

IBM Business Process Manager
バージョン7 リリース5

**IBM Business Process
Manager Advanced**
インストール・ガイド

IBM

PDF ブックおよびインフォメーション・センター

PDF ブックは、印刷およびオフラインでの参照用に提供されています。最新情報は、オンラインのインフォメーション・センターを参照してください。

セットとして、PDF ブックには、インフォメーション・センターと同一の内容が含まれます。PDF ブック内のリンクの中には、インフォメーション・センターで使用するよう調整されていて、正常に機能しないものがあります。

PDF 資料は、バージョン 7.0 またはバージョン 7.5 など、インフォメーション・センターのメジャー・リリースの後の四半期以内にご利用いただけます。

PDF 資料の更新頻度は、インフォメーション・センターより低いですが、Redbooks® よりも頻繁に更新されます。通常、PDF ブックはブックに十分な変更が累積されたときに更新されます。

目次

PDF ブックおよびインフォメーション・センター	iii
------------------------------------	-----

第 1 章 ロードマップ: IBM Business Process Manager Advanced のインストールおよび構成	1
--	---

第 2 章 インストール・タイプおよびプロファイル	15
-------------------------------------	----

第 3 章 データベースとインストールおよび構成のシナリオ	17
---	----

第 4 章 ソフトウェアのインストールおよび構成の準備	19
---------------------------------------	----

第 5 章 IBM Business Process Manager の計画	21
--	----

要件の評価	21
プロセスおよび Process Application に関する考慮事項	21
リソースに関する考慮事項	22
開発およびデプロイメントのバージョン・レベル	23
プロファイル、ノード、サーバー、ホスト、およびセルの命名に関する考慮事項	24
必要なセキュリティー許可の準備	31
製品およびプロファイルのインストール・ディレクトリー	31
スタンドアロン環境または Network Deployment 環境の選択	35
インストール・タイプおよびプロファイル	38
Network Deployment 環境の計画	40
概要: デプロイメント環境のトポロジーおよびパターン	41
ネットワーク・デプロイメント環境のトポロジー	46
単一クラスター・トポロジー・パターン	46
リモート・メッセージング・トポロジー・パターン	48
リモート・メッセージングおよびリモート・サポート・トポロジー・パターン	50
リモート・メッセージング、リモート・サポート、および Web トポロジー・パターン	53
カスタマイズされたトポロジー	55
トポロジーを選択するための考慮事項	56
トポロジー・パターンおよびサポート対象の製品フィーチャー	58
標準化された Network Deployment 環境とカスタマイズされた Network Deployment 環境のどちらを作成するかを判断	61

IBM HTTP サーバーでのロード・バランシングとフェイルオーバー	62
データベース構成の計画	63
データベースと IBM Business Process Manager トポロジー	63
データベース・タイム・ゾーンおよび文字セットに関する考慮事項	64
共通データベースを構成する方法とタイミングの選択	65
サポートされているデータベース・タイプ	65
データベース命名の制約事項	68
IBM Business Process Manager のデータ・ソース	69
JDBC ドライバーおよびロケーション	71
必須のデータベース管理者タスクの識別	72
非管理ユーザーの考慮事項	73
データベース特権	74
ユーザー ID またはスキーマ名特権	81
コンポーネントに固有のデータベース構成の計画	86
テーブルおよびスキーマの作成	89
共通データベース構成の計画	90
Common Event Infrastructure データベース構成の計画	96
Business Process Choreographer データベースの構成計画	96
メッセージング・エンジン・データベース構成の計画	97
WebSphere Enterprise Service Bus のロガー・メディエーション・データベース表を構成する計画	101
セレクター/ビジネス・ルール・グループ・データベース構成	103
Business Process Choreographer の構成計画	106
Business Process Choreographer の概要	106
Business Process Choreographer Explorer の概要	107
Business Process Choreographer Explorer レポート作成機能 概要 (非推奨)	108
BPEL Process アーカイブの概要	111
共有作業項目	117
トポロジー、セットアップ、および構成パスの計画	118
基本サンプル Business Process Choreographer 構成の作成の計画	123
サンプル組織を含むサンプル Business Process Choreographer 構成の作成の計画	124
管理コンソールのデプロイメント環境ウィザードを使用するための計画	124
Business Process Choreographer カスタム構成の計画	128
セキュリティー、ユーザー ID、および許可の計画	129

Business Process Choreographer のデータベ スの計画	136
BPEDB データベースの計画	138
レポート・データベースの計画	144
メッセージング・エンジン・データベ スの計画	148
Business Process Archive データベースの計 画	149
Business Flow Manager および Human Task Manager の計画	149
担当者ディレクトリー・プロバイダーの計画	150
Business Process Choreographer Explorer およ び Business Process Archive Explorer の計画	153
Business Process Choreographer Explorer レ ポート作成機能の計画 (非推奨)	154
Business Process Archive の計画	157
Business Process Archive Manager の計画	158
リモート・クライアント・アプリケーション の計画	162
エラー防止およびリカバリーの計画	164
エラー防止とリカバリーの概要	164
エラー防止の計画	165
アプリケーション設計の一部としてのエラー 防止	165
接続グループ	165
例外および障害に対するアプリケーション 設計上の考慮事項	166

**第 6 章 IBM Business Process
Manager Advanced のインストールお
よび構成 171**

ソフトウェアのインストールおよび構成の準備	171
製品インストール用のオペレーティング・システ ムの準備	172
AIX システムのインストール準備	173
Linux システムのインストール準備	174
Solaris システムのインストール準備	177
Windows システムのインストール準備	178
データベースとインストールおよび構成のシナリ オ	179
IBM Business Process Manager Advanced のイン ストール	180
IBM Business Process Manager Advanced のイン ストール	180
ロードマップ: IBM Business Process Manager Advanced のインストールおよび構成	180
標準インストール: IBM Business Process Manager Advanced	193
標準インストール時の既存データベースの 構成	196
カスタム・インストール: IBM Business Process Manager Advanced	201
既存の WebSphere Application Server イン ストール済み環境へのインストール	205
IBM Process Designer のインストール	206

IBM Business Process Manager Advanced のサ イレント・インストール	207
コマンド行を使用した IBM Business Process Manager Advanced のサイレント・ インストール	208
応答ファイルを使用した IBM Business Process Manager Advanced のサイレント・ インストール	211
構成のアップグレード	214
IBM Business Process Manager Advanced の構成	215
configureNode コマンドを使用した Network Deployment 環境の構成	217
configureNode コマンドを使用したデプロイメ ント環境の作成	218
configureNode コマンドを使用したデプロイメ ント環境の拡張	220
configureNode の例 221	
例: デプロイメント・マネージャーおよび 1 つのノードをホストする単一マシン: Standard, PC, DB2	221
例: デプロイメント・マネージャーおよび 1 つのノードをホストする単一マシン: Standard, PC, Oracle	223
例: デプロイメント・マネージャーおよび 1 つのノードをホストする単一マシン: Standard, PC, SQL Server	224
例: デプロイメント・マネージャーおよび 1 つのノードをホストする単一マシン: Standard, PS, DB2	226
例: デプロイメント・マネージャーおよび 3 つのノードをホストする複数のマシン: Advanced, PS, DB2	227
プロファイルの作成および拡張	230
プロファイルに関する前提条件および考慮事 項	230
プロファイルの作成または拡張に関する前 提条件	230
プロファイルの作成または拡張に関するデ ータベースの前提条件	235
プロファイル管理ツールの開始	237
カスタム・インストールの後のスタンドアロ ン・プロファイルの作成	238
プロファイル管理ツールを使用した Process Center スタンドアロン・プロファ イルの作成	239
プロファイル管理ツールを使用したスタン ドアロン・プロファイルの作成	252
Network Deployment プロファイルの作成	266
プロファイル管理ツールを使用した Process Center デプロイメント・マネー ジャー・プロファイルの作成	266
プロファイル管理ツールを使用した Process Center カスタム・プロファイル (管理対象ノード) の作成	280

プロファイル管理ツールを使用した Process Server デプロイメント・マネー ジャー・プロファイルの作成	288	DB2 for z/OS データベースの作成および構成 SPUFI、DSNTEP2、または DUtility.sh を 使用した DB2 for z/OS データベースおよ びストレージ・グループの作成	940
プロファイル管理ツールを使用した Process Server カスタム・プロファイル (管理対象ノード) の作成	301	メッセージ・エンジンのデータ・ストアの 作成	943
manageprofiles コマンド行ユーティリテ ーを使用したプロファイルの削除	310	JCA 認証別名ユーザー ID への表の特権の 付与	944
manageprofiles および wsadmin を使用した環 境の構成	310	SIB の正しいスキーマ名の設定	944
manageprofiles コマンド行ユーティリテ ーを使用したプロファイルの作成	310	DB2 for z/OS を使用したインストールの 検査	945
カスタム・インストール後の manageprofiles を使用したスタンドアロ ン・プロファイルの作成	316	Process Server および Performance Data Warehouse を構成した後のデータベース・パ スワードとユーザー ID の変更	946
カスタム・インストールの後の manageprofiles を使用したデプロイメン ト・マネージャーとカスタム・プロファイ ルの作成	534	データ・ソース認証別名の更新	946
manageprofiles の例	784	メッセージ・エンジンのデータ・ストア認 証別名の更新	947
プロファイルの拡張	812	構成ファイル内のパスワードおよびユーザ ー名の更新	947
プロファイル管理ツールを使用したプロフ ァイルの拡張	812	DB2 データベースのトランザクション・ロ グ・オプションの変更	950
manageprofiles コマンド行ユーティリテ ーを使用したプロファイルの拡張	886	Network Deployment 環境の構成	951
プロファイル管理ツール構成のデータベー ス構成フィールド	893	Network Deployment 環境の作成	951
データベースの構成	901	デプロイメント環境ウィザードを使用した Network Deployment 環境の構成	951
提供されているスクリプトを使用したデー タベースの作成	901	管理コンソールを使用した Network Deployment 環境の構成	969
手動でのデータベースの作成	902	コマンド行を使用したデプロイメント環 境の作成	974
Process Center または Process Server のデー タベース表の作成	904	データベース構成の完了	981
Performance Data Warehouse データベース表 の作成	905	Process Center または Process Server のデ ータベース表の作成	981
Microsoft SQL Server データベースの構成	906	Performance Data Warehouse データベース 表の作成	982
XA トランザクションの構成	907	データベースへのシステム情報のロード	983
Microsoft SQL Server で使用するスタンド アロン・プロファイルの作成	909	コンポーネントの構成	985
Microsoft SQL Server と共に使用する Network Deployment 環境の作成	916	Process Center の構成	985
プロファイルの作成後または拡張後の共通デ ータベースとテーブルの作成	921	Process Server の構成	987
データベース設計ツールを使用したデータベ ース設計ファイルの作成	922	サーバー上またはクラスター上の Business Performance Data Warehouse コンポーネント の構成	988
データベース設計ツールを使用したスタン ドアロン・プロファイル用またはデプロイ メント環境用のデータベース設計ファイル の作成	923	サーバーまたはクラスターの SCA サポート の構成	989
データベース設計ツールを使用した特定の コンポーネントのためのデータベース設計 ファイルの作成	930	サーバーおよびクラスター上での Service Component Architecture (SCA) サポートに 関する考慮事項	991
データベース設計ツールの例	935	Business Space の構成	992
データベース設計ツールのトラブルシュー ティング	937	ビジネス・ルールおよびセレクターの構成	992
データベースへのシステム情報のロード	938	ビジネス・ルールとセレクターの監査ログ の構成	992
		コマンドを使用したビジネス・ルールとセ レクター監査の構成 (Configuring business rule and selector auditing using commands)	993
		ビジネス・ルール・マネージャーのインス トールの考慮事項	996
		リレーションシップ・サービスの構成	1001

メッセージング・サーバー環境のセットアップ	1002	Process Center への接続で Process Server が使用する設定のカスタマイズ	1032
JNDILookup Web Service の構成	1002	Web サーバーと連動する Process Server/Process Center クラスターのカスタマイズ	1034
CEI データベースの構成	1003	IBM Business Process Manager 用の Oracle Real Application Cluster (RAC) の構成	1038
WebSphere Portal 用の IBM Business Process Manager ウィジェットの構成	1004	LDAP セキュリティー・プロバイダーの構成	1039
Common Event Infrastructure の構成	1004	スタンドアロン構成用のユーザー・アカウントのセットアップ	1041
Common Event Infrastructure コンポーネント	1004	インストール後のパスワード変更	1041
Common Event Infrastructure サーバーの構成	1006	スタンドアロン環境での tw_admin パスワードの変更	1042
イベント・メッセージングの構成	1007	スタンドアロン環境での tw_user パスワードの変更	1043
イベント・データベースの構成	1009	ND クラスター環境での tw_admin パスワードの変更	1044
WebSphere Business Integration Adapter の構成	1024	ND クラスター環境での tw_user パスワードの変更	1045
WebSphere Business Integration Adapter の管理のセットアップ	1025	Process Server および Performance Data Warehouse を構成した後のデータベース・パスワードとユーザー ID の変更	1047
Service Federation Management 用の IBM Business Process Manager の構成	1026	データ・ソース認証別名の更新	1047
Service Connectivity Management 接続サーバーの構成	1027	メッセージ・エンジンのデータ・ストア認証別名の更新	1047
Service Connectivity Management 接続プロバイダーの構成	1027	構成ファイル内のパスワードおよびユーザー名の更新	1048
Service Component Architecture (SCA) モジュールの Service Connectivity Management の使用	1030	パスワードの暗号化	1051
Service Connectivity Management (SCM) のプロキシ・ゲートウェイへのマッピング	1030	サンプルの手動インストール	1052
SMTP サーバーの構成	1031	ファースト・ステップ・コンソールの開始	1053
拡張構成: 環境のカスタマイズ	1032		

第 1 章 ロードマップ: IBM Business Process Manager Advanced のインストールおよび構成

IBM® Business Process Manager インストーラーおよび構成プログラムは、さまざまなシナリオに対応します。このロードマップでは、スタンドアロン環境または Network Deployment 環境で IBM Business Process Manager Advanced をインストールし構成するために最も広く使用されている方法について説明します。

このロードマップでは、一般的なインストールおよび構成の各シナリオをそれぞれ 1 つのセクションで説明しています。各セクションには、実行するアクティビティ、説明へのリンク、および各アクティビティの完了後の結果についての注を示す表が含まれています。

このロードマップの各セクションでは、以下のシナリオについて説明します。

- 標準インストール

「標準インストール」オプションでは、ソフトウェアをインストールし、スタンドアロンの Process Center プロファイルまたは Process Server プロファイルを構成します。標準インストールでは、プロファイル管理ツールまたは **manageprofiles** ユーティリティを使用してプロファイルを別個に作成する必要はありません。

「標準インストール」オプションは、ソフトウェアをインストールおよび構成するための最も単純で迅速な方法です。また、(Express、Standard、または Advanced 構成の) すべての Business Process Manager フィーチャーおよび機能を単一のマシンに取り込むための理想的な方法でもあります。標準インストールは電子インストール・イメージからのみ使用でき、DVD からは使用できません。

『「標準インストール」オプションを使用した IBM Business Process Manager Advanced のインストール』を参照してください。

- カスタム・インストール、およびそれに続く 1 つ以上のスタンドアロン・プロファイルの作成

「カスタム・インストール」オプションでは、ご使用のシステムにソフトウェアをインストールし、次にプロファイル管理ツールを実行して、ソフトウェアの構成方法をより柔軟に制御することができます。標準インストール・パスでは使用できない構成フィーチャーを必要とするスタンドアロンの Process Center 環境または Process Server 環境を作成する場合は、製品バイナリーをインストールした後で、プロファイル管理ツールまたは **manageprofiles** コマンド行ユーティリティを使用して、スタンドアロンの Process Center プロファイルまたは Process Server プロファイルを作成します。

『「カスタム・インストール」オプションを使用した IBM Business Process Manager Advanced のインストール、および 1 つ以上のスタンドアロン・プロファイルの構成』を参照してください。

- カスタム・インストール、およびそれに続く 1 つ以上のデプロイメント・マネージャー・プロファイルおよびカスタム (管理対象ノード) プロファイルの作成

このインストールおよび構成のシナリオでは、一般に大規模な実稼働環境に要求されるキャパシティー、スケーラビリティ、および頑強性が提供されます。Network Deployment 構成は、コラボレーションを通じてワークロード・バランシングおよびフェイルオーバーを提供する複数のサーバーから成るグループ (クラスターと呼ばれます) で構成されています。各サーバーは、デプロイメント・マネージャーと呼ばれる単一の管理コンソールを使用して一元管理されます。

カスタム・インストールの後に、いくつかの構成オプションを選択できます。

- 単純な Network Deployment 構成用の **configureNode** コマンド行ユーティリティを使用する。

インストーラーがご使用のシステムにソフトウェアをインストールします。次に、**configureNode** コマンドを使用して、1 つのデプロイメント・マネージャー・プロファイルおよび 1 つ以上のカスタム (管理対象ノード) プロファイルを作成して構成し、パターン・ベースの Network Deployment 構成を作成します。『configureNode コマンドを使用した IBM Business Process Manager Advanced のインストールと Network Deployment 環境の構成』を参照してください。

- プロファイル構成およびデプロイメント環境ウィザードを使用する。

インストーラーがご使用のシステムにソフトウェアをインストールします。次に、プロファイル構成プログラム (プロファイル管理ツールまたは **manageprofiles** コマンド行ユーティリティ) を使用して、1 つ以上のデプロイメント・マネージャー・プロファイルおよびカスタム (管理対象ノード) プロファイルを作成して構成します。さらに、デプロイメント環境ウィザードを使用して、パターン・ベースの Network Deployment 構成を作成します。『IBM Business Process Manager Advanced のインストール、デプロイメント・マネージャー・プロファイルとカスタム・プロファイルの構成、およびデプロイメント環境ウィザードの使用』を参照してください。

- プロファイル構成および管理コンソールまたは **wsadmin** コマンドを使用する。

インストーラーがご使用のシステムにソフトウェアをインストールします。次に、プロファイル構成プログラム (プロファイル管理ツールまたは **manageprofiles** コマンド行ユーティリティ) を使用して、1 つ以上のデプロイメント・マネージャー・プロファイルおよびカスタム (管理対象ノード) プロファイルを作成して構成します。さらに、管理コンソールまたは **wsadmin** コマンドを使用して、カスタマイズされた Network Deployment 構成を作成します。『IBM Business Process Manager Advanced のインストール、デプロイメント・マネージャー・プロファイルとカスタム・プロファイルの構成、および管理コンソールまたは **wsadmin** コマンドの使用』を参照してください。

Network Deployment に関する概念情報については、『スタンドアロン環境または Network Deployment 環境の選択』および『デプロイメント環境の計画』を参照してください。

ソフトウェアと一緒にパッケージされ、デプロイメント環境ウィザードによってサポートされるトポロジー・パターンについては、『概要: デプロイメント環境のトポロジーおよびパターン』を参照してください。

「標準インストール」オプションを使用した IBM Business Process Manager Advanced のインストール

電子イメージからインストールする場合は、インストールで「標準インストール」オプションを使用して、ソフトウェアのインストールとスタンドアロン・プロファイルの構成を自動的に行うことができます。標準インストールでは、インストール後にプロファイル管理ツールまたは **manageprofiles** を実行する必要はありません。

「標準」オプションは、ソフトウェアをインストールおよび構成するための最も迅速な方法です。このインストール・オプションでは大半の設定にデフォルトが使用されますが、インストール・パスとデータベース・タイプは指定できます。

標準インストールでは、Process Center と Process Server を別個にインストールします。まず Process Center の標準インストールを最後まで実行してから、Process Server の標準インストールを最後まで実行します。

「標準」オプションを使用した IBM Business Process Manager Advanced のインストールについては、『標準インストール: IBM Business Process Manager Advanced』を参照してください。

「標準」オプションを使用して単一マシンに IBM Business Process Manager Advanced をインストールする場合は、単一マシンでの Business Process Manager Advanced のインストールを参照してください。

「カスタム・インストール」オプションを使用した IBM Business Process Manager Advanced のインストール、および 1 つ以上のスタンドアロン・プロファイルの構成

インストーラーの「カスタム・インストール」オプションを使用すると、ソフトウェアをインストールし、プロファイル管理ツールまたは **manageprofiles** コマンド行ユーティリティーを使用して 1 つ以上のスタンドアロン・プロファイルを構成することができます。

表 1. 「カスタム・インストール」オプションを使用した IBM Business Process Manager Advanced のインストール、および 1 つ以上のスタンドアロン・プロファイルの構成

タスク	情報の入手先	タスクの実行結果
「カスタム・インストール」オプションを使用したソフトウェアのインストール	カスタム・インストール・オプションを使用した IBM Business Process Manager Advanced のインストールについては、『カスタム・インストール: IBM Business Process Manager Advanced』を参照してください。	カスタム・インストールでは、ご使用のシステムに Process Center、Process Designer、および Process Server の製品バイナリーをインストールします。 カスタム・インストールでは、インストール中にプロファイルを作成しません。
プロファイル管理ツールの起動	インストーラーからプロファイル管理ツールを起動しなかった場合は、ここで起動できます。『プロファイル管理ツールの開始』を参照してください。 制約事項: Linux on zSeries プラットフォームを除き、64 ビットのアーキテクチャーの BPM インストール済み環境では、プロファイル管理ツールを使用してプロファイルを作成できません。代わりに、次のステップに進んで manageprofiles コマンド行ユーティリティーを使用します。	プロファイル管理ツールが開始され、いつでも使用できます。 Process Center プロファイルからのデータが Process Server プロファイル作成プロセスへの入力として使用されるため、Process Center スタンドアロン・プロファイルを最初に (Process Server スタンドアロン・プロファイルを作成する前に) 作成する必要があります。
1 つ以上の Process Center スタンドアロン・プロファイルの作成	Process Center スタンドアロン・プロファイルをどのような方法で作成したいかに応じて、以下のトピックのいずれか 1 つを参照してください。 <ul style="list-style-type: none"> プロファイル管理ツールを使用した Process Center スタンドアロン・プロファイルの作成 manageprofiles ユーティリティーを使用した Process Center スタンドアロン・プロファイルの作成 	Process Center スタンドアロン・プロファイルが作成されます。このプロファイルは、スタンドアロン・サーバー環境を定義し、コマンド・ファイル、構成ファイル、およびログ・ファイルを含みます。 プロファイル作成プロセスは、(共通およびコンポーネント固有の) データベースを構成し、スタンドアロン・サーバー環境をサポートするために必要なデータベース表を生成します。 これで、Process Server スタンドアロン・プロファイルを作成したり、Process Designer をインストールしたりできるようになります。

表1. 「カスタム・インストール」オプションを使用した IBM Business Process Manager Advanced のインストール、および 1 つ以上のスタンドアロン・プロファイルの構成 (続き)

タスク	情報の入手先	タスクの実行結果
Process Designer のインストール	ソフトウェアのビジネス・プロセス設計機能の使用を開始する場合は、Process Designer をダウンロードおよびインストールします。『Process Designer のインストール』を参照してください。	Process Designer がインストールされます。 Process Designer の使用方法については、以下のトピックを参照してください。 <ul style="list-style-type: none"> • IBM Process Designer の雇用サンプル・チュートリアル • Authoring environments • Process Center によるプロセス開発
1 つ以上の Process Server スタンドアロン・プロファイルの作成	ランタイム環境も含めてソフトウェアを完全に構成することが目的である場合は、Process Server スタンドアロン・プロファイルを作成します。Process Server スタンドアロン・プロファイルをどのような方法で作成したいかに応じて、以下のトピックのいずれか 1 つを参照してください。 <ul style="list-style-type: none"> • プロファイル管理ツールを使用した Process Server スタンドアロン・プロファイルの作成 • manageprofiles ユーティリティーを使用した Process Server スタンドアロン・プロファイルの作成 	スタンドアロン・サーバー環境が構成され、いつでも使用できます。
プロファイル作成時に「データベース・スクリプトを実行してデータベースを初期化 (Run database scripts to initialize the databases)」チェック・ボックスをクリアした場合は、データベース・スクリプトを手動で実行し、その後にはブートストラップ・ユーティリティーを実行してデータベースにシステム情報をロードする	ブートストラップ・ユーティリティーの実行方法については、『データベースへのシステム情報のロード』を参照してください。 <div style="text-align: center;"> <div style="border: 1px solid black; padding: 2px; display: inline-block; margin-bottom: 5px;">Windows</div> bootstrapProcessServerData.bat <div style="display: flex; justify-content: center; gap: 10px;"> <div style="border: 1px solid black; padding: 2px; display: inline-block; margin-bottom: 5px;">Linux</div> <div style="border: 1px solid black; padding: 2px; display: inline-block; margin-bottom: 5px;">UNIX</div> </div> bootstrapProcessServerData.sh </div> <p>クラスター・メンバーの最初の始動の前に、ブートストラップ・ユーティリティーを実行する必要があります。</p>	Process Server/Process Center を正常に始動する前に、データベースにシステム情報がロードされます。

configureNode コマンドを使用した IBM Business Process Manager Advanced のインストールと Network Deployment 環境の構成

インストーラーの「標準インストール」または「カスタム・インストール」オプションを使用してソフトウェアをインストールし、次に **configureNode** コマンドを使用して 1 つのデプロイメント・マネージャー・プロファイルおよび 1 つ以上のカスタム (管理対象ノード) プロファイルを構成し、さらにパターン・ベースの Network Deployment 環境を作成することができます。また、後から **configureNode** を使用して既存の環境にノードを追加することもできます。

configureNode コマンドは、リモート・メッセージング、リモート・サポート、および Web トポロジー・パターンを使用して単一セル環境を作成します。このトポロジー・パターンには、以下の 4 つのクラスターが含まれます。

- メッセージング・インフラストラクチャー・クラスター
- サポート・インフラストラクチャー・クラスター
- アプリケーション・デプロイメント・ターゲット・クラスター
- Web アプリケーション・クラスター

表 2. *configureNode* コマンドを使用した *IBM Business Process Manager Advanced* のインストールおよび構成

タスク	情報の入手先	タスクの実行結果
「カスタム・インストール」オプションを使用したソフトウェアのインストール	標準インストール・オプションを使用した <i>IBM Business Process Manager</i> のインストールについては、『標準インストール: <i>IBM Business Process Manager Advanced</i> 』を参照してください。 カスタム・インストール・オプションを使用した <i>IBM Business Process Manager</i> のインストールについては、『カスタム・インストール: <i>IBM Business Process Manager Advanced</i> 』を参照してください。	<i>IBM Business Process Manager Advanced</i> のインストールでは、ご使用のシステムに <i>Process Center</i> (<i>Process Server</i> 機能を含む)、 <i>Process Designer</i> 、および <i>WebSphere ESB</i> の製品バイナリーをインストールします。
<i>configureNode</i> コマンドを使用したデプロイメント・マネージャー、1 つ以上のカスタム・ノード、およびデプロイメント環境の作成	『 <i>configureNode</i> コマンドを使用したデプロイメント環境の作成』を参照してください。	<i>Process Center</i> または <i>Process Server</i> の <i>Network Deployment</i> 環境が作成されます。

IBM Business Process Manager Advanced のインストール、デプロイメント・マネージャー・プロファイルとカスタム・プロファイルの構成、およびデプロイメント環境ウィザードの使用

インストーラーの「カスタム・インストール」オプションを使用すると、ソフトウェアをインストールし、プロファイル管理ツールまたは **manageprofiles** コマンド行ユーティリティを使用して 1 つ以上のデプロイメント・マネージャー・プロファイルおよびカスタム (管理対象ノード) プロファイルを構成することができます。プロファイル作成後に、デプロイメント環境ウィザードを使用して、パターン・ベースの *Network Deployment* 構成を生成できます。

デプロイメント環境ウィザードからどのパターンを選択するかは、ご使用の環境の計画された使用法 (PoC (概念検証)、テスト、実動) およびご使用のエンタープライズで必要な処理能力 (高可用性やフェイルオーバー処理など) を基準にすることができます。

このインストールおよび構成のシナリオでは、ソフトウェアに含まれるトポロジー・パターンの 1 つによってビジネス・ニーズおよび要件を満たすことができると想定しています。ソフトウェアに含まれるパターンでは対応できない要件がある場合は、管理コンソールを使用して、カスタマイズされた *Network Deployment* 環境を作成することができます。10 ページの『*IBM Business Process Manager Advanced* のインストール、デプロイメント・マネージャー・プロファイルとカスタム・プロファイルの構成、および管理コンソールまたは *wsadmin* コマンドの使用』を参照してください。

表 3. デプロイメント環境ウィザードを使用した IBM Business Process Manager Advanced のインストールおよび構成

タスク	情報の入手先	タスクの実行結果
「カスタム・インストール」オプションを使用したソフトウェアのインストール	カスタム・インストール・オプションを使用した IBM Business Process Manager Advanced のインストールについては、『カスタム・インストール: IBM Business Process Manager Advanced』を参照してください。	<p>カスタム・インストールでは、ご使用のシステムに Process Center (Process Server 機能を含む)、Process Designer、および WebSphere ESB の製品バイナリーをインストールします。</p> <p>Network Deployment 環境のデータベース構成をいつでも作成できます。</p>
作成している環境に適用されるデータベース構成の設計	<p>IBM Business Process Manager Advanced のデータベース構成の設計については、『データベース設計ツールを使用したスタンドアロン・プロファイル用またはデプロイメント環境用のデータベース設計ファイルの作成』を参照し、Network Deployment データベース構成の設計の説明に従ってください。</p> <p>設計文書を生成し、Process Center の SQL スクリプトを実行します。</p>	<p>SQL スクリプトによって生成されたすべての必要なデータベース表を含むデータベース構成がご使用のシステム上に存在します。</p> <p>これでプロファイル作成プロセスを開始できます。設計文書は、プロファイル管理ツールまたは manageprofiles ユーティリティーから参照します。</p> <p>プロファイル管理ツールまたは manageprofiles を使用して、使用する IBM BPM コンポーネントのデプロイメント・マネージャー・プロファイルおよび 1 つ以上のカスタム (管理対象ノード) プロファイルを作成します。</p>
プロファイル管理ツールの起動	<p>インストーラーからプロファイル管理ツールを起動しなかった場合は、ここで起動できます。『プロファイル管理ツールの開始』を参照してください。</p> <p>制約事項: Linux on zSeries プラットフォームを除き、64 ビットのアーキテクチャの BPM インストール済み環境では、プロファイル管理ツールを使用してプロファイルを作成できません。代わりに、次のステップに進んで manageprofiles コマンド行ユーティリティーを使用します。</p>	<p>プロファイル管理ツールが開始され、いつでも使用できます。</p> <p>Process Center プロファイルからのデータが Process Server プロファイル作成プロセスへの入力として使用されるため、Process Center スタンドアロン・プロファイルを最初に (Process Server スタンドアロン・プロファイルを作成する前に) 作成する必要があります。</p>

表 3. デプロイメント環境ウィザードを使用した IBM Business Process Manager Advanced のインストールおよび構成 (続き)

タスク	情報の入手先	タスクの実行結果
<p>Process Center デプロイメント・マネージャー・プロファイルの作成</p>	<p>このタスクでは、『作成している環境に適用されるデータベース構成の設計』のタスクを完了したときに作成されたデータベース設計文書を指すパラメーターをプロファイル管理ツールまたは manageprofiles コマンド行ユーティリティーで選択すると想定しています。</p> <p>注: データベース設計文書の作成および DDT からの SQL の生成をまだ行っていない場合は、プロファイル管理ツールを使用して、データベースを構成し、関連付けられた SQL を実行することができます。</p> <p>Process Center プロファイルをどのような方法で作成したいかに応じて、以下のトピックのいずれか 1 つを参照してください。</p> <ul style="list-style-type: none"> • プロファイル管理ツールを使用した Process Center デプロイメント・マネージャー・プロファイルの作成 • manageprofiles を使用した Process Center デプロイメント・マネージャーとカスタム・プロファイルの作成 	<p>Process Center デプロイメント・マネージャー・プロファイルがあること。</p> <p>このプロファイルは、環境を定義し、コマンド・ファイル、構成ファイル、およびログ・ファイルを含みます。</p> <p>デプロイメント・マネージャーとは、他のサーバーの論理グループ (セル) の操作を管理するサーバーです。デプロイメント・マネージャーは、サーバーおよびクラスタを管理するための中央の場所になっています。</p>
<p>共通データベースをまだ作成していない場合は、ここで作成します。</p>	<p>プロファイルの作成後または拡張後の共通データベースとテーブルの作成を参照してください。</p>	<p>共通データベースが作成されました。</p>
<p>デプロイメント・マネージャーを開始し、開始操作が成功したことを検証します。</p>	<p>デプロイメント・マネージャーの開始方法に関する詳細については、『デプロイメント・マネージャーの開始』を参照してください。</p>	<p>デプロイメント・マネージャー・サーバーが開始します。</p>

表 3. デプロイメント環境ウィザードを使用した *IBM Business Process Manager Advanced* のインストールおよび構成 (続き)

タスク	情報の入手先	タスクの実行結果
<p>Process Center カスタム (管理対象ノード) プロファイル (複数の場合もある) の作成</p>	<p>このタスクでは、プロファイル作成プロセスの一部としてノードを統合しないと想定しています。(カスタム (管理対象ノード) プロファイルを作成してから) ノードを後で統合するためのパラメーターをプロファイル管理ツールまたは manageprofiles コマンドで設定すると想定しています。</p> <p>プロファイルを作成する方法に応じて、以下のトピックのいずれかを参照してください。</p> <ul style="list-style-type: none"> プロファイル管理ツールを使用した Process Center カスタム・プロファイル (管理対象ノード) の作成 manageprofiles を使用した Process Center デプロイメント・マネージャーとカスタム・プロファイルの作成 <p>管理対象ノードごとにこのタスクを繰り返します。</p>	<p>カスタム (管理対象ノード) プロファイルが作成されます。これらのノードは、デプロイメント・マネージャーによって管理され、運営されます。</p> <p>これで、ノードを Process Center デプロイメント・マネージャー・セルに統合できるようになります。管理対象ノードには、ノード・エージェントが含まれ、さらに管理対象サーバーを含めることができます。管理対象ノードでは、管理対象サーバーを構成して実行できます。</p>
<p>カスタム (管理対象) ノードのデプロイメント・マネージャーへの統合</p>	<p>addNode コマンドを使用して Process Center カスタム・ノードを Process Center デプロイメント・マネージャー・セルに統合する方法の説明については、『カスタム・ノードのデプロイメント・マネージャーへの統合』を参照してください。</p>	<p>カスタム・プロファイルはデプロイメント・マネージャーに統合されました。</p>
<p>デプロイメント環境ウィザードを使用した Network Deployment 構成の作成</p>	<p>デプロイメント環境ウィザードの使用方法については、『パターンを使用した Process Center デプロイメント環境の作成』を参照してください。</p>	<p>このタスクの一部として、すべての据え置かれた構成アイテムを処理し、Process Center デプロイメント環境を生成する必要があります。</p> <p>Process Center Network Deployment 環境が作成されます。</p>

表 3. デプロイメント環境ウィザードを使用した IBM Business Process Manager Advanced のインストールおよび構成 (続き)

タスク	情報の入手先	タスクの実行結果
Process Server のセルの作成	<p>Process Server を実行するには、別個のセルを作成する必要があります。</p> <p>そのためには、同じ一連のステップを実行します。ただし、以下のトピックで説明するように、Process Server デプロイメント・マネージャー・プロファイルおよび Process Server カスタム (管理対象ノード) プロファイルを作成し、次にデプロイメント環境ウィザードを使用して Process Server デプロイメント環境を作成します。</p> <ul style="list-style-type: none"> • プロファイル管理ツールを使用した Process Server デプロイメント・マネージャー・プロファイルの作成 • プロファイル管理ツールを使用した Process Server カスタム・プロファイル (管理対象ノード) の作成 • manageprofiles を使用した Process Server デプロイメント・マネージャー・プロファイルとカスタム・プロファイルの作成 <ul style="list-style-type: none"> – カスタム・ノードのデプロイメント・マネージャーへの統合 • パターンを使用した Process Server デプロイメント環境の作成 <p>このタスクの一部として、すべての据え置かれた構成アイテムを処理し、Process Server デプロイメント環境を生成する必要があります。</p>	<p>Process Server Network Deployment 環境が作成されます。</p>
手動によるデータベース構成ステップの実行	<p>構成ステップを据え置いた場合は、デプロイメント環境でクラスターを開始する前に、追加のデータベース構成を実行する必要があります。『Network Deployment 環境のデータベース構成の完了』を参照してください。</p>	<p>これで、Network Deployment 環境に必要な手動のデータベース構成アクティビティは完了です。</p>

表 3. デプロイメント環境ウィザードを使用した *IBM Business Process Manager Advanced* のインストールおよび構成 (続き)

タスク	情報の入手先	タスクの実行結果
データベースへのシステム情報のロード	<p>ブートストラップ・ユーティリティの実行方法については、『データベースへのシステム情報のロード』を参照してください。</p> <p>Windows</p> <p>bootstrapProcessServerData.bat</p> <p>Linux UNIX</p> <p>bootstrapProcessServerData.sh</p> <p>クラスター・メンバーの最初の始動の前に、ブートストラップ・ユーティリティを実行する必要があります。</p>	Process Server / Process Center を正常に始動する前に、データベースにシステム情報がロードされます。

IBM Business Process Manager Advanced のインストール、デプロイメント・マネージャー・プロファイルとカスタム・プロファイルの構成、および管理コンソールまたは wsadmin コマンドの使用

ソフトウェアにパッケージされ、デプロイメント環境ウィザードを使用して実装されるトポロジー・パターンは、広範囲にわたるビジネス・プロセス要件に対応できるように設計されています。ただし、これらのトポロジー・パターンでは十分に対応できないシナリオがある場合は、管理コンソールを使用して、カスタマイズされた Network Deployment 環境を作成できます。

注: このシナリオは、管理コンソールを使用して製品コンポーネントおよび機能を構成する方法を十分に理解しているユーザーを対象としています。このセクションで説明するインストールおよび構成のシナリオを開始する前に、デプロイメント環境ウィザードを使用して Network Deployment 環境を作成することを検討してください。

管理コンソール・アクションのサブセットで、コマンド・アシスタンスを使用することができます。コマンド・アシスタンスを使用できる場合は、最後に実行したコンソール・アクションに対応する wsadmin スクリプト・コマンドが表示されます。このデータを使用して、特定の管理タスクを自動化する wsadmin スクリプトを作成できます。コマンド・アシスタンスに関する詳細については、『コマンド・アシスタンスを使用した管理コンソールのアクション』を参照してください。

表 4. 管理コンソールを使用した IBM Business Process Manager Advanced のインストールおよび構成

タスク	情報の入手先	タスクの実行結果
ソフトウェアをインストールし、必要なプロファイルを作成します。	<p>5 ページの『IBM Business Process Manager Advanced のインストール、デプロイメント・マネージャー・プロファイルとカスタム・プロファイルの構成、およびデプロイメント環境ウィザードの使用』に記載されている、『デプロイメント環境ウィザードを使用した Network Deployment 構成の作成』の前のタスクまでを完了します。</p> <p>デプロイメント環境ウィザードを使用する代わりに、管理コンソールを使用して、カスタマイズされたデプロイメント環境を手動で作成します。</p>	<p>デプロイメント・マネージャー・ノードおよびカスタム管理対象ノードが作成され、ノードがデプロイメント・マネージャー・セルに統合されます。</p> <p>IBM Business Process Manager Advanced のカスタム・インストールでは、ご使用のシステムに Process Center (Process Server の全機能を含む)、Process Designer、および WebSphere ESB の製品バイナリーをインストールします。</p> <p>これで、管理コンソールを使用して、Network Deployment 環境を構成するサーバー、サーバー・クラスター、およびコンポーネントを作成できるようになります。</p>
管理コンソールを使用したサーバーおよびクラスターの作成と構成	『管理コンソールを使用したサーバーおよびクラスターの作成と構成』を参照してください。	使用環境のサーバーおよびサーバー・クラスターが作成されました。
Process Server としてのサーバーまたはクラスターの構成	<p>管理コンソールを使用してご使用のサーバーまたはサーバー・クラスターを Process Server として構成するための情報については、『サーバーまたはクラスターの Process Server としての構成』を参照してください。</p> <p>wsadmin を使用して、サーバーまたはクラスターを Process Server として構成することもできます。</p> <p>『configureProcessServer コマンド』を参照してください。</p>	サーバーまたはサーバー・クラスターが Process Server として構成されます。
サーバー上またはクラスター上の Performance Data Warehouse コンポーネントの構成	<p>管理コンソールを使用してサーバーまたはクラスター上で Performance Data Warehouse を構成することに関する情報については、『サーバーまたはクラスター上での Performance Data Warehouse コンポーネントの構成』を参照してください。</p> <p>サーバーまたはクラスター上で wsadmin を使用して Performance Data Warehouse を構成することもできます。</p> <p>『configurePerfDW コマンド』を参照してください。</p>	Process Server 上で Performance Data Warehouse が構成されます。
サーバーまたはクラスター用の SCA サポートを構成します。	管理コンソールを使用してサーバーまたはクラスター用の SCA サポートを構成することに関する情報については、『サーバーまたはクラスター用の SCA サポートの構成』を参照してください。	サーバーまたはクラスターの SCA サポートが構成されます。

表 4. 管理コンソールを使用した IBM Business Process Manager Advanced のインストールおよび構成 (続き)

タスク	情報の入手先	タスクの実行結果
ビジネス・スペースを構成します。	管理コンソールを使用してビジネス・スペースを構成することに関する情報については、『ビジネス・スペースの構成』を参照してください。	Business Space コンポーネントが構成されました。
Business Process Choreographer の構成。	管理コンソールを使用して Business Process Choreographer を構成することに関する情報については、『Business Process Choreographer の構成』を参照してください。 管理コンソールではなしにスクリプティングを使用して Business Process Choreographer を構成するように決めた場合には、『bpeconfig.jacl スクリプトを使用した Business Process Choreographer の構成』を参照してください。	Business Process Choreographer が構成されます。
ビジネス・ルールおよびセレクターの構成	管理コンソールを使用してビジネス・ルールおよびセレクターを構成することに関する情報については、『ビジネス・ルールおよびセレクターの構成』を参照してください。	ビジネス・ルールおよびセレクターが構成されます。
リレーションシップ・サービスの構成	管理コンソールを使用してリレーションシップ・サービスを構成することに関する情報については、『リレーションシップ・サービスの構成』を参照してください。	リレーションシップ・サービスが構成されます。
メッセージング・サービスのセットアップ	管理コンソールを使用してメッセージング・サービスを構成することに関する情報については、『メッセージング・サーバー環境のセットアップ』を参照してください。	メッセージング・サーバー環境がセットアップされます。
JNDILookup Web サービスの構成	管理コンソールを使用して JNDILookup Web サービスを構成することに関する情報については、『JNDILookup Web サービスの構成』を参照してください。	JNDILookup Web サービスが構成されました
Common Event Infrastructure を構成する。	管理コンソールを使用して Common Event Infrastructure を構成することに関する情報については、『Common Event Infrastructure の構成』を参照してください。	Common Event Infrastructure は構成されました
WebSphere Portal 用の IBM Business Process Manager ウィジェットの構成	管理コンソールを使用して WebSphere Portal 用のウィジェットを構成することに関する情報については、『WebSphere Portal 用の IBM Business Process Manager ウィジェットの構成』を参照してください。	WebSphere Portal 用のウィジェットを構成しました

表 4. 管理コンソールを使用した IBM Business Process Manager Advanced のインストールおよび構成 (続き)

タスク	情報の入手先	タスクの実行結果
WebSphere Business Integration Adapter の構成	管理コンソールを使用して WebSphere Business Integration Adapter を構成することに関する情報については、『WebSphere Business Integration Adapter の構成』を参照してください。	WebSphere Business Integration Adapter を構成しました。
Service Federation Management 用の IBM Business Process Manager の構成	管理コンソールを使用して Service Federation Management 用の IBM Business Process Manager を構成することに関する情報については、『Service Federation Management 用の IBM Business Process Manager の構成』を参照してください。	Service Federation Management 用の IBM Business Process Manager を構成しました。
データベースへのシステム情報のロード	<p>ブートストラップ・ユーティリティーの実行方法については、『データベースへのシステム情報のロード』を参照してください。</p> <p>Windows</p> <p>bootstrapProcessServerData.bat</p> <p>Linux UNIX</p> <p>bootstrapProcessServerData.sh</p> <p>クラスター・メンバーの最初の始動の前に、ブートストラップ・ユーティリティーを実行する必要があります。</p>	Process Server / Process Center を正常に始動する前に、データベースにシステム情報がロードされます。

第 2 章 インストール・タイプおよびプロファイル

実行するインストールのタイプ（「標準的」または「カスタム」）と、そのインストール・タイプに関連付けられたプロファイルを各 IBM BPM 構成 (Express、Standard、および Advanced) に対して作成する方法の間には、一定の関係が存在します。

以下の表は、その関係を示しています。

表 5. インストールの一部としてのプロファイル構成: IBM Business Process Manager Advanced

インストールのタイプ	メディア	スタンドアロン・プロファイルの作成	オプションとしてのプロファイル管理ツールの開始	オプションとしてのファースト・ステップ・コンソールの開始	Installation Manager からフィーチャーを選択可能
標準的 (ランチパッドを使用)	電子イメージのみ	はい	いいえ	はい	適用外
カスタム	DVD または電子イメージ	いいえ	はい	いいえ	はい

表 6. インストールの一部としてのプロファイル構成: IBM Business Process Manager Advanced: Process Server

インストールのタイプ	メディア	スタンドアロン・プロファイルの作成	オプションとしてのプロファイル管理ツールの開始	オプションとしてのファースト・ステップ・コンソールの開始	Installation Manager からフィーチャーを選択可能
標準的 (ランチパッドを使用)	電子イメージのみ	Process Server のみ	いいえ	はい	適用外
カスタム	DVD または電子イメージ	オプション 単体テスト環境 (UTE) 専用の Process Server プロファイルまたは WebSphere ESB プロファイル (あるいはその両方) を作成できるフィーチャーがあります	はい	いいえ	はい

表7. インストールの一部としてのプロファイル構成: IBM Business Process Manager Standard

インストールのタイプ	メディア	スタンドアロン・プロファイルの作成	オプションとしてのプロファイル管理ツールの開始	オプションとしてのファースト・ステップ・コンソールの開始	Installation Managerからフィーチャーを選択可能
標準的 (ランチパッドを使用)	電子イメージのみ	はい	いいえ	はい	適用外
カスタム	DVD または電子イメージ	いいえ	はい	いいえ	いいえ

表8. インストールの一部としてのプロファイル構成: IBM Business Process Manager Express

インストールのタイプ	メディア	スタンドアロン・プロファイルの作成	オプションとしてのプロファイル管理ツールの開始	オプションとしてのファースト・ステップ・コンソールの開始	Installation Managerからフィーチャーを選択可能
標準的 (ランチパッドを使用)	電子イメージのみ	はい	いいえ	はい	適用外
カスタム	DVD または電子イメージ	いいえ	はい	いいえ	いいえ

第 3 章 データベースとインストールおよび構成のシナリオ

ソフトウェアと連携するようにデータベースを構成する方法は、インストールするソフトウェアおよび達成しようとするシナリオに関連します。

「標準インストール」オプションを使用するインストール・シナリオでは、データベースがローカル側 (IBM Business Process Manager のインストール先と同じシステム上) にあってもリモート側 (別のシステム上) にあっても、データベースを事前に作成しておく必要があります。データベースを事前に作成する必要のないシナリオは、IBM Business Process Manager に組み込まれている DB2 Express データベースをインストールする場合のみです。DB2 Express は、Windows および Linux for Intel の IBM Business Process Manager に組み込まれています。DB2 Express がまだインストールされていない場合は、IBM Business Process Manager インストーラーを実行するとオプションとしてインストールできます。また、このインストーラーによって DB2 Express に共通データベースおよびコンポーネント固有データベースも作成されます。DB2 Express をインストールするには、管理特権 (管理者または root ユーザー) が必要で、既存の DB2 データベース・サーバーがシステム上にあってはなりません。

「標準」インストール用の DB2 Express を使用しないシナリオはすべて、既存のデータベースを使用する「標準」インストールと見なされます。つまり、既にインストール済みのデータベースがあり、インストーラーの「既存データベース」パネルを使用して構成プロパティを指定することになります。詳細については、『標準インストール時の既存データベースの構成』を参照してください。このオプションを使用するには、ご使用のデータベースが既に作成されていることを確かめる必要があります。

ユーザーとデータベース管理者は、ソフトウェアをインストールおよび構成する前に、インフォメーション・センター内のデータベースの構成に関する情報を確認する必要があります。

第 4 章 ソフトウェアのインストールおよび構成の準備

ソフトウェアのインストールおよび構成を準備する前に、作成するデプロイメント環境の計画を作成します。

IBM Business Process Manager のインストールおよび構成の準備を行う場合は、以下の表に記載された情報を使用してください。

表 9. インストールおよび構成の準備

タスク	情報の入手先	タスクの実行結果
ハードウェアおよびソフトウェア要件を確認する	IBM BPM の構成に応じて、以下を参照してください。 <ul style="list-style-type: none">IBM Business Process Manager Advanced system requirementsIBM Business Process Manager Standard system requirementsIBM Business Process Manager Express system requirements	ご使用の IBM Business Process Manager インストールをサポートするために必要なシステム要件について理解します。
オペレーティング・システムを準備する	<ul style="list-style-type: none">AIX AIX システムのインストール準備Linux Linux システムのインストール準備Solaris インストールに向けた Solaris システムの準備Windows Windows システムのインストール準備	使用する各ワークステーションのオペレーティング・システムが準備されます。

表9. インストールおよび構成の準備 (続き)

タスク	情報の入手先	タスクの実行結果
データベース管理システムがインストールされているか確認する	使用するデータベース管理システムのインストールおよび管理の詳細については、データベースの資料を参照してください。	<p>データベース管理システムがインストールされます。</p> <p>IBM Business Process Manager によって DB2 Express データベースが組み込まれます。データベースとして DB2 Express を使用する場合は、インストーラーからデータベース機能として DB2 Express を選択すると、DB2 Express が自動的にインストールおよび構成されます。DB2 Express をインストールするには、管理特権 (管理者または root ユーザー) が必要で、既存の DB2 データベース・サーバーがシステム上にあってはなりません。</p> <p>注: 既に DB2 の特定のバージョンがインストールされていて DB2 Express をインストールする場合は、DB2 をアンインストールしてから IBM Business Process Manager インストーラーを実行する必要があります。インストーラーから DB2 Express をインストールするように選択した場合に、インストーラーが特定のバージョンの DB2 がインストールされていることを検出すると、警告メッセージが表示され、DB2 Express をインストールすることができなくなります。</p> <p>重要: Linux DB2 Express を root ユーザーとしてインストールする場合、DB2 Express のインストールを開始する前に、すべてのカーネル要件を満たしておく必要があります。カーネル要件のリストについては、カーネル・パラメーターの要件 (Linux) を参照してください。現行値は、<code>ipcs -l</code> コマンドの出力を解析することによって見つけることができます。</p>

第 5 章 IBM Business Process Manager の計画

実装するシステムがユーザーのニーズを満たすことを確実にするために、該当のソフトウェアをご使用のエンタープライズ情報システムに導入する前に、ご使用の IBM Business Process Manager の計画を立てます。

要件の評価

再作業および障害を最小限にするために、インストールおよび構成の決定を行う前に、現行の環境の検討に時間をかけてください。現在のビジネス要件と設計、既にインストールされているハードウェアとソフトウェア、および現在の長所と短所を検討してください。また、この計画は、財政投資を最小化するのにも役立つ場合があります。

いくつかの要因がご使用のソフトウェアの要件を決定します。それらの要因は、以下のカテゴリーにまとめることができます。

- 製品のハードウェア要件およびソフトウェア要件、ユーザー自身のシステム・リソースの制約、およびご使用のシステムを管理し維持するためのリソースの可用性
- ランタイム環境にデプロイするアプリケーション、および構成済み環境の所期の使用方法
- 要件を満たすためにインストールする製品および製品のバージョン

これらすべての要因について賢明な選択をするには、以下の概念を理解する必要があります。

- 環境の構成に適用される用語
- インストール、構成、管理、保守を行う製品の管理アーキテクチャー。
- (提供されるパターンを介して) 使用可能な構成オプション、およびパターンが製品の使用目的に対処するかどうかを判別する方法。
- サポート対象の実装メソッド。製品をインストールし環境を構成する各種タスク・フローの理解も含まれる。

このセクションの情報を使用して、現在および将来の要件を評価および分析し、これらの要件に合致する環境を開発します。

重要: プラットフォーム固有のディスク・スペース要件、サポート対象のオペレーティング・システム、およびサポート対象のデータベースのバージョンに関する最新情報については、以下のリンクの 1 つをクリックします。オペレーティング・システムを要件に準拠させるためにインストールする必要がある、オペレーティング・システムのフィックスとパッチを検索することもできます。

- [IBM Business Process Manager Advanced system requirements](#)
- [IBM Business Process Manager Standard system requirements](#)
- [IBM Business Process Manager Express system requirements](#)
- [IBM Business Process Manager Tooling Requirements](#)

プロセスおよび Process Application に関する考慮事項

ビジネス・コンポーネントの統合を合理化する計画のベースラインになるのは、現在の要件です。ビジネスの拡大に伴う意思決定に役立つガイドラインを作成するには、ビジネスの将来を視野に入れた構想が必要になります。

製品の製造および出荷、サービスの提供がどのように行われているかを把握する必要があります。IBM Business Process Manager には、実稼働環境とテスト環境の両方の要件に合うように設計されたデプロイメント環境パターンが用意されています。

以下を検討します。

- Process Application が既存のサービスやバックエンド・システムとどう対話するかを検討します。
- 特定のビジネス・ニーズに対処するために、プロセス・アプリケーションでデータをどう処理するか、およびシステム内にデータをどう流すかを検討します。

ソリューションを開発してその環境を構成する際には、複数の検索、セッション、プロセス、およびその他の境界にわたって、データがどのように存続するかを理解する必要があります。

環境にデプロイするプロセス・アプリケーションに関する以下の項目を検討してください。

– Process Application の呼び出しパターン

非同期呼び出しがランタイム環境でどのように処理されるか、また、非同期呼び出しを実装するために、基盤となるメッセージ・システムが SCA ランタイム環境でどのように利用されるかを理解する必要があります。

アプリケーションが異なれば要件が異なります。こうした要件の決定要因としては、例えば、エクスポート・タイプ、コンポーネント間の対話、インポート・タイプ、データベースや JMS リソースなどの必要なリソース、ビジネス・イベントの必要性、ビジネス・イベントの伝送機構などがあります。

– 実装予定のビジネス・プロセスのタイプ (トランザクション・ビジネス・プロセス、割り込み可能なビジネス・プロセス、割り込み不可能なビジネス・プロセス)

割り込み不可能なビジネス・プロセス、つまり microflow は、1 つのトランザクションで実行されるかトランザクションなしで実行される、実行時間の短いビジネス・プロセスです。割り込み不可能なビジネス・プロセスは、パフォーマンスのオーバーヘッドがほとんどなく、高速です。このプロセス内のすべてのアクティビティが単一スレッド内で処理されます。

割り込み可能なビジネス・プロセス、つまり macroflow は、一連のアクティビティが含まれている、実行時間の長いビジネス・プロセスです。このプロセス内のアクティビティは、それぞれ固有のトランザクションで実行されます。割り込み可能なビジネス・プロセスには、人の介入またはリモート・システムの呼び出し、あるいはその両方が必要なアクティビティを組み込むことができます。非同期アクティビティは完了するために数分、数時間、あるいは数日の時間がかかる可能性があるため、それらのアクティビティを組み込むビジネス・プロセスは割り込み可能にする必要があります。

リソースに関する考慮事項

資産を明確化し、既に使用可能なソフトウェアおよびハードウェアのリソースを最大限に利用するとともに、十分な情報に基づいて実装の決定を下します。現在のエンタープライズ情報システムを評価し、ビジネス上のニーズを満たすためにハードウェアまたはソフトウェアを追加する必要があるかを判別します。

次の要因を検討します。

- 現在のハードウェアおよびソフトウェアをよく理解します。以下のようにして使用可能な資産のリストを準備します。
- 使用する物理コンピューター・システムの数と判別し、各物理ハードウェアを項目別に分けます。以下の情報を記録します。

- 実装済みメモリーの量
- 実装済みマイクロプロセッサの数およびタイプ
- 外部メディア
- 特定の装置がアップグレード可能かどうか
- すべてのサーバーが、製品とデータベースのどちらに関与するかを問わず、同じネットワーク・タイム・プロトコルを使用し、同じ時刻に設定されているようにします。
- 現在インストールされているソフトウェアおよびデータベース・アプリケーションを列挙します。以下の情報を記録します。
 - 機能
 - 企業内での使用範囲
 - セキュリティー要件
- 現在の IT 要員のリストを作成します。ご使用のデータベースを管理するのに必要な専門的知識と共に、IBM Business Process Manager をインストールし維持するために必要な専門的知識を備えているかどうか判断します。適切なユーザーが、すべての製品およびファイルを正しくインストールする権限のあるユーザー ID を持っていることを確認します。

開発およびデプロイメントのバージョン・レベル

ご使用の環境に必要な IBM Business Process Manager のバージョン・レベルの決定は、アプリケーションの開発で使用されたバージョン・レベルに依存します。一般に、前のバージョンの IBM Business Process Manager にデプロイされたアプリケーションは、次に入手可能なバージョンの IBM Business Process Manager 上でも実行できます。

次の表は、IBM Integration Designer V7.5.1 (以前の WebSphere® Integration Developer) および IBM Process Designer V7.5.1 を含む IBM Business Process Manager V7.5.1 と、それ以前のリリースとの互換性を説明しています。

タスク	サポートされているか
WebSphere Integration Developer バージョン 6.1.0、6.1.2、6.2.0、または 7.0.0 または IBM Integration Designer 7.5 から IBM Business Process Manager V7.5.1 へのデプロイメント。	はい。 重要: WebSphere Adapters V6.1.0、V6.1.2、および V6.2.0 の場合は、「Mandatory adapter fix for running 6.1 and 6.2 Adapters on WPS v7.0」というタイトルの暫定修正をインストールする必要があります。WebSphere Adapter をバージョン 7.0 レベルにアップデートせず、アプリケーションを WebSphere Adapter バージョン 6.1.0、V6.1.2、または V6.2.0 で使用し続ける計画の場合は、この暫定修正をソース環境に適用する必要があります。 重要: Websphere Adapter for SAP V6.0.2、V6.1.0、V6.1.2、および V6.2.0 は、IBM Business Process Manager V7.5.1 ではサポートされません。Websphere Adapter for SAP を使用するアプリケーションを IBM Business Process Manager V7.5.1 にデプロイするには、まず Websphere Adapter for SAP を V7.0 に更新する必要があります。WebSphere Adapter for SAP に固有の詳細情報については、『IBM Business Process Manager の事後マイグレーション・タスク』を参照してください。

タスク	サポートされているか
IBM Business Process Manager V7.5.1 成果物の WebSphere Process Server 6.1.0、6.1.2、6.2.0、7.0、または IBM Business Process Manager 7.5 での実行。	いいえ。 IBM Integration Designer V7.5.1 で作成したアプリケーションは、WebSphere Process Server 6.1.0、6.1.2、6.2.0、7.0、または IBM Business Process Manager 7.5 (前のすべてのリリース) のサーバーにパブリッシュまたはインストールできません。 WebSphere Integration Developer 6.1.0、6.1.2、6.2.0、7.0、または IBM Integration Designer 7.5 で作成され、IBM Integration Designer V7.5.1 で生成されたアプリケーションは、WebSphere Process Server 6.1.0、6.1.2、6.2.0、7.0、または IBM Business Process Manager 7.5 のサーバーにパブリッシュまたはインストールできません。 serviceDeploy を使用して IBM Business Process Manager V7.5.1 サーバーで生成されたアプリケーションは、WebSphere Process Server 6.1.0、6.1.2、6.2.0、7.0、または IBM Business Process Manager 7.5 のサーバーにインストールできません。

プロファイル、ノード、サーバー、ホスト、およびセルの命名に関する考慮事項

このトピックでは、プロファイル、ノード、サーバー、ホスト、およびセル (該当する場合) を命名する際に考慮しなければならない予約語および問題について説明します。このトピックは分散プラットフォームに適用されます。

プロファイルの命名の考慮事項

プロファイル名には、固有の名前を付けることができますが、以下の制限があります。プロファイルの名前を付ける際には、以下の文字を使用しないでください。

- スペース
- ご使用のオペレーティング・システムのディレクトリー名に使用できない特殊文字 (*、&、または ? など)
- スラッシュ (/) または円記号 (¥)

全角文字は許可されています。

Windows ディレクトリー・パスについての考慮事項: インストール・ディレクトリーのパスは、60 文字以下でなければなりません。 `profiles_directory_path¥profile_name` ディレクトリーの文字数は、80 文字以下でなければなりません。

ノード、サーバー、ホスト、セルの命名の考慮事項

予約名: フィールド値として予約済みの名前を使用しないでください。予約済みの名前を使用すると、予測不能な結果が起こる可能性があります。以下のワードは、予約されています。

- cells

- nodes
- servers
- クラスター
- アプリケーション
- deployments

「ノード名およびホスト名」および「ノード名、ホスト名、セル名」パネルのフィールドの説明: 表 10 では、プロファイル管理ツールの「ノード名およびホスト名」および「ノード名、ホスト名、セル名」ページにあるフィールドについて説明します。この表には、フィールド名、デフォルト値、および制約が示されています。プロファイルの作成時には、この情報をガイドとして使用してください。

表 10. ノード、サーバー、ホスト、およびセルの命名ガイドライン

フィールド名	デフォルト値	制約	説明
スタンドアロン・サーバー・プロファイル			
ノード名	<div style="display: flex; flex-direction: column; gap: 5px;"> <div style="background-color: #800000; color: white; padding: 2px 5px; text-align: center;">Linux</div> <div style="background-color: #800000; color: white; padding: 2px 5px; text-align: center;">UNIX</div> <div style="background-color: #800000; color: white; padding: 2px 5px; text-align: center;">Windows</div> </div> <p><i>shortHostName</i> Node <i>NodeNumber</i> ここで、</p> <ul style="list-style-type: none"> • <i>shortHost Name</i> は短いホスト名です。 • <i>NodeNumber</i> は 01 で始まるシーケンス番号です。 	予約名を使用しないでください。	希望の名前を選択してください。システムに複数のサーバーを作成する予定がある場合、インストールを編成するには、固有の名前を使用します。
サーバー名	<div style="display: flex; flex-direction: column; gap: 5px;"> <div style="background-color: #800000; color: white; padding: 2px 5px; text-align: center;">Linux</div> <div style="background-color: #800000; color: white; padding: 2px 5px; text-align: center;">UNIX</div> <div style="background-color: #800000; color: white; padding: 2px 5px; text-align: center;">Windows</div> </div> <p>server1</p>	サーバーの固有の名前を使用します。	サーバーの論理名です。
ホスト名	<div style="display: flex; flex-direction: column; gap: 5px;"> <div style="background-color: #800000; color: white; padding: 2px 5px; text-align: center;">Linux</div> <div style="background-color: #800000; color: white; padding: 2px 5px; text-align: center;">UNIX</div> <div style="background-color: #800000; color: white; padding: 2px 5px; text-align: center;">Windows</div> </div> <p>ドメイン・ネーム・サーバー (DNS) 名の長い書式。</p>	ホスト名は、ご使用のネットワークを介してアドレス可能でなければなりません。 Business Space の使用を計画している場合は、完全修飾ホスト名を使用します。	ワークステーションの実際の DNS 名または IP アドレスを使用して、ワークステーションと通信できるようにします。この表の後にある、ホスト名に関する追加情報を参照してください。

表 10. ノード、サーバー、ホスト、およびセルの命名ガイドライン (続き)

フィールド名	デフォルト値	制約	説明
セル名	<p>Linux</p> <p>UNIX</p> <p>Windows</p> <p><i>shortHostName</i> Node <i>NodeNumber</i> Cell ここで、</p> <ul style="list-style-type: none"> • <i>shortHost Name</i> は短いホスト名です。 • <i>NodeNumber</i> は 01 で始まるシーケンス番号です。 	<p>セルの固有の名前を使用します。製品が同じ物理ワークステーション上で稼働する場合や、ワークステーションのクラスター上で稼働する場合 (例: Sysplex) は、どんな環境でも、セル名は固有でなければなりません。また、エンティティー間のネットワーク接続性 (セル間の、または各セルと通信する必要のあるクライアントからの) が求められる環境では、セル名は固有でなければなりません。さらに、名前空間がフェデレートされる場合にも、セル名を固有にする必要があります。固有でなければ、<code>javax.naming.NameNotFoundException</code> 例外などの症状が発生する可能性があります。この場合は、固有の名前のセルを作成する必要があります。</p>	<p>すべての統合ノードは、デプロイメント・マネージャー・セルのメンバーになります。</p>
SSL 証明書所有者の共通名 (CN)	<p>生成された証明書は、ホスト名を所有者の共通名 (CN) として使用します。</p>	<p>SSL 検証の場合、証明書の共通名は、ホスト名と一致する必要があります。</p>	
Deployment manager プロファイル			

表 10. ノード、サーバー、ホスト、およびセルの命名ガイドライン (続き)

フィールド名	デフォルト値	制約	説明
ノード名	<p>Linux</p> <p>UNIX</p> <p>Windows</p> <p><i>shortHostName</i> Cell <i>ManagerNode</i> <i>Number</i> ここで、</p> <ul style="list-style-type: none"> • <i>shortHost Name</i> は短いホスト名です。 • <i>NodeNumber</i> は 01 で始まるシーケンス番号です。 	<p>デプロイメント・マネージャーの固有の名前を使用します。予約名を使用しないでください。</p>	<p>この名前は、デプロイメント・マネージャー・セル内での管理に使用されます。</p>
ホスト名	<p>Linux</p> <p>UNIX</p> <p>Windows</p> <p>ドメイン・ネーム・サーバー (DNS) 名の長い書式。</p>	<p>ホスト名は、ご使用のネットワークを介してアドレス可能でなければなりません。予約名を使用しないでください。</p> <p>Business Space の使用を計画している場合は、完全修飾ホスト名を使用します。</p>	<p>ワークステーションの実際の DNS 名または IP アドレスを使用して、ワークステーションと通信できるようにします。この表の後にある、ホスト名に関する追加情報を参照してください。</p>

表 10. ノード、サーバー、ホスト、およびセルの命名ガイドライン (続き)

フィールド名	デフォルト値	制約	説明
セル名	<p>Linux</p> <p>UNIX</p> <p>Windows</p> <p><i>shortHostName</i> Cell <i>CellNumber</i> ここで、</p> <ul style="list-style-type: none"> • <i>shortHost Name</i> は短いホスト名です。 • <i>CellNumber</i> は、01 から始まる連続番号を表します。 	<p>デプロイメント・マネージャー・セルに固有の名前を使用します。製品が同じ物理ワークステーション上で稼働する場合や、ワークステーションのクラスター上で稼働する場合 (例: Sysplex) は、どんな環境でも、セル名は固有でなければなりません。また、エンティティ間のネットワーク接続性 (セル間の、または各セルと通信する必要があるクライアントからの) が求められる環境では、セル名は固有でなければなりません。名前空間が統合される場合でも、セル名は固有である必要があります。固有でなければ、<code>javax.naming.NameNotFoundException</code> 例外などの症状が発生する可能性があります。この場合は、固有の名前のセルを作成する必要があります。</p>	<p>すべての統合ノードは、デプロイメント・マネージャー・セルのメンバーになります。このセルは、プロファイル管理ツールの「ノード名、ホスト名、セル名」ページで指定します。</p>
SSL 証明書所有者の共通名 (CN)	<p>生成された証明書は、ホスト名を所有者の共通名 (CN) として使用します。</p>	<p>SSL 検証の場合、証明書の共通名は、ホスト名と一致する必要があります。</p>	
カスタム・プロファイル			

表 10. ノード、サーバー、ホスト、およびセルの命名ガイドライン (続き)

フィールド名	デフォルト値	制約	説明
ノード名	<p>Linux</p> <p>UNIX</p> <p>Windows</p> <p><i>shortHostName</i> Node <i>NodeNumber</i> ここで、</p> <ul style="list-style-type: none"> <i>shortHost Name</i> は短いホスト名です。 <i>NodeNumber</i> は 01 で始まるシーケンス番号です。 	<p>予約名を使用しないでください。</p> <p>デプロイメント・マネージャー・セル内で固有の名前を使用します。</p>	<p>この名前は、カスタム・プロファイルが追加されるデプロイメント・マネージャー・セル内で管理のために使用されます。デプロイメント・マネージャー・セル内で固有の名前を使用します。</p>
ホスト名	<p>Linux</p> <p>UNIX</p> <p>Windows</p> <p>ドメイン・ネーム・サーバー (DNS) 名の長い書式。</p>	<p>ホスト名は、ご使用のネットワークを介してアドレス可能でなければなりません。</p> <p>Business Space の使用を計画している場合は、完全修飾ホスト名を使用します。</p>	<p>ワークステーションの実際の DNS 名または IP アドレスを使用して、ワークステーションと通信できるようにします。この表の後にある、ホスト名に関する追加情報を参照してください。</p>
SSL 証明書所有者の共通名 (CN)	<p>生成された証明書は、ホスト名を所有者の共通名 (CN) として使用します。</p>	<p>SSL 検証の場合、証明書の共通名は、ホスト名と一致する必要があります。</p>	

ホスト名の考慮事項:

ホスト名は、ノードがインストールされている物理ワークステーションのネットワーク名です。ホスト名は、サーバー上の物理ネットワーク・ノードに解決する必要があります。サーバーが複数のネットワーク・カードを備えている場合は、ホスト名または IP アドレスは、そのネットワーク・カードのいずれか 1 つに解決されなければなりません。リモート・ノードは、ホスト名を使用して、このノードに接続および通信します。

IBM Business Process Manager は、インターネット・プロトコル・バージョン 4 (IPv4) およびバージョン 6 (IPv6) の両方に対応しています。管理コンソールなどで IP アドレスを入力できる場所では、どちらの形式で入力しても構いません。ご使用のシステムに IPv6 が実装されている場合は、IP アドレスを IPv6 形式で入力する必要があります。反対に、IPv6 を使用できない環境では、IP アドレスを IPv4 形式で入力してください。IPv6 について詳しくは、IPv6 の公式 Web サイトを参照してください。

以下のガイドラインが、ご使用のワークステーションに適切なホスト名を付ける場合に役立ちます。

- その他のワークステーションがネットワーク内でアクセスできるホスト名を選択します。
- この値に汎用 ID、localhost を使用しないでください。

- 2 バイト文字セット (DBCS) の文字を使用しているホスト名を持つサーバーには、IBM Business Process Manager 製品をインストールしないでください。DBCS 文字は、ホスト名に使用する場合はサポートされていません。
- サーバー名には下線文字 (_) を使用しないようにしてください。インターネット標準では、ドメイン・ネームが Internet Official Protocol Standards の RFC 952 および RFC 1123 に記述されているホスト名の要件に適合するよう定めています。ドメイン・ネームには、文字 (大文字または小文字) および数字のみを使用する必要があります。ただし、名前の先頭または末尾にならない限り、ドメイン・ネームにダッシュ文字 (-) を使用してもかまいません。ホスト名では、下線文字 (_) はサポートされていません。サーバー名に下線文字を使用しているサーバーにすでに IBM Business Process Manager をインストールした場合、このサーバーにアクセスするには、その名前を変更するまで IP アドレスを使用してください。
- Secure Sockets Layer (SSL) を使用している場合、サーバーの接続先のホスト名は、SSL 証明書の共通名 (CN) に一致する必要があります。

同一コンピューター上に共存している複数のノードを固有の IP アドレスで定義する場合は、ドメイン・ネーム・サーバー (DNS) のルックアップ・テーブルで、個々の IP アドレスを定義してください。サーバーの構成ファイルでは、ネットワーク・アドレスが 1 つしかないワークステーションでの複数 IP アドレスのドメイン・ネーム解決が提供されません。

ホスト名に指定する値は、構成文書で `hostName` プロパティの値として使用されます。次のいずれかの形式で、ホスト名の値を指定してください。

- 完全修飾のドメイン・ネーム・サーバー (DNS) ホスト名ストリング。例えば `xmachine.manhattan.ibm.com` など。
- デフォルトの DNS 短縮ホスト名ストリング。例えば `xmachine` など。
- 数値 IP アドレス。例えば `127.1.255.3` など。

完全修飾 DNS ホスト名には、あいまいなところがなく、柔軟性に富むという利点があります。この柔軟性により、ユーザーは、ホスト・システムの実際の IP アドレスを変更しても、サーバー構成を変更する必要がありません。ホスト名のこの値は、動的ホスト構成プロトコル (DHCP) を使用して IP アドレスを割り当てる際に頻繁に IP アドレスを変更することが予定されている場合には、特に有用です。この形式の欠点は、DNS に依存するという点です。DNS が使用できないと、接続に支障を来します。

短縮ホスト名も、動的に解決可能です。ショート・ネーム形式には、ネットワークから切断されたときでもシステムがサーバーを実行できるように、ローカルの `hosts` ファイルで再定義されるという機能もあります。`hosts` ファイルの `127.0.0.1` (ローカル・ループバック) に対するショート・ネームを、切断した状態でも実行されるように定義します。ショート・ネーム形式の欠点は、リモート・アクセスでは DNS に依存するという点です。DNS が使用できないと、接続に支障を来します。

数値 IP アドレスには、DNS によって名前を解決する必要がないという利点があります。リモート・ノードは、DNS が使用できなくても、数値 IP アドレスを使用して名付けられたノードに接続できます。この形式の欠点は、数値 IP アドレスを使用するとアドレスが固定化されるということです。ワークステーションの IP アドレスを変更したら、構成文書の `hostName` プロパティの設定も必ず変更しなければなりません。したがって、DHCP を使用するか、あるいは IP アドレスを定期的に変更する場合は、数値 IP アドレスを使用しないでください。もう一方の形式の欠点としては、ホストがネットワークから切断されるとノードを使用できないことがあります。

必要なセキュリティ許可の準備

セキュリティ・ポリシーによっては、ファイルおよびフォルダーの作成やデータベースへのアクセスなどのタスクを完了するためにユーザー ID とパスワードが必要な場合があります。サーバーが保護データにアクセスしようとしたときの問題を防ぐために、セキュア・ユーザー ID を準備してください。

- データベースの設計を完了します。
- 使用する認証システム (例えば Lightweight Directory Access Protocol (LDAP)) を決定します。
- IBM Business Process Manager のインストールに必要な権限に影響する制御として、存在している制御を判別します。
- 製品をインストールするシステムを識別します。

サイトのセキュリティ・ポリシーではグローバル・セキュリティが有効になっており、ソフトウェアのインストール、データベースまたはテーブルの作成、およびデータベースへのアクセスを行うために所定の権限が必要になっています。正常に製品をインストールして運用するためには、ここに示すステップを行う必要があります。

IBM Business Process Manager データベースのセキュリティ許可を準備するには、以下のステップを実行します。

- システムにソフトウェアをインストールする権限を持つユーザー ID とパスワードのリストを作成します。ファイルおよびフォルダーを作成する権限を持つ IBM Business Process Manager ユーザー ID 用に、インストール・ウィザードを実行する必要があります。
- システムの日常の運用に必要なユーザー ID、パスワード、およびロールのリストを作成します。
 - 管理コンソールのユーザー ID と能力を制限するロール。ロールの構成、管理、またはモニター用のユーザー ID を所有することができます。
 - システム通信を認証する各システム・バスのユーザー ID。
 - Business Flow Manager と Human Task Manager での認証のための Business Process Choreographer Container ごとの管理およびモニター用のユーザー ID またはグループ。
 - Business Flow Manager と Human Task Manager での認証のための同期呼び出し用のユーザー ID またはグループ。
- システムが操作中に使用するデータベース表にアクセスするために使用するユーザー ID とパスワードのリストを作成します。
- オプション: システムがインストール中にデータベースまたはデータベース表の作成に使用するユーザー ID とパスワードのリストを作成します。サイト・ポリシーによっては、この権限がデータベース管理者に制限されている場合があります。その場合は、生成されたスクリプトを管理者に提供して、データベースまたはデータベース表を作成してもらう必要があります。

サーバーをセキュアな環境にインストールして運用できます。

製品およびプロファイルのインストール・ディレクトリー

IBM Business Process Manager のインストール・ディレクトリーは、いくつかの変数で表されます。それらの変数の意味は、さまざまな要因で異なる可能性があります。

この資料で使用されている変数

この資料では、特定のデフォルト・ディレクトリーを表すいくつかの変数が使用されています。これらのファイル・パスは、デフォルトのロケーションです。書き込み権限を所有しているディレクトリーであれば

のディレクトリーにも、製品およびその他のコンポーネントをインストールし、プロファイルを作成できません。IBM Business Process Manager 製品またはコンポーネントを複数インストールする場合は、複数のロケーションが必要です。

以下に、この資料で使用されている主な変数を示します。

Linux UNIX Windows *install_root*

IBM Business Process Manager のインストール・ロケーション。IBM Business Process Manager は常に、関連付けられた WebSphere Application Server Network Deployment と同じ場所にインストールされます。

profile_root

IBM Business Process Manager プロファイルの場所。

変数の意味の違いについて

インストール・ディレクトリーを表すのに使用する変数の意味は、製品をクリーン・ワークステーションにインストールするか、あるいは WebSphere Application Server または WebSphere Application Server Network Deployment が既にインストールされているワークステーションにインストールするかに基づいて異なることがあります。またそのような変数は、インストールを root ユーザー (Windows システムでは Administrator) として実行しているか、あるいは非 root ユーザーとして実行しているかによっても異なる場合があります。

Linux UNIX Windows

非 root ユーザーがインストールする場合の制限

root、Administrator、および非 root ユーザーが製品をインストールできます。インストール・プログラムが用意するデフォルト・ディレクトリーは、ユーザーが root (管理者) 特権を所有しているかどうかにより異なります。root および Administrator ユーザーは共用製品を登録でき、システム所有のディレクトリー (すべてのユーザーが使用可能なグローバル共有リソース) にインストールできますが、非 root ユーザーはこれできません。非 root ユーザーは、そのユーザーが所有しているディレクトリーにしかインストールできません。

標準インストールの場合のデフォルト・ディレクトリー

以下の表は、標準インストールの場合の IBM Business Process Manager の基本インストールとそのプロファイルのデフォルトのインストール・ロケーションを示します。

表 11 は、root (Administrator) ユーザーおよび非 root ユーザーの両方について、インストール・プログラムが IBM Business Process Manager および WebSphere Application Server Network Deployment の両方をインストールするデフォルトのインストール・ルート・ディレクトリーを示したものです。

表 11. *install_root* デフォルト・ディレクトリー

root または Administrator ユーザーのデフォルトの <i>install_root</i>	非 root ユーザーのデフォルトの <i>install_root</i>
AIX /opt/IBM/BPM/v7.5	AIX <i>user_home</i> /IBM/BPM/v7.5
Linux /opt/ibm/BPM/v7.5	Linux <i>user_home</i> /ibm/BPM/v7.5C:¥IBM¥BPM¥v7.5
Windows C:¥IBM¥BPM¥v7.5	Windows C:¥IBM¥BPM¥v7.5

表 12 は、root (Administrator) ユーザーと非 root ユーザーの両方について、*profile_name* という名前のプロファイルのデフォルト・インストール・ディレクトリーを示したものです。

表 12. *profile_root* デフォルト・ディレクトリー

root または Administrator ユーザーのデフォルトの <i>profile_root</i>	非 root ユーザーのデフォルトの <i>profile_root</i>
AIX /opt/IBM/BPM/v7.5/profiles/ <i>profile_name</i>	AIX <i>user_home</i> IBM/BPM/v7.5/profiles/ <i>profile_name</i>
Linux /opt/ibm/BPM/v7.5/profiles/ <i>profile_name</i>	Linux <i>user_home</i> /ibm/BPM/v7.5/profiles/ <i>profile_name</i>
Windows C:¥IBM¥BPM¥v7.5¥profiles¥ <i>profile_name</i>	Windows C:¥IBM¥BPM¥v7.5¥profiles¥ <i>profile_name</i>

表 13 は、DB2 Express のインストール・ロケーションを示します。DB2 Express は IBM Business Process Manager と同じディレクトリーの下にインストールされます。

表 13. *DB2 Express* デフォルト・ディレクトリー

DB2 Express バイナリーのデフォルト・ロケーション	データベース・インスタンスのロケーション
Linux /opt/ibm/BPM/v7.5/DB2	Linux データベース・インスタンスは <i>bpminst</i> ユーザーの下で作成されます。例: <i>user_home</i> /bpminst
Windows C:¥IBM¥BPM¥v7.5¥DB2	Windows BPMINST データベース・インスタンスは、IBM Business Process Manager がインストールされているドライブのルート (¥) に作成されます。例えば、IBM Business Process Manager が C:¥IBM¥BPM¥v7.5¥ にインストールされている場合は、C:¥BPMINST となります。

カスタム・インストールまたは WebSphere Application Server または WebSphere Application Server Network Deployment が既にインストールされている場合のデフォルト・ディレクトリー

以下の表は、製品とそのプロファイルのデフォルト・インストール・ロケーションを示します。サポートされる既存のバージョンの WebSphere Application Server または WebSphere Application Server Network Deployment の上に IBM Business Process Manager をインストールする選択をした場合、IBM Business Process Manager は同じロケーションにインストールされます。表 14 は、root (Administrator) ユーザーおよび非 root ユーザーの両方について、そのような場合でのデフォルトのインストール・ルート・ディレクトリーを示したものです。

表 14. インストール・プログラムが root (管理者) ユーザー用と非 root ユーザー用の両方に IBM Business Process Manager と WebSphere Application Server の両方をインストールするデフォルトのインストール・ルート・ディレクトリー

root または Administrator ユーザーのデフォルトの <i>install_root</i>	非 root ユーザーのデフォルトの <i>install_root</i>
AIX /usr/IBM/WebSphere/AppServer	AIX <i>user_home</i> /IBM/WebSphere/AppServer
Linux Solaris /opt/IBM/WebSphere/AppServer	Linux Solaris <i>user_home</i> /IBM/WebSphere/AppServer
Windows C:¥Program Files¥IBM ¥WebSphere¥AppServer	Windows <i>user_home</i> ¥IBM ¥WebSphere¥AppServer

表 15. root (Administrator) および root 以外のユーザーの両方における、profile_name という名前のプロファイルのデフォルト・インストール・ディレクトリーを示します。

root または Administrator ユーザーのデフォルトの profile_root	非 root ユーザーのデフォルトの profile_root
AIX /usr/IBM/WebSphere/AppServer/profiles/ profile_name	AIX user_home/IBM/WebSphere/AppServer/ profiles/profile_name
Linux Solaris /opt/IBM/WebSphere/AppServer/ profiles/profile_name	Linux Solaris user_home/IBM/WebSphere/ AppServer/profiles/profile_name
Windows C:¥Program Files¥IBM¥ WebSphere¥AppServer¥profiles¥ profile_name	Windows user_home¥IBM¥ WebSphere¥AppServer¥profiles¥ profile_name

Installation Manager のデフォルトのインストール・ディレクトリー

表 16 は、Installation Manager ツールに関連する 2 つのデフォルト・ディレクトリーを示したものです。

インストール・ディレクトリー内のディレクトリーは、Launchpad アプリケーションによって Installation Manager が格納される (プラットフォームごとの) デフォルト・ディレクトリーです。

エージェント・データ・ロケーション・ディレクトリー内のディレクトリーは、Installation Manager に関連するデータ (Installation Manager によって実行された操作の状態や履歴など) 用の (プラットフォームごとの) デフォルト・ディレクトリーです。

root (Administrator) ユーザー用と非 root ユーザー用の両方の値が提供されます。

エージェント・データのロケーションについては、Installation Manager 資料の『エージェント・データのロケーション』を参照してください。Installation Manager のその他のデフォルト設定については詳しくは、Installation Manager 資料の『管理者または非管理者としてのインストール』を参照してください。

表 16. Installation Manager のデフォルトのインストール・ディレクトリー

root または Administrator ユーザーのデフォルト	非 root ユーザーのデフォルト
インストール・ディレクトリー:	インストール・ディレクトリー:
Linux /opt/IBM/InstallationManager/eclipse	Linux user_home/IBM/InstallationManager/eclipse
UNIX /opt/IBM/InstallationManager/eclipse	UNIX user_home/IBM/InstallationManager/eclipse
Windows C:¥Program Files¥IBM¥ Installation Manager¥eclipse	Windows C:¥Documents and Settings¥ userID¥IBM¥Installation Manager¥eclipse
	Vista Windows 7 C:¥ProgramData¥IBM¥Installation Manager
エージェント・データ・ロケーション・ディレクトリー:	エージェント・データ・ロケーション・ディレクトリー:
Linux /var/ibm/InstallationManager	Linux user_home/var/ibm/InstallationManager
UNIX /var/ibm/InstallationManager	UNIX user_home/var/ibm/InstallationManager

表 16. Installation Manager のデフォルトのインストール・ディレクトリー (続き)

root または Administrator ユーザーのデフォルト	非 root ユーザーのデフォルト
<p>Windows C:¥Documents and Settings¥All Users¥Application Data¥IBM¥Installation Manager</p> <p>Vista Windows 7 C:¥ProgramData¥IBM¥Installation Manager</p>	<p>Windows C:¥Documents and Settings¥userID¥Application Data¥IBM¥Installation Manager</p> <p>Vista Windows 7 C:¥Users¥userID¥AppData¥Roaming¥IBM¥ Installation Manager</p>

スタンドアロン環境または Network Deployment 環境の選択

製品を評価するため、またはアプリケーションおよびサービスの開発をサポートするためには、スタンドアロン環境を選択します。実稼働環境でキャパシティ、アベイラビリティ、スケーラビリティ、およびフェイルオーバー・サポートなどの追加のフィーチャーを必要とする場合は、Network Deployment 環境を選択します。

スタンドアロン環境はインストール および構成が最も容易であり、計画はほとんど必要ありません。Network Deployment 環境では、多数のロールを含む、より詳細なインストールおよび構成のタスクが必要です。

Network Deployment 環境の場合、ビジネス・アプリケーションおよびサービスがその環境で実行する作業の要件を満たすことを目的として、慎重に特性を計画する必要があります。考慮すべき点はいくつかありません。以下に例を示します。

- 必要とする物理ワークステーションおよびハードウェア・リソースの数
- ビジネスをサポートするために必要なクラスターおよびクラスター・メンバーの数
- 必要なデータベースの数
- 認証の役割およびセキュリティー上の考慮事項
- デプロイメント環境の実装に使用する方式
- ユーザー・レジストリー (セキュリティー用)、1 台以上の HTTP サーバー (Web コンテンツ用)、必要なファイアウォール、ロード・バランサーなど、その他のサポート・リソース。

スタンドアロン環境

スタンドアロン環境を使用すると、単一のサーバー・プロセスで Service Component Architecture (SCA) モジュールをデプロイできます。

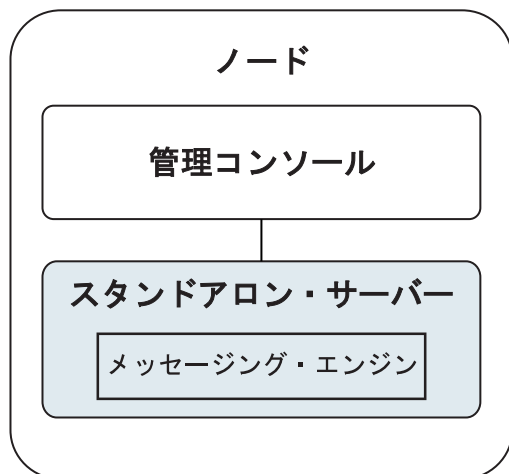


図1. スタンドアロン環境

製品を評価するため、またはアプリケーションおよびサービスの開発をサポートするために、サンプルをインストールして、スタンドアロン・サーバーにサンプル・ソリューションをデプロイできます。このサンプルに使用されているリソースは、管理コンソールで探索できます。

まずスタンドアロン環境から始めて、後でそれを Network Deployment 環境に組み込むには、スタンドアロン環境をデプロイメント・マネージャー・セルに統合します。これは、そのセルに他のノードが統合されていない場合にのみ可能です。

製品ソフトウェアをインストールするときに、スタンドアロン開発環境 (qesb) 用のプロファイルの作成を選択できます。作成されたプロファイルは、テスト・シナリオでの使用またはアプリケーション開発のサポートにのみ適します。実動目的でスタンドアロン・サーバー環境を使用するシナリオの場合、製品ソフトウェアをインストールしてください。次に、プロファイル管理ツールまたは **manageprofiles** コマンド行ユーティリティを使用して、スタンドアロン・プロファイルを構成します。

ネットワーク・デプロイメント環境

Network Deployment 環境には、サービス要求元およびプロバイダーのエンタープライズ・アプリケーション、およびそれらのメディエーション・モジュールを実行するために相互接続されたサーバーとクラスターのコレクションが含まれます。この環境には、WebSphere Application Server のアプリケーション・サーバーも組み込むことができます。

Network Deployment 環境は、以下のようなアプリケーション・コンポーネントをサポートする、相互接続されたサーバーとクラスターのコレクションを提供します。

- Process Server
- パフォーマンス・データウェアハウス
- Business Process Choreographer
- ビジネス・ルール
- メディエーション
- 関係

この環境では、WebSphere Enterprise Service Bus および WebSphere Application Server 用のサーバーもサポートされます。

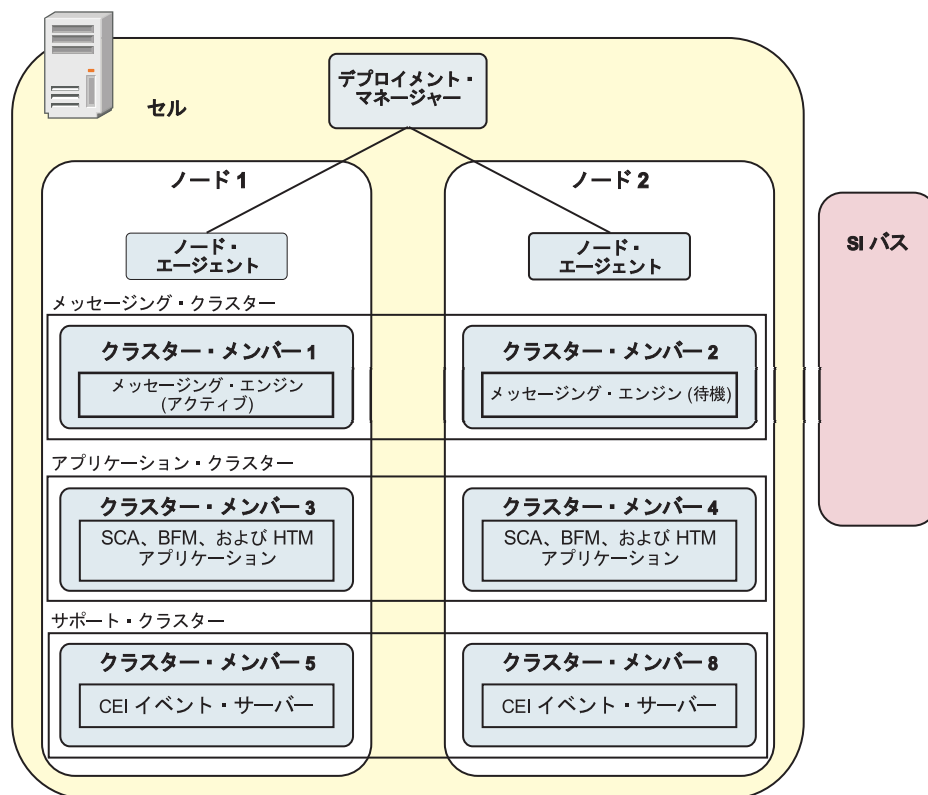


図 2. Network Deployment 環境

サーバーおよびクラスターは、1 つ以上の管理対象ノードで実行されます。それらの管理対象ノードは、それぞれ 1 つの論理コンピューター・システムまたは物理コンピューター・システムに対応しています。

複数のサーバーを、ロード・バランシングとフェイルオーバーをサポートするためにクラスターにグループ化することができます。

相互接続サーバーまたはクラスターのデプロイメント環境は、スタンドアロン・サーバーでは提供できないパフォーマンス、アベイラビリティ、スケーラビリティ、分離機能、セキュリティ、および安定度の特性を提供します。さらに、集中化されたデプロイメント・マネージャーからすべてのサーバーまたはクラスターを管理することができます。

デプロイメント・マネージャーによって管理されるサーバーとクラスターの集合全体は、デプロイメント環境として構成および管理されます。

Network Deployment 環境をインストールするには、製品ソフトウェアをインストールしてから、デプロイメント・マネージャーおよび 1 つ以上のカスタム (管理対象) ノード用のプロファイルを構成します。管理対象のデプロイメント環境は後で作成できます。提供されているトポロジー・パターンから標準のデプロイメント環境を作成するか、あるいはクラスターおよびサーバーを構成して、カスタマイズされたデプロイメント環境を作成することができます。

使用目的に応じたスタンドアロンまたは Network Deployment のクラスター・トポロジー・パターンの選択

IBM Business Process Manager の使用目的に応じたスタンドアロンまたは Network Deployment のクラスター・トポロジー・パターンの選択内容と、それに関連する計画について、以下の表に記載しています。

表 17. IBM Business Process Manager の使用目的に応じたスタンドアロンまたは Network Deployment のクラスター・トポロジー・パターンの選択

使用目的	構成パスおよび計画アクティビティ
単一サーバーの単体テスト環境 (UTE)	スタンドアロン・プロファイル構成パス。計画はほとんど必要ない。
クラスター化されたテスト環境	Network Deployment 環境の標準の「リモート・メッセージングおよびリモート・サポート」トポロジー・パターン。計画はほとんど必要ない。
柔軟性の高い実稼働環境	Network Deployment 環境の標準の「リモート・メッセージングおよびリモート・サポート」トポロジー・パターン。計画はほとんど必要ない。
高度に最適化された実稼働環境	固有の処理要件やビジネス要件に対応したカスタマイズ・トポロジー。必須の詳細計画 (資料の本セクションで説明しているもの)。

適切なクラスター・トポロジー・パターンの選択については、関連概念のリンクを参照してください。

関連概念:

46 ページの『ネットワーク・デプロイメント環境のトポロジー』

トポロジーとは、デプロイメント環境の物理的レイアウトのことです。IBM 提供パターンの 1 つを選択するか、独自のカスタマイズ・パターンを作成することで、ビジネス・ニーズに最適に対応したトポロジーを作成することができます。

56 ページの『トポロジーを選択するための考慮事項』

使用するデプロイメント環境に適したトポロジーの選択は、いくつかの要因に基づいて行います。

インストール・タイプおよびプロファイル

実行するインストールのタイプ (「標準的」または「カスタム」と、そのインストール・タイプに関連付けられたプロファイルを各 IBM BPM 構成 (Express、Standard、および Advanced) に対して作成する方法の間には、一定の関係が存在します。

以下の表は、その関係を示しています。

表 18. インストールの一部としてのプロファイル構成: IBM Business Process Manager Advanced

インストールのタイプ	メディア	スタンドアロン・プロファイルの作成	オプションとしてのプロファイル管理ツールの開始	オプションとしてのファースト・ステップ・コンソールの開始	Installation Manager からフィーチャーを選択可能
標準的 (ランチパッドを使用)	電子イメージのみ	はい	いいえ	はい	適用外
カスタム	DVD または電子イメージ	いいえ	はい	いいえ	はい

表 19. インストールの一部としてのプロファイル構成: IBM Business Process Manager Advanced: Process Server

インストールのタイプ	メディア	スタンドアロン・プロファイルの作成	オプションとしてのプロファイル管理ツールの開始	オプションとしてのファースト・ステップ・コンソールの開始	Installation Manager からフィーチャーを選択可能
標準的 (ランチパッドを使用)	電子イメージのみ	Process Server のみ	いいえ	はい	適用外
カスタム	DVD または電子イメージ	オプション 単体テスト環境 (UTE) 専用の Process Server プロファイルまたは WebSphere ESB プロファイル (あるいはその両方) を作成できるフィーチャーがあります	はい	いいえ	はい

表 20. インストールの一部としてのプロファイル構成: IBM Business Process Manager Standard

インストールのタイプ	メディア	スタンドアロン・プロファイルの作成	オプションとしてのプロファイル管理ツールの開始	オプションとしてのファースト・ステップ・コンソールの開始	Installation Manager からフィーチャーを選択可能
標準的 (ランチパッドを使用)	電子イメージのみ	はい	いいえ	はい	適用外
カスタム	DVD または電子イメージ	いいえ	はい	いいえ	いいえ

表 21. インストールの一部としてのプロファイル構成: IBM Business Process Manager Express

インストールのタイプ	メディア	スタンドアロン・プロファイルの作成	オプションとしてのプロファイル管理ツールの開始	オプションとしてのファースト・ステップ・コンソールの開始	Installation Manager からフィーチャーを選択可能
標準的 (ランチパッドを使用)	電子イメージのみ	はい	いいえ	はい	適用外
カスタム	DVD または電子イメージ	いいえ	はい	いいえ	いいえ

Network Deployment 環境の計画

Network Deployment 環境のセットアップには、物理ワークステーションの数および選択するパターンのタイプなど、多くの決定が関係しています。それぞれの決定はデプロイメント環境をセットアップする方法に影響を与えます。

デプロイメント環境を計画する前に、以下の作業を実行します。

- データベース・タイプの選択
- 使用可能なリソースの識別
- 必要なセキュリティ権限の明確化

相互接続サーバーのレイアウトを計画する際には、いくつかの決定を下す必要があります。こうした決定は、使用可能なハードウェアと物理接続の間で行われるトレードオフ、管理および構成の複雑さ、およびパフォーマンス、アベイラビリティ、スケーラビリティ、分離機能、セキュリティ、安定度などの要件に影響を与えます。

1. デプロイメント環境の機能要件を明確化します。

- a. デプロイメント環境のフィーチャーおよびランタイム機能を明確化します。

デプロイメント環境で、IBM Business Process Manager に加えてその他の IBM Business Process Manager 製品および BPM 以外の製品をサポートするかどうか検討します。

- b. デプロイするコンポーネントのタイプを確認します。

コンポーネント・タイプとコンポーネント間の対話を要件の一部として検討します。

- c. インポートおよびエクスポートの実装タイプとトランスポートを決定します。

データベースに必要なリソースまたは Java™ Message Service (JMS) リソース、およびビジネス・イベントとそれらの伝送手段に必要な事柄について考慮します。

- d. アプリケーションに関連しない機能要件を確認します。

セキュリティ・サーバー、ルーター、およびビジネス・イベントを処理するための他のすべてのハードウェア要件またはソフトウェア要件を検討します。

2. ご使用の環境に対する容量とパフォーマンスの要件を明確化します。
3. 各機能に必要な物理サーバーの数を決定します。
4. デプロイメント環境を設計します。

パターンを決定します。IBM Business Process Manager では、次の 4 つの確立されたトポロジー・パターンのいずれかを選択できます。

- 単一クラスター
- リモート・メッセージング
- リモート・メッセージングおよびリモート・サポート
- リモート・メッセージング、リモート・サポート、および Web

これらのパターンがいずれもニーズを満たさない場合は、管理コンソールを使用してカスタム・デプロイメント環境を作成できます。

注: 構成が、IBM Business Process Manager に加えて、およびこれと互換性のある、複数の IBM Business Process Manager および BPM 以外の製品をサポートする場合、デプロイメント環境を作成するときにこれらの製品のパターンを使用できます。

各パターンとその相違点について詳しくは、『46 ページの『ネットワーク・デプロイメント環境のトポロジー』』を参照してください。

5. デプロイメント環境の構成に使用できる方法を理解します。

以下のタイプの IBM Business Process Manager のデプロイメント環境を構成できます。

• 標準化された Network Deployment 環境

標準化された Network Deployment 環境は、ソフトウェアに組み込まれているトポロジー・パターン・テンプレートに基づいており、「デプロイメント環境構成」ウィザードまたは `wsadmin` コマンドを使用して実装されます。

「デプロイメント環境構成」ウィザードを使用して、単一クラスター、リモート・メッセージング、リモート・メッセージングとリモート・サポート、および (該当する場合) リモート・メッセージング、リモート・サポート、および Web クラスターのトポロジー・パターンを持つクラスターを作成できます。

• カスタマイズされた Network Deployment 環境

カスタマイズされた Network Deployment 環境は、管理コンソールから作成する構成であり、デプロイメント環境ウィザードを使用して作成される「テンプレート・ベース」の構成とは異なります。

カスタマイズされた Network Deployment 環境は、ソフトウェアに組み込まれているトポロジー・パターンが構成要件を満たさない場合にのみ作成してください。

標準化された環境の場合と同様に、カスタマイズされた Network Deployment 環境は `wsadmin` を使用して作成できます。

概要: デプロイメント環境のトポロジーおよびパターン

Network Deployment 環境にはさまざまなトポロジーを持たせることができます。またこの環境は、いくつかの標準トポロジー・パターンから作成することができます。

トポロジーの概要

トポロジーとは、キャパシティー、可用性、およびスケーラビリティに対するビジネス・ニーズを満たすために必要なデプロイメント環境の物理的レイアウトのことです。

IBM Business Process Manager の Process Center コンポーネントと Process Server コンポーネントの両方のトポロジーをセットアップすることができます。

さまざまな要因がトポロジーの設計方法および実装方法に影響を与えます。例えば、ビジネスおよびアプリケーションの要件、リソースの要件および制約、環境の本来の目的、オペレーティング・システムなどを考慮する必要があります。

IBM Business Process Manager には、以下のトポロジーのパターンが組み込まれています。これらのパターンを使用すると、PoC (概念検証) から完全な機能を備えた実稼働環境に至るさまざまなビジネス・シナリオに対処できます。

- 単一クラスター
- リモート・メッセージング
- リモート・メッセージングおよびリモート・サポート
- リモート・メッセージング、リモート・サポート、および Web

各トポロジー・パターンには、特定のビジネス・ニーズに対応する設計特性があります。例えば、分散システムの場合、単一クラスター・トポロジー・パターンは、通常、テストまたは PoC のシナリオに使用します。z/OS® システムの場合、このトポロジー・パターンはデフォルト・パターンであり、実稼働環境で使用できます。

各トポロジーの設計特性は、トポロジー・パターンとして取り込まれ、構成テンプレートとして製品とともに提供されます。

標準化された (IBM 提供の) トポロジー・パターンを必ず使用する必要はありません。どのトポロジー・パターンも特定のニーズに対応しない場合は、カスタム・トポロジー・パターンを作成できます。

デプロイメント環境パターンの目的

デプロイメント環境トポロジー・パターンでは、デプロイメント環境に関するコンポーネントとリソースの制約と要件を指定します。トポロジー・レイアウトごとに IBM 提供のパターンが用意されています。これらのトポロジー・パターンは、最もよく使用される BPM トポロジー・パターンの特性である、コンポーネント対話のルールおよびガイドラインを提供します。IBM 提供のトポロジー・パターンは、テスト済みの既知の構成シナリオに基づいています。これらのパターンにはデプロイメント環境を作成するための反復可能な自動化方式が含まれています。各トポロジー・パターンは、関連付けられているトポロジーの構成要件およびビジネス・ニーズを満たすように設計されています。トポロジー・パターンを使用すると、デプロイメント環境を最も単純な方法で作成できます。

デプロイメント環境トポロジー・パターンは、連携して動作するコンポーネント構成を含む推奨トポロジーを表します。そのため、完全に機能するデプロイメント環境を確実に構築できます。デプロイメント環境トポロジー・パターンの構成ルールを使用して、ファースト・パス構成を生成できます。これが可能な理由は、多数の設計上の決定 (例えば、どのコンポーネントを構成するか、どのデフォルト・パラメーターおよびリソースが必要か) がトポロジー・パターンに実装されているためです。

提供されているデプロイメント環境トポロジー・パターンは、それぞれ特定の要件のセットに対応しています。これらのトポロジー・パターンのいずれかを使用すると、ほとんどの要件セットに対処できます。トポロジー・パターンを選択するには、以下のステップをすべて実行します。

- 作成するビジネス・ソリューションの要件を理解します。
- IBM 提供のトポロジー・パターンの機能および特性を検討し、理解します。
- 使用するトポロジー・パターンを決定します。

IBM Business Process Manager トポロジー・パターンがいずれもニーズを満たさない場合は、管理コンソールまたはスクリプティング (wsadmin コマンド) を使用して、カスタマイズ・トポロジー・パターンを作成できます。

データベースおよびデプロイメント環境

Network Deployment 環境を作成して構成する前に、データベースを構成し、必要なデータベース表を作成する必要があります。IBM Business Process Manager を使用するには、少なくとも、データベース管理システムで以下のデータベースを構成する必要があります。

- 共通データベース (CMNDB)
- Process Server データベース (BPMDB)
- Performance Data Warehouse データベース (PDWDB)

スタンドアロン・サーバー構成の場合、「標準」インストール・オプションを使用すると、これらのデータベースが構成され、必要なデータベース表が自動的に作成されます。

Network Deployment 環境 (カスタマイズされたデプロイメント環境または標準化されたデプロイメント環境) の場合は、担当者またはデータベース管理者がインストーラーの外部で各データベースを構成する必要があります。追加機能をサポートするには、追加データベースが必要です。例えば、IBM Business Process Manager 構成に Business Process Choreographer、Business Space、または Common Base Event のモニタリングが含まれている場合は、担当者またはデータベース管理者がこれらのデータベースを構成し、用意されているユーティリティーまたはスクリプトを使用して、必要なデータベース表を作成する必要があります。この構成は、Network Deployment 環境を作成する前に行う必要があります。

詳しくは、『データベース構成の計画』を参照してください。

IBM 提供のデプロイメント環境トポロジー・パターンの機能

どの IBM Business Process Manager デプロイメント環境にも、基本的な一連の機能が含まれており、それらの機能が組み合わさることで完全な実稼働環境を形成しています。

堅固なデプロイメント環境を設計するためには、各クラスターが IBM 提供のトポロジー・パターンまたはカスタム・デプロイメント環境に提供できる機能について理解しておく必要があります。特定のタイプの機能 (例えば、サポート・インフラストラクチャー機能) を特定のクラスターに割り振ることができます。これらの機能を理解しておくこと、ニーズに最も合ったデプロイメント環境トポロジー・パターンを選択するのに役立ちます。

ネットワーク・デプロイメントの場合、複数のクラスターが共同でその環境に固有の機能を提供できます。お客様の要件に合わせて、デプロイメント環境内の各クラスターに特定の機能を割り当てて、パフォーマンス、フェイルオーバー、および容量を提供します。

デプロイメント環境で構成されたクラスターは、以下の機能を提供します。

これらの機能は、単一のクラスター内に存在している場合もあれば、複数のクラスターにまたがって分散している場合もあります。標準化された (IBM 提供の) トポロジー・パターンでは、これらの機能をサポートするために、それぞれ異なる数のクラスターが作成されます。デプロイメント環境内でのクラスターの数は、使用するトポロジー・パターンにより異なります。

アプリケーション・デプロイメント・ターゲット

アプリケーション・デプロイメント・ターゲットとは、アプリケーション (ヒューマン・タスク、ビジネス・プロセス、メディエーションなど) のインストール先となる一連のサーバー (クラスター) です。選択したデプロイメント環境トポロジー・パターンによっては、アプリケーション・デプロイメント・ターゲットがメッセージング・インフラストラクチャーおよびサポート・インフラストラクチャーの機能を提供する場合があります。デプロイするアプリケーションのタイプに基づいて適切な製品を選択します。

- アプリケーションにヒューマン・タスクまたはビジネス・プロセスの成果物が含まれる場合、Process Server をインストールします。
- アプリケーションにメディエーション・モジュールのみが含まれる場合、WebSphere Enterprise Service Bus をインストールします。

単一クラスター・トポロジー・パターンでは、アプリケーション・デプロイメント・ターゲットはデプロイメント環境のすべての機能を提供します。

サポート・インフラストラクチャー

サポート・インフラストラクチャーには、環境をサポートしてシステムを管理するために使用される Common Event Infrastructure (CEI) サーバーやその他のインフラストラクチャー・サービスが含まれます。各種インフラストラクチャー・サービスには、以下のものがあります。

- ビジネス・ルール
- セレクター
- ヒューマン・タスク
- ビジネス・プロセス

重要: このノードに対して、アプリケーション・デプロイメント・ターゲット・クラスターに対して使用した製品機能と同じ製品機能のカスタム・プロファイルを使用する必要があります。

ビジネス・ルールは、サポート・インフラストラクチャー・クラスターには結合されません。実際、ビジネス・ルールは、セル内のすべての場所で存在し、機能することができます。ビジネス・ルール管理機能 (Business Rules Manager から実行される) は、サポート・インフラストラクチャー・クラスター (3 クラスター構成の場合) または Web アプリケーション・インフラストラクチャー・クラスター (4 クラスター構成の場合) にデプロイできます。同じ原理がヒューマン・タスクとビジネス・プロセスに適用されます。ヒューマン・タスクとビジネス・プロセスは、アプリケーション・デプロイメント・ターゲット・クラスターで実行されます。これは、このクラスターでヒューマン・タスク・コンテナとビジネス・プロセス・コンテナが構成されるためです。ただし、プロセスとタスクは、Business Process Choreographer Explorer から管理します。Business Process Choreographer Explorer は、3 クラスター構成の場合はサポート・インフラストラクチャー・クラスター上、4 クラスター構成の場合は Web アプリケーション・インフラストラクチャー・クラスター上に配置できます。

メッセージング・エンジン・インフラストラクチャー

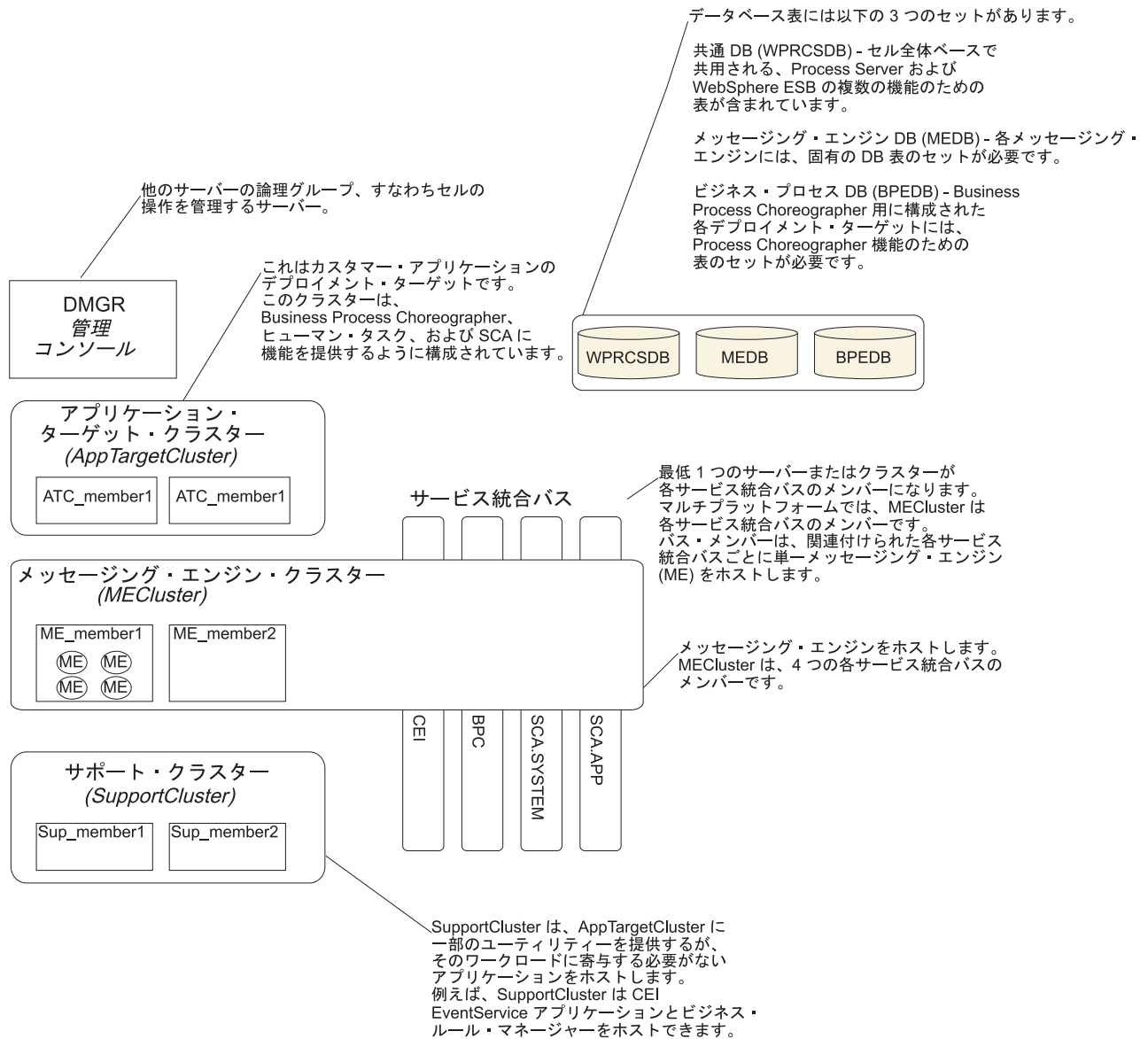
メッセージング・インフラストラクチャーは、メッセージング・エンジンが配置されている一連のサーバー (クラスター) です。メッセージング・インフラストラクチャーは、ご使用のアプリケーションおよび IBM Business Process Manager コンポーネントの内部メッセージング・ニーズに非同期メッセージング・サポートを提供するために使用されます。メッセージング・エンジンによって、デプロイメント環境内のノード間の通信が可能になります。クラスターがメッセージング機能のみを提供する場合は、このクラスターは IBM Business Process Manager ではなく WebSphere Application Server で作成されたノード上のメンバーでも構成することができます。

Web アプリケーション・インフラストラクチャー

Web ベース・コンポーネントの Business Process Choreographer Explorer、Business Space および Business Rules Manager が配置されている 1 つのクラスターで構成されます。

すべての環境内にあるトポロジーに対して、IBM Process Server および WebSphere ESB の基本的な部分は、常にほぼ同等です。どの IBM Process Server セルおよび WebSphere ESB セルでも、デプロイメント・マネージャーが、そのセルの管理の中心点になります。

次の図に、「リモート・メッセージングおよびリモート・サポート」トポロジー・パターンを使用して構成した、IBM Process Server デプロイメント環境の注目点を示します。Process Center デプロイメント環境ではアプリケーション・デプロイメント・ターゲット・クラスターに Process Center コンソールが含まれていますが、この点を除けば、このトポロジー・パターンは Process Center デプロイメント環境と同じです。Process Server の Network Deployment 環境には、Process Center コンソールは含まれません。



この図には、以下のものが含まれています。

- **デプロイメント・マネージャー (DMGR):** 論理グループまたは他のサーバーのセルの操作を管理するサーバー。
- **アプリケーション・ターゲット・クラスター:** カスタマー・アプリケーションのデプロイメント・ターゲット。このクラスターは、BPEL プロセス、ヒューマン・タスク、プロセス・アプリケーション、および SCA に機能を提供するように構成されています。Process Center デプロイメントの場合、このクラスターには Process Center コンソールも含まれます。
- **データベース:**
 - 共通データベース (CMNDB) - 必須。複数の IBM BPM Advanced Process Server および WebSphere ESB 機能のためにセル全体ベースで共用される表が含まれます。
 - Process Server データベース (BPMDB) - 必須。IBM BPM Advanced Process Server 機能のための表が含まれます。
 - Performance Data Warehouse データベース (PDWDB) - 必須。Performance Data Warehouse 機能のための表が含まれます。

- メッセージング・エンジン・データベース (MEDB) - 各メッセージング・エンジンには、固有のデータベース表のセットが必要です。
- Business Process データベース (BPEDB) - Business Process Choreographer 用に構成された各デプロイメント・ターゲットには、Business Process Choreographer 機能のための表のセットが必要です。
- **サービス統合バス (SIBus):** 少なくとも 1 つのサーバーまたはクラスターが各 SIBus のメンバーです。マルチプラットフォームでは、メッセージング・エンジン・クラスターは各 SIBus のメンバーです。バス・メンバーは、関連付けられた各 SIBus ごとに 1 つのメッセージング・エンジン (ME) をホストします。
- **メッセージング・エンジン (ME) クラスター:** メッセージング・エンジンをホストします。ME クラスターは、4 つのサービス統合バスのそれぞれのメンバーです。
- **サポート・クラスター:** サポート・クラスターは、アプリケーション・ターゲット・クラスターに一部のユーティリティを提供するアプリケーション (ただし、そのクラスターのワークロードの一部にはならない) をホストします。例えば、サポート・クラスターはビジネス・ルール・マネージャーをホストする場合があります。

ネットワーク・デプロイメント環境のトポロジー

トポロジーとは、デプロイメント環境の物理的レイアウトのことです。IBM 提供パターンの 1 つを選択するか、独自のカスタマイズ・パターンを作成することで、ビジネス・ニーズに最適に対応したトポロジーを作成することができます。

関連概念:

56 ページの『トポロジーを選択するための考慮事項』

使用するデプロイメント環境に適したトポロジーの選択は、いくつかの要因に基づいて行います。

58 ページの『トポロジー・パターンおよびサポート対象の製品フィーチャー』

トポロジーとは、デプロイメント環境の物理的レイアウトのことです。製品フィーチャーとデフォルトの使用法は、選択するトポロジー・パターンによって異なります。

35 ページの『スタンドアロン環境または Network Deployment 環境の選択』

製品を評価するため、またはアプリケーションおよびサービスの開発をサポートするためには、スタンドアロン環境を選択します。実稼働環境でキャパシティー、アベイラビリティ、スケラビリティ、およびフェイルオーバー・サポートなどの追加のフィーチャーを必要とする場合は、Network Deployment 環境を選択します。

単一クラスター・トポロジー・パターン

「単一クラスター」トポロジー・パターンは、IBM 提供のトポロジー・パターンの 1 つです。単一クラスター・トポロジー・パターンでは、デプロイメント環境のすべての機能が 1 つのクラスターにまとめられています。

これは、IBM Business Process Manager for z/OS のデフォルト・パターンです。

単一クラスター・トポロジー・パターンは、ハードウェアが限られている場合に理想的です。すべてのコンポーネントが同じクラスターにインストールされるため、必要な物理マシンの数が少なく済みます。ただし、サポート・アプリケーションおよび統合アプリケーションを各サーバー・インスタンスで実行する必要があるため、個々の Java 仮想マシン (JVM) のメモリー所要量が多くなります。さらに、クラスターの 1 つ以上のメンバーで、非同期対話に必要なメッセージング・エンジンも実行する必要があります。そのため、単一クラスター・トポロジー・パターンは、通常、PoC (概念検証) 環境、開発環境、およびテスト環境で使用されます。

IBM Business Process Manager 環境のすべての側面を単一クラスターに結合する場合には、メモリー所要量が増加する点に加えて、いくつかの点を考慮する必要があります。

- 非同期対話 (JMS および MQ/JMS バインディングを含む)、ヒューマン・タスク、ステート・マシン、および長期実行ビジネス・プロセスは、メッセージング・インフラストラクチャーを頻繁に使用することがあるため、これらのコンポーネントを使用するアプリケーションには、単一クラスター環境は適していません。
- このトポロジー・パターンでは、メッセージング要件は最小に抑える必要があります (z/OS の場合は除く)。
- Service Component Architecture (SCA) の内部非同期呼び出し、Java Message Service (JMS) と MQ のメッセージングのバインディングは、同じクラスターで複数のメッセージング・エンジンをサポートしません。

必要な場合は、他のいずれかのトポロジー・パターン (メッセージング・インフラストラクチャーがアプリケーション・デプロイメント・ターゲットとは別のクラスターに存在する) を選択してください。

単一クラスター・トポロジー・パターンは、アプリケーションの実行および同期呼び出しに焦点を当てたシナリオに適しています。このトポロジー・パターンは、Common Event Infrastructure (CEI) を頻繁に使用することを計画している場合にも適していません。CEI 関連のメッセージング・トラフィックとイベントを生成すると、クラスター・メンバーに対する負荷が増加します。

管理上の観点とスケーラビリティの観点からは、単一クラスター・トポロジー・パターンが優れています。単一クラスターでは、各メンバーがすべての IBM Business Process Manager コンポーネントを実行するため、管理が容易になります。複数のクラスター内にいくつかのサーバー・インスタンスがある代わりに、少数のメンバーが単一のクラスターにまとめられています。環境のニーズが増大した場合でも、ノードおよびクラスター・メンバーを追加するだけで、インフラストラクチャーを拡張できます。このため、簡単に機能を追加できますが、その場合はすべてのコンポーネントが同じ比率で拡張されます。例えば、クラスター・メンバーを追加するたびに、CEI 処理が必要かどうかに関係なく、CEI 処理が追加されます。複数のサーバー・メンバーにわたって分散するメッセージング・エンジンがポリシーを使用する場合は、ポリシーの作成および保守のために、管理上の作業が増える可能性があります。

単一クラスター・トポロジー・パターンでは、以下に示すすべてのデプロイメント環境機能およびコンポーネントが単一クラスター上で実行されます。

- アプリケーション:
 - Business Process Choreographer (BPC) コンテナー
 - Process Server
 - Process Portal
- メッセージング・バス・メンバー:
 - Business Process Choreographer バス・メンバー
 - Common Event Interface (CEI) バス・メンバー
 - Performance Data Warehouse (PDW) バス・メンバー
 - Process Server バス・メンバー
 - Service Component Architecture (SCA) アプリケーション・バス・メンバー
 - SCA システム・バス・メンバー
- サポート・インフラストラクチャー・アプリケーション:
 - CEI サーバー・アプリケーション
 - パフォーマンス・データウェアハウス

- Web アプリケーション:
 - Business Process Choreographer Explorer
 - ビジネス・ルール・マネージャー
 - Business Space
 - REST API サービス

次に示す単一クラスター・トポロジー・パターンのグラフィカル表現を参照してください。

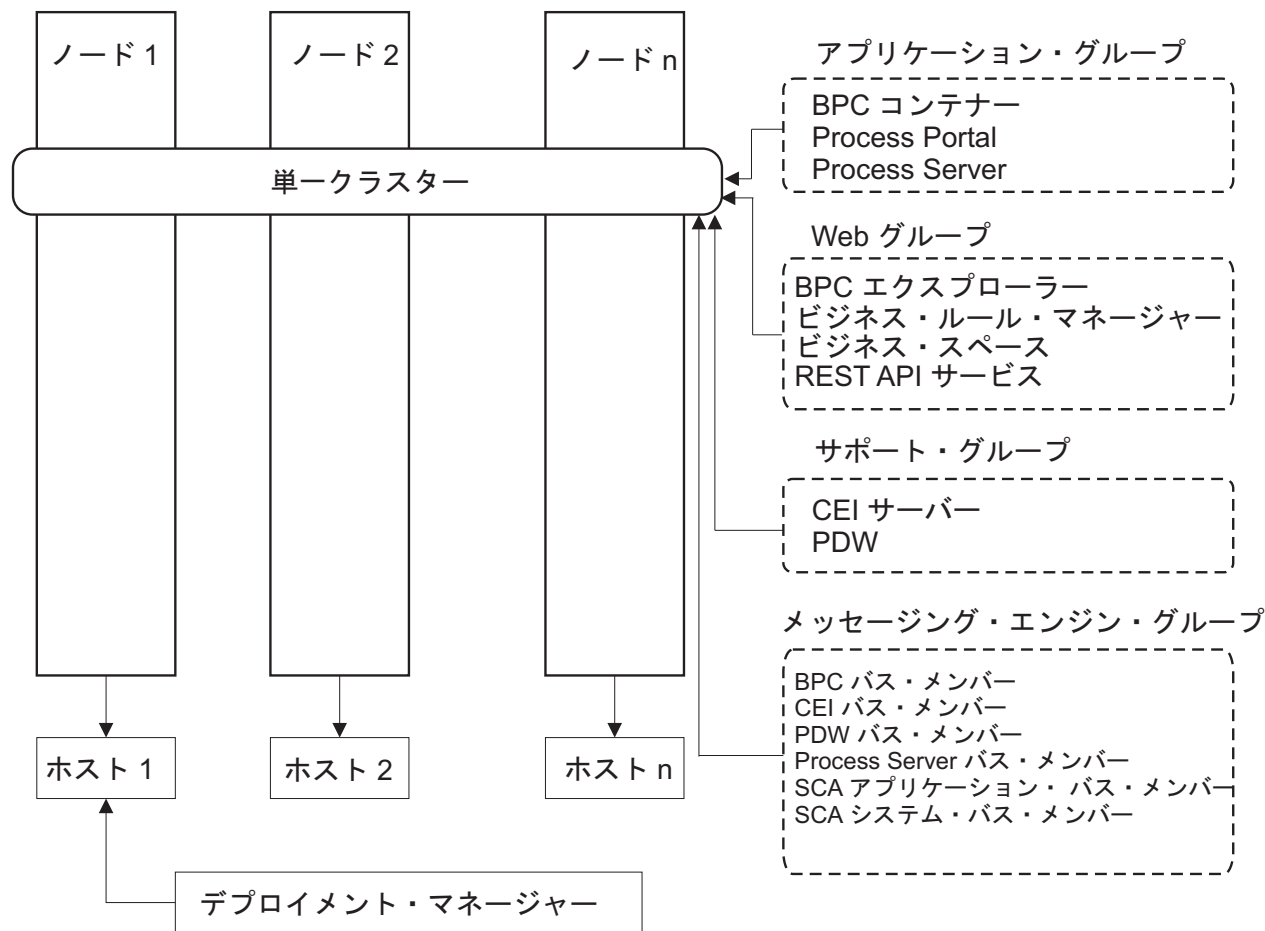


図3. 単一クラスター・トポロジー・パターン

リモート・メッセージング・トポロジー・パターン

リモート・メッセージング・トポロジー・パターンは、IBM 提供のトポロジー・パターンです。リモート・メッセージング・トポロジー・パターンでは、デプロイメント環境の機能は 2 つの別個のクラスターに分割されています。

リモート・メッセージング・トポロジー・パターンでは、メッセージング機能用に独立したクラスターを使用します。このトポロジー・パターンは、負荷に対してクラスターを拡張できるため、非同期呼び出しを必要とするシナリオに適しています。各コンポーネントは、2 つのクラスター間で分割されます。

多数のヒューマン・タスク、長期実行ビジネス・プロセス、ステート・マシン、および非同期対話をサポートする必要がある環境では、リモート・メッセージング・トポロジー・パターンの方が単一クラスター・トポロジー・パターンよりも有利です。

独立したクラスターにメッセージング・インフラストラクチャーを分離することで、メッセージングのオーバーヘッドがアプリケーション・ターゲット・クラスターから取り除かれます。分離されたメッセージング・インフラストラクチャーを持っている場合には、アプリケーション・ターゲット・クラスター・メンバーに必要なメモリーは少なくなります。このトポロジー・パターンは、また、必要なハードウェアに関して、単一クラスター・トポロジー・パターンとは異なっています。複数のクラスター・メンバーを持つ 2 つのクラスターがあるので、分散環境を構築するためにハードウェア要件が増えています。

管理上の観点からは、リモート・メッセージング・トポロジー・パターンの要件は、単一クラスター・トポロジー・パターンの要件よりも増えています。クラスターやクラスター・メンバーを追加すると、必要な管理上の手間が増えます。さらに、メッセージング・クラスターのメンバー全体にわたってメッセージング・エンジンを分散させているので、ポリシーを作成し、維持する必要があります。

リモート・メッセージング・トポロジー・パターンでは、サポート・アプリケーションおよび Common Event Interface (CEI) コンポーネントはやはりアプリケーション・ターゲット・クラスターの一部です。したがって、CEI を頻繁に使用する環境には、リモート・メッセージング・トポロジー・パターンも理想的ではないことがあります。小規模から中規模のビジネスの場合、または頻繁なモニター要件または監査要件がないビジネスの場合は、通常、このトポロジー・パターンが適しています。

リモート・メッセージング・トポロジー・パターンのスケーラビリティ・オプションは、単一クラスター・トポロジー・パターンのオプションと同程度に単純なものです。メッセージング・エンジンが従うのは n 個のポリシーのうちのいずれか 1 つである (各メッセージング・エンジンは 1 つのサーバー上でのみアクティブになる) ため、メッセージング・クラスターにメンバーを追加しても、影響はほとんどありません。ポリシーを使用してサーバーのメンバー全体にわたってメッセージング・エンジンを分散させる場合、メッセージングの負担を最大で 3 つのサーバーに分割できます。(SCA.SYSTEM および SCA.APPLICATION のエンジンは、同じサーバー上でアクティブです。) このため、3 つより多くのクラスター・メンバーをメッセージング・クラスターに追加しても、メッセージング・インフラストラクチャーの処理能力は増強されません。アプリケーション・ターゲット・クラスターの拡張は、比較的容易です。ご使用のアプリケーションまたはサポート・インフラストラクチャーのために追加の処理能力が必要な場合は、追加のノードおよびメンバーをアプリケーション・ターゲット・クラスターに追加することができます。

アプリケーション・デプロイメント・ターゲット・クラスターは、以下をホスティングします。

- アプリケーション:
 - Business Process Choreographer (BPC) コンテナー
 - Process Server
 - Process Portal
- サポート・インフラストラクチャー・アプリケーション:
 - CEI サーバー・アプリケーション
 - パフォーマンス・データウェアハウス
- Web アプリケーション:
 - Business Process Choreographer Explorer
 - ビジネス・ルール・マネージャー
 - Business Space

- REST API サービス

メッセージング・インフラストラクチャー・クラスターは、以下をホスティングします。

- Business Process Choreographer バス・メンバー
- Common Event Interface (CEI) バス・メンバー
- Performance Data Warehouse (PDW) バス・メンバー
- Process Server バス・メンバー
- Service Component Architecture (SCA) アプリケーション・バス・メンバー
- SCA システム・バス・メンバー

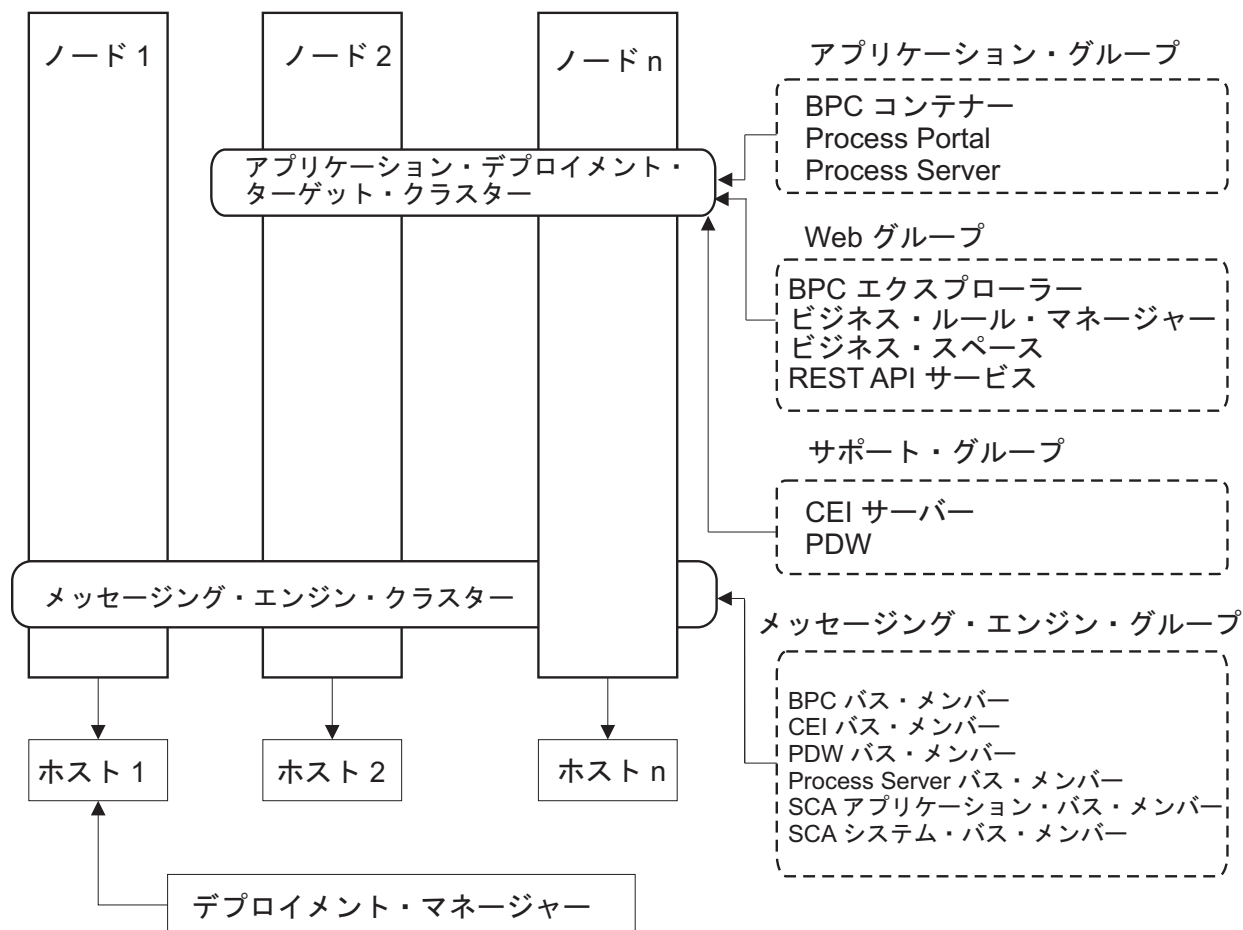


図4. リモート・メッセージング・トポロジー・パターン

リモート・メッセージングおよびリモート・サポート・トポロジー・パターン

「リモート・メッセージングおよびリモート・サポート」トポロジー・パターンは、IBM 提供のトポロジー・パターンです。リモート・メッセージングおよびリモート・サポート・トポロジー・パターンでは、デプロイメント環境機能は 3 つの分離したクラスターに分割されます。

この 3 つのクラスターのトポロジー・パターンを使用して、最も高い負荷を処理するクラスターにリソースが割り振られます。このトポロジー・パターンは、最も柔軟性が高く、用途が広いため、ほとんどのユーザー (z/OS を除く) に推奨されます。コンポーネントは 3 つのクラスター間で分割されます。

大規模なコンピューティング・インフラストラクチャーを保有されている多くのお客様には、リモート・メッセージングおよびリモート・サポート・トポロジー・パターンが推奨される環境です。分散プラットフォームのハードウェア要件はより強いものです。ただし、複数のメンバーが特定の機能を実行している 3 つ以上のクラスターを持っている場合に、Java 仮想マシン (JVM) のメモリーの使用を調整しチューニングするのに、より大きい柔軟性があります。

それぞれが自身の機能およびアプリケーションを持つ 3 つのクラスターを作成すると、管理上の余分の負担が追加されます。クラスターやクラスター・メンバーを追加するにつれて、パフォーマンス・チューニング計画の規模が大幅に拡大し、トラブルシューティングの負担が大幅に増すことがあります。メッセージング・クラスターのメンバー全体にわたってメッセージング・エンジンを分散させると、ポリシーの作成および保守に関連する管理上の負担も増します。

スケーラビリティの観点からは、リモート・メッセージングおよびリモート・サポート・トポロジー・パターンが最も高い柔軟性を提供します。IBM Business Process Manager 内の個別の機能のそれぞれが 3 つのクラスター間で分割されるため、パフォーマンス上のボトルネックを正確に特定でき、クラスター・サイズもかなり容易に調整できます。追加の Common Event Interface (CEI) 処理が必要な場合は、単純にノードおよびクラスター・メンバーをサポート・クラスターに追加することができます。同様に、ビジネス・プロセスまたはヒューマン・タスクの処理能力を増強する必要がある場合は、ノードおよびメンバーをアプリケーション・ターゲット・クラスターに追加することができます。3 つより多くのクラスター・メンバーを追加してメッセージング・インフラストラクチャーを拡張しても処理能力には効果はないので、リモート・メッセージング・トポロジー・パターンのスケーラビリティの制限事項は、リモート・メッセージングおよびリモート・サポート・トポロジー・パターンにも適用されます。

リモート・メッセージング・トポロジー・パターンの場合と同様に、リモート・メッセージングおよびリモート・サポート・トポロジー・パターンは長期実行ビジネス・プロセス、ステート・マシン、ヒューマン・タスク、および非同期対話 (JMS および MQ/JMS バインディングを含む) のための理想的な環境を提供します。

アプリケーション・ターゲット・クラスターはビジネス・インテグレーション・アプリケーションのみを実行するので、パフォーマンスのチューニングおよび診断は、アプリケーション・ターゲット・クラスターが追加の役割を持っているトポロジー・パターンの場合よりもはるかに単純です。リモート・メッセージングおよびリモート・サポート・トポロジー・パターンは、モニターおよび監査のために CEI を頻繁に使用する環境 (IBM Business Monitor を使用する環境を含む) でも理想的です。サポート・インフラストラクチャーをそれ自身のクラスターに分割すると、CEI 用およびサポートを行うアプリケーション用の専用のクラスター・メンバーのセットを持つことになります。

アプリケーション・デプロイメント・ターゲット・クラスターは、以下をホスティングします。

- Business Process Choreographer (BPC) コンテナ
- Process Server
- Process Portal

メッセージング・インフラストラクチャー・クラスターは、以下をホスティングします。

- Business Process Choreographer バス・メンバー
- Common Event Interface (CEI) バス・メンバー
- Performance Data Warehouse (PDW) バス・メンバー

- Process Server バス・メンバー
- Service Component Architecture (SCA) アプリケーション・バス・メンバー
- SCA システム・バス・メンバー

サポート・インフラストラクチャー・クラスターは、以下をホスティングします。

- サポート・アプリケーション:
 - CEI サーバー・アプリケーション
 - パフォーマンス・データウェアハウス
- Web アプリケーション:
 - Business Process Choreographer Explorer
 - ビジネス・ルール・マネージャー
 - Business Space
 - REST API サービス

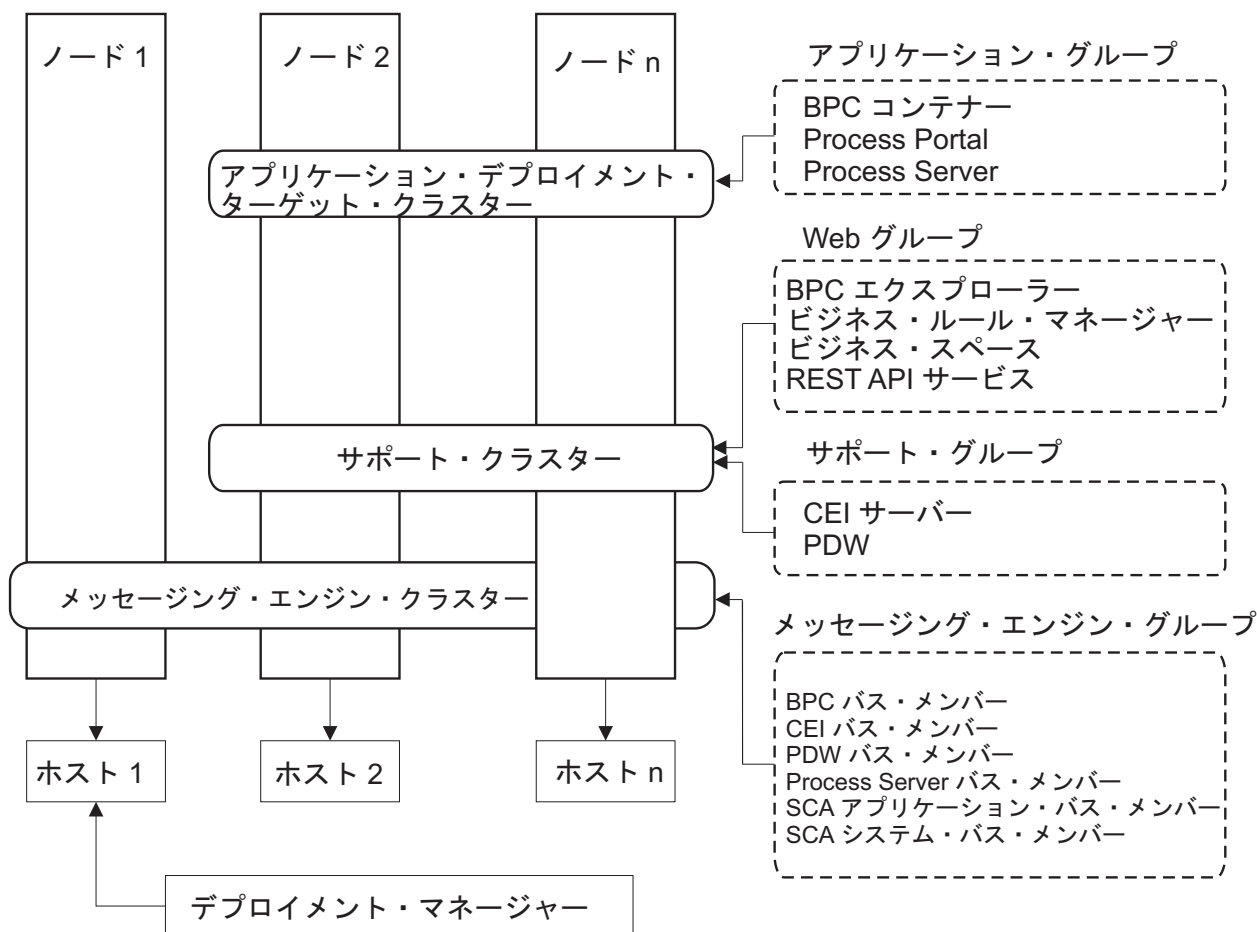


図5. リモート・メッセージングおよびリモート・サポート・トポロジー・パターン

リソース割り振りの例

以下の図は、リモート・メッセージングおよびリモート・サポート・トポロジー・パターンを使用してリソースを割り振る 1 つの方法を示しています。この図は、3 つのホストを示しています。ホスト A にはサーバー 1 およびサーバー 3 があります。ホスト B にはサーバー 2、サーバー 4、およびサーバー 5 があります。またホスト C にはサーバー 6 およびサーバー 7 があります。このインストール済み環境に対する最も重い負荷はアプリケーションの使用によって発生するので、アプリケーション・デプロイメントのターゲット・クラスター (クラスター 3) には、サーバー 1、サーバー 2、およびサーバー 6 のために他の機能のためよりも多くのリソースが割り振られています。

重要: ロード・バランシングは、デフォルトの構成であるリモート・メッセージングおよびリモート・サポート・トポロジー・パターンでは使用できません。このデフォルト構成で使用されるメッセージング・エンジン・バスは 1 つだけですが、ロード・バランシング機能を使用する場合、2 つ以上のメッセージング・エンジン・バスが必要になります。

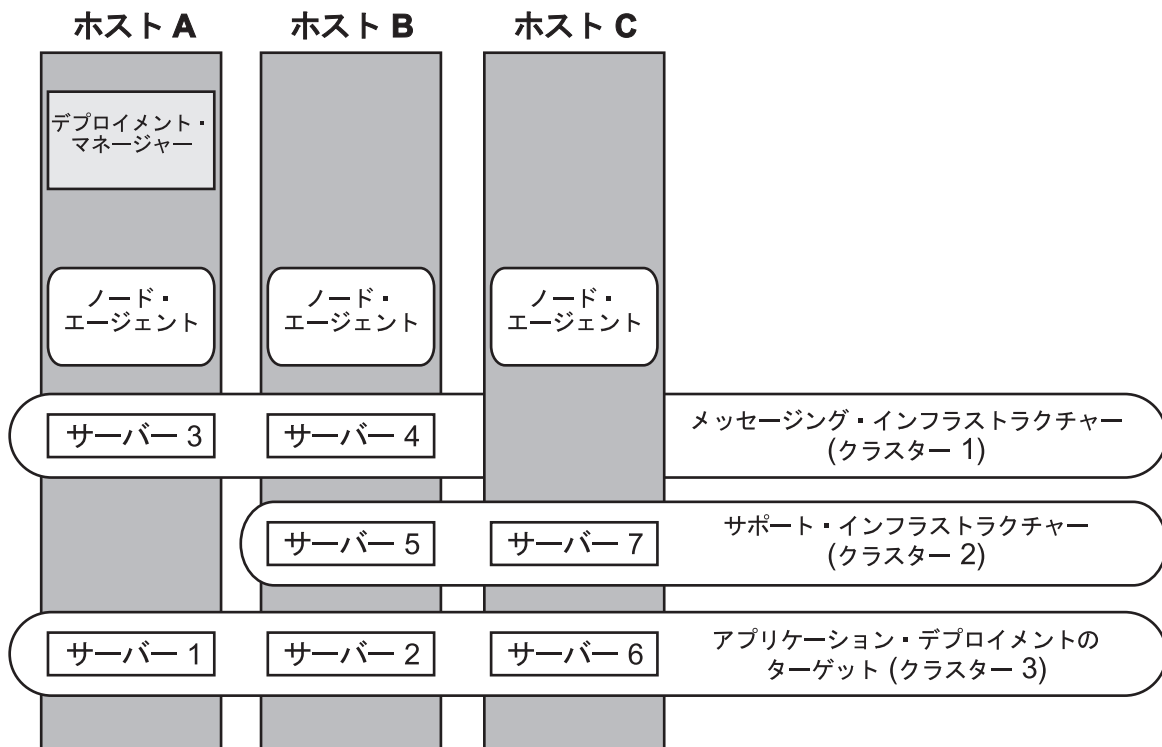


図 6. リソース割り振りの例

リモート・メッセージング、リモート・サポート、および Web トポロジー・パターン

「リモート・メッセージング、サポート、および Web」トポロジー・パターンは、IBM 提供のトポロジー・パターンの 1 つです。「リモート・メッセージング、サポート、および Web」トポロジー・パターンでは、デプロイメント環境の機能が 4 つの独立したクラスターに分割されます。

「リモート・メッセージング、サポート、および Web」トポロジー・パターンは、IBM Business Process Manager Advanced で推奨される開始トポロジー・パターンです。

注: このパターンは、IBM Business Monitor が組み込まれていない限り標準構成では使用しないでください。

この 4 つのクラスターからなるトポロジー・パターンは、サポートする Web アプリケーションが独自のクラスターに常駐するという点を除き、「リモート・メッセージングおよびリモート・サポート」トポロジー・パターンによく似ています。

アプリケーション・デプロイメント・ターゲット・クラスターは、以下をホスティングします。

- Business Process Choreographer (BPC) コンテナ
- Process Server
- Process Portal

メッセージング・インフラストラクチャー・クラスターは、以下をホスティングします。

- Business Process Choreographer バス・メンバー
- Common Event Interface (CEI) バス・メンバー
- Performance Data Warehouse (PDW) バス・メンバー
- Process Server バス・メンバー
- Service Component Architecture (SCA) アプリケーション・バス・メンバー
- SCA システム・バス・メンバー

サポート・インフラストラクチャー・クラスターは、以下をホスティングします。

- CEI サーバー・アプリケーション
- パフォーマンス・データウェアハウス

Web アプリケーション・クラスターは、以下をホスティングします。

- Business Process Choreographer Explorer
- ビジネス・ルール・マネージャー
- Business Space
- REST API サービス

「リモート・メッセージング、サポート、および Web」トポロジー・パターンでは、デプロイメント環境の機能が 4 つの独立したクラスターに分割されます。メッセージング機能に 1 つのクラスター、サポート機能に 1 つのクラスター、アプリケーションに 1 つのクラスター、Web ベースの機能に 1 つのクラスターが使用されます。

環境内の個々のコンポーネントを詳細に制御できる能力に加え、このトポロジー・パターンの利点は、「リモート・メッセージングおよびリモート・サポート」トポロジー・パターンの利点に似ています。

リモート・メッセージング、サポート、および Web トポロジーのグラフィカル表現を参照してください。

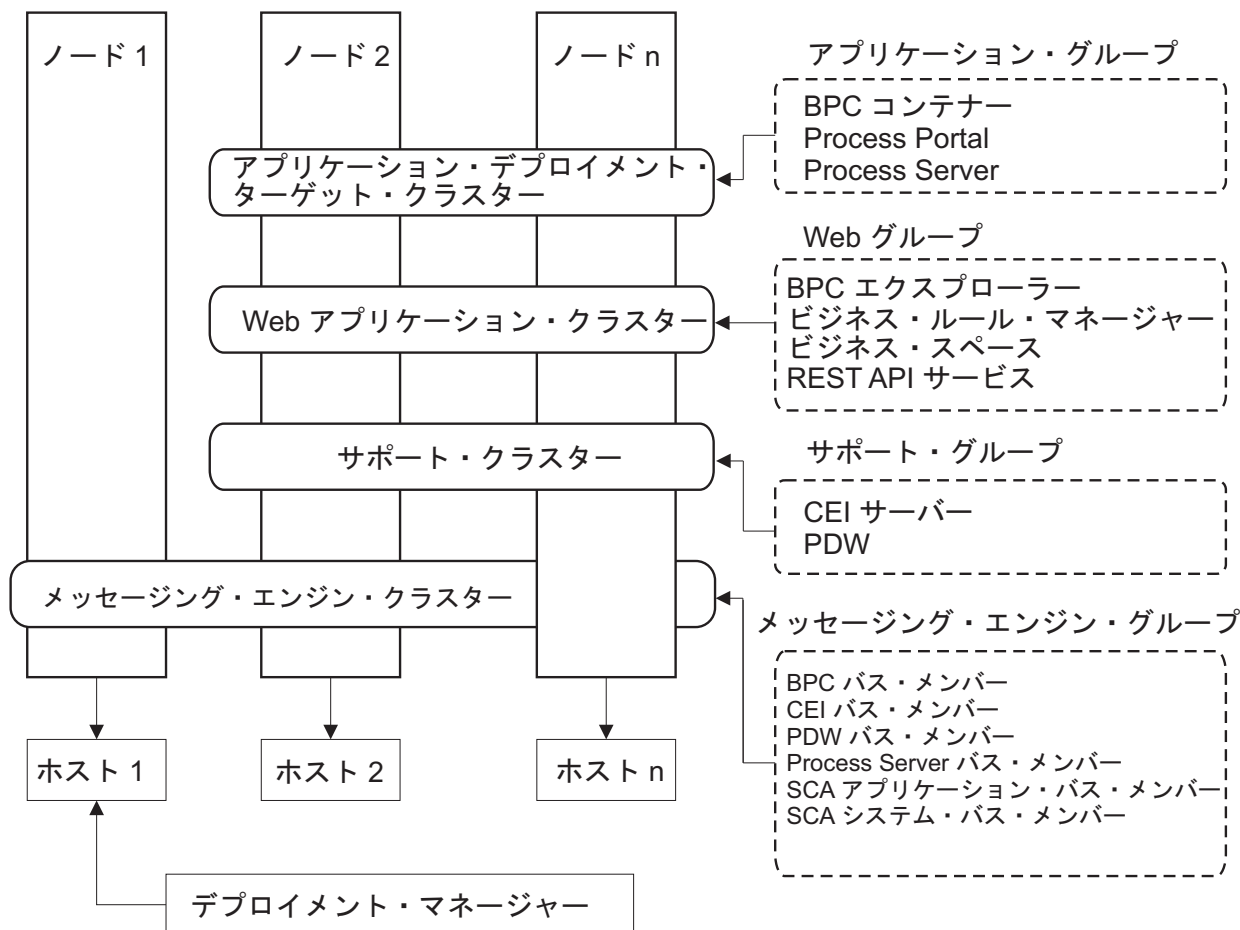


図7. 「リモート・メッセージング、サポート、および Web」 トポロジー・パターン

カスタマイズされたトポロジー

カスタマイズされたトポロジーは、お客様の状態に固有の処理要件およびビジネス要件に対処します。これは IBM 提供のトポロジー・パターンではなく、ユーザーが作成し、次に固有のニーズに合うように調整するトポロジーです。

ユーザー自身のデプロイメント環境トポロジーを定義する必要がある場合には、カスタマイズされたトポロジーが抜群に柔軟性の高いものです。IBM 提供のトポロジー (単一クラスター、リモート・メッセージング、リモート・メッセージングおよびリモート・サポート、および リモート・メッセージング、リモート・サポート、および Web) は、すべての IBM Business Process Manager コンポーネントを、それぞれのデフォルトの場所にデプロイします。これらのコンポーネントに関連する追加のオーバーヘッドは、必要な場合とそうでない場合があります。例えば、組織が Common Event Interface (CEI) を必要としない場合は、CEI サポートを使用環境から取り除いたカスタム・トポロジーを作成できます。同様に、ビジネス・ルール・マネージャーの利用を許可しないガバナンス・ルールが組織に存在する場合は、デプロイメント環境からビジネス・ルール・マネージャーを取り除くことができます。

使用環境にデプロイされているコンポーネントを制御できる能力を除けば、カスタム・トポロジーの利点は、リモート・メッセージングおよびリモート・サポート・トポロジーの利点と同様です。また、欠点も同様です。

重要: カスタマイズされた Network Deployment 環境を作成するには、IBM 提供のトポロジー・パターンを使用する場合よりも多くの労力が必要です。IBM 提供のトポロジー・パターンは、「デプロイメント環境構成」ウィザードを使用して作成できます。カスタマイズされた Network Deployment 環境の作成を試行する前に、IBM 提供のトポロジーの中に、ニーズに対処するものがないかを確認してください。管理コンソールのフィーチャーと機能を確かに理解している場合に限り、カスタマイズされた Network Deployment 環境の作成を試行すべきです。

トポロジーを選択するための考慮事項

使用するデプロイメント環境に適したトポロジーの選択は、いくつかの要因に基づいて行います。

トポロジー・パターンを選択する場合には、以下の要因を考慮します。

- 使用可能なハードウェア・リソース
- アプリケーションの呼び出しパターン
- 実装を計画しているビジネス・プロセスのタイプ (割り込み可能か割り込み不可能か)
- Common Event Infrastructure (CEI) をどの程度頻繁に使用する予定であるか
- 個別のスケラビリティ要件
- 必要になる管理作業

IBM 提供のトポロジーは、Process Server および Process Center トポロジーの両方に適用することができます。したがって、ご使用の Process Center および Process Server Network Deployment 環境は、同様な方法で編成することができます。

IBM 提供のトポロジーに基づいて Process Server および Process Center 用の環境を作成する手順も、やはり同様なものです。IBM 提供のパターンに関連する唯一の相違点は、実稼働環境用に推奨されるパターンと、それらのパターンを形成するクラスター上で構成されるコンポーネントです。

IBM Business Process Manager の各構成で使用可能なコンポーネント、フィーチャーおよび機能に関する情報については、『IBM Business Process Manager V7.5.1 構成の機能』を参照してください。

IBM 提供のトポロジーに関するヒントに従ってください。

- IBM Process Server デプロイメント環境の場合、最適なトポロジーは以下のとおりです。
 - リモート・メッセージング、リモート・サポート、および Web: 4 クラスター・トポロジー・パターン

注: このパターンは、IBM Business Monitor が組み込まれていない限り標準構成では使用しないでください。

- リモート・メッセージングおよびリモート・サポート: 3 クラスター・トポロジー・パターン
- IBM Process Center デプロイメント環境の場合、最適なトポロジーは以下のとおりです。
 - 単一クラスター・トポロジー・パターン
 - リモート・メッセージング: 2 クラスター・トポロジー・パターン

ご使用の Process Server または Process Center Network Deployment 環境用に選択するパターンは、ユーザーの固有の要件に基づいている必要があります。

ご使用の実稼働環境の計画を立てるときに、共通の各トポロジー・パターンの利点および欠点を綿密に考慮してください。

圧縮されたトポロジー・パターンの選択基準

以下の表に記載されている情報を考慮してください。これは、使用する実動トポロジーを選択する場合の簡単な手引きです。この表には、各トポロジー・パターンの利点と欠点の要約リストを示します。

提供トポロジー・パターンをサポートする BPM 製品については、『トポロジー・パターンおよびサポート対象の BPM 製品フィーチャー』を参照してください。

表 22. デプロイメント環境に合わせてトポロジーを選択するための考慮事項

考慮事項	トポロジー・パターン			
	単一クラスター	リモート・メッセージング	リモート・メッセージングおよびリモート・サポート	リモート・メッセージング、リモート・サポート、および Web
保守するクラスターの数	すべてのコンポーネントに対して 1 クラスター	アプリケーションおよびサポート・インフラストラクチャーに対して 1 クラスター メッセージングに対して 1 クラスター	アプリケーションに対して 1 クラスター サポート・インフラストラクチャーに対して 1 クラスター サポート・インフラストラクチャーに対して 1 クラスター	アプリケーションに対して 1 クラスター Web インターフェースに対して 1 クラスター サポート・インフラストラクチャーに対して 1 クラスター メッセージングに対して 1 クラスター
ハードウェア要件	限られた数のハードウェアで実装できる	分散環境ではより多くのハードウェアが必要	分散環境ではより多くのハードウェアが必要	必要なハードウェアが最も多い
非同期対話	最低限の使用頻度に抑えることが望ましい	使用頻度はリソースの可用性とのバランスをとる必要がある	非同期対話に理想的な環境	非同期対話に理想的な環境
長期実行プロセス、ステート・マシン、およびヒューマン・タスク	最低限の使用頻度に抑えることが望ましい	使用頻度はリソースの可用性とのバランスをとる必要がある	割り込み可能プロセス、ステート・マシン、およびヒューマン・タスクに理想的な環境	割り込み可能プロセス、ステート・マシン、およびヒューマン・タスクに理想的な環境
非常に高い CEI 活動の頻度	非推奨 (CEI の使用頻度を低くしてリソース使用量とのバランスをとることが望ましい)	非推奨 (CEI の使用頻度を低くしてリソース使用量とのバランスをとることが望ましい)	CEI 使用頻度が高い場合に理想的な環境	CEI 使用頻度が高い場合に理想的な環境
管理上の負担	比較的少ない	手間が増す	管理の手間が増す	管理に最も多くの手間がかかる

表 22. デプロイメント環境に合わせてトポロジーを選択するための考慮事項 (続き)

考慮事項	トポロジー・パターン			
	単一クラスター	リモート・メッセージング	リモート・メッセージングおよびリモート・サポート	リモート・メッセージング、リモート・サポート、および Web
スケーラビリティ	すべてのコンポーネントは同じ比率で拡張される	メッセージング・クラスターのスケーラビリティは制限されている (サーバーの数を 3 つより多くしてもメリットがない) それ以外のすべてのコンポーネントは同じ比率で拡張される	拡張が容易 すべての機能が独立している メッセージング・クラスターのスケーラビリティは引き続き制限されている (サーバーの数を 3 つより多くしてもメリットがない)	スケールの変更が最も容易 すべての機能が独立している メッセージング・クラスターのスケーラビリティは引き続き制限されている (他の BPM 製品を導入するとメリットが出てくる)

関連概念:

『トポロジー・パターンおよびサポート対象の製品フィーチャー』

トポロジーとは、デプロイメント環境の物理的レイアウトのことです。製品フィーチャーとデフォルトの使用法は、選択するトポロジー・パターンによって異なります。

46 ページの『ネットワーク・デプロイメント環境のトポロジー』

トポロジーとは、デプロイメント環境の物理的レイアウトのことです。IBM 提供パターンの 1 つを選択するか、独自のカスタマイズ・パターンを作成することで、ビジネス・ニーズに最適に対応したトポロジーを作成することができます。

35 ページの『スタンドアロン環境または Network Deployment 環境の選択』

製品を評価するため、またはアプリケーションおよびサービスの開発をサポートするためには、スタンドアロン環境を選択します。実稼働環境でキャパシティ、アベイラビリティ、スケーラビリティ、およびフェイルオーバー・サポートなどの追加のフィーチャーを必要とする場合は、Network Deployment 環境を選択します。

トポロジー・パターンおよびサポート対象の製品フィーチャー

トポロジーとは、デプロイメント環境の物理的レイアウトのことです。製品フィーチャーとデフォルトの使用法は、選択するトポロジー・パターンによって異なります。

管理コンソールで「デプロイメント環境構成」ウィザードを使用してデプロイメント環境を作成する場合、デプロイメント環境のベースにするトポロジー・パターンの可用性は、以下の条件および構成上の決定事項によって異なります。

- IBM Business Process Manager をインストールしたプラットフォーム
- 1 次デプロイメント環境フィーチャーおよび補足フィーチャー

59 ページの表 23 に、トポロジー・パターンと製品フィーチャーとの間の関係を示します。

表 23. 使用可能な提供パターンおよびそれらのパターンと製品フィーチャーとの関係

トポロジー・パターン	クラスター数	説明	サポートされる BPM 製品とフィーチャー	デフォルト状況
単一クラスター	1	<p>メッセージング、アプリケーション・デプロイメント・ターゲット、およびアプリケーション・サポート機能を単一のクラスターに含めます。このトポロジー・パターンは、同期メッセージング環境、PoC (概念検証) 環境、またはアプリケーション・テスト環境に役立ちます。</p> <p>単一クラスター・トポロジー・パターンは、ハードウェアが限られている場合に理想的です。すべてのコンポーネントが同じクラスターにインストールされるため、必要な物理マシンの数が少なく済みます。</p>	<p>以下の製品、またはこれらの製品の組み合わせでサポートされます。</p> <ul style="list-style-type: none"> • IBM Business Process Manager <p>Advanced 構成および Standard 構成</p> <ul style="list-style-type: none"> • IBM Business Monitor 	
リモート・メッセージング	2	<p>このトポロジー・パターンでは、メッセージング環境をアプリケーション・デプロイメント・ターゲットおよびアプリケーション・サポート機能から分離します。このトポロジー・パターンは、日常の運用でメッセージのスループットが重要な要件となる場合に使用します。このトポロジー・パターンは、非同期メッセージング・システムおよびトランザクション・システムの場合に強くお勧めします。</p> <p>Process Center Network Deployment 環境では、リモート・メッセージング・トポロジー・パターンが処理要件を満たすのに十分である場合がよくあります。</p>	<p>以下の単一の製品インストールによってサポートされます。</p> <ul style="list-style-type: none"> • IBM Business Process Manager <p>Advanced 構成および Standard 構成</p>	

表 23. 使用可能な提供パターンおよびそれらのパターンと製品フィーチャーとの関係 (続き)

トポロジー・パターン	クラスター数	説明	サポートされる BPM 製品とフィーチャー	デフォルト状況
リモート・メッセージングおよびリモート・サポート	3	このトポロジー・パターンでは、メッセージング、Common Event Infrastructure (CEI)、アプリケーション・デプロイメント・ターゲット、およびアプリケーション・サポート機能を別個のクラスターに分離します。ほとんどのビジネスでは、このトポロジー・パターンを使用してデプロイメント環境をサポートできます。このトポロジー・パターンはパフォーマンスを主眼にして設計され、トランザクション処理をメッセージングおよびその他のサポート機能から分離するように設計されているためです。	以下の単一の製品インストールによってサポートされます。 <ul style="list-style-type: none"> IBM Business Process Manager Advanced 構成および Standard 構成	このトポロジー・パターンは、IBM Business Process Manager 実稼働環境のデフォルトのトポロジー・パターンです。 このトポロジー・パターンは、以下のインストール済み環境のデフォルトのトポロジー・パターンです。 <ul style="list-style-type: none"> IBM Business Process Manager Advanced (デプロイメント環境も含む) IBM Business Process Manager Standard
リモート・メッセージング、リモート・サポート、および Web	4	このトポロジー・パターンは、アプリケーション・デプロイメント用に 1 つのクラスター、メッセージング・インフラストラクチャー用に 1 つのリモート・クラスター、サポート・アプリケーション用に 1 つのリモート・クラスター、および Web アプリケーション・デプロイメント (Business Process Choreographer Explorer、ビジネス・スペース、および Business Rules Manager) 用に 1 つのリモート・クラスターを定義します。	以下の製品、またはこれらの製品の組み合わせでサポートされます。 <ul style="list-style-type: none"> IBM Business Process Manager Advanced 構成および Standard 構成 <ul style="list-style-type: none"> IBM Business Monitor 	このトポロジー・パターンは、IBM Business Monitor インストール済み環境のデフォルトのトポロジー・パターンです。 標準構成の場合、ご使用のトポロジーに IBM Business Monitor が含まれている場合に限り、このパターンを選択します。

各構成の構成可能コンポーネント

IBM Business Process Manager のさまざまな構成をインストールする場合、インストールおよび構成プロセス時に特定のコンポーネントがユーザーに表示されます。Network Deployment の場合、これらのコンポーネントは 1 つのクラスター内か、複数のクラスター内にあることが可能です。

61 ページの表 24 に、各種構成それぞれのコンポーネントを示します。

表 24. IBM Business Process Manager コンポーネント

コンポーネント	Advan- -ced	WebSphere ESB	Stan- dard	Express
Process Server	X		X	X
Process Server メッセージング・エンジン (サービス統合バス)	X		X	X
パフォーマンス・データウェアハウス	X		X	X
Performance Data Warehouse メッセージング・エンジン (サービス統合バス)	X		X	X
共通データベース	X	X		
Common Event Infrastructure (CEI) メッセージング・エンジン (サービス統合バス)	X	X		
サービス・コンポーネント・アーキテクチャー (SCA) (Service Component Architecture)	X	X		
SCA アプリケーション・メッセージング・エンジン (サービス統合バス)	X	X		
Business Space	X	X		
Business Process Choreographer	X			
Business Process Choreographer メッセージング・エンジン (サービス統合バス)	X			
Business Process Choreographer Explorer	X			

関連概念:

56 ページの『トポロジーを選択するための考慮事項』

使用するデプロイメント環境に適したトポロジーの選択は、いくつかの要因に基づいて行います。

46 ページの『ネットワーク・デプロイメント環境のトポロジー』

トポロジーとは、デプロイメント環境の物理的レイアウトのことです。IBM 提供パターンの 1 つを選択するか、独自のカスタマイズ・パターンを作成することで、ビジネス・ニーズに最適に対応したトポロジーを作成することができます。

標準化された Network Deployment 環境とカスタマイズされた Network Deployment 環境のどちらを作成するかの判断

プロファイルの作成後に、Network Deployment 環境を形成するサーバー、サーバー・クラスターおよび製品コンポーネントを構成するには 2 つの方法があります。IBM 提供のトポロジー・パターンに基づいて、標準化された Network Deployment 環境を作成できます。または、ユーザーのビジネス・プロセス要件に応じてカスタマイズされた方法で、サーバー、サーバー・クラスターおよび製品コンポーネントをセットアップして、カスタマイズされた Network Deployment 環境を作成することもできます。

標準化された Network Deployment 環境を作成する理由

IBM 提供のトポロジー・パターン (IBM Business Process Manager にテンプレートとしてパッケージ化) が、ユーザーのビジネス・プロセス要件のすべてまたは大部分を満たしている場合、デプロイメント環境ウィザードを使用して、標準化された Network Deployment 環境を作成します。デプロイメント環境ウィザードを使用すると、いくつかの事前定義トポロジーに従ってクラスターとサーバーを生成し、それらのクラスターとサーバー全体に複数のコンポーネントをすべて同時に構成することができます。

カスタマイズされた Network Deployment 環境ではなく、標準化された Network Deployment 環境を作成するその他の理由は、以下のとおりです。

- サーバー、サーバー・クラスターおよび IBM Business Process Manager コンポーネントの作成と構成に必要な管理コンソールのフィーチャーおよび機能の使用経験が豊富なユーザーがいません。
- 管理アプリケーションで単一のウィザードを実行して、複数のコンポーネントを構成します。
- データベース設計ファイルをインポートして、データベース関連リソース定義の値を指定します。データベース設計ファイルの作成については、922 ページの『データベース設計ツールを使用したデータベース設計ファイルの作成』を参照してください。
- 現在の環境にインポートして、必要に応じてカスタマイズできる、事前定義デプロイメント環境が提供されています。

カスタマイズされた Network Deployment 環境を作成する理由

ユーザーのビジネス・プロセス要件が複雑で、IBM 提供のトポロジー・パターンでは十分に対応できない場合、管理コンソールのフィーチャーおよび機能を使用して、カスタマイズされた Network Deployment 環境を作成します。

標準化された Network Deployment 環境ではなく、カスタマイズされた Network Deployment 環境を作成するその他の理由は、以下のとおりです。

- 管理コンソールを使用してデプロイメント環境を作成するために必要な経験と知識がユーザーに豊富にあります。
- マルチクラスター環境で必要な概念およびコンポーネント・アーキテクチャーを理解しています。
- IBM Business Process Manager コンポーネント自体を構成する前に、そのコンポーネントをデプロイするクラスターまたはサーバーを構成したいと考えています。

IBM HTTP サーバーでのロード・バランシングとフェイルオーバー

Network Deployment 環境では、ワークロード・バランシングとフェイルオーバーの目的で、IBM HTTP Server をプロキシ・サーバーとして構成できます。着信 HTTP 要求は、アプリケーション・サーバーに直接送信されるのではなく、プロキシ・サーバーに送信されます。このプロキシ・サーバーにより、処理を実行する複数のアプリケーション・サーバーの間で要求が分散されます。

具体的な構成ステップは環境によって異なりますが、IBM HTTP Server を使用したワークロード・バランシングとフェイルオーバーの計画と実装には、以下の一般的なタスクが役立ちます。

1. 『WebSphere Application Server トポロジーのフロントエンドの選択』を参照して、プロキシ・サーバー・フロントエンドの使用方法を詳しく確認します。
2. Web サーバー・プラグインを実装します。このプラグインを、ローカルのデプロイメント・マネージャー・プロファイルの一部としてインストールし、構成します。詳しくは、WebSphere Application Server に関する以下のトピックを参照してください。
 - Web サーバー・プラグインの実装
 - Web サーバー・プラグインのインストールと構成 (このトピックのシナリオ 5 を参照)
3. WebSphere Application Server の Deployment Manager と IBM HTTP Server 管理サーバーの間に Secure Sockets Layer (SSL) を構成します。SSL 接続を受け入れてトランザクションを実行できるように、IBM HTTP Server からの自己署名証明書を受け付けるように Application Server を構成する必要があります。詳しくは、IBM HTTP Server 管理サーバーと Deployment Manager の間の SSL の構成を参照してください。
4. 構成ファイルが Web サーバーを指し、Process Server がオンライン・モードとなり、通信が HTTP over SSL または HTTP Secure (HTTPS) に対応するように、Process Server クラスターまたは Process

Center クラスターをカスタマイズします。1034 ページの『Web サーバーと連動する Process Server/Process Center クラスターのカスタマイズ』を参照してください。

データベース構成の計画

データベース構成の計画を立てるには、該当ソフトウェアを使用するためにどのデータベースが所定の位置になければならないか、また構成する必要があるか、IBM Business Process Manager のどのコンポーネントを使用するのか、およびそれらに関連するデータベース、データベースを管理するのに必要なタスク、および使用するデータベース・システムのセキュリティ特権を知っている必要があります。

データベースと IBM Business Process Manager トポロジー

データベース構成は、IBM Business Process Manager トポロジー全体の一部です。構成アクティビティについては、Process Center と Process Server のデータベースがトポロジーおよびランタイム処理に関係する場合の相違を理解する必要があります。

Process Center は同じデータベース・スキーマを共有しますが、保管されるインスタンス・データには具体的な違いがあります。Process Center および Process Server のインスタンスごとに、共有スキーマの別個のインスタンスがなければなりません。

「標準プロファイル作成」オプションを使用する場合、データベース設計ツールは、デフォルトのデータベースの構成のために自動的に SQL スクリプトを生成します。

インストール中にスタンドアロン開発プロファイル (qesb) を作成する場合には、必須のデータベースは自動的に構成されます。ユーザーはデータベース要件を設計する必要はありません。

データベース表を手動で作成する場合は、データベース設計ツールを使用して SQL スクリプトを作成します。このツールを使用すると、生成される SQL スクリプトは必ず固有になるからです。

制約事項: Oracle の場合、データベース・インスタンスは SQL ファイル実行の一環として作成されません。Oracle 製品資料を参照して、インスタンスを手動で作成する必要があります。

ユーザーは、データベースの構成情報を、以下のいずれかの方法でプロファイル作成プロセスに取り込むことができます。

- データベース設計ファイルを参照する
- プロファイル管理ツールまたは **manageprofiles** コマンド行ユーティリティを使用したデータベース構成パラメーターの設定

データベース構成を実装するために選択する方法に関係なく、プロファイル作成プロセスの一環として SQL スクリプトを生成する必要があります。Process Server 間または Process Server のクラスター間で SQL スクリプトを再使用することはできません。

データベースを構成する前に、ソリューション・アーキテクトとデータベース管理者は、データベース・トポロジーに関して共同作業を行って、データベース表を保管する最善の方法を理解する必要があります。例えば、表は共通データベースと同じデータベースに保管されるのかどうか。あるいは、表は別個のデータベースにスタンドアロン・プロファイルとして保管されるのかどうか。別個のデータベースは、データベース構成を単純化するので、役に立つ可能性があります。別個のデータベースを使用して、スタンドアロン・サーバー環境で、共通データベースとは別個にコンポーネント・データベースを調整し管理することが可能な場合もあります。

データベース設計ツールに関する詳細については、『データベース設計ツールを使用したデータベース設計ファイルの作成』を参照してください。

Process Center データベースおよび Process Server データベース

IBM Business Process Manager Express および IBM Business Process Manager Standard にはデータベース構成パターンが含まれており、したがって各ランタイム環境用にデータベース設計を作成することができます。いずれかのパターンを使用して、Process Server および Performance Data Warehouse Server コンポーネント用のデータベース構成を作成することができます。

IBM Business Process Manager Advanced には、同じデータベース構成パターンに加えて、**bpm.advanced.standalone.dbDesign** と呼ばれる追加パターンが含まれています。

bpm.advanced.standalone.dbDesign パターンを、共通データベース内の Process Server および Performance Data Warehouse サーバー・コンポーネント用のデータベース・スキーマとして使用することができます。Process Server と Performance Data Warehouse ランタイム環境を結合するスタンドアロン・プロファイルを作成する場合、このパターンを使用します。このパターンを共通データベース用に使用する場合には、カスタム・スキーマ値は指定されません。

デプロイメント環境ウィザードによる procsry および pctrsry データベース設計も使用することができます。標準 (standard) 構成または拡張 (advanced) 構成内の Network Deployment 環境については、これらのパターンは、デプロイメント・ホスト上の Process Server または Process Center のセットアップの一部です。

データベース・タイム・ゾーンおよび文字セットに関する考慮事項

IBM Business Process Manager に使用するデータベース・サーバーのタイム・ゾーンは変更しないでください。IBM BPM に必要な国別文字セットは、Oracle のデフォルト値とは異なります。

タイム・ゾーンに関する考慮事項

データベースに保管されているタイム・スタンプは、データベース・サーバーに対して構成されているタイム・ゾーンに基づいています。このデータベース・タイム・ゾーンへの依存関係のため、既にタイマーがスケジュールされている場合は、既存のセットアップのデータベース・サーバーのタイム・ゾーン構成を変更しないでください。データベース・サーバーのタイム・ゾーン構成を変更すると、予期しない時刻に既存のタイマーがトリガーされる可能性があります。

フェイルオーバーまたは災害復旧の理由で 2 番目のデータベース・サーバーが存在する場合は、両方のデータベース・サーバーを、それらの物理的な位置に関係なく、同じタイム・ゾーンに構成してください。

Oracle データベース用の文字セットに関する考慮事項

IBM BPM では、Oracle データベースが Unicode 対応であることが必要です。Oracle には、データベースでの CHAR 型および NCHAR 型の格納方法に影響する文字セット・パラメーターが 2 つあります。

1. データベース文字セット (CHAR 型) の場合、IBM BPM では AL32UTF8 が必要です。
2. 国別文字セット (NCHAR 型) の場合、IBM BPM では UTF8 が必要です。

IBM BPM に必要な国別文字セットは、Oracle のデフォルト値とは異なることに注意してください。

文字セット・パラメーターについての詳しい説明は、関連する Oracle 情報を参照してください。

関連情報:

Oracle Database Migration Assistant for Unicode

共通データベースを構成する方法とタイミングの選択

必須のデータベース表は、IBM Business Process Manager の構成前または構成後に作成することができます。いずれの場合も、IBM Business Process Manager のサーバーがデータベースを使用しようとする前に、データベース (テーブルやスキーマなども含む) が既に存在している必要があることに注意してください。

Business Process Choreographer を構成する予定の場合は、『トポロジー、セットアップ、および構成パスの計画』を参照してください。

共通データベースは、IBM Business Process Manager プロファイルの作成前、作成中、または作成後に作成できます。

- IBM Business Process Manager を構成する前:
 - IBM Business Process Manager に用意されているデフォルトのスクリプトを編集して実行します。デフォルトのスクリプトは、共通データベースおよび Business Process Choreographer テーブルの作成のみに使用できます。
 - データベース設計ツール (DDT) を使用して作成された設計ファイルを使用します。『データベース設計ツールを使用したデータベース設計ファイルの作成』を参照してください。
- IBM Business Process Manager を構成した後:
 - プロファイル管理ツールを使用して、プロファイルの作成時にデータベース内のテーブルと連携するように IBM Business Process Manager を構成します。データベース表の作成と構成は、プロファイルの作成時に行うことができます。また、プロファイルの作成後までデータベース表の作成と構成を遅らせることができます。プロファイル管理ツールを使用してデータベース・スクリプトを生成し、そのスクリプトをデータベース表の作成と構成に使用することができます。生成されるこれらのスクリプトは、使用可能な状態になっています。編集する必要はありません。
 - データベース設計ツール (DDT) を使用して作成された設計ファイルを使用します。『データベース設計ツールを使用したデータベース設計ファイルの作成』を参照してください。

サポートされているデータベース・タイプ

データベースの選択は、IBM Business Process Manager と共に使用するオペレーティング・システムおよびフィーチャーによって異なります。

IBM Business Process Manager でサポートされるデータベースのリストについては、66 ページの表 25を参照してください。

IBM Business Process Manager には、DB2、Oracle、および SQL Server 用の JDBC ドライバーがパッケージ化されています。JDBC ドライバーについて (バージョンおよびレベル情報を含む) は、「Detailed hardware and software requirements for IBM Business Process Manager」の Web ページを参照してください。

注: IBM Business Process Manager でパッケージ化されているもの以外の JDBC ドライバー・レベルの提供は、お客様の責任において行ってください。

DB2 Express データベースは IBM Business Process Manager ソフトウェアに組み込まれており、IBM Business Process Manager のインストール時に自動的にインストールおよび構成することができます。

重要: **Linux** DB2 Express を root ユーザーとしてインストールする場合、DB2 Express のインストールを開始する前に、すべてのカーネル要件を満たしておく必要があります。カーネル要件のリストについては、カーネル・パラメーターの要件 (**Linux**) を参照してください。現行値は、**ipcs -l** コマンドの出力を解析することによって見つけることができます。

注: 現在、DB2 Express インストーラーには、IBM Business Process Manager インストーラーから渡されるプロパティーでの各国語 (NL) スtringの取り込み関する、既知の制約事項があります。DB2 Express のインストール時に DB2 Express に渡される以下の値に、NL スtringを組み込むことはできません。

Linux **Windows**

- **Linux** インスタンス・ユーザー名およびパスワード: `bpminst` および `bpminst1`
- **Linux** 隔離 (fenced) ユーザー名およびパスワード: `bpmfenc` および `bpmfenc1`
- **Linux** 管理サーバー (DAS) ユーザー名およびパスワード: `bpmadmin` および `bpmadmin1`
- **Windows** 管理ユーザー名およびパスワード: `bpmadmin` および `bpmadmin1`

各データベースは、文字スStringのパラメーター `dbType` で表されています。`dbType` パラメーターは、**manageprofile** コマンド行ユーティリティーのパラメーターとして使用されます。サポートされているデータベースの `dbType` の値を表 25 にまとめます。

表 25. サポートされているデータベース・タイプ、その関連 `dbType` の値および制約事項

サポートされているデータベース	dbType の値	制約事項および注意事項
DB2 Express	DB2_UNIVERSAL	スタンドアロン・プロファイルのデフォルトのデータベース・タイプとして使用されます。
DB2® Universal	DB2_UNIVERSAL	
DB2 データ・サーバー	DB2_DATASERVER	ダウンロード元: 9.7 GA レベル フィックスバック
DB2 for z/OS	DB2UDBOS390	DB2 for z/OS をデータベース管理システムとして使用する場合は、 createDB.sh スクリプトを使用してデータベースおよびデータベース・オブジェクトを構成する必要があります。インストール・ウィザードは、このタイプのデータベースを作成できません。

表 25. サポートされているデータベース・タイプ、その関連 dbType の値および制約事項 (続き)

サポートされているデータベース	dbType の値	制約事項および注意事項
Microsoft SQL Server	Microsoft SQL Server JDBC 1.2 および 2.0 = MSSQLSERVER_MICROSOFT	Microsoft SQL Server JDBC 3.0 もサポートされていますが、Profile Management Tool には個別のデータベース・タイプとしてリストされません。Microsoft SQL Server JDBC 3.0 をデータベース管理システムとして使用する場合は、Microsoft SQL Server JDBC 2.0 のデータベース・タイプを選択すると、バージョン 3.0 がサポートされます。Business Process Choreographer Explorer レポート作成機能では、このデータベース・タイプはサポートされていません。 注: Process Server および Performance Data Warehouse データベースを、CommonDB で共用することはできません。 注: Latin 以外のロケールを指定する必要がある場合、createDatabase.sql スクリプトは使用できません。大/小文字が区別されない別のロケールを指定する必要があります。 重要: データベースをインストールしたら、サーバーを始動する前に、XA トランザクションを構成する必要があります。XA トランザクションを構成しないと、サーバーの始動時にエラーが発生することがあります。907 ページの『XA トランザクションの構成』を参照してください。
Oracle	ORACLE	インストール・ウィザードは、Oracle 用のこのタイプのデータベースを作成できません。

ファイル・パスとファイルの命名規則で使用する 2 番目のパラメーターは、*feature* です。このパラメーターでは、対象になっているデータベースを指定します。表 26 は、各データベースとそれぞれに関連付けられている *feature* パラメーターをまとめたものです。

表 26. 各データベースとそれぞれに関連付けられている feature 名

データベース	フィーチャー
Business Process Choreographer	ProcessChoreographer
Business Space	BusinessSpace
Process Server	ProcessServer
パフォーマンス・データウェアハウス	PerformanceDW
共通データベース	CommonDB
エンタープライズ・サービス・バスのロガー・メディエーション・データベース	EsbLoggerMediation

IBM Business Process Manager をインストールすると、データベース・スクリプトが以下の場所に作成されます。

`INSTALL_ROOT/dbscripts/feature/dbType`

feature は以下のいずれかです。

- BusinessSpace
- CommonDB
- EsbLoggerMediation
- ProcessChoreographer
- ProcessServer
- PerformanceDW


ほとんどの JDBC プロバイダーの作成は、指定されたデータベース・パラメーターに基づいて、プロファイルの作成中に実行されます。ただし、Business Process Choreographer JDBC プロバイダーは、スクリプトまたは管理コンソールを使用して、後で作成されます。適切な JDBC プロバイダーがサーバーまたはクラスターに存在していれば、その既存の JDBC プロバイダーが使用され、新しいプロバイダーの作成は省略されます。

関連概念:

71 ページの『JDBC ドライバーおよびロケーション』

以下の各表に、サポートされている JDBC ドライバーをリストします。最初の表には、製品に付属している JDBC ドライバーの名前とロケーションを示します。2 番目の表には、サポートされているが製品には付属していない JDBC ドライバーの名前とロケーションを示します。

関連情報:

 DB2 データベースを使用したカスタム・ユーザー・レジストリー・データの保持

データベース命名の制約事項

データベースは、IBM Business Process Manager の複数のインストール済み環境にわたって再使用することはできません。IBM Business Process Manager の各インストール済み環境は、関連するデータベースを排他使用する必要があります。データベースは、一意的に識別できるように構成される必要があります。

選択するインストール・パスに応じて、インストールに関連するデータベースはデフォルト名を使用して構成されることがあります。例えば、IBM DB2 上の IBM Business Process Manager Advanced に関連付けられたデータベースは、以下のデフォルト名を持ちます。

- Process Server - BPMDB
- Performance Data Warehouse - PDWDB

DB2 を使用する 2 つの IBM Business Process Manager Advanced のインストール済み環境がある場合には、インストール済み環境のうちの 1 つに対して、デフォルト値を受け入れるのではなく名前を指定するインストール・パスを選択する必要があります。

データベース名の固有性を確実にするために、データベース名を求めるプロンプトを出すインストール・パスを選択します。

例えば、「標準」インストール・パスを使用するときに、データベース名を求めるプロンプトが出されません。デフォルトの DB2 Express ではなく既存のデータベース・サーバーを使用するオプションを選択します。

注: インストール後にプロファイル管理ツールを使用してプロファイルを作成するときに、プロファイル管理ツールのどのパス(「標準」または「拡張」)を選択しても、データベース名を求めるプロンプトが出されます。唯一の例外は、ご使用のデータベース構成用のデータベース設計ファイルを使用する場合です。デ

ータベース設計ファイルには、データベース名、ユーザー名、およびパスワード情報が含まれています。したがって、プロファイル管理ツールはこの情報を求めるプロンプトは出しません。

以下のケースでは、対照的に、ユーザーに対してデータベース名を求めるプロンプトは出されません。

- IBM Business Process Manager Advanced Process Server イメージ用のカスタム・インストール・パスを使用しています。Installation Manager はプロファイルを作成するオプションを提供しますが、データベース名にはデフォルト値を割り当てます。
- 「標準」インストール・パスを使用しており、インストール・イメージと一緒にパッケージされている DB2 Express をインストールするよう選択しています。データベース名にはデフォルト値が割り当てられます。

追加の制約事項がデータベース名の命名に適用されます。これらの制約事項は、使用しているデータベース・サーバーによって決まります。

IBM Business Process Manager Advanced Advanced のインストール

IBM DB2 および Microsoft SQL Server データベースの場合、以下の制約事項が適用されます。

- Process Server、Performance Data Warehouse、および共通データベース・コンポーネントは別個のデータベースになければなりません。
- Process Server および Performance Data Warehouse のコンポーネントは、大/小文字の区別のあるデータベースはサポートしません。これらのデータベースは大/小文字を区別しないものでなければなりません。

Microsoft SQL Server データベースの場合、Process Server または Performance Data Warehouse 以外のコンポーネントでは、それらのデータベースが大/小文字の区別があるものでなければなりません。

Oracle データベースの場合、Process Server、Performance Data Warehouse、および共通データベースのコンポーネントは別個のスキーマ/ユーザーを使用しなければなりません。これらは同じインスタンスを使用することができます。

注: Oracle データベース・コンポーネントのスキーマ/ユーザー名に含めることができるのは、ご使用のデータベース文字セットからの文字のみです。Oracle では、ご使用のデータベース文字セットにマルチバイト文字も含まれているかどうかに関係なく、ユーザー名に 1 バイト文字を少なくとも 1 つ含めることを推奨しています。引用符なしのスキーマ ID は、ご使用のデータベース文字セットからの英字で始まる必要があります。引用符付きの ID は、任意の文字で始めることができます。

IBM Business Process Manager のデータ・ソース

データ・ソースは、アプリケーションとリレーショナル・データベースの間のリンクを提供します。使用するデータ・ソースは、スタンドアロン環境あるいは Network Deployment 環境のいずれをセットアップするかによって影響されます。

アプリケーションは、データ・ソースを使用して、リレーショナル・データベースへの接続を取得します。データ・ソースは、他の種類のエンタープライズ情報システム (EIS) に接続するための Java EE コネクタ・アーキテクチャ (JCA) 接続ファクトリーに類似しています。

データ・ソースは、固有のタイプのデータベースに接続するドライバー実装クラスを提供する Java Database Connectivity (JDBC) プロバイダーに関連しています。アプリケーション・コンポーネントはデータ・ソースと直接対話して、ご使用のデータベースへの接続インスタンスを取得します。各データ・ソースに対応する接続プールによって、接続を管理できます。

さまざまな設定で複数のデータ・ソースを作成し、それらを同じ JDBC プロバイダーに関連付けることも可能です。例えば、同じデータベース・アプリケーション内でさまざまなデータベースにアクセスするために複数のデータ・ソースを使用する、といった状況が考えられます。IBM Business Process Manager において、JDBC プロバイダーは以下のデータ・ソース・インターフェースの 1 つまたは両方を実装する必要があります。これらのインターフェースを使用して、アプリケーションを単一フェーズまたは 2 フェーズのトランザクション・プロトコルで実行します。

注: Business Process Choreographer データ・ソースは、Business Process Choreographer 構成ツールを使用して作成されます。『Business Process Choreographer の構成』を参照してください。

ConnectionPoolDataSource

2 フェーズ・コミット・トランザクション以外のローカル・トランザクションとグローバル・トランザクションにアプリケーションが参加することを可能にするデータ・ソース。接続プールのデータ・ソースがグローバル・トランザクションに関わる場合は、トランザクション・マネージャーがトランザクションのリカバリーを実施することはありません。複数のリソース・マネージャーが関わっている場合は、バックアップ・リカバリー・プロセスをアプリケーション側で用意する必要があります。

XADatasource

1 フェーズまたは 2 フェーズのトランザクション環境にアプリケーションが参加することを可能にするデータ・ソース。このデータ・ソースがグローバル・トランザクションに関わる場合は、WebSphere Application Server のトランザクション・マネージャーがトランザクションのリカバリーを実施します。

以下の表には、標準的なスタンドアロン環境のセットアップと標準的なデプロイメント環境のセットアップの例を示します。

表 27. 標準的なスタンドアロン環境のセットアップ

データ・ソース	コンポーネント	Scope	JNDI 名
WBI データ・ソース	CommonDB	ノード	jdbc/WPSDB
SCA アプリケーション・バス ME データ・ソース	SCA ME	サーバー	jdbc/com.ibm.ws.sib/nlNode01.server1-SCA.APPLICATION.localhostNode01Cell.Bus
Business Process Choreographer データ・ソース	BPC	サーバー	jdbc/BPEDB
Business Process Choreographer ME データ・ソース	BPC ME	サーバー	jdbc/com.ibm.ws.sib/nlNode01.server1-BPC.localhostNode01Cell.Bus
イベント	CEI	サーバー	jdbc/cei
CEI ME データ・ソース	CEI ME	サーバー	jdbc/com.ibm.ws.sib/nlNode01.server1-CEI.cellName.BUS

表 28. 標準的なデプロイメント環境のセットアップ

データ・ソース	コンポーネント	Scope	JNDI 名
WBI データ・ソース	CommonDB	セル	jdbc/WPSDB
SCA アプリケーション・バス ME データ・ソース	SCA ME	クラスター	jdbc/com.ibm.ws.sib/clusterone-SCA.APPLICATION.enduranceTestCell01.Bus
Business Process Choreographer データ・ソース	BPC	クラスター	jdbc/BPEDB
Business Process Choreographer ME データ・ソース	BPC ME	クラスター	jdbc/com.ibm.ws.sib/clusterone-BPC.enduranceTestCell01.Bus
イベント	CEI	クラスター	jdbc/cei
CEI ME データ・ソース	CEI ME	クラスター	jdbc/com.ibm.ws.sib/clusterone-CEI.cellName.BUS

JDBC ドライバーおよびロケーション

以下の各表に、サポートされている JDBC ドライバーをリストします。最初の表には、製品に付属している JDBC ドライバーの名前とロケーションを示します。2 番目の表には、サポートされているが製品には付属していない JDBC ドライバーの名前とロケーションを示します。

以下のサポートされている JDBC ドライバーは、製品のインストール・ファイルに含まれています。

表 29. 製品に付属しているサポート対象の JDBC ドライバーとそのロケーション

サーバー	ドライバーの説明	ドライバーのロケーション	コメント
DB2	IBM DB2 Universal JDBC Driver 3.61.65	WAS_HOME/jdbcdrivers/DB2	IBM DB2 Universal JDBC Driver は、分散プラットフォームおよび z/OS プラットフォームでのデフォルトの DB2 ドライバーです。
	IBM Data Server Driver for JDBC and SQLJ 4.11.69		
Oracle	Oracle JDBC Driver 11g 11.2.0.1.0	WAS_HOME/jdbcdrivers/Oracle	
SQL Server	Microsoft SQL Server JDBC Driver 2.0	WAS_HOME/jdbcdrivers/SQL Server	Microsoft SQL Server JDBC Driver 2.0 は、SQL Server 1.2、2.0、および 3.0 をサポートしています。

以下のサポートされている JDBC ドライバーは、製品のインストール・ファイルに含まれていません。

表 30. 製品に付属していないサポート対象の JDBC ドライバー

サーバー	ドライバーの説明
Oracle	Oracle JDBC Driver 11g 11.1.0.6

表 30. 製品に付属していないサポート対象の JDBC ドライバー (続き)

サーバー	ドライバーの説明
SQL Server	Microsoft SQL Server JDBC ドライバー 1.2
	Microsoft SQL Server JDBC ドライバー 3.0

関連概念:

65 ページの『サポートされているデータベース・タイプ』

データベースの選択は、IBM Business Process Manager と共に使用するオペレーティング・システムおよびフィーチャーによって異なります。

関連情報:

 IBM Business Process Manager Advanced のハードウェアおよびソフトウェア要件の詳細

必須のデータベース管理者タスクの識別

IBM Business Process Manager での何らかのタイプのデータベース作成および構成タスクを実行したい場合には、データベース管理者 (DBA) である必要があります。

データベースの選択

データベースの構成方法の選択

データベース特権およびセキュリティ上の考慮事項

- 74 ページの『データベース特権』
- 必要なセキュリティ権限の明確化

プロファイルの作成

- プロファイルの作成および拡張に対する前提条件
- スタンドアロン環境の作成
- カスタム・インストール後に 1 つ以上のデプロイメント・マネージャー・プロファイルおよびカスタム (管理対象ノード) プロファイルを作成するためのソフトウェアの構成
-

ヒント: デプロイメント環境フィーチャーを使用する場合には、デフォルトのデータベース・サーバー以外のデータベースを、ご使用のデータベース製品として使用することができます。データベース構成パネル上の「データベースで認証するユーザー名」フィールドに提供するユーザー ID は、DBA 特権を備えている必要があります。

データベースの構成

- プロファイルを作成または拡張する前のデータベースおよびテーブルの作成
 - データベース設計ツールを使用したデータベース設計ファイルの作成
- プロファイルを作成または拡張した後のデータベースおよびテーブルの作成
 - プロファイルの作成後または拡張後の共通データベースとテーブルの作成
 - データベース設計ツールを使用したデータベース設計ファイルの作成
- 97 ページの『メッセージング・エンジン・データベース構成の計画』

関連リンク

- Business Process Choreographer の構成
- Business Space の構成
- IBM Business Monitor の構成
 - データベースの考慮事項
 - データベースのインストール

非管理ユーザーの考慮事項

非管理ユーザーまたは非 root ユーザーとして IBM Business Process Manager をインストールする場合、インストール中にテスト・プロファイルを作成するには、インストールを始める前に DB2 サーバーがインストールされている必要があります。インストール中には、入力できるように、データベースの詳細を覚えておいてください。

このトピックで説明する考慮事項は、「標準 (Typical)」インストール・オプションを使用してインストールすることを選択したインストール・シナリオに適用されます。「標準 (Typical)」インストール・オプションを使用してインストールを行うと、プロファイルが自動的に作成されます。

注: テスト・プロファイルは、IBM BPM 拡張構成で使用する場合にのみ該当します。

非管理ユーザーとしてインストールを行う場合は、以下の選択肢があります。

Linux

Windows

UNIX

- 製品をインストールする前に、DB2 サーバーを別途インストールします。非管理ユーザーまたは非 root ユーザーとして DB2 をインストールする方法については、以下を参照してください。

Linux

UNIX

Windows

- Linux UNIX 非 root インストールの概要 (Linux および UNIX)
- Windows DB2 サーバー製品のインストールに必要なユーザー・アカウント (Windows)
- 管理者としてログオンし、製品インストーラーを使用して DB2 サーバーを単体でインストールします。非管理ユーザーに特別な権限を付与します。次に、非管理ユーザーとしてログオンし、インストールされた DB2 サーバーを使用して製品をインストールします。

また、テスト・プロファイルを作成する代わりに、インストール後にプロファイルを作成できます（「カスタム」インストール・オプションを選択した場合）。以下の手順に従ってください。

1. プロファイルを作成せずに製品をインストールします。非管理ユーザーとしてインストールする場合は、「パッケージのインストール (Install Packages)」ページで、DB2 Express のチェック・ボックスのチェック・マークを外す必要があります。Windows で IBM Cognos Business Intelligence をインストールするためのオプションがある場合は、そのチェック・ボックスのチェック・マークも外す必要があります。
2. 「機能」ページでサーバーを展開し、テスト・プロファイルがいずれも選択されていないことを確認します。
3. プロファイル管理ツールを使用して、スタンドアロン・プロファイルを作成するか、デプロイメント・マネージャーおよびカスタム・プロファイルを作成します。データベースがインストールされていない場合は必ず、「拡張」パスを使用してください。「標準 (Typical)」パスは使用しないでください。プロファイルの作成中に、データベース・スクリプトの実行を遅らせるオプションを選択してください。

4. データベースを事前に作成しなかった場合は、プロファイルの作成後または拡張後に、データベース管理者にデータベースと表を作成してもらいます。
5. ネットワーク・デプロイメントの場合:
 - a. カスタム・プロファイルをデプロイメント・マネージャーに統合します。
 - b. 管理コンソールを使用して、必要なデプロイメント環境を作成します。

注: 製品に組み込まれている (オプションでインストールした) DB2 Express データベースを使用する場合は、以下の基準を満たしている必要があります。

- 他のバージョンの DB2 をすべてシステムからアンインストールする
- 非管理ユーザーまたは非 root ユーザーとして IBM Business Process Manager をインストールする

データベース特権

サポートされるデータベース管理システムごとに、データ・ストア・テーブルの作成またはアクセスに必要な権限を決めるために、データベース特権を設定します。

インストーラー、プロファイル管理ツール、データベース設計ツール、またはスクリプトを使用してスキーマを作成する場合、テーブルを作成する権限のあるユーザー ID が必要です。テーブルが作成された後では、テーブル内の情報の選択、挿入、更新、削除を行う権限が必要です。

次の表では、データ・ストアにアクセスするために必要なデータベース特権について説明します。

表 31. データベース特権

ヘッダー	データベース内にオブジェクトを作成するために必要な最小特権	データベース内のオブジェクトにアクセスするために必要な最小特権
DB2	ユーザー ID には、データベースに関する CREATETAB 権限と、テーブル・スペースを作成するための CREATETS 権限が必要です。また、ユーザー ID には、スキーマに関する CREATEIN 特権と DROPIN 特権も必要です。ユーザー ID にはシステム特権 CREATEDBA および CREATEDBC が必要です。また、ユーザー ID には、作成されたテーブルに関する ALTER、DELETE、INDEX、INSERT、REFERENCES、SELECT、および UPDATE 特権も必要です。	ユーザー ID はテーブルに対する SELECT、INSERT、UPDATE、および DELETE 特権が必要です。また、ユーザー ID には、ストアード・プロシージャに関する EXECUTE ON PROCEDURE 特権も必要です。 IBM Business Process Manager および WebSphere Enterprise Service Bus コンポーネントに関する DB2 データベース特権について詳しくは、『76 ページの表 32』を参照してください。
DB2 for z/OS	ユーザー ID には、データベースに関する CREATETAB 権限と、テーブル・スペースを作成するための CREATETS 権限が必要です。また、ユーザー ID には、スキーマに関する CREATEIN 特権と DROPIN 特権も必要です。データベースのストレージ・グループを作成するには、ユーザー ID には CREATESG、CREATEDBA、および CREATEDBC システム特権が必要です。また、ユーザー ID には、作成されたテーブルに関する ALTER、DELETE、INDEX、INSERT、REFERENCES、SELECT、および UPDATE 特権も必要です。	ユーザー ID はテーブルに対する SELECT、INSERT、UPDATE、および DELETE 特権が必要です。また、ユーザー ID には、ストアード・プロシージャに関する EXECUTE ON PROCEDURE 特権も必要です。 IBM Business Process Manager および WebSphere Enterprise Service Bus コンポーネントに関する DB2 for z/OS データベース特権について詳しくは、77 ページの表 33 を参照してください。

表 31. データベース特権 (続き)

ヘッダー	データベース内にオブジェクトを作成するために必要な最小特権	データベース内のオブジェクトにアクセスするために必要な最小特権
Oracle	<p>ユーザー ID には、データ・ストア・スキーマ内にリレーショナル・テーブルおよび索引を作成するための十分な特権が必要です。またデータベースには、スキーマの所有者のデフォルト・テーブル・スペースにおけるスペース割り当て量も必要です。</p>	<p>ユーザー ID には、データベースに接続するための SESSION 特権が必要です。データ・ストア・スキーマと、データベースに接続するコンポーネントの両方を同じユーザー ID が所有している場合、このユーザー ID にはテーブルを処理するのに十分な特権が設定されています。そうでない場合、ユーザー ID には、データ・ストアを構成するテーブルに関する SELECT、INSERT、UPDATE、ALTER、および DELETE オブジェクト特権と、TRUNCATE TABLE ステートメントの使用を可能にする DROP ANY TABLE システム特権が必要です。ユーザー ID には CREATE INDEX 特権も必要です。</p> <p>Oracle データベースの作成には UTF-8 文字セットを使用してください。この文字セットは、IBM Business Process Manager でサポートされるその他のカスタム文字セットをサポートしていません。</p> <p>IBM Business Process Manager および WebSphere Enterprise Service Bus コンポーネントに関する Oracle データベース特権について詳しくは、『78 ページの表 34』を参照してください。</p>
SQL Server	<p>理想的な場合、ユーザー ID には IBM Business Process Manager に使用されるデータ・ストアに関する DB OWNER 特権が必要です。</p>	<p>SQL Server および Windows の認証が SQL Server ログイン ID およびパスワードに基づいて行われるように、SQL Server を構成します。ユーザー ID は、テーブルの所有者か、または TRUNCATE TABLE ステートメントを実行する十分な権限を持つグループのメンバーでなければなりません。</p> <p>IBM Business Process Manager および WebSphere Enterprise Service Bus コンポーネントに関する SQL Server データベース特権について詳しくは、『80 ページの表 35』を参照してください。</p>

76 ページの表 32 では、IBM Business Process Manager コンポーネントに対する追加の DB2 データベース特権について説明しています。

表 32. DB2 データベース特権の詳細

コンポーネント	インストール特権	実行時特権
共通 DB	CREATE TABLE、CREATE INDEXTYPE、ALTER TABLE、INSERT、CREATE SEQUENCE、CREATE USER、ALTER USER、CREATE TABLESPACE	SELECT、UPDATE、DELETE、INSERT、CREATE VIEW、CREATE PROCEDURE、USAGE ON SEQUENCE
Business Space	CREATE TABLE、CREATE INDEXTYPE、ALTER TABLE、INSERT、CREATE SEQUENCE、CREATE USER、ALTER USER、CREATE TABLESPACE	SELECT、UPDATE、DELETE、INSERT、CREATE VIEW、CREATE PROCEDURE
Business Process Choreographer	CREATE TABLE、ALTER TABLE、CREATE VIEW、CREATE TABLESPACE、CREATE USER、CREATE PROCEDURE	SELECT、UPDATE、DELETE、INSERT
Business Process Choreographer Explorer のレポート作成機能	CREATE TABLE、ALTER TABLE、CREATE VIEW、CREATE TABLESPACE、CREATE FUNCTION	createFunctionsSql_Observer.sql スクリプトにリストされている関数での SELECT、UPDATE、DELETE、INSERT、および EXECUTE ON FUNCTION の各特権
メッセージング・エンジン	CREATE TABLE、CREATE INDEXTYPE	SELECT、UPDATE、DELETE、INSERT、DROP ANY TABLE 注: メッセージング・エンジンは TRUNCATE TABLE SQL ステートメントを使用しますが、このステートメントには DROP ANY TABLE 特権が必要となる可能性があります。データベース特権を参照してください。
Process Server パフォーマンス・データウェアハウス	データベースの作成に必要な特権: <ul style="list-style-type: none"> • CREATEDBA • CREATEDBC データベースにスキーマおよびストアード・プロシージャを取り込むために必要な特権: <ul style="list-style-type: none"> • CREATETAB • CREATEIN • DROPIN 作成されたテーブルに関するその他の必要な特権: <ul style="list-style-type: none"> • ALTER • DELETE • INDEX • INSERT • REFERENCES • SELECT • UPDATE 	Process Server および Performance Data Warehouse データベース内のテーブルに関する必要な特権: <ul style="list-style-type: none"> • DELETE • INSERT • SELECT • UPDATE 実行時ユーザーには、createProcedure_ProcessServer.sql スクリプト内の 6 つのストアード・プロシージャに関する EXECUTE ON PROCEDURE 特権が必要です。 実行時ユーザーには、Performance Tracking Server データベースについても、上記の特権のすべてが必要です。さらに、ユーザーは Performance Tracking データベース内に新しいテーブルを作成できるように、CREATETAB 特権も必要です。 システム・メタデータ・テーブルを読み取るには、syscat.tables、syscat.views、syscat.columns、syscat.tabconst、および sysibm.sysdummy1 に関する SELECT 権限が必要です。

データベースを作成し、DB2 ユーザーに権限を割り当てるための構文:

```
create database database_name; automatic storage yes using codeset UTF-8 territory US pagesize 32768;
connect to database_name;
grant dbadm on database to user user_name;
UPDATE DB CFG FOR database_name USING LOGFILSIZ 4096 DEFERRED;
UPDATE DB CFG FOR database_name USING LOGSECOND 64 DEFERRED;
connect reset;
```

表 33 では、IBM Business Process Manager コンポーネントに関する追加の DB2 for z/OS データベース特権について説明します。

表 33. DB2 for z/OS データベース特権の詳細

コンポーネント	インストール特権	実行時特権
共通 DB	CREATE TABLE、 CREATE INDEXTYPE、 ALTER TABLE、 INSERT、 CREATE SEQUENCE、 CREATE USER 、 ALTER USER、 CREATE TABLESPACE	SELECT、 UPDATE、 DELETE、 INSERT、 CREATE VIEW、 CREATE PROCEDURE、 USAGE ON SEQUENCE
Business Space	CREATE TABLE、 CREATE INDEXTYPE、 ALTER TABLE、 INSERT、 CREATE SEQUENCE、 CREATE USER、 ALTER USER、 CREATE TABLESPACE	SELECT、 UPDATE、 DELETE、 INSERT、 CREATE VIEW、 CREATE PROCEDURE、 USAGE ON SEQUENCE
Business Process Choreographer	CREATE TABLE、 ALTER TABLE、 CREATE VIEW、 CREATE TABLESPACE、 CREATE USER、 CREATE PROCEDURE	SELECT、 UPDATE、 DELETE、 INSERT
Business Process Choreographer Explorer のレポート作成機能	CREATE TABLE、 CREATE INDEXTYPE、 ALTER TABLE、 INSERT、 CREATE TABLESPACE、 CREATE FUNCTION	createFunctionsSql_Observer.sql スクリプトにリストされている関数での SELECT、 UPDATE、 DELETE、 INSERT、 および EXECUTE ON FUNCTION の各特権
メッセージング・エンジン	CREATE TABLE、 CREATE INDEXTYPE	SELECT、 UPDATE、 DELETE、 INSERT、 DROP ANY TABLE 注: メッセージング・エンジンは TRUNCATE TABLE SQL ステートメントを使用しますが、このステートメントには DROP ANY TABLE 特権が必要となる可能性があります。 データベース特権を参照してください。

表 33. DB2 for z/OS データベース特権の詳細 (続き)

コンポーネント	インストール特権	実行時特権
Process Server パフォーマンス・データウェアハウス	<p>データベースの作成に必要な特権:</p> <ul style="list-style-type: none"> • CREATESG • CREATEDBA • CREATEDBC <p>データベースにスキーマおよびストアード・プロシージャを取り込むために必要な特権:</p> <ul style="list-style-type: none"> • CREATETS • CREATETAB • CREATEIN • DROPIN <p>作成されたテーブルに関するその他の必要な特権:</p> <ul style="list-style-type: none"> • ALTER • DELETE • INDEX • INSERT • REFERENCES • SELECT • UPDATE 	<p>Process Server および Performance Data Warehouse データベース内のテーブルに関する必要な特権:</p> <ul style="list-style-type: none"> • DELETE • INSERT • SELECT • UPDATE <p>実行時ユーザーには、 createProcedure_ProcessServer.sql スクリプト内の 6 つのストアード・プロシージャに関する EXECUTE ON PROCEDURE 特権が必要です。</p> <p>実行時ユーザーには、Performance Tracking Server データベースについても、上記の特権のすべてが必要です。さらに、ユーザーは Performance Tracking データベース内に新しいテーブルを作成できるように、CREATETS および CREATETAB 特権も必要です。</p> <p>システム・メタデータ・テーブルを読み取るには、sysibm.systables、sysibm.sysviews、sysibm.syscolumns、sysibm.syschecks、sysibm.sysrels、sysibm.systabconst、sysibm.systablespace、および sysibm.sysdummy1 に関する SELECT 特権も必要です。</p>

表 34 では、IBM Business Process Manager コンポーネントに対する追加の Oracle データベース特権について説明しています。

重要: 以下のすべてのコンポーネントを 1 つの Oracle データベースに対して構成する場合は、コンポーネントごとに指定されているすべての特権のスーパーセットを作成することができます。以下の 4 つのコンポーネントを多数のデータベースに対して構成する場合は、データベースごとに異なる特権を設定できます。

表 34. Oracle データベース特権の詳細

コンポーネント	インストール特権	実行時特権
共通 DB	CREATE TABLE, ALTER TABLE, INSERT, CREATE SEQUENCE, CREATE USER, ALTER USER, CREATE TABLESPACE	SELECT, UPDATE, DELETE, INSERT, CREATE VIEW, CREATE PROCEDURE
Business Space	CREATE TABLE, ALTER TABLE, INSERT, CREATE SEQUENCE, CREATE USER, ALTER USER, CREATE TABLESPACE	SELECT, UPDATE, DELETE, INSERT, CREATE VIEW, CREATE PROCEDURE

表 34. Oracle データベース特権の詳細 (続き)

コンポーネント	インストール特権	実行時特権
Business Process Choreographer	CREATE TABLE、ALTER TABLE、CREATE VIEW、CREATE TABLESPACE、CREATE USER、CREATE PROCEDURE	SELECT、UPDATE、DELETE、INSERT
Business Process Choreographer Explorer のレポート作成機能	CREATE TABLE、ALTER TABLE、CREATE VIEW、CREATE TABLESPACE、CREATE FUNCTION	createFunctionsSql_Observer.sql スクリプトにリストされている関数での SELECT、UPDATE、DELETE、INSERT、および EXECUTE ON FUNCTION の各特権
Common Event Infrastructure (CEI)	CREATE TABLE、CREATE INDEXTYPE、ALTER TABLE、CREATE VIEW、ALTER SESSION、SELECT、UPDATE、DELETE、INSERT、CREATE TABLESPACE、CREATE PROFILE、CREATE ROLE、CREATE PROCEDURE、CREATE TEMPORARY TABLESPACE	SELECT、UPDATE、DELETE、INSERT、CREATE PROCEDURE
メッセージング・エンジン	CREATE TABLE	SELECT、UPDATE、DELETE、INSERT、DROP ANY TABLE 注: メッセージング・エンジンは TRUNCATE TABLE SQL ステートメントを使用しますが、このステートメントには DROP ANY TABLE 特権が必要となる可能性があります。データベース特権を参照してください。
Process Server	CREATE TABLE、SELECT、INSERT、UPDATE、ALTER LOCK TABLE、DELETE TABLE、DROP TABLE、CREATE INDEX、CREATE VIEW、DROP VIEW、CREATE PROCEDURE、CREATE SEQUENCE、CREATE USER、ALTER USER、CREATE TABLESPACE	SELECT、UPDATE、DELETE、INSERT、CREATE VIEW、CREATE PROCEDURE、DROP TABLE、DROP VIEW、CREATE SEQUENCE

表 34. Oracle データベース特権の詳細 (続き)

コンポーネント	インストール特権	実行時特権
パフォーマンス・データウェアハウス	CREATE TABLE, SELECT, INSERT, UPDATE, ALTER LOCK TABLE, DELETE TABLE, DROP TABLE, CREATE INDEX, CREATE VIEW, DROP VIEW, CREATE PROCEDURE, CREATE SEQUENCE, CREATE USER, ALTER USER, CREATE TABLESPACE	<p>SELECT, UPDATE, DELETE, INSERT, CREATE VIEW, CREATE PROCEDURE, DROP TABLE, DROP VIEW, CREATE SEQUENCE</p> <p>IBM BPM プロファイルを作成またはマイグレーションするすべてのスキーマまたはユーザーは、DBMS_LOCK パッケージへのアクセス権限を持っている必要があります。次の例に示すように、パフォーマンス・データベースを使用する Oracle ユーザーまたはスキーマに対して DBMS_LOCK パッケージの Execute 権限を設定します。</p> <pre>GRANT execute ON DBMS_LOCK TO <schema_name></pre> <p>この例で、<i>schema_name</i> はパフォーマンス・データベースに使用されるユーザー ID です。</p>

Oracle ユーザーに権限を割り当てるための構文:

```
CREATE USER user_name; IDENTIFIED BY user_password;
grant connect, resource, unlimited tablespace to user_name;
grant create view to user_name;
grant javauserpriv to user_name;
grant execute on dbms_lock to user_name;
```

表 35 では、IBM Business Process Manager コンポーネントに対する追加の SQL Server データベース特権について説明します。

IBM Business Process Manager データベース・ユーザーに対して、以下の 3 つのロールを割り当てる必要があります。

注: データベースは、データベース管理者が作成する必要があります。作成後、データベース管理者は、IBM Business Process Manager のデータベース・ユーザーにこれらのロールを割り当てることができます。

- db_ddladmin
- db_datawriter
- db_datareader

これらのロールに設定されている権限については、Microsoft 固有の資料を参照してください。

以下の表は、インストール・アクティビティと実行時アクティビティの両方について、各コンポーネントの必要な権限を示しています。

表 35. SQL Server データベース特権の詳細

コンポーネント	インストール特権	実行時特権
共通 DB	CREATE TABLE, ALTER TABLE, INSERT, CREATE USER, ALTER USER	SELECT, UPDATE, DELETE, INSERT, CREATE VIEW, CREATE PROCEDURE

表 35. SQL Server データベース特権の詳細 (続き)

コンポーネント	インストール特権	実行時特権
Business Space	CREATE TABLE、ALTER TABLE、INSERT、CREATE USER、ALTER USER	SELECT、UPDATE、DELETE、INSERT、CREATE VIEW、CREATE PROCEDURE
Business Process Choreographer	CREATE TABLE、ALTER TABLE、CREATE VIEW、CREATE USER、CREATE PROCEDURE	SELECT、UPDATE、DELETE、INSERT
メッセージング・エンジン	CREATE TABLE	SELECT、UPDATE、DELETE、INSERT、DROP ANY TABLE 注: メッセージング・エンジンは TRUNCATE TABLE SQL ステートメントを使用しますが、このステートメントには DROP ANY TABLE 特権が必要となる可能性があります。データベース特権を参照してください。
Process Server	CREATE TABLE、SELECT、INSERT、UPDATE、DELETE TABLE、DROP TABLE、CREATE INDEX、CREATE VIEW、DROP VIEW、CREATE PROCEDURE、CREATE USER、ALTER USER	SELECT、UPDATE、DELETE、INSERT、CREATE VIEW、CREATE PROCEDURE、DROP TABLE、DROP VIEW
パフォーマンス・データウェアハウス	CREATE TABLE、SELECT、INSERT、UPDATE、DELETE TABLE、DROP TABLE、CREATE INDEX、CREATE VIEW、DROP VIEW、CREATE PROCEDURE、CREATE USER、ALTER USER	SELECT、UPDATE、DELETE、INSERT、CREATE VIEW、CREATE PROCEDURE、DROP TABLE、DROP VIEW

SQL Server では、Business Process Choreographer Explorer レポート作成機能はサポートされません。

SQL ユーザーに権限を割り当てるための構文:

```
USE database_name
GO
CREATE USER user_name FOR LOGIN user_name WITH DEFAULT_SCHEMA=user_name
GO
CREATE SCHEMA user_name AUTHORIZATION user_name
GO
EXEC sp_addrolemember 'db_ddladmin', 'user_name';
EXEC sp_addrolemember 'db_datareader', 'user_name';
EXEC sp_addrolemember 'db_datawriter', 'user_name';</p>
```

詳しくは、関連参照の WebSphere Application Server のページを参照してください。

関連資料:

 WebSphere Application Server でのデータベース特権

ユーザー ID またはスキーマ名特権

IBM Business Process Manager のインストール時には、デフォルトのスキーマ名およびユーザー ID 特権を使用してデータベースをインストールできます。ただし、データベース設計によっては、別のユーザー ID またはスキーマ名特権が必要になる場合があります。

提供されているシナリオを検討して、IBM Business Process Manager のインストール時に別のスキーマ名およびユーザー ID 特権を構成するタイミングと方法を決定してください。

単一のユーザー ID 特権またはスキーマ名特権の場合のシナリオ

データベースのデフォルト・インストールを選択した場合、IBM Business Process Manager では、テーブルを作成する機能と、作成したテーブルの行の選択、挿入、更新、および削除を行う機能を備えたユーザー ID またはスキーマ名が最小限 1 つ必要です。データベースを作成するには、プロファイル管理ツールまたはインストーラーが使用できます。

次の表は、データベースとして DB2 を使用する際のデフォルトのデータベース構成プロパティを示しています。他のデータベースでは、データベース構成用に、これとは異なるデフォルト構成プロパティがあります。

表 36. シナリオ: 単一のユーザー ID またはスキーマ

データベース表	DB2 を使用したデフォルト・データベース名	ユーザー ID またはスキーマ名
共通データベース表	CMNDB	IBM Business Process Manager は、インストール中にユーザー ID を提供します
Business Process Choreographer	BPEDB	IBM Business Process Manager は、インストール中にユーザー ID を提供します
メッセージング・テーブル	MEDB	IBM Business Process Manager は、インストール中にスキーマ名を提供します

データベース設計のプロパティが異なる場合、複数のユーザー ID およびスキーマ名特権が必要となる場合があります。以下のシナリオは、構成を適用して希望の設計を実現する方法を示しています。提供されているシナリオに希望する特定の設計が含まれていない場合でも、アイデアの一部を修正して、特定の設計を実装することができます。

複数のユーザー ID 特権またはスキーマ名特権の場合のシナリオ 1

このシナリオでは、ユーザー ID 特権と同じスキーマ名を使用しますが、デフォルトのスキーマ名またはデフォルトのユーザー ID 特権は使用しません。この単一ユーザー ID は、すべてのデータベースにアクセスことができ、必要なすべてのテーブルを作成することもできます。以下にシナリオ 1 の特権の例を示します。

- スキーマ名: dog
- SCA.SYSTEM ME のスキーマ名: dogSYS
- SCA.APP ME のスキーマ名: dogAPP
- Event ME のスキーマ名: dogEvent
- BPC ME のスキーマ名: dogBPC
- スキーマを作成するためのユーザー ID: dog
- スキーマの選択、挿入、更新、削除を行うためのユーザー ID: dog

次の表は、データベースとして DB2 を使用してスキーマ名特権およびユーザー ID 特権をセットアップする方法に関する情報を示しています。別のデータベースを選択した場合、スキーマ名およびユーザー ID 特権のセットアップについては、そのデータベースの資料を参照してください。

表 37. シナリオ 1: 複数のユーザー ID またはスキーマ

データベース表	DB2 を使用したデータベース名	スキーマ名	テーブルを作成するためのユーザー ID	行の選択、挿入、更新、および削除を行うためのユーザー ID
共通データベース表	この値は、以下で指定します。 <ul style="list-style-type: none"> • インストール・ウィザード • Profile Management Tool • サイレント・インストール • サイレント・プロファイル作成 	このスキーマ名は、行の選択、挿入、更新、および削除に使用されるユーザー ID と同じです。	この値は、行の選択、挿入、更新、および削除に使用されるユーザー ID と同じです。	この値は、以下で指定します。 <ul style="list-style-type: none"> • インストール・ウィザード • Profile Management Tool • サイレント・インストール • サイレント・プロファイル作成
Business Process Choreographer 表	この値は、以下で 2 回指定します。 <ol style="list-style-type: none"> 1. テーブル作成スクリプト 2. 以下のいずれかを使用したデプロイメント・ターゲットの構成時 <ul style="list-style-type: none"> • 管理コンソール • インストール・ウィザード • bpeconfig.jacl 	このスキーマ名は、行の選択、挿入、更新、および削除に使用されるユーザー ID と同じです。	この値は、行の選択、挿入、更新、および削除に使用されるユーザー ID と同じです。	この値は、以下で 2 回指定します。 <ol style="list-style-type: none"> 1. テーブル作成スクリプト 2. 以下のいずれかを使用したデプロイメント・ターゲットの構成時 <ul style="list-style-type: none"> • 管理コンソール • インストール・ウィザード • bpeconfig.jacl

複数のユーザー ID 特権またはスキーマ名特権の場合のシナリオ 2

このシナリオでは、同じスキーマ名とユーザー ID を使用して、スキーマの選択、挿入、更新、削除を行います。ただし、スキーマの作成には別のユーザー ID を使用します。以下にシナリオ 2 の特権の例を示します。

- スキーマ名 : snow
- SCA.SYSTEM ME のスキーマ名: snowSYS
- SCA.APP ME のスキーマ名: snowAPP
- Event ME のスキーマ名: snowEvent
- BPC ME のスキーマ名: snowBPC
- スキーマを作成するためのユーザー ID: rock
- スキーマの選択、挿入、更新、削除を行うためのユーザー ID: snow

次の表は、データベースとして DB2 を使用してスキーマ名特権およびユーザー ID 特権をセットアップする方法に関する情報を示しています。別のデータベースを選択した場合、スキーマ名およびユーザー ID 特権のセットアップについては、そのデータベースの資料を参照してください。

表 38. シナリオ 2: 複数のユーザー ID またはスキーマ

データベース表	DB2 を使用したデータベース名	スキーマ名	テーブルを作成するためのユーザー ID	行の選択、挿入、更新、および削除を行うためのユーザー ID
共通データベース表	<p>この値は、以下で 2 回指定します。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. テーブル作成スクリプト 2. 次のいずれかを使用した IBM Business Process Manager 構成時: <ul style="list-style-type: none"> • 管理コンソール • インストール・ウィザード • Profile Management Tool • サイレント・インストーラ • サイレント・プロファイル作成 • bpeconfig.jacl <p>制約事項: 最初にインストーラーを実行する場合は、生成されるスクリプトに既に正しいスキーマ名およびユーザー ID の値が含まれているため、値を指定する回数は 1 回です。</p>	<p>テーブル作成スクリプトは、行の読み取りおよび書き込みが可能なスキーマ名を使用して変更する必要があります。</p>	<p>テーブル作成スクリプトは、テーブルの作成が可能なユーザー ID を使用して変更する必要があります。</p>	<p>ユーザー ID はプロファイルの作成中に、以下のいずれかを使用して指定します。</p> <ul style="list-style-type: none"> • インストール・ウィザード • Profile Management Tool • サイレント・インストーラ • サイレント・プロファイル作成
Business Process Choreographer 表	<p>この値は、以下で 2 回指定します。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. テーブル作成スクリプト 2. 以下のいずれかを使用したデプロイメント・ターゲットの構成時 <ul style="list-style-type: none"> • 管理コンソール • インストール・ウィザード • bpeconfig.jacl 	<p>テーブル作成スクリプトは、行の読み取りおよび書き込みが可能なスキーマ名を使用して変更する必要があります。</p>	<p>テーブル作成スクリプトは、テーブルの作成が可能なユーザー ID を使用して変更する必要があります。</p>	<p>ユーザー ID はプロファイルの作成中に、以下のいずれかを使用して指定します。</p> <ul style="list-style-type: none"> • インストール・ウィザード • Profile Management Tool • サイレント・インストーラ • サイレント・プロファイル作成

複数のユーザー ID 特権またはスキーマ名特権の場合のシナリオ 3

このシナリオでは、同じユーザー ID を使用してすべてのスキーマを作成します。ただし、各スキーマには、行を選択、挿入、更新、および削除するための別々のユーザー ID があります。次のリストは、シナリオ 3 の特権の例を示しています。

- スキーマ名: waterCom
- 共通テーブルのスキーマ名 : waterCom
- SCA.SYSTEM ME のスキーマ名: waterSYSME
- SCA.APP ME のスキーマ名: waterAPPME
- Event ME のスキーマ名: waterEventME
- BPC ME のスキーマ名: waterBPCME
- BPC および HTM テーブルのスキーマ名: waterBPC
- ESBMessaging テーブルのスキーマ名: waterESB
- スキーマを作成するためのユーザー ID: milk
- スキーマの選択、挿入、更新、削除を行うためのユーザー ID:

スキーマ名	スキーマの選択、挿入、更新、削除を行うためのユーザー ID
waterCom	waterCom
waterSYSME	waterSYSME
waterAPPME	waterAPPME
waterEventME	waterEventME
waterBPCME	waterBPCME
waterBPC	waterBPC
waterESB	waterESB

次の表は、データベースとして DB2 を使用してスキーマ名特権およびユーザー ID 特権をセットアップする方法に関する情報を示しています。別のデータベースを選択した場合、スキーマ名およびユーザー ID 特権のセットアップについては、そのデータベースの資料を参照してください。

表 39. シナリオ 3: 複数のユーザー ID またはスキーマ

データベース表	DB2 を使用したデータベース名	スキーマ名	テーブルを作成するためのユーザー ID	行の選択、挿入、更新、および削除を行うためのユーザー ID
共通データベース表	この値は、以下で指定します。 <ul style="list-style-type: none"> インストール・ウィザード Profile Management Tool サイレント・インストール サイレント・プロファイル作成 	このスキーマ名は、行の選択、挿入、更新、および削除に使用されるユーザー ID と同じです。	この値は、行の選択、挿入、更新、および削除に使用されるユーザー ID と同じです。	ユーザー ID はプロファイルの作成中に、以下のいずれかを使用して指定します。 <ul style="list-style-type: none"> インストール・ウィザード Profile Management Tool サイレント・インストール サイレント・プロファイル作成
Business Process Choreographer 表	この値は、以下で 2 回指定します。 <ol style="list-style-type: none"> テーブル作成スクリプト 以下のいずれかを使用したデプロイメント・ターゲットの構成時 <ul style="list-style-type: none"> 管理コンソール インストール・ウィザード bpeconfig.jacl 	テーブル作成スクリプトは、行の選択、挿入、更新、および削除を行う場合に使用するスキーマ名を使用して変更する必要があります。	この値は、行の選択、挿入、更新、および削除に使用されるユーザー ID と同じです。	この値は、以下で 2 回指定します。 <ol style="list-style-type: none"> テーブル作成スクリプト 以下のいずれかを使用したデプロイメント・ターゲットの構成時 <ul style="list-style-type: none"> 管理コンソール インストール・ウィザード bpeconfig.jacl
メッセージング・テーブル	この値は、各メッセージング・エンジンの定義を使用して指定します。	テーブル作成スクリプトは、行の選択、挿入、更新、および削除に使用されるスキーマ名を含める必要があります。	この値は、行の選択、挿入、更新、および削除に使用されるユーザー ID と同じです。	この値は、メッセージング・エンジンの作成中に指定します。メッセージング・エンジンの構成中に「 テーブル作成 」オプションを使用します。

コンポーネントに固有のデータベース構成の計画

IBM Business Process Manager には、データベース表を必要とするコンポーネントと、表が保管されるデータベースの固有の名前が含まれています。

このセクションの情報をを使用して、該当のデータベース管理者が管理し、構成し、運営する必要のある IBM Business Process Manager コンポーネントに精通してください。

データベースの構成を計画するには、使用するコンポーネントを明確にする必要があります。データベース表を必要とする IBM Business Process Manager のコンポーネントと、それぞれのコンポーネントに関連付けられている表が保管されているデータベースのデフォルト名を、87 ページの表 40 にまとめます。

重要: これらの名前は必要に応じて変更できますが、後の構成手順でも一貫してその名前を使用する必要がありますのでご注意ください。

表 40. 個々のコンポーネントが必要とするデータベース

サーバー・コンポーネント	データベース (デフォルト名)	注
Process Server	BPMDB	Process Server のテーブルは、Process App リポジトリのデータの保持、格納、および追跡を行うために使用されます。
パフォーマンス・データウェアハウス	PDWDB	
Application Scheduler	CMNDB (共通データベース)	IBM Business Process Manager の開始前に、共通データベースを作成する必要があります。CMNDB テーブルは、デプロイメント・マネージャーまたはスタンドアロン・サーバーの始動時か、デプロイメント・マネージャーまたはスタンドアロン・サーバーを始動する前に構成する必要があります。
Business Process Choreographer	BPEDB	BPEDB は、Business Process Choreographer が構成されている状態でサーバーまたはクラスターを始動する前に作成する必要があります。
Business Process Choreographer Explorer のレポート作成機能	OBSRVDB	Business Process Choreographer Explorer レポート作成機能は推奨されません。BPEL プロセスをモニターし、それに関するレポートを作成するには、IBM Business Monitor を使用します。
Business Space	CMNDB (共通データベース)	スタンドアロン・プロファイルの場合、IBM Business Process Manager の開始前に共通データベースを作成する必要があります。その他のプロファイルについては、管理コンソールを使用して Business Space を構成する必要があります。Business Space データベースの構成は、Business Space powered by WebSphere を使用する場合には必須の作業です。これは、アプリケーション・ユーザーが、特定の範囲の IBM 製品で Web インターフェースを作成、管理、および統合するための共通のインターフェースです。

表 40. 個々のコンポーネントが必要とするデータベース (続き)

サーバー・コンポーネント	データベース (デフォルト名)	注
Common Event Infrastructure (CEI)	EVENT (イベントの格納)	<p>CEI データベースの構成は、プロファイル管理ツールまたは manageprofile コマンド行ユーティリティではサポートされていません。</p> <p>永続イベントのパフォーマンスに影響を与える可能性があるため、実稼働環境の場合はこのデータベースを作成しないでください。</p> <p>Common Base Event ブラウザーは CEI データベースを利用します。ご使用のビジネス・エンタープライズ・アプリケーションでのログイン、トレース、管理、およびビジネスの各イベントの取得および表示に Common Base Event ブラウザーを使用する場合は、CEI データベースを手動で作成する必要があります。</p>
エンタープライズ・サービス・バス	CMNDB (共通データベース)	これらのテーブルは、デプロイメント・マネージャーまたはスタンドアロン・サーバーの始動時か、あるいはデプロイメント・マネージャーまたはスタンドアロン・サーバーを始動する前に構成する必要があります。
メディエーション	CMNDB (共通データベース)	IBM Business Process Manager の開始前に、共通データベースを作成する必要があります。CMNDB テーブルは、デプロイメント・マネージャーまたはスタンドアロン・サーバーの始動時か、デプロイメント・マネージャーまたはスタンドアロン・サーバーを始動する前に構成する必要があります。
リカバリー	CMNDB (共通データベース)	IBM Business Process Manager の開始前に、共通データベースを作成する必要があります。CMNDB テーブルは、デプロイメント・マネージャーまたはスタンドアロン・サーバーの始動時か、デプロイメント・マネージャーまたはスタンドアロン・サーバーを始動する前に構成する必要があります。
関係	CMNDB (共通データベース)	IBM Business Process Manager の開始前に、共通データベースを作成する必要があります。CMNDB テーブルは、デプロイメント・マネージャーまたはスタンドアロン・サーバーを始動する前、またはそれらの始動時に構成する必要があります。

表 40. 個々のコンポーネントが必要とするデータベース (続き)

サーバー・コンポーネント	データベース (デフォルト名)	注
セレクターおよびビジネス・ルール	CMNDB (共通データベース)/リポジトリ DB	IBM Business Process Manager の開始前に、共通データベースを作成する必要があります。CMNDB テーブルは、デプロイメント・マネージャーまたはスタンドアロン・サーバーを始動する前、またはそれらの始動時に構成する必要があります。
SIBus	ユーザー作成	これらのテーブルは、メッセージング・エンジンの始動時、またはメッセージング・エンジンを始動する前に構成する必要があります。プロファイルの作成時には、スタンドアロン環境で SIBus によるファイル・ストアを使用できます。ただし、Network Deployment 環境では、SIBus によるファイル・ストアを使用することはできません。

テーブルおよびスキーマの作成

データベース・プロバイダーによっては、IBM Business Process Manager 内のデータベース用に異なるデータベース表およびスキーマが必要な場合があります。

管理コンソールで「リソース」 > 「JDBC」 > 「ビジネス・インテグレーション・データ・ソース」を選択してデータ・ソースをクリックするときに、「テーブルの作成」のチェック・ボックスを選択して、データ・ソースからテーブルを作成できます。データベース表の作成がデータベース管理者に限られている場合は、このチェック・ボックスを選択解除し、メッセージ・ボックスでスクリプトを見つけ、そのスクリプトをデータベース管理者に提供して実行を依頼します。「テーブルの作成」を使用可能にすると、以下の表に示すように、各データベース・プロバイダーの各種のデプロイメント環境機能を使用できます。「X」は、テーブルまたはスキーマが作成されたことを示します。

ヒント: 共通データベースはプロファイル作成時に構成します。

表 41. データベース・プロバイダーごとのテーブルの作成

データベース・プロバイダー	メッセージング・エンジン	Business Process Choreographer	Business Process Choreographer レポート作成	IBM Process Server	パフォーマンス・データウェアハウス
DB2	X	X	X	X	X
Oracle	X	X	X	X	X
Microsoft SQL	X	X		X	X

表 42. データベース・プロバイダーごとのスキーマの作成

データベース・プロバイダー	メッセージング・エンジン	Business Process Choreographer	Business Process Choreographer レポート作成	IBM Process Server	パフォーマンス・データウェアハウス
DB2	X	X	X	X	

表 42. データベース・プロバイダーごとのスキーマの作成 (続き)

データベース・プロバイダー	メッセージング・エンジン	Business Process Choreographer	Business Process Choreographer レポート作成	IBM Process Server	パフォーマンス・データウェアハウス
DB2 for z/OS	X	X	X	X	X
Oracle	X	X	X	X	

Common Event Infrastructure データベースは手動でのみ構成できます。詳しくは、『*Common Event Infrastructure* データベースの構成』を参照してください。

共通データベース構成の計画

共通データベース構成には、サポート対象のデータベース・タイプ、スクリプトの名前およびスクリプトの場所、プロファイル作成の構成アクション、インストール・パラメーター、作成されるテーブルのタイプ、およびユーザー ID の特権に関する情報が含まれます。

IBM Business Process Manager 共通データベースは、以下の製品コンポーネントで使用します。

- リカバリー
- リレーションシップ・サービス
- メディエーション
- Application Scheduler
- カスタマイズ (セレクターとビジネス・ルール・グループ)
- EventSequencing (LockManager)
- Enterprise Service Bus (ESB) ロガー・メディエーション・プリミティブ

共通データベースは、IBM Business Process Manager プロファイルの作成前、作成中、または作成後に作成できます。

- IBM Business Process Manager を構成する前:
 - IBM Business Process Manager に用意されているデフォルトのスクリプトを編集して実行します。デフォルトのスクリプトは、共通データベースおよび Business Process Choreographer テーブルの作成のみに使用できます。
 - データベース設計ツール (DDT) を使用して作成された設計ファイルを使用します。『データベース設計ツールを使用したデータベース設計ファイルの作成』を参照してください。
- IBM Business Process Manager を構成した後:
 - プロファイル管理ツールを使用して、プロファイルの作成時にデータベース内のテーブルと連携するように IBM Business Process Manager を構成します。データベース表の作成と構成は、プロファイルの作成時に行うことができます。また、プロファイルの作成後までデータベース表の作成と構成を遅らせることができます。プロファイル管理ツールを使用してデータベース・スクリプトを生成し、そのスクリプトをデータベース表の作成と構成に使用することができます。生成されるこれらのスクリプトは、使用可能な状態になっています。編集する必要はありません。
 - データベース設計ツール (DDT) を使用して作成された設計ファイルを使用します。『データベース設計ツールを使用したデータベース設計ファイルの作成』を参照してください。

サポートされているデータベース・タイプ

共通データベースは、以下のデータベース製品を使用することができます。

表 43. サポートされるデータベース製品

データベース・タイプ	考慮事項
DB2 Express®	スタンドアロン・プロファイルのデフォルトのデータベース・タイプとして使用されます。
DB2 Universal	Network Deployment 構成のデータベースとして使用されます。オプションで、スタンドアロン・サーバー構成でのデータベースとしても使用できます。
DB2 データ・サーバー	Network Deployment 構成のデータベースとして使用されます。オプションで、スタンドアロン・サーバー構成でのデータベースとしても使用できます。
DB2 for z/OS v8 DB2 for z/OS v9	重要: DB2 for z/OS v9 を使用するサーバー用にプロファイルを作成するときは、そのサーバーが DB2 データベースに接続できる必要があります。Network Deployment 構成のデータベースとして使用されます。オプションで、スタンドアロン・サーバー構成でのデータベースとしても使用できます。
Microsoft SQL Server (Microsoft)	
Oracle	データベース、テーブル、およびスキーマを作成するには、システム・データベース管理者特権が必要です。これらの特権を持っていない場合には、テーブルおよびスキーマを作成するかそれらにアクセスするときに、エラーを受け取る可能性があります。

ユーザー ID の特権

プロファイル管理ツールで指定するユーザー資格情報には、テーブル・スペース、テーブル、スキーマ、索引、およびストアド・プロシージャを作成するのに必要な権限を持つ必要があります。「データベースの作成」オプションを使用する場合は、新規データベースを作成するために必要な特権がユーザー ID に与えられていなければなりません。スクリプトを実行しているユーザーがテーブルの作成の権限を持っている場合には、そのスクリプトは、スクリプト内に認証 ID を持っている必要はありません。詳細については、『データベースのユーザーおよびスキーマ』および『データベース特権』を参照してください。

データベース管理サービス・インスタンス

Network Deployment 環境の場合、セルあたりに共通データベース表のセットが 1 つあります。

プロファイル作成時の構成操作

共通データベースをインストールするのに、以下のオプションの中の 1 つを使用することができます。

- インストーラー
- Profile Management Tool
- サイレント・インストール
- スクリプト

これらのオプションのそれぞれに、さらにいくつかの選択項目があります。

インストーラー

ソフトウェアのインストール時にプロファイルを作成する場合は、「インストーラー」を使用します。インストール時に、ご使用のデータベース製品をインストールすることができますが、インストールできるデータベース製品のタイプは制限されています。表 44 にはない、サポート対象のデータベース製品を使用するには、プロファイル管理ツールを使用して、ユーザーのデプロイメント・マネージャーを作成する必要があります。

表 44. インストーラー・オプション

オプション	使用可能なデータベース
標準: スタンドアロン・プロファイル	DB2 Express
標準: その他のすべてのプロファイル	DB2 Express
カスタマイズ: スタンドアロン・プロファイル	<ul style="list-style-type: none">• DB2 Universal• DB2 データ・サーバー• Oracle
カスタマイズ: その他のすべてのプロファイル	<ul style="list-style-type: none">• DB2 Universal• DB2 データ・サーバー• Oracle

標準インストールでは、構成パラメーターのデフォルト値を使用します。これらのデフォルト値は変更できません。カスタマイズ・インストールを選択する場合は、ユーザーの固有の要件に合わせてデフォルトを変更することができます。

Profile Management Tool

プロファイル管理ツールを使用して、ソフトウェアのインストール後にプロファイルを作成します。プロファイル管理ツールを使用すると、プロファイルの作成前、作成中、または作成後にデータベースをインストールすることができます。

表 45 では、標準 (デフォルト) プロファイルおよびカスタマイズ・プロファイルでサポートされるデータベースをリストします。

表 45. 「プロファイル管理ツール」オプション

オプション	使用可能なデータベース
標準: スタンドアロン・プロファイル	<ul style="list-style-type: none">• DB2 DataServer• DB2 Universal• DB2 for z/OS• Microsoft SQL Server• Oracle <p>DB2 for z/OS、Oracle、および Microsoft SQL データベースが存在しなければなりません。プロファイル管理ツールがそれらを構成できるようにするためです。</p>

表 45. 「プロファイル管理ツール」 オプション (続き)

オプション	使用可能なデータベース
標準: その他のすべてのプロファイル	<ul style="list-style-type: none"> • DB2 DataServer • DB2 Universal • DB2 for z/OS • Microsoft SQL Server • Oracle <p>DB2 for z/OS、Oracle、および Microsoft SQL データベースが存在しなければなりません。プロファイル管理ツールがそれらを構成できるようにするためです。</p>
カスタマイズ: スタンドアロン・プロファイル	91 ページの『サポートされているデータベース・タイプ』のいずれか
カスタマイズ: その他のすべてのプロファイル	91 ページの『サポートされているデータベース・タイプ』のいずれか

サイレント・インストール

製品をサイレント・インストールするとき、テンプレート応答ファイルを編集して共通データベース構成を指定することができます。

スクリプト

IBM Business Process Manager をインストールする前、またはプロファイルの作成中に、スクリプトを使用して、ご使用の共通データベースを作成することができます。

プロファイルの作成後にデータベースを手動で構成するように選択した場合は、まず IBM Business Process Manager をインストールして、プロファイル管理ツール内で、プロファイル作成の一環としてスクリプトを実行したくないことを示す必要があります。プロファイル管理ツールは、ユーザーが指定したデータベース・パラメーターを使用してデフォルト・スクリプトを更新し、更新されたスクリプトを `profile_root/dbscripts/CommonDB/dbType/dbName` ディレクトリーに書き込みます。

ヒント: プロファイル管理ツールを使用して、更新されたスクリプトが書き込まれるディレクトリーを変更することができます。

スクリプトは、そのままでも実行できますが、編集して特定の要件を組み込むことも可能です。これらのスクリプトを、共通データベースを作成する担当者に渡すことができます。データベースを作成する前に IBM Business Process Manager を開始しようとする、エラー・メッセージを受け取ります。

スクリプトを実行するときに、以下のタスクも実行します。

- 適切な場合 (ローカル・データベースの場合にのみ有効)、プロファイル管理ツール内の「データベース構成」パネルでの選択に応じて、データベースを作成します。

重要: データベースの作成をプロファイル作成の完了後に先送りすることもできますが、プロファイル管理ツールの「データベース構成」パネルに有効な情報を入力する必要があります。その情報に基づいて、IBM Business Process Manager のデータ・ソースが作成されます。

- JDBC プロバイダーでデータ・ソースを作成します。

重要: プロファイルの作成と同時にデータベースも作成する場合に、データベース・パラメーターに誤りがあると、プロファイルにエラーが発生します。データベースの作成を先送りすれば、プロファイルはエラ

一なしで作成されますが、生成されたデータベース・スクリプトにはエラーが含まれているため、データベースを作成できるようにするには、そのスクリプトを訂正する必要があります。セルのカスタム (管理対象) ノードの場合、デプロイメント・マネージャー・プロファイルと同じデータベース・タイプを選択する必要があります。データ・ソースは、セル・レベルでのみ維持されます。

注: セルのカスタム (管理対象) ノードの場合、デプロイメント・マネージャー・プロファイルと同じデータベース・タイプを選択する必要があります。データ・ソースは、セル・レベルでのみ維持されます。

SQL スクリプト

SQL スクリプトを使用して、プロファイル作成の前後にご使用のデータベースを構成します。テーブルは、デプロイメント・マネージャー・プロファイルを使用して作成されるため、管理対象ノードの作成時に SQL スクリプトが実行されることはありません。

各共通データベース・クライアントの SQL スクリプトは、以下の場所にあります。

- IBM Business Process Manager のインストール後の *install_root/dbscripts/CommonDB/dbType*

データベースの作成をプロファイルの作成後に先送りするよう選択した場合は、更新されたスクリプトは *profile_root/dbscripts/feature/dbType/dbName* ディレクトリーで見つけることができます。

SQL スクリプト命名規則

- コンポーネント固有のスクリプトの場合: **createTable_componentName.sql**、例えば **createTable_Recovery.sql**。
- コンポーネントに依存しないスクリプトの場合: **createTable.sql**。

以下の表は、スクリプトの命名規則を示しています。

表 46. 共通データベース・スクリプトの命名規則

スクリプトのタイプ	スクリプト名
コンポーネント固有のスクリプト	<i>scriptName_componentName.sql</i>
コンポーネントに依存しないスクリプト	<i>scriptName.sql</i>

JDBC プロバイダー

新しい Java Database Connectivity (JDBC) プロバイダーは、データベース・タイプに応じて作成されます。プロバイダーは、スタンドアロン・プロファイルのノード・スコープ内に、Network Deployment 環境のセル・レベルで作成されます。JDBC プロバイダーは、**JDBC_DRIVER_PATH** 変数を参照して、ローカル JDBC ドライバーを見つけます。その変数は、セル・レベルで指定され、各ノード・レベルは、正しいローカル・パスを指します。

データ・ソース名:

- **WPS DataSource**

データ・ソース JNDI 名:

- **jdbc/WPSDB**

制約事項

プロファイルの作成中に使用可能なデータベース・コマンドには、いくつかの制約事項があります。

以下のデータベース・タイプでは、「新規データベースの作成」が使用不可になります。

- DB2 for z/OS
- Oracle
- Microsoft SQL Server

テーブル

共通データベース・スクリプトは、プロファイルの作成時に静的テーブルのみを作成します。以下の表には、さまざまなコンポーネントによって作成されるすべてのテーブルのリストが含まれています。

表 47. IBM Business Process Manager の各コンポーネントによって作成されるテーブル

コンポーネント	テーブル名	スクリプト
リカバリー	FAILEDEVENTS FAILEDEVENTBOTYPES FAILEDEVENTMESSAGE	createTable_Recovery.sql
メディエーション	MEDIATION_TICKETS	createTable_mediation.sql
リレーションシップ	実行時に作成される動的テーブル	createTable_Relationship MetadataTable.sql
Application Scheduler	WSCH_LMGR WSCH_ LMPR WSCH_TASK WSCH_TREG	createTable_AppScheduler.sql
カスタマイズ (セクター/ビジネス・ルール・グループ)	BYTESTORE BYTESTOREOVERFLOW APPTIMESTAMP	createTable_customization.sql
共通データベース	SchemaVersionInfo	createTable_CommonDB.sql
永続ロック・マネージャー	PERSISTENTLOCK	createTable_lockmanager.sql
ESB ロガー・メディエーション	MSGLOG	createTable_ESBLogger Mediation.sql

前出のテーブル中のすべての SQL スクリプトは、**configRecovery > commonDBUtility > execute createTable_Recovery.sql** といった各コンポーネント・スクリプトからの **commonDBUtility.ant** ファイルによって実行されます。値 **delayConfig=true** が応答ファイル内にあるとき、SQL ファイルは作成されますが、これらのファイルは実行はされません。この場合、構成後に SQL を手動で実行する必要があります。

WebSphere Enterprise Bus ロガー・メディエーション・コンポーネントでは、各メッセージ・ロガー・プリミティブを構成して、さまざまなデータ・ソースおよびさまざまなデータベースを使用できるようにすることができます。

スクリプトのエクスポート

スクリプトは、共通データベースを構成するためにプロファイル管理ツール・パネルで選択されたすべてのオプション用に作成されます。これらのスクリプトには、データベース、テーブル、および索引の基本的な作成ステートメントのみが含まれています。データベース管理者は、これらのスクリプトを実行するために、データベースのネイティブ・コマンドを使用する必要があります。詳細については、『プロファイル管理ツールによる共通データベースの構成』を参照してください。

スクリプトの名前は、Windows の場合は configCommonDB.bat、UNIX ベースのオペレーティング・システムの場合は configCommonDB.sh です。

データベース・スクリプトは、以下の場所にエクスポートされます：

`profile_root/dbscripts/CommonDB/dbType/dbName` ディレクトリー。

Common Event Infrastructure データベース構成の計画

Common Event Infrastructure (CEI) データベース仕様には、サポートされるデータベースのタイプ、スクリプトの場所、プロファイル構成タイプ、および必要なユーザー ID の特権がリストされます。オプションで、CEI データベースを使用して、それが IBM Business Process Manager をモニターしているときに取り込まれるイベントを保管することができます。

CEI データベースは内部のデバイスであり、ユーザーと直接対話することはありません。CEI データベースとの間のすべての対話に対して、サポート対象の CEI プログラミング・インターフェースを使用する必要があります。

プロファイル管理ツールを実行するときに、自動的に CEI データベースを作成することはありません。CEI イベントを保管したい場合には、スタンドアロン・プロファイルに対して、および Network Deployment 環境内の CEI サーバーの各インスタンスに対して、データベースを手動で作成する必要があります。

関連タスク：

1003 ページの『CEI データベースの構成』

Common Event Infrastructure (CEI) データベースを手動で構成して、IBM Business Process Manager 用の CEI 機能を使用することができます。

Business Process Choreographer データベースの構成計画

Business Process Choreographer にはデータベースが必要です。非実動構成では、Business Process Choreographer データベースを共通データベース内に配置できます。実動構成では、Business Process Choreographer データベースを単独のハイパフォーマンス・データベース・システムにする必要があります。

Business Process Choreographer データベースでは 1 つのデータベースが必要ですが、オプション機能の中にもデータベースを必要とするものがあります。Business Process Choreographer に必要な計画の詳細については、『Business Process Choreographer の構成計画』で説明しています。

以下のリストに、データベースの計画に関連した Business Process Choreographer のトピックへのリンクを示します。

- Business Process Choreographer データベースでの選択および制約については、『トポロジー、セットアップ、および構成パスの計画』を参照してください。
- 単純なサンプル Business Process Choreographer 構成を計画しない場合は、Business Process Choreographer のデータベースの計画を実行します。
- Business Process Choreographer データベースを作成してそのデータベースに接続するために必要なユーザー ID を計画するには、『セキュリティー、ユーザー ID、および許可の計画』にあるデータベースに関する計画表を完成させてください。

メッセージング・エンジン・データベース構成の計画

このメッセージング・エンジン・データベースの仕様には、サポート対象のデータベース・タイプ、スクリプトとそれらの場所、プロファイル作成のタイプ、および必要なユーザー ID の特権がリストされています。

メッセージング・エンジン・データベースは、運用情報を格納するために使用します。障害が発生した場合のリカバリーのためにメッセージング・エンジンが必要とする重要なオブジェクトも保管されます。

メッセージング・エンジン・データベースは、Service Component Architecture (SCA) モジュール、Business Process Choreographer、および Common Event Infrastructure (CEI) 用のメッセージ・エンジンによって使用されます。SCA メッセージング・エンジンのデフォルトのデータベース名は SCADB です。他のメッセージング・エンジンの場合、デフォルトのデータベース名は MEDB です。デフォルトのスキーマ名は、IBMWSSIB です。

重要: すべてのデータベース・タイプで複数のスキーマがサポートされているとは限りません。詳細については、ご使用のデータベースの資料を参照してください。

スタンドアロン環境では、管理コンソールを使用して、SCA メッセージング・エンジンを構成できます。パターン化された Network Deployment 環境では、メッセージング・エンジンは、デプロイメント環境の作成時に構成されます。カスタム Network Deployment 環境の場合、メッセージング・エンジンを手動で構成する必要があります。

ユーザーは、メッセージング・エンジン・データベースに対して制御を行います。例えば、各メッセージング・エンジン用のデータベースを作成することができ、また、すべてのメッセージング・エンジンに対して単一のデータベースを使用することができます。各メッセージング・エンジンは、独自のデータベースまたはスキーマのいずれかを持つ必要があります。

サポートされているデータベース・タイプ

メッセージング・エンジン・データベースには、以下のデータベース製品を使用することができます。

表 48. サポートされるデータベース製品

データベース・タイプ	考慮事項
DB2 Express	スタンドアロン・プロファイルのデフォルトのデータベース・タイプとして使用されます。
DB2 Universal	Network Deployment 構成のデータベースとして使用されます。オプションで、スタンドアロン・サーバー構成でのデータベースとしても使用できます。
DB2 データ・サーバー	Network Deployment 構成のデータベースとして使用されます。オプションで、スタンドアロン・サーバー構成でのデータベースとしても使用できます。
DB2 for z/OS v8 DB2 for z/OS v9	重要: DB2 for z/OS v9 を使用するサーバー用にプロファイルを作成するときは、そのサーバーが DB2 データベースに接続できる必要があります。Network Deployment 構成のデータベースとして使用されます。オプションで、スタンドアロン・サーバー構成でのデータベースとしても使用できます。
Microsoft SQL Server (Microsoft)	

表 48. サポートされるデータベース製品 (続き)

データベース・タイプ	考慮事項
Oracle	データベース、テーブル、およびスキーマを作成するには、システム・データベース管理者特権が必要です。これらの特権を持っていない場合には、テーブルおよびスキーマを作成するかそれらにアクセスするときに、エラーを受け取る可能性があります。

ユーザー ID の特権

プロファイル管理ツールで指定するユーザー資格情報には、テーブル・スペース、テーブル、スキーマ、索引、およびストアド・プロシージャを作成するのに必要な権限を持つ必要があります。「データベースの作成」オプションを使用する場合は、新規データベースを作成するために必要な特権がユーザー ID に与えられていなければなりません。スクリプトを実行しているユーザーがテーブルの作成の権限を持っている場合には、そのスクリプトは、スクリプト内に認証 ID を持っている必要はありません。詳細については、『データベースのユーザーおよびスキーマ』および『データベース特権』を参照してください。

Network Deployment 環境では、構成時に管理コンソールで指定したユーザー特権に関して必要な許可すべてを持っている必要があります。

重要: DB2 V9.7 の場合、新しく作成されたユーザーに、適切な権限を付与します。これは、ユーザー作成プロセスはユーザーに対して自動的に必要な権限を付与することがないためです。

データベース管理サービス (DBMS) インスタンス

各メッセージング・エンジンには、以下に示す独自のデータベースまたはスキーマがあります。

- Service Component Architecture システム・バスの各メッセージング・エンジンのホストとして使用するもの。
- Service Component Architecture アプリケーション・バスの各メッセージング・エンジンのホストとして使用するもの。
- Common Event Infrastructure バスの各メッセージング・エンジンのホストとして使用するもの。
- Business Process Choreographer バスの各メッセージング・エンジンのホストとして使用するもの。

以下のリストには、メッセージング・エンジンがデータベースと対話するのに使用する JDBC データ・ソースの命名規則が含まれています。

- システム・バス: <node><server><cluster>-SCA.SYSTEM.<cell>.Bus
- アプリケーション・バス: <node><server><cluster>-SCA.APPLICATION.<cell>.Bus
- CEI バス: <node><server><cluster>-CEI.cellName.BUS
- BPC バス: <node><server>.-BPC.<cell>.Bus

プロファイル作成時の構成操作

Network Deployment

メッセージング・エンジン・データベースは自動的に作成されません。プロファイルが作成された後、「Network Deployment 環境の構成」というガイド付きアクティビティを使用して、SCA 用のサーバーまたはクラスターを構成することができます。デプロイメント・マネージャーの管理コンソールからこのガイド付きアクティビティにアクセスするには、「ガイド付きアクティビティ」を展開して、「Network Deployment 環境の構成」をクリックします。

管理コンソールの「アプリケーション・サーバー」 > 「*servername*」 > 「**Service Component Architecture**」 パネルで、サーバーの SCA 構成を表示できます。

プロファイルの作成時に、以下の管理用タスクが実行されます。

- リモート宛先の場所:
 - configSCAAsyncForServer、configSCAJMSForServer (remoteMELocation は true)
 - configSCAAsyncForCluster、configSCAJMSForCluster (remoteMELocation は true)
- ローカル宛先の場所:
 - configSCAAsyncForServer、configSCAJMSForServer
 - configSCAAsyncForCluster、configSCAJMSForCluster

これらのタスクに関する詳細については、『configSCAAsyncForCluster コマンド』および『configSCAAsyncForServer コマンド』を参照してください。

サーバーまたはクラスターに非同期の SCA 構成を実行すると、SCA システム・バス用にメッセージング・エンジンが作成されます。サーバーまたはクラスターに SCA 構成の JMS エレメントを実行すると、SCA アプリケーション・バス用にメッセージング・エンジンが作成されます。両方のメッセージング・エンジンに対して、データベースまたはスキーマを作成する必要があります。

Business Process Choreographer メッセージング・エンジンは、Business Process Choreographer の構成中に作成されます。Business Process Choreographer は、パターン化されたデプロイメント環境のみに構成されます。詳細については、トポロジー、セットアップ、および構成パスの計画を参照してください。

Common Event Infrastructure メッセージング・エンジンを構成するためには、deployEventService 管理用タスクを使用して、イベント・サーバーおよび Common Event Infrastructure バスを構成します。

SQL スクリプト

製品の一部として SQL スクリプトが作成されることはありません。必要な場合は、既存の基本 WebSphere Application Server のスクリプトを使用して、データベースとテーブルを作成することができます。構成される前に MEDB を手動で作成するには、管理コンソールの「アプリケーション・サーバー」 > 「*servername*」 > 「**Service Component Architecture**」 パネルを使用します。

JDBC プロバイダー

Service Component Architecture

JDBC プロバイダーの実装クラスが、拡張構成で選択されている実装クラスと一致しなければならない場合は、その JDBC プロバイダーが再利用されます。同じデータベース・タイプを使用する場合には、通常、実装クラスは一致します。resource.xml ファイル内に一致する JDBC プロバイダーが見つからない場合、templates/system ディレクトリー (プロファイル構成) 内にある jdbc-resource-provider-templates.xml ファイルで、一致する JDBC プロバイダーが検索されます。プロバイダーの突き合わせは、実装クラスについても行われます。

Business Process Choreographer

Business Process Choreographer は、SCA メッセージング・エンジン用に、JDBC プロバイダーを再使用します。詳細については、『Business Process Choreographer の構成』を参照してください。

Common Event Infrastructure

メッセージング・エンジン・データベースの JDBC プロバイダーの作成手順は、CEIDB データベースの場合の作成手順とよく似ています。

データ・ソース名

- システム・バス: `_(node.server|cluster)-SCA.SYSTEM.cell.Bus/cel/cluster/server/node`
- アプリケーション・バス: `_(node.server|cluster)-SCA.APPLICATION.cell.Bus/cell/cluster/server/node`
- Common Event Infrastructure: `_(node.server| cluster)-CEI.cellName.BUS/cluster/server/node`
- Business Process Choreographer: `_(node.server|cluster)-BPC.cell.Bus/cell/cluster/server/node`

データ・ソース JNDI 名

- システム・バス: `jdbc/com.ibm.ws.sib/(node.server|cluster)-SCA.SYSTEM.cell.Bus/cell/cluster/server/node`
- アプリケーション・バス: `jdbc/com.ibm.ws.sib/(node.server|cluster)-SCA.APPLICATION.cell.Bus/cell/cluster/server/node`
- Common Event Infrastructure: `Jdbc/ com.ibm.ws.sib /(node.server|cluster)-CEI.cellName.BUS/cluster/server/node`
- Business Process Choreographer バス: `jdbc/com.ibm.ws.sib/(node.server|cluster)-BPC.cell.Bus/cell/cluster/server/node`

制約事項

既知の制約事項はありません。

テーブル

テーブルについては、WebSphere Application Server Network Deployment インフォメーション・センターの『データ・ストア』のトピックを参照してください。

スクリプトのエクスポート

`WAS_INSTALL_ROOT/bin` 内の **sibDDLGenerator** スクリプトを使用して、メッセージング・エンジン・データベース用の SQL スクリプトを作成することができます。実稼働環境、特に DB2 for z/OS プラットフォームで使用される SQL スクリプトを作成するために、**sibDDLGenerator** スクリプトを使用します。詳細については、「sibDDLGenerator コマンド」を参照してください。

これらのスクリプトには、基本的な **database/tablespace/table** 作成ステートメントのみが含まれています。データベース管理者は、データベースのニーズを満たすために、特に DB2 for z/OS において、これらのスクリプトを調整する必要がさらに生じることがあります。

データ・ストア接続が失われた場合のメッセージング・エンジンとサーバーの動作の構成

何らかの障害のため、またはデータベースを停止したために、稼働しているメッセージング・エンジンとそのデータ・ストアとの接続が失われることがあります。ご使用のシステムの動作を、メッセージング・エンジンのカスタム・プロパティを通じて判別することができます。

sib.msgstore.jdbcFailoverOnDBConnectionLoss カスタム・プロパティを設定する場合には、 可用性の高い IBM Business Process Manager 環境の自動リカバリーをさらに強化することができます。

sib.msgstore.jdbcFailoverOnDBConnectionLoss プロパティに関する情報 (このプロパティの設定方法の情報も含む) については、 データ・ストア接続が失われた場合のメッセージング・エンジンおよびサーバ

一の動作の構成 (Configuring messaging engine and server behavior when a data store connection is lost) を参照してください。

関連情報:

 データ・ストア接続が失われた場合のメッセージング・エンジンとサーバーの動作の構成

WebSphere Enterprise Service Bus のロガー・メディエーション・データベース表を構成する計画

WebSphere ESB のロガー・メディエーション・データベース表の仕様を検索することができます。仕様には、サポート対象のデータベース・タイプ、スクリプトの名前およびスクリプトの場所、プロファイル作成の構成アクション、スキーマのアップグレード、およびユーザー ID の特権に関する情報が含まれています。

ロガー・メディエーション・データベース表は、WebSphere ESB 内のメッセージ・ロガー・メディエーション・プリミティブが使用します。メッセージ・ロガー・プリミティブは、メッセージ情報を共通データベースに保管します。共通データベースは、WebSphere ESB ロガー・メディエーション・データベース用のデフォルトですが、外部データベースを使用することもできます。プロファイルの拡張フェーズ時に、システムは `ESB_MESSAGE_LOGGER_QUALIFIER` 変数を作成し、その変数は選択された共通データベースのスキーマ修飾子の値に設定されます。

データベースがスタンドアロン構成に対して自動的に作成されます。データ定義言語 (DDL) ファイルを使用することにより、スタンドアロン・サーバー構成用または Network Deployment 環境用に追加のデータベースを使用できます。

DB2 for z/OS データベースを使用するスタンドアロン構成の場合、または Network Deployment 構成内の管理対象ノードまたはデプロイメント・マネージャーの場合には、まず WebSphere ESB データベースおよびストレージ・グループを作成する必要があります。次に、IBM Business Process Manager for z/OS 用の構成スクリプトを実行することができます。

サポートされているデータベース・タイプ

WebSphere ESB ロガー・メディエーション・データベースは、以下のデータベース製品を使用することができます。

表 49. サポートされるデータベース製品

データベース・タイプ	考慮事項
DB2 Express	スタンドアロン・プロファイルのデフォルトのデータベース・タイプとして使用されます。
DB2 Universal	Network Deployment 構成のデータベースとして使用されます。オプションで、スタンドアロン・サーバー構成でのデータベースとしても使用できます。
DB2 データ・サーバー	Network Deployment 構成のデータベースとして使用されます。オプションで、スタンドアロン・サーバー構成でのデータベースとしても使用できます。

表 49. サポートされるデータベース製品 (続き)

データベース・タイプ	考慮事項
DB2 for z/OS v8 DB2 for z/OS v9	重要: DB2 for z/OS v9 を使用するサーバー用にプロファイルを作成するときは、そのサーバーが DB2 データベースに接続できる必要があります。Network Deployment 構成のデータベースとして使用されます。オプションで、スタンドアロン・サーバー構成でのデータベースとしても使用できます。
Microsoft SQL Server (Microsoft)	
Oracle	データベース、テーブル、およびスキーマを作成するには、システム・データベース管理者特権が必要です。これらの特権を持っていない場合には、テーブルおよびスキーマを作成するかそれらにアクセスするときに、エラーを受け取る可能性があります。

ユーザー ID の特権

プロファイル管理ツールで指定するユーザー資格情報には、テーブル・スペース、テーブル、スキーマ、索引、およびストアド・プロシージャを作成するのに必要な権限を持つ必要があります。「データベースの作成」オプションを使用する場合は、新規データベースを作成するために必要な特権がユーザー ID に与えられていなければなりません。スクリプトを実行しているユーザーがテーブルの作成の権限を持っている場合には、そのスクリプトは、スクリプト内に認証 ID を持っている必要はありません。詳細については、『データベースのユーザーおよびスキーマ』および『データベース特権』を参照してください。

データベース管理サービス (DBMS) インスタンス

共通データベースは、スタンドアロン環境および Network Deployment 環境の両方に、セル・スコープで使用されます。ただし、他のインスタンスを、必要な数だけ手動で作成することができます。各メッセージ・ロガー・メディエーション・プリミティブは、さまざまなデータ・ソース、したがってさまざまなデータベースを使用するために構成することができます。

プロファイル作成時の構成操作

スタンドアロン・プロファイルとデプロイメント・マネージャー・プロファイルの場合、WebSphere ESB のロガー・プロファイルは、共通データベース内の **createTable** 共通データベース・スクリプトを実行します。

スタンドアロン・プロファイル

デフォルトのスタンドアロン環境では、EsbLogMedDB という名前の DB2 データベースが自動的に作成されます。

ネットワーク・デプロイメント環境

デフォルトの WebSphere ESB データベースは、Network Deployment プロファイルの作成中に自動的に選択されることはありません。デフォルトのデータベースを選択するか、またはサポート対象のデータベースの 1 つを選択する必要があります。

SQL スクリプト

createTable_ESB.sql SQL スクリプトは、*install_root/dbscripts/CommonDB/DBTYPE* ディレクトリーにあります。

createMessageLoggerResource.jacl および **removeMessageLoggerResource.jacl** スクリプトは、*install_root/bin* ディレクトリにあり、要求されたデータベース・タイプのテーブルを作成または削除するのに使用することができます。

JDBC プロバイダー

以下の 共通データベースの JDBC プロバイダーとデータ・ソースがデフォルトで使用されます。

データ・ソース名:

- **WPS DataSource**

データ・ソース JNDI 名:

- **jdbc/WPSDB**

メッセージ・ロガー・メディエーションを構成して、異なるデータ・ソースを使用することができます。

制約事項

既知の制約事項はありません。

テーブル

WebSphere ESB ロガー・メディエーション・データベースは、共通データベース内の MSGLOG テーブルを使用します。ただし、共通データベースを使用しないことを選択でき、代わりに外部データベースを使用することもできます。

スクリプトのエクスポート

データベース・スクリプトは、*install_root/dbscripts/CommonDB/DBTYPE/dbName* ディレクトリにエクスポートされます。

スキーマのアップグレード・スクリプト

スキーマのアップグレードは、MSGLOG テーブルには含まれていません。IBM Business Process Manager V6.1 にマイグレーションするときに、IBM Business Process Manager は、前のリリースで使用された MessageLogger データベースを継続して使用します。このデータを IBM Business Process Manager 共通データベースにマイグレーションするためのサポートはありません。

メッセージ情報用に単一の場所を維持したい場合には、以下のタスクの中の 1 つを実行することができます。

- データを古いデータベースから新しいデータベースへ手動で移動する
- 古いデータベースを引き続き使用する
- **createMessageLoggerResource.jacl** スクリプトを使用して、データを移動します。

セクター/ビジネス・ルール・グループ・データベース構成

このセクター/ビジネス・ルール・グループ・データベースの仕様を使用して、サポートされるデータベース・タイプ、スクリプトとそれらの場所、プロファイル作成の構成操作、制限事項、テーブル名、およびユーザー ID の特権に関する情報を調べてください。

セクターやビジネス・ルールの成果物を含んだアプリケーションをインストールすると、それらの成果物は、サーバーによってデータベース表に格納されるので、ユーザーはアプリケーションを変更しなくてもそ

これらの成果物を動的に更新できます。セレクターとビジネス・ルール・グループのコンポーネントは、セレクターとビジネス・ルールの成果物を保持するためにデータベースを使用します。それらの成果物は、Integration Designer で作成され、サーバーにインストールされます。管理コンソールからセレクターに変更を加えた場合や、ビジネス・ルール・マネージャーからビジネス・ルールに変更を加えた場合には、最新の情報に基づいてデータベースが更新されます。EAR に含まれている元の成果物は、アプリケーションのインストール後の更新に合わせて同期することはありません。

サポートされているデータベース・タイプ

セレクター/ビジネス・ルール・グループ・データベースには、以下のデータベース製品を使用することができます。

表 50. サポートされるデータベース製品

データベース・タイプ	考慮事項
DB2 Express	スタンドアロン・プロファイルのデフォルトのデータベース・タイプとして使用されます。
DB2 Universal	Network Deployment 構成のデータベースとして使用されます。オプションで、スタンドアロン・サーバー構成でのデータベースとしても使用できます。
DB2 データ・サーバー	Network Deployment 構成のデータベースとして使用されます。オプションで、スタンドアロン・サーバー構成でのデータベースとしても使用できます。
DB2 for z/OS v8 DB2 for z/OS v9	重要: DB2 for z/OS v9 を使用するサーバー用にプロファイルを作成するときは、そのサーバーが DB2 データベースに接続できる必要があります。Network Deployment 構成のデータベースとして使用されます。オプションで、スタンドアロン・サーバー構成でのデータベースとしても使用できます。
Microsoft SQL Server (Microsoft)	
Oracle	データベース、テーブル、およびスキーマを作成するには、システム・データベース管理者特権が必要です。これらの特権を持っていない場合には、テーブルおよびスキーマを作成するかそれらにアクセスするときに、エラーを受け取る可能性があります。

ユーザー ID の特権

プロファイル管理ツールで指定するユーザー資格情報には、テーブル・スペース、テーブル、スキーマ、索引、およびストアド・プロシージャを作成するのに必要な権限を持つ必要があります。「データベースの作成」オプションを使用する場合は、新規データベースを作成するために必要な特権がユーザー ID に与えられていなければなりません。スクリプトを実行しているユーザーがテーブルの作成の権限を持っている場合には、そのスクリプトは、スクリプト内に認証 ID を持っている必要はありません。詳細については、『データベースのユーザーおよびスキーマ』および『データベース特権』を参照してください。

データベース管理サービス (DBMS) インスタンス

スタンドアロン・プロファイルまたは Network Deployment 構成 (サーバーまたはサーバー・クラスター) で使用できるデータベース・インスタンスは 1 つのみです。スタンドアロン・プロファイル内またはセル内のサーバー用のすべてのセレクターとビジネス・ルールでは、同じリポジトリが使用されます。別個の

セレクターやビジネス・ルールのために別個のデータベース・インスタンスを使用することはサポートされていません。

プロファイル作成時の構成操作

スタンドアロン・プロファイル

プロファイルの作成時に、共通データベースによって **createTable** が使用されて、ビジネス・ルールとセレクターの各テーブルが作成されます。デフォルトの構成を選択した場合は、デフォルトのデータベースは DB2 です。

デプロイメント・マネージャー・プロファイル

Network Deployment 構成の場合、セル用の共通データベースにセレクターとビジネス・ルール・グループのコンポーネント用の適切なテーブルがセットアップされます。デプロイメント・マネージャー内またはカスタム・プロファイル内のサーバーのすべてのセレクターとビジネス・ルールは、そのデータベースを使用します。

SQL スクリプト

SQL スクリプトの場所については、『共通データベースの仕様』を参照してください。

JDBC プロバイダー

セレクターとビジネス・ルールでは、以下の共通データベースのデータ・ソースと JDBC プロバイダーが使用されます。

データ・ソース名:

- **WPS DataSource**

データ・ソース JNDI 名:

- **jdbc/WPSDB**

制約事項

セレクターやビジネス・ルールを含んだアプリケーションをサーバーまたはセルからアンインストールしても、共通データベースまたは RepositoryDB データベースに格納されている成果物は除去されません。これらは、『ビジネス・ルールおよびセレクター・データのリポジトリからの除去 (Removing business rule and selector data from the repository)』のトピックにある指示に従って、手動で除去する必要があります。

セレクターまたはビジネス・ルールが含まれたアプリケーションをサーバーまたはセルからアンインストールしても、共通データベースに格納されている成果物は除去されません。これらは、インフォメーション・センターにある『リポジトリからのビジネス・ルールおよびセレクター・データの除去』の指示に従って、手動で除去する必要があります。

テーブル

セレクターとビジネス・ルールの成果物を保持するために、以下の 3 つのテーブルがあります。

- ByteStore
- ByteStoreOverflow
- AppTimestamp

スクリプトのエクスポート

スクリプトは、共通データベースのスクリプトと同じ場所にエクスポートされます。スクリプトの場所については、『共通データベースの仕様』を参照してください。

Business Process Choreographer の構成計画

Business Process Choreographer のセットアップ、構成パラメーター、および Business Process Archive を計画します。

- 118 ページの『トポロジー、セットアップ、および構成パスの計画』を実行します。
- 選択した構成パスに応じて、以下のいずれかを実行します。
 - 『基本サンプル』の場合は、123 ページの『基本サンプル Business Process Choreographer 構成の作成の計画』を実行してください。
 - 『組織付きサンプル』の場合は、124 ページの『サンプル組織を含むサンプル Business Process Choreographer 構成の作成の計画』を実行してください。
 - 『実動デプロイメント環境』の場合は、124 ページの『管理コンソールのデプロイメント環境ウィザードを使用するための計画』を実行してください。
 - 『柔軟なカスタム構成』の場合は、128 ページの『Business Process Choreographer カスタム構成の計画』を実行してください。
 - 『Business Process Archive』の場合は、157 ページの『Business Process Archive の計画』を実行してください。

これで、topics/t2configovr.ditaを実行するために必要なすべての事項の計画が完了しました。

Business Process Choreographer の概要

Business Flow Manager、Human Task Manager、および Business Process Archive Manager の機能について説明します。

Business Process Choreographer は、WebSphere Application Server 環境にある BPEL Process とヒューマン・タスクの両方をサポートするエンタープライズ・ワークフロー・エンジンです。これらの構成体は、サービスのオーケストレーションと、ビジネス・プロセスの担当者が関与するアクティビティーの統合に使用できます。Business Process Choreographer は、BPEL プロセスのライフ・サイクルおよびヒューマン・タスクを管理し、関連したプロセス・モデルをナビゲートして、該当するサービスを呼び出します。

Business Process Choreographer は、次の機能を提供します。

- BPEL Process およびヒューマン・タスクのサポート。Web Services Business Process Execution Language (WS-BPEL、略記 BPEL) を使用してビジネス・プロセスをモデル化できます。ヒューマン・タスクでは、Task Execution Language (TEL) を使用して、担当者が関与するアクティビティーをモデル化できます。BPEL Process およびヒューマン・タスクは、サービス指向アーキテクチャー (SOA) または Service Component Architecture (SCA) でのサービスとして公開され、単純なデータ・オブジェクトおよびビジネス・オブジェクトもサポートします。
- BPEL Process およびヒューマン・タスクとの対話用のカスタマイズ・アプリケーションを開発するためのアプリケーション・プログラミング・インターフェース。
- Business Space の一部としてのヒューマン・ワークフロー・ウィジェット。これらのウィジェットにより、作業の管理、他のユーザーのためのタスクの作成、およびサービスとプロセスの開始が可能です。
- Business Process Choreographer Explorer。この Web アプリケーションを使用すると、BPEL プロセスおよびヒューマン・タスクを管理できます。

また、これにはオプションで Business Process Choreographer Explorer レポート作成機能 (これまでは Business Process Choreographer Observer と呼ばれていました) が組み込まれ、この機能によって実行中のプロセスの状態を監視することができます。Business Process Choreographer Explorer レポート作成機能は推奨されません。BPEL Process についてモニターおよびレポートするには、IBM Business Monitor を使用します。

- Business Process Archive Manager。構成すると、別個のデータベースが作成され、管理スクリプトを実行することにより、そのデータベースに完了済みのプロセス・インスタンスおよびヒューマン・タスクを移動できるようになります。そのようにすれば、Business Process Choreographer データベースのパフォーマンスを維持するのに役立ちます。また、アーカイブされたインスタンスを操作するための独自のクライアントを作成できるように、API も用意されています。

Business Process Archive Explorer は、Web アプリケーションであり、ユーザーは、アーカイブ・データベースに移動されたインスタンスを表示または削除するために使用することができます。詳しくは、111 ページの『BPEL Process アーカイブの概要』を参照してください。

Business Process Choreographer Explorer レポート作成機能用に構成されたレポート・データベースを再利用することにより、Business Process Archive Explorer もレポート作成機能を提供するように構成することができます。Business Process Archive Explorer レポート作成機能は推奨されません。BPEL プロセスをモニターし、それに関するレポートを作成するには、IBM Business Monitor を使用します。

- デフォルトでは、新しい Business Process Choreographer 構成では、共有作業項目の使用によってもたらされるパフォーマンス改善の効果が表れます。

Business Process Choreographer Explorer の概要

Business Process Choreographer Explorer は、BPEL Process およびヒューマン・タスクとの対話を目的として汎用の Web ユーザー・インターフェースを実装する Web アプリケーションです。

また、オプションのレポート作成機能が組み込まれていますが、この機能はこれまでは Business Process Choreographer Observer と呼ばれていました。

1 つ以上の Business Process Choreographer Explorer インスタンスをサーバーまたはクラスター上で構成できます。Business Process Choreographer Explorer などのクライアントを Business Process Choreographer 構成に接続するには、WebSphere プロファイルを持つ Process Server のインストール済み環境、または Process Server クライアントのインストール済み環境があれば十分です。Business Process Choreographer をサーバーまたはクラスター上に構成する必要はありません。Process Server クライアントのインストール済み環境は、必要とされる唯一のインフラストラクチャーです。

このクライアントのインストール済み環境に Business Process Choreographer Explorer は含まれていません。デプロイメント・マネージャー、管理コンソール、または管理スクリプトを使用して、Process Server クライアントのインストール済み環境のサーバーにも Business Process Choreographer Explorer をインストールできます。

単一の Business Process Choreographer Explorer のみ 1 つの Business Process Choreographer 構成に接続できます。とはいえ、ローカル構成に接続する必要はありません。ただし、Business Process Choreographer Explorer の複数のインスタンスを同じサーバーまたはクラスター上に構成し、各インスタンスを異なる Business Process Choreographer 構成に接続することはできません。

Business Process Choreographer Explorer を開始する場合、ユーザー・インターフェースに表示されるオブジェクト、および実行できるアクションは、所属するユーザー・グループとそのグループに与えられた権限によって異なります。例えば、BPEL Process 管理者であれば、配置されたビジネス・プロセスの運用を平滑化する責任を負います。管理者は、プロセスやタスクのテンプレート、プロセス・インスタンス、タス

ク・インスタンス、およびそれらの関連オブジェクトに関する情報を表示できます。これらのオブジェクトを操作することもできます。例えば、新規プロセス・インスタンスの開始、タスクの作成と開始、失敗したアクティビティの修復と再始動、作業項目の管理、完了したプロセス・インスタンスおよびタスク・インスタンスの削除を実行できます。ただし、ユーザーの場合は、割り当てられたタスクのみを表示し、操作することができます。

Business Process Choreographer Explorer を使用して、Business Process Archive データベースに移動されたインスタンスを表示することはできません。その場合は、Business Process Archive Manager 構成に接続する Business Process Archive Explorer インスタンスが必要です。アーカイブに関する詳細については、111 ページの『BPEL Process アーカイブの概要』を参照してください。

Business Process Choreographer Explorer レポート作成機能 概要 (非推奨):

Business Process Choreographer Explorer レポート作成機能について。

Business Process Choreographer Explorer レポート作成機能は推奨されません。BPEL Process についてモニターおよびレポートするには、IBM Business Monitor を使用します。

Business Process Choreographer Explorer レポート作成機能を使用すると、完了しているプロセスに関するレポートを作成できます。また、これを使用して、実行中のプロセスの状況を表示することもできます。ここでは、アーキテクチャーと可能な構成パスについて説明します。

Business Process Choreographer Explorer レポート作成機能 では、Common Event Infrastructure (CEI) を使用してイベントを収集します。数多くの定義済みレポートを使用するか、または独自のレポートを定義して、多くのプロセス、アクティビティ、または他の集約データの概要を把握することができます。また、特定のプロセスまたはアクティビティについての情報を得ることも可能です。

Business Process Choreographer Explorer レポート作成機能 は、次の図に示す 2 つの Java Platform Enterprise Edition (Java EE) アプリケーションが基本になっています。

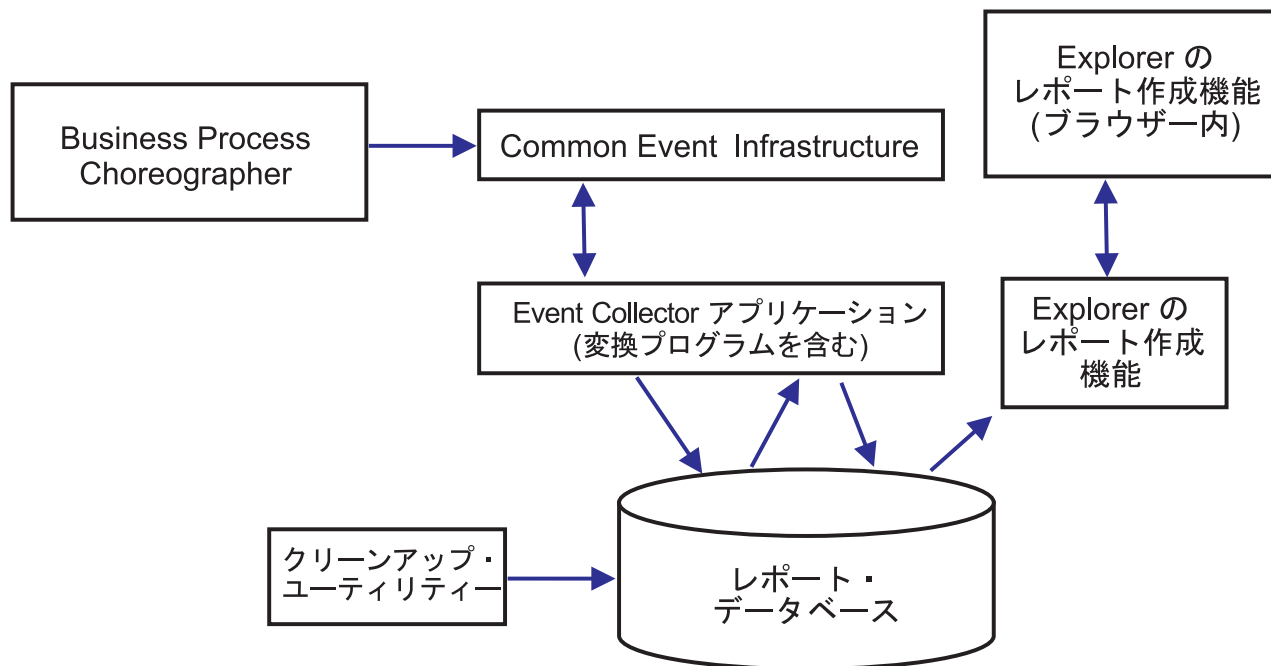


図 8. アーキテクチャー

- Event Collector アプリケーションは、CEI バスからイベント情報を読み取り、その情報をレポート・データベースの Event Collector 表に格納します。
- レポート・データベースは、イベント・データを格納する一連のデータベース表です。
- イベント変換プログラムが定期的に起動し、未加工のイベント・データを、Business Process Choreographer Explorer レポート作成機能からの照会に適した形式に変換します。
- Business Process Choreographer Explorer レポート作成機能は、レポートを生成し、ユーザーがグラフィカル・ユーザー・インターフェース (GUI) を使用して開始できるほかのアクションを実行します。
- GUI を使用して独自のレポートを生成することができます。また、自分で定義したレポートを保管および検索することも可能です。
- クリーンアップ・ユーティリティーは、データベースからレコードを除去するときに使用することができます。これはパフォーマンスの向上に役立ちます。
- レポート作成機能は、Business Process Archive Explorer でもサポートされており、Business Process Choreographer Explorer で使用するために作成されたのと同じレポート作成機能インフラストラクチャーを使用するようにセットアップすることができます。

簡易構成

簡易構成では、パフォーマンスは重要な考慮事項ではありません。簡易構成を次の図に示します。

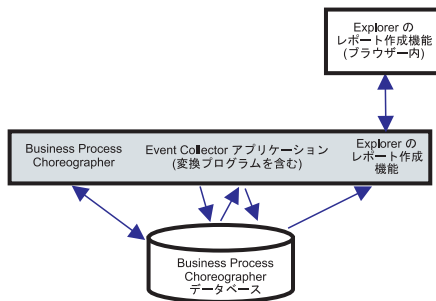


図9. スタンドアロン・セットアップ

すべてが 1 台のシステムにデプロイされており、Business Process Choreographer と Business Process Choreographer Explorer レポート作成機能が同じデータベースを使用します。

サンプル Business Process Choreographer 構成を作成する場合、このような簡易構成が作成されます。また、bpeconfig.jacl ツールでは、デフォルトで、Business Process Choreographer 構成と同じデプロイメント・ターゲットでこの種のセットアップが構成されます。Common Event Infrastructure (CEI) ロギングが使用可能になり、必要なデータベース・スキーマが、デフォルトの Business Process Choreographer データベース BPEDB に作成されます。この構成パスは、パフォーマンスが重要な考慮事項ではない場合に最適です。

ハイパフォーマンス構成

Business Process Choreographer Explorer レポート作成機能アーキテクチャーの潜在能力を最大限に活用できるようにするための対話式の構成ツールが用意されています。例えば、パフォーマンスの点で理想的な構成は、Business Process Choreographer 構成、CEI イベント・サーバー、および Business Process Choreographer Explorer (レポート作成機能を持つもの) がそれぞれ別個のシステム稼働し、Business Process Choreographer および Business Process Choreographer Explorer レポート作成機能に専用のデータベースを用意した構成です。

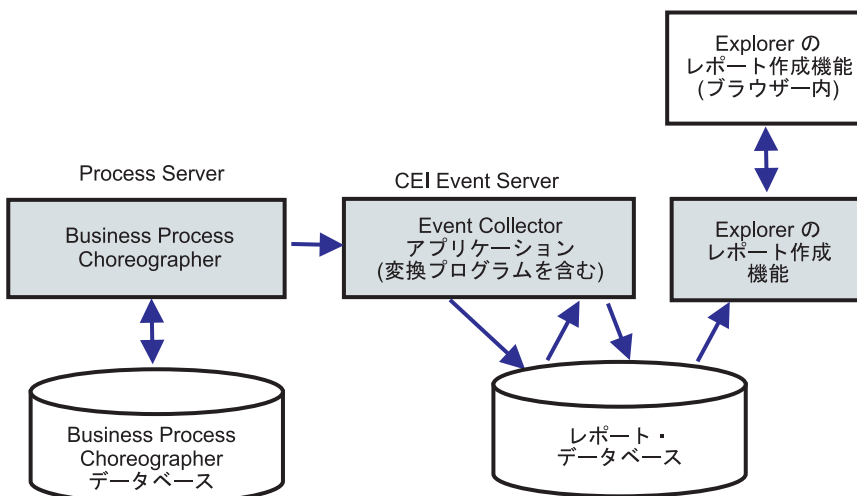


図10. 実動パフォーマンスを考慮した Business Process Choreographer Explorer レポート作成のセットアップ

Business Process Choreographer Explorer レポート作成機能用に別個のデータベースを使用する場合、クラスター構成のセットアップにおいて Business Process Choreographer Explorer レポート作成機能を既存の Business Process Choreographer 構成に追加する場合、あるいは、より複雑なデータベース・オプションを使用する場合は、Business Process Choreographer Explorer レポート作成機能および Event Collector の構成を実行します。

Network Deployment 環境

Business Process Choreographer Explorer レポート作成機能を Network Deployment 環境で構成する場合は、以下の制約事項が適用されます。

- CEI は、使用するセル内で構成する必要があります。
- 前の図に示すとおり、Business Process Choreographer の Event Collector は、CEI イベント・サーバーが構成されているデプロイメント・ターゲットに構成する必要があります。CEI イベント・サーバーを Business Process Choreographer とは別のクラスターに構成する場合は、CEI イベント・サーバーが構成されているデプロイメント・ターゲットに Business Process Choreographer の Event Collector を構成する必要があります。Business Process Choreographer Explorer レポート作成機能アプリケーションを Event Collector と同じシステム上にデプロイする必要はありません。

BPPEL Process アーカイブの概要

Business Process Archive Manager を構成すると、スクリプトを使用して、完了済みのプロセス・インスタンスおよびヒューマン・タスクを Business Process Choreographer データベースからアーカイブ・データベースに移動することができます。

定期的にアーカイブを実行することにより、ランタイム・データベースが古いオブジェクトでいっぱいになってデータベースのパフォーマンスが徐々に低下するのを防ぐことができます。アーカイブ・データベースに移動されたプロセスおよびタスクには、Business Process Archive Explorer または Business Process Archive Manager API を使用してアクセスすることができます。データをアーカイブ・データベースからランタイム・データベースに戻すことはできないので、このアーカイブ機能を使用しても、バックアップ保護を実現することはできません。

アーキテクチャー

ビジネス・プロセス・アーカイブ機能は以下の要素から構成されています。

- Business Process Archive Manager
- Business Process Archive データベース
- archive.py スクリプト
- Business Process Archive Explorer
- Business Process Archive Manager EJB API

Business Process Archive Manager

Business Process Archive Manager は、使用前に構成しておく必要があります。以下の条件が適用されます。

- Business Process Archive Manager は、Network Deployment 環境で構成しなければならず、サービス・コンポーネント・アーキテクチャー (SCA) およびメッセージング・サービスが必要です。
- Business Process Choreographer 構成では、同じセル内にある Business Process Archive Manager 構成のみを使用することができます。
- 1 つの Business Process Archive Manager 構成でデータをアーカイブできる Business Process Choreographer 構成は 1 つだけです。
- それぞれの Business Process Archive Manager 構成に専用の Business Process Archive データベースが必要です。
- 1 つのデプロイメント・ターゲットで配置できるのは、Business Process Archive Manager と Business Process Choreographer のどちらか 1 つの構成のみです。

- BPEL Process またはヒューマン・タスクを含んでいるアプリケーションは、Business Process Archive Manager が構成されているデプロイメント・ターゲットにはデプロイできません。
- それぞれの Business Process Choreographer 構成に対して、1 つまたは複数の Business Process Archive Manager 構成を使用することができます。

最小構成

1 つの Business Process Choreographer 構成に対して Business Process Archive Manager 構成を 1 つ使用する場合は、以下の図のようになります。ランタイム・データベースが完了済みインスタンスでいっぱいになることが原因で発生するデータベース・パフォーマンスの問題を防ぐ場合は、このようなセットアップで十分です。どちらの構成も同じセル内になければなりません。

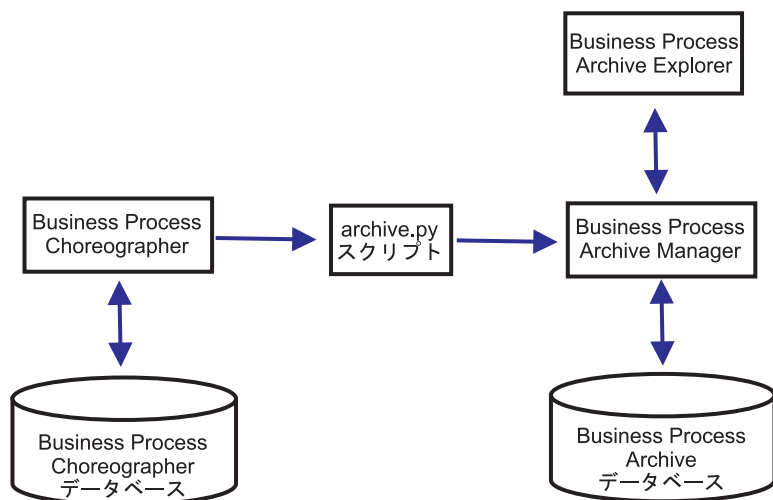


図 11. Business Process Choreographer で Business Process Archive を 1 つ使用する場合

複数の構成

複数の Business Process Archive を使用して Business Process Choreographer 構成からのインスタンスをアーカイブすることも可能です。

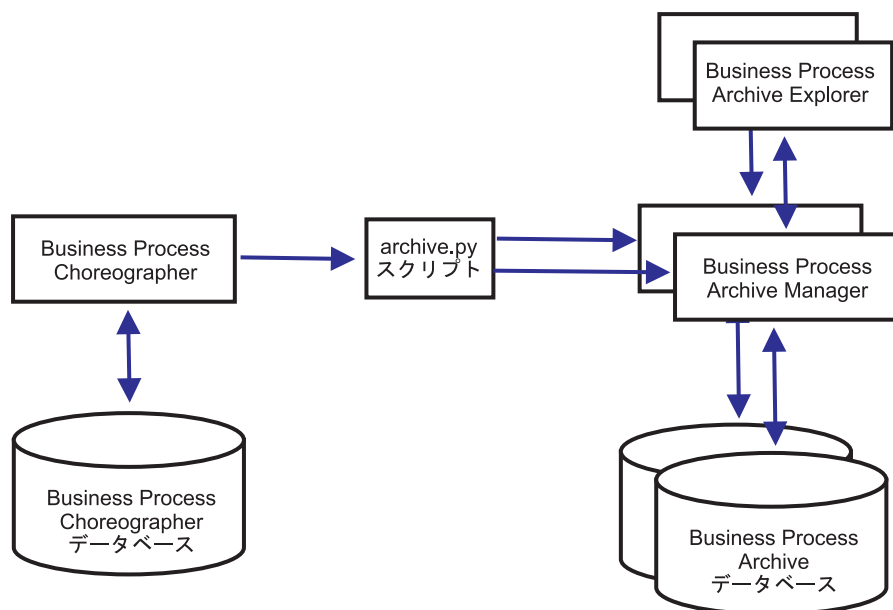


図 12. Business Process Choreographer で Business Process Archive を 2 つ使用する場合

例えば、異なる部署で別々の BPEL Process を扱う場合、部署ごとにアーカイブを用意し、それぞれの部署のビジネス・プロセスの完了済みインスタンスを専用のアーカイブに移動して、一方の部署のメンバーがもう一方の部署のアーカイブ済みプロセス・インスタンスにアクセスできないようにすることは合理的です。

注: 複数の Business Process Archive を使用してもアーカイブ操作のパフォーマンスは改善されません。

Business Process Archive データベース

それぞれの Business Process Archive Manager に専用のデータベースが必要です。データベースのタイプおよび構造は、Business Process Choreographer データベースで使用されているものと同じでなければなりません。アーカイブ・データベースのデフォルト名は BPARCDB です。

archive.py 管理スクリプト

WebSphere システム管理者は、このスクリプトを実行して、データを 1 つの Business Process Choreographer 構成のランタイム・データベースから 1 つの Business Process Archive Manager 構成のアーカイブ・データベースにアーカイブすることができます。さまざまなパラメーターを指定して、アーカイブ対象のインスタンス、アーカイブ対象インスタンスの合計数、およびデータベース・トランザクションごとのアーカイブ対象インスタンス数を制御することができます。ソースと宛先を指定するときには、それぞれのデプロイメント・サーバーまたはデプロイメント・クラスターを指定します。このスクリプトについて詳しくは、完了済みの BPEL Process インスタンスおよびタスク・インスタンスのアーカイブを参照してください。

制約事項: 以下の制限が適用されます。

- オブジェクトをアーカイブ・データベースから Business Process Choreographer データベースに戻すことはできません。また、他のアーカイブに転送することもできません。
- インスタンスを新規アーカイブ・データベースに初めてアーカイブすると、Business Process Choreographer 構成の ID がデータベースに書き込まれます。それ以降は、その構成からのインスタンスのみを、アーカイブ・データベースにアーカイブできます。
- インスタンスは、アーカイブに正常に移動された場合には、Business Process Choreographer データベースから削除されます。したがって、Common Event Infrastructure (CEI) および監査ログの

削除イベントが発生します。ただし、削除イベントがアーカイブ・アクションによって発生したもののか、その他の何らかの削除アクション (クリーンアップ・サービス、ユーザーによって開始された削除アクション、削除スクリプト、またはアーカイブの正常完了後の自動削除など) によって発生したのを見分けることはできません。

- 同時に別々のアーカイブへアーカイブすることはできません。archive.py スクリプトが同時に呼び出された場合、スクリプトは順次実行されます。
- アーカイブ・データベース内の他のプロセス・インスタンスとプロセス名が同じプロセス・インスタンスをアーカイブすることはできません。
- アーカイブ・データベース内の他のプロセス・インスタンスと相関セットの値が同じプロセス・インスタンスをアーカイブすることはできません。
- プロセス・テンプレートのインスタンスをアーカイブした後に同一のプロセス・テンプレートを有効期間開始日を変更せずにアンデプロイしてから再デプロイすると、そのプロセス・テンプレートの新規インスタンスを同じアーカイブ・データベースにアーカイブできなくなります。これは、異なる有効期間開始日が使用されるというような、プロセス・テンプレートのバージョン管理に関する一般的な問題ではありません。

ただし、上記のいずれかの制限事項のために特定のプロセス・インスタンスをあるアーカイブ・データベースにアーカイブできなくても、制限条件に該当しない別のアーカイブ・データベースにそれらのプロセス・インスタンスをアーカイブすることができます。

Business Process Archive Manager の EJB API のサポート

Business Process Archive Manager 構成に対しても利用できるのは、Business Flow Manager EJB API および Human Task Manager EJB API を使用して実行できるアクションのサブセットのみです。関連付けられているアーカイブ・データベース内のプロセス・インスタンスおよびヒューマン・タスクの読み取り操作および削除操作を実行することができます。その他の API は、Business Process Archive Manager ではサポートされていません。

新しいメソッド **OperationMode getOperationMode()** が用意されており、クライアントが Business Process Choreographer 構成と Business Process Archive Manager 構成のどちらに接続されるかを指定することができます。このメソッドを使用して、ランタイム構成およびアーカイブ構成に接続してそれらの構成にふさわしい動作をするカスタム・クライアントを作成することができます。

Business Process Archive Manager API について詳しくは、com.ibm.bpe.api パッケージおよび com.ibm.task.api パッケージの JavaDoc を参照してください。

Business Process Archive Explorer

Business Process Archive Explorer は、Business Process Choreographer Explorer と非常によく似ていますが、Business Process Archive Manager 構成に関連付けられているアーカイブ・データベースに接続するという点が異なります。Business Process Choreographer Explorer と同様に、Business Process Archive Explorer を使用するには事前に構成する必要があります。Business Process Choreographer Explorer インスタンスのレポート作成機能を構成した場合、Business Process Archive Explorer インスタンスで同じレポート・データベースを使用することができます。

Business Process Archive Explorer を構成する方法として、以下の 2 つがあります。

- bpeconfig.jacl スクリプトを実行して Business Process Archive Manager 構成を作成する場合は、同じデプロイメント・ターゲット上に Business Process Archive Explorer インスタンスも構成するという選択肢があります。
- Business Process Archive Explorer インスタンスのみを構成する場合は、clientconfig.jacl スクリプトを対話式で実行するか、または、**-operationMode ARCHIVE** オプションを使用してバッチ・モードで実行することができます。

与えられた許可によっては、Business Process Archive Explorer を使用してインスタンスを表示することや、場合によってはインスタンスを削除することもできます。インスタンスの更新、または新規インスタンスの作成はできません。

許可 Business Process Archive Manager EJB API または Business Process Archive Explorer を使用して実行できるアクションは、以下のように、Java Platform, Enterprise Edition (Java EE) のロールによって異なります。

- Business Process Archive Manager システム・モニター・ロールに属しているユーザーは、アーカイブ・データベース内のすべてのプロセス・インスタンスおよびすべてのタスク・インスタンスの読み取りおよび表示が可能です。
- Business Process Archive Manager システム管理者ロールに属しているユーザーは、さらに、アーカイブ・データベース内の任意の最上位プロセス・インスタンスおよび最上位タスク・インスタンスを削除することもできます。
- システム・モニター・ロールとシステム管理者ロールのどちらにも属していないユーザーは、自身で作成または開始したインスタンスのみを表示することができます。ただし、それらのインスタンスの詳細を表示することはできません。
- いかなるユーザーも (システム管理者ロールに属しているユーザーでも)、アーカイブ・データベース内のインスタンスに関連付けられているデータを変更することはできません。
- インスタンス・ベースの許可に関する情報 (潜在的所有者やリーダーに関する情報など) をアーカイブすることはできません。したがって、そのようなデータはアーカイブに存在しません。この場合の唯一の例外は、プロセスおよびタスクの開始者ならびに作成者に関する情報です。
- ユーザーは、Business Process Archive Explorer を使用するには、**WebClientUser** ロールに属していなければなりません。

アーカイブされるデータ

アーカイブ・データベースに移動できるのは、いずれかの終了状態 (「終了」、「強制終了」、「失敗」、または「期限切れ」) に達した最上位プロセス・インスタンスおよび最上位スタンドアロン・ヒューマン・タスク・インスタンスのみです。最上位インスタンスをアーカイブすると、特定のデータも一緒にアーカイブに移動され、その他のデータは削除されます。

完了済みの最上位プロセス・インスタンス (ビジネス・ステート・マシン・インスタンスなど) の場合:

- アクティビティ、変数、インライン・ヒューマン・タスク、入力メッセージ、出力メッセージなどのインスタンス・データは移動されます。
- 子プロセスおよび関連データは再帰的に移動されます。
- プロセス・テンプレートやタスク・テンプレートなどの関連メタデータがアーカイブ・データベース内にまだ存在していない場合は、それらのコピーが作成されます。
- 照会テーブルおよび保管照会文は、アーカイブ・データベースに移動することも、コピーされることもありません。
- アーカイブされるインスタンスに関連付けられている作業項目はアーカイブされずに削除されます。

完了済みの最上位スタンドアロン・ヒューマン・タスクの場合:

- 入力メッセージや出力メッセージなどのインスタンス・データは移動されます。
- エスカレーション・インスタンスは移動されます。
- 子タスクは、後続タスクを含めて移動されます。

- タスク・テンプレートなどの関連メタデータがアーカイブ・データベース内にまだ存在していない場合は、それらのコピーが作成されます。
- アーカイブされるインスタンスに関連付けられている作業項目はアーカイブされずに削除されません。

メタデータ

プロセス・テンプレート情報やタスク・テンプレート情報など、その他のメタデータは、アーカイブされたデータが正しく解釈および表示されるようにするため、必要に応じてアーカイブにコピーされます。アーカイブ・データベース内のメタデータは、不要になった時点、つまり、そのメタデータを参照する最後のプロセス・インスタンスまたはヒューマン・タスクが削除された時点で、削除されます。

アーカイブされないデータ

その他の Business Process Choreographer データ (構成データ、XSD 成果物および WSDL 成果物、SCA モジュール、アプリケーション、ワーク・バスケット、ビジネス・カテゴリー、ビジネス・ルール、メッセージ、監査証跡データ、レポート・データベース内のデータなど) は、アーカイブに移動できません。

ビジネス・プロセス・アーカイブの構成の概要

ビジネス・プロセス・アーカイブを構成する場合は、以下の手順を実行するための計画を立てる必要があります。

1. 157 ページの『Business Process Archive の計画』を実行します。
2. 以下の前提条件がすべて満たされていることを確認します。
 - アーカイブの接続先の Business Process Choreographer 構成が既に稼働していること。
 - ビジネス・プロセス・アーカイブのデプロイメント・ターゲットが既に存在しており、そこに Business Process Choreographer 構成または Business Process Archive Manager 構成が存在していないこと。

重要: このデプロイメント・ターゲット上の Service Component Architecture (SCA) は、「バス・メンバー・ロケーション」、「データベース・インスタンス」、および「スキーマ」について、関連付けられる Business Process Choreographer 構成のデプロイメント・ターゲット上の SCA 構成と同じ値を使用するように構成する必要があります。そのようにすることで、既存のメッセージング・インフラストラクチャーを共有できるようになります。

3. bpeconfig.jacl スクリプトを実行します。

Business Process Archive Manager 構成を作成するときに使用できるのは bpeconfig.jacl スクリプトのみです。また、このスクリプトを使用して、同じデプロイメント・ターゲット上に最初の Business Process Archive Explorer 構成を作成することもできます。追加の Business Process Archive Explorer 構成が (同じデプロイメント・ターゲット上または別のデプロイメント・ターゲット上に) 必要な場合は、clientconfig.jacl スクリプトを使用する必要があります。

4. Business Process Archive データベースがまだ存在していない場合は、Business Process Archive Manager を始動する前にそれを作成する必要があります。
5. Business Process Archive Manager を構成するサーバーまたはクラスターを再始動します。
6. 以下のようにして、アーカイブ機能が動作することを確認します。
 - Business Process Choreographer Explorer が構成済みである場合は、それを使用して、アーカイブ・データベースに移動する終了状態の BPEL Process インスタンスまたはヒューマン・タスク・インスタンスを見つけます。

- archive.py スクリプトを実行して、完了済みの BPEL Process インスタンスまたはヒューマン・タスク・インスタンスをアーカイブに移動します。
- ブラウザーで Business Process Archive Explorer の URL に移動して、インスタンスがアーカイブ内にあることを確認します。

共有作業項目

共有作業項目の使用は、データベース照会のパフォーマンスを改善し、データベース入出力を削減するための最適化の手段です。新しい Business Process Choreographer 構成を作成すると、その構成は自動的に共有作業項目を使用します。Business Process Choreographer 構成をマイグレーションすると、共有作業項目の使用はオプションとなります。

共有作業項目とは

Business Process Choreographer データベースには、ヒューマン・タスク・インスタンスと、そのインスタンスでアクションの実行を許可されたすべてのユーザーとの組み合わせごとに、作業項目が作成されます。ヒューマン・タスク・インスタンスの数とユーザーの数が大幅に増えると、データベース内の作業項目の数が増大して、データベースのパフォーマンスに影響を及ぼす可能性があります。

共有作業項目の背後にある概念は、作業項目に関する情報が重複してデータベースに保管されないように、作業項目の実装を最適化することです。これにより、BPEL Process およびヒューマン・タスクに対する照会の多くのパフォーマンスを改善できます。共有作業項目が使用されているかどうかを、Business Process Choreographer API のユーザーが意識することはありません。

共有作業項目に対するサポートを追加するかどうかを決定する方法

共有作業項目に対するサポートがアクティブにならないのは、バージョン 7.0.0.2 以前の Business Process Choreographer 構成をマイグレーションした場合のみです。アクティブにするかどうかはオプションですが、共有作業項目を使用することによってパフォーマンスが改善されることを示す、一定の要因があります。

- システム内に数百または数千のヒューマン・タスク・インスタンスしかない場合、共有作業項目を使用するようにマイグレーションしても、パフォーマンスの改善はおそらくほとんど、あるいはまったく見込まれません。
- システム内に何十万ものヒューマン・タスク・インスタンスがあり、タスク・リストおよびプロセス・リストの照会にあまりにも時間がかかる場合には、共有作業項目を使用するようにマイグレーションすると、パフォーマンスが改善されると考えられます。
- 共有作業項目を使用することで、以下の照会のパフォーマンスが改善される場合があります。
 - query()
 - queryAll()
 - queryEntities()
 - queryEntityCount()
 - queryRows()
 - queryRowCount()

制約事項

一部の照会は、非共有作業項目を使用した場合にのみ解決できます。つまり、共有作業項目のサポートを有効にしても、以下のタイプの照会のパフォーマンスは改善されません。

- WORK_ITEM ビューに対して排他的に実行される照会

- WORK_ITEM ビューで、以下の列の 1 つ以上を参照する照会
 - ASSOC_OBJECT_TYPE
 - ASSOC_OID
 - OBJECT_ID
 - CREATION_TIME
 - OBJECT_TYPE
- WORK_ITEM ビューに直接結合されるカスタム・テーブルを参照する照会
- 実体化ビューとして作成された照会
- 継承した作業項目について許可を使用する照会

トポロジー、セットアップ、および構成パスの計画

選択するトポロジーとセットアップによって、使用できる Business Process Choreographer 構成パスが決まります。

構成パスごとに、複雑さ、柔軟性、および各種トポロジーとデータベースのサポートが異なります。

1. Business Process Choreographer 構成を作成するためには、いくつかの異なる構成パスから選択する必要があります。
 - 『基本サンプル』には次の項目のみが含まれています。
 - Business Process Choreographer ランタイム構成
 - Business Process Choreographer Explorer (レポート作成機能付き)。
 - レポート作成機能のための Business Process Choreographer Event Collector。
 - 『組織付きサンプル』には、次の項目も含まれています。
 - サンプル組織の 15 人のユーザーを使用して事前に構成されている担当者ディレクトリー。
 - 担当者の代替およびグループ作業項目が使用可能になっています。
 - 『実動デプロイメント環境』
 - 『柔軟なカスタム構成』

ほとんどの構成パスでは、構成ツールを選択できます。

注: 追加の 『Business Process Archive』 構成パスでは、Business Process Archive Manager のみが構成されます。

2. Business Process Choreographer の構成にはさまざまな構成ツールを使用できる点に注意してください。

インストーラー

インストーラーでは、非実動システムを簡単に作成することができます。

- 標準的なインストールと、共通データベースとして DB2 を使用する組み合わせは、『基本サンプル』 Business Process Choreographer 構成にするための 1 つの方法です。
- カスタム・インストールと、共通データベースとして DB2 Express を使用する組み合わせは、『組織付きサンプル』 Business Process Choreographer 構成にするための唯一の方法です。

プロファイル管理ツール

プロファイル管理ツールでは、『基本サンプル』 Business Process Choreographer 構成の非実動システムを 2 つの方法で作成できます。

- 共通データベースとして DB2 を使用する場合は、Process Server または Process Center の標準的なプロファイルを作成すれば、『基本サンプル』 Business Process Choreographer 構成が組み込まれます。
- 拡張プロファイルを作成し、Business Process Choreographer オプションを選択すると、『基本サンプル』 Business Process Choreographer 構成が組み込まれます。この場合は、サポートされているすべてのデータベースを使用できます。

管理コンソールのデプロイメント環境ウィザード

このウィザードを使用して、デプロイメント環境パターンに基づいて『実動デプロイメント環境』の Business Process Choreographer 構成を作成できます。

管理コンソールの「Business Process Choreographer の構成」ページ

管理コンソールのこのページでは、サーバーまたはクラスター上の『柔軟なカスタム構成』の Business Process Choreographer 実動システムを構成できます。多数の構成パラメーターを設定できます。これには、詳細な計画が必要です。このページでは、Business Process Choreographer Explorer は構成されません。これは、管理コンソール内の独自の構成ページを使用するか、スクリプトを実行することによって構成できます。この構成パスは、実動システムの構築に最も適しています。

bpeconfig.jacl 構成スクリプト

このスクリプトを使用して、特定のサーバーまたはクラスター上で、『柔軟なカスタム構成』の Business Process Choreographer 実動システムと必要なすべてのリソースを構成できます。このスクリプトは対話式に実行できます。また、必要なパラメーターをすべて指定する場合は、バッチ・モードで実行して繰り返し可能な自動化を実現できます。ローカル・データベースおよび必要なメッセージング・リソースを作成することができます。また、オプションで Business Process Choreographer Explorer を構成することもできます。ここには、Business Process Choreographer Explorer レポート作成機能が組み込まれます。データベース・システムによっては、リモート・データベースも作成できます。この構成パスは、実動システムの構築に最も適しています。

また、このスクリプトを使用して、Business Process Archive Manager を構成することもできます。ただし、その場合、Business Process Choreographer が構成されているのと同じデプロイメント・ターゲットに構成することはできません。

clientconfig.jacl 構成スクリプト

このスクリプトを使用して、以下のいずれかを構成することができます。

- Business Process Choreographer Explorer (オプションでレポート作成機能)。
 - Business Process Archive Explorer (オプションでレポート作成機能)。
- 一部の構成パスには、実動システムへの適合を限定する制約事項があります。例えば、次のようになります。
 - 共通 CMNDB データベースを使用する Business Process Choreographer 構成を作成する場合、この構成はハイパフォーマンス・システムには適していません。
 - 1 つのサンプル構成を試験的に使用した後で、同じプロファイルを使用して実動システムに適した新規構成を作成するには、最初にこのサンプル構成を削除する必要があります。サンプル構成を保持する場合は、実動セットアップ用に 1 つ以上の別個のプロファイルを作成する必要があります。
 - バージョン 6.1.2 までの Business Process Choreographer Observer を使用していた場合は、この機能が今では Business Process Choreographer Explorer に統合されていることに注意してください。これは今では Business Process Choreographer Explorer レポート作成機能と呼ばれ、Business Process Choreographer Explorer クライアントの「レポート」タブを使用してアクセスできます。レポート作成機能が使用する URL は、Business Process Choreographer Explorer の URL と同じです。

管理コンソールで Business Process Choreographer Explorer を構成する場合や、bpeconfig.jacl 構成スクリプトまたは clientconfig.jacl 構成スクリプトを使用する場合は、Business Process Choreographer Explorer レポート作成機能を構成することもできます。

既存の Business Process Choreographer 構成をマイグレーションしても、Business Process Choreographer Observer の構成はマイグレーションされません。Business Process Choreographer Explorer レポート作成機能を使用するには、マイグレーション後の Business Process Choreographer Explorer レポート作成機能の使用可能化の説明に従って、この機能を使用可能にする必要があります。

5. 使用する構成パスを決定する上での主な基準を確認します。 次の表で、選択できる構成パスと制約を確認してください。

表 51. 構成パスの選択基準

選択項目		制約事項		適切な構成パス	
実動システムを計画しているか	デプロイメント・ターゲットの形態	Business Process Choreographer 構成のタイプ	別のデータベースを使用できるか	メッセージング・エンジンでサポートされているメッセージ・ストア	構成パス名および使用可能な構成ツール
いいえ	スタンドアロン・サーバー	基本サンプル (サンプル組織なし)	はい。BPEDB データベースはサポートされている任意のデータベースです。	共用 DB2 CMNDB データベースのみ	『基本サンプル』。プロファイル管理ツールを使用して Process Server または Process Center の拡張プロファイルを作成し、Business Process Choreographer オプションを選択します。
			いいえ。BPEDB データベースは、共通データベース CMNDB 内に (スキーマ名 BPEDB を使用して) 作成されます。CMNDB は DB2 のみ使用可能です。		『基本サンプル』。プロファイル管理ツールを使用して Process Server または Process Center の標準プロファイルを作成します。
			15 名の担当者で構成される組織を含むサンプル (担当者の代替が使用可能)。		いいえ。BPEDB データベースは、共通データベース CMNDB 内に (スキーマ名 BPEDB を使用して) 作成されます。CMNDB は DB2 Express のみ使用可能です。

表 51. 構成パスの選択基準 (続き)

選択項目		制約事項		適切な構成パス	
実動システムを計画しているか	デプロイメント・ターゲットの形態	Business Process Choreographer 構成のタイプ	別のデータベースを使用できるか	メッセージング・エンジンでサポートされているメッセージ・ストア	構成パス名および使用可能な構成ツール
はい	クラスター	選択できるデプロイメント環境パターン: ・ 単一クラスター ・ リモート・メッセージング ・ リモート・メッセージング、リモート・サポート、および Web ・ リモート・メッセージングおよびリモート・サポート	はい。BPEDB データベースはサポートされている任意のデータベースです。	サポートされている任意のデータベース。	『 実動デプロイメント環境 』。管理コンソールを使用。
		柔軟なカスタム構成			『 柔軟なカスタム構成 』。次のいずれかを使用。 ・ bpeconfig.jacl スクリプト ・ 管理コンソールの「Business Process Choreographer の構成」ページ
はい	スタンドアロン・サーバー	柔軟なカスタム構成			
はい	Business Process Choreographer が構成されていない任意の Network Deployment サーバーまたはクラスター	Business Process Archive	BPARCDB アーカイブ・データベースは BPEDB データベースとは別にする必要があります。 Business Process Choreographer 構成で使われるのと同じデータベース・タイプでなければなりません。	専用のメッセージング・エンジンがありません。Business Process Choreographer 構成と同じメッセージング・エンジンを使用します。	『 Business Process Archive 』。以下を使用。 ・ bpeconfig.jacl スクリプト (Business Process Archive Manager を構成する)

注: 実動システムに適していない構成を作成するときに、実動システムの作成向けに推奨されている構成パスを使用することもできます。次のオプションを検討します。

- a. 実動システムを構成するかどうかを決定します。一般に実動システムでは、ハイパフォーマンス、スケーラビリティ、およびセキュリティが必要です。Business Process Choreographer の場合、実動システムに専用の BPEDB データベースが必要です。
- b. Business Process Choreographer のデプロイメント・ターゲットとして、スタンドアロン・サーバーとクラスターのいずれを使用するかを決定します。
- c. 実動システムを構築しない場合は、スタンドアロン・サーバーのサンプル構成が要件に対応するかどうかを確認します。対応する場合は、担当者割り当てと担当者の代替を使用可能にするためにサンプル担当者ディレクトリー (サンプル組織が取り込まれています) をサンプルに組み込むかどうかを決定します。

注: サンプル担当者ディレクトリーでは、フェデレーテッド・リポジトリー用に構成されたデフォルトのファイル・レジストリーが使用され、すべてのサンプル担当者のパスワードが「wid」に設定されています。WebSphere 管理ユーザー ID も、プロファイル作成時に指定されたパスワードを使用してこのディレクトリーに追加されます。サンプル構成が作成された後、管理コンソールを使用して「**ユーザーおよびグループ**」をクリックしてから「**ユーザーの管理**」または「**グループの管理**」をクリックすることで、使用可能なユーザーおよびグループを表示させることができます。

- d. クラスターで Business Process Choreographer を構成する場合は、パフォーマンスの要件に基づいて、メッセージング・エンジンとサポート・アプリケーション (Business Process Choreographer Explorer、Common Event Infrastructure など) に専用のクラスターを設定するか、それともクラスターを共有するかを決定します。標準のデプロイメント環境パターンは以下のとおりです。

単一クラスター

単一クラスター・パターンは最も単純なパターンです。このパターンは、メッセージング・インフラストラクチャーとサポート・アプリケーションが含まれた 1 つのアプリケーション・デプロイメント・ターゲット・クラスターを定義します。

リモート・メッセージング

リモート・メッセージング・パターンでは、アプリケーション・デプロイメント用のクラスターが 1 つと、メッセージング・インフラストラクチャー用のリモート・クラスター 1 つが定義されます。サポート・アプリケーションが、アプリケーション・デプロイメント・ターゲット・クラスター上に構成されます。

リモート・メッセージング、リモート・サポート、および Web

リモート・メッセージング、リモート・サポート、および Web のパターンは、アプリケーション・デプロイメント用に 1 つのクラスター、メッセージング・インフラストラクチャー用に 1 つのリモート・クラスター、サポート・アプリケーション用に 1 つのリモート・クラスター、Business Space および REST サービス関連の Web アプリケーション用に 1 つのクラスターを定義します。

リモート・メッセージングおよびリモート・サポート

リモート・メッセージングおよびリモート・サポートのパターンは、アプリケーション・デプロイメント用に 1 つのクラスター、メッセージング・インフラストラクチャー用に 1 つのリモート・クラスター、サポート・アプリケーション用に 1 つのリモート・クラスターを定義します。

- e. 実動システムでは、Business Process Choreographer に専用 BPEDB データベースを使用することを計画します。
- f. Business Process Choreographer は、SCA が使用するメッセージ・ストアと同じデータベースを使用します。Business Process Choreographer では同じデータベース内でそれ独自のスキーマを使用します。

6. Business Process Choreographer Explorer レポート作成機能 (Business Process Choreographer Explorer に統合) を使用する場合は、Business Process Choreographer Explorer 構成を作成した後でこれを構成する必要があります。また、Business Process Choreographer Explorer レポート作成機能が BPEDB データベースを使用するか、あるいは専用の OBSRVADB データベースを使用するかどうかを決定します。Business Process Choreographer Explorer レポート作成機能のコンポーネントのトポロジーについても計画します。詳細な計画を実行するには、154 ページの『Business Process Choreographer Explorer レポート作成機能の計画 (非推奨)』を実行します。
7. Business Process Archive Manager を使用して完了済みのプロセス・インスタンスおよびヒューマン・タスクを BPEDB データベースからアーカイブ・データベースに移動する場合は、Business Process Choreographer が構成されていないデプロイメント・ターゲットで Business Process Archive Manager を構成する必要があります。詳細な計画を実行するには、157 ページの『Business Process Archive の計画』を実行します。
8. WebSphere Portal Server またはカスタムの IBM Business Process Manager Advanced クライアントから Business Process Choreographer にアクセスする場合は、162 ページの『リモート・クライアント・アプリケーションの計画』を実行します。
9. アプリケーション・セキュリティーを有効にしている、リモート EJB メソッドを呼び出す長期実行のプロセスがある場合、Common Secure Interoperability Version 2 (CSIv2) のインバウンド認証を構成するときに CSIv2 の ID アサーションを有効にする必要があります。
10. ヒューマン・タスクを使用する場合は、WebSphere 管理セキュリティーとアプリケーション・セキュリティーの両方を有効にする必要があります。

これでトポロジーの計画が完了し、使用する構成パスと構成ツールが決定しました。

関連概念:

111 ページの『BPEL Process アーカイブの概要』

Business Process Archive Manager を構成すると、スクリプトを使用して、完了済みのプロセス・インスタンスおよびヒューマン・タスクを Business Process Choreographer データベースからアーカイブ・データベースに移動することができます。

関連タスク:

162 ページの『リモート・クライアント・アプリケーションの計画』

Business Process Choreographer API を使用し、Process Server クライアント・インストールで稼働するリモート Business Process Choreographer クライアント・アプリケーションを計画します。

基本サンプル Business Process Choreographer 構成の作成の計画

この基本サンプル構成はスタンドアロン・サーバーを対象としており、サンプル組織は含まれていません。

118 ページの『トポロジー、セットアップ、および構成パスの計画』を実行し、実動システムには適していない『基本サンプル』にすることを決めている。

1. 『基本サンプル』 Business Process Choreographer 構成にするのに使用するツールとオプションを確認します。

インストーラーの使用:

Process Server または Process Center の標準的なインストールを実行すると、DB2 データベースを使用するよう選択した場合には、『基本サンプル』 Business Process Choreographer 構成のみが構成されます。

プロファイル管理ツールの使用:

標準的なプロファイル作成

『基本サンプル』 Business Process Choreographer 構成は、DB2 データベースを使用するよう選択する場合にのみ構成されます。

拡張プロファイル作成

『基本サンプル』 Business Process Choreographer 構成にするには、Business Process Choreographer オプションを選択する必要があります。この構成では、サポートされているすべてのデータベースを使用できます。

- Human Task Manager でエスカレーションの通知を E メールで送信できるようにするには、以下を計画します。
 - 使用可能なローカル Simple Mail Transfer Protocol (SMTP) メール・サーバーがない場合は、後で適切なメール・サーバーを指し示すようにメール・セッションを変更することを計画します。
 - Eメールの送信者アドレスの変更を計画します。変更しない場合は、ダミー送信者アドレスが使用されます。
- このサンプル構成では、各種 Business Process Choreographer ユーザー ID として WebSphere 管理者ユーザー ID とパスワードが使用される点に注意してください。

基本サンプル Business Process Choreographer 構成の作成の計画が完了しました。

サンプル組織を含むサンプル Business Process Choreographer 構成の作成の計画

このサンプルには、15名の担当員からなるサンプル組織が含まれており、スタンドアロン・サーバーで担当者の割り当てと代替を試験的に使用する場合に適しています。

118ページの『トポロジー、セットアップ、および構成パスの計画』を実行し、『組織付きサンプル』構成にすることを決めている。

このサンプル Business Process Choreographer 構成に必要な計画は最小限の計画です。

- インストーラーを使用し、**スタンドアロン開発 IBM Business Process Manager Advanced - Process Server (qbpmaps)** オプションを使用したカスタム・インストールの実行を計画してください。サンプル構成では DB2 Express を使用します。
- Human Task Manager でエスカレーションの通知を E メールで送信できるようにするには、以下を計画します。
 - 使用可能なローカル Simple Mail Transfer Protocol (SMTP) メール・サーバーがない場合は、後で適切なメール・サーバーを指し示すようにメール・セッションを変更することを計画します。
 - Eメールの送信者アドレスの変更を計画します。変更しない場合は、ダミー送信者アドレスが使用されます。
- このサンプル構成では、各種 Business Process Choreographer ユーザー ID として WebSphere 管理者ユーザー ID とパスワードが使用される点に注意してください。

サンプル組織を含むサンプル Business Process Choreographer 構成の作成の計画が完了しました。

管理コンソールのデプロイメント環境ウィザードを使用するための計画

実動システムの場合は、Business Process Choreographer のすべての構成パラメーター (個別のデータベースを含む) を計画します。非実動システムの場合は、共用データベースを使用できます。

118 ページの『トポロジー、セットアップ、および構成パスの計画』を行い、『実動デプロイメント環境』構成パスを選択している。

デプロイメント環境ウィザードを使用するときには、デプロイメント環境パターンを選択する必要があります。パターンの選択後に、WBI_BPC コンポーネントのデフォルトのデータベース・パラメーターと認証別名を変更し、Business Process Choreographer の他のパラメーターを入力できます。

1. 構成全体を作成するための十分な情報または権限がない場合は、システムの他の部分に対する責任を持つ担当者に相談して計画します。以下に例を示します。
 - 場合によっては、組織の LDAP サーバーに関する情報を要求する必要があります。また、このサーバーで認証が使用される場合には、ユーザー ID と許可が必要になります。
 - ユーザーにデータベースを作成する権限がない場合は、データベースの計画にデータベース管理者 (DBA) が参加する必要があります。DBA には、カスタマイズして実行するデータベース・スクリプトのコピーが必要です。
2. 129 ページの『セキュリティ、ユーザー ID、および許可の計画』を実行します。
3. 使用するデプロイメント環境パターンを決定します。
 - 単一クラスター
 - リモート・メッセージング
 - リモート・メッセージング、リモート・サポート、および Web
 - リモート・メッセージングおよびリモート・サポート
4. 以下の専用データベースを使用する場合:
 - Business Process Choreographer 用の BPEDB データベース。ウィザードの、コンポーネント WBI_BPC 用のテーブル行で変更できます。
 - Business Process Choreographer メッセージング・エンジン用の BPEME データベース。ウィザードの、コンポーネント WBI_BPC_ME 用のテーブル行で変更できます。

ウィザードのデータベース・ページで入力するために、各データベース用の次のパラメーターを計画します。

データベース名

データベースの名前。例えば、デフォルト値 CMNDB の代わりに BPEDB または BPEME。デフォルト値を指定すると、共通データベースが共有されます。デフォルト値は、低いパフォーマンスのセットアップの場合にのみ適しています。

スキーマ

各データベースで使用するスキーマ修飾子。

テーブルの作成

これを選択すると、データベースに最初にアクセスしたときにテーブルが自動的に作成されます。このオプションが機能するには、データベースが既に存在し、データ・ソースを作成するために指定したユーザー名が、データベース内でテーブルおよび索引を作成する権限を持つ必要があります。選択しない場合、テーブルは自動的に作成されず、スクリプトを実行してテーブルを手動で作成する必要があります。実動システムの場合、このオプションをクリアし、提供された SQL スクリプトを使用してデータベースをセットアップすることを計画します。

ユーザー名とパスワード

データベースへの接続とデータの変更を行う権限を持つユーザー ID。データベース内にテーブルと索引を作成する権限のあるユーザー ID の場合、テーブルを自動的に作成するオプションを使用できます。また、サービス・バックまたはフィックスバックを適用した後、必要に応じてデータベース・スキーマが自動的に更新されます。

サーバー

データベース・サーバーのアドレス。ホスト名または IP アドレスのいずれかを指定します。

プロバイダー

JDBC プロバイダー。

データベース固有の設定も計画します。これらの設定は、JDBC プロバイダーの「編集」ボタンを使用して設定できます。

表 52. データベース固有の設定

データベース / JDBC ドライバー・タイプ	データベース固有の設定
DB2 UDB - Universal ドライバー	<ul style="list-style-type: none">• ユーザー名• パスワード• データベース名• スキーマ名• サーバー名• サーバー・ポート番号• ドライバー・タイプ• 説明• テーブルの作成
DB2 for z/OS	<ul style="list-style-type: none">• 実装タイプ - 接続プール・データ・ソースまたは XA データ・ソース• ユーザー名• パスワード• データベース名• スキーマ名• サーバー名• サーバー・ポート番号• ストレージ・グループ• 説明
Microsoft SQL Server - Microsoft ドライバー	<ul style="list-style-type: none">• ユーザー名• パスワード• データベース名• サーバー名• サーバー・ポート番号• 説明• テーブルの作成

表 52. データベース固有の設定 (続き)

データベース / JDBC ドライバー・タイプ	データベース固有の設定
Oracle - thin ドライバー	<ul style="list-style-type: none"> • ユーザー名 • パスワード • データベース名 • スキーマ名 • サーバー名 • サーバー・ポート番号 • ドライバー・タイプ - thin • 説明 • テーブルの作成

データベースの計画について詳しくは、136 ページの『Business Process Choreographer のデータベースの計画』を参照してください。

5. セキュリティー・ステップで入力する Business Process Choreographer JMS 認証別名のユーザー名を計画します。
6. 「**Business Process Choreographer Explorer コンテキスト・ルート**」を計画します。これによって、ブラウザで Business Process Choreographer Explorer を開く場合に必要な URL の一部が定義されません。
7. Business Process Choreographer ステップのセキュリティー・パラメーターを計画します。以下に示すユーザー ID とグループは、Business Flow Manager と Human Task Manager に使用されます。

管理者ユーザーおよび管理者グループ

ビジネス管理者ロールがマップされるユーザー ID リストまたはグループのリスト (あるいはこの両方) を計画します。

モニター・ユーザーおよびモニター・グループ

ビジネス・モニター・ロールがマップされるユーザー ID リストまたはグループのリスト (あるいはこの両方) を計画します。

JMS API 認証ユーザーおよびパスワード

Business Flow Manager メッセージ駆動型 Bean の run-as ユーザー ID。

エスカレーション・ユーザーの認証ユーザーおよびパスワード

Human Task Manager メッセージ駆動型 Bean の run-as ユーザー ID。

クリーンアップ・ユーザー認証のユーザーとパスワード

Business Flow Manager と Human Task Manager のクリーンアップ・サービスの run-as ユーザー ID。そのユーザーは、ビジネス管理者ロールのメンバーでなければなりません。

8. Human Task Manager のエスカレーションのための E メール・セッションを構成する場合、Business Process Choreographer ステップ用に次のパラメーターを計画します。

メール・トランスポートのホスト

Simple Mail Transfer Protocol (SMTP) E メール・サービスが配置されている場所のホスト名または IP アドレス。

メール・トランスポート・ユーザーおよびメール・トランスポート・パスワード

メール・サーバーで認証が不要な場合は、これらのフィールドを空白のままにすることができます。

Business Process Choreographer Explorer の URL

この URL は、生成された E メール内でリンクを指定するために使用されます。これにより、E メール通知を受信したビジネス管理者は、リンクをクリックして、関連したビジネス・プロセスまたはヒューマン・タスクを Web ブラウザーで表示することができます。

9. Business Process Choreographer Explorer、Business Space、または Representational State Transfer (REST) API あるいは JAX Web サービス API を使用するクライアントを使用する場合は、REST API および JAX Web Services API のコンテキスト・ルートを決定してください。
 - Business Flow Manager のデフォルトは /rest/bpm/bfm および /BFMJAXWSAPI です。
 - Human Task Manager のデフォルトは /rest/bpm/htm および /HTMJAXWSAPI です。
 - サーバー、単一クラスター、または異なる Web サーバーにマップされた複数のクラスターに構成されている場合は、デフォルト値を使用できます。
 - Network Deployment 環境内で、同じ Web サーバーにマップされた複数のデプロイメント・ターゲットに構成されている場合は、デフォルト値を使用しないでください。各 Business Process Choreographer 構成のコンテキスト・ルートは、ホスト名とポートの組み合わせごとに固有のものでなければなりません。これらの値は、Business Process Choreographer の構成後に、管理コンソールを使用して手動で設定する必要があります。
10. 担当者割り当てを使用する場合は、150 ページの『担当者ディレクトリー・プロバイダーの計画』を行います。

これで管理コンソールのデプロイメント環境ウィザードを使用するための計画が完了しました。

Business Process Choreographer カスタム構成の計画

管理コンソールの「Business Process Choreographer の構成」ページまたは bpeconfig.jacl 構成スクリプトを使用してカスタム構成を作成するための構成パラメーターおよびオプションを計画します。

118 ページの『トポロジー、セットアップ、および構成パスの計画』を行い、『柔軟なカスタム構成』構成パスを選択している。

1. Business Process Choreographer を構成するときに次のどちらを使用するかを確認します。
 - 管理コンソールの「Business Process Choreographer の構成」ページ
 - bpeconfig.jacl 構成スクリプト
2. 構成全体を作成するための十分な情報または権限がない場合は、システムの他の部分に対する責任を持つ担当者に相談して計画します。以下に例を示します。
 - 場合によっては、組織の LDAP サーバーに関する情報を要求する必要があります。また、このサーバーで認証が使用される場合には、ユーザー ID と許可が必要になります。
 - ユーザーにデータベースを作成する権限がない場合は、データベースの計画にデータベース管理者 (DBA) が参加する必要があります。DBA には、カスタマイズして実行するデータベース・スクリプトのコピーが必要です。
3. 129 ページの『セキュリティ、ユーザー ID、および許可の計画』
4. 136 ページの『Business Process Choreographer のデータベースの計画』
5. 149 ページの『Business Flow Manager および Human Task Manager の計画』
6. 150 ページの『担当者ディレクトリー・プロバイダーの計画』
7. 153 ページの『Business Process Choreographer Explorer および Business Process Archive Explorer の計画』

8. 管理コンソールの「Business Process Choreographer の構成」ページを使用する場合は、構成ページで入力するすべての値について計画したことを確認してください。
9. `bpeconfig.jacl` 構成スクリプトを使用する場合:
 - a. コマンド行またはバッチ・ファイルに指定する必要があるすべてのオプションとパラメーター値の計画が完了していることを確認します。オプションとパラメーターの要約については `topics/t2co_bpeconfig.dita`、詳細については `bpeconfig.jacl` スクリプト・ファイルをそれぞれ参照してください。
 - b. 必要な場合は、応答ファイルにパラメーター値を指定できます。
 - c. バッチ・ファイルを使用して `bpeconfig.jacl` 構成スクリプトを実行する場合は、バッチ・ファイルまたはシェル・スクリプトを作成します。

これで、Business Process Choreographer のカスタム構成を作成するために必要なすべての事項の計画が完了しました。

`topics/t2configovr.dita` を実行します。

セキュリティ、ユーザー ID、および許可の計画

Business Process Choreographer を構成する場合のユーザー ID と許可を計画します。

構成時には、さまざまなユーザー ID を使用する必要があり、実行時に使用される他のユーザー ID を指定する必要があります。Business Process Choreographer の構成を始める前に、必ずすべてのユーザー ID を計画および作成してください。

サンプル Business Process Choreographer 構成の場合:

必要な権限は、新規プロファイルを作成する権限のみです。プロファイル管理ツールで標準プロファイル作成オプションを使用し、管理セキュリティを有効にすると、Business Process Choreographer サンプルも構成されます。他の計画やユーザー ID は不要なので、このタスクはスキップできます。

高セキュリティ構成の場合:

このタスクでの説明に従って、すべてのユーザー ID を詳細に計画する必要があります。

低セキュリティ構成の場合:

非実動システムなど、完全なセキュリティが不要な場合は、使用されるユーザー ID の数を減らすことができます。すべてのユーザー ID を詳細に計画する必要がありますが、特定のユーザー ID を複数の目的で使用できます。例えば、データベース・スキーマを作成するために使用するデータベース・ユーザー ID は、実行時にデータベースに接続するためのデータ・ソース・ユーザー名としても使用できます。

`bpeconfig.jacl` スクリプトを使用して Business Process Choreographer を構成する場合:

`bpeconfig.jacl` スクリプトを実行するために使用されるユーザー ID には、スクリプトが実行する構成アクションで必要とされる権限が付与されている必要があります。そうでない場合は、必要な権限を持つユーザー ID をスクリプトのパラメーターとして指定する必要があります。そのためすべてのユーザー ID を詳細に計画する必要があります。`bpeconfig.jacl` スクリプトに対するパラメーターとして指定可能なユーザー ID の場合は、パラメーター名がテーブルに取り込まれます。プロファイルが既に作成されている必要があります。WebSphere 管理セキュリティが有効になっている場合は、`wsadmin` ツールを起動するために使用できる `configurator` ロールの WebSphere 管理者ユーザー ID が必要です。

ヒューマン・タスクを使用する場合:

- WebSphere 管理セキュリティとアプリケーション・セキュリティの両方を有効にする必要があります。
 - セキュリティ・オプションの「**レルム修飾ユーザー名の使用**」は有効にしないでください。
1. このページのハードコピーを印刷し、計画した値を最後の列に書き込みます。Business Process Choreographer を構成するときの参照用に保管し、将来的に参照できるように記録を残すことができます。
 2. Business Process Choreographer を構成するために、Process Server で使用するユーザー ID を計画します。

表 53. Process Server のユーザー ID の計画

ユーザー ID またはロール	ユーザー ID を使用する場合	ユーザー ID の使用目的	ユーザー ID に必要な権限	計画されるユーザー ID
Business Process Choreographer を構成するユーザー	構成	管理コンソールにログオンして管理スクリプトを実行する。	WebSphere 管理セキュリティが有効になっている場合は、WebSphere 管理者またはコンフィギュレーターのロール。	
		bpeconfig.jacl スクリプトを実行して Business Process Choreographer を構成する場合。	スクリプトを実行する場合は、選択するオプションの必須項目としてユーザー ID も入力する必要があります。詳しくは、bpeconfig.jacl スクリプト・ファイルを参照してください。	

3. *install_root* のサブディレクトリーにアクセスする必要があるユーザーを計画します。セキュリティ・ポリシーにより、これらのユーザーにこの種のアクセス権限を付与することが許可されない場合は、ディレクトリー内のファイルのコピーを与える必要が生じます。

表 54. *install_root* のサブディレクトリーへのアクセスの計画

ユーザー ID またはロール	ユーザー ID を使用する場合	ユーザー ID の使用目的	ユーザー ID に必要な権限	計画されるユーザー ID
データベース管理者	構成	次のデータベースをセットアップするスクリプトの実行 BPEDB: Business Process Choreographer 用データベースのデフォルト名。 OBSRVDB: Business Process Choreographer Explorer レポート作成機能用データベースのデフォルト名。	bpeconfig.jacl スクリプトを使用して Business Process Choreographer を構成する場合: bpeconfig.jacl により次のディレクトリーのサブディレクトリーに生成される createSchema.sql スクリプト (またはそのコピー) への読み取りアクセス権限: <ul style="list-style-type: none"> Linux UNIX <i>profile_root/dbscripts/ProcessChoreographer/</i> Windows <i>profile_root%dbscripts%ProcessChoreographer%</i> 	
			データベース・スクリプト・ファイルを確認する場合: ディレクトリー内に作成されたデータベース・スクリプト (またはそのディレクトリー内のファイルのコピー) への読み取りアクセス。ディレクトリーは以下のとおりです。 <ul style="list-style-type: none"> Linux UNIX <i>install_root/dbscripts/ProcessChoreographer/database_type</i> Windows <i>install_root%dbscripts%ProcessChoreographer%database_type</i> ここで、 <i>database_type</i> は以下のいずれかになります。 <ul style="list-style-type: none"> DB2 DB2zOS Oracle SQLServer 	
Integration Developer	カスタマイズ	Lightweight Directory Access Protocol (LDAP) または Virtual Member Manager (VMM) 担当者ディレクトリー・プロバイダーで担当者割り当てを使用するには、サンプル XSL 変換ファイルのコピーをカスタマイズする必要があります。	Staff ディレクトリーまたは次のディレクトリー内のファイルのコピーへの読み取りアクセス。 <ul style="list-style-type: none"> Linux UNIX <i>install_root/ProcessChoreographer/Staff</i> Windows <i>install_root%ProcessChoreographer%Staff</i> Integration Developer では、カスタマイズされた XSL 変換ファイルをサーバーで使用可能にするために、適切なディレクトリーへの書き込みアクセスも必要になります。	

4. Business Process Choreographer が使用するデータベースの作成、構成、およびアクセスに使用するユーザー ID を計画します。

表 55. BPEDB データベースのユーザー ID の計画

ユーザー ID またはロール	ユーザー ID を使用する場 合	ユーザー ID の使用目的	ユーザー ID に必要な権限	計画される ユーザー ID
データベース 管理者	構成前	BPEDB データベースを作成 します。	データベースを作成します。	
bpeconfig.jacl スクリプトを 実行するデー タベース管理 者または管理 者	構成	ユーザーまたはデータベース 管理者は、デフォルト・デー タベースを使用するのではない 限り、Business Process Choreographer データベースの スクリプトを実行する必要が あります。	BPEDB データベースの場合: テーブル 変更、接続、テーブル挿入、および索 引、スキーマ、テーブル、テーブル・ス ペース、およびビューの作成を行いま す。	
データ・ソー スのユーザー 名 bpeconfig.jacl スクリプトを 使用する場 合、これは -dbUser パラ メーターで す。	構成	「 テーブルの作成 」 オプショ ンを選択する場合は、このユ ーザー ID を使用してデー タベース表が作成されます。	「 テーブルの作成 」 構成オプションを使用 するには、このユーザー ID に、次 に示す BPEDB データベースに対する 操作の実行権限も付与する必要がありま す: テーブル変更、接続、テーブル挿 入、および索引、テーブル、ビューの作 成。	
	ランタイム	Business Flow Manager と Human Task Manager は、こ のユーザー ID を使用して BPEDB データベースに接続 します。	このユーザー ID に、次に示す BPEDB データベースに対する操作の実行権限も 付与する必要があります: 接続、テー ブル削除、テーブル挿入、テーブルとビ ューの選択、テーブルの更新。	
	サービスまた はフィックス バックの適用 後	データベース・スキーマは、 必要に応じてサービスの適用 後に自動的に更新されます。 この仕組みは、このユーザー ID に必要なデータベース権 限が付与されている場合にの み機能します。権限が付与さ れていない場合は、スキーマ の更新を手動で実行する必要 があります。	このユーザー ID に、BPEDB データベ ースに対する次に示す操作の実行権限も 付与する必要があります。テーブルの変 更、作成、挿入、および選択、デー タベースへの接続、索引とビューの作成およ び除去。	

5. Business Process Choreographer Explorer レポート作成機能を構成する場合は、レポート・データベ
ースの作成、構成、およびアクセスに使用するユーザー ID を計画します。

表 56. レポート・データベースのユーザー ID の計画

ユーザー ID またはロール	ユーザー ID を使用する場 合	ユーザー ID の使用目的	ユーザー ID に必要な権限	計画される ユーザー ID
データベース 管理者	構成前	レポート・データベースを作 成します。 Oracle の場合 は、レポート・データベース を作成します。	データベースを作成します。	

表 56. レポート・データベースのユーザー ID の計画 (続き)

ユーザー ID またはロール	ユーザー ID を使用する場 合	ユーザー ID の使用目的	ユーザー ID に必要な権限	計画される ユーザー ID
データベース 管理者または 管理者	構成	setupEventCollector ツール、 またはスキーマを作成する SQL スクリプトを実行しま す。	レポート・データベースの場合: テー ブル変更、接続、プロシージャ作成、テ ーブル挿入、およびテーブル、テー ブル・スペース、およびビューの作成。 ユーザー定義関数の Java 実装を使用す る場合、ユーザー ID には、JAR ファ イルをインストールする権限も必要で す。	
Event Collector デ ータ・ソース のユーザー名	ランタイム	レポート・データベースに接 続します。レポート・デー タベースを使用しており、その データベースで BPEDB デ ータベースを使用する場合は、 Business Process Choreographer データ・ソース の場合と同じユーザー名を使用 します。	データベースに接続します。	

6. Business Process Choreographer のメッセージング・エンジンのメッセージ・ストア用に別個のデータ
ベースを使用する場合は、データベースへのアクセスに使用するユーザー ID を計画します。

表 57. 事前構成 BPEME メッセージング・エンジン・データベースのユーザー ID の計画

ユーザー ID	ユーザー ID を 使用する場 合	ユーザー ID の使用目的	ユーザー ID に必要な権限	計画されるユ ーザー ID
バス・データ・ ソースのユーザ ー名 bpeconfig.jacl ス クリプトを使用 する場合、これ は -medbUser パ ラメーターで す。	構成および実行 時	このユーザー名は、 BPEME データベースへ の接続と、必要なテー ブルおよび索引の作成に使 用されます。	このユーザー ID に、次に示す BPEME データベースに対する操作 の実行権限も付与する必要がありま す: 接続、テーブル削除、テー ブル挿入、テーブルとビューの選択、テ ーブルの更新。	

7. Java Message Service (JMS) で使用する Business Process Choreographer のユーザー ID を計画しま
す。

表 58. JMS のユーザー ID の計画

ユーザー ID	ユーザー ID を使用する 場合	ユーザー ID の使用目的	ユーザー ID に必要な権限	計画されるユーザー ID
JMS 認証ユーザー	ランタイム	システム統合バスの認証別名。 Business Process Choreographer の構成時に指定する必要があります。 bpeconfig.jacl スクリプトを使用する場合、このユーザー ID とそのパスワードは、-mqUser パラメーターと -mqPwd パラメーターです。	WebSphere ユーザー・レジストリーに存在するユーザー名でなければなりません。Business Process Choreographer バスのバス・コネクター・ロールに自動的に追加されます。	
JMS API 認証ユーザー	ランタイム	Business Flow Manager JMS API 要求はすべて、このユーザー ID を使用して処理されます。 bpeconfig.jacl スクリプトを使用する場合、このユーザー ID とそのパスワードは、 -jmsBFMRunAsUser パラメーターと -jmsBFMRunAsPwd パラメーターです。	このユーザー名は、WebSphere ユーザー・レジストリーに存在するユーザー名でなければなりません。	
エスカレーションの認証ユーザー	ランタイム	Human Task Manager のエスカレーションはすべて、このユーザー ID を使用して処理されます。 bpeconfig.jacl スクリプトを使用する場合、このユーザー ID とそのパスワードは、 -jmsHTMRunAsUser パラメーターと -jmsHTMRunAsPwd パラメーターです。	このユーザー名は、WebSphere ユーザー・レジストリーに存在するユーザー名でなければなりません。	

8. Business Flow Manager および Human Task Manager の Java EE ロールのマップ対象グループまたはユーザー ID を計画します。

表 59. Business Flow Manager および Human Task Manager のセキュリティのロールの計画

ユーザー ID またはロール	ユーザー ID を使用する場合	ユーザー ID の使用目的	ユーザー ID、グループ、またはこの両方の計画済みリスト
管理者ユーザー	ランタイム	Business Flow Manager と Human Task Manager の両方のセキュリティ・ロールであるシステム管理者またはシステム・モニターはそれぞれ、ユーザー ID のリスト、グループのリスト、またはこの両方のリストにマップされます。ここで定義される値により、必要とするアクセス権限をこのロールのユーザーに与えるマッピングが作成されます。 bpeconfig.jacl スクリプトを使用する場合、これらのユーザーおよびグループは次のパラメーターに対応します。 <ul style="list-style-type: none"> • -adminUsers • -adminGroups • -monitorUsers • -monitorGroups 	
管理者グループ	ランタイム		
モニター・ユーザー	ランタイム		
モニター・グループ	ランタイム		

9. Business Flow Manager および Human Task Manager のクリーンアップ・サービス、およびプロセス・インスタンス・マイグレーション・ツールなどの管理ジョブで Java EE run-as ロールとして使用するユーザー ID を計画します。このユーザー ID は、表 59で計画した管理者ロールのユーザーまたはグループのメンバーでなければなりません。

表 60. 管理ジョブを実行するためのユーザー ID の計画

ユーザー ID	ユーザー ID を使用する場合	ユーザー ID の使用目的	計画されるユーザー ID
管理ジョブ・ユーザー ID	ランタイム管理	このユーザー ID を使用して、管理ジョブを実行します。 bpeconfig.jacl スクリプトを使用する場合は、このユーザー ID とパスワードが -adminJobUser パラメーターと -adminJobPwd パラメーターに対応します。	

10. ヒューマン・タスクのエスカレーションで特定のビジネス・イベントについての通知 E メールを送信し、使用する Simple Mail Transfer Protocol (SMTP) サーバーで認証を必要とする場合は、E メール・サーバーに接続するために使用するユーザー ID を決定します。

表 61. E メール・サーバーのユーザー ID の計画

ユーザー ID またはロール	ユーザー ID を使用する場合	ユーザー ID の使用目的	ユーザー ID に必要な権限	計画されるユーザー ID
メール・トランスポートのユーザー	ランタイム	Human Task Manager は、エスカレーション E メールを送信する構成済みメール・サーバーに対する認証でこのユーザー ID を使用します。 bpeconfig.jacl スクリプトを使用する場合、これは -mailUser パラメーターです。パスワードは -mailPwd パラメーターです。	E メールを送信する。	

11. ヒューマン・タスクで担当者割り当てを使用し、簡易認証を使用する Lightweight Directory Access Protocol (LDAP) 担当者ディレクトリー・プロバイダーを使用する場合は、LDAP サーバーへの接続に使用する Java 認証・承認サービス (JAAS) 別名および関連付けられたユーザー ID を計画します。LDAP サーバーで匿名認証を使用する場合、この別名およびユーザー ID は不要です。

表 62. LDAP サーバーの別名およびユーザー ID の計画

ユーザー ID またはロール	ユーザー ID を使用する場 合	別名およびユーザー ID の使用目的	ユーザー ID に必要な権限	計画される別名お よびユー ザー ID
LDAP プラグ イン・プロパテ ィー: 認証別名	ランタイム	この別名は、LDAP サーバーに接続 するときに使用するユーザー ID を 検索する目的で使用します。この別 名 ID は、LDAP プラグインのプロ パティをカスタマイズするときに 指定します。例えば、 mycomputer/My LDAP Alias と指定 します。	JAAS 別名は、LDAP ユーザー ID と関連付ける必要があります。	
LDAP ユーザ ー ID	ランタイム	このユーザー ID は、LDAP サーバ ーに接続するときに使用します。	LDAP サーバーで簡易認証を使用 する場合は、このユーザー ID で LDAP サーバーに接続できるよう にする必要があります。このユー ザー ID は、ショート・ネームま たは識別名 (DN) です。LDAP サ ーバーに識別名が必要な場合は、 ショート・ネームを使用すること はできません。	

12. 必要な権限を付与して、計画したユーザー ID を作成します。すべてを自分で作成する権限を持っていない場合は、適切な管理者に要求を実行依頼し、管理者によってユーザー用に作成されるユーザー ID の名前をこのテーブルに入力します。

Business Process Choreographer の構成時に必要とされるユーザー ID が分かります。

Business Process Choreographer のデータベースの計画

Business Process Choreographer のデータベースを計画します。

Business Process Choreographer のセットアップに応じて、最大 3 つのデータベースの作成を計画することが必要な場合も、データベースを作成する必要がない場合 (すべてのデータベースが CMNDB 共通データベースに統合される場合) もあります。また、Business Process Archive Manager ごとにもデータベースが必要であり、それらのデータベースも共通データベースに含めることができます。ただし、実動システムの場合は、すべての Business Process Choreographer データベースに別々のハイパフォーマンス・データベースが確保されるように計画を立てる必要があります。

Business Process Choreographer は、他のプロセス・サーバー・コンポーネントとデータベースを共用できます。BPEDB データベースは、Business Flow Manager と Human Task Manager で使用されます。実動システムでは、Business Process Choreographer が構成されているデプロイメント・ターゲットごとに専用データベースを設定することを計画します。

Business Process Choreographer の構成が複数ある場合は、それぞれの構成で独自のデータベースまたはデータベース・スキーマが必要になります。Business Process Choreographer の複数の構成で Business Process Choreographer データベース表を共有することはできません。

Business Process Choreographer Explorer レポート作成機能 (バージョン 6.1.2 までの Business Process Choreographer Observer) を使用する場合は、同じ BPEDB データベースを使用できますが、追加データベースを使用するとパフォーマンスが改善されます。レポート・データベースをセットアップするためのスクリプトの一部には、推奨される名前 OBSRVDB が既に含まれていますが、別の名前を選択することもできます。

Business Process Choreographer メッセージング・エンジンは、SCA メッセージング・エンジンとデータベースを共有するか、または専用の BPEME データベースを使用できます。選択した構成パスでサポートされているデータベースの詳細については、120 ページの表 51 または を参照してください。

1. 実動システムの場合:

- a. パフォーマンスの重要性が高い場合は、138 ページの『BPEDB データベースの計画』の説明に従い、Business Process Choreographer に個別のデータベースを使用することを計画します。パフォーマンスの重要性が低い場合は、CMNDB 共通データベースを使用することを計画します。
- b. Business Process Choreographer Explorer レポート作成機能を使用する場合:
 - BPEL Process のパフォーマンスに及ぶ照会の影響を最小限に抑えるには、144 ページの『レポート・データベースの計画』の説明に従い、個別のデータベースを使用するように計画します。
 - それ以外の場合は、BPEDB データベースを使用するように構成することを計画します。
- c. メッセージング・レートが非常に高い大規模クラスターなど、高負荷セットアップの場合、Business Process Choreographer メッセージング・エンジンに個別のデータベースを使用することでパフォーマンスを向上させることを検討してください。これによって、データベース・ロギングが並列化され、ボトルネックになることを防ぐことができます。
 - 管理コンソールを使用して Business Process Choreographer を構成するときに、Business Process Choreographer のメッセージング・エンジンで個別のデータベースを使用する場合は、148 ページの『メッセージング・エンジン・データベースの計画』を実行します。それ以外の場合は、Service Component Architecture (SCA) が使用するデフォルトのデータベースを使用するように計画します。
 - bpeconfig.jacl 構成スクリプトを使用して Business Process Choreographer を構成する場合、Business Process Choreographer は SCA によって使用されるものと同じデータベースをメッセージ・ストアとして使用します。Business Process Choreographer では同じデータベース内でそれぞれ独自のスキーマを使用します。
- d. オプション: データベース設計ツールを使用して、データベース設計ファイルおよび SQL スクリプト・ファイルを対話式で作成します。データベース管理者は、作成されたファイルを使用して、これまでのステップで計画した 3 つのすべてのデータベースを作成することができます。このツールを使用することには、以下のような大きな利点があります。
 - ツールを必要に応じて随時実行して、データベース設計パラメーターを調整することができます。提供される SQL テンプレート・ファイルを手動で編集する方法とは異なり、データベース設計パラメーターを破損させるというリスクを回避できます。
 - データベース設計ファイルを使用している場合は、次回、この製品の新しいバージョンにマイグレーションするときに、スキーマ更新 SQL スクリプトを生成することができます。
 - テスト構成用のデータベース設計ファイルを作成する場合は、設計ファイルのコピーを作成してそれに若干の変更を加え、実動システムのデータベースに使用できるので便利です。

- また、このツールを使用して、3 つのすべてのデータベースのデータ・ソースを定義することができます。ただし、レポート・データベース用のデータ・ソースは手動で構成する必要があります。

重要: データベース設計ツールを使用してデプロイメント環境を構築すると、共通データベースを構成した後に Business Process Choreographer が「完全」なものとして表示されます。これは、有効なデフォルトが存在し、その結果、Business Process Choreographer のテーブルが共通データベースに作成されるためです。ただし、このデフォルトは実動システムには適していません。実動システムでは、必ず、Business Process Choreographer が構成されるデプロイメント・ターゲットごとに専用データベースを構成してください。

2. パフォーマンスよりもセットアップの単純さの重要性の方が高い非実動システムの場合、選択するオプションは、選択した構成パスによって決まります。
 - インストーラーまたはプロファイル管理ツールを使用して『基本サンプル』または『組織付きサンプル』の Business Process Choreographer 構成を作成する場合は、別のデフォルト BPEDB データベースが作成されます。このデータベースは、Business Process Choreographer Explorer レポート作成機能でも使用されます。Business Process Choreographer のメッセンジング・エンジンの場合は、デフォルトで別個のデフォルト・データベース (BPEME) が作成されます。プロファイル管理ツールを使用する場合は、CMNDB データベースを共用することも選択できます。
 - プロファイル管理ツールを使用して、Business Process Choreographer 構成が含まれているデプロイメント環境を作成する場合は、Business Process Choreographer、Business Process Choreographer Explorer レポート作成機能、および Business Process Choreographer メッセンジング・エンジンはすべて CMNDB データベースを使用します。したがって、Business Process Choreographer のデータベースに関する計画は不要です。
3. 1 つ以上の Business Process Archive Manager 構成を作成する場合は、それぞれの Business Process Archive Manager 構成について 149 ページの『Business Process Archive データベースの計画』を行います。

これで、Business Process Choreographer 構成のすべてのデータベースの計画が完了しました。

BPEDB データベースの計画:

Business Process Choreographer のデータベースを計画します。

Business Process Choreographer にはデータベースが必要です。サポートされているすべてのデータベース・システムを対象とした、データベース・スキーマを作成および管理するための SQL スクリプトが提供されています。データベースが配備されたら、Business Process Choreographer のデータベースへの JDBC アクセスを構成する必要があります。データベース・システム、使用するトポロジー、インストールの目的、および使用する管理ツールによっては、データベースを作成して JDBC アクセスを構成するための一部のタスクまたはすべてのタスクを自動化することができます。実動システムの場合、Business Process Choreographer に独自のデータベースが必要ですが、パフォーマンスが重要でない場合は、他の IBM Business Process Manager コンポーネントとデータベースを共有するように Business Process Choreographer を構成することもできます。

1. 選択した BPEDB データベースと構成パスに互換性のあることを確認します。以下のデータベースがサポートされています。
 - DB2 UDB for Linux、UNIX、および Windows
 - DB2 for z/OS
 - DB2 Express
 - Microsoft SQL Server

- Oracle

Business Process Choreographer の構成方法を既に決定している場合は、選択した構成パスが、データベースの作成方法に影響します。Business Process Choreographer の構成に使用する構成パスを決定していない場合は、データベースの要件を確認することで、ニーズに対応しない構成パスを除外できます。各構成パスでサポートされているデータベースの詳細については、120 ページの表 51 または を参照してください。

2. 実動システムに通常必要なパフォーマンス、スケーラビリティ、セキュリティを必要としない場合は、IBM Business Process Manager に対してローカルなデータベース・サーバー上の単一のテーブル・スペースにデータベース・オブジェクトを作成できます。このようにすると、データベース作成に必要な計画と労力を最小限に抑えることができますが、データベースへのアクセスに使用するユーザー ID にもデータベース管理権限が必要になります。計画する必要があるオプションは、以下のよう
に、選択する構成パスに依存します。
 - a. インストーラーまたはプロファイル管理ツールを使用してサンプル Business Process Choreographer 構成を取得する場合は、Business Process Choreographer に単独のデフォルト BPEDB データベースが作成されます。この場合、それ以上の計画は不要です。
 - b. 管理コンソールの**デプロイメント環境ウィザード**で Business Process Choreographer を構成する際に、1 つのテーブル・スペースにデフォルト・スキーマが作成されると十分である場合は、提供されている SQL スクリプトのコピーを使用して BPEDB データベースを作成するように計画してください。
 - c. **bpeconfig.jacl** ツールを使用して Business Process Choreographer を構成する場合、次の中からどれが自身のケースに該当するかを計画します。
 - bpeconfig.jacl スクリプトを対話モードで実行する場合は、既存のデータベースにテーブルを作成できます。
 - データベース・オブジェクトを作成できる権限が付与されているユーザー ID では、`-createDB yes` オプションを使用できます。このオプションを指定すると、bpeconfig.jacl スクリプトで、デフォルトのテーブル・スペースにデータベース・オブジェクトを作成する SQL ファイルが生成、実行されます。この場合、サーバーを停止し、**wsadmin** ユーティリティで `-conntype NONE` オプションを使用することも計画します。
 - Oracle データベースを使用している場合、データベースが既に存在している必要があります。DB2 for z/OS データベースを使用している場合、データベース・インスタンスが既に存在している必要があります。他のデータベース・タイプの場合、bpeconfig.jacl はデータベースの作成を試行します。
 - データベースまたはオブジェクトの作成中にエラーが発生した場合は、`-createDB no` オプションを使用する場合と同様の方法で生成された SQL スクリプトを使用できます。
 - データベース・オブジェクトを作成できる権限が付与されていないユーザー ID では、`-createDB no` オプションを使用する必要があります。このオプションを指定すると、bpeconfig.jacl スクリプトで、デフォルトのテーブル・スペースにデータベース・オブジェクトを作成する SQL ファイルが生成されますが、スクリプトの実行は行われません。この場合は、データベース管理者に連絡し、スクリプトのカスタマイズと実行を依頼してください。

このツールとその他のデータベース・パラメーターの詳細については、bpeconfig.jacl スクリプト・ファイルを参照してください。
 - d. 管理コンソールの「**Business Process Choreographer の構成**」ページを使用すると、次の操作を実行できます。

- Business Process Choreographer データベース・オブジェクトを共通データベース CMNDB 内で作成する場合、デフォルト・データベースを Business Process Choreographer データ・ソースのターゲットとして使用することを計画します。
 - 既存のデータベースを再利用するには、Business Process Choreographer データ・ソースのターゲットとして既存のデータベースを指定するように計画します。
 - 「テーブルの作成」オプションを選択すると、Business Process Choreographer が初めてデータベースを使用するときに、必要なデータベース・オブジェクトをデフォルトのテーブル・スペース内に作成します。このオプションは、DB2 on z/OS データベースおよびリモート Oracle データベースには使用できません。DB2 UDB データベースでこのオプションを使用する場合は、データベースで **AUTOMATIC STORAGE YES** が有効になっていなければなりません。
 - スクリプトを使用してデータベースを作成するには、「テーブルの作成」オプションを使用しないように計画します。
- e. ステップ 12 (144 ページ) に進みます。
3. Business Process Choreographer に対して、次の特性を備えたハイパフォーマンス・データベース・セットアップが必要な場合は、以下のステップをすべて実行してください。
 - データベースは Business Process Choreographer 専用で使用されます。
 - データベースは、複雑な照会や読み取り操作を効率的に処理できるように、十分のメモリーがある専用サーバーに配置しておくことが理想的です。データベースは、Process Server システムに対してローカルであっても構いません。データベース・ホストには、高速ストレージ・サブシステム、例えば、通常は複数の単一ディスクよりも高いパフォーマンスが得られる Network Attached Storage やストレージ・エリア・ネットワークなどのハードウェア支援ディスク・アレイなどが必要です。
 - パフォーマンスを向上するためにテーブル・スペースのディスクへの割り振りをカスタマイズできます。
 - データベース管理用のユーザー ID とは異なるユーザー ID を使用してデータベースにアクセスできます。
 4. データベースのユーザー ID についてまだ計画していない場合は、132 ページの表 55 の内容を実行します。
 5. ディスクとテーブル・スペースの割り振りを計画します。実動システムでは、開発およびシステム・テストにおける経験を考慮します。データベースのサイズは多くの要因に依存します。
 - microflow として実行されるプロセスは、ほとんどデータベース・スペースを使用しません。
 - 各プロセス・テンプレートに数十キロバイトまたは数百キロバイトが必要です。
 - プロセスの性質上、トランザクション・ログが頻繁に更新される場合は、トランザクション・ログを専用ディスクに割り当てなければならない場合があります。

個別のディスクを使用する予定であり、ご使用のデータベース・システムでデータベース表を複数のディスクに割り振ることができる場合は、使用するディスクの数とディスクの割り振り方法を計画します。

DB2 for z/OS の場合は、表ごとにテーブル・スペースが作成され、LOB 列についても追加のラージ・オブジェクト (LOB) テーブル・スペースが作成されます。

以下のいずれかを使用する場合は、テーブル・スペースを計画します。

- DB2
- Oracle

テーブル・スペースを計画する場合の目標は、できるだけ多くのディスク・ドライブ全体に入出力操作を分散させることです。デフォルトでは、スクリプトにより次のテーブル・スペースが作成されます。

AUDITLOG

プロセスおよびタスクの監査証跡テーブルを格納します。使用される監査の程度に応じて、このテーブル・スペース内のテーブルへのアクセス数が増える可能性があります。監査をオフにすると、このテーブル・スペース内のテーブルにアクセスできなくなります。

BPETEMP8K

データベース・スキーマのマイグレーション時に必要な 8 KB バッファ・プールをサポートするための一時テーブル・スペースを格納します。

BPETS8K

データベース・スキーマのマイグレーション時に必要な 8 KB バッファ・プールをサポートするためのテーブル・スペースを格納します。

INSTANCE

プロセス・インスタンスおよびタスク・テーブルを格納します。実行される長期実行プロセスの種類に関係なく、常時集中的に使用されます。可能な場合は、このテーブル・スペースを専用ディスクに配置し、プロセス・データベースの他の部分からトラフィックを分離してください。このテーブル・スペースの成長率はビジネス・アプリケーションにより異なります。

LOBTS

BPEL Process およびヒューマン・タスクのインスタンスに属するラージ・データ・オブジェクトを格納します。これはたいへん多く使用され、成長率はインスタンス数と相関関係があります。

SCHEDTS

スケジューリング・コンポーネントが使用するテーブルを格納します。スケジューラー・テーブル・スペース内のテーブルへのアクセスは、スケジューラーで使用されるキャッシング機構のため、通常は少なくなります。このテーブル・スペースのサイズは、インスタンスの数に関係します。

STAFFQRY

Lightweight Directory Access Protocol (LDAP) のような社員レジストリーから入手される社員照会結果を一時的に保管するために使用するテーブルを含みます。BPEL Process に多数のヒューマン・アクティビティが含まれている場合は、このテーブル・スペース内のテーブルへのアクセスが頻繁に行われます。

TEMPLATE

プロセスおよびタスクのテンプレート情報を保管するテーブルを格納します。アプリケーションのデプロイメント中に、テーブルにデータが取り込まれます。実行時には、アクセス速度が低下します。デプロイメント中は、データは更新されず、新規データのみが挿入されます。

WORKITEM

作業項目の処理に必要なテーブルを保持します。作業項目は、ヒューマン・タスクの対話に使用されます。BPEL Process 内のヒューマン・タスクの数に応じて、このテーブル・スペースのテーブルへのアクセス速度が、低速からかなりの高速まで変わる場合があります。使用されている明示的なヒューマン・タスクがない場合でも、アクセス速度はゼロになりません。これは、長期実行プロセスの管理をサポートするために、作業項目も生成されるからです。

1 つのハイパフォーマンス RAID アレイにすべてのテーブル・スペースを配置できますが、並列アクセスを可能にするには、各テーブル・スペースを異なるファイルに作成する必要があります。特定の数のディスクでは、テーブル・スペースを個別のディスクに割り振るよりも、RAID 構成を使用する方が

パフォーマンスが高くなります。例えば、N 個のプロセッサを搭載した専用サーバー上で DB2 データベースが稼働中の場合、次のガイドラインを適用することを検討してください。

- テーブル・スペースには、2*N 個のプライマリー・ディスク、2*N 個のミラー・ディスクを備え、ストライプ・サイズが 256 KB の RAID-1 アレイを使用します。
- データベース・トランザクション・ログには、1.5*N 個のプライマリー・ディスク、1.5*N 個のミラー・ディスクを備え、ストライプ・サイズが 64 KB の RAID-1 アレイを使用します。

DB2 データベースを使用しており、4 基のプロセッサのサーバーで実行し、RAID コントローラーで 15 台のディスク・ドライブを使用する予定の場合は、以下の割り振りを検討します。

- オペレーティング・システムおよびページング (Windows ではページ・ファイル、AIX® ではページング・スペース、Solaris ではスワップ・スペースと呼ばれている) に対しディスク 1 台を使用します。
- RAID-1 構成の 8 つのディスク (4 つのプライマリー・ディスクと 4 つのミラー) を、データベース制御ファイルおよびテーブル・スペースのための 1 つの論理ディスクとして使用し、ストライプ・サイズ 256 KB を使用します。
- RAID-1 構成の 6 つのディスク (3 つのプライマリー・ディスクと 3 つのミラー) を、データベース・トランザクション・ログのための 1 つの論理ディスクとして使用し、ストライプ・サイズ 64 KB を使用します。

Oracle データベースを使用している場合は、次のガイドラインを検討します。

- ストライプ幅 1 MB を使用して、すべてのディスクの全ファイルの内容をストライプおよびミラーリング (SAME) します。
- 高可用性を実現するためデータをミラーリングします。
- ディスクではなく区画ごとにデータ・サブセットを作成します。
- Automatic Storage Management (ASM) ファイル・システムを使用します。
- ディスク・ドライブの外側半分に (テーブル・スペースの) 区画を作成します。
- BPEDB データベース・スキーマを作成する際は、使用可能なディスク上へのテーブル・スペースの分散を必ずカスタマイズします。
- REDO ログ・ファイルを専用ディスクに置きます。
- 自動メモリー管理を有効にします。
- 統計レベルを **TYPICAL** に設定します。
- 自動保守ジョブ用の保守ウィンドウをカスタマイズします。

Linux、UNIX、および Windows で DB2 データベースを使用している場合は、次のガイドラインを検討します。

- BPEDB データベース・スキーマの作成時に、使用可能な複数のディスクへのテーブル・スペースの分散を必ずカスタマイズします。
 - トランザクション・ログ・ファイルを専用ディスクに置きます。
 - ロック・タイムアウトおよびデッドロック検知間隔の構成パラメーターを、ご使用のセットアップに合わせて調整しなければならない場合があります。
6. データベース・オブジェクトを作成する SQL スクリプトを実行する前に、ユーザー自身またはデータベース管理者がこのスクリプトをカスタマイズするように計画します。
- **bpeconfig.jacl** ツールを使用して Business Process Choreographer を構成する場合は、**-createDB no** オプションを使用します。これにより、このツールで生成される SQL スクリプトが実行されません。生成される SQL ファイルは、ご使用のデータベース用に提供されるオリジナルの SQL ファイ

ルをベースとしていますが、bpeconfig.jacl ツールに対して指定される構成パラメーターのすべてがこの SQL ファイルに事前に入力されるため、必要となるカスタマイズ作業が最小限に抑えられます。

- 管理コンソールの「**Business Process Choreographer の構成**」ページまたは**デプロイメント環境ウィザード**で Business Process Choreographer を構成する場合は、「テーブルの作成」オプションのチェックを外し、デフォルト・スキーマが作成されないようにしてください。生成される SQL ファイルは、ご使用のデータベース用に提供されるオリジナルの SQL ファイルをベースとしていますが、管理コンソールで入力した構成パラメーターのすべてが、生成された SQL ファイルに事前に入力されるため、必要となるカスタマイズ作業が最小限に抑えられます。

生成された SQL スクリプトの使用については、生成済みの SQL スクリプトを使用した Business Process Choreographer 用のデータベース・スキーマの作成を参照してください。実施するカスタマイズについて計画できるように、データベースのオリジナルの SQL ファイルのプレビューを表示するには、ご使用のデータベースの SQL スクリプト createSchema.sql を見つけて表示します。ただし、このスクリプトを変更しないでください。元の SQL ファイルは、次のディレクトリーにあります。

- **Linux** **UNIX** `install_root/dbscripts/ProcessChoreographer/database_type`
- **Windows** `install_root%dbscripts%ProcessChoreographer %database_type`

ここで、`database_type` は以下のいずれかになります。

- DB2
 - DB2zOS
 - Oracle
 - SQLServer
7. データベース・サーバーが Process Server システムに対しリモートである場合は、Java Database Connectivity (JDBC) ドライバーまたはデータベース・クライアントを Process Server システムにインストールするように計画します。
 - タイプ 2 JDBC ドライバー: インストールするデータベース・クライアントとインストール先の場所を決定します。
 - タイプ 4 JDBC ドライバー: 製品インストールの一部として提供されるドライバーの JAR ファイルを見つけ、インストール先の場所を決定します。
 8. データベース・サーバーが Process Server システムに対しローカルである場合は、データベースにアクセスするために必要な JDBC JAR ファイルがデータベース・システムと共にインストールされます。これらの JAR ファイルを見つけ、その場所を書き留めておきます。
 9. DB2 for z/OS を使用する場合は、スクリプト・ファイル createTablespace.sql および createSchema.sql の変更を計画します。
 - a. ストレージ・グループ名、(サブシステム名ではなく) データベース名、およびスキーマ修飾子を置き換える値を計画します。
 - b. テーブル・スペースへのテーブルのデフォルト割り当てを評価します。次に、セットアップに合わせて必要な変更を計画します。
 - c. バッファ・プールへのテーブル・スペースのデフォルト割り当てとデフォルト・バッファ・プール・サイズを評価します。次に、セットアップに合わせて必要な変更を計画します。
 10. データベースをホストするサーバーを決定します。データベース・サーバーがリモートである場合は、適切なデータベース・クライアントまたは XA をサポートしているタイプ 4 の JDBC ドライバーが必要です。
 11. データベースに対して指定する必要がある次の構成パラメーターの値を決定します。

- Java Database Connectivity (JDBC) プロバイダーは、タイプ 2 またはタイプ 4 のいずれかです。Oracle の場合は、タイプ 4 thin ドライバーのみがサポートされます。
 - データベース・インスタンス (Oracle の場合はデータベース名、DB2 on z/OS の場合はサブシステム名)。
 - スキーマ修飾子。デフォルトでは、暗黙的なスキーマ修飾子として接続ユーザー ID が使用されます。
 - スキーマを作成するユーザーのユーザー名。
 - タイプ 4 JDBC ドライバーを使用している場合は、データベース・サーバーの名前または IP アドレス。
 - データベース・サーバーが使用するポート番号。これは、タイプ 4 JDBC ドライバーを使用する場合にのみ必要です。
 - 認証別名のユーザー ID とパスワード。これは、jdbc/BPEDB データ・ソースが実行時にデータベースにアクセスするために使用するユーザー ID です。これらは、bpeconfig.jacl の `-dbUser` および `-dbPwd` パラメーターです。
12. 十分な数の並列 JDBC 接続をサポートするように計画します。
 - a. 必要な Business Process Choreographer BPEDB データベースへの並列 JDBC 接続の最大数を推定します。これは、BPEL Process の特性とユーザー数によって異なります。適切な推測値は、Business Process Choreographer API を介して同時接続可能なクライアントの最大数、JMS アクティベーション・スペック `BPEInternalActivationSpec` および `HTMInternalActivationSpec` で定義されている並行エンドポイントの数、および過負荷状態を考慮した 10% の安全マージンを加算した値です。
 - b. ご使用のデータベース・システムで必要な数の並列 JDBC 接続をサポートできることを確認します。
 - c. ご使用のデータベース・システムで推測される数の並列 JDBC 接続をサポートするためのベスト・プラクティスに基づき、適切な設定を計画します。
 13. デフォルトでは、Oracle 用の JDBC バッチ処理は使用可能になっており、これにより、パフォーマンスが改善される可能性があります。Oracle 用の JDBC バッチ処理を使用不可にする場合は、Business Flow Manager のカスタム・プロパティー `DatabaseBatchUpdate` を値 `false` に設定します。このプロパティーが設定されていない場合は、デフォルトで、Oracle データベース用の JDBC バッチ処理が使用可能になります。
 14. 実動システムでは、次の管理作業について計画します。
 - データベースに標準的な実動データを取り込んだ後で、このデータベースを調整する。
 - アプリケーション・ワークロードに変化が生じた後、データベースを再調整します。
 - 完了したプロセス・インスタンスおよびタスク・インスタンスをデータベースから定期的に削除する。使用可能なツールやスクリプトの概要については、『Business Process Choreographer のクリーンアップ手順』を参照してください。

これで、Business Process Choreographer のデータベースの計画が完了しました。

レポート・データベースの計画:

Business Process Choreographer Explorer レポート作成機能のためのデータベースの準備

Business Process Choreographer Explorer レポート作成機能では同じデータベースを使用できますが、別のデータベースを使用すると、パフォーマンスが向上します。BPEDB データベースを再利用しない場合は、以下を実行します。

1. 複数の Event Collector インスタンスを使用する予定であり、これらのインスタンスが同一データベースを使用する場合は、Event Collector ごとに固有のスキーマ名を使用するよう計画します。パフォーマンスを改善するには、Event Collector ごとに個別のデータベースを使用することを計画します。
2. データベースに使用するデータベース・システムを決定します。
 - DB2 UDB for Linux、UNIX、および Windows
 - DB2 for z/OS
 - Oracle
3. データベースをホストするサーバーを決定します。
4. データベースのユーザー ID についてまだ計画していない場合は、132 ページの表 56 の内容を実行します。
5. SQL ベースのユーザー定義関数 (UDF) を使用するか Java ベースの UDF を使用するかを決めます。
 - Java UDF の方が高精度ですが、データベースに JAR ファイルがインストールされていなければ使用できません。
 - DB2 for z/OS データベースを使用する予定であり、SQL ベースの UDF ではなく Java ベースの UDF を使用してデータベースを作成したい場合は、メニュー方式の管理ツール **setupEventCollector** を使用する以外に方法はありません。

UDF の詳細については、Business Process Choreographer Explorer レポート作成機能のユーザー定義関数を参照してください。

6. Business Process Choreographer Explorer レポート作成機能と Event Collector が BPEDB データベースを使用するように構成する際に `bpeconfig.jacl` スクリプトを使用しない場合は、レポート・データベースの作成方法を決定します。

メニュー方式の管理ツール **setupEventCollector** の使用

このツールでは、データベースを対話モードで作成し、実行時環境に突き合わせて入力を検証できます。このツールを使用する場合は、このツールで SQL ファイルを作成するがこの SQL ファイルを実行しないようにするかどうかを決定します。実行前に SQL をカスタマイズする場合、またはデータベース管理者に SQL のカスタマイズと実行を依頼する場合は、このオプション (SQL ファイルを作成するがこの SQL ファイルを実行しない) を使用します。このツールの詳細については、`setupEventCollector` ツールを参照してください。

このツールでは、データベースを作成する他の方法とは異なり、Java ベースのユーザー定義関数 (UDF) または SQL ベースの UDF を作成することができます。また、この 2 つのオプションの切り替えや、UDF をサポートするために必要な JAR ファイルのインストールと削除を行うこともできます。このツールでは、Java ベースのユーザー定義関数 (UDF) または SQL ベースの UDF のいずれかを使用してデータベースを作成できます。

SQL スクリプトの実行

このツールを使用してデータベースへアクセスする操作が許可されていない場合は、SQL スクリプトを使用する必要があります。バッチ・モードで `bpeconfig.jacl` スクリプトを使用するか、または管理コンソールを使用して Business Process Choreographer を構成した場合、SQL スクリプトが生成され、必要なパラメーターがすべて置換されています。そうでない場合は、データベース設計ツールを使用して、SQL スクリプトを対話式で生成できます。

すべての SQL スクリプトは、SQL 実装を使用して、レポート・データベース用の UDF を作成します。

初回使用時にテーブルを自動的に作成する

デフォルトのデータベース・スキーマを簡単に作成する方法として、管理コンソールの

Business Process Choreographer Event Collector の構成ページで「テーブルの作成」オプションを選択する方法があります。このオプションは、ハイパフォーマンス・システムには適していません。

SQL ベースの UDF が使用されます。

7. DB2 for Linux、UNIX、または Windows データベースを使用する場合は、以下のことを計画します。
 - データベース名。パフォーマンスを優先しない場合は、値 BPEDB を指定できます。この値を指定すると、レポート・データベースで Business Process Choreographer データベースが使用されます。パフォーマンスを向上させるには、別個のデータベース (例えば OBSVRDB) を使用するように計画してください。
 - データベースへの接続に使用するユーザー ID。このユーザー ID のパスワードも必要です。
 - データベース・オブジェクトの作成に使用するデータベース・スキーマ名。デフォルト値は接続ユーザー ID です。
 - テーブル・スペース OBSVRTS の完全修飾ロケーションを計画します。
 - デフォルトの Java ベースのユーザー定義関数 UDF ではなく SQL ベースの UDF を使用するかどうかを決定します。
 - setupEventCollector ツールを使用してデータベースをセットアップする場合、以下についても計画します。
 - 使用する JDBC ドライバーのタイプを決定します。
 - タイプ 2 (ネイティブ・データベース・クライアントを使用して接続)。これはデフォルトです。
 - タイプ 4 (JDBC を介して直接接続)。この場合は、以下の点も確認してください。
 - データベース・サーバーのホスト名または IP アドレス。デフォルトは localhost です。
 - データベースに使用するポート番号。デフォルトは 50000 です。
 - DB2 JDBC ドライバー・ファイル db2jcc.jar および db2jcc_license_cu.jar がインストールされているディレクトリーを見つけます。
8. DB2 for z/OS データベースを使用する場合は、以下を計画します。
 - サブシステムのロケーション名 (ネットワーク名)。
 - ストレージ・グループ名。
 - サブシステムが認識するデータベース名。デフォルト値は OBSVRDB です。
 - データベースへの接続に使用するユーザー ID。このユーザー ID のパスワードも必要です。
 - データベース・オブジェクトが作成されるデータベース・スキーマの名前 (SQLID)。
 - テーブル・スペースが作成されるストレージ・グループを計画します。
 - OBSVR01、OBSVR02、OBSVR03、OBSVR04、OBSVR05、OBSVR06、OBSVR07、および OBSVR08 の場合は通常のテーブル・スペース
 - OS26201、OS26202、OS26203、および OS26204 の場合は LOB テーブル・スペース。
 - デフォルトの SQL ユーザー定義関数 (UDF) ではなく、Java ベースのユーザー定義関数を使用する場合は、関数を実行する WLM 環境の名前を決定します。
 - setupEventCollector ツールを使用してデータベースをセットアップする場合、以下についても計画します。
 - 使用する JDBC ドライバーのタイプを決定します。
 - タイプ 4 (JDBC を介して直接接続)。この場合は、以下の点も確認してください。
 - データベース・サーバーのホスト名または IP アドレス。デフォルトは localhost です。

- データベースに使用するポート番号。デフォルトは 446 です。
 - JDBC ドライバーの JAR ファイル db2jcc.jar および db2jcc_license_cisuz.jar のディレクトリー。
 - タイプ 2 (ネイティブ・データベース・クライアントを使用して接続)。この場合は、ローカル・カタログに含めるデータベース別名も計画します。
9. Oracle データベースを使用する場合は、以下を計画します。
- SID 名。デフォルト値は BPEDB です。
 - データベースへの接続に使用する Oracle ユーザー ID を決定します。このユーザー ID には、ローカル CONNECT と RESOURCE が必要です。デフォルトのユーザー ID は **system** です。このユーザー ID のパスワードも必要です。
 - データベース・オブジェクトが作成されるデータベース・スキーマの名前。デフォルト値は、データベースへの接続に使用するユーザー ID です。
 - 次のテーブル・スペースの完全修飾ロケーションを計画します。
 - OBSVRIDX
 - OBSVRLOB
 - OBSVRTS
 - デフォルトの Java ベースのユーザー定義関数 UDF ではなく SQL ベースの UDF を使用するかどうかを決定します。
 - setupEventCollector ツールを使用してデータベースをセットアップする場合、以下についても計画します。
 - JDBC ドライバー・ファイル (ojdbc6.jar) のロケーション。
 - データベース・サーバーのホスト名。デフォルトは localhost です。
 - データベースに使用するポート番号。デフォルトは 1521 です。
10. バッチ・モードで -createEventCollector yes オプションを指定して **bpeconfig.jacl** ツールを使用する場合は、次のいずれかを計画します。
- -createDB yes オプションを指定すると、**bpeconfig.jacl** により生成された SQL スクリプトが実行されます。-dbSchema パラメーターを使用して、BPEDB データベースのスキーマ修飾子を指定できます。-reportSchemaName パラメーターと -reportDataSource パラメーターを使用すれば、Business Process Choreographer Explorer レポート作成機能で BPEDB データベースではなく別のデータベースを使用できます。
 - -createDB no オプションを指定すると、ツールで生成される SQL スクリプトが実行されません。生成される SQL ファイルは、ご使用のデータベースに対応した標準 SQL ファイルに基づいていますが、bpeconfig.jacl ツールに対して指定される構成パラメーターがすべてこの SQL ファイルに事前に入力されるため、必要となるカスタマイズ作業が最小限に抑えられます。生成された SQL スクリプト (データベース・オブジェクト作成スクリプト) を実行する前に、ユーザー自身またはデータベース管理者がこのスクリプトをカスタマイズするように計画します。このツールとその他のデータベース・パラメーターの詳細については、topics/t2co_bpeconfig.ditaを参照してください。
11. 管理コンソールの「**Business Process Choreographer Event Collector**」ページでデータベース表を作成する場合は、次のいずれかを計画します。
- DB2 for z/OS 以外のすべてのデータベース・タイプでは、「テーブルの作成」オプションを使用して、指定されているデータベースに Business Process Choreographer が初めてアクセスするときにデフォルト・スキーマをデータベース内に作成するように設定できます。
 - SQL スクリプトを実行してデータベース表を作成する場合は、「テーブルの作成」オプションを使用しないでください。ユーザー自身またはデータベース管理者がデータベース・オブジェクト作成

SQL スクリプトのコピーをカスタマイズした後で、このスクリプトを実行するように計画します。
このオプションは、実動システムに最も適しています。

12. 実施するカスタマイズについて計画できるようにするためにデータベース用 SQL スクリプトのプレビューを表示するには、以下のようにします。データベースの `createSchema_Observer.sql` ファイルを見つけて表示します。ただし、このファイルは変更しないでください。SQL ファイルは、次の場所にあります。

- **Windows** Windows プラットフォームの場合:

```
install_root%dbscripts%ProcessChoreographer%database_type %database_name%database_schema
```

- **Linux** **UNIX** On Linux、UNIX プラットフォーム (および UNIX System Services (USS) on z/OS) の場合:
`install_root/dbscripts/ProcessChoreographer/database_type/database_name/
database_schema`

ここで、`database_type` は以下のいずれかになります。

- DB2
- DB2zOS
- Oracle

注: `bpeconfig.jacl` ツールを使用して **Business Process Choreographer** を設定する場合、このツールにより生成される SQL スクリプトを使用することを計画します。このスクリプトは、構成パラメーターのプレースホルダーを値に置き換えるために編集する必要はありません。生成されるスクリプトはツールを実行した後でのみ利用できますが、これらは上記のロケーションにあるスクリプトに基づいています。テーブル・スペース割り振りをカスタマイズする場合は、生成されたスクリプト・ファイルを編集する必要があります。あるいは、データベース設計ツールを使用して、SQL スクリプトを生成できます。

レポート・データベースの計画が完了しました。

メッセージング・エンジン・データベースの計画:

データベース・ロギングがボトルネックになる可能性がある高負荷設定の場合、**Business Process Choreographer** バスのメッセージング・エンジンに別のデータベースを使用することで、パフォーマンスを改善できます。長期実行プロセスの最善のパフォーマンスを引き出すには、永続メッセージのパフォーマンスが最大化するようにメッセージング・システムを調整します。

Service Component Architecture (SCA) システム・バスの各メッセージング・エンジン、**SCA** アプリケーション・バスの各メッセージング・エンジン、**Common Event Infrastructure** バスの各メッセージング・エンジン、および **Business Process Choreographer** バスの各メッセージング・エンジンに対して同じメッセージング・データベースを使用できます。このデータベースは、メッセージ・エンジンのフェイルオーバー可用性を確保するために、メッセージ・エンジンのホストとして動作するクラスターのすべてのメンバーがアクセス可能である必要があります。パフォーマンスの重要性が高い場合は、**SCA** バスおよびアプリケーションに使用されるデフォルト **MEDB** を使用する代わりに、**Business Process Choreographer** メッセージング・エンジン専用のデータベースを使用するように計画します。

1. **WebSphere MQ** を使用するには、`bpeconfig.jacl` 構成スクリプトを使用して **Business Process Choreographer** を構成する必要があります。 **WebSphere MQ** の使用は推奨されません。
2. `bpeconfig.jacl` 構成スクリプトを使用して **Business Process Choreographer** を構成する場合、**Business Process Choreographer** は **SCA** によって使用されるものと同じデータベースをメッセージ・ストアとして使用します。 **Business Process Choreographer** では同じデータベース内でそれ独自のスキーマを使用します。

3. 管理コンソールの Business Process Choreographer 構成ページを使用するとき、SCA メッセージ・ストア設定に基づくデフォルトの構成を使用する必要がある場合は「**デフォルト構成の使用**」チェック・ボックスを選択し、それ以外の場合は以下の構成パラメーターを計画します。
 - ローカル・バス・メンバーまたはリモート・バス・メンバーの場所。
 - データベースの名前。デフォルトは BPEME です。
 - スキーマ名。デフォルトは MEDBPM00 です。
4. 以下の構成パラメーターを計画します。
 - a. Business Process Choreographer の開始前にデータベースを作成しておくように計画します。
 - b. データベース・サーバーのホスト名または IP アドレス、およびこのデータベース・サーバーが使用するポート番号。
 - c. データベースへの接続とスキーマの作成に使用するユーザー名。これは、133 ページの表 57 で計画したユーザー ID です。

これで、Business Process Choreographer メッセージング・エンジンのデータベースの計画が完了しました。

Business Process Archive データベースの計画:

それぞれの Business Process Archive Manager 構成に専用のアーカイブ・データベースが必要です。Business Process Archive Manager の構成が複数ある場合は、それぞれの構成に独自のデータベースまたはデータベース・スキーマが必要になります。Business Process Archive の複数の構成で Business Process Archive Manager データベース表を共用することはできません。

1. このデータベースを使用する Business Process Archive Manager を決定します。
2. この Business Process Archive Manager にデータをアーカイブするソース Business Process Choreographer 構成を決定します。
3. アーカイブ・データベースのタイプは、Business Process Choreographer 構成で使用されているものと同じでなければなりません。
 - a. 新規データベースの名前を決定します。デフォルト名は BPARCDB です。
 - b. データベース・タイプに応じて、ホスト名、ポート番号、ユーザー ID などの接続情報を決定します。

注: DB2 for z/OS データベースを使用しており、アーカイブ・データベースと Business Process Choreographer データベースの両方に同じ DB2 サブシステムを使用したい場合は、別のデータベース名および別のユーザー ID を使用する必要があります。

これで、Business Process Archive Manager のデータベースの計画が完了しました。

Business Flow Manager および Human Task Manager の計画

Business Flow Manager と Human Task Manager は、Business Process Choreographer 構成の中核を形成します。これらの構成パラメーターを計画する必要があります。

1. Business Flow Manager メッセージ駆動型 Bean で run-as ユーザー ID として使用される、Java Message Service (JMS) プロバイダーのユーザー ID を確認してください。管理コンソールおよび 134 ページの表 58 では、「**JMS API 認証ユーザー**」とされています。
2. Human Task Manager メッセージ駆動型 Bean で run-as ユーザー ID として使用される Java Message Service (JMS) プロバイダーのユーザー ID を確認してください。管理コンソールおよび 134 ページの表 58 では、「**エスカレーション・ユーザーの認証ユーザー**」とされています。

3. 管理者とモニターのセキュリティー・ロールがマップされるグループまたはユーザー ID が判明していることを確認します。詳しくは、135 ページの表 59 を参照してください。
4. Human Task Manager でエスカレーション・イベントの E メール通知を送信する場合、Simple Mail Transfer Protocol (SMTP) E メール・サーバーが配置されている場所のホスト名または IP アドレスを識別します。通知 Eメールの送信者アドレスを計画します。Eメール・サービスで認証が必要な場合、サービスへの接続に使用するユーザー ID およびパスワードを確認してください。
5. API の Web サービス・バインディングのコンテキスト・ルートを決めます。
 - サーバーでの構成時:
 - Business Flow Manager のデフォルトは `/BFMIF_nodeName_serverName` です。
 - Human Task Manager のデフォルトは `/HTMIF_nodeName_serverName` です。
 - クラスターでの構成時:
 - Business Flow Manager のデフォルトは `/BFMIF_clusterName` です。
 - Human Task Manager のデフォルトは `/HTMIF_clusterName` です。
6. Business Process Choreographer Explorer、Business Space、または Representational State Transfer (REST) API あるいは JAX Web サービス API を使用するクライアントを使用する場合は、REST API および JAX Web Services API のコンテキスト・ルートを決めてください。
 - Business Flow Manager のデフォルトは `/rest/bpm/bfm` および `/BFMJAXWSAPI` です。
 - Human Task Manager のデフォルトは `/rest/bpm/htm` および `/HTMJAXWSAPI` です。
 - サーバー、単一クラスター、または異なる Web サーバーにマップされた複数のクラスターに構成されている場合は、デフォルト値を使用できます。
 - Network Deployment 環境内で、同じ Web サーバーにマップされた複数のデプロイメント・ターゲットに構成されている場合は、デフォルト値を使用しないでください。各 Business Process Choreographer 構成のコンテキスト・ルートは、ホスト名とポートの組み合わせごとに固有のものでなければなりません。これらの値は、Business Process Choreographer の構成後に、管理コンソールを使用して手動で設定する必要があります。
7. 初期設定で Business Flow Manager または Human Task Manager (あるいはこの両方) の監査ロギングを使用可能にするかどうかを決めます。
8. Business Process Choreographer Explorer レポート作成機能を使用する場合は、Common Event Infrastructure ロギング・イベントを生成するように Business Flow Manager を初期設定するかどうかを決めます。

これで、Business Flow Manager および Human Task Manager のすべての初期構成パラメーターの計画が完了しました。これらの設定は、管理コンソールを使用して後でいつでも変更することができます。

担当者ディレクトリー・プロバイダーの計画

Business Process Choreographer の担当者ディレクトリー・プロバイダー、担当者の代替、virtual member manager、および Lightweight Directory Access Protocol (LDAP) の設定を計画します。

1. ヒューマン・タスクを使用する場合は、使用する担当者ディレクトリー・プロバイダーを決めます。

Virtual Member Manager (VMM) 担当者ディレクトリー・プロバイダー

VMM 担当者ディレクトリー・プロバイダーは、すぐに利用できるフェデレーテッド・リポジトリー (Virtual Member Manager と呼ばれる) であり、ファイル・リポジトリーを使用して WebSphere セキュリティー向けに事前構成されています。フェデレーテッド・リポジトリーと別のユーザー・リポジトリーを組み合わせる場合は、フェデレーテッド・リポジトリーを再構成する必要があります。VMM 担当者ディレクトリー・プロバイダーでは、代替を含む Business Process Choreographer の担当者割り当て機能がすべてサポートされています。これ

は、フェデレーテッド・リポジトリの機能 (LDAP、データベース、ファイル・ベース、およびプロパティ拡張リポジトリなど各種リポジトリ・タイプのサポートなど) を使用します。

VMM 担当者ディレクトリー・プロバイダーを使用するには、WebSphere Application Server セキュリティーに対応してフェデレーテッド・リポジトリを構成している必要があります。フェデレーテッド・リポジトリは、ファイル、LDAP、またはデータベースに基づいて 1 つ以上のユーザー・リポジトリに関連付けることができます。詳しくは、『フェデレーテッド・リポジトリ構成におけるレルムの管理』を参照してください。フェデレーテッド・リポジトリの使用について詳しくは、『IBM WebSphere Developer Technical Journal』を参照してください。

Lightweight Directory Access Protocol (LDAP) 担当者ディレクトリー・プロバイダー

この担当者ディレクトリー・プロバイダーは、使用前に構成しておく必要があります。ステップ 2 で計画を行います。

システムの担当者ディレクトリー・プロバイダー

この担当者ディレクトリー・プロバイダーは、構成せずに使用できます。実動システムではこのプロバイダーを使用しないでください。これは、アプリケーション開発テストでのみ使用するプロバイダーとして提供されています。

ユーザー・レジストリーの担当者ディレクトリー・プロバイダー

この担当者ディレクトリー・プロバイダーは、構成せずに使用できます。WebSphere セキュリティー・レルム定義に応じて、ユーザー・レジストリーは以下のリポジトリのいずれかを使用します。

- フェデレーテッド・リポジトリ - 以下を使用できます。
 - ファイル・レジストリー
 - 1 つ以上の LDAP
 - 1 つ以上のデータベース
- スタンドアロン LDAP
- スタンドアロン・カスタム
- ローカル・オペレーティング・システム

2. Lightweight Directory Access Protocol (LDAP) を使用する場合、以下を計画します。

- a. 場合によっては、使用する LDAPTransformation.xml ファイルをカスタマイズする必要があります。このファイルの場所と、カスタマイズする必要があるプロパティのリストについては、LDAP ユーザー・ディレクトリー・プロバイダーの構成を参照してください。
- b. 以下の LDAP カスタム・プロパティを計画します。

LDAP プラグイン・プロパティ	必須またはオプション	説明
AuthenticationAlias	オプション	例えば mycomputer/My LDAP Alias など、LDAP への接続に使用される認証別名。「セキュリティ」 > 「セキュア管理、アプリケーション、およびインフラストラクチャー」 > 「Java 認証・承認サービス」 > 「J2C 認証データ」をクリックして、管理コンソールでこの別名を定義する必要があります。別名が設定されていない場合、または AuthenticationType が simple に設定されていない場合は、LDAP サーバーへの匿名ログオンが使用されます。

LDAP プラグイン・プロパティ	必須またはオプション	説明
AuthenticationType	オプション	このプロパティを simple (単純認証) に設定する場合は、AuthenticationAlias パラメーターを指定する必要があります。このパラメーターを設定しない場合は、匿名認証が使用されます。
BaseDN	必須	例えば o=mycompany, c=us など、すべての LDAP 検索操作の基本識別名 (DN)。ディレクトリー・ルートを指定するには、単一引用符を 2 個使用して空ストリング '' を指定します。
Casesentiveness ForObjectclasses	オプション	LDAP オブジェクト・クラスの名前がケース・センシティブかどうかを決定します。
ContextFactory	必須	例えば com.sun.jndi.ldap.LdapCtxFactory など、Java Naming and Directory Interface (JNDI) コンテキスト・ファクトリーを設定します。
ProviderURL	必須	この Web アドレスは、LDAP JNDI ディレクトリー・サーバーおよびポートを指す必要があります。フォーマットは、例えば ldap://localhost:389 など、通常の JNDI 構文である必要があります。SSL 接続の場合は LDAP の URL を使用します。 ミラーリングされたデータを 2 台以上の LDAP サーバーで保持する高可用性構成の場合、それぞれの LDAP サーバーの URL を指定するように計画し、個々の URL はスペース文字で分離してください。
SearchScope	必須	すべての検索操作のデフォルト検索スコープ。baseDN プロパティの下の検索の深さを決定します。objectScope、onelevelScope、または subtreeScope のいずれかの値を指定します。
additionalParameter Name1-5 および additionalParameter Value1-5	オプション	これらの名前と値のペアを使用し、最大 5 つの任意の接続用 JNDI プロパティを LDAP サーバーに対してセットアップします。

3. virtual member manager を使用する場合は、以下を計画します。

- a. 場合によっては、使用する VMMTransformation.xml ファイルをカスタマイズする必要があります。このファイルの場所と、カスタマイズする必要があるプロパティのリストについては、Virtual Member Manager 担当者ディレクトリー・プロバイダーの構成を参照してください。

4. 担当者の代替を使用する場合は、以下の点を考慮に入れてください。

- VMM 担当者ディレクトリー・プロバイダーを使用する必要があります。LDAP、システム、およびユーザー・レジストリーの担当者ディレクトリー・プロバイダーは、担当者の代替をサポートしていません。
- 実稼働環境で担当者の代替を使用する場合、代替情報の格納先として VMM プロパティ拡張リポジトリを使用するように計画します。プロパティ拡張リポジトリは、セル全体で固有であり、セル内からアクセス可能である必要があります。暗黙的には、選択されたデータベースも同様です。BPEDB データベースは必ずしもセル内で固有ではないため、BPEDB は使用できません。共通データベース WPSRCDB を使用してプロパティ拡張リポジトリをホストできます。ただし実稼働環境では、他の Process Server データベースから独立したデータベースを使用することをお勧めします。
- 単一サーバーのテスト環境で担当者の代替を使用する場合は、フェデレーテッド・リポジトリ用に構成した内部ファイル・レジストリーに担当者代替情報を格納できます。

これで、担当者ディレクトリー・プロバイダーと担当者割り当てオプションの計画が完了しました。

Business Process Choreographer Explorer および Business Process Archive Explorer の計画

Business Process Choreographer Explorer および Business Process Archive Explorer の構成オプションおよびパラメーターを計画します。

Business Process Choreographer Explorer または Business Process Archive Explorer を使用する場合は、Business Process Choreographer または Business Process Archive Manager の構成時に Explorer を構成するか、後で Explorer を構成することができます。

レポート作成機能は、オプションであり、Business Process Choreographer Explorer および Business Process Archive Explorer と共に使用することができます。

1. 構成する Business Process Choreographer Explorer および Business Process Archive Explorer インスタンスの数、およびレポート作成機能を提供するかどうかを決定します。最初のインスタンスは Business Process Choreographer または Business Process Archive Manager の構成中に簡単に作成できます。
 - Business Process Choreographer Explorer の各インスタンスが接続できる Business Process Choreographer 構成は 1 つだけであるため、それぞれの Business Process Choreographer 構成に対して Business Process Choreographer Explorer インスタンスをセットアップすることが妥当です。
 - 同様に、Business Process Archive Explorer の各インスタンスが接続できる Business Process Archive Manager 構成は 1 つだけであるため、それぞれの Business Process Archive Manager 構成に対して Business Process Archive Explorer インスタンスをセットアップすることが妥当です。
 - カスタマイズ設定が異なる複数の Business Process Choreographer Explorer または Business Process Archive Explorer 構成を同じ Business Process Choreographer または Business Process Archive Manager に接続することが必要な場合もあります。それぞれのバージョンを独立してカスタマイズすることができます。カスタマイズできる内容については、Business Process Choreographer Explorer または Business Process Archive Explorer のカスタマイズを参照してください。
 - それぞれの Business Process Choreographer Explorer インスタンスのレポート作成機能でデータを読み取ることができる Business Process Choreographer Event Collector は 1 つだけであるため、レポート作成機能を持つ Business Process Choreographer Explorer インスタンスの数が、Business Process Choreographer Event Collector と同じになるように構成することを計画します。
 - Business Process Choreographer Explorer のレポート作成機能を構成した場合、Business Process Archive Explorer インスタンスで、同じレポート・データベースに接続することにより、同じレポート作成機能を提供することができます。
2. 必要な Business Process Choreographer Explorer および Business Process Archive Explorer インスタンスごとに、以下を計画します。
 - a. インスタンスの構成先のデプロイメント・ターゲット。
 - 各サーバーまたはクラスター上に複数の Business Process Choreographer Explorer インスタンスおよび Business Process Archive Explorer インスタンスを構成できます。インスタンスが Business Process Choreographer Explorer または Business Process Archive Explorer のように動作するかは、実際には、そのインスタンスの接続先の構成によって決まります。
 - Event Collector 構成が存在する場所に関係なく、任意のデプロイメント・ターゲットにインスタンスを作成できます。
 - b. コンテキスト・ルート。これはセル内で固有でなければなりません。Business Process Choreographer Explorer のデフォルトは /bpc です。Business Process Archive Explorer のデフォルトは /bpcarchive です。
 - c. Business Process Choreographer Explorer の URL (この URL は、例えば、エスカレーション E メールに挿入されます)。

- d. Business Process Choreographer Explorer を構成しようとしている場合は、Business Flow Manager と Human Task Manager の Representational State Transfer (REST) API エンドポイントの URL について計画を立てます。REST API で計画したコンテキスト・ルートの値と一致する必要があります。例えば、Human Task Manager Web サービスのコンテキスト・ルートが `/rest/bpm/htm` である場合、Human Task Manager REST API エンドポイントのエンドポイント URL は、**`http://hostname:port/rest/bpm/htm`** になります。
- e. 照会に対して返される結果の最大数。デフォルトは 10000 です。
- f. この Business Process Choreographer Explorer または Business Process Archive Explorer が接続する Business Process Choreographer または Business Process Archive Manager インスタンスのデプロイメント・ターゲット (サーバーまたはクラスター)。
- g. レポート作成機能を Business Process Choreographer Explorer または Business Process Archive Explorer と共に使用する場合は、『Business Process Choreographer Explorer レポート作成機能の計画 (非推奨)』を行います。計画と構成は後で行うこともできます。

これで、Business Process Choreographer Explorer および Business Process Archive Explorer の構成オプションの計画が完了しました。

Business Process Choreographer Explorer レポート作成機能の計画 (非推奨):

Business Process Choreographer Explorer レポート作成機能は推奨されません。BPEL Process についてモニターおよびレポートするには、IBM Business Monitor を使用します。

このトピックでは、Business Process Choreographer Explorer レポート作成機能と Event Collector の構成計画について説明します。

Business Process Choreographer Explorer レポート作成機能を使用する場合は、その構成を Business Process Choreographer Explorer の構成時に行うことも、後で行うこともできます。

注: Business Process Archive Manager に対して Event Collector を構成することはサポートされていませんが、Business Process Archive Explorer でも、Business Process Choreographer 構成の Event Collector 用にセットアップされた既存のアーカイブ・データベース・データ・ソースを使用することにより、レポート作成機能を提供できます。

1. レポート作成機能へのアクセス権限を Business Process Choreographer Explorer のすべてのユーザーには付与しない場合は、レポート作成機能用に別の Business Process Choreographer Explorer インスタンスを構成し、そのインスタンスを通常のユーザーからアクセス不能にするように計画します。
2. Business Process Choreographer Explorer レポート作成機能の各種トポロジー・エレメントの目的とエレメント間の関係を理解します。

Business Process Choreographer Explorer レポート作成機能

バージョン 6.2 より前は、この機能は Business Process Choreographer Observer として利用可能でした。バージョン 6.2 以降では、この機能は統合され、Business Process Choreographer Explorer と Business Process Archive Explorer の両方で使用できるようになりました。この機能は「レポート」タブにあります。この機能を使用するには、まず Business Process Choreographer Explorer レポート作成機能を構成する必要があります。

Event Collector アプリケーション

このアプリケーションは、Common Event Infrastructure (CEI) サーバーが構成されているクラスターまたはサーバー上にデプロイする必要があります。各 CEI デプロイメント・ターゲットについて、Event Collector を 1 つだけ持つことができます。Business Process Choreographer が構

成されているターゲット上にデプロイする必要はありません。CEI からビジネス・プロセス・イベントを受信して変換し、変換したイベントをレポート・データベースに書き込みます。

レポート・データベース

Event Collector と Business Process Choreographer Explorer レポート作成機能は、同じデータベースを使用して情報を交換します。非実動システムの場合、他のコンポーネントとデータベースを共有できます。

選択肢は、セットアップされている Business Process Choreographer のトポロジーから独立していません。可能な構成について詳しくは、108 ページの『Business Process Choreographer Explorer レポート作成機能 概要 (非推奨)』を参照してください。

3. セットアップの目的、システムの要件、およびトポロジーの影響を確認します。

単純なセットアップ

構成と管理が単純であるが、パフォーマンスが低いセットアップでは、Business Process Choreographer Explorer および CEI が構成されているデプロイメント・ターゲットに Event Collector アプリケーションをデプロイし、ローカル・データベース・システムを使用します。

負荷が高い実動システム: Network Deployment

複数ノードで構成されるセルと複数のクラスターを使用します。Business Process Choreographer Explorer のインスタンスを、セル内のデプロイメント・ターゲットにデプロイします。Event Collector アプリケーションを、Common Event Infrastructure (CEI) を構成したクラスターにデプロイします。個別のデータベース・サーバーを使用します。

4. Business Process Choreographer Explorer レポート作成機能のデータベースについてまだ計画していない場合は、144 ページの『レポート・データベースの計画』を行います。
5. 構成する Event Collector インスタンスごとに、以下を計画します。
 - a. インスタンスをデプロイするかどうかを決定します。デプロイメント・ターゲットごとに 1 つの Event Collector インスタンスのみをデプロイできます。また、デプロイメント・ターゲットでは CEI が構成されている必要があります。
 - b. この Event Collector インスタンスの構成方法を決定します。
 - 管理コンソールを使用する。このオプションについて詳しくは、管理コンソールを使用した Business Process Choreographer Event Collector の構成を参照してください。
 - 対話式 setupEventCollector ツールを使用する。このオプションについて詳しくは、setupEventCollector ツールを使用した Business Process Choreographer Event Collector の構成を参照してください。
 - Business Process Choreographer 構成の作成時に、bpeconfig.jacl スクリプトを使用する。**-createEventCollector** オプションにはデフォルト値 `yes` が設定されています。

注: ハイパフォーマンス・システムについては、bpeconfig.jacl を使用して Business Process Choreographer Explorer レポート作成機能を構成しないでください。この理由は、bpeconfig.jacl は Event Collector および Business Process Choreographer Explorer レポート作成機能 アプリケーションを、Business Process Choreographer 構成と同じデプロイメント・ターゲットに構成するためです。このオプションについて詳しくは、topics/t2co_bpeconfig.dita を参照してください。

Event Collector を対話モードで構成する場合は、bpeconfig.jacl は使用できません。

- c. データ・ソースを計画します。

- Business Process Choreographer Explorer レポート作成機能が Business Process Choreographer と同じ物理データベースを共有している場合は、レポート・データベースに別のデータ・ソースを使用することを計画し、その JNDI 名を計画します。
 - データベースに使用する認証別名を計画します。
 - セルの有効範囲を使用してデータ・ソースを作成するように計画します。
- d. Event Collector の構成時に必要な構成パラメーターを計画します。
- レポート・データベースの JNDI データ・ソース名。
 - データベース・オブジェクトに使用するスキーマ。デフォルトは、データベースへの接続に使用するユーザー ID です。
 - データベースへの接続に使用するユーザー ID。デフォルトはデータベースによって異なります。DB2 の場合、デフォルトは db2admin、Oracle の場合、デフォルトは system、その他のデータベースの場合、デフォルトはログオン・ユーザーのユーザー ID です。
 - ユーザー ID のパスワード。
 - タイプ 4 JDBC ドライバーを使用する場合は、データベース・サーバーのホスト名または IP アドレスと、データベース・サーバーが使用するポート番号も収集します。
 - Event Collector をデプロイするかどうかを決定します。デプロイメント・ターゲットでは CEI が構成されている必要があります。したがって、CEI のための別のクラスターがある場合は、Event Collector をそのクラスターにデプロイするよう計画してください。
 - Network Deployment 環境に Event Collector をデプロイする場合は、CEI バスのメッセージング・エンジンが構成されているデプロイメント・ターゲットを確認しておいてください。
 - CEI バスのセキュリティーが有効な場合、CEI バスでの認証に使用する JMS ユーザー ID を計画します。
 - CEI イベントによるビジネス・イベントのログ記録を Event Collector の構成時に有効にするか、後で管理コンソールを使用するかスクリプトを実行してログ記録を有効にするかを決定します。
- e. ランタイム構成値を計画します。場合によっては、Event Collector の構成後にニーズに合わせてランタイム構成値をカスタマイズする必要があります。
- BpcEventTransformerEventCount
 - BpcEventTransformerMaxWaitTime
 - BpcEventTransformerToleranceTime
 - ObserverCreateTables
 - 認証別名ユーザー ID がデータベース・スキーマを所有していない場合は、ObserverSchemaName を計画します。

これらの値について詳しくは、Business Process Choreographer Explorer レポート作成機能の構成パラメーターの変更を参照してください。

6. 構成する Business Process Choreographer Explorer レポート作成機能ごとに、以下を計画します。

- このインスタンスの構成方法を決定します。
 - Business Process Choreographer Explorer の作成時に、Business Process Choreographer Explorer の管理コンソール・ページを使用する。このオプションについて詳しくは、管理コンソールを使用した Business Process Choreographer Explorer レポート作成機能の構成を参照してください。
 - Business Process Choreographer Explorer の作成時に、clientconfig.jacl スクリプトを使用する。
 - Business Process Choreographer 構成の作成時に、bpeconfig.jacl スクリプトを使用する。

注: ハイパフォーマンス・システムについては、bpeconfig.jacl を使用して Business Process Choreographer Explorer レポート作成機能 を構成しないでください。この理由は、bpeconfig.jacl は Event Collector および Business Process Choreographer Explorer レポート作成機能 アプリケーションを、Business Process Choreographer 構成と同じデプロイメント・ターゲットに構成するためです。このオプションについて詳しくは、topics/t2co_bpeconfig.ditaを参照してください。

- レポート・データベースのスキーマ名。
- レポート作成機能を提供するためにレポート・データベースに接続するときに Business Process Choreographer Explorer または Business Process Archive Explorer で使用できるデータ・ソースの JNDI 名。

7. bpeconfig.jacl スクリプトを使用して Business Process Choreographer を構成する場合:

- スクリプトをバッチ・モードで実行する場合、デフォルトでは、Event Collector アプリケーションと Business Process Choreographer Explorer アプリケーションも、Business Process Choreographer 構成と同じデプロイメント・ターゲットで構成されます。
- Event Collector および Business Process Choreographer Explorer のいずれかあるいは両方を bpeconfig.jacl で構成しない場合は、bpeconfig.jacl のオプションである **-createEventCollector no** と **-createExplorer no** のいずれかまたは両方を使用するように計画します。これらのオプションを指定すると、bpeconfig.jacl がこれらのアプリケーションを構成しません。

これで、Business Process Choreographer Explorer レポート作成機能と Event Collector の構成オプションの計画が完了しました。

Business Process Archive の計画

Business Process Archive Manager を構成すると、完了済みのプロセス・インスタンスおよびヒューマン・タスクに関連付けられているデータを BPEDB データベースから別のアーカイブ・データベースに移動することができます。

Business Process Archive Manager エlement、アーキテクチャー、および可能な構成について理解するため、111 ページの『BPEL Process アーカイブの概要』を参照してください。

Business Process Archive Manager には専用のデータベースが必要です。アーカイブされたプロセス・インスタンスおよびヒューマン・タスクのデータにアクセスするには、Business Process Archive Explorer を使用することができます。または、Process Archive Manager EJB API を使用して、アーカイブされたデータにカスタム・クライアントからアクセスできるようにします。データベース・クリーンアップ手順またはアーカイブを実行しないと、ランタイム・データベースのサイズが次第に大きくなり、その結果、データベース・パフォーマンスが徐々に低下する可能性があります。

1. それぞれの最上位 BPEL Process および最上位ヒューマン・タスクについて、保持、アーカイブ、および削除に関する以下の要件を検討します。
 - a. どれだけの期間、Business Process Choreographer データベースに保持してから削除またはアーカイブに移動するか。
 - b. アーカイブする場合は、どのアーカイブに移動し、どのユーザーにアクセス権が必要か。
 - c. アーカイブするべきインスタンスが Business Process Choreographer データベースから削除されないようにするため、アーカイブ・ポリシーとクリーンアップ手順の整合性をとる。クリーンアップ手順について詳しくは、Business Process Choreographer のクリーンアップ手順を参照してください。
2. 必要な Business Process Archive Manager 構成の数を決定します。以下の点を考慮してください。
 - それぞれの Business Process Archive Manager 構成を使用してアーカイブできるのは、1 つの Business Process Choreographer 構成からのデータのみです。

- 複数の Business Process Archive Manager 構成を使用して、同一の Business Process Choreographer 構成からデータをアーカイブすることができます。
 - Business Process Archive データベース間の統合機能は、IBM Business Process Manager Advanced には組み込まれていません。
 - 複数の Business Process Archive Manager 構成が必要な場合の例として、異なるアプリケーションに属するプロセス・インスタンスおよびタスク・インスタンスを同じ Business Process Choreographer 構成で処理するケースが挙げられます。
3. それぞれの Business Process Archive Manager 構成について、『Business Process Archive Manager の計画』を行います。
 4. 必要な Business Process Archive Explorer 構成の数を決定します。Business Process Archive Manager 構成に接続して連携する独自のカスタム・クライアントを開発する場合を除き、Business Process Archive Manager 構成ごとに 1 つの Business Process Archive Explorer 構成が必要になるものと思われます。
 5. それぞれの Business Process Archive Explorer 構成について、153 ページの『Business Process Choreographer Explorer および Business Process Archive Explorer の計画』を行います。
 6. アーカイブされたプロセス・インスタンスおよびヒューマン・タスクに独自のカスタム・クライアントからアクセスできるようにしたい場合は、Business Process Archive Manager の EJB API のサポートを参照してください。

Business Process Archive Manager の計画:

Business Process Archive Manager を構成するには、完了済みのプロセス・インスタンスおよびヒューマン・タスクの移動先となるデータベースが必要です。

1. Business Process Archive Manager の場合は、以下を計画します。
 - a. この Business Process Archive Manager がサービスを提供するソース Business Process Choreographer 構成のデプロイメント・ターゲットを決定します。
 - b. Business Process Archive Manager のデプロイメント・ターゲットを決定します。デプロイメント・ターゲット上では、Business Process Choreographer 構成とも、他の Business Process Archive Manager 構成とも共存できないことに注意してください。ただし、アーカイブするインスタンスが含まれる Business Process Choreographer 構成と同じセル内に配置する必要があります。サポート・クラスターがある場合は、そのクラスター上に構成することを検討してください。
 - c. スクリプトを実行して Business Process Archive Manager を構成する前に、Business Process Archive Manager のデプロイメント・ターゲット上にサービス・コンポーネント・アーキテクチャー (SCA) を構成するための計画を立てます。Business Process Choreographer 構成で使用される SCA 構成のリモート・バス・メンバーの場所を確認する必要があります。Business Process Archive Manager の SCA の構成に関するその他の値については、データ・ストア設定のために事前に指定されている値を使用する必要がありますので、計画を立てる必要はありません。
 - d. Business Process Archive Manager を構成するときには使用できるのは bpeconfig.jacl スクリプトのみです。すべての構成パラメーターに関する計画を立てます。以下の表に、いくつかのガイドラインを示します。デフォルト値を含むこれらのパラメーターについて詳しくは、bpeconfig.jacl スクリプト・ファイルを参照してください。

表 63. Business Process Archive Manager 構成の bpeconfig.jacl パラメーターの計画

条件	計画における対応
デプロイメント・マネージャーが稼働していない場合のみ:	次の wsadmin オプションを指定します。 -conntype NONE

表 63. Business Process Archive Manager 構成の bpeconfig.jacl パラメーターの計画 (続き)

条件	計画における対応
デプロイメント・マネージャーが実行中で、管理セキュリティが有効な場合:	wsadmin の実行を許可されているユーザー ID について、次の wsadmin パラメーターを指定します。 -user <i>userName</i> -password <i>userPassword</i>
デフォルト・プロファイルを使用しない場合:	次の wsadmin パラメーターを指定します。 -profileName <i>profileName</i>
スクリプトを対話式で実行し、すべての必須パラメーターおよびオプション・パラメーターについてプロンプトが出されるようにする場合:	スクリプトを呼び出して、必要な wsadmin パラメーター (この表内の上記のパラメーター) のみを指定します。この表内で以下に記載されているスクリプト・パラメーターは指定しないでください。 スクリプト・パラメーターを一切指定しないことにより、 -promptMode がデフォルトで ASK に設定されます。
スクリプトを対話式で実行し、すべての必須パラメーターおよびオプション・パラメーターについてプロンプトが出されるようにし、さらに、一部のスクリプト・パラメーターを指定する場合:	必要な wsadmin パラメーターおよびスクリプト・パラメーターがあれば指定します。ただし、次のオプションも指定してください。 -promptMode ASK 指定したスクリプト・パラメーターについてもプロンプトが出され、指定した値がデフォルトとして提示されます。デフォルトは、受け入れることも、変更することもできます。
スクリプトを対話式で実行し、指定されていないオプションのスクリプト・パラメーターについてはプロンプトが出されることなくデフォルト値が設定されるようにする場合:	必要な wsadmin パラメーターおよびすべての必須スクリプト・パラメーターを指定します。ただし、次のオプションも指定してください。 -promptMode USE_DEFAULT 必須パラメーターが指定されていない場合、スクリプトは -promptMode ASK モードに切り替わります。
いずれかの必須パラメーターが指定されていないときにはプロンプトが出されるようにするのではなくスクリプトが失敗するようにする場合:	次のオプションを指定します。 -promptMode FAIL_IF_MISSING このオプションは、コンソールからの入力を受け取る可能性がない状況でスクリプトが呼び出される場合に使用してください。
応答ファイルを使用してスクリプトのパラメーター値を指定する場合:	次のオプションを指定します。 -options <i>responseFile</i> 詳しくは、bpeconfig.jacl スクリプト・ファイルでの -options パラメーターの説明を参照してください。
Business Process Archive Manager 構成を作成する場合:	次のオプションを指定します。 -operationMode ARCHIVE
デフォルト・サーバーで構成を作成しない場合:	次のいずれかのパラメーターを指定します。 -cluster <i>clusterName</i> または次の両方のパラメーター: -node <i>nodeName</i> -server <i>serverName</i>

表 63. Business Process Archive Manager 構成の bpeconfig.jacl パラメーターの計画 (続き)

条件	計画における対応
<p>すべての Business Process Archive Manager 構成について:</p>	<p>許可に関する必須パラメーターを指定します。</p> <pre>-jmsBFMRunAsUser userID -jmsBFMRunAsPwd password -jmsHTMRunAsUser userID -jmsHTMRunAsPwd password</pre> <p>Users と Groups で終わる以下の管理者パラメーターとモニター・パラメーターのペアの場合、いずれか 1 つまたは両方のパラメーターを指定する必要があります。</p> <pre>{-adminUsers userList -adminGroups groupList} {-monitorUsers userList -monitorGroups groupList}</pre> <p>管理ジョブ・ユーザー ID とパスワードは任意指定です。</p> <pre>-adminJobUser userID -adminJobPwd password</pre>
<p>API にデフォルトのコンテキスト・ルートを使用しない場合:</p>	<p>コンテキスト・ルートに関するオプション・パラメーターを指定します。</p> <pre>-contextRootBFMWS contextRootBFMWS -contextRootBFMREST contextRootBFMREST -contextRootHTMWS contextRootHTMWS -contextRootHTMREST contextRootHTMREST</pre>
<p>スクリプト・ファイルにより Business Process Archive データベースを作成することも、スクリプトを実行せずに SQL スクリプトの生成のみをすることもできる場合:</p>	<p>次のオプションを使用します。</p> <pre>-createDB { yes no }</pre> <p>yes を選択すると、bpeconfig.jacl スクリプトは、SQL ファイルを生成して実行し、デフォルトのテーブル・スペースにデータベース・オブジェクトを作成します。このスクリプトは、ハイパフォーマンス・システムには適していません。この場合、デプロイメント・マネージャーを停止し、-conntype NONE オプションを使用することも計画してください。</p> <p>no を選択したが、データベースが存在していない場合、ユーザーまたはデータベース管理者が生成された SQL スクリプトを実行する必要があります。ハイパフォーマンス・システムの場合、SQL スクリプトを実行する前にカスタマイズする必要がありますため、no を指定します。また、データベース作成権限がない場合は no を指定します。これにより、SQL スクリプトをデータベース管理者に提供し、カスタマイズと実行を依頼できます。</p> <p>また、サポートが制限されているデータベースを使用する場合にも no と指定してください。</p> <p>制約事項: このスクリプトでは、次のタイプのデータベースは作成できません。</p> <ul style="list-style-type: none"> • DB2 for z/OS • Oracle • リモート Microsoft SQL Server <p>yes を選択し、接続モードでスクリプトを実行し、実行時間がデフォルトのタイムアウトである 3 分を超えると、データベースまたはスキーマの作成が失敗することがあります。タイムアウトを変更する方法は、wsadmin スクリプト実行中の接続タイムアウトで説明されています。</p>

表 63. Business Process Archive Manager 構成の bpeconfig.jacl パラメーターの計画 (続き)

条件	計画における対応
<p>Business Process Archive Manager 構成ごとにデータベースが必要であるため:</p>	<p>次のパラメーターを指定します。</p> <pre>-dbType databaseType</pre> <p>また、使用しているデータベース・タイプに必要なパラメーターも指定します (詳しくは bpeconfig.jacl スクリプト・ファイルを参照)。</p> <pre>-dbVersion version -dbHome databaseInstallPath -dbJava JDBCDriverPath -dbName databaseName -dbUser databaseUser -dbPwd databasePassword -driverType JDBCDriverType -driverVersion JDBCDriverVersion -dbTablespaceDir databaseTablespacePath -dbServerName databaseServerName -dbServerPort databaseServerPort -dbStorageGroup DB2zOSSStorageGroup -dbConnectionTarget DB2zOSSubSystem -dbSchema schemaQualifier</pre> <p>クラスターでこのスクリプトをバッチ・モードで実行するときに、ご使用のデータベースが <code>-dbJava</code> パラメーターを必要とする場合は、クラスター・メンバーをホストするノードごとに、このパラメーターを次のように指定します。</p> <pre>-dbJava.nodeName JDBCDriverPath _on_nodeName</pre> <p>注: 次のいずれかのデータベースを使用している場合は、bpeconfig.jacl でデータベース・インスタンスも作成できます。</p> <ul style="list-style-type: none"> ローカルの DB2 for Linux, UNIX, or Windows
<p>すべての Business Process Archive Manager 構成で JMS プロバイダーが使用されている場合:</p>	<p>次のパラメーターを指定します。</p> <pre>-mqType { WPM MQSeries }</pre> <p>WPM を指定すると、Business Process Archive Manager は関連付けられている Business Process Choreographer 構成で使用されるメッセージング・エンジンと同じメッセージング・エンジンを使用します。</p> <p>注: MQSeries® オプションで WebSphere MQ の使用は推奨されません。</p>
<p><code>-mqType MQSeries</code> オプションを使用する場合:</p>	<p>次のパラメーターを指定します。</p> <pre>-createQM { yes no } -qmNameGet getQueueManagerName -mqClusterName mqClusterName -qmNamePut putQueueManagerName -mqHome MQInstallationDirectory</pre>
<p>Business Process Archive Manager と同じデプロイメント・ターゲットに Business Process Archive Explorer を実装しない場合:</p>	<p>次のパラメーターを指定します。</p> <pre>-createExplorer no</pre> <p>注: 後で clientconfig.jacl スクリプトを実行して、Business Process Archive Explorer 構成を作成することができます。</p>

表 63. Business Process Archive Manager 構成の bpeconfig.jacl パラメーターの計画 (続き)

条件	計画における対応
Business Process Archive Manager と同じデプロイメント・ターゲットに Business Process Archive Explorer を実装する場合:	<p>次のパラメーターを指定します。</p> <pre>-createExplorer yes -restAPIBFM restAPIURL -restAPIHTM restAPIURL</pre> <p>また、以下のいずれかのオプション・パラメーターも指定します。</p> <pre>-contextRootExplorer explorerContextRoot -hostName explorerVirtualHostname -maxListEntries maximum -remoteCluster clusterName -remoteNode nodeName -remoteServer serverName</pre> <p>これらのパラメーターを指定しない場合は、デフォルト値が使用されます。</p>
Business Process Archive Explorer を構成するがレポート作成機能を提供しない場合:	<p>次のオプションを指定します。</p> <pre>-reportFunction no</pre>
Business Process Archive Explorer を構成し、既存のレポート・データベースに接続することによってレポート作成機能を提供する場合:	<p>次のオプションを指定します。</p> <pre>-reportFunction yes -reportAtSnapshotRange number -reportCreateTables no -reportDataSource jndiName -reportSchemaName schemaName</pre>
すべての bpeconfig.jacl パラメーターが Business Archive Manager 構成に適用されるわけではないため:	<p>以下のパラメーターの値に関する計画を立てる必要はありません。</p> <pre>-createEventCollector -explorerHost -mailPwd -mailServerName -mailUser -medbPwd -medbUser -mqCreateTables -mqPwd -mqSchemaName -mqUser</pre> <p>これらのパラメーターのいずれかを指定しても、それらは無視されます。</p>

2. この Business Process Archive Manager のプロセス・アーカイブ・データベースについてまだ計画していない場合は、149 ページの『Business Process Archive データベースの計画』を行います。

これで、Business Process Archive Manager 構成およびそのデータベースの計画が完了しました。

リモート・クライアント・アプリケーションの計画

Business Process Choreographer API を使用し、Process Server クライアント・インストールで稼働するリモート Business Process Choreographer クライアント・アプリケーションを計画します。

アプリケーションで Business Process Choreographer API を 使用する場合は、Process Server クライアントのインストール済み環境を使用して完全な Process Server インストール済み環境に対してリモート側からアプリケーションを実行できます。クライアントは、完全な Process Server インストールよりも構成および管理が容易です。

Process Server クライアント・インストール済み環境には Process Server プロファイル・テンプレートが含まれていませんが、基盤となる WebSphere Application Server プロファイルを Feature Pack for SCA バージョン 1.0 (SDO 2.1.1 適用) で拡張する必要があります。つまり、Process Server クライアントを、フェデレート済みプロファイルのある既存の WebSphere Application Server インストール済み環境の上にインストールすることもでき、それらのフェデレート済み WebSphere Application Server プロファイルにより、Process Server クライアント機能をただちに利用できます。完全な Process Server サーバーではこのシナリオは実現できません。IBM Business Process Manager Advanced は、フェデレート済みプロファイルの拡張をサポートしていないためです。

1. Process Server クライアントのインストールを計画します。

- WebSphere Portal Server から Business Process Choreographer にアクセスする場合は、互換性のある Process Server クライアントをインストールする必要があります。

表 64. WebSphere Portal Server が Business Process Choreographer にアクセスするために使用できるクライアント・バージョン

	WebSphere Process Server (バージョン 7.5 以前) または Process Server クライアント・バージョン			
WebSphere Portal Server のバージョン	6.1.0.1	6.1.2	6.2	7.0
6.1.0.1	はい	はい	いいえ	いいえ
6.1.0.2	はい	はい	はい	いいえ
6.1.0.3	はい	はい	はい	いいえ
6.1.0.5	はい	はい	はい	いいえ

- クライアント・インストール済み環境は基本プロファイルを拡張しないため、フェデレート済みプロファイルを含む既存のプロファイルは、いずれも Process Server クライアントをただちに使用できません。
 - 既存の WebSphere Application Server インストールがない場合は、WebSphere Application Server Network Deployment インストールが作成されます。
2. 以下のどのタイプの Business Process Choreographer クライアント・アプリケーションを使用するかを決定します。
- カスタム・クライアント・アプリケーション
 - Business Process Choreographer Explorer

注: カスタマイズした JavaServer Pages (JSP) を使用する場合は、タスクおよびプロセス・メッセージ用の JSP ページの開発で説明しているように、その場所を調べておきます。

3. Business Process Choreographer を使用するカスタム・クライアント・アプリケーションを開発する場合は、アプリケーションで使用するインターフェースを計画します。プロセスおよびタスクは、以下のいずれかを使用して処理できます。
- Web サービス API, Java Messaging Service (JMS) API, または Representational State Transfer (REST) API: これらの API に基づくリモート・クライアント・アプリケーションでは、WebSphere Process Server のインストールは必要ありません。
 - JavaServer Faces (JSF) コンポーネント
 - Enterprise JavaBeans (EJB) API

注: Business Process Choreographer の EJB API を使用するクライアント・アプリケーションを開発する場合は、セッション Bean のリモート・インターフェースにアクセスするで説明している方法に従ってパッケージ化する必要があります。

4. Process Server クライアントをインストールするセルのタイプを決定するか識別します。
 - a. Business Process Choreographer を構成した管理対象サーバーまたはクラスターが存在するセルでは、リモート成果物ローダー (RAL) のデフォルト構成によってクライアントとサーバーの間で成果物の非セキュア伝送を実行できます。これを「単一セル」のシナリオと呼びます。
 - b. Business Process Choreographer が構成されている管理対象サーバーまたはクラスターを持たないセルには、さまざまなデプロイメント・マネージャーが存在します。これを「クロス・セル」のシナリオと呼びます。クライアント・アプリケーションが EJB API を使用する場合は、名前空間のバインディングを定義し、Business Process Choreographer が構成されているサーバーまたはクラスターをクライアント・アプリケーションが検出できるようにする必要があります。

リモート Business Process Choreographer クライアント・アプリケーションの計画が完了しました。

エラー防止およびリカバリーの計画

システムおよびアプリケーションのエラーの影響を最小化するために、エラー防止およびリカバリーの方法を作成することができます。

『エラー防止およびリカバリーの計画』の各トピックには、インフォメーション・センター・トピック、技術記事および IBM Redbooks などのさまざまなリソースへのリンクが含まれています。これらには WebSphere のシステム・リカバリー機能を活用するように設計された開発プロセスおよびシステム構成パターンに関する詳細な情報が提供されています。

エラー防止とリカバリーの概要

エラー防止とリカバリーの情報では、システム障害を引き起こす問題を回避する方法について説明し、通常の状態と異常な状態の両方で発生する可能性があるシステム障害からリカバリーする方法について、情報を提供しています。

IBM Business Process Manager は、ビジネス・プロセス管理 (BPM) ソリューションとサービス指向アーキテクチャー (SOA) ソリューションの実行および管理を可能にするために最適化されたミドルウェア・サーバーです。IBM Business Process Manager は WebSphere Application Server の基盤となる機能に基づいて構築されています。

ミドルウェア・システムはさまざまな条件下で実行されますが、従来、それらのすべてが『良好なパス (good path)』条件になっているわけではありません。IBM Business Process Manager の主要な機能の多くは、普通に見える動作から発生する可能性がある、不確実さに対処するためのものです。

想定および予期

『エラー防止およびリカバリーの計画』セクションの記載に従ってシステム障害およびリカバリーの情報を使用する前に、以下の想定リストを読んでください。

- IBM Business Process Manager およびその構築に使用されている基本のアーキテクチャー原則、ならびにそれが実行する基本的な種類のアプリケーションについて熟知している。
- 統合プロジェクトの計画および実施方法などの、統合プロジェクトについての基礎知識がある。
- 特に指定しない限り、システム障害およびリカバリーについての情報は、IBM Business Process Manager のバージョン 6.1.0 以降に関するものである。

注: 『エラー防止およびリカバリーの計画』セクションに含まれている情報は、リモート・メッセージングおよびリモート・サポートのパターンを想定しており、IBM Business Process Manager 用に 1 つ、メッセージング・エンジンおよび CEI イベント・サーバー用にそれぞれ 1 つずつの 3 つの別個のクラスターで構成されています。

エラー防止の計画

あらゆる IT 処理の場合と同様、極端なシチュエーションに対して計画を行って実行すれば、正常にリカバリーする確率は高くなります。

システムおよびアプリケーションのリカバリーを準備することに関しては、必須の考慮事項が数多くあります。これらの考慮事項は、次の 2 つのカテゴリに分類できます。

- アプリケーション設計の一部としてのエラー防止手段
- 開発プロセスの一部としてのエラー防止手段

アプリケーション設計の一部としてのエラー防止

アプリケーション設計の一部としてエラー防止手段を組み込むことは、特定の設計技法を実装し、製品の機能を使用して、システムおよびアプリケーションのエラーを防止することを意味します。

アプリケーションを正しく構築するためには、アーキテクチャーおよび設計のガイドラインと適切な標準と、その組み合わせとなるレビューおよびチェックポイントが完備された強力なシステム・ガバナンスが不可欠です。

アプリケーション設計の一部としてのエラー防止手段には、以下の要素が含まれています。

- 例外および障害に対する設計上の考慮事項の実装
- 既存の IBM Business Process Manager エラー処理機能とツールを使用するエラー処理方針の実装
- 接続グループの作成とモジュール・アプリケーション設計技法の使用

接続グループ:

接続グループは、SCA モジュール内に見られる特定の動作パターンを表します。

システムで考えられる要求ソースを表す接続グループを作成します。

接続グループでは以下を行います。

- インバウンド・データを取得するためのすべてのロジックを 1 つのモジュールに配置します。

これはアウトバウンド・データが、外部システムまたはレガシー・システムに送信される場合にも該当します。

- データを接続および変換するためのすべてのロジックを 1 つのモジュールに配置します。

他のすべてのモジュールもインターフェースの標準セットを使用できるようになったため、さらなる変換を考慮する必要はありません。

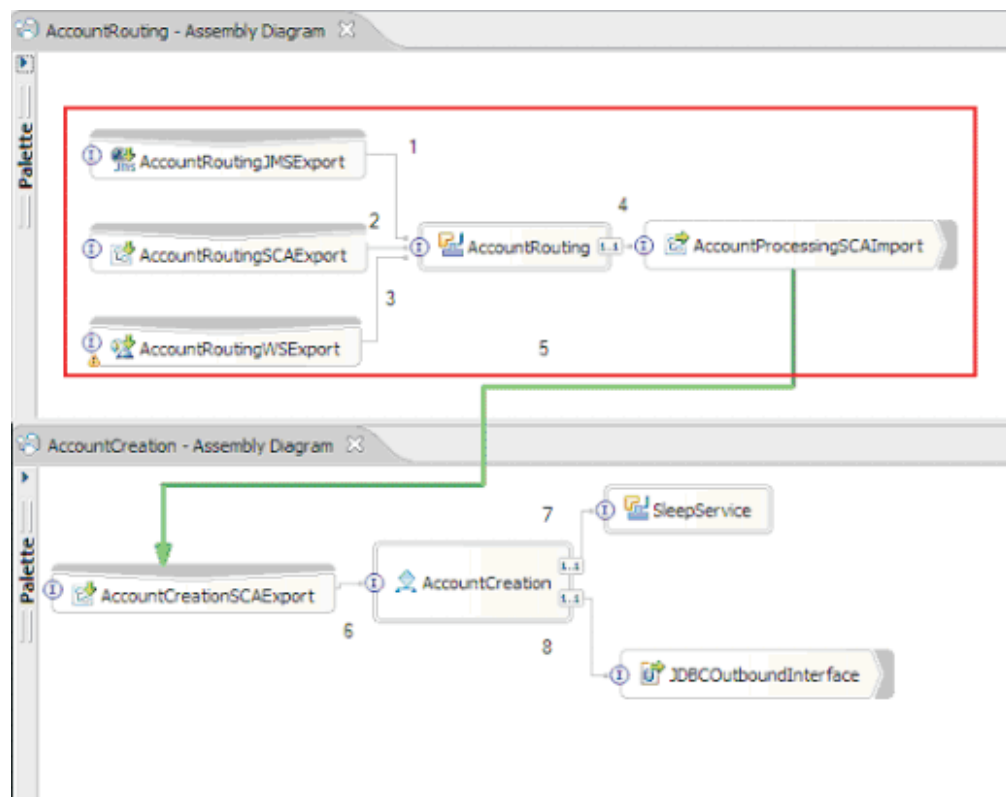
接続グループには、長期実行ビジネス・プロセスやビジネス・ステート・マシンのようなステートフル・コンポーネント・タイプが含まれません。これらの接続グループにより、特定のエンドポイントの統合要件をカプセル化して分離できます。一般に、WebSphere ESB メディエーション・モジュールがこの目的のために使用されるのは、「インフラストラクチャー」関連タスクを実装する便利な方法だからです。

接続グループの概念は、リカバリーの必要がある場合に、システムを休止状態にするための便利な方法として使用することもできます。接続グループ・モジュールはステートレスであるため、モジュールを一時的に停止して、システムが保持するイベントの処理を完了させる間、新規イベントのインバウンド・フローを遮断することができます。

注：インバウンド・イベントのフローを停止する場合、接続モジュールはインバウンドおよびアウトバウンドを同じモジュール内でサポートしてはいけません (同じ EIS システムがインバウンドとアウトバウンドの両方を持っている場合でも該当します)。インバウンドおよびアウトバウンドが同じモジュールでサポートされている場合、アウトバウンドはインバウンドと一緒にオフになります。このため、内部処理の実行が停止することがあります。このケースでは、インバウンドとアウトバウンドを分離することを検討してください。

システムがリカバリーされ、新規の作業を処理できるようになったら、これらのモジュールを再開できます。

以下の画面取りに外観が示されているモジュールは、接続グループの一部と見なされます。



接続グループは、SAP または CICS® などの外部ソースまたは既存システムからの入力用に使用できます。または、Web ブラウザー・ベースのクライアントからの新規作業のためにも使用できます。

例外および障害に対するアプリケーション設計上の考慮事項:

アプリケーション設計では、IBM Business Process Manager のエラー処理機能と障害処理機能の利点を活用することを考慮する必要があります。

包括的なエラー処理方法を作成するには、ソリューション設計者は、WebSphere Process Server および WebSphere ESB が宣言済みまたは宣言済みでない例外をどのように表すかを理解する必要があります。

SCA プログラミング・モデルには以下の 2 つのタイプの例外が提供されています。

- サービス・ビジネス例外

サービス・ビジネス例外は、ビジネス・メソッドの機能シグニチャー (WSDL 障害または Java スロー) で宣言されるチェック例外です。サービス・ビジネス例外では、アプリケーションまたはサービスによって予期されるエラー状態を識別します。これらの例外は、「チェック例外」と呼ばれることもあります。

例えば、株価サービスでの **InvalidSymbolException** があります。そのような例外は **ServiceBusinessException** によってラップされ、クライアントに戻されます。

- サービス・ランタイム例外

「システム例外」としても知られています。サービス・ランタイム例外は、メソッド・シグニチャーでは宣言されません。一般にこの例外は、Java コンポーネントでの **NullPointerException** などのように、アプリケーションによって予期されていないエラー状態を表します。

これらの例外は、**ServiceRuntimeException** によってラップされ、クライアントに戻されます。クライアントは **ServiceRuntimeException** について問い合わせる原因を判別できます。

注: SCA レベルで動作するとき、これらの例外は障害と呼ばれることもあります。ただし、Java コードを使用するときは、これらはたいてい例外と呼ばれます。

コンポーネントから **ServiceRuntimeException** が throw されると、現在のトランザクションがロールバックされます。

サービス・ビジネス例外の処理:

サービス・ビジネス例外は、アプリケーションまたはサービスによって予期される既知および宣言済みの例外を表します。

サービス・ビジネス例外は、サービス・インターフェースで定義されます。

コンポーネント開発者は、スローされる可能性がある例外を宣言することに注意を払い、消費側のサービスでそれらの例外を処理できるようにしてください。例えば、銀行用アプリケーションのビジネス障害には、「無効な口座番号」または「資金不足」がビジネス例外として含まれる場合があります。したがって、サービスを呼び出すアプリケーションには、無効な口座番号が渡された場合や、\$100 を振り替えようとして口座に \$50 しかなかった場合などの状況を処理するロジックを組み込んでおく必要があります。これらは、呼び出し側のアプリケーションが処理するように設計されたタイプのビジネス・エラーです。IBM Business Process Manager のビジネス例外は、catch して適切に処理するクライアントに戻されます。

ビジネス・サービス例外を処理する場合、サービス・コンシューマーは、宣言済みのビジネス例外の場合に以下のアクションのいずれかを実行するようにクライアントを実装します。

1. 例外を catch して、呼び出し側のアプリケーションに適したサービス・ビジネス例外を作成します。

これは、元の例外を新規例外に含める (ラッピングする) ことを意味する場合があります。これが最も頻繁に行われるのは、呼び出し側のモジュールが、呼び出し先のサービスと同じビジネス例外を持たない場合です。例外を catch して、呼び出し側のアプリケーションのためにサービス・ビジネス例外を作成するフローの例を以下に示します。

- a. モジュール A は SBE 「MoneyTransferFailed」を持つ
- b. モジュール B は SBE 「InsufficientFunds」を持つ

- c. モジュール A はモジュール B を呼び出し、「InsufficientFunds」例外を取得する
- d. モジュール A は、資金の不足という元のエラーを定義するストリングを格納できる場所を持つ、新規例外「MoneyTransferFailed」を作成する必要がある。

2. 例外を catch して代替ロジックを実行します。

サービス・ランタイム例外の処理:

サービス・ランタイム例外は、未宣言の例外です。一般にこの例外は、アプリケーションによって予期されていないエラー状態を表します。

サービス・ランタイム例外を使用して、実行時の予期せぬ状態を知らせます。

コンポーネント開発者は、次の方法でサービス・ランタイム例外を処理できます。

1. それらの例外を catch し、何らかの代替ロジックを実行します。

例えば、あるパートナーが要求を処理できなくても、別のパートナーでは処理できることもあります。

2. 例外を catch し、クライアントに「再スロー」します。

3. その例外をビジネス例外に再マップします。

例えば、パートナーがタイムアウトになると、ビジネス例外が生成される可能性があります。その例外では、ほとんどの要求が処理されたものの、完了していない 1 つの要求が残されており、その要求を後に再試行するか、異なるパラメーターを指定して試行すべきことが示されます。

例外が catch されない場合、例外は現行コンポーネントを呼び出したコンポーネントに渡されます。この呼び出しチェーンは、チェーンの最初の呼び出し元に戻るまで続きます。例えば、**Module A** が **Module B** を呼び出し、**Module B** が **Module C** を呼び出して、**Module C** が例外をスローすると、**Module B** は例外を catch する場合も、またはしない場合もあります。**Module B** が例外を catch しない場合、例外は **Module A** まで戻されます。

コンポーネントから **ServiceRuntimeException** が throw されると、現在のトランザクションがロールバックされます。このタイプの例外処理は、チェーン内のすべてのコンポーネントに対して繰り返されます。例えば、**Module C** から **ServiceRuntimeException** がスローされた場合は、そのトランザクションに、ロールバック対象としてのマークが付けられます。次にその例外は **Module B** にスローされ、**Module B** で例外が catch されず、別のトランザクションが存在する場合は、そのトランザクションもロールバックされます。コンポーネント開発者は、呼び出しが現行トランザクションと新規トランザクションのどちらで行われるかを制御するサービス品質 (QoS) 修飾子を使用できます。例えば、**Module A** が **Module B** を呼び出し、**Module B** が新しいトランザクションの一部である場合、**Module A** は **Module B** からの **ServiceRuntimeException** を "catch" することで、**Module A** のトランザクションをロールバックすることなく、処理を続行できます。

注: ランタイム例外はインターフェースの一部として宣言されていないため、コンポーネント開発者は、例外の解決を試みて、クライアントがユーザー・インターフェースである場合にランタイム例外がクライアントまで不意に伝搬されるのを防止してください。

ロールバックされるトランザクションの内容は、トランザクションの性質によって異なることに注意してください。例えば、長期実行の BPEL プロセスは、多数の小規模なトランザクションにセグメント化することができます。非同期要求および応答の呼び出しは、自動的にトランザクションから切り離されます (そうしないと、呼び出し側のアプリケーションが長時間にわたって応答を待たなければならなくなります)。

1 つのトランザクションが、(1 つの大きなトランザクションとして扱われるのではなく) 複数の非同期呼び出しに分割される場合、トランザクションの最初の作業は `ServiceRuntimeException` の発生時にロールバックします。ただし、非同期呼び出しの応答が別のトランザクションから送信された場合、その非同期呼び出しの応答の行き先がなくなるため、Failed Event Manager (FEM) でイベントが作成されます。

以下に、`ServiceRuntimeException` の現行サブクラス 4 つを示します。

1. `ServiceExpirationRuntimeException`

この例外を使用して、非同期 SCA メッセージの有効期限が切れたことを示します。有効期限は、サービス参照で `RequestExpiration` 修飾子を使用して設定できます。

2. `ServiceTimeoutRuntimeException`

この例外を使用して、非同期要求への応答を構成された期間内に受信しなかったことを示します。有効期限は、サービス参照で `ResponseExpiration` 修飾子を使用して設定できます。

3. `ServiceUnavailableException`

この例外を使用して、インポートを介して外部サービスを呼び出し中にスローされた例外が存在することを示します。

4. `ServiceUnwiredReferenceRuntimeException`

この例外を使用して、コンポーネントでのサービス参照が正しくワイヤーされていないことを示します。

第 6 章 IBM Business Process Manager Advanced のインストールおよび構成

IBM Business Process Manager Advanced を単一サーバー上にインストールおよび構成すること (スタンドアロン構成と呼ばれます) も、そのコンポーネントを複数のシステムに分散させること (Network Deployment 構成と呼ばれます) もできます。

ソフトウェアのインストールおよび構成の準備

ソフトウェアのインストールおよび構成を準備する前に、作成するデプロイメント環境の計画を作成します。

IBM Business Process Manager のインストールおよび構成の準備を行う場合は、以下の表に記載された情報を使用してください。

表 65. インストールおよび構成の準備

タスク	情報の入手先	タスクの実行結果
ハードウェアおよびソフトウェア要件を確認する	IBM BPM の構成に応じて、以下を参照してください。 <ul style="list-style-type: none">IBM Business Process Manager Advanced system requirementsIBM Business Process Manager Standard system requirementsIBM Business Process Manager Express system requirements	ご使用の IBM Business Process Manager インストールをサポートするために必要なシステム要件について理解します。
オペレーティング・システムを準備する	AIX AIX システムのインストール準備 Linux Linux システムのインストール準備 Solaris インストールに向けた Solaris システムの準備 Windows Windows システムのインストール準備	使用する各ワークステーションのオペレーティング・システムが準備されます。

表 65. インストールおよび構成の準備 (続き)

タスク	情報の入手先	タスクの実行結果
データベース管理システムがインストールされているか確認する	使用するデータベース管理システムのインストールおよび管理の詳細については、データベースの資料を参照してください。	<p>データベース管理システムがインストールされます。</p> <p>IBM Business Process Manager によって DB2 Express データベースが組み込まれます。データベースとして DB2 Express を使用する場合は、インストーラーからデータベース機能として DB2 Express を選択すると、DB2 Express が自動的にインストールおよび構成されます。DB2 Express をインストールするには、管理特権 (管理者または root ユーザー) が必要で、既存の DB2 データベース・サーバーがシステム上にあってはなりません。</p> <p>注: 既に DB2 の特定のバージョンがインストールされていて DB2 Express をインストールする場合は、DB2 をアンインストールしてから IBM Business Process Manager インストーラーを実行する必要があります。インストーラーから DB2 Express をインストールするように選択した場合に、インストーラーが特定のバージョンの DB2 がインストールされていることを検出すると、警告メッセージが表示され、DB2 Express をインストールすることができなくなります。</p> <p>重要: Linux DB2 Express を root ユーザーとしてインストールする場合、DB2 Express のインストールを開始する前に、すべてのカーネル要件を満たしておく必要があります。カーネル要件のリストについては、カーネル・パラメーターの要件 (Linux) を参照してください。現行値は、<code>ipcs -l</code> コマンドの出力を解析することによって見つけることができます。</p>

製品インストール用のオペレーティング・システムの準備

IBM Business Process Manager Advanced をインストールする前に、オペレーティング・システムを準備する必要があります。構成は、ご使用のオペレーティング・システムのタイプによって異なります。

インストール環境を準備する前に、以下の作業を実行してください。

- IBM Business Process Manager Advanced をインストールするシステム上でファイアウォールが実行されている場合は、ファイアウォールを無効にします。
- ご自分のユーザー・ログインが、DB2 または Oracle データベースのコマンドにアクセスできることを確認します。
- ご使用のオペレーティング・システムに固有の追加作業を実行します。

重要: IBM Business Process Manager 7.5.0 を **Windows Server 2003** または **Windows 7 (英語版)** でインストールし、IBM Process Portal の「設定」->「インターフェース言語」でロケールをチェコ語に切り替えると、IBM Process Designer のいくつかのパネルでテキストが文字化けして表示されます。IBM Process Designer をチェコ語のロケールで開始しても、テキストは文字化けして表示されます。

ヒント: この問題を解決するには、システム設定を以下のように変更します。

- **Windows Server 2003** の場合: 「地域と言語のオプション」->「詳細設定」->「Unicode 対応でないプログラムの言語」->「チェコ語」に設定
- **Windows 7** の場合: 「地域と言語」オプション->「管理」タブ->「システム ロケールの変更...」(「Unicode 対応でないプログラムの現在の言語」の下)->「チェコ語」を選択

AIX システムのインストール準備

IBM Business Process Manager をインストールする前に、AIX オペレーティング・システムを準備する必要があります。

WebSphere Application Server は IBM Business Process Manager の前提条件であるため、WebSphere Application Server インフォメーション・センターの『製品インストールのためのオペレーティング・システムの準備』というトピックの、必要な準備手順をすべて実行する必要があります。

注: ただし、WebSphere Application Server のインストールに関連する以下の点に注意してください。

- IBM Business Process Manager V7.5 によってインストールされる WebSphere Application Server Network Deployment V7.0 は、インストールに IBM Installation Manager を使用しますが、InstallShield Multiplatform (ISMP) は使用しません。ISMP の実行について具体的に言及する前提条件は無視してください。
- IBM Business Process Manager V7.5 によってインストールされる WebSphere Application Server Network Deployment V7.0 は、フィックスパックおよびインテリム・フィックスをインストールするのに IBM Installation Manager を使用しますが、WebSphere Update Installer は使用しません。WebSphere Update Installer の実行について具体的に言及する前提条件は無視してください。

一部のステップはオペレーティング・システムの 1 つのバージョンに特定であるため、すべてのステップがご使用の環境に該当するとは限りません。ステップに修飾子が示されていない場合、そのステップはオペレーティング・システムのすべてのバージョンで実行してください。

64 ビット AIX システムで稼働するように Installation Manager を構成するための追加の準備情報については、技術情報『Installation Manager graphical environment issues』を参照してください。

IBM Business Process Manager をインストールする前に、AIX システム上で以下の手順を実行します。

1. 32 ビット WebSphere Application Server を 64 ビット・オペレーティング・システム上にインストールする場合は、適切な 32 ビット・ライブラリーがご使用の 64 ビット・システム上にインストールされていることを確認します。
2. オープン・ファイルの最大数を増やしてください。通常デフォルト設定では十分ではありません。オープン・ファイルの現在の最大数を調べるには、**ulimit -n** を使用します。以下の例は、8800 に増やされたオープン・ファイルの最大数を示しています。この数は、ほとんどのシステムで十分なものです。ulimit 要件は、インストール時に動的に計算されるので、場合によっては選択したオプションに基づいて大きくする必要があります。

インストール前に、以下のコマンドを実行します。

ulimit -n 8800

または、以下の手順でリソースしきい値ファイルを編集します。

- a. /etc/security/limits を開きます。
- b. **default** セクションを編集または追加し、次の行を組み込みます。

```
nofiles = 8800
```

- c. ファイルを保存して閉じます。
 - d. オペレーティング・システムからログオフしてから、再度ログインします。
3. 以下のコマンドを使用して、**umask** 値を **077** に設定します。

umask 077

値 **077** は、製品が許容する最も制限的な値です。以下のアクセス・レベルの場合は、オプションで、より制限の弱い **umask** 値を設定することを選択できます。

- 人間の管理者およびツールのグループに関する読み取り専用アクセス権限の場合は **037**
- 人間の管理者およびツールのグループに関する読み取り/書き込みアクセス権限の場合は **027**
- 人間の管理者およびツールのグループに関する読み取りアクセス権限、書き込みアクセス権限、および実行アクセス権限の場合は **007**

4. バージョン 3.5.x.x 以上の Mozilla Firefox がインストールされていることを確認してください。
5. データ移動サービスを開始する前に、接続リセット・エラーを回避するために、AIX オペレーティング・システムで構成されているプロセスの数を増加します。プロセスの数を増加するには、コマンドを使用するか、AIX インターフェースを使用してください。
 - 次のコマンドを実行します。

```
chgdev -l sys0 -a maxuproc='256'
```
 - AIX インターフェースで、**smitty** と入力し、「システム環境 (System Environments)」>「オペレーティング・システムの特性の変更/表示 (Change / Show Characteristics of Operating System)」>「許可されるユーザーあたりのプロセス数 (Number of processes allowed per user(Num.))」を選択します。
6. AIX システムの調整を行うための手順を実行します。
7. 関与するすべてのサーバーが同じ時刻に設定されていることを確認します。アプリケーション・クラスター、サポート・クラスター、データベース・クラスターを含め、すべてのクラスター・ノードのすべてのサーバーに同じネットワーク・タイム・プロトコルを使用してください。時刻の不一致は、システム・タスクの重複を含め、不安定な動作の原因になります。

Linux システムのインストール準備

IBM Business Process Manager をインストールする前に、Linux オペレーティング・システムを準備する必要があります。

WebSphere Application Server は IBM Business Process Manager の前提条件であるため、WebSphere Application Server インフォメーション・センターの『製品インストールのためのオペレーティング・システムの準備』というトピックの、必要な準備手順をすべて実行する必要があります。

注: ただし、WebSphere Application Server のインストールに関連する以下の点に注意してください。

- IBM Business Process Manager V7.5 によってインストールされる WebSphere Application Server Network Deployment V7.0 は、インストールに IBM Installation Manager を使用しますが、InstallShield Multiplatform (ISMP) は使用しません。ISMP の実行について具体的に言及する前提条件は無視してください。
- IBM Business Process Manager V7.5 によってインストールされる WebSphere Application Server Network Deployment V7.0 は、フィックスパックおよびインテリム・フィックスをインストールするのに IBM Installation Manager を使用しますが、WebSphere Update Installer は使用しません。WebSphere Update Installer の実行について具体的に言及する前提条件は無視してください。

バージョン 3.5.x.x 以上の Mozilla Firefox がインストールされていることを確認してください。

一部のステップはオペレーティング・システムの 1 つのバージョンに特定であるため、すべてのステップがご使用の環境に該当するとは限りません。ステップに修飾子が示されていない場合、そのステップはオペレーティング・システムのすべてのバージョンで実行してください。Red Hat Enterprise Linux 6.0 (64 ビット) 上にインストール・マネージャーをインストールするには、『Unable to install Installation Manager on RHEL 6.0 (64-bit)』を参照してください。

Red Hat Enterprise Linux 6 環境で DB2 Express を使用して IBM Business Process Manager をインストールする場合は、管理権限 (root ユーザー) が必要であり、システム上に既存の DB2 データベース・サーバーがあってはならず、DB2 Express のインストールを開始する前にすべてのカーネル要件が満たされている必要があります。現行値は、**ipcs -l** コマンドの出力を解析することによって見つけることができます。

値を変更するには、以下の処理を行います。

1. 次の行を、次に示す順序で /etc/sysctl.conf ファイルに追加します。

```
kernel.shmni=4096
kernel.shmmax=4294967296
kernel.shmall=8388608
#kernel.sem=<SEMMS><SEMMNS><SEMOPM><SEMMNI>
kernel.sem=250 256000 32 4096
kernel.msgmni=16384
kernel.msgmax=65536
kernel.msgmnb=65536
```

2. 次の行を /etc/security/limits.conf の末尾に追加します。

```
# - stack - max stack size (KB)
* soft stack 32768
* hard stack 32768
# - nfile - max number of open files
* soft nfile 65536
* hard nfile 65536
# - nproc - max number of processes
* soft nproc 16384
* hard nproc 16384
```

3. システムをリブートします。

IBM Business Process Manager をインストールする前に、Linux システム上で以下の手順を実行します。

1. 32 ビット WebSphere Application Server を 64 ビット・オペレーティング・システム上にインストールする場合は、適切な 32 ビット・ライブラリーがご使用の 64 ビット・システム上にインストールされていることを確認します。
2. Red Hat Enterprise Linux 6 環境で DB2 Express を使用して、root ユーザーとして IBM Business Process Manager をインストールする場合は、前述の手順のとおりに行い、このステップはスキップしてください。それ以外の場合は、オープン・ファイルの最大数を少なくとも 8800 に増やします。デフォルト設定は通常、十分ではありません。オープン・ファイルの現在の最大数を調べるには、**ulimit -n**

を使用します。以下の例は、8800 に増やされたオープン・ファイルの最大数を示しています。この数は、ほとんどのシステムで十分なものです。ulimit 要件は、インストール時に動的に計算されるので、場合によっては選択したオプションに基づいて大きくする必要があります。

- a. /etc/security/limits.conf を開きます。
- b. **nofile** パラメーターを見つけて、値を増やします。**nofile** パラメーターが含まれている行が存在しない場合は、以下の行をファイルに追加します。

* **hard nofile 8800**

* **soft nofile 8800**

- c. ファイルを保存して閉じます。
- d. ログオフし、ログインし直します。

この設定の詳細については、**man limits.conf** を実行するか、WebSphere Application Server インフォメーション・センターのトピック『製品インストールのためのオペレーティング・システムの準備』を参照してください。

3. ご使用のオペレーティング・システム用の以下のパッケージをインストールします。

オプション	説明
Red Hat Enterprise Linux 5	compat-libstdc++-33-3.2.3-61 compat-db-4.2.52-5.1 libXp-1.0.0-8 rpm-build-4.4.2-37.el5 64 ビット・カーネルのみ: compat-libstdc++-296-2.96-138
Red Hat Enterprise Linux 6	ksh-version.rpm Korn シェル 詳細な手順とパッケージのリストについて『Unable to install Installation Manager on RHEL 6.0 (64-bit)』を参照してください。
SUSE Linux Enterprise Server 9.0	XFree86-libs-32bit-9 glibc-32bit-9 glib-32bit-9 gtk-32bit-9

訂正として新しいパッケージがある場合は、これらのいずれのパッケージについても、より最新のリリースをインストールすることもできます。ご使用のハードウェアに固有の追加パッケージがある場合は、インストールします。

単一行コマンドを使用して、依存関係 (必要な全パッケージ) をインストールできます。以下のコマンドは、サポート対象の Linux 配布版のデフォルトのパッケージ・マネージャーを使用した例です。

- **Red Hat Enterprise Linux 5 (32-bit):**

```
yum install compat-libstdc++-33 compat-db libXp rpm-build RHEL 5.x
```

- **Red Hat Enterprise Linux 5 (64-bit):**

```
yum install compat-libstdc++-33 compat-db libXp rpm-build compat-libstdc++-296
```

- **SUSE Linux:**

```
zypper install XFree86-libs-32bit-9 glibc-32bit-9 glib-32bit-9 gtk-32bit-9
```

4. 以下のコマンドを使用して、**umask** 値を 077 に設定します。

umask 077

値 077 は、製品が許容する最も制限的な値です。以下のアクセス・レベルの場合は、オプションで、より制限の弱い **umask** 値を設定することを選択できます。

- 人間の管理者およびツールのグループに関する読み取り専用アクセス権限の場合は 037
 - 人間の管理者およびツールのグループに関する読み取り/書き込みアクセス権限の場合は 027
 - 人間の管理者およびツールのグループに関する読み取りアクセス権限、書き込みアクセス権限、および実行アクセス権限の場合は 007
5. Red Hat Enterprise Linux 5 システムの場合、SELinux を使用不可に設定するか、または許容モードに設定します。
 6. コンピューターを再起動します。
 7. Linux システムの調整を行うための手順を実行します。
 8. 関与するすべてのサーバーが同じ時刻に設定されていることを確認します。アプリケーション・クラスター、サポート・クラスター、データベース・クラスターを含め、すべてのクラスター・ノードのすべてのサーバーに同じネットワーク・タイム・プロトコルを使用してください。時刻の不一致は、システム・タスクの重複を含め、不安定な動作の原因になります。

Solaris システムのインストール準備

IBM Business Process Manager をインストールする前に、Solaris オペレーティング・システムを準備する必要があります。

WebSphere Application Server は IBM Business Process Manager の前提条件であるため、WebSphere Application Server インフォメーション・センターの『製品インストールのためのオペレーティング・システムの準備』というトピックの、必要な準備手順をすべて実行する必要があります。

注: ただし、WebSphere Application Server のインストールに関連する以下の点に注意してください。

- IBM Business Process Manager V7.5 によってインストールされる WebSphere Application Server Network Deployment V7.0 は、インストールに IBM Installation Manager を使用しますが、InstallShield Multiplatform (ISMP) は使用しません。ISMP の実行について具体的に言及する前提条件は無視してください。
- IBM Business Process Manager V7.5 によってインストールされる WebSphere Application Server Network Deployment V7.0 は、フィックスパックおよびインテリム・フィックスをインストールするのに IBM Installation Manager を使用しますが、WebSphere Update Installer は使用しません。WebSphere Update Installer の実行について具体的に言及する前提条件は無視してください。

一部のステップはオペレーティング・システムの 1 つのバージョンに特定であるため、すべてのステップがご使用の環境に該当するとは限りません。ステップに修飾子が示されていない場合、そのステップはオペレーティング・システムのすべてのバージョンで実行してください。

Solaris システムで実行するようにインストール・マネージャーを構成するための準備情報については他に、次の技術情報を参照してください: <http://www-01.ibm.com/support/docview.wss?uid=swg24027719>

IBM Business Process Manager をインストールする前に、Solaris システム上で以下の手順を実行します。

1. 32 ビット WebSphere Application Server を 64 ビット・オペレーティング・システム上にインストールする場合は、適切な 32 ビット・ライブラリーがご使用の 64 ビット・システム上にインストールされていることを確認します。

2. オープン・ファイルの最大数を増やしてください。通常デフォルト設定では十分ではありません。オープン・ファイルの現在の最大数を調べるには、**ulimit -n** を使用します。以下の例は、8800 に増やされたオープン・ファイルの最大数を示しています。この数は、ほとんどのシステムで十分なものです。**ulimit** 要件は、インストール時に動的に計算されるので、場合によっては選択したオプションに基づいて大きくする必要があります。

インストール前に、以下のコマンドを実行します。

```
ulimit -Hn 8800
```

または、以下の手順でリソースしきい値ファイルを編集します。

a. Open /etc/system

b. 次の行をファイルの末尾に追加します。

```
set rlim_fd_max=8800
```

c. ファイルを保存して閉じます。

d. オペレーティング・システムからログオフしてから、再度ログインします。

3. 以下のコマンドを使用して、**umask** 値を 077 に設定します。

```
umask 077
```

値 077 は、製品が許容する最も制限的な値です。以下のアクセス・レベルの場合は、オプションで、より制限の弱い **umask** 値を設定することを選択できます。

- 人間の管理者およびツールのグループに関する読み取り専用アクセス権限の場合は 037
- 人間の管理者およびツールのグループに関する読み取り/書き込みアクセス権限の場合は 027
- 人間の管理者およびツールのグループに関する読み取りアクセス権限、書き込みアクセス権限、および実行アクセス権限の場合は 007

4. Solaris システムの調整を行うための手順を実行します。

5. 関与するすべてのサーバーが同じ時刻に設定されていることを確認します。アプリケーション・クラスター、サポート・クラスター、データベース・クラスターを含め、すべてのクラスター・ノードのすべてのサーバーに同じネットワーク・タイム・プロトコルを使用してください。時刻の不一致は、システム・タスクの重複を含め、不安定な動作の原因になります。

Windows システムのインストール準備

IBM Business Process Manager をインストールするには、まず Windows オペレーティング・システムを準備する必要があります。

IBM Business Process Manager インストール済み環境で DB2 Express を使用する場合は、管理特権 (管理者ユーザー) が必要で、インストールを実行するシステム上に既存の DB2 データベース・サーバーがなくてはなりません。

WebSphere Application Server は IBM Business Process Manager の前提条件製品であるため、IBM Business Process Manager をインストールする前に、WebSphere Application Server の準備作業をすべて完了する必要があります。

IBM Business Process Manager をインストールする前に、Windows システムで以下の手順を実行します。

1. WebSphere Application Server のインストール環境について、以下の手順を実行します。

- a. Web ブラウザーをダウンロードしてインストールします。ランチパッド・アプリケーションを使用したい場合は、Web ブラウザーをインストールする必要があります。システムにデフォルトのブラ

ユーザーがないか、またはブラウザが破損しているか正しくインストールされていない場合は、インストール・ウィザード・パネルでさまざまなハイパーリンクを開こうとするとエラーが発生することがあります。

- b. 32 ビット WebSphere Application Server を 64 ビット・オペレーティング・システム上にインストールする場合は、適切な 32 ビット・ライブラリーがご使用の 64 ビット・システム上にインストールされていることを確認します。
- c. 製品をインストールしているマシン上で、すべての WebSphere Application Server 関連の Java プロセスを停止します。
- d. IBM HTTP Server などの Web サーバー・プロセスはすべて停止します。
- e. **process_spawner.exe** プログラムのすべてのインスタンスを停止します。**process_spawner.exe** が存在しない場合は、このステップをスキップできます。**process_spawner.exe** は、WebSphere Application Server が適切に機能するための必要なバイナリー・ファイルです。**process_spawner.exe** は直接呼び出されるものではなく、Windows 上の WebSphere Application Server のコア機能となります。
- f. 十分なディスク・スペースを用意します。必要なディスク・スペースの量は、インストールされる機構または製品によって異なります。インストール・ウィザードを使用して製品をインストールする場合、「インストールの要約」パネルに、選択された機構および製品に基づく、必要なディスク・スペースの概算量が示されます。アプリケーションおよび構成を以前のバージョンからマイグレーションする計画がある場合は、アプリケーション・オブジェクトに十分なディスク・スペースがあることを確認します。以下の場合に大まかなガイドラインとして、アプリケーションのサイズの 110% に相当するスペースを見込んでおいてください。
- g. 前提条件および相互前提条件が、必要なリリース・レベルであることを確認します。インストール・ウィザードは、前提条件となるオペレーティング・システム・パッチの有無を調べますが、前提条件をまだ検討していない場合は、サポートされるハードウェアおよびソフトウェア Web サイトで前提条件を検討してください。サポートされているバージョンへのマイグレーションの方法については、IBM 以外の前提条件および相互に必要な製品の資料を参照してください。

WebSphere Application Server インストール済み環境では、IBM Installation Manager ウィザードを使用します。このウィザードのグラフィカル・インターフェースを使用することができます。また、サイレント・モードでウィザードを使用することもできます。リモートでインストールしており、インストール・ウィザードを使用する場合は、グラフィックスの使用をサポートする接続メカニズムを使用する必要があります。ご使用の接続でグラフィックスの使用がサポートされていない場合は、製品をサイレント・インストールします。

インストールを正しく実行するには、**USER_HOME** ディレクトリーへの書き込み権限が必要です。**USER_HOME** への書き込み権限がない場合は、以下のインストール上の制限に注意してください。

- プロファイル管理ツールの GUI は、**USER_HOME** への書き込みを必要とするため、機能しません。代わりに、コマンド行で **manageprofiles** を使用してプロファイルを管理する必要があります。
2. 『Windows システムの調整』のステップを完了します。
 3. 関与するすべてのサーバーが同じ時刻に設定されていることを確認します。アプリケーション・クラスター、サポート・クラスター、データベース・クラスターを含め、すべてのクラスター・ノードのすべてのサーバーに同じネットワーク・タイム・プロトコルを使用してください。時刻の不一致は、システム・タスクの重複を含め、不安定な動作の原因になります。

データベースとインストールおよび構成のシナリオ

ソフトウェアと連携するようにデータベースを構成する方法は、インストールするソフトウェアおよび達成しようとするシナリオに関連します。

「標準インストール」オプションを使用するインストール・シナリオでは、データベースがローカル側 (IBM Business Process Manager のインストール先と同じシステム上) にあってもリモート側 (別のシステム上) にあっても、データベースを事前に作成しておく必要があります。データベースを事前に作成する必要のないシナリオは、IBM Business Process Manager に組み込まれている DB2 Express データベースをインストールする場合のみです。DB2 Express は、Windows および Linux for Intel の IBM Business Process Manager に組み込まれています。DB2 Express がまだインストールされていない場合は、IBM Business Process Manager インストーラーを実行するとオプションとしてインストールできます。また、このインストーラーによって DB2 Express に共通データベースおよびコンポーネント固有データベースも作成されます。DB2 Express をインストールするには、管理特権 (管理者または root ユーザー) が必要で、既存の DB2 データベース・サーバーがシステム上にあってはなりません。

「標準」インストール用の DB2 Express を使用しないシナリオはすべて、既存のデータベースを使用する「標準」インストールと見なされます。つまり、既にインストール済みのデータベースがあり、インストーラーの「既存データベース」パネルを使用して構成プロパティを指定することになります。詳細については、『標準インストール時の既存データベースの構成』を参照してください。このオプションを使用するには、ご使用のデータベースが既に作成されていることを確かめる必要があります。

ユーザーとデータベース管理者は、ソフトウェアをインストールおよび構成する前に、インフォメーション・センター内のデータベースの構成に関する情報を確認する必要があります。

IBM Business Process Manager Advanced のインストール

IBM Business Process Manager Advanced のインストールには、ソフトウェアの取得とそれに続くソフトウェア・ファイルのインストール (前提ソフトウェア、IBM Business Process Manager Advanced によって使用されるデータベース製品、および IBM Business Process Manager Advanced ソフトウェア) が含まれます。

IBM Business Process Manager Advancedのインストール

ソフトウェアは、Launchpad プログラムで対話的にインストールするか、Installation Manager をサイレント・インストール・モードで実行してサイレントにインストールします。サイレント・モードでは、インストール・ウィザードはグラフィカル・インターフェースを表示せずに、応答ファイルから応答を読み取ります。

ロードマップ: IBM Business Process Manager Advanced のインストールおよび構成

IBM Business Process Manager インストーラーおよび構成プログラムは、さまざまなシナリオに対応します。このロードマップでは、スタンドアロン環境または Network Deployment 環境で IBM Business Process Manager Advanced をインストールし構成するために最も広く使用されている方法について説明します。

このロードマップでは、一般的なインストールおよび構成の各シナリオをそれぞれ 1 つのセクションで説明しています。各セクションには、実行するアクティビティ、説明へのリンク、および各アクティビティの完了後の結果についての注を示す表が含まれています。

このロードマップの各セクションでは、以下のシナリオについて説明します。

- 標準インストール

「標準インストール」オプションでは、ソフトウェアをインストールし、スタンドアロンの Process Center プロファイルまたは Process Server プロファイルを構成します。標準インストールでは、プロファイル管理ツールまたは **manageprofiles** ユーティリティを使用してプロファイルを別個に作成する必要はありません。

「標準インストール」オプションは、ソフトウェアをインストールおよび構成するための最も単純で迅速な方法です。また、(Express、Standard、または Advanced 構成の) すべての Business Process Manager フィーチャーおよび機能を単一のマシンに取り込むための理想的な方法でもあります。標準インストールは電子インストール・イメージからのみ使用でき、DVD からは使用できません。

『「標準インストール」オプションを使用した IBM Business Process Manager Advanced のインストール』を参照してください。

- カスタム・インストール、およびそれに続く 1 つ以上のスタンドアロン・プロファイルの作成

「カスタム・インストール」オプションでは、ご使用のシステムにソフトウェアをインストールし、次にプロファイル管理ツールを実行して、ソフトウェアの構成方法をより柔軟に制御することができます。標準インストール・パスでは使用できない構成フィーチャーを必要とするスタンドアロンの Process Center 環境または Process Server 環境を作成する場合は、製品バイナリーをインストールした後で、プロファイル管理ツールまたは **manageprofiles** コマンド行ユーティリティを使用して、スタンドアロンの Process Center プロファイルまたは Process Server プロファイルを作成します。

『「カスタム・インストール」オプションを使用した IBM Business Process Manager Advanced のインストール、および 1 つ以上のスタンドアロン・プロファイルの構成』を参照してください。

- カスタム・インストール、およびそれに続く 1 つ以上のデプロイメント・マネージャー・プロファイルおよびカスタム (管理対象ノード) プロファイルの作成

このインストールおよび構成のシナリオでは、一般に大規模な実稼働環境に要求されるキャパシティ、スケーラビリティ、および頑強性が提供されます。Network Deployment 構成は、コラボレーションを通じてワークロード・บาลancingおよびフェイルオーバーを提供する複数のサーバーから成るグループ (クラスターと呼ばれます) で構成されています。各サーバーは、デプロイメント・マネージャーと呼ばれる単一の管理コンソールを使用して一元管理されます。

カスタム・インストールの後に、いくつかの構成オプションを選択できます。

- 単純な Network Deployment 構成用の **configureNode** コマンド行ユーティリティを使用する。

インストーラーがご使用のシステムにソフトウェアをインストールします。次に、**configureNode** コマンドを使用して、1 つのデプロイメント・マネージャー・プロファイルおよび 1 つ以上のカスタム (管理対象ノード) プロファイルを作成して構成し、パターン・ベースの Network Deployment 構成を作成します。『configureNode コマンドを使用した IBM Business Process Manager Advanced のインストールと Network Deployment 環境の構成』を参照してください。

- プロファイル構成およびデプロイメント環境ウィザードを使用する。

インストーラーがご使用のシステムにソフトウェアをインストールします。次に、プロファイル構成プログラム (プロファイル管理ツールまたは **manageprofiles** コマンド行ユーティリティ) を使用して、1 つ以上のデプロイメント・マネージャー・プロファイルおよびカスタム (管理対象ノード) プロファイルを作成して構成します。さらに、デプロイメント環境ウィザードを使用して、パターン・ベースの Network Deployment 構成を作成します。『IBM Business Process Manager Advanced のインストール、デプロイメント・マネージャー・プロファイルとカスタム・プロファイルの構成、およびデプロイメント環境ウィザードの使用』を参照してください。

- プロファイル構成および管理コンソールまたは `wsadmin` コマンドを使用する。

インストーラーがご使用のシステムにソフトウェアをインストールします。次に、プロファイル構成プログラム (プロファイル管理ツールまたは `manageprofiles` コマンド行ユーティリティー) を使用して、1 つ以上のデプロイメント・マネージャー・プロファイルおよびカスタム (管理対象ノード) プロファイルを作成して構成します。さらに、管理コンソールまたは `wsadmin` コマンドを使用して、カスタマイズされた Network Deployment 構成を作成します。『IBM Business Process Manager Advanced のインストール、デプロイメント・マネージャー・プロファイルとカスタム・プロファイルの構成、および管理コンソールまたは `wsadmin` コマンドの使用』を参照してください。

Network Deployment に関する概念情報については、『スタンドアロン環境または Network Deployment 環境の選択』および『デプロイメント環境の計画』を参照してください。

ソフトウェアと一緒にパッケージされ、デプロイメント環境ウィザードによってサポートされるトポロジー・パターンについては、『概要: デプロイメント環境のトポロジーおよびパターン』を参照してください。

「標準インストール」オプションを使用した IBM Business Process Manager Advanced のインストール

電子イメージからインストールする場合は、インストールで「標準インストール」オプションを使用して、ソフトウェアのインストールとスタンドアロン・プロファイルの構成を自動的に行うことができます。標準インストールでは、インストール後にプロファイル管理ツールまたは `manageprofiles` を実行する必要はありません。

「標準」オプションは、ソフトウェアをインストールおよび構成するための最も迅速な方法です。このインストール・オプションでは大半の設定にデフォルトが使用されますが、インストール・パスとデータベース・タイプは指定できます。

標準インストールでは、Process Center と Process Server を別個にインストールします。まず Process Center の標準インストールを最後まで実行してから、Process Server の標準インストールを最後まで実行します。

「標準」オプションを使用した IBM Business Process Manager Advanced のインストールについては、『標準インストール: IBM Business Process Manager Advanced』を参照してください。

「標準」オプションを使用して単一マシンに IBM Business Process Manager Advanced をインストールする場合は、単一マシンでの Business Process Manager Advanced のインストールを参照してください。

「カスタム・インストール」オプションを使用した IBM Business Process Manager Advanced のインストール、および 1 つ以上のスタンドアロン・プロファイルの構成

インストーラーの「カスタム・インストール」オプションを使用すると、ソフトウェアをインストールし、プロファイル管理ツールまたは `manageprofiles` コマンド行ユーティリティーを使用して 1 つ以上のスタンドアロン・プロファイルを構成することができます。

表 66. 「カスタム・インストール」オプションを使用した IBM Business Process Manager Advanced のインストール、および 1 つ以上のスタンドアロン・プロファイルの構成

タスク	情報の入手先	タスクの実行結果
「カスタム・インストール」オプションを使用したソフトウェアのインストール	カスタム・インストール・オプションを使用した IBM Business Process Manager Advanced のインストールについては、『カスタム・インストール: IBM Business Process Manager Advanced』を参照してください。	<p>カスタム・インストールでは、ご使用のシステムに Process Center、Process Designer、および Process Server の製品バイナリーをインストールします。</p> <p>カスタム・インストールでは、インストール中にプロファイルを作成しません。</p>
プロファイル管理ツールの起動	<p>インストーラーからプロファイル管理ツールを起動しなかった場合は、ここで起動できます。『プロファイル管理ツールの開始』を参照してください。</p> <p>制約事項: Linux on zSeries プラットフォームを除き、64 ビットのアーキテクチャーの BPM インストール済み環境では、プロファイル管理ツールを使用してプロファイルを作成できません。代わりに、次のステップに進んで manageprofiles コマンド行ユーティリティーを使用します。</p>	<p>プロファイル管理ツールが開始され、いつでも使用できます。</p> <p>Process Center プロファイルからのデータが Process Server プロファイル作成プロセスへの入力として使用されるため、Process Center スタンドアロン・プロファイルを最初に (Process Server スタンドアロン・プロファイルを作成する前に) 作成する必要があります。</p>
1 つ以上の Process Center スタンドアロン・プロファイルの作成	<p>Process Center スタンドアロン・プロファイルをどのような方法で作成したいかに応じて、以下のトピックのいずれか 1 つを参照してください。</p> <ul style="list-style-type: none"> • プロファイル管理ツールを使用した Process Center スタンドアロン・プロファイルの作成 • manageprofiles ユーティリティーを使用した Process Center スタンドアロン・プロファイルの作成 	<p>Process Center スタンドアロン・プロファイルが作成されます。このプロファイルは、スタンドアロン・サーバー環境を定義し、コマンド・ファイル、構成ファイル、およびログ・ファイルを含みます。</p> <p>プロファイル作成プロセスは、(共通およびコンポーネント固有の) データベースを構成し、スタンドアロン・サーバー環境をサポートするために必要なデータベース表を生成します。</p> <p>これで、Process Server スタンドアロン・プロファイルを作成したり、Process Designer をインストールしたりできるようになります。</p>
Process Designer のインストール	ソフトウェアのビジネス・プロセス設計機能の使用を開始する場合は、Process Designer をダウンロードおよびインストールします。『Process Designer のインストール』を参照してください。	<p>Process Designer がインストールされます。</p> <p>Process Designer の使用方法については、以下のトピックを参照してください。</p> <ul style="list-style-type: none"> • IBM Process Designer の雇用サンプル・チュートリアル • Authoring environments • Process Center によるプロセス開発

表 66. 「カスタム・インストール」オプションを使用した IBM Business Process Manager Advanced のインストール、および 1 つ以上のスタンドアロン・プロファイルの構成 (続き)

タスク	情報の入手先	タスクの実行結果
1 つ以上の Process Server スタンドアロン・プロファイルの作成	ランタイム環境も含めてソフトウェアを完全に構成することが目的である場合は、Process Server スタンドアロン・プロファイルを作成します。Process Server スタンドアロン・プロファイルをどのような方法で作成したいかに応じて、以下のトピックのいずれか 1 つを参照してください。 <ul style="list-style-type: none"> プロファイル管理ツールを使用した Process Server スタンドアロン・プロファイルの作成 manageprofiles ユーティリティを使用した Process Server スタンドアロン・プロファイルの作成 	スタンドアロン・サーバー環境が構成され、いつでも使用できます。
プロファイル作成時に「データベース・スクリプトを実行してデータベースを初期化 (Run database scripts to initialize the databases)」チェック・ボックスをクリアした場合は、データベース・スクリプトを手動で実行し、その後にブートストラップ・ユーティリティを実行してデータベースにシステム情報をロードする	ブートストラップ・ユーティリティの実行方法については、『データベースへのシステム情報のロード』を参照してください。 <div style="text-align: center;"> <div style="border: 1px solid black; padding: 2px; display: inline-block; margin-bottom: 5px;">Windows</div> bootstrapProcessServerData.bat <div style="display: flex; justify-content: space-around; margin-bottom: 5px;"> <div style="border: 1px solid black; padding: 2px; display: inline-block;">Linux</div> <div style="border: 1px solid black; padding: 2px; display: inline-block;">UNIX</div> </div> bootstrapProcessServerData.sh </div> <p>クラスター・メンバーの最初の始動の前に、ブートストラップ・ユーティリティを実行する必要があります。</p>	Process Server/Process Center を正常に始動する前に、データベースにシステム情報がロードされます。

configureNode コマンドを使用した IBM Business Process Manager Advanced のインストールと Network Deployment 環境の構成

インストーラーの「標準インストール」または「カスタム・インストール」オプションを使用してソフトウェアをインストールし、次に **configureNode** コマンドを使用して 1 つのデプロイメント・マネージャー・プロファイルおよび 1 つ以上のカスタム (管理対象ノード) プロファイルを構成し、さらにパターン・ベースの Network Deployment 環境を作成することができます。また、後から **configureNode** を使用して既存の環境にノードを追加することもできます。

configureNode コマンドは、リモート・メッセージング、リモート・サポート、および Web トポロジー・パターンを使用して単一セル環境を作成します。このトポロジー・パターンには、以下の 4 つのクラスターが含まれます。

- メッセージング・インフラストラクチャー・クラスター
- サポート・インフラストラクチャー・クラスター
- アプリケーション・デプロイメント・ターゲット・クラスター
- Web アプリケーション・クラスター

表 67. `configureNode` コマンドを使用した IBM Business Process Manager Advanced のインストールおよび構成

タスク	情報の入手先	タスクの実行結果
「カスタム・インストール」オプションを使用したソフトウェアのインストール	標準インストール・オプションを使用した IBM Business Process Manager のインストールについては、『標準インストール: IBM Business Process Manager Advanced』を参照してください。 カスタム・インストール・オプションを使用した IBM Business Process Manager のインストールについては、『カスタム・インストール: IBM Business Process Manager Advanced』を参照してください。	IBM Business Process Manager Advanced のインストールでは、ご使用のシステムに Process Center (Process Server 機能を含む)、Process Designer、および WebSphere ESB の製品バイナリーをインストールします。
<code>configureNode</code> コマンドを使用したデプロイメント・マネージャー、1 つ以上のカスタム・ノード、およびデプロイメント環境の作成	『 <code>configureNode</code> コマンドを使用したデプロイメント環境の作成』を参照してください。	Process Center または Process Server の Network Deployment 環境が作成されます。

IBM Business Process Manager Advanced のインストール、デプロイメント・マネージャー・プロファイルとカスタム・プロファイルの構成、およびデプロイメント環境ウィザードの使用

インストーラーの「カスタム・インストール」オプションを使用すると、ソフトウェアをインストールし、プロファイル管理ツールまたは `manageprofiles` コマンド行ユーティリティを使用して 1 つ以上のデプロイメント・マネージャー・プロファイルおよびカスタム (管理対象ノード) プロファイルを構成することができます。プロファイル作成後に、デプロイメント環境ウィザードを使用して、パターン・ベースの Network Deployment 構成を生成できます。

デプロイメント環境ウィザードからどのパターンを選択するかは、ご使用の環境の計画された使用法 (PoC (概念検証)、テスト、実動) およびご使用のエンタープライズで必要な処理能力 (高可用性やフェイルオーバー処理など) を基準にすることができます。

このインストールおよび構成のシナリオでは、ソフトウェアに含まれるトポロジー・パターンの 1 つによってビジネス・ニーズおよび要件を満たすことができると想定しています。ソフトウェアに含まれるパターンでは対応できない要件がある場合は、管理コンソールを使用して、カスタマイズされた Network Deployment 環境を作成することができます。10 ページの『IBM Business Process Manager Advanced のインストール、デプロイメント・マネージャー・プロファイルとカスタム・プロファイルの構成、および管理コンソールまたは `wsadmin` コマンドの使用』を参照してください。

表 68. デプロイメント環境ウィザードを使用した IBM Business Process Manager Advanced のインストールおよび構成

タスク	情報の入手先	タスクの実行結果
「カスタム・インストール」オプションを使用したソフトウェアのインストール	カスタム・インストール・オプションを使用した IBM Business Process Manager Advanced のインストールについては、『カスタム・インストール: IBM Business Process Manager Advanced』を参照してください。	<p>カスタム・インストールでは、ご使用のシステムに Process Center (Process Server 機能を含む)、Process Designer、および WebSphere ESB の製品バイナリーをインストールします。</p> <p>Network Deployment 環境のデータベース構成をいつでも作成できます。</p>
作成している環境に適用されるデータベース構成の設計	<p>IBM Business Process Manager Advanced のデータベース構成の設計については、『データベース設計ツールを使用したスタンドアロン・プロファイル用またはデプロイメント環境用のデータベース設計ファイルの作成』を参照し、Network Deployment データベース構成の設計の説明に従ってください。</p> <p>設計文書を生成し、Process Center の SQL スクリプトを実行します。</p>	<p>SQL スクリプトによって生成されたすべての必要なデータベース表を含むデータベース構成がご使用のシステム上に存在します。</p> <p>これでプロファイル作成プロセスを開始できます。設計文書は、プロファイル管理ツールまたは manageprofiles ユーティリティーから参照します。</p> <p>プロファイル管理ツールまたは manageprofiles を使用して、使用する IBM BPM コンポーネントのデプロイメント・マネージャー・プロファイルおよび 1 つ以上のカスタム (管理対象ノード) プロファイルを作成します。</p>
プロファイル管理ツールの起動	<p>インストーラーからプロファイル管理ツールを起動しなかった場合は、ここで起動できます。『プロファイル管理ツールの開始』を参照してください。</p> <p>制約事項: Linux on zSeries プラットフォームを除き、64 ビットのアーキテクチャーの BPM インストール済み環境では、プロファイル管理ツールを使用してプロファイルを作成できません。代わりに、次のステップに進んで manageprofiles コマンド行ユーティリティーを使用します。</p>	<p>プロファイル管理ツールが開始され、いつでも使用できます。</p> <p>Process Center プロファイルからのデータが Process Server プロファイル作成プロセスへの入力として使用されるため、Process Center スタンドアロン・プロファイルを最初に (Process Server スタンドアロン・プロファイルを作成する前に) 作成する必要があります。</p>

表 68. デプロイメント環境ウィザードを使用した IBM Business Process Manager Advanced のインストールおよび構成 (続き)

タスク	情報の入手先	タスクの実行結果
<p>Process Center デプロイメント・マネージャー・プロファイルの作成</p>	<p>このタスクでは、『作成している環境に適用されるデータベース構成の設計』のタスクを完了したときに作成されたデータベース設計文書を指すパラメーターをプロファイル管理ツールまたは manageprofiles コマンド行ユーティリティーで選択すると想定しています。</p> <p>注: データベース設計文書の作成および DDT からの SQL の生成をまだ行っていない場合は、プロファイル管理ツールを使用して、データベースを構成し、関連付けられた SQL を実行することができます。</p> <p>Process Center プロファイルをどのような方法で作成したいかに応じて、以下のトピックのいずれか 1 つを参照してください。</p> <ul style="list-style-type: none"> • プロファイル管理ツールを使用した Process Center デプロイメント・マネージャー・プロファイルの作成 • manageprofiles を使用した Process Center デプロイメント・マネージャーとカスタム・プロファイルの作成 	<p>Process Center デプロイメント・マネージャー・プロファイルがあること。</p> <p>このプロファイルは、環境を定義し、コマンド・ファイル、構成ファイル、およびログ・ファイルを含みます。</p> <p>デプロイメント・マネージャーとは、他のサーバーの論理グループ (セル) の操作を管理するサーバーです。デプロイメント・マネージャーは、サーバーおよびクラスタを管理するための中央の場所になっています。</p>
<p>共通データベースをまだ作成していない場合は、ここで作成します。</p>	<p>プロファイルの作成後または拡張後の共通データベースとテーブルの作成を参照してください。</p>	<p>共通データベースが作成されました。</p>
<p>デプロイメント・マネージャーを開始し、開始操作が成功したことを検証します。</p>	<p>デプロイメント・マネージャーの開始方法に関する詳細については、『デプロイメント・マネージャーの開始』を参照してください。</p>	<p>デプロイメント・マネージャー・サーバーが開始します。</p>

表 68. デプロイメント環境ウィザードを使用した IBM Business Process Manager Advanced のインストールおよび構成 (続き)

タスク	情報の入手先	タスクの実行結果
Process Center カスタム (管理対象ノード) プロファイル (複数の場合もある) の作成	<p>このタスクでは、プロファイル作成プロセスの一部としてノードを統合しないと想定しています。(カスタム (管理対象ノード) プロファイルを作成してから) ノードを後で統合するためのパラメーターをプロファイル管理ツールまたは manageprofiles コマンドで設定すると想定しています。</p> <p>プロファイルを作成する方法に応じて、以下のトピックのいずれかを参照してください。</p> <ul style="list-style-type: none"> プロファイル管理ツールを使用した Process Center カスタム・プロファイル (管理対象ノード) の作成 manageprofiles を使用した Process Center デプロイメント・マネージャーとカスタム・プロファイルの作成 <p>管理対象ノードごとにこのタスクを繰り返します。</p>	<p>カスタム (管理対象ノード) プロファイルが作成されます。これらのノードは、デプロイメント・マネージャーによって管理され、運営されます。</p> <p>これで、ノードを Process Center デプロイメント・マネージャー・セルに統合できるようになります。管理対象ノードには、ノード・エージェントが含まれ、さらに管理対象サーバーを含めることができます。管理対象ノードでは、管理対象サーバーを構成して実行できます。</p>
カスタム (管理対象) ノードのデプロイメント・マネージャーへの統合	<p>addNode コマンドを使用して Process Center カスタム・ノードを Process Center デプロイメント・マネージャー・セルに統合する方法の説明については、『カスタム・ノードのデプロイメント・マネージャーへの統合』を参照してください。</p>	<p>カスタム・プロファイルはデプロイメント・マネージャーに統合されました。</p>
デプロイメント環境ウィザードを使用した Network Deployment 構成の作成	<p>デプロイメント環境ウィザードの使用方法については、『パターンを使用した Process Center デプロイメント環境の作成』を参照してください。</p>	<p>このタスクの一部として、すべての据え置かれた構成アイテムを処理し、Process Center デプロイメント環境を生成する必要があります。</p> <p>Process Center Network Deployment 環境が作成されます。</p>

表 68. デプロイメント環境ウィザードを使用した IBM Business Process Manager Advanced のインストールおよび構成 (続き)

タスク	情報の入手先	タスクの実行結果
Process Server のセルの作成	<p>Process Server を実行するには、別個のセルを作成する必要があります。</p> <p>そのためには、同じ一連のステップを実行します。ただし、以下のトピックで説明するように、Process Server デプロイメント・マネージャー・プロファイルおよび Process Server カスタム (管理対象ノード) プロファイルを作成し、次にデプロイメント環境ウィザードを使用して Process Server デプロイメント環境を作成します。</p> <ul style="list-style-type: none"> • プロファイル管理ツールを使用した Process Server デプロイメント・マネージャー・プロファイルの作成 • プロファイル管理ツールを使用した Process Server カスタム・プロファイル (管理対象ノード) の作成 • manageprofiles を使用した Process Server デプロイメント・マネージャー・プロファイルとカスタム・プロファイルの作成 <ul style="list-style-type: none"> – カスタム・ノードのデプロイメント・マネージャーへの統合 • パターンを使用した Process Server デプロイメント環境の作成 <p>このタスクの一部として、すべての据え置かれた構成アイテムを処理し、Process Server デプロイメント環境を生成する必要があります。</p>	<p>Process Server Network Deployment 環境が作成されます。</p>
手動によるデータベース構成ステップの実行	<p>構成ステップを据え置いた場合は、デプロイメント環境でクラスターを開始する前に、追加のデータベース構成を実行する必要があります。『Network Deployment 環境のデータベース構成の完了』を参照してください。</p>	<p>これで、Network Deployment 環境に必要な手動のデータベース構成アクティビティは完了です。</p>

表 68. デプロイメント環境ウィザードを使用した IBM Business Process Manager Advanced のインストールおよび構成 (続き)

タスク	情報の入手先	タスクの実行結果
データベースへのシステム情報のロード	<p>ブートストラップ・ユーティリティーの実行方法については、『データベースへのシステム情報のロード』を参照してください。</p> <p>Windows</p> <p>bootstrapProcessServerData.bat</p> <p>Linux UNIX</p> <p>bootstrapProcessServerData.sh</p> <p>クラスター・メンバーの最初の始動の前に、ブートストラップ・ユーティリティーを実行する必要があります。</p>	<p>Process Server / Process Center を正常に始動する前に、データベースにシステム情報がロードされます。</p>

IBM Business Process Manager Advanced のインストール、デプロイメント・マネージャー・プロファイルとカスタム・プロファイルの構成、および管理コンソールまたは wsadmin コマンドの使用

ソフトウェアにパッケージされ、デプロイメント環境ウィザードを使用して実装されるトポロジー・パターンは、広範囲にわたるビジネス・プロセス要件に対応できるように設計されています。ただし、これらのトポロジー・パターンでは十分に対応できないシナリオがある場合は、管理コンソールを使用して、カスタマイズされた Network Deployment 環境を作成できます。

注: このシナリオは、管理コンソールを使用して製品コンポーネントおよび機能を構成する方法を十分に理解しているユーザーを対象としています。このセクションで説明するインストールおよび構成のシナリオを開始する前に、デプロイメント環境ウィザードを使用して Network Deployment 環境を作成することを検討してください。

管理コンソール・アクションのサブセットで、コマンド・アシスタンスを使用することができます。コマンド・アシスタンスを使用できる場合は、最後に実行したコンソール・アクションに対応する wsadmin スクリプト・コマンドが表示されます。このデータを使用して、特定の管理タスクを自動化する wsadmin スクリプトを作成できます。コマンド・アシスタンスに関する詳細については、『コマンド・アシスタンスを使用した管理コンソールのアクション』を参照してください。

表 69. 管理コンソールを使用した IBM Business Process Manager Advanced のインストールおよび構成

タスク	情報の入手先	タスクの実行結果
ソフトウェアをインストールし、必要なプロファイルを作成します。	<p>5 ページの『IBM Business Process Manager Advanced のインストール、デプロイメント・マネージャー・プロファイルとカスタム・プロファイルの構成、およびデプロイメント環境ウィザードの使用』に記載されている、『デプロイメント環境ウィザードを使用した <i>Network Deployment</i> 構成の作成』の前のタスクまでを完了します。</p> <p>デプロイメント環境ウィザードを使用する代わりに、管理コンソールを使用して、カスタマイズされたデプロイメント環境を手動で作成します。</p>	<p>デプロイメント・マネージャー・ノードおよびカスタム管理対象ノードが作成され、ノードがデプロイメント・マネージャー・セルに統合されます。</p> <p>IBM Business Process Manager Advanced のカスタム・インストールでは、ご使用のシステムに Process Center (Process Server の全機能を含む)、Process Designer、および WebSphere ESB の製品バイナリーをインストールします。</p> <p>これで、管理コンソールを使用して、Network Deployment 環境を構成するサーバー、サーバー・クラスター、およびコンポーネントを作成できるようになります。</p>
管理コンソールを使用したサーバーおよびクラスターの作成と構成	『管理コンソールを使用したサーバーおよびクラスターの作成と構成』を参照してください。	使用環境のサーバーおよびサーバー・クラスターが作成されました。
Process Server としてのサーバーまたはクラスターの構成	<p>管理コンソールを使用してご使用のサーバーまたはサーバー・クラスターを Process Server として構成するための情報については、『サーバーまたはクラスターの Process Server としての構成』を参照してください。</p> <p>wsadmin を使用して、サーバーまたはクラスターを Process Server として構成することもできます。</p> <p>『configureProcessServer コマンド』を参照してください。</p>	サーバーまたはサーバー・クラスターが Process Server として構成されます。
サーバー上またはクラスター上の Performance Data Warehouse コンポーネントの構成	<p>管理コンソールを使用してサーバーまたはクラスター上で Performance Data Warehouse を構成することに関する情報については、『サーバーまたはクラスター上での Performance Data Warehouse コンポーネントの構成』を参照してください。</p> <p>サーバーまたはクラスター上で wsadmin を使用して Performance Data Warehouse を構成することもできます。</p> <p>『configurePerfDW コマンド』を参照してください。</p>	Process Server 上で Performance Data Warehouse が構成されます。
サーバーまたはクラスター用の SCA サポートを構成します。	管理コンソールを使用してサーバーまたはクラスター用の SCA サポートを構成することに関する情報については、『サーバーまたはクラスター用の SCA サポートの構成』を参照してください。	サーバーまたはクラスターの SCA サポートが構成されます。

表 69. 管理コンソールを使用した IBM Business Process Manager Advanced のインストールおよび構成 (続き)

タスク	情報の入手先	タスクの実行結果
ビジネス・スペースを構成します。	管理コンソールを使用してビジネス・スペースを構成することに関する情報については、『ビジネス・スペースの構成』を参照してください。	Business Space コンポーネントが構成されました。
Business Process Choreographer の構成。	管理コンソールを使用して Business Process Choreographer を構成することに関する情報については、『Business Process Choreographer の構成』を参照してください。 管理コンソールではなしにスクリプティングを使用して Business Process Choreographer を構成するように決めた場合には、『bpeconfig.jacl スクリプトを使用した Business Process Choreographer の構成』を参照してください。	Business Process Choreographer が構成されます。
ビジネス・ルールおよびセレクターの構成	管理コンソールを使用してビジネス・ルールおよびセレクターを構成することに関する情報については、『ビジネス・ルールおよびセレクターの構成』を参照してください。	ビジネス・ルールおよびセレクターが構成されます。
リレーションシップ・サービスの構成	管理コンソールを使用してリレーションシップ・サービスを構成することに関する情報については、『リレーションシップ・サービスの構成』を参照してください。	リレーションシップ・サービスが構成されます。
メッセージング・サービスのセットアップ	管理コンソールを使用してメッセージング・サービスを構成することに関する情報については、『メッセージング・サーバー環境のセットアップ』を参照してください。	メッセージング・サーバー環境がセットアップされます。
JNDILookup Web サービスの構成	管理コンソールを使用して JNDILookup Web サービスを構成することに関する情報については、『JNDILookup Web サービスの構成』を参照してください。	JNDILookup Web サービスが構成されました
Common Event Infrastructure を構成する。	管理コンソールを使用して Common Event Infrastructure を構成することに関する情報については、『Common Event Infrastructure の構成』を参照してください。	Common Event Infrastructure は構成されました
WebSphere Portal 用の IBM Business Process Manager ウィジェットの構成	管理コンソールを使用して WebSphere Portal 用のウィジェットを構成することに関する情報については、『WebSphere Portal 用の IBM Business Process Manager ウィジェットの構成』を参照してください。	WebSphere Portal 用のウィジェットを構成しました

表 69. 管理コンソールを使用した IBM Business Process Manager Advanced のインストールおよび構成 (続き)

タスク	情報の入手先	タスクの実行結果
WebSphere Business Integration Adapter の構成	管理コンソールを使用して WebSphere Business Integration Adapter を構成することに関する情報については、『WebSphere Business Integration Adapter の構成』を参照してください。	WebSphere Business Integration Adapter を構成しました。
Service Federation Management 用の IBM Business Process Manager の構成	管理コンソールを使用して Service Federation Management 用の IBM Business Process Manager を構成することに関する情報については、『Service Federation Management 用の IBM Business Process Manager の構成』を参照してください。	Service Federation Management 用の IBM Business Process Manager を構成しました。
データベースへのシステム情報のロード	ブートストラップ・ユーティリティーの実行方法については、『データベースへのシステム情報のロード』を参照してください。 <div style="display: flex; justify-content: center; gap: 20px;"> <div style="border: 1px solid black; padding: 2px 5px; background-color: #808080; color: white;">Windows</div> </div> <pre>bootstrapProcessServerData.bat</pre> <div style="display: flex; justify-content: center; gap: 20px;"> <div style="border: 1px solid black; padding: 2px 5px; background-color: #808080; color: white;">Linux</div> <div style="border: 1px solid black; padding: 2px 5px; background-color: #808080; color: white;">UNIX</div> </div> <pre>bootstrapProcessServerData.sh</pre> <p>クラスター・メンバーの最初の始動の前に、ブートストラップ・ユーティリティーを実行する必要があります。</p>	Process Server / Process Center を正常に始動する前に、データベースにシステム情報がロードされます。

標準インストール: IBM Business Process Manager Advanced

「標準インストール」オプションを使用して、開発、品質保証、およびクラスター化されていないステージングおよび実動のための環境に IBM Business Process Manager Advanced をインストールします。このインストール・オプションでは、ほとんどの設定値がデフォルトで設定されますが、インストール・パスとデータベース・タイプはユーザーが指定できます。電子インストール・イメージ (DVD ではなく) から標準インストールを実行する必要があります。

標準インストールの使用シナリオを理解して、このオプションで作成されるインストール環境がニーズを満たすことを確認してください。システム上に IBM Business Process Manager の個人用コピーを保持するには、「標準的」オプションを選択する必要があります。このようにして、ローカルで統合サービスまたはビジネス・プロセスを開発したり、製品に組み込まれたエクスポート機能およびインポート機能を使用して成果物を提供したりできます。標準インストールは、PoC (概念検証) 作業と、製品のフィーチャーおよび機能の習得にも推奨されます。

Red Hat Enterprise Linux 6 環境で DB2 Express を使用して IBM Business Process Manager をインストールする場合は、管理権限 (root ユーザー) が必要であり、システム上に既存の DB2 データベース・サーバーがあってはならず、DB2 Express のインストールを開始する前にすべてのカーネル要件が満たされている必要があります。現行値は、`ipcs -l` コマンドの出力を解析することによって見つけることができます。

重要: 標準インストールでは、製品のビット・アーキテクチャーがシステムのビット・アーキテクチャーと一致していなければなりません。32 ビット・システムの場合、32 ビット・バージョンの製品がインストー

ルされます。64 ビット・システムの場合、64 ビット・バージョンの製品がインストールされます。64 ビット・システムに 32-bit ビット製品をインストールする場合は、「カスタム・インストール」オプションを使用する必要があります。

ヒント: 組み込みの DB2 Express データベースではなく既存のデータベース・サーバーを使用する場合は、この手順を開始する前に、DB2、Microsoft SQL Server、または Oracle の構成情報を準備します。このオプションを使用するには、データベースが既に作成されている必要があります。DB2 の場合は、少なくとも 32 K のページ・サイズでデータベースを作成する必要があります。

Windows Windows 7、Windows Vista、または Windows Server 2008 で IBM Business Process Manager Advanced をインストールまたは実行するには、Microsoft Windows のユーザー・アカウント特権を昇格させることが必要です。管理ユーザーであるか非管理ユーザーであるかにかかわらず、launchpad.exe を右クリックし、「**管理者として実行 (Run as administrator)**」を選択します。

重要: 1 つの IBM Installation Manager だけで、IBM Business Process Manager Advanced の複数のインスタンスをインストールできます。

このタスクでは、ランチパッドから標準インストール・オプションを使用して、IBM Business Process Manager Advanced をインストールする手順について説明します。

- 標準インストールでは、Advanced Process Center の標準スタンドアロン・プロファイルが作成されます。
 - 標準インストールでは、既存のデータベースが指定されていない場合に、DB2 Express をインストールできます。DB2 Express が使用可能なのは、Windows および Linux の 32 ビット・システムと 64 ビット・システムのみです。ユーザーは管理者または root ユーザーであり、他の DB2 製品がインストールされていない必要があります。
 - 標準インストールでは、自動的にデータベースにデータを取り込みます。
 - **Windows** Windows オペレーティング・システムの場合、Advanced Process Center のインストールにより、IBM Process Designer が自動的にインストールされます。
 - 標準インストールでは、Process Center 管理コンソール、Playback Server 管理コンソール、Process Designer、および WebSphere 管理コンソールのショートカットが作成されます。
1. オプション: インターネットに接続している場合、標準インストールでは、推奨される暫定修正レベルに製品が自動的にアップグレードされます。これらのアップグレードをインターネットからではなくローカル・ディレクトリーからインストールする場合や、フィックス・レベルを指定する場合は、プロパティー・ファイルを使用して、アップグレードを検索する場所やインストール対象のアップグレードを、Installation Manager に対して指定することができます。

次のファイルを作成します。

- **Linux** **UNIX** <user.home>/bpm_updates.properties

注: <user.home> は、ユーザーのホーム・ディレクトリーを示します。

- **Windows** C:/HOMEPATH%bpm_updates.properties

Windows XP では、HOMEPATH 環境変数が C:%Documents and Settings%user_name% を示します。

Windows 7、Windows Vista、または Windows Server 2008 では、HOMEPATH 環境変数が C:%Users%user_name% を示します。

注: bpm_updates.properties ファイルに指定されているフォルダーに対する読み取り/書き込み権限があることを確認します。

このファイルは、ifix プレフィックスを使用します。プレフィックスの後には 1 つのドットが続いていなければなりません。接頭部とドットの後の名前部分には、任意の文字列を指定できます。これにより、ifix のアップグレードを行う複数の場所を指定することができます。ロケーションには、ローカル・ディレクトリーまたは URL のいずれかを指定できます。以下に例を示します。

```
ifix.1=C:¥bpmUpdates
```

```
ifix.2=C:¥WASUpdates
```

2. 以下のコマンドのいずれかを入力して、Launchpad を開始します。

Linux **UNIX** `extract_directory/launchpad.sh`

Windows (コマンド行から) `extract_directory¥launchpad.exe`

3. 「ようこそ」ページで「標準インストール」をクリックします。

4. 以下のインストール・オプションのいずれかを選択します。

- **Process Center:** Process Center は、Process App のビルドに使用する共用開発環境です。Process Center には、Process Designer 開発ツールが含まれています。
- **Process Server:** Process Server は、Process App のデプロイ先となる場所です。

5. 選択したインストール・オプションに関する情報を指定します。

- **Process Center: Process Center** を選択した場合は、以下の情報を指定します。
 - ホスト名
 - インストールの場所
 - Process Designer のインストール場所
- **Process Server: Process Server** を選択した場合は、以下の情報を指定します。
 - ホスト名
 - インストールの場所
 - 環境のタイプ
 - 環境の名前

「このサーバーをオフラインで使用する」を選択していない場合は、このサーバーが接続する Process Center に関する以下の情報を指定します。

- ホスト名
- ポート
- ユーザー名
- パスワード

「このサーバーをオフラインで使用する」を選択した場合は、「ホスト名」、「ポート」、「ユーザー名」、および「パスワード」の各フィールドが使用不可になります。

重要: DB2 Express をインストールする場合、インストール・ロケーションに各国語のストリング (NLS) を含めることはできません。

6. 「次へ」をクリックします。

7. データベースを選択します。

- 組み込み DB2 Express データベースをインストールする場合、データベースはインストールされ、完全に構成されます。デフォルト値は以下のとおりです。

- **Linux** インスタンス・ユーザー名およびパスワード: bpminst および Db2pswd!
- **Linux** 隔離 (fenced) ユーザー名およびパスワード: bpmfenc および bpmfenc1
- **Linux** 管理サーバー (DAS) ユーザー名およびパスワード: bpmadmin および bpmadmin1
- **Windows** 管理ユーザー名およびパスワード: bpmadmin および Db2pswd!

制約事項: ユーザー名に各国語のストリング (NLS) が含まれていてはなりません。

- 既存のデータベースを使用する場合は、データベース固有のフィールドの説明を確認するには、「**セットアップ手順**」のリンクをクリックします。標準インストール時に既存のデータベースを構成する場合の必須フィールドの値に関する情報を参照してください。

8. 「次へ」をクリックします。
9. 「ライセンス (Licenses)」ページで、インストール・オプションを検証し、ご使用条件を確認します。ご使用条件の条項に同意する場合は、「**使用条件と注意事項を読んで同意しました (I have read and accepted the license agreement and notices)**」をクリックし、「次へ」をクリックします。
10. 「ソフトウェアのインストール (Install Software)」をクリックします。

標準インストールを行うと、完全な機能を備えた Process Center が単一のマシン上にインストールされます。

標準インストールによって、デフォルトの Process Center プロファイルが作成され、開始されます。

注: Process Designer は、Windows プラットフォームでのみサポートされます。

ファースト・ステップ・コンソールを起動して、インストールの検証、サーバーまたはデプロイメント・マネージャーの開始または停止、管理コンソールへのアクセス、プロファイル管理ツールの開始、製品資料へのアクセスを行います。

関連タスク:

902 ページの『**手動でのデータベースの作成**』

IBM Business Process Manager Advanced は、Process Server データベース、Performance Data Warehouse データベース、および共通データベースを必要とします。標準インストールを使用して IBM Business Process Manager Advanced をインストールする前に、データベースが使用可能であることを確認する必要があります。

『**標準インストール時の既存データベースの構成**』

標準インストール時に既存のデータベース・サーバーを構成するための正しいデータベース値を判別するには、このトピックの情報を参考にしてください。

201 ページの『**カスタム・インストール: IBM Business Process Manager Advanced**』

デプロイメント環境で追加のクラスター・ノードが必要な場合や、複雑なデプロイメント環境とデータベース・トポロジーがビジネスに必要な場合は、「**カスタム・インストール**」オプションを使用して IBM Business Process Manager Advanced をインストールします。

標準インストール時の既存データベースの構成:

標準インストール時に既存のデータベース・サーバーを構成するための正しいデータベース値を判別するには、このトピックの情報を参考にしてください。

IBM Business Process Manager Advanced の標準インストール時に既存のデータベース・サーバーの使用を計画している場合は、データベースが既に存在すること、およびそのデータベースが空であることを確認する必要があります。DB2 の場合は、少なくとも 32 K のページ・サイズでデータベースを作成する必要があります。

標準インストール時に、既存のデータベース・サーバーに関する情報を指定する必要があります。ここでは、データベース認証用のユーザー名とパスワード、データベース・サーバーのホスト名とポート、および Process Server データベースと Performance Data Warehouse データベースを指定する必要があります。共通データベースを指定する必要がある場合もあります。

「データベース」ページで、そのデータベースに関する必要な情報を指定します。

- 表 70 に、DB2 用のデータベース構成フィールドを示します。
- 表 71 に、Microsoft SQL Server 用のデータベース構成フィールドを示します。
- 199 ページの表 72 に、Oracle 用のデータベース構成フィールドを示します。

表 70. DB2 データベース の場合の必須のデータベース構成フィールド

フィールド	必要なアクション
ホスト名	デフォルト値 localhost をそのまま確定するか、データベース・サーバーの正しいホスト名を入力します。例えば、IP アドレス。
ポート	デフォルト値 50000 をそのまま確定するか、サーバーの正しいポート番号を入力します。
ユーザー名	データベースで認証を行うユーザー名を入力してください。
パスワード	データベースで認証を行うパスワードを入力してください。
共通データベース名	共通データベース用の名前を入力してください。
Process Center のデータベース名または Process Server のデータベース名	Process Server データベースの名前を入力してください。
Performance Data Warehouse のデータベース名	Performance Data Warehouse データベースの名前を入力してください。

表 71. Microsoft SQL Server の場合の必須のデータベース構成フィールド

フィールド	必要なアクション
ホスト名	デフォルト値 localhost をそのまま確定するか、データベース・サーバーの正しいホスト名を入力します。例えば、IP アドレス。
ポート	デフォルト値 1433 をそのまま確定するか、サーバーの正しいポート番号を入力します。
共通データベース名	共通データベース用の名前を入力してください。
Process Center のデータベース名または Process Server のデータベース名	Process Center または Process Server のデータベース名を入力してください。
Performance Data Warehouse のデータベース名	Performance Data Warehouse のデータベース名を入力してください。
Windows 認証情報を使用してデータベースに接続するように指定する場合は、「Windows 認証を適用」オプションを選択します。このオプションを選択すると、それ以降のフィールドが非アクティブになります。	

表 71. Microsoft SQL Server の場合の必須のデータベース構成フィールド (続き)

フィールド	必要なアクション
共通データベース	<p>共通データベースの場合は、以下のパラメーターの値を入力してください。</p> <ul style="list-style-type: none"> • ユーザー名 <p>共通データベースのユーザー名を入力してください。</p> <ul style="list-style-type: none"> • パスワード <p>共通データベースで認証を行うパスワードを入力してください。</p>
Process Server データベース	<p>Process Server データベースの場合は、以下のパラメーターの値を入力してください。</p> <ul style="list-style-type: none"> • ユーザー名 <p>Process Server データベースのユーザー名を入力してください。</p> <ul style="list-style-type: none"> • パスワード <p>Process Server データベースで認証を行うパスワードを入力してください。</p>
Performance Data Warehouse データベース	<p>Performance Data Warehouse データベースの場合は、以下のパラメーターの値を入力してください。</p> <ul style="list-style-type: none"> • ユーザー名 <p>Performance Data Warehouse データベースのユーザー名を入力してください。</p> <ul style="list-style-type: none"> • パスワード <p>Performance Data Warehouse データベースで認証を行うパスワードを入力してください。</p>
Common Event Infrastructure バス・メッセージング・エンジン・データベース	<p>Common Event Infrastructure バス・メッセージング・エンジンの場合は、以下のパラメーターの値を入力してください。</p> <ul style="list-style-type: none"> • ユーザー名 <p>Common Event Infrastructure バス・メッセージング・エンジンのユーザー名を入力してください。</p> <ul style="list-style-type: none"> • パスワード <p>Common Event Infrastructure バス・メッセージング・エンジンで認証を行うパスワードを入力してください。</p>

表 71. Microsoft SQL Server の場合の必須のデータベース構成フィールド (続き)

フィールド	必要なアクション
Service Component Architecture システム・バス・メッセージング・エンジン・データベース	<p>SCA システム・バス・メッセージング・エンジンの場合は、以下のパラメーターの値を入力してください。</p> <ul style="list-style-type: none"> • ユーザー名 SCA システム・バス・メッセージング・エンジンのユーザー名を入力してください。 • パスワード SCA システム・バス・メッセージング・エンジンで認証を行うパスワードを入力してください。
Service Component Architecture アプリケーション・バス・メッセージング・エンジン・データベース	<p>SCA アプリケーション・バス・メッセージング・エンジンの場合は、以下のパラメーターの値を入力してください。</p> <ul style="list-style-type: none"> • ユーザー名 SCA アプリケーション・バス・メッセージング・エンジンのユーザー名を入力してください。 • パスワード SCA アプリケーション・バス・メッセージング・エンジンで認証を行うパスワードを入力してください。

表 72. Oracle の場合の必須のデータベース構成フィールド

フィールド	必要なアクション
ホスト名	デフォルト値 localhost をそのまま確定するか、データベース・サーバーの正しいホスト名を入力します。例えば、IP アドレス。
ポート	デフォルト値 1521 をそのまま確定するか、サーバーの正しいポート番号を入力します。
共通データベース名	共通データベース用の名前を入力してください。
Process Center のデータベース・システム ID	正しい Process Center データベース・システム ID を入力してください。
共通データベース	<p>共通データベースの場合は、以下のパラメーターの値を入力してください。</p> <ul style="list-style-type: none"> • ユーザー名 共通データベースのユーザー名を入力してください。 • パスワード 共通データベースで認証を行うパスワードを入力してください。

表 72. Oracle の場合の必須のデータベース構成フィールド (続き)

フィールド	必要なアクション
Process Server データベース	<p>Process Server データベースの場合は、以下のパラメーターの値を入力してください。</p> <ul style="list-style-type: none"> • ユーザー名 <p>Process Server データベースのユーザー名を入力してください。</p> <ul style="list-style-type: none"> • パスワード <p>Process Server データベースで認証を行うパスワードを入力してください。</p>
Performance Data Warehouse データベース	<p>Performance Data Warehouse データベースの場合は、以下のパラメーターの値を入力してください。</p> <ul style="list-style-type: none"> • ユーザー名 <p>Performance Data Warehouse データベースのユーザー名を入力してください。</p> <ul style="list-style-type: none"> • パスワード <p>Performance Data Warehouse データベースで認証を行うパスワードを入力してください。</p>
Common Event Infrastructure バス・メッセージング・エンジン・データベース	<p>Common Event Infrastructure バス・メッセージング・エンジンの場合は、以下のパラメーターの値を入力してください。</p> <ul style="list-style-type: none"> • ユーザー名 <p>Common Event Infrastructure バス・メッセージング・エンジンのユーザー名を入力してください。</p> <ul style="list-style-type: none"> • パスワード <p>Common Event Infrastructure バス・メッセージング・エンジンで認証を行うパスワードを入力してください。</p>
Service Component Architecture システム・バス・メッセージング・エンジン・データベース	<p>SCA システム・バス・メッセージング・エンジンの場合は、以下のパラメーターの値を入力してください。</p> <ul style="list-style-type: none"> • ユーザー名 <p>SCA システム・バス・メッセージング・エンジンのユーザー名を入力してください。</p> <ul style="list-style-type: none"> • パスワード <p>SCA システム・バス・メッセージング・エンジンで認証を行うパスワードを入力してください。</p>

表 72. Oracle の場合の必須のデータベース構成フィールド (続き)

フィールド	必要なアクション
Service Component Architecture アプリケーション・パス・メッセージング・エンジン・データベース	<p>SCA アプリケーション・パス・メッセージング・エンジンの場合は、以下のパラメーターの値を入力してください。</p> <ul style="list-style-type: none"> • ユーザー名 <p>SCA アプリケーション・パス・メッセージング・エンジンのユーザー名を入力してください。</p> <ul style="list-style-type: none"> • パスワード <p>SCA アプリケーション・パス・メッセージング・エンジンで認証を行うパスワードを入力してください。</p>

関連概念:

906 ページの『Microsoft SQL Server データベースの構成』

Microsoft SQL Server と共に使用するスタンドアロン・プロファイルを作成することができます。

関連タスク:

193 ページの『標準インストール: IBM Business Process Manager Advanced』

「標準インストール」オプションを使用して、開発、品質保証、およびクラスター化されていないステージングおよび実動のための環境に IBM Business Process Manager Advanced をインストールします。このインストール・オプションでは、ほとんどの設定値がデフォルトで設定されますが、インストール・パスとデータベース・タイプはユーザーが指定できます。電子インストール・イメージ (DVD ではなく) から標準インストールを実行する必要があります。

902 ページの『手動でのデータベースの作成』

IBM Business Process Manager Advanced は、Process Server データベース、Performance Data Warehouse データベース、および共通データベースを必要とします。標準インストールを使用して IBM Business Process Manager Advanced をインストールする前に、データベースが使用可能であることを確認する必要があります。

940 ページの『DB2 for z/OS データベースの作成および構成』

デプロイメント環境がリモートの DB2 for z/OS データベースに依存している場合、このセクションの手順および参照情報を使用して、データベースの構成およびデータベース表の作成に役立ててください。

カスタム・インストール: IBM Business Process Manager Advanced

デプロイメント環境で追加のクラスター・ノードが必要な場合や、複雑なデプロイメント環境とデータベース・トポロジーがビジネスに必要な場合は、「カスタム・インストール」オプションを使用して IBM Business Process Manager Advanced をインストールします。

Red Hat Enterprise Linux 6 環境で DB2 Express を使用して IBM Business Process Manager をインストールする場合は、管理権限 (root ユーザー) が必要であり、システム上に既存の DB2 データベース・サーバーがあってはならず、DB2 Express のインストールを開始する前にすべてのカーネル要件が満たされている必要があります。現行値は、`ipcs -l` コマンドの出力を解析することによって見つけることができます。

Windows IBM Business Process Manager Advanced を Windows 7、Windows Vista あるいは Windows Server 2008 にインストールして実行するには、使用している Microsoft Windows ユーザー・アカウントの特権を上げる必要があります。管理ユーザーか非管理ユーザーかに関係なく、`launchpad.exe` を右クリックして「管理者として実行」を選択します。

重要: 1 つの IBM Installation Manager だけで、IBM Business Process Manager Advanced の複数のインスタンスをインストールできます。

このタスクでは、Launchpad のカスタム・インストール・オプションを使用して IBM Business Process Manager Advanced をインストールする手順を説明します。

1. 製品 DVD からインストールするか、またはパスポート・アドバンテージからダウンロードしたイメージからインストールするかに応じて、以下のいずれかの方法でメディアにアクセスします。
 - 製品 DVD からインストールする場合は、IBM Business Process Manager Advanced のラベルが付いた製品ディスクをディスク・ドライブに挿入します。必要に応じてディスク・ドライブをマウントします。ワークステーションで自動実行が使用可能な場合は、ランチパッド・プログラムが自動的に開き、ステップ 2 に進むことができます。ワークステーションで自動実行が使用可能でない場合は、次のコマンドのいずれかを入力して、ランチパッドを手動で開始します。

- **Linux** **UNIX** `mount_point/launchpad.sh`

- **Windows** (コマンド行から) `DVD_root%1launchpad.exe`

- パスポート・アドバンテージからダウンロードしたイメージを使用してインストールする場合は、以下のステップを実行します。
 - a. イメージを解凍するディレクトリーに移動します。
 - b. 以下のコマンドのいずれかを入力して、Launchpad を開始します。

- **Linux** **UNIX** `extract_directory/launchpad.sh`

- **Windows** (コマンド行から) `extract_directory%1launchpad.exe`

2. 「ようこそ」ページで「**カスタム・インストール**」をクリックします。

重要: 64 ビット・システムを使用している場合は、以下のメッセージが表示される場合があります。

ご使用のオペレーティング・システムは、ランチパッド前提条件の検査に失敗しました。IBM Installation Manager の実行のための次の 32 ビット GTK ライブラリーが、基本 OS で使用可能ではありません。 [list_of_missing_files](#)。
32 ビット GTK ライブラリーをインストールし、そのインストール環境を再始動してください。

このメッセージが表示された場合、サーバーに 32 ビット・バージョンの GTK ライブラリーがインストールされていないか、そのライブラリーが正しいバージョンではありません。オペレーティング・システムの DVD または公式 Web サイトから入手する正しいバージョンの 32 ビット GTK ライブラリーでサーバーを更新してから、インストールを続行してください。

3. 「**管理ユーザーとしてのインストール**」をクリックして、管理ユーザーとしてインストールします。Windows で管理者グループに属する場合、あるいは Linux または UNIX システムで root ユーザーである場合は、管理ユーザーとしてインストールできます。管理ユーザーでない場合、または管理特権のない独自のユーザー名でインストールする場合は、このチェック・ボックスをクリアします。
4. 「**インストール**」をクリックします。IBM Business Process Manager Advanced をインストールすると、必要な WebSphere Application Server Network Deployment Feature Pack for XML と Feature Pack for Service Component Architecture (SCA) が組み込まれます。
5. オプション: 「**ヘルプ・システムのインストール**」をクリックし、製品のヘルプ・システムと文書をコンピューターにインストールします。ヘルプ・システムは、文書を表示するための Eclipse フレームワークです。インストール後は、文書をスタンドアロン・モードで表示することも、サーバー・モードで表示することもできます。このオプションは、Windows XP 32 ビット、Linux 32 ビット、および AIX 32 ビットでのみサポートされています。

6. Installation Manager の「パッケージのインストール」ページで、「**IBM Business Process Manager Advanced**」パッケージを選択します。
7. オプション: 「IBM DB2 Express」を選択し、組み込みの DB2 Express データベースをインストールおよび使用します。
8. 「次へ」をクリックして先に進みます。

前提条件の検査時に以下のエラー・メッセージを受け取った場合、製品の非互換性の問題に対処し、「戻る」をクリックし、問題を修正して、「次へ」をクリックして続行します。

- DB2 Express をインストールするように選択した場合に、そのシステムに DB2 が既にインストールされていると、以下のエラー・メッセージを受け取ります。

DB2 は既にこのシステムにインストール済みです。既存の DB2 をアンインストールするか、DB2 Express をインストール対象から選択解除してください。

- IBM Business Process Manager バージョン 7.5.1 製品のいずれかを、他のいずれかの IBM Business Process Manager バージョン 7.5.1 または同等の以前のリリースの製品と同じ WebSphere Application Server のロケーションにインストールすることを選択すると、以下のエラー・メッセージを受け取ります。

IBM Business Process Manager V7.5.1 can not coexist with the following offerings:

Installation Manager は、参照用にすべての非互換製品をリストします。

前提条件の検査中に以下の警告メッセージが表示された場合は、後述のプラットフォーム固有の手順を使用して、**ulimit** の数 値を増やしてください。

Current system has detected a lower level of ulimit than the recommended value of *recommended_value*. Please increase the ulimit number to minimum value of *recommended_value* and re-start the installation.

Shutdown your installer. If you are a root user open a command prompt and issue `ulimit -n recommended_value` and then restart the installer.

If you are a non-root user, work with your system administrator to increase your ulimit `-n recommended_value` and then restart the installer.

必要な値は、WebSphere Application Server のバージョン、フィーチャー・パック、およびインストール中の構成に基づいて計算されます。

- a. 以下の手順で、オープン・ファイルの最大数を設定します。

AIX

- 1) `/etc/security/limits` を開きます。
- 2) **default** セクションを編集または追加して、以下の行を含めます。

nfiles = *recommended_value*

- 3) ファイルを保存して閉じます。
- 4) ログオフし、ログインし直します。

Linux

- 1) `/etc/security/limits.conf` を開きます。
- 2) **nofile** パラメーターを見つけて、値を増やします。**nofile** パラメーターが含まれている行が存在しない場合は、以下の行をファイルに追加します。

* **hard nofile *recommended_value***

* **soft nofile *recommended_value***

- 3) ファイルを保存して閉じます。

4) ログオフし、ログインし直します。

Solaris

1) /etc/system を開き、ファイルの終わりに以下の行を追加します。

set rlim_fd_max=8800

2) ファイルを保存して閉じます。

3) ログオフし、ログインし直します。

b. コンピューターを再始動します。

c. インストーラーを再始動します。

9. 「ライセンス」ページで、ご使用条件を読みます。ご使用条件の条項に同意する場合は、「**使用条件の条項に同意します**」をクリックし、「**次へ**」をクリックします。
10. 「ロケーション」ページでは、「**新規パッケージ・グループの作成**」オプションがデフォルトで選択されています。共用リソース・ディレクトリーのロケーションおよび **Installation Manager** のロケーションを選択し、「**次へ**」をクリックします。「**パッケージのインストール**」ウィザードは、ご使用のシステムがオペレーティング・システムの前提条件を満たしているかどうかを検査します。サポートされるオペレーティング・システムのより高いメジャー・リリースが稼働している場合、またはオペレーティング・システム自体がサポート対象のリストにない場合は、警告が出されることがあります。インストールを続行することはできますが、保守を適用しないとインストール済み環境または製品が正常に稼働しなくなる可能性があります。

警告が出された場合は、製品サポート Web ページにアクセスして、最新保守パッケージを取得し、インストール終了後に適用してください。サポートされているバージョンへのマイグレーションについては、IBM 以外の前提条件および相互に必要な製品の資料を参照してください。

重要: DB2 Express をインストールする場合、インストール・ロケーションに各国語のストリング (NLS) を含めることはできません。

11. 「フィーチャー」ページで、インストールするパッケージ・フィーチャーを選択します。**Installation Manager** により、他のフィーチャーとの依存関係が自動的に適用され、ダウンロード・サイズとインストールに必要なディスク・スペース所要量が更新されて表示されます。
- a. オプション: フィーチャー間の依存関係を表示するには、「**依存関係の表示**」を選択します。
- b. オプション: フィーチャーをクリックすると、その簡潔な説明が「**詳細**」の下に表示されます。
- フィーチャーの選択が終了したら、「**次へ**」をクリックします。
12. オプション: 組み込み DB2 Express データベースのインストールと使用を選択した場合は、「共通構成」ページで DB2 管理者の「**ユーザー名**」および「**パスワード**」を指定します。デフォルト値は以下のとおりです。
- Linux インスタンス・ユーザー名およびパスワード: bpinst および bpinst1
 - Linux 隔離 (fenced) ユーザー名およびパスワード: bpmfenc および bpmfenc1
 - Linux 管理サーバー (DAS) ユーザー名およびパスワード: bpmadmin および bpmadmin1
 - Windows 管理ユーザー名およびパスワード: bpmadmin および bpmadmin1

重要: 使用しているオペレーティング・システム (Windows 2008 など) のパスワード・ポリシーにデフォルトのパスワードが準拠していない場合、標準インストールではなくカスタム・インストールを実行すると、システムのパスワード・ポリシーに準拠するパスワードを指定することができます。

制約事項: ユーザー名に各国語のストリング (NLS) が含まれてはなりません。

13. IBM Business Process Manager Advanced パッケージをインストールする前に、「要約」ページで選択内容を確認します。これまでのページで行った選択を変更するには、「戻る」をクリックして変更します。インストールの選択項目が希望どおりになったら、「インストール」をクリックしてパッケージをインストールします。進行標識で、インストールの完了率が示されます。
14. インストール・プロセスが完了すると、プロセス正常終了の確認メッセージが表示されます。
 - a. オプション: 「ログ・ファイルの表示」をクリックして、現行セッションのインストール・ログ・ファイルを新しいウィンドウに表示します。続行するには、「インストール・ログ」ウィンドウを閉じる必要があります。
 - b. 終了時にプロファイル管理ツールを起動する場合は「プロファイル管理ツール」を選択し、そうでない場合は「なし」を選択してインストールを完了します。
 - c. 「完了」をクリックして、Installation Manager を終了します。

ファースト・ステップ・コンソールを起動して、インストールの検証、サーバーまたはデプロイメント・マネージャーの開始または停止、管理コンソールへのアクセス、プロファイル管理ツールの開始、製品資料へのアクセスを行います。




関連タスク:

193 ページの『標準インストール: IBM Business Process Manager Advanced』

「標準インストール」オプションを使用して、開発、品質保証、およびクラスター化されていないステージングおよび実動のための環境に IBM Business Process Manager Advanced をインストールします。このインストール・オプションでは、ほとんどの設定値がデフォルトで設定されますが、インストール・パスとデータベース・タイプはユーザーが指定できます。電子インストール・イメージ (DVD ではなく) から標準インストールを実行する必要があります。

既存の WebSphere Application Server インストール済み環境へのインストール:

IBM Business Process Manager Advanced を WebSphere Application Server の既存のインストール済み環境にインストールできます。

1. 製品 DVD からインストールするか、またはパスポート・アドバンテージからダウンロードしたイメージからインストールするかに応じて、以下のいずれかの方法でメディアにアクセスします。
 - 製品 DVD からインストールする場合は、IBM Business Process Manager Advanced のラベルが付いた製品ディスクをディスク・ドライブに挿入します。必要に応じてディスク・ドライブをマウントします。ワークステーションで自動実行が使用可能な場合は、Launchpad プログラムが自動的に開き、ステップ 2 (206 ページ) に進むことができます。ワークステーションで自動実行が使用可能でない場合は、以下のコマンドの 1 つを入力して手動で Launchpad を開始します。
 -   `mount_point/launchpad.sh`
 -  (コマンド行から) `DVD_root¥1launchpad.exe`
 - パスポート・アドバンテージからダウンロードしたイメージを使用してインストールする場合は、以下のステップを実行します。
 - a. イメージを解凍するディレクトリーに移動します。
 - b. 以下のコマンドのいずれかを入力して、Launchpad を開始します。

- Linux UNIX `extract_directory/launchpad.sh`
- Windows (コマンド行から) `extract_directory%1launchpad.exe`

重要: 64 ビット・システムを使用している場合は、以下のメッセージが表示される場合があります。

ご使用のオペレーティング・システムは、ランチパッド前提条件の検査に失敗しました。IBM Installation Manager の実行のための次の 32 ビット GTK ライブラリーが、基本 OS で使用可能ではありません。 *list_of_missing_files*。
32 ビット GTK ライブラリーをインストールし、そのインストール環境を再始動してください。

このメッセージが表示された場合、サーバーに 32 ビット・バージョンの GTK ライブラリーがインストールされていないか、そのライブラリーが正しいバージョンではありません。オペレーティング・システムの DVD または公式 Web サイトから入手する正しいバージョンの 32 ビット GTK ライブラリーでサーバーを更新してから、インストールを続行してください。

2. 「**カスタム・インストール**」をクリックします。
3. 「**既存の WebSphere Application Server へのインストール**」をクリックします。
4. 「**管理ユーザーとしてのインストール**」を選択して、管理ユーザーとしてインストールします。
Windows で管理者グループに属する場合、あるいは Linux または UNIX システムで root ユーザーである場合は、管理ユーザーとしてインストールできます。管理ユーザーでない場合、または管理特権のない独自のユーザー名でインストールする場合は、このチェック・ボックスをクリアします。
5. 「**インポートまたは更新 (Import or Update)**」をクリックして、WebSphere Application Server および関連するフィーチャー・パックをインポートまたは更新します。

WebSphere Application Server を過去にインポートしていない場合、または最後にインポートした後に Update Installer を使用して更新した場合、今回 WebSphere Application Server をインポートする必要があります。ここで「**インポートまたは更新 (Import or Update)**」をクリックし、Installation Manager が開いたら「**インポート**」をクリックします。

これ以前に WebSphere Application Server をインポートしていて、更新はまだ行っていない場合、この時点で WebSphere Application Server を更新できます。ここで「**インポートまたは更新 (Import or Update)**」をクリックし、Installation Manager が開いたら「**更新**」をクリックします。WebSphere Application Server、Feature Pack for XML、および Feature Pack for SCA 用の使用可能な更新をインストールします。「**パッケージの更新**」ページで、「**すべて表示**」を選択して、使用可能な更新を表示します。Feature Pack for SCA を既にインストールしてある場合、サービス・データ・オブジェクト機能がインストールされていることを確認してください。インストールされていない場合、「**フィーチャー**」パネルで機能を選択します。サービス・データ・オブジェクト機能には、Feature Pack for XML が必要です。

6. 「**インストール**」をクリックして、IBM Business Process Manager をインストールします。IBM Business Process Manager をインストールする際、インストールに必要な WebSphere Application Server、XML 用フィーチャー・パック、および SCA 用フィーチャー・パックが自動的に選択されます。これらのフィーチャー・パックが既にインストールされている場合は、WebSphere Application Server およびフィーチャー・パックの横のチェック・ボックスをクリアします。

IBM Process Designer のインストール:

Process Center をインストールしたときにプロセス・オーサリング用の IBM Process Designer をインストールしなかった場合は、Process Center コンソールから Process Designer をダウンロードしてインストールすることができます。

注: Process Designer、Process Center、および各ランタイム環境は、同じバージョンの IBM Business Process Manager を実行する必要があります。

1. Process Center を開きます。
2. IBM Process Designer の「ダウンロード」オプションをクリックします。プロンプトが表示されたら、IBM Process Designer.zip ファイルをご使用のファイル・システムに保存します。このファイルには、Process Designer のインストールと実行に必要なすべての情報が含まれています。使用するネットワーク接続によっては、ダウンロードの完了までに数分かかる場合があります。
3. IBM Process Designer.zip ファイルの内容を、ご使用のファイル・システム上の一時ディレクトリーに解凍します。
4. コマンド・ウィンドウを開き、IBM Process Designer.zip ファイルの内容を解凍したディレクトリーに移動します。

重要: Windows 7、Windows Vista、または Windows Server 2008 が稼働している場合は、「管理者として実行」を右クリックして選択し、コマンド・プロンプトを開始します。

5. 以下のコマンドのいずれかを実行して、Process Designer をインストールします。Windows で管理者グループに属している場合は、admin コマンドを使用してインストールできます。管理ユーザーでない場合、または管理者特権のない独自のユーザー名でインストールする場合は、nonadmin コマンドを使用してインストールします。

デフォルト・ロケーション (C:¥IBM¥ProcessDesigner¥v7.5)

- **installProcessDesigner_admin.bat**
- **installProcessDesigner_nonadmin.bat**

別のロケーション

- **installProcessDesigner_admin.bat *installLocation***
- **installProcessDesigner_nonadmin.bat *installLocation***

ロケーションのディレクトリー名にスペースが含まれている場合は、ロケーション全体を引用符で囲んでください。

以下の例は、別のロケーションにインストールする方法を示しています。

```
installProcessDesigner_admin.bat D:¥IBM¥PD  
installProcessDesigner_admin.bat "D:¥Process Designer¥"
```

インストール・メッセージがファイル %TEMP%¥IBMProcessDesignerInstall.log に記録されます。ここで、%TEMP% 変数は通常 C:¥Documents and Settings¥current_user_name¥Local Settings¥Temp に設定されています。

ショートカットにアクセスするには、「スタート」 > 「IBM Process DesignerEdition」 > 「Process Designer」をクリックします。

IBM Business Process Manager Advanced のサイレント・インストール

IBM Business Process Manager Advanced 製品パッケージをサイレント・インストール・モードでインストールできます。サイレント・モードでインストールするときは、ユーザー・インターフェースは使用できません。

重要: 1 つの IBM Installation Manager だけで、IBM Business Process Manager Advanced の複数のインスタンスをインストールできます。

コマンド行を使用した IBM Business Process Manager Advanced のサイレント・インストール:

コマンド行を使用して、IBM Business Process Manager Advanced をインストールできます。(DVD ではなく) 電子インストール・イメージからサイレント・インストールを実行する必要があります。

IBM Business Process Manager Advanced をインストールする前に、製品のシステム要件を確認してください。

オペレーティング・システムおよびソフトウェアの前提条件レベルが特に重要です。インストール・プロセスでは前提条件オペレーティング・システム・パッチが自動的に検査されますが、まだ確認していない場合はシステム要件を確認してください。システム要件リンクには、すべてのサポートされているオペレーティング・システムと、対応したオペレーティング・システムにするためにインストールしなければならないオペレーティング・システムのフィックスおよびパッチがリストされています。さらに、すべての前提ソフトウェアの必要レベルも記載されています。

Red Hat Enterprise Linux 6 環境で DB2 Express を使用して IBM Business Process Manager をインストールする場合は、管理権限 (root ユーザー) が必要であり、システム上に既存の DB2 データベース・サーバーがあってはならず、DB2 Express のインストールを開始する前にすべてのカーネル要件が満たされている必要があります。現行値は、**ipcs -l** コマンドの出力を解析することによって見つけることができます。

前提条件の検査中に以下の警告メッセージが表示された場合は、後述のプラットフォーム固有の手順を使用して、**ulimit** の数 値を増やしてください。

```
Current system has detected a lower level of ulimit than the recommended value of recommended_value.  
Please increase the ulimit number to minimum value of recommended_value and re-start the installation.
```

```
Shutdown your installer. If you are a root user open a command prompt and issue ulimit  
-n recommended_value and then restart the installer.
```

```
If you are a non-root user, work with your system administrator to increase your ulimit  
-n recommended_value and then restart the installer.
```

必要な値は、WebSphere Application Server のバージョン、フィーチャー・パック、およびインストール中の構成に基づいて計算されます。

1. 以下の手順で、オープン・ファイルの最大数を設定します。

AIX

- a. `/etc/security/limits` を開きます。
- b. **default** セクションを編集または追加して、以下の行を含めます。

```
nfiles = recommended_value
```

- c. ファイルを保存して閉じます。
- d. ログオフし、ログインし直します。

Linux

- a. `/etc/security/limits.conf` を開きます。
- b. **nofile** パラメーターを見つけて、値を増やします。**nofile** パラメーターが含まれている行が存在しない場合は、以下の行をファイルに追加します。

```
* hard nofile recommended_value
```

```
* soft nofile recommended_value
```

- c. ファイルを保存して閉じます。
- d. ログオフし、ログインし直します。

Solaris

a. `/etc/system` を開き、ファイルの終わりに以下の行を追加します。

```
set rlim_fd_max=8800
```

- b. ファイルを保存して閉じます。
- c. ログオフし、ログインし直します。

2. コンピューターを再起動します。
3. インストーラーを再起動します。

IBM Business Process Manager Advanced のインストールに必要な前提条件の基本製品がない場合、サイレント・インストールの一部としてそれをインストールする必要があります。必要な基本製品は以下のとおりです。

- Installation Manager
- WebSphere Application Server Network Deployment
- Feature Pack for XML
- サービス・コンポーネント・アーキテクチャー (SCA) 用のフィーチャー・パック

サイレント・インストールでは、以下のタスクが実行されます。

- Installation Manager がまだインストールされていない場合はインストールし、既にインストールされている場合は適切なレベルに更新します。
- 必要な基本製品および IBM Business Process Manager Advanced をインストールします。

IBM Business Process Manager Advanced をサイレント・インストールするには、以下のステップを実行します。

1. インストール前にライセンス条項を読んで同意します。**-acceptLicense** をコマンド行に追加すると、すべてのライセンスに同意したことになります。
2. 次のコマンドを実行します。

重要: Windows 7、Windows Vista、または Windows Server 2008 を実行している場合、右クリックして「管理者として実行」を選択してコマンド・プロンプトを開始します。

Windows

```
extract_directory\imcl install list_of_product_IDs -acceptLicense  
-installationDirectory location  
-repositories repository  
-properties key=value,key=value  
-showVerboseProgress -log logName.log
```

UNIX

Linux

```
extract_directory/imcl install list_of_product_IDs -acceptLicense -installationDirectory location  
-repositories repository -properties key=value,key=value -showVerboseProgress -log  
logName.log
```

ここで、

- `list_of_product_IDs` は、インストールする製品と機能の ID のリストです。構文は `productID.feature.feature` で、複数の製品はスペースで区切ります。

表 73. 製品 ID

製品	製品 ID
IBM BPM Advanced	com.ibm.ws.WPS75
WebSphere Application Server Network Deployment	com.ibm.websphere.ND.v70,core.feature, samples,import.productProviders.feature, import.configLauncher.feature, consoleLanguagesSupport.feature, runtimeLanguagesSupport.feature (すべての必須フィーチャーを含む)
サービス・コンポーネント・アーキテクチャー (SCA) 用のフィーチャー・パック	com.ibm.websphere.SCA.v10
Feature Pack for XML	com.ibm.websphere.XML.v10
Installation Manager	com.ibm.cic.agent,agent_core,agent_jre
DB2 for Linux (32 ビット版)	com.ibm.ws.DB2EXP97.linuxia32
DB2 for Linux (64 ビット版)	com.ibm. ws.DB2EXP97. linuxia64
DB2 for Windows (32 ビット版)	com.ibm.ws.DB2EXP97.winia32
DB2 for Windows (64 ビット版)	com.ibm.ws.DB2EXP97.winia64

- *location* は、製品がインストールされるディレクトリーへのパスです。
- *repository* は、ファイルが抽出されたリポジトリーへのパスで、以下のいずれかのディレクトリーです。

```
extract_directory/repository/repos_32bit
extract_directory/repository/repos_64bit
```

複数のリポジトリーを指定する場合は、リポジトリーの場所をコンマで区切ってください。

- *key=value* は、インストール環境に渡すキーと値のコンマで区切られたリストです。コンマとコンマの間にスペースを入れないでください。

表 74. キー

キー	説明
user.select.64bit.image	64 ビット・オペレーティング・システムにインストールする場合、以下の行を正確に追加します。 user.select.64bit.image,,com.ibm.websphere.ND.v70=true デフォルト値は false です。
user.db2.admin.username	Windows のみ。DB2 データベースにアクセスする権限を持つユーザー名。デフォルト値は bpmadmin です。
user.db2.admin.password	Windows のみ。上記のユーザー名のパスワード。デフォルト値は bpmadmin1 です。
user.db2.port	DB2 データベースのポート。デフォルト値は 50000 です。
user.db2.instance.username	Linux および UNIX のみ。DB2 インスタンスのユーザー名。デフォルト値は bpminst です。
user.db2.instance.password	Linux および UNIX のみ。上記のユーザー名のパスワード。デフォルト値は bpminst1 です。

表 74. キー (続き)

キー	説明
user.db2.fenced.username	Linux および UNIX のみ。fenced ユーザー名。デフォルト値は bpmfenc です。
user.db2.fenced.password	Linux および UNIX のみ。上記のユーザー名のパスワード。デフォルト値は bpmfenc1 です。
user.db2.das.username	Linux および UNIX のみ。管理サーバー (DAS) ユーザー名。デフォルト値は bpmadmin です。
user.db2.das.password	Linux および UNIX のみ。上記のユーザー名のパスワード。デフォルト値は bpmadmin1 です。

- *logName* は、メッセージおよび結果が記録されるログ・ファイルの名前です。

このコマンドを実行すると、デフォルト・フィーチャーの製品がインストールされます。特定のフィーチャーをインストールする場合、またはその他の変更を行う場合は、`imcl` のコマンド行引数に関する参照リンクを参照してください。

Installation Manager により、リストされた製品がインストールされ、指定したディレクトリーにログ・ファイルが書き込まれます。

次の例では、IBM Business Process Manager Advanced、WebSphere Application Server Network Deployment、Feature Pack for XML、Feature Pack for SCA、および DB2 for Windows 32 ビットを Windows にインストールします。

```
imcl install com.ibm.ws.WPS75 com.ibm.websphere.ND.v70,core.feature,
samples,import.productProviders.feature, import.configLauncher.feature,consoleLanguagesSupport.feature,
runtimeLanguagesSupport.feature com.ibm.websphere.XML.v10 com.ibm.websphere.SCA.v10
com.ibm.ws.DB2EXP97.winia32 -acceptLicense -installationDirectory C:\IBM\BPM75 -repositories
D:\temp\BPM\repository\repos_32bit -properties user.db2.admin.username=bpmadmin,
user.db2.admin.password=bpmadmin1 -showVerboseProgress -log silentinstall.log
```

プロファイル管理ツールで、または `manageprofiles` コマンドを使用して、スタンドアロン・サーバー・プロファイルまたはデプロイメント・マネージャーを定義する必要があります。実稼働環境では、プロファイル管理ツールまたは `manageprofiles` コマンドで作成されたプロファイルのみを使用できます。

関連資料:



[imcl のコマンド行引数](#)



[IBM Business Process Manager Advanced のシステム要件](#)

応答ファイルを使用した IBM Business Process Manager Advanced のサイレント・インストール:

応答ファイルを作成し、その応答ファイルを使用して製品をインストールするコマンドを実行すれば、IBM Business Process Manager Advanced をインストールできます。サイレント・インストールは、電子インストール・イメージから行う必要があります (DVD ではなく)。

IBM Business Process Manager Advanced をインストールする前に、製品のシステム要件を確認してください。

オペレーティング・システムおよびソフトウェアの前提条件レベルが特に重要です。インストール・プロセスでは前提条件オペレーティング・システム・パッチが自動的に検査されますが、まだ確認していない場合はシステム要件を確認してください。システム要件リンクには、すべてのサポートされているオペレーティ

ング・システムと、対応したオペレーティング・システムにするためにインストールしなければならないオペレーティング・システムのフィックスおよびパッチがリストされています。さらに、すべての前提ソフトウェアの必要レベルも記載されています。

Red Hat Enterprise Linux 6 環境で DB2 Express を使用して IBM Business Process Manager をインストールする場合は、管理権限 (root ユーザー) が必要であり、システム上に既存の DB2 データベース・サーバーがあってはならず、DB2 Express のインストールを開始する前にすべてのカーネル要件が満たされている必要があります。現行値は、**ipcs -l** コマンドの出力を解析することによって見つけることができます。

前提条件の検査中に以下の警告メッセージが表示された場合は、後述のプラットフォーム固有の手順を使用して、**ulimit** の数 値を増やしてください。

Current system has detected a lower level of ulimit than the recommended value of *recommended_value*. Please increase the ulimit number to minimum value of *recommended_value* and re-start the installation.

Shutdown your installer. If you are a root user open a command prompt and issue ulimit -n *recommended_value* and then restart the installer.

If you are a non-root user, work with your system administrator to increase your ulimit -n *recommended_value* and then restart the installer.

必要な値は、WebSphere Application Server のバージョン、フィーチャー・パック、およびインストール中の構成に基づいて計算されます。

1. 以下の手順で、オープン・ファイルの最大数を設定します。 AIX

- a. /etc/security/limits を開きます。
- b. **default** セクションを編集または追加して、以下の行を含めます。

nfiles = recommended_value

- c. ファイルを保存して閉じます。
- d. ログオフし、ログインし直します。

Linux

- a. /etc/security/limits.conf を開きます。
- b. **nofile** パラメーターを見つけて、値を増やします。**nofile** パラメーターが含まれている行が存在しない場合は、以下の行をファイルに追加します。

*** hard nofile recommended_value**

*** soft nofile recommended_value**

- c. ファイルを保存して閉じます。
- d. ログオフし、ログインし直します。

Solaris

- a. /etc/system を開き、ファイルの終わりに以下の行を追加します。

set rlim_fd_max=8800

- b. ファイルを保存して閉じます。
- c. ログオフし、ログインし直します。

2. コンピューターを再始動します。
3. インストーラーを再始動します。

IBM Business Process Manager Advanced のインストールに必要な前提条件の基本製品がない場合、サイレント・インストールの一部としてそれをインストールする必要があります。必要な基本製品は以下のとおりです。

- Installation Manager
- WebSphere Application Server Network Deployment
- Feature Pack for XML
- サービス・コンポーネント・アーキテクチャー (SCA) 用のフィーチャー・パック

サイレント・インストールでは、以下のタスクが実行されます。

- Installation Manager がまだインストールされていない場合はインストールし、既にインストールされている場合は適切なレベルに更新します。
- 必要な基本製品および IBM Business Process Manager Advanced をインストールします。

IBM Business Process Manager Advanced をサイレント・インストールするには、以下のステップを実行します。

1. 必要な基本製品と IBM Business Process Manager Advanced をインストールする応答ファイルを作成します。以下のディレクトリーからサンプル応答ファイルをコピーし、独自の応答ファイルを作成します。

```
extract_directory/responsefiles/BPM/template_response.xml
```

2. 応答ファイル・テンプレートのテキストの指示に従ってパラメーターを変更し、独自の応答ファイルを作成します。

以下の変更を行います。

- リポジトリーのロケーションを設定します。32 ビットまたは 64 ビットのいずれか適切な方のリポジトリーを選択し、使用しない方のリポジトリーはコメント化してください。 `extract_directory/responsefiles/BPM/` ディレクトリーから直接実行しない場合は、使用するインストール・リポジトリーの場所を指定します。リポジトリーは、ローカルでもリモートでも構いません。DVD から実行する場合は、DVD から応答ファイルをコピーし、DVD 上のリポジトリーでこの応答ファイルを再び指定します。
 - 応答ファイルの置換変数を次のように設定します。
 - `${INSTALL_LOCATION_IM}` - IBM Installation Manager が既にインストールされているか、またはこれからインストールされるロケーション。
 - `${LOCATION_ECLIPSE_CACHE}` - Eclipse キャッシュのロケーション。このロケーションを設定する必要があるのは、このロケーションがまだ定義されていない場合のみです。このロケーションが既に設定済みの場合は、この行をコメント化してください。
 - `${INSTALL_LOCATION}` - 製品のインストール先のロケーション。
 - `${FEATURE_LIST}` - 製品のフィーチャーのリスト。このリストは、インストールするフィーチャーのリストと置き換える必要があります。 `template_response.xml` ファイルに記載されている説明に従ってください。
 - DB2 Express をインストールする場合は、`template_response.xml` ファイルの説明に従って、必要なユーザー ID とパスワードを指定します。
3. インストール前にライセンス条項を読んで同意します。**-acceptLicense** をコマンド行に追加すると、すべてのライセンスに同意したことになります。
 4. 次のコマンドを実行します。

重要: Windows 7、Windows Vista、または Windows Server 2008 を実行している場合、右クリックして「管理者として実行」を選択してコマンド・プロンプトを開始します。

管理者または root ユーザー: Windows

```
extract_directory%IM%installc.exe -acceptLicense input
extract_directory%responsefiles%productID
%template_response.xml -log preferred_log_location%silent_install.log
```

UNIX

Linux

```
extract_directory/IM/installc -acceptLicense input
extract_directory/responsefiles/productID/template_response.xml -log preferred_log_location/silent_install.log
```

管理者/root ユーザー以外の場合: Windows

```
extract_directory%IM%userinstc.exe -acceptLicense input
extract_directory%responsefiles%productID
%template_response.xml -log
preferred_log_location%silent_install.log
```

UNIX

Linux

```
extract_directory/IM/userinstc -acceptLicense input
extract_directory/responsefiles/productID/template_response.xml -log preferred_log_location/silent_install.log
```

Installation Manager により、必要なすべての前提条件および IBM Business Process Manager Advanced がインストールされ、指定したディレクトリーにログ・ファイルが書き出されます。

プロファイル管理ツールで、または `manageprofiles` コマンドを使用して、スタンドアロン・サーバー・プロファイルまたはデプロイメント・マネージャーを定義する必要があります。実稼働環境では、プロファイル管理ツールまたは `manageprofiles` コマンドで作成されたプロファイルのみを使用できます。

関連資料:



IBM Business Process Manager Advanced のシステム要件

関連情報:



Installation Manager でのサイレント・インストール



Installation Manager を使用した応答ファイルの記録

構成のアップグレード

IBM Installation Manager を使用して、同じパッケージ・グループ内のインストール済み構成上に新規構成をインストールすることで、IBM Business Process Manager の構成をアップグレードします。

アップグレードする構成が、Installation Manager を使用してインストールされている必要があります。アップグレードを実行する前に、サーバーまたは Network Deployment 環境をシャットダウンしてください。

サポート対象の製品アップグレード・パスは以下のとおりです。

- IBM Business Process Manager Express から IBM Business Process Manager Standard
- IBM Business Process Manager Express から IBM Business Process Manager Advanced
- IBM Business Process Manager Standard から IBM Business Process Manager Advanced

IBM Business Process Manager Advanced - Process Server 構成への、またはその構成からのアップグレード・パスはありません。

注: 構成のアップグレードを実行するとき、既存の IBM Business Process Manager プロファイルはどれも変更されずに残ります。

サポートされているアップグレード・パスとして、以前のバージョンから V7.5.1 にアップグレードすることができます。例えば、IBM Business Process Manager Express バージョン 7.5.0.1 を、IBM Business Process Manager Standard V7.5.1 または IBM Business Process Manager Advanced V7.5.1 にアップグレードすることができます。バージョンをアップグレードする前に、エディションをアップグレードする必要はありません。

注意:

ある構成の V7.5.1 から、アップグレードされた構成の以前のバージョンにアップグレードすることは推奨されません。例えば、IBM Business Process Manager Express V7.5.1 を使用していて、IBM Business Process Manager Standard にアップグレードする場合は、IBM Business Process Manager Standard の以前のバージョンではなく V7.5.1 にアップグレードする必要があります。以前のバージョンへのアップグレードではプロファイルに問題が生じる可能性があり、暫定修正が存在する場合は、それらの暫定修正を先に削除しないとエラーが発生します。

1. Installation Manager を始動します。
2. 「ファイル」 > 「設定」 > 「リポジトリ」をクリックし、新規構成パッケージが含まれているリポジトリを参照します。「リポジトリの追加」をクリックします。
3. Installation Manager の「ようこそ」ページで、「インストール」をクリックします。
4. 「パッケージのインストール」ページで、インストールする構成を選択します。IBM Business Process Manager Advanced にアップグレードする場合は、Feature Pack for Service Component Architecture (SCA) とともに SCA フィーチャー・パックの SDO フィーチャーも選択する必要があります。
5. 「次へ」をクリックして先に進みます。
6. 「ライセンス」ページで、ご使用条件を読みます。ご使用条件の条項に同意する場合は、「使用条件の条項に同意します」をクリックし、「次へ」をクリックします。
7. 「インストールの場所」ページで、アップグレードする構成が含まれているパッケージ・グループを選択します。
8. パッケージをインストールする前に、「要約」ページで選択内容を確認します。これまでのページで行った選択を変更するには、「戻る」をクリックして変更します。インストールの選択項目が希望どおりになったら、「インストール」をクリックしてパッケージをインストールします。進行標識にインストールの完了した割合が表示されます。
9. インストール・プロセスが完了すると、プロセス正常終了の確認メッセージが表示されます。
 - a. オプション: 「ログ・ファイルの表示」をクリックして、現行セッションのインストール・ログ・ファイルを新しいウィンドウに表示します。「インストール・ログ」ウィンドウを閉じて続行します。
 - b. 終了時にプロファイル管理ツールを起動する場合は「プロファイル管理ツール」を選択し、そうでない場合は「なし」を選択してインストールを完了します。
 - c. 「完了」をクリックして、Installation Manager を終了します。

IBM Business Process Manager Advanced の構成

IBM Business Process Manager を構成して、スタンドアロンまたは Network Deployment 環境を構築することができます。

構成 (Advanced、Standard、または Express) は、さまざまなレベルのビジネス・プロセス・マネジメント機能を提供します。例えば、Business Process Choreographer 機能は、IBM Business Process Manager Advanced でのみ使用可能です。IBM Business Process Manager Advanced 構成の詳細な説明については、「IBM Business Process Manager バージョン 7.5.1 構成の機能」を参照してください。

構成フェーズは、製品構成タスクおよび環境構成タスクという 2 種類のタスクで構成されています。製品構成タスクは、製品プロファイルのセットアップとデータベースの構成を目的としています。環境構成タスクは、デプロイメント環境のセットアップおよび生成を目的としています。

環境の構成タスクの 1 つは、デプロイメント環境のクラスターの作成です。デプロイメント環境内のクラスターには、そのクラスターの機能目的に応じた固有のテーブル、スキーマ、およびユーザー権限が必要です。例えば、デプロイメント環境にメッセージング・インフラストラクチャー・クラスターとアプリケーション・デプロイメント・ターゲット・クラスターの両方が含まれる場合があります。この場合、メッセージング・インフラストラクチャー・クラスターはメッセージング・エンジンのデータベース表にアクセスし、アプリケーション・デプロイメント・ターゲット・クラスターは Business Process Choreographer のデータベース表にアクセスします。

217 ページの図 13 に、製品および環境の計画、インストール、および構成に関するタスク・フローを示します。

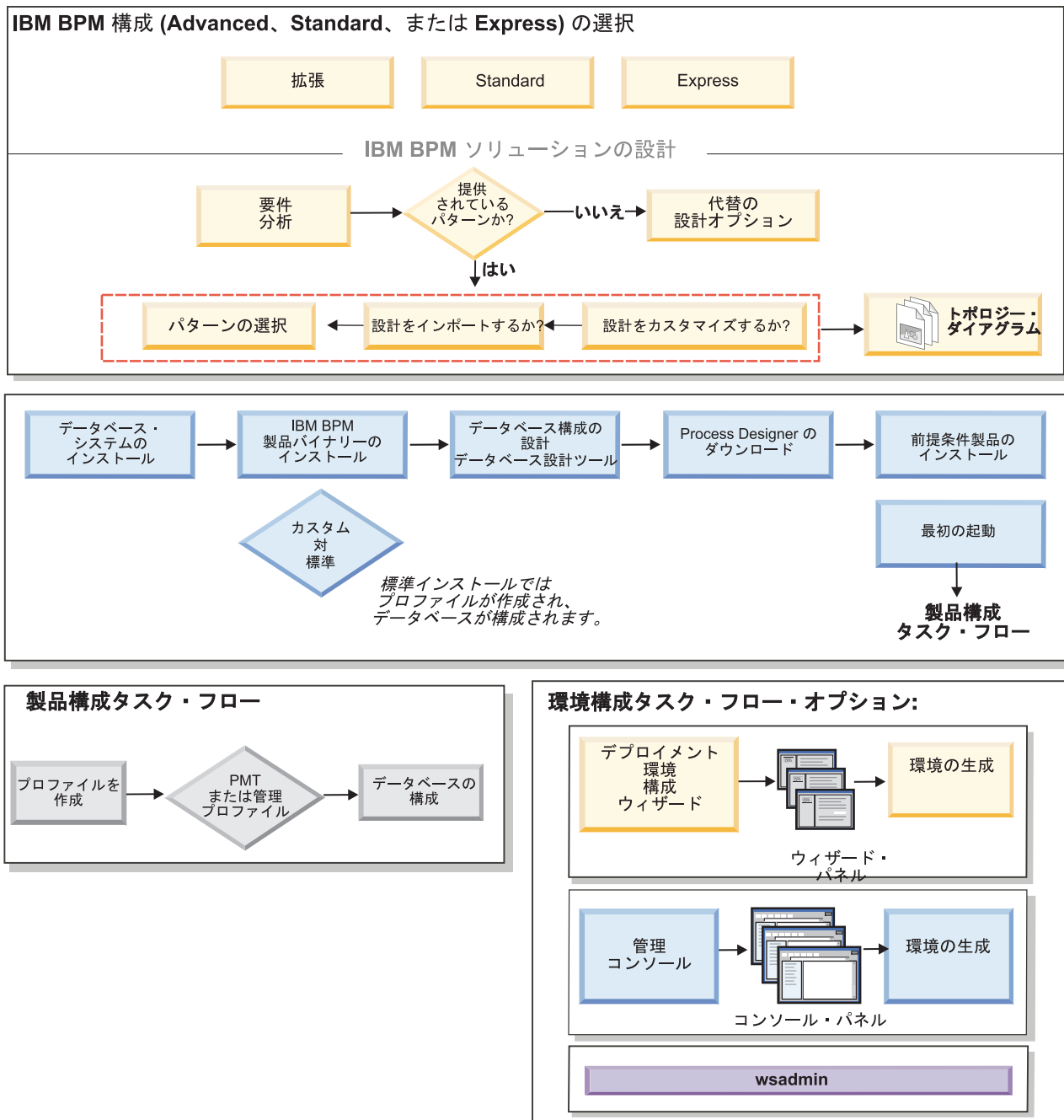


図 13. 製品および環境の計画、インストール、および構成に関するタスク・フロー

製品データベースの作成は、製品インストールの前、製品インストールの後 (ただしプロファイル作成の前)、またはプロファイルの作成後に行うことができます。

configureNode コマンドを使用した Network Deployment 環境の構成

標準的な Network Deployment 環境を構成する場合は、プロファイル管理ツールとデプロイメント環境ウィザード、または `manageprofiles` コマンドと `wsadmin` コマンドを使用する代わりに、`configureNode` コマンドを使用できます。`configureNode` は、後からデプロイメント環境を拡張する場合にも使用できます。

関連概念:

46 ページの『ネットワーク・デプロイメント環境のトポロジー』

トポロジーとは、デプロイメント環境の物理的レイアウトのことです。IBM 提供パターンの 1 つを選択するか、独自のカスタマイズ・パターンを作成することで、ビジネス・ニーズに最適に対応したトポロジーを作成することができます。

configureNode コマンドを使用したデプロイメント環境の作成

configureNode コマンドを使用して、標準的な Network Deployment 環境を作成することができます。

注：一般的な構成には、入力ファイル内で使用可能な **configurenode** プロパティを使用できます。拡張データベース・プロパティなどの拡張オプションを使用する構成の場合は、デプロイメント環境ウィザードを使用する必要があります。

製品、およびプロパティ・ファイルに指定されているすべてのデータベースをインストールしておく必要があります。

重要：データベース・ソフトウェアをインストールして、データベースを作成しておく必要があります (ただし、テーブルは作成しないでください)。また、プロパティ・ファイルで指定するすべてのユーザー (特に SQL Server および Oracle 用) の作成が完了している必要があります。データベースは、手動で作成することも、以下の SQL スクリプトを使用して作成することもできます。

- Process Server データベースの場合:

```
install_root%dbscripts%ProcessServer%db_type%createDatabase.sql
```

- Performance Data Warehouse データベースの場合:

```
install_root%dbscripts%PerformanceDW%db_type%createDatabase.sql
```

- 共通データベースの場合:

```
install_root%dbscripts%CommonDB%db_type%createDatabase_CommonDB.sql
```

- Business Process Choreographer データベースの場合:

```
install_root%dbscripts%ProcessChoreographer%db_type%createDatabase.sql
```

SQL Server に関する考慮事項:

- 構成を行う前に、ユーザー名とスキーマが存在していることを確認します。スキーマの値は、選択されたユーザーのデフォルト・スキーマでなければなりません。
- ユーザーが Windows の資格情報を使用してデータベースに接続することを指定するには、データ・ソースを個別に選択し、「編集」をクリックし、「**Windows 認証を適用**」を選択します。

制約事項: Oracle の場合、データベース・インスタンスは SQL ファイル実行の一環として作成されません。Oracle 製品資料を参照して、インスタンスを手動で作成する必要があります。

制約事項: **configureNode** コマンドは順次実行するようにして、複数のマシンで同時に実行しないでください。

configureNode コマンドにより、以下の Network Deployment トポロジーが作成されます。

- 単一セル環境
- この環境には、プロパティ・ファイルで指定した数のクラスター・メンバーが含まれます。
- この環境では、以下の 4 つのクラスターを含む、リモート・メッセージング、リモート・サポート、および Web のトポロジー・パターンを使用します。
 - メッセージング・インフラストラクチャー・クラスター
 - サポート・インフラストラクチャー・クラスター

- アプリケーション・デプロイメント・ターゲット・クラスター
- Web アプリケーション・クラスター

このコマンドは、以下のタスクを実行します。

- デプロイメント・マネージャー・プロパティ・ファイルに指定された値を基にしてデプロイメント・マネージャー・ノードを作成し、デプロイメント・マネージャーを始動する。
- デプロイメント環境の定義を作成する。
- カスタム・ノード・プロパティ・ファイルに指定された値を基にしてカスタム・ノードを作成する。
- ノードをフェデレートしてデプロイメント環境に追加する。
- デプロイメント環境を生成する。
- データベース表を作成する (データベースは、あらかじめ作成しておく必要があります。手順については、『始める前に』を参照してください)。
- ブートストラップ・ユーティリティを実行し、システム情報と共に Process Server データベースをロードする。

デフォルト・ポートを使用して、デプロイメント・マネージャーが作成されます。**configureNode** を実行した時点で、デプロイメント・マネージャーが既にマシン上で稼働している場合は、デプロイメント環境の作成が失敗します。デプロイメント・マネージャーが既に作成されているが、まだ稼働していない場合は、いずれかのデプロイメント・マネージャーのポートを変更する必要があります。変更しないと、別のデプロイメント・マネージャーを始動したときに、ポートの競合エラーが発生する可能性があります。

デプロイメント環境を初めて作成する場合は、以下の手順を実行します。

1. デプロイメント環境を作成するマシンの `install_root/util/ndUtils/samples/` で、サンプル・プロパティ・ファイル を見つけます。
2. 必要とするプロパティ・ファイルに最も近いサンプル・ファイルをコピーします。例えば、Process Center 用 IBM BPM Advanced のデプロイメント・マネージャーの場合は、`sample_adv_pc_dmgr.properties` ファイルを選択します。ご使用の環境を反映させるために新規ファイルを変更します。

作成するデータベースごとに、データベース・パラメーター・セクションをコピーし、データベース名、ユーザー名、パスワード、およびスキーマ名を指定します。Process Server データベースと Performance Data Warehouse データベースが必要であり、それぞれ別の名前にする必要があります。IBM BPM Advanced の場合は、共通データベースと Business Process Choreographer データベースも必要です。

使用可能なプロパティについて詳しくは、サンプル・ファイル内のコメント、または **configureNode** コマンドの解説と例を参照してください。

重要: Oracle データベースを使用している場合は、オプションのデータベースを含むすべてのデータベースについて、データベースのユーザー名とパスワードを指定する必要があります。

3. 作成した 2 つのファイルの名前を渡して **configureNode** コマンドを実行します。カスタム・ノード・ファイルはオプションですが、これを含めなかった場合はデプロイメント・マネージャーのみが作成されます。例えば、次のようにします。

```
Windows install_root\util\ndUtils\configureNode.bat -dmgr_response  
my_dmgr_response_file.properties -response node01_response_file.properties
```


```
Linux install_root/util/ndUtils/configureNode.sh -dmgr_response  
my_dmgr_response_file.properties -response node01_response_file.properties
```

これで、リモート・メッセージング、リモート・サポート、および Web のトポロジー・パターンを使用する、デプロイメント・マネージャー、カスタム・ノード、およびデプロイメント環境が作成されました。

メッセージは、ファイル `install_root/logs/config/configureNode.log` に記録されます。

重要: 固有のポートを持つ追加のサーバーを使用する場合、WebSphere Application Server ではそのサーバーの仮想ホストが自動的に構成されません。具体的には、WebSphere Application Server は、ホスト別名ポートを自動的に仮想ホストに追加しません。ただし、管理コンソールを使用して、新しいサーバーが使用するポートごとに新しいホスト別名を追加することは可能です。詳しくは、仮想ホストの構成に関する WebSphere Application Server の資料を参照してください。

関連概念:

 仮想ホスト

関連タスク:

1051 ページの『パスワードの暗号化』

IBM Business Process Manager 製品コンポーネントのインストール時には、通常、インストール済みファイル内のパスワードはデフォルトで暗号化されます。これらのパスワードを変更する必要がある場合は、IBM BPM EncryptPassword ユーティリティーを使用して新規パスワードを暗号化できます。

 仮想ホストの構成

関連資料:

221 ページの『`configureNode` の例』

このセクションの例では、`configureNode` コマンド行ユーティリティーを使用して Network Deployment トポロジーを作成する方法を示します。

configureNode コマンドを使用したデプロイメント環境の拡張

`configureNode` コマンドを使用してデプロイメント環境を作成した後、そのデプロイメント環境をこのコマンドで後から拡張することができます。

`configureNode` コマンドを実行するには、以下の前提条件を満たしている必要があります。

- デプロイメント環境の拡張を行うマシンに製品をインストールしておく必要があります。
- デプロイメント・マネージャーは稼働している必要があります。
- `configureNode` コマンドを実行してデプロイメント環境を作成しておく必要があります。

制約事項: `configureNode` コマンドは順次実行するようにして、複数のマシンで同時に実行しないでください。

デプロイメント環境を拡張するには、以下の手順を実行します。

1. デプロイメント環境の拡張を行うマシンで、サンプルのカスタム・ノード・ファイルを見つけます。
`install_root/util/ndUtils/samples/`
2. 必要とするプロパティ・ファイルに最も近いサンプル・ファイルをコピーします。例えば、Process Center 用 IBM BPM Advanced のデプロイメント環境を拡張するには、`sample_adv_pc_node.properties` ファイルを選択します。デプロイメント・マネージャーの詳細を含む、ご使用の環境を反映させるために、新規ファイルを変更します。使用可能なプロパティについて詳しくは、サンプル・ファイル内のコメント、または `configureNode` コマンドの解説と例を参照してください。
3. サンプル・ファイルの名前を渡して `configureNode` コマンドを実行します。以下に例を示します。

Windows `install_root\util\ndUtils\configureNode.bat -response node01_response_file.properties`

Linux **UNIX** `install_root/util/ndUtils/configureNode.sh -response
node01_response_file.properties`

デプロイメント環境を拡張しました。

ファイル `install_root/logs/config/configureNode.log` にメッセージが記録されています。

重要: 固有のポートを持つ追加のサーバーを使用する場合、WebSphere Application Server ではそのサーバーの仮想ホストが自動的に構成されません。具体的には、WebSphere Application Server は、ホスト別名ポートを自動的に仮想ホストに追加しません。ただし、管理コンソールを使用して、新しいサーバーが使用するポートごとに新しいホスト別名を追加することは可能です。詳しくは、仮想ホストの構成に関する WebSphere Application Server の資料を参照してください。

関連概念:

 仮想ホスト

関連タスク:

1051 ページの『パスワードの暗号化』

IBM Business Process Manager 製品コンポーネントのインストール時には、通常、インストール済みファイル内のパスワードはデフォルトで暗号化されます。これらのパスワードを変更する必要がある場合は、IBM BPM EncryptPassword ユーティリティを使用して新規パスワードを暗号化できます。

 仮想ホストの構成

関連資料:

『**configureNode** の例』

このセクションの例では、**configureNode** コマンド行ユーティリティを使用して Network Deployment トポロジーを作成する方法を示します。

configureNode の例

このセクションの例では、**configureNode** コマンド行ユーティリティを使用して Network Deployment トポロジーを作成する方法を示します。

関連タスク:

218 ページの『**configureNode** コマンドを使用したデプロイメント環境の作成』

configureNode コマンドを使用して、標準的な Network Deployment 環境を作成することができます。

220 ページの『**configureNode** コマンドを使用したデプロイメント環境の拡張』

configureNode コマンドを使用してデプロイメント環境を作成した後、そのデプロイメント環境をこのコマンドで後から拡張することができます。

例: デプロイメント・マネージャーおよび 1 つのノードをホストする単一マシン: Standard、PC、DB2:

configureNode コマンド行ユーティリティを使用して、DB2 データベースを使用する 1 台のマシンにデプロイメント・マネージャーと 1 つのノードを配置する IBM Business Process Manager Standard の Process Center トポロジーを作成します。

この例では、M01 というマシンを使用して以下の構成を作成することを想定しています。

マシン	ノード	メッセージング・クラスター	サポート・クラスター	アプリケーション・ターゲット・クラスター
M01	Dmgr	-	-	-
M01	PCNode01	1	1	1

1. 以下のサンプル・プロパティ・ファイルをコピーします。

```
install_root/util/ndUtils/std/samples/sample_std_pc_dmgr.properties
```

```
install_root/util/ndUtils/std/samples/sample_std_pc_node.properties
```

2. 新規ファイルの名前を、例えば `m01_std_pc_dmgr.properties` と `m01_std_pc_node.properties` に変更します。これらのファイルを必要な値で更新します。

デプロイメント・マネージャー・ファイルの例:

```
# filename: m01_std_pc_dmgr.properties

server.type = PCS          # Process Center (PCS) or Process Server (PS)

# Dmgr settings
hostName=M01.ibm.com
adminUserName=admin
adminPassword=admin

nodeName=Dmgr

# Database settings
dbType=DB2
dbServerName=M01.ibm.com
dbPortNumber=50000

# DB for Process Server
prcsvr.dbName = BPMDB
prcsvr.dbUserName = bpmadmin
prcsvr.dbPassword = s0m3passw0rd

# DB for Performance Data Warehouse
perfDW.dbName = PDWDB
perfDW.dbUserName = bpmadmin
perfDW.dbPassword = s0m3passw0rd
```

カスタム・ノード・ファイルの例:

```
# filename: m01_std_pc_node.properties

nodeName=Node01

# Basic Install environment information
server.type = PCS          # Process Center (PCS) or Process Server (PS)

#Install clusters on this node
install.cluster.support = 1
install.cluster.AppTarget = 1
install.cluster.message = 1

# Database settings
dbType=DB2

# Deployment Manager Properties
dmgr.hostName=M01.ibm.com
dmgr.adminUserName=admin
dmgr.adminPassword=admin
```

3. M01 マシン上で `configureNode` コマンドを実行します。

```
Windows install_root\util\ndUtils\configureNode.bat -dmgr_response
m01_dmgr_response_file.properties -response m01_response_file.properties
```

```
Linux UNIX install_root/util/ndUtils/configureNode.sh -dmgr_response
m01_dmgr_response_file.properties -response m01_response_file.properties
```

例: デプロイメント・マネージャーおよび 1 つのノードをホストする単一マシン:
Standard、PC、Oracle:

configureNode コマンド行ユーティリティを使用して、Oracle データベースを使用する 1 台のマシンにデプロイメント・マネージャーと 1 つのノードを配置する IBM Business Process Manager Standard の Process Center トポロジを作成します。

注: 一般的な構成には、入力ファイル内で使用可能な **configurenode** プロパティを使用できます。**configurenode** コマンドは、単一のマシン上のデータベースについてのみ使用できます。拡張データベース・プロパティなどの拡張オプションを使用する構成の場合、または複数のデータベースについての情報の指定の場合は、「デプロイメント環境ウィザード」を使用する必要があります。

この例では、M01 というマシンを使用して以下の構成を作成することを想定しています。

マシン	ノード	メッセージング・クラスター	サポート・クラスター	アプリケーション・ターゲット・クラスター
M01	Dmgr	-	-	-
M01	PCNode01	1	1	1

1. 以下のサンプル・プロパティ・ファイルをコピーします。

```
install_root/util/ndUtils/std/samples/sample_std_pc_dmgr.properties
install_root/util/ndUtils/std/samples/sample_std_pc_node.properties
```

2. 新規ファイルの名前を、例えば `m01_std_pc_dmgr.properties` と `m01_std_pc_node.properties` に変更します。これらのファイルを必要な値で更新します。Oracle データベースの場合は、その他の場合はオプションであるデータベースを含めたすべてのデータベースについて、データベース・ユーザー名とパスワードを組み込む必要があります。データベース・ユーザー名は、データベースごとに異なっている必要があります。

デプロイメント・マネージャー・ファイルの例:

```
# filename: m01_std_pc_dmgr.properties

server.type = PCS          # Process Center (PCS) or Process Server (PS)

# Dmgr settings
hostName=M01.ibm.com
adminUserName=admin
adminPassword=admin

nodeName=Dmgr

# Database settings
dbType=Oracle
dbServerName=M01.ibm.com
dbPortNumber=1521

# DB for Process Server
prcsvr.dbName = orcl
prcsvr.dbUserName = bpmdba
```



```

prcsvr.dbPassword = s0m3passw0rd

# DB for Process Server ME
prcsvrME.dbName = orcl
prcsvrME.dbUserName = bpmmedba
prcsvrME.dbPassword = s0m3passw0rd

# DB for Performance Data Warehouse
perfDW.dbName = orcl
perfDW.dbUserName = pdwdba
perfDW.dbPassword = s0m3passw0rd

# DB for PerformanceDW ME
perfDWME.dbName = orcl
perfDWME.dbUserName = pdwmedba
perfDWME.dbPassword = s0m3passw0rd

```

カスタム・ノード・ファイルの例:

```

# filename: m01_std_pc_node.properties

nodeName=Node01

# Basic Install environment information
server.type = PCS          # Process Center (PCS) or Process Server (PS)

#Install clusters on this node
install.cluster.support = 1
install.cluster.AppTarget = 1
install.cluster.message = 1

# Database settings
dbType=Oracle

# Deployment Manager Properties
dmgr.hostName=M01.ibm.com
dmgr.adminUserName=admin
dmgr.adminPassword=admin

```

3. M01 マシン上で **configureNode** コマンドを実行します。

Windows `install_root\util\ndUtils\configureNode.bat -dmgr_response m01_dmgr_response_file.properties -response m01_response_file.properties`

Linux **UNIX** `install_root/util/ndUtils/configureNode.sh -dmgr_response m01_dmgr_response_file.properties -response m01_response_file.properties`

例: デプロイメント・マネージャーおよび 1 つのノードをホストする単一マシン: Standard, PC, SQL Server:

configureNode コマンド行ユーティリティを使用して、SQL Server データベースを使用する 1 台のマシンにデプロイメント・マネージャーと 1 つのノードを配置する IBM Business Process Manager Standard の Process Center トポロジーを作成します。

この例では、M01 というマシンを使用して以下の構成を作成することを想定しています。

マシン	ノード	メッセージング・クラスター	サポート・クラスター	アプリケーション・ターゲット・クラスター
M01	Dmgr	-	-	-
M01	PCNode01	1	1	1

1. 以下のサンプル・プロパティ・ファイルをコピーします。

```
install_root/util/ndUtils/std/samples/sample_std_pc_dmgr.properties
```

```
install_root/util/ndUtils/std/samples/sample_std_pc_node.properties
```

2. 新規ファイルの名前を、例えば `m01_std_pc_dmgr.properties` と `m01_std_pc_node.properties` に変更します。これらのファイルを必要な値で更新します。

デプロイメント・マネージャー・ファイルの例:

```
# filename: m01_std_pc_dmgr.properties

install.type = Standard # Optional
server.type = PCS      # Process Center (PCS) or Process Server (PS)

# Dmgr setting
hostName=M01.ibm.com
adminUserName=admin
adminPassword=admin

nodeName=Dmgr

# Database settings
dbType=SQLServer
dbServerName=M01.ibm.com
dbPortNumber=1433
# When dbWinAuth=true, Windows Authentication is used
dbWinAuth=false

# DB for Process Server
prcsvr.dbName = BPMDB
prcsvr.dbUserName = bpmadmin
prcsvr.dbPassword = s0m3passw0rd

# DB for Performance Data Warehouse
perfDW.dbName = PDWDB
perfDW.dbUserName = bpmadmin
perfDW.dbPassword = s0m3passw0rd
```

カスタム・ノード・ファイルの例:

```
# filename: m01_std_pc_node.properties

nodeName=Node01

# Basic Install environment information
server.type = PCS      # Process Center (PCS) or Process Server (PS)

#Install clusters on this node
install.cluster.support = 1
install.cluster.AppTarget = 1
install.cluster.message = 1

# Database settings
dbType=SQLServer

# Deployment Manager Properties
dmgr.hostName=M01.ibm.com
dmgr.adminUserName=admin
dmgr.adminPassword=admin
```

3. M01 マシン上で `configureNode` コマンドを実行します。

```
Windows install_root\util\ndUtils\configureNode.bat -dmgr_response
m01_dmgr_response_file.properties -response m01_response_file.properties
```

Linux

UNIX

```
install_root/Util/ndUtils/configureNode.sh -dmgr_response  
m01_dmgr_response_file.properties -response m01_response_file.properties
```

例: デプロイメント・マネージャーおよび 1 つのノードをホストする単一マシン: Standard、PS、DB2:

Process Center トポロジーを作成した後に、**configureNode** コマンド行ユーティリティを使用して、DB2 データベースを使用する 1 台のマシンにデプロイメント・マネージャーと 1 つのノードを配置する IBM Business Process Manager Standard の Process Server トポロジーを作成することもできます。

この例では、M02 というマシンを使用して以下の構成を作成することを想定しています。

マシン	ノード	メッセージング・クラスタ	サポート・クラスタ	アプリケーション・ターゲット・クラスタ
M02	Dmgr	-	-	-
M02	PSNode01	1	1	1

1. 以下のサンプル・プロパティ・ファイルをコピーします。

```
install_root/Util/ndUtils/std/samples/sample_std_ps_dmgr.properties
```

```
install_root/Util/ndUtils/std/samples/sample_std_ps_node.properties
```

2. 新規ファイルの名前を、例えば `m02_std_ps_dmgr.properties` と `m02_std_ps_node.properties` に変更します。これらのファイルを必要な値で更新します。

デプロイメント・マネージャー・ファイルの例:

```
# filename: m02_std_ps_dmgr.properties

server.type = PS      # Process Center (PCS) or Process Server (PS)

# Dmgr setting
hostName=M02.ibm.com
adminUserName=admin
adminPassword=admin

nodeName=Dmgr

# Environment settings
environment.type = Test
processCenterURL= http://M01:9080 #(optional, if not set, the environment is offline PS)
repository.user = admin #(optional, if not set, the environment is offline PS)
repository.credential = admin #(optional, if not set, the environment is offline PS)

# Database settings
dbType=DB2
dbServerName=M01
dbPortNumber=50000

# DB for Process Server
prcsvr.dbName = BPMPSDB
prcsvr.dbUserName = bpmadmin
prcsvr.dbPassword = s0m3passw0rd

# DB for Performance Data Warehouse
perfDW.dbName = PDWPSDB
perfDW.dbUserName = bpmadmin
perfDW.dbPassword = s0m3passw0rd
```

カスタム・ノード・ファイルの例:

```
# filename: m02_std_ps_node.properties

nodeName=PSNode01

# Basic Install environment information
server.type = PS      # Process Center (PCS) or Process Server (PS)
install.type = Standard # Optional

#Install clusters on this node
install.cluster.support = 1
install.cluster.AppTarget = 1
install.cluster.message = 1

# Database setting
dbType=DB2

# Deployment Manager Properties
dmgr.hostName=M02.ibm.com
dmgr.adminUserName=admin
dmgr.adminPassword=admin
```

3. M02 マシン上で **configureNode** コマンドを実行します。

```
Windows install_root\util\ndUtils\configureNode.bat -dmgr_response
m01_dmgr_response_file.properties -response m01_response_file.properties
```

```
Linux UNIX install_root/util/ndUtils/configureNode.sh -dmgr_response
m01_dmgr_response_file.properties -response m01_response_file.properties
```

例: デプロイメント・マネージャーおよび 3 つのノードをホストする複数のマシン:
Advanced、PS、DB2:

configureNode コマンド行ユーティリティを使用して、DB2 データベースを使用する 4 台のマシンにデプロイメント・マネージャーと 3 つのノードを配置する IBM Business Process Manager Advanced の Process Server トポロジーを作成します。

注: 一般的な構成には、入力ファイル内で使用可能な **configurenode** プロパティを使用できます。拡張データベース・プロパティなどの拡張オプションを使用する構成の場合は、デプロイメント環境ウィザードを使用する必要があります。

この例では、4 台のマシンで以下の構成を作成することを想定しています。

マシン	ノード	メッセージング・クラスタ	サポート・クラスター	アプリケーション・ターゲット・クラスタ	Web クラスタ
M03	Dmgr	-	-	-	
M04	Node01	1	0	1	0
M05	Node02	0	1	0	1
M06	Node03	1	1	1	1

1. 以下のサンプル・プロパティ・ファイルをコピーします。

```
install_root/util/ndUtils/std/samples/sample_adv_ps_dmgr.properties
install_root/util/ndUtils/std/samples/sample_adv_ps_node.properties
```

2. 新しいデプロイメント・マネージャー・ファイル (例えば `adv_dmgr.properties`) と、3 つのカスタム・ノード・ファイル (例えば `node01.properties`、`node02.properties`、および `node03.properties`) を作成します。これらのファイルを必要な値で更新します。

重要: DB2 データベースではなく Oracle データベースを使用している場合は、オプションのデータベースを含むすべてのデータベースについて、データベース・ユーザー名とパスワードを組み込む必要があります。データベース・ユーザー名は、データベースごとに異なっている必要があります。

デプロイメント・マネージャー・ファイルの例:

```
# filename: adv_dmgr.properties

server.type = PS          # Process Center (PCS) or Process Server (PS)

# Dmgr setting
hostName=M03.ibm.com
adminUserName=admin
adminPassword=admin

nodeName=Dmgr

# Environment settings
environment.type = Test
processCenterURL= http://M01:9080 #(optional, if not set, the environment is offline PS)
repository.user = admin #(optional, if not set, the environment is offline PS)
repository.credential = admin #(optional, if not set, the environment is offline PS)

# Database settings
dbType=DB2
dbServerName=M01
dbPortNumber=50000

# DB for Process Server
prcsvr.dbName = BPMDB 2
prcsvr.dbUserName = bpmadmin
prcsvr.dbPassword = s0m3passw0rd

# DB for Performance Data Warehouse
perfDW.dbName = PDWDB 2
perfDW.dbUserName = bpmadmin
perfDW.dbPassword = s0m3passw0rd

# DB for Common DB
cmn.dbName=CMNDB2
cmn.dbUserName=bpmadmin
cmn.dbPassword=s0m3passw0rd

# DB for Business Process Choreographer
bpc.dbName=BPEDB2
bpc.dbUserName=s0m3passw0rd
bpc.dbPassword=bpmadmin
```

カスタム・ノード・ファイルの例:

```
# filename: node01.properties

nodeName=Node01

# Basic Install environment information
server.type = PS          # Process Center (PCS) or Process Server (PS)
install.type = Advanced # Optional

#Install clusters on this node
install.cluster.support = 1
install.cluster.AppTarget = 1
install.cluster.message = 0
install.cluster.web = 0

# Database settings
dbType=DB2
```

```

# Deployment Manager Properties
dmgr.hostName=M03.ibm.com
dmgr.adminUserName=admin
dmgr.adminPassword=admin

# filename: node02.properties

nodeName=Node02

# Basic Install environment information
server.type = PS          # Process Center (PCS) or Process Server (PS)
install.type = Advanced # Optional

#Install clusters on this node
install.cluster.support = 0
install.cluster.AppTarget = 0
install.cluster.message = 1
install.cluster.web = 1

# Database settings
dbType=DB2

# Deployment Manager Properties
dmgr.hostName=M03.ibm.com
dmgr.adminUserName=admin
dmgr.adminPassword=admin

# filename: node03.properties

nodeName=Node03

# Basic Install environment information
server.type = PS          # Process Center (PCS) or Process Server (PS)
install.type = Advanced # Optional

#Install clusters on this node
install.cluster.support = 1
install.cluster.AppTarget = 1
install.cluster.message = 1
install.cluster.web = 1

# Database settings
dbType=DB2

# Deployment Manager Properties
dmgr.hostName=M03.ibm.com
dmgr.adminUserName=admin
dmgr.adminPassword=admin

```

3. 4 台のマシン上で **configureNode** コマンドを実行します。

a. マシン M03 にログオンし、以下のコマンドを実行します。

```
Windows install_root\util\ndUtils\configureNode.bat -dmgr_response adv_dmgr.properties
```

```
Linux   UNIX install_root/util/ndUtils/configureNode.sh -dmgr_response
adv_dmgr.properties
```

b. マシン M04 にログオンし、以下のコマンドを実行します。

```
Windows install_root\util\ndUtils\configureNode.bat -response node01.properties
```

```
Linux   UNIX install_root/util/ndUtils/configureNode.sh -response node01.properties
```

c. マシン M05 にログオンし、以下のコマンドを実行します。

```
Windows install_root\util\ndUtils\configureNode.bat -response node02.properties
```


Linux

UNIX

```
install_root/util/ndUtils/configureNode.sh -response node02.properties
```

d. マシン M06 にログオンし、以下のコマンドを実行します。

Windows

```
install_root\util\ndUtils\configureNode.bat -response node03.properties
```

Linux

UNIX

```
install_root/util/ndUtils/configureNode.sh -response node03.properties
```

プロファイルの作成および拡張

製品のインストール後に、標準インストールまたは `configureNode` コマンドを使用してプロファイルの自動作成を行わなかった場合は、1 つ以上のプロファイルを作成して、ランタイム環境を定義する必要があります。

プロファイルに関する前提条件および考慮事項

IBM Business Process Manager のプロファイルを作成または拡張する前に、前提条件とその他の考慮事項を検討してください。

プロファイルの作成または拡張に関する前提条件:

プロファイルの作成または拡張を実行する前に、一連の前提条件が満たされていることを確認する必要があります。

- IBM Business Process Manager が既にインストールされている必要があります。存在しない場合は、『IBM Business Process Manager のインストールおよび構成』でインストール手順を参照してください。
- 製品をインストールしたユーザー ID でない場合は、IBM Business Process Manager インストール内の選択されたディレクトリーへの書き込み権限を持つ必要があります。それらの権限を取得する方法については、232 ページの『プロファイル作成のための、非 root ユーザーに対するファイルとディレクトリーの書き込み権限の付与』を参照してください。プロファイルは、`install_root/profiles` 以外のディレクトリーに作成する必要があります。

Windows

- プロファイル管理ツールを Windows 7、Windows Vista あるいは Windows Server 2008 にインストールして実行するには、使用している Microsoft Windows ユーザー・アカウントの特権を上げる必要があります。ご自身が管理ユーザーであるかまたは非管理ユーザーであるかに関係なく、`pmt.bat` ファイルを右クリックし、「**管理者として実行**」を選択します。代替の方法として、コマンド行で `runas` コマンドを使用します。例えば、`install_root\bin\ProfileManagement` ディレクトリーから以下のコマンドを実行できます。

```
runas /user:MyAdminName /env pmt.bat
```

非管理ユーザーに、管理者パスワードの入力を求めるプロンプトが出されます。

Windows

- `manageprofiles` コマンドを Windows 7、Windows Vista あるいは Windows Server 2008 にインストールして実行するには、`runas` コマンドを使用して Microsoft Windows ユーザー・アカウントの特権を上げる必要があります。必ず `manageprofiles` コマンドとすべてのパラメーターを二重引用符で囲んでください。例えば、`install_root\bin` ディレクトリーから以下のコマンドを実行できます。

```
runas /env /user:MyAdminName "manageprofiles -create -templatePath
install_root/profileTemplates/BPM/default.procctr.adv"
```

非管理ユーザーに、管理者パスワードの入力を求めるプロンプトが出されます。

- 作成または拡張するプロファイルのタイプを知っている必要があります。プロファイルについて詳しくは、『プロファイル』を参照してください。

- 適切な手順に従って、プロファイルを作成または拡張する必要があります。
 - IBM Business Process Manager スタンドアロン構成のプロファイルを作成する場合は、『プロファイル管理ツールを使用したスタンドアロン・プロファイルの作成』を参照してください。

このトピックには、プロセス・センターのプロファイルおよびプロセス・サーバーのプロファイルの作成に関する情報が含まれています。

- IBM Business Process Manager Network Deployment 構成のプロファイルを作成する場合は、『プロファイル管理ツールを使用した Process Center デプロイメント・マネージャー・プロファイルの作成』を参照してください。

このトピックには、Process Center と Process Server の両方のデプロイメント・マネージャー・プロファイルおよびカスタム (管理対象ノード) プロファイルの作成に関する情報が含まれています。

- 既存の WebSphere Application Server、WebSphere Application Server Network Deployment、または WebSphere Enterprise Service Bus プロファイルを IBM Business Process Manager プロファイルに拡張する場合は、以下のトピックの 1 つを参照してください。

重要: 拡張する予定のプロファイルでは、既に統合されている管理対象ノードを定義できません。

- スタンドアロン・サーバー・プロファイルを拡張するには、『Process Server スタンドアロン・サーバー・プロファイルの拡張』または『Process Center スタンドアロン・サーバー・プロファイルの拡張』を参照してください。
- Network Deployment 環境構成のプロファイルを拡張するには、『Network Deployment 構成のプロファイルの拡張』または『Network Deployment 構成のプロファイルの拡張』を参照してください。
- 64 ビット・アーキテクチャー (Linux on zSeries プラットフォームは除く) 上の IBM Business Process Manager インストール済み環境でプロファイルを作成または拡張するときは、プロファイル管理ツールを使用することはできません。その他の 64 ビット・アーキテクチャー上でプロファイルを作成または拡張するには、**manageprofiles** コマンド行ユーティリティを使用できます。

注: 32 ビットの IBM Business Process Manager インストール済み環境を使用している場合は、これらのアーキテクチャー上でプロファイル管理ツールを使用できます。

- 拡張する予定のプロファイルに関連付けられたすべてのサーバーをシャットダウンする必要があります。
- プロファイル、ノード、ホスト、サーバー (該当する場合) またはセル (該当する場合) の名前を設定するときに考慮しなければならない予約語や問題点について、『プロファイル、ノード、サーバー、ホスト、およびセルの命名に関する考慮事項』の情報を確認する必要があります。
- 新しいプロファイルの作成または拡張に必要な十分なディスク・スペースと一時スペースが必要です。スペース所要量については、詳細なシステム要件の Web ページを参照し、ご使用のバージョンの IBM Business Process Manager へのリンクを選択してください。
 - Advanced 構成の場合: <http://www.ibm.com/software/integration/business-process-manager/advanced/sysreqs/>
 - Standard 構成の場合: <http://www.ibm.com/software/integration/business-process-manager/standard/sysreqs/>
 - Express 構成の場合: <http://www.ibm.com/software/integration/business-process-manager/express/sysreqs/>

関連概念:

235 ページの『プロファイルの作成または拡張に関するデータベースの前提条件』

プロファイルの作成または拡張を実行する前に、一連のデータベースの前提条件が満たされていることを確認する必要があります。

関連タスク:

534 ページの『manageprofiles を使用した Process Center デプロイメント・マネージャーとカスタム・プロファイルの作成』

Network Deployment 構成用の Process Center デプロイメント・マネージャー・プロファイルとカスタム・プロファイルを作成するには、**manageprofiles** コマンド行ユーティリティを使用します。

659 ページの『manageprofiles を使用した Process Server デプロイメント・マネージャー・プロファイルとカスタム・プロファイルの作成』

manageprofiles コマンド行ユーティリティを使用して、Network Deployment 構成用の Process Server デプロイメント・マネージャー・プロファイルおよびカスタム・プロファイルを作成します。

422 ページの『manageprofiles を使用した Process Server スタンドアロン・プロファイルの作成』

manageprofiles コマンド行ユーティリティを使用して、IBM Business Process Manager Advanced 用の Process Server スタンドアロン・プロファイルを作成します。

316 ページの『manageprofiles を使用した Process Center スタンドアロン・プロファイルの作成』

IBM Business Process Manager Advanced 用の Process Center スタンドアロン・プロファイルを作成するには、**manageprofiles** コマンド行ユーティリティを使用します。

プロファイル作成のための、非 root ユーザーに対するファイルとディレクトリーの書き込み権限の付与:

製品インストール・ユーザー (root または管理者の場合と非 root ユーザーの場合がある) は、該当する IBM Business Process Manager のファイルとディレクトリーへの書き込み権限を非 root ユーザーに付与することができます。この権限付与を行うと、非 root ユーザーがプロファイルを作成できるようになります。製品インストール・ユーザーは、プロファイル作成の権限を持つユーザーのグループを作成することもでき、また個々のユーザーにプロファイル作成の権限を付与することもできます。

以下の作業の例では、プロファイルの作成権限があるグループの作成方法を示しています。

ここの説明全体にわたり、「インストール・ユーザー」と「製品インストール・ユーザー」という用語は、IBM Business Process Manager をインストールしたユーザー ID のことを指しています。

制約事項: IBM Business Process Manager では、製品インストール・ユーザーから非 root ユーザーへの既存のプロファイルの所有権の変更はサポートされていません。このため、非 root ユーザーによる、別のユーザーによって所有されているプロファイルの拡張はサポートされません。

非 root ユーザーは、自分の環境を管理できるように、独自のプロファイルを作成します。通常、これらのユーザーは開発の目的で環境を管理します。

非 root ユーザーは、製品の **install_root/profiles** ディレクトリーではなく、自身の専用ディレクトリー構造にプロファイルを格納する必要があります。

制約事項: プロファイルを作成する非 root ユーザーには、操作性の制限があります。固有の名前とポート値を提示してくれるプロファイル管理ツール内の仕組みは、非 root ユーザーには使用不可になります。さらに非 root ユーザーは、プロファイル管理ツールのフィールドのうち、プロファイル名、ノード名、セル名、ポート割り当ての各フィールドのデフォルト値を変更することも必要になります。製品インストール・ユーザーは、各フィールドの値の範囲を非 root ユーザーに割り当てることができ、また非 root ユーザーが各自の割り当てられた値の範囲を遵守し、また自分の定義の整合性を維持するための責任を非 root ユーザーに割り当てることがもできます。

少なくとも 1 つのプロファイルを既に作成してある場合は、該当するディレクトリーおよびファイルが作成されています。その場合は、このトピック内のステップのうち、それらのディレクトリーおよびファイル

を作成するためのステップをスキップしてください。以前にプロファイルを作成したことがない場合は、必要なディレクトリーおよびファイルを作成するためのステップを完了する必要があります。ほとんどの場合、プロファイルは以前に作成済みです。

製品インストール・ユーザーが適切な権限を付与するために実行する必要がある手順

インストール・ユーザーは、以下のステップを実行して、`profilers` グループを作成し、このグループにプロファイル作成のための適切な権限を付与することができます。

1. 製品インストール・ユーザーとして、IBM Business Process Manager システムにログオンします (製品インストール・ユーザーは、`root` または管理者の場合と非 `root` ユーザーの場合があります。)

2. オペレーティング・システム・コマンドを使用して、以下のステップを実行します。

- プロファイルの作成を実行できるユーザーをすべて組み込むグループ (名前は `profilers`) を作成します。
- プロファイルの作成を実行できるユーザー (名前は `user1`) を作成します。
- ユーザー `product_installer` と `user1` を `profilers` グループに追加します。

3. **Linux** **UNIX** ログオフし、インストール・ユーザーとして再びログオンして、新しいグループを有効にします。

4. プロファイルが存在しない場合は、以下のディレクトリーをインストール・ユーザーとして作成します。

- **Linux** **UNIX** 次のように入力して、`install_root/logs/manageprofiles` ディレクトリーを作成します。

```
mkdir install_root/logs/manageprofiles
```

Windows Windows の資料の説明に従って、`install_root¥logs¥manageprofiles` ディレクトリーを作成します。この手順例の場合、ディレクトリーは次のとおりです。

```
install_root¥logs¥manageprofiles
```

- **Linux** **UNIX** 次のように入力して `install_root/properties/fsdb` ディレクトリーを作成します。

```
mkdir install_root/properties/fsdb
```

Windows Windows の資料の説明に従って、`install_root¥properties¥fsdb` ディレクトリーを作成します。この手順例の場合、ディレクトリーは次のとおりです。

```
install_root¥properties¥fsdb
```

5. プロファイルが存在しない場合は、インストール・ユーザーとして、ご使用のオペレーティング・システムの方法に従って `profileRegistry.xml` ファイルを作成します。この例の場合、ファイル・パスは次のとおりです。

Linux **UNIX**

```
install_root/properties/profileRegistry.xml
```

Windows

```
install_root¥properties¥profileRegistry.xml
```

ご使用のオペレーティング・システムの説明に従って、次の情報を `profileRegistry.xml` ファイルに追加します。ファイルは、UTF-8 でエンコードする必要があります。

```
<?xml version="1.0" encoding="UTF-8"?>
<profiles/>
```

- 製品インストール・ユーザーとして、オペレーティング・システムのツールを使用して、ディレクトリーとファイルのアクセス許可を変更します。

Linux **UNIX** 次の例では、変数 **\$WASHOME** が IBM Business Process Manager のルート・インストール・ディレクトリーの **/opt/IBM/WebSphere/ProcServer** であると想定しています。

```
export WASHOME=/opt/IBM/WebSphere/ProcServer
echo $WASHOME
echo "Performing chgrp/chmod per WAS directions..."
chgrp profilers $WASHOME/logs/manageprofiles
chmod g+wr $WASHOME/logs/manageprofiles
chgrp profilers $WASHOME/properties
chmod g+wr $WASHOME/properties
chgrp profilers $WASHOME/properties/fsdb
chmod g+wr $WASHOME/properties/fsdb
chgrp profilers $WASHOME/properties/profileRegistry.xml
chmod g+wr $WASHOME/properties/profileRegistry.xml
chgrp -R profilers $WASHOME/profileTemplates
```

Linux 以下のコマンドを別途発行します。

```
chgrp profilers $WASHOME/properties/Profiles.menu
chmod g+wr $WASHOME/properties/Profiles.menu
```

Windows 次の例では、変数 **\$WASHOME** が IBM Business Process Manager のルート・インストール・ディレクトリーの **C:\Program Files\IBM\WebSphere\ProcServer** であると想定しています。Windows の資料の説明に従って、profilers グループに以下のディレクトリーとそれらのファイルに対する読み取り権限および書き込み権限を付与します。

```
@WASHOME¥logs¥manageprofiles
@WASHOME¥properties
@WASHOME¥properties¥fsdb
@WASHOME¥properties¥profileRegistry.xml
```

非 root ユーザーに許可エラーが発生した場合は、追加ファイルの許可を変更することが必要になる場合があります。例えば、製品インストール・ユーザーが非 root ユーザーにプロファイルの削除の権限を与える場合、製品インストール・ユーザーは以下のファイルを削除することが必要になる場合があります。

Linux **UNIX** **install_root/properties/profileRegistry.xml_LOCK**

Windows **install_root¥properties¥profileRegistry.xml_LOCK**

このファイルを削除する権限を非 root ユーザーに付与するには、そのユーザーにこのファイルへの書き込み権限を付与します。それでも非 root ユーザーがこのプロファイルを削除できない場合は、製品インストール・ユーザーがこのプロファイルを削除することができます。

結果

インストール・ユーザーが **profilers** グループを作成し、特定のディレクトリーとファイルに対する適切な、プロファイル作成のための権限をこのグループに付与しました。非 root ユーザーがプロファイルの作成のために書き込む必要がある、IBM Business Process Manager のインストール・ルートに存在するディレクトリーとファイルはこれだけです。

次の作業

profilers グループに属している非 root ユーザーは、この非 root ユーザーが所有していて、書き込み権限を持っているディレクトリーにプロファイルを作成することができます。ただし、非 root ユーザーは、製品のインストール・ルート・ディレクトリーにプロファイルを作成することはできません。

1 つの非 root ユーザー ID で、複数のプロファイルを管理することができます。サーバーとノード・エージェントが含まれているデプロイメント・マネージャー・プロファイルであっても、カスタム・プロファイルであっても、1 つのプロファイル全体を同じ非 root ユーザー ID で管理することができます。グローバル・セキュリティまたは管理セキュリティが使用可能か使用不可かに関係なく、セル内のプロファイルごとに異なるユーザー ID を使用することができます。ユーザー ID には、root ユーザー ID と非 root ユーザー ID を混用することができます。例えば、root ユーザーでデプロイメント・マネージャー・プロファイルを管理する一方で、非 root ユーザーでサーバーとノード・エージェントが含まれたプロファイルを管理することができ、またこの逆も可能です。ただし、通常は単一の root ユーザーまたは非 root ユーザーがセル内のすべてのプロファイルを管理することができます。

非 root ユーザーは、root ユーザーと同じタスクを使用してプロファイルを管理できます。

プロファイルの作成または拡張に関するデータベースの前提条件:

プロファイルの作成または拡張を実行する前に、一連のデータベースの前提条件が満たされていることを確認する必要があります。

製品データベースに関連する前提条件を以下に示します。

- プロファイル作成または拡張のプロセス中に、選択したコンポーネントで使用される共通データベースを構成します。新規データベースと表を作成するのか、後でユーザー自身またはデータベース管理者 (DBA) が手動で実行する必要があるスクリプトを作成することにより、実際のデータベースの構成を延期するのにかかわらず、以下のトピックにリストされているデータベース詳細がわかっている必要があります。
 - manageprofiles パラメーター
- 共通データベースをリモート・サーバーで使用、または作成する場合は、プロファイルの作成または拡張を開始する前にこのリポジトリーを作成する必要があります。ローカル・サーバーにデータベースを作成するか、またはリモート・サーバー上の既存のデータベースを使用することができます。
- 共通データベース・リポジトリーとして、リモート z/OS ワークステーション上の DB2 を使用する場合は、DBA は z/OS サーバー上に **CMNDB** というデータベースおよびそのデータベース用の正しいストレージ・グループを作成する必要があります。DBA は、サイトの標準的なデータベース定義ツールや手順を使用できます。

CreateDB.sh を実行する前に、以下のバッファー・プールをこれらの DB2 コマンドで割り振る必要があります。

```
-ALTER BUFFERPOOL (BP1) VPSIZE(20000)
-ALTER BUFFERPOOL (BP2) VPSIZE(20000)
-ALTER BUFFERPOOL (BP3) VPSIZE(20000)
```

また、これらを使用する権限が以下のように付与されていることを確認する必要があります。

```
GRANT USE OF BUFFERPOOL BP1 TO PUBLIC;
GRANT USE OF BUFFERPOOL BP2 TO PUBLIC;
GRANT USE OF BUFFERPOOL BP3 TO PUBLIC;
```

- デプロイメント・マネージャー・プロファイル作成の一部であるデータベース構成パネルには、データベース管理者 (DBA) 特権が必要です。

ユーザー ID に DBA 特権がない場合は、以下のような予備手段を使用します。

1. プロファイルを作成せずに製品をインストールします。
2. プロファイル管理ツールを使用して、デプロイメント・マネージャーおよびカスタム・プロファイル (すべてに対して拡張パスを使用して) を作成します。「標準的」パスは使用しないでください。プロファイル作成プロセスの一部としてデータベース表を作成しないでください。
3. DBA で共通データベースを作成します。プロファイルの作成後または拡張後の共通データベースとテーブルの作成を参照してください。
4. カスタム・プロファイルをデプロイメント・マネージャーに統合します。
5. 管理コンソールを使用して、必要なデプロイメント環境を作成します。詳しくは、『パターンを使用したデプロイメント環境の作成』を参照してください。

- **Linux** **UNIX** DB2 Universal Database™ を使用する場合:

db2profile スクリプトを実行して、プロファイル作成中に使用される DB2 コマンドの起動に使用される、必要な DB2 環境を設定する必要があります。**db2profile** スクリプトを `/etc/profile` ディレクトリに追加します。

`vi /etc/profile` を実行し、以下の行を追加します。

```
export PATH=/opt/IBM/db2/V9.7/bin:$PATH
. /home/db2inst1/sqllib/db2profile
```

db2profile スクリプトを `/etc/profile` ディレクトリに追加した後に、**db2profile** スクリプトを実行して DB2 環境を設定する必要があります。

DB2 管理グループに、プロファイル作成時に使用されるユーザー ID を追加する必要があります。例えば、`root` ユーザーでログインし、`db2inst1` をユーザー ID として使用してデータベースを作成する場合、`root` を `/etc/group` 管理グループに追加します

`vi /etc/group` を実行し、以下の行を更新します。

```
dasadm:|:101:dasusr1,db2inst1,root
db2iadm:|:102:root
db2fadm:|:103:db2fenc1,root
```

プロファイル作成の典型的な例外:

db2profile スクリプトが実行されていない場合:

```
/opt/HJJ/wps4013/util/dbUtils/profileHelpers/commonDBUtility.ant:841:
Execute failed:
java.io.IOException: Cannot run program "db2" (in directory "/opt/HJJ/
wps4013/profiles/Dmgr01/dbscripts/CommonDB/DB2/WPSDB1")
```

DB2 データベース・マネージャーが実行中でない場合:

```
SQL1032N No start database manager command was issued. SQLSTATE=57019
```

IBM Business Process Manager をインストールし、プロファイルを作成使用しているユーザーが DB2 管理グループに追加されない場合:

```
SQL1092N "ROOT" does not have the authority to perform the requested command.
```

When DB2 database manager is down or not running...

```
SQL1032N No start database manager command was issued. SQLSTATE=57019
```

- Microsoft SQL Server 2005 または Microsoft SQL Server 2008 をスタンドアロン・プロファイルとともに使用し、メッセージング・エンジン・テーブルを共通データベースに配置する場合は、以下のステップを実行する必要があります。

1. スタンドアロン・サーバー・プロファイルを作成する前に、4 つのスキーマを共通データベースに手動で追加します。4 つのスキーマとは、XXXSS00、XXXSA00、XXXCM00、および XXXBM00 です。XXX は、共通データベース名の最初の 3 文字です。
2. 以下のコマンドにより、上で定義したスキーマを使用する SQL Server 上のメッセージング・エンジンを構成します。このコマンドでは、共通データベース用に指定した **dbUserId** および **dbPassword** を使用します。

Microsoft SQL Server JDBC 1.2 ドライバーの場合

```
install_root/bin/manageprofiles -create -templatePath install_root/profileTemplates/default.wbiserver
-dbType MSSQLSERVER_MICROSOFT -dbJDBCClasspath path to JDBC driver -dbDriverVersion 1.2 -dbUserId
userID -dbPassword password -ceiServerName serverName -ceiSaUser
sa -ceiSaPassword sapass -dbCeiMeSchemaName ceiSchema -dbSysMeSchemaName sysSchema
-dbAppMeSchemaName appSchema
```

Microsoft SQL Server JDBC 2.0 ドライバーの場合

```
install_root/bin/manageprofiles -create -templatePath install_root/profileTemplates/default.wbiserver
-dbType MSSQLSERVER_MICROSOFT -dbJDBCClasspath path to JDBC driver
-dbDriverVersion 2.0 -dbUserId userID -dbPassword password
-ceiServerName serverName -ceiSaUser sa -ceiSaPassword sapass
-dbCeiMeSchemaName ceiSchema -dbSysMeSchemaName sysSchema -dbAppMeSchemaName
appSchema
```

関連概念:

230 ページの『プロファイルの作成または拡張に関する前提条件』

プロファイルの作成または拡張を実行する前に、一連の前提条件が満たされていることを確認する必要があります。

プロファイル管理ツールの開始:

プロファイル管理ツールを開始する前に、制約事項に注意し、特定の前提条件が満たされていることを確認してください。プロファイル管理ツールは、実行するときのプラットフォームに応じて、いくつかの方法で開始できます。

制約事項:

- 64 ビット・アーキテクチャー (Linux on zSeries プラットフォームは除く) 上の IBM Business Process Manager インストール済み環境でプロファイルを作成または拡張するときは、プロファイル管理ツールを使用することはできません。他の 64 ビット・アーキテクチャーでプロファイルを作成するときは、**manageprofiles** コマンド行ユーティリティを使用できます。**manageprofiles** コマンド行ユーティリティの使用については詳しくは、『310 ページの『manageprofiles コマンド行ユーティリティを使用したプロファイルの作成』』を参照してください。プロファイル管理ツールは、これらのアーキテクチャー上の IBM Business Process Manager 32 ビットのインストール済み環境でも使用できます。

- **Vista** **Windows 7** **複数インスタンスを持つ非管理ユーザーの制約事項:** IBM Business Process Manager の複数インスタンスをルート・ユーザーとしてインストールし、それらのインスタンスのサブセットだけに非管理ユーザーのアクセス権限を与えた場合、プロファイル管理ツールはその非管理ユーザーに対して正しく機能しません。さらに、com.ibm.wsspi.profile.WSProfileException、つまりアクセス拒否メッセージが `install_root\bin\ProfileManagement\pmt.bat` ファイルで出現します。デフォルトでは、非管理ユーザーにはプログラム・ファイル・ディレクトリに対するアクセス権限がありま

せん。プログラム・ファイル・ディレクトリーは製品がデフォルトでインストールされる場所です。この問題を解決するには、非管理ユーザーが自分で製品をインストールするか、あるいは他の製品インスタンスにアクセスする許可を得ます。

Linux **UNIX** **Windows** プロファイル管理ツールの言語は、システムのデフォルト言語で決まります。デフォルト言語がサポートされる言語ではない場合、英語として使用されます。デフォルト言語をオーバーライドするには、コマンド行からプロファイル管理ツールを開始し、**java user.language** 設定を使用してデフォルト言語を置き換えます。次のコマンドを実行します。

- **Linux** **UNIX** `install_root/java/bin/java -Duser.language=locale install_root/bin/ProfileManagement/startup.jar`
- **Windows** `install_root\java\bin\java -Duser.language=locale install_root\bin\ProfileManagement\startup.jar`

例えば、Linux システム上でドイツ語のプロファイル管理ツールを開始するには、以下のコマンドを入力します。

```
install_root/java/bin/java -Duser.language=de install_root/ ¥
bin/ProfileManagement/startup.jar
```

すべてのプラットフォームでのプロファイル管理ツールの開始

任意のプラットフォームで、ファースト・ステップ・コンソールからプロファイル管理ツールを開始します。詳しくは、『』『ファースト・ステップ・コンソールの開始またはファースト・ステップ・コンソールの開始』を参照してください。

Linux および UNIX プラットフォームでのツールの開始

Linux **UNIX** このツールは、Linux および UNIX プラットフォーム上で、コマンド `install_root/bin/ProfileManagement/pmt.sh` を実行して開始できます。

Linux Linux プラットフォームでは、オペレーティング・システムのメニューを使用して、プロファイル管理ツールを開始することもできます。例えば、「**Linux_operating_system_menus_to_access_programs**」 > 「**IBM WebSphere**」 > 「**your_product**」 > 「プロファイル管理ツール」をクリックします。

Windows プラットフォームでのツールの開始

Windows Windows プラットフォームでは、以下の方法でツールを開始できます。

- Windows 「スタート」メニューを使用してください。例えば、「スタート」 > 「プログラム」または「すべてのプログラム」 > 「**IBM WebSphere**」 > 「**Business Process Manager 7.0**」 > 「プロファイル管理ツール」を選択します。
- `install_root\bin\ProfileManagement\pmt.bat` コマンドを実行します。

カスタム・インストールの後のスタンドアロン・プロファイルの作成

カスタム・インストールを実行した後で、プロファイル管理ツールまたは `manageprofiles` コマンド行ユーティリティを使用してスタンドアロン・サーバー・プロファイルを作成することができます。

重要: AIX プラットフォームで「インストールが完了しました」ページからプロファイル管理ツールを起動し、終了コード 721035 の JVM 終了エラーを受け取った場合は、以下のいずれかの方法でプロファイル管理ツールを起動します。

64 ビット AIX プラットフォーム

64 ビット版の AIX を使用している場合は、**manageprofiles** コマンドを使用します。

64 ビット AIX プラットフォーム

32 ビット版の AIX を使用している場合は、以下のコマンドを使用します。

```
install_root/bin/ProfileManagement/pmt.sh
```

プロファイル管理ツールまたは **manageprofiles** コマンド行ユーティリティを使用する際のプロファイル作成に関する情報については、以下のリンクのうち 1 つを選択してください。

関連概念:

310 ページの『**manageprofiles** および **wsadmin** を使用した環境の構成』

プロファイル管理ツールおよびデプロイメント環境ウィザードを使用してセットアップする構成と同じ構成を、**manageprofiles** コマンド行ユーティリティおよび **wsadmin** コマンドを使用して実現できます。

関連タスク:

422 ページの『**manageprofiles** を使用した Process Server スタンドアロン・プロファイルの作成』

manageprofiles コマンド行ユーティリティを使用して、IBM Business Process Manager Advanced 用の Process Server スタンドアロン・プロファイルを作成します。

プロファイル管理ツールを使用した Process Center スタンドアロン・プロファイルの作成:

Process Center スタンドアロン・プロファイルを作成するには、プロファイル管理ツールを使用します。

Process Center スタンドアロン・プロファイルの統合は、バージョン 7.5 ではサポートされていません。

• 『プロファイルの作成または拡張に関する前提条件』を確認します。

- **Solaris** Solaris オペレーティング・システム上の Motif グラフィカル・ユーザー・インターフェースでプロファイル管理ツールを使用する場合、プロファイル管理ツールのデフォルト・サイズが、すべてのメッセージおよびボタンを表示するには小さすぎる可能性があります。この問題を修正するには、`install_root/.Xdefaults` ファイルに以下の行を追加します。

```
Eclipse*spacing:0  
Eclipse*fontList:-misc-fixed-medium-r-normal-*-10-100-75-75-c-60-iso8859-1
```

行を追加したら、プロファイル管理ツールを開始する前に次のコマンドを実行します。

```
xrdb -load user_home/.Xdefaults
```

このタスク・トピックで説明する手順は、以下の場合に使用します。

- IBM Business Process Manager Advanced 用の *Process Center* スタンドアロン・プロファイルを作成する場合。

ここに示すステップでは、「**拡張プロファイル作成**」と「**標準プロファイル作成**」の両方について説明します。

1. プロファイル管理ツールを開始します。

以下のいずれかのコマンドを使用します。

- **Linux** **UNIX** `install_root/bin/ProfileManagement/pmt.sh`
- **Windows** `install_root\bin\ProfileManagement\pmt.bat`

「ようこそ」ページが表示されます。

このツールを開始するためのその他の方法については、『プロファイル管理ツールの開始』を参照してください。

2. 「ようこそ」 ページで、「**プロファイル管理ツールの起動 (Launch Profile Management Tool)**」をクリック、または「**プロファイル管理ツール**」タブを選択します。

「**プロファイル**」タブが表示されます。

「**プロファイル**」タブには、マシン上で作成されたプロファイルのリストが表示される場合があります。プロファイル管理ツールを使用して、新規プロファイルを作成するか、既存のプロファイルを拡張することができます。

3. 「**プロファイル**」タブで、「**作成**」をクリックします。

「**環境の選択**」ページが別ウィンドウで開きます。

4. 「**環境の選択**」ページで、プロファイルの作成対象の構成を見つけ、そのセクションを展開します。

例えば、IBM BPM Advanced 用のプロファイルを作成する場合は、「**IBM BPM Advanced、Process Server スタンドアロン**」プロファイルのオプションを選択し、「**次へ**」をクリックします。IBM BPM Standard 用のプロファイルを作成する場合は、「**IBM BPM Standard、Process Server スタンドアロン**」プロファイルのオプションを選択し、「**次へ**」をクリックします。IBM BPM Express 用のプロファイルを作成する場合は、「**IBM BPM Express、Process Server スタンドアロン**」プロファイルのオプションを選択し、「**次へ**」をクリックします。

注: WebSphere Application Server プロファイルもこのプロファイル管理ツールで作成できます。ただし、本書では、IBM Business Process Manager プロファイルの作成のみを扱います。

「**プロファイル作成オプション**」ページが表示されます。

「**プロファイル作成オプション**」ページから、「**標準プロファイル作成**」または「**拡張プロファイル作成**」のいずれかの方法を使用して、スタンドアロン・プロファイルを完成させます。

関連タスク:

『プロファイル管理ツールの標準オプションを使用した Process Center スタンドアロン・プロファイルの作成』

プロファイル管理ツールの標準オプションを使用して、Process Center スタンドアロン・プロファイルを作成します。

243 ページの『プロファイル管理ツールの拡張オプションを使用した Process Center スタンドアロン・プロファイルの作成』

プロファイル管理ツールの拡張オプションを使用して、Process Center スタンドアロン・プロファイルを作成します。

関連資料:

893 ページの『プロファイル管理ツール構成のデータベース構成フィールド』

スタンドアロン環境のプロファイルを作成するには、データベース情報が必要です。必要な情報は、使用するデータベースによって異なります。

プロファイル管理ツールの標準オプションを使用した Process Center スタンドアロン・プロファイルの作成:

プロファイル管理ツールの標準オプションを使用して、Process Center スタンドアロン・プロファイルを作成します。

239 ページの『プロファイル管理ツールを使用した Process Center スタンドアロン・プロファイルの作成』に記載されている初期プロファイル作成の手順を完了します。

以下のステップは「標準プロファイル作成」の説明です。標準プロファイル作成オプションは、プロファイル管理ツールで以下のことを行う場合に使用します。

- ポート、プロファイルのロケーション、およびプロファイル、ノード、ホスト、セルの名前にデフォルト値を割り当てます。
- 管理コンソールをインストールします。
- プロファイルの個人セキュリティ証明書を作成します。

証明書には個人鍵と秘密鍵があり、各鍵のデフォルト値は WebAS です (このパスワードは変更する必要があります)。有効期間は 1 年です。

- 他の証明書に署名するためのルート署名セキュリティ証明書を作成します。

証明書には個人鍵と秘密鍵があり、各鍵のデフォルト値は WebAS です (このパスワードは変更する必要があります)。有効期間は 15 年です。

- サーバーを実行するためのシステム・サービスを作成します。

ご使用のオペレーティング・システムとユーザー・アカウントの特権で許可される場合にのみ該当します。

- サポート対象のデータベース製品のいずれかを選択します。データベース構成は、CommonDB、Process Server データベース、および Performance Data Warehouse データベース用に設定されます。
1. 「管理セキュリティ」ページで、「ユーザー名」、「パスワード」、および「パスワードの確認」の値を入力します。インストール時に管理者に対して指定されたパスワードが、tw_admin および tw_user を含むすべての内部ユーザーに使用されます。

注: 初期設定では、「次へ」ボタンは無効に設定されています。管理セキュリティを無効に設定するオプションはないため、ユーザー ID、パスワード、およびパスワードの確認の各項目に値を指定しなければ、「次へ」ボタンは有効になりません。

「次へ」をクリックします。

2. 「データベース構成 - パート 1」ページで、以下のアクションを実行します。

- 「データベース製品の選択 (Select a database product)」ドロップダウン・リストから、プロファイルで使用されるデータベース製品を選択します。
- 「新規ローカル・データベースの作成」または「既存のローカルまたはリモート・データベースの使用 (Use an existing local or remote database)」を選択します。

データベース製品として DB2 を選択した場合は、新規データベースの作成を選択できます。DB2 はソフトウェアに組み込まれているため、プロファイル管理ツールにより新規 DB2 データベースが作成されます。

ソフトウェアで使用するデータベース製品が既に存在する場合は、「既存のローカルまたはリモート・データベースの使用 (Use an existing local or remote database)」を選択します。

- 「Process Server データベース名 (Process Server database name)」フィールドにデータベースの名前を入力するか、またはデフォルト値 **BPMDB** をそのまま使用します。
- 「Performance Data Warehouse データベース名 (Performance Data Warehouse database name)」フィールドにデータベースの名前を入力するか、またはデフォルト値 **PDWDB** をそのまま使用します。

- 「共通データベース名」フィールドで、共通データベースの名前を入力するか、**CMNDB** デフォルト値を受け入れます。
- データベース表の作成に使用される SQL スクリプトが書き込まれるディレクトリーを設定する場合は、「データベース・スクリプトのデフォルト出力ディレクトリーをオーバーライドする (**Override the default output directory for database scripts**)」チェック・ボックスを選択します。

このチェック・ボックスを選択しない場合、スクリプトはデフォルト・ディレクトリーに出力されません。

- データベース・スクリプトを自動で (プロファイル作成プロセスの一部として) 実行する場合は、「データベース・スクリプトを実行してデータベースを初期化 (**Run database scripts to initialize the databases**)」チェック・ボックスを選択します。このチェック・ボックスを選択しない場合、プロファイル作成の完了後に、ユーザー自身またはデータベース管理者がスクリプトを手動で実行できます。

「次へ」をクリックして、「データベース構成 - パート 2」ページを表示します。

「データベース構成 - パート 2」ページの内容は、「データベース構成 - パート 1」ページの「データベース製品の選択 (**Select a database product**)」メニューで指定した値によって異なります。

3. 「データベース構成 - パート 2」ページで、選択したデータベースの構成を完了します。各必須フィールドについて詳しくは、『プロファイル管理ツール構成のデータベース構成フィールド』を参照してください。

以下のデータベースのパラメーターを構成できます。

DB2 「データベース構成 - パート 2」ページで DB2 データベースの値を設定した後に、「次へ」をクリックして「プロファイルの要約」ページに進みます。

DB2 Universal Database for z/OS

DB2 Universal Database for z/OS を使用して新規データベースを作成することはできません。Performance Data Warehouse データベースが存在している必要があり、スタンドアロン・サーバー・プロファイルの場合は Process Server データベースも必要です。「データベース構成 - パート 2」ページで DB2 Universal Database for z/OS の値を設定した後に、「次へ」をクリックして「プロファイルの要約」ページに進みます。

Microsoft SQL Server

「データベース構成 - パート 2」ページで Microsoft SQL Server データベースの値を設定した後に、「次へ」をクリックして「データベース構成 - パート 3」ページに進みます。構成が完了したら、「次へ」をクリックして、「プロファイルの要約」ページに進みます。

Oracle このデータベースを使用して新規データベースを作成することはできません。

重要: プロファイルを作成する前に、SYSDBA 特権のあるユーザー ID を取得している必要があります。

「データベース構成 - パート 2」ページで Oracle データベースの値を設定した後に、「次へ」をクリックして「データベース構成 - パート 3」ページに進みます。「データベース構成 - パート 3」ページでの構成が完了したら、「次へ」をクリックして「プロファイルの要約」ページに進みます。

4. 「プロファイルの要約」ページで、「作成」をクリックしてプロファイルを作成するか、または「戻る」をクリックしてプロファイルの特性を変更します。

構成の進行状況が、「プロファイル構成の進行 (Profile Configuration Progress)」ウィンドウに表示されます。

プロファイルの作成が完了すると、「プロファイル完了 (Profile Complete)」ページに「**プロファイル管理ツールにより、プロファイルが正常に作成されました。**」というメッセージが表示されます。

重要: プロファイルの作成中にエラーが検出された場合は、正常終了のメッセージの代わりに他のメッセージが表示される可能性があります。その例と意味は次のとおりです。

- 「**プロファイル管理ツールによりプロファイルが作成されましたが、エラーが発生しました**」: プロファイルの作成が完了したが、エラーが生成されたことを示します。
- 「**プロファイル管理ツールでプロファイルを作成できません**」: プロファイルの作成が完全に失敗したことを示します。

「プロファイル完了 (Profile complete)」ページには、問題のトラブルシューティングを行うために参照するログ・ファイルが示されます。ファースト・ステップ・コンソールに進むには、「**ファースト・ステップ・コンソールの起動**」チェック・ボックスにチェック・マークが付けられていることを確認して、「**終了**」をクリックします。また、別のウィンドウで開いている「プロファイル」ページも閉じてください。ファースト・ステップ・コンソールを使用して、製品資料にアクセスします。

ファースト・ステップ・コンソールに進み、作成した Process Center スタンドアロン・プロファイルに対応するサーバーを始動することができます。

プロファイル作成時にデータベース・スクリプトを実行しなかった場合は、データベースの作成後に、データベースにシステム情報をロードする必要があります。

関連タスク:

938 ページの『データベースへのシステム情報のロード』

IBM Business Process Manager サーバーの始動または使用を試みる前に、**bootstrapProcessServerData** コマンドを実行する必要があります。

239 ページの『プロファイル管理ツールを使用した Process Center スタンドアロン・プロファイルの作成』

Process Center スタンドアロン・プロファイルを作成するには、プロファイル管理ツールを使用します。

プロファイル管理ツールの拡張オプションを使用した Process Center スタンドアロン・プロファイルの作成:

プロファイル管理ツールの拡張オプションを使用して、Process Center スタンドアロン・プロファイルを作成します。

239 ページの『プロファイル管理ツールを使用した Process Center スタンドアロン・プロファイルの作成』に記載されている初期プロファイル作成の手順を完了します。

以下のステップは「**拡張プロファイル作成**」の説明です。拡張オプションを使用して以下のことを行います。

- データベース構成に使用するデータベース設計ファイルを指定します。
- ポート、プロファイルのロケーション、およびプロファイル、ノード、ホスト、セル (該当する場合) の名前にカスタマイズ値を割り当てます。
- 管理コンソールをデプロイします。
- デフォルト・アプリケーション (Snoop、Hello、および HitCount の各サブレットを含む) をデプロイします。
- Web サーバー定義を作成します。

- ご使用のオペレーティング・システムとユーザー・アカウントの特権によってサービスの作成が許可される場合に、サーバーを実行するためのシステム・サービスを作成します。
- Business Space powered by WebSphere を構成します。

注: Business Space powered by WebSphere は、共通データベースで構成されます。

- ビジネス・ルール・マネージャーを構成し、Business Process Choreographer サンプル構成を作成します。

重要: DB2 データベースと共に使用するスタンドアロン・プロファイルを作成するときは、サンプルの Business Process Choreographer 構成がデフォルトで作成されます。共通データベース (CMNDB) 内で専用のスキーマを使用し、スキーマ名は必ず BPEDB になります。これらの条件では制限が厳しすぎるという場合は、プロファイルの作成中は Business Process Choreographer 構成を無効にして、プロファイルの作成後に Business Process Choreographer を構成します。プロファイルの作成中、Business Process Choreographer は DB2 以外のデータベースを使用するように構成することはできません。Oracle または SQL Server データベースを使用するには、プロファイルの作成後に Business Process Choreographer を構成します。

1. 「オプションのアプリケーション・デプロイメント」ページで、管理コンソールおよびデフォルト・アプリケーションをデプロイするかどうかを選択します。

サンプル・アプリケーションのデプロイ

IBM Business Process Manager および WebSphere Application Server サンプル・アプリケーションをインストールします。サンプル・アプリケーションは、実稼働環境へのデプロイメントが推奨されていません。

管理コンソールのデプロイ (推奨)

サーバーを管理する Web ベースの管理コンソールをインストールします。

デフォルト・アプリケーションのデプロイ

Snoop、Hello、および HitCount の各サブレットを含むデフォルト・アプリケーションをインストールします。

「次へ」をクリックすると、「プロファイル名およびロケーション」ページが表示されます。

2. 「プロファイル名およびロケーション」ページで、以下のステップを実行します。
 - a. 「プロファイル名」フィールドで固有の名前を指定するか、デフォルト値をそのまま使用します。

作成する各プロファイルに名前を付ける必要があります。複数のプロファイルがある場合は、この名前によって明らかに区別することができます。デフォルト名を使用しないことを選択した場合は、ディレクトリー名の長さに関する制限など、プロファイルの命名の際に考慮する必要がある問題について、『プロファイル、ノード、サーバー、ホスト、およびセルの命名の考慮事項』を参照してください。

- b. 「プロファイル・ディレクトリー」フィールドにプロファイルのディレクトリーを入力するか、「参照...」ボタンを使用してプロファイル・ディレクトリーに移動します。

指定したディレクトリーには、ランタイム環境を定義するファイル (コマンド、構成ファイル、ログ・ファイルなど) が格納されます。デフォルト・ディレクトリーは、プラットフォームに依存しています。以下の例は、プラットフォームの相違を示しています。profile_name はユーザーが指定する名前です。

- **Linux** **UNIX** `install_root/profiles/profile_name`
- **Windows** `install_root¥profiles¥profile_name`

次のいずれかの問題が発生すると、エラー・メッセージが表示されます。

- 指定した *profile_name* が固有ではない。
 - 指定したディレクトリーが空ではない。
 - 使用しているユーザー ID に、このディレクトリーに対する十分な権限がない。
 - プロファイルを作成するための十分なスペースがない。
- c. オプション: 作成中のプロファイルをデフォルト・プロファイルにするには、「このプロファイル
をデフォルトにする」チェック・ボックスを選択します。

注: このチェック・ボックスは、既存のプロファイルがご使用のシステムに存在する場合にのみ表示されます。

デフォルト・プロファイルにするプロファイルを作成すると、コマンドは自動的にそのプロファイル
を処理対象とします。ワークステーションで作成する最初のプロファイルは、デフォルト・プロ
ファイルです。デフォルト・プロファイルは、製品インストール・ルートの bin ディレクトリーか
ら実行されるコマンドのデフォルトのターゲットです。ワークステーション上にプロファイルが 1
つしか存在しない場合は、すべてのコマンドがそのプロファイルに基づいて機能します。複数の
プロファイルが存在する場合、特定のコマンドでは、コマンドが適用されるプロファイルを指定する
必要があります。詳しくは、『複数プロファイル環境のプロファイル・コマンド』を参照してくだ
さい。

- d. 「サーバー・ランタイムのパフォーマンス・チューニング設定 (Server runtime performance
tuning setting)」プルダウン・リストから、作成するプロファイルに適したパフォーマンス・チュー
ニング・レベルを選択します。
- e. 「次へ」をクリックします。

注: 「戻る」をクリックしてプロファイル名を変更した場合、このページが再表示されたときに、
このページで手動で名前を変更しなければならないことがあります。

3. 「ノード、ホスト、およびセルの名前」ページで、作成するプロファイルに対して次の処置を行いま
す。

- 「ノード名」フィールドにノードの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。

ノード名はできるだけ短くしてください。ただし、ノード名は、デプロイメント環境内で固有でな
ければなりません。命名時に考慮する必要のある予約済みの用語やその他の問題については、『
プロファイル、ノード、サーバー、ホスト、およびセルの命名に関する考慮事項』を参照してくだ
さい。

- 「サーバー名」フィールドにサーバーの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。
- 「ホスト名」フィールドにホストの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。
- 「セル名」フィールドにセルの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。

「次へ」をクリックすると、「管理セキュリティ」ページが表示されます。

4. 「管理セキュリティ」ページで、「ユーザー名」、「パスワード」、および「パスワードの確認」の
値を入力します。インストール時に管理者に対して指定されたパスワードが、tw_admin および
tw_user を含むすべての内部ユーザーに使用されます。

注: 初期設定では、「次へ」ボタンは無効に設定されています。管理セキュリティを無効に設定する
オプションはないため、ユーザー ID、パスワード、およびパスワードの確認の各項目に値を指定しな
ければ、「次へ」ボタンは有効になりません。

「次へ」をクリックします。

5. 「セキュリティー証明書 (パート 1)」 ページで、新規証明書を作成するか、既存の証明書をインポートするかを指定します。

以下のアクションを実行します。

- 新規デフォルト個人証明書と新規ルート署名証明書を作成するには、「**新規デフォルト個人証明書を作成する (Create a new default personal certificate)**」ラジオ・ボタンと「**新規ルート署名証明書を作成する (Create a new root signing certificate)**」ラジオ・ボタンを選択して、「次へ」をクリックします。
- 既存の証明書をインポートするには、「**既存のデフォルト個人証明書をインポートする (Import an existing default personal certificate)**」ラジオ・ボタンと「**既存のルート署名個人証明書をインポートする (Import an existing root signing personal certificate)**」ラジオ・ボタンを選択して、以下の情報を指定します。
 - 「パス」フィールドに、既存の証明書へのディレクトリー・パスを入力します。
 - 「パスワード」フィールドに、証明書のパスワードを入力します。
 - 「**鍵ストア・タイプ (Keystore type)**」フィールドで、インポートする証明書の鍵ストア・タイプを選択します。
 - 「**鍵ストア別名 (Keystore alias)**」フィールドで、インポートする証明書の鍵ストア別名を選択します。
 - 「次へ」をクリックすると、「セキュリティー証明書 (パート 2)」 ページが表示されます。

個人証明書をデフォルトの個人証明書としてインポートする場合は、個人証明書に署名したルート証明書をインポートしてください。そのようにしない場合、プロファイル管理ツールは、個人証明書の署名者を `trust.p12` ファイルに追加します。

6. 「セキュリティー証明書 (パート 2)」 ページで、証明書の情報が正しいことを確認し、「次へ」をクリックして「ポート値の割り当て」 ページを表示します。

証明書を作成する場合、デフォルト値をそのまま使用するか変更して、新しい証明書を作成します。デフォルトの個人証明書は、デフォルトで 1 年間有効で、ルート署名証明書によって署名されます。ルート署名証明書は、デフォルトで 15 年間有効な自己署名証明書です。ルート署名証明書のデフォルトの鍵ストア・パスワードは、WebAS です。パスワードを変更します。パスワードに 2 バイト文字セット (DBCS) 文字を使用することはできません。PKCS12 などの特定の鍵ストア・タイプは、これらの文字をサポートしないからです。サポートされる鍵ストア・タイプは、`java.security` ファイルのプロバイダーによって異なります。

いずれかの証明書または両方の証明書を作成するか、いずれかの証明書または両方の証明書をインポートすると、以下の鍵ストア・ファイルが作成されます。

- `key.p12`: デフォルトの個人証明書が入っています。
- `trust.p12`: デフォルトのルート証明書の署名者証明書が入っています。
- `root-key.p12`: ルート署名証明書が入っています。
- `default-signers.p12`: サーバーのインストールまたは実行後に作成する新しい鍵ストア・ファイルに追加された署名者証明書が入っています。デフォルトで、デフォルトのルート証明書署名者と、DataPower® 署名者証明書は、この鍵ストア・ファイルに入っています。
- `deleted.p12`: 必要に応じて復旧できるように、`deleteKeyStore` タスクで削除された証明書を保持します。

- `ltpa.jceks`: 環境内のサーバーが相互に通信するために使用するサーバーのデフォルトの Lightweight Third-Party Authentication (LTPA) 鍵が入っています。

これらのすべてのファイルのパスワードは、証明書の作成またはインポート時に使用したのと同じパスワード (デフォルトのパスワードか、指定したパスワード) です。

インポートされた証明書が `key.p12` ファイルまたは `root-key.p12` ファイルに追加されます。

証明書をインポートして、その証明書に必要な情報が含まれていない場合は、「戻る」をクリックして、別の証明書をインポートします。

7. 「ポート値の割り当て」ページで、プロファイルに指定されたポートが固有であることを確認し、「次へ」をクリックします。

プロファイル管理ツールは、他の WebSphere 製品によって現在使用されているポートを検出し、既存のポート値と競合しない推奨値を表示します。指定されたポートを使用する WebSphere アプリケーション以外のアプリケーションが存在する場合は、ポートが競合しないことを確認してください。「オプションのアプリケーション・デプロイメント」ページで管理コンソールをデプロイしないように選択した場合、「ポート値の割り当て」ページ上で管理コンソール・ポートは使用できません。

以下の条件が満たされた場合には、ポートは使用中であると認識されます。

- ポートが、現在のユーザーが実行したインストールで作成されたプロファイルに割り当てられている。
- ポートが現在使用中である。

「ポート値の割り当て (Port Values Assignment)」ページにアクセスするときにはポートはツールによって検証されますが、続いて表示される「プロファイル管理ツール」ページで行われる選択の結果、依然としてポート競合が発生する可能性があります。ポートは、プロファイルの作成が完了するまで割り当てられません。

ポートの競合が発生していると思われる場合、プロファイルの作成後に調査することができます。以下のファイルを調べて、プロファイルの作成時に使用されたポートを確認します。

- **Linux** **UNIX** `profile_root/properties/portdef.props`
- **Windows** `profile_root\properties\portdef.props`

このファイル内に含まれているものは、ポートの設定で使用されたキーと値です。ポートの競合を発見した場合は、ポートを手動で再度割り当てることができます。ポートを再度割り当てするには、WebSphere Application Server Network Deployment インフォメーション・センターのトピック『既存プロファイル内のポートの更新』を参照してください。このトピックで説明されている `ws_ant` スクリプトを使用して `updatePorts.ant` ファイルを実行します。

次のステップは、ご使用のプラットフォーム、およびインストールを `root` (管理者) ユーザーで行っているか、非 `root` ユーザーで行っているかによって異なります。

インストールの内容	次のステップ
Linux または Windows プラットフォームで <code>root</code> または管理者グループ特権 を持っている場合	「Linux または Windows サービス定義 (Linux or Windows Service Definition)」ページが表示されます。ステップ 8 (248 ページ) に進みます。
それ以外のプラットフォームの場合、または Linux または Windows プラットフォームで非 <code>root</code> ユーザーとして実行している場合	「Web サーバー定義 (Web Server Definition)」ページが表示されます。ステップ 9 (249 ページ) に進みます。

8. 「サービスの定義」ページで、Windows サービスまたは Linux サービスを使用して IBM Business Process Manager を実行するかどうかを指定します。

Windows Windows プラットフォームにおいて、Windows サービスをインストールする ID に管理者グループ特権が設定されている場合にのみ、「Windows サービスの定義」ページが表示されます。プロファイルが Windows サービスとして構成されている場合、製品は、**startServer** または **startManager** コマンドによって開始されるプロセスに対応する Windows サービスを開始します。例えば、サーバーまたはデプロイメント・マネージャーを Windows サービスとして構成し、**startServer** または **startManager** コマンドを実行すると、**wasservice** コマンドは定義されたサービスを開始します。

重要: 特定のユーザー・アカウントを使用してログオンすることを選択した場合、サービスを実行するユーザーのユーザー ID とパスワード、および始動タイプ (デフォルトは「手動」) を指定する必要があります。ユーザー ID の名前にスペースを使用することはできません。また、この ID は管理者グループに属し、拡張ユーザー権限の「サービスとしてログオン」を持っている必要があります。ユーザー ID が管理者グループに属していて、まだ拡張ユーザー権限がない場合は、プロファイル管理ツールにより、ユーザー ID に拡張ユーザー権限が付与されます。

プロファイルの作成時に追加された Windows サービスをプロファイルの削除時に除去できます。

プロファイルを Windows サービスとして実行する場合の IPv6 に関する考慮事項

Windows サービスとして実行するように作成されたプロファイルは、このサービスがローカル・システムとして実行するように構成されている場合、IPv6 の使用時には開始できません。ユーザー固有の環境変数を作成して、IPv6 を使用可能にします。この環境変数はローカル・システム変数ではなくユーザー変数であるため、その特定のユーザーで実行される Windows サービスのみが、この環境変数にアクセスできます。新規プロファイルが Windows サービスとして実行するように作成および構成されている場合、デフォルトでは、このサービスはローカル・システムとして実行するように設定されます。IBM Business Process Manager Windows サービスによって実行が試みられる場合、このサービスは IPv6 が指定されているユーザー環境変数にアクセスできないため、IPv4 として開始を試みます。この場合、サーバーは正常に始動しません。この問題を解決するには、プロファイルの作成時に、IBM Business Process Manager Windows サービスが、ローカル・システムの代わりに IPv6 が指定されている環境変数を定義したユーザー ID と同じユーザー ID で実行されることを指定します。

Linux 「Linux サービスの定義」ページは、現在のオペレーティング・システムがサポート対象バージョンの Linux であり、現在のユーザーに適切な権限がある場合にのみ表示されます。

IBM Business Process Manager によって、**startManager** または **startManager** コマンドで開始されたプロセス用の Linux サービスの開始が試みられます。例えば、サーバーまたはデプロイメント・マネージャーを Linux サービスとして構成し、**startServer** または **startManager** コマンドを実行すると、**wasservice** コマンドは定義されたサービスを開始します。

デフォルトでは、IBM Business Process Manager は、Linux サービスとして実行するように選択されません。

このサービスを作成するためには、プロファイル管理ツールを実行するユーザーは root ユーザーでなければなりません。プロファイル管理ツールを root 以外のユーザー ID で実行している場合は、「Linux サービスの定義」ページは表示されないため、サービスも作成されません。

サービスの実行に使用されるユーザー名を指定する必要があります。

Linux サービスを削除するためには、ユーザーが root ユーザーであるか、またはこのサービスを削除するための適切な特権を持っている必要があります。それ以外の場合は、root ユーザーがこのユーザーの代わりにサービスを削除するために実行できる除去スクリプトが作成されます。

9. Web サーバー定義をすぐにプロファイルに組み込む場合は、以下のステップを実行します。
 - a. 「**Web サーバー定義を作成する**」チェック・ボックスを選択します。
 - b. ページ上の Web サーバーの特性を指定して、「次へ」をクリックします。
 - c. 「第 2 部」ページの Web サーバーの特性を指定します。

Web サーバーを使用して、要求を IBM Business Process Manager に送信する場合は、Web サーバー定義を組み込む必要があります。定義をすぐに組み込むこともできますし、後で IBM Business Process Manager に対して Web サーバーを定義することもできます。このプロファイルの作成中に Web サーバー定義を定義する場合は、プロファイルの作成後に Web サーバーとそのプラグインをインストールすることができます。ただし、「Web サーバー定義」ページ上で指定したパスに対してこの両方をインストールする必要があります。このプロファイルの作成後に、Web サーバーを IBM Business Process Manager に対して定義する場合は、Web サーバーを別のプロファイルに定義する必要があります。

- d. 「次へ」をクリックします。
10. 設計ファイルを使用してデータベースを構成します。
 - a. 「**データベース設計ファイルの使用 (Use a database design file)**」を選択します。
 - b. 「参照」をクリックします。
 - c. 設計ファイルの完全修飾パス名を選択します。
 - d. データベース・スクリプトを自動で (プロファイル作成プロセスの一部として) 実行する場合は、「**データベース・スクリプトを実行してデータベース表を作成する**」を選択します。このチェック・ボックスを選択しない場合、プロファイル作成の完了後に、ユーザー自身またはデータベース管理者がスクリプトを手動で実行できます。

重要: 「データベース・スクリプトを実行してデータベース表を作成する」を選択する場合は、「**既存のローカル・データベースまたはリモート・データベースを使用する**」を選択しないようにしてください。両方のオプションを選択すると、エラーが発生します。

- e. 「次へ」をクリックします。
11. 「データベース構成 - パート 1」ページで、以下のアクションを実行します。
 - 「**データベース製品の選択 (Select a database product)**」ドロップダウン・リストから、プロファイルで使用されるデータベース製品を選択します。
 - 「**新規ローカル・データベースの作成**」または「**既存のローカルまたはリモート・データベースの使用 (Use an existing local or remote database)**」を選択します。

データベース製品として DB2 を選択した場合は、新規データベースの作成を選択できます。DB2 はソフトウェアに組み込まれているため、プロファイル管理ツールにより新規 DB2 データベースが作成されます。

ソフトウェアで使用するデータベース製品が既に存在する場合は、「**既存のローカルまたはリモート・データベースの使用 (Use an existing local or remote database)**」を選択します。

- 「**Process Server データベース名 (Process Server database name)**」フィールドにデータベースの名前を入力するか、またはデフォルト値 **BP MDB** をそのまま使用します。

- 「**Performance Data Warehouse データベース名 (Performance Data Warehouse database name)**」フィールドにデータベースの名前を入力するか、またはデフォルト値 **PDWDB** をそのまま使用します。
- 「**共通データベース名**」フィールドで、共通データベースの名前を入力するか、**CMNDB** デフォルト値を受け入れます。
- データベース表の作成に使用される SQL スクリプトが書き込まれるディレクトリーを設定する場合は、「**データベース・スクリプトのデフォルト出力ディレクトリーをオーバーライドする (Override the default output directory for database scripts)**」チェック・ボックスを選択します。

このチェック・ボックスを選択しない場合、スクリプトはデフォルト・ディレクトリーに出力されます。

- データベース・スクリプトを自動で (プロファイル作成プロセスの一部として) 実行する場合は、「**データベース・スクリプトを実行してデータベースを初期化 (Run database scripts to initialize the databases)**」チェック・ボックスを選択します。このチェック・ボックスを選択しない場合、プロファイル作成の完了後に、ユーザー自身またはデータベース管理者がスクリプトを手動で実行できます。

「次へ」をクリックして、「データベース構成 - パート 2」ページを表示します。

「データベース構成 - パート 2」ページの内容は、「データベース構成 - パート 1」ページの「**データベース製品の選択 (Select a database product)**」メニューで指定した値によって異なります。

12. 「データベース構成 - パート 2」ページで、選択したデータベースの構成を指定します。各必須フィールドについて詳しくは、『プロファイル管理ツール構成のデータベース構成フィールド』を参照してください。

以下のデータベースのパラメーターを構成できます。

- DB2** 「データベース構成 - パート 2」ページで DB2 データベースの値を設定した後に、「次へ」をクリックして「プロファイルの要約」ページに進みます。

DB2 Universal Database for z/OS

DB2 Universal Database for z/OS を使用して新規データベースを作成することはできません。Performance Data Warehouse データベースが存在している必要があり、スタンドアロン・サーバー・プロファイルの場合は Process Server データベースも必要です。「データベース構成 - パート 2」ページで DB2 Universal Database for z/OS の値を設定した後に、「次へ」をクリックして「プロファイルの要約」ページに進みます。

Microsoft SQL Server

「データベース構成 - パート 2」ページで Microsoft SQL Server データベースの値を設定した後に、「次へ」をクリックして「データベース構成 - パート 3」ページに進みます。構成が完了したら、「次へ」をクリックして、「プロファイルの要約」ページに進みます。

- Oracle** このデータベースを使用して新規データベースを作成することはできません。

重要: プロファイルを作成する前に、SYSDBA 特権のあるユーザー ID を取得している必要があります。

「データベース構成 - パート 2」ページで Oracle データベースの値を設定した後に、「次へ」をクリックして「データベース構成 - パート 3」ページに進みます。「データベース構成 - パート 3」ページでの構成が完了したら、「次へ」をクリックして「プロファイルの要約」ページに進みます。

13. 「ビジネス・スペースの構成」 ページで、「**ビジネス・スペースの構成**」チェック・ボックスが選択された状態にして、ビジネス・スペースをセットアップします。これは、IBM ビジネス・プロセス管理ポータルフォリオでアプリケーション・ユーザー用に統合されたユーザー・エクスペリエンスです。Business Space 内のヒューマン・タスク管理ウィジェットと連携するように IBM Forms Server を構成する場合は、「**IBM Forms Server の構成**」チェック・ボックスを選択し、IBM Forms Server 変換プログラムおよび IBM Forms Server インストール・ルートの HTTP ロケーションを入力します。その後、「**次へ**」をクリックします。
14. ビジネス・ルール・マネージャーを構成してインストールするかどうかを選択します。

ビジネス・ルール・マネージャーは、ビジネス・アプリケーションの必要に合わせてビジネス・ルール・テンプレートをカスタマイズする Web アプリケーションです。

「**次へ**」をクリックします。

15. 「Business Process Choreographer の構成」で、サンプル Business Process Choreographer 構成を作成するかどうかを選択します。

注: サンプルの Business Process Choreographer 構成は、非実稼働 DB2 環境でのみサポートされます。DB2 以外の非実稼働環境で Business Process Choreographer を構成する場合は、『Business Process Choreographer の構成』を参照してください。

16. 「プロファイルの要約」 ページで、「**作成**」をクリックしてプロファイルを作成するか、または「**戻る**」をクリックしてプロファイルの特性を変更します。

構成の進行状況が、「プロファイル構成の進行 (Profile Configuration Progress)」ウィンドウに表示されます。

プロファイルの作成が完了すると、「プロファイル完了 (Profile Complete)」ページに「**プロファイル管理ツールにより、プロファイルが正常に作成されました。**」というメッセージが表示されます。

重要: プロファイルの作成中にエラーが検出された場合は、正常終了のメッセージの代わりに他のメッセージが表示される可能性があります。その例と意味は次のとおりです。

- 「**プロファイル管理ツールによりプロファイルが作成されましたが、エラーが発生しました**」: プロファイルの作成が完了したが、エラーが生成されたことを示します。
- 「**プロファイル管理ツールでプロファイルを作成できません**」: プロファイルの作成が完全に失敗したことを示します。

「プロファイル完了 (Profile complete)」ページには、問題のトラブルシューティングを行うために参照するログ・ファイルが示されます。ファースト・ステップ・コンソールに進むには、「**ファースト・ステップ・コンソールの起動**」チェック・ボックスにチェック・マークが付けられていることを確認して、「**終了**」をクリックします。また、別のウィンドウで開いている「プロファイル」ページも閉じてください。ファースト・ステップ・コンソールを使用して、製品資料にアクセスします。

17. SMTP サーバーを手動で構成して、メール通知を使用可能にします。1031 ページの『SMTP サーバーの構成』を参照してください。

ファースト・ステップ・コンソールに進み、作成した Process Center スタンドアロン・プロファイルに対応するサーバーを始動することができます。

プロファイル作成時にデータベース・スクリプトを実行しなかった場合は、データベースの作成後に、データベースにシステム情報をロードする必要があります。

関連タスク:

938 ページの『データベースへのシステム情報のロード』

IBM Business Process Manager サーバーの始動または使用を試みる前に、`bootstrapProcessServerData` コマンドを実行する必要があります。

239 ページの『プロファイル管理ツールを使用した Process Center スタンドアロン・プロファイルの作成』

Process Center スタンドアロン・プロファイルを作成するには、プロファイル管理ツールを使用します。

プロファイル管理ツールを使用したスタンドアロン・プロファイルの作成:

プロファイル管理ツールを使用して、スタンドアロン環境のプロファイルを作成できます。スタンドアロン環境は、他のすべてのサーバーから独立して機能し、専用の管理コンソールによって管理されます。

Process Server スタンドアロン・プロファイルの統合は、バージョン 7.5 ではサポートされていません。

• 『プロファイルの作成または拡張に関する前提条件』を確認します。

- **Solaris** Solaris オペレーティング・システム上の Motif グラフィカル・ユーザー・インターフェースでプロファイル管理ツールを使用する場合、プロファイル管理ツールのデフォルト・サイズが、すべてのメッセージおよびボタンを表示するには小さすぎる可能性があります。この問題を修正するには、`install_root/.Xdefaults` ファイルに以下の行を追加します。

```
Eclipse*spacing:0  
Eclipse*fontList:-misc-fixed-medium-r-normal-*-10-100-75-75-c-60-iso8859-1
```

行を追加したら、プロファイル管理ツールを開始する前に次のコマンドを実行します。

```
xrdb -load user_home/.Xdefaults
```

ヒント: プロファイル管理ツールを使用する代わりに、`manageprofiles` コマンド行ユーティリティーを使用してプロファイルを作成することもできます (『コマンド行ユーティリティーおよび `wsadmin` を使用したソフトウェアの構成』を参照)。

IBM Business Process Manager Advanced 用のスタンドアロンの *Process Server* プロファイルを作成する場合は、このタスク・トピックの手順に従ってください。このステップでは、「標準的なプロファイル作成」オプションと「高度なプロファイル作成」オプションの両方について説明します。

1. プロファイル管理ツールを開始します。このツールの開始方法については、『プロファイル管理ツールの開始』を参照してください。「ようこそ」ページが表示されます。
2. 「ようこそ」ページで、「プロファイル管理ツールの起動 (**Launch Profile Management Tool**)」をクリック、または「プロファイル管理ツール」タブを選択します。

「プロファイル」タブが表示されます。

「プロファイル」タブには、マシン上で作成されたプロファイルのリストが表示される場合があります。プロファイル管理ツールを使用して、新規プロファイルを作成するか、既存のプロファイルを拡張することができます。

3. 「プロファイル」タブで、「作成」をクリックします。

「環境の選択」ページが別ウィンドウで開きます。

4. 「環境の選択」ページで、プロファイルの作成対象の構成を見つけ、そのセクションを展開します。

例えば、IBM BPM Advanced 用のプロファイルを作成する場合は、「**IBM BPM Advanced、Process Server スタンドアロン**」プロファイルのオプションを選択し、「次へ」をクリックします。IBM BPM Standard 用のプロファイルを作成する場合は、「**IBM BPM Standard、Process Server スタンドアロ**

ン」プロファイルのオプションを選択し、「次へ」をクリックします。IBM BPM Express 用のプロファイルを作成する場合は、「**IBM BPM Express、Process Server スタンドアロン**」プロファイルのオプションを選択し、「次へ」をクリックします。

注: WebSphere Application Server プロファイルもこのプロファイル管理ツールで作成できます。ただし、本書では、IBM Business Process Manager プロファイルの作成のみを扱います。

「プロファイル作成オプション」ページが表示されます。

5. 「プロファイル作成オプション」ページで、以下のオプションのいずれかを使用してスタンドアロン・プロファイルを作成します。

標準的なプロファイル作成

デフォルトの構成設定を使用してプロファイルを作成します。

「拡張プロファイル作成」

指定した構成値を使用してプロファイルを作成します。

スタンドアロン・プロファイルを作成するためのオプションについて詳しくは、『表 75』を参照してください。

表 75. スタンドアロン・プロファイルに応じた作成オプションの選択

選択	目的
標準的なプロファイル作成	<p>プロファイル管理ツールで以下のアクションを実行できます。</p> <ul style="list-style-type: none"> • ポート、プロファイルのロケーション、およびプロファイル、ノード、ホスト、セルの名前にデフォルト値を割り当てます。 • 管理コンソールをインストールします。 • プロファイルの個人セキュリティ証明書を作成します。 <p>証明書には個人鍵と秘密鍵があり、各鍵のデフォルト値は WebAS です (このパスワードは変更する必要があります)。有効期間は 1 年です。</p> <ul style="list-style-type: none"> • 他の証明書に署名するためのルート署名セキュリティ証明書を作成します。 <p>証明書には個人鍵と秘密鍵があり、各鍵のデフォルト値は WebAS です (このパスワードは変更する必要があります)。有効期間は 15 年です。</p> <ul style="list-style-type: none"> • サーバーを実行するためのシステム・サービスを作成します。 <p>ご使用のオペレーティング・システムとユーザー・アカウントの特権で許可される場合のみ該当します。</p> <ul style="list-style-type: none"> • サポート対象のデータベース製品のいずれかを選択します。データベース構成は、CommonDB、Process Server データベース、および Performance Data Warehouse データベース用に設定されます。

表 75. スタンドアロン・プロファイルに応じた作成オプションの選択 (続き)

選択	目的
高度なプロファイル作成	<ul style="list-style-type: none"> • データベース構成に使用するデータベース設計ファイルを指定します。 • ポート、プロファイルのロケーション、およびプロファイル、ノード、ホスト、セル (該当する場合) の名前にカスタマイズ値を割り当てます。 • 管理コンソールをデプロイします。 • デフォルト・アプリケーション (Snoop、Hello、および HitCount の各サーブレットを含む) をデプロイします。 • Web サーバー定義を作成します。 • ご使用のオペレーティング・システムとユーザー・アカウントの特権によってサービスの作成が許可される場合に、サーバーを実行するためのシステム・サービスを作成します。 • Business Space powered by WebSphere を構成します。 <p>注: Business Space powered by WebSphere は、共通データベースで構成されます。</p> <ul style="list-style-type: none"> • ビジネス・ルール・マネージャーを構成し、Business Process Choreographer サンプル構成を作成します。 <p>重要: DB2 データベースと共に使用するスタンドアロン・プロファイルを作成するときは、サンプルの Business Process Choreographer 構成がデフォルトで作成されます。共通データベース (CMNDB) 内で専用のスキーマを使用し、スキーマ名は必ず BPEDB になります。これらの条件では制限が厳しすぎるという場合は、プロファイルの作成中は Business Process Choreographer 構成を無効にして、プロファイルの作成後に Business Process Choreographer を構成します。プロファイルの作成中、Business Process Choreographer は DB2 以外のデータベースを使用するように構成することはできません。Oracle または SQL Server データベースを使用するには、プロファイルの作成後に Business Process Choreographer を構成します。</p>

引き続き、以下のいずれかのタイプの Process Server スタンドアロン・プロファイルを作成します。

- 標準的なプロファイル作成
- 「拡張プロファイル作成」

関連タスク:

255 ページの『プロファイル管理ツールを使用した標準 Process Server スタンドアロン・プロファイルの作成』

プロファイル管理ツールを使用して、標準的なスタンドアロン環境のプロファイルを作成できます。スタンドアロン環境は、他のすべてのサーバーから独立して機能し、専用の管理コンソールによって管理されます。

258 ページの『プロファイル管理ツールを使用した拡張 Process Server スタンドアロン・プロファイルの作成』

プロファイル管理ツールを使用して、スタンドアロン環境の拡張プロファイルを作成することができます。スタンドアロン環境は、他のすべてのサーバーから独立して機能し、専用の管理コンソールによって管理されます。

関連資料:

893 ページの『プロファイル管理ツール構成のデータベース構成フィールド』

スタンドアロン環境のプロファイルを作成するには、データベース情報が必要です。必要な情報は、使用するデータベースによって異なります。

関連情報:

データベース設計ツールを使用したデータベース設計ファイルの作成

プロファイル管理ツールを使用した標準 *Process Server* スタンドアロン・プロファイルの作成:

プロファイル管理ツールを使用して、標準的なスタンドアロン環境のプロファイルを作成できます。スタンドアロン環境は、他のすべてのサーバーから独立して機能し、専用の管理コンソールによって管理されます。

252 ページの『プロファイル管理ツールを使用したスタンドアロン・プロファイルの作成』に記載されている初期構成の手順を完了します。

IBM Business Process Manager Advanced 用の標準スタンドアロン *Process Server* プロファイルを作成する場合は、このタスク・トピックの手順に従ってください。以下のステップは「標準プロファイル作成」の説明です。

1. 「管理セキュリティ」ページで、「**ユーザー名**」、「**パスワード**」、および「**パスワードの確認**」の値を入力します。インストール時に管理者に対して指定されたパスワードが、tw_admin および tw_user を含むすべての内部ユーザーに使用されます。

注: 初期設定では、「次へ」ボタンは無効に設定されています。管理セキュリティを無効に設定するオプションはないため、ユーザー ID、パスワード、およびパスワードの確認の各項目に値を指定しなければ、「次へ」ボタンは有効になりません。

「次へ」をクリックします。

2. 「Process Server 構成」ページで、以下のパラメーターの値を設定します。

環境名

構成する環境の名前を指定します。

環境タイプの選択

以下のオプションを使用できます。

実動 実動キャパシティーでサーバーを実行する場合は、「**実動**」を選択します。

ステージング

実動前サーバーとして使用されるステージング・プラットフォームとしてサーバーを実行する場合は、「**ステージング**」を選択します。

テスト 構成するサーバーをテスト環境として使用する場合は、「**テスト**」を選択します。

インストール時に設定した環境タイプは、Process Server の使用方法を指すものであり、サーバーに適用できる環境変数および値を決定します。Process App ごとに環境固有の変数を設定できます。次に、プロセスが実行される環境のタイプごとに値を定義します。例えば、Process Server を使用するキャパシティー (実動、ステージング、またはテスト) です。負荷テストはテスト・サーバーで実行され、ステージング環境タイプは、変更を実動環境に反映する前にそれらの変更をホストするための一時的なロケーションとして使用されます。構成する Process Server が、コンテンツおよび新機能のレビューを目的としてアクセスおよび使用される場合は、「**環境タイプ**」として「**ステージング**」を指定することが考えられます。

Process Center の構成情報

この Process Center に接続するための構成の詳細を指定します。一方、オフライン・モードで実行する場合は、サーバーをオフライン・モードで使用するためのチェック・ボックスを選択します。

サーバーをオフラインで使用する

構成するサーバーがオフライン・サーバーであるかどうかを示します。オフライン・サーバーは、Process Center に接続されていない Process Server です。

オフライン・サーバーは、Process App の Snapshot をデプロイするときにも使用できません。ただし、Process App をオフラインの Process Server にデプロイする方法は、Process App をオンラインの Process Server にデプロイする方法とは異なります。

プロトコル

Process Center への接続プロトコルとして「**http://**」または「**https://**」を選択します。

ホスト名

この Process Server が Process Center と通信するために必要なホストまたは仮想ホストを入力します。完全修飾ホスト名を使用します。

Process Server と Process Center サービスとの間にロード・バランサーまたはプロキシ・サーバーが存在する環境の場合、ここでの設定内容が Process Center にアクセスするための URL と一致していることを確認してください。

ポート Process Center のポート番号を入力します。Process Server と Process Center との間にロード・バランサーまたはプロキシ・サーバーが存在する環境の場合、ここでの設定内容が Process Center にアクセスするための URL と一致していることを確認してください。

ユーザー名

Process Center に存在する有効なユーザー名を入力します。Process Server は、このユーザーとして Process Center に接続します。

パスワード

前述のユーザーのパスワードを入力します。

「**接続のテスト**」をクリックすることによって、Process Center への接続をテストできます。

「**次へ**」をクリックします。

3. 「データベース構成」ページで、以下の措置を行います。

- 「**データベース製品の選択 (Select a database product)**」ドロップダウン・リストから、プロファイルで使用されるデータベース製品を選択します。
- 「**新規ローカル・データベースの作成**」または「**既存のローカルまたはリモート・データベースの使用 (Use an existing local or remote database)**」を選択します。

データベース製品として DB2 を選択した場合は、新規データベースの作成を選択できます。DB2 はソフトウェアに組み込まれているため、プロファイル管理ツールにより新規 DB2 データベースが作成されます。

ソフトウェアで使用するデータベース製品が既に存在する場合は、「**既存のローカルまたはリモート・データベースの使用 (Use an existing local or remote database)**」を選択します。

- 「**Process Server データベース名 (Process Server database name)**」フィールドにデータベースの名前を入力するか、またはデフォルト値 **BPMDB** をそのまま使用します。
- 「**Performance Data Warehouse データベース名 (Performance Data Warehouse database name)**」フィールドにデータベースの名前を入力するか、またはデフォルト値 **PDWDB** をそのまま使用します。
- 「**共通データベース名**」フィールドで、共通データベースの名前を入力するか、**CMNDB** デフォルト値を受け入れます。

- データベース表の作成に使用される SQL スクリプトが書き込まれるディレクトリーを設定する場合は、「データベース・スクリプトのデフォルト出力ディレクトリーをオーバーライドする (Override the default output directory for database scripts)」チェック・ボックスを選択します。

このチェック・ボックスを選択しない場合、スクリプトはデフォルト・ディレクトリーに出力されます。

- データベース・スクリプトを自動で (プロファイル作成プロセスの一部として) 実行する場合は、「データベース・スクリプトを実行してデータベースを初期化 (Run database scripts to initialize the databases)」チェック・ボックスを選択します。このチェック・ボックスを選択しない場合、プロファイル作成の完了後に、ユーザー自身またはデータベース管理者がスクリプトを手動で実行できます。

Oracle の場合、「Process Server データベース名 (Process Server database name)」および

「Performance Data Warehouse データベース名 (Performance Data Warehouse database name)」(実際にはこれがデータベース・インスタンス名) を、「共通データベース名」と同じにすることができます。その他のデータベース・タイプでは、データベース名は固有である必要があります。

4. 「データベース構成 - パート 2」ページで、選択したデータベースの構成を指定します。各必須フィールドについて詳しくは、『プロファイル管理ツール構成のデータベース構成フィールド』を参照してください。

以下のデータベースのパラメーターを構成できます。

DB2 「データベース構成 - パート 2」ページで DB2 データベースの値を設定した後に、「次へ」をクリックして「プロファイルの要約」ページに進みます。

DB2 Universal Database for z/OS

DB2 Universal Database for z/OS を使用して新規データベースを作成することはできません。Performance Data Warehouse データベースが存在する必要があるため、スタンドアロン・サーバー・プロファイルの場合は Process Server データベースも必要です。「データベース構成 - パート 2」ページで DB2 Universal Database for z/OS の値を設定した後に、「次へ」をクリックして「プロファイルの要約」ページに進みます。

Microsoft SQL Server

「データベース構成 - パート 2」ページで Microsoft SQL Server データベースの値を設定した後に、「次へ」をクリックして「データベース構成 - パート 3」ページに進みます。構成が完了したら、「次へ」をクリックして、「プロファイルの要約」ページに進みます。

Oracle このデータベースを使用して新規データベースを作成することはできません。

重要: プロファイルを作成する前に、SYSDBA 特権のあるユーザー ID を取得している必要があります。

「データベース構成 - パート 2」ページで Oracle データベースの値を設定した後に、「次へ」をクリックして「データベース構成 - パート 3」ページに進みます。「データベース構成 - パート 3」ページでの構成が完了したら、「次へ」をクリックして「プロファイルの要約」ページに進みます。

5. 「プロファイルの要約」ページで、「作成」をクリックしてプロファイルを作成するか、または「戻る」をクリックしてプロファイルの特性を変更します。

「プロファイル構成の進行状況 (Profile Configuration Progress)」ウィンドウに構成の進行状況が表示されます。

プロファイルの作成が完了すると、「プロファイル完了 (Profile Complete)」ページに「プロファイル管理ツールにより、プロファイルが正常に作成されました。」というメッセージが表示されます。

重要: プロファイルの作成中にエラーが検出された場合は、正常終了のメッセージの代わりに他のメッセージが表示される可能性があります。その例と意味は次のとおりです。

- 「プロファイル管理ツールによりプロファイルが作成されましたが、エラーが発生しました」：プロファイルの作成が完了したが、エラーが生成されたことを示します。
- 「プロファイル管理ツールでプロファイルを作成できません」：プロファイルの作成が完全に失敗したことを示します。

「プロファイル完了 (Profile Complete)」ページには、問題のトラブルシューティングを行うために参照するログ・ファイルが示されます。ファースト・ステップ・コンソールに進むには、「**ファースト・ステップ・コンソールの起動**」チェック・ボックスにチェック・マークが付けられていることを確認して、「**終了**」をクリックします。また、別のウィンドウで開いている「プロファイル」ページも閉じてください。ファースト・ステップ・コンソールを使用して、製品資料にアクセスします。デフォルト構成設定を使用してプロファイルを作成するステップが完了しました。

「ファースト・ステップ・コンソール」から、先程作成した *Process Server* スタンドアロン・プロファイルを開始できます。

プロファイル作成時にデータベース・スクリプトを実行しなかった場合は、データベースの作成後に、データベースにシステム情報をロードする必要があります。

関連タスク:

252 ページの『プロファイル管理ツールを使用したスタンドアロン・プロファイルの作成』プロファイル管理ツールを使用して、スタンドアロン環境のプロファイルを作成できます。スタンドアロン環境は、他のすべてのサーバーから独立して機能し、専用の管理コンソールによって管理されます。

938 ページの『データベースへのシステム情報のロード』

IBM Business Process Manager サーバーの始動または使用を試みる前に、`bootstrapProcessServerData` コマンドを実行する必要があります。

プロファイル管理ツールを使用した拡張 *Process Server* スタンドアロン・プロファイルの作成:

プロファイル管理ツールを使用して、スタンドアロン環境の拡張プロファイルを作成することができます。スタンドアロン環境は、他のすべてのサーバーから独立して機能し、専用の管理コンソールによって管理されます。

252 ページの『プロファイル管理ツールを使用したスタンドアロン・プロファイルの作成』に記載されている初期構成の手順を完了します。

IBM Business Process Manager Advanced 用の拡張スタンドアロン *Process Server* プロファイルを作成する場合は、このタスク・トピックの手順に従ってください。以下のステップは「**拡張プロファイル作成**」オプションの説明です。

1. 「オプションのアプリケーション・デプロイメント」ページで、プロファイル環境にデプロイするアプリケーションを選択します。

サンプル・アプリケーションのデプロイ

IBM Business Process Manager および WebSphere Application Server サンプル・アプリケーションをインストールします。サンプル・アプリケーションは、実稼働環境へのデプロイメントが推奨されていません。

管理コンソールのデプロイ (推奨)

サーバーを管理する Web ベースの管理コンソールをインストールします。

デフォルト・アプリケーションのデプロイ

Snoop、Hello、および HitCount の各サブレットを含むデフォルト・アプリケーションをインストールします。

2. 「プロファイル名およびロケーション」ページで、以下のステップを実行します。

a. 「プロファイル名」フィールドで固有の名前を指定するか、デフォルト値をそのまま使用します。

作成する各プロファイルに名前を付ける必要があります。複数のプロファイルがある場合は、この名前によって明らかに区別することができます。デフォルト名を使用しないことを選択した場合は、ディレクトリー名の長さに関する制限など、プロファイルの命名の際に考慮する必要がある問題について、『プロファイル、ノード、サーバー、ホスト、およびセルの命名の考慮事項』を参照してください。

b. 「プロファイル・ディレクトリー」フィールドにプロファイルのディレクトリーを入力するか、「参照...」ボタンを使用してプロファイル・ディレクトリーに移動します。

指定したディレクトリーには、ランタイム環境を定義するファイル (コマンド、構成ファイル、ログ・ファイルなど) が格納されます。デフォルト・ディレクトリーは、プラットフォームに依存しています。以下の例は、プラットフォームの相違を示しています。*profile_name* はユーザーが指定する名前です。

- **Linux** **UNIX** `install_root/profiles/profile_name`
- **Windows** `install_root¥profiles¥profile_name`

次のいずれかの問題が発生すると、エラー・メッセージが表示されます。

- 指定した *profile_name* が固有ではない。
 - 指定したディレクトリーが空ではない。
 - 使用しているユーザー ID に、このディレクトリーに対する十分な権限がない。
 - プロファイルを作成するための十分なスペースがない。
- c. オプション: 作成中のプロファイルをデフォルト・プロファイルにするには、「このプロファイル
をデフォルトにする」チェック・ボックスを選択します。

注: このチェック・ボックスは、既存のプロファイルがご使用のシステムに存在する場合にのみ表示されます。

デフォルト・プロファイルにするプロファイルを作成すると、コマンドは自動的にそのプロファイル
を処理対象とします。ワークステーションで作成する最初のプロファイルは、デフォルト・プロ
ファイルです。デフォルト・プロファイルは、製品インストール・ルートの bin ディレクトリーか
ら実行されるコマンドのデフォルトのターゲットです。ワークステーション上にプロファイルが 1
つしか存在しない場合は、すべてのコマンドがそのプロファイルに基づいて機能します。複数の
プロファイルが存在する場合、特定の命令では、命令が適用されるプロファイルを指定する
必要があります。詳しくは、『複数プロファイル環境のプロファイル・コマンド』を参照してくだ
さい。

- d. 「サーバー・ランタイムのパフォーマンス・チューニング設定 (Server runtime performance
tuning setting)」プルダウン・リストから、作成するプロファイルに適したパフォーマンス・チュー
ニング・レベルを選択します。
- e. 「次へ」をクリックします。

注: 「戻る」をクリックしてプロファイル名を変更した場合、このページが再表示されたときに、このページで手動で名前を変更しなければならないことがあります。

3. 「ノード、ホスト、およびセルの名前」ページで、作成するプロファイルに対して次の処置を行います。

- 「ノード名」フィールドにノードの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。

ノード名はできるだけ短くしてください。ただし、ノード名は、デプロイメント環境内で固有でなければなりません。命名時に考慮する必要のある予約済みの用語やその他の問題については、『プロファイル、ノード、サーバー、ホスト、およびセルの命名に関する考慮事項』を参照してください。

- 「サーバー名」フィールドにサーバーの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。
- 「ホスト名」フィールドにホストの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。
- 「セル名」フィールドにセルの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。

「次へ」をクリックすると、「管理セキュリティー」ページが表示されます。

4. 「管理セキュリティー」ページで、「ユーザー名」、「パスワード」、および「パスワードの確認」の値を入力します。インストール時に管理者に対して指定されたパスワードが、tw_admin および tw_user を含むすべての内部ユーザーに使用されます。

注: 初期設定では、「次へ」ボタンは無効に設定されています。管理セキュリティーを無効に設定するオプションはないため、ユーザー ID、パスワード、およびパスワードの確認の各項目に値を指定しなければ、「次へ」ボタンは有効になりません。

「次へ」をクリックします。

5. 「セキュリティー証明書 (パート 1)」ページで、新規証明書を作成するか、既存の証明書をインポートするかを指定します。

以下のアクションを実行します。

- 新規デフォルト個人証明書と新規ルート署名証明書を作成するには、「**新規デフォルト個人証明書を作成する (Create a new default personal certificate)**」ラジオ・ボタンと「**新規ルート署名証明書を作成する (Create a new root signing certificate)**」ラジオ・ボタンを選択して、「次へ」をクリックします。
- 既存の証明書をインポートするには、「**既存のデフォルト個人証明書をインポートする (Import an existing default personal certificate)**」ラジオ・ボタンと「**既存のルート署名個人証明書をインポートする (Import an existing root signing personal certificate)**」ラジオ・ボタンを選択して、以下の情報を指定します。
 - 「パス」フィールドに、既存の証明書へのディレクトリー・パスを入力します。
 - 「パスワード」フィールドに、証明書のパスワードを入力します。
 - 「**鍵ストア・タイプ (Keystore type)**」フィールドで、インポートする証明書の鍵ストア・タイプを選択します。
 - 「**鍵ストア別名 (Keystore alias)**」フィールドで、インポートする証明書の鍵ストア別名を選択します。
 - 「次へ」をクリックすると、「セキュリティー証明書 (パート 2)」ページが表示されます。

個人証明書をデフォルトの個人証明書としてインポートする場合は、個人証明書に署名したルート証明書をインポートしてください。そのようにしない場合、プロファイル管理ツールは、個人証明書の署名者を trust.p12 ファイルに追加します。

6. 「セキュリティー証明書 (パート 2)」 ページで、証明書の情報が正しいことを確認し、「次へ」をクリックして「ポート値の割り当て」 ページを表示します。

証明書を作成する場合、デフォルト値をそのまま使用するか変更して、新しい証明書を作成します。デフォルトの個人証明書は、デフォルトで 1 年間有効で、ルート署名証明書によって署名されます。ルート署名証明書は、デフォルトで 15 年間有効な自己署名証明書です。ルート署名証明書のデフォルトの鍵ストア・パスワードは、WebAS です。パスワードを変更します。パスワードに 2 バイト文字セット (DBCS) 文字を使用することはできません。PKCS12 などの特定の鍵ストア・タイプは、これらの文字をサポートしないからです。サポートされる鍵ストア・タイプは、java.security ファイルのプロバイダーによって異なります。

いずれかの証明書または両方の証明書を作成するか、いずれかの証明書または両方の証明書をインポートすると、以下の鍵ストア・ファイルが作成されます。

- key.p12: デフォルトの個人証明書が入っています。
- trust.p12: デフォルトのルート証明書の署名者証明書が入っています。
- root-key.p12: ルート署名証明書が入っています。
- default-signers.p12: サーバーのインストールまたは実行後に作成する新しい鍵ストア・ファイルに追加された署名者証明書が入っています。デフォルトで、デフォルトのルート証明書署名者と、DataPower 署名者証明書は、この鍵ストア・ファイルに入っています。
- deleted.p12: 必要に応じて復旧できるように、deleteKeyStore タスクで削除された証明書を保持します。
- ltpa.jceks: 環境内のサーバーが相互に通信するために使用するサーバーのデフォルトの Lightweight Third-Party Authentication (LTPA) 鍵が入っています。

これらのすべてのファイルのパスワードは、証明書の作成またはインポート時に使用したのと同じパスワード (デフォルトのパスワードか、指定したパスワード) です。

インポートされた証明書が key.p12 ファイルまたは root-key.p12 ファイルに追加されます。

証明書をインポートして、その証明書に必要な情報が含まれていない場合は、「戻る」をクリックして、別の証明書をインポートします。

7. 「ポート値の割り当て」 ページで、プロファイルに指定されたポートが固有であることを確認し、「次へ」をクリックします。

プロファイル管理ツールは、他の WebSphere 製品によって現在使用されているポートを検出し、既存のポート値と競合しない推奨値を表示します。指定されたポートを使用する WebSphere アプリケーション以外のアプリケーションが存在する場合は、ポートが競合しないことを確認してください。「オプションのアプリケーション・デプロイメント」 ページで管理コンソールをデプロイしないように選択した場合、「ポート値の割り当て」 ページ上で管理コンソール・ポートは使用できません。

以下の条件が満たされた場合には、ポートは使用中であると認識されます。

- ポートが、現在のユーザーが実行したインストールで作成されたプロファイルに割り当てられている。
- ポートが現在使用中である。

「ポート値の割り当て (Port Values Assignment)」 ページにアクセスするときにはポートはツールによって検証されますが、続いて表示される「プロファイル管理ツール」 ページで行われる選択の結果、依然としてポート競合が発生する可能性があります。ポートは、プロファイルの作成が完了するまで割り当てられません。

ポートの競合が発生していると思われる場合、プロファイルの作成後に調査することができます。以下のファイルを調べて、プロファイルの作成時に使用されたポートを確認します。

- **Linux** **UNIX** `profile_root/properties/portdef.props`
- **Windows** `profile_root\properties\portdef.props`

このファイル内に含まれているものは、ポートの設定で使用されたキーと値です。ポートの競合を発見した場合は、ポートを手動で再度割り当てることができます。ポートを再度割り当てるには、WebSphere Application Server Network Deployment インフォメーション・センターのトピック『既存プロファイル内のポートの更新』を参照してください。このトピックで説明されている `ws_ant` スクリプトを使用して `updatePorts.ant` ファイルを実行します。

次のステップは、ご使用のプラットフォーム、およびインストールを `root` (管理者) ユーザーで行っているか、非 `root` ユーザーで行っているかによって異なります。

インストールの内容	次のステップ
Linux または Windows プラットフォームで <code>root</code> または管理者グループ特権を持っている場合	「Linux または Windows サービス定義 (Linux or Windows Service Definition)」ページが表示されます。ステップ 8 に進みます。
それ以外のプラットフォームの場合、または Linux または Windows プラットフォームで非 <code>root</code> ユーザーとして実行している場合	「Web サーバー定義 (Web Server Definition)」ページが表示されます。ステップ 9 (263 ページ) に進みます。

8. 「サービスの定義」ページで、Windows サービスまたは Linux サービスを使用して IBM Business Process Manager を実行するかどうかを指定します。

Windows Windows プラットフォームにおいて、Windows サービスをインストールする ID に管理者グループ特権が設定されている場合にのみ、「Windows サービスの定義」ページが表示されます。プロファイルが Windows サービスとして構成されている場合、製品は、`startServer` または `startManager` コマンドによって開始されるプロセスに対応する Windows サービスを開始します。例えば、サーバーまたはデプロイメント・マネージャーを Windows サービスとして構成し、`startServer` または `startManager` コマンドを実行すると、`wasservice` コマンドは定義されたサービスを開始します。

重要: 特定のユーザー・アカウントを使用してログオンすることを選択した場合、サービスを実行するユーザーのユーザー ID とパスワード、および始動タイプ (デフォルトは「手動」) を指定する必要があります。ユーザー ID の名前にスペースを使用することはできません。また、この ID は管理者グループに属し、拡張ユーザー権限の「サービスとしてログオン」を持っている必要があります。ユーザー ID が管理者グループに属していて、まだ拡張ユーザー権限がない場合は、プロファイル管理ツールにより、ユーザー ID に拡張ユーザー権限が付与されます。

プロファイルの作成時に追加された Windows サービスをプロファイルの削除時に除去できます。

プロファイルを Windows サービスとして実行する場合の IPv6 に関する考慮事項

Windows サービスとして実行するように作成されたプロファイルは、このサービスがローカル・システムとして実行するように構成されている場合、IPv6 の使用時には開始できません。ユーザー固有の環境変数を作成して、IPv6 を使用可能にします。この環境変数はローカル・システム変数ではなくユーザー変数であるため、その特定のユーザーで実行される Windows サービスのみが、この環境変数にアクセスできます。新規プロファイルが Windows サービスとして実行するように作成および構成されている場合、デフォルトでは、このサービスはローカ

ル・システムとして実行するように設定されます。IBM Business Process Manager Windows サービスによって実行が試みられる場合、このサービスは IPv6 が指定されているユーザー環境変数にアクセスできないため、IPv4 として開始を試みます。この場合、サーバーは正常に始動しません。この問題を解決するには、プロファイルの作成時に、IBM Business Process Manager Windows サービスが、ローカル・システムの代わりに IPv6 が指定されている環境変数を定義したユーザー ID と同じユーザー ID で実行されることを指定します。

Linux 「Linux サービスの定義」ページは、現在のオペレーティング・システムがサポート対象バージョンの Linux であり、現在のユーザーに適切な権限がある場合にのみ表示されます。

IBM Business Process Manager によって、**startManager** または **startManager** コマンドで開始されたプロセス用の Linux サービスの開始が試みられます。例えば、サーバーまたはデプロイメント・マネージャーを Linux サービスとして構成し、**startServer** または **startManager** コマンドを実行すると、**wasservice** コマンドは定義されたサービスを開始します。

デフォルトでは、IBM Business Process Manager は、Linux サービスとして実行するように選択されません。

このサービスを作成するためには、プロファイル管理ツールを実行するユーザーは root ユーザーでなければなりません。プロファイル管理ツールを root 以外のユーザー ID で実行している場合は、「Linux サービスの定義」ページは表示されないため、サービスも作成されません。

サービスの実行に使用されるユーザー名を指定する必要があります。

Linux サービスを削除するためには、ユーザーが root ユーザーであるか、またはこのサービスを削除するための適切な特権を持っている必要があります。それ以外の場合は、root ユーザーがこのユーザーの代わりにサービスを削除するために実行できる除去スクリプトが作成されます。

「次へ」をクリックして先に進みます。

9. Web サーバー定義をすぐにプロファイルに組み込む場合は、以下のステップを実行します。
 - a. 「Web サーバー定義を作成する」チェック・ボックスを選択します。
 - b. ページ上の Web サーバーの特性を指定して、「次へ」をクリックします。
 - c. 「第 2 部」ページの Web サーバーの特性を指定します。

Web サーバーを使用して、要求を IBM Business Process Manager に送信する場合は、Web サーバー定義を組み込む必要があります。定義をすぐに組み込むこともできますし、後で IBM Business Process Manager に対して Web サーバーを定義することもできます。このプロファイルの作成中に Web サーバー定義を定義する場合は、プロファイルの作成後に Web サーバーとそのプラグインをインストールすることができます。ただし、「Web サーバー定義」ページ上で指定したパスに対してこの両方をインストールする必要があります。このプロファイルの作成後に、Web サーバーを IBM Business Process Manager に対して定義する場合は、Web サーバーを別のプロファイルに定義する必要があります。

- d. 「次へ」をクリックします。
10. 「ビジネス・スペースの構成」ページで、「ビジネス・スペースの構成」チェック・ボックスが選択された状態にして、ビジネス・スペースをセットアップします。これは、IBM ビジネス・プロセス管理ポータルフォリオでアプリケーション・ユーザー用に統合されたユーザー・エクスペリエンスです。Business Space 内のヒューマン・タスク管理ウィジェットと連携するように IBM Forms Server を構成

する場合は、「**IBM Forms Server の構成**」チェック・ボックスを選択し、IBM Forms Server 変換プログラムおよび IBM Forms Server インストール・ルートの HTTP ロケーションを入力します。その後、「次へ」をクリックします。

11. ビジネス・ルール・マネージャーを構成してインストールするかどうか選択します。
12. 設計ファイルを使用してデータベースを構成します。
 - a. 「**データベース設計ファイルの使用 (Use a database design file)**」を選択します。
 - b. 「参照」をクリックします。
 - c. 設計ファイルの完全修飾パス名を選択します。
 - d. データベース・スクリプトを自動で (プロファイル作成プロセスの一部として) 実行する場合は、「**データベース・スクリプトを実行してデータベース表を作成する**」を選択します。このチェック・ボックスを選択しない場合、プロファイル作成の完了後に、ユーザー自身またはデータベース管理者がスクリプトを手動で実行できます。

重要: 「データベース・スクリプトを実行してデータベース表を作成する」を選択する場合は、「**既存のローカル・データベースまたはリモート・データベースを使用する**」を選択しないようにしてください。両方のオプションを選択すると、エラーが発生します。

- e. 「次へ」をクリックします。
13. 設計ファイルを使用したデータベースの構成を行わないことを選択した場合、「データベース構成」パネルでデータベースの詳細を指定します。詳細は、以下のステップを参照してください。
 - a. 「データベース構成」ページで、以下の措置を行います。
 - 「**データベース製品の選択 (Select a database product)**」ドロップダウン・リストから、プロファイルで使用されるデータベース製品を選択します。
 - 「**新規ローカル・データベースの作成**」または「**既存のローカルまたはリモート・データベースの使用 (Use an existing local or remote database)**」を選択します。

データベース製品として DB2 を選択した場合は、新規データベースの作成を選択できます。DB2 はソフトウェアに組み込まれているため、プロファイル管理ツールにより新規 DB2 データベースが作成されます。

ソフトウェアで使用するデータベース製品が既に存在する場合は、「**既存のローカルまたはリモート・データベースの使用 (Use an existing local or remote database)**」を選択します。

- 「**Process Server データベース名 (Process Server database name)**」フィールドにデータベースの名前を入力するか、またはデフォルト値 **BPMDB** をそのまま使用します。
- 「**Performance Data Warehouse データベース名 (Performance Data Warehouse database name)**」フィールドにデータベースの名前を入力するか、またはデフォルト値 **PDWDB** をそのまま使用します。
- 「**共通データベース名**」フィールドで、共通データベースの名前を入力するか、**CMNDB** デフォルト値を受け入れます。
- データベース表の作成に使用される SQL スクリプトが書き込まれるディレクトリーを設定する場合は、「**データベース・スクリプトのデフォルト出力ディレクトリーをオーバーライドする (Override the default output directory for database scripts)**」チェック・ボックスを選択します。

このチェック・ボックスを選択しない場合、スクリプトはデフォルト・ディレクトリーに出力されます。

- データベース・スクリプトを自動で (プロファイル作成プロセスの一部として) 実行する場合は、「データベース・スクリプトを実行してデータベースを初期化 (Run database scripts to initialize the databases)」チェック・ボックスを選択します。このチェック・ボックスを選択しない場合、プロファイル作成の完了後に、ユーザー自身またはデータベース管理者がスクリプトを手動で実行できます。

Oracle の場合、「Process Server データベース名」と「Performance Data Warehouse データベース」の名前 (データベース・インスタンス名) は、「共通データベース名」と同じにすることができます。その他のデータベース・タイプでは、データベース名は固有である必要があります。

- b. 「データベース構成 - パート 2」ページで、選択したデータベースの構成を指定します。各必須フィールドについて詳しくは、『プロファイル管理ツール構成のデータベース構成フィールド』を参照してください。

以下のデータベースのパラメーターを構成できます。

DB2 「データベース構成 - パート 2」ページで DB2 データベースの値を設定した後に、「次へ」をクリックして「プロファイルの要約」ページに進みます。

DB2 Universal Database for z/OS

DB2 Universal Database for z/OS を使用して新規データベースを作成することはできません。Performance Data Warehouse データベースが存在している必要があります。スタンドアロン・サーバー・プロファイルの場合は Process Server データベースも必要です。「データベース構成 - パート 2」ページで DB2 Universal Database for z/OS の値を設定した後に、「次へ」をクリックして「プロファイルの要約」ページに進みます。

Microsoft SQL Server

「データベース構成 - パート 2」ページで Microsoft SQL Server データベースの値を設定した後に、「次へ」をクリックして「データベース構成 - パート 3」ページに進みます。構成が完了したら、「次へ」をクリックして、「プロファイルの要約」ページに進みます。

Oracle このデータベースを使用して新規データベースを作成することはできません。

重要: プロファイルを作成する前に、SYSDBA 特権のあるユーザー ID を取得している必要があります。

「データベース構成 - パート 2」ページで Oracle データベースの値を設定した後に、「次へ」をクリックして「データベース構成 - パート 3」ページに進みます。「データベース構成 - パート 3」ページでの構成が完了したら、「次へ」をクリックして「プロファイルの要約」ページに進みます。

14. 「Business Process Choreographer の構成」で、サンプル Business Process Choreographer 構成を作成するかどうかを選択します。
15. 「プロファイルの要約」ページで、「作成」をクリックしてプロファイルを作成するか、または「戻る」をクリックしてプロファイルの特性を変更します。

構成の進行状況が、「プロファイル構成の進行 (Profile Configuration Progress)」ウィンドウに表示されます。

プロファイルの作成が完了すると、「プロファイル完了 (Profile Complete)」ページに「プロファイル管理ツールにより、プロファイルが正常に作成されました。」というメッセージが表示されます。

重要: プロファイルの作成中にエラーが検出された場合は、正常終了のメッセージの代わりに他のメッセージが表示される可能性があります。その例と意味は次のとおりです。

- 「プロファイル管理ツールによりプロファイルが作成されましたが、エラーが発生しました」：プロファイルの作成が完了したが、エラーが生成されたことを示します。
- 「プロファイル管理ツールでプロファイルを作成できません」：プロファイルの作成が完全に失敗したことを示します。

「プロファイル完了 (Profile complete)」ページには、問題のトラブルシューティングを行うために参照するログ・ファイルが示されます。ファースト・ステップ・コンソールに進むには、「ファースト・ステップ・コンソールの起動」チェック・ボックスにチェック・マークが付けられていることを確認して、「終了」をクリックします。また、別のウィンドウで開いている「プロファイル」ページも閉じてください。ファースト・ステップ・コンソールを使用して、製品資料にアクセスします。

16. SMTP サーバーを手動で構成して、メール通知を使用可能にします。1031 ページの『SMTP サーバーの構成』を参照してください。

「ファースト・ステップ・コンソール」から、先程作成した Process Server スタンドアロン・プロファイルを開始できます。

プロファイル作成時にデータベース・スクリプトを実行しなかった場合は、データベースの作成後に、データベースにシステム情報をロードする必要があります。

関連タスク:

252 ページの『プロファイル管理ツールを使用したスタンドアロン・プロファイルの作成』
プロファイル管理ツールを使用して、スタンドアロン環境のプロファイルを作成できます。スタンドアロン環境は、他のすべてのサーバーから独立して機能し、専用の管理コンソールによって管理されます。

938 ページの『データベースへのシステム情報のロード』
IBM Business Process Manager サーバーの始動または使用を試みる前に、`bootstrapProcessServerData` コマンドを実行する必要があります。

Network Deployment プロファイルの作成

`configureNode` コマンドを使用してデプロイメント環境を作成および構成する場合は、これ以上の構成は不要です。それ以外の場合は、デプロイメント環境を作成する前に、1 つのデプロイメント・マネージャー・プロファイルおよび 1 つ以上のカスタム・プロファイルを作成する必要があります。

プロファイル管理ツールを使用した **Process Center** デプロイメント・マネージャー・プロファイルの作成 :

プロファイル管理ツールを使用して、ネットワーク・デプロイメント構成の **Process Center** デプロイメント・マネージャー・プロファイルを作成することができます。

- 『プロファイルの作成または拡張に関する前提条件』を確認します。
- **Solaris** Solaris オペレーティング・システム上の Motif グラフィカル・ユーザー・インターフェースでプロファイル管理ツールを使用する場合、プロファイル管理ツールのデフォルト・サイズが、すべてのメッセージおよびボタンを表示するには小さすぎる可能性があります。この問題を修正するには、`install_root/.Xdefaults` ファイルに以下の行を追加します。

```
Eclipse*spacing:0
Eclipse*fontList:-misc-fixed-medium-r-normal-*-*-10-100-75-75-c-60-iso8859-1
```

行を追加したら、プロファイル管理ツールを開始する前に次のコマンドを実行します。

```
xrdb -load user_home/.Xdefaults
```

このタスク・トピックで説明する手順は、以下の場合に使用します。

- IBM Business Process Manager Advanced Network Deployment 構成用の *Process Center* デプロイメント・マネージャー・プロファイルを作成する場合。

注: デプロイメント・マネージャー・プロファイルの作成は、Network Deployment 構成を作成するための複数ある処理の中の 1 ステップ です。

Network Deployment 環境構成とは、IBM Business Process Manager Advanced をスタンドアロン以外で構成したものです。

1. プロファイル管理ツールを開始します。

以下のいずれかのコマンドを使用します。

- **Linux** **UNIX** `install_root/bin/ProfileManagement/pmt.sh`
- **Windows** `install_root\bin\ProfileManagement\pmt.bat`

「ようこそ」ページが表示されます。

このツールを開始するためのその他の方法については、『プロファイル管理ツールの開始』を参照してください。

2. 「ようこそ」ページで、「プロファイル管理ツールの起動 (**Launch Profile Management Tool**)」をクリック、または「プロファイル管理ツール」タブを選択します。

「プロファイル」タブが表示されます。

「プロファイル」タブには、マシン上で作成されたプロファイルのリストが表示される場合があります。プロファイル管理ツールを使用して、新規プロファイルを作成するか、既存のプロファイルを拡張することができます。

3. 「プロファイル」タブで、「作成」をクリックします。

「環境の選択」ページが別ウィンドウで開きます。

4. 「環境の選択」ページで、デプロイメント・マネージャー・プロファイルを作成する対象となる IBM Business Process Manager Advanced 構成を見つけ、セクションを展開します。IBM BPM Advanced, Process Center デプロイメント・マネージャー・プロファイルのオプションを選択して、「次へ」をクリックします。

注: WebSphere Application Server プロファイルもこのプロファイル管理ツールで作成できます。ただし、本書では、IBM Business Process Manager プロファイルのみの作成を扱います。

「プロファイル作成オプション」ページが表示されます。

5. 「プロファイル作成オプション」ページで、「拡張」または「標準」のどちらのオプションを使用してデプロイメント・マネージャー・プロファイルを作成するかを決定します。

表 76. デプロイメント・マネージャー・プロファイルに応じたプロファイル作成オプションの選択

選択	目的
<p>高度なプロファイル作成</p>	<ul style="list-style-type: none"> • データベース構成に使用するデータベース設計ファイルを指定します。 • ポート、プロファイルのロケーション、およびプロファイル、ノード、ホスト、セル (該当する場合) の名前にカスタマイズ値を割り当てます。 • 管理コンソールをデプロイします。 • デフォルト・アプリケーション (Snoop、Hello、および HitCount の各サブレットを含む) をデプロイします。 • Web サーバー定義を作成します。 • ご使用のオペレーティング・システムとユーザー・アカウントの特権によってサービスの作成が許可される場合に、サーバーを実行するためのシステム・サービスを作成します。 • Business Space powered by WebSphere を構成します。 <p>注: Business Space powered by WebSphere は、共通データベースで構成されます。</p> <ul style="list-style-type: none"> • ビジネス・ルール・マネージャーを構成し、Business Process Choreographer サンプル構成を作成します。
<p>標準的なプロファイル作成</p>	<p>プロファイル管理ツールによって以下の処理が行われます。</p> <ul style="list-style-type: none"> • ポート、プロファイルのロケーション、およびプロファイル、ノード、ホスト、セルの名前にデフォルト値を割り当てます。 • 管理コンソールをインストールします。 • プロファイルの個人セキュリティ証明書を作成します。 <p>証明書には個人鍵と秘密鍵があり、各鍵のデフォルト値は WebAS です (このパスワードは変更する必要があります)。有効期間は 1 年です。</p> <ul style="list-style-type: none"> • 他の証明書に署名するためのルート署名セキュリティ証明書を作成します。 <p>証明書には個人鍵と秘密鍵があり、各鍵のデフォルト値は WebAS です (このパスワードは変更する必要があります)。有効期間は 15 年です。</p> <ul style="list-style-type: none"> • サーバーを実行するためのシステム・サービスを作成します。 <p>ご使用のオペレーティング・システムとユーザー・アカウントの特権で許可される場合にのみ該当します。</p> <ul style="list-style-type: none"> • サポート対象のデータベース製品のいずれかを選択します。データベース構成は、CommonDB、Process Server データベース、および Performance Data Warehouse データベース用に設定されます。

Process Center デプロイメント・マネージャー・プロファイルが作成されました。

Process Center デプロイメント・マネージャー・プロファイルの構成を実行するために、プロファイル管理ツールの標準または拡張のいずれかのオプションを選択できます。

関連タスク:

269 ページの『プロファイル管理ツールの拡張オプションを使用した Process Center デプロイメント・マネージャー・プロファイルの作成』
 プロファイル管理ツールの拡張オプションを使用して、Network Deployment 構成用の Process Center デプロイメント・マネージャー・プロファイルを作成できます。

277 ページの『プロファイル管理ツールの標準オプションを使用した Process Center デプロイメント・マネージャー・プロファイルの作成』
プロファイル管理ツールの標準オプションを使用して、Network Deployment 構成用の Process Center デプロイメント・マネージャー・プロファイルを作成できます。

プロファイル管理ツールの拡張オプションを使用した Process Center デプロイメント・マネージャー・プロファイルの作成:

プロファイル管理ツールの拡張オプションを使用して、Network Deployment 構成用の Process Center デプロイメント・マネージャー・プロファイルを作成できます。

266 ページの『プロファイル管理ツールを使用した Process Center デプロイメント・マネージャー・プロファイルの作成』に記載されている初期プロファイル作成の手順を完了します。

拡張オプションを使用して、以下のタスクを実行します。

- データベース構成に使用するデータベース設計ファイルを指定します。
- ポート、プロファイルのロケーション、およびプロファイル、ノード、ホスト、セル (該当する場合) の名前にカスタマイズ値を割り当てます。
- 管理コンソールをデプロイします。
- デフォルト・アプリケーション (Snoop、Hello、および HitCount の各サーブレットを含む) をデプロイします。
- Web サーバー定義を作成します。
- ご使用のオペレーティング・システムとユーザー・アカウントの特権によってサービスの作成が許可される場合に、サーバーを実行するためのシステム・サービスを作成します。
- Business Space powered by WebSphere を構成します。

注: Business Space powered by WebSphere は、共通データベースで構成されます。

- ビジネス・ルール・マネージャーを構成し、Business Process Choreographer サンプル構成を作成します。
1. 「オプションのアプリケーション・デプロイメント」ページで、管理コンソールをデプロイするかどうかを選択します。

「次へ」をクリックすると、「プロファイル名およびロケーション」ページが表示されます。

2. 「プロファイル名およびロケーション」ページで、以下のステップを実行します。
 - a. 「プロファイル名」フィールドで固有の名前を指定するか、デフォルト値をそのまま使用します。

作成する各プロファイルに名前を付ける必要があります。複数のプロファイルがある場合は、この名前によって明らかに区別することができます。デフォルト名を使用しない場合は、『複数プロファイル環境のプロファイル・コマンド』を参照して、プロファイルの命名時に考慮する必要のある問題点 (ディレクトリー名の長さ制限など) について確認してください。

- b. 「プロファイル・ディレクトリー」フィールドにプロファイルのディレクトリーを入力するか、「参照...」ボタンを使用してプロファイル・ディレクトリーに移動します。

指定したディレクトリーには、ランタイム環境を定義するファイル (コマンド、構成ファイル、ログ・ファイルなど) が格納されます。デフォルト・ディレクトリーはプラットフォームに応じて異なります。

- **Linux** **UNIX** `install_root/profiles/profile_name`
- **Windows** `install_root¥profiles¥profile_name`

ここで、`profile_name` は指定した名前です。以下の場合、エラー・メッセージが表示されます。

- 指定した `profile_name` が固有ではない。
 - 指定したディレクトリーが空ではない。
 - 使用しているユーザー ID に、このディレクトリーに対する十分な権限がない。
 - プロファイルを作成するための十分なスペースがない。
- c. オプション: 作成しているプロファイルをデフォルト・プロファイルにする場合は、「**デフォルトにするプロファイル**」チェック・ボックスを選択します。

プロファイルがデフォルト・プロファイルに設定されると、コマンドが自動的にこのプロファイル进行处理するようになります。

注: このチェック・ボックスは、既存のプロファイルがご使用のシステムに存在する場合にのみ表示されます。

ワークステーション上に最初に作成するプロファイルが、デフォルト・プロファイルです。

デフォルト・プロファイルは、製品インストール・ルートの `bin` ディレクトリーから実行されるコマンドのデフォルトのターゲットです。ワークステーション上にプロファイルが 1 つしか存在しない場合は、すべてのコマンドがそのプロファイルに基づいて機能します。複数のプロファイルが存在する場合、特定のコマンドでは、コマンドが適用されるプロファイルを指定する必要があります。詳しくは、『複数プロファイル環境のプロファイル・コマンド』を参照してください。

3. 「ノード名、ホスト名、セル名」ページで、作成中のプロファイルに対して以下のアクションを実行します。

- 「**ノード名**」フィールドにノードの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。

ノード名はできるだけ短くしてください。ただし、ノード名は、デプロイメント環境内で固有でなければなりません。命名時に考慮する必要のある予約済みの用語やその他の問題については、『プロファイル、ノード、サーバー、ホスト、およびセルの命名に関する考慮事項』を参照してください。

- 「**ホスト名**」フィールドにホストの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。
- 「**セル名**」フィールドにセルの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。

「次へ」をクリックすると、「管理セキュリティ」ページが表示されます。

4. 「管理セキュリティ」ページで、「**ユーザー名**」、「**パスワード**」、および「**パスワードの確認**」の値を入力します。インストール時に管理者に対して指定されたパスワードが、`tw_admin` および `tw_user` を含むすべての内部ユーザーに使用されます。

注: 初期設定では、「次へ」ボタンは無効に設定されています。管理セキュリティを無効に設定するオプションはないため、ユーザー ID、パスワード、およびパスワードの確認の各項目に値を指定しなければ、「次へ」ボタンは有効になりません。

「次へ」をクリックします。

5. 「セキュリティ証明書 (パート 1)」ページで、新規証明書を作成するか、既存の証明書をインポートするかを指定します。

以下のアクションを実行します。

- 新規デフォルト個人証明書と新規ルート署名証明書を作成するには、「**新規デフォルト個人証明書を作成する (Create a new default personal certificate)**」ラジオ・ボタンと「**新規ルート署名証明書を作成する (Create a new root signing certificate)**」ラジオ・ボタンを選択して、「次へ」をクリックします。
- 既存の証明書をインポートするには、「**既存のデフォルト個人証明書をインポートする (Import an existing default personal certificate)**」ラジオ・ボタンと「**既存のルート署名個人証明書をインポートする (Import an existing root signing personal certificate)**」ラジオ・ボタンを選択して、以下の情報を指定します。
 - 「パス」フィールドに、既存の証明書へのディレクトリー・パスを入力します。
 - 「パスワード」フィールドに、証明書のパスワードを入力します。
 - 「**鍵ストア・タイプ (Keystore type)**」フィールドで、インポートする証明書の鍵ストア・タイプを選択します。
 - 「**鍵ストア別名 (Keystore alias)**」フィールドで、インポートする証明書の鍵ストア別名を選択します。
 - 「次へ」をクリックすると、「セキュリティ証明書 (パート 2)」ページが表示されます。

個人証明書をデフォルトの個人証明書としてインポートする場合は、個人証明書に署名したルート証明書をインポートしてください。そのようにしない場合、プロファイル管理ツールは、個人証明書の署名者を `trust.p12` ファイルに追加します。

6. 「セキュリティ証明書 (パート 2)」ページで、証明書の情報が正しいことを確認し、「次へ」をクリックして「ポート値の割り当て」ページを表示します。

証明書を作成する場合、デフォルト値をそのまま使用するか変更して、新しい証明書を作成します。デフォルトの個人証明書は、デフォルトで 1 年間有効で、ルート署名証明書によって署名されます。ルート署名証明書は、デフォルトで 15 年間有効な自己署名証明書です。ルート署名証明書のデフォルトの鍵ストア・パスワードは、WebAS です。パスワードを変更します。パスワードに 2 バイト文字セット (DBCS) 文字を使用することはできません。PKCS12 などの特定の鍵ストア・タイプは、これらの文字をサポートしないからです。サポートされる鍵ストア・タイプは、`java.security` ファイルのプロバイダーによって異なります。

いずれかの証明書または両方の証明書を作成するか、いずれかの証明書または両方の証明書をインポートすると、以下の鍵ストア・ファイルが作成されます。

- `key.p12`: デフォルトの個人証明書が入っています。
- `trust.p12`: デフォルトのルート証明書の署名者証明書が入っています。
- `root-key.p12`: ルート署名証明書が入っています。
- `default-signers.p12`: サーバーのインストールまたは実行後に作成する新しい鍵ストア・ファイルに追加された署名者証明書が入っています。デフォルトで、デフォルトのルート証明書署名者と、DataPower 署名者証明書は、この鍵ストア・ファイルに入っています。
- `deleted.p12`: 必要に応じて復旧できるように、`deleteKeyStore` タスクで削除された証明書を保持します。
- `ltpa.jceks`: 環境内のサーバーが相互に通信するために使用するサーバーのデフォルトの Lightweight Third-Party Authentication (LTPA) 鍵が入っています。

これらのすべてのファイルのパスワードは、証明書の作成またはインポート時に使用したのと同じパスワード (デフォルトのパスワードか、指定したパスワード) です。

インポートされた証明書が `key.p12` ファイルまたは `root-key.p12` ファイルに追加されます。

証明書をインポートして、その証明書に必要な情報が含まれていない場合は、「戻る」をクリックして、別の証明書をインポートします。

- 「ポート値の割り当て」ページで、プロファイルに指定されたポートが固有であることを確認し、「次へ」をクリックします。

プロファイル管理ツールは、他の WebSphere 製品によって現在使用されているポートを検出し、既存のポート値と競合しない推奨値を表示します。指定されたポートを使用する WebSphere アプリケーション以外のアプリケーションが存在する場合は、ポートが競合しないことを確認してください。「オプションのアプリケーション・デプロイメント」ページで管理コンソールをデプロイしないように選択した場合、「ポート値の割り当て」ページ上で管理コンソール・ポートは使用できません。

以下の条件が満たされた場合には、ポートは使用中であると認識されます。

- ポートが、現在のユーザーが実行したインストールで作成されたプロファイルに割り当てられている。
- ポートが現在使用中である。

「ポート値の割り当て (Port Values Assignment)」ページにアクセスするときにはポートはツールによって検証されますが、続いて表示される「プロファイル管理ツール」ページで行われる選択の結果、依然としてポート競合が発生する可能性があります。ポートは、プロファイルの作成が完了するまで割り当てられません。

ポートの競合が発生していると思われる場合、プロファイルの作成後に調査することができます。以下のファイルを調べて、プロファイルの作成時に使用されたポートを確認します。

- **Linux** **UNIX** `profile_root/properties/portdef.props`
- **Windows** `profile_root\properties\portdef.props`

このファイル内に含まれているものは、ポートの設定で使用されたキーと値です。ポートの競合を発見した場合は、ポートを手動で再度割り当てることができます。ポートを再度割り当てるには、WebSphere Application Server Network Deployment インフォメーション・センターのトピック『既存プロファイル内のポートの更新』を参照してください。このトピックで説明されている `ws_ant` スクリプトを使用して `updatePorts.ant` ファイルを実行します。

次のステップは、ご使用のプラットフォーム、およびインストールを root (管理者) ユーザーで行っているか、非 root ユーザーで行っているかによって異なります。

インストール・タイプ	次のステップ
Linux または Windows プラットフォームで root または管理者グループ特権 を持っている場合	「Linux または Windows サービス定義 (Linux or Windows Service Definition)」ページが表示されます。ステップ 8 に進みます。
それ以外のプラットフォームの場合、または Linux または Windows プラットフォームで非 root ユーザーとして実行している場合	「データベース設計」ページが表示されます。ステップ 9 (273 ページ) に進みます。

- 「サービスの定義」ページで、Windows サービスまたは Linux サービスを使用して IBM Business Process Manager を実行するかどうかを指定します。

Windows Windows プラットフォームにおいて、Windows サービスをインストールする ID に管理者グループ特権が設定されている場合にのみ、「Windows サービスの定義」ページが表示されます。プロファイルが Windows サービスとして構成されている場合、製品は、`startServer` または

startManager コマンドによって開始されるプロセスに対応する Windows サービスを開始します。例えば、サーバーまたはデプロイメント・マネージャーを Windows サービスとして構成し、**startServer** または **startManager** コマンドを実行すると、**wasservice** コマンドは定義されたサービスを開始します。

重要: 特定のユーザー・アカウントを使用してログオンすることを選択した場合、サービスを実行するユーザーのユーザー ID とパスワード、および始動タイプ (デフォルトは「手動」) を指定する必要があります。ユーザー ID の名前にスペースを使用することはできません。また、この ID は管理者グループに属し、拡張ユーザー権限の「サービスとしてログオン」を持っている必要があります。ユーザー ID が管理者グループに属していて、まだ拡張ユーザー権限がない場合は、プロファイル管理ツールにより、ユーザー ID に拡張ユーザー権限が付与されます。

プロファイルの作成時に追加された Windows サービスをプロファイルの削除時に除去できます。

プロファイルを Windows サービスとして実行する場合の IPv6 に関する考慮事項

Windows サービスとして実行するように作成されたプロファイルは、このサービスがローカル・システムとして実行するように構成されている場合、IPv6 の使用時には開始できません。ユーザー固有の環境変数を作成して、IPv6 を使用可能にします。この環境変数はローカル・システム変数ではなくユーザー変数であるため、その特定のユーザーで実行される Windows サービスのみが、この環境変数にアクセスできます。新規プロファイルが Windows サービスとして実行するように作成および構成されている場合、デフォルトでは、このサービスはローカル・システムとして実行するように設定されます。IBM Business Process Manager Windows サービスによって実行が試みられる場合、このサービスは IPv6 が指定されているユーザー環境変数にアクセスできないため、IPv4 として開始を試みます。この場合、サーバーは正常に始動しません。この問題を解決するには、プロファイルの作成時に、IBM Business Process Manager Windows サービスが、ローカル・システムの代わりに IPv6 が指定されている環境変数を定義したユーザー ID と同じユーザー ID で実行されることを指定します。

Linux 「Linux サービスの定義」ページは、現在のオペレーティング・システムがサポート対象バージョンの Linux であり、現在のユーザーに適切な権限がある場合のみ表示されます。

IBM Business Process Manager によって、**startManager** または **startManager** コマンドで開始されたプロセス用の Linux サービスの開始が試みられます。例えば、サーバーまたはデプロイメント・マネージャーを Linux サービスとして構成し、**startServer** または **startManager** コマンドを実行すると、**wasservice** コマンドは定義されたサービスを開始します。

デフォルトでは、IBM Business Process Manager は、Linux サービスとして実行するように選択されません。

このサービスを作成するためには、プロファイル管理ツールを実行するユーザーは root ユーザーでなければなりません。プロファイル管理ツールを root 以外のユーザー ID で実行している場合は、「Linux サービスの定義」ページは表示されないため、サービスも作成されません。

サービスの実行に使用されるユーザー名を指定する必要があります。

Linux サービスを削除するためには、ユーザーが root ユーザーであるか、またはこのサービスを削除するための適切な特権を持っている必要があります。それ以外の場合は、root ユーザーがこのユーザーの代わりにサービスを削除するために実行できる除去スクリプトが作成されます。

9. 設計ファイルを使用してデータベースを構成します。

a. 「データベース設計ファイルの使用 (Use a database design file)」を選択します。

- b. 「参照」をクリックします。
- c. 設計ファイルの完全修飾パス名を選択します。
- d. データベース・スクリプトを自動で (プロファイル作成プロセスの一部として) 実行する場合は、「データベース・スクリプトを実行してデータベース表を作成する」を選択します。このチェック・ボックスを選択しない場合、プロファイル作成の完了後に、ユーザー自身またはデータベース管理者がスクリプトを手動で実行できます。

重要: 「データベース・スクリプトを実行してデータベース表を作成する」を選択する場合は、「既存のローカル・データベースまたはリモート・データベースを使用する」を選択しないようにしてください。両方のオプションを選択すると、エラーが発生します。

- e. 「次へ」をクリックします。

設計ファイルを指定することを選択すると、プロファイル管理ツールのデータベース構成パネルはスキップされます。代わりに、データベースの構成を完了するために、設計ファイルの場所がコマンド行に渡されます。データベース構成用の設計ファイルの使用については、922 ページの『データベース設計ツールを使用したデータベース設計ファイルの作成』を参照してください。

- 10. 「データベース構成」ページで、以下のアクションを実行します。
 - 「データベース製品の選択 (Select a database product)」ドロップダウン・リストから、プロファイルで使用されるデータベース製品を選択します。
 - データベース表の作成に使用する SQL スクリプトを書き込むディレクトリーを設定する場合は、「データベース・スクリプトのデフォルト出力ディレクトリーをオーバーライドする」チェック・ボックスを選択します。

このチェック・ボックスを選択しない場合、スクリプトはデフォルト・ディレクトリーに出力されます。

- 「新規ローカル・データベースの作成」または「既存のローカルまたはリモート・データベースの使用 (Use an existing local or remote database)」を選択します。

データベース製品として DB2 を選択した場合は、新規データベースの作成を選択できます。DB2 はソフトウェアに組み込まれているため、プロファイル管理ツールにより新規 DB2 データベースが作成されます。

このソフトウェアとともに使用しているデータベース製品がすでにある場合は、「既存のローカルまたはリモート・データベースを使用する (Use an existing local or remote database)」を選択します。

- 「共通データベース名」フィールドで、共通データベースの名前を入力するか、デフォルトの **CMNDB** 値を受け入れます。
- データベース・スクリプトが自動的に実行されるようにするには (プロファイル作成処理の一環として)、「データベース・スクリプトを実行してデータベース表を作成する」を選択します。「データベース・スクリプトを実行してデータベース表を作成する」を選択しない場合、プロファイル作成の完了後に、ユーザー自身またはデータベース管理者がスクリプトを手動で実行できます。

重要:

- 「既存のローカル・データベースまたはリモート・データベースを使用する」を選択したときに表が既に存在している場合は、「データベース・スクリプトを実行してデータベース表を作成する」が選択されていないことを確認してください。両方のオプションが選択されていると、エラーが発生してプロファイルの作成が失敗します。
 - 「データベース・スクリプトを実行してデータベース表を作成する」を選択して、Oracle または DB2 for z/OS を構成する場合は、プロファイル管理ツールがデータベース・システムにアクセスして表を作成する必要があります。プロファイル管理ツールがデータベース・システムに接続して表を作成できない場合は、データベースの妥当性検査エラーがスローされます。
11. 「データベース構成 - パート 2」ページで、選択したデータベースの構成を完了します。各必須フィールドについて詳しくは、『プロファイル管理ツール構成のデータベース構成フィールド』を参照してください。

以下のデータベースのパラメーターを構成できます。

DB2 「データベース構成 - パート 2」ページで DB2 データベースの値を設定した後に、「次へ」をクリックして「プロファイルの要約」ページに進みます。

DB2 Universal Database for z/OS

DB2 Universal Database for z/OS を使用して新規データベースを作成することはできません。Performance Data Warehouse データベースが存在している必要があります。スタンドアロン・サーバー・プロファイルの場合は Process Server データベースも必要です。「データベース構成 - パート 2」ページで DB2 Universal Database for z/OS の値を設定した後に、「次へ」をクリックして「プロファイルの要約」ページに進みます。

Microsoft SQL Server

「データベース構成 - パート 2」ページで Microsoft SQL Server データベースの値を設定した後に、「次へ」をクリックして「データベース構成 - パート 3」ページに進みます。(「Windows 認証を適用」オプションを選択した場合は、このページは表示されません。)構成が完了したら、「次へ」をクリックして、「プロファイルの要約」ページに進みます。

Oracle このデータベースを使用して新規データベースを作成することはできません。

重要: プロファイルを作成する前に、SYSDBA 特権のあるユーザー ID を取得している必要があります。

「データベース構成 - パート 2」ページで Oracle データベースの値を設定した後に、「次へ」をクリックして「データベース構成 - パート 3」ページに進みます。「データベース構成 - パート 3」ページでの構成が完了したら、「次へ」をクリックして「プロファイルの要約」ページに進みます。

12. 「プロファイルの要約」ページで、「作成」をクリックしてプロファイルを作成するか、または「戻る」をクリックしてプロファイルの特性を変更します。

構成の進行状況が、「プロファイル構成の進行 (Profile Configuration Progress)」ウィンドウに表示されます。

プロファイルの作成が完了すると、「プロファイル完了 (Profile Complete)」ページに「プロファイル管理ツールにより、プロファイルが正常に作成されました。」というメッセージが表示されます。

重要: プロファイルの作成中にエラーが検出された場合は、正常終了のメッセージの代わりに他のメッセージが表示される可能性があります。その例と意味は次のとおりです。

- 「プロファイル管理ツールによりプロファイルが作成されましたが、エラーが発生しました」：プロファイルの作成が完了したが、エラーが生成されたことを示します。
- 「プロファイル管理ツールでプロファイルを作成できません」：プロファイルの作成が完全に失敗したことを示します。

「プロファイル完了 (Profile complete)」ページには、問題のトラブルシューティングを行うために参照するログ・ファイルが示されます。ファースト・ステップ・コンソールに進むには、「ファースト・ステップ・コンソールの起動」チェック・ボックスにチェック・マークが付けられていることを確認して、「終了」をクリックします。また、別のウィンドウで開いている「プロファイル」ページも閉じてください。ファースト・ステップ・コンソールを使用して、製品資料にアクセスします。

13. SMTP サーバーを手動で構成して、メール通知を使用可能にします。詳しくは、1031 ページの『SMTP サーバーの構成』を参照してください。

Process Center デプロイメント・マネージャー・プロファイルが作成されました。

デプロイメント・マネージャーで管理するカスタム (管理対象ノード) プロファイルを追加したら、クラスターを構築し、それらのクラスター上でコンポーネントを構成することができます。

Network Deployment 環境で構成に使用可能なコンポーネントは、ご使用のシステムにインストールされている IBM Business Process Manager Advanced (拡張または標準) によって異なります。

クラスターを構築し、Network Deployment 構成用に IBM Business Process Manager Advanced コンポーネントを構成できます。

関連概念:

951 ページの『デプロイメント環境ウィザードを使用した Network Deployment 環境の構成』
カスタム・インストールを実行し、デプロイメント・マネージャー・プロファイルおよびカスタム (管理対象ノード) プロファイルを作成した後に、Network Deployment 構成を作成できます。

969 ページの『管理コンソールを使用した Network Deployment 環境の構成』
カスタム・インストールを実行し、デプロイメント・マネージャー・プロファイルおよびカスタム (管理対象ノード) プロファイルを作成した後で、管理コンソールを使用して Network Deployment 環境を作成できます。

関連タスク:

266 ページの『プロファイル管理ツールを使用した Process Center デプロイメント・マネージャー・プロファイルの作成』

プロファイル管理ツールを使用して、ネットワーク・デプロイメント構成の Process Center デプロイメント・マネージャー・プロファイルを作成することができます。

938 ページの『データベースへのシステム情報のロード』

IBM Business Process Manager サーバーの始動または使用を試みる前に、`bootstrapProcessServerData` コマンドを実行する必要があります。

関連資料:

893 ページの『プロファイル管理ツール構成のデータベース構成フィールド』
スタンドアロン環境のプロファイルを作成するには、データベース情報が必要です。必要な情報は、使用するデータベースによって異なります。

プロファイル管理ツールの標準オプションを使用した Process Center デプロイメント・マネージャー・プロファイルの作成:

プロファイル管理ツールの標準オプションを使用して、Network Deployment 構成用の Process Center デプロイメント・マネージャー・プロファイルを作成できます。

266 ページの『プロファイル管理ツールを使用した Process Center デプロイメント・マネージャー・プロファイルの作成』に記載されている初期プロファイル作成の手順を完了します。

プロファイル管理ツールで以下のタスクを実行する場合は、標準オプションを使用します。

- ポート、プロファイルのロケーション、およびプロファイル、ノード、ホスト、セルの名前にデフォルト値を割り当てます。
- 管理コンソールをインストールします。
- プロファイルの個人セキュリティ証明書を作成します。

証明書には個人鍵と秘密鍵があり、各鍵のデフォルト値は WebAS です (このパスワードは変更する必要があります)。有効期間は 1 年です。

- 他の証明書に署名するためのルート署名セキュリティ証明書を作成します。

証明書には個人鍵と秘密鍵があり、各鍵のデフォルト値は WebAS です (このパスワードは変更する必要があります)。有効期間は 15 年です。

- サーバーを実行するためのシステム・サービスを作成します。

ご使用のオペレーティング・システムとユーザー・アカウントの特権で許可される場合にのみ該当します。

- サポート対象のデータベース製品のいずれかを選択します。データベース構成は、CommonDB、Process Server データベース、および Performance Data Warehouse データベース用に設定されます。
1. 「管理セキュリティ」ページで、「ユーザー名」、「パスワード」、および「パスワードの確認」の値を入力します。インストール時に管理者に対して指定されたパスワードが、tw_admin および tw_user を含むすべての内部ユーザーに使用されます。

注: 初期設定では、「次へ」ボタンは無効に設定されています。管理セキュリティを無効に設定するオプションはないため、ユーザー ID、パスワード、およびパスワードの確認の各項目に値を指定しなければ、「次へ」ボタンは有効になりません。

「次へ」をクリックします。

2. 「データベース構成」ページで、以下のアクションを実行します。
 - 「データベース製品の選択 (Select a database product)」ドロップダウン・リストから、プロファイルで使用されるデータベース製品を選択します。
 - データベース表の作成に使用する SQL スクリプトを書き込むディレクトリーを設定する場合は、「データベース・スクリプトのデフォルト出力ディレクトリーをオーバーライドする」チェック・ボックスを選択します。

このチェック・ボックスを選択しない場合、スクリプトはデフォルト・ディレクトリーに出力されます。

- 「新規ローカル・データベースの作成」または「既存のローカルまたはリモート・データベースの使用 (Use an existing local or remote database)」を選択します。

データベース製品として DB2 を選択した場合は、新規データベースの作成を選択できます。DB2 はソフトウェアに組み込まれているため、プロファイル管理ツールにより新規 DB2 データベースが作成されます。

このソフトウェアとともに使用しているデータベース製品がすでにある場合は、「既存のローカルまたはリモート・データベースを使用する (Use an existing local or remote database)」を選択します。

- 「共通データベース名」フィールドで、共通データベースの名前を入力するか、デフォルトの **CMNDB** 値を受け入れます。
- データベース・スクリプトが自動的に実行されるようにするには (プロファイル作成処理の一環として)、「データベース・スクリプトを実行してデータベース表を作成する」を選択します。「データベース・スクリプトを実行してデータベース表を作成する」を選択しない場合、プロファイル作成の完了後に、ユーザー自身またはデータベース管理者がスクリプトを手動で実行できます。

重要:

- 「既存のローカル・データベースまたはリモート・データベースを使用する」を選択したときに表が既に存在している場合は、「データベース・スクリプトを実行してデータベース表を作成する」が選択されていないことを確認してください。両方のオプションが選択されていると、エラーが発生してプロファイルの作成が失敗します。
- 「データベース・スクリプトを実行してデータベース表を作成する」を選択して、Oracle または DB2 for z/OS を構成する場合は、プロファイル管理ツールがデータベース・システムにアクセスして表を作成する必要があります。プロファイル管理ツールがデータベース・システムに接続して表を作成できない場合は、データベースの妥当性検査エラーがスローされます。

3. 「データベース構成 - パート 2」ページで、選択したデータベースの構成を完了します。各必須フィールドについて詳しくは、『プロファイル管理ツール構成のデータベース構成フィールド』を参照してください。

以下のデータベースのパラメーターを構成できます。

DB2 「データベース構成 - パート 2」ページで DB2 データベースの値を設定した後に、「次へ」をクリックして「プロファイルの要約」ページに進みます。

DB2 Universal Database for z/OS

DB2 Universal Database for z/OS を使用して新規データベースを作成することはできません。Performance Data Warehouse データベースが存在している必要があり、スタンドアロン・サーバー・プロファイルの場合は Process Server データベースも必要です。「データベース構成 - パート 2」ページで DB2 Universal Database for z/OS の値を設定した後に、「次へ」をクリックして「プロファイルの要約」ページに進みます。

Microsoft SQL Server

「データベース構成 - パート 2」ページで Microsoft SQL Server データベースの値を設定した後に、「次へ」をクリックして「データベース構成 - パート 3」ページに進みます。
(「**Windows 認証を適用**」オプションを選択した場合は、このページは表示されません。)構成が完了したら、「次へ」をクリックして、「プロファイルの要約」ページに進みます。

Oracle このデータベースを使用して新規データベースを作成することはできません。

重要: プロファイルを作成する前に、SYSDBA 特権のあるユーザー ID を取得している必要があります。

「データベース構成 - パート 2」ページで Oracle データベースの値を設定した後に、「次

へ」をクリックして「データベース構成 - パート 3」ページに進みます。「データベース構成 - パート 3」ページでの構成が完了したら、「次へ」をクリックして「プロファイルの要約」ページに進みます。

4. 「プロファイルの要約」ページで、「作成」をクリックしてプロファイルを作成するか、または「戻る」をクリックしてプロファイルの特性を変更します。

構成の進行状況が、「プロファイル構成の進行 (Profile Configuration Progress)」ウィンドウに表示されます。

プロファイルの作成が完了すると、「プロファイル完了 (Profile Complete)」ページに「プロファイル管理ツールにより、プロファイルが正常に作成されました。」というメッセージが表示されます。

重要: プロファイルの作成中にエラーが検出された場合は、正常終了のメッセージの代わりに他のメッセージが表示される可能性があります。その例と意味は次のとおりです。

- 「プロファイル管理ツールによりプロファイルが作成されましたが、エラーが発生しました」：プロファイルの作成が完了したが、エラーが生成されたことを示します。
- 「プロファイル管理ツールでプロファイルを作成できません」：プロファイルの作成が完全に失敗したことを示します。

「プロファイル完了 (Profile complete)」ページには、問題のトラブルシューティングを行うために参照するログ・ファイルが示されます。ファースト・ステップ・コンソールに進むには、「ファースト・ステップ・コンソールの起動」チェック・ボックスにチェック・マークが付けられていることを確認して、「終了」をクリックします。また、別のウィンドウで開いている「プロファイル」ページも閉じてください。ファースト・ステップ・コンソールを使用して、製品資料にアクセスします。

Process Center デプロイメント・マネージャー・プロファイルが作成されました。

デプロイメント・マネージャーで管理するカスタム (管理対象ノード) プロファイルを追加したら、クラスターを構築し、それらのクラスター上でコンポーネントを構成することができます。

Network Deployment 環境で構成に使用可能なコンポーネントは、ご使用のシステムにインストールされている IBM Business Process Manager Advanced (拡張または標準) によって異なります。

クラスターを構築し、Network Deployment 構成用に IBM Business Process Manager Advanced コンポーネントを構成できます。

関連概念:

951 ページの『デプロイメント環境ウィザードを使用した Network Deployment 環境の構成』
カスタム・インストールを実行し、デプロイメント・マネージャー・プロファイルおよびカスタム (管理対象ノード) プロファイルを作成した後に、Network Deployment 構成を作成できます。

969 ページの『管理コンソールを使用した Network Deployment 環境の構成』
カスタム・インストールを実行し、デプロイメント・マネージャー・プロファイルおよびカスタム (管理対象ノード) プロファイルを作成した後で、管理コンソールを使用して Network Deployment 環境を作成できます。

関連タスク:

266 ページの『プロファイル管理ツールを使用した Process Center デプロイメント・マネージャー・プロファイルの作成』

プロファイル管理ツールを使用して、ネットワーク・デプロイメント構成の Process Center デプロイメント・マネージャー・プロファイルを作成することができます。

938 ページの『データベースへのシステム情報のロード』

IBM Business Process Manager サーバーの始動または使用を試みる前に、`bootstrapProcessServerData` コマンドを実行する必要があります。

関連資料:

893 ページの『プロファイル管理ツール構成のデータベース構成フィールド』

スタンドアロン環境のプロファイルを作成するには、データベース情報が必要です。必要な情報は、使用するデータベースによって異なります。

プロファイル管理ツールを使用した **Process Center** カスタム・プロファイル (管理対象ノード) の作成:

プロファイル管理ツールを使用して、**Network Deployment** 構成用の **Process Center** カスタム・プロファイル (管理対象ノード) を作成および構成することができます。

- **Process Center** 用のデプロイメント・マネージャー・プロファイルが作成済みであること。
- データベース構成スクリプトの実行により共通データベースと表が作成されていること。
- デプロイメント・マネージャーが実行されていること。

このタスク・トピックで説明する手順は、以下の場合に使用します。

- **IBM Business Process Manager Advanced Network Deployment** 構成用の *Process Center* カスタム・プロファイル (管理対象ノード) を作成する場合。

注: プロセス・センターのみ、またはプロセス・サーバーのみに適用する情報については、この手順でそのように注記しています。

このトピックでは、カスタム・プロファイル (管理対象ノード) を作成するための「標準」および「拡張」の両方の方法について説明します。

ノードは、作成プロセス時に既存のデプロイメント・マネージャーに統合することができますし、後で `addNode` コマンドを使用して統合することもできます。プロファイルを作成プロセス時に統合することを決定した場合は、このツールによって共通データベースの構成がデプロイメント・マネージャーと同じデータベースに設定されます。統合しないことを決定した場合は、データベースは未構成のままになります。

1. プロファイル管理ツールを開始します。

以下のいずれかのコマンドを使用します。

- **Linux** **UNIX** `install_root/bin/ProfileManagement/pmt.sh`
- **Windows** `install_root¥bin¥ProfileManagement¥pmt.bat`

「ようこそ」ページが表示されます。

2. 「ようこそ」ページで、「**プロファイル管理ツールの起動 (Launch Profile Management Tool)**」をクリック、または「**プロファイル管理ツール**」タブを選択します。

「**プロファイル**」タブが表示されます。

「**プロファイル**」タブには、マシン上で作成されたプロファイルのリストが表示される場合があります。プロファイル管理ツールを使用して、新規プロファイルを作成するか、既存のプロファイルを拡張することができます。

3. 「**プロファイル**」タブで、「**作成**」をクリックします。

「環境の選択」ページが別ウィンドウで開きます。

4. 「環境の選択」ページで、カスタム・プロファイルを作成中でセクションを拡張する対象の IBM Business Process Manager 構成 (高度または標準) を見つけます。カスタム・プロファイルのオプションを選択して、「次へ」をクリックします。

注: WebSphere Application Server プロファイルもこのプロファイル管理ツールで作成できます。ただし、本書では、IBM Business Process Manager プロファイルの作成のみを扱います。

「プロファイル作成オプション」ページが表示されます。

5. 「プロファイル作成オプション」ページで、「拡張」または「標準」のいずれかのオプションを使用してカスタム・プロファイルを作成するかどうかを決定します。

表 77. カスタム・プロファイルに応じたプロファイル作成オプションの選択

選択	目的
高度なプロファイル作成	<p>以下のアクションを実行します。</p> <ul style="list-style-type: none"> • データベース構成に使用するデータベース設計ファイルを指定します。 • ポート、プロファイルのロケーション、およびプロファイル、ノード、ホスト、セル (該当する場合) の名前にカスタマイズ値を割り当てます。 • 管理コンソールをデプロイします。 • デフォルト・アプリケーション (Snoop、Hello、および HitCount の各サーブレットを含む) をデプロイします。 • Web サーバー定義を作成します。 • ご使用のオペレーティング・システムとユーザー・アカウントの特権によってサービスの作成が許可される場合に、サーバーを実行するためのシステム・サービスを作成します。 • Business Space powered by WebSphere を構成します。 <p>注: Business Space powered by WebSphere は、共通データベースで構成されます。</p> <ul style="list-style-type: none"> • ビジネス・ルール・マネージャーを構成し、Business Process Choreographer サンプル構成を作成します。
標準的なプロファイル作成	<p>プロファイル管理ツールによって、以下のアクションを実行します。</p> <ul style="list-style-type: none"> • ポート、プロファイルのロケーション、およびプロファイル、ノード、ホスト、セルの名前にデフォルト値を割り当てます。 • 管理コンソールをインストールします。 • プロファイルの個人セキュリティー証明書を作成します。 <p>証明書には個人鍵と秘密鍵があり、各鍵のデフォルト値は WebAS です (このパスワードは変更する必要があります)。有効期間は 1 年です。</p> <ul style="list-style-type: none"> • 他の証明書に署名するためのルート署名セキュリティー証明書を作成します。 <p>証明書には個人鍵と秘密鍵があり、各鍵のデフォルト値は WebAS です (このパスワードは変更する必要があります)。有効期間は 15 年です。</p> <ul style="list-style-type: none"> • サーバーを実行するためのシステム・サービスを作成します。 <p>ご使用のオペレーティング・システムとユーザー・アカウントの特権で許可される場合のみ該当します。</p> <ul style="list-style-type: none"> • サポート対象のデータベース製品のいずれかを選択します。データベース構成は、CommonDB、Process Server データベース、および Performance Data Warehouse データベース用に設定されます。

プロファイル管理ツールを使用して、Process Center カスタム・プロファイル (管理対象ノード) の構成を実行するために、標準または拡張のいずれかのオプションを選択できます。

関連タスク:

『プロファイル管理ツールの拡張オプションを使用した Process Center カスタム・プロファイルの作成』
プロファイル管理ツールの拡張オプションを使用して、Network Deployment 構成用の Process Center カスタム・プロファイル (管理対象ノード) を作成および構成します。

286 ページの『プロファイル管理ツールの標準オプションを使用した Process Center カスタム・プロファイルの作成』

プロファイル管理ツールの標準オプションを使用して、Network Deployment 構成用の Process Center カスタム・プロファイル (管理対象ノード) を作成および構成します。

プロファイル管理ツールの拡張オプションを使用した Process Center カスタム・プロファイルの作成:

プロファイル管理ツールの拡張オプションを使用して、Network Deployment 構成用の Process Center カスタム・プロファイル (管理対象ノード) を作成および構成します。

280 ページの『プロファイル管理ツールを使用した Process Center カスタム・プロファイル (管理対象ノード) の作成』に記載されている初期プロファイル作成の手順を完了します。

以下のアクションを実行する場合は、拡張オプションを使用します。

- データベース構成に使用するデータベース設計ファイルを指定します。
- ポート、プロファイルのロケーション、およびプロファイル、ノード、ホスト、セル (該当する場合) の名前にカスタマイズ値を割り当てます。
- 管理コンソールをデプロイします。
- デフォルト・アプリケーション (Snoop、Hello、および HitCount の各サブレットを含む) をデプロイします。
- Web サーバー定義を作成します。
- ご使用のオペレーティング・システムとユーザー・アカウントの特権によってサービスの作成が許可される場合に、サーバーを実行するためのシステム・サービスを作成します。
- Business Space powered by WebSphere を構成します。

注: Business Space powered by WebSphere は、共通データベースで構成されます。

- ビジネス・ルール・マネージャーを構成し、Business Process Choreographer サンプル構成を作成します。

1. 「プロファイル名およびロケーション」ページで、以下のステップを実行します。

- a. 「**プロファイル名**」フィールドで固有の名前を指定するか、デフォルト値をそのまま使用します。

作成する各プロファイルに名前を付ける必要があります。複数のプロファイルがある場合は、この名前によって明らかに区別することができます。デフォルト名を使用しない場合は、『複数プロファイル環境のプロファイル・コマンド』を参照して、プロファイルの命名時に考慮する必要のある問題点 (ディレクトリー名の長さ制限など) について確認してください。

- b. 「**プロファイル**」フィールドで、プロファイルのディレクトリーを入力するか、「**参照...**」ボタンを使用して目的のプロファイル・ディレクトリーに進みます。

指定したディレクトリーには、ランタイム環境を定義するファイル (コマンド、構成ファイル、ログ・ファイルなど) が格納されます。デフォルト・ディレクトリーは、プラットフォームに依存しています。

- **Linux** **UNIX** `install_root/profiles/profile_name`
- **Windows** `install_root¥profiles¥profile_name`

ここで、`profile_name` は指定した名前です。以下の場合は、エラー・メッセージが表示されます。

- 指定した `profile_name` が固有ではない。
 - 指定したディレクトリーが空ではない。
 - 使用しているユーザー ID に、このディレクトリーに対する十分な権限がない。
 - プロファイルを作成するための十分なスペースがない。
- c. オプション: 作成しているプロファイルをデフォルト・プロファイルにする場合は、「**デフォルトにするプロファイル**」チェック・ボックスを選択します。

プロファイルがデフォルト・プロファイルに設定されると、コマンドが自動的にこのプロファイル进行处理するようになります。

注: このチェック・ボックスは、既存のプロファイルがご使用のシステムに存在する場合にのみ表示されます。

ワークステーション上に最初に作成するプロファイルが、デフォルト・プロファイルです。

デフォルト・プロファイルは、製品インストール・ルートの `bin` ディレクトリーから実行されるコマンドのデフォルトのターゲットです。ワークステーション上にプロファイルが 1 つしか存在しない場合は、すべてのコマンドがそのプロファイルに基づいて機能します。複数のプロファイルが存在する場合、特定のコマンドでは、コマンドが適用されるプロファイルを指定する必要があります。詳しくは、『複数プロファイル環境のプロファイル・コマンド』を参照してください。

- d. 「次へ」をクリックします。

注: 「戻る」をクリックしてプロファイル名を変更した場合、このページが再表示されたときに、このページで手動で名前を変更しなければならないことがあります。

2. 「ノード名およびホスト名」ページで、作成するプロファイルに対して次の措置を行います。
- 「ノード名」フィールドにノードの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。

ノード名はできるだけ短くしてください。ただし、ノード名は、デプロイメント環境内で固有でなければなりません。命名時に考慮する必要のある予約済みの用語やその他の問題については、『プロファイル、ノード、サーバー、ホスト、およびセルの命名に関する考慮事項』を参照してください。

- 「ホスト名」フィールドにホストの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。

「次へ」をクリックすると、「フェデレーション」ページが表示されます。

3. 「フェデレーション」ページで、ノードのデプロイメント・マネージャーへの統合をプロファイルの作成の一部としてここで実行するか、またはプロファイルの作成とは別に後で実行するかを選択します。プロファイル作成の一部としてノードを統合することを選択した場合は、デプロイメント・マネージャーのホスト名または IP アドレスと SOAP ポート番号、および認証ユーザー ID とパスワード (デプロイメント・マネージャーでの認証に使用する場合) を指定します。

重要:

以下の状況のいずれかに該当する場合は、「後でこのノードを統合する」にチェック・マークを付けます。

- このカスタム・ノードをマイグレーション・ターゲットとして使用する予定がある。

- 別のプロファイルが統合されている (ノードの統合はシリアルライズする必要があります)。
- デプロイメント・マネージャーが実行中でない、またはそれが確実に実行中であるかどうか不明である。
- デプロイメント・マネージャーで SOAP コネクタが使用不可である。
- そのデプロイメント・マネージャーは、まだ IBM Business Process Manager デプロイメント・マネージャーに拡張されていない。
- デプロイメント・マネージャーが、作成するプロファイルと同じか、それより高いリリース・レベルではない。
- デプロイメント・マネージャーで、JMX 管理ポートが有効になっていない。
- デプロイメント・マネージャーが、優先 Java Management Extensions (JMX) コネクタとして、デフォルトでないリモート・メソッド呼び出し (RMI) を使用するように再構成されている。(優先コネクタ・タイプを確認するには、デプロイメント・マネージャーの管理コンソールで「システム管理 (System administration)」>「デプロイメント・マネージャー (Deployment manager)」>「管理サービス (Administration services)」を選択します。)

カスタム・プロファイル作成の一部としてのノード統合に関連する処理

- プロファイル管理ツールによって、デプロイメント・マネージャーが存在していて通信可能であること、および認証ユーザー ID とパスワードがそのデプロイメント・マネージャーで有効であること (デプロイメント・マネージャーがセキュリティーで保護されている場合) が検査されます。
- デプロイメント・マネージャーが実行中でないとき、またはほかの理由でデプロイメント・マネージャーを使用できないときに、カスタム・ノードを統合しようとする、警告ボックスが表示されて、続行できなくなります。この警告ボックスが表示されたら、「OK」をクリックしてこの警告パネルを終了し、「フェデレーション」ページで別の選択を行ってください。

「次へ」をクリックして先に進みます。

4. 「セキュリティー証明書 (パート 1)」ページで、新規証明書を作成するか、既存の証明書をインポートするかを指定します。

以下のアクションを実行します。

- 新規デフォルト個人証明書と新規ルート署名証明書を作成するには、「**新規デフォルト個人証明書を作成する (Create a new default personal certificate)**」ラジオ・ボタンと「**新規ルート署名証明書を作成する (Create a new root signing certificate)**」ラジオ・ボタンを選択して、「次へ」をクリックします。
- 既存の証明書をインポートするには、「**既存のデフォルト個人証明書をインポートする (Import an existing default personal certificate)**」ラジオ・ボタンと「**既存のルート署名個人証明書をインポートする (Import an existing root signing personal certificate)**」ラジオ・ボタンを選択して、以下の情報を指定します。
 - 「パス」フィールドに、既存の証明書へのディレクトリー・パスを入力します。
 - 「パスワード」フィールドに、証明書のパスワードを入力します。
 - 「**鍵ストア・タイプ (Keystore type)**」フィールドで、インポートする証明書の鍵ストア・タイプを選択します。
 - 「**鍵ストア別名 (Keystore alias)**」フィールドで、インポートする証明書の鍵ストア別名を選択します。
 - 「次へ」をクリックすると、「セキュリティー証明書 (パート 2)」ページが表示されます。

個人証明書をデフォルトの個人証明書としてインポートする場合は、個人証明書に署名したルート証明書をインポートしてください。そのようにしない場合、プロファイル管理ツールは、個人証明書の署名者を `trust.p12` ファイルに追加します。

5. 「セキュリティー証明書 (パート 2)」ページで、証明書の情報が正しいことを確認し、「次へ」をクリックして「ポート値の割り当て」ページを表示します。

証明書を作成する場合、デフォルト値をそのまま使用するか変更して、新しい証明書を作成します。デフォルトの個人証明書は、デフォルトで 1 年間有効で、ルート署名証明書によって署名されます。ルート署名証明書は、デフォルトで 15 年間有効な自己署名証明書です。ルート署名証明書のデフォルトの鍵ストア・パスワードは、`WebAS` です。パスワードを変更します。パスワードに 2 バイト文字セット (DBCS) 文字を使用することはできません。PKCS12 などの特定の鍵ストア・タイプは、これらの文字をサポートしないからです。サポートされる鍵ストア・タイプは、`java.security` ファイルのプロバイダーによって異なります。

いずれかの証明書または両方の証明書を作成するか、いずれかの証明書または両方の証明書をインポートすると、以下の鍵ストア・ファイルが作成されます。

- `key.p12`: デフォルトの個人証明書が入っています。
- `trust.p12`: デフォルトのルート証明書の署名者証明書が入っています。
- `root-key.p12`: ルート署名証明書が入っています。
- `default-signers.p12`: サーバーのインストールまたは実行後に作成する新しい鍵ストア・ファイルに追加された署名者証明書が入っています。デフォルトで、デフォルトのルート証明書署名者と、DataPower 署名者証明書は、この鍵ストア・ファイルに入っています。
- `deleted.p12`: 必要に応じて復旧できるように、`deleteKeyStore` タスクで削除された証明書を保持します。
- `ltpa.jceks`: 環境内のサーバーが相互に通信するために使用するサーバーのデフォルトの Lightweight Third-Party Authentication (LTPA) 鍵が入っています。

これらのすべてのファイルのパスワードは、証明書の作成またはインポート時に使用したのと同じパスワード (デフォルトのパスワードか、指定したパスワード) です。

インポートされた証明書が `key.p12` ファイルまたは `root-key.p12` ファイルに追加されます。

証明書をインポートして、その証明書に必要な情報が含まれていない場合は、「戻る」をクリックして、別の証明書をインポートします。

6. 「データベース構成」ページで、データベース製品を選択し、デプロイメント・マネージャーの共通データベース構成と一致するように JDBC ドライバーのクラスパス・ファイルのロケーションを設定します。
7. 「プロファイルの要約」ページで、「作成」をクリックしてプロファイルを作成するか、または「戻る」をクリックしてプロファイルの特性を変更します。

構成の進行状況が、「プロファイル構成の進行 (Profile Configuration Progress)」ウィンドウに表示されます。

プロファイルの作成が完了すると、「プロファイル完了 (Profile Complete)」ページに「プロファイル管理ツールにより、プロファイルが正常に作成されました。」というメッセージが表示されます。

重要: プロファイルの作成中にエラーが検出された場合は、正常終了のメッセージの代わりに他のメッセージが表示される可能性があります。その例と意味は次のとおりです。

- 「プロファイル管理ツールによりプロファイルが作成されましたが、エラーが発生しました」：プロファイルの作成が完了したが、エラーが生成されたことを示します。
- 「プロファイル管理ツールでプロファイルを作成できません」：プロファイルの作成が完全に失敗したことを示します。

「プロファイル完了 (Profile complete)」ページには、問題のトラブルシューティングを行うために参照するログ・ファイルが示されます。ファースト・ステップ・コンソールに進むには、「ファースト・ステップ・コンソールの起動」チェック・ボックスにチェック・マークが付けられていることを確認して、「終了」をクリックします。また、別のウィンドウで開いている「プロファイル」ページも閉じてください。ファースト・ステップ・コンソールを使用して、製品資料にアクセスします。

8. SMTP サーバーを手動で構成して、メール通知を使用可能にします。1031 ページの『SMTP サーバーの構成』を参照してください。

IBM Business Process Manager または WebSphere Enterprise Service Bus のプロファイルが作成されました。

プロファイル内のノードを統合し、管理コンソールを使用してそのノードをカスタマイズするまでは、そのノードは空です。

デプロイメント環境で、データベースを作成して構成し、他のカスタム・プロファイルを作成してそれをご使用のデプロイメント・マネージャーに統合し、サーバーを作成し、ワークロード管理機能が必要な場合はクラスターを作成し、さらに計画したインストール環境に固有のその他のタスクを実行する必要があります。計画した環境では、実行が必要なタスク、およびその実行順序を指示します。

関連タスク:

280 ページの『プロファイル管理ツールを使用した Process Center カスタム・プロファイル (管理対象ノード) の作成』

プロファイル管理ツールを使用して、Network Deployment 構成用の Process Center カスタム・プロファイル (管理対象ノード) を作成および構成することができます。

関連資料:

893 ページの『プロファイル管理ツール構成のデータベース構成フィールド』

スタンドアロン環境のプロファイルを作成するには、データベース情報が必要です。必要な情報は、使用するデータベースによって異なります。

プロファイル管理ツールの標準オプションを使用した Process Center カスタム・プロファイルの作成:

プロファイル管理ツールの標準オプションを使用して、Network Deployment 構成用の Process Center カスタム・プロファイル (管理対象ノード) を作成および構成します。

280 ページの『プロファイル管理ツールを使用した Process Center カスタム・プロファイル (管理対象ノード) の作成』に記載されている初期プロファイル作成の手順を完了します。

プロファイル管理ツールで以下のアクションを実行する場合は、標準オプションを使用します。

- ポート、プロファイルのロケーション、およびプロファイル、ノード、ホスト、セルの名前にデフォルト値を割り当てます。
- 管理コンソールをインストールします。
- プロファイルの個人セキュリティ証明書を作成します。

証明書には個人鍵と秘密鍵があり、各鍵のデフォルト値は WebAS です (このパスワードは変更する必要があります)。有効期間は 1 年です。

- 他の証明書に署名するためのルート署名セキュリティー証明書を作成します。

証明書には個人鍵と秘密鍵があり、各鍵のデフォルト値は WebAS です (このパスワードは変更する必要があります)。有効期間は 15 年です。

- サーバーを実行するためのシステム・サービスを作成します。

ご使用のオペレーティング・システムとユーザー・アカウントの特権で許可される場合にのみ該当します。

- サポート対象のデータベース製品のいずれかを選択します。データベース構成は、CommonDB、Process Server データベース、および Performance Data Warehouse データベース用に設定されます。

1. 「フェデレーション」ページで、ノードのデプロイメント・マネージャーへの統合をプロファイルの作成の一部としてここで実行するか、またはプロファイルの作成とは別に後で実行するかを選択します。プロファイル作成の一部としてノードを統合することを選択した場合は、デプロイメント・マネージャーのホスト名または IP アドレスと SOAP ポート番号、および認証ユーザー ID とパスワード (デプロイメント・マネージャーでの認証に使用する場合) を指定します。

重要:

以下の状況のいずれかに該当する場合は、「後でこのノードを統合する」にチェック・マークを付けます。

- このカスタム・ノードをマイグレーション・ターゲットとして使用する予定がある。
- 別のプロファイルが統合されている (ノードの統合はシリアルライズする必要があります)。
- デプロイメント・マネージャーが実行中でない、またはそれが確実に実行中であるかどうか不明である。
- デプロイメント・マネージャーで SOAP コネクタが使用不可である。
- そのデプロイメント・マネージャーは、まだ IBM Business Process Manager デプロイメント・マネージャーに拡張されていない。
- デプロイメント・マネージャーが、作成するプロファイルと同じか、それより高いリリース・レベルではない。
- デプロイメント・マネージャーで、JMX 管理ポートが有効になっていない。
- デプロイメント・マネージャーが、優先 Java Management Extensions (JMX) コネクタとして、デフォルトでないリモート・メソッド呼び出し (RMI) を使用するように再構成されている。(優先コネクタ・タイプを確認するには、デプロイメント・マネージャーの管理コンソールで「システム管理 (System administration)」>「デプロイメント・マネージャー (Deployment manager)」>「管理サービス (Administration services)」を選択します。)

カスタム・プロファイル作成の一部としてのノード統合に関連する処理

- プロファイル管理ツールによって、デプロイメント・マネージャーが存在していて通信可能であること、および認証ユーザー ID とパスワードがそのデプロイメント・マネージャーで有効であること (デプロイメント・マネージャーがセキュリティーで保護されている場合) が検査されます。
- デプロイメント・マネージャーが実行中でないとき、またはほかの理由でデプロイメント・マネージャーを使用できないときに、カスタム・ノードを統合しようとする、警告ボックスが表示されて、続行できなくなります。この警告ボックスが表示されたら、「OK」をクリックしてこの警告パネルを終了し、「フェデレーション」ページで別の選択を行ってください。

「次へ」をクリックして先に進みます。

2. 「データベース構成」ページで、デプロイメント・マネージャーが使用するデータベースを選択し、JDBC ドライバー・クラスパス・ファイルの場所を指定します。
3. 「プロファイルの要約」ページで、「作成」をクリックしてプロファイルを作成するか、または「戻る」をクリックしてプロファイルの特性を変更します。

構成の進行状況が、「プロファイル構成の進行 (Profile Configuration Progress)」ウィンドウに表示されます。

プロファイルの作成が完了すると、「プロファイル完了 (Profile Complete)」ページに「プロファイル管理ツールにより、プロファイルが正常に作成されました。」というメッセージが表示されます。

重要: プロファイルの作成中にエラーが検出された場合は、正常終了のメッセージの代わりに他のメッセージが表示される可能性があります。その例と意味は次のとおりです。

- 「プロファイル管理ツールによりプロファイルが作成されましたが、エラーが発生しました」：プロファイルの作成が完了したが、エラーが生成されたことを示します。
- 「プロファイル管理ツールでプロファイルを作成できません」：プロファイルの作成が完全に失敗したことを示します。

「プロファイル完了 (Profile complete)」ページには、問題のトラブルシューティングを行うために参照するログ・ファイルが示されます。ファースト・ステップ・コンソールに進むには、「ファースト・ステップ・コンソールの起動」チェック・ボックスにチェック・マークが付けられていることを確認して、「終了」をクリックします。また、別のウィンドウで開いている「プロファイル」ページも閉じてください。ファースト・ステップ・コンソールを使用して、製品資料にアクセスします。

IBM Business Process Manager または WebSphere Enterprise Service Bus のプロファイルが作成されました。

プロファイル内のノードを統合し、管理コンソールを使用してそのノードをカスタマイズするまでは、そのノードは空です。

デプロイメント環境で、データベースを作成して構成し、他のカスタム・プロファイルを作成してそれをご使用のデプロイメント・マネージャーに統合し、サーバーを作成し、ワークロード管理機能が必要な場合はクラスターを作成し、さらに計画したインストール環境に固有のその他のタスクを実行する必要があります。計画した環境では、実行が必要なタスク、およびその実行順序を指示します。

関連タスク:

280 ページの『プロファイル管理ツールを使用した Process Center カスタム・プロファイル (管理対象ノード) の作成』

プロファイル管理ツールを使用して、Network Deployment 構成用の Process Center カスタム・プロファイル (管理対象ノード) を作成および構成することができます。

関連資料:

893 ページの『プロファイル管理ツール構成のデータベース構成フィールド』

スタンドアロン環境のプロファイルを作成するには、データベース情報が必要です。必要な情報は、使用するデータベースによって異なります。

プロファイル管理ツールを使用した Process Server デプロイメント・マネージャー・プロファイルの作成 :

プロファイル管理ツールを使用して、Network Deployment 構成用の Process Server デプロイメント・マネージャー・プロファイルを作成することができます。

- 『プロファイルの作成または拡張に関する前提条件』を確認します。
- Solaris** Solaris オペレーティング・システム上の Motif グラフィカル・ユーザー・インターフェースでプロファイル管理ツールを使用する場合、プロファイル管理ツールのデフォルト・サイズが、すべてのメッセージおよびボタンを表示するには小さすぎる可能性があります。この問題を修正するには、`install_root/.Xdefaults` ファイルに以下の行を追加します。

```
Eclipse*spacing:0
Eclipse*fontList:-misc-fixed-medium-r-normal-*-10-100-75-75-c-60-iso8859-1
```

行を追加したら、プロファイル管理ツールを開始する前に次のコマンドを実行します。

```
xrdb -load user_home/.Xdefaults
```

このタスク・トピックで説明する手順は、以下の場合に使用します。

- IBM Business Process Manager Advanced Network Deployment 構成用の *Process Server* デプロイメント・マネージャー・プロファイルを作成する場合。

注: デプロイメント・マネージャー・プロファイルの作成は、Network Deployment 構成を作成するための複数ある処理の中の 1 ステップです。

Network Deployment 環境構成とは、IBM Business Process Manager Advanced をスタンドアロン以外で構成したものです。

1. プロファイル管理ツールを開始します。

以下のいずれかのコマンドを使用します。

- Linux** **UNIX** `install_root/bin/ProfileManagement/pmt.sh`
- Windows** `install_root\bin\ProfileManagement\pmt.bat`

「ようこそ」ページが表示されます。

このツールを開始するためのその他の方法については、『プロファイル管理ツールの開始』を参照してください。

2. 「ようこそ」ページで、「プロファイル管理ツールの起動 (Launch Profile Management Tool)」をクリック、または「プロファイル管理ツール」タブを選択します。

「プロファイル」タブが表示されます。

「プロファイル」タブには、マシン上で作成されたプロファイルのリストが表示される場合があります。プロファイル管理ツールを使用して、新規プロファイルを作成するか、既存のプロファイルを拡張することができます。

3. 「プロファイル」タブで、「作成」をクリックします。

「環境の選択」ページが別ウィンドウで開きます。

4. 「環境の選択」ページで、デプロイメント・マネージャー・プロファイルを作成する対象となる IBM Business Process Manager Advanced 構成を見つけ、セクションを展開します。IBM BPM Advanced, Process Server デプロイメント・マネージャー・プロファイルのオプションを選択して、「次へ」をクリックします。

注: WebSphere Application Server プロファイルもこのプロファイル管理ツールで作成できます。ただし、本書では、IBM Business Process Manager プロファイルのみの作成を扱います。

「プロファイル作成オプション」ページが表示されます。

5. 「プロファイル作成オプション」ページで、「拡張」または「標準」のどちらのオプションを使用してデプロイメント・マネージャー・プロファイルを作成するかを決定します。

表 78. デプロイメント・マネージャー・プロファイルに応じたプロファイル作成オプションの選択

選択	目的
高度なプロファイル作成	<p>以下の手順を実行します。</p> <ul style="list-style-type: none"> • データベース構成に使用するデータベース設計ファイルを指定します。 • ポート、プロファイルのロケーション、およびプロファイル、ノード、ホスト、セル (該当する場合) の名前にカスタマイズ値を割り当てます。 • 管理コンソールをデプロイします。 • デフォルト・アプリケーション (Snoop、Hello、および HitCount の各サブレットを含む) をデプロイします。 • Web サーバー定義を作成します。 • ご使用のオペレーティング・システムとユーザー・アカウントの特権によってサービスの作成が許可される場合に、サーバーを実行するためのシステム・サービスを作成します。 • Business Space powered by WebSphere を構成します。 <p>注: Business Space powered by WebSphere は、共通データベースで構成されます。</p> <ul style="list-style-type: none"> • ビジネス・ルール・マネージャーを構成し、Business Process Choreographer サンプル構成を作成します。
標準的なプロファイル作成	<p>プロファイル管理ツールによって、以下のステップを実行します。</p> <ul style="list-style-type: none"> • ポート、プロファイルのロケーション、およびプロファイル、ノード、ホスト、セルの名前にデフォルト値を割り当てます。 • 管理コンソールをインストールします。 • プロファイルの個人セキュリティ証明書を作成します。 <p>証明書には個人鍵と秘密鍵があり、各鍵のデフォルト値は WebAS です (このパスワードは変更する必要があります)。有効期間は 1 年です。</p> <ul style="list-style-type: none"> • 他の証明書に署名するためのルート署名セキュリティ証明書を作成します。 <p>証明書には個人鍵と秘密鍵があり、各鍵のデフォルト値は WebAS です (このパスワードは変更する必要があります)。有効期間は 15 年です。</p> <ul style="list-style-type: none"> • サーバーを実行するためのシステム・サービスを作成します。 <p>ご使用のオペレーティング・システムとユーザー・アカウントの特権で許可される場合にのみ該当します。</p> <ul style="list-style-type: none"> • サポート対象のデータベース製品のいずれかを選択します。データベース構成は、CommonDB、Process Server データベース、および Performance Data Warehouse データベース用に設定されます。

Process Server デプロイメント・マネージャー・プロファイルの構成を実行するために、標準または拡張のいずれかのオプションを選択できます。

関連タスク:

『プロファイル管理ツールの標準オプションを使用した Process Server デプロイメント・マネージャー・プロファイルの作成』

プロファイル管理ツールの標準オプションを使用して、Network Deployment 構成の Process Server デプロイメント・マネージャー・プロファイルを作成します。

294 ページの『プロファイル管理ツールの拡張オプションを使用した Process Server デプロイメント・マネージャー・プロファイルの作成』

プロファイル管理ツールの拡張オプションを使用して、Network Deployment 構成の Process Server デプロイメント・マネージャー・プロファイルを作成します。

プロファイル管理ツールの標準オプションを使用した Process Server デプロイメント・マネージャー・プロファイルの作成:

プロファイル管理ツールの標準オプションを使用して、Network Deployment 構成の Process Server デプロイメント・マネージャー・プロファイルを作成します。

288 ページの『プロファイル管理ツールを使用した Process Server デプロイメント・マネージャー・プロファイルの作成』に記載されている初期プロファイル作成の手順を完了します。

プロファイル管理ツールで以下のアクションを実行する場合は、標準オプションを使用します。

- ポート、プロファイルのロケーション、およびプロファイル、ノード、ホスト、セルの名前にデフォルト値を割り当てます。
- 管理コンソールをインストールします。
- プロファイルの個人セキュリティ証明書を作成します。

証明書には個人鍵と秘密鍵があり、各鍵のデフォルト値は WebAS です (このパスワードは変更する必要があります)。有効期間は 1 年です。

- 他の証明書に署名するためのルート署名セキュリティ証明書を作成します。

証明書には個人鍵と秘密鍵があり、各鍵のデフォルト値は WebAS です (このパスワードは変更する必要があります)。有効期間は 15 年です。

- サーバーを実行するためのシステム・サービスを作成します。

ご使用のオペレーティング・システムとユーザー・アカウントの特権で許可される場合にのみ該当します。

- サポート対象のデータベース製品のいずれかを選択します。データベース構成は、CommonDB、Process Server データベース、および Performance Data Warehouse データベース用に設定されます。
1. 「管理セキュリティ」ページで、「ユーザー名」、「パスワード」、および「パスワードの確認」の値を入力します。インストール時に管理者に対して指定されたパスワードが、tw_admin および tw_user を含むすべての内部ユーザーに使用されます。

注: 初期設定では、「次へ」ボタンは無効に設定されています。管理セキュリティを無効に設定するオプションはないため、ユーザー ID、パスワード、およびパスワードの確認の各項目に値を指定しなければ、「次へ」ボタンは有効になりません。

「次へ」をクリックします。

2. 「データベース構成 - パート 1」ページで、以下のアクションを実行します。

- a. 「データベース製品の選択 (Select a database product)」ドロップダウン・リストから、プロファイルで使用されるデータベース製品を選択します。

- b. 「新規ローカル・データベースの作成」または「既存のローカルまたはリモート・データベースの使用 (Use an existing local or remote database)」を選択します。 データベース製品として DB2 を選択した場合は、新規データベースの作成を選択できます。DB2 はソフトウェアに組み込まれているため、プロファイル管理ツールにより新規 DB2 データベースが作成されます。

ソフトウェアで使用するデータベース製品が既に存在する場合は、「既存のローカル・データベースまたはリモート・データベースを使用する」を選択します。

- c. 「共通データベース名」フィールドで、共通データベースの名前を入力するか、デフォルトの CMNDB 値を受け入れます。
- d. データベース表の作成に使用される SQL スクリプトが書き込まれるディレクトリーを設定する場合は、「データベース・スクリプトのデフォルト出力ディレクトリーをオーバーライドする (Override the default output directory for database scripts)」チェック・ボックスを選択します。 このチェック・ボックスを選択しない場合、スクリプトはデフォルト・ディレクトリーに出力されます。
- e. プロファイル作成プロセスで Process Server および Performance Data Warehouse 用のデータベースを初期化したくない場合は、「Process Server および Performance Data Warehouse 用のデータベースの初期化をスキップする (Skip the database initialization for the Process Server and Performance Data Warehouse)」チェック・ボックスを選択します。
- f. (プロファイル作成処理の一環として) データベース・スクリプトが自動的に実行されるようにするには、「データベース・スクリプトを実行してデータベース表を作成する」チェック・ボックスを選択します。 このチェック・ボックスを選択しない場合、プロファイル作成の完了後に、ユーザー自身またはデータベース管理者がスクリプトを手動で実行できます。

重要:

- 「既存のローカル・データベースまたはリモート・データベースを使用する」を選択したときに表が既に存在している場合は、「データベース・スクリプトを実行してデータベース表を作成する」が選択されていないことを確認してください。両方のオプションが選択されていると、エラーが発生してプロファイルの作成が失敗します。
- 「データベース・スクリプトを実行してデータベース表を作成する」を選択して、Oracle または DB2 for z/OS を構成する場合は、プロファイル管理ツールがデータベース・システムにアクセスして表を作成する必要があります。プロファイル管理ツールがデータベース・システムに接続して表を作成できない場合は、データベースの妥当性検査エラーがスローされます。

3. 「データベース構成 - パート 2」ページで、選択したデータベースの構成を完了します。 各必須フィールドについて詳しくは、『プロファイル管理ツール構成のデータベース構成フィールド』を参照してください。

DB2 「データベース構成 - パート 2」ページで DB2 データベースの値を設定した後に、「次へ」をクリックして「プロファイルの要約」ページに進みます。

DB2 Universal Database for z/OS

DB2 Universal Database for z/OS を使用して新規データベースを作成することはできません。 Performance Data Warehouse データベースが存在している必要があり、スタンドアロン・サーバー・プロファイルの場合は Process Server データベースも必要です。「データベース構成 - パート 2」ページで DB2 Universal Database for z/OS の値を設定した後に、「次へ」をクリックして「プロファイルの要約」ページに進みます。

Microsoft SQL Server

「データベース構成 - パート 2」ページで Microsoft SQL Server データベースの値を設定した後に、「次へ」をクリックして「データベース構成 - パート 3」ページに進みます。
(「Windows 認証を適用」オプションを選択した場合は、このページは表示されません。)構成が完了したら、「次へ」をクリックして、「プロファイルの要約」ページに進みます。

Oracle このデータベースを使用して新規データベースを作成することはできません。

重要: プロファイルを作成する前に、SYSDBA 特権のあるユーザー ID を取得している必要があります。

「データベース構成 - パート 2」ページで Oracle データベースの値を設定した後に、「次へ」をクリックして「データベース構成 - パート 3」ページに進みます。「データベース構成 - パート 3」ページでの構成が完了したら、「次へ」をクリックして「プロファイルの要約」ページに進みます。

4. 「プロファイルの要約」ページで、「作成」をクリックしてプロファイルを作成するか、または「戻る」をクリックしてプロファイルの特性を変更します。

構成の進行状況が、「プロファイル構成の進行 (Profile Configuration Progress)」ウィンドウに表示されます。

プロファイルの作成が完了すると、「プロファイル完了 (Profile Complete)」ページに「プロファイル管理ツールにより、プロファイルが正常に作成されました。」というメッセージが表示されます。

重要: プロファイルの作成中にエラーが検出された場合は、正常終了のメッセージの代わりに他のメッセージが表示される可能性があります。その例と意味は次のとおりです。

- 「プロファイル管理ツールによりプロファイルが作成されましたが、エラーが発生しました」：プロファイルの作成が完了したが、エラーが生成されたことを示します。
- 「プロファイル管理ツールでプロファイルを作成できません」：プロファイルの作成が完全に失敗したことを示します。

「プロファイル完了 (Profile complete)」ページには、問題のトラブルシューティングを行うために参照するログ・ファイルが示されます。ファースト・ステップ・コンソールに進むには、「ファースト・ステップ・コンソールの起動」チェック・ボックスにチェック・マークが付けられていることを確認して、「終了」をクリックします。また、別のウィンドウで開いている「プロファイル」ページも閉じてください。ファースト・ステップ・コンソールを使用して、製品資料にアクセスします。

IBM Business Process Manager Advanced Network Deployment 構成用の Process Server デプロイメント・マネージャー・プロファイルを作成しました。

クラスターを構築し、クラスター上のコンポーネントを構成します。Network Deployment 環境で構成に使用可能なコンポーネントは、ご使用のシステムにインストールされている IBM Business Process Manager Advanced (拡張または標準) によって異なります。

Network Deployment 構成のためのクラスターの構築方法および IBM Business Process Manager Advanced コンポーネントの構成方法には、いくつかのオプションがあります。

関連タスク:

288 ページの『プロファイル管理ツールを使用した Process Server デプロイメント・マネージャー・プロファイルの作成』

プロファイル管理ツールを使用して、Network Deployment 構成用の Process Server デプロイメント・マネージャー・プロファイルを作成することができます。

938 ページの『データベースへのシステム情報のロード』

IBM Business Process Manager サーバーの始動または使用を試みる前に、`bootstrapProcessServerData` コマンドを実行する必要があります。

関連資料:

893 ページの『プロファイル管理ツール構成のデータベース構成フィールド』
スタンドアロン環境のプロファイルを作成するには、データベース情報が必要です。必要な情報は、使用するデータベースによって異なります。

プロファイル管理ツールの拡張オプションを使用した Process Server デプロイメント・マネージャー・プロファイルの作成:

プロファイル管理ツールの拡張オプションを使用して、Network Deployment 構成の Process Server デプロイメント・マネージャー・プロファイルを作成します。

288 ページの『プロファイル管理ツールを使用した Process Server デプロイメント・マネージャー・プロファイルの作成』に記載されている初期プロファイル作成の手順を完了します。

以下のアクションを実行する場合は、拡張オプションを使用します。

- データベース構成に使用するデータベース設計ファイルを指定します。
- ポート、プロファイルのロケーション、およびプロファイル、ノード、ホスト、セル (該当する場合) の名前にカスタマイズ値を割り当てます。
- 管理コンソールをデプロイします。
- デフォルト・アプリケーション (Snoop、Hello、および HitCount の各サーブレットを含む) をデプロイします。
- Web サーバー定義を作成します。
- ご使用のオペレーティング・システムとユーザー・アカウントの特権によってサービスの作成が許可される場合に、サーバーを実行するためのシステム・サービスを作成します。
- Business Space powered by WebSphere を構成します。

注: Business Space powered by WebSphere は、共通データベースで構成されます。

- ビジネス・ルール・マネージャーを構成し、Business Process Choreographer サンプル構成を作成します。
1. 「オプションのアプリケーション・デプロイメント」ページで、管理コンソールをデプロイするかどうかを選択します。

「次へ」をクリックすると、「プロファイル名およびロケーション」ページが表示されます。

2. 「プロファイル名およびロケーション」ページで、以下のステップを実行します。
 - a. 「**プロファイル名**」フィールドで固有の名前を指定するか、デフォルト値をそのまま使用します。

作成する各プロファイルに名前を付ける必要があります。複数のプロファイルがある場合は、この名前によって明らかに区別することができます。デフォルト名を使用しない場合は、『複数プロファイル環境のプロファイル・コマンド』を参照して、プロファイルの命名時に考慮する必要のある問題点 (ディレクトリー名の長さ制限など) について確認してください。

- b. 「**プロファイル・ディレクトリー**」フィールドにプロファイルのディレクトリーを入力するか、「参照...」ボタンを使用してプロファイル・ディレクトリーに移動します。

指定したディレクトリーには、ランタイム環境を定義するファイル (コマンド、構成ファイル、ログ・ファイルなど) が格納されます。デフォルト・ディレクトリーはプラットフォームに応じて異なります。

- **Linux** **UNIX** `install_root/profiles/profile_name`
- **Windows** `install_root¥profiles¥profile_name`

ここで、`profile_name` は指定した名前です。以下の場合には、エラー・メッセージが表示されます。

- 指定した *profile_name* が固有ではない。
 - 指定したディレクトリーが空ではない。
 - 使用しているユーザー ID に、このディレクトリーに対する十分な権限がない。
 - プロファイルを作成するための十分なスペースがない。
- c. オプション: 作成しているプロファイルをデフォルト・プロファイルにする場合は、「**デフォルトにするプロファイル**」チェック・ボックスを選択します。

プロファイルがデフォルト・プロファイルに設定されると、コマンドが自動的にこのプロファイル进行处理するようになります。

注: このチェック・ボックスは、既存のプロファイルがご使用のシステムに存在する場合にのみ表示されます。

ワークステーション上に最初に作成するプロファイルが、デフォルト・プロファイルです。

デフォルト・プロファイルは、製品インストール・ルートの `bin` ディレクトリーから実行されるコマンドのデフォルトのターゲットです。ワークステーション上にプロファイルが 1 つしか存在しない場合は、すべてのコマンドがそのプロファイルに基づいて機能します。複数のプロファイルが存在する場合、特定のコマンドでは、コマンドが適用されるプロファイルを指定する必要があります。詳しくは、『複数プロファイル環境のプロファイル・コマンド』を参照してください。

3. 「ノード名、ホスト名、セル名」ページで、作成中のプロファイルに対して以下のアクションを実行します。

- 「**ノード名**」フィールドにノードの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。

ノード名はできるだけ短くしてください。ただし、ノード名は、デプロイメント環境内で固有でなければなりません。命名時に考慮する必要のある予約済みの用語やその他の問題については、『プロファイル、ノード、サーバー、ホスト、およびセルの命名に関する考慮事項』を参照してください。

- 「**ホスト名**」フィールドにホストの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。
- 「**セル名**」フィールドにセルの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。

「**次へ**」をクリックすると、「管理セキュリティ」ページが表示されます。

4. 「管理セキュリティ」ページで、「**ユーザー名**」、「**パスワード**」、および「**パスワードの確認**」の値を入力します。インストール時に管理者に対して指定されたパスワードが、`tw_admin` および `tw_user` を含むすべての内部ユーザーに使用されます。

注: 初期設定では、「**次へ**」ボタンは無効に設定されています。管理セキュリティを無効に設定するオプションはないため、ユーザー ID、パスワード、およびパスワードの確認の各項目に値を指定しなければ、「**次へ**」ボタンは有効になりません。

「**次へ**」をクリックします。

5. 「セキュリティ証明書 (パート 1)」ページで、新規証明書を作成するか、既存の証明書をインポートするかを指定します。

以下のアクションを実行します。

- 新規デフォルト個人証明書と新規ルート署名証明書を作成するには、「**新規デフォルト個人証明書を作成する (Create a new default personal certificate)**」ラジオ・ボタンと「**新規ルート署名証明書を作成する (Create a new root signing certificate)**」ラジオ・ボタンを選択して、「次へ」をクリックします。
- 既存の証明書をインポートするには、「**既存のデフォルト個人証明書をインポートする (Import an existing default personal certificate)**」ラジオ・ボタンと「**既存のルート署名個人証明書をインポートする (Import an existing root signing personal certificate)**」ラジオ・ボタンを選択して、以下の情報を指定します。
 - 「パス」フィールドに、既存の証明書へのディレクトリー・パスを入力します。
 - 「パスワード」フィールドに、証明書のパスワードを入力します。
 - 「**鍵ストア・タイプ (Keystore type)**」フィールドで、インポートする証明書の鍵ストア・タイプを選択します。
 - 「**鍵ストア別名 (Keystore alias)**」フィールドで、インポートする証明書の鍵ストア別名を選択します。
 - 「次へ」をクリックすると、「セキュリティ証明書 (パート 2)」ページが表示されます。

個人証明書をデフォルトの個人証明書としてインポートする場合は、個人証明書に署名したルート証明書をインポートしてください。そのようにしない場合、プロファイル管理ツールは、個人証明書の署名者を `trust.p12` ファイルに追加します。

6. 「セキュリティ証明書 (パート 2)」ページで、証明書の情報が正しいことを確認し、「次へ」をクリックして「ポート値の割り当て」ページを表示します。

証明書を作成する場合、デフォルト値をそのまま使用するか変更して、新しい証明書を作成します。デフォルトの個人証明書は、デフォルトで 1 年間有効で、ルート署名証明書によって署名されます。ルート署名証明書は、デフォルトで 15 年間有効な自己署名証明書です。ルート署名証明書のデフォルトの鍵ストア・パスワードは、WebAS です。パスワードを変更します。パスワードに 2 バイト文字セット (DBCS) 文字を使用することはできません。PKCS12 などの特定の鍵ストア・タイプは、これらの文字をサポートしないからです。サポートされる鍵ストア・タイプは、`java.security` ファイルのプロバイダーによって異なります。

いずれかの証明書または両方の証明書を作成するか、いずれかの証明書または両方の証明書をインポートすると、以下の鍵ストア・ファイルが作成されます。

- `key.p12`: デフォルトの個人証明書が入っています。
- `trust.p12`: デフォルトのルート証明書の署名者証明書が入っています。
- `root-key.p12`: ルート署名証明書が入っています。
- `default-signers.p12`: サーバーのインストールまたは実行後に作成する新しい鍵ストア・ファイルに追加された署名者証明書が入っています。デフォルトで、デフォルトのルート証明書署名者と、DataPower 署名者証明書は、この鍵ストア・ファイルに入っています。
- `deleted.p12`: 必要に応じて復旧できるように、`deleteKeyStore` タスクで削除された証明書を保持します。
- `ltpa.jceks`: 環境内のサーバーが相互に通信するために使用するサーバーのデフォルトの Lightweight Third-Party Authentication (LTPA) 鍵が入っています。

これらのすべてのファイルのパスワードは、証明書の作成またはインポート時に使用したのと同じパスワード (デフォルトのパスワードか、指定したパスワード) です。

インポートされた証明書が `key.p12` ファイルまたは `root-key.p12` ファイルに追加されます。

証明書をインポートして、その証明書に必要な情報が含まれていない場合は、「戻る」をクリックして、別の証明書をインポートします。

- 「ポート値の割り当て」ページで、プロファイルに指定されたポートが固有であることを確認し、「次へ」をクリックします。

プロファイル管理ツールは、他の WebSphere 製品によって現在使用されているポートを検出し、既存のポート値と競合しない推奨値を表示します。指定されたポートを使用する WebSphere アプリケーション以外のアプリケーションが存在する場合は、ポートが競合しないことを確認してください。「オプションのアプリケーション・デプロイメント」ページで管理コンソールをデプロイしないように選択した場合、「ポート値の割り当て」ページ上で管理コンソール・ポートは使用できません。

以下の条件が満たされた場合には、ポートは使用中であると認識されます。

- ポートが、現在のユーザーが実行したインストールで作成されたプロファイルに割り当てられている。
- ポートが現在使用中である。

「ポート値の割り当て (Port Values Assignment)」ページにアクセスするときにはポートはツールによって検証されますが、続いて表示される「プロファイル管理ツール」ページで行われる選択の結果、依然としてポート競合が発生する可能性があります。ポートは、プロファイルの作成が完了するまで割り当てられません。

ポートの競合が発生していると思われる場合、プロファイルの作成後に調査することができます。以下のファイルを調べて、プロファイルの作成時に使用されたポートを確認します。

- **Linux** **UNIX** `profile_root/properties/portdef.props`
- **Windows** `profile_root\properties\portdef.props`

このファイル内に含まれているものは、ポートの設定で使用されたキーと値です。ポートの競合を発見した場合は、ポートを手動で再度割り当てることができます。ポートを再度割り当てるには、WebSphere Application Server Network Deployment インフォメーション・センターのトピック『既存プロファイル内のポートの更新』を参照してください。このトピックで説明されている `ws_ant` スクリプトを使用して `updatePorts.ant` ファイルを実行します。

次のステップは、ご使用のプラットフォーム、およびインストールを root (管理者) ユーザーで行っているか、非 root ユーザーで行っているかによって異なります。

インストールの内容	次のステップ
Linux または Windows プラットフォームで root または管理者グループ特権を持っている場合	「Linux または Windows サービス定義 (Linux or Windows Service Definition)」ページが表示されます。ステップ 8 に進みます。
それ以外のプラットフォームの場合、または Linux または Windows プラットフォームで非 root ユーザーとして実行している場合	「データベース設計」ページが表示されます。ステップ 9 (298 ページ) に進みます。

- 「サービスの定義」ページで、Windows サービスまたは Linux サービスを使用して IBM Business Process Manager を実行するかどうかを指定します。

Windows Windows プラットフォームにおいて、Windows サービスをインストールする ID に管理者グループ特権が設定されている場合にのみ、「Windows サービスの定義」ページが表示されます。プロファイルが Windows サービスとして構成されている場合、製品は、`startServer` または

startManager コマンドによって開始されるプロセスに対応する Windows サービスを開始します。例えば、サーバーまたはデプロイメント・マネージャーを Windows サービスとして構成し、**startServer** または **startManager** コマンドを実行すると、**wasservice** コマンドは定義されたサービスを開始します。

重要: 特定のユーザー・アカウントを使用してログオンすることを選択した場合、サービスを実行するユーザーのユーザー ID とパスワード、および始動タイプ (デフォルトは「手動」) を指定する必要があります。ユーザー ID の名前にスペースを使用することはできません。また、この ID は管理者グループに属し、拡張ユーザー権限の「サービスとしてログオン」を持っている必要があります。ユーザー ID が管理者グループに属していて、まだ拡張ユーザー権限がない場合は、プロファイル管理ツールにより、ユーザー ID に拡張ユーザー権限が付与されます。

プロファイルの作成時に追加された Windows サービスをプロファイルの削除時に除去できます。

プロファイルを Windows サービスとして実行する場合の IPv6 に関する考慮事項

Windows サービスとして実行するように作成されたプロファイルは、このサービスがローカル・システムとして実行するように構成されている場合、IPv6 の使用時には開始できません。ユーザー固有の環境変数を作成して、IPv6 を使用可能にします。この環境変数はローカル・システム変数ではなくユーザー変数であるため、その特定のユーザーで実行される Windows サービスのみが、この環境変数にアクセスできます。新規プロファイルが Windows サービスとして実行するように作成および構成されている場合、デフォルトでは、このサービスはローカル・システムとして実行するように設定されます。IBM Business Process Manager Windows サービスによって実行が試みられる場合、このサービスは IPv6 が指定されているユーザー環境変数にアクセスできないため、IPv4 として開始を試みます。この場合、サーバーは正常に始動しません。この問題を解決するには、プロファイルの作成時に、IBM Business Process Manager Windows サービスが、ローカル・システムの代わりに IPv6 が指定されている環境変数を定義したユーザー ID と同じユーザー ID で実行されることを指定します。

Linux 「Linux サービスの定義」ページは、現在のオペレーティング・システムがサポート対象バージョンの Linux であり、現在のユーザーに適切な権限がある場合にのみ表示されます。

IBM Business Process Manager によって、**startManager** または **startManager** コマンドで開始されたプロセス用の Linux サービスの開始が試みられます。例えば、サーバーまたはデプロイメント・マネージャーを Linux サービスとして構成し、**startServer** または **startManager** コマンドを実行すると、**wasservice** コマンドは定義されたサービスを開始します。

デフォルトでは、IBM Business Process Manager は、Linux サービスとして実行するように選択されません。

このサービスを作成するためには、プロファイル管理ツールを実行するユーザーは root ユーザーでなければなりません。プロファイル管理ツールを root 以外のユーザー ID で実行している場合は、「Linux サービスの定義」ページは表示されないため、サービスも作成されません。

サービスの実行に使用されるユーザー名を指定する必要があります。

Linux サービスを削除するためには、ユーザーが root ユーザーであるか、またはこのサービスを削除するための適切な特権を持っている必要があります。それ以外の場合は、root ユーザーがこのユーザーの代わりにサービスを削除するために実行できる除去スクリプトが作成されます。

9. 設計ファイルを使用してデータベースを構成します。
 - a. 「データベース設計ファイルの使用 (Use a database design file)」を選択します。

- b. 「参照」をクリックします。
- c. 設計ファイルの完全修飾パス名を選択します。
- d. データベース・スクリプトを自動で (プロファイル作成プロセスの一部として) 実行する場合は、「データベース・スクリプトを実行してデータベース表を作成する」を選択します。このチェック・ボックスを選択しない場合、プロファイル作成の完了後に、ユーザー自身またはデータベース管理者がスクリプトを手動で実行できます。

重要: 「データベース・スクリプトを実行してデータベース表を作成する」を選択する場合は、「既存のローカル・データベースまたはリモート・データベースを使用する」を選択しないようにしてください。両方のオプションを選択すると、エラーが発生します。

- e. 「次へ」をクリックします。

設計ファイルを指定することを選択すると、プロファイル管理ツールのデータベース構成パネルはスキップされます。代わりに、データベースの構成を完了するために、設計ファイルの場所がコマンド行に渡されます。データベース構成用の設計ファイルの使用については、922 ページの『データベース設計ツールを使用したデータベース設計ファイルの作成』を参照してください。

- 10. 「データベース構成 - パート 1」ページで、以下のアクションを実行します。

- a. 「データベース製品の選択 (Select a database product)」ドロップダウン・リストから、プロファイルで使用されるデータベース製品を選択します。
- b. 「新規ローカル・データベースの作成」または「既存のローカルまたはリモート・データベースの使用 (Use an existing local or remote database)」を選択します。データベース製品として DB2 を選択した場合は、新規データベースの作成を選択できます。DB2 はソフトウェアに組み込まれているため、プロファイル管理ツールにより新規 DB2 データベースが作成されます。

ソフトウェアで使用するデータベース製品が既に存在する場合は、「既存のローカル・データベースまたはリモート・データベースを使用する」を選択します。

- c. 「共通データベース名」フィールドで、共通データベースの名前を入力するか、デフォルトの CMNDB 値を受け入れます。
- d. データベース表の作成に使用される SQL スクリプトが書き込まれるディレクトリーを設定する場合は、「データベース・スクリプトのデフォルト出力ディレクトリーをオーバーライドする (Override the default output directory for database scripts)」チェック・ボックスを選択します。このチェック・ボックスを選択しない場合、スクリプトはデフォルト・ディレクトリーに出力されます。
- e. プロファイル作成プロセスで Process Server および Performance Data Warehouse 用のデータベースを初期化したくない場合は、「Process Server および Performance Data Warehouse 用のデータベースの初期化をスキップする (Skip the database initialization for the Process Server and Performance Data Warehouse)」チェック・ボックスを選択します。
- f. (プロファイル作成処理の一環として) データベース・スクリプトが自動的に実行されるようにするには、「データベース・スクリプトを実行してデータベース表を作成する」チェック・ボックスを選択します。このチェック・ボックスを選択しない場合、プロファイル作成の完了後に、ユーザー自身またはデータベース管理者がスクリプトを手動で実行できます。

重要:

- 「既存のローカル・データベースまたはリモート・データベースを使用する」を選択したときに表が既に存在している場合は、「データベース・スクリプトを実行してデータベース表を作成する」が選択されていないことを確認してください。両方のオプションが選択されていると、エラーが発生してプロファイルの作成が失敗します。
- 「データベース・スクリプトを実行してデータベース表を作成する」を選択して、Oracle または DB2 for z/OS を構成する場合は、プロファイル管理ツールがデータベース・システムにアクセスして表を作成する必要があります。プロファイル管理ツールがデータベース・システムに接続して表を作成できない場合は、データベースの妥当性検査エラーがスローされます。

11. 「データベース構成 - パート 2」ページで、選択したデータベースの構成を完了します。各必須フィールドについて詳しくは、『プロファイル管理ツール構成のデータベース構成フィールド』を参照してください。

以下のデータベースのパラメーターを構成できます。

DB2 「データベース構成 - パート 2」ページで DB2 データベースの値を設定した後に、「次へ」をクリックして「プロファイルの要約」ページに進みます。

DB2 Universal Database for z/OS

DB2 Universal Database for z/OS を使用して新規データベースを作成することはできません。Performance Data Warehouse データベースが存在している必要があり、スタンドアロン・サーバー・プロファイルの場合は Process Server データベースも必要です。「データベース構成 - パート 2」ページで DB2 Universal Database for z/OS の値を設定した後に、「次へ」をクリックして「プロファイルの要約」ページに進みます。

Microsoft SQL Server

「データベース構成 - パート 2」ページで Microsoft SQL Server データベースの値を設定した後に、「次へ」をクリックして「データベース構成 - パート 3」ページに進みます。(「Windows 認証を適用」オプションを選択した場合は、このページは表示されません。)構成が完了したら、「次へ」をクリックして、「プロファイルの要約」ページに進みます。

Oracle このデータベースを使用して新規データベースを作成することはできません。

重要: プロファイルを作成する前に、SYSDBA 特権のあるユーザー ID を取得している必要があります。

「データベース構成 - パート 2」ページで Oracle データベースの値を設定した後に、「次へ」をクリックして「データベース構成 - パート 3」ページに進みます。「データベース構成 - パート 3」ページでの構成が完了したら、「次へ」をクリックして「プロファイルの要約」ページに進みます。

12. 「プロファイルの要約」ページで、「作成」をクリックしてプロファイルを作成するか、または「戻る」をクリックしてプロファイルの特性を変更します。

構成の進行状況が、「プロファイル構成の進行 (Profile Configuration Progress)」ウィンドウに表示されます。

プロファイルの作成が完了すると、「プロファイル完了 (Profile Complete)」ページに「プロファイル管理ツールにより、プロファイルが正常に作成されました。」というメッセージが表示されます。

重要: プロファイルの作成中にエラーが検出された場合は、正常終了のメッセージの代わりに他のメッセージが表示される可能性があります。その例と意味は次のとおりです。

- 「プロファイル管理ツールによりプロファイルが作成されましたが、エラーが発生しました」：プロファイルの作成が完了したが、エラーが生成されたことを示します。
- 「プロファイル管理ツールでプロファイルを作成できません」：プロファイルの作成が完全に失敗したことを示します。

「プロファイル完了 (Profile complete)」ページには、問題のトラブルシューティングを行うために参照するログ・ファイルが示されます。ファースト・ステップ・コンソールに進むには、「ファースト・ステップ・コンソールの起動」チェック・ボックスにチェック・マークが付けられていることを確認して、「終了」をクリックします。また、別のウィンドウで開いている「プロファイル」ページも閉じてください。ファースト・ステップ・コンソールを使用して、製品資料にアクセスします。

13. SMTP サーバーを手動で構成して、メール通知を使用可能にします。1031 ページの『SMTP サーバーの構成』を参照してください。

IBM Business Process Manager Advanced Network Deployment 構成用の Process Server デプロイメント・マネージャー・プロファイルを作成しました。

クラスターを構築し、クラスター上のコンポーネントを構成します。Network Deployment 環境で構成に使用可能なコンポーネントは、ご使用のシステムにインストールされている IBM Business Process Manager Advanced (拡張または標準) によって異なります。

Network Deployment 構成のためのクラスターの構築方法および IBM Business Process Manager Advanced コンポーネントの構成方法には、いくつかのオプションがあります。

関連タスク:

288 ページの『プロファイル管理ツールを使用した Process Server デプロイメント・マネージャー・プロファイルの作成』

プロファイル管理ツールを使用して、Network Deployment 構成用の Process Server デプロイメント・マネージャー・プロファイルを作成することができます。

938 ページの『データベースへのシステム情報のロード』

IBM Business Process Manager サーバーの始動または使用を試みる前に、**bootstrapProcessServerData** コマンドを実行する必要があります。

関連資料:

893 ページの『プロファイル管理ツール構成のデータベース構成フィールド』

スタンドアロン環境のプロファイルを作成するには、データベース情報が必要です。必要な情報は、使用するデータベースによって異なります。

プロファイル管理ツールを使用した Process Server カスタム・プロファイル (管理対象ノード) の作成:

プロファイル管理ツールを使用して、Network Deployment 構成用の Process Server カスタム・プロファイル (管理対象ノード) を作成して構成することができます。

Process Server デプロイメント・マネージャー・プロファイルが作成されていること。および、データベース構成スクリプトの実行により共通データベースおよびテーブルが作成されていること。

ノード (カスタム・プロファイル) を使用するには、既存のデプロイメント・マネージャーにそのノードを統合する必要があります。作成プロセス中にノードを統合する場合は、デプロイメント・マネージャーが実行中でなければなりません。

ヒント: プロファイル管理ツールを使用する代わりに、`manageprofiles` コマンド行ユーティリティーを使用してプロファイルを作成することもできます (『コマンド行ユーティリティーおよび `wsadmin` を使用したソフトウェアの構成』を参照)。

このタスク・トピックで説明する手順は、以下の場合に使用します。

- IBM Business Process Manager Advanced Network Deployment 構成用の *Process Server* カスタム・プロファイル (管理対象ノード) を作成する場合。

注: プロセス・センターのみ、またはプロセス・サーバーのみに適用する情報については、この手順でそのように注記しています。

このトピックでは、カスタム・プロファイル (管理対象ノード) を作成するための「標準」および「拡張」の両方の方法について説明します。

作成プロセス時に既存のデプロイメント・マネージャーにノード (カスタム・プロファイル) を統合するか、あるいは後で `addNode` コマンドを使用してノードを統合するかを選択できます。作成プロセス時にノードを統合することを決定した場合は、このツールによって共通データベースの構成がデプロイメント・マネージャーと同じデータベースに設定されます。ノードを統合しないことを決定した場合は、データベースは未構成のままになります。

1. プロファイル管理ツールを開始します。

以下のいずれかのコマンドを使用します。

- `Linux` `UNIX` `install_root/bin/ProfileManagement/pmt.sh`
- `Windows` `install_root¥bin¥ProfileManagement¥pmt.bat`

「ようこそ」ページが表示されます。

2. 「ようこそ」ページで、「プロファイル管理ツールの起動 (Launch Profile Management Tool)」をクリック、または「プロファイル管理ツール」タブを選択します。

「プロファイル」タブが表示されます。

「プロファイル」タブには、マシン上で作成されたプロファイルのリストが表示される場合があります。プロファイル管理ツールを使用して、新規プロファイルを作成するか、既存のプロファイルを拡張することができます。

3. 「プロファイル」タブで、「作成」をクリックします。

「環境の選択」ページが別ウィンドウで開きます。

4. 「環境の選択」ページで、カスタム・プロファイルを作成中でセクションを拡張する対象の IBM Business Process Manager 構成 (高度または標準) を見つけます。カスタム・プロファイルのオプションを選択して、「次へ」をクリックします。

注: WebSphere Application Server プロファイルもこのプロファイル管理ツールで作成できます。ただし、本書では、IBM Business Process Manager プロファイルの作成のみを扱います。

「プロファイル作成オプション」ページが表示されます。

5. 「プロファイル作成オプション」ページで、カスタム・プロファイルの作成に「標準的なプロファイル作成」オプションまたは「高度なプロファイル作成」オプションのどちらを使用するかを決定します。

表 79. カスタム・プロファイルのプロファイル作成オプションの選択

選択	目的
標準的なプロファイル作成	<p>プロファイル管理ツールによって以下の処理が行われます。</p> <ul style="list-style-type: none"> • ポート、プロファイルのロケーション、およびプロファイル、ノード、ホスト、セルの名前にデフォルト値を割り当てます。 • 管理コンソールをインストールします。 • プロファイルの個人セキュリティー証明書を作成します。 <p>証明書には個人鍵と秘密鍵があり、各鍵のデフォルト値は WebAS です (このパスワードは変更する必要があります)。有効期間は 1 年です。</p> <ul style="list-style-type: none"> • 他の証明書に署名するためのルート署名セキュリティー証明書を作成します。 <p>証明書には個人鍵と秘密鍵があり、各鍵のデフォルト値は WebAS です (このパスワードは変更する必要があります)。有効期間は 15 年です。</p> <ul style="list-style-type: none"> • サーバーを実行するためのシステム・サービスを作成します。 <p>ご使用のオペレーティング・システムとユーザー・アカウントの特権で許可される場合のみ該当します。</p> <ul style="list-style-type: none"> • サポート対象のデータベース製品のいずれかを選択します。データベース構成は、CommonDB、Process Server データベース、および Performance Data Warehouse データベース用に設定されます。
高度なプロファイル作成	<ul style="list-style-type: none"> • データベース構成に使用するデータベース設計ファイルを指定します。 • ポート、プロファイルのロケーション、およびプロファイル、ノード、ホスト、セル (該当する場合) の名前にカスタマイズ値を割り当てます。 • 管理コンソールをデプロイします。 • デフォルト・アプリケーション (Snoop、Hello、および HitCount の各サブレットを含む) をデプロイします。 • Web サーバー定義を作成します。 • ご使用のオペレーティング・システムとユーザー・アカウントの特権によってサービスの作成が許可される場合に、サーバーを実行するためのシステム・サービスを作成します。 • Business Space powered by WebSphere を構成します。 <p>注: Business Space powered by WebSphere は、共通データベースで構成されます。</p> <ul style="list-style-type: none"> • ビジネス・ルール・マネージャーを構成し、Business Process Choreographer サンプル構成を作成します。

「標準的なプロファイル作成」を選択した場合は、ステップ 6 に進んでください。

「高度なプロファイル作成」を選択した場合は、ステップ 9 (305 ページ) に進みます。

6. 「フェデレーション」ページで、ノードのデプロイメント・マネージャーへの統合をプロファイルの作成の一部としてここで実行するか、またはプロファイルの作成とは別に後で実行するかを選択します。プロファイル作成の一部としてノードを統合することを選択した場合は、デプロイメント・マネージャーのホスト名または IP アドレスと SOAP ポート、および認証ユーザー ID とパスワード (デプロイメント・マネージャーでの認証で使用する場合) を指定します。

重要:

以下の状況のいずれかに該当する場合は、「このノードを後でフェデレートする (Federate this node later)」にチェック・マークを付けます。

- このカスタム・ノードをマイグレーション・ターゲットとして使用する予定がある。
- 別のプロファイルが統合されている (ノードの統合はシリアルライズする必要があります)。
- デプロイメント・マネージャーが実行中でない、またはそれが確実に実行中であるかどうか不明である。
- デプロイメント・マネージャーで SOAP コネクタが使用不可である。
- そのデプロイメント・マネージャーは、まだ IBM Business Process Manager デプロイメント・マネージャーに拡張されていない。
- デプロイメント・マネージャーが、作成するプロファイルと同じか、それより高いリリース・レベルではない。
- デプロイメント・マネージャーで、JMX 管理ポートが有効になっていない。
- デプロイメント・マネージャーが、優先 Java Management Extensions (JMX) コネクタとして、デフォルトでないリモート・メソッド呼び出し (RMI) を使用するように再構成されている。(優先コネクタ・タイプを確認するには、デプロイメント・マネージャーの管理コンソールで「システム管理」 > 「デプロイメント・マネージャー」 > 「管理サービス」を選択します。)

カスタム・プロファイル作成の一部としてのノード統合に関連する処理

- プロファイル管理ツールによって、デプロイメント・マネージャーが存在していて通信可能であること、および認証ユーザー ID とパスワードがそのデプロイメント・マネージャーで有効であること (デプロイメント・マネージャーがセキュリティーで保護されている場合) が検査されます。
- デプロイメント・マネージャーが実行中でないとき、またはほかの理由でデプロイメント・マネージャーを使用できないときに、カスタム・ノードを統合しようとする、警告ボックスが表示されて、続行できなくなります。この警告ボックスが表示されたら、「OK」をクリックしてこの警告パネルを終了し、「フェデレーション」ページで別の選択を行ってください。

「次へ」をクリックして先に進みます。

7. 「データベース構成」ページで、デプロイメント・マネージャーが使用するデータベースを選択し、JDBC ドライバー・クラスパス・ファイルの場所を指定します。
8. 「プロファイルの要約」ページで、「作成」をクリックしてプロファイルを作成するか、または「戻る」をクリックしてプロファイルの特性を変更します。

構成の進行状況が、「プロファイル構成の進行 (Profile Configuration Progress)」ウィンドウに表示されます。

プロファイルの作成が完了すると、「プロファイル完了 (Profile Complete)」ページに「プロファイル管理ツールにより、プロファイルが正常に作成されました。」というメッセージが表示されます。

重要: プロファイルの作成中にエラーが検出された場合は、正常終了のメッセージの代わりに他のメッセージが表示される可能性があります。その例と意味は次のとおりです。

- 「プロファイル管理ツールによりプロファイルが作成されましたが、エラーが発生しました」: プロファイルの作成が完了したが、エラーが生成されたことを示します。
- 「プロファイル管理ツールでプロファイルを作成できません」: プロファイルの作成が完全に失敗したことを示します。

「プロファイル完了 (Profile complete)」ページには、問題のトラブルシューティングを行うために参照するログ・ファイルが示されます。ファースト・ステップ・コンソールに進むには、「ファース

ト・ステップ・コンソールの起動」チェック・ボックスにチェック・マークが付けられていることを確認して、「終了」をクリックします。また、別のウィンドウで開いている「プロファイル」ページも閉じてください。ファースト・ステップ・コンソールを使用して、製品資料にアクセスします。デフォルト構成設定を使用してプロファイルを作成するステップが完了しました。

このトピックで残っているステップは、「高度なプロファイル作成」のステップです。

9. 「プロファイル名およびロケーション」ページで、以下のステップを実行します。
 - a. 「プロファイル名」フィールドで固有の名前を指定するか、デフォルト値をそのまま使用します。

作成する各プロファイルに名前を付ける必要があります。複数のプロファイルがある場合は、この名前によって明らかに区別することができます。デフォルト名を使用しない場合は、『複数プロファイル環境のプロファイル・コマンド』を参照して、プロファイルの命名時に考慮する必要のある問題点 (ディレクトリー名の長さ制限など) について確認してください。

- b. 「プロファイル・ディレクトリー」フィールドにプロファイルのディレクトリーを入力するか、「参照...」 ボタンを使用してプロファイル・ディレクトリーに移動します。

指定したディレクトリーには、ランタイム環境を定義するファイル (コマンド、構成ファイル、ログ・ファイルなど) が格納されます。デフォルト・ディレクトリーはプラットフォームに応じて異なります。

- **Linux** **UNIX** `install_root/profiles/profile_name`
- **Windows** `install_root¥profiles¥profile_name`

ここで、`profile_name` は指定した名前です。以下の場合、エラー・メッセージが表示されます。

- 指定した `profile_name` が固有ではない。
 - 指定したディレクトリーが空ではない。
 - 使用しているユーザー ID に、このディレクトリーに対する十分な権限がない。
 - プロファイルを作成するための十分なスペースがない。
- c. オプション: 作成しているプロファイルをデフォルト・プロファイルにする場合は、「デフォルトにするプロファイル」チェック・ボックスを選択します。

プロファイルがデフォルト・プロファイルに設定されると、コマンドが自動的にこのプロファイルを処理するようになります。

注: このチェック・ボックスは、既存のプロファイルがご使用のシステムに存在する場合にのみ表示されます。

ワークステーション上に最初に作成するプロファイルが、デフォルト・プロファイルです。

デフォルト・プロファイルは、製品インストール・ルートの `bin` ディレクトリーから実行されるコマンドのデフォルトのターゲットです。ワークステーション上にプロファイルが 1 つしか存在しない場合は、すべてのコマンドがそのプロファイルに基づいて機能します。複数のプロファイルが存在する場合、特定のコマンドでは、コマンドが適用されるプロファイルを指定する必要があります。詳しくは、『複数プロファイル環境のプロファイル・コマンド』を参照してください。

- d. 「次へ」をクリックします。

注: 「戻る」をクリックしてプロファイル名を変更した場合、このページが再表示されたときに、このページで手動で名前を変更しなければならないことがあります。

10. 「ノード名およびホスト名」ページで、作成するプロファイルに対して次の措置を行います。

- 「**ノード名**」フィールドにノードの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。

ノード名はできるだけ短くしてください。ただし、ノード名は、デプロイメント環境内で固有でなければなりません。命名時に考慮する必要がある予約済みの用語やその他の問題については、『**プロファイル、ノード、サーバー、ホスト、およびセルの命名に関する考慮事項**』を参照してください。

- 「**ホスト名**」フィールドにホストの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。

「**次へ**」をクリックすると、「**フェデレーション**」ページが表示されます。

11. 「**フェデレーション**」ページで、ノードのデプロイメント・マネージャーへの統合をプロファイルの作成の一部としてここで実行するか、またはプロファイルの作成とは別に後で実行するかを選択します。プロファイル作成の一部としてノードを統合することを選択した場合は、デプロイメント・マネージャーのホスト名または IP アドレスと SOAP ポート、および認証ユーザー ID とパスワード (デプロイメント・マネージャーでの認証で使用する場合) を指定します。

重要:

以下の状況のいずれかに該当する場合は、「**このノードを後でフェデレートする (Federate this node later)**」にチェック・マークを付けます。

- このカスタム・ノードをマイグレーション・ターゲットとして使用する予定がある。
- 別のプロファイルが統合されている (ノードの統合はシリアル化する必要があります)。
- デプロイメント・マネージャーが実行中でない、またはそれが確実に実行中であるかどうか不明である。
- デプロイメント・マネージャーで SOAP コネクタが使用不可である。
- そのデプロイメント・マネージャーは、まだ IBM Business Process Manager デプロイメント・マネージャーに拡張されていない。
- デプロイメント・マネージャーが、作成するプロファイルと同じか、それより高いリリース・レベルではない。
- デプロイメント・マネージャーで、JMX 管理ポートが有効になっていない。
- デプロイメント・マネージャーが、優先 Java Management Extensions (JMX) コネクタとして、デフォルトでないリモート・メソッド呼び出し (RMI) を使用するように再構成されている。(優先コネクタ・タイプを確認するには、デプロイメント・マネージャーの管理コンソールで「**システム管理**」 > 「**デプロイメント・マネージャー**」 > 「**管理サービス**」を選択します。)

カスタム・プロファイル作成の一部としてのノード統合に関連する処理

- プロファイル管理ツールによって、デプロイメント・マネージャーが存在していて通信可能であること、および認証ユーザー ID とパスワードがそのデプロイメント・マネージャーで有効であること (デプロイメント・マネージャーがセキュリティーで保護されている場合) が検査されます。
- デプロイメント・マネージャーが実行中でないとき、またはほかの理由でデプロイメント・マネージャーを使用できないときに、カスタム・ノードを統合しようとする、警告ボックスが表示されて、続行できなくなります。この警告ボックスが表示されたら、「**OK**」をクリックしてこの警告パネルを終了し、「**フェデレーション**」ページで別の選択を行ってください。

「**次へ**」をクリックして先に進みます。

12. 「**セキュリティー証明書 (パート 1)**」ページで、新規証明書を作成するか、既存の証明書をインポートするかを指定します。

以下のアクションを実行します。

- 新規デフォルト個人証明書と新規ルート署名証明書を作成するには、「**新規デフォルト個人証明書を作成する (Create a new default personal certificate)**」ラジオ・ボタンと「**新規ルート署名証明書を作成する (Create a new root signing certificate)**」ラジオ・ボタンを選択して、「次へ」をクリックします。
- 既存の証明書をインポートするには、「**既存のデフォルト個人証明書をインポートする (Import an existing default personal certificate)**」ラジオ・ボタンと「**既存のルート署名個人証明書をインポートする (Import an existing root signing personal certificate)**」ラジオ・ボタンを選択して、以下の情報を指定します。
 - 「パス」フィールドに、既存の証明書へのディレクトリー・パスを入力します。
 - 「パスワード」フィールドに、証明書のパスワードを入力します。
 - 「**鍵ストア・タイプ (Keystore type)**」フィールドで、インポートする証明書の鍵ストア・タイプを選択します。
 - 「**鍵ストア別名 (Keystore alias)**」フィールドで、インポートする証明書の鍵ストア別名を選択します。
 - 「次へ」をクリックすると、「セキュリティ証明書 (パート 2)」ページが表示されます。

個人証明書をデフォルトの個人証明書としてインポートする場合は、個人証明書に署名したルート証明書をインポートしてください。そのようにしない場合、プロファイル管理ツールは、個人証明書の署名者を `trust.p12` ファイルに追加します。

13. 「セキュリティ証明書 (パート 2)」ページで、証明書の情報が正しいことを確認し、「次へ」をクリックして「ポート値の割り当て」ページを表示します。

証明書を作成する場合、デフォルト値をそのまま使用するか変更して、新しい証明書を作成します。デフォルトの個人証明書は、デフォルトで 1 年間有効で、ルート署名証明書によって署名されます。ルート署名証明書は、デフォルトで 15 年間有効な自己署名証明書です。ルート署名証明書のデフォルトの鍵ストア・パスワードは、WebAS です。パスワードを変更します。パスワードに 2 バイト文字セット (DBCS) 文字を使用することはできません。PKCS12 などの特定の鍵ストア・タイプは、これらの文字をサポートしないからです。サポートされる鍵ストア・タイプは、`java.security` ファイルのプロバイダーによって異なります。

いずれかの証明書または両方の証明書を作成するか、いずれかの証明書または両方の証明書をインポートすると、以下の鍵ストア・ファイルが作成されます。

- `key.p12`: デフォルトの個人証明書が入っています。
- `trust.p12`: デフォルトのルート証明書の署名者証明書が入っています。
- `root-key.p12`: ルート署名証明書が入っています。
- `default-signers.p12`: サーバーのインストールまたは実行後に作成する新しい鍵ストア・ファイルに追加された署名者証明書が入っています。デフォルトで、デフォルトのルート証明書署名者と、DataPower 署名者証明書は、この鍵ストア・ファイルに入っています。
- `deleted.p12`: 必要に応じて復旧できるように、`deleteKeyStore` タスクで削除された証明書を保持します。
- `ltpa.jceks`: 環境内のサーバーが相互に通信するために使用するサーバーのデフォルトの Lightweight Third-Party Authentication (LTPA) 鍵が入っています。

これらのすべてのファイルのパスワードは、証明書の作成またはインポート時に使用したのと同じパスワード (デフォルトのパスワードか、指定したパスワード) です。

インポートされた証明書が `key.p12` ファイルまたは `root-key.p12` ファイルに追加されます。

証明書をインポートして、その証明書に必要な情報が含まれていない場合は、「戻る」をクリックして、別の証明書をインポートします。

14. 「データベース構成」ページで、データベース製品と、JDBC ドライバーの場所を選択します。
15. 「プロファイルの要約」ページで、「作成」をクリックしてプロファイルを作成するか、または「戻る」をクリックしてプロファイルの特性を変更します。

構成の進行状況が、「プロファイル構成の進行 (Profile Configuration Progress)」ウィンドウに表示されます。

プロファイルの作成が完了すると、「プロファイル完了 (Profile Complete)」ページに「**プロファイル管理ツールにより、プロファイルが正常に作成されました。**」というメッセージが表示されます。

重要: プロファイルの作成中にエラーが検出された場合は、正常終了のメッセージの代わりに他のメッセージが表示される可能性があります。その例と意味は次のとおりです。

- 「**プロファイル管理ツールによりプロファイルが作成されましたが、エラーが発生しました**」: プロファイルの作成が完了したが、エラーが生成されたことを示します。
- 「**プロファイル管理ツールでプロファイルを作成できません**」: プロファイルの作成が完全に失敗したことを示します。

「プロファイル完了 (Profile complete)」ページには、問題のトラブルシューティングを行うために参照するログ・ファイルが示されます。ファースト・ステップ・コンソールに進むには、「**ファースト・ステップ・コンソールの起動**」チェック・ボックスにチェック・マークが付けられていることを確認して、「終了」をクリックします。また、別のウィンドウで開いている「プロファイル」ページも閉じてください。ファースト・ステップ・コンソールを使用して、製品資料にアクセスします。

16. 「プロファイル完了 (Profile Complete)」ページで、「**ファースト・ステップ・コンソールの起動**」が選択されていることを確認し、「終了」をクリックして終了します。また、別のウィンドウで開いている「プロファイル」ページも閉じてください。ファースト・ステップ・コンソールを使用して、製品資料にアクセスします。
17. SMTP サーバーを手動で構成して、メール通知を使用可能にします。1031 ページの『SMTP サーバーの構成』を参照してください。

カスタム・プロファイルの作成が完了しました。

デプロイメント・マネージャーにノードを統合してから、管理コンソールを使用してそのノードをカスタマイズするまでは、プロファイル内のノードは空です。

Network Deployment 環境で、データベースを作成して構成し、他のカスタム・プロファイルを作成してそれをご使用のデプロイメント・マネージャーに統合し、サーバーを作成し、ワークロード管理機能が必要な場合はクラスターを作成し、さらに計画したインストール環境に固有のその他のタスクを実行する必要があります。計画した環境では、実行が必要なタスク、およびその実行順序を指示します。

カスタム・ノードのデプロイメント・マネージャーへの統合:

addNode コマンドを使用して、カスタム・ノードをデプロイメント・マネージャー・セルに統合します。以下の説明に従って、カスタム・ノードの統合およびデプロイのプロセスを実行します。

この手順を実行する前に、以下の前提条件が満たされていることを確認します。

- IBM Business Process Manager をインストール済みであり、IBM Business Process Manager または WebSphere ESB デプロイメント・マネージャーとカスタム・プロファイルを作成済みであること。この

手順では、カスタム・プロファイルの統合がその作成または拡張中に (プロファイル管理ツールまたは **manageprofiles** コマンド行ユーティリティを使用して) 行われていないことが前提となっています。

- デプロイメント・マネージャーが実行されている。稼働していない場合は、ファースト・ステップ・コンソールから「**デプロイメント・マネージャーの始動**」を選択するか、または以下のコマンドを入力してデプロイメント・マネージャーを始動します。ここで、*profile_root* はデプロイメント・マネージャー・プロファイルのインストール場所を表します。
 - **Linux** **UNIX** `profile_root/bin/startManager.sh`
 - **Windows** `profile_root%bin%startManager.bat`
- デプロイメント・マネージャーが IBM Business Process Manager または WebSphere ESB デプロイメント・マネージャーに拡張されていること。IBM Business Process Manager プロファイルの場合は WebSphere Enterprise Service Bus デプロイメント・マネージャーを使用できませんが、WebSphere Enterprise Service Bus プロファイルでは、IBM Business Process Manager デプロイメント・マネージャーを使用できます。
- デプロイメント・マネージャーのリリース・レベルが、作成または拡張されたカスタム・プロファイルと同じか、それより高い。
- デプロイメント・マネージャーで、JMX 管理ポートが有効になっている。デフォルト・プロトコルは SOAP です。
- このカスタム・ノードをマイグレーション・ターゲットとして使用する予定がない。

カスタム・ノードをデプロイメント・マネージャーが管理できるように、カスタム・ノードを統合します。**addNode** コマンドを使用して、カスタム・プロファイルをデプロイメント・マネージャー・セルに統合します。

1. 統合するカスタム・プロファイルの bin ディレクトリーに移動します。コマンド・ウィンドウを開き、(コマンド行から) プラットフォームに応じて以下のディレクトリーのいずれかに移動します (ここで *profile_root* はカスタム・プロファイルのインストール・ロケーションを表します)。
 - **Linux** **UNIX** `profile_root/bin`
 - **Windows** `profile_root%bin`
2. **addNode** コマンドを実行します。

セキュリティが有効になっていない場合は、コマンド行から以下のいずれかのコマンドを発行します。

- **Linux** **UNIX** `./addNode.sh deployment_manager_host deployment_manager_SOAP_port`
- **Windows** `addNode.bat deployment_manager_host deployment_manager_SOAP_port`

セキュリティが使用可能である場合は、コマンド行から以下のいずれかのコマンドを発行します。

- **Linux** **UNIX** `./addNode.sh deployment_manager_host deployment_manager_SOAP_port-username userID_for_authentication-password password_for_authentication`
- **Windows** `addNode.bat deployment_manager_host deployment_manager_SOAP_port-username userID_for_authentication-password password_for_authentication`

出力ウィンドウが開きます。次のようなメッセージが表示されたら、カスタム・プロファイルは正常に統合されています。

```
ADMU00031: ノード DMNDID2Node03 は正常に統合されました。  
(Node DMNDID2Node03 has been successfully federated.)
```

カスタム・プロファイルはデプロイメント・マネージャーに統合されました。**addNode** コマンドとそのパラメーターについて詳しくは、WebSphere Application Server Network Deployment インフォメーション・センターのトピック『wsadmin スクリプトを使用した addNode コマンドの実行 (Using wsadmin scripting to run the addNode command)』を参照してください。

カスタム・プロファイルを統合したら、デプロイメント・マネージャーの管理コンソールに移動して空のノードをカスタマイズするか、新規のサーバーを作成します。

manageprofiles コマンド行ユーティリティを使用したプロファイルの削除:

プロファイルは、コマンド行から **manageprofiles** コマンド行ユーティリティを使用して削除することができます。

manageprofiles コマンド行ユーティリティについて詳しくは、**manageprofiles** コマンド行ユーティリティを参照してください。

1. コマンド・プロンプトを開き、使用するオペレーティング・システムに基づいて以下のいずれかのコマンドを実行します。

- **Linux** **UNIX** `manageprofiles.sh -delete -profileName profile_name`
- **Windows** `manageprofiles.bat -delete -profileName profile_name`

変数 *profile_name* は削除するプロファイルの名前を示します。

2. 以下のログ・ファイルを調べて、プロファイルの削除が完了したことを確認します。

- **Linux** **UNIX** `install_root/logs/manageprofiles/profile_name_delete.log`
- **Windows** `install_root%logs%manageprofiles%profile_name_delete.log`

削除したプロファイルに関連付けられたものと同じプロファイル名および同じデータベース名の両方を使用して、削除したプロファイルを再作成する場合は、プロファイル名とデータベース名を再作成する前に、関連付けられたデータベース名を手動で削除する必要があります。

manageprofiles および **wsadmin** を使用した環境の構成

プロファイル管理ツールおよびデプロイメント環境ウィザードを使用してセットアップする構成と同じ構成を、**manageprofiles** コマンド行ユーティリティおよび **wsadmin** コマンドを使用して実現できます。

関連概念:

238 ページの『カスタム・インストールの後のスタンドアロン・プロファイルの作成』

カスタム・インストールを実行した後で、プロファイル管理ツールまたは **manageprofiles** コマンド行ユーティリティを使用してスタンドアロン・サーバー・プロファイルを作成することができます。

manageprofiles コマンド行ユーティリティを使用したプロファイルの作成:

manageprofiles コマンド行ユーティリティおよびプロパティ・ファイルを使用して、コマンド行からプロファイルを作成できます。

manageprofiles コマンド行ユーティリティについて詳しくは、『**manageprofiles** コマンド行ユーティリティ』を参照してください。**manageprofiles** コマンド行ユーティリティのサンプル応答ファイルは `install_root/BPM/samples/manageprofiles` ディレクトリにあります。

manageprofiles コマンド行ユーティリティを実行する前に、以下の作業が完了していることを確認します。

- 『プロファイルの作成または拡張に関する前提条件』で、プロファイルを作成または拡張するための前提条件をすべて確認している。
- プロファイル作成コマンドの例を『manageprofile の例』で確認している。
- 同じプロファイルで **manageprofiles** コマンド行ユーティリティを実行していないことをチェックしている。エラー・メッセージが表示された場合は、別のプロファイル作成操作や拡張操作が進行中かどうかを確認してください。実行されている場合は、完了するまで待ってください。

このタスクには、**セキュリティー・ロールが必要です**。『プロファイル作成のための、非 root ユーザーに対するファイルとディレクトリーの書き込み権限の付与』を参照してください。

manageprofiles コマンド行ユーティリティを使用してプロファイルを作成するには、以下のステップを実行します。

1. 作成するプロファイルの種類を決定します。これにより、新しいプロファイルに使用するテンプレートが決まります (**-templatePath** オプションを使用)。

各プロファイルのテンプレートは、*install_root/profileTemplates/BPM* ディレクトリー (BPM テンプレートの場合) および *install_root/profileTemplates* の下 (その他の製品の場合) にあります。以下のテンプレートを使用できます。

- **default.procctr**: IBM Business Process Manager Process Center スタンドアロン・プロファイル用で、IBM BPM Standard または Express に固有の機能を備えたスタンドアロン・サーバーを定義します。
- **default.procctr.adv**: IBM Business Process Manager Process Center スタンドアロン・プロファイル用で、IBM BPM Advanced に固有の機能を備えたスタンドアロン・サーバーを定義します。
- **dmgr.procctr**: IBM Business Process Manager Process Center デプロイメント・マネージャー・プロファイル用で、IBM BPM Standard のデプロイメント・マネージャーを定義します。デプロイメント・マネージャーは、1 つ以上のワークステーション上にあるサーバーの論理グループに、1 つの管理インターフェースを提供します。
- **dmgr.procctr.adv**: IBM Business Process Manager Process Center デプロイメント・マネージャー・プロファイル用で、IBM BPM Advanced のデプロイメント・マネージャーを定義します。デプロイメント・マネージャーは、1 つ以上のワークステーション上にあるサーバーの論理グループに、1 つの管理インターフェースを提供します。
- **managed.procctr**: IBM BPM Standard の IBM Business Process Manager Process Center カスタム・プロファイル用で、デプロイメント・マネージャーに統合されている場合に管理対象ノードを定義します。使用するソリューションにデプロイメント環境が必要であると判断した場合、ランタイム環境には 1 つ以上の管理対象ノードが必要になります。

カスタム・プロファイルには、稼働状態にするにはデプロイメント・マネージャー・セルにフェデレートする必要がある空のノードがあります。カスタム・プロファイルを統合すると、カスタム・プロファイルが管理対象ノードに変更されます。フェデレート先のデプロイメント・マネージャーのリリース・レベルが、作成しているカスタム・プロファイルのリリース・レベル以上でない場合は、ノードをフェデレートしないでください。

- **managed.procctr.adv**: IBM BPM Advanced の IBM Business Process Manager Process Center カスタム・プロファイル用で、デプロイメント・マネージャーに統合されている場合に管理対象ノードを定義します。使用するソリューションにデプロイメント環境が必要であると判断した場合、ランタイム環境には 1 つ以上の管理対象ノードが必要になります。

カスタム・プロファイルには、稼働状態にするにはデプロイメント・マネージャー・セルにフェデレートする必要がある空のノードがあります。カスタム・プロファイルを統合すると、カスタム・プロ

ファイルが管理対象ノードに変更されます。フェデレート先のデプロイメント・マネージャーのリリース・レベルが、作成しているカスタム・プロファイルのリリース・レベル以上でない場合は、ノードをフェデレートしないでください。

- `default.procsvr`: Process Server スタンドアロン・プロファイル用で、IBM BPM Standard または Express に固有の機能を備えたスタンドアロン・サーバーを定義します。
- `default.procsvr.adv`: Process Server スタンドアロン・プロファイル用で、IBM BPM Advanced に固有の機能を備えたスタンドアロン・サーバーを定義します。
- `dmgr.procsvr`: IBM Business Process Manager Process Server デプロイメント・マネージャー・プロファイル用で、IBM BPM Standard のデプロイメント・マネージャーを定義します。デプロイメント・マネージャーは、1 つ以上のワークステーション上にあるサーバーの論理グループに、1 つの管理インターフェースを提供します。
- `dmgr.procsvr.adv`: IBM Business Process Manager Process Server デプロイメント・マネージャー・プロファイル用で、IBM BPM Advanced のデプロイメント・マネージャーを定義します。デプロイメント・マネージャーは、1 つ以上のワークステーション上にあるサーバーの論理グループに、1 つの管理インターフェースを提供します。
- `managed.procsvr`: IBM BPM Standard の IBM Business Process Manager Process Server カスタム・プロファイル用で、デプロイメント・マネージャーに統合されている場合に管理対象ノードを定義します。

使用するソリューションに Network Deployment 構成が必要であると判断した場合、ランタイム環境には 1 つ以上の管理対象ノードが必要になります。カスタム・プロファイルには、稼働状態にするにはデプロイメント・マネージャー・セルにフェデレートする必要がある空のノードがあります。カスタム・プロファイルを統合すると、カスタム・プロファイルが管理対象ノードに変更されます。統合先のデプロイメント・マネージャーのリリース・レベルが、作成しているカスタム・プロファイルのリリース・レベル以上でない場合は、ノードを統合しないでください。

- `managed.procsvr.adv`: IBM BPM Advanced の IBM Business Process Manager Process Server カスタム・プロファイル用で、デプロイメント・マネージャーに統合されている場合に管理対象ノードを定義します。

使用するソリューションに Network Deployment 構成が必要であると判断した場合、ランタイム環境には 1 つ以上の管理対象ノードが必要になります。カスタム・プロファイルには、稼働状態にするにはデプロイメント・マネージャー・セルにフェデレートする必要がある空のノードがあります。カスタム・プロファイルを統合すると、カスタム・プロファイルが管理対象ノードに変更されます。フェデレート先のデプロイメント・マネージャーのリリース・レベルが、作成しているカスタム・プロファイルのリリース・レベル以上でない場合は、ノードをフェデレートしないでください。また、IBM® Business Process Manager Advanced: Process Server プロファイルは WebSphere® Enterprise Service Bus デプロイメント・マネージャーを使用できませんが、WebSphere Enterprise Service Bus プロファイルは IBM Business Process Manager Advanced: Process Server デプロイメント・マネージャーを使用できます。

- `default.esbserver`: WebSphere Enterprise Service Bus スタンドアロン・サーバー・プロファイル用で、スタンドアロン・サーバーを定義します。
- `dmgr.esbserver`: WebSphere Enterprise Service Bus デプロイメント・マネージャー・プロファイル用で、デプロイメント・マネージャーを定義します。
- `managed.esbserver`: WebSphere Enterprise Service Bus カスタム・プロファイル用で、デプロイメント・マネージャーにフェデレートされた場合、管理対象ノードを定義します。

2. 『manageprofile の例』に記載されているプロファイル作成コマンドの例を検討して、ご使用のプロファイルのタイプにどのパラメーターが必要であるかを判断します。

3. プロファイルに提供する値を決定します。これを行うには、`manageprofiles` パラメーターのトピックで示されているデフォルト値を確認して、それらがプロファイルに必要なものであるかどうかを検討します。

注: `samplesPassword` パラメーターを指定せずに `manageprofiles` コマンド行ユーティリティーを使用して IBM Business Process Manager にプロファイルを作成した場合は、**INSTCONFPARTIALSUCCESS** メッセージが返されます。これは以下の基準が満たされたときに起こります。

- IBM Business Process Manager または WebSphere Application Server のインストール中にサンプルをインストールした。
 - `manageprofiles` コマンド行ユーティリティーを使用してプロファイルを作成している。
 - `manageprofiles` コマンド行ユーティリティーに `samplesPassword` パラメーターが指定されていない。
4. 応答ファイルを作成します。

サンプル応答ファイルは、`install_root/BPM/samples/manageprofiles/` ディレクトリーの下にあります。作成するプロファイル (スタンドアロンまたはネットワーク、Process Center または Process Server) に応じて適切な応答ファイルを選択し、環境に合わせてファイルをカスタマイズしてください。

重要: 値の後にスペースが入っている (例えば、`'personalCertValidityPeriod=1 '` や `'winserviceCheck=false '`) ことがないようにしてください。スペースがある場合は、プロファイルの作成が失敗します。

『IBM Business Process Manager サンプルを使用した応答ファイルの作成』を参照してください。

5. `-response` パラメーターと、作成した応答ファイルの名前を使用して、コマンド行から `manageprofiles` コマンドを実行します。

- `Linux` `UNIX` `manageprofiles.sh -response myResponseFile`
- `Windows` `manageprofiles.bat -response myResponseFile`

コマンドにより、実行につれて状況が表示されます。コマンドが終了するまで待機します。他の応答ファイルと同様に、ファイルの構文解析時には応答ファイルに対する通常の構文検査が適用されます。応答ファイルの個々の値はコマンド行パラメーターと見なされます。

6. SMTP サーバーを手動で構成して、メール通知を使用可能にします。『SMTP サーバーの構成』を参照してください。

「INSTCONFSUCCESS: プロファイルの作成は正常に終了しました。」というメッセージが表示された場合は、プロファイルの作成が正常に完了したことが分かります。また、以下のログ・ファイルを確認できます。

- `Linux` `UNIX` `Windows` `install_root/logs/manageprofiles/profile_name_create.log`
- `Windows` `install_root\logs\manageprofiles\profile_name_create.log`

インストール検査テスト (IVT) ツールを実行して、プロファイルが正常に作成されたことを確認する。このためには、以下のコマンドを実行します。

- `Linux` `UNIX` `profile_root/bin/wbi_ivt.sh`
- `Windows` `profile_root\bin\wbi_ivt.bat`

関連概念:

71 ページの『JDBC ドライバーおよびロケーション』

以下の各表に、サポートされている JDBC ドライバーをリストします。最初の表には、製品に付属している JDBC ドライバーの名前とロケーションを示します。2 番目の表には、サポートされているが製品には付属していない JDBC ドライバーの名前とロケーションを示します。

IBM Business Process Manager サンプルを使用した応答ファイルの作成:

IBM Business Process Manager には、サンプル応答ファイルが用意されています。これを基に、使用するシステムの構成方法の詳細がすべて含まれた応答ファイルを作成することができます。

IBM Business Process Manager 構成の基礎として使用する WebSphere Application Server をインストールし、構成します。

作成する応答ファイルは、次に示す 8 つのサンプル応答ファイルのいずれかに基づきます。

- PCStd_StandAlone_MSSQLSERVER_Win.response

SQL Server データベースを使用するスタンドアロン構成で IBM Business Process Manager Standard Process Center を構成するときに使用する応答ファイルを作成できます。

- PSStd_StandAlone_DB2_UNIVERSAL_Win.response

DB2 データベースを使用するスタンドアロン構成で IBM Business Process Manager Standard Process Server を構成するときに使用する応答ファイルを作成できます。

- PCAdv_StandAlone_MSSQLSERVER_MICROSOFT_Win.response

SQL Server データベースを使用するスタンドアロン構成で IBM Business Process Manager Standard Process Center を構成するときに使用する応答ファイルを作成できます。

- PSAdv_StandAlone_DB2_UNIVERSAL_Win.response

DB2 データベースを使用するスタンドアロン構成で IBM Business Process Manager Standard Process Server を構成するときに使用する応答ファイルを作成できます。

- PCAdv_Dmgr_ORACLE_Unix.response

Oracle データベースを使用するデプロイメント・マネージャー構成で IBM Business Process Manager Standard Process Center を構成するときに使用する応答ファイルを作成できます。

- PSAdv_Dmgr_DB2_DATASERVER_Unix.response

DB2 Dataserver データベースを使用するデプロイメント・マネージャー構成で IBM Business Process Manager Standard Process Server を構成するときに使用する応答ファイルを作成できます。

- PCAdv_Custom_ORACLE_Unix.response

Oracle データベースを使用するカスタム構成で IBM Business Process Manager Standard Process Center を構成するときに使用する応答ファイルを作成できます。

- PSAdv_Custom_DB2_DATASERVER_Unix.response

DB2 Dataserver データベースを使用するカスタム構成で IBM Business Process Manager Standard Process Server を構成するときに使用する応答ファイルを作成できます。

1. `Install_root\BPM\samples\manageprofiles` ディレクトリーから、サンプル応答ファイルを見つけて作業ディレクトリーにコピーします。作成するプロファイル (スタンドアロンまたはネットワーク、Process Center または Process Server) に応じて適切な応答ファイルを選択します。

2. **UNIX** **Linux** **chmod** コマンドを使用して、応答ファイルのコピーに適切な許可を割り当てます。例:

```
chmod 644 myResponseFile
```

3. 使用している構成に合わせて、応答ファイル内のパラメーターを編集します。 **templatePath** プロパティのパスが、特定のインストール・ディレクトリーと一致していることを確認してください。

重要: 値の後にスペースが入っている (例えば、'**personalCertValidityPeriod=1** ' や '**winserviceCheck=false** ') ことがないようにしてください。スペースがある場合は、プロファイルの作成が失敗します。

4. 編集した応答ファイルを保存します。
5. **z/OS** のみ: 製品構成スクリプトを最後まで実行させるために、OMVS の制限時間を延長します。MVS コンソールで、次のコマンドを実行します。 **SETOMVS MAXCPU TIME=86400**
6. **z/OS** のみ: z/OS UNIX システム・サービス・コマンド・シェルにアクセスし、管理者ユーザー ID に切り替えます。例: **su wsadmin**
7. **-response** パラメーターと、作成した応答ファイルの名前を使用して、コマンド行から **manageprofiles** コマンドを実行します。

- **Linux** **UNIX** **manageprofiles.sh -response myResponseFile**

- **Windows** **manageprofiles.bat -response myResponseFile**

コマンドにより、実行につれて状況が表示されます。コマンドが終了するまで待機します。他の応答ファイルと同様に、ファイルの構文解析時には応答ファイルに対する通常の構文検査が適用されます。応答ファイルの個々の値はコマンド行パラメーターと見なされます。

8. サーバーを始動します。

次の例では、Windows 上でスタンドアロン Process Center プロファイルを作成するための応答ファイルを示します。

```
*****
# Creates a stand-alone Process Center profile on a Windows platform.
# Call manageprofiles -response PCStd_StandAlone__DB2_UNIVERSAL_Win.response
*****
create
templatePath=C:/Program Files/IBM/WebSphere/AppServer/profileTemplates/BPM/default.procctr
profileName=ProcCtr01
cellName=SampleCell
nodeName=SampleNode01
serverName=server1
hostName=SampleHost.com
winserviceCheck=false
enableAdminSecurity=true
adminUserName=tw_admin
adminPassword=tw_admin
applyPerfTuningSetting=standard
dbJDBCClasspath=${WAS_INSTALL_ROOT}/jdbcdrivers/DB2
dbType=DB2_UNIVERSAL
dbUserId=bpmadmin
dbPassword=bpmadmin1
dbHostName=DB_hostname
dbServerPort=50000
dbCreateNew=true
dbDelayConfig=false
procSvrDbName=PCBPMDb
dbProcSvrUserId=procadmin
dbProcSvrPassword=procpwd
```

```
perfDWDdbName=PCPERFDB
dbPerfDWUserId=perfadmin
dbPerfDWPassword=perfpwd
samplesPassword=smppwd
```

次の例では、Windows 上でスタンドアロン Process Server プロファイルを作成するための応答ファイルを示します。

```
*****
# Creates a stand-alone Process Server profile on a Windows platform.
# Call manageprofiles -response PSStd_StandAlone_DB2_UNIVERSAL_Win.response
*****

create
templatePath=C:/Program Files/IBM/WebSphere/AppServer/profileTemplates/BPM/default.procsvr
profileName=ProcSrv01
cellName=SampleCell
nodeName=SampleNode01
serverName=server1
hostName=SampleHost.com
environmentName=SampleEnv
winserviceCheck=false
enableAdminSecurity=true
adminUserName=tw_admin
adminPassword=tw_admin
processCenterURL=http://processcenter_hostname:9080
processCenterUserId=tw_admin
processCenterPassword=tw_admin
applyPerfTuningSetting=standard
dbJDBCClasspath=${WAS_INSTALL_ROOT}/jdbcdrivers/DB2
dbType=DB2_UNIVERSAL
dbUserId=bpmadmin
dbPassword=bpmadmin1
dbHostName=DB_hostname
dbServerPort=50000
dbCreateNew=true
dbDelayConfig=false
procSvrDbName=PSBPMDB
perfDWDdbName=PSPERFDB
samplesPassword=smppwd
```

カスタム・インストール後の **manageprofiles** を使用したスタンドアロン・プロファイルの作成:

カスタム・インストールを実行した後で、プロファイル管理ツールまたは **manageprofiles** コマンド行ユーティリティを使用してスタンドアロン・サーバー・プロファイルを作成することができます。

このセクションでは、**manageprofiles** コマンド行ユーティリティを使用してスタンドアロン・プロファイルを作成する方法について説明します。ここでは、インストーラーを実行済みであり、カスタム・インストールを実行済みであることを想定しています。

また、カスタム・インストールの実行後に、プロファイル管理ツールを使用してスタンドアロン・プロファイルを作成することもできます。

manageprofiles を使用した *Process Center* スタンドアロン・プロファイルの作成:

IBM Business Process Manager Advanced 用の *Process Center* スタンドアロン・プロファイルを作成するには、**manageprofiles** コマンド行ユーティリティを使用します。

manageprofiles コマンド行ユーティリティを実行する前に、以下の作業が完了していることを確認します。

- プロファイルを作成または拡張するための前提条件を確認済みである。

- プロファイル作成コマンドの例を確認済みである。
- 同じプロファイルで **manageprofiles** コマンド行ユーティリティを実行していないことを検査している。エラー・メッセージが表示された場合は、別のプロファイル作成操作や拡張操作が進行中かどうかを確認してください。実行されている場合は、完了するまで待ってください。

このタスクでは、**manageprofiles** コマンド行ユーティリティを使用して IBM Business Process Manager Advanced 用の Process Center プロファイルを作成する方法について説明します。

manageprofiles コマンド行ユーティリティを使用してプロファイルを作成するには、以下のステップを実行します。

1. 作成するプロファイルの種類を決定します。これにより、新しいプロファイルに使用するテンプレートが決まります (**-templatePath** オプションを使用)。

各プロファイルのテンプレートは、*install_root/profileTemplates/BPM* ディレクトリー (BPM テンプレートの場合) および *install_root/profileTemplates* の下 (その他の製品の場合) にあります。

以下のテンプレートを使用できます。

- **default.procctr**: Process Center スタンドアロン・プロファイル用に、IBM BPM Standard 構成および Express 構成に固有の機能を使用してスタンドアロン・サーバーを定義します。
 - **default.procctr.adv**: Process Center のスタンドアロン・プロファイル用です。このプロファイルは、IBM BPM Advanced 構成に固有の機能でスタンドアロン・サーバーを定義します。
2. 『manageprofile の例』に記載されているプロファイル作成コマンドの例を検討して、ご使用のプロファイルのタイプにどのパラメーターが必要であるかを判断します。
 3. プロファイルに提供する値を決定します。これを行うには、**manageprofiles** パラメーターのトピックで示されているデフォルト値を確認して、それらがプロファイルに必要なものであるかどうかを検討します。
 4. 応答ファイルを作成します。

サンプル応答ファイルは、*install_root/BPM/samples/manageprofiles/* ディレクトリーの下にあります。作成するプロファイル (スタンドアロンまたはネットワーク、Process Center または Process Server) に応じて適切な応答ファイルを選択し、環境に合わせてファイルをカスタマイズしてください。

重要: 値の後にスペースが入っている (例えば、'**personalCertValidityPeriod=1** ' や '**winserviceCheck=false** ') ことがないようにしてください。スペースがある場合は、プロファイルの作成が失敗します。

『IBM Business Process Manager サンプルを使用した応答ファイルの作成』を参照してください。

5. **-response** パラメーターと、作成した応答ファイルの名前を使用して、コマンド行から **manageprofiles** コマンドを実行します。

- **Linux** **UNIX** `manageprofiles.sh -response myResponseFile`

- **Windows** `manageprofiles.bat -response myResponseFile`

コマンドにより、実行につれて状況が表示されます。コマンドが終了するまで待機します。他の応答ファイルと同様に、ファイルの構文解析時には応答ファイルに対する通常の構文検査が適用されます。応答ファイルの個々の値はコマンド行パラメーターと見なされます。

6. SMTP サーバーを手動で構成して、メール通知を使用可能にします。『SMTP サーバーの構成』を参照してください。

関連概念:

230 ページの『プロファイルの作成または拡張に関する前提条件』

プロファイルの作成または拡張を実行する前に、一連の前提条件が満たされていることを確認する必要があります。

784 ページの『**manageprofiles** の例』

このセクションの例では、**manageprofiles** コマンド行ユーティリティを使用して、スタンドアロン・プロファイル、デプロイメント・マネージャー・プロファイル、およびカスタム (管理対象ノード) プロファイルを作成する方法を示します。

Standard Process Center 用の応答ファイル:

manageprofiles コマンド行ユーティリティと応答ファイルを使用して、スタンドアロン・プロファイルを作成します。

DB2 用の Standard Process Center スタンドアロン・プロファイル作成の応答ファイル:

ここに用意されている応答ファイルを変更し、**manageprofiles** コマンド行ユーティリティと一緒に使用して、DB2 データベース用のスタンドアロン・プロファイルを作成します。

注: ご使用のオペレーティング・システムに合わせて、必要に応じて応答ファイルの情報をコメント化またはアンコメントしてください。詳細については、応答ファイルのコメントを参照してください。

```
# BEGIN COPYRIGHT
# *****
#
# Licensed Materials - Property of IBM
# 5725-C94
# (C) Copyright IBM Corporation 2011, 2012. All Rights Reserved.
# This sample program is provided AS IS and may be used, executed, copied
# and modified without royalty payment by customer (a) for its own
# instruction and study, (b) in order to develop applications designed to
# run with an IBM WebSphere product, either for customer's own internal
# use or for redistribution by customer, as part of such an application,
# in customer's own products.
#
# *****
# END COPYRIGHT

#####
# These response file has the applicable parameters for creating a
# Standalone PC Std profile that uses DB2.
#
# Depending on your environment, you may need to change the default values.
#
# To create a profile with this response file specify:
#
# was.install.root/bin/manageprofiles -response PC_Std_Standalone_DB2.response
#
# If you use the -response parameter, it must be the only parameter on
# the command-line. If you include any manageprofile parameters
# (in addition to -response) on the command-line, the response file
# is ignored. And default WebSphere Application server profile will be created .
#####

#####
# Parameter: create
#
# Description:
#   Creates the profile.
#   If you are creating a profile, this parameter is required.
#####
create
```

```

#####
# Parameter:  templatePath
#
# Description:
#   Specifies the directory path to the template files in the installation
#   root directory. Within the profileTemplates directory are various
#   directories that correspond to different profile types and that vary with
#   the type of product installed. The profile directories are the paths that
#   you indicate while using the -templatePath option.
#   Use absolute paths. This parameter must exist as a directory and point to
#   a valid template directory.
#
#   When using the -templatePath parameter, specify the fully qualified file
#   path for the parameter.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
templatePath=BPM/default.procctr

#####
# Parameter:  profileName
#
# Description:
#   Specifies the name of the profile. Use a unique value when creating a
#   profile.
#   Each profile that shares the same set of product binaries must have a
#   unique name. The default profile name is based on the profile type and a
#   trailing number, for example:
#   profileType ProfileNumberwhere profileType is a value such as ProcSrv,
#   Dmgr, or Custom and ProfileNumber is a sequential number that creates a
#   unique profile name. The value for this parameter must not contain spaces
#   or characters that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,,
#   /, \, and |. The profile name that you choose must not be in use. On
#   Windows platforms: If the fully qualified path contains spaces, enclose
#   the value in quotation marks. The default value is based on the
#   install_root directory, the profiles subdirectory, and the name of the
#   file. For example, the default for profile creation is:
#   WS_WSPROFILE_DEFAULT_PROFILE_HOME/profileNamewhere
#   WS_WSPROFILE_DEFAULT_PROFILE_HOME is defined in the wasprofile.properties
#   file in the install_root/properties directory. The value for this
#   parameter must be a valid path for the target system and must not be
#   currently in use. You must have permissions to write to the directory.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
profileName=ProcCtr01

#####
# Parameter:  applyPerfTuningSetting
#
# Description:
#   Set a performance tuning level appropriate for the profile you are
#   creating.
#   This parameter is a WebSphere Application Server parameter.
#
# Valid Values:
#   development
#   standard
#   production
# Default Values:
#   None

```



```

#####
#applyPerfTuningSetting=standard

#####
# Parameter: cellName
#
# Description:
#   Specifies the cell name of the profile. Use a unique cell name for each
#   profile.
#   The default value for this parameter is based on a combination of the
#   short host name, the constant Cell, and a trailing number, for example:
#   if (DMgr)
#       shortHostNameCellCellNumber
#   else
#       shortHostNameNodeNodeNumberCell
#   where CellNumber is a sequential number starting at 01 and NodeNumber is
#   the node number that you used to define the node name.
#   The value for this parameter must not contain spaces or any characters
#   that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   Varies
#
# Parameter: nodeName
#
# Description:
#   Specifies the node name for the node that is created with the new profile.
#   Use a unique value within the cell or on the workstation. Each profile
#   that shares the same set of product binaries must have a unique node name.
#   This parameter is required for profile creation only with the
#   dmgr.esbserverdefault.procsvrdefault.procctrdefault.procsvr.advdefault.
#   procctr.advdmgr.procctrmanaged.procctrmanaged.procsvr templates.
#   The default value for this parameter is based on the short host name,
#   profile type, and a trailing number, for example:
#   if (DMgr)
#       shortHostNameCellManagerNodeNumber
#   else
#       shortHostNameNodeNodeNumber
#   where NodeNumber is a sequential number starting at 01.
#   The value for this parameter must not contain spaces or any characters
#   that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   Varies
#
# Parameter: serverName
#
# Description:
#   Specifies the name of the server.
#####
cellName=cell_name
nodeName=node_name
serverName=server1

#####
# Parameter: enableAdminSecurity
#
# Description:
#   For IBM Business Process Manager omit this parameter. Administrative
#   security is always enabled for IBM Business Process Manager profiles.
#   You must also specify the parameters -adminUserName and -adminPassword
#   along with the values for these parameters.
#

```

```

# Valid Values:
#   true
# Default Values:
#   true
#####
enableAdminSecurity=true
adminUserName=adminUser_ID
adminPassword=adminPassword

#####
# Parameter: signingCertDN
#
# Description:
#   Specifies the distinguished name of the root signing certificate that you
#   create when you create the profile. Specify the distinguished name in
#   quotation marks. This default personal certificate is located in the
#   server keystore file. If you do not specifically create or import a root
#   signing certificate, one is created by default. See the
#   -signingCertValidityPeriod parameter and the -keyStorePassword.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: signingCertValidityPeriod
#
# Description:
#   An optional parameter that specifies the amount of time in years that the
#   root signing certificate is valid. If you do not specify this parameter
#   with the -signingCertDN parameter, the root signing certificate is valid
#   for 20 years.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: keyStorePassword
#
# Description:
#   Specifies the password to use on all keystore files created during profile
#   creation. Keystore files are created for the default personal certificate
#   and the root signing certificate.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
#signingCertDN =distinguished_name
#signingCertValidityPeriod =validity_period
#keyStorePassword =keyStore_password

#####
# Parameter: defaultPorts
#
# Description:
#   Assigns the default or base port values to the profile.d o not use this
#   parameter when using the -startingPort or -portsFile parameter.
#   During profile creation, the manageprofiles command-line utility uses an
#   automatically generated set of recommended ports if you do not specify the
#   -startingPort parameter, the -defaultPorts parameter or the -portsFile
#   parameter. The recommended port values can be different than the default
#   port values based on the availability of the default ports.
#
# Valid Values:

```

```

#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter:  startingPort
#
# Description:
#   Specifies the starting port number for generating and assigning all ports
#   for the profile.
#   Port values are assigned sequentially from the -startingPort value,
#   omitting those ports that are already in use. The system recognizes and
#   resolves ports that are currently in use and determines the port
#   assignments to avoid port conflicts.
#   Do not use this parameter with the -defaultPorts or -portsFile parameters.
#   During profile creation, the manageprofiles command-line utility uses an
#   automatically generated set of recommended ports if you do not specify the
#   -startingPort parameter, the -defaultPorts parameter or the -portsFile
#   parameter. The recommended port values can be different than the default
#   port values based on the availability of the default ports.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter:  portsFile
#
# Description:
#   An optional parameter that specifies the path to a file that defines port
#   settings for the new profile.
#   Do not use this parameter when using the -startingPort or -defaultPorts
#   parameter.
#   During profile creation, the manageprofiles command-line utility uses an
#   automatically generated set of recommended ports if you do not specify the
#   -startingPort parameter, the -defaultPorts parameter or the -portsFile
#   parameter. The recommended port values can be different than the default
#   port values based on the availability of the default ports.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
#defaultPorts=default_ports
#startingPort=startingPort
#portsFile=file_path
#####
# Parameter:  enableService
#
# Description:
#   Enables the creation of a Linux service. Valid values include true or
#   false. The default value for this parameter is false. When the
#   manageprofiles command-line utility is run with the -enableService option
#   set to true , the Linux service is created with the profile when the
#   command is run by the root user. When a nonroot user runs the
#   manageprofiles command-line utility, the profile is created, but the Linux
#   service is not. The Linux service is not created because the nonroot user
#   does not have sufficient permission to set up the service. An
#   INSTCONPARTIALSUCCESS result is displayed at the end of the profile
#   creation and the profile creation log
#   install_root/logs/manageprofiles/profile_name_create.log contains a
#   message indicating the current user does not have sufficient permission to
#   set up the Linux service. Use this parameter when creating profiles only.
#
# Valid Values:
#   false

```

```

# true
# Default Values:
# None
#
# Parameter: serviceUserName
#
# Description:
# Specifies the user ID that is used during the creation of the Linux
# service so that the Linux service will run under this user ID. The Linux
# service runs whenever the user ID is logged on. Not required.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# None
#
# Parameter: winserviceAccountType
#
# Description:
# The type of the owner account of the Windows service created for the
# profile. Valid values include specifieduser or localsystem. The
# localsystem value runs the Windows service under the local account of the
# user who creates the profile. The default value for this parameter is
# localsystem. Use this parameter when creating profiles only.
#
# Valid Values:
# localsystem
# specifieduser
# Default Values:
# localsystem
#
# Parameter: winserviceUserName
#
# Description:
# Specify your user ID so that the Windows operating system can verify you
# as an ID that is capable of creating a Windows service. Your user ID must
# belong to the Administrator group and have the following advanced user
# rights:
# Act as part of the operating system
# Log on as a service
# The default value for this parameter is the current user name. The value
# for this parameter must not contain spaces or characters that are not
# valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |. The user that
# you specify must have the proper permissions to create a Windows service.
# You must specify the correct password for the user name that you choose.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# None
#
# Parameter: winservicePassword
#
# Description:
# Specify the password for the specified user or the local account that is
# to own the Windows service.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# None
#
# Parameter: winserviceCheck
#
# Description:
# The value can be either true or false. Specify true to create a Windows
# service for the server process that is created within the profile. Specify

```

```

# false to not create the Windows service. The default value for this
# parameter is false.
#
# Valid Values:
# false
# true
# Default Values:
# false
#
# Parameter: winserviceStartupType
#
# Description:
# The following values for Windows service startup can be used:
# manual
# automatic
# disabled
# The default value for this parameter is manual.
#
# Valid Values:
# manual
# automatic
# disabled
# Default Values:
# manual
#####
#enableService=true
#serviceName=service_user_ID
#winserviceAccountType=localsystem
#winserviceUserName=winservice_user_ID
#winservicePassword=winservice_password
#winserviceCheck=false
#winserviceStartupType>manual

#####
# Parameter: bpmdbDesign
#
# Description:
# Specifies the file that holds the database configuration design for all of
# the IBM Business Process Manager components .
# This parameter replaces the -wbldbDesign that was used in previous
# versions of WebSphere Process Server.
#
# Note: If a bpmdbDesign file parameter is specified, none of the database
# related properties should be specified.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# None
#####
#bpmdbDesign=design_file

#####
# Parameter: dbCreateNew
#
# Description:
# Indicates a new database is created or if an existing database is to be
# reused. Valid values are true or false. This value cannot be true for an
# Oracle, SQL Server or a DB2 z/OS database. This value can only be true for
# a DB2 database.
#
# Valid Values:
# false
# true
# Default Values:
# None
#####

```

```

dbCreateNew=true

#####
# Parameter: dbType
#
# Description:
#   The database type. Set one of the following values for the type of
#   database product you are using with IBM Business Process Manager.
#
#   Required only for one of the following:
#   A stand-alone profile when -bpmdbDesign was not specified.
#   An advanced dmgr or managed profiles when -bpmdbDesign was not specified.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   DB2_DATASERVER
# Default Values:
#   DB2_DATASERVER
#
# Parameter: dbJDBCClasspath
#
# Description:
#   The directory path location of JDBC driver files.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: dbHostName
#
# Description:
#   The database server host name or IP address. The default value is the
#   local host name. Required when the -bpmdbDesign parameter was not
#   specified. (It is not required if the -bpmdbDesign parameter is
#   specified.)
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: dbServerPort
#
# Description:
#   The database server port number. Depending on the database you are using,
#   you can specify a different port number instead of the default port
#   number.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
dbType=DB2_DATASERVER
dbJDBCClasspath=${WAS_INSTALL_ROOT}/jdbcdrivers/DB2
dbHostName=db_host_name
dbServerPort=db_port_number

#####

```



```

# Parameter: dbDelayConfig
#
# Description:
# Indicates whether to postpone table creation until after the profile is
# created. Valid values are true or false. The parameter is set to false by
# default. Setting this parameter to true delays the execution of the
# scripts that create the database tables. No. Specify false if you want the
# database to be set up during profile creation.
#
# Valid Values:
# false
# true
# Default Values:
# false
#####
dbDelayConfig=false

#####
# Parameter: dbName
#
# Description:
# The name of the database. By default, the value is set to orcl for Oracle
# databases and to CMNDB for all other supported databases.
#
# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# CMNDB
#
# Parameter: dbUserId
#
# Description:
# The user ID for all database types. Specifies the user ID that has
# privileges to create and drop the databases. The WebSphere data source
# uses this ID to authenticate the database connection.
# Important: The -dbUserId parameter value must be a valid database
# authorization ID. Required if the -bpmdbDesign file is not set.
#
# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# None
#
# Parameter: dbPassword
#
# Description:
# The password required for database authentication. Required when the
# -bpmdbDesign file is not set.
#
# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# None
#####
dbName=CMNDB
dbUserId=db_userid
dbPassword=db_pswd

#####
# Parameter: procSvrDbName
#

```

```

# Description:
# Database name for Process Server database. The value specified for
# -procSvrDbName and -perfDWDbName must be different.
#
# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# None
#
# Parameter: dbProcSvrUserId
#
# Description:
# The Process Server user name. Required for setting up the Process Server.
#
# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# None
#
# Parameter: dbProcSvrPassword
#
# Description:
# The Process Server password. Required for setting up the Process Server.
#
# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# None
#####
procSvrDbName=procSvr_Db_Name
dbProcSvrUserId=db_ProcSvr_UserId_name
dbProcSvrPassword=db_ProcSvr_Password
#####
# Parameter: perfDWDbName
#
# Description:
# Database name for Performance Data Warehouse. The value specified for
# -perfDWDbName and -procSvrDbName must be different.
#
# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Parameter: dbPerfDWUserId
#
# Description:
# Performance Data Warehouse user name. Required for setting up the
# Performance Data Warehouse.
#
# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Parameter: dbPerfDWPassword
#
# Description:
# Performance Data Warehouse password. Required for setting up the
# Performance Data Warehouse.
#
# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#####
perfDWDbName=perfDW_Db_Name
dbPerfDWUserId=db_PerfDW_UserId
dbPerfDWPassword=db_PerfDW_Password

```

```

#####
# Parameter: dbProcSvrMeUserId
#
# Description:
#   Process Server Messaging Engine user name. Required for setting up the
#   Process Server Messaging Engine. If you enter a user-specified a user name
#   and password during profile creation and if you specified ORACLE for
#   dbType, this parameter is required.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: dbProcSvrMePassword
#
# Description:
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
#dbProcSvrMeUserId=db_ProcSvr_ME_UserID
#dbProcSvrMePassword=db_ProcSvr_Me_Password

#####
# Parameter: dbPerfDWMeUserId
#
# Description:
#   Performance Data Warehouse Messaging Engine user name. Required for
#   setting up the Performance Data Warehouse Messaging Engine.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: dbPerfDWMePassword
#
# Description:
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
#dbPerfDWMeUserId=db_PerfDW_Me_UserId
#dbPerfDWMePassword=db_PerfDW_ME_Password

#####
# Parameter: cdbSchemaName
#
# Description:
#   The schema name for the Common database. If no value is specified, the
#   following default database schema names are used:
#   DB2 database
#   The default schema name is the value specified by the dbUserId parameter.
#   The -cdbSchemaName parameter is valid for all database types except for
#   Oracle and Microsoft SQL Server.

```

```

#
# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: dbCommonUserId
#
# Description:
#   The user id to authenticate with the Common database.
#
# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: dbCommonPassword
#
# Description:
#   The password for the user id of the dbCommonUserId parameter.
#
# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
#cdbSchemaName=db_schema_name
#dbCommonUserId=common_db_userid
#dbCommonPassword=common_db_pswd
#####
# Parameter: environmentName
#
# Description:
#   Specifies the name of the environment you are configuring. This parameter
#   has no default value, and it must not be empty.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
environmentName=environment_name
#####
# Parameter: environmentType
#
# Description:
#   Specifies the environment type. The environment type refers to how IBM
#   Business Process Manager is used; for example, in a production, stage or
#   test environment. Load testing might be done on a test server, while a
#   stage environment type might be used as a temporary location to host
#   changes before putting those changes into production. You might specify
#   Stage as the Environment type if the server you are configuring will be
#   accessed and used to review content and new functionality. Valid values
#   are as follows:
#   Test
#   Use Test if the server you are configuring is to be used as a testing
#   environment.
#   Stage
#   Use Stage if the server is to serve as a staging platform to be used as a

```

```

#    preproduction server.
#    Production
#    Use Production if the server is to serve in a production capacity.
#    The default value is Test.
#
# Valid Values:
#    Test
#    Production
#    Stage
# Default Values:
#    Test
#####
environmentType=Test

#####
# Parameter:  isDeveloperServer
#
# Description:
#    Specifies whether the server is intended for development purposes only.
#    This parameter is useful when creating profiles to test applications on a
#    non-production server prior to deploying the applications on their
#    production application servers. If -isDeveloperServer is set when
#    creating an IBM Business Process Manager profile, then a preconfigured VMM
#    file repository is installed. This file repository contains a sample
#    organization that can be used to test Business Process Choreographer
#    people resolution, ready for you to use as is.
#
# Valid Values:
#    false
#    true
# Default Values:
#    false
#####
#isDeveloperServer=false

#####
# Parameter:  samplesPassword
#
# Description:
#    Creates a password to be used for samples. The password is used to
#    restrict access to Web application samples installed during the
#    installation of the application server.
#
# Valid Values:
#    Varies
# Default Values:
#    None
#####
samplesPassword=samplesPassword

```

DB2 for z/OS 用の Standard Process Center スタンドアロン・プロファイル作成の応答ファイル:

ここに用意されている応答ファイルを変更し、**manageprofiles** コマンド行ユーティリティと一緒に使用して、DB2 for z/OS データベース用のスタンドアロン・プロファイルを作成します。

注: ご使用のオペレーティング・システムに合わせて、必要に応じて応答ファイルの情報をコメント化またはアンコメントしてください。詳細については、応答ファイルのコメントを参照してください。

```

# BEGIN COPYRIGHT
# *****
#
# Licensed Materials - Property of IBM
# 5725-C94
# (C) Copyright IBM Corporation 2011, 2012. All Rights Reserved.
# This sample program is provided AS IS and may be used, executed, copied
# and modified without royalty payment by customer (a) for its own

```

```

# instruction and study, (b) in order to develop applications designed to
# run with an IBM WebSphere product, either for customer's own internal
# use or for redistribution by customer, as part of such an application,
# in customer's own products.
#
# *****
# END COPYRIGHT

#####
# These response file has the applicable parameters for creating a
# Standalone PC Std profile that uses DB2zOS.
#
# Depending on your environment, you may need to change the default values.
#
# To create a profile with this response file specify:
#
# was.install.root/bin/manageprofiles -response PC_Std_Standalone_DB2zOS.response
#
# If you use the -response parameter, it must be the only parameter on
# the command-line. If you include any manageprofile parameters
# (in addition to -response) on the command-line, the response file
# is ignored. And default WebSphere Application server profile will be created .
#####

#####
# Parameter: create
#
# Description:
#   Creates the profile.
#   If you are creating a profile, this parameter is required.
#####
create

#####
# Parameter: templatePath
#
# Description:
#   Specifies the directory path to the template files in the installation
#   root directory. Within the profileTemplates directory are various
#   directories that correspond to different profile types and that vary with
#   the type of product installed. The profile directories are the paths that
#   you indicate while using the -templatePath option.
#   Use absolute paths. This parameter must exist as a directory and point to
#   a valid template directory.
#
#   When using the -templatePath parameter, specify the fully qualified file
#   path for the parameter.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
templatePath=BPM/default.procctr

#####
# Parameter: profileName
#
# Description:
#   Specifies the name of the profile. Use a unique value when creating a
#   profile.
#   Each profile that shares the same set of product binaries must have a
#   unique name. The default profile name is based on the profile type and a
#   trailing number, for example:
#   profileType ProfileNumberwhere profileType is a value such as ProcSrv,
#   Dmgr, or Custom and ProfileNumber is a sequential number that creates a
#   unique profile name. The value for this parameter must not contain spaces

```



```

# or characters that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,,
# /, \, and |. The profile name that you choose must not be in use. On
# Windows platforms: If the fully qualified path contains spaces, enclose
# the value in quotation marks. The default value is based on the
# install_root directory, the profiles subdirectory, and the name of the
# file. For example, the default for profile creation is:
# WS_WSPROFILE_DEFAULT_PROFILE_HOME/profileNamewhere
# WS_WSPROFILE_DEFAULT_PROFILE_HOME is defined in the wasprofile.properties
# file in the install_root/properties directory. The value for this
# parameter must be a valid path for the target system and must not be
# currently in use. You must have permissions to write to the directory.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
profileName=ProcCtr01
#####
# Parameter: applyPerfTuningSetting
#
# Description:
#   Set a performance tuning level appropriate for the profile you are
#   creating.
#   This parameter is a WebSphere Application Server parameter.
#
# Valid Values:
#   development
#   standard
#   production
# Default Values:
#   None
#####
#applyPerfTuningSetting=standard
#####
# Parameter: cellName
#
# Description:
#   Specifies the cell name of the profile. Use a unique cell name for each
#   profile.
#   The default value for this parameter is based on a combination of the
#   short host name, the constant Cell, and a trailing number, for example:
#   if (DMgr)
#       shortHostNameCellCellNumber
#   else
#       shortHostNameNodeNodeNumberCell
#   where CellNumber is a sequential number starting at 01 and NodeNumber is
#   the node number that you used to define the node name.
#   The value for this parameter must not contain spaces or any characters
#   that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   Varies
#
# Parameter: nodeName
#
# Description:
#   Specifies the node name for the node that is created with the new profile.
#   Use a unique value within the cell or on the workstation. Each profile
#   that shares the same set of product binaries must have a unique node name.
#   This parameter is required for profile creation only with the
#   dmgr.esbserverdefault.procsvrdefault.procctrdefault.procsvr.advdefault.
#   procctr.advmgr.procctrmanaged.procctrmanaged.procsvr templates.

```

```

# The default value for this parameter is based on the short host name,
# profile type, and a trailing number, for example:
# if (DMgr)
#     shortHostNameCellManagerNodeNumber
# else
#     shortHostNameNodeNodeNumber
# where NodeNumber is a sequential number starting at 01.
# The value for this parameter must not contain spaces or any characters
# that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |.
#
# Valid Values:
#     Varies
# Default Values:
#     Varies
#
# Parameter:  serverName
#
# Description:
#     Specifies the name of the server.
#####
cellName=cell_name
nodeName=node_name
serverName=server1
#####
# Parameter:  enableAdminSecurity
#
# Description:
#     For IBM Business Process Manager omit this parameter. Administrative
#     security is always enabled for IBM Business Process Manager profiles.
#     You must also specify the parameters -adminUserName and -adminPassword
#     along with the values for these parameters.
#
# Valid Values:
#     true
# Default Values:
#     true
#####
enableAdminSecurity=true
adminUserName=adminUser_ID
adminPassword=adminPassword
#####
# Parameter:  signingCertDN
#
# Description:
#     Specifies the distinguished name of the root signing certificate that you
#     create when you create the profile. Specify the distinguished name in
#     quotation marks. This default personal certificate is located in the
#     server keystore file. If you do not specifically create or import a root
#     signing certificate, one is created by default. See the
#     -signingCertValidityPeriod parameter and the -keyStorePassword.
#
# Valid Values:
#     Varies
# Default Values:
#     None
#
# Parameter:  signingCertValidityPeriod
#
# Description:
#     An optional parameter that specifies the amount of time in years that the
#     root signing certificate is valid. If you do not specify this parameter
#     with the -signingCertDN parameter, the root signing certificate is valid
#     for 20 years.
#
# Valid Values:

```

```

#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter:  keyStorePassword
#
# Description:
#   Specifies the password to use on all keystore files created during profile
#   creation. Keystore files are created for the default personal certificate
#   and the root signing certificate.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
#signingCertDN =distinguished_name
#signingCertValidityPeriod =validity_period
#keyStorePassword =keyStore_password
#####
# Parameter:  defaultPorts
#
# Description:
#   Assigns the default or base port values to the profile.d o not use this
#   parameter when using the -startingPort or -portsFile parameter.
#   During profile creation, the manageprofiles command-line utility uses an
#   automatically generated set of recommended ports if you do not specify the
#   -startingPort parameter, the -defaultPorts parameter or the -portsFile
#   parameter. The recommended port values can be different than the default
#   port values based on the availability of the default ports.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter:  startingPort
#
# Description:
#   Specifies the starting port number for generating and assigning all ports
#   for the profile.
#   Port values are assigned sequentially from the -startingPort value,
#   omitting those ports that are already in use. The system recognizes and
#   resolves ports that are currently in use and determines the port
#   assignments to avoid port conflicts.
#   Do not use this parameter with the -defaultPorts or -portsFile parameters.
#   During profile creation, the manageprofiles command-line utility uses an
#   automatically generated set of recommended ports if you do not specify the
#   -startingPort parameter, the -defaultPorts parameter or the -portsFile
#   parameter. The recommended port values can be different than the default
#   port values based on the availability of the default ports.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter:  portsFile
#
# Description:
#   An optional parameter that specifies the path to a file that defines port
#   settings for the new profile.
#   Do not use this parameter when using the -startingPort or -defaultPorts
#   parameter.
#   During profile creation, the manageprofiles command-line utility uses an
#   automatically generated set of recommended ports if you do not specify the

```

```

# -startingPort parameter, the -defaultPorts parameter or the -portsFile
# parameter. The recommended port values can be different than the default
# port values based on the availability of the default ports.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
#defaultPorts=default_ports
#startingPort=startingPort
#portsFile=file_path
#####
# Parameter: enableService
#
# Description:
#   Enables the creation of a Linux service. Valid values include true or
#   false. The default value for this parameter is false. When the
#   manageprofiles command-line utility is run with the -enableService option
#   set to true , the Linux service is created with the profile when the
#   command is run by the root user. When a nonroot user runs the
#   manageprofiles command-line utility, the profile is created, but the Linux
#   service is not. The Linux service is not created because the nonroot user
#   does not have sufficient permission to set up the service. An
#   INSTCONPARTIALSUCCESS result is displayed at the end of the profile
#   creation and the profile creation log
#   install_root/logs/manageprofiles/profile_name_create.log contains a
#   message indicating the current user does not have sufficient permission to
#   set up the Linux service. Use this parameter when creating profiles only.
#
# Valid Values:
#   false
#   true
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: serviceUserName
#
# Description:
#   Specifies the user ID that is used during the creation of the Linux
#   service so that the Linux service will run under this user ID. The Linux
#   service runs whenever the user ID is logged on. Not required.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: winserviceAccountType
#
# Description:
#   The type of the owner account of the Windows service created for the
#   profile. Valid values include specifieduser or localsystem. The
#   localsystem value runs the Windows service under the local account of the
#   user who creates the profile. The default value for this parameter is
#   localsystem. Use this parameter when creating profiles only.
#
# Valid Values:
#   localsystem
#   specifieduser
# Default Values:
#   localsystem
#
# Parameter: winserviceUserName
#
# Description:

```

```

# Specify your user ID so that the Windows operating system can verify you
# as an ID that is capable of creating a Windows service. Your user ID must
# belong to the Administrator group and have the following advanced user
# rights:
# Act as part of the operating system
# Log on as a service
# The default value for this parameter is the current user name. The value
# for this parameter must not contain spaces or characters that are not
# valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |. The user that
# you specify must have the proper permissions to create a Windows service.
# You must specify the correct password for the user name that you choose.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# None
#
# Parameter: winservicePassword
#
# Description:
# Specify the password for the specified user or the local account that is
# to own the Windows service.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# None
#
# Parameter: winserviceCheck
#
# Description:
# The value can be either true or false. Specify true to create a Windows
# service for the server process that is created within the profile. Specify
# false to not create the Windows service. The default value for this
# parameter is false.
#
# Valid Values:
# false
# true
# Default Values:
# false
#
# Parameter: winserviceStartupType
#
# Description:
# The following values for Windows service startup can be used:
# manual
# automatic
# disabled
# The default value for this parameter is manual.
#
# Valid Values:
# manual
# automatic
# disabled
# Default Values:
# manual
#####
#enableService=true
#serviceName=service_user_ID
#winserviceAccountType=localsystem
#winserviceUserName=winservice_user_ID
#winservicePassword=winservice_password
#winserviceCheck=false
#winserviceStartupType>manual
#####

```

```

# Parameter:  bpmdbDesign
#
# Description:
#   Specifies the file that holds the database configuration design for all of
#   the IBM Business Process Manager components .
#   This parameter replaces the -wbidbDesign that was used in previous
#   versions of WebSphere Process Server.
#
#   Note: If a bpmdbDesign file parameter is specified, none of the database
#   related properties should be specified.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
#bpmdbDesign=design_file

#####
# Parameter:  dbCreateNew
#
# Description:
#   Indicates a new database is created or if an existing database is to be
#   reused. Valid values are true or false. This value cannot be true for an
#   Oracle, SQL Server or a DB2 z/OS database. This value can only be true for
#   a DB2 database.
#
# Valid Values:
#   false
# Default Values:
#   false
#####
dbCreateNew=false

#####
# Parameter:  dbType
#
# Description:
#   The database type. Set one of the following values for the type of
#   database product you are using with IBM Business Process Manager.
#
#   Required only for one of the following:
#   A stand-alone profile when -bpmdbDesign was not specified.
#   An advanced dmgr or managed profiles when -bpmdbDesign was not specified.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   DB2UDBOS390
# Default Values:
#   DB2UDBOS390
#####
dbType=DB2UDBOS390

#####
# Parameter:  dbDelayConfig
#
# Description:
#   Indicates whether to postpone table creation until after the profile is
#   created. Valid values are true or false. The parameter is set to false by
#   default. Setting this parameter to true delays the execution of the
#   scripts that create the database tables. No. Specify false if you want the
#   database to be set up during profile creation.
#
# Valid Values:
#   false
#   true

```



```

# Default Values:
#   false
#####
dbDelayConfig=true

#####
# Parameter: dbName
#
# Description:
#   The name of the database. By default, the value is set to orcl for Oracle
#   databases and to CMNDB for all other supported databases.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   CMNDB
#
# Parameter: dbUserId
#
# Description:
#   The user ID for all database types. Specifies the user ID that has
#   privileges to create and drop the databases. The WebSphere data source
#   uses this ID to authenticate the database connection.
#   Important: The -dbUserId parameter value must be a valid database
#   authorization ID. Required if the -bpmdbDesign file is not set.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: dbPassword
#
# Description:
#   The password required for database authentication. Required when the
#   -bpmdbDesign file is not set.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
dbName=CMNDB
dbUserId=db_userid
dbPassword=db_pswd

#####
# Parameter: procSvrDbName
#
# Description:
#   Database name for Process Server database. The value specified for
#   -procSvrDbName and -perfDWDbName must be different.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: dbProcSvrUserId

```

```

#
# Description:
#   The Process Server user name. Required for setting up the Process Server.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter:  dbProcSvrPassword
#
# Description:
#   The Process Server password. Required for setting up the Process Server.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
procSvrDbName=procSvr_Db_Name
dbProcSvrUserId=db_ProcSvr_UserId_name
dbProcSvrPassword=db_ProcSvr_Password
#####
# Parameter:  perfDWDbName
#
# Description:
#   Database name for Performance Data Warehouse. The value specified for
#   -perfDWDbName and -procSvrDbName must be different.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Parameter:  dbPerfDWUserId
#
# Description:
#   Performance Data Warehouse user name. Required for setting up the
#   Performance Data Warehouse.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Parameter:  dbPerfDWPassword
#
# Description:
#   Performance Data Warehouse password. Required for setting up the
#   Performance Data Warehouse.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#####
perfDWDbName=perfDW_Db_Name
dbPerfDWUserId=db_PerfDW_UserId
dbPerfDWPassword=db_PerfDW_Password
#####
# Parameter:  dbStorageGroup
#
# Description:
#   The storage group name for DB2 z/OS databases.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:

```

```

# None
#
# Parameter: dbConnectionLocation
#
# Description:
#   The location of DB2 for z/OS database.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
dbStorageGroup=db_stg_group
dbConnectionLocation=db2_location
#####
# Parameter: environmentName
#
# Description:
#   Specifies the name of the environment you are configuring. This parameter
#   has no default value, and it must not be empty.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
environmentName=environment_name
#####
# Parameter: environmentType
#
# Description:
#   Specifies the environment type. The environment type refers to how IBM
#   Business Process Manager is used; for example, in a production, stage or
#   test environment. Load testing might be done on a test server, while a
#   stage environment type might be used as a temporary location to host
#   changes before putting those changes into production. You might specify
#   Stage as the Environment type if the server you are configuring will be
#   accessed and used to review content and new functionality. Valid values
#   are as follows:
#   Test
#   Use Test if the server you are configuring is to be used as a testing
#   environment.
#   Stage
#   Use Stage if the server is to serve as a staging platform to be used as a
#   preproduction server.
#   Production
#   Use Production if the server is to serve in a production capacity.
#   The default value is Test.
#
# Valid Values:
#   Test
#   Production
#   Stage
# Default Values:
#   Test
#####
environmentType=Test
#####
# Parameter: isDeveloperServer
#
# Description:
#   Specifies whether the server is intended for development purposes only.

```

```

# This parameter is useful when creating profiles to test applications on a
# non-production server prior to deploying the applications on their
# production application servers. If -isDeveloperServer is set when
# creating an IBM Business Process Manager profile, then a preconfigured VMM
# file repository is installed. This file repository contains a sample
# organization that can be used to test Business Process Choreographer
# people resolution, ready for you to use as is.
#
# Valid Values:
# false
# true
# Default Values:
# false
#####
#isDeveloperServer=false

#####
# Parameter: samplesPassword
#
# Description:
# Creates a password to be used for samples. The password is used to
# restrict access to Web application samples installed during the
# installation of the application server.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# None
#####
samplesPassword=samplesPassword

```

Oracle 用の Standard Process Center スタンドアロン・プロファイル作成の応答ファイル:

ここに用意されている応答ファイルを変更し、**manageprofiles** コマンド行ユーティリティと一緒に使用して、Oracle データベース用のスタンドアロン・プロファイルを作成します。

注: ご使用のオペレーティング・システムに合わせて、必要に応じて応答ファイルの情報をコメント化またはアンコメントしてください。詳細については、応答ファイルのコメントを参照してください。

```

# BEGIN COPYRIGHT
# *****
#
# Licensed Materials - Property of IBM
# 5725-C94
# (C) Copyright IBM Corporation 2011, 2012. All Rights Reserved.
# This sample program is provided AS IS and may be used, executed, copied
# and modified without royalty payment by customer (a) for its own
# instruction and study, (b) in order to develop applications designed to
# run with an IBM WebSphere product, either for customer's own internal
# use or for redistribution by customer, as part of such an application,
# in customer's own products.
#
# *****
# END COPYRIGHT

#####
# These response file has the applicable parameters for creating a
# Standalone PC Std profile that uses Oracle.
#
# Depending on your environment, you may need to change the default values.
#
# To create a profile with this response file specify:
#
# was.install.root/bin/manageprofiles -response PC_Std_Standalone_Oracle.response
#
# If you use the -response parameter, it must be the only parameter on

```

```

# the command-line. If you include any manageprofile parameters
# (in addition to -response) on the command-line, the response file
# is ignored. And default WebSphere Application server profile will be created .
#####

#####
# Parameter: create
#
# Description:
#   Creates the profile.
#   If you are creating a profile, this parameter is required.
#####
create

#####
# Parameter: templatePath
#
# Description:
#   Specifies the directory path to the template files in the installation
#   root directory. Within the profileTemplates directory are various
#   directories that correspond to different profile types and that vary with
#   the type of product installed. The profile directories are the paths that
#   you indicate while using the -templatePath option.
#   Use absolute paths. This parameter must exist as a directory and point to
#   a valid template directory.
#
#   When using the -templatePath parameter, specify the fully qualified file
#   path for the parameter.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
templatePath=BPM/default.procctr

#####
# Parameter: profileName
#
# Description:
#   Specifies the name of the profile. Use a unique value when creating a
#   profile.
#   Each profile that shares the same set of product binaries must have a
#   unique name. The default profile name is based on the profile type and a
#   trailing number, for example:
#   profileType ProfileNumberwhere profileType is a value such as ProcSrv,
#   Dmgr, or Custom and ProfileNumber is a sequential number that creates a
#   unique profile name. The value for this parameter must not contain spaces
#   or characters that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,,
#   /, \, and |. The profile name that you choose must not be in use. On
#   Windows platforms: If the fully qualified path contains spaces, enclose
#   the value in quotation marks. The default value is based on the
#   install_root directory, the profiles subdirectory, and the name of the
#   file. For example, the default for profile creation is:
#   WS_WSPROFILE_DEFAULT_PROFILE_HOME/profileNamewhere
#   WS_WSPROFILE_DEFAULT_PROFILE_HOME is defined in the wasprofile.properties
#   file in the install_root/properties directory. The value for this
#   parameter must be a valid path for the target system and must not be
#   currently in use. You must have permissions to write to the directory.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
profileName=ProcCtr01

```

```

#####
# Parameter: applyPerfTuningSetting
#
# Description:
#   Set a performance tuning level appropriate for the profile you are
#   creating.
#   This parameter is a WebSphere Application Server parameter.
#
# Valid Values:
#   development
#   standard
#   production
# Default Values:
#   None
#####
#applyPerfTuningSetting=standard

#####
# Parameter: cellName
#
# Description:
#   Specifies the cell name of the profile. Use a unique cell name for each
#   profile.
#   The default value for this parameter is based on a combination of the
#   short host name, the constant Cell, and a trailing number, for example:
#   if (DMgr)
#       shortHostNameCellCellNumber
#   else
#       shortHostNameNodeNodeNumberCell
#   where CellNumber is a sequential number starting at 01 and NodeNumber is
#   the node number that you used to define the node name.
#   The value for this parameter must not contain spaces or any characters
#   that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   Varies
#
# Parameter: nodeName
#
# Description:
#   Specifies the node name for the node that is created with the new profile.
#   Use a unique value within the cell or on the workstation. Each profile
#   that shares the same set of product binaries must have a unique node name.
#   This parameter is required for profile creation only with the
#   dmgr.esbserverdefault.procsvrdefault.procctrdefault.procsvr.advdefault.
#   procctr.advdmgr.procctrmanaged.procctrmanaged.procsvr templates.
#   The default value for this parameter is based on the short host name,
#   profile type, and a trailing number, for example:
#   if (DMgr)
#       shortHostNameCellManagerNodeNumber
#   else
#       shortHostNameNodeNodeNumber
#   where NodeNumber is a sequential number starting at 01.
#   The value for this parameter must not contain spaces or any characters
#   that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   Varies
#
# Parameter: serverName
#
# Description:
#   Specifies the name of the server.

```



```

#####
cellName=cell_name
nodeName=node_name
serverName=server1

#####
# Parameter: enableAdminSecurity
#
# Description:
#   For IBM Business Process Manager omit this parameter. Administrative
#   security is always enabled for IBM Business Process Manager profiles.
#   You must also specify the parameters -adminUserName and -adminPassword
#   along with the values for these parameters.
#
# Valid Values:
#   true
# Default Values:
#   true
#####
enableAdminSecurity=true
adminUserName=adminUser_ID
adminPassword=adminPassword

#####
# Parameter: signingCertDN
#
# Description:
#   Specifies the distinguished name of the root signing certificate that you
#   create when you create the profile. Specify the distinguished name in
#   quotation marks. This default personal certificate is located in the
#   server keystore file. If you do not specifically create or import a root
#   signing certificate, one is created by default. See the
#   -signingCertValidityPeriod parameter and the -keyStorePassword.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: signingCertValidityPeriod
#
# Description:
#   An optional parameter that specifies the amount of time in years that the
#   root signing certificate is valid. If you do not specify this parameter
#   with the -signingCertDN parameter, the root signing certificate is valid
#   for 20 years.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: keyStorePassword
#
# Description:
#   Specifies the password to use on all keystore files created during profile
#   creation. Keystore files are created for the default personal certificate
#   and the root signing certificate.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
#signingCertDN =distinguished_name
#signingCertValidityPeriod =validity_period
#keyStorePassword =keyStore_password

```

```

#####
# Parameter: defaultPorts
#
# Description:
#   Assigns the default or base port values to the profile.d o not use this
#   parameter when using the -startingPort or -portsFile parameter.
#   During profile creation, the manageprofiles command-line utility uses an
#   automatically generated set of recommended ports if you do not specify the
#   -startingPort parameter, the -defaultPorts parameter or the -portsFile
#   parameter. The recommended port values can be different than the default
#   port values based on the availability of the default ports.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: startingPort
#
# Description:
#   Specifies the starting port number for generating and assigning all ports
#   for the profile.
#   Port values are assigned sequentially from the -startingPort value,
#   omitting those ports that are already in use. The system recognizes and
#   resolves ports that are currently in use and determines the port
#   assignments to avoid port conflicts.
#   Do not use this parameter with the -defaultPorts or -portsFile parameters.
#   During profile creation, the manageprofiles command-line utility uses an
#   automatically generated set of recommended ports if you do not specify the
#   -startingPort parameter, the -defaultPorts parameter or the -portsFile
#   parameter. The recommended port values can be different than the default
#   port values based on the availability of the default ports.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: portsFile
#
# Description:
#   An optional parameter that specifies the path to a file that defines port
#   settings for the new profile.
#   Do not use this parameter when using the -startingPort or -defaultPorts
#   parameter.
#   During profile creation, the manageprofiles command-line utility uses an
#   automatically generated set of recommended ports if you do not specify the
#   -startingPort parameter, the -defaultPorts parameter or the -portsFile
#   parameter. The recommended port values can be different than the default
#   port values based on the availability of the default ports.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
#defaultPorts=default_ports
#startingPort=startingPort
#portsFile=file_path
#####
# Parameter: enableService
#
# Description:
#   Enables the creation of a Linux service. Valid values include true or
#   false. The default value for this parameter is false. When the

```

```

# manageprofiles command-line utility is run with the -enableService option
# set to true , the Linux service is created with the profile when the
# command is run by the root user. When a nonroot user runs the
# manageprofiles command-line utility, the profile is created, but the Linux
# service is not. The Linux service is not created because the nonroot user
# does not have sufficient permission to set up the service. An
# INSTCONPARTIALSUCCESS result is displayed at the end of the profile
# creation and the profile creation log
# install_root/logs/manageprofiles/profile_name_create.log contains a
# message indicating the current user does not have sufficient permission to
# set up the Linux service. Use this parameter when creating profiles only.
#
# Valid Values:
#   false
#   true
# Default Values:
#   None
#
# Parameter:  serviceName
#
# Description:
#   Specifies the user ID that is used during the creation of the Linux
#   service so that the Linux service will run under this user ID. The Linux
#   service runs whenever the user ID is logged on. Not required.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter:  winserviceAccountType
#
# Description:
#   The type of the owner account of the Windows service created for the
#   profile. Valid values include specifieduser or localsystem. The
#   localsystem value runs the Windows service under the local account of the
#   user who creates the profile. The default value for this parameter is
#   localsystem. Use this parameter when creating profiles only.
#
# Valid Values:
#   localsystem
#   specifieduser
# Default Values:
#   localsystem
#
# Parameter:  winserviceUserName
#
# Description:
#   Specify your user ID so that the Windows operating system can verify you
#   as an ID that is capable of creating a Windows service. Your user ID must
#   belong to the Administrator group and have the following advanced user
#   rights:
#   Act as part of the operating system
#   Log on as a service
#   The default value for this parameter is the current user name. The value
#   for this parameter must not contain spaces or characters that are not
#   valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |. The user that
#   you specify must have the proper permissions to create a Windows service.
#   You must specify the correct password for the user name that you choose.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter:  winservicePassword
#

```

```

# Description:
#   Specify the password for the specified user or the local account that is
#   to own the Windows service.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: winserviceCheck
#
# Description:
#   The value can be either true or false. Specify true to create a Windows
#   service for the server process that is created within the profile. Specify
#   false to not create the Windows service. The default value for this
#   parameter is false.
#
# Valid Values:
#   false
#   true
# Default Values:
#   false
#
# Parameter: winserviceStartupType
#
# Description:
#   The following values for Windows service startup can be used:
#   manual
#   automatic
#   disabled
#   The default value for this parameter is manual.
#
# Valid Values:
#   manual
#   automatic
#   disabled
# Default Values:
#   manual
#####
#enableService=true
#serviceName=service_user_ID
#winserviceAccountType=localsystem
#winserviceUserName=winservice_user_ID
#winservicePassword=winservice_password
#winserviceCheck=false
#winserviceStartupType=manual

#####
# Parameter: bpmdbDesign
#
# Description:
#   Specifies the file that holds the database configuration design for all of
#   the IBM Business Process Manager components .
#   This parameter replaces the -wbldbDesign that was used in previous
#   versions of WebSphere Process Server.
#
#   Note: If a bpmdbDesign file parameter is specified, none of the database
#   related properties should be specified.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
#bpmdbDesign=design_file

#####

```

```

# Parameter: dbCreateNew
#
# Description:
# Indicates a new database is created or if an existing database is to be
# reused. Valid values are true or false. This value cannot be true for an
# Oracle, SQL Server or a DB2 z/OS database. This value can only be true for
# a DB2 database.
#
# Valid Values:
# false
# Default Values:
# false
#####
dbCreateNew=false

#####
# Parameter: dbType
#
# Description:
# The database type. Set one of the following values for the type of
# database product you are using with IBM Business Process Manager.
#
# Required only for one of the following:
# A stand-alone profile when -bpmdbDesign was not specified.
# An advanced dmgr or managed profiles when -bpmdbDesign was not specified.
#
# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
# ORACLE
# Default Values:
# ORACLE
#
# Parameter: dbDriverType
#
# Description:
# The database driver type. For an Oracle database, specify ORACLE. For
# databases other than Oracle, the value is automatically set based on the
# server operating system. Server installations on all operating systems use
# type 4.
#
# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# None
#
# Parameter: dbJDBCClasspath
#
# Description:
# The directory path location of JDBC driver files.
#
# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# None
#####
dbType=ORACLE
dbDriverType=ORACLE_THIN
dbJDBCClasspath=${WAS_INSTALL_ROOT}/jdbcdrivers/Oracle

#####
# Parameter: dbLocation
#

```

```

# Description:
#   The directory of the ORACLE_HOME directory. This parameter is required
#   when the parameter dbDelayConfig is set to false. No, this parameter is
#   only valid if you are using Oracle databases.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
dbLocation=db_location

#####
# Parameter: dbDelayConfig
#
# Description:
#   Indicates whether to postpone table creation until after the profile is
#   created. Valid values are true or false. The parameter is set to false by
#   default. Setting this parameter to true delays the execution of the
#   scripts that create the database tables. No. Specify false if you want the
#   database to be set up during profile creation.
#
# Valid Values:
#   false
#   true
# Default Values:
#   false
#####
dbDelayConfig=false

#####
# Parameter: dbName
#
# Description:
#   The name of the database. By default, the value is set to orcl for Oracle
#   databases and to CMNDB for all other supported databases.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   orcl
#
# Parameter: dbUserId
#
# Description:
#   The user ID for all database types. Specifies the user ID that has
#   privileges to create and drop the databases. The WebSphere data source
#   uses this ID to authenticate the database connection.
#   Important: The -dbUserId parameter value must be a valid database
#   authorization ID. Required if the -bpmdbDesign file is not set.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: dbPassword
#
# Description:
#   The password required for database authentication. Required when the
#   -bpmdbDesign file is not set.

```



```

#
# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
dbName=orcl
dbUserId=db_userid
dbPassword=db_pswd

#####
# Parameter: procSvrDbName
#
# Description:
#   Database name for Process Server database. The value specified for
#   -procSvrDbName and -perfDWDbName can be the same.
#
# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: dbProcSvrUserId
#
# Description:
#   The Process Server user name. Required for setting up the Process Server.
#
# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: dbProcSvrPassword
#
# Description:
#   The Process Server password. Required for setting up the Process Server.
#
# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
procSvrDbName=procSvr_Db_Name
dbProcSvrUserId=db_ProcSvr_UserId_name
dbProcSvrPassword=db_ProcSvr_Password

#####
# Parameter: perfDWDbName
#
# Description:
#   Database name for Performance Data Warehouse. The value specified for
#   -perfDWDbName and -procSvrDbName can be the same.
#
# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Parameter: dbPerfDWUserId
#
# Description:
#   Performance Data Warehouse user name. Required for setting up the

```

```

# Performance Data Warehouse.
#
# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Parameter: dbPerfDWPASSWORD
#
# Description:
# Performance Data Warehouse password. Required for setting up the
# Performance Data Warehouse.
#
# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#####
perfDWDbName=perfDW_Db_Name
dbPerfDWUserId=db_PerfDW_UserId
dbPerfDWPASSWORD=db_PerfDW_Password

#####
# Parameter: dbProcSvrMeUserId
#
# Description:
# Process Server Messaging Engine user name. Required for setting up the
# Process Server Messaging Engine. If you enter a user-specified a user name
# and password during profile creation and if you specified ORACLE for
# dbType, this parameter is required.
#
# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# None
#
# Parameter: dbProcSvrMePassword
#
# Description:
# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# None
#####
dbProcSvrMeUserId=db_ProcSvr_ME_UserId
dbProcSvrMePassword=db_ProcSvr_Me_Password

#####
# Parameter: dbPerfDWMeUserId
#
# Description:
# Performance Data Warehouse Messaging Engine user name. Required for
# setting up the Performance Data Warehouse Messaging Engine. This
# parameter is required.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# None
#
# Parameter: dbPerfDWMePassword
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# None
#####
dbPerfDWMeUserId=db_PerfDW_Me_UserId
dbPerfDWMePassword=db_PerfDW_ME_Password

```

```

#####
# Parameter: dbCommonUserId
#
# Description:
#   The user id to authenticate with the Common database. For Oracle, the
#   default user name is the first three characters of the Oracle database
#   service name. For example: If the database service name is ORCL,
#   dbCommonUserId is ORCCOMM. Required for all stand-alone IBM Business
#   Process Manager profiles and advanced deployment manager (dmgr.*.adv)
#   profiles, if the -dbType parameter is set to ORACLE or MICROSOFT_SQLSERVER
#   and no bpmbdDesign file was specified.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmbdDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: dbCommonPassword
#
# Description:
#   The password for the user id of the dbCommonUserId parameter. Required for
#   all stand-alone IBM Business Process Manager profiles and advanced
#   deployment manager (dmgr.*.adv) profiles, if the -dbType parameter is set
#   to ORACLE or MICROSOFT_SQLSERVER and no bpmbdDesign file was specified.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmbdDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
dbCommonUserId=common_db_userid
dbCommonPassword=common_db_pswd

#####
# Parameter: environmentName
#
# Description:
#   Specifies the name of the environment you are configuring. This parameter
#   has no default value, and it must not be empty.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
environmentName=environment_name

#####
# Parameter: environmentType
#
# Description:
#   Specifies the environment type. The environment type refers to how IBM
#   Business Process Manager is used; for example, in a production, stage or
#   test environment. Load testing might be done on a test server, while a
#   stage environment type might be used as a temporary location to host
#   changes before putting those changes into production. You might specify
#   Stage as the Environment type if the server you are configuring will be
#   accessed and used to review content and new functionality. Valid values
#   are as follows:
#   Test
#   Use Test if the server you are configuring is to be used as a testing
#   environment.

```

```

# Stage
# Use Stage if the server is to serve as a staging platform to be used as a
# preproduction server.
# Production
# Use Production if the server is to serve in a production capacity.
# The default value is Test.
#
# Valid Values:
# Test
# Production
# Stage
# Default Values:
# Test
#####
environmentType=Test

#####
# Parameter: isDeveloperServer
#
# Description:
# Specifies whether the server is intended for development purposes only.
# This parameter is useful when creating profiles to test applications on a
# non-production server prior to deploying the applications on their
# production application servers. If -isDeveloperServer is set when
# creating an IBM Business Process Manager profile, then a preconfigured VMM
# file repository is installed. This file repository contains a sample
# organization that can be used to test Business Process Choreographer
# people resolution, ready for you to use as is.
#
# Valid Values:
# false
# true
# Default Values:
# false
#####
isDeveloperServer=false

#####
# Parameter: samplesPassword
#
# Description:
# Creates a password to be used for samples. The password is used to
# restrict access to Web application samples installed during the
# installation of the application server.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# None
#####
samplesPassword=samplesPassword

```

SQL 用の Standard Process Center スタンドアロン・プロファイル作成の応答ファイル:

ここに用意されている応答ファイルを変更し、**manageprofiles** コマンド行ユーティリティと一緒に使用して、SQL データベース用のスタンドアロン・プロファイルを作成します。

注: ご使用のオペレーティング・システムに合わせて、必要に応じて応答ファイルの情報をコメント化またはアンコメントしてください。詳細については、応答ファイルのコメントを参照してください。

```

# BEGIN COPYRIGHT
# *****
#
# Licensed Materials - Property of IBM
# 5725-C94
# (C) Copyright IBM Corporation 2011, 2012. All Rights Reserved.

```

```

# This sample program is provided AS IS and may be used, executed, copied
# and modified without royalty payment by customer (a) for its own
# instruction and study, (b) in order to develop applications designed to
# run with an IBM WebSphere product, either for customer's own internal
# use or for redistribution by customer, as part of such an application,
# in customer's own products.
#
# *****
# END COPYRIGHT

#####
# These response file has the applicable parameters for creating a
# Standalone PC Std profile that uses SQLServer.
#
# Depending on your environment, you may need to change the default values.
#
# To create a profile with this response file specify:
#
# was.install.root/bin/manageprofiles -response PC_Std_Standalone_SQLServer.response
#
# If you use the -response parameter, it must be the only parameter on
# the command-line. If you include any manageprofile parameters
# (in addition to -response) on the command-line, the response file
# is ignored. And default WebSphere Application server profile will be created .
#####

#####
# Parameter: create
#
# Description:
#   Creates the profile.
#   If you are creating a profile, this parameter is required.
#####
create

#####
# Parameter: templatePath
#
# Description:
#   Specifies the directory path to the template files in the installation
#   root directory. Within the profileTemplates directory are various
#   directories that correspond to different profile types and that vary with
#   the type of product installed. The profile directories are the paths that
#   you indicate while using the -templatePath option.
#   Use absolute paths. This parameter must exist as a directory and point to
#   a valid template directory.
#
#   When using the -templatePath parameter, specify the fully qualified file
#   path for the parameter.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
templatePath=BPM/default.procctr

#####
# Parameter: profileName
#
# Description:
#   Specifies the name of the profile. Use a unique value when creating a
#   profile.
#   Each profile that shares the same set of product binaries must have a
#   unique name. The default profile name is based on the profile type and a
#   trailing number, for example:
#   profileType ProfileNumberwhere profileType is a value such as ProcSrv,

```

```

# Dmgr, or Custom and ProfileNumber is a sequential number that creates a
# unique profile name. The value for this parameter must not contain spaces
# or characters that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,,
# /, \, and |. The profile name that you choose must not be in use. On
# Windows platforms: If the fully qualified path contains spaces, enclose
# the value in quotation marks. The default value is based on the
# install_root directory, the profiles subdirectory, and the name of the
# file. For example, the default for profile creation is:
# WS_WSPROFILE_DEFAULT_PROFILE_HOME/profileNamewhere
# WS_WSPROFILE_DEFAULT_PROFILE_HOME is defined in the wasprofile.properties
# file in the install_root/properties directory. The value for this
# parameter must be a valid path for the target system and must not be
# currently in use. You must have permissions to write to the directory.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
profileName=ProcCtr01

#####
# Parameter: applyPerfTuningSetting
#
# Description:
#   Set a performance tuning level appropriate for the profile you are
#   creating.
#   This parameter is a WebSphere Application Server parameter.
#
# Valid Values:
#   development
#   standard
#   production
# Default Values:
#   None
#####
#applyPerfTuningSetting=standard

#####
# Parameter: cellName
#
# Description:
#   Specifies the cell name of the profile. Use a unique cell name for each
#   profile.
#   The default value for this parameter is based on a combination of the
#   short host name, the constant Cell, and a trailing number, for example:
#   if (DMgr)
#     shortHostNameCellCellNumber
#   else
#     shortHostNameNodeNodeNumberCell
#   where CellNumber is a sequential number starting at 01 and NodeNumber is
#   the node number that you used to define the node name.
#   The value for this parameter must not contain spaces or any characters
#   that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   Varies
#
# Parameter: nodeName
#
# Description:
#   Specifies the node name for the node that is created with the new profile.
#   Use a unique value within the cell or on the workstation. Each profile
#   that shares the same set of product binaries must have a unique node name.
#   This parameter is required for profile creation only with the

```



```

# dmgr.esbserverdefault.procsvrdefault.procctrdefault.procsvr.advdefault.
# procctr.advdmgr.procctrmanaged.procctrmanaged.procsvr templates.
# The default value for this parameter is based on the short host name,
# profile type, and a trailing number, for example:
# if (DMgr)
#     shortHostNameCellManagerNodeNumber
# else
#     shortHostNameNodeNodeNumber
# where NodeNumber is a sequential number starting at 01.
# The value for this parameter must not contain spaces or any characters
# that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |.
#
# Valid Values:
#     Varies
# Default Values:
#     Varies
#
# Parameter:  serverName
#
# Description:
#     Specifies the name of the server.
#####
cellName=cell_name
nodeName=node_name
serverName=server1

#####
# Parameter:  enableAdminSecurity
#
# Description:
#     For IBM Business Process Manager omit this parameter. Administrative
#     security is always enabled for IBM Business Process Manager profiles.
#     You must also specify the parameters -adminUserName and -adminPassword
#     along with the values for these parameters.
#
# Valid Values:
#     true
# Default Values:
#     true
#####
enableAdminSecurity=true
adminUserName=adminUser_ID
adminPassword=adminPassword

#####
# Parameter:  signingCertDN
#
# Description:
#     Specifies the distinguished name of the root signing certificate that you
#     create when you create the profile. Specify the distinguished name in
#     quotation marks. This default personal certificate is located in the
#     server keystore file. If you do not specifically create or import a root
#     signing certificate, one is created by default. See the
#     -signingCertValidityPeriod parameter and the -keyStorePassword.
#
# Valid Values:
#     Varies
# Default Values:
#     None
#
# Parameter:  signingCertValidityPeriod
#
# Description:
#     An optional parameter that specifies the amount of time in years that the
#     root signing certificate is valid. If you do not specify this parameter
#     with the -signingCertDN parameter, the root signing certificate is valid
#     for 20 years.

```

```

#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter:  keyStorePassword
#
# Description:
#   Specifies the password to use on all keystore files created during profile
#   creation. Keystore files are created for the default personal certificate
#   and the root signing certificate.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
#signingCertDN =distinguished_name
#signingCertValidityPeriod =validity_period
#keyStorePassword =keyStore_password
#####
# Parameter:  defaultPorts
#
# Description:
#   Assigns the default or base port values to the profile.d o not use this
#   parameter when using the -startingPort or -portsFile parameter.
#   During profile creation, the manageprofiles command-line utility uses an
#   automatically generated set of recommended ports if you do not specify the
#   -startingPort parameter, the -defaultPorts parameter or the -portsFile
#   parameter. The recommended port values can be different than the default
#   port values based on the availability of the default ports.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter:  startingPort
#
# Description:
#   Specifies the starting port number for generating and assigning all ports
#   for the profile.
#   Port values are assigned sequentially from the -startingPort value,
#   omitting those ports that are already in use. The system recognizes and
#   resolves ports that are currently in use and determines the port
#   assignments to avoid port conflicts.
#   Do not use this parameter with the -defaultPorts or -portsFile parameters.
#   During profile creation, the manageprofiles command-line utility uses an
#   automatically generated set of recommended ports if you do not specify the
#   -startingPort parameter, the -defaultPorts parameter or the -portsFile
#   parameter. The recommended port values can be different than the default
#   port values based on the availability of the default ports.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter:  portsFile
#
# Description:
#   An optional parameter that specifies the path to a file that defines port
#   settings for the new profile.
#   Do not use this parameter when using the -startingPort or -defaultPorts
#   parameter.

```

```

# During profile creation, the manageprofiles command-line utility uses an
# automatically generated set of recommended ports if you do not specify the
# -startingPort parameter, the -defaultPorts parameter or the -portsFile
# parameter. The recommended port values can be different than the default
# port values based on the availability of the default ports.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
#defaultPorts=default_ports
#startingPort=startingPort
#portsFile=file_path

#####
# Parameter: enableService
#
# Description:
#   Enables the creation of a Linux service. Valid values include true or
#   false. The default value for this parameter is false. When the
#   manageprofiles command-line utility is run with the -enableService option
#   set to true , the Linux service is created with the profile when the
#   command is run by the root user. When a nonroot user runs the
#   manageprofiles command-line utility, the profile is created, but the Linux
#   service is not. The Linux service is not created because the nonroot user
#   does not have sufficient permission to set up the service. An
#   INSTCONPARTIALSUCCESS result is displayed at the end of the profile
#   creation and the profile creation log
#   install_root/logs/manageprofiles/profile_name_create.log contains a
#   message indicating the current user does not have sufficient permission to
#   set up the Linux service. Use this parameter when creating profiles only.
#
# Valid Values:
#   false
#   true
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: serviceUserName
#
# Description:
#   Specifies the user ID that is used during the creation of the Linux
#   service so that the Linux service will run under this user ID. The Linux
#   service runs whenever the user ID is logged on. Not required.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: winserviceAccountType
#
# Description:
#   The type of the owner account of the Windows service created for the
#   profile. Valid values include specifieduser or localsystem. The
#   localsystem value runs the Windows service under the local account of the
#   user who creates the profile. The default value for this parameter is
#   localsystem. Use this parameter when creating profiles only.
#
# Valid Values:
#   localsystem
#   specifieduser
# Default Values:
#   localsystem
#
# Parameter: winserviceUserName

```

```

#
# Description:
#   Specify your user ID so that the Windows operating system can verify you
#   as an ID that is capable of creating a Windows service. Your user ID must
#   belong to the Administrator group and have the following advanced user
#   rights:
#   Act as part of the operating system
#   Log on as a service
#   The default value for this parameter is the current user name. The value
#   for this parameter must not contain spaces or characters that are not
#   valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |. The user that
#   you specify must have the proper permissions to create a Windows service.
#   You must specify the correct password for the user name that you choose.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: winservicePassword
#
# Description:
#   Specify the password for the specified user or the local account that is
#   to own the Windows service.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: winserviceCheck
#
# Description:
#   The value can be either true or false. Specify true to create a Windows
#   service for the server process that is created within the profile. Specify
#   false to not create the Windows service. The default value for this
#   parameter is false.
#
# Valid Values:
#   false
#   true
# Default Values:
#   false
#
# Parameter: winserviceStartupType
#
# Description:
#   The following values for Windows service startup can be used:
#   manual
#   automatic
#   disabled
#   The default value for this parameter is manual.
#
# Valid Values:
#   manual
#   automatic
#   disabled
# Default Values:
#   manual
#####
#enableService=true
#serviceName=service_user_ID
#winserviceAccountType=localsystem
#winserviceUserName=winservice_user_ID
#winservicePassword=winservice_password
#winserviceCheck=false
#winserviceStartupType>manual

```

```

#####
# Parameter: bpmdbDesign
#
# Description:
#   Specifies the file that holds the database configuration design for all of
#   the IBM Business Process Manager components .
#   This parameter replaces the -wbldbDesign that was used in previous
#   versions of WebSphere Process Server.
#
#   Note: If a bpmdbDesign file parameter is specified, none of the database
#   related properties should be specified.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
#bpmdbDesign=design_file

#####
# Parameter: dbCreateNew
#
# Description:
#   Indicates a new database is created or if an existing database is to be
#   reused. Valid values are true or false. This value cannot be true for an
#   Oracle, SQL Server or a DB2 z/OS database. This value can only be true for
#   a DB2 database.
#
# Valid Values:
#   false
# Default Values:
#   false
#####
dbCreateNew=false

#####
# Parameter: dbType
#
# Description:
#   The database type. Set one of the following values for the type of
#   database product you are using with IBM Business Process Manager.
#
#   Required only for one of the following:
#   A stand-alone profile when -bpmdbDesign was not specified.
#   An advanced dmgr or managed profiles when -bpmdbDesign was not specified.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   MSSQLSERVER_MICROSOFT
# Default Values:
#   MSSQLSERVER_MICROSOFT
#
# Parameter: dbJDBCClasspath
#
# Description:
#   The directory path location of JDBC driver files.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
dbType=MSSQLSERVER_MICROSOFT

```

```

dbJDBCClasspath=${WAS_INSTALL_ROOT}/jdbcdrivers/SQLServer
#####
# Parameter: dbDelayConfig
#
# Description:
#   Indicates whether to postpone table creation until after the profile is
#   created. Valid values are true or false. The parameter is set to false by
#   default. Setting this parameter to true delays the execution of the
#   scripts that create the database tables. No. Specify false if you want the
#   database to be set up during profile creation.
#
# Valid Values:
#   false
#   true
# Default Values:
#   false
#####
dbDelayConfig=false

#####
# Parameter: dbName
#
# Description:
#   The name of the database. By default, the value is set to orcl for Oracle
#   databases and to CMNDB for all other supported databases.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   CMNDB
#
# Parameter: dbUserId
#
# Description:
#   The user ID for all database types. Specifies the user ID that has
#   privileges to create and drop the databases. The WebSphere data source
#   uses this ID to authenticate the database connection.
#   Important: The -dbUserId parameter value must be a valid database
#   authorization ID. Required if the -bpmdbDesign file is not set.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: dbPassword
#
# Description:
#   The password required for database authentication. Required when the
#   -bpmdbDesign file is not set.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
dbName=CMNDB
dbUserId=db_userid
dbPassword=db_pswd

```



```

#####
# Parameter: procSvrDbName
#
# Description:
# Database name for Process Server database. The value specified for
# -procSvrDbName and -perfDWDbName must be different.
#
# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# None
#
# Parameter: dbProcSvrUserId
#
# Description:
# The Process Server user name. Required for setting up the Process Server.
#
# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# None
#
# Parameter: dbProcSvrPassword
#
# Description:
# The Process Server password. Required for setting up the Process Server.
#
# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# None
#####
procSvrDbName=procSvr_Db_Name
dbProcSvrUserId=db_ProcSvr_UserId_name
dbProcSvrPassword=db_ProcSvr_Password
#####
# Parameter: perfDWDbName
#
# Description:
# Database name for Performance Data Warehouse. The value specified for
# -perfDWDbName and -procSvrDbName must be different.
#
# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Parameter: dbPerfDWUserId
#
# Description:
# Performance Data Warehouse user name. Required for setting up the
# Performance Data Warehouse.
#
# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Parameter: dbPerfDWPassword
#
# Description:
# Performance Data Warehouse password. Required for setting up the
# Performance Data Warehouse.
#
# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#####

```

```

perfDWDbName=perfDW_Db_Name
dbPerfDWUserId=db_PerfDW_UserId
dbPerfDWPassword=db_PerfDW_Password

#####
# Parameter: dbProcSvrMeUserId
#
# Description:
#   Process Server Messaging Engine user name. Required for setting up the
#   Process Server Messaging Engine. If you enter a user-specified a user name
#   and password during profile creation and if you specified ORACLE for
#   dbType, this parameter is required.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: dbProcSvrMePassword
#
# Description:
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
dbProcSvrMeUserId=db_ProcSvr_ME_UserId
dbProcSvrMePassword=db_ProcSvr_Me_Password

#####
# Parameter: dbPerfDWMeUserId
#
# Description:
#   Performance Data Warehouse Messaging Engine user name. Required for
#   setting up the Performance Data Warehouse Messaging Engine.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: dbPerfDWMePassword
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
dbPerfDWMeUserId=db_PerfDW_Me_UserId
dbPerfDWMePassword=db_PerfDW_ME_Password

#####
# Parameter: dbCommonUserId
#
# Description:
#   The user id to authenticate with the Common database. For Oracle, the
#   default user name is the first three characters of the Oracle database
#   service name. For example: If the database service name is ORCL,
#   dbCommonUserId is ORCCOMM. Required for all stand-alone IBM Business
#   Process Manager profiles and advanced deployment manager (dmgr.*.adv)
#   profiles, if the -dbType parameter is set to ORACLE or MICROSOFT_SQLSERVER
#   and no bpmdbDesign file was specified.
#

```

```

# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: dbCommonPassword
#
# Description:
#   The password for the user id of the dbCommonUserId parameter. Required for
#   all stand-alone IBM Business Process Manager profiles and advanced
#   deployment manager (dmgr.*.adv) profiles, if the -dbType parameter is set
#   to ORACLE or MICROSOFT_SQLSERVER and no bpmdbDesign file was specified.
#
# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
dbCommonUserId=common_db_userid
dbCommonPassword=common_db_pswd
#####
# Parameter: dbWinAuth
#
# Description:
#   An optional parameter that is valid in all default profile templates.
#   Specify true to indicate that you are running SQL Server using integrated
#   windows authentication.
#
# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   false
#   true
# Default Values:
#   None
#####
#dbWinAuth=true
#####
# Parameter: environmentName
#
# Description:
#   Specifies the name of the environment you are configuring. This parameter
#   has no default value, and it must not be empty.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
environmentName=environment_name
#####
# Parameter: environmentType
#
# Description:
#   Specifies the environment type. The environment type refers to how IBM
#   Business Process Manager is used; for example, in a production, stage or
#   test environment. Load testing might be done on a test server, while a
#   stage environment type might be used as a temporary location to host
#   changes before putting those changes into production. You might specify
#   Stage as the Environment type if the server you are configuring will be

```

```

# accessed and used to review content and new functionality. Valid values
# are as follows:
# Test
# Use Test if the server you are configuring is to be used as a testing
# environment.
# Stage
# Use Stage if the server is to serve as a staging platform to be used as a
# preproduction server.
# Production
# Use Production if the server is to serve in a production capacity.
# The default value is Test.
#
# Valid Values:
# Test
# Production
# Stage
# Default Values:
# Test
#####
environmentType=Test

#####
# Parameter: isDeveloperServer
#
# Description:
# Specifies whether the server is intended for development purposes only.
# This parameter is useful when creating profiles to test applications on a
# non-production server prior to deploying the applications on their
# production application servers. If -isDeveloperServer is set when
# creating an IBM Business Process Manager profile, then a preconfigured VMM
# file repository is installed. This file repository contains a sample
# organization that can be used to test Business Process Choreographer
# people resolution, ready for you to use as is.
#
# Valid Values:
# false
# true
# Default Values:
# false
#####
#isDeveloperServer=false

#####
# Parameter: samplesPassword
#
# Description:
# Creates a password to be used for samples. The password is used to
# restrict access to Web application samples installed during the
# installation of the application server.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# None
#####
samplesPassword=samplesPassword

```

Advanced Process Center 用の応答ファイル:

manageprofiles コマンド行ユーティリティーと応答ファイルを使用して、スタンドアロン・プロファイルを作成します。

DB2 用の Advanced Process Center スタンドアロン・プロファイル作成の応答ファイル:

ここに用意されている応答ファイルを変更し、**manageprofiles** コマンド行ユーティリティーと一緒に使用して、DB2 データベース用のスタンドアロン・プロファイルを作成します。

注: ご使用のオペレーティング・システムに合わせて、必要に応じて応答ファイルの情報をコメント化またはアンコメントしてください。詳細については、応答ファイルのコメントを参照してください。

```
# BEGIN COPYRIGHT
# *****
#
# Licensed Materials - Property of IBM
# 5725-C94
# (C) Copyright IBM Corporation 2011, 2012. All Rights Reserved.
# This sample program is provided AS IS and may be used, executed, copied
# and modified without royalty payment by customer (a) for its own
# instruction and study, (b) in order to develop applications designed to
# run with an IBM WebSphere product, either for customer's own internal
# use or for redistribution by customer, as part of such an application,
# in customer's own products.
#
# *****
# END COPYRIGHT

#####
# These response file has the applicable parameters for creating a
# Standalone PC Adv profile that uses DB2.
#
# Depending on your environment, you may need to change the default values.
#
# To create a profile with this response file specify:
#
# was.install.root/bin/manageprofiles -response PC_Adv_Standalone_DB2.response
#
# If you use the -response parameter, it must be the only parameter on
# the command-line. If you include any manageprofile parameters
# (in addition to -response) on the command-line, the response file
# is ignored. And default WebSphere Application server profile will be created .
#####

#####
# Parameter: create
#
# Description:
#   Creates the profile.
#   If you are creating a profile, this parameter is required.
#####
create

#####
# Parameter: templatePath
#
# Description:
#   Specifies the directory path to the template files in the installation
#   root directory. Within the profileTemplates directory are various
#   directories that correspond to different profile types and that vary with
#   the type of product installed. The profile directories are the paths that
#   you indicate while using the -templatePath option.
#   Use absolute paths. This parameter must exist as a directory and point to
#   a valid template directory.
#
#   When using the -templatePath parameter, specify the fully qualified file
#   path for the parameter.
#
# Valid Values:
#   Varies
```

```

# Default Values:
#   None
#####
templatePath=BPM/default.procctr.adv

#####
# Parameter:  profileName
#
# Description:
#   Specifies the name of the profile. Use a unique value when creating a
#   profile.
#   Each profile that shares the same set of product binaries must have a
#   unique name. The default profile name is based on the profile type and a
#   trailing number, for example:
#   profileType ProfileNumberwhere profileType is a value such as ProcSrv,
#   Dmgr, or Custom and ProfileNumber is a sequential number that creates a
#   unique profile name. The value for this parameter must not contain spaces
#   or characters that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,,
#   /, \, and |. The profile name that you choose must not be in use. On
#   Windows platforms: If the fully qualified path contains spaces, enclose
#   the value in quotation marks. The default value is based on the
#   install_root directory, the profiles subdirectory, and the name of the
#   file. For example, the default for profile creation is:
#   WS_WSPROFILE_DEFAULT_PROFILE_HOME/profileNamewhere
#   WS_WSPROFILE_DEFAULT_PROFILE_HOME is defined in the wasprofile.properties
#   file in the install_root/properties directory. The value for this
#   parameter must be a valid path for the target system and must not be
#   currently in use. You must have permissions to write to the directory.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
profileName=ProcCtr01

#####
# Parameter:  applyPerfTuningSetting
#
# Description:
#   Set a performance tuning level appropriate for the profile you are
#   creating.
#   This parameter is a WebSphere Application Server parameter.
#
# Valid Values:
#   development
#   standard
#   production
# Default Values:
#   None
#####
#applyPerfTuningSetting=standard

#####
# Parameter:  cellName
#
# Description:
#   Specifies the cell name of the profile. Use a unique cell name for each
#   profile.
#   The default value for this parameter is based on a combination of the
#   short host name, the constant Cell, and a trailing number, for example:
#   if (DMgr)
#     shortHostNameCellCellNumber
#   else
#     shortHostNameNodeNodeNumberCell
#   where CellNumber is a sequential number starting at 01 and NodeNumber is
#   the node number that you used to define the node name.

```



```

# The value for this parameter must not contain spaces or any characters
# that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   Varies
#
# Parameter:  nodeName
#
# Description:
#   Specifies the node name for the node that is created with the new profile.
#   Use a unique value within the cell or on the workstation. Each profile
#   that shares the same set of product binaries must have a unique node name.
#   This parameter is required for profile creation only with the
#   dmgr.esbserverdefault.procsvrdefault.procctrdefault.procsvr.advdefault.
#   procctr.advdmgr.procctrmanaged.procctrmanaged.procsvr templates.
#   The default value for this parameter is based on the short host name,
#   profile type, and a trailing number, for example:
#   if (DMgr)
#       shortHostNameCellManagerNodeNumber
#   else
#       shortHostNameNodeNodeNumber
#   where NodeNumber is a sequential number starting at 01.
#   The value for this parameter must not contain spaces or any characters
#   that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   Varies
#
# Parameter:  serverName
#
# Description:
#   Specifies the name of the server.
#####
cellName=cell_name
nodeName=node_name
serverName=server1
#####
# Parameter:  enableAdminSecurity
#
# Description:
#   For IBM Business Process Manager omit this parameter. Administrative
#   security is always enabled for IBM Business Process Manager profiles.
#   You must also specify the parameters -adminUserName and -adminPassword
#   along with the values for these parameters.
#
# Valid Values:
#   true
# Default Values:
#   true
#####
enableAdminSecurity=true
adminUserName=adminUser_ID
adminPassword=adminPassword
#####
# Parameter:  signingCertDN
#
# Description:
#   Specifies the distinguished name of the root signing certificate that you
#   create when you create the profile. Specify the distinguished name in
#   quotation marks. This default personal certificate is located in the
#   server keystore file. If you do not specifically create or import a root

```

```

# signing certificate, one is created by default. See the
# -signingCertValidityPeriod parameter and the -keyStorePassword.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: signingCertValidityPeriod
#
# Description:
#   An optional parameter that specifies the amount of time in years that the
#   root signing certificate is valid. If you do not specify this parameter
#   with the -signingCertDN parameter, the root signing certificate is valid
#   for 20 years.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: keyStorePassword
#
# Description:
#   Specifies the password to use on all keystore files created during profile
#   creation. Keystore files are created for the default personal certificate
#   and the root signing certificate.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
#signingCertDN =distinguished_name
#signingCertValidityPeriod =validity_period
#keyStorePassword =keyStore_password
#####
# Parameter: defaultPorts
#
# Description:
#   Assigns the default or base port values to the profile.d o not use this
#   parameter when using the -startingPort or -portsFile parameter.
#   During profile creation, the manageprofiles command-line utility uses an
#   automatically generated set of recommended ports if you do not specify the
#   -startingPort parameter, the -defaultPorts parameter or the -portsFile
#   parameter. The recommended port values can be different than the default
#   port values based on the availability of the default ports.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: startingPort
#
# Description:
#   Specifies the starting port number for generating and assigning all ports
#   for the profile.
#   Port values are assigned sequentially from the -startingPort value,
#   omitting those ports that are already in use. The system recognizes and
#   resolves ports that are currently in use and determines the port
#   assignments to avoid port conflicts.
#   Do not use this parameter with the -defaultPorts or -portsFile parameters.
#   During profile creation, the manageprofiles command-line utility uses an
#   automatically generated set of recommended ports if you do not specify the
#   -startingPort parameter, the -defaultPorts parameter or the -portsFile

```

```

# parameter. The recommended port values can be different than the default
# port values based on the availability of the default ports.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: portsFile
#
# Description:
#   An optional parameter that specifies the path to a file that defines port
#   settings for the new profile.
#   Do not use this parameter when using the -startingPort or -defaultPorts
#   parameter.
#   During profile creation, the manageprofiles command-line utility uses an
#   automatically generated set of recommended ports if you do not specify the
#   -startingPort parameter, the -defaultPorts parameter or the -portsFile
#   parameter. The recommended port values can be different than the default
#   port values based on the availability of the default ports.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
#defaultPorts=default_ports
#startingPort=startingPort
#portsFile=file_path
#####
# Parameter: enableService
#
# Description:
#   Enables the creation of a Linux service. Valid values include true or
#   false. The default value for this parameter is false. When the
#   manageprofiles command-line utility is run with the -enableService option
#   set to true , the Linux service is created with the profile when the
#   command is run by the root user. When a nonroot user runs the
#   manageprofiles command-line utility, the profile is created, but the Linux
#   service is not. The Linux service is not created because the nonroot user
#   does not have sufficient permission to set up the service. An
#   INSTCONPARTIALSUCCESS result is displayed at the end of the profile
#   creation and the profile creation log
#   install_root/logs/manageprofiles/profile_name_create.log contains a
#   message indicating the current user does not have sufficient permission to
#   set up the Linux service. Use this parameter when creating profiles only.
#
# Valid Values:
#   false
#   true
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: serviceUserName
#
# Description:
#   Specifies the user ID that is used during the creation of the Linux
#   service so that the Linux service will run under this user ID. The Linux
#   service runs whenever the user ID is logged on. Not required.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: winserviceAccountType

```

```

#
# Description:
#   The type of the owner account of the Windows service created for the
#   profile. Valid values include specifieduser or localsystem. The
#   localsystem value runs the Windows service under the local account of the
#   user who creates the profile. The default value for this parameter is
#   localsystem. Use this parameter when creating profiles only.
#
# Valid Values:
#   localsystem
#   specifieduser
# Default Values:
#   localsystem
#
# Parameter: winserviceUserName
#
# Description:
#   Specify your user ID so that the Windows operating system can verify you
#   as an ID that is capable of creating a Windows service. Your user ID must
#   belong to the Administrator group and have the following advanced user
#   rights:
#   Act as part of the operating system
#   Log on as a service
#   The default value for this parameter is the current user name. The value
#   for this parameter must not contain spaces or characters that are not
#   valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |. The user that
#   you specify must have the proper permissions to create a Windows service.
#   You must specify the correct password for the user name that you choose.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: winservicePassword
#
# Description:
#   Specify the password for the specified user or the local account that is
#   to own the Windows service.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: winserviceCheck
#
# Description:
#   The value can be either true or false. Specify true to create a Windows
#   service for the server process that is created within the profile. Specify
#   false to not create the Windows service. The default value for this
#   parameter is false.
#
# Valid Values:
#   false
#   true
# Default Values:
#   false
#
# Parameter: winserviceStartupType
#
# Description:
#   The following values for Windows service startup can be used:
#   manual
#   automatic
#   disabled
#   The default value for this parameter is manual.

```

```

#
# Valid Values:
#   manual
#   automatic
#   disabled
# Default Values:
#   manual
#####
#enableService=true
#serviceName=service_user_ID
#winserviceAccountType=localsystem
#winserviceUserName=winservice_user_ID
#winservicePassword=winservice_password
#winserviceCheck=false
#winserviceStartupType>manual

#####
# Parameter:  bpmdbDesign
#
# Description:
#   Specifies the file that holds the database configuration design for all of
#   the IBM Business Process Manager components .
#   This parameter replaces the -wbddbDesign that was used in previous
#   versions of WebSphere Process Server.
#
#   Note: If a bpmdbDesign file parameter is specified, none of the database
#   related properties should be specified.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
#bpmdbDesign=design_file

#####
# Parameter:  dbCreateNew
#
# Description:
#   Indicates a new database is created or if an existing database is to be
#   reused. Valid values are true or false. This value cannot be true for an
#   Oracle, SQL Server or a DB2 z/OS database. This value can only be true for
#   a DB2 database.
#
# Valid Values:
#   false
#   true
# Default Values:
#   None
#####
dbCreateNew=true

#####
# Parameter:  dbType
#
# Description:
#   The database type. Set one of the following values for the type of
#   database product you are using with IBM Business Process Manager.
#
#   Required only for one of the following:
#   A stand-alone profile when -bpmdbDesign was not specified.
#   An advanced dmgr or managed profiles when -bpmdbDesign was not specified.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   DB2_DATASERVER

```

```

# Default Values:
#   DB2_DATASERVER
#
# Parameter: dbJDBCClasspath
#
# Description:
#   The directory path location of JDBC driver files.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: dbHostName
#
# Description:
#   The database server host name or IP address. The default value is the
#   local host name. Required when the -bpmdbDesign parameter was not
#   specified. (It is not required if the -bpmdbDesign parameter is
#   specified.)
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: dbServerPort
#
# Description:
#   The database server port number. Depending on the database you are using,
#   you can specify a different port number instead of the default port
#   number.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
dbType=DB2_DATASERVER
dbJDBCClasspath=${WAS_INSTALL_ROOT}/jdbcdrivers/DB2
dbHostName=db_host_name
dbServerPort=db_port_number
#####
# Parameter: dbDelayConfig
#
# Description:
#   Indicates whether to postpone table creation until after the profile is
#   created. Valid values are true or false. The parameter is set to false by
#   default. Setting this parameter to true delays the execution of the
#   scripts that create the database tables. No. Specify false if you want the
#   database to be set up during profile creation.
#
# Valid Values:
#   false
#   true
# Default Values:
#   false
#####
dbDelayConfig=false

```



```

#####
# Parameter: dbName
#
# Description:
#   The name of the database. By default, the value is set to orcl for Oracle
#   databases and to CMNDB for all other supported databases.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   CMNDB
#
# Parameter: dbUserId
#
# Description:
#   The user ID for all database types. Specifies the user ID that has
#   privileges to create and drop the databases. The WebSphere data source
#   uses this ID to authenticate the database connection.
#   Important: The -dbUserId parameter value must be a valid database
#   authorization ID. Required if the -bpmdbDesign file is not set.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: dbPassword
#
# Description:
#   The password required for database authentication. Required when the
#   -bpmdbDesign file is not set.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
dbName=CMNDB
dbUserId=db_userid
dbPassword=db_pswd
#####
# Parameter: procSvrDbName
#
# Description:
#   Database name for Process Server database. The value specified for
#   -procSvrDbName and -perfDWDbName must be different.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: dbProcSvrUserId
#
# Description:
#   The Process Server user name. Required for setting up the Process Server.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.

```

```

#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: dbProcSvrPassword
#
# Description:
#   The Process Server password. Required for setting up the Process Server.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
procSvrDbName=procSvr_Db_Name
dbProcSvrUserId=db_ProcSvr_UserId_name
dbProcSvrPassword=db_ProcSvr_Password
#####
# Parameter: perfDWDbName
#
# Description:
#   Database name for Performance Data Warehouse. The value specified for
#   -perfDWDbName and -procSvrDbName must be different.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Parameter: dbPerfDWUserId
#
# Description:
#   Performance Data Warehouse user name. Required for setting up the
#   Performance Data Warehouse.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Parameter: dbPerfDWPassword
#
# Description:
#   Performance Data Warehouse password. Required for setting up the
#   Performance Data Warehouse.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#####
perfDWDbName=perfDW_Db_Name
dbPerfDWUserId=db_PerfDW_UserId
dbPerfDWPassword=db_PerfDW_Password
#####
# Parameter: dbProcSvrMeUserId
#
# Description:
#   Process Server Messaging Engine user name. Required for setting up the
#   Process Server Messaging Engine. If you enter a user-specified a user name
#   and password during profile creation and if you specified ORACLE for
#   dbType, this parameter is required.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#

```

```

# Parameter: dbProcSvrMePassword
#
# Description:
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
#dbProcSvrMeUserId=db_ProcSvr_ME_UserID
#dbProcSvrMePassword=db_ProcSvr_Me_Password
#####
# Parameter: dbPerfDWMeUserId
#
# Description:
#   Performance Data Warehouse Messaging Engine user name. Required for
#   setting up the Performance Data Warehouse Messaging Engine.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: dbPerfDWMePassword
#
# Description:
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
#dbPerfDWMeUserId=db_PerfDW_Me_UserId
#dbPerfDWMePassword=db_PerfDW_ME_Password
#####
# Parameter: cdbSchemaName
#
# Description:
#   The schema name for the Common database. If no value is specified, the
#   following default database schema names are used:
#   DB2 database
#   The default schema name is the value specified by the dbUserId parameter.
#   The -cdbSchemaName parameter is valid for all database types except for
#   Oracle and Microsoft SQL Server.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: dbCommonUserId
#
# Description:
#   The user id to authenticate with the Common database.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies

```

```

# Default Values:
#   None
#
# Parameter: dbCommonPassword
#
# Description:
#   The password for the user id of the dbCommonUserId parameter.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
#cdbSchemaName=db_schema_name
#dbCommonUserId=common_db_userid
#dbCommonPassword=common_db_pswd
#####
# Parameter: dbAppMeUserId
#
# Description:
#   User name for application messaging engine.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: dbAppMePassword
#
# Description:
#   The password for the user id of the dbAppMeUserId parameter.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
#dbAppMeUserId=app_me_userid
#dbAppMePassword=app_me_pwd
#####
# Parameter: dbCeiMeUserId
#
# Description:
#   User name for CEI messaging engine.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: dbCeiMePassword
#
# Description:
#   The password for the user id of the dbCeiMeUserId parameter. If you enter
#   a user-specified user name and password during profile creation and if
#   you specified ORACLE for -dbType, this parameter is required.
#

```

```

# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
#dbCeiMeUserId=cei_me_userID
#dbCeiMePassword=cei_me_pwd

#####
# Parameter: dbSysMeUserId
#
# Description:
#   The default user name for the SCA system bus messaging engine is the first
#   three characters of the Oracle database service name. For example: If the
#   database service name is ORCL, dbSysMeUserId is ORCSS00.
#
# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: dbSysMePassword
#
# Description:
#   The default password for the SCA system bus messaging engine is
#   dbPassword.
#
# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
#dbSysMeUserId=sys_me_userID
#dbSysMePassword=sys_me_pwd

#####
# Parameter: environmentName
#
# Description:
#   Specifies the name of the environment you are configuring. This parameter
#   has no default value, and it must not be empty.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
environmentName=environment_name

#####
# Parameter: environmentType
#
# Description:
#   Specifies the environment type. The environment type refers to how IBM
#   Business Process Manager is used; for example, in a production, stage or
#   test environment. Load testing might be done on a test server, while a
#   stage environment type might be used as a temporary location to host
#   changes before putting those changes into production. You might specify
#   Stage as the Environment type if the server you are configuring will be
#   accessed and used to review content and new functionality. Valid values
#   are as follows:

```

```

# Test
# Use Test if the server you are configuring is to be used as a testing
# environment.
# Stage
# Use Stage if the server is to serve as a staging platform to be used as a
# preproduction server.
# Production
# Use Production if the server is to serve in a production capacity.
# The default value is Test.
#
# Valid Values:
# Test
# Production
# Stage
# Default Values:
# Test
#####
environmentType=Test

#####
# Parameter: isDeveloperServer
#
# Description:
# Specifies whether the server is intended for development purposes only.
# This parameter is useful when creating profiles to test applications on a
# non-production server prior to deploying the applications on their
# production application servers. If -isDeveloperServer is set when
# creating an IBM Business Process Manager profile, then a preconfigured VMM
# file repository is installed. This file repository contains a sample
# organization that can be used to test Business Process Choreographer
# people resolution, ready for you to use as is.
#
# Valid Values:
# false
# true
# Default Values:
# false
#####
isDeveloperServer=false

#####
# Parameter: samplesPassword
#
# Description:
# Creates a password to be used for samples. The password is used to
# restrict access to Web application samples installed during the
# installation of the application server.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# None
#####
samplesPassword=samplesPassword

#####
# Parameter: webFormConfig
#
# Description:
# Indicates if Business Space is configured to use IBM Forms Server to work
# with Human Task Management widgets. The default value for this parameter
# is false. Indicate true to configure Business Space to use IBM Forms
# Server. Both the webFormConfig and webFormInstallRoot parameters are
# required to configure IBM Forms Server. This parameter is valid for
# stand-alone server profiles only.
# Note: IBM Forms Server configuration using these parameters is only valid
# for local IBM Forms Server installations.

```



```

#
# Valid Values:
#   false
#   true
# Default Values:
#   false
#
# Parameter:  webFormHTTP
#
# Description:
#   Specifies the location of the IBM Forms Server Translator. The default URL
#   for the location is http://localhost:8085/translator. No. This parameter
#   is valid only if the -webFormConfig parameter is set to true. It is valid
#   for stand-alone server profiles only.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter:  webFormInstallRoot
#
# Description:
#   Specifies the full path where IBM Forms Server is installed. For example,
#   the IBM Forms Server install root might be
#   C:/IBM/IBMFormsServer/4.0/WebFormServer. No. This parameter is valid only
#   if the -webFormConfig parameter is set to true. It is valid for
#   stand-alone server profiles only.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
#webFormConfig=false
#webFormHTTP=URL
#webFormInstallRoot=Webform_Server_install_root

#####
# Parameter:  configureBRM
#
# Description:
#   Configures the business process rules manager. The default value is false.
#
# Valid Values:
#   false
#   true
# Default Values:
#   false
#####
configureBRM=false

#####
# Parameter:  configureBPC
#
# Description:
#   Determines whether the Business Process Choreographer sample configuration
#   is created.
#   The following conditions apply:
#   Only DB2 databases are supported.
#   The default is set to true for DB2.
#   It uses its own schema within the common database (CMNDB) and the schema
#   name is always BPEDB.
#   Business Process Choreographer database parameters set in the Database
#   Design Tool and generated to the database design file are ignored by
#   Business Process Choreographer at profile creation time.
#   See -bpmdbDesign for information about the database design file.

```

```

# Note: If these conditions are too restrictive, consider setting
# -configureBPC to false and using other documented methods to configure
# Business Process Choreographer.
#
# Valid Values:
# false
# true
# Default Values:
# true
#####
configureBPC=true

```

DB2 for z/OS 用の Advanced Process Center スタンドアロン・プロファイル作成の応答ファイル:

ここに用意されている応答ファイルを変更し、**manageprofiles** コマンド行ユーティリティと一緒に使用して、DB2 for z/OS データベース用のスタンドアロン・プロファイルを作成します。

注: ご使用のオペレーティング・システムに合わせて、必要に応じて応答ファイルの情報をコメント化またはアンコメントしてください。詳細については、応答ファイルのコメントを参照してください。

```

# BEGIN COPYRIGHT
# *****
#
# Licensed Materials - Property of IBM
# 5725-C94
# (C) Copyright IBM Corporation 2011, 2012. All Rights Reserved.
# This sample program is provided AS IS and may be used, executed, copied
# and modified without royalty payment by customer (a) for its own
# instruction and study, (b) in order to develop applications designed to
# run with an IBM WebSphere product, either for customer's own internal
# use or for redistribution by customer, as part of such an application,
# in customer's own products.
#
# *****
# END COPYRIGHT

#####
# These response file has the applicable parameters for creating a
# Standalone PC Adv profile that uses DB2zOS.
#
# Depending on your environment, you may need to change the default values.
#
# To create a profile with this response file specify:
#
# was.install.root/bin/manageprofiles -response PC_Adv_Standalone_DB2zOS.response
#
# If you use the -response parameter, it must be the only parameter on
# the command-line. If you include any manageprofile parameters
# (in addition to -response) on the command-line, the response file
# is ignored. And default WebSphere Application server profile will be created .
#####

#####
# Parameter: create
#
# Description:
# Creates the profile.
# If you are creating a profile, this parameter is required.
#####
create

#####
# Parameter: templatePath
#
# Description:
# Specifies the directory path to the template files in the installation

```

```

#    root directory. Within the profileTemplates directory are various
#    directories that correspond to different profile types and that vary with
#    the type of product installed. The profile directories are the paths that
#    you indicate while using the -templatePath option.
#    Use absolute paths. This parameter must exist as a directory and point to
#    a valid template directory.
#
#    When using the -templatePath parameter, specify the fully qualified file
#    path for the parameter.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
templatePath=BPM/default.procctr.adv
#####

# Parameter:  profileName
#
# Description:
#   Specifies the name of the profile. Use a unique value when creating a
#   profile.
#   Each profile that shares the same set of product binaries must have a
#   unique name. The default profile name is based on the profile type and a
#   trailing number, for example:
#   profileType ProfileNumberwhere profileType is a value such as ProcSrv,
#   Dmgr, or Custom and ProfileNumber is a sequential number that creates a
#   unique profile name. The value for this parameter must not contain spaces
#   or characters that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,,
#   /, \, and |. The profile name that you choose must not be in use. On
#   Windows platforms: If the fully qualified path contains spaces, enclose
#   the value in quotation marks. The default value is based on the
#   install_root directory, the profiles subdirectory, and the name of the
#   file. For example, the default for profile creation is:
#   WS_WSPROFILE_DEFAULT_PROFILE_HOME/profileNamewhere
#   WS_WSPROFILE_DEFAULT_PROFILE_HOME is defined in the wasprofile.properties
#   file in the install_root/properties directory. The value for this
#   parameter must be a valid path for the target system and must not be
#   currently in use. You must have permissions to write to the directory.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
profileName=ProcCtr01
#####

# Parameter:  applyPerfTuningSetting
#
# Description:
#   Set a performance tuning level appropriate for the profile you are
#   creating.
#   This parameter is a WebSphere Application Server parameter.
#
# Valid Values:
#   development
#   standard
#   production
# Default Values:
#   None
#####
#applyPerfTuningSetting=standard
#####

# Parameter:  cellName

```

```

#
# Description:
#   Specifies the cell name of the profile. Use a unique cell name for each
#   profile.
#   The default value for this parameter is based on a combination of the
#   short host name, the constant Cell, and a trailing number, for example:
#   if (DMgr)
#       shortHostNameCellCellNumber
#   else
#       shortHostNameNodeNodeNumberCell
#   where CellNumber is a sequential number starting at 01 and NodeNumber is
#   the node number that you used to define the node name.
#   The value for this parameter must not contain spaces or any characters
#   that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   Varies
#
# Parameter:  nodeName
#
# Description:
#   Specifies the node name for the node that is created with the new profile.
#   Use a unique value within the cell or on the workstation. Each profile
#   that shares the same set of product binaries must have a unique node name.
#   This parameter is required for profile creation only with the
#   dmgr.esbserverdefault.procsvrdefault.procctrdefault.procsvr.advdefault.
#   procctr.advdmgr.procctrmanaged.procctrmanaged.procsvr templates.
#   The default value for this parameter is based on the short host name,
#   profile type, and a trailing number, for example:
#   if (DMgr)
#       shortHostNameCellManagerNodeNumber
#   else
#       shortHostNameNodeNodeNumber
#   where NodeNumber is a sequential number starting at 01.
#   The value for this parameter must not contain spaces or any characters
#   that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   Varies
#
# Parameter:  serverName
#
# Description:
#   Specifies the name of the server.
#####
cellName=cell_name
nodeName=node_name
serverName=server1
#####
# Parameter:  enableAdminSecurity
#
# Description:
#   For IBM Business Process Manager omit this parameter. Administrative
#   security is always enabled for IBM Business Process Manager profiles.
#   You must also specify the parameters -adminUserName and -adminPassword
#   along with the values for these parameters.
#
# Valid Values:
#   true
# Default Values:
#   true
#####

```

```
enableAdminSecurity=true
adminUserName=adminUser_ID
adminPassword=adminPassword
```

```
#####
```

```
# Parameter: signingCertDN
```

```
#
```

```
# Description:
```

```
# Specifies the distinguished name of the root signing certificate that you
# create when you create the profile. Specify the distinguished name in
# quotation marks. This default personal certificate is located in the
# server keystore file. If you do not specifically create or import a root
# signing certificate, one is created by default. See the
# -signingCertValidityPeriod parameter and the -keyStorePassword.
```

```
#
```

```
# Valid Values:
```

```
# Varies
```

```
# Default Values:
```

```
# None
```

```
#
```

```
# Parameter: signingCertValidityPeriod
```

```
#
```

```
# Description:
```

```
# An optional parameter that specifies the amount of time in years that the
# root signing certificate is valid. If you do not specify this parameter
# with the -signingCertDN parameter, the root signing certificate is valid
# for 20 years.
```

```
#
```

```
# Valid Values:
```

```
# Varies
```

```
# Default Values:
```

```
# None
```

```
#
```

```
# Parameter: keyStorePassword
```

```
#
```

```
# Description:
```

```
# Specifies the password to use on all keystore files created during profile
# creation. Keystore files are created for the default personal certificate
# and the root signing certificate.
```

```
#
```

```
# Valid Values:
```

```
# Varies
```

```
# Default Values:
```

```
# None
```

```
#####
```

```
#signingCertDN =distinguished_name
```

```
#signingCertValidityPeriod =validity_period
```

```
#keyStorePassword =keyStore_password
```

```
#####
```

```
# Parameter: defaultPorts
```

```
#
```

```
# Description:
```

```
# Assigns the default or base port values to the profile.d o not use this
# parameter when using the -startingPort or -portsFile parameter.
# During profile creation, the manageprofiles command-line utility uses an
# automatically generated set of recommended ports if you do not specify the
# -startingPort parameter, the -defaultPorts parameter or the -portsFile
# parameter. The recommended port values can be different than the default
# port values based on the availability of the default ports.
```

```
#
```

```
# Valid Values:
```

```
# Varies
```

```
# Default Values:
```

```
# None
```

```
#
```

```
# Parameter: startingPort
```

```

#
# Description:
#   Specifies the starting port number for generating and assigning all ports
#   for the profile.
#   Port values are assigned sequentially from the -startingPort value,
#   omitting those ports that are already in use. The system recognizes and
#   resolves ports that are currently in use and determines the port
#   assignments to avoid port conflicts.
#   Do not use this parameter with the -defaultPorts or -portsFile parameters.
#   During profile creation, the manageprofiles command-line utility uses an
#   automatically generated set of recommended ports if you do not specify the
#   -startingPort parameter, the -defaultPorts parameter or the -portsFile
#   parameter. The recommended port values can be different than the default
#   port values based on the availability of the default ports.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter:  portsFile
#
# Description:
#   An optional parameter that specifies the path to a file that defines port
#   settings for the new profile.
#   Do not use this parameter when using the -startingPort or -defaultPorts
#   parameter.
#   During profile creation, the manageprofiles command-line utility uses an
#   automatically generated set of recommended ports if you do not specify the
#   -startingPort parameter, the -defaultPorts parameter or the -portsFile
#   parameter. The recommended port values can be different than the default
#   port values based on the availability of the default ports.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
#defaultPorts=default_ports
#startingPort=startingPort
#portsFile=file_path
#####
# Parameter:  enableService
#
# Description:
#   Enables the creation of a Linux service. Valid values include true or
#   false. The default value for this parameter is false. When the
#   manageprofiles command-line utility is run with the -enableService option
#   set to true , the Linux service is created with the profile when the
#   command is run by the root user. When a nonroot user runs the
#   manageprofiles command-line utility, the profile is created, but the Linux
#   service is not. The Linux service is not created because the nonroot user
#   does not have sufficient permission to set up the service. An
#   INSTCONPARTIALSUCCESS result is displayed at the end of the profile
#   creation and the profile creation log
#   install_root/logs/manageprofiles/profile_name_create.log contains a
#   message indicating the current user does not have sufficient permission to
#   set up the Linux service. Use this parameter when creating profiles only.
#
# Valid Values:
#   false
#   true
# Default Values:
#   None
#
# Parameter:  serviceUserName

```



```

#
# Description:
#   Specifies the user ID that is used during the creation of the Linux
#   service so that the Linux service will run under this user ID. The Linux
#   service runs whenever the user ID is logged on. Not required.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: winserviceAccountType
#
# Description:
#   The type of the owner account of the Windows service created for the
#   profile. Valid values include specifieduser or localsystem. The
#   localsystem value runs the Windows service under the local account of the
#   user who creates the profile. The default value for this parameter is
#   localsystem. Use this parameter when creating profiles only.
#
# Valid Values:
#   localsystem
#   specifieduser
# Default Values:
#   localsystem
#
# Parameter: winserviceUserName
#
# Description:
#   Specify your user ID so that the Windows operating system can verify you
#   as an ID that is capable of creating a Windows service. Your user ID must
#   belong to the Administrator group and have the following advanced user
#   rights:
#   Act as part of the operating system
#   Log on as a service
#   The default value for this parameter is the current user name. The value
#   for this parameter must not contain spaces or characters that are not
#   valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |. The user that
#   you specify must have the proper permissions to create a Windows service.
#   You must specify the correct password for the user name that you choose.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: winservicePassword
#
# Description:
#   Specify the password for the specified user or the local account that is
#   to own the Windows service.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: winserviceCheck
#
# Description:
#   The value can be either true or false. Specify true to create a Windows
#   service for the server process that is created within the profile. Specify
#   false to not create the Windows service. The default value for this
#   parameter is false.
#
# Valid Values:
#   false

```

```

# true
# Default Values:
# false
#
# Parameter: winserviceStartupType
#
# Description:
# The following values for Windows service startup can be used:
# manual
# automatic
# disabled
# The default value for this parameter is manual.
#
# Valid Values:
# manual
# automatic
# disabled
# Default Values:
# manual
#####
#enableService=true
#serviceName=service_user_ID
#winserviceAccountType=localsystem
#winserviceUserName=winservice_user_ID
#winservicePassword=winservice_password
#winserviceCheck=false
#winserviceStartupType>manual

#####
# Parameter: bpmdbDesign
#
# Description:
# Specifies the file that holds the database configuration design for all of
# the IBM Business Process Manager components .
# This parameter replaces the -wbiddbDesign that was used in previous
# versions of WebSphere Process Server.
#
# Note: If a bpmdbDesign file parameter is specified, none of the database
# related properties should be specified.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# None
#####
#bpmdbDesign=design_file

#####
# Parameter: dbCreateNew
#
# Description:
# Indicates a new database is created or if an existing database is to be
# reused. Valid values are true or false. This value cannot be true for an
# Oracle, SQL Server or a DB2 z/OS database. This value can only be true for
# a DB2 database.
#
# Valid Values:
# false
# Default Values:
# false
#####
dbCreateNew=false

#####
# Parameter: dbType
#
# Description:

```

```

# The database type. Set one of the following values for the type of
# database product you are using with IBM Business Process Manager.
#
# Required only for one of the following:
# A stand-alone profile when -bpmdbDesign was not specified.
# An advanced dmgr or managed profiles when -bpmdbDesign was not specified.
#
# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
# DB2UDBOS390
# Default Values:
# DB2UDBOS390
#####
dbType=DB2UDBOS390

#####
# Parameter: dbDelayConfig
#
# Description:
# Indicates whether to postpone table creation until after the profile is
# created. Valid values are true or false. The parameter is set to false by
# default. Setting this parameter to true delays the execution of the
# scripts that create the database tables. No. Specify false if you want the
# database to be set up during profile creation.
#
# Valid Values:
# false
# true
# Default Values:
# false
#####
dbDelayConfig=true

#####
# Parameter: dbName
#
# Description:
# The name of the database. By default, the value is set to orcl for Oracle
# databases and to CMNDB for all other supported databases.
#
# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# CMNDB
#
# Parameter: dbUserId
#
# Description:
# The user ID for all database types. Specifies the user ID that has
# privileges to create and drop the databases. The WebSphere data source
# uses this ID to authenticate the database connection.
# Important: The -dbUserId parameter value must be a valid database
# authorization ID. Required if the -bpmdbDesign file is not set.
#
# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# None
#
# Parameter: dbPassword
#
# Description:

```

```

# The password required for database authentication. Required when the
# -bpmdbDesign file is not set.
#
# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
dbName=CMNDB
dbUserId=db_userid
dbPassword=db_pswd

#####
# Parameter:  procSvrDbName
#
# Description:
#   Database name for Process Server database. The value specified for
#   -procSvrDbName and -perfDWDbName must be different.
#
# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter:  dbProcSvrUserId
#
# Description:
#   The Process Server user name. Required for setting up the Process Server.
#
# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter:  dbProcSvrPassword
#
# Description:
#   The Process Server password. Required for setting up the Process Server.
#
# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
procSvrDbName=procSvr_Db_Name
dbProcSvrUserId=db_ProcSvr_UserId_name
dbProcSvrPassword=db_ProcSvr_Password

#####
# Parameter:  perfDWDbName
#
# Description:
#   Database name for Performance Data Warehouse. The value specified for
#   -perfDWDbName and -procSvrDbName must be different.
#
# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Parameter:  dbPerfDWUserId
#

```

```

# Description:
# Performance Data Warehouse user name. Required for setting up the
# Performance Data Warehouse.
#
# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Parameter: dbPerfDWPASSWORD
#
# Description:
# Performance Data Warehouse password. Required for setting up the
# Performance Data Warehouse.
#
# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#####
perfDWDbName=perfDW_Db_Name
dbPerfDWUserId=db_PerfDW_UserId
dbPerfDWPASSWORD=db_PerfDW_Password

#####
# Parameter: dbStorageGroup
#
# Description:
# The storage group name for DB2 z/OS databases.
#
# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# None
#
# Parameter: dbConnectionLocation
#
# Description:
# The location of DB2 for z/OS database.
#
# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# None
#####
dbStorageGroup=db_stg_group
dbConnectionLocation=db2_location

#####
# Parameter: environmentName
#
# Description:
# Specifies the name of the environment you are configuring. This parameter
# has no default value, and it must not be empty.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# None
#####
environmentName=environment_name

#####
# Parameter: environmentType
#
# Description:
# Specifies the environment type. The environment type refers to how IBM
# Business Process Manager is used; for example, in a production, stage or
# test environment. Load testing might be done on a test server, while a

```

```

# stage environment type might be used as a temporary location to host
# changes before putting those changes into production. You might specify
# Stage as the Environment type if the server you are configuring will be
# accessed and used to review content and new functionality. Valid values
# are as follows:
# Test
# Use Test if the server you are configuring is to be used as a testing
# environment.
# Stage
# Use Stage if the server is to serve as a staging platform to be used as a
# preproduction server.
# Production
# Use Production if the server is to serve in a production capacity.
# The default value is Test.
#
# Valid Values:
# Test
# Production
# Stage
# Default Values:
# Test
#####
environmentType=Test

#####
# Parameter: isDeveloperServer
#
# Description:
# Specifies whether the server is intended for development purposes only.
# This parameter is useful when creating profiles to test applications on a
# non-production server prior to deploying the applications on their
# production application servers. If -isDeveloperServer is set when
# creating an IBM Business Process Manager profile, then a preconfigured VMM
# file repository is installed. This file repository contains a sample
# organization that can be used to test Business Process Choreographer
# people resolution, ready for you to use as is.
#
# Valid Values:
# false
# true
# Default Values:
# false
#####
#isDeveloperServer=false

#####
# Parameter: samplesPassword
#
# Description:
# Creates a password to be used for samples. The password is used to
# restrict access to Web application samples installed during the
# installation of the application server.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# None
#####
samplesPassword=samplesPassword

#####
# Parameter: webFormConfig
#
# Description:
# Indicates if Business Space is configured to use IBM Forms Server to work
# with Human Task Management widgets. The default value for this parameter
# is false. Indicate true to configure Business Space to use IBM Forms

```



```

# Server. Both the webFormConfig and webFormInstallRoot parameters are
# required to configure IBM Forms Server. This parameter is valid for
# stand-alone server profiles only.
# Note: IBM Forms Server configuration using these parameters is only valid
# for local IBM Forms Server installations.
#
# Valid Values:
# false
# true
# Default Values:
# false
#
# Parameter: webFormHTTP
#
# Description:
# Specifies the location of the IBM Forms Server Translator. The default URL
# for the location is http://localhost:8085/translator. No. This parameter
# is valid only if the -webFormConfig parameter is set to true. It is valid
# for stand-alone server profiles only.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# None
#
# Parameter: webFormInstallRoot
#
# Description:
# Specifies the full path where IBM Forms Server is installed. For example,
# the IBM Forms Server install root might be
# C:/IBM/IBMFormsServer/4.0/WebFormServer. No. This parameter is valid only
# if the -webFormConfig parameter is set to true. It is valid for
# stand-alone server profiles only.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# None
#####
#webFormConfig=false
#webFormHTTP=URL
#webFormInstallRoot=Webform_Server_install_root
#####
# Parameter: configureBRM
#
# Description:
# Configures the business process rules manager. The default value is false.
#
# Valid Values:
# false
# true
# Default Values:
# false
#####
configureBRM=false

```

Oracle 用の Advanced Process Center スタンドアロン・プロファイル作成の応答ファイル:

ここに用意されている応答ファイルを変更し、**manageprofiles** コマンド行ユーティリティと一緒に使用して、Oracle データベース用のスタンドアロン・プロファイルを作成します。

注: ご使用のオペレーティング・システムに合わせて、必要に応じて応答ファイルの情報をコメント化またはアンコメントしてください。詳細については、応答ファイルのコメントを参照してください。

```

# BEGIN COPYRIGHT
# *****
#
# Licensed Materials - Property of IBM
# 5725-C94
# (C) Copyright IBM Corporation 2011, 2012. All Rights Reserved.
# This sample program is provided AS IS and may be used, executed, copied
# and modified without royalty payment by customer (a) for its own
# instruction and study, (b) in order to develop applications designed to
# run with an IBM WebSphere product, either for customer's own internal
# use or for redistribution by customer, as part of such an application,
# in customer's own products.
#
# *****
# END COPYRIGHT

#####
# These response file has the applicable parameters for creating a
# Standalone PC Adv profile that uses Oracle.
#
# Depending on your environment, you may need to change the default values.
#
# To create a profile with this response file specify:
#
# was.install.root/bin/manageprofiles -response PC_Adv_Standalone_Oracle.response
#
# If you use the -response parameter, it must be the only parameter on
# the command-line. If you include any manageprofile parameters
# (in addition to -response) on the command-line, the response file
# is ignored. And default WebSphere Application server profile will be created .
#####

#####
# Parameter: create
#
# Description:
#   Creates the profile.
#   If you are creating a profile, this parameter is required.
#####
create

#####
# Parameter: templatePath
#
# Description:
#   Specifies the directory path to the template files in the installation
#   root directory. Within the profileTemplates directory are various
#   directories that correspond to different profile types and that vary with
#   the type of product installed. The profile directories are the paths that
#   you indicate while using the -templatePath option.
#   Use absolute paths. This parameter must exist as a directory and point to
#   a valid template directory.
#
#   When using the -templatePath parameter, specify the fully qualified file
#   path for the parameter.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
templatePath=BPM/default.procctr.adv

#####
# Parameter: profileName
#
# Description:

```

```

# Specifies the name of the profile. Use a unique value when creating a
# profile.
# Each profile that shares the same set of product binaries must have a
# unique name. The default profile name is based on the profile type and a
# trailing number, for example:
# profileType ProfileNumber where profileType is a value such as ProcSrv,
# Dmgr, or Custom and ProfileNumber is a sequential number that creates a
# unique profile name. The value for this parameter must not contain spaces
# or characters that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,,
# /, \, and |. The profile name that you choose must not be in use. On
# Windows platforms: If the fully qualified path contains spaces, enclose
# the value in quotation marks. The default value is based on the
# install_root directory, the profiles subdirectory, and the name of the
# file. For example, the default for profile creation is:
# WS_WSPROFILE_DEFAULT_PROFILE_HOME/profileName where
# WS_WSPROFILE_DEFAULT_PROFILE_HOME is defined in the wasprofile.properties
# file in the install_root/properties directory. The value for this
# parameter must be a valid path for the target system and must not be
# currently in use. You must have permissions to write to the directory.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
profileName=ProcCtr01

#####
# Parameter: applyPerfTuningSetting
#
# Description:
#   Set a performance tuning level appropriate for the profile you are
#   creating.
#   This parameter is a WebSphere Application Server parameter.
#
# Valid Values:
#   development
#   standard
#   production
# Default Values:
#   None
#####
#applyPerfTuningSetting=standard

#####
# Parameter: cellName
#
# Description:
#   Specifies the cell name of the profile. Use a unique cell name for each
#   profile.
#   The default value for this parameter is based on a combination of the
#   short host name, the constant Cell, and a trailing number, for example:
#   if (DMgr)
#     shortHostNameCellCellNumber
#   else
#     shortHostNameNodeNodeNumberCell
#   where CellNumber is a sequential number starting at 01 and NodeNumber is
#   the node number that you used to define the node name.
#   The value for this parameter must not contain spaces or any characters
#   that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   Varies
#
# Parameter: nodeName

```

```

#
# Description:
#   Specifies the node name for the node that is created with the new profile.
#   Use a unique value within the cell or on the workstation. Each profile
#   that shares the same set of product binaries must have a unique node name.
#   This parameter is required for profile creation only with the
#   dmgr.esbserverdefault.procsvrdefault.procctrdefault.procsvr.advdefault.
#   procctr.advmgr.procctrmanaged.procctrmanaged.procsvr templates.
#   The default value for this parameter is based on the short host name,
#   profile type, and a trailing number, for example:
#   if (DMgr)
#       shortHostNameCellManagerNodeNumber
#   else
#       shortHostNameNodeNodeNumber
#   where NodeNumber is a sequential number starting at 01.
#   The value for this parameter must not contain spaces or any characters
#   that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   Varies
#
# Parameter:  serverName
#
# Description:
#   Specifies the name of the server.
#####
cellName=cell_name
nodeName=node_name
serverName=server1

#####
# Parameter:  enableAdminSecurity
#
# Description:
#   For IBM Business Process Manager omit this parameter. Administrative
#   security is always enabled for IBM Business Process Manager profiles.
#   You must also specify the parameters -adminUserName and -adminPassword
#   along with the values for these parameters.
#
# Valid Values:
#   true
# Default Values:
#   true
#####
enableAdminSecurity=true
adminUserName=adminUser_ID
adminPassword=adminPassword

#####
# Parameter:  signingCertDN
#
# Description:
#   Specifies the distinguished name of the root signing certificate that you
#   create when you create the profile. Specify the distinguished name in
#   quotation marks. This default personal certificate is located in the
#   server keystore file. If you do not specifically create or import a root
#   signing certificate, one is created by default. See the
#   -signingCertValidityPeriod parameter and the -keyStorePassword.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter:  signingCertValidityPeriod

```

```

#
# Description:
#   An optional parameter that specifies the amount of time in years that the
#   root signing certificate is valid. If you do not specify this parameter
#   with the -signingCertDN parameter, the root signing certificate is valid
#   for 20 years.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter:  keyStorePassword
#
# Description:
#   Specifies the password to use on all keystore files created during profile
#   creation. Keystore files are created for the default personal certificate
#   and the root signing certificate.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
#signingCertDN =distinguished_name
#signingCertValidityPeriod =validity_period
#keyStorePassword =keyStore_password

#####
# Parameter:  defaultPorts
#
# Description:
#   Assigns the default or base port values to the profile.d o not use this
#   parameter when using the -startingPort or -portsFile parameter.
#   During profile creation, the manageprofiles command-line utility uses an
#   automatically generated set of recommended ports if you do not specify the
#   -startingPort parameter, the -defaultPorts parameter or the -portsFile
#   parameter. The recommended port values can be different than the default
#   port values based on the availability of the default ports.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter:  startingPort
#
# Description:
#   Specifies the starting port number for generating and assigning all ports
#   for the profile.
#   Port values are assigned sequentially from the -startingPort value,
#   omitting those ports that are already in use. The system recognizes and
#   resolves ports that are currently in use and determines the port
#   assignments to avoid port conflicts.
#   Do not use this parameter with the -defaultPorts or -portsFile parameters.
#   During profile creation, the manageprofiles command-line utility uses an
#   automatically generated set of recommended ports if you do not specify the
#   -startingPort parameter, the -defaultPorts parameter or the -portsFile
#   parameter. The recommended port values can be different than the default
#   port values based on the availability of the default ports.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter:  portsFile

```

```

#
# Description:
#   An optional parameter that specifies the path to a file that defines port
#   settings for the new profile.
#   Do not use this parameter when using the -startingPort or -defaultPorts
#   parameter.
#   During profile creation, the manageprofiles command-line utility uses an
#   automatically generated set of recommended ports if you do not specify the
#   -startingPort parameter, the -defaultPorts parameter or the -portsFile
#   parameter. The recommended port values can be different than the default
#   port values based on the availability of the default ports.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
#defaultPorts=default_ports
#startingPort=startingPort
#portsFile=file_path

#####
# Parameter: enableService
#
# Description:
#   Enables the creation of a Linux service. Valid values include true or
#   false. The default value for this parameter is false. When the
#   manageprofiles command-line utility is run with the -enableService option
#   set to true , the Linux service is created with the profile when the
#   command is run by the root user. When a nonroot user runs the
#   manageprofiles command-line utility, the profile is created, but the Linux
#   service is not. The Linux service is not created because the nonroot user
#   does not have sufficient permission to set up the service. An
#   INSTCONPARTIALSUCCESS result is displayed at the end of the profile
#   creation and the profile creation log
#   install_root/logs/manageprofiles/profile_name_create.log contains a
#   message indicating the current user does not have sufficient permission to
#   set up the Linux service. Use this parameter when creating profiles only.
#
# Valid Values:
#   false
#   true
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: serviceUserName
#
# Description:
#   Specifies the user ID that is used during the creation of the Linux
#   service so that the Linux service will run under this user ID. The Linux
#   service runs whenever the user ID is logged on. Not required.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: winserviceAccountType
#
# Description:
#   The type of the owner account of the Windows service created for the
#   profile. Valid values include specifieduser or localsystem. The
#   localsystem value runs the Windows service under the local account of the
#   user who creates the profile. The default value for this parameter is
#   localsystem. Use this parameter when creating profiles only.
#
# Valid Values:

```



```

# localsystem
# specifieduser
# Default Values:
# localsystem
#
# Parameter: winserviceUserName
#
# Description:
# Specify your user ID so that the Windows operating system can verify you
# as an ID that is capable of creating a Windows service. Your user ID must
# belong to the Administrator group and have the following advanced user
# rights:
# Act as part of the operating system
# Log on as a service
# The default value for this parameter is the current user name. The value
# for this parameter must not contain spaces or characters that are not
# valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |. The user that
# you specify must have the proper permissions to create a Windows service.
# You must specify the correct password for the user name that you choose.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# None
#
# Parameter: winservicePassword
#
# Description:
# Specify the password for the specified user or the local account that is
# to own the Windows service.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# None
#
# Parameter: winserviceCheck
#
# Description:
# The value can be either true or false. Specify true to create a Windows
# service for the server process that is created within the profile. Specify
# false to not create the Windows service. The default value for this
# parameter is false.
#
# Valid Values:
# false
# true
# Default Values:
# false
#
# Parameter: winserviceStartupType
#
# Description:
# The following values for Windows service startup can be used:
# manual
# automatic
# disabled
# The default value for this parameter is manual.
#
# Valid Values:
# manual
# automatic
# disabled
# Default Values:
# manual
#####
#enableService=true

```

```

#serviceName=service_user_ID
#winserviceAccountType=localsystem
#winserviceUserName=winservice_user_ID
#winservicePassword=winservice_password
#winserviceCheck=false
#winserviceStartupType>manual

#####
# Parameter:  bpmdbDesign
#
# Description:
#   Specifies the file that holds the database configuration design for all of
#   the IBM Business Process Manager components .
#   This parameter replaces the -wbldbDesign that was used in previous
#   versions of WebSphere Process Server.
#
#   Note: If a bpmdbDesign file parameter is specified, none of the database
#   related properties should be specified.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
#bpmdbDesign=design_file

#####
# Parameter:  dbCreateNew
#
# Description:
#   Indicates a new database is created or if an existing database is to be
#   reused. Valid values are true or false. This value cannot be true for an
#   Oracle, SQL Server or a DB2 z/OS database. This value can only be true for
#   a DB2 database.
#
# Valid Values:
#   false
# Default Values:
#   false
#####
dbCreateNew=false

#####
# Parameter:  dbType
#
# Description:
#   The database type. Set one of the following values for the type of
#   database product you are using with IBM Business Process Manager.
#
#   Required only for one of the following:
#   A stand-alone profile when -bpmdbDesign was not specified.
#   An advanced dmgr or managed profiles when -bpmdbDesign was not specified.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   ORACLE
# Default Values:
#   ORACLE
#
# Parameter:  dbDriverType
#
# Description:
#   The database driver type. For an Oracle database, specify ORACLE. For
#   databases other than Oracle, the value is automatically set based on the
#   server operating system. Server installations on all operating systems use
#   type 4.

```

```

#
# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: dbJDBCClasspath
#
# Description:
#   The directory path location of JDBC driver files.
#
# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
dbType=ORACLE
dbDriverType=ORACLE_THIN
dbJDBCClasspath=${WAS_INSTALL_ROOT}/jdbcdrivers/Oracle
#####
# Parameter: dbLocation
#
# Description:
#   The directory of the ORACLE_HOME directory. This parameter is required
#   when the parameter dbDelayConfig is set to false. No, this parameter is
#   only valid if you are using Oracle databases.
#
# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
dbLocation=db_location
#####
# Parameter: dbDelayConfig
#
# Description:
#   Indicates whether to postpone table creation until after the profile is
#   created. Valid values are true or false. The parameter is set to false by
#   default. Setting this parameter to true delays the execution of the
#   scripts that create the database tables. No. Specify false if you want the
#   database to be set up during profile creation.
#
# Valid Values:
#   false
#   true
# Default Values:
#   false
#####
dbDelayConfig=false
#####
# Parameter: dbName
#
# Description:
#   The name of the database. By default, the value is set to orcl for Oracle
#   databases and to CMNDB for all other supported databases.
#
# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.

```

```

#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   orcl
#
# Parameter: dbUserId
#
# Description:
#   The user ID for all database types. Specifies the user ID that has
#   privileges to create and drop the databases. The WebSphere data source
#   uses this ID to authenticate the database connection.
#   Important: The -dbUserId parameter value must be a valid database
#   authorization ID. Required if the -bpmdbDesign file is not set.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: dbPassword
#
# Description:
#   The password required for database authentication. Required when the
#   -bpmdbDesign file is not set.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
dbName=orcl
dbUserId=db_userid
dbPassword=db_pswd
#####
# Parameter: procSvrDbName
#
# Description:
#   Database name for Process Server database. The value specified for
#   -procSvrDbName and -perfDWDbName can be the same.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: dbProcSvrUserId
#
# Description:
#   The Process Server user name. Required for setting up the Process Server.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: dbProcSvrPassword
#

```

```

# Description:
#   The Process Server password. Required for setting up the Process Server.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
procSvrDbName=procSvr_Db_Name
dbProcSvrUserId=db_ProcSvr_UserId_name
dbProcSvrPassword=db_ProcSvr_Password

#####
# Parameter: perfDWDbName
#
# Description:
#   Database name for Performance Data Warehouse. The value specified for
#   -perfDWDbName and -procSvrDbName can be the same.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Parameter: dbPerfDWUserId
#
# Description:
#   Performance Data Warehouse user name. Required for setting up the
#   Performance Data Warehouse.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Parameter: dbPerfDWPassword
#
# Description:
#   Performance Data Warehouse password. Required for setting up the
#   Performance Data Warehouse.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#####
perfDWDbName=perfDW_Db_Name
dbPerfDWUserId=db_PerfDW_UserId
dbPerfDWPassword=db_PerfDW_Password

#####
# Parameter: dbProcSvrMeUserId
#
# Description:
#   Process Server Messaging Engine user name. Required for setting up the
#   Process Server Messaging Engine. If you enter a user-specified a user name
#   and password during profile creation and if you specified ORACLE for
#   dbType, this parameter is required.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: dbProcSvrMePassword
#
# Description:
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:

```

```

# None
#####
dbProcSvrMeUserId=db_ProcSvr_ME_UserID
dbProcSvrMePassword=db_ProcSvr_Me_Password

#####
# Parameter: dbPerfDWMeUserId
#
# Description:
# Performance Data Warehouse Messaging Engine user name. Required for
# setting up the Performance Data Warehouse Messaging Engine. This
# parameter is required.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# None
#
# Parameter: dbPerfDWMePassword
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# None
#####
dbPerfDWMeUserId=db_PerfDW_Me_UserId
dbPerfDWMePassword=db_PerfDW_ME_Password

#####
# Parameter: dbCommonUserId
#
# Description:
# The user id to authenticate with the Common database. For Oracle, the
# default user name is the first three characters of the Oracle database
# service name. For example: If the database service name is ORCL,
# dbCommonUserId is ORCCOMM. Required for all stand-alone IBM Business
# Process Manager profiles and advanced deployment manager (dmgr.*.adv)
# profiles, if the -dbType parameter is set to ORACLE or MICROSOFT_SQLSERVER
# and no bpmdbDesign file was specified.
#
# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# None
#
# Parameter: dbCommonPassword
#
# Description:
# The password for the user id of the dbCommonUserId parameter. Required for
# all stand-alone IBM Business Process Manager profiles and advanced
# deployment manager (dmgr.*.adv) profiles, if the -dbType parameter is set
# to ORACLE or MICROSOFT_SQLSERVER and no bpmdbDesign file was specified.
#
# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# None
#####
dbCommonUserId=common_db_userid
dbCommonPassword=common_db_pswd

#####
# Parameter: dbAppMeUserId

```



```

#
# Description:
#   The default user name is the first three characters of the Oracle database
#   service name. For example: If the database service name is ORCL,
#   dbAppMeUserId is ORCSA00. If you enter a user-specified a user name and
#   password during profile creation and if you specified ORACLE for dbType,
#   this parameter is required.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: dbAppMePassword
#
# Description:
#   The password for the user id of the dbAppMeUserId parameter. If you enter
#   a user-specified a user name and password during profile creation and if
#   you specified ORACLE for dbType, this parameter is required.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
dbAppMeUserId=app_me_userID
dbAppMePassword=app_me_pwd

#####
# Parameter: dbCeiMeUserId
#
# Description:
#   The default user name is the first three characters of the Oracle database
#   service name. For example: If the database service name is ORCL,
#   dbCeiMeUserId is ORCCM00. If you enter a user-specified a user name and
#   password during profile creation and if you specified ORACLE for dbType,
#   this parameter is required.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: dbCeiMePassword
#
# Description:
#   The password for the user id of the dbCeiMeUserId parameter. If you enter
#   a user-specified a user name and password during profile creation and if
#   you specified ORACLE for -dbType, this parameter is required.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
dbCeiMeUserId=cei_me_userID
dbCeiMePassword=cei_me_pwd

#####

```

```

# Parameter: dbSysMeUserId
#
# Description:
#   The default user name for the SCA system bus messaging engine is the first
#   three characters of the Oracle database service name. For example: If the
#   database service name is ORCL, dbSysMeUserId is ORCSS00. If you enter a
#   user-specified a user name and password during profile creation, this
#   parameter is required.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: dbSysMePassword
#
# Description:
#   The default password for the SCA system bus messaging engine is
#   dbPassword. If you enter a user-specified a user name and password during
#   profile creation, this parameter is required.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
dbSysMeUserId=sys_me_userID
dbSysMePassword=sys_me_pwd

#####
# Parameter: environmentName
#
# Description:
#   Specifies the name of the environment you are configuring. This parameter
#   has no default value, and it must not be empty.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
environmentName=environment_name

#####
# Parameter: environmentType
#
# Description:
#   Specifies the environment type. The environment type refers to how IBM
#   Business Process Manager is used; for example, in a production, stage or
#   test environment. Load testing might be done on a test server, while a
#   stage environment type might be used as a temporary location to host
#   changes before putting those changes into production. You might specify
#   Stage as the Environment type if the server you are configuring will be
#   accessed and used to review content and new functionality. Valid values
#   are as follows:
#   Test
#   Use Test if the server you are configuring is to be used as a testing
#   environment.
#   Stage
#   Use Stage if the server is to serve as a staging platform to be used as a
#   preproduction server.
#   Production
#   Use Production if the server is to serve in a production capacity.

```

```

# The default value is Test.
#
# Valid Values:
# Test
# Production
# Stage
# Default Values:
# Test
#####
environmentType=Test

#####
# Parameter: isDeveloperServer
#
# Description:
# Specifies whether the server is intended for development purposes only.
# This parameter is useful when creating profiles to test applications on a
# non-production server prior to deploying the applications on their
# production application servers. If -isDeveloperServer is set when
# creating an IBM Business Process Manager profile, then a preconfigured VMM
# file repository is installed. This file repository contains a sample
# organization that can be used to test Business Process Choreographer
# people resolution, ready for you to use as is.
#
# Valid Values:
# false
# true
# Default Values:
# false
#####
#isDeveloperServer=false

#####
# Parameter: samplesPassword
#
# Description:
# Creates a password to be used for samples. The password is used to
# restrict access to Web application samples installed during the
# installation of the application server.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# None
#####
samplesPassword=samplesPassword

#####
# Parameter: webFormConfig
#
# Description:
# Indicates if Business Space is configured to use IBM Forms Server to work
# with Human Task Management widgets. The default value for this parameter
# is false. Indicate true to configure Business Space to use IBM Forms
# Server. Both the webFormConfig and webFormInstallRoot parameters are
# required to configure IBM Forms Server. This parameter is valid for
# stand-alone server profiles only.
# Note: IBM Forms Server configuration using these parameters is only valid
# for local IBM Forms Server installations.
#
# Valid Values:
# false
# true
# Default Values:
# false
#
# Parameter: webFormHTTP

```

```

#
# Description:
#   Specifies the location of the IBM Forms Server Translator. The default URL
#   for the location is http://localhost:8085/translator. No. This parameter
#   is valid only if the -webFormConfig parameter is set to true. It is valid
#   for stand-alone server profiles only.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: webFormInstallRoot
#
# Description:
#   Specifies the full path where IBM Forms Server is installed. For example,
#   the IBM Forms Server install root might be
#   C:/IBM/IBMFormsServer/4.0/WebFormServer. No. This parameter is valid only
#   if the -webFormConfig parameter is set to true. It is valid for
#   stand-alone server profiles only.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
#webFormConfig=false
#webFormHTTP=URL
#webFormInstallRoot=Webform_Server_install_root

#####
# Parameter: configureBRM
#
# Description:
#   Configures the business process rules manager. The default value is false.
#
# Valid Values:
#   false
#   true
# Default Values:
#   false
#####
configureBRM=false

#####
# Parameter: configureBPC
#
# Description:
#   Determines whether the Business Process Choreographer sample configuration
#   is created.
#   The following conditions apply:
#   Only DB2 databases are supported.
#   The default is set to true for DB2.
#   It uses its own schema within the common database (CMNDB) and the schema
#   name is always BPEDB.
#   Business Process Choreographer database parameters set in the Database
#   Design Tool and generated to the database design file are ignored by
#   Business Process Choreographer at profile creation time.
#   See -bpmdbDesign for information about the database design file.
#   Note: If these conditions are too restrictive, consider setting
#   -configureBPC to false and using other documented methods to configure
#   Business Process Choreographer.
#
# Valid Values:
#   false

```

```
# Default Values:
#   false
#####
configureBPC=false
```

SQL 用の Advanced Process Center スタンドアロン・プロファイル作成の応答ファイル:

ここに用意されている応答ファイルを変更し、**manageprofiles** コマンド行ユーティリティーと一緒に使用して、SQL データベース用のスタンドアロン・プロファイルを作成します。

注: ご使用のオペレーティング・システムに合わせて、必要に応じて応答ファイルの情報をコメント化またはアンコメントしてください。詳細については、応答ファイルのコメントを参照してください。

```
# BEGIN COPYRIGHT
# *****
#
# Licensed Materials - Property of IBM
# 5725-C94
# (C) Copyright IBM Corporation 2011, 2012. All Rights Reserved.
# This sample program is provided AS IS and may be used, executed, copied
# and modified without royalty payment by customer (a) for its own
# instruction and study, (b) in order to develop applications designed to
# run with an IBM WebSphere product, either for customer's own internal
# use or for redistribution by customer, as part of such an application,
# in customer's own products.
#
# *****
# END COPYRIGHT

#####
# These response file has the applicable parameters for creating a
# Standalone PC Adv profile that uses SQLServer.
#
# Depending on your environment, you may need to change the default values.
#
# To create a profile with this response file specify:
#
# was.install.root/bin/manageprofiles -response PC_Adv_Standalone_SQLServer.response
#
# If you use the -response parameter, it must be the only parameter on
# the command-line. If you include any manageprofile parameters
# (in addition to -response) on the command-line, the response file
# is ignored. And default WebSphere Application server profile will be created .
#####

#####
# Parameter: create
#
# Description:
#   Creates the profile.
#   If you are creating a profile, this parameter is required.
#####
create

#####
# Parameter: templatePath
#
# Description:
#   Specifies the directory path to the template files in the installation
#   root directory. Within the profileTemplates directory are various
#   directories that correspond to different profile types and that vary with
#   the type of product installed. The profile directories are the paths that
#   you indicate while using the -templatePath option.
#   Use absolute paths. This parameter must exist as a directory and point to
#   a valid template directory.
#
```

```

# When using the -templatePath parameter, specify the fully qualified file
# path for the parameter.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
templatePath=BPM/default.procctr.adv

#####
# Parameter:  profileName
#
# Description:
#   Specifies the name of the profile. Use a unique value when creating a
#   profile.
#   Each profile that shares the same set of product binaries must have a
#   unique name. The default profile name is based on the profile type and a
#   trailing number, for example:
#   profileType ProfileNumberwhere profileType is a value such as ProcSrv,
#   Dmgr, or Custom and ProfileNumber is a sequential number that creates a
#   unique profile name. The value for this parameter must not contain spaces
#   or characters that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,,
#   /, \, and |. The profile name that you choose must not be in use. On
#   Windows platforms: If the fully qualified path contains spaces, enclose
#   the value in quotation marks. The default value is based on the
#   install_root directory, the profiles subdirectory, and the name of the
#   file. For example, the default for profile creation is:
#   WS_WSPROFILE_DEFAULT_PROFILE_HOME/profileNamewhere
#   WS_WSPROFILE_DEFAULT_PROFILE_HOME is defined in the wasprofile.properties
#   file in the install_root/properties directory. The value for this
#   parameter must be a valid path for the target system and must not be
#   currently in use. You must have permissions to write to the directory.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
profileName=ProcCtr01

#####
# Parameter:  applyPerfTuningSetting
#
# Description:
#   Set a performance tuning level appropriate for the profile you are
#   creating.
#   This parameter is a WebSphere Application Server parameter.
#
# Valid Values:
#   development
#   standard
#   production
# Default Values:
#   None
#####
#applyPerfTuningSetting=standard

#####
# Parameter:  cellName
#
# Description:
#   Specifies the cell name of the profile. Use a unique cell name for each
#   profile.
#   The default value for this parameter is based on a combination of the
#   short host name, the constant Cell, and a trailing number, for example:
#   if (DMgr)

```



```

#     shortHostNameCellCellNumber
# else
#     shortHostNameNodeNodeNumberCell
# where CellNumber is a sequential number starting at 01 and NodeNumber is
# the node number that you used to define the node name.
# The value for this parameter must not contain spaces or any characters
# that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |.
#
# Valid Values:
#     Varies
# Default Values:
#     Varies
#
# Parameter: nodeName
#
# Description:
#     Specifies the node name for the node that is created with the new profile.
#     Use a unique value within the cell or on the workstation. Each profile
#     that shares the same set of product binaries must have a unique node name.
#     This parameter is required for profile creation only with the
#     dmgr.esbserverdefault.procsvrdefault.procctrdefault.procsvr.advdefault.
#     procctr.advdmgr.procctrmanaged.procctrmanaged.procsvr templates.
#     The default value for this parameter is based on the short host name,
#     profile type, and a trailing number, for example:
#     if (DMgr)
#         shortHostNameCellManagerNodeNumber
#     else
#         shortHostNameNodeNodeNumber
#     where NodeNumber is a sequential number starting at 01.
#     The value for this parameter must not contain spaces or any characters
#     that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |.
#
# Valid Values:
#     Varies
# Default Values:
#     Varies
#
# Parameter: serverName
#
# Description:
#     Specifies the name of the server.
#####
cellName=cell_name
nodeName=node_name
serverName=server1

#####
# Parameter: enableAdminSecurity
#
# Description:
#     For IBM Business Process Manager omit this parameter. Administrative
#     security is always enabled for IBM Business Process Manager profiles.
#     You must also specify the parameters -adminUserName and -adminPassword
#     along with the values for these parameters.
#
# Valid Values:
#     true
# Default Values:
#     true
#####
enableAdminSecurity=true
adminUserName=adminUser_ID
adminPassword=adminPassword

#####
# Parameter: signingCertDN
#

```

```

# Description:
#   Specifies the distinguished name of the root signing certificate that you
#   create when you create the profile. Specify the distinguished name in
#   quotation marks. This default personal certificate is located in the
#   server keystore file. If you do not specifically create or import a root
#   signing certificate, one is created by default. See the
#   -signingCertValidityPeriod parameter and the -keyStorePassword.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: signingCertValidityPeriod
#
# Description:
#   An optional parameter that specifies the amount of time in years that the
#   root signing certificate is valid. If you do not specify this parameter
#   with the -signingCertDN parameter, the root signing certificate is valid
#   for 20 years.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: keyStorePassword
#
# Description:
#   Specifies the password to use on all keystore files created during profile
#   creation. Keystore files are created for the default personal certificate
#   and the root signing certificate.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
#signingCertDN =distinguished_name
#signingCertValidityPeriod =validity_period
#keyStorePassword =keyStore_password
#####
# Parameter: defaultPorts
#
# Description:
#   Assigns the default or base port values to the profile.d o not use this
#   parameter when using the -startingPort or -portsFile parameter.
#   During profile creation, the manageprofiles command-line utility uses an
#   automatically generated set of recommended ports if you do not specify the
#   -startingPort parameter, the -defaultPorts parameter or the -portsFile
#   parameter. The recommended port values can be different than the default
#   port values based on the availability of the default ports.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: startingPort
#
# Description:
#   Specifies the starting port number for generating and assigning all ports
#   for the profile.
#   Port values are assigned sequentially from the -startingPort value,
#   omitting those ports that are already in use. The system recognizes and
#   resolves ports that are currently in use and determines the port

```

```

# assignments to avoid port conflicts.
# Do not use this parameter with the -defaultPorts or -portsFile parameters.
# During profile creation, the manageprofiles command-line utility uses an
# automatically generated set of recommended ports if you do not specify the
# -startingPort parameter, the -defaultPorts parameter or the -portsFile
# parameter. The recommended port values can be different than the default
# port values based on the availability of the default ports.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: portsFile
#
# Description:
#   An optional parameter that specifies the path to a file that defines port
#   settings for the new profile.
#   Do not use this parameter when using the -startingPort or -defaultPorts
#   parameter.
#   During profile creation, the manageprofiles command-line utility uses an
#   automatically generated set of recommended ports if you do not specify the
#   -startingPort parameter, the -defaultPorts parameter or the -portsFile
#   parameter. The recommended port values can be different than the default
#   port values based on the availability of the default ports.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
#defaultPorts=default_ports
#startingPort=startingPort
#portsFile=file_path
#####
# Parameter: enableService
#
# Description:
#   Enables the creation of a Linux service. Valid values include true or
#   false. The default value for this parameter is false. When the
#   manageprofiles command-line utility is run with the -enableService option
#   set to true , the Linux service is created with the profile when the
#   command is run by the root user. When a nonroot user runs the
#   manageprofiles command-line utility, the profile is created, but the Linux
#   service is not. The Linux service is not created because the nonroot user
#   does not have sufficient permission to set up the service. An
#   INSTCONPARTIALSUCCESS result is displayed at the end of the profile
#   creation and the profile creation log
#   install_root/logs/manageprofiles/profile_name_create.log contains a
#   message indicating the current user does not have sufficient permission to
#   set up the Linux service. Use this parameter when creating profiles only.
#
# Valid Values:
#   false
#   true
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: serviceUserName
#
# Description:
#   Specifies the user ID that is used during the creation of the Linux
#   service so that the Linux service will run under this user ID. The Linux
#   service runs whenever the user ID is logged on. Not required.
#
# Valid Values:

```

```

#    Varies
# Default Values:
#    None
#
# Parameter:  winserviceAccountType
#
# Description:
#    The type of the owner account of the Windows service created for the
#    profile. Valid values include specifieduser or localsystem. The
#    localsystem value runs the Windows service under the local account of the
#    user who creates the profile. The default value for this parameter is
#    localsystem. Use this parameter when creating profiles only.
#
# Valid Values:
#    localsystem
#    specifieduser
# Default Values:
#    localsystem
#
# Parameter:  winserviceUserName
#
# Description:
#    Specify your user ID so that the Windows operating system can verify you
#    as an ID that is capable of creating a Windows service. Your user ID must
#    belong to the Administrator group and have the following advanced user
#    rights:
#    Act as part of the operating system
#    Log on as a service
#    The default value for this parameter is the current user name. The value
#    for this parameter must not contain spaces or characters that are not
#    valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |. The user that
#    you specify must have the proper permissions to create a Windows service.
#    You must specify the correct password for the user name that you choose.
#
# Valid Values:
#    Varies
# Default Values:
#    None
#
# Parameter:  winservicePassword
#
# Description:
#    Specify the password for the specified user or the local account that is
#    to own the Windows service.
#
# Valid Values:
#    Varies
# Default Values:
#    None
#
# Parameter:  winserviceCheck
#
# Description:
#    The value can be either true or false. Specify true to create a Windows
#    service for the server process that is created within the profile. Specify
#    false to not create the Windows service. The default value for this
#    parameter is false.
#
# Valid Values:
#    false
#    true
# Default Values:
#    false
#
# Parameter:  winserviceStartupType
#
# Description:

```

```

# The following values for Windows service startup can be used:
# manual
# automatic
# disabled
# The default value for this parameter is manual.
#
# Valid Values:
# manual
# automatic
# disabled
# Default Values:
# manual
#####
#enableService=true
#serviceName=service_user_ID
#winserviceAccountType=localsystem
#winserviceUserName=winservice_user_ID
#winservicePassword=winservice_password
#winserviceCheck=false
#winserviceStartupType=manual

#####
# Parameter: bpmdbDesign
#
# Description:
# Specifies the file that holds the database configuration design for all of
# the IBM Business Process Manager components .
# This parameter replaces the -wbldbDesign that was used in previous
# versions of WebSphere Process Server.
#
# Note: If a bpmdbDesign file parameter is specified, none of the database
# related properties should be specified.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# None
#####
#bpmdbDesign=design_file

#####
# Parameter: dbCreateNew
#
# Description:
# Indicates a new database is created or if an existing database is to be
# reused. Valid values are true or false. This value cannot be true for an
# Oracle, SQL Server or a DB2 z/OS database. This value can only be true for
# a DB2 database.
#
# Valid Values:
# false
# Default Values:
# false
#####
dbCreateNew=false

#####
# Parameter: dbType
#
# Description:
# The database type. Set one of the following values for the type of
# database product you are using with IBM Business Process Manager.
#
# Required only for one of the following:
# A stand-alone profile when -bpmdbDesign was not specified.
# An advanced dmgr or managed profiles when -bpmdbDesign was not specified.
#

```

```

# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   MSSQLSERVER_MICROSOFT
# Default Values:
#   MSSQLSERVER_MICROSOFT
#
# Parameter: dbJDBCClasspath
#
# Description:
#   The directory path location of JDBC driver files.
#
# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
dbType=MSSQLSERVER_MICROSOFT
dbJDBCClasspath=${WAS_INSTALL_ROOT}/jdbcdrivers/SQLServer
#####
# Parameter: dbDelayConfig
#
# Description:
#   Indicates whether to postpone table creation until after the profile is
#   created. Valid values are true or false. The parameter is set to false by
#   default. Setting this parameter to true delays the execution of the
#   scripts that create the database tables. No. Specify false if you want the
#   database to be set up during profile creation.
#
# Valid Values:
#   false
#   true
# Default Values:
#   false
#####
dbDelayConfig=false
#####
# Parameter: dbName
#
# Description:
#   The name of the database. By default, the value is set to orcl for Oracle
#   databases and to CMNDB for all other supported databases.
#
# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   CMNDB
#
# Parameter: dbUserId
#
# Description:
#   The user ID for all database types. Specifies the user ID that has
#   privileges to create and drop the databases. The WebSphere data source
#   uses this ID to authenticate the database connection.
#   Important: The -dbUserId parameter value must be a valid database
#   authorization ID. Required if the -bpmdbDesign file is not set.
#
# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies

```



```

# Default Values:
#   None
#
# Parameter: dbPassword
#
# Description:
#   The password required for database authentication. Required when the
#   -bpmdbDesign file is not set.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
dbName=CMNDB
dbUserId=db_userid
dbPassword=db_pswd

#####
# Parameter: procSvrDbName
#
# Description:
#   Database name for Process Server database. The value specified for
#   -procSvrDbName and -perfDWDbName must be different.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: dbProcSvrUserId
#
# Description:
#   The Process Server user name. Required for setting up the Process Server.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: dbProcSvrPassword
#
# Description:
#   The Process Server password. Required for setting up the Process Server.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
procSvrDbName=procSvr_Db_Name
dbProcSvrUserId=db_ProcSvr_UserId_name
dbProcSvrPassword=db_ProcSvr_Password

#####
# Parameter: perfDWDbName
#
# Description:
#   Database name for Performance Data Warehouse. The value specified for

```

```

# -perfDWDbName and -procSvrDbName must be different.
#
# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Parameter: dbPerfDWUserId
#
# Description:
# Performance Data Warehouse user name. Required for setting up the
# Performance Data Warehouse.
#
# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Parameter: dbPerfDWPassword
#
# Description:
# Performance Data Warehouse password. Required for setting up the
# Performance Data Warehouse.
#
# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#####
perfDWDbName=perfDW_Db_Name
dbPerfDWUserId=db_PerfDW_UserId
dbPerfDWPassword=db_PerfDW_Password
#####
# Parameter: dbProcSvrMeUserId
#
# Description:
# Process Server Messaging Engine user name. Required for setting up the
# Process Server Messaging Engine. If you enter a user-specified a user name
# and password during profile creation and if you specified ORACLE for
# dbType, this parameter is required.
#
# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# None
#
# Parameter: dbProcSvrMePassword
#
# Description:
# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# None
#####
dbProcSvrMeUserId=db_ProcSvr_ME_UserID
dbProcSvrMePassword=db_ProcSvr_Me_Password
#####
# Parameter: dbPerfDWMeUserId
#
# Description:
# Performance Data Warehouse Messaging Engine user name. Required for
# setting up the Performance Data Warehouse Messaging Engine.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# None
#
# Parameter: dbPerfDWMePassword
#

```

```

# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
dbPerfDWMeUserId=db_PerfDW_Me_UserId
dbPerfDWMePassword=db_PerfDW_ME_Password

#####
# Parameter: dbCommonUserId
#
# Description:
#   The user id to authenticate with the Common database. For Oracle, the
#   default user name is the first three characters of the Oracle database
#   service name. For example: If the database service name is ORCL,
#   dbCommonUserId is ORCCOMM. Required for all stand-alone IBM Business
#   Process Manager profiles and advanced deployment manager (dmgr.*.adv)
#   profiles, if the -dbType parameter is set to ORACLE or MICROSOFT_SQLSERVER
#   and no bpmdbDesign file was specified.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: dbCommonPassword
#
# Description:
#   The password for the user id of the dbCommonUserId parameter. Required for
#   all stand-alone IBM Business Process Manager profiles and advanced
#   deployment manager (dmgr.*.adv) profiles, if the -dbType parameter is set
#   to ORACLE or MICROSOFT_SQLSERVER and no bpmdbDesign file was specified.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
dbCommonUserId=common_db_userid
dbCommonPassword=common_db_pswd

#####
# Parameter: dbAppMeUserId
#
# Description:
#   User name for application messaging engine.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: dbAppMePassword
#
# Description:
#   The password for the user id of the dbAppMeUserId parameter.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies

```

```

# Default Values:
#   None
#####
#dbAppMeUserId=app_me_userID
#dbAppMePassword=app_me_pwd

#####
# Parameter: dbCeiMeUserId
#
# Description:
#   User name for CEI messaging engine.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: dbCeiMePassword
#
# Description:
#   The password for the user id of the dbCeiMeUserId parameter. If you enter
#   a user-specified a user name and password during profile creation and if
#   you specified ORACLE for -dbType, this parameter is required.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
#dbCeiMeUserId=cei_me_userID
#dbCeiMePassword=cei_me_pwd

#####
# Parameter: dbSysMeUserId
#
# Description:
#   The default user name for the SCA system bus messaging engine is the first
#   three characters of the Oracle database service name. For example: If the
#   database service name is ORCL, dbSysMeUserId is ORCSS00.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: dbSysMePassword
#
# Description:
#   The default password for the SCA system bus messaging engine is
#   dbPassword.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
#dbSysMeUserId=sys_me_userID
#dbSysMePassword=sys_me_pwd

```

```

#####
# Parameter: dbWinAuth
#
# Description:
#   An optional parameter that is valid in all default profile templates.
#   Specify true to indicate that you are running SQL Server using integrated
#   windows authentication.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   false
#   true
# Default Values:
#   None
#####
#dbWinAuth=true

#####
# Parameter: environmentName
#
# Description:
#   Specifies the name of the environment you are configuring. This parameter
#   has no default value, and it must not be empty.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
environmentName=environment_name

#####
# Parameter: environmentType
#
# Description:
#   Specifies the environment type. The environment type refers to how IBM
#   Business Process Manager is used; for example, in a production, stage or
#   test environment. Load testing might be done on a test server, while a
#   stage environment type might be used as a temporary location to host
#   changes before putting those changes into production. You might specify
#   Stage as the Environment type if the server you are configuring will be
#   accessed and used to review content and new functionality. Valid values
#   are as follows:
#   Test
#   Use Test if the server you are configuring is to be used as a testing
#   environment.
#   Stage
#   Use Stage if the server is to serve as a staging platform to be used as a
#   preproduction server.
#   Production
#   Use Production if the server is to serve in a production capacity.
#   The default value is Test.
#
# Valid Values:
#   Test
#   Production
#   Stage
# Default Values:
#   Test
#####
environmentType=Test

#####
# Parameter: isDeveloperServer
#
# Description:

```

```

# Specifies whether the server is intended for development purposes only.
# This parameter is useful when creating profiles to test applications on a
# non-production server prior to deploying the applications on their
# production application servers. If -isDeveloperServer is set when
# creating an IBM Business Process Manager profile, then a preconfigured VMM
# file repository is installed. This file repository contains a sample
# organization that can be used to test Business Process Choreographer
# people resolution, ready for you to use as is.
#
# Valid Values:
# false
# true
# Default Values:
# false
#####
#isDeveloperServer=false

#####
# Parameter: samplesPassword
#
# Description:
# Creates a password to be used for samples. The password is used to
# restrict access to Web application samples installed during the
# installation of the application server.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# None
#####
samplesPassword=samplesPassword

#####
# Parameter: webFormConfig
#
# Description:
# Indicates if Business Space is configured to use IBM Forms Server to work
# with Human Task Management widgets. The default value for this parameter
# is false. Indicate true to configure Business Space to use IBM Forms
# Server. Both the webFormConfig and webFormInstallRoot parameters are
# required to configure IBM Forms Server. This parameter is valid for
# stand-alone server profiles only.
# Note: IBM Forms Server configuration using these parameters is only valid
# for local IBM Forms Server installations.
#
# Valid Values:
# false
# true
# Default Values:
# false
#
# Parameter: webFormHTTP
#
# Description:
# Specifies the location of the IBM Forms Server Translator. The default URL
# for the location is http://localhost:8085/translator. No. This parameter
# is valid only if the -webFormConfig parameter is set to true. It is valid
# for stand-alone server profiles only.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# None
#
# Parameter: webFormInstallRoot
#
# Description:

```



```

# Specifies the full path where IBM Forms Server is installed. For example,
# the IBM Forms Server install root might be
# C:/IBM/IBMFormsServer/4.0/WebFormServer. No. This parameter is valid only
# if the -webFormConfig parameter is set to true. It is valid for
# stand-alone server profiles only.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
#webFormConfig=false
#webFormHTTP=URL
#webFormInstallRoot=Webform_Server_install_root

#####
# Parameter: configureBRM
#
# Description:
#   Configures the business process rules manager. The default value is false.
#
# Valid Values:
#   false
#   true
# Default Values:
#   false
#####
configureBRM=false

#####
# Parameter: configureBPC
#
# Description:
#   Determines whether the Business Process Choreographer sample configuration
#   is created.
#   The following conditions apply:
#   Only DB2 databases are supported.
#   The default is set to true for DB2.
#   It uses its own schema within the common database (CMNDB) and the schema
#   name is always BPEDB.
#   Business Process Choreographer database parameters set in the Database
#   Design Tool and generated to the database design file are ignored by
#   Business Process Choreographer at profile creation time.
#   See -bpmdbDesign for information about the database design file.
#   Note: If these conditions are too restrictive, consider setting
#   -configureBPC to false and using other documented methods to configure
#   Business Process Choreographer.
#
# Valid Values:
#   false
# Default Values:
#   false
#####
configureBPC=false

```

manageprofiles を使用した *Process Server* スタンドアロン・プロファイルの作成:

manageprofiles コマンド行ユーティリティーを使用して、IBM Business Process Manager Advanced 用の *Process Server* スタンドアロン・プロファイルを作成します。

manageprofiles コマンド行ユーティリティーを実行する前に、以下の作業が完了していることを確認します。

- 『プロファイルの作成または拡張に関する前提条件』で、プロファイルを作成または拡張するための前提条件を確認している。

- プロファイル作成コマンドの例を確認している。
- 同じプロファイルで **manageprofiles** コマンド行ユーティリティを実行していないことを検査している。エラー・メッセージが表示された場合は、別のプロファイル作成操作や拡張操作が進行中かどうかを確認してください。実行されている場合は、完了するまで待ってください。

このタスクでは、**manageprofiles** コマンド行ユーティリティを使用して、IBM Business Process Manager Advanced 用の Process Server スタンドアロン・プロファイルを作成する方法について説明します。

manageprofiles コマンド行ユーティリティを使用してプロファイルを作成するには、以下のステップを実行します。

1. 作成するプロファイルの種類を決定します。これにより、新しいプロファイルに使用するテンプレートが決まります (**-templatePath** オプションを使用)。

各プロファイルのテンプレートは、*install_root/profileTemplates/BPM* ディレクトリー (BPM テンプレートの場合) および *install_root/profileTemplates* の下 (その他の製品の場合) にあります。

以下のテンプレートを使用できます。

- **default.procsvr**: Process Server スタンドアロン・プロファイル用で、IBM BPM Standard 構成および Express 構成に固有の機能を持ったスタンドアロン・サーバーを定義します。
 - **default.procsvr.adv**: Process Server のスタンドアロン・プロファイル用で、IBM BPM Advanced 構成に固有の機能を持ったスタンドアロン・サーバーを定義します。
 - **default.esbserver**: WebSphere Enterprise Service Bus スタンドアロン・サーバー・プロファイル用。スタンドアロン・サーバーを定義します。
2. 『manageprofile の例』に記載されているプロファイル作成コマンドの例を検討して、ご使用のプロファイルのタイプにどのパラメーターが必要であるかを判断します。
 3. プロファイルに提供する値を決定します。これを行うには、**manageprofiles** パラメーター のトピックで示されているデフォルト値を確認して、それらがプロファイルに必要なものであるかどうかを検討します。
 4. 応答ファイルを作成します。

サンプル応答ファイルは、*install_root/BPM/samples/manageprofiles/* ディレクトリーの下にあります。作成するプロファイル (スタンドアロンまたはネットワーク、Process Center または Process Server) に応じて適切な応答ファイルを選択し、環境に合わせてファイルをカスタマイズしてください。

重要: 値の後にスペースが入っている (例えば、'**personalCertValidityPeriod=1** ' や '**winserviceCheck=false** ') ことがないようにしてください。スペースがある場合は、プロファイルの作成が失敗します。

『IBM Business Process Manager サンプルを使用した応答ファイルの作成』を参照してください。

5. **-response** パラメーターと、作成した応答ファイルの名前を使用して、コマンド行から **manageprofiles** コマンドを実行します。

- **Linux** **UNIX** **manageprofiles.sh -response myResponseFile**
- **Windows** **manageprofiles.bat -response myResponseFile**

コマンドにより、実行につれて状況が表示されます。コマンドが終了するまで待機します。他の応答ファイルと同様に、ファイルの構文解析時には応答ファイルに対する通常の構文検査が適用されます。応答ファイルの個々の値はコマンド行パラメーターと見なされます。

6. SMTP サーバーを手動で構成して、メール通知を使用可能にします。『SMTP サーバーの構成』を参照してください。

関連概念:

238 ページの『カスタム・インストールの後のスタンドアロン・プロファイルの作成』

カスタム・インストールを実行した後で、プロファイル管理ツールまたは **manageprofiles** コマンド行ユーティリティーを使用してスタンドアロン・サーバー・プロファイルを作成することができます。

230 ページの『プロファイルの作成または拡張に関する前提条件』

プロファイルの作成または拡張を実行する前に、一連の前提条件が満たされていることを確認する必要があります。

784 ページの『**manageprofiles** の例』

このセクションの例では、**manageprofiles** コマンド行ユーティリティーを使用して、スタンドアロン・プロファイル、デプロイメント・マネージャー・プロファイル、およびカスタム (管理対象ノード) プロファイルを作成する方法を示します。

Standard Process Server 用の応答ファイル:

manageprofiles コマンド行ユーティリティーと応答ファイルを使用して、スタンドアロン・プロファイルを作成します。

DB2 用の Standard Process Server スタンドアロン・プロファイル作成の応答ファイル:

ここに用意されている応答ファイルを変更し、**manageprofiles** コマンド行ユーティリティーと一緒に使用して、DB2 データベース用のスタンドアロン・プロファイルを作成します。

注: ご使用のオペレーティング・システムに合わせて、必要に応じて応答ファイルの情報をコメント化またはアンコメントしてください。詳細については、応答ファイルのコメントを参照してください。

```
# BEGIN COPYRIGHT
# *****
#
# Licensed Materials - Property of IBM
# 5725-C94
# (C) Copyright IBM Corporation 2011, 2012. All Rights Reserved.
# This sample program is provided AS IS and may be used, executed, copied
# and modified without royalty payment by customer (a) for its own
# instruction and study, (b) in order to develop applications designed to
# run with an IBM WebSphere product, either for customer's own internal
# use or for redistribution by customer, as part of such an application,
# in customer's own products.
#
# *****
# END COPYRIGHT

#####
# These response file has the applicable parameters for creating a
# Standalone PS Std profile that uses DB2.
#
# Depending on your environment, you may need to change the default values.
#
# To create a profile with this response file specify:
#
# was.install.root/bin/manageprofiles -response PS_Std_Standalone_DB2.response
#
# If you use the -response parameter, it must be the only parameter on
# the command-line. If you include any manageprofile parameters
# (in addition to -response) on the command-line, the response file
# is ignored. And default WebSphere Application server profile will be created .
#####
```

```

#####
# Parameter: create
#
# Description:
#   Creates the profile.
#   If you are creating a profile, this parameter is required.
#####
create

#####
# Parameter: templatePath
#
# Description:
#   Specifies the directory path to the template files in the installation
#   root directory. Within the profileTemplates directory are various
#   directories that correspond to different profile types and that vary with
#   the type of product installed. The profile directories are the paths that
#   you indicate while using the -templatePath option.
#   Use absolute paths. This parameter must exist as a directory and point to
#   a valid template directory.
#
#   When using the -templatePath parameter, specify the fully qualified file
#   path for the parameter.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
templatePath=BPM/default.procsvr

#####
# Parameter: profileName
#
# Description:
#   Specifies the name of the profile. Use a unique value when creating a
#   profile.
#   Each profile that shares the same set of product binaries must have a
#   unique name. The default profile name is based on the profile type and a
#   trailing number, for example:
#   profileType ProfileNumberwhere profileType is a value such as ProcSrv,
#   Dmgr, or Custom and ProfileNumber is a sequential number that creates a
#   unique profile name. The value for this parameter must not contain spaces
#   or characters that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,,
#   /, \, and |. The profile name that you choose must not be in use. On
#   Windows platforms: If the fully qualified path contains spaces, enclose
#   the value in quotation marks. The default value is based on the
#   install_root directory, the profiles subdirectory, and the name of the
#   file. For example, the default for profile creation is:
#   WS_WSPROFILE_DEFAULT_PROFILE_HOME/profileNamewhere
#   WS_WSPROFILE_DEFAULT_PROFILE_HOME is defined in the wasprofile.properties
#   file in the install_root/properties directory. The value for this
#   parameter must be a valid path for the target system and must not be
#   currently in use. You must have permissions to write to the directory.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
profileName=ProcSrv01

#####
# Parameter: applyPerfTuningSetting
#
# Description:

```

```

# Set a performance tuning level appropriate for the profile you are
# creating.
# This parameter is a WebSphere Application Server parameter.
#
# Valid Values:
#   development
#   standard
#   production
# Default Values:
#   None
#####
#applyPerfTuningSetting=standard
#####
# Parameter:  cellName
#
# Description:
#   Specifies the cell name of the profile. Use a unique cell name for each
#   profile.
#   The default value for this parameter is based on a combination of the
#   short host name, the constant Cell, and a trailing number, for example:
#   if (DMgr)
#       shortHostNameCellCellNumber
#   else
#       shortHostNameNodeNodeNumberCell
#   where CellNumber is a sequential number starting at 01 and NodeNumber is
#   the node number that you used to define the node name.
#   The value for this parameter must not contain spaces or any characters
#   that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   Varies
#
# Parameter:  nodeName
#
# Description:
#   Specifies the node name for the node that is created with the new profile.
#   Use a unique value within the cell or on the workstation. Each profile
#   that shares the same set of product binaries must have a unique node name.
#   This parameter is required for profile creation only with the
#   dmgr.esbserverdefault.procsvrdefault.procctrdefault.procsvr.advdefault.
#   procctr.advdmgr.procctrmanaged.procctrmanaged.procsvr templates.
#   The default value for this parameter is based on the short host name,
#   profile type, and a trailing number, for example:
#   if (DMgr)
#       shortHostNameCellManagerNodeNumber
#   else
#       shortHostNameNodeNodeNumber
#   where NodeNumber is a sequential number starting at 01.
#   The value for this parameter must not contain spaces or any characters
#   that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   Varies
#
# Parameter:  serverName
#
# Description:
#   Specifies the name of the server.
#####
cellName=cell_name
nodeName=node_name
serverName=server1

```

```

#####
# Parameter: processCenterURL
#
# Description:
#   Specifies the URL of the Process Center that the Process Server connects
#   to. If this parameter is set, the protocol must be either http or https.
#   Note: No corresponding useServerOffline parameter exists to use the server
#   offline. To use the server offline, omit the processCenterURL parameter.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: processCenterUserId
#
# Description:
#   Specifies the user ID to be used to connect to the Process Center. This
#   parameter is valid for stand-alone Process Server profiles. This parameter
#   is required if the Process Server is online (connected to a Process
#   Center). It is required for a stand-alone process server (standard or
#   advanced) profile if the processCenterURL parameter is specified.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: processCenterPassword
#
# Description:
#   Specifies the user password to be used to connect to the Process Center.
#   This parameter is valid for stand-alone Process Server profiles. This
#   parameter is required if the Process Server is online (connected to a
#   Process Center). It is required for a stand-alone process server (standard
#   or advanced) profile if the processCenterURL parameter is specified.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
processCenterURL=process_Center_URL
processCenterUserId=process_Center_UserId
processCenterPassword=process_Center_Password

#####
# Parameter: enableAdminSecurity
#
# Description:
#   For IBM Business Process Manager omit this parameter. Administrative
#   security is always enabled for IBM Business Process Manager profiles.
#   You must also specify the parameters -adminUserName and -adminPassword
#   along with the values for these parameters.
#
# Valid Values:
#   true
# Default Values:
#   true
#####
enableAdminSecurity=true
adminUserName=adminUser_ID
adminPassword=adminPassword

#####
# Parameter: signingCertDN

```



```

#
# Description:
#   Specifies the distinguished name of the root signing certificate that you
#   create when you create the profile. Specify the distinguished name in
#   quotation marks. This default personal certificate is located in the
#   server keystore file. If you do not specifically create or import a root
#   signing certificate, one is created by default. See the
#   -signingCertValidityPeriod parameter and the -keyStorePassword.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: signingCertValidityPeriod
#
# Description:
#   An optional parameter that specifies the amount of time in years that the
#   root signing certificate is valid. If you do not specify this parameter
#   with the -signingCertDN parameter, the root signing certificate is valid
#   for 20 years.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: keyStorePassword
#
# Description:
#   Specifies the password to use on all keystore files created during profile
#   creation. Keystore files are created for the default personal certificate
#   and the root signing certificate.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
#signingCertDN =distinguished_name
#signingCertValidityPeriod =validity_period
#keyStorePassword =keyStore_password
#####
# Parameter: defaultPorts
#
# Description:
#   Assigns the default or base port values to the profile.d o not use this
#   parameter when using the -startingPort or -portsFile parameter.
#   During profile creation, the manageprofiles command-line utility uses an
#   automatically generated set of recommended ports if you do not specify the
#   -startingPort parameter, the -defaultPorts parameter or the -portsFile
#   parameter. The recommended port values can be different than the default
#   port values based on the availability of the default ports.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: startingPort
#
# Description:
#   Specifies the starting port number for generating and assigning all ports
#   for the profile.
#   Port values are assigned sequentially from the -startingPort value,
#   omitting those ports that are already in use. The system recognizes and

```

```

# resolves ports that are currently in use and determines the port
# assignments to avoid port conflicts.
# Do not use this parameter with the -defaultPorts or -portsFile parameters.
# During profile creation, the manageprofiles command-line utility uses an
# automatically generated set of recommended ports if you do not specify the
# -startingPort parameter, the -defaultPorts parameter or the -portsFile
# parameter. The recommended port values can be different than the default
# port values based on the availability of the default ports.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter:  portsFile
#
# Description:
#   An optional parameter that specifies the path to a file that defines port
#   settings for the new profile.
#   Do not use this parameter when using the -startingPort or -defaultPorts
#   parameter.
#   During profile creation, the manageprofiles command-line utility uses an
#   automatically generated set of recommended ports if you do not specify the
#   -startingPort parameter, the -defaultPorts parameter or the -portsFile
#   parameter. The recommended port values can be different than the default
#   port values based on the availability of the default ports.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
#defaultPorts=default_ports
#startingPort=startingPort
#portsFile=file_path
#####
# Parameter:  enableService
#
# Description:
#   Enables the creation of a Linux service. Valid values include true or
#   false. The default value for this parameter is false. When the
#   manageprofiles command-line utility is run with the -enableService option
#   set to true , the Linux service is created with the profile when the
#   command is run by the root user. When a nonroot user runs the
#   manageprofiles command-line utility, the profile is created, but the Linux
#   service is not. The Linux service is not created because the nonroot user
#   does not have sufficient permission to set up the service. An
#   INSTCONPARTIALSUCCESS result is displayed at the end of the profile
#   creation and the profile creation log
#   install_root/logs/manageprofiles/profile_name_create.log contains a
#   message indicating the current user does not have sufficient permission to
#   set up the Linux service. Use this parameter when creating profiles only.
#
# Valid Values:
#   false
#   true
# Default Values:
#   None
#
# Parameter:  serviceUserName
#
# Description:
#   Specifies the user ID that is used during the creation of the Linux
#   service so that the Linux service will run under this user ID. The Linux
#   service runs whenever the user ID is logged on. Not required.
#

```

```

# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: winserviceAccountType
#
# Description:
#   The type of the owner account of the Windows service created for the
#   profile. Valid values include specifieduser or localsystem. The
#   localsystem value runs the Windows service under the local account of the
#   user who creates the profile. The default value for this parameter is
#   localsystem. Use this parameter when creating profiles only.
#
# Valid Values:
#   localsystem
#   specifieduser
# Default Values:
#   localsystem
#
# Parameter: winserviceUserName
#
# Description:
#   Specify your user ID so that the Windows operating system can verify you
#   as an ID that is capable of creating a Windows service. Your user ID must
#   belong to the Administrator group and have the following advanced user
#   rights:
#   Act as part of the operating system
#   Log on as a service
#   The default value for this parameter is the current user name. The value
#   for this parameter must not contain spaces or characters that are not
#   valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |. The user that
#   you specify must have the proper permissions to create a Windows service.
#   You must specify the correct password for the user name that you choose.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: winservicePassword
#
# Description:
#   Specify the password for the specified user or the local account that is
#   to own the Windows service.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: winserviceCheck
#
# Description:
#   The value can be either true or false. Specify true to create a Windows
#   service for the server process that is created within the profile. Specify
#   false to not create the Windows service. The default value for this
#   parameter is false.
#
# Valid Values:
#   false
#   true
# Default Values:
#   false
#
# Parameter: winserviceStartupType
#

```

```

# Description:
#   The following values for Windows service startup can be used:
#   manual
#   automatic
#   disabled
#   The default value for this parameter is manual.
#
# Valid Values:
#   manual
#   automatic
#   disabled
# Default Values:
#   manual
#####
#enableService=true
#serviceName=service_user_ID
#winserviceAccountType=localsystem
#winserviceUserName=winservice_user_ID
#winservicePassword=winservice_password
#winserviceCheck=false
#winserviceStartupType>manual

#####
# Parameter:  bpmdbDesign
#
# Description:
#   Specifies the file that holds the database configuration design for all of
#   the IBM Business Process Manager components .
#   This parameter replaces the -wbiddbDesign that was used in previous
#   versions of WebSphere Process Server.
#
#   Note: If a bpmdbDesign file parameter is specified, none of the database
#   related properties should be specified.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
#bpmdbDesign=design_file

#####
# Parameter:  dbCreateNew
#
# Description:
#   Indicates a new database is created or if an existing database is to be
#   reused. Valid values are true or false. This value cannot be true for an
#   Oracle, SQL Server or a DB2 z/OS database. This value can only be true for
#   a DB2 database.
#
# Valid Values:
#   false
#   true
# Default Values:
#   None
#####
dbCreateNew=true

#####
# Parameter:  dbType
#
# Description:
#   The database type. Set one of the following values for the type of
#   database product you are using with IBM Business Process Manager.
#
#   Required only for one of the following:
#   A stand-alone profile when -bpmdbDesign was not specified.

```

```

# An advanced dmgr or managed profiles when -bpmdbDesign was not specified.
#
# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
# DB2_DATASERVER
# Default Values:
# DB2_DATASERVER
#
# Parameter: dbJDBCClasspath
#
# Description:
# The directory path location of JDBC driver files.
#
# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# None
#
# Parameter: dbHostName
#
# Description:
# The database server host name or IP address. The default value is the
# local host name. Required when the -bpmdbDesign parameter was not
# specified. (It is not required if the -bpmdbDesign parameter is
# specified.)
#
# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# None
#
# Parameter: dbServerPort
#
# Description:
# The database server port number. Depending on the database you are using,
# you can specify a different port number instead of the default port
# number.
#
# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# None
#####
dbType=DB2_DATASERVER
dbJDBCClasspath=${WAS_INSTALL_ROOT}/jdbcdrivers/DB2
dbHostName=db_host_name
dbServerPort=db_port_number
#####
# Parameter: dbDelayConfig
#
# Description:
# Indicates whether to postpone table creation until after the profile is
# created. Valid values are true or false. The parameter is set to false by
# default. Setting this parameter to true delays the execution of the
# scripts that create the database tables. No. Specify false if you want the
# database to be set up during profile creation.
#
# Valid Values:
# false

```

```

# true
# Default Values:
# false
#####
dbDelayConfig=false

#####
# Parameter: dbName
#
# Description:
# The name of the database. By default, the value is set to orcl for Oracle
# databases and to CMNDB for all other supported databases.
#
# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# CMNDB
#
# Parameter: dbUserId
#
# Description:
# The user ID for all database types. Specifies the user ID that has
# privileges to create and drop the databases. The WebSphere data source
# uses this ID to authenticate the database connection.
# Important: The -dbUserId parameter value must be a valid database
# authorization ID. Required if the -bpmdbDesign file is not set.
#
# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# None
#
# Parameter: dbPassword
#
# Description:
# The password required for database authentication. Required when the
# -bpmdbDesign file is not set.
#
# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# None
#####
dbName=CMNDB
dbUserId=db_userid
dbPassword=db_pswd

#####
# Parameter: procSvrDbName
#
# Description:
# Database name for Process Server database. The value specified for
# -procSvrDbName and -perfDWDbName must be different.
#
# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# None
#

```



```

# Parameter: dbProcSvrUserId
#
# Description:
#   The Process Server user name. Required for setting up the Process Server.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: dbProcSvrPassword
#
# Description:
#   The Process Server password. Required for setting up the Process Server.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
procSvrDbName=procSvr_Db_Name
dbProcSvrUserId=db_ProcSvr_UserId_name
dbProcSvrPassword=db_ProcSvr_Password
#####
# Parameter: perfDWDbName
#
# Description:
#   Database name for Performance Data Warehouse. The value specified for
#   -perfDWDbName and -procSvrDbName must be different.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Parameter: dbPerfDWUserId
#
# Description:
#   Performance Data Warehouse user name. Required for setting up the
#   Performance Data Warehouse.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Parameter: dbPerfDWPASSWORD
#
# Description:
#   Performance Data Warehouse password. Required for setting up the
#   Performance Data Warehouse.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#####
perfDWDbName=perfDW_Db_Name
dbPerfDWUserId=db_PerfDW_UserId
dbPerfDWPASSWORD=db_PerfDW_Password
#####
# Parameter: dbProcSvrMeUserId
#
# Description:
#   Process Server Messaging Engine user name. Required for setting up the
#   Process Server Messaging Engine. If you enter a user-specified a user name
#   and password during profile creation and if you specified ORACLE for
#   dbType, this parameter is required.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.

```

```

#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: dbProcSvrMePassword
#
# Description:
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
#dbProcSvrMeUserId=db_ProcSvr_ME_UserID
#dbProcSvrMePassword=db_ProcSvr_Me_Password
#####
# Parameter: dbPerfDWMeUserId
#
# Description:
#   Performance Data Warehouse Messaging Engine user name. Required for
#   setting up the Performance Data Warehouse Messaging Engine.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: dbPerfDWMePassword
#
# Description:
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
#dbPerfDWMeUserId=db_PerfDW_Me_UserId
#dbPerfDWMePassword=db_PerfDW_ME_Password
#####
# Parameter: cdbSchemaName
#
# Description:
#   The schema name for the Common database. If no value is specified, the
#   following default database schema names are used:
#   DB2 database
#   The default schema name is the value specified by the dbUserId parameter.
#   The -cdbSchemaName parameter is valid for all database types except for
#   Oracle and Microsoft SQL Server.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: dbCommonUserId
#
# Description:

```

```

# The user id to authenticate with the Common database.
#
# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: dbCommonPassword
#
# Description:
#   The password for the user id of the dbCommonUserId parameter.
#
# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
#cdbSchemaName=db_schema_name
#dbCommonUserId=common_db_userid
#dbCommonPassword=common_db_pswd
#####
# Parameter: environmentName
#
# Description:
#   Specifies the name of the environment you are configuring. This parameter
#   has no default value, and it must not be empty.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
environmentName=environment_name
#####
# Parameter: environmentType
#
# Description:
#   Specifies the environment type. The environment type refers to how IBM
#   Business Process Manager is used; for example, in a production, stage or
#   test environment. Load testing might be done on a test server, while a
#   stage environment type might be used as a temporary location to host
#   changes before putting those changes into production. You might specify
#   Stage as the Environment type if the server you are configuring will be
#   accessed and used to review content and new functionality. Valid values
#   are as follows:
#   Test
#   Use Test if the server you are configuring is to be used as a testing
#   environment.
#   Stage
#   Use Stage if the server is to serve as a staging platform to be used as a
#   preproduction server.
#   Production
#   Use Production if the server is to serve in a production capacity.
#   The default value is Test.
#
# Valid Values:
#   Test
#   Production
#   Stage
# Default Values:
#   Test

```

```
#####
environmentType=Test

#####
# Parameter: isDeveloperServer
#
# Description:
#   Specifies whether the server is intended for development purposes only.
#   This parameter is useful when creating profiles to test applications on a
#   non-production server prior to deploying the applications on their
#   production application servers. If -isDeveloperServer is set when
#   creating an IBM Business Process Manager profile, then a preconfigured VMM
#   file repository is installed. This file repository contains a sample
#   organization that can be used to test Business Process Choreographer
#   people resolution, ready for you to use as is.
#
# Valid Values:
#   false
#   true
# Default Values:
#   false
#####
#isDeveloperServer=false

#####
# Parameter: samplesPassword
#
# Description:
#   Creates a password to be used for samples. The password is used to
#   restrict access to Web application samples installed during the
#   installation of the application server.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
samplesPassword=samplesPassword
```

DB2 for z/OS 用の Standard Process Server スタンドアロン・プロファイル作成の応答ファイル:

ここに用意されている応答ファイルを変更し、**manageprofiles** コマンド行ユーティリティと一緒に使用して、DB2 for z/OS データベース用のスタンドアロン・プロファイルを作成します。

注: ご使用のオペレーティング・システムに合わせて、必要に応じて応答ファイルの情報をコメント化またはアンコメントしてください。詳細については、応答ファイルのコメントを参照してください。

```
# BEGIN COPYRIGHT
# *****
#
# Licensed Materials - Property of IBM
# 5725-C94
# (C) Copyright IBM Corporation 2011, 2012. All Rights Reserved.
# This sample program is provided AS IS and may be used, executed, copied
# and modified without royalty payment by customer (a) for its own
# instruction and study, (b) in order to develop applications designed to
# run with an IBM WebSphere product, either for customer's own internal
# use or for redistribution by customer, as part of such an application,
# in customer's own products.
#
# *****
# END COPYRIGHT

#####
# These response file has the applicable parameters for creating a
# Standalone PS Std profile that uses DB2zOS.
```

```

#
# Depending on your environment, you may need to change the default values.
#
# To create a profile with this response file specify:
#
# was.install.root/bin/manageprofiles -response PS_Std_Standalone_DB2z0S.response
#
# If you use the -response parameter, it must be the only parameter on
# the command-line. If you include any manageprofile parameters
# (in addition to -response) on the command-line, the response file
# is ignored. And default WebSphere Application server profile will be created .
#####
#####
# Parameter: create
#
# Description:
#   Creates the profile.
#   If you are creating a profile, this parameter is required.
#####
create

#####
# Parameter: templatePath
#
# Description:
#   Specifies the directory path to the template files in the installation
#   root directory. Within the profileTemplates directory are various
#   directories that correspond to different profile types and that vary with
#   the type of product installed. The profile directories are the paths that
#   you indicate while using the -templatePath option.
#   Use absolute paths. This parameter must exist as a directory and point to
#   a valid template directory.
#
#   When using the -templatePath parameter, specify the fully qualified file
#   path for the parameter.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
templatePath=BPM/default.procsvr

#####
# Parameter: profileName
#
# Description:
#   Specifies the name of the profile. Use a unique value when creating a
#   profile.
#   Each profile that shares the same set of product binaries must have a
#   unique name. The default profile name is based on the profile type and a
#   trailing number, for example:
#   profileType ProfileNumberwhere profileType is a value such as ProcSrv,
#   Dmgr, or Custom and ProfileNumber is a sequential number that creates a
#   unique profile name. The value for this parameter must not contain spaces
#   or characters that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,,
#   /, \, and |. The profile name that you choose must not be in use. On
#   Windows platforms: If the fully qualified path contains spaces, enclose
#   the value in quotation marks. The default value is based on the
#   install_root directory, the profiles subdirectory, and the name of the
#   file. For example, the default for profile creation is:
#   WS_WSPROFILE_DEFAULT_PROFILE_HOME/profileNamewhere
#   WS_WSPROFILE_DEFAULT_PROFILE_HOME is defined in the wasprofile.properties
#   file in the install_root/properties directory. The value for this
#   parameter must be a valid path for the target system and must not be
#   currently in use. You must have permissions to write to the directory.

```

```

#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
profileName=ProcSrv01

#####
# Parameter: applyPerfTuningSetting
#
# Description:
#   Set a performance tuning level appropriate for the profile you are
#   creating.
#   This parameter is a WebSphere Application Server parameter.
#
# Valid Values:
#   development
#   standard
#   production
# Default Values:
#   None
#####
#applyPerfTuningSetting=standard

#####
# Parameter: cellName
#
# Description:
#   Specifies the cell name of the profile. Use a unique cell name for each
#   profile.
#   The default value for this parameter is based on a combination of the
#   short host name, the constant Cell, and a trailing number, for example:
#   if (DMgr)
#     shortHostNameCellCellNumber
#   else
#     shortHostNameNodeNodeNumberCell
#   where CellNumber is a sequential number starting at 01 and NodeNumber is
#   the node number that you used to define the node name.
#   The value for this parameter must not contain spaces or any characters
#   that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   Varies
#
# Parameter: nodeName
#
# Description:
#   Specifies the node name for the node that is created with the new profile.
#   Use a unique value within the cell or on the workstation. Each profile
#   that shares the same set of product binaries must have a unique node name.
#   This parameter is required for profile creation only with the
#   dmgr.esbserverdefault.procsvrdefault.procctrdefault.procsvr.advdefault.
#   procctr.advdmgr.procctrmanaged.procctrmanaged.procsvr templates.
#   The default value for this parameter is based on the short host name,
#   profile type, and a trailing number, for example:
#   if (DMgr)
#     shortHostNameCellManagerNodeNumber
#   else
#     shortHostNameNodeNodeNumber
#   where NodeNumber is a sequential number starting at 01.
#   The value for this parameter must not contain spaces or any characters
#   that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |.
#
# Valid Values:

```



```

#    Varies
# Default Values:
#    Varies
#
# Parameter:  serverName
#
# Description:
#    Specifies the name of the server.
#####
cellName=cell_name
nodeName=node_name
serverName=server1
#####
# Parameter:  processCenterURL
#
# Description:
#    Specifies the URL of the Process Center that the Process Server connects
#    to. If this parameter is set, the protocol must be either http or https.
#    Note: No corresponding useServerOffline parameter exists to use the server
#    offline. To use the server offline, omit the processCenterURL parameter.
#
# Valid Values:
#    Varies
# Default Values:
#    None
#
# Parameter:  processCenterUserId
#
# Description:
#    Specifies the user ID to be used to connect to the Process Center. This
#    parameter is valid for stand-alone Process Server profiles. This parameter
#    is required if the Process Server is online (connected to a Process
#    Center). It is required for a stand-alone process server (standard or
#    advanced) profile if the processCenterURL parameter is specified.
#
# Valid Values:
#    Varies
# Default Values:
#    None
#
# Parameter:  processCenterPassword
#
# Description:
#    Specifies the user password to be used to connect to the Process Center.
#    This parameter is valid for stand-alone Process Server profiles. This
#    parameter is required if the Process Server is online (connected to a
#    Process Center). It is required for a stand-alone process server (standard
#    or advanced) profile if the processCenterURL parameter is specified.
#
# Valid Values:
#    Varies
# Default Values:
#    None
#####
processCenterURL=process_Center_URL
processCenterUserId=process_Center_UserId
processCenterPassword=process_Center_Password
#####
# Parameter:  enableAdminSecurity
#
# Description:
#    For IBM Business Process Manager omit this parameter. Administrative
#    security is always enabled for IBM Business Process Manager profiles.
#    You must also specify the parameters -adminUserName and -adminPassword
#    along with the values for these parameters.

```

```

#
# Valid Values:
#   true
# Default Values:
#   true
#####
enableAdminSecurity=true
adminUserName=adminUser_ID
adminPassword=adminPassword

#####
# Parameter: signingCertDN
#
# Description:
#   Specifies the distinguished name of the root signing certificate that you
#   create when you create the profile. Specify the distinguished name in
#   quotation marks. This default personal certificate is located in the
#   server keystore file. If you do not specifically create or import a root
#   signing certificate, one is created by default. See the
#   -signingCertValidityPeriod parameter and the -keyStorePassword.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: signingCertValidityPeriod
#
# Description:
#   An optional parameter that specifies the amount of time in years that the
#   root signing certificate is valid. If you do not specify this parameter
#   with the -signingCertDN parameter, the root signing certificate is valid
#   for 20 years.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: keyStorePassword
#
# Description:
#   Specifies the password to use on all keystore files created during profile
#   creation. Keystore files are created for the default personal certificate
#   and the root signing certificate.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
#signingCertDN =distinguished_name
#signingCertValidityPeriod =validity_period
#keyStorePassword =keyStore_password

#####
# Parameter: defaultPorts
#
# Description:
#   Assigns the default or base port values to the profile.d o not use this
#   parameter when using the -startingPort or -portsFile parameter.
#   During profile creation, the manageprofiles command-line utility uses an
#   automatically generated set of recommended ports if you do not specify the
#   -startingPort parameter, the -defaultPorts parameter or the -portsFile
#   parameter. The recommended port values can be different than the default
#   port values based on the availability of the default ports.
#

```

```

# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter:  startingPort
#
# Description:
#   Specifies the starting port number for generating and assigning all ports
#   for the profile.
#   Port values are assigned sequentially from the -startingPort value,
#   omitting those ports that are already in use. The system recognizes and
#   resolves ports that are currently in use and determines the port
#   assignments to avoid port conflicts.
#   Do not use this parameter with the -defaultPorts or -portsFile parameters.
#   During profile creation, the manageprofiles command-line utility uses an
#   automatically generated set of recommended ports if you do not specify the
#   -startingPort parameter, the -defaultPorts parameter or the -portsFile
#   parameter. The recommended port values can be different than the default
#   port values based on the availability of the default ports.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter:  portsFile
#
# Description:
#   An optional parameter that specifies the path to a file that defines port
#   settings for the new profile.
#   Do not use this parameter when using the -startingPort or -defaultPorts
#   parameter.
#   During profile creation, the manageprofiles command-line utility uses an
#   automatically generated set of recommended ports if you do not specify the
#   -startingPort parameter, the -defaultPorts parameter or the -portsFile
#   parameter. The recommended port values can be different than the default
#   port values based on the availability of the default ports.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
#defaultPorts=default_ports
#startingPort=startingPort
#portsFile=file_path
#####
# Parameter:  enableService
#
# Description:
#   Enables the creation of a Linux service. Valid values include true or
#   false. The default value for this parameter is false. When the
#   manageprofiles command-line utility is run with the -enableService option
#   set to true , the Linux service is created with the profile when the
#   command is run by the root user. When a nonroot user runs the
#   manageprofiles command-line utility, the profile is created, but the Linux
#   service is not. The Linux service is not created because the nonroot user
#   does not have sufficient permission to set up the service. An
#   INSTCONPARTIALSUCCESS result is displayed at the end of the profile
#   creation and the profile creation log
#   install_root/logs/manageprofiles/profile_name_create.log contains a
#   message indicating the current user does not have sufficient permission to
#   set up the Linux service. Use this parameter when creating profiles only.
#
# Valid Values:

```

```

#   false
#   true
# Default Values:
#   None
#
# Parameter:  serviceName
#
# Description:
#   Specifies the user ID that is used during the creation of the Linux
#   service so that the Linux service will run under this user ID. The Linux
#   service runs whenever the user ID is logged on. Not required.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter:  winserviceAccountType
#
# Description:
#   The type of the owner account of the Windows service created for the
#   profile. Valid values include specifieduser or localsystem. The
#   localsystem value runs the Windows service under the local account of the
#   user who creates the profile. The default value for this parameter is
#   localsystem. Use this parameter when creating profiles only.
#
# Valid Values:
#   localsystem
#   specifieduser
# Default Values:
#   localsystem
#
# Parameter:  winserviceUserName
#
# Description:
#   Specify your user ID so that the Windows operating system can verify you
#   as an ID that is capable of creating a Windows service. Your user ID must
#   belong to the Administrator group and have the following advanced user
#   rights:
#   Act as part of the operating system
#   Log on as a service
#   The default value for this parameter is the current user name. The value
#   for this parameter must not contain spaces or characters that are not
#   valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |. The user that
#   you specify must have the proper permissions to create a Windows service.
#   You must specify the correct password for the user name that you choose.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter:  winservicePassword
#
# Description:
#   Specify the password for the specified user or the local account that is
#   to own the Windows service.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter:  winserviceCheck
#
# Description:
#   The value can be either true or false. Specify true to create a Windows

```

```

# service for the server process that is created within the profile. Specify
# false to not create the Windows service. The default value for this
# parameter is false.
#
# Valid Values:
# false
# true
# Default Values:
# false
#
# Parameter: winserviceStartupType
#
# Description:
# The following values for Windows service startup can be used:
# manual
# automatic
# disabled
# The default value for this parameter is manual.
#
# Valid Values:
# manual
# automatic
# disabled
# Default Values:
# manual
#####
#enableService=true
#serviceName=service_user_ID
#winserviceAccountType=localsystem
#winserviceUserName=winservice_user_ID
#winservicePassword=winservice_password
#winserviceCheck=false
#winserviceStartupType>manual

#####
# Parameter: bpmdbDesign
#
# Description:
# Specifies the file that holds the database configuration design for all of
# the IBM Business Process Manager components .
# This parameter replaces the -wbddbDesign that was used in previous
# versions of WebSphere Process Server.
#
# Note: If a bpmdbDesign file parameter is specified, none of the database
# related properties should be specified.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# None
#####
#bpmdbDesign=design_file

#####
# Parameter: dbCreateNew
#
# Description:
# Indicates a new database is created or if an existing database is to be
# reused. Valid values are true or false. This value cannot be true for an
# Oracle, SQL Server or a DB2 z/OS database. This value can only be true for
# a DB2 database.
#
# Valid Values:
# false
# Default Values:
# false
#####

```

dbCreateNew=false

```
#####  
# Parameter: dbType  
#  
# Description:  
#   The database type. Set one of the following values for the type of  
#   database product you are using with IBM Business Process Manager.  
#  
#   Required only for one of the following:  
#   A stand-alone profile when -bpmdbDesign was not specified.  
#   An advanced dmgr or managed profiles when -bpmdbDesign was not specified.  
#  
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.  
#  
# Valid Values:  
#   DB2UDBOS390  
# Default Values:  
#   DB2UDBOS390  
#####  
dbType=DB2UDBOS390
```

```
#####  
# Parameter: dbDelayConfig  
#  
# Description:  
#   Indicates whether to postpone table creation until after the profile is  
#   created. Valid values are true or false. The parameter is set to false by  
#   default. Setting this parameter to true delays the execution of the  
#   scripts that create the database tables. No. Specify false if you want the  
#   database to be set up during profile creation.  
#  
# Valid Values:  
#   false  
#   true  
# Default Values:  
#   false  
#####  
dbDelayConfig=true
```

```
#####  
# Parameter: dbName  
#  
# Description:  
#   The name of the database. By default, the value is set to orcl for Oracle  
#   databases and to CMNDB for all other supported databases.  
#  
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.  
#  
# Valid Values:  
#   Varies  
# Default Values:  
#   CMNDB  
#  
# Parameter: dbUserId  
#  
# Description:  
#   The user ID for all database types. Specifies the user ID that has  
#   privileges to create and drop the databases. The WebSphere data source  
#   uses this ID to authenticate the database connection.  
#   Important: The -dbUserId parameter value must be a valid database  
#   authorization ID. Required if the -bpmdbDesign file is not set.  
#  
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.  
#  
# Valid Values:  
#   Varies
```



```

# Default Values:
#   None
#
# Parameter: dbPassword
#
# Description:
#   The password required for database authentication. Required when the
#   -bpmdbDesign file is not set.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
dbName=CMNDB
dbUserId=db_userid
dbPassword=db_pswd

#####
# Parameter: procSvrDbName
#
# Description:
#   Database name for Process Server database. The value specified for
#   -procSvrDbName and -perfDWDbName must be different.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: dbProcSvrUserId
#
# Description:
#   The Process Server user name. Required for setting up the Process Server.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: dbProcSvrPassword
#
# Description:
#   The Process Server password. Required for setting up the Process Server.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
procSvrDbName=procSvr_Db_Name
dbProcSvrUserId=db_ProcSvr_UserId_name
dbProcSvrPassword=db_ProcSvr_Password

#####
# Parameter: perfDWDbName
#
# Description:
#   Database name for Performance Data Warehouse. The value specified for

```

```

# -perfDWDName and -procSvrDbName must be different.
#
# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Parameter: dbPerfDWUserId
#
# Description:
# Performance Data Warehouse user name. Required for setting up the
# Performance Data Warehouse.
#
# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Parameter: dbPerfDWPASSWORD
#
# Description:
# Performance Data Warehouse password. Required for setting up the
# Performance Data Warehouse.
#
# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#####
perfDWDName=perfDW_Db_Name
dbPerfDWUserId=db_PerfDW_UserId
dbPerfDWPASSWORD=db_PerfDW_Password
#####
# Parameter: dbStorageGroup
#
# Description:
# The storage group name for DB2 z/OS databases.
#
# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# None
#
# Parameter: dbConnectionLocation
#
# Description:
# The location of DB2 for z/OS database.
#
# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# None
#####
dbStorageGroup=db_stg_group
dbConnectionLocation=db2_location
#####
# Parameter: environmentName
#
# Description:
# Specifies the name of the environment you are configuring. This parameter
# has no default value, and it must not be empty.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# None
#####
environmentName=environment_name
#####

```

```

# Parameter: environmentType
#
# Description:
# Specifies the environment type. The environment type refers to how IBM
# Business Process Manager is used; for example, in a production, stage or
# test environment. Load testing might be done on a test server, while a
# stage environment type might be used as a temporary location to host
# changes before putting those changes into production. You might specify
# Stage as the Environment type if the server you are configuring will be
# accessed and used to review content and new functionality. Valid values
# are as follows:
# Test
# Use Test if the server you are configuring is to be used as a testing
# environment.
# Stage
# Use Stage if the server is to serve as a staging platform to be used as a
# preproduction server.
# Production
# Use Production if the server is to serve in a production capacity.
# The default value is Test.
#
# Valid Values:
# Test
# Production
# Stage
# Default Values:
# Test
#####
environmentType=Test

#####
# Parameter: isDeveloperServer
#
# Description:
# Specifies whether the server is intended for development purposes only.
# This parameter is useful when creating profiles to test applications on a
# non-production server prior to deploying the applications on their
# production application servers. If -isDeveloperServer is set when
# creating an IBM Business Process Manager profile, then a preconfigured VMM
# file repository is installed. This file repository contains a sample
# organization that can be used to test Business Process Choreographer
# people resolution, ready for you to use as is.
#
# Valid Values:
# false
# true
# Default Values:
# false
#####
#isDeveloperServer=false

#####
# Parameter: samplesPassword
#
# Description:
# Creates a password to be used for samples. The password is used to
# restrict access to Web application samples installed during the
# installation of the application server.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# None
#####
samplesPassword=samplesPassword

```

Oracle 用の Standard Process Server スタンドアロン・プロファイル作成の応答ファイル:

ここに用意されている応答ファイルを変更し、**manageprofiles** コマンド行ユーティリティーと一緒に使用して、Oracle データベース用のスタンドアロン・プロファイルを作成します。

注: ご使用のオペレーティング・システムに合わせて、必要に応じて応答ファイルの情報をコメント化またはアンコメントしてください。詳細については、応答ファイルのコメントを参照してください。

```
# BEGIN COPYRIGHT
# *****
#
# Licensed Materials - Property of IBM
# 5725-C94
# (C) Copyright IBM Corporation 2011, 2012. All Rights Reserved.
# This sample program is provided AS IS and may be used, executed, copied
# and modified without royalty payment by customer (a) for its own
# instruction and study, (b) in order to develop applications designed to
# run with an IBM WebSphere product, either for customer's own internal
# use or for redistribution by customer, as part of such an application,
# in customer's own products.
#
# *****
# END COPYRIGHT

#####
# These response file has the applicable parameters for creating a
# Standalone PS Std profile that uses Oracle.
#
# Depending on your environment, you may need to change the default values.
#
# To create a profile with this response file specify:
#
# was.install.root/bin/manageprofiles -response PS_Std_Standalone_Oracle.response
#
# If you use the -response parameter, it must be the only parameter on
# the command-line. If you include any manageprofile parameters
# (in addition to -response) on the command-line, the response file
# is ignored. And default WebSphere Application server profile will be created .
#####

#####
# Parameter: create
#
# Description:
#   Creates the profile.
#   If you are creating a profile, this parameter is required.
#####
create

#####
# Parameter: templatePath
#
# Description:
#   Specifies the directory path to the template files in the installation
#   root directory. Within the profileTemplates directory are various
#   directories that correspond to different profile types and that vary with
#   the type of product installed. The profile directories are the paths that
#   you indicate while using the -templatePath option.
#   Use absolute paths. This parameter must exist as a directory and point to
#   a valid template directory.
#
#   When using the -templatePath parameter, specify the fully qualified file
#   path for the parameter.
#
# Valid Values:
#   Varies
```

```

# Default Values:
#   None
#####
templatePath=BPM/default.procsvr

#####
# Parameter:  profileName
#
# Description:
#   Specifies the name of the profile. Use a unique value when creating a
#   profile.
#   Each profile that shares the same set of product binaries must have a
#   unique name. The default profile name is based on the profile type and a
#   trailing number, for example:
#   profileType ProfileNumberwhere profileType is a value such as ProcSrv,
#   Dmgr, or Custom and ProfileNumber is a sequential number that creates a
#   unique profile name. The value for this parameter must not contain spaces
#   or characters that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,,
#   /, \, and |. The profile name that you choose must not be in use. On
#   Windows platforms: If the fully qualified path contains spaces, enclose
#   the value in quotation marks. The default value is based on the
#   install_root directory, the profiles subdirectory, and the name of the
#   file. For example, the default for profile creation is:
#   WS_WSPROFILE_DEFAULT_PROFILE_HOME/profileNamewhere
#   WS_WSPROFILE_DEFAULT_PROFILE_HOME is defined in the wasprofile.properties
#   file in the install_root/properties directory. The value for this
#   parameter must be a valid path for the target system and must not be
#   currently in use. You must have permissions to write to the directory.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
profileName=ProcSrv01

#####
# Parameter:  applyPerfTuningSetting
#
# Description:
#   Set a performance tuning level appropriate for the profile you are
#   creating.
#   This parameter is a WebSphere Application Server parameter.
#
# Valid Values:
#   development
#   standard
#   production
# Default Values:
#   None
#####
#applyPerfTuningSetting=standard

#####
# Parameter:  cellName
#
# Description:
#   Specifies the cell name of the profile. Use a unique cell name for each
#   profile.
#   The default value for this parameter is based on a combination of the
#   short host name, the constant Cell, and a trailing number, for example:
#   if (Dmgr)
#       shortHostNameCellCellNumber
#   else
#       shortHostNameNodeNodeNumberCell
#   where CellNumber is a sequential number starting at 01 and NodeNumber is
#   the node number that you used to define the node name.

```

```

# The value for this parameter must not contain spaces or any characters
# that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   Varies
#
# Parameter: nodeName
#
# Description:
#   Specifies the node name for the node that is created with the new profile.
#   Use a unique value within the cell or on the workstation. Each profile
#   that shares the same set of product binaries must have a unique node name.
#   This parameter is required for profile creation only with the
#   dmgr.esbserverdefault.procsvrdefault.procctrdefault.procsvr.advdefault.
#   procctr.advmgr.procctrmanaged.procctrmanaged.procsvr templates.
#   The default value for this parameter is based on the short host name,
#   profile type, and a trailing number, for example:
#   if (DMgr)
#       shortHostNameCellManagerNodeNumber
#   else
#       shortHostNameNodeNodeNumber
#   where NodeNumber is a sequential number starting at 01.
#   The value for this parameter must not contain spaces or any characters
#   that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   Varies
#
# Parameter: serverName
#
# Description:
#   Specifies the name of the server.
#####
cellName=cell_name
nodeName=node_name
serverName=server1
#####
# Parameter: processCenterURL
#
# Description:
#   Specifies the URL of the Process Center that the Process Server connects
#   to. If this parameter is set, the protocol must be either http or https.
#   Note: No corresponding useServerOffline parameter exists to use the server
#   offline. To use the server offline, omit the processCenterURL parameter.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: processCenterUserId
#
# Description:
#   Specifies the user ID to be used to connect to the Process Center. This
#   parameter is valid for stand-alone Process Server profiles. This parameter
#   is required if the Process Server is online (connected to a Process
#   Center). It is required for a stand-alone process server (standard or
#   advanced) profile if the processCenterURL parameter is specified.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:

```



```

# None
#
# Parameter: processCenterPassword
#
# Description:
# Specifies the user password to be used to connect to the Process Center.
# This parameter is valid for stand-alone Process Server profiles. This
# parameter is required if the Process Server is online (connected to a
# Process Center). It is required for a stand-alone process server (standard
# or advanced) profile if the processCenterURL parameter is specified.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# None
#####
processCenterURL=process_Center_URL
processCenterUserId=process_Center_UserId
processCenterPassword=process_Center_Password
#####
# Parameter: enableAdminSecurity
#
# Description:
# For IBM Business Process Manager omit this parameter. Administrative
# security is always enabled for IBM Business Process Manager profiles.
# You must also specify the parameters -adminUserName and -adminPassword
# along with the values for these parameters.
#
# Valid Values:
# true
# Default Values:
# true
#####
enableAdminSecurity=true
adminUserName=adminUser_ID
adminPassword=adminPassword
#####
# Parameter: signingCertDN
#
# Description:
# Specifies the distinguished name of the root signing certificate that you
# create when you create the profile. Specify the distinguished name in
# quotation marks. This default personal certificate is located in the
# server keystore file. If you do not specifically create or import a root
# signing certificate, one is created by default. See the
# -signingCertValidityPeriod parameter and the -keyStorePassword.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# None
#
# Parameter: signingCertValidityPeriod
#
# Description:
# An optional parameter that specifies the amount of time in years that the
# root signing certificate is valid. If you do not specify this parameter
# with the -signingCertDN parameter, the root signing certificate is valid
# for 20 years.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# None
#

```

```

# Parameter: keyStorePassword
#
# Description:
#   Specifies the password to use on all keystore files created during profile
#   creation. Keystore files are created for the default personal certificate
#   and the root signing certificate.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
#signingCertDN =distinguished_name
#signingCertValidityPeriod =validity_period
#keyStorePassword =keyStore_password

#####
# Parameter: defaultPorts
#
# Description:
#   Assigns the default or base port values to the profile. Do not use this
#   parameter when using the -startingPort or -portsFile parameter.
#   During profile creation, the manageprofiles command-line utility uses an
#   automatically generated set of recommended ports if you do not specify the
#   -startingPort parameter, the -defaultPorts parameter or the -portsFile
#   parameter. The recommended port values can be different than the default
#   port values based on the availability of the default ports.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: startingPort
#
# Description:
#   Specifies the starting port number for generating and assigning all ports
#   for the profile.
#   Port values are assigned sequentially from the -startingPort value,
#   omitting those ports that are already in use. The system recognizes and
#   resolves ports that are currently in use and determines the port
#   assignments to avoid port conflicts.
#   Do not use this parameter with the -defaultPorts or -portsFile parameters.
#   During profile creation, the manageprofiles command-line utility uses an
#   automatically generated set of recommended ports if you do not specify the
#   -startingPort parameter, the -defaultPorts parameter or the -portsFile
#   parameter. The recommended port values can be different than the default
#   port values based on the availability of the default ports.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: portsFile
#
# Description:
#   An optional parameter that specifies the path to a file that defines port
#   settings for the new profile.
#   Do not use this parameter when using the -startingPort or -defaultPorts
#   parameter.
#   During profile creation, the manageprofiles command-line utility uses an
#   automatically generated set of recommended ports if you do not specify the
#   -startingPort parameter, the -defaultPorts parameter or the -portsFile
#   parameter. The recommended port values can be different than the default
#   port values based on the availability of the default ports.
#

```

```

# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
#defaultPorts=default_ports
#startingPort=startingPort
#portsFile=file_path

#####
# Parameter: enableService
#
# Description:
#   Enables the creation of a Linux service. Valid values include true or
#   false. The default value for this parameter is false. When the
#   manageprofiles command-line utility is run with the -enableService option
#   set to true , the Linux service is created with the profile when the
#   command is run by the root user. When a nonroot user runs the
#   manageprofiles command-line utility, the profile is created, but the Linux
#   service is not. The Linux service is not created because the nonroot user
#   does not have sufficient permission to set up the service. An
#   INSTCONPARTIALSUCCESS result is displayed at the end of the profile
#   creation and the profile creation log
#   install_root/logs/manageprofiles/profile_name_create.log contains a
#   message indicating the current user does not have sufficient permission to
#   set up the Linux service. Use this parameter when creating profiles only.
#
# Valid Values:
#   false
#   true
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: serviceUserName
#
# Description:
#   Specifies the user ID that is used during the creation of the Linux
#   service so that the Linux service will run under this user ID. The Linux
#   service runs whenever the user ID is logged on. Not required.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: winserviceAccountType
#
# Description:
#   The type of the owner account of the Windows service created for the
#   profile. Valid values include specifieduser or localsystem. The
#   localsystem value runs the Windows service under the local account of the
#   user who creates the profile. The default value for this parameter is
#   localsystem. Use this parameter when creating profiles only.
#
# Valid Values:
#   localsystem
#   specifieduser
# Default Values:
#   localsystem
#
# Parameter: winserviceUserName
#
# Description:
#   Specify your user ID so that the Windows operating system can verify you
#   as an ID that is capable of creating a Windows service. Your user ID must
#   belong to the Administrator group and have the following advanced user
#   rights:

```

```

# Act as part of the operating system
# Log on as a service
# The default value for this parameter is the current user name. The value
# for this parameter must not contain spaces or characters that are not
# valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |. The user that
# you specify must have the proper permissions to create a Windows service.
# You must specify the correct password for the user name that you choose.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: winservicePassword
#
# Description:
#   Specify the password for the specified user or the local account that is
#   to own the Windows service.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: winserviceCheck
#
# Description:
#   The value can be either true or false. Specify true to create a Windows
#   service for the server process that is created within the profile. Specify
#   false to not create the Windows service. The default value for this
#   parameter is false.
#
# Valid Values:
#   false
#   true
# Default Values:
#   false
#
# Parameter: winserviceStartupType
#
# Description:
#   The following values for Windows service startup can be used:
#   manual
#   automatic
#   disabled
#   The default value for this parameter is manual.
#
# Valid Values:
#   manual
#   automatic
#   disabled
# Default Values:
#   manual
#####
#enableService=true
#serviceName=service_user_ID
#winserviceAccountType=localsystem
#winserviceUserName=winservice_user_ID
#winservicePassword=winservice_password
#winserviceCheck=false
#winserviceStartupType>manual

#####
# Parameter: bpmdbDesign
#
# Description:
#   Specifies the file that holds the database configuration design for all of

```

```

# the IBM Business Process Manager components .
# This parameter replaces the -wbidbDesign that was used in previous
# versions of WebSphere Process Server.
#
# Note: If a bpmdbDesign file parameter is specified, none of the database
# related properties should be specified.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
#bpmdbDesign=design_file
#####
# Parameter: dbCreateNew
#
# Description:
#   Indicates a new database is created or if an existing database is to be
#   reused. Valid values are true or false. This value cannot be true for an
#   Oracle, SQL Server or a DB2 z/OS database. This value can only be true for
#   a DB2 database.
#
# Valid Values:
#   false
# Default Values:
#   false
#####
dbCreateNew=false
#####
# Parameter: dbType
#
# Description:
#   The database type. Set one of the following values for the type of
#   database product you are using with IBM Business Process Manager.
#
#   Required only for one of the following:
#   A stand-alone profile when -bpmdbDesign was not specified.
#   An advanced dmgr or managed profiles when -bpmdbDesign was not specified.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   ORACLE
# Default Values:
#   ORACLE
#
# Parameter: dbDriverType
#
# Description:
#   The database driver type. For an Oracle database, specify ORACLE. For
#   databases other than Oracle, the value is automatically set based on the
#   server operating system. Server installations on all operating systems use
#   type 4.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: dbJDBCClasspath
#
# Description:
#   The directory path location of JDBC driver files.

```

```

#
# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
dbType=ORACLE
dbDriverType=ORACLE_THIN
dbJDBCClasspath=${WAS_INSTALL_ROOT}/jdbcdrivers/Oracle

#####
# Parameter: dbLocation
#
# Description:
#   The directory of the ORACLE_HOME directory. This parameter is required
#   when the parameter dbDelayConfig is set to false. No, this parameter is
#   only valid if you are using Oracle databases.
#
# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
dbLocation=db_location

#####
# Parameter: dbDelayConfig
#
# Description:
#   Indicates whether to postpone table creation until after the profile is
#   created. Valid values are true or false. The parameter is set to false by
#   default. Setting this parameter to true delays the execution of the
#   scripts that create the database tables. No. Specify false if you want the
#   database to be set up during profile creation.
#
# Valid Values:
#   false
#   true
# Default Values:
#   false
#####
dbDelayConfig=false

#####
# Parameter: dbName
#
# Description:
#   The name of the database. By default, the value is set to orcl for Oracle
#   databases and to CMNDB for all other supported databases.
#
# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   orcl
#
# Parameter: dbUserId
#
# Description:
#   The user ID for all database types. Specifies the user ID that has
#   privileges to create and drop the databases. The WebSphere data source
#   uses this ID to authenticate the database connection.

```



```

# Important: The -dbUserId parameter value must be a valid database
# authorization ID. Required if the -bpmdbDesign file is not set.
#
# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: dbPassword
#
# Description:
#   The password required for database authentication. Required when the
#   -bpmdbDesign file is not set.
#
# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
dbName=orcl
dbUserId=db_userid
dbPassword=db_pswd
#####
# Parameter: procSvrDbName
#
# Description:
#   Database name for Process Server database. The value specified for
#   -procSvrDbName and -perfDWDbName can be the same.
#
# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: dbProcSvrUserId
#
# Description:
#   The Process Server user name. Required for setting up the Process Server.
#
# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: dbProcSvrPassword
#
# Description:
#   The Process Server password. Required for setting up the Process Server.
#
# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
procSvrDbName=procSvr_Db_Name
dbProcSvrUserId=db_ProcSvr_UserId_name

```

```

dbProcSvrPassword=db_ProcSvr_Password

#####
# Parameter: perfDWDbName
#
# Description:
#   Database name for Performance Data Warehouse. The value specified for
#   -perfDWDbName and -procSvrDbName can be the same.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Parameter: dbPerfDWUserId
#
# Description:
#   Performance Data Warehouse user name. Required for setting up the
#   Performance Data Warehouse.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Parameter: dbPerfDWPassword
#
# Description:
#   Performance Data Warehouse password. Required for setting up the
#   Performance Data Warehouse.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#####
perfDWDbName=perfDW_Db_Name
dbPerfDWUserId=db_PerfDW_UserId
dbPerfDWPassword=db_PerfDW_Password

#####
# Parameter: dbProcSvrMeUserId
#
# Description:
#   Process Server Messaging Engine user name. Required for setting up the
#   Process Server Messaging Engine. If you enter a user-specified a user name
#   and password during profile creation and if you specified ORACLE for
#   dbType, this parameter is required.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: dbProcSvrMePassword
#
# Description:
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
dbProcSvrMeUserId=db_ProcSvr_ME_UserId
dbProcSvrMePassword=db_ProcSvr_Me_Password

#####
# Parameter: dbPerfDWMUserId
#
# Description:
#   Performance Data Warehouse Messaging Engine user name. Required for
#   setting up the Performance Data Warehouse Messaging Engine. This
#   parameter is required.

```

```

#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: dbPerfDWMePassword
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
dbPerfDWMeUserId=db_PerfDW_Me_UserId
dbPerfDWMePassword=db_PerfDW_ME_Password

#####
# Parameter: dbCommonUserId
#
# Description:
#   The user id to authenticate with the Common database. For Oracle, the
#   default user name is the first three characters of the Oracle database
#   service name. For example: If the database service name is ORCL,
#   dbCommonUserId is ORCCOMM. Required for all stand-alone IBM Business
#   Process Manager profiles and advanced deployment manager (dmgr.*.adv)
#   profiles, if the -dbType parameter is set to ORACLE or MICROSOFT_SQLSERVER
#   and no bpmdbDesign file was specified.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: dbCommonPassword
#
# Description:
#   The password for the user id of the dbCommonUserId parameter. Required for
#   all stand-alone IBM Business Process Manager profiles and advanced
#   deployment manager (dmgr.*.adv) profiles, if the -dbType parameter is set
#   to ORACLE or MICROSOFT_SQLSERVER and no bpmdbDesign file was specified.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
dbCommonUserId=common_db_userid
dbCommonPassword=common_db_pswd

#####
# Parameter: environmentName
#
# Description:
#   Specifies the name of the environment you are configuring. This parameter
#   has no default value, and it must not be empty.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
environmentName=environment_name

```

```

#####
# Parameter: environmentType
#
# Description:
# Specifies the environment type. The environment type refers to how IBM
# Business Process Manager is used; for example, in a production, stage or
# test environment. Load testing might be done on a test server, while a
# stage environment type might be used as a temporary location to host
# changes before putting those changes into production. You might specify
# Stage as the Environment type if the server you are configuring will be
# accessed and used to review content and new functionality. Valid values
# are as follows:
# Test
# Use Test if the server you are configuring is to be used as a testing
# environment.
# Stage
# Use Stage if the server is to serve as a staging platform to be used as a
# preproduction server.
# Production
# Use Production if the server is to serve in a production capacity.
# The default value is Test.
#
# Valid Values:
# Test
# Production
# Stage
# Default Values:
# Test
#####
environmentType=Test

#####
# Parameter: isDeveloperServer
#
# Description:
# Specifies whether the server is intended for development purposes only.
# This parameter is useful when creating profiles to test applications on a
# non-production server prior to deploying the applications on their
# production application servers. If -isDeveloperServer is set when
# creating an IBM Business Process Manager profile, then a preconfigured VMM
# file repository is installed. This file repository contains a sample
# organization that can be used to test Business Process Choreographer
# people resolution, ready for you to use as is.
#
# Valid Values:
# false
# true
# Default Values:
# false
#####
isDeveloperServer=false

#####
# Parameter: samplesPassword
#
# Description:
# Creates a password to be used for samples. The password is used to
# restrict access to Web application samples installed during the
# installation of the application server.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# None
#####
samplesPassword=samplesPassword

```

SQL 用の Standard Process Server スタンドアロン・プロファイル作成の応答ファイル:

ここに用意されている応答ファイルを変更し、**manageprofiles** コマンド行ユーティリティーと一緒に使用して、SQL データベース用のスタンドアロン・プロファイルを作成します。

注: ご使用のオペレーティング・システムに合わせて、必要に応じて応答ファイルの情報をコメント化またはアンコメントしてください。詳細については、応答ファイルのコメントを参照してください。

```
# BEGIN COPYRIGHT
# *****
#
# Licensed Materials - Property of IBM
# 5725-C94
# (C) Copyright IBM Corporation 2011, 2012. All Rights Reserved.
# This sample program is provided AS IS and may be used, executed, copied
# and modified without royalty payment by customer (a) for its own
# instruction and study, (b) in order to develop applications designed to
# run with an IBM WebSphere product, either for customer's own internal
# use or for redistribution by customer, as part of such an application,
# in customer's own products.
#
# *****
# END COPYRIGHT

#####
# These response file has the applicable parameters for creating a
# Standalone PS Std profile that uses SQLServer.
#
# Depending on your environment, you may need to change the default values.
#
# To create a profile with this response file specify:
#
# was.install.root/bin/manageprofiles -response PS_Std_Standalone_SQLServer.response
#
# If you use the -response parameter, it must be the only parameter on
# the command-line. If you include any manageprofile parameters
# (in addition to -response) on the command-line, the response file
# is ignored. And default WebSphere Application server profile will be created .
#####

#####
# Parameter: create
#
# Description:
#   Creates the profile.
#   If you are creating a profile, this parameter is required.
#####
create

#####
# Parameter: templatePath
#
# Description:
#   Specifies the directory path to the template files in the installation
#   root directory. Within the profileTemplates directory are various
#   directories that correspond to different profile types and that vary with
#   the type of product installed. The profile directories are the paths that
#   you indicate while using the -templatePath option.
#   Use absolute paths. This parameter must exist as a directory and point to
#   a valid template directory.
#
#   When using the -templatePath parameter, specify the fully qualified file
#   path for the parameter.
#
# Valid Values:
#   Varies
```

```

# Default Values:
#   None
#####
templatePath=BPM/default.procsvr

#####
# Parameter:  profileName
#
# Description:
#   Specifies the name of the profile. Use a unique value when creating a
#   profile.
#   Each profile that shares the same set of product binaries must have a
#   unique name. The default profile name is based on the profile type and a
#   trailing number, for example:
#   profileType ProfileNumberwhere profileType is a value such as ProcSrv,
#   Dmgr, or Custom and ProfileNumber is a sequential number that creates a
#   unique profile name. The value for this parameter must not contain spaces
#   or characters that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,,
#   /, \, and |. The profile name that you choose must not be in use. On
#   Windows platforms: If the fully qualified path contains spaces, enclose
#   the value in quotation marks. The default value is based on the
#   install_root directory, the profiles subdirectory, and the name of the
#   file. For example, the default for profile creation is:
#   WS_WSPROFILE_DEFAULT_PROFILE_HOME/profileNamewhere
#   WS_WSPROFILE_DEFAULT_PROFILE_HOME is defined in the wasprofile.properties
#   file in the install_root/properties directory. The value for this
#   parameter must be a valid path for the target system and must not be
#   currently in use. You must have permissions to write to the directory.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
profileName=ProcSrv01

#####
# Parameter:  applyPerfTuningSetting
#
# Description:
#   Set a performance tuning level appropriate for the profile you are
#   creating.
#   This parameter is a WebSphere Application Server parameter.
#
# Valid Values:
#   development
#   standard
#   production
# Default Values:
#   None
#####
#applyPerfTuningSetting=standard

#####
# Parameter:  cellName
#
# Description:
#   Specifies the cell name of the profile. Use a unique cell name for each
#   profile.
#   The default value for this parameter is based on a combination of the
#   short host name, the constant Cell, and a trailing number, for example:
#   if (DMgr)
#     shortHostNameCellCellNumber
#   else
#     shortHostNameNodeNodeNumberCell
#   where CellNumber is a sequential number starting at 01 and NodeNumber is
#   the node number that you used to define the node name.

```



```

# The value for this parameter must not contain spaces or any characters
# that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   Varies
#
# Parameter: nodeName
#
# Description:
#   Specifies the node name for the node that is created with the new profile.
#   Use a unique value within the cell or on the workstation. Each profile
#   that shares the same set of product binaries must have a unique node name.
#   This parameter is required for profile creation only with the
#   dmgr.esbserverdefault.procsvrdefault.procctrdefault.procsvr.advdefault.
#   procctr.advdmgr.procctrmanaged.procctrmanaged.procsvr templates.
#   The default value for this parameter is based on the short host name,
#   profile type, and a trailing number, for example:
#   if (DMgr)
#       shortHostNameCellManagerNodeNumber
#   else
#       shortHostNameNodeNodeNumber
#   where NodeNumber is a sequential number starting at 01.
#   The value for this parameter must not contain spaces or any characters
#   that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   Varies
#
# Parameter: serverName
#
# Description:
#   Specifies the name of the server.
#####
cellName=cell_name
nodeName=node_name
serverName=server1
#####
# Parameter: processCenterURL
#
# Description:
#   Specifies the URL of the Process Center that the Process Server connects
#   to. If this parameter is set, the protocol must be either http or https.
#   Note: No corresponding useServerOffline parameter exists to use the server
#   offline. To use the server offline, omit the processCenterURL parameter.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: processCenterUserId
#
# Description:
#   Specifies the user ID to be used to connect to the Process Center. This
#   parameter is valid for stand-alone Process Server profiles. This parameter
#   is required if the Process Server is online (connected to a Process
#   Center). It is required for a stand-alone process server (standard or
#   advanced) profile if the processCenterURL parameter is specified.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:

```

```

# None
#
# Parameter: processCenterPassword
#
# Description:
# Specifies the user password to be used to connect to the Process Center.
# This parameter is valid for stand-alone Process Server profiles. This
# parameter is required if the Process Server is online (connected to a
# Process Center). It is required for a stand-alone process server (standard
# or advanced) profile if the processCenterURL parameter is specified.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# None
#####
processCenterURL=process_Center_URL
processCenterUserId=process_Center_UserId
processCenterPassword=process_Center_Password
#####
# Parameter: enableAdminSecurity
#
# Description:
# For IBM Business Process Manager omit this parameter. Administrative
# security is always enabled for IBM Business Process Manager profiles.
# You must also specify the parameters -adminUserName and -adminPassword
# along with the values for these parameters.
#
# Valid Values:
# true
# Default Values:
# true
#####
enableAdminSecurity=true
adminUserName=adminUser_ID
adminPassword=adminPassword
#####
# Parameter: signingCertDN
#
# Description:
# Specifies the distinguished name of the root signing certificate that you
# create when you create the profile. Specify the distinguished name in
# quotation marks. This default personal certificate is located in the
# server keystore file. If you do not specifically create or import a root
# signing certificate, one is created by default. See the
# -signingCertValidityPeriod parameter and the -keyStorePassword.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# None
#
# Parameter: signingCertValidityPeriod
#
# Description:
# An optional parameter that specifies the amount of time in years that the
# root signing certificate is valid. If you do not specify this parameter
# with the -signingCertDN parameter, the root signing certificate is valid
# for 20 years.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# None
#

```

```

# Parameter: keyStorePassword
#
# Description:
#   Specifies the password to use on all keystore files created during profile
#   creation. Keystore files are created for the default personal certificate
#   and the root signing certificate.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
#signingCertDN =distinguished_name
#signingCertValidityPeriod =validity_period
#keyStorePassword =keyStore_password

#####
# Parameter: defaultPorts
#
# Description:
#   Assigns the default or base port values to the profile. Do not use this
#   parameter when using the -startingPort or -portsFile parameter.
#   During profile creation, the manageprofiles command-line utility uses an
#   automatically generated set of recommended ports if you do not specify the
#   -startingPort parameter, the -defaultPorts parameter or the -portsFile
#   parameter. The recommended port values can be different than the default
#   port values based on the availability of the default ports.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: startingPort
#
# Description:
#   Specifies the starting port number for generating and assigning all ports
#   for the profile.
#   Port values are assigned sequentially from the -startingPort value,
#   omitting those ports that are already in use. The system recognizes and
#   resolves ports that are currently in use and determines the port
#   assignments to avoid port conflicts.
#   Do not use this parameter with the -defaultPorts or -portsFile parameters.
#   During profile creation, the manageprofiles command-line utility uses an
#   automatically generated set of recommended ports if you do not specify the
#   -startingPort parameter, the -defaultPorts parameter or the -portsFile
#   parameter. The recommended port values can be different than the default
#   port values based on the availability of the default ports.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: portsFile
#
# Description:
#   An optional parameter that specifies the path to a file that defines port
#   settings for the new profile.
#   Do not use this parameter when using the -startingPort or -defaultPorts
#   parameter.
#   During profile creation, the manageprofiles command-line utility uses an
#   automatically generated set of recommended ports if you do not specify the
#   -startingPort parameter, the -defaultPorts parameter or the -portsFile
#   parameter. The recommended port values can be different than the default
#   port values based on the availability of the default ports.
#

```

```

# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
#defaultPorts=default_ports
#startingPort=startingPort
#portsFile=file_path

#####
# Parameter: enableService
#
# Description:
#   Enables the creation of a Linux service. Valid values include true or
#   false. The default value for this parameter is false. When the
#   manageprofiles command-line utility is run with the -enableService option
#   set to true , the Linux service is created with the profile when the
#   command is run by the root user. When a nonroot user runs the
#   manageprofiles command-line utility, the profile is created, but the Linux
#   service is not. The Linux service is not created because the nonroot user
#   does not have sufficient permission to set up the service. An
#   INSTCONPARTIALSUCCESS result is displayed at the end of the profile
#   creation and the profile creation log
#   install_root/logs/manageprofiles/profile_name_create.log contains a
#   message indicating the current user does not have sufficient permission to
#   set up the Linux service. Use this parameter when creating profiles only.
#
# Valid Values:
#   false
#   true
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: serviceUserName
#
# Description:
#   Specifies the user ID that is used during the creation of the Linux
#   service so that the Linux service will run under this user ID. The Linux
#   service runs whenever the user ID is logged on. Not required.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: winserviceAccountType
#
# Description:
#   The type of the owner account of the Windows service created for the
#   profile. Valid values include specifieduser or localsystem. The
#   localsystem value runs the Windows service under the local account of the
#   user who creates the profile. The default value for this parameter is
#   localsystem. Use this parameter when creating profiles only.
#
# Valid Values:
#   localsystem
#   specifieduser
# Default Values:
#   localsystem
#
# Parameter: winserviceUserName
#
# Description:
#   Specify your user ID so that the Windows operating system can verify you
#   as an ID that is capable of creating a Windows service. Your user ID must
#   belong to the Administrator group and have the following advanced user
#   rights:

```

```

# Act as part of the operating system
# Log on as a service
# The default value for this parameter is the current user name. The value
# for this parameter must not contain spaces or characters that are not
# valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |. The user that
# you specify must have the proper permissions to create a Windows service.
# You must specify the correct password for the user name that you choose.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: winservicePassword
#
# Description:
#   Specify the password for the specified user or the local account that is
#   to own the Windows service.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: winserviceCheck
#
# Description:
#   The value can be either true or false. Specify true to create a Windows
#   service for the server process that is created within the profile. Specify
#   false to not create the Windows service. The default value for this
#   parameter is false.
#
# Valid Values:
#   false
#   true
# Default Values:
#   false
#
# Parameter: winserviceStartupType
#
# Description:
#   The following values for Windows service startup can be used:
#   manual
#   automatic
#   disabled
#   The default value for this parameter is manual.
#
# Valid Values:
#   manual
#   automatic
#   disabled
# Default Values:
#   manual
#####
#enableService=true
#serviceName=service_user_ID
#winserviceAccountType=localsystem
#winserviceUserName=winservice_user_ID
#winservicePassword=winservice_password
#winserviceCheck=false
#winserviceStartupType>manual

#####
# Parameter: bpmdbDesign
#
# Description:
#   Specifies the file that holds the database configuration design for all of

```

```

# the IBM Business Process Manager components .
# This parameter replaces the -wbldbDesign that was used in previous
# versions of WebSphere Process Server.
#
# Note: If a bpmdbDesign file parameter is specified, none of the database
# related properties should be specified.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# None
#####
#bpmdbDesign=design_file

#####
# Parameter: dbCreateNew
#
# Description:
# Indicates a new database is created or if an existing database is to be
# reused. Valid values are true or false. This value cannot be true for an
# Oracle, SQL Server or a DB2 z/OS database. This value can only be true for
# a DB2 database.
#
# Valid Values:
# false
# Default Values:
# false
#####
dbCreateNew=false

#####
# Parameter: dbType
#
# Description:
# The database type. Set one of the following values for the type of
# database product you are using with IBM Business Process Manager.
#
# Required only for one of the following:
# A stand-alone profile when -bpmdbDesign was not specified.
# An advanced dmgr or managed profiles when -bpmdbDesign was not specified.
#
# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
# MSSQLSERVER_MICROSOFT
# Default Values:
# MSSQLSERVER_MICROSOFT
#
# Parameter: dbJDBCClasspath
#
# Description:
# The directory path location of JDBC driver files.
#
# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# None
#####
dbType=MSSQLSERVER_MICROSOFT
dbJDBCClasspath=${WAS_INSTALL_ROOT}/jdbcdrivers/SQLServer

#####
# Parameter: dbDelayConfig
#
# Description:

```



```

# Indicates whether to postpone table creation until after the profile is
# created. Valid values are true or false. The parameter is set to false by
# default. Setting this parameter to true delays the execution of the
# scripts that create the database tables. No. Specify false if you want the
# database to be set up during profile creation.
#
# Valid Values:
# false
# true
# Default Values:
# false
#####
dbDelayConfig=false

#####
# Parameter: dbName
#
# Description:
# The name of the database. By default, the value is set to orcl for Oracle
# databases and to CMNDB for all other supported databases.
#
# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# CMNDB
#
# Parameter: dbUserId
#
# Description:
# The user ID for all database types. Specifies the user ID that has
# privileges to create and drop the databases. The WebSphere data source
# uses this ID to authenticate the database connection.
# Important: The -dbUserId parameter value must be a valid database
# authorization ID. Required if the -bpmdbDesign file is not set.
#
# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# None
#
# Parameter: dbPassword
#
# Description:
# The password required for database authentication. Required when the
# -bpmdbDesign file is not set.
#
# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# None
#####
dbName=CMNDB
dbUserId=db_userid
dbPassword=db_pswd

#####
# Parameter: procSvrDbName
#
# Description:
# Database name for Process Server database. The value specified for
# -procSvrDbName and -perfDWDbName must be different.

```

```

#
# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: dbProcSvrUserId
#
# Description:
#   The Process Server user name. Required for setting up the Process Server.
#
# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: dbProcSvrPassword
#
# Description:
#   The Process Server password. Required for setting up the Process Server.
#
# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
procSvrDbName=procSvr_Db_Name
dbProcSvrUserId=db_ProcSvr_UserId_name
dbProcSvrPassword=db_ProcSvr_Password
#####
# Parameter: perfDWDbName
#
# Description:
#   Database name for Performance Data Warehouse. The value specified for
#   -perfDWDbName and -procSvrDbName must be different.
#
# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Parameter: dbPerfDWUserId
#
# Description:
#   Performance Data Warehouse user name. Required for setting up the
#   Performance Data Warehouse.
#
# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Parameter: dbPerfDWPassword
#
# Description:
#   Performance Data Warehouse password. Required for setting up the
#   Performance Data Warehouse.
#
# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#####
perfDWDbName=perfDW_Db_Name
dbPerfDWUserId=db_PerfDW_UserId
dbPerfDWPassword=db_PerfDW_Password
#####
# Parameter: dbProcSvrMeUserId

```

```

#
# Description:
#   Process Server Messaging Engine user name. Required for setting up the
#   Process Server Messaging Engine. If you enter a user-specified a user name
#   and password during profile creation and if you specified ORACLE for
#   dbType, this parameter is required.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter:  dbProcSvrMePassword
#
# Description:
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
dbProcSvrMeUserId=db_ProcSvr_ME_UserID
dbProcSvrMePassword=db_ProcSvr_Me_Password

#####
# Parameter:  dbPerfDWMeUserId
#
# Description:
#   Performance Data Warehouse Messaging Engine user name. Required for
#   setting up the Performance Data Warehouse Messaging Engine.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter:  dbPerfDWMePassword
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
dbPerfDWMeUserId=db_PerfDW_Me_UserId
dbPerfDWMePassword=db_PerfDW_ME_Password

#####
# Parameter:  dbCommonUserId
#
# Description:
#   The user id to authenticate with the Common database. For Oracle, the
#   default user name is the first three characters of the Oracle database
#   service name. For example: If the database service name is ORCL,
#   dbCommonUserId is ORCCOMM. Required for all stand-alone IBM Business
#   Process Manager profiles and advanced deployment manager (dmgr.*.adv)
#   profiles, if the -dbType parameter is set to ORACLE or MICROSOFT_SQLSERVER
#   and no bpmdbDesign file was specified.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None

```

```

#
# Parameter: dbCommonPassword
#
# Description:
#   The password for the user id of the dbCommonUserId parameter. Required for
#   all stand-alone IBM Business Process Manager profiles and advanced
#   deployment manager (dmgr.*.adv) profiles, if the -dbType parameter is set
#   to ORACLE or MICROSOFT_SQLSERVER and no bpmdbDesign file was specified.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
dbCommonUserId=common_db_userid
dbCommonPassword=common_db_pswd
#####
# Parameter: dbWinAuth
#
# Description:
#   An optional parameter that is valid in all default profile templates.
#   Specify true to indicate that you are running SQL Server using integrated
#   windows authentication.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   false
#   true
# Default Values:
#   None
#####
#dbWinAuth=true
#####
# Parameter: environmentName
#
# Description:
#   Specifies the name of the environment you are configuring. This parameter
#   has no default value, and it must not be empty.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
environmentName=environment_name
#####
# Parameter: environmentType
#
# Description:
#   Specifies the environment type. The environment type refers to how IBM
#   Business Process Manager is used; for example, in a production, stage or
#   test environment. Load testing might be done on a test server, while a
#   stage environment type might be used as a temporary location to host
#   changes before putting those changes into production. You might specify
#   Stage as the Environment type if the server you are configuring will be
#   accessed and used to review content and new functionality. Valid values
#   are as follows:
#   Test
#   Use Test if the server you are configuring is to be used as a testing
#   environment.
#   Stage

```

```

# Use Stage if the server is to serve as a staging platform to be used as a
# preproduction server.
# Production
# Use Production if the server is to serve in a production capacity.
# The default value is Test.
#
# Valid Values:
# Test
# Production
# Stage
# Default Values:
# Test
#####
environmentType=Test

#####
# Parameter: isDeveloperServer
#
# Description:
# Specifies whether the server is intended for development purposes only.
# This parameter is useful when creating profiles to test applications on a
# non-production server prior to deploying the applications on their
# production application servers. If -isDeveloperServer is set when
# creating an IBM Business Process Manager profile, then a preconfigured VMM
# file repository is installed. This file repository contains a sample
# organization that can be used to test Business Process Choreographer
# people resolution, ready for you to use as is.
#
# Valid Values:
# false
# true
# Default Values:
# false
#####
#isDeveloperServer=false

#####
# Parameter: samplesPassword
#
# Description:
# Creates a password to be used for samples. The password is used to
# restrict access to Web application samples installed during the
# installation of the application server.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# None
#####
samplesPassword=samplesPassword

```

Advanced Process Server 用の応答ファイル:

manageprofiles コマンド行ユーティリティーと応答ファイルを使用して、スタンドアロン・プロファイルを作成します。

DB2 用の Advanced Process Server スタンドアロン・プロファイル作成の応答ファイル:

ここに用意されている応答ファイルを変更し、**manageprofiles** コマンド行ユーティリティーと一緒に使用して、DB2 データベース用のスタンドアロン・プロファイルを作成します。

注: ご使用のオペレーティング・システムに合わせて、必要に応じて応答ファイルの情報をコメント化またはアンコメントしてください。詳細については、応答ファイルのコメントを参照してください。

```

# BEGIN COPYRIGHT
# *****
#
# Licensed Materials - Property of IBM
# 5725-C94
# (C) Copyright IBM Corporation 2011, 2012. All Rights Reserved.
# This sample program is provided AS IS and may be used, executed, copied
# and modified without royalty payment by customer (a) for its own
# instruction and study, (b) in order to develop applications designed to
# run with an IBM WebSphere product, either for customer's own internal
# use or for redistribution by customer, as part of such an application,
# in customer's own products.
#
# *****
# END COPYRIGHT

#####
# This response file has the applicable parameters for creating a
# Standalone PS Adv profile that uses DB2.
#
# Depending on your environment, you may need to change the default values.
#
# To create a profile with this response file specify:
#
# was.install.root/bin/manageprofiles -response PS_Adv_Standalone_DB2.response
#
# If you use the -response parameter, it must be the only parameter on
# the command-line. If you include any manageprofile parameters
# (in addition to -response) on the command-line, the response file
# is ignored. And default WebSphere Application server profile will be created .
#####

#####
# Parameter: create
#
# Description:
#   Creates the profile.
#   If you are creating a profile, this parameter is required.
#####
create

#####
# Parameter: templatePath
#
# Description:
#   Specifies the directory path to the template files in the installation
#   root directory. Within the profileTemplates directory are various
#   directories that correspond to different profile types and that vary with
#   the type of product installed. The profile directories are the paths that
#   you indicate while using the -templatePath option.
#   Use absolute paths. This parameter must exist as a directory and point to
#   a valid template directory.
#
#   When using the -templatePath parameter, specify the fully qualified file
#   path for the parameter.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
templatePath=BPM/default.procsvr.adv

#####
# Parameter: profileName
#
# Description:

```



```

# Specifies the name of the profile. Use a unique value when creating a
# profile.
# Each profile that shares the same set of product binaries must have a
# unique name. The default profile name is based on the profile type and a
# trailing number, for example:
# profileType ProfileNumber where profileType is a value such as ProcSrv,
# Dmgr, or Custom and ProfileNumber is a sequential number that creates a
# unique profile name. The value for this parameter must not contain spaces
# or characters that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,,
# /, \, and |. The profile name that you choose must not be in use. On
# Windows platforms: If the fully qualified path contains spaces, enclose
# the value in quotation marks. The default value is based on the
# install_root directory, the profiles subdirectory, and the name of the
# file. For example, the default for profile creation is:
# WS_WSPROFILE_DEFAULT_PROFILE_HOME/profileName where
# WS_WSPROFILE_DEFAULT_PROFILE_HOME is defined in the wasprofile.properties
# file in the install_root/properties directory. The value for this
# parameter must be a valid path for the target system and must not be
# currently in use. You must have permissions to write to the directory.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
profileName=ProcSrv01

#####
# Parameter: applyPerfTuningSetting
#
# Description:
#   Set a performance tuning level appropriate for the profile you are
#   creating.
#   This parameter is a WebSphere Application Server parameter.
#
# Valid Values:
#   development
#   standard
#   production
# Default Values:
#   None
#####
#applyPerfTuningSetting=standard

#####
# Parameter: cellName
#
# Description:
#   Specifies the cell name of the profile. Use a unique cell name for each
#   profile.
#   The default value for this parameter is based on a combination of the
#   short host name, the constant Cell, and a trailing number, for example:
#   if (DMgr)
#     shortHostNameCellCellNumber
#   else
#     shortHostNameNodeNodeNumberCell
#   where CellNumber is a sequential number starting at 01 and NodeNumber is
#   the node number that you used to define the node name.
#   The value for this parameter must not contain spaces or any characters
#   that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   Varies
#
# Parameter: nodeName

```

```

#
# Description:
#   Specifies the node name for the node that is created with the new profile.
#   Use a unique value within the cell or on the workstation. Each profile
#   that shares the same set of product binaries must have a unique node name.
#   This parameter is required for profile creation only with the
#   dmgr.esbserverdefault.procsvrdefault.procctrdefault.procsvr.advdefault.
#   procctr.advdmgr.procctrmanaged.procctrmanaged.procsvr templates.
#   The default value for this parameter is based on the short host name,
#   profile type, and a trailing number, for example:
#   if (DMgr)
#       shortHostNameCellManagerNodeNumber
#   else
#       shortHostNameNodeNodeNumber
#   where NodeNumber is a sequential number starting at 01.
#   The value for this parameter must not contain spaces or any characters
#   that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   Varies
#
# Parameter:  serverName
#
# Description:
#   Specifies the name of the server.
#####
cellName=cell_name
nodeName=node_name
serverName=server1

#####
# Parameter:  processCenterURL
#
# Description:
#   Specifies the URL of the Process Center that the Process Server connects
#   to. If this parameter is set, the protocol must be either http or https.
#   Note: No corresponding useServerOffline parameter exists to use the server
#   offline. To use the server offline, omit the processCenterURL parameter.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter:  processCenterUserId
#
# Description:
#   Specifies the user ID to be used to connect to the Process Center. This
#   parameter is valid for stand-alone Process Server profiles. This parameter
#   is required if the Process Server is online (connected to a Process
#   Center). It is required for a stand-alone process server (standard or
#   advanced) profile if the processCenterURL parameter is specified.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter:  processCenterPassword
#
# Description:
#   Specifies the user password to be used to connect to the Process Center.
#   This parameter is valid for stand-alone Process Server profiles. This
#   parameter is required if the Process Server is online (connected to a
#   Process Center). It is required for a stand-alone process server (standard

```

```

# or advanced) profile if the processCenterURL parameter is specified.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
processCenterURL=process_Center_URL
processCenterUserId=process_Center_UserId
processCenterPassword=process_Center_Password
#####
# Parameter: enableAdminSecurity
#
# Description:
#   For IBM Business Process Manager omit this parameter. Administrative
#   security is always enabled for IBM Business Process Manager profiles.
#   You must also specify the parameters -adminUserName and -adminPassword
#   along with the values for these parameters.
#
# Valid Values:
#   true
# Default Values:
#   true
#####
enableAdminSecurity=true
adminUserName=adminUser_ID
adminPassword=adminPassword
#####
# Parameter: signingCertDN
#
# Description:
#   Specifies the distinguished name of the root signing certificate that you
#   create when you create the profile. Specify the distinguished name in
#   quotation marks. This default personal certificate is located in the
#   server keystore file. If you do not specifically create or import a root
#   signing certificate, one is created by default. See the
#   -signingCertValidityPeriod parameter and the -keyStorePassword.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: signingCertValidityPeriod
#
# Description:
#   An optional parameter that specifies the amount of time in years that the
#   root signing certificate is valid. If you do not specify this parameter
#   with the -signingCertDN parameter, the root signing certificate is valid
#   for 20 years.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: keyStorePassword
#
# Description:
#   Specifies the password to use on all keystore files created during profile
#   creation. Keystore files are created for the default personal certificate
#   and the root signing certificate.
#
# Valid Values:
#   Varies

```

```

# Default Values:
#   None
#####
#signingCertDN =distinguished_name
#signingCertValidityPeriod =validity_period
#keyStorePassword =keyStore_password

#####
# Parameter:  defaultPorts
#
# Description:
#   Assigns the default or base port values to the profile.d o not use this
#   parameter when using the -startingPort or -portsFile parameter.
#   During profile creation, the manageprofiles command-line utility uses an
#   automatically generated set of recommended ports if you do not specify the
#   -startingPort parameter, the -defaultPorts parameter or the -portsFile
#   parameter. The recommended port values can be different than the default
#   port values based on the availability of the default ports.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter:  startingPort
#
# Description:
#   Specifies the starting port number for generating and assigning all ports
#   for the profile.
#   Port values are assigned sequentially from the -startingPort value,
#   omitting those ports that are already in use. The system recognizes and
#   resolves ports that are currently in use and determines the port
#   assignments to avoid port conflicts.
#   Do not use this parameter with the -defaultPorts or -portsFile parameters.
#   During profile creation, the manageprofiles command-line utility uses an
#   automatically generated set of recommended ports if you do not specify the
#   -startingPort parameter, the -defaultPorts parameter or the -portsFile
#   parameter. The recommended port values can be different than the default
#   port values based on the availability of the default ports.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter:  portsFile
#
# Description:
#   An optional parameter that specifies the path to a file that defines port
#   settings for the new profile.
#   Do not use this parameter when using the -startingPort or -defaultPorts
#   parameter.
#   During profile creation, the manageprofiles command-line utility uses an
#   automatically generated set of recommended ports if you do not specify the
#   -startingPort parameter, the -defaultPorts parameter or the -portsFile
#   parameter. The recommended port values can be different than the default
#   port values based on the availability of the default ports.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
#defaultPorts=default_ports
#startingPort=startingPort
#portsFile=file_path

```

```

#####
# Parameter: enableService
#
# Description:
#   Enables the creation of a Linux service. Valid values include true or
#   false. The default value for this parameter is false. When the
#   manageprofiles command-line utility is run with the -enableService option
#   set to true , the Linux service is created with the profile when the
#   command is run by the root user. When a nonroot user runs the
#   manageprofiles command-line utility, the profile is created, but the Linux
#   service is not. The Linux service is not created because the nonroot user
#   does not have sufficient permission to set up the service. An
#   INSTCONPARTIALSUCCESS result is displayed at the end of the profile
#   creation and the profile creation log
#   install_root/logs/manageprofiles/profile_name_create.log contains a
#   message indicating the current user does not have sufficient permission to
#   set up the Linux service. Use this parameter when creating profiles only.
#
# Valid Values:
#   false
#   true
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: serviceUserName
#
# Description:
#   Specifies the user ID that is used during the creation of the Linux
#   service so that the Linux service will run under this user ID. The Linux
#   service runs whenever the user ID is logged on. Not required.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: winserviceAccountType
#
# Description:
#   The type of the owner account of the Windows service created for the
#   profile. Valid values include specifieduser or localsystem. The
#   localsystem value runs the Windows service under the local account of the
#   user who creates the profile. The default value for this parameter is
#   localsystem. Use this parameter when creating profiles only.
#
# Valid Values:
#   localsystem
#   specifieduser
# Default Values:
#   localsystem
#
# Parameter: winserviceUserName
#
# Description:
#   Specify your user ID so that the Windows operating system can verify you
#   as an ID that is capable of creating a Windows service. Your user ID must
#   belong to the Administrator group and have the following advanced user
#   rights:
#   Act as part of the operating system
#   Log on as a service
#   The default value for this parameter is the current user name. The value
#   for this parameter must not contain spaces or characters that are not
#   valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |. The user that
#   you specify must have the proper permissions to create a Windows service.
#   You must specify the correct password for the user name that you choose.
#
# Valid Values:

```

```

#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: winservicePassword
#
# Description:
#   Specify the password for the specified user or the local account that is
#   to own the Windows service.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: winserviceCheck
#
# Description:
#   The value can be either true or false. Specify true to create a Windows
#   service for the server process that is created within the profile. Specify
#   false to not create the Windows service. The default value for this
#   parameter is false.
#
# Valid Values:
#   false
#   true
# Default Values:
#   false
#
# Parameter: winserviceStartupType
#
# Description:
#   The following values for Windows service startup can be used:
#   manual
#   automatic
#   disabled
#   The default value for this parameter is manual.
#
# Valid Values:
#   manual
#   automatic
#   disabled
# Default Values:
#   manual
#####
#enableService=true
#serviceName=service_user_ID
#winserviceAccountType=localsystem
#winserviceUserName=winservice_user_ID
#winservicePassword=winservice_password
#winserviceCheck=false
#winserviceStartupType>manual
#####
# Parameter: bpmdbDesign
#
# Description:
#   Specifies the file that holds the database configuration design for all of
#   the IBM Business Process Manager components .
#   This parameter replaces the -wbldbDesign that was used in previous
#   versions of WebSphere Process Server.
#
#   Note: If a bpmdbDesign file parameter is specified, none of the database
#   related properties should be specified.
#
# Valid Values:
#   Varies

```

```

# Default Values:
#   None
#####
#bpmdbDesign=design_file

#####
# Parameter: dbCreateNew
#
# Description:
#   Indicates a new database is created or if an existing database is to be
#   reused. Valid values are true or false. This value cannot be true for an
#   Oracle, SQL Server or a DB2 z/OS database. This value can only be true for
#   a DB2 database.
#
# Valid Values:
#   false
#   true
# Default Values:
#   None
#####
dbCreateNew=true

#####
# Parameter: dbType
#
# Description:
#   The database type. Set one of the following values for the type of
#   database product you are using with IBM Business Process Manager.
#
#   Required only for one of the following:
#   A stand-alone profile when -bpmdbDesign was not specified.
#   An advanced dmgr or managed profiles when -bpmdbDesign was not specified.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   DB2_DATASERVER
# Default Values:
#   DB2_DATASERVER
#
# Parameter: dbJDBCClasspath
#
# Description:
#   The directory path location of JDBC driver files.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: dbHostName
#
# Description:
#   The database server host name or IP address. The default value is the
#   local host name. Required when the -bpmdbDesign parameter was not
#   specified. (It is not required if the -bpmdbDesign parameter is
#   specified.)
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#

```



```

# Parameter: dbServerPort
#
# Description:
#   The database server port number. Depending on the database you are using,
#   you can specify a different port number instead of the default port
#   number.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
dbType=DB2_DATASERVER
dbJDBCClasspath=${WAS_INSTALL_ROOT}/jdbcdrivers/DB2
dbHostName=db_host_name
dbServerPort=db_port_number
#####
# Parameter: dbDelayConfig
#
# Description:
#   Indicates whether to postpone table creation until after the profile is
#   created. Valid values are true or false. The parameter is set to false by
#   default. Setting this parameter to true delays the execution of the
#   scripts that create the database tables. No. Specify false if you want the
#   database to be set up during profile creation.
#
# Valid Values:
#   false
#   true
# Default Values:
#   false
#####
dbDelayConfig=false
#####
# Parameter: dbName
#
# Description:
#   The name of the database. By default, the value is set to orcl for Oracle
#   databases and to CMNDB for all other supported databases.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   CMNDB
#
# Parameter: dbUserId
#
# Description:
#   The user ID for all database types. Specifies the user ID that has
#   privileges to create and drop the databases. The WebSphere data source
#   uses this ID to authenticate the database connection.
#   Important: The -dbUserId parameter value must be a valid database
#   authorization ID. Required if the -bpmdbDesign file is not set.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#

```

```

# Parameter: dbPassword
#
# Description:
#   The password required for database authentication. Required when the
#   -bpmdbDesign file is not set.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
dbName=CMNDB
dbUserId=db_userid
dbPassword=db_pswd
#####
# Parameter: procSvrDbName
#
# Description:
#   Database name for Process Server database. The value specified for
#   -procSvrDbName and -perfDWDbName must be different.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: dbProcSvrUserId
#
# Description:
#   The Process Server user name. Required for setting up the Process Server.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: dbProcSvrPassword
#
# Description:
#   The Process Server password. Required for setting up the Process Server.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
procSvrDbName=procSvr_Db_Name
dbProcSvrUserId=db_ProcSvr_UserId_name
dbProcSvrPassword=db_ProcSvr_Password
#####
# Parameter: perfDWDbName
#
# Description:
#   Database name for Performance Data Warehouse. The value specified for
#   -perfDWDbName and -procSvrDbName must be different.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.

```

```

#
# Parameter: dbPerfDWUserId
#
# Description:
# Performance Data Warehouse user name. Required for setting up the
# Performance Data Warehouse.
#
# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Parameter: dbPerfDWPASSWORD
#
# Description:
# Performance Data Warehouse password. Required for setting up the
# Performance Data Warehouse.
#
# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#####
perfDWDbName=perfDW_Db_Name
dbPerfDWUserId=db_PerfDW_UserId
dbPerfDWPASSWORD=db_PerfDW_Password

#####
# Parameter: dbProcSvrMeUserId
#
# Description:
# Process Server Messaging Engine user name. Required for setting up the
# Process Server Messaging Engine. If you enter a user-specified a user name
# and password during profile creation and if you specified ORACLE for
# dbType, this parameter is required.
#
# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# None
#
# Parameter: dbProcSvrMePASSWORD
#
# Description:
# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# None
#####
#dbProcSvrMeUserId=db_ProcSvr_ME_UserID
#dbProcSvrMePASSWORD=db_ProcSvr_Me_Password

#####
# Parameter: dbPerfDWMeUserId
#
# Description:
# Performance Data Warehouse Messaging Engine user name. Required for
# setting up the Performance Data Warehouse Messaging Engine.
#
# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# None
#
# Parameter: dbPerfDWMePASSWORD
#
# Description:

```

```

# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
#dbPerfDWMeUserId=db_PerfDW_Me_UserId
#dbPerfDWMePassword=db_PerfDW_ME_Password

#####
# Parameter:  cdbSchemaName
#
# Description:
#   The schema name for the Common database. If no value is specified, the
#   following default database schema names are used:
#   DB2 database
#   The default schema name is the value specified by the dbUserId parameter.
#   The -cdbSchemaName parameter is valid for all database types except for
#   Oracle and Microsoft SQL Server.
#
# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter:  dbCommonUserId
#
# Description:
#   The user id to authenticate with the Common database.
#
# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter:  dbCommonPassword
#
# Description:
#   The password for the user id of the dbCommonUserId parameter.
#
# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
#cdbSchemaName=db_schema_name
#dbCommonUserId=common_db_userid
#dbCommonPassword=common_db_pswd

#####
# Parameter:  dbAppMeUserId
#
# Description:
#   User name for application messaging engine.
#
# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:

```

```

# None
#
# Parameter: dbAppMePassword
#
# Description:
# The password for the user id of the dbAppMeUserId parameter.
#
# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# None
#####
#dbAppMeUserId=app_me_userID
#dbAppMePassword=app_me_pwd

#####
# Parameter: dbCeiMeUserId
#
# Description:
# User name for CEI messaging engine.
#
# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# None
#
# Parameter: dbCeiMePassword
#
# Description:
# The password for the user id of the dbCeiMeUserId parameter. If you enter
# a user-specified a user name and password during profile creation and if
# you specified ORACLE for -dbType, this parameter is required.
#
# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# None
#####
#dbCeiMeUserId=cei_me_userID
#dbCeiMePassword=cei_me_pwd

#####
# Parameter: dbSysMeUserId
#
# Description:
# The default user name for the SCA system bus messaging engine is the first
# three characters of the Oracle database service name. For example: If the
# database service name is ORCL, dbSysMeUserId is ORCSS00.
#
# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# None
#
# Parameter: dbSysMePassword
#
# Description:
# The default password for the SCA system bus messaging engine is
# dbPassword.

```

```

#
# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
#dbSysMeUserId=sys_me_userID
#dbSysMePassword=sys_me_pwd
#####
# Parameter: environmentName
#
# Description:
#   Specifies the name of the environment you are configuring. This parameter
#   has no default value, and it must not be empty.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
environmentName=environment_name
#####
# Parameter: environmentType
#
# Description:
#   Specifies the environment type. The environment type refers to how IBM
#   Business Process Manager is used; for example, in a production, stage or
#   test environment. Load testing might be done on a test server, while a
#   stage environment type might be used as a temporary location to host
#   changes before putting those changes into production. You might specify
#   Stage as the Environment type if the server you are configuring will be
#   accessed and used to review content and new functionality. Valid values
#   are as follows:
#   Test
#   Use Test if the server you are configuring is to be used as a testing
#   environment.
#   Stage
#   Use Stage if the server is to serve as a staging platform to be used as a
#   preproduction server.
#   Production
#   Use Production if the server is to serve in a production capacity.
#   The default value is Test.
#
# Valid Values:
#   Test
#   Production
#   Stage
# Default Values:
#   Test
#####
environmentType=Test
#####
# Parameter: isDeveloperServer
#
# Description:
#   Specifies whether the server is intended for development purposes only.
#   This parameter is useful when creating profiles to test applications on a
#   non-production server prior to deploying the applications on their
#   production application servers. If -isDeveloperServer is set when
#   creating an IBM Business Process Manager profile, then a preconfigured VMM
#   file repository is installed. This file repository contains a sample
#   organization that can be used to test Business Process Choreographer

```

```

#     people resolution, ready for you to use as is.
#
# Valid Values:
#     false
#     true
# Default Values:
#     false
#####
#isDeveloperServer=false

#####
# Parameter:  samplesPassword
#
# Description:
#     Creates a password to be used for samples. The password is used to
#     restrict access to Web application samples installed during the
#     installation of the application server.
#
# Valid Values:
#     Varies
# Default Values:
#     None
#####
samplesPassword=samplesPassword

#####
# Parameter:  webFormConfig
#
# Description:
#     Indicates if Business Space is configured to use IBM Forms Server to work
#     with Human Task Management widgets. The default value for this parameter
#     is false. Indicate true to configure Business Space to use IBM Forms
#     Server. Both the webFormConfig and webFormInstallRoot parameters are
#     required to configure IBM Forms Server. This parameter is valid for
#     stand-alone server profiles only.
#     Note: IBM Forms Server configuration using these parameters is only valid
#     for local IBM Forms Server installations.
#
# Valid Values:
#     false
#     true
# Default Values:
#     false
#
# Parameter:  webFormHTTP
#
# Description:
#     Specifies the location of the IBM Forms Server Translator. The default URL
#     for the location is http://localhost:8085/translator. No. This parameter
#     is valid only if the -webFormConfig parameter is set to true. It is valid
#     for stand-alone server profiles only.
#
# Valid Values:
#     Varies
# Default Values:
#     None
#
# Parameter:  webFormInstallRoot
#
# Description:
#     Specifies the full path where IBM Forms Server is installed. For example,
#     the IBM Forms Server install root might be
#     C:/IBM/IBMFormsServer/4.0/WebFormServer. No. This parameter is valid only
#     if the -webFormConfig parameter is set to true. It is valid for
#     stand-alone server profiles only.
#
# Valid Values:

```



```

#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
#webFormConfig=false
#webFormHTTP=URL
#webFormInstallRoot=Webform_Server_install_root

#####
# Parameter:  configureBRM
#
# Description:
#   Configures the business process rules manager. The default value is false.
#
# Valid Values:
#   false
#   true
# Default Values:
#   false
#####
configureBRM=false

#####
# Parameter:  configureBPC
#
# Description:
#   Determines whether the Business Process Choreographer sample configuration
#   is created.
#   The following conditions apply:
#   Only DB2 databases are supported.
#   The default is set to true for DB2.
#   It uses its own schema within the common database (CMNDB) and the schema
#   name is always BPEDB.
#   Business Process Choreographer database parameters set in the Database
#   Design Tool and generated to the database design file are ignored by
#   Business Process Choreographer at profile creation time.
#   See -bpmdbDesign for information about the database design file.
#   Note: If these conditions are too restrictive, consider setting
#   -configureBPC to false and using other documented methods to configure
#   Business Process Choreographer.
#
# Valid Values:
#   false
#   true
# Default Values:
#   true
#####
configureBPC=true

```

DB2 for z/OS 用の Advanced Process Server スタンドアロン・プロファイル作成の応答ファイル:

ここに用意されている応答ファイルを変更し、**manageprofiles** コマンド行ユーティリティと一緒に使用して、DB2 for z/OS データベース用のスタンドアロン・プロファイルを作成します。

注: ご使用のオペレーティング・システムに合わせて、必要に応じて応答ファイルの情報をコメント化またはアンコメントしてください。詳細については、応答ファイルのコメントを参照してください。

```

# BEGIN COPYRIGHT
# *****
#
# Licensed Materials - Property of IBM
# 5725-C94
# (C) Copyright IBM Corporation 2011, 2012. All Rights Reserved.
# This sample program is provided AS IS and may be used, executed, copied
# and modified without royalty payment by customer (a) for its own
# instruction and study, (b) in order to develop applications designed to

```

```

# run with an IBM WebSphere product, either for customer's own internal
# use or for redistribution by customer, as part of such an application,
# in customer's own products.
#
# *****
# END COPYRIGHT

#####
# These response file has the applicable parameters for creating a
# Standalone PS Adv profile that uses DB2zOS.
#
# Depending on your environment, you may need to change the default values.
#
# To create a profile with this response file specify:
#
# was.install.root/bin/manageprofiles -response PS_Adv_Standalone_DB2zOS.response
#
# If you use the -response parameter, it must be the only parameter on
# the command-line. If you include any manageprofile parameters
# (in addition to -response) on the command-line, the response file
# is ignored. And default WebSphere Application server profile will be created .
#####

#####
# Parameter: create
#
# Description:
#   Creates the profile.
#   If you are creating a profile, this parameter is required.
#####
create

#####
# Parameter: templatePath
#
# Description:
#   Specifies the directory path to the template files in the installation
#   root directory. Within the profileTemplates directory are various
#   directories that correspond to different profile types and that vary with
#   the type of product installed. The profile directories are the paths that
#   you indicate while using the -templatePath option.
#   Use absolute paths. This parameter must exist as a directory and point to
#   a valid template directory.
#
#   When using the -templatePath parameter, specify the fully qualified file
#   path for the parameter.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
templatePath=BPM/default.procsvr.adv

#####
# Parameter: profileName
#
# Description:
#   Specifies the name of the profile. Use a unique value when creating a
#   profile.
#   Each profile that shares the same set of product binaries must have a
#   unique name. The default profile name is based on the profile type and a
#   trailing number, for example:
#   profileType ProfileNumberwhere profileType is a value such as ProcSrv,
#   Dmgr, or Custom and ProfileNumber is a sequential number that creates a
#   unique profile name. The value for this parameter must not contain spaces
#   or characters that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,,

```

```

# /, \, and |. The profile name that you choose must not be in use. On
# Windows platforms: If the fully qualified path contains spaces, enclose
# the value in quotation marks. The default value is based on the
# install_root directory, the profiles subdirectory, and the name of the
# file. For example, the default for profile creation is:
# WS_WSPROFILE_DEFAULT_PROFILE_HOME/profileNamewhere
# WS_WSPROFILE_DEFAULT_PROFILE_HOME is defined in the wasprofile.properties
# file in the install_root/properties directory. The value for this
# parameter must be a valid path for the target system and must not be
# currently in use. You must have permissions to write to the directory.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
profileName=ProcSrv01

#####
# Parameter: applyPerfTuningSetting
#
# Description:
#   Set a performance tuning level appropriate for the profile you are
#   creating.
#   This parameter is a WebSphere Application Server parameter.
#
# Valid Values:
#   development
#   standard
#   production
# Default Values:
#   None
#####
#applyPerfTuningSetting=standard

#####
# Parameter: cellName
#
# Description:
#   Specifies the cell name of the profile. Use a unique cell name for each
#   profile.
#   The default value for this parameter is based on a combination of the
#   short host name, the constant Cell, and a trailing number, for example:
#   if (DMgr)
#       shortHostNameCellCellNumber
#   else
#       shortHostNameNodeNodeNumberCell
#   where CellNumber is a sequential number starting at 01 and NodeNumber is
#   the node number that you used to define the node name.
#   The value for this parameter must not contain spaces or any characters
#   that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   Varies
#
# Parameter: nodeName
#
# Description:
#   Specifies the node name for the node that is created with the new profile.
#   Use a unique value within the cell or on the workstation. Each profile
#   that shares the same set of product binaries must have a unique node name.
#   This parameter is required for profile creation only with the
#   dmgr.esbserverdefault.procsvrdefault.procctrdefault.procsvr.advdefault.
#   procctr.advdmgr.procctrmanaged.procctrmanaged.procsvr templates.
#   The default value for this parameter is based on the short host name,

```

```

# profile type, and a trailing number, for example:
# if (DMgr)
#     shortHostNameCellManagerNodeNumber
# else
#     shortHostNameNodeNodeNumber
# where NodeNumber is a sequential number starting at 01.
# The value for this parameter must not contain spaces or any characters
# that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |.
#
# Valid Values:
#     Varies
# Default Values:
#     Varies
#
# Parameter:  serverName
#
# Description:
#     Specifies the name of the server.
#####
cellName=cell_name
nodeName=node_name
serverName=server1
#####
# Parameter:  processCenterURL
#
# Description:
#     Specifies the URL of the Process Center that the Process Server connects
#     to. If this parameter is set, the protocol must be either http or https.
#     Note: No corresponding useServerOffline parameter exists to use the server
#     offline. To use the server offline, omit the processCenterURL parameter.
#
# Valid Values:
#     Varies
# Default Values:
#     None
#
# Parameter:  processCenterUserId
#
# Description:
#     Specifies the user ID to be used to connect to the Process Center. This
#     parameter is valid for stand-alone Process Server profiles. This parameter
#     is required if the Process Server is online (connected to a Process
#     Center). It is required for a stand-alone process server (standard or
#     advanced) profile if the processCenterURL parameter is specified.
#
# Valid Values:
#     Varies
# Default Values:
#     None
#
# Parameter:  processCenterPassword
#
# Description:
#     Specifies the user password to be used to connect to the Process Center.
#     This parameter is valid for stand-alone Process Server profiles. This
#     parameter is required if the Process Server is online (connected to a
#     Process Center). It is required for a stand-alone process server (standard
#     or advanced) profile if the processCenterURL parameter is specified.
#
# Valid Values:
#     Varies
# Default Values:
#     None
#####
processCenterURL=process_Center_URL
processCenterUserId=process_Center_UserId

```

processCenterPassword=process_Center_Password

#####

Parameter: enableAdminSecurity

#

Description:

For IBM Business Process Manager omit this parameter. Administrative security is always enabled for IBM Business Process Manager profiles. You must also specify the parameters -adminUserName and -adminPassword along with the values for these parameters.

#

Valid Values:

true

Default Values:

true

#####

enableAdminSecurity=true

adminUserName=adminUser_ID

adminPassword=adminPassword

#####

Parameter: signingCertDN

#

Description:

Specifies the distinguished name of the root signing certificate that you create when you create the profile. Specify the distinguished name in quotation marks. This default personal certificate is located in the server keystore file. If you do not specifically create or import a root signing certificate, one is created by default. See the -signingCertValidityPeriod parameter and the -keyStorePassword.

#

Valid Values:

Varies

Default Values:

None

#

Parameter: signingCertValidityPeriod

#

Description:

An optional parameter that specifies the amount of time in years that the root signing certificate is valid. If you do not specify this parameter with the -signingCertDN parameter, the root signing certificate is valid for 20 years.

#

Valid Values:

Varies

Default Values:

None

#

Parameter: keyStorePassword

#

Description:

Specifies the password to use on all keystore files created during profile creation. Keystore files are created for the default personal certificate and the root signing certificate.

#

Valid Values:

Varies

Default Values:

None

#####

#signingCertDN =distinguished_name

#signingCertValidityPeriod =validity_period

#keyStorePassword =keyStore_password

#####

Parameter: defaultPorts

```

#
# Description:
#   Assigns the default or base port values to the profile.d o not use this
#   parameter when using the -startingPort or -portsFile parameter.
#   During profile creation, the manageprofiles command-line utility uses an
#   automatically generated set of recommended ports if you do not specify the
#   -startingPort parameter, the -defaultPorts parameter or the -portsFile
#   parameter. The recommended port values can be different than the default
#   port values based on the availability of the default ports.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter:  startingPort
#
# Description:
#   Specifies the starting port number for generating and assigning all ports
#   for the profile.
#   Port values are assigned sequentially from the -startingPort value,
#   omitting those ports that are already in use. The system recognizes and
#   resolves ports that are currently in use and determines the port
#   assignments to avoid port conflicts.
#   Do not use this parameter with the -defaultPorts or -portsFile parameters.
#   During profile creation, the manageprofiles command-line utility uses an
#   automatically generated set of recommended ports if you do not specify the
#   -startingPort parameter, the -defaultPorts parameter or the -portsFile
#   parameter. The recommended port values can be different than the default
#   port values based on the availability of the default ports.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter:  portsFile
#
# Description:
#   An optional parameter that specifies the path to a file that defines port
#   settings for the new profile.
#   Do not use this parameter when using the -startingPort or -defaultPorts
#   parameter.
#   During profile creation, the manageprofiles command-line utility uses an
#   automatically generated set of recommended ports if you do not specify the
#   -startingPort parameter, the -defaultPorts parameter or the -portsFile
#   parameter. The recommended port values can be different than the default
#   port values based on the availability of the default ports.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
#defaultPorts=default_ports
#startingPort=startingPort
#portsFile=file_path

#####
# Parameter:  enableService
#
# Description:
#   Enables the creation of a Linux service. Valid values include true or
#   false. The default value for this parameter is false. When the
#   manageprofiles command-line utility is run with the -enableService option
#   set to true , the Linux service is created with the profile when the
#   command is run by the root user. When a nonroot user runs the

```

```

# manageprofiles command-line utility, the profile is created, but the Linux
# service is not. The Linux service is not created because the nonroot user
# does not have sufficient permission to set up the service. An
# INSTCONPARTIALSUCCESS result is displayed at the end of the profile
# creation and the profile creation log
# install_root/logs/manageprofiles/profile_name_create.log contains a
# message indicating the current user does not have sufficient permission to
# set up the Linux service. Use this parameter when creating profiles only.
#
# Valid Values:
#   false
#   true
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: serviceUserName
#
# Description:
#   Specifies the user ID that is used during the creation of the Linux
#   service so that the Linux service will run under this user ID. The Linux
#   service runs whenever the user ID is logged on. Not required.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: winserviceAccountType
#
# Description:
#   The type of the owner account of the Windows service created for the
#   profile. Valid values include specifieduser or localsystem. The
#   localsystem value runs the Windows service under the local account of the
#   user who creates the profile. The default value for this parameter is
#   localsystem. Use this parameter when creating profiles only.
#
# Valid Values:
#   localsystem
#   specifieduser
# Default Values:
#   localsystem
#
# Parameter: winserviceUserName
#
# Description:
#   Specify your user ID so that the Windows operating system can verify you
#   as an ID that is capable of creating a Windows service. Your user ID must
#   belong to the Administrator group and have the following advanced user
#   rights:
#   Act as part of the operating system
#   Log on as a service
#   The default value for this parameter is the current user name. The value
#   for this parameter must not contain spaces or characters that are not
#   valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |. The user that
#   you specify must have the proper permissions to create a Windows service.
#   You must specify the correct password for the user name that you choose.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: winservicePassword
#
# Description:
#   Specify the password for the specified user or the local account that is
#   to own the Windows service.

```



```

#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: winserviceCheck
#
# Description:
#   The value can be either true or false. Specify true to create a Windows
#   service for the server process that is created within the profile. Specify
#   false to not create the Windows service. The default value for this
#   parameter is false.
#
# Valid Values:
#   false
#   true
# Default Values:
#   false
#
# Parameter: winserviceStartupType
#
# Description:
#   The following values for Windows service startup can be used:
#   manual
#   automatic
#   disabled
#   The default value for this parameter is manual.
#
# Valid Values:
#   manual
#   automatic
#   disabled
# Default Values:
#   manual
#####
#enableService=true
#serviceName=service_user_ID
#winserviceAccountType=localsystem
#winserviceUserName=winservice_user_ID
#winservicePassword=winservice_password
#winserviceCheck=false
#winserviceStartupType>manual

#####
# Parameter: bpmdbDesign
#
# Description:
#   Specifies the file that holds the database configuration design for all of
#   the IBM Business Process Manager components .
#   This parameter replaces the -wbldbDesign that was used in previous
#   versions of WebSphere Process Server.
#
#   Note: If a bpmdbDesign file parameter is specified, none of the database
#   related properties should be specified.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
#bpmdbDesign=design_file

#####
# Parameter: dbCreateNew
#
# Description:

```

```

# Indicates a new database is created or if an existing database is to be
# reused. Valid values are true or false. This value cannot be true for an
# Oracle, SQL Server or a DB2 z/OS database. This value can only be true for
# a DB2 database.
#
# Valid Values:
# false
# Default Values:
# false
#####
dbCreateNew=false

#####
# Parameter: dbType
#
# Description:
# The database type. Set one of the following values for the type of
# database product you are using with IBM Business Process Manager.
#
# Required only for one of the following:
# A stand-alone profile when -bpmdbDesign was not specified.
# An advanced dmgr or managed profiles when -bpmdbDesign was not specified.
#
# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
# DB2UDBOS390
# Default Values:
# DB2UDBOS390
#####
dbType=DB2UDBOS390

#####
# Parameter: dbDelayConfig
#
# Description:
# Indicates whether to postpone table creation until after the profile is
# created. Valid values are true or false. The parameter is set to false by
# default. Setting this parameter to true delays the execution of the
# scripts that create the database tables. No. Specify false if you want the
# database to be set up during profile creation.
#
# Valid Values:
# false
# true
# Default Values:
# false
#####
dbDelayConfig=true

#####
# Parameter: dbName
#
# Description:
# The name of the database. By default, the value is set to orcl for Oracle
# databases and to CMNDB for all other supported databases.
#
# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# CMNDB
#
# Parameter: dbUserId
#
# Description:

```

```

# The user ID for all database types. Specifies the user ID that has
# privileges to create and drop the databases. The WebSphere data source
# uses this ID to authenticate the database connection.
# Important: The -dbUserId parameter value must be a valid database
# authorization ID. Required if the -bpmdbDesign file is not set.
#
# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: dbPassword
#
# Description:
#   The password required for database authentication. Required when the
#   -bpmdbDesign file is not set.
#
# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
dbName=CMNDB
dbUserId=db_userid
dbPassword=db_pswd
#####
# Parameter: procSvrDbName
#
# Description:
#   Database name for Process Server database. The value specified for
#   -procSvrDbName and -perfDWDbName must be different.
#
# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: dbProcSvrUserId
#
# Description:
#   The Process Server user name. Required for setting up the Process Server.
#
# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: dbProcSvrPassword
#
# Description:
#   The Process Server password. Required for setting up the Process Server.
#
# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None

```

```

#####
procSvrDbName=procSvr_Db_Name
dbProcSvrUserId=db_ProcSvr_UserId_name
dbProcSvrPassword=db_ProcSvr_Password

#####
# Parameter: perfDWDbName
#
# Description:
# Database name for Performance Data Warehouse. The value specified for
# -perfDWDbName and -procSvrDbName must be different.
#
# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Parameter: dbPerfDWUserId
#
# Description:
# Performance Data Warehouse user name. Required for setting up the
# Performance Data Warehouse.
#
# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Parameter: dbPerfDWPassword
#
# Description:
# Performance Data Warehouse password. Required for setting up the
# Performance Data Warehouse.
#
# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#####
perfDWDbName=perfDW_Db_Name
dbPerfDWUserId=db_PerfDW_UserId
dbPerfDWPassword=db_PerfDW_Password

#####
# Parameter: dbStorageGroup
#
# Description:
# The storage group name for DB2 z/OS databases.
#
# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# None
#
# Parameter: dbConnectionLocation
#
# Description:
# The location of DB2 for z/OS database.
#
# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# None
#####
dbStorageGroup=db_stg_group
dbConnectionLocation=db2_location

#####
# Parameter: environmentName
#
# Description:
# Specifies the name of the environment you are configuring. This parameter

```

```

#     has no default value, and it must not be empty.
#
# Valid Values:
#     Varies
# Default Values:
#     None
#####
environmentName=environment_name

#####
# Parameter: environmentType
#
# Description:
#     Specifies the environment type. The environment type refers to how IBM
#     Business Process Manager is used; for example, in a production, stage or
#     test environment. Load testing might be done on a test server, while a
#     stage environment type might be used as a temporary location to host
#     changes before putting those changes into production. You might specify
#     Stage as the Environment type if the server you are configuring will be
#     accessed and used to review content and new functionality. Valid values
#     are as follows:
#     Test
#     Use Test if the server you are configuring is to be used as a testing
#     environment.
#     Stage
#     Use Stage if the server is to serve as a staging platform to be used as a
#     preproduction server.
#     Production
#     Use Production if the server is to serve in a production capacity.
#     The default value is Test.
#
# Valid Values:
#     Test
#     Production
#     Stage
# Default Values:
#     Test
#####
environmentType=Test

#####
# Parameter: isDeveloperServer
#
# Description:
#     Specifies whether the server is intended for development purposes only.
#     This parameter is useful when creating profiles to test applications on a
#     non-production server prior to deploying the applications on their
#     production application servers. If -isDeveloperServer is set when
#     creating an IBM Business Process Manager profile, then a preconfigured VMM
#     file repository is installed. This file repository contains a sample
#     organization that can be used to test Business Process Choreographer
#     people resolution, ready for you to use as is.
#
# Valid Values:
#     false
#     true
# Default Values:
#     false
#####
isDeveloperServer=false

#####
# Parameter: samplesPassword
#
# Description:
#     Creates a password to be used for samples. The password is used to
#     restrict access to Web application samples installed during the

```

```

#      installation of the application server.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
samplesPassword=samplesPassword

#####
# Parameter: webFormConfig
#
# Description:
#   Indicates if Business Space is configured to use IBM Forms Server to work
#   with Human Task Management widgets. The default value for this parameter
#   is false. Indicate true to configure Business Space to use IBM Forms
#   Server. Both the webFormConfig and webFormInstallRoot parameters are
#   required to configure IBM Forms Server. This parameter is valid for
#   stand-alone server profiles only.
#   Note: IBM Forms Server configuration using these parameters is only valid
#   for local IBM Forms Server installations.
#
# Valid Values:
#   false
#   true
# Default Values:
#   false
#
# Parameter: webFormHTTP
#
# Description:
#   Specifies the location of the IBM Forms Server Translator. The default URL
#   for the location is http://localhost:8085/translator. No. This parameter
#   is valid only if the -webFormConfig parameter is set to true. It is valid
#   for stand-alone server profiles only.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: webFormInstallRoot
#
# Description:
#   Specifies the full path where IBM Forms Server is installed. For example,
#   the IBM Forms Server install root might be
#   C:/IBM/IBMFormsServer/4.0/WebFormServer. No. This parameter is valid only
#   if the -webFormConfig parameter is set to true. It is valid for
#   stand-alone server profiles only.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
#webFormConfig=false
#webFormHTTP=URL
#webFormInstallRoot=Webform_Server_install_root

#####
# Parameter: configureBRM
#
# Description:
#   Configures the business process rules manager. The default value is false.
#
# Valid Values:
#   false

```

```

# true
# Default Values:
# false
#####
configureBRM=false

```

Oracle 用の Advanced Process Server スタンドアロン・プロファイル作成の応答ファイル:

ここに用意されている応答ファイルを変更し、**manageprofiles** コマンド行ユーティリティーと一緒に使用して、Oracle データベース用のスタンドアロン・プロファイルを作成します。

注: ご使用のオペレーティング・システムに合わせて、必要に応じて応答ファイルの情報をコメント化またはアンコメントしてください。詳細については、応答ファイルのコメントを参照してください。

```

# BEGIN COPYRIGHT
# *****
#
# Licensed Materials - Property of IBM
# 5725-C94
# (C) Copyright IBM Corporation 2011, 2012. All Rights Reserved.
# This sample program is provided AS IS and may be used, executed, copied
# and modified without royalty payment by customer (a) for its own
# instruction and study, (b) in order to develop applications designed to
# run with an IBM WebSphere product, either for customer's own internal
# use or for redistribution by customer, as part of such an application,
# in customer's own products.
#
# *****
# END COPYRIGHT

#####
# These response file has the applicable parameters for creating a
# Standalone PS Adv profile that uses Oracle.
#
# Depending on your environment, you may need to change the default values.
#
# To create a profile with this response file specify:
#
# was.install.root/bin/manageprofiles -response PS_Adv_Standalone_Oracle.response
#
# If you use the -response parameter, it must be the only parameter on
# the command-line. If you include any manageprofile parameters
# (in addition to -response) on the command-line, the response file
# is ignored. And default WebSphere Application server profile will be created .
#####

#####
# Parameter: create
#
# Description:
#   Creates the profile.
#   If you are creating a profile, this parameter is required.
#####
create

#####
# Parameter: templatePath
#
# Description:
#   Specifies the directory path to the template files in the installation
#   root directory. Within the profileTemplates directory are various
#   directories that correspond to different profile types and that vary with
#   the type of product installed. The profile directories are the paths that
#   you indicate while using the -templatePath option.
#   Use absolute paths. This parameter must exist as a directory and point to
#   a valid template directory.

```



```

#
#   When using the -templatePath parameter, specify the fully qualified file
#   path for the parameter.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
templatePath=BPM/default.procsvr.adv

#####
# Parameter:  profileName
#
# Description:
#   Specifies the name of the profile. Use a unique value when creating a
#   profile.
#   Each profile that shares the same set of product binaries must have a
#   unique name. The default profile name is based on the profile type and a
#   trailing number, for example:
#   profileType ProfileNumberwhere profileType is a value such as ProcSrv,
#   Dmgr, or Custom and ProfileNumber is a sequential number that creates a
#   unique profile name. The value for this parameter must not contain spaces
#   or characters that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,,
#   /, \, and |. The profile name that you choose must not be in use. On
#   Windows platforms: If the fully qualified path contains spaces, enclose
#   the value in quotation marks. The default value is based on the
#   install_root directory, the profiles subdirectory, and the name of the
#   file. For example, the default for profile creation is:
#   WS_WSPROFILE_DEFAULT_PROFILE_HOME/profileNamewhere
#   WS_WSPROFILE_DEFAULT_PROFILE_HOME is defined in the wasprofile.properties
#   file in the install_root/properties directory. The value for this
#   parameter must be a valid path for the target system and must not be
#   currently in use. You must have permissions to write to the directory.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
profileName=ProcSrv01

#####
# Parameter:  applyPerfTuningSetting
#
# Description:
#   Set a performance tuning level appropriate for the profile you are
#   creating.
#   This parameter is a WebSphere Application Server parameter.
#
# Valid Values:
#   development
#   standard
#   production
# Default Values:
#   None
#####
#applyPerfTuningSetting=standard

#####
# Parameter:  cellName
#
# Description:
#   Specifies the cell name of the profile. Use a unique cell name for each
#   profile.
#   The default value for this parameter is based on a combination of the
#   short host name, the constant Cell, and a trailing number, for example:

```

```

#   if (DMgr)
#       shortHostNameCellCellNumber
#   else
#       shortHostNameNodeNodeNumberCell
#   where CellNumber is a sequential number starting at 01 and NodeNumber is
#   the node number that you used to define the node name.
#   The value for this parameter must not contain spaces or any characters
#   that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   Varies
#
# Parameter:  nodeName
#
# Description:
#   Specifies the node name for the node that is created with the new profile.
#   Use a unique value within the cell or on the workstation. Each profile
#   that shares the same set of product binaries must have a unique node name.
#   This parameter is required for profile creation only with the
#   dmgr.esbserverdefault.procsvrdefault.procctrdefault.procsvr.advdefault.
#   procctr.advdmgr.procctrmanaged.procctrmanaged.procsvr templates.
#   The default value for this parameter is based on the short host name,
#   profile type, and a trailing number, for example:
#   if (DMgr)
#       shortHostNameCellManagerNodeNumber
#   else
#       shortHostNameNodeNodeNumber
#   where NodeNumber is a sequential number starting at 01.
#   The value for this parameter must not contain spaces or any characters
#   that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   Varies
#
# Parameter:  serverName
#
# Description:
#   Specifies the name of the server.
#####
cellName=cell_name
nodeName=node_name
serverName=server1
#####
# Parameter:  processCenterURL
#
# Description:
#   Specifies the URL of the Process Center that the Process Server connects
#   to. If this parameter is set, the protocol must be either http or https.
#   Note: No corresponding useServerOffline parameter exists to use the server
#   offline. To use the server offline, omit the processCenterURL parameter.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter:  processCenterUserId
#
# Description:
#   Specifies the user ID to be used to connect to the Process Center. This
#   parameter is valid for stand-alone Process Server profiles. This parameter
#   is required if the Process Server is online (connected to a Process

```

```

# Center). It is required for a stand-alone process server (standard or
# advanced) profile if the processCenterURL parameter is specified.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: processCenterPassword
#
# Description:
#   Specifies the user password to be used to connect to the Process Center.
#   This parameter is valid for stand-alone Process Server profiles. This
#   parameter is required if the Process Server is online (connected to a
#   Process Center). It is required for a stand-alone process server (standard
#   or advanced) profile if the processCenterURL parameter is specified.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
processCenterURL=process_Center_URL
processCenterUserId=process_Center_UserId
processCenterPassword=process_Center_Password
#####
# Parameter: enableAdminSecurity
#
# Description:
#   For IBM Business Process Manager omit this parameter. Administrative
#   security is always enabled for IBM Business Process Manager profiles.
#   You must also specify the parameters -adminUserName and -adminPassword
#   along with the values for these parameters.
#
# Valid Values:
#   true
# Default Values:
#   true
#####
enableAdminSecurity=true
adminUserName=adminUser_ID
adminPassword=adminPassword
#####
# Parameter: signingCertDN
#
# Description:
#   Specifies the distinguished name of the root signing certificate that you
#   create when you create the profile. Specify the distinguished name in
#   quotation marks. This default personal certificate is located in the
#   server keystore file. If you do not specifically create or import a root
#   signing certificate, one is created by default. See the
#   -signingCertValidityPeriod parameter and the -keyStorePassword.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: signingCertValidityPeriod
#
# Description:
#   An optional parameter that specifies the amount of time in years that the
#   root signing certificate is valid. If you do not specify this parameter
#   with the -signingCertDN parameter, the root signing certificate is valid
#   for 20 years.

```

```

#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: keyStorePassword
#
# Description:
#   Specifies the password to use on all keystore files created during profile
#   creation. Keystore files are created for the default personal certificate
#   and the root signing certificate.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
#signingCertDN =distinguished_name
#signingCertValidityPeriod =validity_period
#keyStorePassword =keyStore_password
#####
# Parameter: defaultPorts
#
# Description:
#   Assigns the default or base port values to the profile.d o not use this
#   parameter when using the -startingPort or -portsFile parameter.
#   During profile creation, the manageprofiles command-line utility uses an
#   automatically generated set of recommended ports if you do not specify the
#   -startingPort parameter, the -defaultPorts parameter or the -portsFile
#   parameter. The recommended port values can be different than the default
#   port values based on the availability of the default ports.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: startingPort
#
# Description:
#   Specifies the starting port number for generating and assigning all ports
#   for the profile.
#   Port values are assigned sequentially from the -startingPort value,
#   omitting those ports that are already in use. The system recognizes and
#   resolves ports that are currently in use and determines the port
#   assignments to avoid port conflicts.
#   Do not use this parameter with the -defaultPorts or -portsFile parameters.
#   During profile creation, the manageprofiles command-line utility uses an
#   automatically generated set of recommended ports if you do not specify the
#   -startingPort parameter, the -defaultPorts parameter or the -portsFile
#   parameter. The recommended port values can be different than the default
#   port values based on the availability of the default ports.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: portsFile
#
# Description:
#   An optional parameter that specifies the path to a file that defines port
#   settings for the new profile.
#   Do not use this parameter when using the -startingPort or -defaultPorts
#   parameter.

```

```

# During profile creation, the manageprofiles command-line utility uses an
# automatically generated set of recommended ports if you do not specify the
# -startingPort parameter, the -defaultPorts parameter or the -portsFile
# parameter. The recommended port values can be different than the default
# port values based on the availability of the default ports.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
#defaultPorts=default_ports
#startingPort=startingPort
#portsFile=file_path

#####
# Parameter: enableService
#
# Description:
#   Enables the creation of a Linux service. Valid values include true or
#   false. The default value for this parameter is false. When the
#   manageprofiles command-line utility is run with the -enableService option
#   set to true , the Linux service is created with the profile when the
#   command is run by the root user. When a nonroot user runs the
#   manageprofiles command-line utility, the profile is created, but the Linux
#   service is not. The Linux service is not created because the nonroot user
#   does not have sufficient permission to set up the service. An
#   INSTCONPARTIALSUCCESS result is displayed at the end of the profile
#   creation and the profile creation log
#   install_root/logs/manageprofiles/profile_name_create.log contains a
#   message indicating the current user does not have sufficient permission to
#   set up the Linux service. Use this parameter when creating profiles only.
#
# Valid Values:
#   false
#   true
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: serviceUserName
#
# Description:
#   Specifies the user ID that is used during the creation of the Linux
#   service so that the Linux service will run under this user ID. The Linux
#   service runs whenever the user ID is logged on. Not required.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: winserviceAccountType
#
# Description:
#   The type of the owner account of the Windows service created for the
#   profile. Valid values include specifieduser or localsystem. The
#   localsystem value runs the Windows service under the local account of the
#   user who creates the profile. The default value for this parameter is
#   localsystem. Use this parameter when creating profiles only.
#
# Valid Values:
#   localsystem
#   specifieduser
# Default Values:
#   localsystem
#
# Parameter: winserviceUserName

```

```

#
# Description:
#   Specify your user ID so that the Windows operating system can verify you
#   as an ID that is capable of creating a Windows service. Your user ID must
#   belong to the Administrator group and have the following advanced user
#   rights:
#   Act as part of the operating system
#   Log on as a service
#   The default value for this parameter is the current user name. The value
#   for this parameter must not contain spaces or characters that are not
#   valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |. The user that
#   you specify must have the proper permissions to create a Windows service.
#   You must specify the correct password for the user name that you choose.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: winservicePassword
#
# Description:
#   Specify the password for the specified user or the local account that is
#   to own the Windows service.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: winserviceCheck
#
# Description:
#   The value can be either true or false. Specify true to create a Windows
#   service for the server process that is created within the profile. Specify
#   false to not create the Windows service. The default value for this
#   parameter is false.
#
# Valid Values:
#   false
#   true
# Default Values:
#   false
#
# Parameter: winserviceStartupType
#
# Description:
#   The following values for Windows service startup can be used:
#   manual
#   automatic
#   disabled
#   The default value for this parameter is manual.
#
# Valid Values:
#   manual
#   automatic
#   disabled
# Default Values:
#   manual
#####
#enableService=true
#serviceName=service_user_ID
#winserviceAccountType=localsystem
#winserviceUserName=winservice_user_ID
#winservicePassword=winservice_password
#winserviceCheck=false
#winserviceStartupType>manual

```

```

#####
# Parameter: bpmdbDesign
#
# Description:
#   Specifies the file that holds the database configuration design for all of
#   the IBM Business Process Manager components .
#   This parameter replaces the -wbidbDesign that was used in previous
#   versions of WebSphere Process Server.
#
#   Note: If a bpmdbDesign file parameter is specified, none of the database
#   related properties should be specified.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
#bpmdbDesign=design_file

#####
# Parameter: dbCreateNew
#
# Description:
#   Indicates a new database is created or if an existing database is to be
#   reused. Valid values are true or false. This value cannot be true for an
#   Oracle, SQL Server or a DB2 z/OS database. This value can only be true for
#   a DB2 database.
#
# Valid Values:
#   false
# Default Values:
#   false
#####
dbCreateNew=false

#####
# Parameter: dbType
#
# Description:
#   The database type. Set one of the following values for the type of
#   database product you are using with IBM Business Process Manager.
#
#   Required only for one of the following:
#   A stand-alone profile when -bpmdbDesign was not specified.
#   An advanced dmgr or managed profiles when -bpmdbDesign was not specified.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   ORACLE
# Default Values:
#   ORACLE
#
# Parameter: dbDriverType
#
# Description:
#   The database driver type. For an Oracle database, specify ORACLE. For
#   databases other than Oracle, the value is automatically set based on the
#   server operating system. Server installations on all operating systems use
#   type 4.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:

```



```

# None
#
# Parameter: dbJDBCClasspath
#
# Description:
#   The directory path location of JDBC driver files.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
dbType=ORACLE
dbDriverType=ORACLE_THIN
dbJDBCClasspath=${WAS_INSTALL_ROOT}/jdbcdrivers/Oracle

#####
# Parameter: dbLocation
#
# Description:
#   The directory of the ORACLE_HOME directory. This parameter is required
#   when the parameter dbDelayConfig is set to false. No, this parameter is
#   only valid if you are using Oracle databases.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
dbLocation=db_location

#####
# Parameter: dbDelayConfig
#
# Description:
#   Indicates whether to postpone table creation until after the profile is
#   created. Valid values are true or false. The parameter is set to false by
#   default. Setting this parameter to true delays the execution of the
#   scripts that create the database tables. No. Specify false if you want the
#   database to be set up during profile creation.
#
# Valid Values:
#   false
#   true
# Default Values:
#   false
#####
dbDelayConfig=false

#####
# Parameter: dbName
#
# Description:
#   The name of the database. By default, the value is set to orcl for Oracle
#   databases and to CMNDB for all other supported databases.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   orcl
#

```

```

# Parameter: dbUserId
#
# Description:
#   The user ID for all database types. Specifies the user ID that has
#   privileges to create and drop the databases. The WebSphere data source
#   uses this ID to authenticate the database connection.
#   Important: The -dbUserId parameter value must be a valid database
#   authorization ID. Required if the -bpmdbDesign file is not set.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: dbPassword
#
# Description:
#   The password required for database authentication. Required when the
#   -bpmdbDesign file is not set.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
dbName=orcl
dbUserId=db_userid
dbPassword=db_pswd
#####
# Parameter: procSvrDbName
#
# Description:
#   Database name for Process Server database. The value specified for
#   -procSvrDbName and -perfDWDbName can be the same.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: dbProcSvrUserId
#
# Description:
#   The Process Server user name. Required for setting up the Process Server.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: dbProcSvrPassword
#
# Description:
#   The Process Server password. Required for setting up the Process Server.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:

```

```

#    Varies
# Default Values:
#    None
#####
procSvrDbName=procSvr_Db_Name
dbProcSvrUserId=db_ProcSvr_UserId_name
dbProcSvrPassword=db_ProcSvr_Password

#####
# Parameter: perfDWDbName
#
# Description:
#    Database name for Performance Data Warehouse. The value specified for
#    -perfDWDbName and -procSvrDbName can be the same.
#
#    Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Parameter: dbPerfDWUserId
#
# Description:
#    Performance Data Warehouse user name. Required for setting up the
#    Performance Data Warehouse.
#
#    Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Parameter: dbPerfDWPASSWORD
#
# Description:
#    Performance Data Warehouse password. Required for setting up the
#    Performance Data Warehouse.
#
#    Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#####
perfDWDbName=perfDW_Db_Name
dbPerfDWUserId=db_PerfDW_UserId
dbPerfDWPASSWORD=db_PerfDW_Password

#####
# Parameter: dbProcSvrMeUserId
#
# Description:
#    Process Server Messaging Engine user name. Required for setting up the
#    Process Server Messaging Engine. If you enter a user-specified a user name
#    and password during profile creation and if you specified ORACLE for
#    dbType, this parameter is required.
#
#    Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#    Varies
# Default Values:
#    None
#
# Parameter: dbProcSvrMePassword
#
# Description:
#    Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#    Varies
# Default Values:
#    None
#####
dbProcSvrMeUserId=db_ProcSvr_ME_UserID
dbProcSvrMePassword=db_ProcSvr_Me_Password

#####

```

```

# Parameter: dbPerfDWMeUserId
#
# Description:
# Performance Data Warehouse Messaging Engine user name. Required for
# setting up the Performance Data Warehouse Messaging Engine. This
# parameter is required.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# None
#
# Parameter: dbPerfDWMePassword
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# None
#####
dbPerfDWMeUserId=db_PerfDW_Me_UserId
dbPerfDWMePassword=db_PerfDW_ME_Password

#####
# Parameter: dbCommonUserId
#
# Description:
# The user id to authenticate with the Common database. For Oracle, the
# default user name is the first three characters of the Oracle database
# service name. For example: If the database service name is ORCL,
# dbCommonUserId is ORCCOMM. Required for all stand-alone IBM Business
# Process Manager profiles and advanced deployment manager (dmgr.*.adv)
# profiles, if the -dbType parameter is set to ORACLE or MICROSOFT_SQLSERVER
# and no bpmdbDesign file was specified.
#
# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# None
#
# Parameter: dbCommonPassword
#
# Description:
# The password for the user id of the dbCommonUserId parameter. Required for
# all stand-alone IBM Business Process Manager profiles and advanced
# deployment manager (dmgr.*.adv) profiles, if the -dbType parameter is set
# to ORACLE or MICROSOFT_SQLSERVER and no bpmdbDesign file was specified.
#
# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# None
#####
dbCommonUserId=common_db_userid
dbCommonPassword=common_db_pswd

#####
# Parameter: dbAppMeUserId
#
# Description:
# The default user name is the first three characters of the Oracle database
# service name. For example: If the database service name is ORCL,
# dbAppMeUserId is ORCSA00. If you enter a user-specified a user name and
# password during profile creation and if you specified ORACLE for dbType,

```

```

#     this parameter is required.
#
#     Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#     Varies
# Default Values:
#     None
#
# Parameter:  dbAppMePassword
#
# Description:
#     The password for the user id of the dbAppMeUserId parameter. If you enter
#     a user-specified a user name and password during profile creation and if
#     you specified ORACLE for dbType, this parameter is required.
#
#     Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#     Varies
# Default Values:
#     None
#####
dbAppMeUserId=app_me_userID
dbAppMePassword=app_me_pwd

#####
# Parameter:  dbCeiMeUserId
#
# Description:
#     The default user name is the first three characters of the Oracle database
#     service name. For example: If the database service name is ORCL,
#     dbCeiMeUserId is ORCCM00. If you enter a user-specified a user name and
#     password during profile creation and if you specified ORACLE for dbType,
#     this parameter is required.
#
#     Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#     Varies
# Default Values:
#     None
#
# Parameter:  dbCeiMePassword
#
# Description:
#     The password for the user id of the dbCeiMeUserId parameter. If you enter
#     a user-specified a user name and password during profile creation and if
#     you specified ORACLE for -dbType, this parameter is required.
#
#     Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#     Varies
# Default Values:
#     None
#####
dbCeiMeUserId=cei_me_userID
dbCeiMePassword=cei_me_pwd

#####
# Parameter:  dbSysMeUserId
#
# Description:
#     The default user name for the SCA system bus messaging engine is the first
#     three characters of the Oracle database service name. For example: If the
#     database service name is ORCL, dbSysMeUserId is ORCSS00. If you enter a

```

```

# user-specified a user name and password during profile creation, this
# parameter is required.
#
# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: dbSysMePassword
#
# Description:
#   The default password for the SCA system bus messaging engine is
#   dbPassword. If you enter a user-specified a user name and password during
#   profile creation, this parameter is required.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
dbSysMeUserId=sys_me_userID
dbSysMePassword=sys_me_pwd
#####
# Parameter: environmentName
#
# Description:
#   Specifies the name of the environment you are configuring. This parameter
#   has no default value, and it must not be empty.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
environmentName=environment_name
#####
# Parameter: environmentType
#
# Description:
#   Specifies the environment type. The environment type refers to how IBM
#   Business Process Manager is used; for example, in a production, stage or
#   test environment. Load testing might be done on a test server, while a
#   stage environment type might be used as a temporary location to host
#   changes before putting those changes into production. You might specify
#   Stage as the Environment type if the server you are configuring will be
#   accessed and used to review content and new functionality. Valid values
#   are as follows:
#   Test
#   Use Test if the server you are configuring is to be used as a testing
#   environment.
#   Stage
#   Use Stage if the server is to serve as a staging platform to be used as a
#   preproduction server.
#   Production
#   Use Production if the server is to serve in a production capacity.
#   The default value is Test.
#
# Valid Values:
#   Test
#   Production
#   Stage

```

```

# Default Values:
#   Test
#####
environmentType=Test

#####
# Parameter:  isDeveloperServer
#
# Description:
#   Specifies whether the server is intended for development purposes only.
#   This parameter is useful when creating profiles to test applications on a
#   non-production server prior to deploying the applications on their
#   production application servers. If -isDeveloperServer is set when
#   creating an IBM Business Process Manager profile, then a preconfigured VMM
#   file repository is installed. This file repository contains a sample
#   organization that can be used to test Business Process Choreographer
#   people resolution, ready for you to use as is.
#
# Valid Values:
#   false
#   true
# Default Values:
#   false
#####
#isDeveloperServer=false

#####
# Parameter:  samplesPassword
#
# Description:
#   Creates a password to be used for samples. The password is used to
#   restrict access to Web application samples installed during the
#   installation of the application server.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
samplesPassword=samplesPassword

#####
# Parameter:  webFormConfig
#
# Description:
#   Indicates if Business Space is configured to use IBM Forms Server to work
#   with Human Task Management widgets. The default value for this parameter
#   is false. Indicate true to configure Business Space to use IBM Forms
#   Server. Both the webFormConfig and webFormInstallRoot parameters are
#   required to configure IBM Forms Server. This parameter is valid for
#   stand-alone server profiles only.
#   Note: IBM Forms Server configuration using these parameters is only valid
#   for local IBM Forms Server installations.
#
# Valid Values:
#   false
#   true
# Default Values:
#   false
#
# Parameter:  webFormHTTP
#
# Description:
#   Specifies the location of the IBM Forms Server Translator. The default URL
#   for the location is http://localhost:8085/translator. No. This parameter
#   is valid only if the -webFormConfig parameter is set to true. It is valid
#   for stand-alone server profiles only.

```



```

#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: webFormInstallRoot
#
# Description:
#   Specifies the full path where IBM Forms Server is installed. For example,
#   the IBM Forms Server install root might be
#   C:/IBM/IBMFormsServer/4.0/WebFormServer. No. This parameter is valid only
#   if the -webFormConfig parameter is set to true. It is valid for
#   stand-alone server profiles only.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
#webFormConfig=false
#webFormHTTP=URL
#webFormInstallRoot=Webform_Server_install_root

#####
# Parameter: configureBRM
#
# Description:
#   Configures the business process rules manager. The default value is false.
#
# Valid Values:
#   false
#   true
# Default Values:
#   false
#####
configureBRM=false

#####
# Parameter: configureBPC
#
# Description:
#   Determines whether the Business Process Choreographer sample configuration
#   is created.
#   The following conditions apply:
#   Only DB2 databases are supported.
#   The default is set to true for DB2.
#   It uses its own schema within the common database (CMNDB) and the schema
#   name is always BPEDB.
#   Business Process Choreographer database parameters set in the Database
#   Design Tool and generated to the database design file are ignored by
#   Business Process Choreographer at profile creation time.
#   See -bpmdbDesign for information about the database design file.
#   Note: If these conditions are too restrictive, consider setting
#   -configureBPC to false and using other documented methods to configure
#   Business Process Choreographer.
#
# Valid Values:
#   false
# Default Values:
#   false
#####
configureBPC=false

```

SQL 用の Advanced Process Server スタンドアロン・プロファイル作成の応答ファイル:

ここに用意されている応答ファイルを変更し、**manageprofiles** コマンド行ユーティリティーと一緒に使用して、SQL データベース用のスタンドアロン・プロファイルを作成します。

注: ご使用のオペレーティング・システムに合わせて、必要に応じて応答ファイルの情報をコメント化またはアンコメントしてください。詳細については、応答ファイルのコメントを参照してください。

```
# BEGIN COPYRIGHT
# *****
#
# Licensed Materials - Property of IBM
# 5725-C94
# (C) Copyright IBM Corporation 2011, 2012. All Rights Reserved.
# This sample program is provided AS IS and may be used, executed, copied
# and modified without royalty payment by customer (a) for its own
# instruction and study, (b) in order to develop applications designed to
# run with an IBM WebSphere product, either for customer's own internal
# use or for redistribution by customer, as part of such an application,
# in customer's own products.
#
# *****
# END COPYRIGHT

#####
# These response file has the applicable parameters for creating a
# Standalone PS Adv profile that uses SQLServer.
#
# Depending on your environment, you may need to change the default values.
#
# To create a profile with this response file specify:
#
# was.install.root/bin/manageprofiles -response PS_Adv_Standalone_SQLServer.response
#
# If you use the -response parameter, it must be the only parameter on
# the command-line. If you include any manageprofile parameters
# (in addition to -response) on the command-line, the response file
# is ignored. And default WebSphere Application server profile will be created .
#####

#####
# Parameter: create
#
# Description:
#   Creates the profile.
#   If you are creating a profile, this parameter is required.
#####
create

#####
# Parameter: templatePath
#
# Description:
#   Specifies the directory path to the template files in the installation
#   root directory. Within the profileTemplates directory are various
#   directories that correspond to different profile types and that vary with
#   the type of product installed. The profile directories are the paths that
#   you indicate while using the -templatePath option.
#   Use absolute paths. This parameter must exist as a directory and point to
#   a valid template directory.
#
#   When using the -templatePath parameter, specify the fully qualified file
#   path for the parameter.
#
# Valid Values:
#   Varies
```

```

# Default Values:
#   None
#####
templatePath=BPM/default.procsvr.adv

#####
# Parameter:  profileName
#
# Description:
#   Specifies the name of the profile. Use a unique value when creating a
#   profile.
#   Each profile that shares the same set of product binaries must have a
#   unique name. The default profile name is based on the profile type and a
#   trailing number, for example:
#   profileType ProfileNumberwhere profileType is a value such as ProcSrv,
#   Dmgr, or Custom and ProfileNumber is a sequential number that creates a
#   unique profile name. The value for this parameter must not contain spaces
#   or characters that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,,
#   /, \, and |. The profile name that you choose must not be in use. On
#   Windows platforms: If the fully qualified path contains spaces, enclose
#   the value in quotation marks. The default value is based on the
#   install_root directory, the profiles subdirectory, and the name of the
#   file. For example, the default for profile creation is:
#   WS_WSPROFILE_DEFAULT_PROFILE_HOME/profileNamewhere
#   WS_WSPROFILE_DEFAULT_PROFILE_HOME is defined in the wasprofile.properties
#   file in the install_root/properties directory. The value for this
#   parameter must be a valid path for the target system and must not be
#   currently in use. You must have permissions to write to the directory.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
profileName=ProcSrv01

#####
# Parameter:  applyPerfTuningSetting
#
# Description:
#   Set a performance tuning level appropriate for the profile you are
#   creating.
#   This parameter is a WebSphere Application Server parameter.
#
# Valid Values:
#   development
#   standard
#   production
# Default Values:
#   None
#####
#applyPerfTuningSetting=standard

#####
# Parameter:  cellName
#
# Description:
#   Specifies the cell name of the profile. Use a unique cell name for each
#   profile.
#   The default value for this parameter is based on a combination of the
#   short host name, the constant Cell, and a trailing number, for example:
#   if (Dmgr)
#       shortHostNameCellCellNumber
#   else
#       shortHostNameNodeNodeNumberCell
#   where CellNumber is a sequential number starting at 01 and NodeNumber is
#   the node number that you used to define the node name.

```

```

# The value for this parameter must not contain spaces or any characters
# that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   Varies
#
# Parameter: nodeName
#
# Description:
#   Specifies the node name for the node that is created with the new profile.
#   Use a unique value within the cell or on the workstation. Each profile
#   that shares the same set of product binaries must have a unique node name.
#   This parameter is required for profile creation only with the
#   dmgr.esbserverdefault.procsvrdefault.procctrdefault.procsvr.advdefault.
#   procctr.advmgr.procctrmanaged.procctrmanaged.procsvr templates.
#   The default value for this parameter is based on the short host name,
#   profile type, and a trailing number, for example:
#   if (DMgr)
#       shortHostNameCellManagerNodeNumber
#   else
#       shortHostNameNodeNodeNumber
#   where NodeNumber is a sequential number starting at 01.
#   The value for this parameter must not contain spaces or any characters
#   that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   Varies
#
# Parameter: serverName
#
# Description:
#   Specifies the name of the server.
#####
cellName=cell_name
nodeName=node_name
serverName=server1
#####
# Parameter: processCenterURL
#
# Description:
#   Specifies the URL of the Process Center that the Process Server connects
#   to. If this parameter is set, the protocol must be either http or https.
#   Note: No corresponding useServerOffline parameter exists to use the server
#   offline. To use the server offline, omit the processCenterURL parameter.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: processCenterUserId
#
# Description:
#   Specifies the user ID to be used to connect to the Process Center. This
#   parameter is valid for stand-alone Process Server profiles. This parameter
#   is required if the Process Server is online (connected to a Process
#   Center). It is required for a stand-alone process server (standard or
#   advanced) profile if the processCenterURL parameter is specified.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:

```

```

# None
#
# Parameter: processCenterPassword
#
# Description:
# Specifies the user password to be used to connect to the Process Center.
# This parameter is valid for stand-alone Process Server profiles. This
# parameter is required if the Process Server is online (connected to a
# Process Center). It is required for a stand-alone process server (standard
# or advanced) profile if the processCenterURL parameter is specified.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# None
#####
processCenterURL=process_Center_URL
processCenterUserId=process_Center_UserId
processCenterPassword=process_Center_Password
#####
# Parameter: enableAdminSecurity
#
# Description:
# For IBM Business Process Manager omit this parameter. Administrative
# security is always enabled for IBM Business Process Manager profiles.
# You must also specify the parameters -adminUserName and -adminPassword
# along with the values for these parameters.
#
# Valid Values:
# true
# Default Values:
# true
#####
enableAdminSecurity=true
adminUserName=adminUser_ID
adminPassword=adminPassword
#####
# Parameter: signingCertDN
#
# Description:
# Specifies the distinguished name of the root signing certificate that you
# create when you create the profile. Specify the distinguished name in
# quotation marks. This default personal certificate is located in the
# server keystore file. If you do not specifically create or import a root
# signing certificate, one is created by default. See the
# -signingCertValidityPeriod parameter and the -keyStorePassword.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# None
#
# Parameter: signingCertValidityPeriod
#
# Description:
# An optional parameter that specifies the amount of time in years that the
# root signing certificate is valid. If you do not specify this parameter
# with the -signingCertDN parameter, the root signing certificate is valid
# for 20 years.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# None
#

```

```

# Parameter: keyStorePassword
#
# Description:
#   Specifies the password to use on all keystore files created during profile
#   creation. Keystore files are created for the default personal certificate
#   and the root signing certificate.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
#signingCertDN =distinguished_name
#signingCertValidityPeriod =validity_period
#keyStorePassword =keyStore_password

#####
# Parameter: defaultPorts
#
# Description:
#   Assigns the default or base port values to the profile. Do not use this
#   parameter when using the -startingPort or -portsFile parameter.
#   During profile creation, the manageprofiles command-line utility uses an
#   automatically generated set of recommended ports if you do not specify the
#   -startingPort parameter, the -defaultPorts parameter or the -portsFile
#   parameter. The recommended port values can be different than the default
#   port values based on the availability of the default ports.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: startingPort
#
# Description:
#   Specifies the starting port number for generating and assigning all ports
#   for the profile.
#   Port values are assigned sequentially from the -startingPort value,
#   omitting those ports that are already in use. The system recognizes and
#   resolves ports that are currently in use and determines the port
#   assignments to avoid port conflicts.
#   Do not use this parameter with the -defaultPorts or -portsFile parameters.
#   During profile creation, the manageprofiles command-line utility uses an
#   automatically generated set of recommended ports if you do not specify the
#   -startingPort parameter, the -defaultPorts parameter or the -portsFile
#   parameter. The recommended port values can be different than the default
#   port values based on the availability of the default ports.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: portsFile
#
# Description:
#   An optional parameter that specifies the path to a file that defines port
#   settings for the new profile.
#   Do not use this parameter when using the -startingPort or -defaultPorts
#   parameter.
#   During profile creation, the manageprofiles command-line utility uses an
#   automatically generated set of recommended ports if you do not specify the
#   -startingPort parameter, the -defaultPorts parameter or the -portsFile
#   parameter. The recommended port values can be different than the default
#   port values based on the availability of the default ports.
#

```

```

# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
#defaultPorts=default_ports
#startingPort=startingPort
#portsFile=file_path

#####
# Parameter: enableService
#
# Description:
#   Enables the creation of a Linux service. Valid values include true or
#   false. The default value for this parameter is false. When the
#   manageprofiles command-line utility is run with the -enableService option
#   set to true , the Linux service is created with the profile when the
#   command is run by the root user. When a nonroot user runs the
#   manageprofiles command-line utility, the profile is created, but the Linux
#   service is not. The Linux service is not created because the nonroot user
#   does not have sufficient permission to set up the service. An
#   INSTCONPARTIALSUCCESS result is displayed at the end of the profile
#   creation and the profile creation log
#   install_root/logs/manageprofiles/profile_name_create.log contains a
#   message indicating the current user does not have sufficient permission to
#   set up the Linux service. Use this parameter when creating profiles only.
#
# Valid Values:
#   false
#   true
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: serviceUserName
#
# Description:
#   Specifies the user ID that is used during the creation of the Linux
#   service so that the Linux service will run under this user ID. The Linux
#   service runs whenever the user ID is logged on. Not required.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: winserviceAccountType
#
# Description:
#   The type of the owner account of the Windows service created for the
#   profile. Valid values include specifieduser or localsystem. The
#   localsystem value runs the Windows service under the local account of the
#   user who creates the profile. The default value for this parameter is
#   localsystem. Use this parameter when creating profiles only.
#
# Valid Values:
#   localsystem
#   specifieduser
# Default Values:
#   localsystem
#
# Parameter: winserviceUserName
#
# Description:
#   Specify your user ID so that the Windows operating system can verify you
#   as an ID that is capable of creating a Windows service. Your user ID must
#   belong to the Administrator group and have the following advanced user
#   rights:

```



```

# Act as part of the operating system
# Log on as a service
# The default value for this parameter is the current user name. The value
# for this parameter must not contain spaces or characters that are not
# valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |. The user that
# you specify must have the proper permissions to create a Windows service.
# You must specify the correct password for the user name that you choose.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: winservicePassword
#
# Description:
#   Specify the password for the specified user or the local account that is
#   to own the Windows service.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: winserviceCheck
#
# Description:
#   The value can be either true or false. Specify true to create a Windows
#   service for the server process that is created within the profile. Specify
#   false to not create the Windows service. The default value for this
#   parameter is false.
#
# Valid Values:
#   false
#   true
# Default Values:
#   false
#
# Parameter: winserviceStartupType
#
# Description:
#   The following values for Windows service startup can be used:
#   manual
#   automatic
#   disabled
#   The default value for this parameter is manual.
#
# Valid Values:
#   manual
#   automatic
#   disabled
# Default Values:
#   manual
#####
#enableService=true
#serviceName=service_user_ID
#winserviceAccountType=localsystem
#winserviceUserName=winservice_user_ID
#winservicePassword=winservice_password
#winserviceCheck=false
#winserviceStartupType>manual

#####
# Parameter: bpmdbDesign
#
# Description:
#   Specifies the file that holds the database configuration design for all of

```

```

# the IBM Business Process Manager components .
# This parameter replaces the -wbidbDesign that was used in previous
# versions of WebSphere Process Server.
#
# Note: If a bpmdbDesign file parameter is specified, none of the database
# related properties should be specified.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
#bpmdbDesign=design_file
#####
# Parameter: dbCreateNew
#
# Description:
#   Indicates a new database is created or if an existing database is to be
#   reused. Valid values are true or false. This value cannot be true for an
#   Oracle, SQL Server or a DB2 z/OS database. This value can only be true for
#   a DB2 database.
#
# Valid Values:
#   false
# Default Values:
#   false
#####
dbCreateNew=false
#####
# Parameter: dbType
#
# Description:
#   The database type. Set one of the following values for the type of
#   database product you are using with IBM Business Process Manager.
#
#   Required only for one of the following:
#   A stand-alone profile when -bpmdbDesign was not specified.
#   An advanced dmgr or managed profiles when -bpmdbDesign was not specified.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   MSSQLSERVER_MICROSOFT
# Default Values:
#   MSSQLSERVER_MICROSOFT
#
# Parameter: dbJDBCclasspath
#
# Description:
#   The directory path location of JDBC driver files.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
dbType=MSSQLSERVER_MICROSOFT
dbJDBCclasspath=${WAS_INSTALL_ROOT}/jdbcdrivers/SQLServer
#####
# Parameter: dbDelayConfig
#
# Description:

```

```

# Indicates whether to postpone table creation until after the profile is
# created. Valid values are true or false. The parameter is set to false by
# default. Setting this parameter to true delays the execution of the
# scripts that create the database tables. No. Specify false if you want the
# database to be set up during profile creation.
#
# Valid Values:
# false
# true
# Default Values:
# false
#####
dbDelayConfig=false

#####
# Parameter: dbName
#
# Description:
# The name of the database. By default, the value is set to orcl for Oracle
# databases and to CMNDB for all other supported databases.
#
# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# CMNDB
#
# Parameter: dbUserId
#
# Description:
# The user ID for all database types. Specifies the user ID that has
# privileges to create and drop the databases. The WebSphere data source
# uses this ID to authenticate the database connection.
# Important: The -dbUserId parameter value must be a valid database
# authorization ID. Required if the -bpmdbDesign file is not set.
#
# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# None
#
# Parameter: dbPassword
#
# Description:
# The password required for database authentication. Required when the
# -bpmdbDesign file is not set.
#
# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# None
#####
dbName=CMNDB
dbUserId=db_userid
dbPassword=db_pswd

#####
# Parameter: procSvrDbName
#
# Description:
# Database name for Process Server database. The value specified for
# -procSvrDbName and -perfDWDbName must be different.

```

```

#
# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: dbProcSvrUserId
#
# Description:
#   The Process Server user name. Required for setting up the Process Server.
#
# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: dbProcSvrPassword
#
# Description:
#   The Process Server password. Required for setting up the Process Server.
#
# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
procSvrDbName=procSvr_Db_Name
dbProcSvrUserId=db_ProcSvr_UserId_name
dbProcSvrPassword=db_ProcSvr_Password
#####
# Parameter: perfDWDbName
#
# Description:
#   Database name for Performance Data Warehouse. The value specified for
#   -perfDWDbName and -procSvrDbName must be different.
#
# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Parameter: dbPerfDWUserId
#
# Description:
#   Performance Data Warehouse user name. Required for setting up the
#   Performance Data Warehouse.
#
# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Parameter: dbPerfDWPassword
#
# Description:
#   Performance Data Warehouse password. Required for setting up the
#   Performance Data Warehouse.
#
# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#####
perfDWDbName=perfDW_Db_Name
dbPerfDWUserId=db_PerfDW_UserId
dbPerfDWPassword=db_PerfDW_Password
#####
# Parameter: dbProcSvrMeUserId

```

```

#
# Description:
#   Process Server Messaging Engine user name. Required for setting up the
#   Process Server Messaging Engine. If you enter a user-specified a user name
#   and password during profile creation and if you specified ORACLE for
#   dbType, this parameter is required.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter:  dbProcSvrMePassword
#
# Description:
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
dbProcSvrMeUserId=db_ProcSvr_ME_UserID
dbProcSvrMePassword=db_ProcSvr_Me_Password

#####
# Parameter:  dbPerfDWMeUserId
#
# Description:
#   Performance Data Warehouse Messaging Engine user name. Required for
#   setting up the Performance Data Warehouse Messaging Engine.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter:  dbPerfDWMePassword
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
dbPerfDWMeUserId=db_PerfDW_Me_UserId
dbPerfDWMePassword=db_PerfDW_ME_Password

#####
# Parameter:  dbCommonUserId
#
# Description:
#   The user id to authenticate with the Common database. For Oracle, the
#   default user name is the first three characters of the Oracle database
#   service name. For example: If the database service name is ORCL,
#   dbCommonUserId is ORCCOMM. Required for all stand-alone IBM Business
#   Process Manager profiles and advanced deployment manager (dmgr.*.adv)
#   profiles, if the -dbType parameter is set to ORACLE or MICROSOFT_SQLSERVER
#   and no bpmdbDesign file was specified.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None

```

```

#
# Parameter: dbCommonPassword
#
# Description:
#   The password for the user id of the dbCommonUserId parameter. Required for
#   all stand-alone IBM Business Process Manager profiles and advanced
#   deployment manager (dmgr.*.adv) profiles, if the -dbType parameter is set
#   to ORACLE or MICROSOFT_SQLSERVER and no bpmdbDesign file was specified.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
dbCommonUserId=common_db_userid
dbCommonPassword=common_db_pswd
#####
# Parameter: dbAppMeUserId
#
# Description:
#   User name for application messaging engine.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: dbAppMePassword
#
# Description:
#   The password for the user id of the dbAppMeUserId parameter.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
#dbAppMeUserId=app_me_userID
#dbAppMePassword=app_me_pwd
#####
# Parameter: dbCeiMeUserId
#
# Description:
#   User name for CEI messaging engine.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: dbCeiMePassword
#
# Description:
#   The password for the user id of the dbCeiMeUserId parameter. If you enter
#   a user-specified a user name and password during profile creation and if
#   you specified ORACLE for -dbType, this parameter is required.
#

```

```

# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
#dbCeiMeUserId=cei_me_userID
#dbCeiMePassword=cei_me_pwd
#####
# Parameter: dbSysMeUserId
#
# Description:
#   The default user name for the SCA system bus messaging engine is the first
#   three characters of the Oracle database service name. For example: If the
#   database service name is ORCL, dbSysMeUserId is ORCSS00.
#
# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: dbSysMePassword
#
# Description:
#   The default password for the SCA system bus messaging engine is
#   dbPassword.
#
# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
#dbSysMeUserId=sys_me_userID
#dbSysMePassword=sys_me_pwd
#####
# Parameter: dbWinAuth
#
# Description:
#   An optional parameter that is valid in all default profile templates.
#   Specify true to indicate that you are running SQL Server using integrated
#   windows authentication.
#
# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   false
#   true
# Default Values:
#   None
#####
#dbWinAuth=true
#####
# Parameter: environmentName
#
# Description:
#   Specifies the name of the environment you are configuring. This parameter
#   has no default value, and it must not be empty.
#
# Valid Values:

```



```

#    Varies
# Default Values:
#    None
#####
environmentName=environment_name
#####
# Parameter: environmentType
#
# Description:
#    Specifies the environment type. The environment type refers to how IBM
#    Business Process Manager is used; for example, in a production, stage or
#    test environment. Load testing might be done on a test server, while a
#    stage environment type might be used as a temporary location to host
#    changes before putting those changes into production. You might specify
#    Stage as the Environment type if the server you are configuring will be
#    accessed and used to review content and new functionality. Valid values
#    are as follows:
#    Test
#    Use Test if the server you are configuring is to be used as a testing
#    environment.
#    Stage
#    Use Stage if the server is to serve as a staging platform to be used as a
#    preproduction server.
#    Production
#    Use Production if the server is to serve in a production capacity.
#    The default value is Test.
#
# Valid Values:
#    Test
#    Production
#    Stage
# Default Values:
#    Test
#####
environmentType=Test
#####
# Parameter: isDeveloperServer
#
# Description:
#    Specifies whether the server is intended for development purposes only.
#    This parameter is useful when creating profiles to test applications on a
#    non-production server prior to deploying the applications on their
#    production application servers. If -isDeveloperServer is set when
#    creating an IBM Business Process Manager profile, then a preconfigured VMM
#    file repository is installed. This file repository contains a sample
#    organization that can be used to test Business Process Choreographer
#    people resolution, ready for you to use as is.
#
# Valid Values:
#    false
#    true
# Default Values:
#    false
#####
isDeveloperServer=false
#####
# Parameter: samplesPassword
#
# Description:
#    Creates a password to be used for samples. The password is used to
#    restrict access to Web application samples installed during the
#    installation of the application server.
#
# Valid Values:

```

```

#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
samplesPassword=samplesPassword

#####
# Parameter:  webFormConfig
#
# Description:
#   Indicates if Business Space is configured to use IBM Forms Server to work
#   with Human Task Management widgets. The default value for this parameter
#   is false. Indicate true to configure Business Space to use IBM Forms
#   Server. Both the webFormConfig and webFormInstallRoot parameters are
#   required to configure IBM Forms Server. This parameter is valid for
#   stand-alone server profiles only.
#   Note: IBM Forms Server configuration using these parameters is only valid
#   for local IBM Forms Server installations.
#
# Valid Values:
#   false
#   true
# Default Values:
#   false
#
# Parameter:  webFormHTTP
#
# Description:
#   Specifies the location of the IBM Forms Server Translator. The default URL
#   for the location is http://localhost:8085/translator. No. This parameter
#   is valid only if the -webFormConfig parameter is set to true. It is valid
#   for stand-alone server profiles only.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter:  webFormInstallRoot
#
# Description:
#   Specifies the full path where IBM Forms Server is installed. For example,
#   the IBM Forms Server install root might be
#   C:/IBM/IBMFormsServer/4.0/WebFormServer. No. This parameter is valid only
#   if the -webFormConfig parameter is set to true. It is valid for
#   stand-alone server profiles only.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
#webFormConfig=false
#webFormHTTP=URL
#webFormInstallRoot=Webform_Server_install_root

#####
# Parameter:  configureBRM
#
# Description:
#   Configures the business process rules manager. The default value is false.
#
# Valid Values:
#   false
#   true
# Default Values:
#   false

```

```
#####
configureBRM=false

#####
# Parameter: configureBPC
#
# Description:
#   Determines whether the Business Process Choreographer sample configuration
#   is created.
#   The following conditions apply:
#   Only DB2 databases are supported.
#   The default is set to true for DB2.
#   It uses its own schema within the common database (CMNDB) and the schema
#   name is always BPEDB.
#   Business Process Choreographer database parameters set in the Database
#   Design Tool and generated to the database design file are ignored by
#   Business Process Choreographer at profile creation time.
#   See -bpmdbDesign for information about the database design file.
#   Note: If these conditions are too restrictive, consider setting
#   -configureBPC to false and using other documented methods to configure
#   Business Process Choreographer.
#
# Valid Values:
#   false
# Default Values:
#   false
#####
configureBPC=false
```

カスタム・インストールの後の **manageprofiles** を使用したデプロイメント・マネージャーとカスタム・プロファイルの作成:

カスタム・インストールを実行した後で、プロファイル管理ツールまたは **manageprofiles** コマンド行ユーティリティーを使用して、デプロイメント・マネージャー・プロファイルおよびカスタム (管理対象ノード) プロファイルを作成することができます。

このセクションでは、Network Deployment 構成の場合に、**manageprofiles** コマンド行ユーティリティーを使用してデプロイメント・マネージャーおよびカスタム (管理対象ノード) プロファイルを作成する方法について説明します。ここでは、インストーラーを実行済みであり、カスタム・インストールを実行済みであることを想定しています。

カスタム・インストールの実行後の、プロファイル管理ツールを使用してのデプロイメント・マネージャー・プロファイルおよびカスタム (管理対象ノード) プロファイルの作成に関する情報については、「プロファイル管理ツールを使用してのカスタム・プロファイル (管理対象ノード) の作成」を参照してください。

manageprofiles を使用した *Process Center* デプロイメント・マネージャーとカスタム・プロファイルの作成:

Network Deployment 構成用の *Process Center* デプロイメント・マネージャー・プロファイルとカスタム・プロファイルを作成するには、**manageprofiles** コマンド行ユーティリティーを使用します。

manageprofiles コマンド行ユーティリティーを実行する前に、以下の作業が完了していることを確認します。

- プロファイルを作成または拡張するための前提条件を確認済みである。
- プロファイル作成コマンドの例を確認済みである。

- 同じプロファイルで **manageprofiles** コマンド行ユーティリティを実行していないことを検査している。エラー・メッセージが表示された場合は、別のプロファイル作成操作や拡張操作が進行中かどうかを確認してください。実行されている場合は、完了するまで待ってください。

このタスクでは、**manageprofiles** コマンド行ユーティリティを使用して、Network Deployment 構成用の Process Center デプロイメント・マネージャー・プロファイルとカスタム・プロファイルを作成する方法について説明します。

manageprofiles コマンド行ユーティリティを使用してプロファイルを作成するには、以下のステップを実行します。

1. 作成するプロファイルの種類を決定します。これにより、新しいプロファイルに使用するテンプレートが決まります (**-templatePath** オプションを使用)。

各プロファイルのテンプレートは、*install_root/profileTemplates/BPM* ディレクトリー (BPM テンプレートの場合) および *install_root/profileTemplates* の下 (その他の製品の場合) にあります。

以下のテンプレートを使用できます。

- **dmgr.procctr**: Process Center デプロイメント・マネージャー・プロファイル用で、デプロイメント・マネージャーを定義します。デプロイメント・マネージャーは、1 つ以上のワークステーション上にあるサーバーの論理グループに、1 つの管理インターフェースを提供します。
- **managed.procctr**: Process Center カスタム・プロファイル用で、デプロイメント・マネージャーにフェデレートされた場合、管理対象ノードを定義します。使用するソリューションにデプロイメント環境が必要であると判断した場合、ランタイム環境には 1 つ以上の管理対象ノードが必要になります。カスタム・プロファイルには、稼働状態にするにはデプロイメント・マネージャー・セルにフェデレートする必要がある空のノードがあります。カスタム・プロファイルを統合すると、カスタム・プロファイルが管理対象ノードに変更されます。統合先のデプロイメント・マネージャーのリリース・レベルが、作成しているカスタム・プロファイルのリリース・レベル以上でない場合は、ノードを統合しないでください。



2. 『**manageprofile** の例』に記載されているプロファイル作成コマンドの例を検討して、ご使用のプロファイルのタイプにどのパラメーターが必要であるかを判断します。
3. プロファイルに提供する値を決定します。これを行うには、**manageprofiles** パラメーターのトピックで示されているデフォルト値を確認して、それらがプロファイルに必要なものであるかどうかを検討します。
4. 応答ファイルを作成します。

サンプル応答ファイルは、*install_root/BPM/samples/manageprofiles/* ディレクトリーの下にあります。作成するプロファイル (スタンドアロンまたはネットワーク、Process Center または Process Server) に応じて適切な応答ファイルを選択し、環境に合わせてファイルをカスタマイズしてください。

重要: 値の後にスペースが入っている (例えば、'**personalCertValidityPeriod=1** ' や '**winserviceCheck=false** ') ことがないようにしてください。スペースがある場合は、プロファイルの作成が失敗します。

『IBM Business Process Manager サンプルを使用した応答ファイルの作成』を参照してください。

5. **-response** パラメーターと、作成した応答ファイルの名前を使用して、コマンド行から **manageprofiles** コマンドを実行します。

-   **manageprofiles.sh -response myResponseFile**
-  **manageprofiles.bat -response myResponseFile**

コマンドにより、実行につれて状況が表示されます。コマンドが終了するまで待機します。他の応答ファイルと同様に、ファイルの構文解析時には応答ファイルに対する通常の構文検査が適用されます。応答ファイルの個々の値はコマンド行パラメーターと見なされます。

6. SMTP サーバーを手動で構成して、メール通知を使用可能にします。『SMTP サーバーの構成』を参照してください。

関連概念:

230 ページの『プロファイルの作成または拡張に関する前提条件』

プロファイルの作成または拡張を実行する前に、一連の前提条件が満たされていることを確認する必要があります。

784 ページの『**manageprofiles** の例』

このセクションの例では、**manageprofiles** コマンド行ユーティリティーを使用して、スタンドアロン・プロファイル、デプロイメント・マネージャー・プロファイル、およびカスタム (管理対象ノード) プロファイルを作成する方法を示します。

Standard Process Center 用の応答ファイル:

manageprofiles コマンド行ユーティリティーと応答ファイルを使用して、デプロイメント・マネージャー・プロファイルを作成します。

DB2 用の **Standard Process Center** デプロイメント・マネージャー・プロファイル作成の応答ファイル:

ここに用意されている応答ファイルを変更し、**manageprofiles** コマンド行ユーティリティーと一緒に使用して、DB2 データベース用のデプロイメント・マネージャー・プロファイルを作成します。

注: ご使用のオペレーティング・システムに合わせて、必要に応じて応答ファイルの情報をコメント化またはアンコメントしてください。詳細については、応答ファイルのコメントを参照してください。

```
# BEGIN COPYRIGHT
# *****
#
# Licensed Materials - Property of IBM
# 5725-C94
# (C) Copyright IBM Corporation 2011, 2012. All Rights Reserved.
# This sample program is provided AS IS and may be used, executed, copied
# and modified without royalty payment by customer (a) for its own
# instruction and study, (b) in order to develop applications designed to
# run with an IBM WebSphere product, either for customer's own internal
# use or for redistribution by customer, as part of such an application,
# in customer's own products.
#
# *****
# END COPYRIGHT

#####
# These response file has the applicable parameters for creating a
# DMgr PC Std profile that uses DB2.
#
# Depending on your environment, you may need to change the default values.
#
# To create a profile with this response file specify:
#
# was.install.root/bin/manageprofiles -response PC_Std_DMGr_DB2.response
#
# If you use the -response parameter, it must be the only parameter on
# the command-line. If you include any manageprofile parameters
# (in addition to -response) on the command-line, the response file
# is ignored. And default WebSphere Application server profile will be created .
#####
```

```

#####
# Parameter: create
#
# Description:
#   Creates the profile.
#   If you are creating a profile, this parameter is required.
#####
create

#####
# Parameter: templatePath
#
# Description:
#   Specifies the directory path to the template files in the installation
#   root directory. Within the profileTemplates directory are various
#   directories that correspond to different profile types and that vary with
#   the type of product installed. The profile directories are the paths that
#   you indicate while using the -templatePath option.
#   Use absolute paths. This parameter must exist as a directory and point to
#   a valid template directory.
#
#   When using the -templatePath parameter, specify the fully qualified file
#   path for the parameter.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
templatePath=BPM/dmgr.procctr

#####
# Parameter: profileName
#
# Description:
#   Specifies the name of the profile. Use a unique value when creating a
#   profile.
#   Each profile that shares the same set of product binaries must have a
#   unique name. The default profile name is based on the profile type and a
#   trailing number, for example:
#   profileType ProfileNumberwhere profileType is a value such as ProcSrv,
#   Dmgr, or Custom and ProfileNumber is a sequential number that creates a
#   unique profile name. The value for this parameter must not contain spaces
#   or characters that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,,
#   /, \, and |. The profile name that you choose must not be in use. On
#   Windows platforms: If the fully qualified path contains spaces, enclose
#   the value in quotation marks. The default value is based on the
#   install_root directory, the profiles subdirectory, and the name of the
#   file. For example, the default for profile creation is:
#   WS_WSPROFILE_DEFAULT_PROFILE_HOME/profileNamewhere
#   WS_WSPROFILE_DEFAULT_PROFILE_HOME is defined in the wasprofile.properties
#   file in the install_root/properties directory. The value for this
#   parameter must be a valid path for the target system and must not be
#   currently in use. You must have permissions to write to the directory.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
profileName=Dmgr01

#####
# Parameter: cellName
#
# Description:

```

```

# Specifies the cell name of the profile. Use a unique cell name for each
# profile.
# The default value for this parameter is based on a combination of the
# short host name, the constant Cell, and a trailing number, for example:
# if (DMgr)
#   shortHostNameCellCellNumber
# else
#   shortHostNameNodeNodeNumberCell
# where CellNumber is a sequential number starting at 01 and NodeNumber is
# the node number that you used to define the node name.
# The value for this parameter must not contain spaces or any characters
# that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   Varies
#
# Parameter: nodeName
#
# Description:
#   Specifies the node name for the node that is created with the new profile.
#   Use a unique value within the cell or on the workstation. Each profile
#   that shares the same set of product binaries must have a unique node name.
#   This parameter is required for profile creation only with the
#   dmgr.esbserverdefault.procsvrdefault.procctrdefault.procsvr.advdefault.
#   procctr.advdmgr.procctrmanaged.procctrmanaged.procsvr templates.
#   The default value for this parameter is based on the short host name,
#   profile type, and a trailing number, for example:
#   if (DMgr)
#     shortHostNameCellManagerNodeNumber
#   else
#     shortHostNameNodeNodeNumber
#   where NodeNumber is a sequential number starting at 01.
#   The value for this parameter must not contain spaces or any characters
#   that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   Varies
#####
cellName=cell_name
nodeName=node_name

#####
# Parameter: enableAdminSecurity
#
# Description:
#   For IBM Business Process Manager omit this parameter. Administrative
#   security is always enabled for IBM Business Process Manager profiles.
#   You must also specify the parameters -adminUserName and -adminPassword
#   along with the values for these parameters.
#
# Valid Values:
#   true
# Default Values:
#   true
#####
enableAdminSecurity=true
adminUserName=adminUser_ID
adminPassword=adminPassword

#####
# Parameter: signingCertDN
#
# Description:

```



```

# Specifies the distinguished name of the root signing certificate that you
# create when you create the profile. Specify the distinguished name in
# quotation marks. This default personal certificate is located in the
# server keystore file. If you do not specifically create or import a root
# signing certificate, one is created by default. See the
# -signingCertValidityPeriod parameter and the -keyStorePassword.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: signingCertValidityPeriod
#
# Description:
#   An optional parameter that specifies the amount of time in years that the
#   root signing certificate is valid. If you do not specify this parameter
#   with the -signingCertDN parameter, the root signing certificate is valid
#   for 20 years.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: keyStorePassword
#
# Description:
#   Specifies the password to use on all keystore files created during profile
#   creation. Keystore files are created for the default personal certificate
#   and the root signing certificate.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
#signingCertDN =distinguished_name
#signingCertValidityPeriod =validity_period
#keyStorePassword =keyStore_password
#####
# Parameter: defaultPorts
#
# Description:
#   Assigns the default or base port values to the profile.d o not use this
#   parameter when using the -startingPort or -portsFile parameter.
#   During profile creation, the manageprofiles command-line utility uses an
#   automatically generated set of recommended ports if you do not specify the
#   -startingPort parameter, the -defaultPorts parameter or the -portsFile
#   parameter. The recommended port values can be different than the default
#   port values based on the availability of the default ports.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: startingPort
#
# Description:
#   Specifies the starting port number for generating and assigning all ports
#   for the profile.
#   Port values are assigned sequentially from the -startingPort value,
#   omitting those ports that are already in use. The system recognizes and
#   resolves ports that are currently in use and determines the port
#   assignments to avoid port conflicts.

```

```

# Do not use this parameter with the -defaultPorts or -portsFile parameters.
# During profile creation, the manageprofiles command-line utility uses an
# automatically generated set of recommended ports if you do not specify the
# -startingPort parameter, the -defaultPorts parameter or the -portsFile
# parameter. The recommended port values can be different than the default
# port values based on the availability of the default ports.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter:  portsFile
#
# Description:
#   An optional parameter that specifies the path to a file that defines port
#   settings for the new profile.
#   Do not use this parameter when using the -startingPort or -defaultPorts
#   parameter.
#   During profile creation, the manageprofiles command-line utility uses an
#   automatically generated set of recommended ports if you do not specify the
#   -startingPort parameter, the -defaultPorts parameter or the -portsFile
#   parameter. The recommended port values can be different than the default
#   port values based on the availability of the default ports.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
#defaultPorts=default_ports
#startingPort=startingPort
#portsFile=file_path

#####
# Parameter:  enableService
#
# Description:
#   Enables the creation of a Linux service. Valid values include true or
#   false. The default value for this parameter is false. When the
#   manageprofiles command-line utility is run with the -enableService option
#   set to true , the Linux service is created with the profile when the
#   command is run by the root user. When a nonroot user runs the
#   manageprofiles command-line utility, the profile is created, but the Linux
#   service is not. The Linux service is not created because the nonroot user
#   does not have sufficient permission to set up the service. An
#   INSTCONPARTIALSUCCESS result is displayed at the end of the profile
#   creation and the profile creation log
#   install_root/logs/manageprofiles/profile_name_create.log contains a
#   message indicating the current user does not have sufficient permission to
#   set up the Linux service. Use this parameter when creating profiles only.
#
# Valid Values:
#   false
#   true
# Default Values:
#   None
#
# Parameter:  serviceUserName
#
# Description:
#   Specifies the user ID that is used during the creation of the Linux
#   service so that the Linux service will run under this user ID. The Linux
#   service runs whenever the user ID is logged on. Not required.
#
# Valid Values:
#   Varies

```

```

# Default Values:
#   None
#
# Parameter: winserviceAccountType
#
# Description:
#   The type of the owner account of the Windows service created for the
#   profile. Valid values include specifieduser or localsystem. The
#   localsystem value runs the Windows service under the local account of the
#   user who creates the profile. The default value for this parameter is
#   localsystem. Use this parameter when creating profiles only.
#
# Valid Values:
#   localsystem
#   specifieduser
# Default Values:
#   localsystem
#
# Parameter: winserviceUserName
#
# Description:
#   Specify your user ID so that the Windows operating system can verify you
#   as an ID that is capable of creating a Windows service. Your user ID must
#   belong to the Administrator group and have the following advanced user
#   rights:
#   Act as part of the operating system
#   Log on as a service
#   The default value for this parameter is the current user name. The value
#   for this parameter must not contain spaces or characters that are not
#   valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |. The user that
#   you specify must have the proper permissions to create a Windows service.
#   You must specify the correct password for the user name that you choose.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: winservicePassword
#
# Description:
#   Specify the password for the specified user or the local account that is
#   to own the Windows service.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: winserviceCheck
#
# Description:
#   The value can be either true or false. Specify true to create a Windows
#   service for the server process that is created within the profile. Specify
#   false to not create the Windows service. The default value for this
#   parameter is false.
#
# Valid Values:
#   false
#   true
# Default Values:
#   false
#
# Parameter: winserviceStartupType
#
# Description:
#   The following values for Windows service startup can be used:

```

```

#    manual
#    automatic
#    disabled
#    The default value for this parameter is manual.
#
# Valid Values:
#    manual
#    automatic
#    disabled
# Default Values:
#    manual
#####
#enableService=true
#serviceName=service_user_ID
#winserviceAccountType=localsystem
#winserviceUserName=winservice_user_ID
#winservicePassword=winservice_password
#winserviceCheck=false
#winserviceStartupType=manual

#####
# Parameter:  environmentType
#
# Description:
#    Specifies the environment type. The environment type refers to how IBM
#    Business Process Manager is used; for example, in a production, stage or
#    test environment. Load testing might be done on a test server, while a
#    stage environment type might be used as a temporary location to host
#    changes before putting those changes into production. You might specify
#    Stage as the Environment type if the server you are configuring will be
#    accessed and used to review content and new functionality. Valid values
#    are as follows:
#    Test
#    Use Test if the server you are configuring is to be used as a testing
#    environment.
#    Stage
#    Use Stage if the server is to serve as a staging platform to be used as a
#    preproduction server.
#    Production
#    Use Production if the server is to serve in a production capacity.
#    The default value is Test.
#
# Valid Values:
#    Test
#    Production
#    Stage
# Default Values:
#    Test
#####
environmentType=Test

#####
# Parameter:  isDeveloperServer
#
# Description:
#    Specifies whether the server is intended for development purposes only.
#    This parameter is useful when creating profiles to test applications on a
#    non-production server prior to deploying the applications on their
#    production application servers. If -isDeveloperServer is set when
#    creating an IBM Business Process Manager profile, then a preconfigured VMM
#    file repository is installed. This file repository contains a sample
#    organization that can be used to test Business Process Choreographer
#    people resolution, ready for you to use as is.
#
# Valid Values:
#    false
#    true

```

```
# Default Values:
#   false
#####
#isDeveloperServer=false
```

DB2 for z/OS 用の Standard Process Center デプロイメント・マネージャー・プロファイル作成の応答ファイル:

ここに用意されている応答ファイルを変更し、**manageprofiles** コマンド行ユーティリティと一緒に使用して、DB2 for z/OS データベース用のデプロイメント・マネージャー・プロファイルを作成します。

注: ご使用のオペレーティング・システムに合わせて、必要に応じて応答ファイルの情報をコメント化またはアンコメントしてください。詳細については、応答ファイルのコメントを参照してください。

```
# BEGIN COPYRIGHT
# *****
#
# Licensed Materials - Property of IBM
# 5725-C94
# (C) Copyright IBM Corporation 2011, 2012. All Rights Reserved.
# This sample program is provided AS IS and may be used, executed, copied
# and modified without royalty payment by customer (a) for its own
# instruction and study, (b) in order to develop applications designed to
# run with an IBM WebSphere product, either for customer's own internal
# use or for redistribution by customer, as part of such an application,
# in customer's own products.
#
# *****
# END COPYRIGHT

#####
# These response file has the applicable parameters for creating a
# DMgr PC Std profile that uses DB2zOS.
#
# Depending on your environment, you may need to change the default values.
#
# To create a profile with this response file specify:
#
# was.install.root/bin/manageprofiles -response PC_Std_DMGr_DB2zOS.response
#
# If you use the -response parameter, it must be the only parameter on
# the command-line. If you include any manageprofile parameters
# (in addition to -response) on the command-line, the response file
# is ignored. And default WebSphere Application server profile will be created .
#####

#####
# Parameter: create
#
# Description:
#   Creates the profile.
#   If you are creating a profile, this parameter is required.
#####
create

#####
# Parameter: templatePath
#
# Description:
#   Specifies the directory path to the template files in the installation
#   root directory. Within the profileTemplates directory are various
#   directories that correspond to different profile types and that vary with
#   the type of product installed. The profile directories are the paths that
#   you indicate while using the -templatePath option.
#   Use absolute paths. This parameter must exist as a directory and point to
```

```

# a valid template directory.
#
# When using the -templatePath parameter, specify the fully qualified file
# path for the parameter.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
templatePath=BPM/dmgr.procctr
#####
# Parameter:  profileName
#
# Description:
#   Specifies the name of the profile. Use a unique value when creating a
#   profile.
#   Each profile that shares the same set of product binaries must have a
#   unique name. The default profile name is based on the profile type and a
#   trailing number, for example:
#   profileType ProfileNumberwhere profileType is a value such as ProcSrv,
#   Dmgr, or Custom and ProfileNumber is a sequential number that creates a
#   unique profile name. The value for this parameter must not contain spaces
#   or characters that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,,
#   /, \, and |. The profile name that you choose must not be in use. On
#   Windows platforms: If the fully qualified path contains spaces, enclose
#   the value in quotation marks. The default value is based on the
#   install_root directory, the profiles subdirectory, and the name of the
#   file. For example, the default for profile creation is:
#   WS_WSPROFILE_DEFAULT_PROFILE_HOME/profileNamewhere
#   WS_WSPROFILE_DEFAULT_PROFILE_HOME is defined in the wasprofile.properties
#   file in the install_root/properties directory. The value for this
#   parameter must be a valid path for the target system and must not be
#   currently in use. You must have permissions to write to the directory.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
profileName=Dmgr01
#####
# Parameter:  cellName
#
# Description:
#   Specifies the cell name of the profile. Use a unique cell name for each
#   profile.
#   The default value for this parameter is based on a combination of the
#   short host name, the constant Cell, and a trailing number, for example:
#   if (DMgr)
#     shortHostNameCellCellNumber
#   else
#     shortHostNameNodeNodeNumberCell
#   where CellNumber is a sequential number starting at 01 and NodeNumber is
#   the node number that you used to define the node name.
#   The value for this parameter must not contain spaces or any characters
#   that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   Varies
#
# Parameter:  nodeName
#

```

```

# Description:
#   Specifies the node name for the node that is created with the new profile.
#   Use a unique value within the cell or on the workstation. Each profile
#   that shares the same set of product binaries must have a unique node name.
#   This parameter is required for profile creation only with the
#   dmgr.esbserverdefault.procsvrdefault.procctrdefault.procsvr.advdefault.
#   procctr.advdmgr.procctrmanaged.procctrmanaged.procsvr templates.
#   The default value for this parameter is based on the short host name,
#   profile type, and a trailing number, for example:
#   if (DMgr)
#       shortHostNameCellManagerNodeNumber
#   else
#       shortHostNameNodeNodeNumber
#   where NodeNumber is a sequential number starting at 01.
#   The value for this parameter must not contain spaces or any characters
#   that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   Varies
#####
cellName=cell_name
nodeName=node_name

#####
# Parameter:  enableAdminSecurity
#
# Description:
#   For IBM Business Process Manager omit this parameter. Administrative
#   security is always enabled for IBM Business Process Manager profiles.
#   You must also specify the parameters -adminUserName and -adminPassword
#   along with the values for these parameters.
#
# Valid Values:
#   true
# Default Values:
#   true
#####
enableAdminSecurity=true
adminUserName=adminUser_ID
adminPassword=adminPassword

#####
# Parameter:  signingCertDN
#
# Description:
#   Specifies the distinguished name of the root signing certificate that you
#   create when you create the profile. Specify the distinguished name in
#   quotation marks. This default personal certificate is located in the
#   server keystore file. If you do not specifically create or import a root
#   signing certificate, one is created by default. See the
#   -signingCertValidityPeriod parameter and the -keyStorePassword.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter:  signingCertValidityPeriod
#
# Description:
#   An optional parameter that specifies the amount of time in years that the
#   root signing certificate is valid. If you do not specify this parameter
#   with the -signingCertDN parameter, the root signing certificate is valid
#   for 20 years.
#

```



```

# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter:  keyStorePassword
#
# Description:
#   Specifies the password to use on all keystore files created during profile
#   creation. Keystore files are created for the default personal certificate
#   and the root signing certificate.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
#signingCertDN =distinguished_name
#signingCertValidityPeriod =validity_period
#keyStorePassword =keyStore_password
#####
# Parameter:  defaultPorts
#
# Description:
#   Assigns the default or base port values to the profile. Do not use this
#   parameter when using the -startingPort or -portsFile parameter.
#   During profile creation, the manageprofiles command-line utility uses an
#   automatically generated set of recommended ports if you do not specify the
#   -startingPort parameter, the -defaultPorts parameter or the -portsFile
#   parameter. The recommended port values can be different than the default
#   port values based on the availability of the default ports.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter:  startingPort
#
# Description:
#   Specifies the starting port number for generating and assigning all ports
#   for the profile.
#   Port values are assigned sequentially from the -startingPort value,
#   omitting those ports that are already in use. The system recognizes and
#   resolves ports that are currently in use and determines the port
#   assignments to avoid port conflicts.
#   Do not use this parameter with the -defaultPorts or -portsFile parameters.
#   During profile creation, the manageprofiles command-line utility uses an
#   automatically generated set of recommended ports if you do not specify the
#   -startingPort parameter, the -defaultPorts parameter or the -portsFile
#   parameter. The recommended port values can be different than the default
#   port values based on the availability of the default ports.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter:  portsFile
#
# Description:
#   An optional parameter that specifies the path to a file that defines port
#   settings for the new profile.
#   Do not use this parameter when using the -startingPort or -defaultPorts
#   parameter.
#   During profile creation, the manageprofiles command-line utility uses an

```

```

#      automatically generated set of recommended ports if you do not specify the
#      -startingPort parameter, the -defaultPorts parameter or the -portsFile
#      parameter. The recommended port values can be different than the default
#      port values based on the availability of the default ports.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
#defaultPorts=default_ports
#startingPort=startingPort
#portsFile=file_path
#####
# Parameter:  enableService
#
# Description:
#   Enables the creation of a Linux service. Valid values include true or
#   false. The default value for this parameter is false. When the
#   manageprofiles command-line utility is run with the -enableService option
#   set to true , the Linux service is created with the profile when the
#   command is run by the root user. When a nonroot user runs the
#   manageprofiles command-line utility, the profile is created, but the Linux
#   service is not. The Linux service is not created because the nonroot user
#   does not have sufficient permission to set up the service. An
#   INSTCONPARTIALSUCCESS result is displayed at the end of the profile
#   creation and the profile creation log
#   install_root/logs/manageprofiles/profile_name_create.log contains a
#   message indicating the current user does not have sufficient permission to
#   set up the Linux service. Use this parameter when creating profiles only.
#
# Valid Values:
#   false
#   true
# Default Values:
#   None
#
# Parameter:  serviceUserName
#
# Description:
#   Specifies the user ID that is used during the creation of the Linux
#   service so that the Linux service will run under this user ID. The Linux
#   service runs whenever the user ID is logged on. Not required.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter:  winserviceAccountType
#
# Description:
#   The type of the owner account of the Windows service created for the
#   profile. Valid values include specifieduser or localsystem. The
#   localsystem value runs the Windows service under the local account of the
#   user who creates the profile. The default value for this parameter is
#   localsystem. Use this parameter when creating profiles only.
#
# Valid Values:
#   localsystem
#   specifieduser
# Default Values:
#   localsystem
#
# Parameter:  winserviceUserName
#

```

```

# Description:
#   Specify your user ID so that the Windows operating system can verify you
#   as an ID that is capable of creating a Windows service. Your user ID must
#   belong to the Administrator group and have the following advanced user
#   rights:
#   Act as part of the operating system
#   Log on as a service
#   The default value for this parameter is the current user name. The value
#   for this parameter must not contain spaces or characters that are not
#   valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |. The user that
#   you specify must have the proper permissions to create a Windows service.
#   You must specify the correct password for the user name that you choose.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: winservicePassword
#
# Description:
#   Specify the password for the specified user or the local account that is
#   to own the Windows service.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: winserviceCheck
#
# Description:
#   The value can be either true or false. Specify true to create a Windows
#   service for the server process that is created within the profile. Specify
#   false to not create the Windows service. The default value for this
#   parameter is false.
#
# Valid Values:
#   false
#   true
# Default Values:
#   false
#
# Parameter: winserviceStartupType
#
# Description:
#   The following values for Windows service startup can be used:
#   manual
#   automatic
#   disabled
#   The default value for this parameter is manual.
#
# Valid Values:
#   manual
#   automatic
#   disabled
# Default Values:
#   manual
#####
#enableService=true
#serviceName=service_user_ID
#winserviceAccountType=localsystem
#winserviceUserName=winservice_user_ID
#winservicePassword=winservice_password
#winserviceCheck=false
#winserviceStartupType>manual

```

```

#####
# Parameter: environmentType
#
# Description:
# Specifies the environment type. The environment type refers to how IBM
# Business Process Manager is used; for example, in a production, stage or
# test environment. Load testing might be done on a test server, while a
# stage environment type might be used as a temporary location to host
# changes before putting those changes into production. You might specify
# Stage as the Environment type if the server you are configuring will be
# accessed and used to review content and new functionality. Valid values
# are as follows:
# Test
# Use Test if the server you are configuring is to be used as a testing
# environment.
# Stage
# Use Stage if the server is to serve as a staging platform to be used as a
# preproduction server.
# Production
# Use Production if the server is to serve in a production capacity.
# The default value is Test.
#
# Valid Values:
# Test
# Production
# Stage
# Default Values:
# Test
#####
environmentType=Test

#####
# Parameter: isDeveloperServer
#
# Description:
# Specifies whether the server is intended for development purposes only.
# This parameter is useful when creating profiles to test applications on a
# non-production server prior to deploying the applications on their
# production application servers. If -isDeveloperServer is set when
# creating an IBM Business Process Manager profile, then a preconfigured VMM
# file repository is installed. This file repository contains a sample
# organization that can be used to test Business Process Choreographer
# people resolution, ready for you to use as is.
#
# Valid Values:
# false
# true
# Default Values:
# false
#####
#isDeveloperServer=false

```

Oracle 用の Standard Process Center デプロイメント・マネージャー・プロファイル作成の応答ファイル:

ここに用意されている応答ファイルを変更し、**manageprofiles** コマンド行ユーティリティと一緒に使用して、Oracle データベース用のデプロイメント・マネージャー・プロファイルを作成します。

注: ご使用のオペレーティング・システムに合わせて、必要に応じて応答ファイルの情報をコメント化またはアンコメントしてください。詳細については、応答ファイルのコメントを参照してください。

```

# BEGIN COPYRIGHT
# *****
#
# Licensed Materials - Property of IBM
# 5725-C94
# (C) Copyright IBM Corporation 2011, 2012. All Rights Reserved.

```

```

# This sample program is provided AS IS and may be used, executed, copied
# and modified without royalty payment by customer (a) for its own
# instruction and study, (b) in order to develop applications designed to
# run with an IBM WebSphere product, either for customer's own internal
# use or for redistribution by customer, as part of such an application,
# in customer's own products.
#
# *****
# END COPYRIGHT

#####
# These response file has the applicable parameters for creating a
# DMgr PC Std profile that uses Oracle.
#
# Depending on your environment, you may need to change the default values.
#
# To create a profile with this response file specify:
#
# was.install.root/bin/manageprofiles -response PC_Std_DMGr_Oracle.response
#
# If you use the -response parameter, it must be the only parameter on
# the command-line. If you include any manageprofile parameters
# (in addition to -response) on the command-line, the response file
# is ignored. And default WebSphere Application server profile will be created .
#####

#####
# Parameter: create
#
# Description:
#   Creates the profile.
#   If you are creating a profile, this parameter is required.
#####
create

#####
# Parameter: templatePath
#
# Description:
#   Specifies the directory path to the template files in the installation
#   root directory. Within the profileTemplates directory are various
#   directories that correspond to different profile types and that vary with
#   the type of product installed. The profile directories are the paths that
#   you indicate while using the -templatePath option.
#   Use absolute paths. This parameter must exist as a directory and point to
#   a valid template directory.
#
#   When using the -templatePath parameter, specify the fully qualified file
#   path for the parameter.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
templatePath=BPM/dmgr.procctr

#####
# Parameter: profileName
#
# Description:
#   Specifies the name of the profile. Use a unique value when creating a
#   profile.
#   Each profile that shares the same set of product binaries must have a
#   unique name. The default profile name is based on the profile type and a
#   trailing number, for example:
#   profileType ProfileNumberwhere profileType is a value such as ProcSrv,

```

```

# Dmgr, or Custom and ProfileNumber is a sequential number that creates a
# unique profile name. The value for this parameter must not contain spaces
# or characters that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,,
# /, \, and |. The profile name that you choose must not be in use. On
# Windows platforms: If the fully qualified path contains spaces, enclose
# the value in quotation marks. The default value is based on the
# install_root directory, the profiles subdirectory, and the name of the
# file. For example, the default for profile creation is:
# WS_WSPROFILE_DEFAULT_PROFILE_HOME/profileNameewhere
# WS_WSPROFILE_DEFAULT_PROFILE_HOME is defined in the wasprofile.properties
# file in the install_root/properties directory. The value for this
# parameter must be a valid path for the target system and must not be
# currently in use. You must have permissions to write to the directory.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
profileName=Dmgr01

#####
# Parameter: cellName
#
# Description:
#   Specifies the cell name of the profile. Use a unique cell name for each
#   profile.
#   The default value for this parameter is based on a combination of the
#   short host name, the constant Cell, and a trailing number, for example:
#   if (DMgr)
#     shortHostNameCellCellNumber
#   else
#     shortHostNameNodeNodeNumberCell
#   where CellNumber is a sequential number starting at 01 and NodeNumber is
#   the node number that you used to define the node name.
#   The value for this parameter must not contain spaces or any characters
#   that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   Varies
#
# Parameter: nodeName
#
# Description:
#   Specifies the node name for the node that is created with the new profile.
#   Use a unique value within the cell or on the workstation. Each profile
#   that shares the same set of product binaries must have a unique node name.
#   This parameter is required for profile creation only with the
#   dmgr.esbserverdefault.procsvrdefault.procctrdefault.procsvr.advdefault.
#   procctr.advdmgr.procctrmanaged.procctrmanaged.procsvr templates.
#   The default value for this parameter is based on the short host name,
#   profile type, and a trailing number, for example:
#   if (DMgr)
#     shortHostNameCellManagerNodeNumber
#   else
#     shortHostNameNodeNodeNumber
#   where NodeNumber is a sequential number starting at 01.
#   The value for this parameter must not contain spaces or any characters
#   that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   Varies
#####

```

cellName=cell_name
nodeName=node_name

```
#####  
# Parameter: enableAdminSecurity  
#  
# Description:  
#   For IBM Business Process Manager omit this parameter. Administrative  
#   security is always enabled for IBM Business Process Manager profiles.  
#   You must also specify the parameters -adminUserName and -adminPassword  
#   along with the values for these parameters.  
#  
# Valid Values:  
#   true  
# Default Values:  
#   true  
#####
```

enableAdminSecurity=true
adminUserName=adminUser_ID
adminPassword=adminPassword

```
#####  
# Parameter: signingCertDN  
#  
# Description:  
#   Specifies the distinguished name of the root signing certificate that you  
#   create when you create the profile. Specify the distinguished name in  
#   quotation marks. This default personal certificate is located in the  
#   server keystore file. If you do not specifically create or import a root  
#   signing certificate, one is created by default. See the  
#   -signingCertValidityPeriod parameter and the -keyStorePassword.  
#  
# Valid Values:  
#   Varies  
# Default Values:  
#   None  
#
```

```
# Parameter: signingCertValidityPeriod  
#  
# Description:  
#   An optional parameter that specifies the amount of time in years that the  
#   root signing certificate is valid. If you do not specify this parameter  
#   with the -signingCertDN parameter, the root signing certificate is valid  
#   for 20 years.  
#  
# Valid Values:  
#   Varies  
# Default Values:  
#   None  
#
```

```
# Parameter: keyStorePassword  
#  
# Description:  
#   Specifies the password to use on all keystore files created during profile  
#   creation. Keystore files are created for the default personal certificate  
#   and the root signing certificate.  
#  
# Valid Values:  
#   Varies  
# Default Values:  
#   None  
#####
```

#signingCertDN =distinguished_name
#signingCertValidityPeriod =validity_period
#keyStorePassword =keyStore_password

```
#####
```



```

# Parameter: defaultPorts
#
# Description:
#   Assigns the default or base port values to the profile. Do not use this
#   parameter when using the -startingPort or -portsFile parameter.
#   During profile creation, the manageprofiles command-line utility uses an
#   automatically generated set of recommended ports if you do not specify the
#   -startingPort parameter, the -defaultPorts parameter or the -portsFile
#   parameter. The recommended port values can be different than the default
#   port values based on the availability of the default ports.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: startingPort
#
# Description:
#   Specifies the starting port number for generating and assigning all ports
#   for the profile.
#   Port values are assigned sequentially from the -startingPort value,
#   omitting those ports that are already in use. The system recognizes and
#   resolves ports that are currently in use and determines the port
#   assignments to avoid port conflicts.
#   Do not use this parameter with the -defaultPorts or -portsFile parameters.
#   During profile creation, the manageprofiles command-line utility uses an
#   automatically generated set of recommended ports if you do not specify the
#   -startingPort parameter, the -defaultPorts parameter or the -portsFile
#   parameter. The recommended port values can be different than the default
#   port values based on the availability of the default ports.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: portsFile
#
# Description:
#   An optional parameter that specifies the path to a file that defines port
#   settings for the new profile.
#   Do not use this parameter when using the -startingPort or -defaultPorts
#   parameter.
#   During profile creation, the manageprofiles command-line utility uses an
#   automatically generated set of recommended ports if you do not specify the
#   -startingPort parameter, the -defaultPorts parameter or the -portsFile
#   parameter. The recommended port values can be different than the default
#   port values based on the availability of the default ports.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
#defaultPorts=default_ports
#startingPort=startingPort
#portsFile=file_path
#####
# Parameter: enableService
#
# Description:
#   Enables the creation of a Linux service. Valid values include true or
#   false. The default value for this parameter is false. When the
#   manageprofiles command-line utility is run with the -enableService option
#   set to true , the Linux service is created with the profile when the

```

```

# command is run by the root user. When a nonroot user runs the
# manageprofiles command-line utility, the profile is created, but the Linux
# service is not. The Linux service is not created because the nonroot user
# does not have sufficient permission to set up the service. An
# INSTCONPARTIALSUCCESS result is displayed at the end of the profile
# creation and the profile creation log
# install_root/logs/manageprofiles/profile_name_create.log contains a
# message indicating the current user does not have sufficient permission to
# set up the Linux service. Use this parameter when creating profiles only.
#
# Valid Values:
#   false
#   true
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: serviceUserName
#
# Description:
#   Specifies the user ID that is used during the creation of the Linux
#   service so that the Linux service will run under this user ID. The Linux
#   service runs whenever the user ID is logged on. Not required.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: winserviceAccountType
#
# Description:
#   The type of the owner account of the Windows service created for the
#   profile. Valid values include specifieduser or localsystem. The
#   localsystem value runs the Windows service under the local account of the
#   user who creates the profile. The default value for this parameter is
#   localsystem. Use this parameter when creating profiles only.
#
# Valid Values:
#   localsystem
#   specifieduser
# Default Values:
#   localsystem
#
# Parameter: winserviceUserName
#
# Description:
#   Specify your user ID so that the Windows operating system can verify you
#   as an ID that is capable of creating a Windows service. Your user ID must
#   belong to the Administrator group and have the following advanced user
#   rights:
#   Act as part of the operating system
#   Log on as a service
#   The default value for this parameter is the current user name. The value
#   for this parameter must not contain spaces or characters that are not
#   valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |. The user that
#   you specify must have the proper permissions to create a Windows service.
#   You must specify the correct password for the user name that you choose.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: winservicePassword
#
# Description:
#   Specify the password for the specified user or the local account that is

```

```

#     to own the Windows service.
#
# Valid Values:
#     Varies
# Default Values:
#     None
#
# Parameter:  winserviceCheck
#
# Description:
#     The value can be either true or false. Specify true to create a Windows
#     service for the server process that is created within the profile. Specify
#     false to not create the Windows service. The default value for this
#     parameter is false.
#
# Valid Values:
#     false
#     true
# Default Values:
#     false
#
# Parameter:  winserviceStartupType
#
# Description:
#     The following values for Windows service startup can be used:
#     manual
#     automatic
#     disabled
#     The default value for this parameter is manual.
#
# Valid Values:
#     manual
#     automatic
#     disabled
# Default Values:
#     manual
#####
#enableService=true
#serviceName=service_user_ID
#winserviceAccountType=localsystem
#winserviceUserName=winservice_user_ID
#winservicePassword=winservice_password
#winserviceCheck=false
#winserviceStartupType>manual

#####
# Parameter:  dbDriverType
#
# Description:
#     The database driver type. For an Oracle database, specify ORACLE. For
#     databases other than Oracle, the value is automatically set based on the
#     server operating system. Server installations on all operating systems use
#     type 4.
#
#     Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#     Varies
# Default Values:
#     None
#####
dbDriverType=ORACLE_THIN

#####
# Parameter:  environmentType
#
# Description:

```

```

# Specifies the environment type. The environment type refers to how IBM
# Business Process Manager is used; for example, in a production, stage or
# test environment. Load testing might be done on a test server, while a
# stage environment type might be used as a temporary location to host
# changes before putting those changes into production. You might specify
# Stage as the Environment type if the server you are configuring will be
# accessed and used to review content and new functionality. Valid values
# are as follows:
# Test
# Use Test if the server you are configuring is to be used as a testing
# environment.
# Stage
# Use Stage if the server is to serve as a staging platform to be used as a
# preproduction server.
# Production
# Use Production if the server is to serve in a production capacity.
# The default value is Test.
#
# Valid Values:
# Test
# Production
# Stage
# Default Values:
# Test
#####
environmentType=Test

#####
# Parameter: isDeveloperServer
#
# Description:
# Specifies whether the server is intended for development purposes only.
# This parameter is useful when creating profiles to test applications on a
# non-production server prior to deploying the applications on their
# production application servers. If -isDeveloperServer is set when
# creating an IBM Business Process Manager profile, then a preconfigured VMM
# file repository is installed. This file repository contains a sample
# organization that can be used to test Business Process Choreographer
# people resolution, ready for you to use as is.
#
# Valid Values:
# false
# true
# Default Values:
# false
#####
#isDeveloperServer=false

```

SQL 用の Standard Process Center デプロイメント・マネージャー・プロファイル作成の応答ファイル:

ここに用意されている応答ファイルを変更し、**manageprofiles** コマンド行ユーティリティーと一緒に使用して、SQL データベース用のデプロイメント・マネージャー・プロファイルを作成します。

注: ご使用のオペレーティング・システムに合わせて、必要に応じて応答ファイルの情報をコメント化またはアンコメントしてください。詳細については、応答ファイルのコメントを参照してください。

```

# BEGIN COPYRIGHT
# *****
#
# Licensed Materials - Property of IBM
# 5725-C94
# (C) Copyright IBM Corporation 2011, 2012. All Rights Reserved.
# This sample program is provided AS IS and may be used, executed, copied
# and modified without royalty payment by customer (a) for its own
# instruction and study, (b) in order to develop applications designed to
# run with an IBM WebSphere product, either for customer's own internal

```

```

# use or for redistribution by customer, as part of such an application,
# in customer's own products.
#
# *****
# END COPYRIGHT

#####
# These response file has the applicable parameters for creating a
# DMgr PC Std profile that uses SQLServer.
#
# Depending on your environment, you may need to change the default values.
#
# To create a profile with this response file specify:
#
# was.install.root/bin/manageprofiles -response PC_Std_DMgr_SQLServer.response
#
# If you use the -response parameter, it must be the only parameter on
# the command-line. If you include any manageprofile parameters
# (in addition to -response) on the command-line, the response file
# is ignored. And default WebSphere Application server profile will be created .
#####

#####
# Parameter: create
#
# Description:
#   Creates the profile.
#   If you are creating a profile, this parameter is required.
#####
create

#####
# Parameter: templatePath
#
# Description:
#   Specifies the directory path to the template files in the installation
#   root directory. Within the profileTemplates directory are various
#   directories that correspond to different profile types and that vary with
#   the type of product installed. The profile directories are the paths that
#   you indicate while using the -templatePath option.
#   Use absolute paths. This parameter must exist as a directory and point to
#   a valid template directory.
#
#   When using the -templatePath parameter, specify the fully qualified file
#   path for the parameter.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
templatePath=BPM/dmgr.procctr

#####
# Parameter: profileName
#
# Description:
#   Specifies the name of the profile. Use a unique value when creating a
#   profile.
#   Each profile that shares the same set of product binaries must have a
#   unique name. The default profile name is based on the profile type and a
#   trailing number, for example:
#   profileType ProfileNumberwhere profileType is a value such as ProcSrv,
#   Dmgr, or Custom and ProfileNumber is a sequential number that creates a
#   unique profile name. The value for this parameter must not contain spaces
#   or characters that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,,
#   /, \, and |. The profile name that you choose must not be in use. On

```

```

# Windows platforms: If the fully qualified path contains spaces, enclose
# the value in quotation marks. The default value is based on the
# install_root directory, the profiles subdirectory, and the name of the
# file. For example, the default for profile creation is:
# WS_WSPROFILE_DEFAULT_PROFILE_HOME/profileNamewhere
# WS_WSPROFILE_DEFAULT_PROFILE_HOME is defined in the wasprofile.properties
# file in the install_root/properties directory. The value for this
# parameter must be a valid path for the target system and must not be
# currently in use. You must have permissions to write to the directory.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
profileName=Dmgr01

#####
# Parameter:  cellName
#
# Description:
#   Specifies the cell name of the profile. Use a unique cell name for each
#   profile.
#   The default value for this parameter is based on a combination of the
#   short host name, the constant Cell, and a trailing number, for example:
#   if (DMgr)
#       shortHostNameCellCellNumber
#   else
#       shortHostNameNodeNodeNumberCell
#   where CellNumber is a sequential number starting at 01 and NodeNumber is
#   the node number that you used to define the node name.
#   The value for this parameter must not contain spaces or any characters
#   that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   Varies
#
# Parameter:  nodeName
#
# Description:
#   Specifies the node name for the node that is created with the new profile.
#   Use a unique value within the cell or on the workstation. Each profile
#   that shares the same set of product binaries must have a unique node name.
#   This parameter is required for profile creation only with the
#   dmgr.esbserverdefault.procsvrdefault.procctrdefault.procsvr.advdefault.
#   procctr.advdmgr.procctrmanaged.procctrmanaged.procsvr templates.
#   The default value for this parameter is based on the short host name,
#   profile type, and a trailing number, for example:
#   if (DMgr)
#       shortHostNameCellManagerNodeNumber
#   else
#       shortHostNameNodeNodeNumber
#   where NodeNumber is a sequential number starting at 01.
#   The value for this parameter must not contain spaces or any characters
#   that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   Varies
#####
cellName=cell_name
nodeName=node_name

#####

```

```

# Parameter: enableAdminSecurity
#
# Description:
#   For IBM Business Process Manager omit this parameter. Administrative
#   security is always enabled for IBM Business Process Manager profiles.
#   You must also specify the parameters -adminUserName and -adminPassword
#   along with the values for these parameters.
#
# Valid Values:
#   true
# Default Values:
#   true
#####
enableAdminSecurity=true
adminUserName=adminUser_ID
adminPassword=adminPassword
#####
# Parameter: signingCertDN
#
# Description:
#   Specifies the distinguished name of the root signing certificate that you
#   create when you create the profile. Specify the distinguished name in
#   quotation marks. This default personal certificate is located in the
#   server keystore file. If you do not specifically create or import a root
#   signing certificate, one is created by default. See the
#   -signingCertValidityPeriod parameter and the -keyStorePassword.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: signingCertValidityPeriod
#
# Description:
#   An optional parameter that specifies the amount of time in years that the
#   root signing certificate is valid. If you do not specify this parameter
#   with the -signingCertDN parameter, the root signing certificate is valid
#   for 20 years.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: keyStorePassword
#
# Description:
#   Specifies the password to use on all keystore files created during profile
#   creation. Keystore files are created for the default personal certificate
#   and the root signing certificate.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
#signingCertDN =distinguished_name
#signingCertValidityPeriod =validity_period
#keyStorePassword =keyStore_password
#####
# Parameter: defaultPorts
#
# Description:
#   Assigns the default or base port values to the profile.d o not use this

```



```

# parameter when using the -startingPort or -portsFile parameter.
# During profile creation, the manageprofiles command-line utility uses an
# automatically generated set of recommended ports if you do not specify the
# -startingPort parameter, the -defaultPorts parameter or the -portsFile
# parameter. The recommended port values can be different than the default
# port values based on the availability of the default ports.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: startingPort
#
# Description:
#   Specifies the starting port number for generating and assigning all ports
#   for the profile.
#   Port values are assigned sequentially from the -startingPort value,
#   omitting those ports that are already in use. The system recognizes and
#   resolves ports that are currently in use and determines the port
#   assignments to avoid port conflicts.
#   Do not use this parameter with the -defaultPorts or -portsFile parameters.
#   During profile creation, the manageprofiles command-line utility uses an
#   automatically generated set of recommended ports if you do not specify the
#   -startingPort parameter, the -defaultPorts parameter or the -portsFile
#   parameter. The recommended port values can be different than the default
#   port values based on the availability of the default ports.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: portsFile
#
# Description:
#   An optional parameter that specifies the path to a file that defines port
#   settings for the new profile.
#   Do not use this parameter when using the -startingPort or -defaultPorts
#   parameter.
#   During profile creation, the manageprofiles command-line utility uses an
#   automatically generated set of recommended ports if you do not specify the
#   -startingPort parameter, the -defaultPorts parameter or the -portsFile
#   parameter. The recommended port values can be different than the default
#   port values based on the availability of the default ports.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
#defaultPorts=default_ports
#startingPort=startingPort
#portsFile=file_path
#####
# Parameter: enableService
#
# Description:
#   Enables the creation of a Linux service. Valid values include true or
#   false. The default value for this parameter is false. When the
#   manageprofiles command-line utility is run with the -enableService option
#   set to true , the Linux service is created with the profile when the
#   command is run by the root user. When a nonroot user runs the
#   manageprofiles command-line utility, the profile is created, but the Linux
#   service is not. The Linux service is not created because the nonroot user
#   does not have sufficient permission to set up the service. An

```

```

# INSTCONPARTIALSUCCESS result is displayed at the end of the profile
# creation and the profile creation log
# install_root/logs/manageprofiles/profile_name_create.log contains a
# message indicating the current user does not have sufficient permission to
# set up the Linux service. Use this parameter when creating profiles only.
#
# Valid Values:
#   false
#   true
# Default Values:
#   None
#
# Parameter:  serviceUserName
#
# Description:
#   Specifies the user ID that is used during the creation of the Linux
#   service so that the Linux service will run under this user ID. The Linux
#   service runs whenever the user ID is logged on. Not required.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter:  winserviceAccountType
#
# Description:
#   The type of the owner account of the Windows service created for the
#   profile. Valid values include specifieduser or localsystem. The
#   localsystem value runs the Windows service under the local account of the
#   user who creates the profile. The default value for this parameter is
#   localsystem. Use this parameter when creating profiles only.
#
# Valid Values:
#   localsystem
#   specifieduser
# Default Values:
#   localsystem
#
# Parameter:  winserviceUserName
#
# Description:
#   Specify your user ID so that the Windows operating system can verify you
#   as an ID that is capable of creating a Windows service. Your user ID must
#   belong to the Administrator group and have the following advanced user
#   rights:
#   Act as part of the operating system
#   Log on as a service
#   The default value for this parameter is the current user name. The value
#   for this parameter must not contain spaces or characters that are not
#   valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |. The user that
#   you specify must have the proper permissions to create a Windows service.
#   You must specify the correct password for the user name that you choose.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter:  winservicePassword
#
# Description:
#   Specify the password for the specified user or the local account that is
#   to own the Windows service.
#
# Valid Values:
#   Varies

```

```

# Default Values:
#   None
#
# Parameter: winserviceCheck
#
# Description:
#   The value can be either true or false. Specify true to create a Windows
#   service for the server process that is created within the profile. Specify
#   false to not create the Windows service. The default value for this
#   parameter is false.
#
# Valid Values:
#   false
#   true
# Default Values:
#   false
#
# Parameter: winserviceStartupType
#
# Description:
#   The following values for Windows service startup can be used:
#   manual
#   automatic
#   disabled
#   The default value for this parameter is manual.
#
# Valid Values:
#   manual
#   automatic
#   disabled
# Default Values:
#   manual
#####
#enableService=true
#serviceName=service_user_ID
#winserviceAccountType=localsystem
#winserviceUserName=winservice_user_ID
#winservicePassword=winservice_password
#winserviceCheck=false
#winserviceStartupType>manual
#####
# Parameter: dbWinAuth
#
# Description:
#   An optional parameter that is valid in all default profile templates.
#   Specify true to indicate that you are running SQL Server using integrated
#   windows authentication.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   false
#   true
# Default Values:
#   None
#####
#dbWinAuth=true
#####
# Parameter: environmentType
#
# Description:
#   Specifies the environment type. The environment type refers to how IBM
#   Business Process Manager is used; for example, in a production, stage or
#   test environment. Load testing might be done on a test server, while a
#   stage environment type might be used as a temporary location to host

```

```

# changes before putting those changes into production. You might specify
# Stage as the Environment type if the server you are configuring will be
# accessed and used to review content and new functionality. Valid values
# are as follows:
# Test
# Use Test if the server you are configuring is to be used as a testing
# environment.
# Stage
# Use Stage if the server is to serve as a staging platform to be used as a
# preproduction server.
# Production
# Use Production if the server is to serve in a production capacity.
# The default value is Test.
#
# Valid Values:
# Test
# Production
# Stage
# Default Values:
# Test
#####
environmentType=Test

#####
# Parameter: isDeveloperServer
#
# Description:
# Specifies whether the server is intended for development purposes only.
# This parameter is useful when creating profiles to test applications on a
# non-production server prior to deploying the applications on their
# production application servers. If -isDeveloperServer is set when
# creating an IBM Business Process Manager profile, then a preconfigured VMM
# file repository is installed. This file repository contains a sample
# organization that can be used to test Business Process Choreographer
# people resolution, ready for you to use as is.
#
# Valid Values:
# false
# true
# Default Values:
# false
#####
#isDeveloperServer=false

```

Advanced Process Center 用の応答ファイル:

manageprofiles コマンド行ユーティリティと応答ファイルを使用して、デプロイメント・マネージャー・プロファイルを作成します。

DB2 用の Advanced Process Center デプロイメント・マネージャー・プロファイル作成の応答ファイル:

ここに用意されている応答ファイルを変更し、**manageprofiles** コマンド行ユーティリティと一緒に使用して、DB2 データベース用のデプロイメント・マネージャー・プロファイルを作成します。

注: ご使用のオペレーティング・システムに合わせて、必要に応じて応答ファイルの情報をコメント化またはアンコメントしてください。詳細については、応答ファイルのコメントを参照してください。

```

# BEGIN COPYRIGHT
# *****
#
# Licensed Materials - Property of IBM
# 5725-C94
# (C) Copyright IBM Corporation 2011, 2012. All Rights Reserved.
# This sample program is provided AS IS and may be used, executed, copied
# and modified without royalty payment by customer (a) for its own

```

```

# instruction and study, (b) in order to develop applications designed to
# run with an IBM WebSphere product, either for customer's own internal
# use or for redistribution by customer, as part of such an application,
# in customer's own products.
#
# *****
# END COPYRIGHT

#####
# These response file has the applicable parameters for creating a
# DMgr PC Adv profile that uses DB2.
#
# Depending on your environment, you may need to change the default values.
#
# To create a profile with this response file specify:
#
# was.install.root/bin/manageprofiles -response PC_Adv_DMgr_DB2.response
#
# If you use the -response parameter, it must be the only parameter on
# the command-line. If you include any manageprofile parameters
# (in addition to -response) on the command-line, the response file
# is ignored. And default WebSphere Application server profile will be created .
#####

#####
# Parameter: create
#
# Description:
#   Creates the profile.
#   If you are creating a profile, this parameter is required.
#####
create

#####
# Parameter: templatePath
#
# Description:
#   Specifies the directory path to the template files in the installation
#   root directory. Within the profileTemplates directory are various
#   directories that correspond to different profile types and that vary with
#   the type of product installed. The profile directories are the paths that
#   you indicate while using the -templatePath option.
#   Use absolute paths. This parameter must exist as a directory and point to
#   a valid template directory.
#
#   When using the -templatePath parameter, specify the fully qualified file
#   path for the parameter.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
templatePath=BPM/dmgr.procctr.adv

#####
# Parameter: profileName
#
# Description:
#   Specifies the name of the profile. Use a unique value when creating a
#   profile.
#   Each profile that shares the same set of product binaries must have a
#   unique name. The default profile name is based on the profile type and a
#   trailing number, for example:
#   profileType ProfileNumberwhere profileType is a value such as ProcSrv,
#   Dmgr, or Custom and ProfileNumber is a sequential number that creates a
#   unique profile name. The value for this parameter must not contain spaces

```

```

# or characters that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,,
# /, \, and |. The profile name that you choose must not be in use. On
# Windows platforms: If the fully qualified path contains spaces, enclose
# the value in quotation marks. The default value is based on the
# install_root directory, the profiles subdirectory, and the name of the
# file. For example, the default for profile creation is:
# WS_WSPROFILE_DEFAULT_PROFILE_HOME/profileNameewhere
# WS_WSPROFILE_DEFAULT_PROFILE_HOME is defined in the wasprofile.properties
# file in the install_root/properties directory. The value for this
# parameter must be a valid path for the target system and must not be
# currently in use. You must have permissions to write to the directory.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
profileName=Dmgr01

#####
# Parameter: cellName
#
# Description:
#   Specifies the cell name of the profile. Use a unique cell name for each
#   profile.
#   The default value for this parameter is based on a combination of the
#   short host name, the constant Cell, and a trailing number, for example:
#   if (DMgr)
#       shortHostNameCellCellNumber
#   else
#       shortHostNameNodeNodeNumberCell
#   where CellNumber is a sequential number starting at 01 and NodeNumber is
#   the node number that you used to define the node name.
#   The value for this parameter must not contain spaces or any characters
#   that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   Varies
#
# Parameter: nodeName
#
# Description:
#   Specifies the node name for the node that is created with the new profile.
#   Use a unique value within the cell or on the workstation. Each profile
#   that shares the same set of product binaries must have a unique node name.
#   This parameter is required for profile creation only with the
#   dmgr.esbserverdefault.procsvrdefault.procctrdefault.procsvr.advdefault.
#   procctr.advdmgr.procctrmanaged.procctrmanaged.procsvr templates.
#   The default value for this parameter is based on the short host name,
#   profile type, and a trailing number, for example:
#   if (DMgr)
#       shortHostNameCellManagerNodeNumber
#   else
#       shortHostNameNodeNodeNumber
#   where NodeNumber is a sequential number starting at 01.
#   The value for this parameter must not contain spaces or any characters
#   that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   Varies
#####
cellName=cell_name
nodeName=node_name

```

```

#####
# Parameter: enableAdminSecurity
#
# Description:
#   For IBM Business Process Manager omit this parameter. Administrative
#   security is always enabled for IBM Business Process Manager profiles.
#   You must also specify the parameters -adminUserName and -adminPassword
#   along with the values for these parameters.
#
# Valid Values:
#   true
# Default Values:
#   true
#####
enableAdminSecurity=true
adminUserName=adminUser_ID
adminPassword=adminPassword

#####
# Parameter: signingCertDN
#
# Description:
#   Specifies the distinguished name of the root signing certificate that you
#   create when you create the profile. Specify the distinguished name in
#   quotation marks. This default personal certificate is located in the
#   server keystore file. If you do not specifically create or import a root
#   signing certificate, one is created by default. See the
#   -signingCertValidityPeriod parameter and the -keyStorePassword.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: signingCertValidityPeriod
#
# Description:
#   An optional parameter that specifies the amount of time in years that the
#   root signing certificate is valid. If you do not specify this parameter
#   with the -signingCertDN parameter, the root signing certificate is valid
#   for 20 years.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: keyStorePassword
#
# Description:
#   Specifies the password to use on all keystore files created during profile
#   creation. Keystore files are created for the default personal certificate
#   and the root signing certificate.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
#signingCertDN =distinguished_name
#signingCertValidityPeriod =validity_period
#keyStorePassword =keyStore_password

#####
# Parameter: defaultPorts
#

```



```

# Description:
#   Assigns the default or base port values to the profile. Do not use this
#   parameter when using the -startingPort or -portsFile parameter.
#   During profile creation, the manageprofiles command-line utility uses an
#   automatically generated set of recommended ports if you do not specify the
#   -startingPort parameter, the -defaultPorts parameter or the -portsFile
#   parameter. The recommended port values can be different than the default
#   port values based on the availability of the default ports.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: startingPort
#
# Description:
#   Specifies the starting port number for generating and assigning all ports
#   for the profile.
#   Port values are assigned sequentially from the -startingPort value,
#   omitting those ports that are already in use. The system recognizes and
#   resolves ports that are currently in use and determines the port
#   assignments to avoid port conflicts.
#   Do not use this parameter with the -defaultPorts or -portsFile parameters.
#   During profile creation, the manageprofiles command-line utility uses an
#   automatically generated set of recommended ports if you do not specify the
#   -startingPort parameter, the -defaultPorts parameter or the -portsFile
#   parameter. The recommended port values can be different than the default
#   port values based on the availability of the default ports.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: portsFile
#
# Description:
#   An optional parameter that specifies the path to a file that defines port
#   settings for the new profile.
#   Do not use this parameter when using the -startingPort or -defaultPorts
#   parameter.
#   During profile creation, the manageprofiles command-line utility uses an
#   automatically generated set of recommended ports if you do not specify the
#   -startingPort parameter, the -defaultPorts parameter or the -portsFile
#   parameter. The recommended port values can be different than the default
#   port values based on the availability of the default ports.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
#defaultPorts=default_ports
#startingPort=startingPort
#portsFile=file_path
#####
# Parameter: enableService
#
# Description:
#   Enables the creation of a Linux service. Valid values include true or
#   false. The default value for this parameter is false. When the
#   manageprofiles command-line utility is run with the -enableService option
#   set to true, the Linux service is created with the profile when the
#   command is run by the root user. When a nonroot user runs the
#   manageprofiles command-line utility, the profile is created, but the Linux

```

```

# service is not. The Linux service is not created because the nonroot user
# does not have sufficient permission to set up the service. An
# INSTCONPARTIALSUCCESS result is displayed at the end of the profile
# creation and the profile creation log
# install_root/logs/manageprofiles/profile_name_create.log contains a
# message indicating the current user does not have sufficient permission to
# set up the Linux service. Use this parameter when creating profiles only.
#
# Valid Values:
#   false
#   true
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: serviceUserName
#
# Description:
#   Specifies the user ID that is used during the creation of the Linux
#   service so that the Linux service will run under this user ID. The Linux
#   service runs whenever the user ID is logged on. Not required.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: winserviceAccountType
#
# Description:
#   The type of the owner account of the Windows service created for the
#   profile. Valid values include specifieduser or localsystem. The
#   localsystem value runs the Windows service under the local account of the
#   user who creates the profile. The default value for this parameter is
#   localsystem. Use this parameter when creating profiles only.
#
# Valid Values:
#   localsystem
#   specifieduser
# Default Values:
#   localsystem
#
# Parameter: winserviceUserName
#
# Description:
#   Specify your user ID so that the Windows operating system can verify you
#   as an ID that is capable of creating a Windows service. Your user ID must
#   belong to the Administrator group and have the following advanced user
#   rights:
#   Act as part of the operating system
#   Log on as a service
#   The default value for this parameter is the current user name. The value
#   for this parameter must not contain spaces or characters that are not
#   valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |. The user that
#   you specify must have the proper permissions to create a Windows service.
#   You must specify the correct password for the user name that you choose.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: winservicePassword
#
# Description:
#   Specify the password for the specified user or the local account that is
#   to own the Windows service.
#

```

```

# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: winserviceCheck
#
# Description:
#   The value can be either true or false. Specify true to create a Windows
#   service for the server process that is created within the profile. Specify
#   false to not create the Windows service. The default value for this
#   parameter is false.
#
# Valid Values:
#   false
#   true
# Default Values:
#   false
#
# Parameter: winserviceStartupType
#
# Description:
#   The following values for Windows service startup can be used:
#   manual
#   automatic
#   disabled
#   The default value for this parameter is manual.
#
# Valid Values:
#   manual
#   automatic
#   disabled
# Default Values:
#   manual
#####
#enableService=true
#serviceName=service_user_ID
#winserviceAccountType=localsystem
#winserviceUserName=winservice_user_ID
#winservicePassword=winservice_password
#winserviceCheck=false
#winserviceStartupType>manual
#####
# Parameter: bpmdbDesign
#
# Description:
#   Specifies the file that holds the database configuration design for all of
#   the IBM Business Process Manager components .
#   This parameter replaces the -wbldbDesign that was used in previous
#   versions of WebSphere Process Server.
#
#   Note: If a bpmdbDesign file parameter is specified, none of the database
#   related properties should be specified.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
#bpmdbDesign=design_file
#####
# Parameter: dbCreateNew
#
# Description:
#   Indicates a new database is created or if an existing database is to be

```

```

# reused. Valid values are true or false. This value cannot be true for an
# Oracle, SQL Server or a DB2 z/OS database. This value can only be true for
# a DB2 database.
#
# Valid Values:
# false
# true
# Default Values:
# None
#####
dbCreateNew=true
#####
# Parameter: dbType
#
# Description:
# The database type. Set one of the following values for the type of
# database product you are using with IBM Business Process Manager.
#
# Required only for one of the following:
# A stand-alone profile when -bpmdbDesign was not specified.
# An advanced dmgr or managed profiles when -bpmdbDesign was not specified.
#
# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
# DB2_DATASERVER
# Default Values:
# DB2_DATASERVER
#
# Parameter: dbJDBCClasspath
#
# Description:
# The directory path location of JDBC driver files.
#
# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# None
#
# Parameter: dbHostName
#
# Description:
# The database server host name or IP address. The default value is the
# local host name. Required when the -bpmdbDesign parameter was not
# specified. (It is not required if the -bpmdbDesign parameter is
# specified.)
#
# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# None
#
# Parameter: dbServerPort
#
# Description:
# The database server port number. Depending on the database you are using,
# you can specify a different port number instead of the default port
# number.
#
# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:

```

```

#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
dbType=DB2_DATASERVER
dbJDBCClasspath=${WAS_INSTALL_ROOT}/jdbcdriver/DB2
dbHostName=db_host_name
dbServerPort=db_port_number

#####
# Parameter: dbDelayConfig
#
# Description:
#   Indicates whether to postpone table creation until after the profile is
#   created. Valid values are true or false. The parameter is set to false by
#   default. Setting this parameter to true delays the execution of the
#   scripts that create the database tables. No. Specify false if you want the
#   database to be set up during profile creation.
#
# Valid Values:
#   false
#   true
# Default Values:
#   false
#####
dbDelayConfig=false

#####
# Parameter: dbName
#
# Description:
#   The name of the database. By default, the value is set to orcl for Oracle
#   databases and to CMNDB for all other supported databases.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   CMNDB
#
# Parameter: dbUserId
#
# Description:
#   The user ID for all database types. Specifies the user ID that has
#   privileges to create and drop the databases. The WebSphere data source
#   uses this ID to authenticate the database connection.
#   Important: The -dbUserId parameter value must be a valid database
#   authorization ID. Required if the -bpmdbDesign file is not set.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: dbPassword
#
# Description:
#   The password required for database authentication. Required when the
#   -bpmdbDesign file is not set.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies

```

```

# Default Values:
#   None
#####
dbName=CMNDB
dbUserId=db_userid
dbPassword=db_pswd

#####
# Parameter:  environmentType
#
# Description:
#   Specifies the environment type. The environment type refers to how IBM
#   Business Process Manager is used; for example, in a production, stage or
#   test environment. Load testing might be done on a test server, while a
#   stage environment type might be used as a temporary location to host
#   changes before putting those changes into production. You might specify
#   Stage as the Environment type if the server you are configuring will be
#   accessed and used to review content and new functionality. Valid values
#   are as follows:
#   Test
#   Use Test if the server you are configuring is to be used as a testing
#   environment.
#   Stage
#   Use Stage if the server is to serve as a staging platform to be used as a
#   preproduction server.
#   Production
#   Use Production if the server is to serve in a production capacity.
#   The default value is Test.
#
# Valid Values:
#   Test
#   Production
#   Stage
# Default Values:
#   Test
#####
environmentType=Test

#####
# Parameter:  isDeveloperServer
#
# Description:
#   Specifies whether the server is intended for development purposes only.
#   This parameter is useful when creating profiles to test applications on a
#   non-production server prior to deploying the applications on their
#   production application servers. If -isDeveloperServer is set when
#   creating an IBM Business Process Manager profile, then a preconfigured VMM
#   file repository is installed. This file repository contains a sample
#   organization that can be used to test Business Process Choreographer
#   people resolution, ready for you to use as is.
#
# Valid Values:
#   false
#   true
# Default Values:
#   false
#####
#isDeveloperServer=false

```

DB2 for z/OS 用の Advanced Process Center デプロイメント・マネージャー・プロファイル作成の応答ファイル:

ここに用意されている応答ファイルを変更し、**manageprofiles** コマンド行ユーティリティと一緒に使用して、DB2 for z/OS データベース用のデプロイメント・マネージャー・プロファイルを作成します。

注: ご使用のオペレーティング・システムに合わせて、必要に応じて応答ファイルの情報をコメント化またはアンコメントしてください。詳細については、応答ファイルのコメントを参照してください。

```
# BEGIN COPYRIGHT
# *****
#
# Licensed Materials - Property of IBM
# 5725-C94
# (C) Copyright IBM Corporation 2011, 2012. All Rights Reserved.
# This sample program is provided AS IS and may be used, executed, copied
# and modified without royalty payment by customer (a) for its own
# instruction and study, (b) in order to develop applications designed to
# run with an IBM WebSphere product, either for customer's own internal
# use or for redistribution by customer, as part of such an application,
# in customer's own products.
#
# *****
# END COPYRIGHT

#####
# These response file has the applicable parameters for creating a
# DMgr PC Adv profile that uses DB2zOS.
#
# Depending on your environment, you may need to change the default values.
#
# To create a profile with this response file specify:
#
# was.install.root/bin/manageprofiles -response PC_Adv_DMGr_DB2zOS.response
#
# If you use the -response parameter, it must be the only parameter on
# the command-line. If you include any manageprofile parameters
# (in addition to -response) on the command-line, the response file
# is ignored. And default WebSphere Application server profile will be created .
#####

#####
# Parameter: create
#
# Description:
#   Creates the profile.
#   If you are creating a profile, this parameter is required.
#####
create

#####
# Parameter: templatePath
#
# Description:
#   Specifies the directory path to the template files in the installation
#   root directory. Within the profileTemplates directory are various
#   directories that correspond to different profile types and that vary with
#   the type of product installed. The profile directories are the paths that
#   you indicate while using the -templatePath option.
#   Use absolute paths. This parameter must exist as a directory and point to
#   a valid template directory.
#
#   When using the -templatePath parameter, specify the fully qualified file
#   path for the parameter.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
templatePath=BPM/dmgr.procctr.adv

#####
```



```

# Parameter:  profileName
#
# Description:
#   Specifies the name of the profile. Use a unique value when creating a
#   profile.
#   Each profile that shares the same set of product binaries must have a
#   unique name. The default profile name is based on the profile type and a
#   trailing number, for example:
#   profileType ProfileNumberwhere profileType is a value such as ProcSrv,
#   Dmgr, or Custom and ProfileNumber is a sequential number that creates a
#   unique profile name. The value for this parameter must not contain spaces
#   or characters that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,,
#   /, \, and |. The profile name that you choose must not be in use. On
#   Windows platforms: If the fully qualified path contains spaces, enclose
#   the value in quotation marks. The default value is based on the
#   install_root directory, the profiles subdirectory, and the name of the
#   file. For example, the default for profile creation is:
#   WS_WSPROFILE_DEFAULT_PROFILE_HOME/profileNamewhere
#   WS_WSPROFILE_DEFAULT_PROFILE_HOME is defined in the wasprofile.properties
#   file in the install_root/properties directory. The value for this
#   parameter must be a valid path for the target system and must not be
#   currently in use. You must have permissions to write to the directory.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
profileName=Dmgr01

#####
# Parameter:  cellName
#
# Description:
#   Specifies the cell name of the profile. Use a unique cell name for each
#   profile.
#   The default value for this parameter is based on a combination of the
#   short host name, the constant Cell, and a trailing number, for example:
#   if (DMgr)
#       shortHostNameCellCellNumber
#   else
#       shortHostNameNodeNodeNumberCell
#   where CellNumber is a sequential number starting at 01 and NodeNumber is
#   the node number that you used to define the node name.
#   The value for this parameter must not contain spaces or any characters
#   that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   Varies
#
# Parameter:  nodeName
#
# Description:
#   Specifies the node name for the node that is created with the new profile.
#   Use a unique value within the cell or on the workstation. Each profile
#   that shares the same set of product binaries must have a unique node name.
#   This parameter is required for profile creation only with the
#   dmgr.esbserverdefault.procsvrdefault.procctrdefault.procsvr.advdefault.
#   procctr.advdmgr.procctrmanaged.procctrmanaged.procsvr templates.
#   The default value for this parameter is based on the short host name,
#   profile type, and a trailing number, for example:
#   if (DMgr)
#       shortHostNameCellManagerNodeNumber
#   else
#       shortHostNameNodeNodeNumber

```

```

# where NodeNumber is a sequential number starting at 01.
# The value for this parameter must not contain spaces or any characters
# that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   Varies
#####
cellName=cell_name
nodeName=node_name

#####
# Parameter: enableAdminSecurity
#
# Description:
#   For IBM Business Process Manager omit this parameter. Administrative
#   security is always enabled for IBM Business Process Manager profiles.
#   You must also specify the parameters -adminUserName and -adminPassword
#   along with the values for these parameters.
#
# Valid Values:
#   true
# Default Values:
#   true
#####
enableAdminSecurity=true
adminUserName=adminUser_ID
adminPassword=adminPassword

#####
# Parameter: signingCertDN
#
# Description:
#   Specifies the distinguished name of the root signing certificate that you
#   create when you create the profile. Specify the distinguished name in
#   quotation marks. This default personal certificate is located in the
#   server keystore file. If you do not specifically create or import a root
#   signing certificate, one is created by default. See the
#   -signingCertValidityPeriod parameter and the -keyStorePassword.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: signingCertValidityPeriod
#
# Description:
#   An optional parameter that specifies the amount of time in years that the
#   root signing certificate is valid. If you do not specify this parameter
#   with the -signingCertDN parameter, the root signing certificate is valid
#   for 20 years.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: keyStorePassword
#
# Description:
#   Specifies the password to use on all keystore files created during profile
#   creation. Keystore files are created for the default personal certificate
#   and the root signing certificate.
#
# Valid Values:

```

```

#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
#signingCertDN =distinguished_name
#signingCertValidityPeriod =validity_period
#keyStorePassword =keyStore_password
#####
# Parameter:  defaultPorts
#
# Description:
#   Assigns the default or base port values to the profile.d o not use this
#   parameter when using the -startingPort or -portsFile parameter.
#   During profile creation, the manageprofiles command-line utility uses an
#   automatically generated set of recommended ports if you do not specify the
#   -startingPort parameter, the -defaultPorts parameter or the -portsFile
#   parameter. The recommended port values can be different than the default
#   port values based on the availability of the default ports.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter:  startingPort
#
# Description:
#   Specifies the starting port number for generating and assigning all ports
#   for the profile.
#   Port values are assigned sequentially from the -startingPort value,
#   omitting those ports that are already in use. The system recognizes and
#   resolves ports that are currently in use and determines the port
#   assignments to avoid port conflicts.
#   Do not use this parameter with the -defaultPorts or -portsFile parameters.
#   During profile creation, the manageprofiles command-line utility uses an
#   automatically generated set of recommended ports if you do not specify the
#   -startingPort parameter, the -defaultPorts parameter or the -portsFile
#   parameter. The recommended port values can be different than the default
#   port values based on the availability of the default ports.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter:  portsFile
#
# Description:
#   An optional parameter that specifies the path to a file that defines port
#   settings for the new profile.
#   Do not use this parameter when using the -startingPort or -defaultPorts
#   parameter.
#   During profile creation, the manageprofiles command-line utility uses an
#   automatically generated set of recommended ports if you do not specify the
#   -startingPort parameter, the -defaultPorts parameter or the -portsFile
#   parameter. The recommended port values can be different than the default
#   port values based on the availability of the default ports.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
#defaultPorts=default_ports
#startingPort=startingPort
#portsFile=file_path

```

```

#####
# Parameter: enableService
#
# Description:
#   Enables the creation of a Linux service. Valid values include true or
#   false. The default value for this parameter is false. When the
#   manageprofiles command-line utility is run with the -enableService option
#   set to true , the Linux service is created with the profile when the
#   command is run by the root user. When a nonroot user runs the
#   manageprofiles command-line utility, the profile is created, but the Linux
#   service is not. The Linux service is not created because the nonroot user
#   does not have sufficient permission to set up the service. An
#   INSTCONPARTIALSUCCESS result is displayed at the end of the profile
#   creation and the profile creation log
#   install_root/logs/manageprofiles/profile_name_create.log contains a
#   message indicating the current user does not have sufficient permission to
#   set up the Linux service. Use this parameter when creating profiles only.
#
# Valid Values:
#   false
#   true
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: serviceUserName
#
# Description:
#   Specifies the user ID that is used during the creation of the Linux
#   service so that the Linux service will run under this user ID. The Linux
#   service runs whenever the user ID is logged on. Not required.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: winserviceAccountType
#
# Description:
#   The type of the owner account of the Windows service created for the
#   profile. Valid values include specifieduser or localsystem. The
#   localsystem value runs the Windows service under the local account of the
#   user who creates the profile. The default value for this parameter is
#   localsystem. Use this parameter when creating profiles only.
#
# Valid Values:
#   localsystem
#   specifieduser
# Default Values:
#   localsystem
#
# Parameter: winserviceUserName
#
# Description:
#   Specify your user ID so that the Windows operating system can verify you
#   as an ID that is capable of creating a Windows service. Your user ID must
#   belong to the Administrator group and have the following advanced user
#   rights:
#   Act as part of the operating system
#   Log on as a service
#   The default value for this parameter is the current user name. The value
#   for this parameter must not contain spaces or characters that are not
#   valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |. The user that
#   you specify must have the proper permissions to create a Windows service.
#   You must specify the correct password for the user name that you choose.
#

```

```

# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: winservicePassword
#
# Description:
#   Specify the password for the specified user or the local account that is
#   to own the Windows service.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: winserviceCheck
#
# Description:
#   The value can be either true or false. Specify true to create a Windows
#   service for the server process that is created within the profile. Specify
#   false to not create the Windows service. The default value for this
#   parameter is false.
#
# Valid Values:
#   false
#   true
# Default Values:
#   false
#
# Parameter: winserviceStartupType
#
# Description:
#   The following values for Windows service startup can be used:
#   manual
#   automatic
#   disabled
#   The default value for this parameter is manual.
#
# Valid Values:
#   manual
#   automatic
#   disabled
# Default Values:
#   manual
#####
#enableService=true
#serviceName=service_user_ID
#winserviceAccountType=localsystem
#winserviceUserName=winservice_user_ID
#winservicePassword=winservice_password
#winserviceCheck=false
#winserviceStartupType>manual
#####
# Parameter: bpmdbDesign
#
# Description:
#   Specifies the file that holds the database configuration design for all of
#   the IBM Business Process Manager components .
#   This parameter replaces the -wbldbDesign that was used in previous
#   versions of WebSphere Process Server.
#
#   Note: If a bpmdbDesign file parameter is specified, none of the database
#   related properties should be specified.
#
# Valid Values:

```

```

#    Varies
# Default Values:
#    None
#####
#bpmdbDesign=design_file

#####
# Parameter: dbCreateNew
#
# Description:
#    Indicates a new database is created or if an existing database is to be
#    reused. Valid values are true or false. This value cannot be true for an
#    Oracle, SQL Server or a DB2 z/OS database. This value can only be true for
#    a DB2 database.
#
# Valid Values:
#    false
# Default Values:
#    false
#####
dbCreateNew=false

#####
# Parameter: dbType
#
# Description:
#    The database type. Set one of the following values for the type of
#    database product you are using with IBM Business Process Manager.
#
#    Required only for one of the following:
#    A stand-alone profile when -bpmdbDesign was not specified.
#    An advanced dmgr or managed profiles when -bpmdbDesign was not specified.
#
#    Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#    DB2UDBOS390
# Default Values:
#    DB2UDBOS390
#####
dbType=DB2UDBOS390

#####
# Parameter: dbDelayConfig
#
# Description:
#    Indicates whether to postpone table creation until after the profile is
#    created. Valid values are true or false. The parameter is set to false by
#    default. Setting this parameter to true delays the execution of the
#    scripts that create the database tables. No. Specify false if you want the
#    database to be set up during profile creation.
#
# Valid Values:
#    false
#    true
# Default Values:
#    false
#####
dbDelayConfig=true

#####
# Parameter: dbName
#
# Description:
#    The name of the database. By default, the value is set to orcl for Oracle
#    databases and to CMNDB for all other supported databases.
#

```

```

# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   CMNDB
#
# Parameter: dbUserId
#
# Description:
#   The user ID for all database types. Specifies the user ID that has
#   privileges to create and drop the databases. The WebSphere data source
#   uses this ID to authenticate the database connection.
#   Important: The -dbUserId parameter value must be a valid database
#   authorization ID. Required if the -bpmdbDesign file is not set.
#
# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: dbPassword
#
# Description:
#   The password required for database authentication. Required when the
#   -bpmdbDesign file is not set.
#
# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
#dbName=CMNDB
dbUserId=db_userid
dbPassword=db_pswd

#####
# Parameter: dbStorageGroup
#
# Description:
#   The storage group name for DB2 z/OS databases.
#
# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: dbConnectionLocation
#
# Description:
#   The location of DB2 for z/OS database.
#
# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
dbStorageGroup=db_stg_group
dbConnectionLocation=db2_location

```



```
#####
# Parameter:  environmentType
#
# Description:
#   Specifies the environment type. The environment type refers to how IBM
#   Business Process Manager is used; for example, in a production, stage or
#   test environment. Load testing might be done on a test server, while a
#   stage environment type might be used as a temporary location to host
#   changes before putting those changes into production. You might specify
#   Stage as the Environment type if the server you are configuring will be
#   accessed and used to review content and new functionality. Valid values
#   are as follows:
#   Test
#   Use Test if the server you are configuring is to be used as a testing
#   environment.
#   Stage
#   Use Stage if the server is to serve as a staging platform to be used as a
#   preproduction server.
#   Production
#   Use Production if the server is to serve in a production capacity.
#   The default value is Test.
#
# Valid Values:
#   Test
#   Production
#   Stage
# Default Values:
#   Test
#####
environmentType=Test

#####
# Parameter:  isDeveloperServer
#
# Description:
#   Specifies whether the server is intended for development purposes only.
#   This parameter is useful when creating profiles to test applications on a
#   non-production server prior to deploying the applications on their
#   production application servers. If -isDeveloperServer is set when
#   creating an IBM Business Process Manager profile, then a preconfigured VMM
#   file repository is installed. This file repository contains a sample
#   organization that can be used to test Business Process Choreographer
#   people resolution, ready for you to use as is.
#
# Valid Values:
#   false
#   true
# Default Values:
#   false
#####
#isDeveloperServer=false
```

Oracle 用の Advanced Process Center デプロイメント・マネージャー・プロファイル作成の応答ファイル
:

ここに用意されている応答ファイルを変更し、**manageprofiles** コマンド行ユーティリティと一緒に使用して、Oracle データベース用のデプロイメント・マネージャー・プロファイルを作成します。

注: ご使用のオペレーティング・システムに合わせて、必要に応じて応答ファイルの情報をコメント化またはアンコメントしてください。詳細については、応答ファイルのコメントを参照してください。

```
# BEGIN COPYRIGHT
# *****
#
```

```

# Licensed Materials - Property of IBM
# 5725-C94
# (C) Copyright IBM Corporation 2011, 2012. All Rights Reserved.
# This sample program is provided AS IS and may be used, executed, copied
# and modified without royalty payment by customer (a) for its own
# instruction and study, (b) in order to develop applications designed to
# run with an IBM WebSphere product, either for customer's own internal
# use or for redistribution by customer, as part of such an application,
# in customer's own products.
#
# *****
# END COPYRIGHT

#####
# These response file has the applicable parameters for creating a
# DMgr PC Adv profile that uses Oracle.
#
# Depending on your environment, you may need to change the default values.
#
# To create a profile with this response file specify:
#
# was.install.root/bin/manageprofiles -response PC_Adv_DMgr_Oracle.response
#
# If you use the -response parameter, it must be the only parameter on
# the command-line. If you include any manageprofile parameters
# (in addition to -response) on the command-line, the response file
# is ignored. And default WebSphere Application server profile will be created .
#####

#####
# Parameter: create
#
# Description:
#   Creates the profile.
#   If you are creating a profile, this parameter is required.
#####
create

#####
# Parameter: templatePath
#
# Description:
#   Specifies the directory path to the template files in the installation
#   root directory. Within the profileTemplates directory are various
#   directories that correspond to different profile types and that vary with
#   the type of product installed. The profile directories are the paths that
#   you indicate while using the -templatePath option.
#   Use absolute paths. This parameter must exist as a directory and point to
#   a valid template directory.
#
#   When using the -templatePath parameter, specify the fully qualified file
#   path for the parameter.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
templatePath=BPM/dmgr.procctr.adv

#####
# Parameter: profileName
#
# Description:
#   Specifies the name of the profile. Use a unique value when creating a
#   profile.
#   Each profile that shares the same set of product binaries must have a

```

```

# unique name. The default profile name is based on the profile type and a
# trailing number, for example:
# profileType ProfileNumberwhere profileType is a value such as ProcSrv,
# Dmgr, or Custom and ProfileNumber is a sequential number that creates a
# unique profile name. The value for this parameter must not contain spaces
# or characters that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,,
# /, \, and |. The profile name that you choose must not be in use. On
# Windows platforms: If the fully qualified path contains spaces, enclose
# the value in quotation marks. The default value is based on the
# install_root directory, the profiles subdirectory, and the name of the
# file. For example, the default for profile creation is:
# WS_WSPROFILE_DEFAULT_PROFILE_HOME/profileNamewhere
# WS_WSPROFILE_DEFAULT_PROFILE_HOME is defined in the wasprofile.properties
# file in the install_root/properties directory. The value for this
# parameter must be a valid path for the target system and must not be
# currently in use. You must have permissions to write to the directory.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
profileName=Dmgr01

#####
# Parameter: cellName
#
# Description:
#   Specifies the cell name of the profile. Use a unique cell name for each
#   profile.
#   The default value for this parameter is based on a combination of the
#   short host name, the constant Cell, and a trailing number, for example:
#   if (DMgr)
#       shortHostNameCellCellNumber
#   else
#       shortHostNameNodeNodeNumberCell
#   where CellNumber is a sequential number starting at 01 and NodeNumber is
#   the node number that you used to define the node name.
#   The value for this parameter must not contain spaces or any characters
#   that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   Varies
#
# Parameter: nodeName
#
# Description:
#   Specifies the node name for the node that is created with the new profile.
#   Use a unique value within the cell or on the workstation. Each profile
#   that shares the same set of product binaries must have a unique node name.
#   This parameter is required for profile creation only with the
#   dmgr.esbserverdefault.procsvrdefault.procctrdefault.procsvr.advdefault.
#   procctr.advdmgr.procctrmanaged.procctrmanaged.procsvr templates.
#   The default value for this parameter is based on the short host name,
#   profile type, and a trailing number, for example:
#   if (DMgr)
#       shortHostNameCellManagerNodeNumber
#   else
#       shortHostNameNodeNodeNumber
#   where NodeNumber is a sequential number starting at 01.
#   The value for this parameter must not contain spaces or any characters
#   that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |.
#
# Valid Values:
#   Varies

```

```

# Default Values:
#   Varies
#####
cellName=cell_name
nodeName=node_name

#####
# Parameter: enableAdminSecurity
#
# Description:
#   For IBM Business Process Manager omit this parameter. Administrative
#   security is always enabled for IBM Business Process Manager profiles.
#   You must also specify the parameters -adminUserName and -adminPassword
#   along with the values for these parameters.
#
# Valid Values:
#   true
# Default Values:
#   true
#####
enableAdminSecurity=true
adminUserName=adminUser_ID
adminPassword=adminPassword

#####
# Parameter: signingCertDN
#
# Description:
#   Specifies the distinguished name of the root signing certificate that you
#   create when you create the profile. Specify the distinguished name in
#   quotation marks. This default personal certificate is located in the
#   server keystore file. If you do not specifically create or import a root
#   signing certificate, one is created by default. See the
#   -signingCertValidityPeriod parameter and the -keyStorePassword.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: signingCertValidityPeriod
#
# Description:
#   An optional parameter that specifies the amount of time in years that the
#   root signing certificate is valid. If you do not specify this parameter
#   with the -signingCertDN parameter, the root signing certificate is valid
#   for 20 years.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: keyStorePassword
#
# Description:
#   Specifies the password to use on all keystore files created during profile
#   creation. Keystore files are created for the default personal certificate
#   and the root signing certificate.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
#signingCertDN =distinguished_name
#signingCertValidityPeriod =validity_period

```

```

#keyStorePassword =keyStore_password

#####
# Parameter:  defaultPorts
#
# Description:
#   Assigns the default or base port values to the profile.d o not use this
#   parameter when using the -startingPort or -portsFile parameter.
#   During profile creation, the manageprofiles command-line utility uses an
#   automatically generated set of recommended ports if you do not specify the
#   -startingPort parameter, the -defaultPorts parameter or the -portsFile
#   parameter. The recommended port values can be different than the default
#   port values based on the availability of the default ports.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter:  startingPort
#
# Description:
#   Specifies the starting port number for generating and assigning all ports
#   for the profile.
#   Port values are assigned sequentially from the -startingPort value,
#   omitting those ports that are already in use. The system recognizes and
#   resolves ports that are currently in use and determines the port
#   assignments to avoid port conflicts.
#   Do not use this parameter with the -defaultPorts or -portsFile parameters.
#   During profile creation, the manageprofiles command-line utility uses an
#   automatically generated set of recommended ports if you do not specify the
#   -startingPort parameter, the -defaultPorts parameter or the -portsFile
#   parameter. The recommended port values can be different than the default
#   port values based on the availability of the default ports.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter:  portsFile
#
# Description:
#   An optional parameter that specifies the path to a file that defines port
#   settings for the new profile.
#   Do not use this parameter when using the -startingPort or -defaultPorts
#   parameter.
#   During profile creation, the manageprofiles command-line utility uses an
#   automatically generated set of recommended ports if you do not specify the
#   -startingPort parameter, the -defaultPorts parameter or the -portsFile
#   parameter. The recommended port values can be different than the default
#   port values based on the availability of the default ports.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
#defaultPorts=default_ports
#startingPort=startingPort
#portsFile=file_path

#####
# Parameter:  enableService
#
# Description:
#   Enables the creation of a Linux service. Valid values include true or

```

```

# false. The default value for this parameter is false. When the
# manageprofiles command-line utility is run with the -enableService option
# set to true , the Linux service is created with the profile when the
# command is run by the root user. When a nonroot user runs the
# manageprofiles command-line utility, the profile is created, but the Linux
# service is not. The Linux service is not created because the nonroot user
# does not have sufficient permission to set up the service. An
# INSTCONPARTIALSUCCESS result is displayed at the end of the profile
# creation and the profile creation log
# install_root/logs/manageprofiles/profile_name_create.log contains a
# message indicating the current user does not have sufficient permission to
# set up the Linux service. Use this parameter when creating profiles only.
#
# Valid Values:
# false
# true
# Default Values:
# None
#
# Parameter: serviceUserName
#
# Description:
# Specifies the user ID that is used during the creation of the Linux
# service so that the Linux service will run under this user ID. The Linux
# service runs whenever the user ID is logged on. Not required.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# None
#
# Parameter: winserviceAccountType
#
# Description:
# The type of the owner account of the Windows service created for the
# profile. Valid values include specifieduser or localsystem. The
# localsystem value runs the Windows service under the local account of the
# user who creates the profile. The default value for this parameter is
# localsystem. Use this parameter when creating profiles only.
#
# Valid Values:
# localsystem
# specifieduser
# Default Values:
# localsystem
#
# Parameter: winserviceUserName
#
# Description:
# Specify your user ID so that the Windows operating system can verify you
# as an ID that is capable of creating a Windows service. Your user ID must
# belong to the Administrator group and have the following advanced user
# rights:
# Act as part of the operating system
# Log on as a service
# The default value for this parameter is the current user name. The value
# for this parameter must not contain spaces or characters that are not
# valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |. The user that
# you specify must have the proper permissions to create a Windows service.
# You must specify the correct password for the user name that you choose.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# None
#
# Parameter: winservicePassword

```

```

#
# Description:
#   Specify the password for the specified user or the local account that is
#   to own the Windows service.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter:  winserviceCheck
#
# Description:
#   The value can be either true or false. Specify true to create a Windows
#   service for the server process that is created within the profile. Specify
#   false to not create the Windows service. The default value for this
#   parameter is false.
#
# Valid Values:
#   false
#   true
# Default Values:
#   false
#
# Parameter:  winserviceStartupType
#
# Description:
#   The following values for Windows service startup can be used:
#   manual
#   automatic
#   disabled
#   The default value for this parameter is manual.
#
# Valid Values:
#   manual
#   automatic
#   disabled
# Default Values:
#   manual
#####
#enableService=true
#serviceName=service_user_ID
#winserviceAccountType=localsystem
#winserviceUserName=winservice_user_ID
#winservicePassword=winservice_password
#winserviceCheck=false
#winserviceStartupType>manual
#####
# Parameter:  bpmdbDesign
#
# Description:
#   Specifies the file that holds the database configuration design for all of
#   the IBM Business Process Manager components .
#   This parameter replaces the -wbldbDesign that was used in previous
#   versions of WebSphere Process Server.
#
#   Note: If a bpmdbDesign file parameter is specified, none of the database
#   related properties should be specified.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
#bpmdbDesign=design_file

```



```

#####
# Parameter: dbCreateNew
#
# Description:
#   Indicates a new database is created or if an existing database is to be
#   reused. Valid values are true or false. This value cannot be true for an
#   Oracle, SQL Server or a DB2 z/OS database. This value can only be true for
#   a DB2 database.
#
# Valid Values:
#   false
# Default Values:
#   false
#####
dbCreateNew=false

#####
# Parameter: dbType
#
# Description:
#   The database type. Set one of the following values for the type of
#   database product you are using with IBM Business Process Manager.
#
#   Required only for one of the following:
#   A stand-alone profile when -bpmdbDesign was not specified.
#   An advanced dmgr or managed profiles when -bpmdbDesign was not specified.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   ORACLE
# Default Values:
#   ORACLE
#
# Parameter: dbDriverType
#
# Description:
#   The database driver type. For an Oracle database, specify ORACLE. For
#   databases other than Oracle, the value is automatically set based on the
#   server operating system. Server installations on all operating systems use
#   type 4.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: dbJDBCClasspath
#
# Description:
#   The directory path location of JDBC driver files.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
dbType=ORACLE
dbDriverType=ORACLE_THIN
dbJDBCClasspath=${WAS_INSTALL_ROOT}/jdbcdrivers/Oracle

#####
# Parameter: dbLocation

```

```

#
# Description:
#   The directory of the ORACLE_HOME directory. This parameter is required
#   when the parameter dbDelayConfig is set to false. No, this parameter is
#   only valid if you are using Oracle databases.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
dbLocation=db_location

#####
# Parameter: dbDelayConfig
#
# Description:
#   Indicates whether to postpone table creation until after the profile is
#   created. Valid values are true or false. The parameter is set to false by
#   default. Setting this parameter to true delays the execution of the
#   scripts that create the database tables. No. Specify false if you want the
#   database to be set up during profile creation.
#
# Valid Values:
#   false
#   true
# Default Values:
#   false
#####
dbDelayConfig=false

#####
# Parameter: dbName
#
# Description:
#   The name of the database. By default, the value is set to orcl for Oracle
#   databases and to CMNDB for all other supported databases.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   CMNDB
#
# Parameter: dbUserId
#
# Description:
#   The user ID for all database types. Specifies the user ID that has
#   privileges to create and drop the databases. The WebSphere data source
#   uses this ID to authenticate the database connection.
#   Important: The -dbUserId parameter value must be a valid database
#   authorization ID.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: dbPassword
#
# Description:
#   The password required for database authentication.

```

```

#
# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
#dbName=orcl
#dbUserId=db_userid
#dbPassword=db_pswd
#####
# Parameter: dbCommonUserId
#
# Description:
#   The user id to authenticate with the Common database.
#
# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: dbCommonPassword
#
# Description:
#   The password for the user id of the dbCommonUserId parameter.
#
# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
dbCommonUserId=common_db_userid
dbCommonPassword=common_db_pswd
#####
# Parameter: environmentType
#
# Description:
#   Specifies the environment type. The environment type refers to how IBM
#   Business Process Manager is used; for example, in a production, stage or
#   test environment. Load testing might be done on a test server, while a
#   stage environment type might be used as a temporary location to host
#   changes before putting those changes into production. You might specify
#   Stage as the Environment type if the server you are configuring will be
#   accessed and used to review content and new functionality. Valid values
#   are as follows:
#   Test
#   Use Test if the server you are configuring is to be used as a testing
#   environment.
#   Stage
#   Use Stage if the server is to serve as a staging platform to be used as a
#   preproduction server.
#   Production
#   Use Production if the server is to serve in a production capacity.
#   The default value is Test.
#
# Valid Values:
#   Test
#   Production
#   Stage
# Default Values:

```

```

# Test
#####
environmentType=Test

#####
# Parameter: isDeveloperServer
#
# Description:
# Specifies whether the server is intended for development purposes only.
# This parameter is useful when creating profiles to test applications on a
# non-production server prior to deploying the applications on their
# production application servers. If -isDeveloperServer is set when
# creating an IBM Business Process Manager profile, then a preconfigured VMM
# file repository is installed. This file repository contains a sample
# organization that can be used to test Business Process Choreographer
# people resolution, ready for you to use as is.
#
# Valid Values:
# false
# true
# Default Values:
# false
#####
#isDeveloperServer=false

```

SQL 用の Advanced Process Center デプロイメント・マネージャー・プロファイル作成の応答ファイル:

ここに用意されている応答ファイルを変更し、**manageprofiles** コマンド行ユーティリティと一緒に使用して、SQL データベース用のデプロイメント・マネージャー・プロファイルを作成します。

注: ご使用のオペレーティング・システムに合わせて、必要に応じて応答ファイルの情報をコメント化またはアンコメントしてください。詳細については、応答ファイルのコメントを参照してください。

```

# BEGIN COPYRIGHT
# *****
#
# Licensed Materials - Property of IBM
# 5725-C94
# (C) Copyright IBM Corporation 2011, 2012. All Rights Reserved.
# This sample program is provided AS IS and may be used, executed, copied
# and modified without royalty payment by customer (a) for its own
# instruction and study, (b) in order to develop applications designed to
# run with an IBM WebSphere product, either for customer's own internal
# use or for redistribution by customer, as part of such an application,
# in customer's own products.
#
# *****
# END COPYRIGHT

#####
# These response file has the applicable parameters for creating a
# DMgr PC Adv profile that uses SQLServer.
#
# Depending on your environment, you may need to change the default values.
#
# To create a profile with this response file specify:
#
# was.install.root/bin/manageprofiles -response PC_Adv_DMgr_SQLServer.response
#
# If you use the -response parameter, it must be the only parameter on
# the command-line. If you include any manageprofile parameters
# (in addition to -response) on the command-line, the response file
# is ignored. And default WebSphere Application server profile will be created .
#####

#####

```

```

# Parameter: create
#
# Description:
#   Creates the profile.
#   If you are creating a profile, this parameter is required.
#####
create

#####
# Parameter: templatePath
#
# Description:
#   Specifies the directory path to the template files in the installation
#   root directory. Within the profileTemplates directory are various
#   directories that correspond to different profile types and that vary with
#   the type of product installed. The profile directories are the paths that
#   you indicate while using the -templatePath option.
#   Use absolute paths. This parameter must exist as a directory and point to
#   a valid template directory.
#
#   When using the -templatePath parameter, specify the fully qualified file
#   path for the parameter.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
templatePath=BPM/dmgr.procctr.adv

#####
# Parameter: profileName
#
# Description:
#   Specifies the name of the profile. Use a unique value when creating a
#   profile.
#   Each profile that shares the same set of product binaries must have a
#   unique name. The default profile name is based on the profile type and a
#   trailing number, for example:
#   profileType ProfileNumberwhere profileType is a value such as ProcSrv,
#   Dmgr, or Custom and ProfileNumber is a sequential number that creates a
#   unique profile name. The value for this parameter must not contain spaces
#   or characters that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,,
#   /, \, and |. The profile name that you choose must not be in use. On
#   Windows platforms: If the fully qualified path contains spaces, enclose
#   the value in quotation marks. The default value is based on the
#   install_root directory, the profiles subdirectory, and the name of the
#   file. For example, the default for profile creation is:
#   WS_WSPROFILE_DEFAULT_PROFILE_HOME/profileNamewhere
#   WS_WSPROFILE_DEFAULT_PROFILE_HOME is defined in the wasprofile.properties
#   file in the install_root/properties directory. The value for this
#   parameter must be a valid path for the target system and must not be
#   currently in use. You must have permissions to write to the directory.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
profileName=Dmgr01

#####
# Parameter: cellName
#
# Description:
#   Specifies the cell name of the profile. Use a unique cell name for each
#   profile.

```

```

# The default value for this parameter is based on a combination of the
# short host name, the constant Cell, and a trailing number, for example:
# if (DMgr)
#     shortHostNameCellCellNumber
# else
#     shortHostNameNodeNodeNumberCell
# where CellNumber is a sequential number starting at 01 and NodeNumber is
# the node number that you used to define the node name.
# The value for this parameter must not contain spaces or any characters
# that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |.
#
# Valid Values:
#     Varies
# Default Values:
#     Varies
#
# Parameter: nodeName
#
# Description:
#     Specifies the node name for the node that is created with the new profile.
#     Use a unique value within the cell or on the workstation. Each profile
#     that shares the same set of product binaries must have a unique node name.
#     This parameter is required for profile creation only with the
#     dmgr.esbserverdefault.procsvrdefault.procctrdefault.procsvr.advdefault.
#     procctr.advmgr.procctrmanaged.procctrmanaged.procsvr templates.
#     The default value for this parameter is based on the short host name,
#     profile type, and a trailing number, for example:
#     if (DMgr)
#         shortHostNameCellManagerNodeNumber
#     else
#         shortHostNameNodeNodeNumber
#     where NodeNumber is a sequential number starting at 01.
#     The value for this parameter must not contain spaces or any characters
#     that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |.
#
# Valid Values:
#     Varies
# Default Values:
#     Varies
#####
cellName=cell_name
nodeName=node_name
#####
# Parameter: enableAdminSecurity
#
# Description:
#     For IBM Business Process Manager omit this parameter. Administrative
#     security is always enabled for IBM Business Process Manager profiles.
#     You must also specify the parameters -adminUserName and -adminPassword
#     along with the values for these parameters.
#
# Valid Values:
#     true
# Default Values:
#     true
#####
enableAdminSecurity=true
adminUserName=adminUser_ID
adminPassword=adminPassword
#####
# Parameter: signingCertDN
#
# Description:
#     Specifies the distinguished name of the root signing certificate that you
#     create when you create the profile. Specify the distinguished name in

```

```

# quotation marks. This default personal certificate is located in the
# server keystore file. If you do not specifically create or import a root
# signing certificate, one is created by default. See the
# -signingCertValidityPeriod parameter and the -keyStorePassword.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: signingCertValidityPeriod
#
# Description:
#   An optional parameter that specifies the amount of time in years that the
#   root signing certificate is valid. If you do not specify this parameter
#   with the -signingCertDN parameter, the root signing certificate is valid
#   for 20 years.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: keyStorePassword
#
# Description:
#   Specifies the password to use on all keystore files created during profile
#   creation. Keystore files are created for the default personal certificate
#   and the root signing certificate.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
#signingCertDN =distinguished_name
#signingCertValidityPeriod =validity_period
#keyStorePassword =keyStore_password
#####
# Parameter: defaultPorts
#
# Description:
#   Assigns the default or base port values to the profile.d o not use this
#   parameter when using the -startingPort or -portsFile parameter.
#   During profile creation, the manageprofiles command-line utility uses an
#   automatically generated set of recommended ports if you do not specify the
#   -startingPort parameter, the -defaultPorts parameter or the -portsFile
#   parameter. The recommended port values can be different than the default
#   port values based on the availability of the default ports.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: startingPort
#
# Description:
#   Specifies the starting port number for generating and assigning all ports
#   for the profile.
#   Port values are assigned sequentially from the -startingPort value,
#   omitting those ports that are already in use. The system recognizes and
#   resolves ports that are currently in use and determines the port
#   assignments to avoid port conflicts.
#   Do not use this parameter with the -defaultPorts or -portsFile parameters.
#   During profile creation, the manageprofiles command-line utility uses an

```



```

#      automatically generated set of recommended ports if you do not specify the
#      -startingPort parameter, the -defaultPorts parameter or the -portsFile
#      parameter. The recommended port values can be different than the default
#      port values based on the availability of the default ports.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter:  portsFile
#
# Description:
#   An optional parameter that specifies the path to a file that defines port
#   settings for the new profile.
#   Do not use this parameter when using the -startingPort or -defaultPorts
#   parameter.
#   During profile creation, the manageprofiles command-line utility uses an
#   automatically generated set of recommended ports if you do not specify the
#   -startingPort parameter, the -defaultPorts parameter or the -portsFile
#   parameter. The recommended port values can be different than the default
#   port values based on the availability of the default ports.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
#defaultPorts=default_ports
#startingPort=startingPort
#portsFile=file_path
#####
# Parameter:  enableService
#
# Description:
#   Enables the creation of a Linux service. Valid values include true or
#   false. The default value for this parameter is false. When the
#   manageprofiles command-line utility is run with the -enableService option
#   set to true , the Linux service is created with the profile when the
#   command is run by the root user. When a nonroot user runs the
#   manageprofiles command-line utility, the profile is created, but the Linux
#   service is not. The Linux service is not created because the nonroot user
#   does not have sufficient permission to set up the service. An
#   INSTCONPARTIALSUCCESS result is displayed at the end of the profile
#   creation and the profile creation log
#   install_root/logs/manageprofiles/profile_name_create.log contains a
#   message indicating the current user does not have sufficient permission to
#   set up the Linux service. Use this parameter when creating profiles only.
#
# Valid Values:
#   false
#   true
# Default Values:
#   None
#
# Parameter:  serviceUserName
#
# Description:
#   Specifies the user ID that is used during the creation of the Linux
#   service so that the Linux service will run under this user ID. The Linux
#   service runs whenever the user ID is logged on. Not required.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None

```

```

#
# Parameter: winserviceAccountType
#
# Description:
#   The type of the owner account of the Windows service created for the
#   profile. Valid values include specifieduser or localsystem. The
#   localsystem value runs the Windows service under the local account of the
#   user who creates the profile. The default value for this parameter is
#   localsystem. Use this parameter when creating profiles only.
#
# Valid Values:
#   localsystem
#   specifieduser
# Default Values:
#   localsystem
#
# Parameter: winserviceUserName
#
# Description:
#   Specify your user ID so that the Windows operating system can verify you
#   as an ID that is capable of creating a Windows service. Your user ID must
#   belong to the Administrator group and have the following advanced user
#   rights:
#   Act as part of the operating system
#   Log on as a service
#   The default value for this parameter is the current user name. The value
#   for this parameter must not contain spaces or characters that are not
#   valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |. The user that
#   you specify must have the proper permissions to create a Windows service.
#   You must specify the correct password for the user name that you choose.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: winservicePassword
#
# Description:
#   Specify the password for the specified user or the local account that is
#   to own the Windows service.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: winserviceCheck
#
# Description:
#   The value can be either true or false. Specify true to create a Windows
#   service for the server process that is created within the profile. Specify
#   false to not create the Windows service. The default value for this
#   parameter is false.
#
# Valid Values:
#   false
#   true
# Default Values:
#   false
#
# Parameter: winserviceStartupType
#
# Description:
#   The following values for Windows service startup can be used:
#   manual
#   automatic

```

```

# disabled
# The default value for this parameter is manual.
#
# Valid Values:
# manual
# automatic
# disabled
# Default Values:
# manual
#####
#enableService=true
#serviceName=service_user_ID
#winserviceAccountType=localsystem
#winserviceUserName=winservice_user_ID
#winservicePassword=winservice_password
#winserviceCheck=false
#winserviceStartupType>manual

#####
# Parameter: bpmdbDesign
#
# Description:
# Specifies the file that holds the database configuration design for all of
# the IBM Business Process Manager components .
# This parameter replaces the -wbldbDesign that was used in previous
# versions of WebSphere Process Server.
#
# Note: If a bpmdbDesign file parameter is specified, none of the database
# related properties should be specified.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# None
#####
#bpmdbDesign=design_file

#####
# Parameter: dbCreateNew
#
# Description:
# Indicates a new database is created or if an existing database is to be
# reused. Valid values are true or false. This value cannot be true for an
# Oracle, SQL Server or a DB2 z/OS database. This value can only be true for
# a DB2 database.
#
# Valid Values:
# false
# Default Values:
# false
#####
dbCreateNew=false

#####
# Parameter: dbType
#
# Description:
# The database type. Set one of the following values for the type of
# database product you are using with IBM Business Process Manager.
#
# Required only for one of the following:
# A stand-alone profile when -bpmdbDesign was not specified.
# An advanced dmgr or managed profiles when -bpmdbDesign was not specified.
#
# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:

```

```

#   MSSQLSERVER_MICROSOFT
# Default Values:
#   MSSQLSERVER_MICROSOFT
#
# Parameter: dbJDBCClasspath
#
# Description:
#   The directory path location of JDBC driver files.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
dbType=MSSQLSERVER_MICROSOFT
dbJDBCClasspath=${WAS_INSTALL_ROOT}/jdbcdrivers/SQLServer
#####
# Parameter: dbDelayConfig
#
# Description:
#   Indicates whether to postpone table creation until after the profile is
#   created. Valid values are true or false. The parameter is set to false by
#   default. Setting this parameter to true delays the execution of the
#   scripts that create the database tables. No. Specify false if you want the
#   database to be set up during profile creation.
#
# Valid Values:
#   false
#   true
# Default Values:
#   false
#####
dbDelayConfig=false
#####
# Parameter: dbName
#
# Description:
#   The name of the database. By default, the value is set to orcl for Oracle
#   databases and to CMNDB for all other supported databases.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   CMNDB
#
# Parameter: dbUserId
#
# Description:
#   The user ID for all database types. Specifies the user ID that has
#   privileges to create and drop the databases. The WebSphere data source
#   uses this ID to authenticate the database connection.
#   Important: The -dbUserId parameter value must be a valid database
#   authorization ID. Required if the -bpmdbDesign file is not set.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#

```

```

# Parameter: dbPassword
#
# Description:
#   The password required for database authentication. Required when the
#   -bpmdbDesign file is not set.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
#dbName=CMNDB
dbUserId=db_userid
dbPassword=db_pswd

#####
# Parameter: dbCommonUserId
#
# Description:
#   The user id to authenticate with the Common database.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: dbCommonPassword
#
# Description:
#   The password for the user id of the dbCommonUserId parameter.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
#dbCommonUserId=common_db_userid
#dbCommonPassword=common_db_pswd

#####
# Parameter: dbWinAuth
#
# Description:
#   An optional parameter that is valid in all default profile templates.
#   Specify true to indicate that you are running SQL Server using integrated
#   windows authentication.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   false
#   true
# Default Values:
#   None
#####
#dbWinAuth=true

#####
# Parameter: environmentType
#
# Description:

```

```

# Specifies the environment type. The environment type refers to how IBM
# Business Process Manager is used; for example, in a production, stage or
# test environment. Load testing might be done on a test server, while a
# stage environment type might be used as a temporary location to host
# changes before putting those changes into production. You might specify
# Stage as the Environment type if the server you are configuring will be
# accessed and used to review content and new functionality. Valid values
# are as follows:
# Test
# Use Test if the server you are configuring is to be used as a testing
# environment.
# Stage
# Use Stage if the server is to serve as a staging platform to be used as a
# preproduction server.
# Production
# Use Production if the server is to serve in a production capacity.
# The default value is Test.
#
# Valid Values:
# Test
# Production
# Stage
# Default Values:
# Test
#####
environmentType=Test

#####
# Parameter: isDeveloperServer
#
# Description:
# Specifies whether the server is intended for development purposes only.
# This parameter is useful when creating profiles to test applications on a
# non-production server prior to deploying the applications on their
# production application servers. If -isDeveloperServer is set when
# creating an IBM Business Process Manager profile, then a preconfigured VMM
# file repository is installed. This file repository contains a sample
# organization that can be used to test Business Process Choreographer
# people resolution, ready for you to use as is.
#
# Valid Values:
# false
# true
# Default Values:
# false
#####
#isDeveloperServer=false

```

Standard Process Center 用の応答ファイル:

manageprofiles コマンド行ユーティリティと応答ファイルを使用して、カスタム・プロファイルを作成します。

DB2 用の Standard Process Center カスタム・プロファイル作成の応答ファイル:

ここに用意されている応答ファイルを変更し、**manageprofiles** コマンド行ユーティリティと一緒に使用して、DB2 データベース用のカスタム・プロファイルを作成します。

注: ご使用のオペレーティング・システムに合わせて、必要に応じて応答ファイルの情報をコメント化またはアンコメントしてください。詳細については、応答ファイルのコメントを参照してください。

```

# BEGIN COPYRIGHT
# *****
#
# Licensed Materials - Property of IBM

```

```

# 5725-C94
# (C) Copyright IBM Corporation 2011, 2012. All Rights Reserved.
# This sample program is provided AS IS and may be used, executed, copied
# and modified without royalty payment by customer (a) for its own
# instruction and study, (b) in order to develop applications designed to
# run with an IBM WebSphere product, either for customer's own internal
# use or for redistribution by customer, as part of such an application,
# in customer's own products.
#
# *****
# END COPYRIGHT

#####
# These response file has the applicable parameters for creating a
# Managed PC Std profile that uses DB2.
#
# Depending on your environment, you may need to change the default values.
#
# To create a profile with this response file specify:
#
# was.install.root/bin/manageprofiles -response PC_Std_Managed_DB2.response
#
# If you use the -response parameter, it must be the only parameter on
# the command-line. If you include any manageprofile parameters
# (in addition to -response) on the command-line, the response file
# is ignored. And default WebSphere Application server profile will be created .
#####

#####
# Parameter: create
#
# Description:
#   Creates the profile.
#   If you are creating a profile, this parameter is required.
#####
create

#####
# Parameter: templatePath
#
# Description:
#   Specifies the directory path to the template files in the installation
#   root directory. Within the profileTemplates directory are various
#   directories that correspond to different profile types and that vary with
#   the type of product installed. The profile directories are the paths that
#   you indicate while using the -templatePath option.
#   Use absolute paths. This parameter must exist as a directory and point to
#   a valid template directory.
#
#   When using the -templatePath parameter, specify the fully qualified file
#   path for the parameter.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
templatePath=BPM/managed.procctr

#####
# Parameter: profileName
#
# Description:
#   Specifies the name of the profile. Use a unique value when creating a
#   profile.
#   Each profile that shares the same set of product binaries must have a
#   unique name. The default profile name is based on the profile type and a

```



```

# trailing number, for example:
# profileType ProfileNumberwhere profileType is a value such as ProcSrv,
# Dmgr, or Custom and ProfileNumber is a sequential number that creates a
# unique profile name. The value for this parameter must not contain spaces
# or characters that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,,
# /, \, and |. The profile name that you choose must not be in use. On
# Windows platforms: If the fully qualified path contains spaces, enclose
# the value in quotation marks. The default value is based on the
# install_root directory, the profiles subdirectory, and the name of the
# file. For example, the default for profile creation is:
# WS_WSPROFILE_DEFAULT_PROFILE_HOME/profileNamewhere
# WS_WSPROFILE_DEFAULT_PROFILE_HOME is defined in the wasprofile.properties
# file in the install_root/properties directory. The value for this
# parameter must be a valid path for the target system and must not be
# currently in use. You must have permissions to write to the directory.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
profileName=Custom01

#####
# Parameter: cellName
#
# Description:
#   Specifies the cell name of the profile. Use a unique cell name for each
#   profile.
#   The default value for this parameter is based on a combination of the
#   short host name, the constant Cell, and a trailing number, for example:
#   if (DMgr)
#       shortHostNameCellCellNumber
#   else
#       shortHostNameNodeNodeNumberCell
#   where CellNumber is a sequential number starting at 01 and NodeNumber is
#   the node number that you used to define the node name.
#   The value for this parameter must not contain spaces or any characters
#   that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   Varies
#
# Parameter: nodeName
#
# Description:
#   Specifies the node name for the node that is created with the new profile.
#   Use a unique value within the cell or on the workstation. Each profile
#   that shares the same set of product binaries must have a unique node name.
#   This parameter is required for profile creation only with the
#   dmgr.esbserverdefault.procsvrdefault.procctrdefault.procsvr.advdefault.
#   procctr.advdmgr.procctrmanaged.procctrmanaged.procsvr templates.
#   The default value for this parameter is based on the short host name,
#   profile type, and a trailing number, for example:
#   if (DMgr)
#       shortHostNameCellManagerNodeNumber
#   else
#       shortHostNameNodeNodeNumber
#   where NodeNumber is a sequential number starting at 01.
#   The value for this parameter must not contain spaces or any characters
#   that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:

```

```

#    Varies
#####
cellName=cell_name
nodeName=node_name

#####
# Parameter:  enableAdminSecurity
#
# Description:
#    For IBM Business Process Manager omit this parameter. Administrative
#    security is always enabled for IBM Business Process Manager profiles.
#    You must also specify the parameters -adminUserName and -adminPassword
#    along with the values for these parameters.
#
# Valid Values:
#    true
# Default Values:
#    true
#####
enableAdminSecurity=true
adminUserName=adminUser_ID
adminPassword=adminPassword

#####
# Parameter:  signingCertDN
#
# Description:
#    Specifies the distinguished name of the root signing certificate that you
#    create when you create the profile. Specify the distinguished name in
#    quotation marks. This default personal certificate is located in the
#    server keystore file. If you do not specifically create or import a root
#    signing certificate, one is created by default. See the
#    -signingCertValidityPeriod parameter and the -keyStorePassword.
#
# Valid Values:
#    Varies
# Default Values:
#    None
#
# Parameter:  signingCertValidityPeriod
#
# Description:
#    An optional parameter that specifies the amount of time in years that the
#    root signing certificate is valid. If you do not specify this parameter
#    with the -signingCertDN parameter, the root signing certificate is valid
#    for 20 years.
#
# Valid Values:
#    Varies
# Default Values:
#    None
#
# Parameter:  keyStorePassword
#
# Description:
#    Specifies the password to use on all keystore files created during profile
#    creation. Keystore files are created for the default personal certificate
#    and the root signing certificate.
#
# Valid Values:
#    Varies
# Default Values:
#    None
#####
#signingCertDN =distinguished_name
#signingCertValidityPeriod =validity_period
#keyStorePassword =keyStore_password

```

```

#####
# Parameter: enableService
#
# Description:
#   Enables the creation of a Linux service. Valid values include true or
#   false. The default value for this parameter is false. When the
#   manageprofiles command-line utility is run with the -enableService option
#   set to true , the Linux service is created with the profile when the
#   command is run by the root user. When a nonroot user runs the
#   manageprofiles command-line utility, the profile is created, but the Linux
#   service is not. The Linux service is not created because the nonroot user
#   does not have sufficient permission to set up the service. An
#   INSTCONPARTIALSUCCESS result is displayed at the end of the profile
#   creation and the profile creation log
#   install_root/logs/manageprofiles/profile_name_create.log contains a
#   message indicating the current user does not have sufficient permission to
#   set up the Linux service. Use this parameter when creating profiles only.
#
# Valid Values:
#   false
#   true
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: serviceUserName
#
# Description:
#   Specifies the user ID that is used during the creation of the Linux
#   service so that the Linux service will run under this user ID. The Linux
#   service runs whenever the user ID is logged on. Not required.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: winserviceAccountType
#
# Description:
#   The type of the owner account of the Windows service created for the
#   profile. Valid values include specifieduser or localsystem. The
#   localsystem value runs the Windows service under the local account of the
#   user who creates the profile. The default value for this parameter is
#   localsystem. Use this parameter when creating profiles only.
#
# Valid Values:
#   localsystem
#   specifieduser
# Default Values:
#   localsystem
#
# Parameter: winserviceUserName
#
# Description:
#   Specify your user ID so that the Windows operating system can verify you
#   as an ID that is capable of creating a Windows service. Your user ID must
#   belong to the Administrator group and have the following advanced user
#   rights:
#   Act as part of the operating system
#   Log on as a service
#   The default value for this parameter is the current user name. The value
#   for this parameter must not contain spaces or characters that are not
#   valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |. The user that
#   you specify must have the proper permissions to create a Windows service.
#   You must specify the correct password for the user name that you choose.
#

```

```

# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: winservicePassword
#
# Description:
#   Specify the password for the specified user or the local account that is
#   to own the Windows service.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: winserviceCheck
#
# Description:
#   The value can be either true or false. Specify true to create a Windows
#   service for the server process that is created within the profile. Specify
#   false to not create the Windows service. The default value for this
#   parameter is false.
#
# Valid Values:
#   false
#   true
# Default Values:
#   false
#
# Parameter: winserviceStartupType
#
# Description:
#   The following values for Windows service startup can be used:
#   manual
#   automatic
#   disabled
#   The default value for this parameter is manual.
#
# Valid Values:
#   manual
#   automatic
#   disabled
# Default Values:
#   manual
#####
#enableService=true
#serviceName=service_user_ID
#winserviceAccountType=localsystem
#winserviceUserName=winservice_user_ID
#winservicePassword=winservice_password
#winserviceCheck=false
#winserviceStartupType>manual
#####
# Parameter: federateLaterBPM
#
# Description:
#   Indicates if the managed profile is to be federated later using either the
#   profileTemplates/managed.esbserver or the
#   profileTemplates/BPM/managed.templateName template. Valid values are true
#   or false. If the -dmgrHost, -dmgrPort, -dmgrAdminUserName and
#   -dmgrAdminPassword parameters are not set, the default value for this
#   parameter is true. If you use -federateLaterBPM, you must either omit the
#   WebSphere Application Server-based parameter -federateLater or set it to
#   true.
#

```

```

# Valid Values:
#   false
#   true
# Default Values:
#   true
#
# Parameter: dmgrHost
#
# Description:
#   Identifies the workstation where the deployment manager is running.
#   Specify this parameter and the dmgrPort parameter to federate a custom
#   profile as it is created or augmented. This parameter is available with
#   the managed.templateName and managed.esbserver profile templates. The
#   host name can be the long or short DNS name or the IP address of the
#   deployment manager workstation. Specifying this optional parameter directs
#   the manageprofiles command-line utility to attempt to federate the custom
#   node into the deployment manager cell as it creates the custom profile.
#   This parameter is ignored when creating a deployment manager profile or
#   stand-alone server profile. If you federate a custom node when the
#   deployment manager is not running, the installation indicator in the logs
#   is INSTCONFFAILED to indicate a complete failure. The resulting custom
#   profile is unusable. You must move the custom profile directory out of the
#   profile repository (the profile's installation root directory) before
#   creating another custom profile with the same profile name. If you have
#   changed the default JMX connector type, you cannot federate with the
#   manageprofiles command-line utility. Use the addNode command later after
#   the node is created instead. The default value for this parameter is
#   localhost. The value for this parameter must be a properly formed host
#   name and must not contain spaces or characters that are not valid such as
#   the following: *, ?, ", <, >, , , /, \, and |. A connection to the
#   deployment manager must also be available in conjunction with the dmgrPort
#   parameter. Required if you are creating a managed profile with the
#   -federateLaterBPM parameter set to false and the deployment manager is not
#   on the local machine.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: dmgrPort
#
# Description:
#   Identifies the SOAP port of the deployment manager. Specify this parameter
#   and the dmgrHost parameter to federate a custom profile as it is created
#   or augmented. The deployment manager must be running and accessible. If
#   you have changed the default JMX connector type, you cannot federate with
#   the manageprofiles command-line utility. Use the addNode command later
#   after the node is created instead. The default value for this parameter is
#   8879. The port that you indicate must be a positive integer and a
#   connection to the deployment manager must be available in conjunction with
#   the dmgrHost parameter. Required if you are creating a managed profile,
#   the -federateLaterBPM parameter is set to false, and the deployment
#   manager was configured with a port that was not a default port.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
federateLaterBPM=true
#dmgrHost=dmgr_host_name
#dmgrPort=dmgr_port_number
#dmgrAdminUserName=dmgr_admin_user_name
#dmgrAdminPassword=dmgr_admin_password
#####

```

```

# Parameter:  environmentType
#
# Description:
#   Specifies the environment type. The environment type refers to how IBM
#   Business Process Manager is used; for example, in a production, stage or
#   test environment. Load testing might be done on a test server, while a
#   stage environment type might be used as a temporary location to host
#   changes before putting those changes into production. You might specify
#   Stage as the Environment type if the server you are configuring will be
#   accessed and used to review content and new functionality. Valid values
#   are as follows:
#   Test
#   Use Test if the server you are configuring is to be used as a testing
#   environment.
#   Stage
#   Use Stage if the server is to serve as a staging platform to be used as a
#   preproduction server.
#   Production
#   Use Production if the server is to serve in a production capacity.
#   The default value is Test.
#
# Valid Values:
#   Test
#   Production
#   Stage
# Default Values:
#   Test
#####
environmentType=Test
#####
# Parameter:  isDeveloperServer
#
# Description:
#   Specifies whether the server is intended for development purposes only.
#   This parameter is useful when creating profiles to test applications on a
#   non-production server prior to deploying the applications on their
#   production application servers. If -isDeveloperServer is set when
#   creating an IBM Business Process Manager profile, then a preconfigured VMM
#   file repository is installed. This file repository contains a sample
#   organization that can be used to test Business Process Choreographer
#   people resolution, ready for you to use as is.
#
# Valid Values:
#   false
#   true
# Default Values:
#   false
#####
isDeveloperServer=false

```

DB2 for z/OS 用の Standard Process Center カスタム・プロファイル作成の応答ファイル:

ここに用意されている応答ファイルを変更し、**manageprofiles** コマンド行ユーティリティと一緒に使用して、DB2 for z/OS データベース用のカスタム・プロファイルを作成します。

注: ご使用のオペレーティング・システムに合わせて、必要に応じて応答ファイルの情報をコメント化またはアンコメントしてください。詳細については、応答ファイルのコメントを参照してください。

```

# BEGIN COPYRIGHT
# *****
#
# Licensed Materials - Property of IBM
# 5725-C94
# (C) Copyright IBM Corporation 2011, 2012. All Rights Reserved.
# This sample program is provided AS IS and may be used, executed, copied

```

```

# and modified without royalty payment by customer (a) for its own
# instruction and study, (b) in order to develop applications designed to
# run with an IBM WebSphere product, either for customer's own internal
# use or for redistribution by customer, as part of such an application,
# in customer's own products.
#
# *****
# END COPYRIGHT

#####
# These response file has the applicable parameters for creating a
# Managed PC Std profile that uses DB2zOS.
#
# Depending on your environment, you may need to change the default values.
#
# To create a profile with this response file specify:
#
# was.install.root/bin/manageprofiles -response PC_Std_Managed_DB2zOS.response
#
# If you use the -response parameter, it must be the only parameter on
# the command-line. If you include any manageprofile parameters
# (in addition to -response) on the command-line, the response file
# is ignored. And default WebSphere Application server profile will be created .
#####

#####
# Parameter: create
#
# Description:
#   Creates the profile.
#   If you are creating a profile, this parameter is required.
#####
create

#####
# Parameter: templatePath
#
# Description:
#   Specifies the directory path to the template files in the installation
#   root directory. Within the profileTemplates directory are various
#   directories that correspond to different profile types and that vary with
#   the type of product installed. The profile directories are the paths that
#   you indicate while using the -templatePath option.
#   Use absolute paths. This parameter must exist as a directory and point to
#   a valid template directory.
#
#   When using the -templatePath parameter, specify the fully qualified file
#   path for the parameter.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
templatePath=BPM/managed.procctr

#####
# Parameter: profileName
#
# Description:
#   Specifies the name of the profile. Use a unique value when creating a
#   profile.
#   Each profile that shares the same set of product binaries must have a
#   unique name. The default profile name is based on the profile type and a
#   trailing number, for example:
#   profileType ProfileNumberwhere profileType is a value such as ProcSrv,
#   Dmgr, or Custom and ProfileNumber is a sequential number that creates a

```



```

# unique profile name. The value for this parameter must not contain spaces
# or characters that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,,
# /, \, and |. The profile name that you choose must not be in use. On
# Windows platforms: If the fully qualified path contains spaces, enclose
# the value in quotation marks. The default value is based on the
# install_root directory, the profiles subdirectory, and the name of the
# file. For example, the default for profile creation is:
# WS_WSPROFILE_DEFAULT_PROFILE_HOME/profileNamewhere
# WS_WSPROFILE_DEFAULT_PROFILE_HOME is defined in the wasprofile.properties
# file in the install_root/properties directory. The value for this
# parameter must be a valid path for the target system and must not be
# currently in use. You must have permissions to write to the directory.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
profileName=Custom01

#####
# Parameter: cellName
#
# Description:
#   Specifies the cell name of the profile. Use a unique cell name for each
#   profile.
#   The default value for this parameter is based on a combination of the
#   short host name, the constant Cell, and a trailing number, for example:
#   if (DMgr)
#     shortHostNameCellCellNumber
#   else
#     shortHostNameNodeNodeNumberCell
#   where CellNumber is a sequential number starting at 01 and NodeNumber is
#   the node number that you used to define the node name.
#   The value for this parameter must not contain spaces or any characters
#   that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   Varies
#
# Parameter: nodeName
#
# Description:
#   Specifies the node name for the node that is created with the new profile.
#   Use a unique value within the cell or on the workstation. Each profile
#   that shares the same set of product binaries must have a unique node name.
#   This parameter is required for profile creation only with the
#   dmgr.esbserverdefault.procsvrdefault.procctrdefault.procsvr.advdefault.
#   procctr.advdmgr.procctrmanaged.procctrmanaged.procsvr templates.
#   The default value for this parameter is based on the short host name,
#   profile type, and a trailing number, for example:
#   if (DMgr)
#     shortHostNameCellManagerNodeNumber
#   else
#     shortHostNameNodeNodeNumber
#   where NodeNumber is a sequential number starting at 01.
#   The value for this parameter must not contain spaces or any characters
#   that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   Varies
#####
cellName=cell_name

```

nodeName=node_name

#####

Parameter: enableAdminSecurity

#

Description:

For IBM Business Process Manager omit this parameter. Administrative security is always enabled for IBM Business Process Manager profiles. You must also specify the parameters -adminUserName and -adminPassword along with the values for these parameters.

#

Valid Values:

true

Default Values:

true

#####

enableAdminSecurity=true

adminUserName=adminUser_ID

adminPassword=adminPassword

#####

Parameter: signingCertDN

#

Description:

Specifies the distinguished name of the root signing certificate that you create when you create the profile. Specify the distinguished name in quotation marks. This default personal certificate is located in the server keystore file. If you do not specifically create or import a root signing certificate, one is created by default. See the -signingCertValidityPeriod parameter and the -keyStorePassword.

#

Valid Values:

Varies

Default Values:

None

#

Parameter: signingCertValidityPeriod

#

Description:

An optional parameter that specifies the amount of time in years that the root signing certificate is valid. If you do not specify this parameter with the -signingCertDN parameter, the root signing certificate is valid for 20 years.

#

Valid Values:

Varies

Default Values:

None

#

Parameter: keyStorePassword

#

Description:

Specifies the password to use on all keystore files created during profile creation. Keystore files are created for the default personal certificate and the root signing certificate.

#

Valid Values:

Varies

Default Values:

None

#####

#signingCertDN =distinguished_name

#signingCertValidityPeriod =validity_period

#keyStorePassword =keyStore_password

#####

Parameter: enableService

```

#
# Description:
#   Enables the creation of a Linux service. Valid values include true or
#   false. The default value for this parameter is false. When the
#   manageprofiles command-line utility is run with the -enableService option
#   set to true , the Linux service is created with the profile when the
#   command is run by the root user. When a nonroot user runs the
#   manageprofiles command-line utility, the profile is created, but the Linux
#   service is not. The Linux service is not created because the nonroot user
#   does not have sufficient permission to set up the service. An
#   INSTCONPARTIALSUCCESS result is displayed at the end of the profile
#   creation and the profile creation log
#   install_root/logs/manageprofiles/profile_name_create.log contains a
#   message indicating the current user does not have sufficient permission to
#   set up the Linux service. Use this parameter when creating profiles only.
#
# Valid Values:
#   false
#   true
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: serviceUserName
#
# Description:
#   Specifies the user ID that is used during the creation of the Linux
#   service so that the Linux service will run under this user ID. The Linux
#   service runs whenever the user ID is logged on. Not required.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: winserviceAccountType
#
# Description:
#   The type of the owner account of the Windows service created for the
#   profile. Valid values include specifieduser or localsystem. The
#   localsystem value runs the Windows service under the local account of the
#   user who creates the profile. The default value for this parameter is
#   localsystem. Use this parameter when creating profiles only.
#
# Valid Values:
#   localsystem
#   specifieduser
# Default Values:
#   localsystem
#
# Parameter: winserviceUserName
#
# Description:
#   Specify your user ID so that the Windows operating system can verify you
#   as an ID that is capable of creating a Windows service. Your user ID must
#   belong to the Administrator group and have the following advanced user
#   rights:
#   Act as part of the operating system
#   Log on as a service
#   The default value for this parameter is the current user name. The value
#   for this parameter must not contain spaces or characters that are not
#   valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |. The user that
#   you specify must have the proper permissions to create a Windows service.
#   You must specify the correct password for the user name that you choose.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:

```

```

# None
#
# Parameter: winservicePassword
#
# Description:
#   Specify the password for the specified user or the local account that is
#   to own the Windows service.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: winserviceCheck
#
# Description:
#   The value can be either true or false. Specify true to create a Windows
#   service for the server process that is created within the profile. Specify
#   false to not create the Windows service. The default value for this
#   parameter is false.
#
# Valid Values:
#   false
#   true
# Default Values:
#   false
#
# Parameter: winserviceStartupType
#
# Description:
#   The following values for Windows service startup can be used:
#   manual
#   automatic
#   disabled
#   The default value for this parameter is manual.
#
# Valid Values:
#   manual
#   automatic
#   disabled
# Default Values:
#   manual
#####
#enableService=true
#serviceName=service_user_ID
#winserviceAccountType=localsystem
#winserviceUserName=winservice_user_ID
#winservicePassword=winservice_password
#winserviceCheck=false
#winserviceStartupType>manual

#####
# Parameter: federateLaterBPM
#
# Description:
#   Indicates if the managed profile is to be federated later using either the
#   profileTemplates/managed.esbserver or the
#   profileTemplates/BPM/managed.templateName template. Valid values are true
#   or false. If the -dmgrHost, -dmgrPort, -dmgrAdminUserName and
#   -dmgrAdminPassword parameters are not set, the default value for this
#   parameter is true. If you use -federateLaterBPM, you must either omit the
#   WebSphere Application Server-based parameter -federateLater or set it to
#   true.
#
# Valid Values:
#   false
#   true

```

```

# Default Values:
#   true
#
# Parameter:  dmgrHost
#
# Description:
#   Identifies the workstation where the deployment manager is running.
#   Specify this parameter and the dmgrPort parameter to federate a custom
#   profile as it is created or augmented. This parameter is available with
#   the managed.templateName and managed.esbserver profile templates. The
#   host name can be the long or short DNS name or the IP address of the
#   deployment manager workstation. Specifying this optional parameter directs
#   the manageprofiles command-line utility to attempt to federate the custom
#   node into the deployment manager cell as it creates the custom profile.
#   This parameter is ignored when creating a deployment manager profile or
#   stand-alone server profile. If you federate a custom node when the
#   deployment manager is not running, the installation indicator in the logs
#   is INSTCONFFAILED to indicate a complete failure. The resulting custom
#   profile is unusable. You must move the custom profile directory out of the
#   profile repository (the profile's installation root directory) before
#   creating another custom profile with the same profile name. If you have
#   changed the default JMX connector type, you cannot federate with the
#   manageprofiles command-line utility. Use the addNode command later after
#   the node is created instead. The default value for this parameter is
#   localhost. The value for this parameter must be a properly formed host
#   name and must not contain spaces or characters that are not valid such as
#   the following: *, ?, ", <, >, , , /, \, and |. A connection to the
#   deployment manager must also be available in conjunction with the dmgrPort
#   parameter. Required if you are creating a managed profile with the
#   -federateLaterBPM parameter set to false and the deployment manager is not
#   on the local machine.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter:  dmgrPort
#
# Description:
#   Identifies the SOAP port of the deployment manager. Specify this parameter
#   and the dmgrHost parameter to federate a custom profile as it is created
#   or augmented. The deployment manager must be running and accessible. If
#   you have changed the default JMX connector type, you cannot federate with
#   the manageprofiles command-line utility. Use the addNode command later
#   after the node is created instead. The default value for this parameter is
#   8879. The port that you indicate must be a positive integer and a
#   connection to the deployment manager must be available in conjunction with
#   the dmgrHost parameter. Required if you are creating a managed profile,
#   the -federateLaterBPM parameter is set to false, and the deployment
#   manager was configured with a port that was not a default port.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
federateLaterBPM=true
#dmgrHost=dmgr_host_name
#dmgrPort=dmgr_port_number
#dmgrAdminUserName=dmgr_admin_user_name
#dmgrAdminPassword=dmgr_admin_password
#####
# Parameter:  environmentType
#
# Description:

```

```

# Specifies the environment type. The environment type refers to how IBM
# Business Process Manager is used; for example, in a production, stage or
# test environment. Load testing might be done on a test server, while a
# stage environment type might be used as a temporary location to host
# changes before putting those changes into production. You might specify
# Stage as the Environment type if the server you are configuring will be
# accessed and used to review content and new functionality. Valid values
# are as follows:
# Test
# Use Test if the server you are configuring is to be used as a testing
# environment.
# Stage
# Use Stage if the server is to serve as a staging platform to be used as a
# preproduction server.
# Production
# Use Production if the server is to serve in a production capacity.
# The default value is Test.
#
# Valid Values:
# Test
# Production
# Stage
# Default Values:
# Test
#####
environmentType=Test

#####
# Parameter: isDeveloperServer
#
# Description:
# Specifies whether the server is intended for development purposes only.
# This parameter is useful when creating profiles to test applications on a
# non-production server prior to deploying the applications on their
# production application servers. If -isDeveloperServer is set when
# creating an IBM Business Process Manager profile, then a preconfigured VMM
# file repository is installed. This file repository contains a sample
# organization that can be used to test Business Process Choreographer
# people resolution, ready for you to use as is.
#
# Valid Values:
# false
# true
# Default Values:
# false
#####
#isDeveloperServer=false

```

Oracle 用の Standard Process Center カスタム・プロファイル作成の応答ファイル:

ここに用意されている応答ファイルを変更し、**manageprofiles** コマンド行ユーティリティーと一緒に使用して、Oracle データベース用のカスタム・プロファイルを作成します。

注: ご使用のオペレーティング・システムに合わせて、必要に応じて応答ファイルの情報をコメント化またはアンコメントしてください。詳細については、応答ファイルのコメントを参照してください。

```

# BEGIN COPYRIGHT
# *****
#
# Licensed Materials - Property of IBM
# 5725-C94
# (C) Copyright IBM Corporation 2011, 2012. All Rights Reserved.
# This sample program is provided AS IS and may be used, executed, copied
# and modified without royalty payment by customer (a) for its own
# instruction and study, (b) in order to develop applications designed to
# run with an IBM WebSphere product, either for customer's own internal

```

```

# use or for redistribution by customer, as part of such an application,
# in customer's own products.
#
# *****
# END COPYRIGHT

#####
# These response file has the applicable parameters for creating a
# Managed PC Std profile that uses Oracle.
#
# Depending on your environment, you may need to change the default values.
#
# To create a profile with this response file specify:
#
# was.install.root/bin/manageprofiles -response PC_Std_Managed_Oracle.response
#
# If you use the -response parameter, it must be the only parameter on
# the command-line. If you include any manageprofile parameters
# (in addition to -response) on the command-line, the response file
# is ignored. And default WebSphere Application server profile will be created .
#####

#####
# Parameter: create
#
# Description:
#   Creates the profile.
#   If you are creating a profile, this parameter is required.
#####
create

#####
# Parameter: templatePath
#
# Description:
#   Specifies the directory path to the template files in the installation
#   root directory. Within the profileTemplates directory are various
#   directories that correspond to different profile types and that vary with
#   the type of product installed. The profile directories are the paths that
#   you indicate while using the -templatePath option.
#   Use absolute paths. This parameter must exist as a directory and point to
#   a valid template directory.
#
#   When using the -templatePath parameter, specify the fully qualified file
#   path for the parameter.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
templatePath=BPM/managed.procctr

#####
# Parameter: profileName
#
# Description:
#   Specifies the name of the profile. Use a unique value when creating a
#   profile.
#   Each profile that shares the same set of product binaries must have a
#   unique name. The default profile name is based on the profile type and a
#   trailing number, for example:
#   profileType ProfileNumberwhere profileType is a value such as ProcSrv,
#   Dmgr, or Custom and ProfileNumber is a sequential number that creates a
#   unique profile name. The value for this parameter must not contain spaces
#   or characters that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,,
#   /, \, and |. The profile name that you choose must not be in use. On

```



```

# Windows platforms: If the fully qualified path contains spaces, enclose
# the value in quotation marks. The default value is based on the
# install_root directory, the profiles subdirectory, and the name of the
# file. For example, the default for profile creation is:
# WS_WSPROFILE_DEFAULT_PROFILE_HOME/profileNamewhere
# WS_WSPROFILE_DEFAULT_PROFILE_HOME is defined in the wasprofile.properties
# file in the install_root/properties directory. The value for this
# parameter must be a valid path for the target system and must not be
# currently in use. You must have permissions to write to the directory.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
profileName=Custom01

#####
# Parameter: cellName
#
# Description:
#   Specifies the cell name of the profile. Use a unique cell name for each
#   profile.
#   The default value for this parameter is based on a combination of the
#   short host name, the constant Cell, and a trailing number, for example:
#   if (DMgr)
#       shortHostNameCellCellNumber
#   else
#       shortHostNameNodeNodeNumberCell
#   where CellNumber is a sequential number starting at 01 and NodeNumber is
#   the node number that you used to define the node name.
#   The value for this parameter must not contain spaces or any characters
#   that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   Varies
#
# Parameter: nodeName
#
# Description:
#   Specifies the node name for the node that is created with the new profile.
#   Use a unique value within the cell or on the workstation. Each profile
#   that shares the same set of product binaries must have a unique node name.
#   This parameter is required for profile creation only with the
#   dmgr.esbserverdefault.procsvrdefault.procctrdefault.procsvr.advdefault.
#   procctr.advdmgr.procctrmanaged.procctrmanaged.procsvr templates.
#   The default value for this parameter is based on the short host name,
#   profile type, and a trailing number, for example:
#   if (DMgr)
#       shortHostNameCellManagerNodeNumber
#   else
#       shortHostNameNodeNodeNumber
#   where NodeNumber is a sequential number starting at 01.
#   The value for this parameter must not contain spaces or any characters
#   that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   Varies
#####
cellName=cell_name
nodeName=node_name

#####

```

```

# Parameter: enableAdminSecurity
#
# Description:
#   For IBM Business Process Manager omit this parameter. Administrative
#   security is always enabled for IBM Business Process Manager profiles.
#   You must also specify the parameters -adminUserName and -adminPassword
#   along with the values for these parameters.
#
# Valid Values:
#   true
# Default Values:
#   true
#####
enableAdminSecurity=true
adminUserName=adminUser_ID
adminPassword=adminPassword
#####
# Parameter: signingCertDN
#
# Description:
#   Specifies the distinguished name of the root signing certificate that you
#   create when you create the profile. Specify the distinguished name in
#   quotation marks. This default personal certificate is located in the
#   server keystore file. If you do not specifically create or import a root
#   signing certificate, one is created by default. See the
#   -signingCertValidityPeriod parameter and the -keyStorePassword.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: signingCertValidityPeriod
#
# Description:
#   An optional parameter that specifies the amount of time in years that the
#   root signing certificate is valid. If you do not specify this parameter
#   with the -signingCertDN parameter, the root signing certificate is valid
#   for 20 years.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: keyStorePassword
#
# Description:
#   Specifies the password to use on all keystore files created during profile
#   creation. Keystore files are created for the default personal certificate
#   and the root signing certificate.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
#signingCertDN =distinguished_name
#signingCertValidityPeriod =validity_period
#keyStorePassword =keyStore_password
#####
# Parameter: enableService
#
# Description:
#   Enables the creation of a Linux service. Valid values include true or

```

```

# false. The default value for this parameter is false. When the
# manageprofiles command-line utility is run with the -enableService option
# set to true , the Linux service is created with the profile when the
# command is run by the root user. When a nonroot user runs the
# manageprofiles command-line utility, the profile is created, but the Linux
# service is not. The Linux service is not created because the nonroot user
# does not have sufficient permission to set up the service. An
# INSTCONPARTIALSUCCESS result is displayed at the end of the profile
# creation and the profile creation log
# install_root/logs/manageprofiles/profile_name_create.log contains a
# message indicating the current user does not have sufficient permission to
# set up the Linux service. Use this parameter when creating profiles only.
#
# Valid Values:
# false
# true
# Default Values:
# None
#
# Parameter: serviceUserName
#
# Description:
# Specifies the user ID that is used during the creation of the Linux
# service so that the Linux service will run under this user ID. The Linux
# service runs whenever the user ID is logged on. Not required.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# None
#
# Parameter: winserviceAccountType
#
# Description:
# The type of the owner account of the Windows service created for the
# profile. Valid values include specifieduser or localsystem. The
# localsystem value runs the Windows service under the local account of the
# user who creates the profile. The default value for this parameter is
# localsystem. Use this parameter when creating profiles only.
#
# Valid Values:
# localsystem
# specifieduser
# Default Values:
# localsystem
#
# Parameter: winserviceUserName
#
# Description:
# Specify your user ID so that the Windows operating system can verify you
# as an ID that is capable of creating a Windows service. Your user ID must
# belong to the Administrator group and have the following advanced user
# rights:
# Act as part of the operating system
# Log on as a service
# The default value for this parameter is the current user name. The value
# for this parameter must not contain spaces or characters that are not
# valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |. The user that
# you specify must have the proper permissions to create a Windows service.
# You must specify the correct password for the user name that you choose.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# None
#
# Parameter: winservicePassword

```

```

#
# Description:
#   Specify the password for the specified user or the local account that is
#   to own the Windows service.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: winserviceCheck
#
# Description:
#   The value can be either true or false. Specify true to create a Windows
#   service for the server process that is created within the profile. Specify
#   false to not create the Windows service. The default value for this
#   parameter is false.
#
# Valid Values:
#   false
#   true
# Default Values:
#   false
#
# Parameter: winserviceStartupType
#
# Description:
#   The following values for Windows service startup can be used:
#   manual
#   automatic
#   disabled
#   The default value for this parameter is manual.
#
# Valid Values:
#   manual
#   automatic
#   disabled
# Default Values:
#   manual
#####
#enableService=true
#serviceName=service_user_ID
#winserviceAccountType=localsystem
#winserviceUserName=winservice_user_ID
#winservicePassword=winservice_password
#winserviceCheck=false
#winserviceStartupType>manual
#####
# Parameter: dbDriverType
#
# Description:
#   The database driver type. For an Oracle database, specify ORACLE. For
#   databases other than Oracle, the value is automatically set based on the
#   server operating system. Server installations on all operating systems use
#   type 4.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
dbDriverType=ORACLE_THIN
#####

```

```

# Parameter: federateLaterBPM
#
# Description:
# Indicates if the managed profile is to be federated later using either the
# profileTemplates/managed.esbserver or the
# profileTemplates/BPM/managed.templateName template. Valid values are true
# or false. If the -dmgrHost, -dmgrPort, -dmgrAdminUserName and
# -dmgrAdminPassword parameters are not set, the default value for this
# parameter is true. If you use -federateLaterBPM, you must either omit the
# WebSphere Application Server-based parameter -federateLater or set it to
# true.
#
# Valid Values:
# false
# true
# Default Values:
# true
#
# Parameter: dmgrHost
#
# Description:
# Identifies the workstation where the deployment manager is running.
# Specify this parameter and the dmgrPort parameter to federate a custom
# profile as it is created or augmented. This parameter is available with
# the managed.templateName and managed.esbserver profile templates. The
# host name can be the long or short DNS name or the IP address of the
# deployment manager workstation. Specifying this optional parameter directs
# the manageprofiles command-line utility to attempt to federate the custom
# node into the deployment manager cell as it creates the custom profile.
# This parameter is ignored when creating a deployment manager profile or
# stand-alone server profile. If you federate a custom node when the
# deployment manager is not running, the installation indicator in the logs
# is INSTCONFFAILED to indicate a complete failure. The resulting custom
# profile is unusable. You must move the custom profile directory out of the
# profile repository (the profile's installation root directory) before
# creating another custom profile with the same profile name. If you have
# changed the default JMX connector type, you cannot federate with the
# manageprofiles command-line utility. Use the addNode command later after
# the node is created instead. The default value for this parameter is
# localhost. The value for this parameter must be a properly formed host
# name and must not contain spaces or characters that are not valid such as
# the following: *, ?, ", <, >, , , /, \, and |. A connection to the
# deployment manager must also be available in conjunction with the dmgrPort
# parameter. Required if you are creating a managed profile with the
# -federateLaterBPM parameter set to false and the deployment manager is not
# on the local machine.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# None
#
# Parameter: dmgrPort
#
# Description:
# Identifies the SOAP port of the deployment manager. Specify this parameter
# and the dmgrHost parameter to federate a custom profile as it is created
# or augmented. The deployment manager must be running and accessible. If
# you have changed the default JMX connector type, you cannot federate with
# the manageprofiles command-line utility. Use the addNode command later
# after the node is created instead. The default value for this parameter is
# 8879. The port that you indicate must be a positive integer and a
# connection to the deployment manager must be available in conjunction with
# the dmgrHost parameter. Required if you are creating a managed profile,
# the -federateLaterBPM parameter is set to false, and the deployment
# manager was configured with a port that was not a default port.
#

```

```

# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
federateLaterBPM=true
#dmgrHost=dmgr_host_name
#dmgrPort=dmgr_port_number
#dmgrAdminUserName=dmgr_admin_user_name
#dmgrAdminPassword=dmgr_admin_password

#####
# Parameter:  environmentType
#
# Description:
#   Specifies the environment type. The environment type refers to how IBM
#   Business Process Manager is used; for example, in a production, stage or
#   test environment. Load testing might be done on a test server, while a
#   stage environment type might be used as a temporary location to host
#   changes before putting those changes into production. You might specify
#   Stage as the Environment type if the server you are configuring will be
#   accessed and used to review content and new functionality. Valid values
#   are as follows:
#   Test
#   Use Test if the server you are configuring is to be used as a testing
#   environment.
#   Stage
#   Use Stage if the server is to serve as a staging platform to be used as a
#   preproduction server.
#   Production
#   Use Production if the server is to serve in a production capacity.
#   The default value is Test.
#
# Valid Values:
#   Test
#   Production
#   Stage
# Default Values:
#   Test
#####
environmentType=Test

#####
# Parameter:  isDeveloperServer
#
# Description:
#   Specifies whether the server is intended for development purposes only.
#   This parameter is useful when creating profiles to test applications on a
#   non-production server prior to deploying the applications on their
#   production application servers. If -isDeveloperServer is set when
#   creating an IBM Business Process Manager profile, then a preconfigured VMM
#   file repository is installed. This file repository contains a sample
#   organization that can be used to test Business Process Choreographer
#   people resolution, ready for you to use as is.
#
# Valid Values:
#   false
#   true
# Default Values:
#   false
#####
#isDeveloperServer=false

```

SQL 用の Standard Process Center カスタム・プロファイル作成の応答ファイル:

ここに用意されている応答ファイルを変更し、**manageprofiles** コマンド行ユーティリティーと一緒に使用して、SQL データベース用のカスタム・プロファイルを作成します。

注: ご使用のオペレーティング・システムに合わせて、必要に応じて応答ファイルの情報をコメント化またはアンコメントしてください。詳細については、応答ファイルのコメントを参照してください。

```
# BEGIN COPYRIGHT
# *****
#
# Licensed Materials - Property of IBM
# 5725-C94
# (C) Copyright IBM Corporation 2011, 2012. All Rights Reserved.
# This sample program is provided AS IS and may be used, executed, copied
# and modified without royalty payment by customer (a) for its own
# instruction and study, (b) in order to develop applications designed to
# run with an IBM WebSphere product, either for customer's own internal
# use or for redistribution by customer, as part of such an application,
# in customer's own products.
#
# *****
# END COPYRIGHT

#####
# These response file has the applicable parameters for creating a
# Managed PC Std profile that uses SQLServer.
#
# Depending on your environment, you may need to change the default values.
#
# To create a profile with this response file specify:
#
# was.install.root/bin/manageprofiles -response PC_Std_Managed_SQLServer.response
#
# If you use the -response parameter, it must be the only parameter on
# the command-line. If you include any manageprofile parameters
# (in addition to -response) on the command-line, the response file
# is ignored. And default WebSphere Application server profile will be created .
#####

#####
# Parameter: create
#
# Description:
#   Creates the profile.
#   If you are creating a profile, this parameter is required.
#####
create

#####
# Parameter: templatePath
#
# Description:
#   Specifies the directory path to the template files in the installation
#   root directory. Within the profileTemplates directory are various
#   directories that correspond to different profile types and that vary with
#   the type of product installed. The profile directories are the paths that
#   you indicate while using the -templatePath option.
#   Use absolute paths. This parameter must exist as a directory and point to
#   a valid template directory.
#
#   When using the -templatePath parameter, specify the fully qualified file
#   path for the parameter.
#
# Valid Values:
#   Varies
```



```

# Default Values:
#   None
#####
templatePath=BPM/managed.procctr

#####
# Parameter:  profileName
#
# Description:
#   Specifies the name of the profile. Use a unique value when creating a
#   profile.
#   Each profile that shares the same set of product binaries must have a
#   unique name. The default profile name is based on the profile type and a
#   trailing number, for example:
#   profileType ProfileNumberwhere profileType is a value such as ProcSrv,
#   Dmgr, or Custom and ProfileNumber is a sequential number that creates a
#   unique profile name. The value for this parameter must not contain spaces
#   or characters that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,,
#   /, \, and |. The profile name that you choose must not be in use. On
#   Windows platforms: If the fully qualified path contains spaces, enclose
#   the value in quotation marks. The default value is based on the
#   install_root directory, the profiles subdirectory, and the name of the
#   file. For example, the default for profile creation is:
#   WS_WSPROFILE_DEFAULT_PROFILE_HOME/profileNamewhere
#   WS_WSPROFILE_DEFAULT_PROFILE_HOME is defined in the wasprofile.properties
#   file in the install_root/properties directory. The value for this
#   parameter must be a valid path for the target system and must not be
#   currently in use. You must have permissions to write to the directory.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
profileName=Custom01

#####
# Parameter:  cellName
#
# Description:
#   Specifies the cell name of the profile. Use a unique cell name for each
#   profile.
#   The default value for this parameter is based on a combination of the
#   short host name, the constant Cell, and a trailing number, for example:
#   if (DMgr)
#     shortHostNameCellCellNumber
#   else
#     shortHostNameNodeNodeNumberCell
#   where CellNumber is a sequential number starting at 01 and NodeNumber is
#   the node number that you used to define the node name.
#   The value for this parameter must not contain spaces or any characters
#   that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   Varies
#
# Parameter:  nodeName
#
# Description:
#   Specifies the node name for the node that is created with the new profile.
#   Use a unique value within the cell or on the workstation. Each profile
#   that shares the same set of product binaries must have a unique node name.
#   This parameter is required for profile creation only with the
#   dmgr.esbserverdefault.proccsrdefault.proccrdefault.proccsvr.advdefault.
#   procctr.advdmgr.procctrmanaged.proccrmanaged.proccsvr templates.

```

```

# The default value for this parameter is based on the short host name,
# profile type, and a trailing number, for example:
# if (DMgr)
#     shortHostNameCellManagerNodeNumber
# else
#     shortHostNameNodeNodeNumber
# where NodeNumber is a sequential number starting at 01.
# The value for this parameter must not contain spaces or any characters
# that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |.
#
# Valid Values:
#     Varies
# Default Values:
#     Varies
#####
cellName=cell_name
nodeName=node_name
#####
# Parameter: enableAdminSecurity
#
# Description:
#     For IBM Business Process Manager omit this parameter. Administrative
#     security is always enabled for IBM Business Process Manager profiles.
#     You must also specify the parameters -adminUserName and -adminPassword
#     along with the values for these parameters.
#
# Valid Values:
#     true
# Default Values:
#     true
#####
enableAdminSecurity=true
adminUserName=adminUser_ID
adminPassword=adminPassword
#####
# Parameter: signingCertDN
#
# Description:
#     Specifies the distinguished name of the root signing certificate that you
#     create when you create the profile. Specify the distinguished name in
#     quotation marks. This default personal certificate is located in the
#     server keystore file. If you do not specifically create or import a root
#     signing certificate, one is created by default. See the
#     -signingCertValidityPeriod parameter and the -keyStorePassword.
#
# Valid Values:
#     Varies
# Default Values:
#     None
#
# Parameter: signingCertValidityPeriod
#
# Description:
#     An optional parameter that specifies the amount of time in years that the
#     root signing certificate is valid. If you do not specify this parameter
#     with the -signingCertDN parameter, the root signing certificate is valid
#     for 20 years.
#
# Valid Values:
#     Varies
# Default Values:
#     None
#
# Parameter: keyStorePassword
#

```

```

# Description:
#   Specifies the password to use on all keystore files created during profile
#   creation. Keystore files are created for the default personal certificate
#   and the root signing certificate.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
#signingCertDN =distinguished_name
#signingCertValidityPeriod =validity_period
#keyStorePassword =keyStore_password
#####
# Parameter:  enableService
#
# Description:
#   Enables the creation of a Linux service. Valid values include true or
#   false. The default value for this parameter is false. When the
#   manageprofiles command-line utility is run with the -enableService option
#   set to true , the Linux service is created with the profile when the
#   command is run by the root user. When a nonroot user runs the
#   manageprofiles command-line utility, the profile is created, but the Linux
#   service is not. The Linux service is not created because the nonroot user
#   does not have sufficient permission to set up the service. An
#   INSTCONPARTIALSUCCESS result is displayed at the end of the profile
#   creation and the profile creation log
#   install_root/logs/manageprofiles/profile_name_create.log contains a
#   message indicating the current user does not have sufficient permission to
#   set up the Linux service. Use this parameter when creating profiles only.
#
# Valid Values:
#   false
#   true
# Default Values:
#   None
#
# Parameter:  serviceUserName
#
# Description:
#   Specifies the user ID that is used during the creation of the Linux
#   service so that the Linux service will run under this user ID. The Linux
#   service runs whenever the user ID is logged on. Not required.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter:  winserviceAccountType
#
# Description:
#   The type of the owner account of the Windows service created for the
#   profile. Valid values include specifieduser or localsystem. The
#   localsystem value runs the Windows service under the local account of the
#   user who creates the profile. The default value for this parameter is
#   localsystem. Use this parameter when creating profiles only.
#
# Valid Values:
#   localsystem
#   specifieduser
# Default Values:
#   localsystem
#
# Parameter:  winserviceUserName
#

```

```

# Description:
#   Specify your user ID so that the Windows operating system can verify you
#   as an ID that is capable of creating a Windows service. Your user ID must
#   belong to the Administrator group and have the following advanced user
#   rights:
#   Act as part of the operating system
#   Log on as a service
#   The default value for this parameter is the current user name. The value
#   for this parameter must not contain spaces or characters that are not
#   valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |. The user that
#   you specify must have the proper permissions to create a Windows service.
#   You must specify the correct password for the user name that you choose.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: winservicePassword
#
# Description:
#   Specify the password for the specified user or the local account that is
#   to own the Windows service.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: winserviceCheck
#
# Description:
#   The value can be either true or false. Specify true to create a Windows
#   service for the server process that is created within the profile. Specify
#   false to not create the Windows service. The default value for this
#   parameter is false.
#
# Valid Values:
#   false
#   true
# Default Values:
#   false
#
# Parameter: winserviceStartupType
#
# Description:
#   The following values for Windows service startup can be used:
#   manual
#   automatic
#   disabled
#   The default value for this parameter is manual.
#
# Valid Values:
#   manual
#   automatic
#   disabled
# Default Values:
#   manual
#####
#enableService=true
#serviceName=service_user_ID
#winserviceAccountType=localsystem
#winserviceUserName=winservice_user_ID
#winservicePassword=winservice_password
#winserviceCheck=false
#winserviceStartupType>manual

```

```

#####
# Parameter: dbWinAuth
#
# Description:
#   An optional parameter that is valid in all default profile templates.
#   Specify true to indicate that you are running SQL Server using integrated
#   windows authentication.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   false
#   true
# Default Values:
#   None
#####
#dbWinAuth=true

#####
# Parameter: federateLaterBPM
#
# Description:
#   Indicates if the managed profile is to be federated later using either the
#   profileTemplates/managed.esbserver or the
#   profileTemplates/BPM/managed.templateName template. Valid values are true
#   or false. If the -dmgrHost, -dmgrPort, -dmgrAdminUserName and
#   -dmgrAdminPassword parameters are not set, the default value for this
#   parameter is true. If you use -federateLaterBPM, you must either omit the
#   WebSphere Application Server-based parameter -federateLater or set it to
#   true.
#
# Valid Values:
#   false
#   true
# Default Values:
#   true
#
# Parameter: dmgrHost
#
# Description:
#   Identifies the workstation where the deployment manager is running.
#   Specify this parameter and the dmgrPort parameter to federate a custom
#   profile as it is created or augmented. This parameter is available with
#   the managed.templateName and managed.esbserver profile templates. The
#   host name can be the long or short DNS name or the IP address of the
#   deployment manager workstation. Specifying this optional parameter directs
#   the manageprofiles command-line utility to attempt to federate the custom
#   node into the deployment manager cell as it creates the custom profile.
#   This parameter is ignored when creating a deployment manager profile or
#   stand-alone server profile. If you federate a custom node when the
#   deployment manager is not running, the installation indicator in the logs
#   is INSTCONFFAILED to indicate a complete failure. The resulting custom
#   profile is unusable. You must move the custom profile directory out of the
#   profile repository (the profile's installation root directory) before
#   creating another custom profile with the same profile name. If you have
#   changed the default JMX connector type, you cannot federate with the
#   manageprofiles command-line utility. Use the addNode command later after
#   the node is created instead. The default value for this parameter is
#   localhost. The value for this parameter must be a properly formed host
#   name and must not contain spaces or characters that are not valid such as
#   the following: *, ?, ", <, >, , , /, \, and |. A connection to the
#   deployment manager must also be available in conjunction with the dmgrPort
#   parameter. Required if you are creating a managed profile with the
#   -federateLaterBPM parameter set to false and the deployment manager is not
#   on the local machine.
#
# Valid Values:

```

```

#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter:  dmgrPort
#
# Description:
#   Identifies the SOAP port of the deployment manager. Specify this parameter
#   and the dmgrHost parameter to federate a custom profile as it is created
#   or augmented. The deployment manager must be running and accessible. If
#   you have changed the default JMX connector type, you cannot federate with
#   the manageprofiles command-line utility. Use the addNode command later
#   after the node is created instead. The default value for this parameter is
#   8879. The port that you indicate must be a positive integer and a
#   connection to the deployment manager must be available in conjunction with
#   the dmgrHost parameter. Required if you are creating a managed profile,
#   the -federateLaterBPM parameter is set to false, and the deployment
#   manager was configured with a port that was not a default port.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
federateLaterBPM=true
#dmgrHost=dmgr_host_name
#dmgrPort=dmgr_port_number
#dmgrAdminUserName=dmgr_admin_user_name
#dmgrAdminPassword=dmgr_admin_password
#####
# Parameter:  environmentType
#
# Description:
#   Specifies the environment type. The environment type refers to how IBM
#   Business Process Manager is used; for example, in a production, stage or
#   test environment. Load testing might be done on a test server, while a
#   stage environment type might be used as a temporary location to host
#   changes before putting those changes into production. You might specify
#   Stage as the Environment type if the server you are configuring will be
#   accessed and used to review content and new functionality. Valid values
#   are as follows:
#   Test
#   Use Test if the server you are configuring is to be used as a testing
#   environment.
#   Stage
#   Use Stage if the server is to serve as a staging platform to be used as a
#   preproduction server.
#   Production
#   Use Production if the server is to serve in a production capacity.
#   The default value is Test.
#
# Valid Values:
#   Test
#   Production
#   Stage
# Default Values:
#   Test
#####
environmentType=Test
#####
# Parameter:  isDeveloperServer
#
# Description:
#   Specifies whether the server is intended for development purposes only.
#   This parameter is useful when creating profiles to test applications on a

```

```

# non-production server prior to deploying the applications on their
# production application servers. If -isDeveloperServer is set when
# creating an IBM Business Process Manager profile, then a preconfigured VMM
# file repository is installed. This file repository contains a sample
# organization that can be used to test Business Process Choreographer
# people resolution, ready for you to use as is.
#
# Valid Values:
# false
# true
# Default Values:
# false
#####
#isDeveloperServer=false

```

Advanced Process Center 用の応答ファイル:

manageprofiles コマンド行ユーティリティと応答ファイルを使用して、カスタム・プロファイルを作成します。

DB2 用の Advanced Process Center カスタム・プロファイル作成の応答ファイル:

ここに用意されている応答ファイルを変更し、**manageprofiles** コマンド行ユーティリティと一緒に使用して、DB2 データベース用のカスタム・プロファイルを作成します。

注: ご使用のオペレーティング・システムに合わせて、必要に応じて応答ファイルの情報をコメント化またはアンコメントしてください。詳細については、応答ファイルのコメントを参照してください。

```

# BEGIN COPYRIGHT
# *****
#
# Licensed Materials - Property of IBM
# 5725-C94
# (C) Copyright IBM Corporation 2011, 2012. All Rights Reserved.
# This sample program is provided AS IS and may be used, executed, copied
# and modified without royalty payment by customer (a) for its own
# instruction and study, (b) in order to develop applications designed to
# run with an IBM WebSphere product, either for customer's own internal
# use or for redistribution by customer, as part of such an application,
# in customer's own products.
#
# *****
# END COPYRIGHT

#####
# These response file has the applicable parameters for creating a
# Managed PC Adv profile that uses DB2.
#
# Depending on your environment, you may need to change the default values.
#
# To create a profile with this response file specify:
#
# was.install.root/bin/manageprofiles -response PC_Adv_Managed_DB2.response
#
# If you use the -response parameter, it must be the only parameter on
# the command-line. If you include any manageprofile parameters
# (in addition to -response) on the command-line, the response file
# is ignored. And default WebSphere Application server profile will be created .
#####

#####
# Parameter: create
#
# Description:
# Creates the profile.

```



```

# If you are creating a profile, this parameter is required.
#####
create

#####
# Parameter: templatePath
#
# Description:
# Specifies the directory path to the template files in the installation
# root directory. Within the profileTemplates directory are various
# directories that correspond to different profile types and that vary with
# the type of product installed. The profile directories are the paths that
# you indicate while using the -templatePath option.
# Use absolute paths. This parameter must exist as a directory and point to
# a valid template directory.
#
# When using the -templatePath parameter, specify the fully qualified file
# path for the parameter.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# None
#####
templatePath=BPM/managed.procctr.adv

#####
# Parameter: profileName
#
# Description:
# Specifies the name of the profile. Use a unique value when creating a
# profile.
# Each profile that shares the same set of product binaries must have a
# unique name. The default profile name is based on the profile type and a
# trailing number, for example:
# profileType ProfileNumberwhere profileType is a value such as ProcSrv,
# Dmgr, or Custom and ProfileNumber is a sequential number that creates a
# unique profile name. The value for this parameter must not contain spaces
# or characters that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,,
# /, \, and |. The profile name that you choose must not be in use. On
# Windows platforms: If the fully qualified path contains spaces, enclose
# the value in quotation marks. The default value is based on the
# install_root directory, the profiles subdirectory, and the name of the
# file. For example, the default for profile creation is:
# WS_WSPROFILE_DEFAULT_PROFILE_HOME/profileNamewhere
# WS_WSPROFILE_DEFAULT_PROFILE_HOME is defined in the wasprofile.properties
# file in the install_root/properties directory. The value for this
# parameter must be a valid path for the target system and must not be
# currently in use. You must have permissions to write to the directory.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# None
#####
profileName=Custom01

#####
# Parameter: cellName
#
# Description:
# Specifies the cell name of the profile. Use a unique cell name for each
# profile.
# The default value for this parameter is based on a combination of the
# short host name, the constant Cell, and a trailing number, for example:
# if (Dmgr)
# shortHostNameCellCellNumber

```

```

#     else
#         shortHostNameNodeNodeNumberCell
#     where CellNumber is a sequential number starting at 01 and NodeNumber is
#     the node number that you used to define the node name.
#     The value for this parameter must not contain spaces or any characters
#     that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |.
#
# Valid Values:
#     Varies
# Default Values:
#     Varies
#
# Parameter:  nodeName
#
# Description:
#     Specifies the node name for the node that is created with the new profile.
#     Use a unique value within the cell or on the workstation. Each profile
#     that shares the same set of product binaries must have a unique node name.
#     This parameter is required for profile creation only with the
#     dmgr.esbserverdefault.procsvrdefault.procctrdefault.procsvr.advdefault.
#     procctr.advdmgr.procctrmanaged.procctrmanaged.procsvr templates.
#     The default value for this parameter is based on the short host name,
#     profile type, and a trailing number, for example:
#     if (DMgr)
#         shortHostNameCellManagerNodeNumber
#     else
#         shortHostNameNodeNodeNumber
#     where NodeNumber is a sequential number starting at 01.
#     The value for this parameter must not contain spaces or any characters
#     that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |.
#
# Valid Values:
#     Varies
# Default Values:
#     Varies
#####
cellName=cell_name
nodeName=node_name

#####
# Parameter:  enableAdminSecurity
#
# Description:
#     For IBM Business Process Manager omit this parameter. Administrative
#     security is always enabled for IBM Business Process Manager profiles.
#     You must also specify the parameters -adminUserName and -adminPassword
#     along with the values for these parameters.
#
# Valid Values:
#     true
# Default Values:
#     true
#####
enableAdminSecurity=true
adminUserName=adminUser_ID
adminPassword=adminPassword

#####
# Parameter:  signingCertDN
#
# Description:
#     Specifies the distinguished name of the root signing certificate that you
#     create when you create the profile. Specify the distinguished name in
#     quotation marks. This default personal certificate is located in the
#     server keystore file. If you do not specifically create or import a root
#     signing certificate, one is created by default. See the
#     -signingCertValidityPeriod parameter and the -keyStorePassword.

```

```

#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: signingCertValidityPeriod
#
# Description:
#   An optional parameter that specifies the amount of time in years that the
#   root signing certificate is valid. If you do not specify this parameter
#   with the -signingCertDN parameter, the root signing certificate is valid
#   for 20 years.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: keyStorePassword
#
# Description:
#   Specifies the password to use on all keystore files created during profile
#   creation. Keystore files are created for the default personal certificate
#   and the root signing certificate.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
#signingCertDN =distinguished_name
#signingCertValidityPeriod =validity_period
#keyStorePassword =keyStore_password
#####
# Parameter: enableService
#
# Description:
#   Enables the creation of a Linux service. Valid values include true or
#   false. The default value for this parameter is false. When the
#   manageprofiles command-line utility is run with the -enableService option
#   set to true , the Linux service is created with the profile when the
#   command is run by the root user. When a nonroot user runs the
#   manageprofiles command-line utility, the profile is created, but the Linux
#   service is not. The Linux service is not created because the nonroot user
#   does not have sufficient permission to set up the service. An
#   INSTCONPARTIALSUCCESS result is displayed at the end of the profile
#   creation and the profile creation log
#   install_root/logs/manageprofiles/profile_name_create.log contains a
#   message indicating the current user does not have sufficient permission to
#   set up the Linux service. Use this parameter when creating profiles only.
#
# Valid Values:
#   false
#   true
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: serviceUserName
#
# Description:
#   Specifies the user ID that is used during the creation of the Linux
#   service so that the Linux service will run under this user ID. The Linux
#   service runs whenever the user ID is logged on. Not required.
#
# Valid Values:

```

```

#    Varies
# Default Values:
#    None
#
# Parameter: winserviceAccountType
#
# Description:
#    The type of the owner account of the Windows service created for the
#    profile. Valid values include specifieduser or localsystem. The
#    localsystem value runs the Windows service under the local account of the
#    user who creates the profile. The default value for this parameter is
#    localsystem. Use this parameter when creating profiles only.
#
# Valid Values:
#    localsystem
#    specifieduser
# Default Values:
#    localsystem
#
# Parameter: winserviceUserName
#
# Description:
#    Specify your user ID so that the Windows operating system can verify you
#    as an ID that is capable of creating a Windows service. Your user ID must
#    belong to the Administrator group and have the following advanced user
#    rights:
#    Act as part of the operating system
#    Log on as a service
#    The default value for this parameter is the current user name. The value
#    for this parameter must not contain spaces or characters that are not
#    valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |. The user that
#    you specify must have the proper permissions to create a Windows service.
#    You must specify the correct password for the user name that you choose.
#
# Valid Values:
#    Varies
# Default Values:
#    None
#
# Parameter: winservicePassword
#
# Description:
#    Specify the password for the specified user or the local account that is
#    to own the Windows service.
#
# Valid Values:
#    Varies
# Default Values:
#    None
#
# Parameter: winserviceCheck
#
# Description:
#    The value can be either true or false. Specify true to create a Windows
#    service for the server process that is created within the profile. Specify
#    false to not create the Windows service. The default value for this
#    parameter is false.
#
# Valid Values:
#    false
#    true
# Default Values:
#    false
#
# Parameter: winserviceStartupType
#
# Description:

```

```

# The following values for Windows service startup can be used:
# manual
# automatic
# disabled
# The default value for this parameter is manual.
#
# Valid Values:
# manual
# automatic
# disabled
# Default Values:
# manual
#####
#enableService=true
#serviceName=service_user_ID
#winserviceAccountType=localsystem
#winserviceUserName=winservice_user_ID
#winservicePassword=winservice_password
#winserviceCheck=false
#winserviceStartupType>manual

#####
# Parameter: dbType
#
# Description:
# The database type. Set one of the following values for the type of
# database product you are using with IBM Business Process Manager.
#
# Required only for one of the following:
# A stand-alone profile when -bpmdbDesign was not specified.
# An advanced dmgr or managed profiles when -bpmdbDesign was not specified.
#
# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
# DB2_DATASERVER
# Default Values:
# DB2_DATASERVER
#
# Parameter: dbJDBCClasspath
#
# Description:
# The directory path location of JDBC driver files.
#
# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# None
#####
dbType=DB2_DATASERVER
dbJDBCClasspath=${WAS_INSTALL_ROOT}/jdbcdrivers/DB2

#####
# Parameter: federateLaterBPM
#
# Description:
# Indicates if the managed profile is to be federated later using either the
# profileTemplates/managed.esbserver or the
# profileTemplates/BPM/managed.templateName template. Valid values are true
# or false. If the -dmgrHost, -dmgrPort, -dmgrAdminUserName and
# -dmgrAdminPassword parameters are not set, the default value for this
# parameter is true. If you use -federateLaterBPM, you must either omit the
# WebSphere Application Server-based parameter -federateLater or set it to
# true.
#
#

```

```

# Valid Values:
#   false
#   true
# Default Values:
#   true
#
# Parameter:  dmgrHost
#
# Description:
#   Identifies the workstation where the deployment manager is running.
#   Specify this parameter and the dmgrPort parameter to federate a custom
#   profile as it is created or augmented. This parameter is available with
#   the managed.templateName and managed.esbserver profile templates. The
#   host name can be the long or short DNS name or the IP address of the
#   deployment manager workstation. Specifying this optional parameter directs
#   the manageprofiles command-line utility to attempt to federate the custom
#   node into the deployment manager cell as it creates the custom profile.
#   This parameter is ignored when creating a deployment manager profile or
#   stand-alone server profile. If you federate a custom node when the
#   deployment manager is not running, the installation indicator in the logs
#   is INSTCONFFAILED to indicate a complete failure. The resulting custom
#   profile is unusable. You must move the custom profile directory out of the
#   profile repository (the profile's installation root directory) before
#   creating another custom profile with the same profile name. If you have
#   changed the default JMX connector type, you cannot federate with the
#   manageprofiles command-line utility. Use the addNode command later after
#   the node is created instead. The default value for this parameter is
#   localhost. The value for this parameter must be a properly formed host
#   name and must not contain spaces or characters that are not valid such as
#   the following: *, ?, ", <, >, , , /, \, and |. A connection to the
#   deployment manager must also be available in conjunction with the dmgrPort
#   parameter. Required if you are creating a managed profile with the
#   -federateLaterBPM parameter set to false and the deployment manager is not
#   on the local machine.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter:  dmgrPort
#
# Description:
#   Identifies the SOAP port of the deployment manager. Specify this parameter
#   and the dmgrHost parameter to federate a custom profile as it is created
#   or augmented. The deployment manager must be running and accessible. If
#   you have changed the default JMX connector type, you cannot federate with
#   the manageprofiles command-line utility. Use the addNode command later
#   after the node is created instead. The default value for this parameter is
#   8879. The port that you indicate must be a positive integer and a
#   connection to the deployment manager must be available in conjunction with
#   the dmgrHost parameter. Required if you are creating a managed profile,
#   the -federateLaterBPM parameter is set to false, and the deployment
#   manager was configured with a port that was not a default port.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
federateLaterBPM=true
#dmgrHost=dmgr_host_name
#dmgrPort=dmgr_port_number
#dmgrAdminUserName=dmgr_admin_user_name
#dmgrAdminPassword=dmgr_admin_password
#####

```

```

# Parameter:  environmentType
#
# Description:
#   Specifies the environment type. The environment type refers to how IBM
#   Business Process Manager is used; for example, in a production, stage or
#   test environment. Load testing might be done on a test server, while a
#   stage environment type might be used as a temporary location to host
#   changes before putting those changes into production. You might specify
#   Stage as the Environment type if the server you are configuring will be
#   accessed and used to review content and new functionality. Valid values
#   are as follows:
#   Test
#   Use Test if the server you are configuring is to be used as a testing
#   environment.
#   Stage
#   Use Stage if the server is to serve as a staging platform to be used as a
#   preproduction server.
#   Production
#   Use Production if the server is to serve in a production capacity.
#   The default value is Test.
#
# Valid Values:
#   Test
#   Production
#   Stage
# Default Values:
#   Test
#####
environmentType=Test

#####
# Parameter:  isDeveloperServer
#
# Description:
#   Specifies whether the server is intended for development purposes only.
#   This parameter is useful when creating profiles to test applications on a
#   non-production server prior to deploying the applications on their
#   production application servers. If -isDeveloperServer is set when
#   creating an IBM Business Process Manager profile, then a preconfigured VMM
#   file repository is installed. This file repository contains a sample
#   organization that can be used to test Business Process Choreographer
#   people resolution, ready for you to use as is.
#
# Valid Values:
#   false
#   true
# Default Values:
#   false
#####
#isDeveloperServer=false

```

DB2 for z/OS 用の Advanced Process Center カスタム・プロファイル作成の応答ファイル:

ここに用意されている応答ファイルを変更し、**manageprofiles** コマンド行ユーティリティと一緒に使用して、DB2 for z/OS データベース用のカスタム・プロファイルを作成します。

注: ご使用のオペレーティング・システムに合わせて、必要に応じて応答ファイルの情報をコメント化またはアンコメントしてください。詳細については、応答ファイルのコメントを参照してください。

```

# BEGIN COPYRIGHT
# *****
#
# Licensed Materials - Property of IBM
# 5725-C94
# (C) Copyright IBM Corporation 2011, 2012. All Rights Reserved.
# This sample program is provided AS IS and may be used, executed, copied

```



```

# and modified without royalty payment by customer (a) for its own
# instruction and study, (b) in order to develop applications designed to
# run with an IBM WebSphere product, either for customer's own internal
# use or for redistribution by customer, as part of such an application,
# in customer's own products.
#
# *****
# END COPYRIGHT

#####
# These response file has the applicable parameters for creating a
# Managed PC Adv profile that uses DB2zOS.
#
# Depending on your environment, you may need to change the default values.
#
# To create a profile with this response file specify:
#
# was.install.root/bin/manageprofiles -response PC_Adv_Managed_DB2zOS.response
#
# If you use the -response parameter, it must be the only parameter on
# the command-line. If you include any manageprofile parameters
# (in addition to -response) on the command-line, the response file
# is ignored. And default WebSphere Application server profile will be created .
#####

#####
# Parameter: create
#
# Description:
#   Creates the profile.
#   If you are creating a profile, this parameter is required.
#####
create

#####
# Parameter: templatePath
#
# Description:
#   Specifies the directory path to the template files in the installation
#   root directory. Within the profileTemplates directory are various
#   directories that correspond to different profile types and that vary with
#   the type of product installed. The profile directories are the paths that
#   you indicate while using the -templatePath option.
#   Use absolute paths. This parameter must exist as a directory and point to
#   a valid template directory.
#
#   When using the -templatePath parameter, specify the fully qualified file
#   path for the parameter.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
templatePath=BPM/managed.procctr.adv

#####
# Parameter: profileName
#
# Description:
#   Specifies the name of the profile. Use a unique value when creating a
#   profile.
#   Each profile that shares the same set of product binaries must have a
#   unique name. The default profile name is based on the profile type and a
#   trailing number, for example:
#   profileType ProfileNumberwhere profileType is a value such as ProcSrv,
#   Dmgr, or Custom and ProfileNumber is a sequential number that creates a

```

```

# unique profile name. The value for this parameter must not contain spaces
# or characters that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,,
# /, \, and |. The profile name that you choose must not be in use. On
# Windows platforms: If the fully qualified path contains spaces, enclose
# the value in quotation marks. The default value is based on the
# install_root directory, the profiles subdirectory, and the name of the
# file. For example, the default for profile creation is:
# WS_WSPROFILE_DEFAULT_PROFILE_HOME/profileNamewhere
# WS_WSPROFILE_DEFAULT_PROFILE_HOME is defined in the wasprofile.properties
# file in the install_root/properties directory. The value for this
# parameter must be a valid path for the target system and must not be
# currently in use. You must have permissions to write to the directory.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
profileName=Custom01

#####
# Parameter: cellName
#
# Description:
#   Specifies the cell name of the profile. Use a unique cell name for each
#   profile.
#   The default value for this parameter is based on a combination of the
#   short host name, the constant Cell, and a trailing number, for example:
#   if (DMgr)
#     shortHostNameCellCellNumber
#   else
#     shortHostNameNodeNodeNumberCell
#   where CellNumber is a sequential number starting at 01 and NodeNumber is
#   the node number that you used to define the node name.
#   The value for this parameter must not contain spaces or any characters
#   that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   Varies
#
# Parameter: nodeName
#
# Description:
#   Specifies the node name for the node that is created with the new profile.
#   Use a unique value within the cell or on the workstation. Each profile
#   that shares the same set of product binaries must have a unique node name.
#   This parameter is required for profile creation only with the
#   dmgr.esbserverdefault.procsvrdefault.procctrdefault.procsvr.advdefault.
#   procctr.advdmgr.procctrmanaged.procctrmanaged.procsvr templates.
#   The default value for this parameter is based on the short host name,
#   profile type, and a trailing number, for example:
#   if (DMgr)
#     shortHostNameCellManagerNodeNumber
#   else
#     shortHostNameNodeNodeNumber
#   where NodeNumber is a sequential number starting at 01.
#   The value for this parameter must not contain spaces or any characters
#   that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   Varies
#####
cellName=cell_name

```

nodeName=node_name

```
#####
# Parameter: enableAdminSecurity
#
# Description:
#   For IBM Business Process Manager omit this parameter. Administrative
#   security is always enabled for IBM Business Process Manager profiles.
#   You must also specify the parameters -adminUserName and -adminPassword
#   along with the values for these parameters.
#
# Valid Values:
#   true
# Default Values:
#   true
#####
enableAdminSecurity=true
adminUserName=adminUser_ID
adminPassword=adminPassword

#####
# Parameter: signingCertDN
#
# Description:
#   Specifies the distinguished name of the root signing certificate that you
#   create when you create the profile. Specify the distinguished name in
#   quotation marks. This default personal certificate is located in the
#   server keystore file. If you do not specifically create or import a root
#   signing certificate, one is created by default. See the
#   -signingCertValidityPeriod parameter and the -keyStorePassword.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: signingCertValidityPeriod
#
# Description:
#   An optional parameter that specifies the amount of time in years that the
#   root signing certificate is valid. If you do not specify this parameter
#   with the -signingCertDN parameter, the root signing certificate is valid
#   for 20 years.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: keyStorePassword
#
# Description:
#   Specifies the password to use on all keystore files created during profile
#   creation. Keystore files are created for the default personal certificate
#   and the root signing certificate.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
#signingCertDN =distinguished_name
#signingCertValidityPeriod =validity_period
#keyStorePassword =keyStore_password

#####
# Parameter: enableService
```

```

#
# Description:
#   Enables the creation of a Linux service. Valid values include true or
#   false. The default value for this parameter is false. When the
#   manageprofiles command-line utility is run with the -enableService option
#   set to true , the Linux service is created with the profile when the
#   command is run by the root user. When a nonroot user runs the
#   manageprofiles command-line utility, the profile is created, but the Linux
#   service is not. The Linux service is not created because the nonroot user
#   does not have sufficient permission to set up the service. An
#   INSTCONPARTIALSUCCESS result is displayed at the end of the profile
#   creation and the profile creation log
#   install_root/logs/manageprofiles/profile_name_create.log contains a
#   message indicating the current user does not have sufficient permission to
#   set up the Linux service. Use this parameter when creating profiles only.
#
# Valid Values:
#   false
#   true
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: serviceUserName
#
# Description:
#   Specifies the user ID that is used during the creation of the Linux
#   service so that the Linux service will run under this user ID. The Linux
#   service runs whenever the user ID is logged on. Not required.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: winserviceAccountType
#
# Description:
#   The type of the owner account of the Windows service created for the
#   profile. Valid values include specifieduser or localsystem. The
#   localsystem value runs the Windows service under the local account of the
#   user who creates the profile. The default value for this parameter is
#   localsystem. Use this parameter when creating profiles only.
#
# Valid Values:
#   localsystem
#   specifieduser
# Default Values:
#   localsystem
#
# Parameter: winserviceUserName
#
# Description:
#   Specify your user ID so that the Windows operating system can verify you
#   as an ID that is capable of creating a Windows service. Your user ID must
#   belong to the Administrator group and have the following advanced user
#   rights:
#   Act as part of the operating system
#   Log on as a service
#   The default value for this parameter is the current user name. The value
#   for this parameter must not contain spaces or characters that are not
#   valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |. The user that
#   you specify must have the proper permissions to create a Windows service.
#   You must specify the correct password for the user name that you choose.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:

```

```

# None
#
# Parameter: winservicePassword
#
# Description:
#   Specify the password for the specified user or the local account that is
#   to own the Windows service.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: winserviceCheck
#
# Description:
#   The value can be either true or false. Specify true to create a Windows
#   service for the server process that is created within the profile. Specify
#   false to not create the Windows service. The default value for this
#   parameter is false.
#
# Valid Values:
#   false
#   true
# Default Values:
#   false
#
# Parameter: winserviceStartupType
#
# Description:
#   The following values for Windows service startup can be used:
#   manual
#   automatic
#   disabled
#   The default value for this parameter is manual.
#
# Valid Values:
#   manual
#   automatic
#   disabled
# Default Values:
#   manual
#####
#enableService=true
#serviceName=service_user_ID
#winserviceAccountType=localsystem
#winserviceUserName=winservice_user_ID
#winservicePassword=winservice_password
#winserviceCheck=false
#winserviceStartupType>manual
#####
# Parameter: dbType
#
# Description:
#   The database type. Set one of the following values for the type of
#   database product you are using with IBM Business Process Manager.
#
#   Required only for one of the following:
#   A stand-alone profile when -bpmdbDesign was not specified.
#   An advanced dmgr or managed profiles when -bpmdbDesign was not specified.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   DB2UDB0S390
# Default Values:

```

```

# DB2UDBOS390
#####
dbType=DB2UDBOS390

#####
# Parameter: federateLaterBPM
#
# Description:
# Indicates if the managed profile is to be federated later using either the
# profileTemplates/managed.esbserver or the
# profileTemplates/BPM/managed.templateName template. Valid values are true
# or false. If the -dmgrHost, -dmgrPort, -dmgrAdminUserName and
# -dmgrAdminPassword parameters are not set, the default value for this
# parameter is true. If you use -federateLaterBPM, you must either omit the
# WebSphere Application Server-based parameter -federateLater or set it to
# true.
#
# Valid Values:
# false
# true
# Default Values:
# true
#
# Parameter: dmgrHost
#
# Description:
# Identifies the workstation where the deployment manager is running.
# Specify this parameter and the dmgrPort parameter to federate a custom
# profile as it is created or augmented. This parameter is available with
# the managed.templateName and managed.esbserver profile templates. The
# host name can be the long or short DNS name or the IP address of the
# deployment manager workstation. Specifying this optional parameter directs
# the manageprofiles command-line utility to attempt to federate the custom
# node into the deployment manager cell as it creates the custom profile.
# This parameter is ignored when creating a deployment manager profile or
# stand-alone server profile. If you federate a custom node when the
# deployment manager is not running, the installation indicator in the logs
# is INSTCONFFAILED to indicate a complete failure. The resulting custom
# profile is unusable. You must move the custom profile directory out of the
# profile repository (the profile's installation root directory) before
# creating another custom profile with the same profile name. If you have
# changed the default JMX connector type, you cannot federate with the
# manageprofiles command-line utility. Use the addNode command later after
# the node is created instead. The default value for this parameter is
# localhost. The value for this parameter must be a properly formed host
# name and must not contain spaces or characters that are not valid such as
# the following: *, ?, ", <, >, , , /, \, and |. A connection to the
# deployment manager must also be available in conjunction with the dmgrPort
# parameter. Required if you are creating a managed profile with the
# -federateLaterBPM parameter set to false and the deployment manager is not
# on the local machine.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# None
#
# Parameter: dmgrPort
#
# Description:
# Identifies the SOAP port of the deployment manager. Specify this parameter
# and the dmgrHost parameter to federate a custom profile as it is created
# or augmented. The deployment manager must be running and accessible. If
# you have changed the default JMX connector type, you cannot federate with
# the manageprofiles command-line utility. Use the addNode command later
# after the node is created instead. The default value for this parameter is
# 8879. The port that you indicate must be a positive integer and a

```

```

# connection to the deployment manager must be available in conjunction with
# the dmgrHost parameter. Required if you are creating a managed profile,
# the -federateLaterBPM parameter is set to false, and the deployment
# manager was configured with a port that was not a default port.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
federateLaterBPM=true
#dmgrHost=dmgr_host_name
#dmgrPort=dmgr_port_number
#dmgrAdminUserName=dmgr_admin_user_name
#dmgrAdminPassword=dmgr_admin_password

#####
# Parameter: environmentType
#
# Description:
#   Specifies the environment type. The environment type refers to how IBM
#   Business Process Manager is used; for example, in a production, stage or
#   test environment. Load testing might be done on a test server, while a
#   stage environment type might be used as a temporary location to host
#   changes before putting those changes into production. You might specify
#   Stage as the Environment type if the server you are configuring will be
#   accessed and used to review content and new functionality. Valid values
#   are as follows:
#   Test
#   Use Test if the server you are configuring is to be used as a testing
#   environment.
#   Stage
#   Use Stage if the server is to serve as a staging platform to be used as a
#   preproduction server.
#   Production
#   Use Production if the server is to serve in a production capacity.
#   The default value is Test.
#
# Valid Values:
#   Test
#   Production
#   Stage
# Default Values:
#   Test
#####
environmentType=Test

#####
# Parameter: isDeveloperServer
#
# Description:
#   Specifies whether the server is intended for development purposes only.
#   This parameter is useful when creating profiles to test applications on a
#   non-production server prior to deploying the applications on their
#   production application servers. If -isDeveloperServer is set when
#   creating an IBM Business Process Manager profile, then a preconfigured VMM
#   file repository is installed. This file repository contains a sample
#   organization that can be used to test Business Process Choreographer
#   people resolution, ready for you to use as is.
#
# Valid Values:
#   false
#   true
# Default Values:
#   false
#####
#isDeveloperServer=false

```


Oracle 用の Advanced Process Center カスタム・プロファイル作成の応答ファイル:

ここに用意されている応答ファイルを変更し、**manageprofiles** コマンド行ユーティリティーと一緒に使用して、Oracle データベース用のカスタム・プロファイルを作成します。

注: ご使用のオペレーティング・システムに合わせて、必要に応じて応答ファイルの情報をコメント化またはアンコメントしてください。詳細については、応答ファイルのコメントを参照してください。

```
# BEGIN COPYRIGHT
# *****
#
# Licensed Materials - Property of IBM
# 5725-C94
# (C) Copyright IBM Corporation 2011, 2012. All Rights Reserved.
# This sample program is provided AS IS and may be used, executed, copied
# and modified without royalty payment by customer (a) for its own
# instruction and study, (b) in order to develop applications designed to
# run with an IBM WebSphere product, either for customer's own internal
# use or for redistribution by customer, as part of such an application,
# in customer's own products.
#
# *****
# END COPYRIGHT

#####
# These response file has the applicable parameters for creating a
# Managed PC Adv profile that uses Oracle.
#
# Depending on your environment, you may need to change the default values.
#
# To create a profile with this response file specify:
#
# was.install.root/bin/manageprofiles -response PC_Adv_Managed_Oracle.response
#
# If you use the -response parameter, it must be the only parameter on
# the command-line. If you include any manageprofile parameters
# (in addition to -response) on the command-line, the response file
# is ignored. And default WebSphere Application server profile will be created .
#####

#####
# Parameter: create
#
# Description:
#   Creates the profile.
#   If you are creating a profile, this parameter is required.
#####
create

#####
# Parameter: templatePath
#
# Description:
#   Specifies the directory path to the template files in the installation
#   root directory. Within the profileTemplates directory are various
#   directories that correspond to different profile types and that vary with
#   the type of product installed. The profile directories are the paths that
#   you indicate while using the -templatePath option.
#   Use absolute paths. This parameter must exist as a directory and point to
#   a valid template directory.
#
#   When using the -templatePath parameter, specify the fully qualified file
#   path for the parameter.
#
# Valid Values:
#   Varies
```

```

# Default Values:
#   None
#####
templatePath=BPM/managed.procctr.adv

#####
# Parameter:  profileName
#
# Description:
#   Specifies the name of the profile. Use a unique value when creating a
#   profile.
#   Each profile that shares the same set of product binaries must have a
#   unique name. The default profile name is based on the profile type and a
#   trailing number, for example:
#   profileType ProfileNumberwhere profileType is a value such as ProcSrv,
#   Dmgr, or Custom and ProfileNumber is a sequential number that creates a
#   unique profile name. The value for this parameter must not contain spaces
#   or characters that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,,
#   /, \, and |. The profile name that you choose must not be in use. On
#   Windows platforms: If the fully qualified path contains spaces, enclose
#   the value in quotation marks. The default value is based on the
#   install_root directory, the profiles subdirectory, and the name of the
#   file. For example, the default for profile creation is:
#   WS_WSPROFILE_DEFAULT_PROFILE_HOME/profileNamewhere
#   WS_WSPROFILE_DEFAULT_PROFILE_HOME is defined in the wasprofile.properties
#   file in the install_root/properties directory. The value for this
#   parameter must be a valid path for the target system and must not be
#   currently in use. You must have permissions to write to the directory.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
profileName=Custom01

#####
# Parameter:  cellName
#
# Description:
#   Specifies the cell name of the profile. Use a unique cell name for each
#   profile.
#   The default value for this parameter is based on a combination of the
#   short host name, the constant Cell, and a trailing number, for example:
#   if (DMgr)
#     shortHostNameCellCellNumber
#   else
#     shortHostNameNodeNodeNumberCell
#   where CellNumber is a sequential number starting at 01 and NodeNumber is
#   the node number that you used to define the node name.
#   The value for this parameter must not contain spaces or any characters
#   that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   Varies
#
# Parameter:  nodeName
#
# Description:
#   Specifies the node name for the node that is created with the new profile.
#   Use a unique value within the cell or on the workstation. Each profile
#   that shares the same set of product binaries must have a unique node name.
#   This parameter is required for profile creation only with the
#   dmgr.esbserverdefault.procsvrdefault.procctrdefault.procsvr.advdefault.
#   procctr.advdmgr.procctrmanaged.procctrmanaged.procsvr templates.

```

```

# The default value for this parameter is based on the short host name,
# profile type, and a trailing number, for example:
# if (DMgr)
#     shortHostNameCellManagerNodeNumber
# else
#     shortHostNameNodeNodeNumber
# where NodeNumber is a sequential number starting at 01.
# The value for this parameter must not contain spaces or any characters
# that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |.
#
# Valid Values:
#     Varies
# Default Values:
#     Varies
#####
cellName=cell_name
nodeName=node_name
#####
# Parameter: enableAdminSecurity
#
# Description:
#     For IBM Business Process Manager omit this parameter. Administrative
#     security is always enabled for IBM Business Process Manager profiles.
#     You must also specify the parameters -adminUserName and -adminPassword
#     along with the values for these parameters.
#
# Valid Values:
#     true
# Default Values:
#     true
#####
enableAdminSecurity=true
adminUserName=adminUser_ID
adminPassword=adminPassword
#####
# Parameter: signingCertDN
#
# Description:
#     Specifies the distinguished name of the root signing certificate that you
#     create when you create the profile. Specify the distinguished name in
#     quotation marks. This default personal certificate is located in the
#     server keystore file. If you do not specifically create or import a root
#     signing certificate, one is created by default. See the
#     -signingCertValidityPeriod parameter and the -keyStorePassword.
#
# Valid Values:
#     Varies
# Default Values:
#     None
#
# Parameter: signingCertValidityPeriod
#
# Description:
#     An optional parameter that specifies the amount of time in years that the
#     root signing certificate is valid. If you do not specify this parameter
#     with the -signingCertDN parameter, the root signing certificate is valid
#     for 20 years.
#
# Valid Values:
#     Varies
# Default Values:
#     None
#
# Parameter: keyStorePassword
#

```

```

# Description:
#   Specifies the password to use on all keystore files created during profile
#   creation. Keystore files are created for the default personal certificate
#   and the root signing certificate.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
#signingCertDN =distinguished_name
#signingCertValidityPeriod =validity_period
#keyStorePassword =keyStore_password
#####
# Parameter:  enableService
#
# Description:
#   Enables the creation of a Linux service. Valid values include true or
#   false. The default value for this parameter is false. When the
#   manageprofiles command-line utility is run with the -enableService option
#   set to true , the Linux service is created with the profile when the
#   command is run by the root user. When a nonroot user runs the
#   manageprofiles command-line utility, the profile is created, but the Linux
#   service is not. The Linux service is not created because the nonroot user
#   does not have sufficient permission to set up the service. An
#   INSTCONPARTIALSUCCESS result is displayed at the end of the profile
#   creation and the profile creation log
#   install_root/logs/manageprofiles/profile_name_create.log contains a
#   message indicating the current user does not have sufficient permission to
#   set up the Linux service. Use this parameter when creating profiles only.
#
# Valid Values:
#   false
#   true
# Default Values:
#   None
#
# Parameter:  serviceUserName
#
# Description:
#   Specifies the user ID that is used during the creation of the Linux
#   service so that the Linux service will run under this user ID. The Linux
#   service runs whenever the user ID is logged on. Not required.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter:  winserviceAccountType
#
# Description:
#   The type of the owner account of the Windows service created for the
#   profile. Valid values include specifieduser or localsystem. The
#   localsystem value runs the Windows service under the local account of the
#   user who creates the profile. The default value for this parameter is
#   localsystem. Use this parameter when creating profiles only.
#
# Valid Values:
#   localsystem
#   specifieduser
# Default Values:
#   localsystem
#
# Parameter:  winserviceUserName
#

```

```

# Description:
#   Specify your user ID so that the Windows operating system can verify you
#   as an ID that is capable of creating a Windows service. Your user ID must
#   belong to the Administrator group and have the following advanced user
#   rights:
#   Act as part of the operating system
#   Log on as a service
#   The default value for this parameter is the current user name. The value
#   for this parameter must not contain spaces or characters that are not
#   valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |. The user that
#   you specify must have the proper permissions to create a Windows service.
#   You must specify the correct password for the user name that you choose.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: winservicePassword
#
# Description:
#   Specify the password for the specified user or the local account that is
#   to own the Windows service.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: winserviceCheck
#
# Description:
#   The value can be either true or false. Specify true to create a Windows
#   service for the server process that is created within the profile. Specify
#   false to not create the Windows service. The default value for this
#   parameter is false.
#
# Valid Values:
#   false
#   true
# Default Values:
#   false
#
# Parameter: winserviceStartupType
#
# Description:
#   The following values for Windows service startup can be used:
#   manual
#   automatic
#   disabled
#   The default value for this parameter is manual.
#
# Valid Values:
#   manual
#   automatic
#   disabled
# Default Values:
#   manual
#####
#enableService=true
#serviceName=service_user_ID
#winserviceAccountType=localsystem
#winserviceUserName=winservice_user_ID
#winservicePassword=winservice_password
#winserviceCheck=false
#winserviceStartupType>manual

```

```

#####
# Parameter: dbType
#
# Description:
#   The database type. Set one of the following values for the type of
#   database product you are using with IBM Business Process Manager.
#
#   Required only for one of the following:
#   A stand-alone profile when -bpmdbDesign was not specified.
#   An advanced dmgr or managed profiles when -bpmdbDesign was not specified.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   ORACLE
# Default Values:
#   ORACLE
#
# Parameter: dbDriverType
#
# Description:
#   The database driver type. For an Oracle database, specify ORACLE. For
#   databases other than Oracle, the value is automatically set based on the
#   server operating system. Server installations on all operating systems use
#   type 4.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: dbJDBCClasspath
#
# Description:
#   The directory path location of JDBC driver files.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
dbType=ORACLE
dbDriverType=ORACLE_THIN
dbJDBCClasspath=${WAS_INSTALL_ROOT}/jdbcdrivers/Oracle
#####
# Parameter: federateLaterBPM
#
# Description:
#   Indicates if the managed profile is to be federated later using either the
#   profileTemplates/managed.esbserver or the
#   profileTemplates/BPM/managed.templateName template. Valid values are true
#   or false. If the -dmgrHost, -dmgrPort, -dmgrAdminUserName and
#   -dmgrAdminPassword parameters are not set, the default value for this
#   parameter is true. If you use -federateLaterBPM, you must either omit the
#   WebSphere Application Server-based parameter -federateLater or set it to
#   true.
#
# Valid Values:
#   false
#   true
# Default Values:
#   true

```

```

#
# Parameter: dmgrHost
#
# Description:
#   Identifies the workstation where the deployment manager is running.
#   Specify this parameter and the dmgrPort parameter to federate a custom
#   profile as it is created or augmented. This parameter is available with
#   the managed.templateName and managed.esbserver profile templates. The
#   host name can be the long or short DNS name or the IP address of the
#   deployment manager workstation. Specifying this optional parameter directs
#   the manageprofiles command-line utility to attempt to federate the custom
#   node into the deployment manager cell as it creates the custom profile.
#   This parameter is ignored when creating a deployment manager profile or
#   stand-alone server profile. If you federate a custom node when the
#   deployment manager is not running, the installation indicator in the logs
#   is INSTCONFFAILED to indicate a complete failure. The resulting custom
#   profile is unusable. You must move the custom profile directory out of the
#   profile repository (the profile's installation root directory) before
#   creating another custom profile with the same profile name. If you have
#   changed the default JMX connector type, you cannot federate with the
#   manageprofiles command-line utility. Use the addNode command later after
#   the node is created instead. The default value for this parameter is
#   localhost. The value for this parameter must be a properly formed host
#   name and must not contain spaces or characters that are not valid such as
#   the following: *, ?, ", <, >, , , /, \, and |. A connection to the
#   deployment manager must also be available in conjunction with the dmgrPort
#   parameter. Required if you are creating a managed profile with the
#   -federateLaterBPM parameter set to false and the deployment manager is not
#   on the local machine.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: dmgrPort
#
# Description:
#   Identifies the SOAP port of the deployment manager. Specify this parameter
#   and the dmgrHost parameter to federate a custom profile as it is created
#   or augmented. The deployment manager must be running and accessible. If
#   you have changed the default JMX connector type, you cannot federate with
#   the manageprofiles command-line utility. Use the addNode command later
#   after the node is created instead. The default value for this parameter is
#   8879. The port that you indicate must be a positive integer and a
#   connection to the deployment manager must be available in conjunction with
#   the dmgrHost parameter. Required if you are creating a managed profile,
#   the -federateLaterBPM parameter is set to false, and the deployment
#   manager was configured with a port that was not a default port.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
federateLaterBPM=true
#dmgrHost=dmgr_host_name
#dmgrPort=dmgr_port_number
#dmgrAdminUserName=dmgr_admin_user_name
#dmgrAdminPassword=dmgr_admin_password
#####
# Parameter: environmentType
#
# Description:
#   Specifies the environment type. The environment type refers to how IBM
#   Business Process Manager is used; for example, in a production, stage or

```



```

# test environment. Load testing might be done on a test server, while a
# stage environment type might be used as a temporary location to host
# changes before putting those changes into production. You might specify
# Stage as the Environment type if the server you are configuring will be
# accessed and used to review content and new functionality. Valid values
# are as follows:
# Test
# Use Test if the server you are configuring is to be used as a testing
# environment.
# Stage
# Use Stage if the server is to serve as a staging platform to be used as a
# preproduction server.
# Production
# Use Production if the server is to serve in a production capacity.
# The default value is Test.
#
# Valid Values:
# Test
# Production
# Stage
# Default Values:
# Test
#####
environmentType=Test

#####
# Parameter: isDeveloperServer
#
# Description:
# Specifies whether the server is intended for development purposes only.
# This parameter is useful when creating profiles to test applications on a
# non-production server prior to deploying the applications on their
# production application servers. If -isDeveloperServer is set when
# creating an IBM Business Process Manager profile, then a preconfigured VMM
# file repository is installed. This file repository contains a sample
# organization that can be used to test Business Process Choreographer
# people resolution, ready for you to use as is.
#
# Valid Values:
# false
# true
# Default Values:
# false
#####
#isDeveloperServer=false

```

SQL 用の Advanced Process Center カスタム・プロファイル作成の応答ファイル:

ここに用意されている応答ファイルを変更し、**manageprofiles** コマンド行ユーティリティと一緒に使用して、SQL データベース用のカスタム・プロファイルを作成します。

注: ご使用のオペレーティング・システムに合わせて、必要に応じて応答ファイルの情報をコメント化またはアンコメントしてください。詳細については、応答ファイルのコメントを参照してください。

```

# BEGIN COPYRIGHT
# *****
#
# Licensed Materials - Property of IBM
# 5725-C94
# (C) Copyright IBM Corporation 2011, 2012. All Rights Reserved.
# This sample program is provided AS IS and may be used, copied
# and modified without royalty payment by customer (a) for its own
# instruction and study, (b) in order to develop applications designed to
# run with an IBM WebSphere product, either for customer's own internal
# use or for redistribution by customer, as part of such an application,
# in customer's own products.

```

```

#
# *****
# END COPYRIGHT

#####
# These response file has the applicable parameters for creating a
# Managed PC Adv profile that uses SQLServer.
#
# Depending on your environment, you may need to change the default values.
#
# To create a profile with this response file specify:
#
# was.install.root/bin/manageprofiles -response PC_Adv_Managed_SQLServer.response
#
# If you use the -response parameter, it must be the only parameter on
# the command-line. If you include any manageprofile parameters
# (in addition to -response) on the command-line, the response file
# is ignored. And default WebSphere Application server profile will be created .
#####

#####
# Parameter: create
#
# Description:
#   Creates the profile.
#   If you are creating a profile, this parameter is required.
#####
create

#####
# Parameter: templatePath
#
# Description:
#   Specifies the directory path to the template files in the installation
#   root directory. Within the profileTemplates directory are various
#   directories that correspond to different profile types and that vary with
#   the type of product installed. The profile directories are the paths that
#   you indicate while using the -templatePath option.
#   Use absolute paths. This parameter must exist as a directory and point to
#   a valid template directory.
#
#   When using the -templatePath parameter, specify the fully qualified file
#   path for the parameter.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
templatePath=BPM/managed.procctr.adv

#####
# Parameter: profileName
#
# Description:
#   Specifies the name of the profile. Use a unique value when creating a
#   profile.
#   Each profile that shares the same set of product binaries must have a
#   unique name. The default profile name is based on the profile type and a
#   trailing number, for example:
#   profileType ProfileNumberwhere profileType is a value such as ProcSrv,
#   Dmgr, or Custom and ProfileNumber is a sequential number that creates a
#   unique profile name. The value for this parameter must not contain spaces
#   or characters that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,,
#   /, \, and |. The profile name that you choose must not be in use. On
#   Windows platforms: If the fully qualified path contains spaces, enclose
#   the value in quotation marks. The default value is based on the

```

```

#   install_root directory, the profiles subdirectory, and the name of the
#   file. For example, the default for profile creation is:
#   WS_WSPROFILE_DEFAULT_PROFILE_HOME/profileNamewhere
#   WS_WSPROFILE_DEFAULT_PROFILE_HOME is defined in the wasprofile.properties
#   file in the install_root/properties directory. The value for this
#   parameter must be a valid path for the target system and must not be
#   currently in use. You must have permissions to write to the directory.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
profileName=Custom01

#####
# Parameter:  cellName
#
# Description:
#   Specifies the cell name of the profile. Use a unique cell name for each
#   profile.
#   The default value for this parameter is based on a combination of the
#   short host name, the constant Cell, and a trailing number, for example:
#   if (DMgr)
#       shortHostNameCellCellNumber
#   else
#       shortHostNameNodeNodeNumberCell
#   where CellNumber is a sequential number starting at 01 and NodeNumber is
#   the node number that you used to define the node name.
#   The value for this parameter must not contain spaces or any characters
#   that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   Varies
#
# Parameter:  nodeName
#
# Description:
#   Specifies the node name for the node that is created with the new profile.
#   Use a unique value within the cell or on the workstation. Each profile
#   that shares the same set of product binaries must have a unique node name.
#   This parameter is required for profile creation only with the
#   dmgr.esbserverdefault.procsvrdefault.procctrdefault.procsvr.advdefault.
#   procctr.advdmgr.procctrmanaged.procctrmanaged.procsvr templates.
#   The default value for this parameter is based on the short host name,
#   profile type, and a trailing number, for example:
#   if (DMgr)
#       shortHostNameCellManagerNodeNumber
#   else
#       shortHostNameNodeNodeNumber
#   where NodeNumber is a sequential number starting at 01.
#   The value for this parameter must not contain spaces or any characters
#   that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   Varies
#####
cellName=cell_name
nodeName=node_name

#####
# Parameter:  enableAdminSecurity
#

```

```

# Description:
#   For IBM Business Process Manager omit this parameter. Administrative
#   security is always enabled for IBM Business Process Manager profiles.
#   You must also specify the parameters -adminUserName and -adminPassword
#   along with the values for these parameters.
#
# Valid Values:
#   true
# Default Values:
#   true
#####
enableAdminSecurity=true
adminUserName=adminUser_ID
adminPassword=adminPassword

#####
# Parameter: signingCertDN
#
# Description:
#   Specifies the distinguished name of the root signing certificate that you
#   create when you create the profile. Specify the distinguished name in
#   quotation marks. This default personal certificate is located in the
#   server keystore file. If you do not specifically create or import a root
#   signing certificate, one is created by default. See the
#   -signingCertValidityPeriod parameter and the -keyStorePassword.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: signingCertValidityPeriod
#
# Description:
#   An optional parameter that specifies the amount of time in years that the
#   root signing certificate is valid. If you do not specify this parameter
#   with the -signingCertDN parameter, the root signing certificate is valid
#   for 20 years.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: keyStorePassword
#
# Description:
#   Specifies the password to use on all keystore files created during profile
#   creation. Keystore files are created for the default personal certificate
#   and the root signing certificate.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
#signingCertDN =distinguished_name
#signingCertValidityPeriod =validity_period
#keyStorePassword =keyStore_password

#####
# Parameter: enableService
#
# Description:
#   Enables the creation of a Linux service. Valid values include true or
#   false. The default value for this parameter is false. When the
#   manageprofiles command-line utility is run with the -enableService option

```

```

# set to true , the Linux service is created with the profile when the
# command is run by the root user. When a nonroot user runs the
# manageprofiles command-line utility, the profile is created, but the Linux
# service is not. The Linux service is not created because the nonroot user
# does not have sufficient permission to set up the service. An
# INSTCONPARTIALSUCCESS result is displayed at the end of the profile
# creation and the profile creation log
# install_root/logs/manageprofiles/profile_name_create.log contains a
# message indicating the current user does not have sufficient permission to
# set up the Linux service. Use this parameter when creating profiles only.
#
# Valid Values:
# false
# true
# Default Values:
# None
#
# Parameter: serviceUserName
#
# Description:
# Specifies the user ID that is used during the creation of the Linux
# service so that the Linux service will run under this user ID. The Linux
# service runs whenever the user ID is logged on. Not required.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# None
#
# Parameter: winserviceAccountType
#
# Description:
# The type of the owner account of the Windows service created for the
# profile. Valid values include specifieduser or localsystem. The
# localsystem value runs the Windows service under the local account of the
# user who creates the profile. The default value for this parameter is
# localsystem. Use this parameter when creating profiles only.
#
# Valid Values:
# localsystem
# specifieduser
# Default Values:
# localsystem
#
# Parameter: winserviceUserName
#
# Description:
# Specify your user ID so that the Windows operating system can verify you
# as an ID that is capable of creating a Windows service. Your user ID must
# belong to the Administrator group and have the following advanced user
# rights:
# Act as part of the operating system
# Log on as a service
# The default value for this parameter is the current user name. The value
# for this parameter must not contain spaces or characters that are not
# valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |. The user that
# you specify must have the proper permissions to create a Windows service.
# You must specify the correct password for the user name that you choose.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# None
#
# Parameter: winservicePassword
#
# Description:

```

```

# Specify the password for the specified user or the local account that is
# to own the Windows service.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: winserviceCheck
#
# Description:
#   The value can be either true or false. Specify true to create a Windows
#   service for the server process that is created within the profile. Specify
#   false to not create the Windows service. The default value for this
#   parameter is false.
#
# Valid Values:
#   false
#   true
# Default Values:
#   false
#
# Parameter: winserviceStartupType
#
# Description:
#   The following values for Windows service startup can be used:
#   manual
#   automatic
#   disabled
#   The default value for this parameter is manual.
#
# Valid Values:
#   manual
#   automatic
#   disabled
# Default Values:
#   manual
#####
#enableService=true
#serviceName=service_user_ID
#winserviceAccountType=localsystem
#winserviceUserName=winservice_user_ID
#winservicePassword=winservice_password
#winserviceCheck=false
#winserviceStartupType>manual
#####
# Parameter: dbType
#
# Description:
#   The database type. Set one of the following values for the type of
#   database product you are using with IBM Business Process Manager.
#
#   Required only for one of the following:
#   A stand-alone profile when -bpmdbDesign was not specified.
#   An advanced dmgr or managed profiles when -bpmdbDesign was not specified.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   MSSQLSERVER_MICROSOFT
# Default Values:
#   MSSQLSERVER_MICROSOFT
#
# Parameter: dbJDBCClasspath
#
# Description:

```

```

# The directory path location of JDBC driver files.
#
# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
dbType=MSSQLSERVER_MICROSOFT
dbJDBCClasspath=${WAS_INSTALL_ROOT}/jdbcdrivers/SQLServer
#####
# Parameter: dbWinAuth
#
# Description:
#   An optional parameter that is valid in all default profile templates.
#   Specify true to indicate that you are running SQL Server using integrated
#   windows authentication.
#
# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   false
#   true
# Default Values:
#   None
#####
#dbWinAuth=true
#####
# Parameter: federateLaterBPM
#
# Description:
#   Indicates if the managed profile is to be federated later using either the
#   profileTemplates/managed.esbserver or the
#   profileTemplates/BPM/managed.templateName template. Valid values are true
#   or false. If the -dmgrHost, -dmgrPort, -dmgrAdminUserName and
#   -dmgrAdminPassword parameters are not set, the default value for this
#   parameter is true. If you use -federateLaterBPM, you must either omit the
#   WebSphere Application Server-based parameter -federateLater or set it to
#   true.
#
# Valid Values:
#   false
#   true
# Default Values:
#   true
#
# Parameter: dmgrHost
#
# Description:
#   Identifies the workstation where the deployment manager is running.
#   Specify this parameter and the dmgrPort parameter to federate a custom
#   profile as it is created or augmented. This parameter is available with
#   the managed.templateName and managed.esbserver profile templates. The
#   host name can be the long or short DNS name or the IP address of the
#   deployment manager workstation. Specifying this optional parameter directs
#   the manageprofiles command-line utility to attempt to federate the custom
#   node into the deployment manager cell as it creates the custom profile.
#   This parameter is ignored when creating a deployment manager profile or
#   stand-alone server profile. If you federate a custom node when the
#   deployment manager is not running, the installation indicator in the logs
#   is INSTCONFFAILED to indicate a complete failure. The resulting custom
#   profile is unusable. You must move the custom profile directory out of the
#   profile repository (the profile's installation root directory) before
#   creating another custom profile with the same profile name. If you have

```



```

#   changed the default JMX connector type, you cannot federate with the
#   manageprofiles command-line utility. Use the addNode command later after
#   the node is created instead. The default value for this parameter is
#   localhost. The value for this parameter must be a properly formed host
#   name and must not contain spaces or characters that are not valid such as
#   the following: *, ?, ", <, >, , , /, \, and |. A connection to the
#   deployment manager must also be available in conjunction with the dmgrPort
#   parameter. Required if you are creating a managed profile with the
#   -federateLaterBPM parameter set to false and the deployment manager is not
#   on the local machine.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter:  dmgrPort
#
# Description:
#   Identifies the SOAP port of the deployment manager. Specify this parameter
#   and the dmgrHost parameter to federate a custom profile as it is created
#   or augmented. The deployment manager must be running and accessible. If
#   you have changed the default JMX connector type, you cannot federate with
#   the manageprofiles command-line utility. Use the addNode command later
#   after the node is created instead. The default value for this parameter is
#   8879. The port that you indicate must be a positive integer and a
#   connection to the deployment manager must be available in conjunction with
#   the dmgrHost parameter. Required if you are creating a managed profile,
#   the -federateLaterBPM parameter is set to false, and the deployment
#   manager was configured with a port that was not a default port.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
federateLaterBPM=true
#dmgrHost=dmgr_host_name
#dmgrPort=dmgr_port_number
#dmgrAdminUserName=dmgr_admin_user_name
#dmgrAdminPassword=dmgr_admin_password
#####
# Parameter:  environmentType
#
# Description:
#   Specifies the environment type. The environment type refers to how IBM
#   Business Process Manager is used; for example, in a production, stage or
#   test environment. Load testing might be done on a test server, while a
#   stage environment type might be used as a temporary location to host
#   changes before putting those changes into production. You might specify
#   Stage as the Environment type if the server you are configuring will be
#   accessed and used to review content and new functionality. Valid values
#   are as follows:
#   Test
#   Use Test if the server you are configuring is to be used as a testing
#   environment.
#   Stage
#   Use Stage if the server is to serve as a staging platform to be used as a
#   preproduction server.
#   Production
#   Use Production if the server is to serve in a production capacity.
#   The default value is Test.
#
# Valid Values:
#   Test
#   Production

```

```

# Stage
# Default Values:
# Test
#####
environmentType=Test

#####
# Parameter: isDeveloperServer
#
# Description:
# Specifies whether the server is intended for development purposes only.
# This parameter is useful when creating profiles to test applications on a
# non-production server prior to deploying the applications on their
# production application servers. If -isDeveloperServer is set when
# creating an IBM Business Process Manager profile, then a preconfigured VMM
# file repository is installed. This file repository contains a sample
# organization that can be used to test Business Process Choreographer
# people resolution, ready for you to use as is.
#
# Valid Values:
# false
# true
# Default Values:
# false
#####
#isDeveloperServer=false

```

manageprofiles を使用した Process Server デプロイメント・マネージャー・プロファイルとカスタム・プロファイルの作成:

manageprofiles コマンド行ユーティリティを使用して、Network Deployment 構成用の Process Server デプロイメント・マネージャー・プロファイルおよびカスタム・プロファイルを作成します。

manageprofiles コマンド行ユーティリティを実行する前に、以下の作業が完了していることを確認します。

- プロファイルを作成または拡張するための前提条件を確認済みである。
- プロファイル作成コマンドの例を確認済みである。
- 同じプロファイルで **manageprofiles** コマンド行ユーティリティを実行していないことを検査している。エラー・メッセージが表示された場合は、別のプロファイル作成操作や拡張操作が進行中かどうかを確認してください。実行されている場合は、完了するまで待ってください。

このタスクでは、**manageprofiles** コマンド行ユーティリティを使用して、Network Deployment 構成用のデプロイメント・マネージャー・プロファイルとカスタム・プロファイルを作成する方法について説明します。Process Server デプロイメント・マネージャーの場合はこのタスクを使用し、Network Deployment 構成の場合はカスタム・プロファイルを使用します。

manageprofiles コマンド行ユーティリティを使用してプロファイルを作成するには、以下の手順を実行します。

1. 作成するプロファイルの種類を決定します。これにより、新しいプロファイルに使用するテンプレートが決まります (**-templatePath** オプションを使用)。

各プロファイルのテンプレートは、*install_root/profileTemplates/BPM* ディレクトリー (BPM テンプレートの場合) および *install_root/profileTemplates* の下 (その他の製品の場合) にあります。

以下のテンプレートを使用できます。

- `dmgr.procsvr`: デプロイメント・マネージャー・プロファイル用で、デプロイメント・マネージャーを定義します。デプロイメント・マネージャーは、1 つ以上のワークステーション上にあるサーバーの論理グループに、1 つの管理インターフェースを提供します。
 - `dmgr.procsvr.adv`: Process Server デプロイメント・マネージャー・プロファイル用で、IBM BPM Advanced 構成に固有の機能を持ったデプロイメント・マネージャー・サーバーを定義します。
 - `managed.procsvr`: Process Server カスタム・プロファイル用で、デプロイメント・マネージャーにフェデレートされた場合、管理対象ノードを定義します。使用するソリューションに Network Deployment 構成が必要であると判断した場合、ランタイム環境には 1 つ以上の管理対象ノードが必要になります。カスタム・プロファイルには、稼働状態にするにはデプロイメント・マネージャー・セルにフェデレートする必要がある空のノードがあります。カスタム・プロファイルを統合すると、カスタム・プロファイルが管理対象ノードに変更されます。統合先のデプロイメント・マネージャーのリリース・レベルが、作成しているカスタム・プロファイルのリリース・レベル以上でない場合は、ノードを統合しないでください。また、IBM Business Process Manager Advanced: Process Server プロファイルは WebSphere Enterprise Service Bus デプロイメント・マネージャーを使用できませんが、WebSphere Enterprise Service Bus プロファイルは IBM Business Process Manager Advanced: Process Server デプロイメント・マネージャーを使用できます。
 - `managed.procsvr.adv`: Process Server カスタム・プロファイル用。デプロイメント・マネージャーに統合されると、IBM BPM Advanced 構成に固有の機能を持った管理対象ノードを定義します。
 - `dmgr.esbserver`: WebSphere Enterprise Service Bus デプロイメント・マネージャー・プロファイル用。デプロイメント・マネージャーを定義します。
 - `managed.esbserver`: WebSphere Enterprise Service Bus カスタム・プロファイル用で、デプロイメント・マネージャーに統合されている場合に、管理対象ノードを定義します。統合先のデプロイメント・マネージャーのリリース・レベルが、作成しているカスタム・プロファイルのリリース・レベル以上でない場合は、ノードを統合しないでください。WebSphere Enterprise Service Bus プロファイルでは Enterprise Service Bus または IBM Business Process Manager Process Server デプロイメント・マネージャーを使用できます。
- 『`manageprofile` の例』に記載されているプロファイル作成コマンドの例を検討して、ご使用のプロファイルのタイプにどのパラメーターが必要であるかを判断します。
 - プロファイルに提供する値を決定します。これを行うには、`manageprofiles` パラメーターのトピックで示されているデフォルト値を確認して、それらがプロファイルに必要なものであるかどうかを検討します。
 - 応答ファイルを作成します。

サンプル応答ファイルは、`install_root/BPM/samples/manageprofiles/` ディレクトリーの下にあります。作成するプロファイル (スタンドアロンまたはネットワーク、Process Center または Process Server) に応じて適切な応答ファイルを選択し、環境に合わせてファイルをカスタマイズしてください。

重要: 値の後にスペースが入っている (例えば、'`personalCertValidityPeriod=1`' や '`winserviceCheck=false`') ことがないようにしてください。スペースがある場合は、プロファイルの作成が失敗します。

『IBM Business Process Manager サンプルを使用した応答ファイルの作成』を参照してください。

5. `-response` パラメーターと、作成した応答ファイルの名前を使用して、コマンド行から `manageprofiles` コマンドを実行します。
 - **Linux** **UNIX** `manageprofiles.sh -response myResponseFile`
 - **Windows** `manageprofiles.bat -response myResponseFile`

コマンドにより、実行につれて状況が表示されます。コマンドが終了するまで待機します。他の応答ファイルと同様に、ファイルの構文解析時には応答ファイルに対する通常の構文検査が適用されます。応答ファイルの個々の値はコマンド行パラメーターと見なされます。

6. SMTP サーバーを手動で構成して、メール通知を使用可能にします。『SMTP サーバーの構成』を参照してください。

関連概念:

230 ページの『プロファイルの作成または拡張に関する前提条件』

プロファイルの作成または拡張を実行する前に、一連の前提条件が満たされていることを確認する必要があります。

784 ページの『**manageprofiles** の例』

このセクションの例では、**manageprofiles** コマンド行ユーティリティーを使用して、スタンドアロン・プロファイル、デプロイメント・マネージャー・プロファイル、およびカスタム (管理対象ノード) プロファイルを作成する方法を示します。

Standard Process Server 用の応答ファイル:

manageprofiles コマンド行ユーティリティーと応答ファイルを使用して、デプロイメント・マネージャー・プロファイルを作成します。

DB2 用の *Standard Process Server* デプロイメント・マネージャー・プロファイル作成の応答ファイル:

ここに用意されている応答ファイルを変更し、**manageprofiles** コマンド行ユーティリティーと一緒に使用して、DB2 データベース用のデプロイメント・マネージャー・プロファイルを作成します。

注: ご使用のオペレーティング・システムに合わせて、必要に応じて応答ファイルの情報をコメント化またはアンコメントしてください。詳細については、応答ファイルのコメントを参照してください。

```
# BEGIN COPYRIGHT
# *****
#
# Licensed Materials - Property of IBM
# 5725-C94
# (C) Copyright IBM Corporation 2011, 2012. All Rights Reserved.
# This sample program is provided AS IS and may be used, executed, copied
# and modified without royalty payment by customer (a) for its own
# instruction and study, (b) in order to develop applications designed to
# run with an IBM WebSphere product, either for customer's own internal
# use or for redistribution by customer, as part of such an application,
# in customer's own products.
#
# *****
# END COPYRIGHT

#####
# These response file has the applicable parameters for creating a
# DMgr PS Std profile that uses DB2.
#
# Depending on your environment, you may need to change the default values.
#
# To create a profile with this response file specify:
#
# was.install.root/bin/manageprofiles -response PS_Std_DMGr_DB2.response
#
# If you use the -response parameter, it must be the only parameter on
# the command-line. If you include any manageprofile parameters
# (in addition to -response) on the command-line, the response file
# is ignored. And default WebSphere Application server profile will be created .
#####
```

```

#####
# Parameter: create
#
# Description:
#   Creates the profile.
#   If you are creating a profile, this parameter is required.
#####
create

#####
# Parameter: templatePath
#
# Description:
#   Specifies the directory path to the template files in the installation
#   root directory. Within the profileTemplates directory are various
#   directories that correspond to different profile types and that vary with
#   the type of product installed. The profile directories are the paths that
#   you indicate while using the -templatePath option.
#   Use absolute paths. This parameter must exist as a directory and point to
#   a valid template directory.
#
#   When using the -templatePath parameter, specify the fully qualified file
#   path for the parameter.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
templatePath=BPM/dmgr.procsvr

#####
# Parameter: profileName
#
# Description:
#   Specifies the name of the profile. Use a unique value when creating a
#   profile.
#   Each profile that shares the same set of product binaries must have a
#   unique name. The default profile name is based on the profile type and a
#   trailing number, for example:
#   profileType ProfileNumberwhere profileType is a value such as ProcSrv,
#   Dmgr, or Custom and ProfileNumber is a sequential number that creates a
#   unique profile name. The value for this parameter must not contain spaces
#   or characters that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,,
#   /, \, and |. The profile name that you choose must not be in use. On
#   Windows platforms: If the fully qualified path contains spaces, enclose
#   the value in quotation marks. The default value is based on the
#   install_root directory, the profiles subdirectory, and the name of the
#   file. For example, the default for profile creation is:
#   WS_WSPROFILE_DEFAULT_PROFILE_HOME/profileNamewhere
#   WS_WSPROFILE_DEFAULT_PROFILE_HOME is defined in the wasprofile.properties
#   file in the install_root/properties directory. The value for this
#   parameter must be a valid path for the target system and must not be
#   currently in use. You must have permissions to write to the directory.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
profileName=Dmgr01

#####
# Parameter: cellName
#
# Description:

```

```

# Specifies the cell name of the profile. Use a unique cell name for each
# profile.
# The default value for this parameter is based on a combination of the
# short host name, the constant Cell, and a trailing number, for example:
# if (DMgr)
#     shortHostNameCellCellNumber
# else
#     shortHostNameNodeNodeNumberCell
# where CellNumber is a sequential number starting at 01 and NodeNumber is
# the node number that you used to define the node name.
# The value for this parameter must not contain spaces or any characters
# that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |.
#
# Valid Values:
#     Varies
# Default Values:
#     Varies
#
# Parameter: nodeName
#
# Description:
#     Specifies the node name for the node that is created with the new profile.
#     Use a unique value within the cell or on the workstation. Each profile
#     that shares the same set of product binaries must have a unique node name.
#     This parameter is required for profile creation only with the
#     dmgr.esbserverdefault.procsvrdefault.procctrdefault.procsvr.advdefault.
#     procctr.advdmgr.procctrmanaged.procctrmanaged.procsvr templates.
#     The default value for this parameter is based on the short host name,
#     profile type, and a trailing number, for example:
#     if (DMgr)
#         shortHostNameCellManagerNodeNumber
#     else
#         shortHostNameNodeNodeNumber
#     where NodeNumber is a sequential number starting at 01.
#     The value for this parameter must not contain spaces or any characters
#     that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |.
#
# Valid Values:
#     Varies
# Default Values:
#     Varies
#####
cellName=cell_name
nodeName=node_name

#####
# Parameter: enableAdminSecurity
#
# Description:
#     For IBM Business Process Manager omit this parameter. Administrative
#     security is always enabled for IBM Business Process Manager profiles.
#     You must also specify the parameters -adminUserName and -adminPassword
#     along with the values for these parameters.
#
# Valid Values:
#     true
# Default Values:
#     true
#####
enableAdminSecurity=true
adminUserName=adminUser_ID
adminPassword=adminPassword

#####
# Parameter: signingCertDN
#
# Description:

```

```

# Specifies the distinguished name of the root signing certificate that you
# create when you create the profile. Specify the distinguished name in
# quotation marks. This default personal certificate is located in the
# server keystore file. If you do not specifically create or import a root
# signing certificate, one is created by default. See the
# -signingCertValidityPeriod parameter and the -keyStorePassword.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: signingCertValidityPeriod
#
# Description:
#   An optional parameter that specifies the amount of time in years that the
#   root signing certificate is valid. If you do not specify this parameter
#   with the -signingCertDN parameter, the root signing certificate is valid
#   for 20 years.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: keyStorePassword
#
# Description:
#   Specifies the password to use on all keystore files created during profile
#   creation. Keystore files are created for the default personal certificate
#   and the root signing certificate.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
#signingCertDN =distinguished_name
#signingCertValidityPeriod =validity_period
#keyStorePassword =keyStore_password
#####
# Parameter: defaultPorts
#
# Description:
#   Assigns the default or base port values to the profile.d o not use this
#   parameter when using the -startingPort or -portsFile parameter.
#   During profile creation, the manageprofiles command-line utility uses an
#   automatically generated set of recommended ports if you do not specify the
#   -startingPort parameter, the -defaultPorts parameter or the -portsFile
#   parameter. The recommended port values can be different than the default
#   port values based on the availability of the default ports.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: startingPort
#
# Description:
#   Specifies the starting port number for generating and assigning all ports
#   for the profile.
#   Port values are assigned sequentially from the -startingPort value,
#   omitting those ports that are already in use. The system recognizes and
#   resolves ports that are currently in use and determines the port
#   assignments to avoid port conflicts.

```



```

# Do not use this parameter with the -defaultPorts or -portsFile parameters.
# During profile creation, the manageprofiles command-line utility uses an
# automatically generated set of recommended ports if you do not specify the
# -startingPort parameter, the -defaultPorts parameter or the -portsFile
# parameter. The recommended port values can be different than the default
# port values based on the availability of the default ports.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter:  portsFile
#
# Description:
#   An optional parameter that specifies the path to a file that defines port
#   settings for the new profile.
#   Do not use this parameter when using the -startingPort or -defaultPorts
#   parameter.
#   During profile creation, the manageprofiles command-line utility uses an
#   automatically generated set of recommended ports if you do not specify the
#   -startingPort parameter, the -defaultPorts parameter or the -portsFile
#   parameter. The recommended port values can be different than the default
#   port values based on the availability of the default ports.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
#defaultPorts=default_ports
#startingPort=startingPort
#portsFile=file_path

#####
# Parameter:  enableService
#
# Description:
#   Enables the creation of a Linux service. Valid values include true or
#   false. The default value for this parameter is false. When the
#   manageprofiles command-line utility is run with the -enableService option
#   set to true , the Linux service is created with the profile when the
#   command is run by the root user. When a nonroot user runs the
#   manageprofiles command-line utility, the profile is created, but the Linux
#   service is not. The Linux service is not created because the nonroot user
#   does not have sufficient permission to set up the service. An
#   INSTCONPARTIALSUCCESS result is displayed at the end of the profile
#   creation and the profile creation log
#   install_root/logs/manageprofiles/profile_name_create.log contains a
#   message indicating the current user does not have sufficient permission to
#   set up the Linux service. Use this parameter when creating profiles only.
#
# Valid Values:
#   false
#   true
# Default Values:
#   None
#
# Parameter:  serviceUserName
#
# Description:
#   Specifies the user ID that is used during the creation of the Linux
#   service so that the Linux service will run under this user ID. The Linux
#   service runs whenever the user ID is logged on. Not required.
#
# Valid Values:
#   Varies

```

```

# Default Values:
#   None
#
# Parameter: winserviceAccountType
#
# Description:
#   The type of the owner account of the Windows service created for the
#   profile. Valid values include specifieduser or localsystem. The
#   localsystem value runs the Windows service under the local account of the
#   user who creates the profile. The default value for this parameter is
#   localsystem. Use this parameter when creating profiles only.
#
# Valid Values:
#   localsystem
#   specifieduser
# Default Values:
#   localsystem
#
# Parameter: winserviceUserName
#
# Description:
#   Specify your user ID so that the Windows operating system can verify you
#   as an ID that is capable of creating a Windows service. Your user ID must
#   belong to the Administrator group and have the following advanced user
#   rights:
#   Act as part of the operating system
#   Log on as a service
#   The default value for this parameter is the current user name. The value
#   for this parameter must not contain spaces or characters that are not
#   valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |. The user that
#   you specify must have the proper permissions to create a Windows service.
#   You must specify the correct password for the user name that you choose.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: winservicePassword
#
# Description:
#   Specify the password for the specified user or the local account that is
#   to own the Windows service.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: winserviceCheck
#
# Description:
#   The value can be either true or false. Specify true to create a Windows
#   service for the server process that is created within the profile. Specify
#   false to not create the Windows service. The default value for this
#   parameter is false.
#
# Valid Values:
#   false
#   true
# Default Values:
#   false
#
# Parameter: winserviceStartupType
#
# Description:
#   The following values for Windows service startup can be used:

```

```

#    manual
#    automatic
#    disabled
#    The default value for this parameter is manual.
#
# Valid Values:
#    manual
#    automatic
#    disabled
# Default Values:
#    manual
#####
#enableService=true
#serviceName=service_user_ID
#winserviceAccountType=localsystem
#winserviceUserName=winservice_user_ID
#winservicePassword=winservice_password
#winserviceCheck=false
#winserviceStartupType=manual

#####
# Parameter:  environmentType
#
# Description:
#    Specifies the environment type. The environment type refers to how IBM
#    Business Process Manager is used; for example, in a production, stage or
#    test environment. Load testing might be done on a test server, while a
#    stage environment type might be used as a temporary location to host
#    changes before putting those changes into production. You might specify
#    Stage as the Environment type if the server you are configuring will be
#    accessed and used to review content and new functionality. Valid values
#    are as follows:
#    Test
#    Use Test if the server you are configuring is to be used as a testing
#    environment.
#    Stage
#    Use Stage if the server is to serve as a staging platform to be used as a
#    preproduction server.
#    Production
#    Use Production if the server is to serve in a production capacity.
#    The default value is Test.
#
# Valid Values:
#    Test
#    Production
#    Stage
# Default Values:
#    Test
#####
environmentType=Test

#####
# Parameter:  isDeveloperServer
#
# Description:
#    Specifies whether the server is intended for development purposes only.
#    This parameter is useful when creating profiles to test applications on a
#    non-production server prior to deploying the applications on their
#    production application servers. If -isDeveloperServer is set when
#    creating an IBM Business Process Manager profile, then a preconfigured VMM
#    file repository is installed. This file repository contains a sample
#    organization that can be used to test Business Process Choreographer
#    people resolution, ready for you to use as is.
#
# Valid Values:
#    false
#    true

```

```
# Default Values:
#   false
#####
#isDeveloperServer=false
```

DB2 for z/OS 用の Standard Process Server デプロイメント・マネージャー・プロファイル作成の応答ファイル:

ここに用意されている応答ファイルを変更し、**manageprofiles** コマンド行ユーティリティと一緒に使用して、DB2 for z/OS データベース用のデプロイメント・マネージャー・プロファイルを作成します。

注: ご使用のオペレーティング・システムに合わせて、必要に応じて応答ファイルの情報をコメント化またはアンコメントしてください。詳細については、応答ファイルのコメントを参照してください。

```
# BEGIN COPYRIGHT
# *****
#
# Licensed Materials - Property of IBM
# 5725-C94
# (C) Copyright IBM Corporation 2011, 2012. All Rights Reserved.
# This sample program is provided AS IS and may be used, executed, copied
# and modified without royalty payment by customer (a) for its own
# instruction and study, (b) in order to develop applications designed to
# run with an IBM WebSphere product, either for customer's own internal
# use or for redistribution by customer, as part of such an application,
# in customer's own products.
#
# *****
# END COPYRIGHT

#####
# These response file has the applicable parameters for creating a
# DMgr PS Std profile that uses DB2zOS.
#
# Depending on your environment, you may need to change the default values.
#
# To create a profile with this response file specify:
#
# was.install.root/bin/manageprofiles -response PS_Std_DMGr_DB2zOS.response
#
# If you use the -response parameter, it must be the only parameter on
# the command-line. If you include any manageprofile parameters
# (in addition to -response) on the command-line, the response file
# is ignored. And default WebSphere Application server profile will be created .
#####

#####
# Parameter: create
#
# Description:
#   Creates the profile.
#   If you are creating a profile, this parameter is required.
#####
create

#####
# Parameter: templatePath
#
# Description:
#   Specifies the directory path to the template files in the installation
#   root directory. Within the profileTemplates directory are various
#   directories that correspond to different profile types and that vary with
#   the type of product installed. The profile directories are the paths that
#   you indicate while using the -templatePath option.
#   Use absolute paths. This parameter must exist as a directory and point to
```

```

# a valid template directory.
#
# When using the -templatePath parameter, specify the fully qualified file
# path for the parameter.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
templatePath=BPM/dmgr.procsvr

#####
# Parameter:  profileName
#
# Description:
#   Specifies the name of the profile. Use a unique value when creating a
#   profile.
#   Each profile that shares the same set of product binaries must have a
#   unique name. The default profile name is based on the profile type and a
#   trailing number, for example:
#   profileType ProfileNumberwhere profileType is a value such as ProcSrv,
#   Dmgr, or Custom and ProfileNumber is a sequential number that creates a
#   unique profile name. The value for this parameter must not contain spaces
#   or characters that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,,
#   /, \, and |. The profile name that you choose must not be in use. On
#   Windows platforms: If the fully qualified path contains spaces, enclose
#   the value in quotation marks. The default value is based on the
#   install_root directory, the profiles subdirectory, and the name of the
#   file. For example, the default for profile creation is:
#   WS_WSPROFILE_DEFAULT_PROFILE_HOME/profileNamewhere
#   WS_WSPROFILE_DEFAULT_PROFILE_HOME is defined in the wasprofile.properties
#   file in the install_root/properties directory. The value for this
#   parameter must be a valid path for the target system and must not be
#   currently in use. You must have permissions to write to the directory.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
profileName=Dmgr01

#####
# Parameter:  cellName
#
# Description:
#   Specifies the cell name of the profile. Use a unique cell name for each
#   profile.
#   The default value for this parameter is based on a combination of the
#   short host name, the constant Cell, and a trailing number, for example:
#   if (DMgr)
#     shortHostNameCellCellNumber
#   else
#     shortHostNameNodeNodeNumberCell
#   where CellNumber is a sequential number starting at 01 and NodeNumber is
#   the node number that you used to define the node name.
#   The value for this parameter must not contain spaces or any characters
#   that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   Varies
#
# Parameter:  nodeName
#

```

```

# Description:
#   Specifies the node name for the node that is created with the new profile.
#   Use a unique value within the cell or on the workstation. Each profile
#   that shares the same set of product binaries must have a unique node name.
#   This parameter is required for profile creation only with the
#   dmgr.esbserverdefault.procsvrdefault.procctrdefault.procsvr.advdefault.
#   procctr.advdmgr.procctrmanaged.procctrmanaged.procsvr templates.
#   The default value for this parameter is based on the short host name,
#   profile type, and a trailing number, for example:
#   if (DMgr)
#       shortHostNameCellManagerNodeNumber
#   else
#       shortHostNameNodeNodeNumber
#   where NodeNumber is a sequential number starting at 01.
#   The value for this parameter must not contain spaces or any characters
#   that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   Varies
#####
cellName=cell_name
nodeName=node_name
#####
# Parameter:  enableAdminSecurity
#
# Description:
#   For IBM Business Process Manager omit this parameter. Administrative
#   security is always enabled for IBM Business Process Manager profiles.
#   You must also specify the parameters -adminUserName and -adminPassword
#   along with the values for these parameters.
#
# Valid Values:
#   true
# Default Values:
#   true
#####
enableAdminSecurity=true
adminUserName=adminUser_ID
adminPassword=adminPassword
#####
# Parameter:  signingCertDN
#
# Description:
#   Specifies the distinguished name of the root signing certificate that you
#   create when you create the profile. Specify the distinguished name in
#   quotation marks. This default personal certificate is located in the
#   server keystore file. If you do not specifically create or import a root
#   signing certificate, one is created by default. See the
#   -signingCertValidityPeriod parameter and the -keyStorePassword.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter:  signingCertValidityPeriod
#
# Description:
#   An optional parameter that specifies the amount of time in years that the
#   root signing certificate is valid. If you do not specify this parameter
#   with the -signingCertDN parameter, the root signing certificate is valid
#   for 20 years.
#

```

```

# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter:  keyStorePassword
#
# Description:
#   Specifies the password to use on all keystore files created during profile
#   creation. Keystore files are created for the default personal certificate
#   and the root signing certificate.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
#signingCertDN =distinguished_name
#signingCertValidityPeriod =validity_period
#keyStorePassword =keyStore_password
#####
# Parameter:  defaultPorts
#
# Description:
#   Assigns the default or base port values to the profile. Do not use this
#   parameter when using the -startingPort or -portsFile parameter.
#   During profile creation, the manageprofiles command-line utility uses an
#   automatically generated set of recommended ports if you do not specify the
#   -startingPort parameter, the -defaultPorts parameter or the -portsFile
#   parameter. The recommended port values can be different than the default
#   port values based on the availability of the default ports.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter:  startingPort
#
# Description:
#   Specifies the starting port number for generating and assigning all ports
#   for the profile.
#   Port values are assigned sequentially from the -startingPort value,
#   omitting those ports that are already in use. The system recognizes and
#   resolves ports that are currently in use and determines the port
#   assignments to avoid port conflicts.
#   Do not use this parameter with the -defaultPorts or -portsFile parameters.
#   During profile creation, the manageprofiles command-line utility uses an
#   automatically generated set of recommended ports if you do not specify the
#   -startingPort parameter, the -defaultPorts parameter or the -portsFile
#   parameter. The recommended port values can be different than the default
#   port values based on the availability of the default ports.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter:  portsFile
#
# Description:
#   An optional parameter that specifies the path to a file that defines port
#   settings for the new profile.
#   Do not use this parameter when using the -startingPort or -defaultPorts
#   parameter.
#   During profile creation, the manageprofiles command-line utility uses an

```



```

#      automatically generated set of recommended ports if you do not specify the
#      -startingPort parameter, the -defaultPorts parameter or the -portsFile
#      parameter. The recommended port values can be different than the default
#      port values based on the availability of the default ports.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
#defaultPorts=default_ports
#startingPort=startingPort
#portsFile=file_path
#####
# Parameter:  enableService
#
# Description:
#   Enables the creation of a Linux service. Valid values include true or
#   false. The default value for this parameter is false. When the
#   manageprofiles command-line utility is run with the -enableService option
#   set to true , the Linux service is created with the profile when the
#   command is run by the root user. When a nonroot user runs the
#   manageprofiles command-line utility, the profile is created, but the Linux
#   service is not. The Linux service is not created because the nonroot user
#   does not have sufficient permission to set up the service. An
#   INSTCONPARTIALSUCCESS result is displayed at the end of the profile
#   creation and the profile creation log
#   install_root/logs/manageprofiles/profile_name_create.log contains a
#   message indicating the current user does not have sufficient permission to
#   set up the Linux service. Use this parameter when creating profiles only.
#
# Valid Values:
#   false
#   true
# Default Values:
#   None
#
# Parameter:  serviceUserName
#
# Description:
#   Specifies the user ID that is used during the creation of the Linux
#   service so that the Linux service will run under this user ID. The Linux
#   service runs whenever the user ID is logged on. Not required.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter:  winserviceAccountType
#
# Description:
#   The type of the owner account of the Windows service created for the
#   profile. Valid values include specifieduser or localsystem. The
#   localsystem value runs the Windows service under the local account of the
#   user who creates the profile. The default value for this parameter is
#   localsystem. Use this parameter when creating profiles only.
#
# Valid Values:
#   localsystem
#   specifieduser
# Default Values:
#   localsystem
#
# Parameter:  winserviceUserName
#

```

```

# Description:
#   Specify your user ID so that the Windows operating system can verify you
#   as an ID that is capable of creating a Windows service. Your user ID must
#   belong to the Administrator group and have the following advanced user
#   rights:
#   Act as part of the operating system
#   Log on as a service
#   The default value for this parameter is the current user name. The value
#   for this parameter must not contain spaces or characters that are not
#   valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |. The user that
#   you specify must have the proper permissions to create a Windows service.
#   You must specify the correct password for the user name that you choose.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: winservicePassword
#
# Description:
#   Specify the password for the specified user or the local account that is
#   to own the Windows service.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: winserviceCheck
#
# Description:
#   The value can be either true or false. Specify true to create a Windows
#   service for the server process that is created within the profile. Specify
#   false to not create the Windows service. The default value for this
#   parameter is false.
#
# Valid Values:
#   false
#   true
# Default Values:
#   false
#
# Parameter: winserviceStartupType
#
# Description:
#   The following values for Windows service startup can be used:
#   manual
#   automatic
#   disabled
#   The default value for this parameter is manual.
#
# Valid Values:
#   manual
#   automatic
#   disabled
# Default Values:
#   manual
#####
#enableService=true
#serviceName=service_user_ID
#winserviceAccountType=localsystem
#winserviceUserName=winservice_user_ID
#winservicePassword=winservice_password
#winserviceCheck=false
#winserviceStartupType>manual

```

```
#####
# Parameter: environmentType
#
# Description:
# Specifies the environment type. The environment type refers to how IBM
# Business Process Manager is used; for example, in a production, stage or
# test environment. Load testing might be done on a test server, while a
# stage environment type might be used as a temporary location to host
# changes before putting those changes into production. You might specify
# Stage as the Environment type if the server you are configuring will be
# accessed and used to review content and new functionality. Valid values
# are as follows:
# Test
# Use Test if the server you are configuring is to be used as a testing
# environment.
# Stage
# Use Stage if the server is to serve as a staging platform to be used as a
# preproduction server.
# Production
# Use Production if the server is to serve in a production capacity.
# The default value is Test.
#
# Valid Values:
# Test
# Production
# Stage
# Default Values:
# Test
#####
environmentType=Test

#####
# Parameter: isDeveloperServer
#
# Description:
# Specifies whether the server is intended for development purposes only.
# This parameter is useful when creating profiles to test applications on a
# non-production server prior to deploying the applications on their
# production application servers. If -isDeveloperServer is set when
# creating an IBM Business Process Manager profile, then a preconfigured VMM
# file repository is installed. This file repository contains a sample
# organization that can be used to test Business Process Choreographer
# people resolution, ready for you to use as is.
#
# Valid Values:
# false
# true
# Default Values:
# false
#####
#isDeveloperServer=false
```

Oracle 用の Standard Process Server デプロイメント・マネージャー・プロファイル作成の応答ファイル:

ここに用意されている応答ファイルを変更し、**manageprofiles** コマンド行ユーティリティと一緒に使用して、Oracle データベース用のデプロイメント・マネージャー・プロファイルを作成します。

注: ご使用のオペレーティング・システムに合わせて、必要に応じて応答ファイルの情報をコメント化またはアンコメントしてください。詳細については、応答ファイルのコメントを参照してください。

```
# BEGIN COPYRIGHT
# *****
#
# Licensed Materials - Property of IBM
# 5725-C94
# (C) Copyright IBM Corporation 2011, 2012. All Rights Reserved.
```

```

# This sample program is provided AS IS and may be used, executed, copied
# and modified without royalty payment by customer (a) for its own
# instruction and study, (b) in order to develop applications designed to
# run with an IBM WebSphere product, either for customer's own internal
# use or for redistribution by customer, as part of such an application,
# in customer's own products.
#
# *****
# END COPYRIGHT

#####
# These response file has the applicable parameters for creating a
# DMgr PS Std profile that uses Oracle.
#
# Depending on your environment, you may need to change the default values.
#
# To create a profile with this response file specify:
#
# was.install.root/bin/manageprofiles -response PS_Std_DMGr_Oracle.response
#
# If you use the -response parameter, it must be the only parameter on
# the command-line. If you include any manageprofile parameters
# (in addition to -response) on the command-line, the response file
# is ignored. And default WebSphere Application server profile will be created .
#####

#####
# Parameter: create
#
# Description:
#   Creates the profile.
#   If you are creating a profile, this parameter is required.
#####
create

#####
# Parameter: templatePath
#
# Description:
#   Specifies the directory path to the template files in the installation
#   root directory. Within the profileTemplates directory are various
#   directories that correspond to different profile types and that vary with
#   the type of product installed. The profile directories are the paths that
#   you indicate while using the -templatePath option.
#   Use absolute paths. This parameter must exist as a directory and point to
#   a valid template directory.
#
#   When using the -templatePath parameter, specify the fully qualified file
#   path for the parameter.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
templatePath=BPM/dmgr.procsvr

#####
# Parameter: profileName
#
# Description:
#   Specifies the name of the profile. Use a unique value when creating a
#   profile.
#   Each profile that shares the same set of product binaries must have a
#   unique name. The default profile name is based on the profile type and a
#   trailing number, for example:
#   profileType ProfileNumberwhere profileType is a value such as ProcSrv,

```

```

# Dmgr, or Custom and ProfileNumber is a sequential number that creates a
# unique profile name. The value for this parameter must not contain spaces
# or characters that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,,
# /, \, and |. The profile name that you choose must not be in use. On
# Windows platforms: If the fully qualified path contains spaces, enclose
# the value in quotation marks. The default value is based on the
# install_root directory, the profiles subdirectory, and the name of the
# file. For example, the default for profile creation is:
# WS_WSPROFILE_DEFAULT_PROFILE_HOME/profileNameewhere
# WS_WSPROFILE_DEFAULT_PROFILE_HOME is defined in the wasprofile.properties
# file in the install_root/properties directory. The value for this
# parameter must be a valid path for the target system and must not be
# currently in use. You must have permissions to write to the directory.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
profileName=Dmgr01

#####
# Parameter: cellName
#
# Description:
#   Specifies the cell name of the profile. Use a unique cell name for each
#   profile.
#   The default value for this parameter is based on a combination of the
#   short host name, the constant Cell, and a trailing number, for example:
#   if (DMgr)
#     shortHostNameCellCellNumber
#   else
#     shortHostNameNodeNodeNumberCell
#   where CellNumber is a sequential number starting at 01 and NodeNumber is
#   the node number that you used to define the node name.
#   The value for this parameter must not contain spaces or any characters
#   that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   Varies
#
# Parameter: nodeName
#
# Description:
#   Specifies the node name for the node that is created with the new profile.
#   Use a unique value within the cell or on the workstation. Each profile
#   that shares the same set of product binaries must have a unique node name.
#   This parameter is required for profile creation only with the
#   dmgr.esbserverdefault.procsvrdefault.procctrdefault.procsvr.advdefault.
#   procctr.advdmgr.procctrmanaged.procctrmanaged.procsvr templates.
#   The default value for this parameter is based on the short host name,
#   profile type, and a trailing number, for example:
#   if (DMgr)
#     shortHostNameCellManagerNodeNumber
#   else
#     shortHostNameNodeNodeNumber
#   where NodeNumber is a sequential number starting at 01.
#   The value for this parameter must not contain spaces or any characters
#   that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   Varies
#####

```

```

cellName=cell_name
nodeName=node_name

#####
# Parameter: enableAdminSecurity
#
# Description:
#   For IBM Business Process Manager omit this parameter. Administrative
#   security is always enabled for IBM Business Process Manager profiles.
#   You must also specify the parameters -adminUserName and -adminPassword
#   along with the values for these parameters.
#
# Valid Values:
#   true
# Default Values:
#   true
#####
enableAdminSecurity=true
adminUserName=adminUser_ID
adminPassword=adminPassword

#####
# Parameter: signingCertDN
#
# Description:
#   Specifies the distinguished name of the root signing certificate that you
#   create when you create the profile. Specify the distinguished name in
#   quotation marks. This default personal certificate is located in the
#   server keystore file. If you do not specifically create or import a root
#   signing certificate, one is created by default. See the
#   -signingCertValidityPeriod parameter and the -keyStorePassword.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: signingCertValidityPeriod
#
# Description:
#   An optional parameter that specifies the amount of time in years that the
#   root signing certificate is valid. If you do not specify this parameter
#   with the -signingCertDN parameter, the root signing certificate is valid
#   for 20 years.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: keyStorePassword
#
# Description:
#   Specifies the password to use on all keystore files created during profile
#   creation. Keystore files are created for the default personal certificate
#   and the root signing certificate.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
#signingCertDN =distinguished_name
#signingCertValidityPeriod =validity_period
#keyStorePassword =keyStore_password
#####

```

```

# Parameter: defaultPorts
#
# Description:
#   Assigns the default or base port values to the profile. Do not use this
#   parameter when using the -startingPort or -portsFile parameter.
#   During profile creation, the manageprofiles command-line utility uses an
#   automatically generated set of recommended ports if you do not specify the
#   -startingPort parameter, the -defaultPorts parameter or the -portsFile
#   parameter. The recommended port values can be different than the default
#   port values based on the availability of the default ports.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: startingPort
#
# Description:
#   Specifies the starting port number for generating and assigning all ports
#   for the profile.
#   Port values are assigned sequentially from the -startingPort value,
#   omitting those ports that are already in use. The system recognizes and
#   resolves ports that are currently in use and determines the port
#   assignments to avoid port conflicts.
#   Do not use this parameter with the -defaultPorts or -portsFile parameters.
#   During profile creation, the manageprofiles command-line utility uses an
#   automatically generated set of recommended ports if you do not specify the
#   -startingPort parameter, the -defaultPorts parameter or the -portsFile
#   parameter. The recommended port values can be different than the default
#   port values based on the availability of the default ports.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: portsFile
#
# Description:
#   An optional parameter that specifies the path to a file that defines port
#   settings for the new profile.
#   Do not use this parameter when using the -startingPort or -defaultPorts
#   parameter.
#   During profile creation, the manageprofiles command-line utility uses an
#   automatically generated set of recommended ports if you do not specify the
#   -startingPort parameter, the -defaultPorts parameter or the -portsFile
#   parameter. The recommended port values can be different than the default
#   port values based on the availability of the default ports.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
#defaultPorts=default_ports
#startingPort=startingPort
#portsFile=file_path
#####
# Parameter: enableService
#
# Description:
#   Enables the creation of a Linux service. Valid values include true or
#   false. The default value for this parameter is false. When the
#   manageprofiles command-line utility is run with the -enableService option
#   set to true , the Linux service is created with the profile when the

```



```

# command is run by the root user. When a nonroot user runs the
# manageprofiles command-line utility, the profile is created, but the Linux
# service is not. The Linux service is not created because the nonroot user
# does not have sufficient permission to set up the service. An
# INSTCONPARTIALSUCCESS result is displayed at the end of the profile
# creation and the profile creation log
# install_root/logs/manageprofiles/profile_name_create.log contains a
# message indicating the current user does not have sufficient permission to
# set up the Linux service. Use this parameter when creating profiles only.
#
# Valid Values:
#   false
#   true
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: serviceUserName
#
# Description:
#   Specifies the user ID that is used during the creation of the Linux
#   service so that the Linux service will run under this user ID. The Linux
#   service runs whenever the user ID is logged on. Not required.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: winserviceAccountType
#
# Description:
#   The type of the owner account of the Windows service created for the
#   profile. Valid values include specifieduser or localsystem. The
#   localsystem value runs the Windows service under the local account of the
#   user who creates the profile. The default value for this parameter is
#   localsystem. Use this parameter when creating profiles only.
#
# Valid Values:
#   localsystem
#   specifieduser
# Default Values:
#   localsystem
#
# Parameter: winserviceUserName
#
# Description:
#   Specify your user ID so that the Windows operating system can verify you
#   as an ID that is capable of creating a Windows service. Your user ID must
#   belong to the Administrator group and have the following advanced user
#   rights:
#   Act as part of the operating system
#   Log on as a service
#   The default value for this parameter is the current user name. The value
#   for this parameter must not contain spaces or characters that are not
#   valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |. The user that
#   you specify must have the proper permissions to create a Windows service.
#   You must specify the correct password for the user name that you choose.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: winservicePassword
#
# Description:
#   Specify the password for the specified user or the local account that is

```

```

# to own the Windows service.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: winserviceCheck
#
# Description:
#   The value can be either true or false. Specify true to create a Windows
#   service for the server process that is created within the profile. Specify
#   false to not create the Windows service. The default value for this
#   parameter is false.
#
# Valid Values:
#   false
#   true
# Default Values:
#   false
#
# Parameter: winserviceStartupType
#
# Description:
#   The following values for Windows service startup can be used:
#   manual
#   automatic
#   disabled
#   The default value for this parameter is manual.
#
# Valid Values:
#   manual
#   automatic
#   disabled
# Default Values:
#   manual
#####
#enableService=true
#serviceName=service_user_ID
#winserviceAccountType=localsystem
#winserviceUserName=winservice_user_ID
#winservicePassword=winservice_password
#winserviceCheck=false
#winserviceStartupType>manual

#####
# Parameter: dbDriverType
#
# Description:
#   The database driver type. For an Oracle database, specify ORACLE. For
#   databases other than Oracle, the value is automatically set based on the
#   server operating system. Server installations on all operating systems use
#   type 4.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
dbDriverType=ORACLE_THIN

#####
# Parameter: environmentType
#
# Description:

```

```

# Specifies the environment type. The environment type refers to how IBM
# Business Process Manager is used; for example, in a production, stage or
# test environment. Load testing might be done on a test server, while a
# stage environment type might be used as a temporary location to host
# changes before putting those changes into production. You might specify
# Stage as the Environment type if the server you are configuring will be
# accessed and used to review content and new functionality. Valid values
# are as follows:
# Test
# Use Test if the server you are configuring is to be used as a testing
# environment.
# Stage
# Use Stage if the server is to serve as a staging platform to be used as a
# preproduction server.
# Production
# Use Production if the server is to serve in a production capacity.
# The default value is Test.
#
# Valid Values:
# Test
# Production
# Stage
# Default Values:
# Test
#####
environmentType=Test

#####
# Parameter: isDeveloperServer
#
# Description:
# Specifies whether the server is intended for development purposes only.
# This parameter is useful when creating profiles to test applications on a
# non-production server prior to deploying the applications on their
# production application servers. If -isDeveloperServer is set when
# creating an IBM Business Process Manager profile, then a preconfigured VMM
# file repository is installed. This file repository contains a sample
# organization that can be used to test Business Process Choreographer
# people resolution, ready for you to use as is.
#
# Valid Values:
# false
# true
# Default Values:
# false
#####
#isDeveloperServer=false

```

SQL 用の Standard Process Server デプロイメント・マネージャー・プロファイル作成の応答ファイル:

ここに用意されている応答ファイルを変更し、**manageprofiles** コマンド行ユーティリティと一緒に使用して、SQL データベース用のデプロイメント・マネージャー・プロファイルを作成します。

注: ご使用のオペレーティング・システムに合わせて、必要に応じて応答ファイルの情報をコメント化またはアンコメントしてください。詳細については、応答ファイルのコメントを参照してください。

```

# BEGIN COPYRIGHT
# *****
#
# Licensed Materials - Property of IBM
# 5725-C94
# (C) Copyright IBM Corporation 2011, 2012. All Rights Reserved.
# This sample program is provided AS IS and may be used, executed, copied
# and modified without royalty payment by customer (a) for its own
# instruction and study, (b) in order to develop applications designed to
# run with an IBM WebSphere product, either for customer's own internal

```

```

# use or for redistribution by customer, as part of such an application,
# in customer's own products.
#
# *****
# END COPYRIGHT

#####
# These response file has the applicable parameters for creating a
# DMgr PS Std profile that uses SQLServer.
#
# Depending on your environment, you may need to change the default values.
#
# To create a profile with this response file specify:
#
# was.install.root/bin/manageprofiles -response PS_Std_DMgr_SQLServer.response
#
# If you use the -response parameter, it must be the only parameter on
# the command-line. If you include any manageprofile parameters
# (in addition to -response) on the command-line, the response file
# is ignored. And default WebSphere Application server profile will be created .
#####

#####
# Parameter: create
#
# Description:
#   Creates the profile.
#   If you are creating a profile, this parameter is required.
#####
create

#####
# Parameter: templatePath
#
# Description:
#   Specifies the directory path to the template files in the installation
#   root directory. Within the profileTemplates directory are various
#   directories that correspond to different profile types and that vary with
#   the type of product installed. The profile directories are the paths that
#   you indicate while using the -templatePath option.
#   Use absolute paths. This parameter must exist as a directory and point to
#   a valid template directory.
#
#   When using the -templatePath parameter, specify the fully qualified file
#   path for the parameter.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
templatePath=BPM/dmgr.procsvr

#####
# Parameter: profileName
#
# Description:
#   Specifies the name of the profile. Use a unique value when creating a
#   profile.
#   Each profile that shares the same set of product binaries must have a
#   unique name. The default profile name is based on the profile type and a
#   trailing number, for example:
#   profileType ProfileNumberwhere profileType is a value such as ProcSrv,
#   Dmgr, or Custom and ProfileNumber is a sequential number that creates a
#   unique profile name. The value for this parameter must not contain spaces
#   or characters that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,,
#   /, \, and |. The profile name that you choose must not be in use. On

```

```

# Windows platforms: If the fully qualified path contains spaces, enclose
# the value in quotation marks. The default value is based on the
# install_root directory, the profiles subdirectory, and the name of the
# file. For example, the default for profile creation is:
# WS_WSPROFILE_DEFAULT_PROFILE_HOME/profileNamewhere
# WS_WSPROFILE_DEFAULT_PROFILE_HOME is defined in the wasprofile.properties
# file in the install_root/properties directory. The value for this
# parameter must be a valid path for the target system and must not be
# currently in use. You must have permissions to write to the directory.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
profileName=Dmgr01

#####
# Parameter:  cellName
#
# Description:
#   Specifies the cell name of the profile. Use a unique cell name for each
#   profile.
#   The default value for this parameter is based on a combination of the
#   short host name, the constant Cell, and a trailing number, for example:
#   if (DMgr)
#       shortHostNameCellCellNumber
#   else
#       shortHostNameNodeNodeNumberCell
#   where CellNumber is a sequential number starting at 01 and NodeNumber is
#   the node number that you used to define the node name.
#   The value for this parameter must not contain spaces or any characters
#   that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   Varies
#
# Parameter:  nodeName
#
# Description:
#   Specifies the node name for the node that is created with the new profile.
#   Use a unique value within the cell or on the workstation. Each profile
#   that shares the same set of product binaries must have a unique node name.
#   This parameter is required for profile creation only with the
#   dmgr.esbserverdefault.procsvrdefault.procctrdefault.procsvr.advdefault.
#   procctr.advdmgr.procctrmanaged.procctrmanaged.procsvr templates.
#   The default value for this parameter is based on the short host name,
#   profile type, and a trailing number, for example:
#   if (DMgr)
#       shortHostNameCellManagerNodeNumber
#   else
#       shortHostNameNodeNodeNumber
#   where NodeNumber is a sequential number starting at 01.
#   The value for this parameter must not contain spaces or any characters
#   that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   Varies
#####
cellName=cell_name
nodeName=node_name

#####

```

```

# Parameter: enableAdminSecurity
#
# Description:
#   For IBM Business Process Manager omit this parameter. Administrative
#   security is always enabled for IBM Business Process Manager profiles.
#   You must also specify the parameters -adminUserName and -adminPassword
#   along with the values for these parameters.
#
# Valid Values:
#   true
# Default Values:
#   true
#####
enableAdminSecurity=true
adminUserName=adminUser_ID
adminPassword=adminPassword
#####
# Parameter: signingCertDN
#
# Description:
#   Specifies the distinguished name of the root signing certificate that you
#   create when you create the profile. Specify the distinguished name in
#   quotation marks. This default personal certificate is located in the
#   server keystore file. If you do not specifically create or import a root
#   signing certificate, one is created by default. See the
#   -signingCertValidityPeriod parameter and the -keyStorePassword.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: signingCertValidityPeriod
#
# Description:
#   An optional parameter that specifies the amount of time in years that the
#   root signing certificate is valid. If you do not specify this parameter
#   with the -signingCertDN parameter, the root signing certificate is valid
#   for 20 years.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: keyStorePassword
#
# Description:
#   Specifies the password to use on all keystore files created during profile
#   creation. Keystore files are created for the default personal certificate
#   and the root signing certificate.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
#signingCertDN =distinguished_name
#signingCertValidityPeriod =validity_period
#keyStorePassword =keyStore_password
#####
# Parameter: defaultPorts
#
# Description:
#   Assigns the default or base port values to the profile.d o not use this

```

```

# parameter when using the -startingPort or -portsFile parameter.
# During profile creation, the manageprofiles command-line utility uses an
# automatically generated set of recommended ports if you do not specify the
# -startingPort parameter, the -defaultPorts parameter or the -portsFile
# parameter. The recommended port values can be different than the default
# port values based on the availability of the default ports.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: startingPort
#
# Description:
#   Specifies the starting port number for generating and assigning all ports
#   for the profile.
#   Port values are assigned sequentially from the -startingPort value,
#   omitting those ports that are already in use. The system recognizes and
#   resolves ports that are currently in use and determines the port
#   assignments to avoid port conflicts.
#   Do not use this parameter with the -defaultPorts or -portsFile parameters.
#   During profile creation, the manageprofiles command-line utility uses an
#   automatically generated set of recommended ports if you do not specify the
#   -startingPort parameter, the -defaultPorts parameter or the -portsFile
#   parameter. The recommended port values can be different than the default
#   port values based on the availability of the default ports.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: portsFile
#
# Description:
#   An optional parameter that specifies the path to a file that defines port
#   settings for the new profile.
#   Do not use this parameter when using the -startingPort or -defaultPorts
#   parameter.
#   During profile creation, the manageprofiles command-line utility uses an
#   automatically generated set of recommended ports if you do not specify the
#   -startingPort parameter, the -defaultPorts parameter or the -portsFile
#   parameter. The recommended port values can be different than the default
#   port values based on the availability of the default ports.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
#defaultPorts=default_ports
#startingPort=startingPort
#portsFile=file_path
#####
# Parameter: enableService
#
# Description:
#   Enables the creation of a Linux service. Valid values include true or
#   false. The default value for this parameter is false. When the
#   manageprofiles command-line utility is run with the -enableService option
#   set to true , the Linux service is created with the profile when the
#   command is run by the root user. When a nonroot user runs the
#   manageprofiles command-line utility, the profile is created, but the Linux
#   service is not. The Linux service is not created because the nonroot user
#   does not have sufficient permission to set up the service. An

```



```

# INSTCONPARTIALSUCCESS result is displayed at the end of the profile
# creation and the profile creation log
# install_root/logs/manageprofiles/profile_name_create.log contains a
# message indicating the current user does not have sufficient permission to
# set up the Linux service. Use this parameter when creating profiles only.
#
# Valid Values:
#   false
#   true
# Default Values:
#   None
#
# Parameter:  serviceUserName
#
# Description:
#   Specifies the user ID that is used during the creation of the Linux
#   service so that the Linux service will run under this user ID. The Linux
#   service runs whenever the user ID is logged on. Not required.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter:  winserviceAccountType
#
# Description:
#   The type of the owner account of the Windows service created for the
#   profile. Valid values include specifieduser or localsystem. The
#   localsystem value runs the Windows service under the local account of the
#   user who creates the profile. The default value for this parameter is
#   localsystem. Use this parameter when creating profiles only.
#
# Valid Values:
#   localsystem
#   specifieduser
# Default Values:
#   localsystem
#
# Parameter:  winserviceUserName
#
# Description:
#   Specify your user ID so that the Windows operating system can verify you
#   as an ID that is capable of creating a Windows service. Your user ID must
#   belong to the Administrator group and have the following advanced user
#   rights:
#   Act as part of the operating system
#   Log on as a service
#   The default value for this parameter is the current user name. The value
#   for this parameter must not contain spaces or characters that are not
#   valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |. The user that
#   you specify must have the proper permissions to create a Windows service.
#   You must specify the correct password for the user name that you choose.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter:  winservicePassword
#
# Description:
#   Specify the password for the specified user or the local account that is
#   to own the Windows service.
#
# Valid Values:
#   Varies

```

```

# Default Values:
#   None
#
# Parameter: winserviceCheck
#
# Description:
#   The value can be either true or false. Specify true to create a Windows
#   service for the server process that is created within the profile. Specify
#   false to not create the Windows service. The default value for this
#   parameter is false.
#
# Valid Values:
#   false
#   true
# Default Values:
#   false
#
# Parameter: winserviceStartupType
#
# Description:
#   The following values for Windows service startup can be used:
#   manual
#   automatic
#   disabled
#   The default value for this parameter is manual.
#
# Valid Values:
#   manual
#   automatic
#   disabled
# Default Values:
#   manual
#####
#enableService=true
#serviceName=service_user_ID
#winserviceAccountType=localsystem
#winserviceUserName=winservice_user_ID
#winservicePassword=winservice_password
#winserviceCheck=false
#winserviceStartupType>manual
#####
# Parameter: dbWinAuth
#
# Description:
#   An optional parameter that is valid in all default profile templates.
#   Specify true to indicate that you are running SQL Server using integrated
#   windows authentication.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   false
#   true
# Default Values:
#   None
#####
#dbWinAuth=true
#####
# Parameter: environmentType
#
# Description:
#   Specifies the environment type. The environment type refers to how IBM
#   Business Process Manager is used; for example, in a production, stage or
#   test environment. Load testing might be done on a test server, while a
#   stage environment type might be used as a temporary location to host

```

```

# changes before putting those changes into production. You might specify
# Stage as the Environment type if the server you are configuring will be
# accessed and used to review content and new functionality. Valid values
# are as follows:
# Test
# Use Test if the server you are configuring is to be used as a testing
# environment.
# Stage
# Use Stage if the server is to serve as a staging platform to be used as a
# preproduction server.
# Production
# Use Production if the server is to serve in a production capacity.
# The default value is Test.
#
# Valid Values:
# Test
# Production
# Stage
# Default Values:
# Test
#####
environmentType=Test

#####
# Parameter: isDeveloperServer
#
# Description:
# Specifies whether the server is intended for development purposes only.
# This parameter is useful when creating profiles to test applications on a
# non-production server prior to deploying the applications on their
# production application servers. If -isDeveloperServer is set when
# creating an IBM Business Process Manager profile, then a preconfigured VMM
# file repository is installed. This file repository contains a sample
# organization that can be used to test Business Process Choreographer
# people resolution, ready for you to use as is.
#
# Valid Values:
# false
# true
# Default Values:
# false
#####
#isDeveloperServer=false

```

Advanced Process Server 用の応答ファイル:

manageprofiles コマンド行ユーティリティと応答ファイルを使用して、デプロイメント・マネージャー・プロファイルを作成します。

DB2 用の Advanced Process Server デプロイメント・マネージャー・プロファイル作成の応答ファイル:

ここに用意されている応答ファイルを変更し、**manageprofiles** コマンド行ユーティリティと一緒に使用して、DB2 データベース用のデプロイメント・マネージャー・プロファイルを作成します。

注: ご使用のオペレーティング・システムに合わせて、必要に応じて応答ファイルの情報をコメント化またはアンコメントしてください。詳細については、応答ファイルのコメントを参照してください。

```

# BEGIN COPYRIGHT
# *****
#
# Licensed Materials - Property of IBM
# 5725-C94
# (C) Copyright IBM Corporation 2011, 2012. All Rights Reserved.
# This sample program is provided AS IS and may be used, executed, copied
# and modified without royalty payment by customer (a) for its own

```

```

# instruction and study, (b) in order to develop applications designed to
# run with an IBM WebSphere product, either for customer's own internal
# use or for redistribution by customer, as part of such an application,
# in customer's own products.
#
# *****
# END COPYRIGHT

#####
# These response file has the applicable parameters for creating a
# DMgr PS Adv profile that uses DB2.
#
# Depending on your environment, you may need to change the default values.
#
# To create a profile with this response file specify:
#
# was.install.root/bin/manageprofiles -response PS_Adv_DMgr_DB2.response
#
# If you use the -response parameter, it must be the only parameter on
# the command-line. If you include any manageprofile parameters
# (in addition to -response) on the command-line, the response file
# is ignored. And default WebSphere Application server profile will be created .
#####

#####
# Parameter: create
#
# Description:
#   Creates the profile.
#   If you are creating a profile, this parameter is required.
#####
create

#####
# Parameter: templatePath
#
# Description:
#   Specifies the directory path to the template files in the installation
#   root directory. Within the profileTemplates directory are various
#   directories that correspond to different profile types and that vary with
#   the type of product installed. The profile directories are the paths that
#   you indicate while using the -templatePath option.
#   Use absolute paths. This parameter must exist as a directory and point to
#   a valid template directory.
#
#   When using the -templatePath parameter, specify the fully qualified file
#   path for the parameter.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
templatePath=BPM/dmgr.procsvr.adv

#####
# Parameter: profileName
#
# Description:
#   Specifies the name of the profile. Use a unique value when creating a
#   profile.
#   Each profile that shares the same set of product binaries must have a
#   unique name. The default profile name is based on the profile type and a
#   trailing number, for example:
#   profileType ProfileNumberwhere profileType is a value such as ProcSrv,
#   Dmgr, or Custom and ProfileNumber is a sequential number that creates a
#   unique profile name. The value for this parameter must not contain spaces

```

```

# or characters that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,,
# /, \, and |. The profile name that you choose must not be in use. On
# Windows platforms: If the fully qualified path contains spaces, enclose
# the value in quotation marks. The default value is based on the
# install_root directory, the profiles subdirectory, and the name of the
# file. For example, the default for profile creation is:
# WS_WSPROFILE_DEFAULT_PROFILE_HOME/profileNameewhere
# WS_WSPROFILE_DEFAULT_PROFILE_HOME is defined in the wasprofile.properties
# file in the install_root/properties directory. The value for this
# parameter must be a valid path for the target system and must not be
# currently in use. You must have permissions to write to the directory.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
profileName=Dmgr01

#####
# Parameter: cellName
#
# Description:
#   Specifies the cell name of the profile. Use a unique cell name for each
#   profile.
#   The default value for this parameter is based on a combination of the
#   short host name, the constant Cell, and a trailing number, for example:
#   if (DMgr)
#       shortHostNameCellCellNumber
#   else
#       shortHostNameNodeNodeNumberCell
#   where CellNumber is a sequential number starting at 01 and NodeNumber is
#   the node number that you used to define the node name.
#   The value for this parameter must not contain spaces or any characters
#   that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   Varies
#
# Parameter: nodeName
#
# Description:
#   Specifies the node name for the node that is created with the new profile.
#   Use a unique value within the cell or on the workstation. Each profile
#   that shares the same set of product binaries must have a unique node name.
#   This parameter is required for profile creation only with the
#   dmgr.esbserverdefault.procsvrdefault.procctrdefault.procsvr.advdefault.
#   procctr.advdmgr.procctrmanaged.procctrmanaged.procsvr templates.
#   The default value for this parameter is based on the short host name,
#   profile type, and a trailing number, for example:
#   if (DMgr)
#       shortHostNameCellManagerNodeNumber
#   else
#       shortHostNameNodeNodeNumber
#   where NodeNumber is a sequential number starting at 01.
#   The value for this parameter must not contain spaces or any characters
#   that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   Varies
#####
cellName=cell_name
nodeName=node_name

```

```

#####
# Parameter: enableAdminSecurity
#
# Description:
#   For IBM Business Process Manager omit this parameter. Administrative
#   security is always enabled for IBM Business Process Manager profiles.
#   You must also specify the parameters -adminUserName and -adminPassword
#   along with the values for these parameters.
#
# Valid Values:
#   true
# Default Values:
#   true
#####
enableAdminSecurity=true
adminUserName=adminUser_ID
adminPassword=adminPassword

#####
# Parameter: signingCertDN
#
# Description:
#   Specifies the distinguished name of the root signing certificate that you
#   create when you create the profile. Specify the distinguished name in
#   quotation marks. This default personal certificate is located in the
#   server keystore file. If you do not specifically create or import a root
#   signing certificate, one is created by default. See the
#   -signingCertValidityPeriod parameter and the -keyStorePassword.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: signingCertValidityPeriod
#
# Description:
#   An optional parameter that specifies the amount of time in years that the
#   root signing certificate is valid. If you do not specify this parameter
#   with the -signingCertDN parameter, the root signing certificate is valid
#   for 20 years.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: keyStorePassword
#
# Description:
#   Specifies the password to use on all keystore files created during profile
#   creation. Keystore files are created for the default personal certificate
#   and the root signing certificate.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
#signingCertDN =distinguished_name
#signingCertValidityPeriod =validity_period
#keyStorePassword =keyStore_password

#####
# Parameter: defaultPorts
#

```

```

# Description:
#   Assigns the default or base port values to the profile. Do not use this
#   parameter when using the -startingPort or -portsFile parameter.
#   During profile creation, the manageprofiles command-line utility uses an
#   automatically generated set of recommended ports if you do not specify the
#   -startingPort parameter, the -defaultPorts parameter or the -portsFile
#   parameter. The recommended port values can be different than the default
#   port values based on the availability of the default ports.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: startingPort
#
# Description:
#   Specifies the starting port number for generating and assigning all ports
#   for the profile.
#   Port values are assigned sequentially from the -startingPort value,
#   omitting those ports that are already in use. The system recognizes and
#   resolves ports that are currently in use and determines the port
#   assignments to avoid port conflicts.
#   Do not use this parameter with the -defaultPorts or -portsFile parameters.
#   During profile creation, the manageprofiles command-line utility uses an
#   automatically generated set of recommended ports if you do not specify the
#   -startingPort parameter, the -defaultPorts parameter or the -portsFile
#   parameter. The recommended port values can be different than the default
#   port values based on the availability of the default ports.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: portsFile
#
# Description:
#   An optional parameter that specifies the path to a file that defines port
#   settings for the new profile.
#   Do not use this parameter when using the -startingPort or -defaultPorts
#   parameter.
#   During profile creation, the manageprofiles command-line utility uses an
#   automatically generated set of recommended ports if you do not specify the
#   -startingPort parameter, the -defaultPorts parameter or the -portsFile
#   parameter. The recommended port values can be different than the default
#   port values based on the availability of the default ports.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
#defaultPorts=default_ports
#startingPort=startingPort
#portsFile=file_path
#####
# Parameter: enableService
#
# Description:
#   Enables the creation of a Linux service. Valid values include true or
#   false. The default value for this parameter is false. When the
#   manageprofiles command-line utility is run with the -enableService option
#   set to true, the Linux service is created with the profile when the
#   command is run by the root user. When a nonroot user runs the
#   manageprofiles command-line utility, the profile is created, but the Linux

```



```

# service is not. The Linux service is not created because the nonroot user
# does not have sufficient permission to set up the service. An
# INSTCONPARTIALSUCCESS result is displayed at the end of the profile
# creation and the profile creation log
# install_root/logs/manageprofiles/profile_name_create.log contains a
# message indicating the current user does not have sufficient permission to
# set up the Linux service. Use this parameter when creating profiles only.
#
# Valid Values:
# false
# true
# Default Values:
# None
#
# Parameter: serviceUserName
#
# Description:
# Specifies the user ID that is used during the creation of the Linux
# service so that the Linux service will run under this user ID. The Linux
# service runs whenever the user ID is logged on. Not required.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# None
#
# Parameter: winserviceAccountType
#
# Description:
# The type of the owner account of the Windows service created for the
# profile. Valid values include specifieduser or localsystem. The
# localsystem value runs the Windows service under the local account of the
# user who creates the profile. The default value for this parameter is
# localsystem. Use this parameter when creating profiles only.
#
# Valid Values:
# localsystem
# specifieduser
# Default Values:
# localsystem
#
# Parameter: winserviceUserName
#
# Description:
# Specify your user ID so that the Windows operating system can verify you
# as an ID that is capable of creating a Windows service. Your user ID must
# belong to the Administrator group and have the following advanced user
# rights:
# Act as part of the operating system
# Log on as a service
# The default value for this parameter is the current user name. The value
# for this parameter must not contain spaces or characters that are not
# valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |. The user that
# you specify must have the proper permissions to create a Windows service.
# You must specify the correct password for the user name that you choose.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# None
#
# Parameter: winservicePassword
#
# Description:
# Specify the password for the specified user or the local account that is
# to own the Windows service.
#

```

```

# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: winserviceCheck
#
# Description:
#   The value can be either true or false. Specify true to create a Windows
#   service for the server process that is created within the profile. Specify
#   false to not create the Windows service. The default value for this
#   parameter is false.
#
# Valid Values:
#   false
#   true
# Default Values:
#   false
#
# Parameter: winserviceStartupType
#
# Description:
#   The following values for Windows service startup can be used:
#   manual
#   automatic
#   disabled
#   The default value for this parameter is manual.
#
# Valid Values:
#   manual
#   automatic
#   disabled
# Default Values:
#   manual
#####
#enableService=true
#serviceName=service_user_ID
#winserviceAccountType=localsystem
#winserviceUserName=winservice_user_ID
#winservicePassword=winservice_password
#winserviceCheck=false
#winserviceStartupType>manual
#####
# Parameter: bpmdbDesign
#
# Description:
#   Specifies the file that holds the database configuration design for all of
#   the IBM Business Process Manager components .
#   This parameter replaces the -wbldbDesign that was used in previous
#   versions of WebSphere Process Server.
#
#   Note: If a bpmdbDesign file parameter is specified, none of the database
#   related properties should be specified.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
#bpmdbDesign=design_file
#####
# Parameter: dbCreateNew
#
# Description:
#   Indicates a new database is created or if an existing database is to be

```

```

# reused. Valid values are true or false. This value cannot be true for an
# Oracle, SQL Server or a DB2 z/OS database. This value can only be true for
# a DB2 database.
#
# Valid Values:
# false
# true
# Default Values:
# None
#####
dbCreateNew=true
#####
# Parameter: dbType
#
# Description:
# The database type. Set one of the following values for the type of
# database product you are using with IBM Business Process Manager.
#
# Required only for one of the following:
# A stand-alone profile when -bpmdbDesign was not specified.
# An advanced dmgr or managed profiles when -bpmdbDesign was not specified.
#
# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
# DB2_DATASERVER
# Default Values:
# DB2_DATASERVER
#
# Parameter: dbJDBCClasspath
#
# Description:
# The directory path location of JDBC driver files.
#
# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# None
#
# Parameter: dbHostName
#
# Description:
# The database server host name or IP address. The default value is the
# local host name. Required when the -bpmdbDesign parameter was not
# specified. (It is not required if the -bpmdbDesign parameter is
# specified.)
#
# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# None
#
# Parameter: dbServerPort
#
# Description:
# The database server port number. Depending on the database you are using,
# you can specify a different port number instead of the default port
# number.
#
# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:

```

```

#    Varies
# Default Values:
#    None
#####
dbType=DB2_DATASERVER
dbJDBCClasspath=${WAS_INSTALL_ROOT}/jdbcdriver/DB2
dbHostName=db_host_name
dbServerPort=db_port_number

#####
# Parameter: dbDelayConfig
#
# Description:
#    Indicates whether to postpone table creation until after the profile is
#    created. Valid values are true or false. The parameter is set to false by
#    default. Setting this parameter to true delays the execution of the
#    scripts that create the database tables. No. Specify false if you want the
#    database to be set up during profile creation.
#
# Valid Values:
#    false
#    true
# Default Values:
#    false
#####
dbDelayConfig=false

#####
# Parameter: dbName
#
# Description:
#    The name of the database. By default, the value is set to orcl for Oracle
#    databases and to CMNDB for all other supported databases.
#
#    Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#    Varies
# Default Values:
#    CMNDB
#
# Parameter: dbUserId
#
# Description:
#    The user ID for all database types. Specifies the user ID that has
#    privileges to create and drop the databases. The WebSphere data source
#    uses this ID to authenticate the database connection.
#    Important: The -dbUserId parameter value must be a valid database
#    authorization ID. Required if the -bpmdbDesign file is not set.
#
#    Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#    Varies
# Default Values:
#    None
#
# Parameter: dbPassword
#
# Description:
#    The password required for database authentication. Required when the
#    -bpmdbDesign file is not set.
#
#    Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#    Varies

```

```

# Default Values:
#   None
#####
dbName=CMNDB
dbUserId=db_userid
dbPassword=db_pswd

#####
# Parameter:  environmentType
#
# Description:
#   Specifies the environment type. The environment type refers to how IBM
#   Business Process Manager is used; for example, in a production, stage or
#   test environment. Load testing might be done on a test server, while a
#   stage environment type might be used as a temporary location to host
#   changes before putting those changes into production. You might specify
#   Stage as the Environment type if the server you are configuring will be
#   accessed and used to review content and new functionality. Valid values
#   are as follows:
#   Test
#   Use Test if the server you are configuring is to be used as a testing
#   environment.
#   Stage
#   Use Stage if the server is to serve as a staging platform to be used as a
#   preproduction server.
#   Production
#   Use Production if the server is to serve in a production capacity.
#   The default value is Test.
#
# Valid Values:
#   Test
#   Production
#   Stage
# Default Values:
#   Test
#####
environmentType=Test

#####
# Parameter:  isDeveloperServer
#
# Description:
#   Specifies whether the server is intended for development purposes only.
#   This parameter is useful when creating profiles to test applications on a
#   non-production server prior to deploying the applications on their
#   production application servers. If -isDeveloperServer is set when
#   creating an IBM Business Process Manager profile, then a preconfigured VMM
#   file repository is installed. This file repository contains a sample
#   organization that can be used to test Business Process Choreographer
#   people resolution, ready for you to use as is.
#
# Valid Values:
#   false
#   true
# Default Values:
#   false
#####
#isDeveloperServer=false

```

DB2 for z/OS 用の Advanced Process Server デプロイメント・マネージャー・プロファイル作成の応答ファイル:

ここに用意されている応答ファイルを変更し、**manageprofiles** コマンド行ユーティリティと一緒に使用して、DB2 for z/OS データベース用のデプロイメント・マネージャー・プロファイルを作成します。

注: ご使用のオペレーティング・システムに合わせて、必要に応じて応答ファイルの情報をコメント化またはアンコメントしてください。詳細については、応答ファイルのコメントを参照してください。

```
# BEGIN COPYRIGHT
# *****
#
# Licensed Materials - Property of IBM
# 5725-C94
# (C) Copyright IBM Corporation 2011, 2012. All Rights Reserved.
# This sample program is provided AS IS and may be used, executed, copied
# and modified without royalty payment by customer (a) for its own
# instruction and study, (b) in order to develop applications designed to
# run with an IBM WebSphere product, either for customer's own internal
# use or for redistribution by customer, as part of such an application,
# in customer's own products.
#
# *****
# END COPYRIGHT

#####
# These response file has the applicable parameters for creating a
# DMgr PS Adv profile that uses DB2zOS.
#
# Depending on your environment, you may need to change the default values.
#
# To create a profile with this response file specify:
#
# was.install.root/bin/manageprofiles -response PS_Adv_DMGr_DB2zOS.response
#
# If you use the -response parameter, it must be the only parameter on
# the command-line. If you include any manageprofile parameters
# (in addition to -response) on the command-line, the response file
# is ignored. And default WebSphere Application server profile will be created .
#####

#####
# Parameter: create
#
# Description:
#   Creates the profile.
#   If you are creating a profile, this parameter is required.
#####
create

#####
# Parameter: templatePath
#
# Description:
#   Specifies the directory path to the template files in the installation
#   root directory. Within the profileTemplates directory are various
#   directories that correspond to different profile types and that vary with
#   the type of product installed. The profile directories are the paths that
#   you indicate while using the -templatePath option.
#   Use absolute paths. This parameter must exist as a directory and point to
#   a valid template directory.
#
#   When using the -templatePath parameter, specify the fully qualified file
#   path for the parameter.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
templatePath=BPM/dmgr.procsvr.adv

#####
```

```

# Parameter:  profileName
#
# Description:
#   Specifies the name of the profile. Use a unique value when creating a
#   profile.
#   Each profile that shares the same set of product binaries must have a
#   unique name. The default profile name is based on the profile type and a
#   trailing number, for example:
#   profileType ProfileNumberwhere profileType is a value such as ProcSrv,
#   Dmgr, or Custom and ProfileNumber is a sequential number that creates a
#   unique profile name. The value for this parameter must not contain spaces
#   or characters that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,,
#   /, \, and |. The profile name that you choose must not be in use. On
#   Windows platforms: If the fully qualified path contains spaces, enclose
#   the value in quotation marks. The default value is based on the
#   install_root directory, the profiles subdirectory, and the name of the
#   file. For example, the default for profile creation is:
#   WS_WSPROFILE_DEFAULT_PROFILE_HOME/profileNamewhere
#   WS_WSPROFILE_DEFAULT_PROFILE_HOME is defined in the wasprofile.properties
#   file in the install_root/properties directory. The value for this
#   parameter must be a valid path for the target system and must not be
#   currently in use. You must have permissions to write to the directory.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
profileName=Dmgr01

#####
# Parameter:  cellName
#
# Description:
#   Specifies the cell name of the profile. Use a unique cell name for each
#   profile.
#   The default value for this parameter is based on a combination of the
#   short host name, the constant Cell, and a trailing number, for example:
#   if (DMgr)
#     shortHostNameCellCellNumber
#   else
#     shortHostNameNodeNodeNumberCell
#   where CellNumber is a sequential number starting at 01 and NodeNumber is
#   the node number that you used to define the node name.
#   The value for this parameter must not contain spaces or any characters
#   that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   Varies
#
# Parameter:  nodeName
#
# Description:
#   Specifies the node name for the node that is created with the new profile.
#   Use a unique value within the cell or on the workstation. Each profile
#   that shares the same set of product binaries must have a unique node name.
#   This parameter is required for profile creation only with the
#   dmgr.esbserverdefault.procsvrdefault.procctrdefault.procsvr.advdefault.
#   procctr.advdmgr.procctrmanaged.procctrmanaged.procsvr templates.
#   The default value for this parameter is based on the short host name,
#   profile type, and a trailing number, for example:
#   if (DMgr)
#     shortHostNameCellManagerNodeNumber
#   else
#     shortHostNameNodeNodeNumber

```



```

# where NodeNumber is a sequential number starting at 01.
# The value for this parameter must not contain spaces or any characters
# that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   Varies
#####
cellName=cell_name
nodeName=node_name
#####
# Parameter: enableAdminSecurity
#
# Description:
#   For IBM Business Process Manager omit this parameter. Administrative
#   security is always enabled for IBM Business Process Manager profiles.
#   You must also specify the parameters -adminUserName and -adminPassword
#   along with the values for these parameters.
#
# Valid Values:
#   true
# Default Values:
#   true
#####
enableAdminSecurity=true
adminUserName=adminUser_ID
adminPassword=adminPassword
#####
# Parameter: signingCertDN
#
# Description:
#   Specifies the distinguished name of the root signing certificate that you
#   create when you create the profile. Specify the distinguished name in
#   quotation marks. This default personal certificate is located in the
#   server keystore file. If you do not specifically create or import a root
#   signing certificate, one is created by default. See the
#   -signingCertValidityPeriod parameter and the -keyStorePassword.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: signingCertValidityPeriod
#
# Description:
#   An optional parameter that specifies the amount of time in years that the
#   root signing certificate is valid. If you do not specify this parameter
#   with the -signingCertDN parameter, the root signing certificate is valid
#   for 20 years.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: keyStorePassword
#
# Description:
#   Specifies the password to use on all keystore files created during profile
#   creation. Keystore files are created for the default personal certificate
#   and the root signing certificate.
#
# Valid Values:

```

```

#    Varies
# Default Values:
#    None
#####
#signingCertDN =distinguished_name
#signingCertValidityPeriod =validity_period
#keyStorePassword =keyStore_password

#####
# Parameter:  defaultPorts
#
# Description:
#    Assigns the default or base port values to the profile.d o not use this
#    parameter when using the -startingPort or -portsFile parameter.
#    During profile creation, the manageprofiles command-line utility uses an
#    automatically generated set of recommended ports if you do not specify the
#    -startingPort parameter, the -defaultPorts parameter or the -portsFile
#    parameter. The recommended port values can be different than the default
#    port values based on the availability of the default ports.
#
# Valid Values:
#    Varies
# Default Values:
#    None
#
# Parameter:  startingPort
#
# Description:
#    Specifies the starting port number for generating and assigning all ports
#    for the profile.
#    Port values are assigned sequentially from the -startingPort value,
#    omitting those ports that are already in use. The system recognizes and
#    resolves ports that are currently in use and determines the port
#    assignments to avoid port conflicts.
#    Do not use this parameter with the -defaultPorts or -portsFile parameters.
#    During profile creation, the manageprofiles command-line utility uses an
#    automatically generated set of recommended ports if you do not specify the
#    -startingPort parameter, the -defaultPorts parameter or the -portsFile
#    parameter. The recommended port values can be different than the default
#    port values based on the availability of the default ports.
#
# Valid Values:
#    Varies
# Default Values:
#    None
#
# Parameter:  portsFile
#
# Description:
#    An optional parameter that specifies the path to a file that defines port
#    settings for the new profile.
#    Do not use this parameter when using the -startingPort or -defaultPorts
#    parameter.
#    During profile creation, the manageprofiles command-line utility uses an
#    automatically generated set of recommended ports if you do not specify the
#    -startingPort parameter, the -defaultPorts parameter or the -portsFile
#    parameter. The recommended port values can be different than the default
#    port values based on the availability of the default ports.
#
# Valid Values:
#    Varies
# Default Values:
#    None
#####
#defaultPorts=default_ports
#startingPort=startingPort
#portsFile=file_path

```

```

#####
# Parameter: enableService
#
# Description:
#   Enables the creation of a Linux service. Valid values include true or
#   false. The default value for this parameter is false. When the
#   manageprofiles command-line utility is run with the -enableService option
#   set to true , the Linux service is created with the profile when the
#   command is run by the root user. When a nonroot user runs the
#   manageprofiles command-line utility, the profile is created, but the Linux
#   service is not. The Linux service is not created because the nonroot user
#   does not have sufficient permission to set up the service. An
#   INSTCONPARTIALSUCCESS result is displayed at the end of the profile
#   creation and the profile creation log
#   install_root/logs/manageprofiles/profile_name_create.log contains a
#   message indicating the current user does not have sufficient permission to
#   set up the Linux service. Use this parameter when creating profiles only.
#
# Valid Values:
#   false
#   true
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: serviceUserName
#
# Description:
#   Specifies the user ID that is used during the creation of the Linux
#   service so that the Linux service will run under this user ID. The Linux
#   service runs whenever the user ID is logged on. Not required.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: winserviceAccountType
#
# Description:
#   The type of the owner account of the Windows service created for the
#   profile. Valid values include specifieduser or localsystem. The
#   localsystem value runs the Windows service under the local account of the
#   user who creates the profile. The default value for this parameter is
#   localsystem. Use this parameter when creating profiles only.
#
# Valid Values:
#   localsystem
#   specifieduser
# Default Values:
#   localsystem
#
# Parameter: winserviceUserName
#
# Description:
#   Specify your user ID so that the Windows operating system can verify you
#   as an ID that is capable of creating a Windows service. Your user ID must
#   belong to the Administrator group and have the following advanced user
#   rights:
#   Act as part of the operating system
#   Log on as a service
#   The default value for this parameter is the current user name. The value
#   for this parameter must not contain spaces or characters that are not
#   valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |. The user that
#   you specify must have the proper permissions to create a Windows service.
#   You must specify the correct password for the user name that you choose.
#

```

```

# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: winservicePassword
#
# Description:
#   Specify the password for the specified user or the local account that is
#   to own the Windows service.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: winserviceCheck
#
# Description:
#   The value can be either true or false. Specify true to create a Windows
#   service for the server process that is created within the profile. Specify
#   false to not create the Windows service. The default value for this
#   parameter is false.
#
# Valid Values:
#   false
#   true
# Default Values:
#   false
#
# Parameter: winserviceStartupType
#
# Description:
#   The following values for Windows service startup can be used:
#   manual
#   automatic
#   disabled
#   The default value for this parameter is manual.
#
# Valid Values:
#   manual
#   automatic
#   disabled
# Default Values:
#   manual
#####
#enableService=true
#serviceName=service_user_ID
#winserviceAccountType=localsystem
#winserviceUserName=winservice_user_ID
#winservicePassword=winservice_password
#winserviceCheck=false
#winserviceStartupType>manual
#####
# Parameter: bpmdbDesign
#
# Description:
#   Specifies the file that holds the database configuration design for all of
#   the IBM Business Process Manager components .
#   This parameter replaces the -wbldbDesign that was used in previous
#   versions of WebSphere Process Server.
#
#   Note: If a bpmdbDesign file parameter is specified, none of the database
#   related properties should be specified.
#
# Valid Values:

```

```

#    Varies
# Default Values:
#    None
#####
#bpmdbDesign=design_file

#####
# Parameter: dbCreateNew
#
# Description:
#    Indicates a new database is created or if an existing database is to be
#    reused. Valid values are true or false. This value cannot be true for an
#    Oracle, SQL Server or a DB2 z/OS database. This value can only be true for
#    a DB2 database.
#
# Valid Values:
#    false
# Default Values:
#    false
#####
dbCreateNew=false

#####
# Parameter: dbType
#
# Description:
#    The database type. Set one of the following values for the type of
#    database product you are using with IBM Business Process Manager.
#
#    Required only for one of the following:
#    A stand-alone profile when -bpmdbDesign was not specified.
#    An advanced dmgr or managed profiles when -bpmdbDesign was not specified.
#
#    Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#    DB2UDBOS390
# Default Values:
#    DB2UDBOS390
#####
dbType=DB2UDBOS390

#####
# Parameter: dbDelayConfig
#
# Description:
#    Indicates whether to postpone table creation until after the profile is
#    created. Valid values are true or false. The parameter is set to false by
#    default. Setting this parameter to true delays the execution of the
#    scripts that create the database tables. No. Specify false if you want the
#    database to be set up during profile creation.
#
# Valid Values:
#    false
#    true
# Default Values:
#    false
#####
dbDelayConfig=true

#####
# Parameter: dbName
#
# Description:
#    The name of the database. By default, the value is set to orcl for Oracle
#    databases and to CMNDB for all other supported databases.
#

```

```

# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   CMNDB
#
# Parameter: dbUserId
#
# Description:
#   The user ID for all database types. Specifies the user ID that has
#   privileges to create and drop the databases. The WebSphere data source
#   uses this ID to authenticate the database connection.
#   Important: The -dbUserId parameter value must be a valid database
#   authorization ID. Required if the -bpmdbDesign file is not set.
#
# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: dbPassword
#
# Description:
#   The password required for database authentication. Required when the
#   -bpmdbDesign file is not set.
#
# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
#dbName=CMNDB
dbUserId=db_userid
dbPassword=db_pswd
#####
# Parameter: dbStorageGroup
#
# Description:
#   The storage group name for DB2 z/OS databases.
#
# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: dbConnectionLocation
#
# Description:
#   The location of DB2 for z/OS database.
#
# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
dbStorageGroup=db_stg_group
dbConnectionLocation=db2_location

```

```
#####
# Parameter: environmentType
#
# Description:
# Specifies the environment type. The environment type refers to how IBM
# Business Process Manager is used; for example, in a production, stage or
# test environment. Load testing might be done on a test server, while a
# stage environment type might be used as a temporary location to host
# changes before putting those changes into production. You might specify
# Stage as the Environment type if the server you are configuring will be
# accessed and used to review content and new functionality. Valid values
# are as follows:
# Test
# Use Test if the server you are configuring is to be used as a testing
# environment.
# Stage
# Use Stage if the server is to serve as a staging platform to be used as a
# preproduction server.
# Production
# Use Production if the server is to serve in a production capacity.
# The default value is Test.
#
# Valid Values:
# Test
# Production
# Stage
# Default Values:
# Test
#####
environmentType=Test
```

```
#####
# Parameter: isDeveloperServer
#
# Description:
# Specifies whether the server is intended for development purposes only.
# This parameter is useful when creating profiles to test applications on a
# non-production server prior to deploying the applications on their
# production application servers. If -isDeveloperServer is set when
# creating an IBM Business Process Manager profile, then a preconfigured VMM
# file repository is installed. This file repository contains a sample
# organization that can be used to test Business Process Choreographer
# people resolution, ready for you to use as is.
#
# Valid Values:
# false
# true
# Default Values:
# false
#####
#isDeveloperServer=false
```

Oracle 用の Advanced Process Server デプロイメント・マネージャー・プロファイル作成の応答ファイル:

ここに用意されている応答ファイルを変更し、**manageprofiles** コマンド行ユーティリティと一緒に使用して、Oracle データベース用のデプロイメント・マネージャー・プロファイルを作成します。

注: ご使用のオペレーティング・システムに合わせて、必要に応じて応答ファイルの情報をコメント化またはアンコメントしてください。詳細については、応答ファイルのコメントを参照してください。

```
# BEGIN COPYRIGHT
# *****
#
# Licensed Materials - Property of IBM
# 5725-C94
```



```

# (C) Copyright IBM Corporation 2011, 2012. All Rights Reserved.
# This sample program is provided AS IS and may be used, executed, copied
# and modified without royalty payment by customer (a) for its own
# instruction and study, (b) in order to develop applications designed to
# run with an IBM WebSphere product, either for customer's own internal
# use or for redistribution by customer, as part of such an application,
# in customer's own products.
#
# *****
# END COPYRIGHT

#####
# These response file has the applicable parameters for creating a
# DMgr PS Adv profile that uses Oracle.
#
# Depending on your environment, you may need to change the default values.
#
# To create a profile with this response file specify:
#
# was.install.root/bin/manageprofiles -response PS_Adv_DMgr_Oracle.response
#
# If you use the -response parameter, it must be the only parameter on
# the command-line. If you include any manageprofile parameters
# (in addition to -response) on the command-line, the response file
# is ignored. And default WebSphere Application server profile will be created .
#####

#####
# Parameter: create
#
# Description:
#   Creates the profile.
#   If you are creating a profile, this parameter is required.
#####
create

#####
# Parameter: templatePath
#
# Description:
#   Specifies the directory path to the template files in the installation
#   root directory. Within the profileTemplates directory are various
#   directories that correspond to different profile types and that vary with
#   the type of product installed. The profile directories are the paths that
#   you indicate while using the -templatePath option.
#   Use absolute paths. This parameter must exist as a directory and point to
#   a valid template directory.
#
#   When using the -templatePath parameter, specify the fully qualified file
#   path for the parameter.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
templatePath=BPM/dmgr.procsvr.adv

#####
# Parameter: profileName
#
# Description:
#   Specifies the name of the profile. Use a unique value when creating a
#   profile.
#   Each profile that shares the same set of product binaries must have a
#   unique name. The default profile name is based on the profile type and a
#   trailing number, for example:

```

```

#   profileType ProfileNumberwhere profileType is a value such as ProcSrv,
#   Dmgr, or Custom and ProfileNumber is a sequential number that creates a
#   unique profile name. The value for this parameter must not contain spaces
#   or characters that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,,
#   /, \, and |. The profile name that you choose must not be in use. On
#   Windows platforms: If the fully qualified path contains spaces, enclose
#   the value in quotation marks. The default value is based on the
#   install_root directory, the profiles subdirectory, and the name of the
#   file. For example, the default for profile creation is:
#   WS_WSPROFILE_DEFAULT_PROFILE_HOME/profileNamewhere
#   WS_WSPROFILE_DEFAULT_PROFILE_HOME is defined in the wasprofile.properties
#   file in the install_root/properties directory. The value for this
#   parameter must be a valid path for the target system and must not be
#   currently in use. You must have permissions to write to the directory.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
profileName=Dmgr01

#####
# Parameter: cellName
#
# Description:
#   Specifies the cell name of the profile. Use a unique cell name for each
#   profile.
#   The default value for this parameter is based on a combination of the
#   short host name, the constant Cell, and a trailing number, for example:
#   if (DMgr)
#       shortHostNameCellCellNumber
#   else
#       shortHostNameNodeNodeNumberCell
#   where CellNumber is a sequential number starting at 01 and NodeNumber is
#   the node number that you used to define the node name.
#   The value for this parameter must not contain spaces or any characters
#   that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   Varies
#
# Parameter: nodeName
#
# Description:
#   Specifies the node name for the node that is created with the new profile.
#   Use a unique value within the cell or on the workstation. Each profile
#   that shares the same set of product binaries must have a unique node name.
#   This parameter is required for profile creation only with the
#   dmgr.esbserverdefault.procsvrdefault.procctrdefault.procsvr.advdefault.
#   procctr.advdmgr.procctrmanaged.procctrmanaged.procsvr templates.
#   The default value for this parameter is based on the short host name,
#   profile type, and a trailing number, for example:
#   if (DMgr)
#       shortHostNameCellManagerNodeNumber
#   else
#       shortHostNameNodeNodeNumber
#   where NodeNumber is a sequential number starting at 01.
#   The value for this parameter must not contain spaces or any characters
#   that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   Varies

```

```

#####
cellName=cell_name
nodeName=node_name

#####
# Parameter: enableAdminSecurity
#
# Description:
#   For IBM Business Process Manager omit this parameter. Administrative
#   security is always enabled for IBM Business Process Manager profiles.
#   You must also specify the parameters -adminUserName and -adminPassword
#   along with the values for these parameters.
#
# Valid Values:
#   true
# Default Values:
#   true
#####
enableAdminSecurity=true
adminUserName=adminUser_ID
adminPassword=adminPassword

#####
# Parameter: signingCertDN
#
# Description:
#   Specifies the distinguished name of the root signing certificate that you
#   create when you create the profile. Specify the distinguished name in
#   quotation marks. This default personal certificate is located in the
#   server keystore file. If you do not specifically create or import a root
#   signing certificate, one is created by default. See the
#   -signingCertValidityPeriod parameter and the -keyStorePassword.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: signingCertValidityPeriod
#
# Description:
#   An optional parameter that specifies the amount of time in years that the
#   root signing certificate is valid. If you do not specify this parameter
#   with the -signingCertDN parameter, the root signing certificate is valid
#   for 20 years.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: keyStorePassword
#
# Description:
#   Specifies the password to use on all keystore files created during profile
#   creation. Keystore files are created for the default personal certificate
#   and the root signing certificate.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
#signingCertDN =distinguished_name
#signingCertValidityPeriod =validity_period
#keyStorePassword =keyStore_password

```

```

#####
# Parameter: defaultPorts
#
# Description:
#   Assigns the default or base port values to the profile.d o not use this
#   parameter when using the -startingPort or -portsFile parameter.
#   During profile creation, the manageprofiles command-line utility uses an
#   automatically generated set of recommended ports if you do not specify the
#   -startingPort parameter, the -defaultPorts parameter or the -portsFile
#   parameter. The recommended port values can be different than the default
#   port values based on the availability of the default ports.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: startingPort
#
# Description:
#   Specifies the starting port number for generating and assigning all ports
#   for the profile.
#   Port values are assigned sequentially from the -startingPort value,
#   omitting those ports that are already in use. The system recognizes and
#   resolves ports that are currently in use and determines the port
#   assignments to avoid port conflicts.
#   Do not use this parameter with the -defaultPorts or -portsFile parameters.
#   During profile creation, the manageprofiles command-line utility uses an
#   automatically generated set of recommended ports if you do not specify the
#   -startingPort parameter, the -defaultPorts parameter or the -portsFile
#   parameter. The recommended port values can be different than the default
#   port values based on the availability of the default ports.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: portsFile
#
# Description:
#   An optional parameter that specifies the path to a file that defines port
#   settings for the new profile.
#   Do not use this parameter when using the -startingPort or -defaultPorts
#   parameter.
#   During profile creation, the manageprofiles command-line utility uses an
#   automatically generated set of recommended ports if you do not specify the
#   -startingPort parameter, the -defaultPorts parameter or the -portsFile
#   parameter. The recommended port values can be different than the default
#   port values based on the availability of the default ports.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
#defaultPorts=default_ports
#startingPort=startingPort
#portsFile=file_path
#####
# Parameter: enableService
#
# Description:
#   Enables the creation of a Linux service. Valid values include true or
#   false. The default value for this parameter is false. When the
#   manageprofiles command-line utility is run with the -enableService option

```

```

# set to true , the Linux service is created with the profile when the
# command is run by the root user. When a nonroot user runs the
# manageprofiles command-line utility, the profile is created, but the Linux
# service is not. The Linux service is not created because the nonroot user
# does not have sufficient permission to set up the service. An
# INSTCONPARTIALSUCCESS result is displayed at the end of the profile
# creation and the profile creation log
# install_root/logs/manageprofiles/profile_name_create.log contains a
# message indicating the current user does not have sufficient permission to
# set up the Linux service. Use this parameter when creating profiles only.
#
# Valid Values:
# false
# true
# Default Values:
# None
#
# Parameter: serviceUserName
#
# Description:
# Specifies the user ID that is used during the creation of the Linux
# service so that the Linux service will run under this user ID. The Linux
# service runs whenever the user ID is logged on. Not required.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# None
#
# Parameter: winserviceAccountType
#
# Description:
# The type of the owner account of the Windows service created for the
# profile. Valid values include specifieduser or localsystem. The
# localsystem value runs the Windows service under the local account of the
# user who creates the profile. The default value for this parameter is
# localsystem. Use this parameter when creating profiles only.
#
# Valid Values:
# localsystem
# specifieduser
# Default Values:
# localsystem
#
# Parameter: winserviceUserName
#
# Description:
# Specify your user ID so that the Windows operating system can verify you
# as an ID that is capable of creating a Windows service. Your user ID must
# belong to the Administrator group and have the following advanced user
# rights:
# Act as part of the operating system
# Log on as a service
# The default value for this parameter is the current user name. The value
# for this parameter must not contain spaces or characters that are not
# valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |. The user that
# you specify must have the proper permissions to create a Windows service.
# You must specify the correct password for the user name that you choose.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# None
#
# Parameter: winservicePassword
#
# Description:

```

```

# Specify the password for the specified user or the local account that is
# to own the Windows service.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: winserviceCheck
#
# Description:
#   The value can be either true or false. Specify true to create a Windows
#   service for the server process that is created within the profile. Specify
#   false to not create the Windows service. The default value for this
#   parameter is false.
#
# Valid Values:
#   false
#   true
# Default Values:
#   false
#
# Parameter: winserviceStartupType
#
# Description:
#   The following values for Windows service startup can be used:
#   manual
#   automatic
#   disabled
#   The default value for this parameter is manual.
#
# Valid Values:
#   manual
#   automatic
#   disabled
# Default Values:
#   manual
#####
#enableService=true
#serviceName=service_user_ID
#winserviceAccountType=localsystem
#winserviceUserName=winservice_user_ID
#winservicePassword=winservice_password
#winserviceCheck=false
#winserviceStartupType>manual
#####
# Parameter: bpmdbDesign
#
# Description:
#   Specifies the file that holds the database configuration design for all of
#   the IBM Business Process Manager components .
#   This parameter replaces the -wbldbDesign that was used in previous
#   versions of WebSphere Process Server.
#
#   Note: If a bpmdbDesign file parameter is specified, none of the database
#   related properties should be specified.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
#bpmdbDesign=design_file
#####
# Parameter: dbCreateNew

```

```

#
# Description:
#   Indicates a new database is created or if an existing database is to be
#   reused. Valid values are true or false. This value cannot be true for an
#   Oracle, SQL Server or a DB2 z/OS database. This value can only be true for
#   a DB2 database.
#
# Valid Values:
#   false
# Default Values:
#   false
#####
dbCreateNew=false

#####
# Parameter: dbType
#
# Description:
#   The database type. Set one of the following values for the type of
#   database product you are using with IBM Business Process Manager.
#
#   Required only for one of the following:
#   A stand-alone profile when -bpmdbDesign was not specified.
#   An advanced dmgr or managed profiles when -bpmdbDesign was not specified.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   ORACLE
# Default Values:
#   ORACLE
#
# Parameter: dbDriverType
#
# Description:
#   The database driver type. For an Oracle database, specify ORACLE. For
#   databases other than Oracle, the value is automatically set based on the
#   server operating system. Server installations on all operating systems use
#   type 4.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: dbJDBCClasspath
#
# Description:
#   The directory path location of JDBC driver files.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
dbType=ORACLE
dbDriverType=ORACLE_THIN
dbJDBCClasspath=${WAS_INSTALL_ROOT}/jdbcdrivers/Oracle

#####
# Parameter: dbLocation
#
# Description:

```



```

# The directory of the ORACLE_HOME directory. This parameter is required
# when the parameter dbDelayConfig is set to false. No, this parameter is
# only valid if you are using Oracle databases.
#
# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
dbLocation=db_location
#####
# Parameter: dbDelayConfig
#
# Description:
#   Indicates whether to postpone table creation until after the profile is
#   created. Valid values are true or false. The parameter is set to false by
#   default. Setting this parameter to true delays the execution of the
#   scripts that create the database tables. No. Specify false if you want the
#   database to be set up during profile creation.
#
# Valid Values:
#   false
#   true
# Default Values:
#   false
#####
dbDelayConfig=false
#####
# Parameter: dbName
#
# Description:
#   The name of the database. By default, the value is set to orcl for Oracle
#   databases and to CMNDB for all other supported databases.
#
# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   CMNDB
#
# Parameter: dbUserId
#
# Description:
#   The user ID for all database types. Specifies the user ID that has
#   privileges to create and drop the databases. The WebSphere data source
#   uses this ID to authenticate the database connection.
#   Important: The -dbUserId parameter value must be a valid database
#   authorization ID.
#
# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: dbPassword
#
# Description:
#   The password required for database authentication.
#
# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.

```

```

#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
#dbName=orcl
#dbUserId=db_userid
#dbPassword=db_pswd

#####
# Parameter: dbCommonUserId
#
# Description:
#   The user id to authenticate with the Common database.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: dbCommonPassword
#
# Description:
#   The password for the user id of the dbCommonUserId parameter.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
dbCommonUserId=common_db_userid
dbCommonPassword=common_db_pswd

#####
# Parameter: environmentType
#
# Description:
#   Specifies the environment type. The environment type refers to how IBM
#   Business Process Manager is used; for example, in a production, stage or
#   test environment. Load testing might be done on a test server, while a
#   stage environment type might be used as a temporary location to host
#   changes before putting those changes into production. You might specify
#   Stage as the Environment type if the server you are configuring will be
#   accessed and used to review content and new functionality. Valid values
#   are as follows:
#   Test
#   Use Test if the server you are configuring is to be used as a testing
#   environment.
#   Stage
#   Use Stage if the server is to serve as a staging platform to be used as a
#   preproduction server.
#   Production
#   Use Production if the server is to serve in a production capacity.
#   The default value is Test.
#
# Valid Values:
#   Test
#   Production
#   Stage
# Default Values:
#   Test
#####

```

```
environmentType=Test
```

```
#####  
# Parameter: isDeveloperServer  
#  
# Description:  
#   Specifies whether the server is intended for development purposes only.  
#   This parameter is useful when creating profiles to test applications on a  
#   non-production server prior to deploying the applications on their  
#   production application servers. If -isDeveloperServer is set when  
#   creating an IBM Business Process Manager profile, then a preconfigured VMM  
#   file repository is installed. This file repository contains a sample  
#   organization that can be used to test Business Process Choreographer  
#   people resolution, ready for you to use as is.  
#  
# Valid Values:  
#   false  
#   true  
# Default Values:  
#   false  
#####  
#isDeveloperServer=false
```

SQL 用の Advanced Process Server デプロイメント・マネージャー・プロファイル作成の応答ファイル:

ここに用意されている応答ファイルを変更し、**manageprofiles** コマンド行ユーティリティーと一緒に使用して、SQL データベース用のデプロイメント・マネージャー・プロファイルを作成します。

注: ご使用のオペレーティング・システムに合わせて、必要に応じて応答ファイルの情報をコメント化またはアンコメントしてください。詳細については、応答ファイルのコメントを参照してください。

```
# BEGIN COPYRIGHT  
# *****  
#  
# Licensed Materials - Property of IBM  
# 5725-C94  
# (C) Copyright IBM Corporation 2011, 2012. All Rights Reserved.  
# This sample program is provided AS IS and may be used, executed, copied  
# and modified without royalty payment by customer (a) for its own  
# instruction and study, (b) in order to develop applications designed to  
# run with an IBM WebSphere product, either for customer's own internal  
# use or for redistribution by customer, as part of such an application,  
# in customer's own products.  
#  
# *****  
# END COPYRIGHT  
  
#####  
# These response file has the applicable parameters for creating a  
# DMgr PS Adv profile that uses SQLServer.  
#  
# Depending on your environment, you may need to change the default values.  
#  
# To create a profile with this response file specify:  
#  
# was.install.root/bin/manageprofiles -response PS_Adv_DMgr_SQLServer.response  
#  
# If you use the -response parameter, it must be the only parameter on  
# the command-line. If you include any manageprofile parameters  
# (in addition to -response) on the command-line, the response file  
# is ignored. And default WebSphere Application server profile will be created .  
#####  
  
#####  
# Parameter: create  
#
```

```

# Description:
#   Creates the profile.
#   If you are creating a profile, this parameter is required.
#####
create

#####
# Parameter:  templatePath
#
# Description:
#   Specifies the directory path to the template files in the installation
#   root directory. Within the profileTemplates directory are various
#   directories that correspond to different profile types and that vary with
#   the type of product installed. The profile directories are the paths that
#   you indicate while using the -templatePath option.
#   Use absolute paths. This parameter must exist as a directory and point to
#   a valid template directory.
#
#   When using the -templatePath parameter, specify the fully qualified file
#   path for the parameter.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
templatePath=BPM/dmgr.procsvr.adv

#####
# Parameter:  profileName
#
# Description:
#   Specifies the name of the profile. Use a unique value when creating a
#   profile.
#   Each profile that shares the same set of product binaries must have a
#   unique name. The default profile name is based on the profile type and a
#   trailing number, for example:
#   profileType ProfileNumberwhere profileType is a value such as ProcSrv,
#   Dmgr, or Custom and ProfileNumber is a sequential number that creates a
#   unique profile name. The value for this parameter must not contain spaces
#   or characters that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,,
#   /, \, and |. The profile name that you choose must not be in use. On
#   Windows platforms: If the fully qualified path contains spaces, enclose
#   the value in quotation marks. The default value is based on the
#   install_root directory, the profiles subdirectory, and the name of the
#   file. For example, the default for profile creation is:
#   WS_WSPROFILE_DEFAULT_PROFILE_HOME/profileNamewhere
#   WS_WSPROFILE_DEFAULT_PROFILE_HOME is defined in the wasprofile.properties
#   file in the install_root/properties directory. The value for this
#   parameter must be a valid path for the target system and must not be
#   currently in use. You must have permissions to write to the directory.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
profileName=Dmgr01

#####
# Parameter:  cellName
#
# Description:
#   Specifies the cell name of the profile. Use a unique cell name for each
#   profile.
#   The default value for this parameter is based on a combination of the
#   short host name, the constant Cell, and a trailing number, for example:

```

```

#   if (DMgr)
#       shortHostNameCellCellNumber
#   else
#       shortHostNameNodeNodeNumberCell
#   where CellNumber is a sequential number starting at 01 and NodeNumber is
#   the node number that you used to define the node name.
#   The value for this parameter must not contain spaces or any characters
#   that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   Varies
#
# Parameter:  nodeName
#
# Description:
#   Specifies the node name for the node that is created with the new profile.
#   Use a unique value within the cell or on the workstation. Each profile
#   that shares the same set of product binaries must have a unique node name.
#   This parameter is required for profile creation only with the
#   dmgr.esbserverdefault.procsvrdefault.procctrdefault.procsvr.advdefault.
#   procctr.advdmgr.procctrmanaged.procctrmanaged.procsvr templates.
#   The default value for this parameter is based on the short host name,
#   profile type, and a trailing number, for example:
#   if (DMgr)
#       shortHostNameCellManagerNodeNumber
#   else
#       shortHostNameNodeNodeNumber
#   where NodeNumber is a sequential number starting at 01.
#   The value for this parameter must not contain spaces or any characters
#   that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   Varies
#####
cellName=cell_name
nodeName=node_name
#####
# Parameter:  enableAdminSecurity
#
# Description:
#   For IBM Business Process Manager omit this parameter. Administrative
#   security is always enabled for IBM Business Process Manager profiles.
#   You must also specify the parameters -adminUserName and -adminPassword
#   along with the values for these parameters.
#
# Valid Values:
#   true
# Default Values:
#   true
#####
enableAdminSecurity=true
adminUserName=adminUser_ID
adminPassword=adminPassword
#####
# Parameter:  signingCertDN
#
# Description:
#   Specifies the distinguished name of the root signing certificate that you
#   create when you create the profile. Specify the distinguished name in
#   quotation marks. This default personal certificate is located in the
#   server keystore file. If you do not specifically create or import a root

```

```

# signing certificate, one is created by default. See the
# -signingCertValidityPeriod parameter and the -keyStorePassword.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: signingCertValidityPeriod
#
# Description:
#   An optional parameter that specifies the amount of time in years that the
#   root signing certificate is valid. If you do not specify this parameter
#   with the -signingCertDN parameter, the root signing certificate is valid
#   for 20 years.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: keyStorePassword
#
# Description:
#   Specifies the password to use on all keystore files created during profile
#   creation. Keystore files are created for the default personal certificate
#   and the root signing certificate.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
#signingCertDN =distinguished_name
#signingCertValidityPeriod =validity_period
#keyStorePassword =keyStore_password
#####
# Parameter: defaultPorts
#
# Description:
#   Assigns the default or base port values to the profile.d o not use this
#   parameter when using the -startingPort or -portsFile parameter.
#   During profile creation, the manageprofiles command-line utility uses an
#   automatically generated set of recommended ports if you do not specify the
#   -startingPort parameter, the -defaultPorts parameter or the -portsFile
#   parameter. The recommended port values can be different than the default
#   port values based on the availability of the default ports.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: startingPort
#
# Description:
#   Specifies the starting port number for generating and assigning all ports
#   for the profile.
#   Port values are assigned sequentially from the -startingPort value,
#   omitting those ports that are already in use. The system recognizes and
#   resolves ports that are currently in use and determines the port
#   assignments to avoid port conflicts.
#   Do not use this parameter with the -defaultPorts or -portsFile parameters.
#   During profile creation, the manageprofiles command-line utility uses an
#   automatically generated set of recommended ports if you do not specify the
#   -startingPort parameter, the -defaultPorts parameter or the -portsFile

```

```

#     parameter. The recommended port values can be different than the default
#     port values based on the availability of the default ports.
#
# Valid Values:
#     Varies
# Default Values:
#     None
#
# Parameter:  portsFile
#
# Description:
#     An optional parameter that specifies the path to a file that defines port
#     settings for the new profile.
#     Do not use this parameter when using the -startingPort or -defaultPorts
#     parameter.
#     During profile creation, the manageprofiles command-line utility uses an
#     automatically generated set of recommended ports if you do not specify the
#     -startingPort parameter, the -defaultPorts parameter or the -portsFile
#     parameter. The recommended port values can be different than the default
#     port values based on the availability of the default ports.
#
# Valid Values:
#     Varies
# Default Values:
#     None
#####
#defaultPorts=default_ports
#startingPort=startingPort
#portsFile=file_path
#####
# Parameter:  enableService
#
# Description:
#     Enables the creation of a Linux service. Valid values include true or
#     false. The default value for this parameter is false. When the
#     manageprofiles command-line utility is run with the -enableService option
#     set to true , the Linux service is created with the profile when the
#     command is run by the root user. When a nonroot user runs the
#     manageprofiles command-line utility, the profile is created, but the Linux
#     service is not. The Linux service is not created because the nonroot user
#     does not have sufficient permission to set up the service. An
#     INSTCONPARTIALSUCCESS result is displayed at the end of the profile
#     creation and the profile creation log
#     install_root/logs/manageprofiles/profile_name_create.log contains a
#     message indicating the current user does not have sufficient permission to
#     set up the Linux service. Use this parameter when creating profiles only.
#
# Valid Values:
#     false
#     true
# Default Values:
#     None
#
# Parameter:  serviceName
#
# Description:
#     Specifies the user ID that is used during the creation of the Linux
#     service so that the Linux service will run under this user ID. The Linux
#     service runs whenever the user ID is logged on. Not required.
#
# Valid Values:
#     Varies
# Default Values:
#     None
#
# Parameter:  winserviceAccountType

```



```

#
# Description:
#   The type of the owner account of the Windows service created for the
#   profile. Valid values include specifieduser or localsystem. The
#   localsystem value runs the Windows service under the local account of the
#   user who creates the profile. The default value for this parameter is
#   localsystem. Use this parameter when creating profiles only.
#
# Valid Values:
#   localsystem
#   specifieduser
# Default Values:
#   localsystem
#
# Parameter: winserviceUserName
#
# Description:
#   Specify your user ID so that the Windows operating system can verify you
#   as an ID that is capable of creating a Windows service. Your user ID must
#   belong to the Administrator group and have the following advanced user
#   rights:
#   Act as part of the operating system
#   Log on as a service
#   The default value for this parameter is the current user name. The value
#   for this parameter must not contain spaces or characters that are not
#   valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |. The user that
#   you specify must have the proper permissions to create a Windows service.
#   You must specify the correct password for the user name that you choose.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: winservicePassword
#
# Description:
#   Specify the password for the specified user or the local account that is
#   to own the Windows service.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: winserviceCheck
#
# Description:
#   The value can be either true or false. Specify true to create a Windows
#   service for the server process that is created within the profile. Specify
#   false to not create the Windows service. The default value for this
#   parameter is false.
#
# Valid Values:
#   false
#   true
# Default Values:
#   false
#
# Parameter: winserviceStartupType
#
# Description:
#   The following values for Windows service startup can be used:
#   manual
#   automatic
#   disabled
#   The default value for this parameter is manual.

```

```

#
# Valid Values:
#   manual
#   automatic
#   disabled
# Default Values:
#   manual
#####
#enableService=true
#serviceName=service_user_ID
#winserviceAccountType=localsystem
#winserviceUserName=winservice_user_ID
#winservicePassword=winservice_password
#winserviceCheck=false
#winserviceStartupType>manual

#####
# Parameter:  bpmdbDesign
#
# Description:
#   Specifies the file that holds the database configuration design for all of
#   the IBM Business Process Manager components .
#   This parameter replaces the -wbldbDesign that was used in previous
#   versions of WebSphere Process Server.
#
#   Note: If a bpmdbDesign file parameter is specified, none of the database
#   related properties should be specified.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
#bpmdbDesign=design_file

#####
# Parameter:  dbCreateNew
#
# Description:
#   Indicates a new database is created or if an existing database is to be
#   reused. Valid values are true or false. This value cannot be true for an
#   Oracle, SQL Server or a DB2 z/OS database. This value can only be true for
#   a DB2 database.
#
# Valid Values:
#   false
# Default Values:
#   false
#####
dbCreateNew=false

#####
# Parameter:  dbType
#
# Description:
#   The database type. Set one of the following values for the type of
#   database product you are using with IBM Business Process Manager.
#
#   Required only for one of the following:
#   A stand-alone profile when -bpmdbDesign was not specified.
#   An advanced dmgr or managed profiles when -bpmdbDesign was not specified.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   MSSQLSERVER_MICROSOFT
# Default Values:

```

```

#   MSSQLSERVER_MICROSOFT
#
# Parameter:  dbJDBCClasspath
#
# Description:
#   The directory path location of JDBC driver files.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
dbType=MSSQLSERVER_MICROSOFT
dbJDBCClasspath=${WAS_INSTALL_ROOT}/jdbcdrivers/SQLServer
#####
# Parameter:  dbDelayConfig
#
# Description:
#   Indicates whether to postpone table creation until after the profile is
#   created. Valid values are true or false. The parameter is set to false by
#   default. Setting this parameter to true delays the execution of the
#   scripts that create the database tables. No. Specify false if you want the
#   database to be set up during profile creation.
#
# Valid Values:
#   false
#   true
# Default Values:
#   false
#####
dbDelayConfig=false
#####
# Parameter:  dbName
#
# Description:
#   The name of the database. By default, the value is set to orcl for Oracle
#   databases and to CMNDB for all other supported databases.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   CMNDB
#
# Parameter:  dbUserId
#
# Description:
#   The user ID for all database types. Specifies the user ID that has
#   privileges to create and drop the databases. The WebSphere data source
#   uses this ID to authenticate the database connection.
#   Important: The -dbUserId parameter value must be a valid database
#   authorization ID. Required if the -bpmdbDesign file is not set.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter:  dbPassword
#

```

```

# Description:
#   The password required for database authentication. Required when the
#   -bpmdbDesign file is not set.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
#dbName=CMNDB
dbUserId=db_userid
dbPassword=db_pswd

#####
# Parameter: dbCommonUserId
#
# Description:
#   The user id to authenticate with the Common database.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: dbCommonPassword
#
# Description:
#   The password for the user id of the dbCommonUserId parameter.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
#dbCommonUserId=common_db_userid
#dbCommonPassword=common_db_pswd

#####
# Parameter: dbWinAuth
#
# Description:
#   An optional parameter that is valid in all default profile templates.
#   Specify true to indicate that you are running SQL Server using integrated
#   windows authentication.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   false
#   true
# Default Values:
#   None
#####
#dbWinAuth=true

#####
# Parameter: environmentType
#
# Description:
#   Specifies the environment type. The environment type refers to how IBM
#   Business Process Manager is used; for example, in a production, stage or

```

```

# test environment. Load testing might be done on a test server, while a
# stage environment type might be used as a temporary location to host
# changes before putting those changes into production. You might specify
# Stage as the Environment type if the server you are configuring will be
# accessed and used to review content and new functionality. Valid values
# are as follows:
# Test
# Use Test if the server you are configuring is to be used as a testing
# environment.
# Stage
# Use Stage if the server is to serve as a staging platform to be used as a
# preproduction server.
# Production
# Use Production if the server is to serve in a production capacity.
# The default value is Test.
#
# Valid Values:
# Test
# Production
# Stage
# Default Values:
# Test
#####
environmentType=Test

#####
# Parameter: isDeveloperServer
#
# Description:
# Specifies whether the server is intended for development purposes only.
# This parameter is useful when creating profiles to test applications on a
# non-production server prior to deploying the applications on their
# production application servers. If -isDeveloperServer is set when
# creating an IBM Business Process Manager profile, then a preconfigured VMM
# file repository is installed. This file repository contains a sample
# organization that can be used to test Business Process Choreographer
# people resolution, ready for you to use as is.
#
# Valid Values:
# false
# true
# Default Values:
# false
#####
#isDeveloperServer=false

```

Standard Process Server 用の応答ファイル:

manageprofiles コマンド行ユーティリティと応答ファイルを使用して、カスタム・プロファイルを作成します。

DB2 用の Standard Process Server カスタム・プロファイル作成の応答ファイル:

ここに用意されている応答ファイルを変更し、**manageprofiles** コマンド行ユーティリティと一緒に使用して、DB2 データベース用のカスタム・プロファイルを作成します。

注: ご使用のオペレーティング・システムに合わせて、必要に応じて応答ファイルの情報をコメント化またはアンコメントしてください。詳細については、応答ファイルのコメントを参照してください。

```

# BEGIN COPYRIGHT
# *****
#
# Licensed Materials - Property of IBM
# 5725-C94
# (C) Copyright IBM Corporation 2011, 2012. All Rights Reserved.

```

```

# This sample program is provided AS IS and may be used, executed, copied
# and modified without royalty payment by customer (a) for its own
# instruction and study, (b) in order to develop applications designed to
# run with an IBM WebSphere product, either for customer's own internal
# use or for redistribution by customer, as part of such an application,
# in customer's own products.
#
# *****
# END COPYRIGHT

#####
# These response file has the applicable parameters for creating a
# Managed PS Std profile that uses DB2.
#
# Depending on your environment, you may need to change the default values.
#
# To create a profile with this response file specify:
#
# was.install.root/bin/manageprofiles -response PS_Std_Managed_DB2.response
#
# If you use the -response parameter, it must be the only parameter on
# the command-line. If you include any manageprofile parameters
# (in addition to -response) on the command-line, the response file
# is ignored. And default WebSphere Application server profile will be created .
#####

#####
# Parameter: create
#
# Description:
#   Creates the profile.
#   If you are creating a profile, this parameter is required.
#####
create

#####
# Parameter: templatePath
#
# Description:
#   Specifies the directory path to the template files in the installation
#   root directory. Within the profileTemplates directory are various
#   directories that correspond to different profile types and that vary with
#   the type of product installed. The profile directories are the paths that
#   you indicate while using the -templatePath option.
#   Use absolute paths. This parameter must exist as a directory and point to
#   a valid template directory.
#
#   When using the -templatePath parameter, specify the fully qualified file
#   path for the parameter.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
templatePath=BPM/managed.procsvr

#####
# Parameter: profileName
#
# Description:
#   Specifies the name of the profile. Use a unique value when creating a
#   profile.
#   Each profile that shares the same set of product binaries must have a
#   unique name. The default profile name is based on the profile type and a
#   trailing number, for example:
#   profileType ProfileNumberwhere profileType is a value such as ProcSrv,

```

```

# Dmgr, or Custom and ProfileNumber is a sequential number that creates a
# unique profile name. The value for this parameter must not contain spaces
# or characters that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,,
# /, \, and |. The profile name that you choose must not be in use. On
# Windows platforms: If the fully qualified path contains spaces, enclose
# the value in quotation marks. The default value is based on the
# install_root directory, the profiles subdirectory, and the name of the
# file. For example, the default for profile creation is:
# WS_WSPROFILE_DEFAULT_PROFILE_HOME/profileNameewhere
# WS_WSPROFILE_DEFAULT_PROFILE_HOME is defined in the wasprofile.properties
# file in the install_root/properties directory. The value for this
# parameter must be a valid path for the target system and must not be
# currently in use. You must have permissions to write to the directory.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
profileName=Custom01

#####
# Parameter: cellName
#
# Description:
#   Specifies the cell name of the profile. Use a unique cell name for each
#   profile.
#   The default value for this parameter is based on a combination of the
#   short host name, the constant Cell, and a trailing number, for example:
#   if (DMgr)
#     shortHostNameCellCellNumber
#   else
#     shortHostNameNodeNodeNumberCell
#   where CellNumber is a sequential number starting at 01 and NodeNumber is
#   the node number that you used to define the node name.
#   The value for this parameter must not contain spaces or any characters
#   that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   Varies
#
# Parameter: nodeName
#
# Description:
#   Specifies the node name for the node that is created with the new profile.
#   Use a unique value within the cell or on the workstation. Each profile
#   that shares the same set of product binaries must have a unique node name.
#   This parameter is required for profile creation only with the
#   dmgr.esbserverdefault.procsvrdefault.procctrdefault.procsvr.advdefault.
#   procctr.advdmgr.procctrmanaged.procctrmanaged.procsvr templates.
#   The default value for this parameter is based on the short host name,
#   profile type, and a trailing number, for example:
#   if (DMgr)
#     shortHostNameCellManagerNodeNumber
#   else
#     shortHostNameNodeNodeNumber
#   where NodeNumber is a sequential number starting at 01.
#   The value for this parameter must not contain spaces or any characters
#   that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   Varies
#####

```



```
cellName=cell_name
nodeName=node_name
```

```
#####
# Parameter: enableAdminSecurity
#
# Description:
#   For IBM Business Process Manager omit this parameter. Administrative
#   security is always enabled for IBM Business Process Manager profiles.
#   You must also specify the parameters -adminUserName and -adminPassword
#   along with the values for these parameters.
#
# Valid Values:
#   true
# Default Values:
#   true
#####
```

```
enableAdminSecurity=true
adminUserName=adminUser_ID
adminPassword=adminPassword
```

```
#####
# Parameter: signingCertDN
#
# Description:
#   Specifies the distinguished name of the root signing certificate that you
#   create when you create the profile. Specify the distinguished name in
#   quotation marks. This default personal certificate is located in the
#   server keystore file. If you do not specifically create or import a root
#   signing certificate, one is created by default. See the
#   -signingCertValidityPeriod parameter and the -keyStorePassword.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
```

```
# Parameter: signingCertValidityPeriod
#
# Description:
#   An optional parameter that specifies the amount of time in years that the
#   root signing certificate is valid. If you do not specify this parameter
#   with the -signingCertDN parameter, the root signing certificate is valid
#   for 20 years.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
```

```
# Parameter: keyStorePassword
#
# Description:
#   Specifies the password to use on all keystore files created during profile
#   creation. Keystore files are created for the default personal certificate
#   and the root signing certificate.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
```

```
#signingCertDN =distinguished_name
#signingCertValidityPeriod =validity_period
#keyStorePassword =keyStore_password
```

```
#####
```

```

# Parameter: enableService
#
# Description:
#   Enables the creation of a Linux service. Valid values include true or
#   false. The default value for this parameter is false. When the
#   manageprofiles command-line utility is run with the -enableService option
#   set to true , the Linux service is created with the profile when the
#   command is run by the root user. When a nonroot user runs the
#   manageprofiles command-line utility, the profile is created, but the Linux
#   service is not. The Linux service is not created because the nonroot user
#   does not have sufficient permission to set up the service. An
#   INSTCONPARTIALSUCCESS result is displayed at the end of the profile
#   creation and the profile creation log
#   install_root/logs/manageprofiles/profile_name_create.log contains a
#   message indicating the current user does not have sufficient permission to
#   set up the Linux service. Use this parameter when creating profiles only.
#
# Valid Values:
#   false
#   true
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: serviceUserName
#
# Description:
#   Specifies the user ID that is used during the creation of the Linux
#   service so that the Linux service will run under this user ID. The Linux
#   service runs whenever the user ID is logged on. Not required.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: winserviceAccountType
#
# Description:
#   The type of the owner account of the Windows service created for the
#   profile. Valid values include specifieduser or localsystem. The
#   localsystem value runs the Windows service under the local account of the
#   user who creates the profile. The default value for this parameter is
#   localsystem. Use this parameter when creating profiles only.
#
# Valid Values:
#   localsystem
#   specifieduser
# Default Values:
#   localsystem
#
# Parameter: winserviceUserName
#
# Description:
#   Specify your user ID so that the Windows operating system can verify you
#   as an ID that is capable of creating a Windows service. Your user ID must
#   belong to the Administrator group and have the following advanced user
#   rights:
#   Act as part of the operating system
#   Log on as a service
#   The default value for this parameter is the current user name. The value
#   for this parameter must not contain spaces or characters that are not
#   valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |. The user that
#   you specify must have the proper permissions to create a Windows service.
#   You must specify the correct password for the user name that you choose.
#
# Valid Values:
#   Varies

```

```

# Default Values:
#   None
#
# Parameter: winservicePassword
#
# Description:
#   Specify the password for the specified user or the local account that is
#   to own the Windows service.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: winserviceCheck
#
# Description:
#   The value can be either true or false. Specify true to create a Windows
#   service for the server process that is created within the profile. Specify
#   false to not create the Windows service. The default value for this
#   parameter is false.
#
# Valid Values:
#   false
#   true
# Default Values:
#   false
#
# Parameter: winserviceStartupType
#
# Description:
#   The following values for Windows service startup can be used:
#   manual
#   automatic
#   disabled
#   The default value for this parameter is manual.
#
# Valid Values:
#   manual
#   automatic
#   disabled
# Default Values:
#   manual
#####
#enableService=true
#serviceName=service_user_ID
#winserviceAccountType=localsystem
#winserviceUserName=winservice_user_ID
#winservicePassword=winservice_password
#winserviceCheck=false
#winserviceStartupType>manual

#####
# Parameter: federateLaterBPM
#
# Description:
#   Indicates if the managed profile is to be federated later using either the
#   profileTemplates/managed.esbserver or the
#   profileTemplates/BPM/managed.templateName template. Valid values are true
#   or false. If the -dmgrHost, -dmgrPort, -dmgrAdminUserName and
#   -dmgrAdminPassword parameters are not set, the default value for this
#   parameter is true. If you use -federateLaterBPM, you must either omit the
#   WebSphere Application Server-based parameter -federateLater or set it to
#   true.
#
# Valid Values:
#   false

```

```

# true
# Default Values:
# true
#
# Parameter: dmgrHost
#
# Description:
# Identifies the workstation where the deployment manager is running.
# Specify this parameter and the dmgrPort parameter to federate a custom
# profile as it is created or augmented. This parameter is available with
# the managed.templateName and managed.esbserver profile templates. The
# host name can be the long or short DNS name or the IP address of the
# deployment manager workstation. Specifying this optional parameter directs
# the manageprofiles command-line utility to attempt to federate the custom
# node into the deployment manager cell as it creates the custom profile.
# This parameter is ignored when creating a deployment manager profile or
# stand-alone server profile. If you federate a custom node when the
# deployment manager is not running, the installation indicator in the logs
# is INSTCONFFAILED to indicate a complete failure. The resulting custom
# profile is unusable. You must move the custom profile directory out of the
# profile repository (the profile's installation root directory) before
# creating another custom profile with the same profile name. If you have
# changed the default JMX connector type, you cannot federate with the
# manageprofiles command-line utility. Use the addNode command later after
# the node is created instead. The default value for this parameter is
# localhost. The value for this parameter must be a properly formed host
# name and must not contain spaces or characters that are not valid such as
# the following: *, ?, ", <, >, , , /, \, and |. A connection to the
# deployment manager must also be available in conjunction with the dmgrPort
# parameter. Required if you are creating a managed profile with the
# -federateLaterBPM parameter set to false and the deployment manager is not
# on the local machine.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# None
#
# Parameter: dmgrPort
#
# Description:
# Identifies the SOAP port of the deployment manager. Specify this parameter
# and the dmgrHost parameter to federate a custom profile as it is created
# or augmented. The deployment manager must be running and accessible. If
# you have changed the default JMX connector type, you cannot federate with
# the manageprofiles command-line utility. Use the addNode command later
# after the node is created instead. The default value for this parameter is
# 8879. The port that you indicate must be a positive integer and a
# connection to the deployment manager must be available in conjunction with
# the dmgrHost parameter. Required if you are creating a managed profile,
# the -federateLaterBPM parameter is set to false, and the deployment
# manager was configured with a port that was not a default port.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# None
#####
federateLaterBPM=true
#dmgrHost=dmgr_host_name
#dmgrPort=dmgr_port_number
#dmgrAdminUserName=dmgr_admin_user_name
#dmgrAdminPassword=dmgr_admin_password

#####
# Parameter: environmentType
#

```

```

# Description:
#   Specifies the environment type. The environment type refers to how IBM
#   Business Process Manager is used; for example, in a production, stage or
#   test environment. Load testing might be done on a test server, while a
#   stage environment type might be used as a temporary location to host
#   changes before putting those changes into production. You might specify
#   Stage as the Environment type if the server you are configuring will be
#   accessed and used to review content and new functionality. Valid values
#   are as follows:
#   Test
#   Use Test if the server you are configuring is to be used as a testing
#   environment.
#   Stage
#   Use Stage if the server is to serve as a staging platform to be used as a
#   preproduction server.
#   Production
#   Use Production if the server is to serve in a production capacity.
#   The default value is Test.
#
# Valid Values:
#   Test
#   Production
#   Stage
# Default Values:
#   Test
#####
environmentType=Test

#####
# Parameter: isDeveloperServer
#
# Description:
#   Specifies whether the server is intended for development purposes only.
#   This parameter is useful when creating profiles to test applications on a
#   non-production server prior to deploying the applications on their
#   production application servers. If -isDeveloperServer is set when
#   creating an IBM Business Process Manager profile, then a preconfigured VMM
#   file repository is installed. This file repository contains a sample
#   organization that can be used to test Business Process Choreographer
#   people resolution, ready for you to use as is.
#
# Valid Values:
#   false
#   true
# Default Values:
#   false
#####
#isDeveloperServer=false

```

DB2 for z/OS 用の Standard Process Server カスタム・プロファイル作成の応答ファイル:

ここに用意されている応答ファイルを変更し、**manageprofiles** コマンド行ユーティリティと一緒に使用して、DB2 for z/OS データベース用のカスタム・プロファイルを作成します。

注: ご使用のオペレーティング・システムに合わせて、必要に応じて応答ファイルの情報をコメント化またはアンコメントしてください。詳細については、応答ファイルのコメントを参照してください。

```

# BEGIN COPYRIGHT
# *****
#
# Licensed Materials - Property of IBM
# 5725-C94
# (C) Copyright IBM Corporation 2011, 2012. All Rights Reserved.
# This sample program is provided AS IS and may be used, executed, copied
# and modified without royalty payment by customer (a) for its own
# instruction and study, (b) in order to develop applications designed to

```

```

# run with an IBM WebSphere product, either for customer's own internal
# use or for redistribution by customer, as part of such an application,
# in customer's own products.
#
# *****
# END COPYRIGHT

#####
# These response file has the applicable parameters for creating a
# Managed PS Std profile that uses DB2zOS.
#
# Depending on your environment, you may need to change the default values.
#
# To create a profile with this response file specify:
#
# was.install.root/bin/manageprofiles -response PS_Std_Managed_DB2zOS.response
#
# If you use the -response parameter, it must be the only parameter on
# the command-line. If you include any manageprofile parameters
# (in addition to -response) on the command-line, the response file
# is ignored. And default WebSphere Application server profile will be created .
#####

#####
# Parameter: create
#
# Description:
#   Creates the profile.
#   If you are creating a profile, this parameter is required.
#####
create

#####
# Parameter: templatePath
#
# Description:
#   Specifies the directory path to the template files in the installation
#   root directory. Within the profileTemplates directory are various
#   directories that correspond to different profile types and that vary with
#   the type of product installed. The profile directories are the paths that
#   you indicate while using the -templatePath option.
#   Use absolute paths. This parameter must exist as a directory and point to
#   a valid template directory.
#
#   When using the -templatePath parameter, specify the fully qualified file
#   path for the parameter.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
templatePath=BPM/managed.procsvr

#####
# Parameter: profileName
#
# Description:
#   Specifies the name of the profile. Use a unique value when creating a
#   profile.
#   Each profile that shares the same set of product binaries must have a
#   unique name. The default profile name is based on the profile type and a
#   trailing number, for example:
#   profileType ProfileNumberwhere profileType is a value such as ProcSrv,
#   Dmgr, or Custom and ProfileNumber is a sequential number that creates a
#   unique profile name. The value for this parameter must not contain spaces
#   or characters that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,,

```

```

# /, \, and |. The profile name that you choose must not be in use. On
# Windows platforms: If the fully qualified path contains spaces, enclose
# the value in quotation marks. The default value is based on the
# install_root directory, the profiles subdirectory, and the name of the
# file. For example, the default for profile creation is:
# WS_WSPROFILE_DEFAULT_PROFILE_HOME/profileNameewhere
# WS_WSPROFILE_DEFAULT_PROFILE_HOME is defined in the wasprofile.properties
# file in the install_root/properties directory. The value for this
# parameter must be a valid path for the target system and must not be
# currently in use. You must have permissions to write to the directory.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
profileName=Custom01

#####
# Parameter: cellName
#
# Description:
#   Specifies the cell name of the profile. Use a unique cell name for each
#   profile.
#   The default value for this parameter is based on a combination of the
#   short host name, the constant Cell, and a trailing number, for example:
#   if (DMgr)
#       shortHostNameCellCellNumber
#   else
#       shortHostNameNodeNodeNumberCell
#   where CellNumber is a sequential number starting at 01 and NodeNumber is
#   the node number that you used to define the node name.
#   The value for this parameter must not contain spaces or any characters
#   that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   Varies
#
# Parameter: nodeName
#
# Description:
#   Specifies the node name for the node that is created with the new profile.
#   Use a unique value within the cell or on the workstation. Each profile
#   that shares the same set of product binaries must have a unique node name.
#   This parameter is required for profile creation only with the
#   dmgr.esbserverdefault.procsvrdefault.procctrdefault.procsvr.advdefault.
#   procctr.advdmgr.procctrmanaged.procctrmanaged.procsvr templates.
#   The default value for this parameter is based on the short host name,
#   profile type, and a trailing number, for example:
#   if (DMgr)
#       shortHostNameCellManagerNodeNumber
#   else
#       shortHostNameNodeNodeNumber
#   where NodeNumber is a sequential number starting at 01.
#   The value for this parameter must not contain spaces or any characters
#   that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   Varies
#####
cellName=cell_name
nodeName=node_name

```



```

#####
# Parameter: enableAdminSecurity
#
# Description:
#   For IBM Business Process Manager omit this parameter. Administrative
#   security is always enabled for IBM Business Process Manager profiles.
#   You must also specify the parameters -adminUserName and -adminPassword
#   along with the values for these parameters.
#
# Valid Values:
#   true
# Default Values:
#   true
#####
enableAdminSecurity=true
adminUserName=adminUser_ID
adminPassword=adminPassword

#####
# Parameter: signingCertDN
#
# Description:
#   Specifies the distinguished name of the root signing certificate that you
#   create when you create the profile. Specify the distinguished name in
#   quotation marks. This default personal certificate is located in the
#   server keystore file. If you do not specifically create or import a root
#   signing certificate, one is created by default. See the
#   -signingCertValidityPeriod parameter and the -keyStorePassword.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: signingCertValidityPeriod
#
# Description:
#   An optional parameter that specifies the amount of time in years that the
#   root signing certificate is valid. If you do not specify this parameter
#   with the -signingCertDN parameter, the root signing certificate is valid
#   for 20 years.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: keyStorePassword
#
# Description:
#   Specifies the password to use on all keystore files created during profile
#   creation. Keystore files are created for the default personal certificate
#   and the root signing certificate.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
#signingCertDN =distinguished_name
#signingCertValidityPeriod =validity_period
#keyStorePassword =keyStore_password

#####
# Parameter: enableService
#
# Description:

```

```

# Enables the creation of a Linux service. Valid values include true or
# false. The default value for this parameter is false. When the
# manageprofiles command-line utility is run with the -enableService option
# set to true , the Linux service is created with the profile when the
# command is run by the root user. When a nonroot user runs the
# manageprofiles command-line utility, the profile is created, but the Linux
# service is not. The Linux service is not created because the nonroot user
# does not have sufficient permission to set up the service. An
# INSTCONPARTIALSUCCESS result is displayed at the end of the profile
# creation and the profile creation log
# install_root/logs/manageprofiles/profile_name_create.log contains a
# message indicating the current user does not have sufficient permission to
# set up the Linux service. Use this parameter when creating profiles only.
#
# Valid Values:
#   false
#   true
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: serviceUserName
#
# Description:
#   Specifies the user ID that is used during the creation of the Linux
#   service so that the Linux service will run under this user ID. The Linux
#   service runs whenever the user ID is logged on. Not required.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: winserviceAccountType
#
# Description:
#   The type of the owner account of the Windows service created for the
#   profile. Valid values include specifieduser or localsystem. The
#   localsystem value runs the Windows service under the local account of the
#   user who creates the profile. The default value for this parameter is
#   localsystem. Use this parameter when creating profiles only.
#
# Valid Values:
#   localsystem
#   specifieduser
# Default Values:
#   localsystem
#
# Parameter: winserviceUserName
#
# Description:
#   Specify your user ID so that the Windows operating system can verify you
#   as an ID that is capable of creating a Windows service. Your user ID must
#   belong to the Administrator group and have the following advanced user
#   rights:
#   Act as part of the operating system
#   Log on as a service
#   The default value for this parameter is the current user name. The value
#   for this parameter must not contain spaces or characters that are not
#   valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |. The user that
#   you specify must have the proper permissions to create a Windows service.
#   You must specify the correct password for the user name that you choose.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#

```

```

# Parameter: winservicePassword
#
# Description:
#   Specify the password for the specified user or the local account that is
#   to own the Windows service.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: winserviceCheck
#
# Description:
#   The value can be either true or false. Specify true to create a Windows
#   service for the server process that is created within the profile. Specify
#   false to not create the Windows service. The default value for this
#   parameter is false.
#
# Valid Values:
#   false
#   true
# Default Values:
#   false
#
# Parameter: winserviceStartupType
#
# Description:
#   The following values for Windows service startup can be used:
#   manual
#   automatic
#   disabled
#   The default value for this parameter is manual.
#
# Valid Values:
#   manual
#   automatic
#   disabled
# Default Values:
#   manual
#####
#enableService=true
#serviceName=service_user_ID
#winserviceAccountType=localsystem
#winserviceUserName=winservice_user_ID
#winservicePassword=winservice_password
#winserviceCheck=false
#winserviceStartupType>manual
#####
# Parameter: federateLaterBPM
#
# Description:
#   Indicates if the managed profile is to be federated later using either the
#   profileTemplates/managed.esbserver or the
#   profileTemplates/BPM/managed.templateName template. Valid values are true
#   or false. If the -dmgrHost, -dmgrPort, -dmgrAdminUserName and
#   -dmgrAdminPassword parameters are not set, the default value for this
#   parameter is true. If you use -federateLaterBPM, you must either omit the
#   WebSphere Application Server-based parameter -federateLater or set it to
#   true.
#
# Valid Values:
#   false
#   true
# Default Values:
#   true

```

```

#
# Parameter: dmgrHost
#
# Description:
#   Identifies the workstation where the deployment manager is running.
#   Specify this parameter and the dmgrPort parameter to federate a custom
#   profile as it is created or augmented. This parameter is available with
#   the managed.templateName and managed.esbserver profile templates. The
#   host name can be the long or short DNS name or the IP address of the
#   deployment manager workstation. Specifying this optional parameter directs
#   the manageprofiles command-line utility to attempt to federate the custom
#   node into the deployment manager cell as it creates the custom profile.
#   This parameter is ignored when creating a deployment manager profile or
#   stand-alone server profile. If you federate a custom node when the
#   deployment manager is not running, the installation indicator in the logs
#   is INSTCONFFAILED to indicate a complete failure. The resulting custom
#   profile is unusable. You must move the custom profile directory out of the
#   profile repository (the profile's installation root directory) before
#   creating another custom profile with the same profile name. If you have
#   changed the default JMX connector type, you cannot federate with the
#   manageprofiles command-line utility. Use the addNode command later after
#   the node is created instead. The default value for this parameter is
#   localhost. The value for this parameter must be a properly formed host
#   name and must not contain spaces or characters that are not valid such as
#   the following: *, ?, ", <, >, , , /, \, and |. A connection to the
#   deployment manager must also be available in conjunction with the dmgrPort
#   parameter. Required if you are creating a managed profile with the
#   -federateLaterBPM parameter set to false and the deployment manager is not
#   on the local machine.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: dmgrPort
#
# Description:
#   Identifies the SOAP port of the deployment manager. Specify this parameter
#   and the dmgrHost parameter to federate a custom profile as it is created
#   or augmented. The deployment manager must be running and accessible. If
#   you have changed the default JMX connector type, you cannot federate with
#   the manageprofiles command-line utility. Use the addNode command later
#   after the node is created instead. The default value for this parameter is
#   8879. The port that you indicate must be a positive integer and a
#   connection to the deployment manager must be available in conjunction with
#   the dmgrHost parameter. Required if you are creating a managed profile,
#   the -federateLaterBPM parameter is set to false, and the deployment
#   manager was configured with a port that was not a default port.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
federateLaterBPM=true
#dmgrHost=dmgr_host_name
#dmgrPort=dmgr_port_number
#dmgrAdminUserName=dmgr_admin_user_name
#dmgrAdminPassword=dmgr_admin_password
#####
# Parameter: environmentType
#
# Description:
#   Specifies the environment type. The environment type refers to how IBM
#   Business Process Manager is used; for example, in a production, stage or

```

```

# test environment. Load testing might be done on a test server, while a
# stage environment type might be used as a temporary location to host
# changes before putting those changes into production. You might specify
# Stage as the Environment type if the server you are configuring will be
# accessed and used to review content and new functionality. Valid values
# are as follows:
# Test
# Use Test if the server you are configuring is to be used as a testing
# environment.
# Stage
# Use Stage if the server is to serve as a staging platform to be used as a
# preproduction server.
# Production
# Use Production if the server is to serve in a production capacity.
# The default value is Test.
#
# Valid Values:
# Test
# Production
# Stage
# Default Values:
# Test
#####
environmentType=Test

#####
# Parameter: isDeveloperServer
#
# Description:
# Specifies whether the server is intended for development purposes only.
# This parameter is useful when creating profiles to test applications on a
# non-production server prior to deploying the applications on their
# production application servers. If -isDeveloperServer is set when
# creating an IBM Business Process Manager profile, then a preconfigured VMM
# file repository is installed. This file repository contains a sample
# organization that can be used to test Business Process Choreographer
# people resolution, ready for you to use as is.
#
# Valid Values:
# false
# true
# Default Values:
# false
#####
#isDeveloperServer=false

```

Oracle 用の Standard Process Server カスタム・プロファイル作成の応答ファイル:

ここに用意されている応答ファイルを変更し、**manageprofiles** コマンド行ユーティリティーと一緒に使用して、Oracle データベース用のカスタム・プロファイルを作成します。

注: ご使用のオペレーティング・システムに合わせて、必要に応じて応答ファイルの情報をコメント化またはアンコメントしてください。詳細については、応答ファイルのコメントを参照してください。

```

# BEGIN COPYRIGHT
# *****
#
# Licensed Materials - Property of IBM
# 5725-C94
# (C) Copyright IBM Corporation 2011, 2012. All Rights Reserved.
# This sample program is provided AS IS and may be used, copied
# and modified without royalty payment by customer (a) for its own
# instruction and study, (b) in order to develop applications designed to
# run with an IBM WebSphere product, either for customer's own internal
# use or for redistribution by customer, as part of such an application,
# in customer's own products.

```

```

#
# *****
# END COPYRIGHT

#####
# These response file has the applicable parameters for creating a
# Managed PS Std profile that uses Oracle.
#
# Depending on your environment, you may need to change the default values.
#
# To create a profile with this response file specify:
#
# was.install.root/bin/manageprofiles -response PS_Std_Managed_Oracle.response
#
# If you use the -response parameter, it must be the only parameter on
# the command-line. If you include any manageprofile parameters
# (in addition to -response) on the command-line, the response file
# is ignored. And default WebSphere Application server profile will be created .
#####

#####
# Parameter: create
#
# Description:
#   Creates the profile.
#   If you are creating a profile, this parameter is required.
#####
create

#####
# Parameter: templatePath
#
# Description:
#   Specifies the directory path to the template files in the installation
#   root directory. Within the profileTemplates directory are various
#   directories that correspond to different profile types and that vary with
#   the type of product installed. The profile directories are the paths that
#   you indicate while using the -templatePath option.
#   Use absolute paths. This parameter must exist as a directory and point to
#   a valid template directory.
#
#   When using the -templatePath parameter, specify the fully qualified file
#   path for the parameter.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
templatePath=BPM/managed.procsvr

#####
# Parameter: profileName
#
# Description:
#   Specifies the name of the profile. Use a unique value when creating a
#   profile.
#   Each profile that shares the same set of product binaries must have a
#   unique name. The default profile name is based on the profile type and a
#   trailing number, for example:
#   profileType ProfileNumberwhere profileType is a value such as ProcSrv,
#   Dmgr, or Custom and ProfileNumber is a sequential number that creates a
#   unique profile name. The value for this parameter must not contain spaces
#   or characters that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,,
#   /, \, and |. The profile name that you choose must not be in use. On
#   Windows platforms: If the fully qualified path contains spaces, enclose
#   the value in quotation marks. The default value is based on the

```

```

# install_root directory, the profiles subdirectory, and the name of the
# file. For example, the default for profile creation is:
# WS_WSPROFILE_DEFAULT_PROFILE_HOME/profileNamewhere
# WS_WSPROFILE_DEFAULT_PROFILE_HOME is defined in the wasprofile.properties
# file in the install_root/properties directory. The value for this
# parameter must be a valid path for the target system and must not be
# currently in use. You must have permissions to write to the directory.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
profileName=Custom01

#####
# Parameter: cellName
#
# Description:
#   Specifies the cell name of the profile. Use a unique cell name for each
#   profile.
#   The default value for this parameter is based on a combination of the
#   short host name, the constant Cell, and a trailing number, for example:
#   if (DMgr)
#       shortHostNameCellCellNumber
#   else
#       shortHostNameNodeNodeNumberCell
#   where CellNumber is a sequential number starting at 01 and NodeNumber is
#   the node number that you used to define the node name.
#   The value for this parameter must not contain spaces or any characters
#   that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   Varies
#
# Parameter: nodeName
#
# Description:
#   Specifies the node name for the node that is created with the new profile.
#   Use a unique value within the cell or on the workstation. Each profile
#   that shares the same set of product binaries must have a unique node name.
#   This parameter is required for profile creation only with the
#   dmgr.esbserverdefault.procsvrdefault.procctrdefault.procsvr.advdefault.
#   procctr.advdmgr.procctrmanaged.procctrmanaged.procsvr templates.
#   The default value for this parameter is based on the short host name,
#   profile type, and a trailing number, for example:
#   if (DMgr)
#       shortHostNameCellManagerNodeNumber
#   else
#       shortHostNameNodeNodeNumber
#   where NodeNumber is a sequential number starting at 01.
#   The value for this parameter must not contain spaces or any characters
#   that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   Varies
#####
cellName=cell_name
nodeName=node_name

#####
# Parameter: enableAdminSecurity
#

```



```

# Description:
#   For IBM Business Process Manager omit this parameter. Administrative
#   security is always enabled for IBM Business Process Manager profiles.
#   You must also specify the parameters -adminUserName and -adminPassword
#   along with the values for these parameters.
#
# Valid Values:
#   true
# Default Values:
#   true
#####
enableAdminSecurity=true
adminUserName=adminUser_ID
adminPassword=adminPassword

#####
# Parameter: signingCertDN
#
# Description:
#   Specifies the distinguished name of the root signing certificate that you
#   create when you create the profile. Specify the distinguished name in
#   quotation marks. This default personal certificate is located in the
#   server keystore file. If you do not specifically create or import a root
#   signing certificate, one is created by default. See the
#   -signingCertValidityPeriod parameter and the -keyStorePassword.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: signingCertValidityPeriod
#
# Description:
#   An optional parameter that specifies the amount of time in years that the
#   root signing certificate is valid. If you do not specify this parameter
#   with the -signingCertDN parameter, the root signing certificate is valid
#   for 20 years.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: keyStorePassword
#
# Description:
#   Specifies the password to use on all keystore files created during profile
#   creation. Keystore files are created for the default personal certificate
#   and the root signing certificate.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
#signingCertDN =distinguished_name
#signingCertValidityPeriod =validity_period
#keyStorePassword =keyStore_password

#####
# Parameter: enableService
#
# Description:
#   Enables the creation of a Linux service. Valid values include true or
#   false. The default value for this parameter is false. When the
#   manageprofiles command-line utility is run with the -enableService option

```

```

# set to true , the Linux service is created with the profile when the
# command is run by the root user. When a nonroot user runs the
# manageprofiles command-line utility, the profile is created, but the Linux
# service is not. The Linux service is not created because the nonroot user
# does not have sufficient permission to set up the service. An
# INSTCONPARTIALSUCCESS result is displayed at the end of the profile
# creation and the profile creation log
# install_root/logs/manageprofiles/profile_name_create.log contains a
# message indicating the current user does not have sufficient permission to
# set up the Linux service. Use this parameter when creating profiles only.
#
# Valid Values:
# false
# true
# Default Values:
# None
#
# Parameter: serviceUserName
#
# Description:
# Specifies the user ID that is used during the creation of the Linux
# service so that the Linux service will run under this user ID. The Linux
# service runs whenever the user ID is logged on. Not required.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# None
#
# Parameter: winserviceAccountType
#
# Description:
# The type of the owner account of the Windows service created for the
# profile. Valid values include specifieduser or localsystem. The
# localsystem value runs the Windows service under the local account of the
# user who creates the profile. The default value for this parameter is
# localsystem. Use this parameter when creating profiles only.
#
# Valid Values:
# localsystem
# specifieduser
# Default Values:
# localsystem
#
# Parameter: winserviceUserName
#
# Description:
# Specify your user ID so that the Windows operating system can verify you
# as an ID that is capable of creating a Windows service. Your user ID must
# belong to the Administrator group and have the following advanced user
# rights:
# Act as part of the operating system
# Log on as a service
# The default value for this parameter is the current user name. The value
# for this parameter must not contain spaces or characters that are not
# valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |. The user that
# you specify must have the proper permissions to create a Windows service.
# You must specify the correct password for the user name that you choose.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# None
#
# Parameter: winservicePassword
#
# Description:

```

```

# Specify the password for the specified user or the local account that is
# to own the Windows service.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: winserviceCheck
#
# Description:
#   The value can be either true or false. Specify true to create a Windows
#   service for the server process that is created within the profile. Specify
#   false to not create the Windows service. The default value for this
#   parameter is false.
#
# Valid Values:
#   false
#   true
# Default Values:
#   false
#
# Parameter: winserviceStartupType
#
# Description:
#   The following values for Windows service startup can be used:
#   manual
#   automatic
#   disabled
#   The default value for this parameter is manual.
#
# Valid Values:
#   manual
#   automatic
#   disabled
# Default Values:
#   manual
#####
#enableService=true
#serviceName=service_user_ID
#winserviceAccountType=localsystem
#winserviceUserName=winservice_user_ID
#winservicePassword=winservice_password
#winserviceCheck=false
#winserviceStartupType>manual
#####
# Parameter: dbDriverType
#
# Description:
#   The database driver type. For an Oracle database, specify ORACLE. For
#   databases other than Oracle, the value is automatically set based on the
#   server operating system. Server installations on all operating systems use
#   type 4.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
dbDriverType=ORACLE_THIN
#####
# Parameter: federateLaterBPM
#

```

```

# Description:
# Indicates if the managed profile is to be federated later using either the
# profileTemplates/managed.esbserver or the
# profileTemplates/BPM/managed.templateName template. Valid values are true
# or false. If the -dmgrHost, -dmgrPort, -dmgrAdminUserName and
# -dmgrAdminPassword parameters are not set, the default value for this
# parameter is true. If you use -federateLaterBPM, you must either omit the
# WebSphere Application Server-based parameter -federateLater or set it to
# true.
#
# Valid Values:
# false
# true
# Default Values:
# true
#
# Parameter: dmgrHost
#
# Description:
# Identifies the workstation where the deployment manager is running.
# Specify this parameter and the dmgrPort parameter to federate a custom
# profile as it is created or augmented. This parameter is available with
# the managed.templateName and managed.esbserver profile templates. The
# host name can be the long or short DNS name or the IP address of the
# deployment manager workstation. Specifying this optional parameter directs
# the manageprofiles command-line utility to attempt to federate the custom
# node into the deployment manager cell as it creates the custom profile.
# This parameter is ignored when creating a deployment manager profile or
# stand-alone server profile. If you federate a custom node when the
# deployment manager is not running, the installation indicator in the logs
# is INSTCONFFAILED to indicate a complete failure. The resulting custom
# profile is unusable. You must move the custom profile directory out of the
# profile repository (the profile's installation root directory) before
# creating another custom profile with the same profile name. If you have
# changed the default JMX connector type, you cannot federate with the
# manageprofiles command-line utility. Use the addNode command later after
# the node is created instead. The default value for this parameter is
# localhost. The value for this parameter must be a properly formed host
# name and must not contain spaces or characters that are not valid such as
# the following: *, ?, ", <, >, , , /, \, and |. A connection to the
# deployment manager must also be available in conjunction with the dmgrPort
# parameter. Required if you are creating a managed profile with the
# -federateLaterBPM parameter set to false and the deployment manager is not
# on the local machine.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# None
#
# Parameter: dmgrPort
#
# Description:
# Identifies the SOAP port of the deployment manager. Specify this parameter
# and the dmgrHost parameter to federate a custom profile as it is created
# or augmented. The deployment manager must be running and accessible. If
# you have changed the default JMX connector type, you cannot federate with
# the manageprofiles command-line utility. Use the addNode command later
# after the node is created instead. The default value for this parameter is
# 8879. The port that you indicate must be a positive integer and a
# connection to the deployment manager must be available in conjunction with
# the dmgrHost parameter. Required if you are creating a managed profile,
# the -federateLaterBPM parameter is set to false, and the deployment
# manager was configured with a port that was not a default port.
#
# Valid Values:
# Varies

```

```

# Default Values:
#   None
#####
federateLaterBPM=true
#dmgrHost=dmgr_host_name
#dmgrPort=dmgr_port_number
#dmgrAdminUserName=dmgr_admin_user_name
#dmgrAdminPassword=dmgr_admin_password

#####
# Parameter: environmentType
#
# Description:
#   Specifies the environment type. The environment type refers to how IBM
#   Business Process Manager is used; for example, in a production, stage or
#   test environment. Load testing might be done on a test server, while a
#   stage environment type might be used as a temporary location to host
#   changes before putting those changes into production. You might specify
#   Stage as the Environment type if the server you are configuring will be
#   accessed and used to review content and new functionality. Valid values
#   are as follows:
#   Test
#   Use Test if the server you are configuring is to be used as a testing
#   environment.
#   Stage
#   Use Stage if the server is to serve as a staging platform to be used as a
#   preproduction server.
#   Production
#   Use Production if the server is to serve in a production capacity.
#   The default value is Test.
#
# Valid Values:
#   Test
#   Production
#   Stage
# Default Values:
#   Test
#####
environmentType=Test

#####
# Parameter: isDeveloperServer
#
# Description:
#   Specifies whether the server is intended for development purposes only.
#   This parameter is useful when creating profiles to test applications on a
#   non-production server prior to deploying the applications on their
#   production application servers. If -isDeveloperServer is set when
#   creating an IBM Business Process Manager profile, then a preconfigured VMM
#   file repository is installed. This file repository contains a sample
#   organization that can be used to test Business Process Choreographer
#   people resolution, ready for you to use as is.
#
# Valid Values:
#   false
#   true
# Default Values:
#   false
#####
isDeveloperServer=false

```

SQL 用の Standard Process Server カスタム・プロファイル作成の応答ファイル:

ここに用意されている応答ファイルを変更し、**manageprofiles** コマンド行ユーティリティーと一緒に使用して、SQL データベース用のカスタム・プロファイルを作成します。

注: ご使用のオペレーティング・システムに合わせて、必要に応じて応答ファイルの情報をコメント化またはアンコメントしてください。詳細については、応答ファイルのコメントを参照してください。

```
# BEGIN COPYRIGHT
# *****
#
# Licensed Materials - Property of IBM
# 5725-C94
# (C) Copyright IBM Corporation 2011, 2012. All Rights Reserved.
# This sample program is provided AS IS and may be used, executed, copied
# and modified without royalty payment by customer (a) for its own
# instruction and study, (b) in order to develop applications designed to
# run with an IBM WebSphere product, either for customer's own internal
# use or for redistribution by customer, as part of such an application,
# in customer's own products.
#
# *****
# END COPYRIGHT

#####
# These response file has the applicable parameters for creating a
# Managed PS Std profile that uses SQLServer.
#
# Depending on your environment, you may need to change the default values.
#
# To create a profile with this response file specify:
#
# was.install.root/bin/manageprofiles -response PS_Std_Managed_SQLServer.response
#
# If you use the -response parameter, it must be the only parameter on
# the command-line. If you include any manageprofile parameters
# (in addition to -response) on the command-line, the response file
# is ignored. And default WebSphere Application server profile will be created .
#####

#####
# Parameter: create
#
# Description:
#   Creates the profile.
#   If you are creating a profile, this parameter is required.
#####
create

#####
# Parameter: templatePath
#
# Description:
#   Specifies the directory path to the template files in the installation
#   root directory. Within the profileTemplates directory are various
#   directories that correspond to different profile types and that vary with
#   the type of product installed. The profile directories are the paths that
#   you indicate while using the -templatePath option.
#   Use absolute paths. This parameter must exist as a directory and point to
#   a valid template directory.
#
#   When using the -templatePath parameter, specify the fully qualified file
#   path for the parameter.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
templatePath=BPM/managed.procsvr

#####
```

```

# Parameter:  profilename
#
# Description:
#   Specifies the name of the profile. Use a unique value when creating a
#   profile.
#   Each profile that shares the same set of product binaries must have a
#   unique name. The default profile name is based on the profile type and a
#   trailing number, for example:
#   profileType ProfileNumberwhere profileType is a value such as ProcSrv,
#   Dmgr, or Custom and ProfileNumber is a sequential number that creates a
#   unique profile name. The value for this parameter must not contain spaces
#   or characters that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,,
#   /, \, and |. The profile name that you choose must not be in use. On
#   Windows platforms: If the fully qualified path contains spaces, enclose
#   the value in quotation marks. The default value is based on the
#   install_root directory, the profiles subdirectory, and the name of the
#   file. For example, the default for profile creation is:
#   WS_WSPROFILE_DEFAULT_PROFILE_HOME/profileNamewhere
#   WS_WSPROFILE_DEFAULT_PROFILE_HOME is defined in the wasprofile.properties
#   file in the install_root/properties directory. The value for this
#   parameter must be a valid path for the target system and must not be
#   currently in use. You must have permissions to write to the directory.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
profileName=Custom01
#####
# Parameter:  cellName
#
# Description:
#   Specifies the cell name of the profile. Use a unique cell name for each
#   profile.
#   The default value for this parameter is based on a combination of the
#   short host name, the constant Cell, and a trailing number, for example:
#   if (DMgr)
#     shortHostNameCellCellNumber
#   else
#     shortHostNameNodeNodeNumberCell
#   where CellNumber is a sequential number starting at 01 and NodeNumber is
#   the node number that you used to define the node name.
#   The value for this parameter must not contain spaces or any characters
#   that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   Varies
#
# Parameter:  nodeName
#
# Description:
#   Specifies the node name for the node that is created with the new profile.
#   Use a unique value within the cell or on the workstation. Each profile
#   that shares the same set of product binaries must have a unique node name.
#   This parameter is required for profile creation only with the
#   dmgr.esbserverdefault.procsvrdefault.procctrdefault.procsvr.advdefault.
#   procctr.advdmgr.procctrmanaged.procctrmanaged.procsvr templates.
#   The default value for this parameter is based on the short host name,
#   profile type, and a trailing number, for example:
#   if (DMgr)
#     shortHostNameCellManagerNodeNumber
#   else
#     shortHostNameNodeNodeNumber

```



```

# where NodeNumber is a sequential number starting at 01.
# The value for this parameter must not contain spaces or any characters
# that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   Varies
#####
cellName=cell_name
nodeName=node_name

#####
# Parameter: enableAdminSecurity
#
# Description:
#   For IBM Business Process Manager omit this parameter. Administrative
#   security is always enabled for IBM Business Process Manager profiles.
#   You must also specify the parameters -adminUserName and -adminPassword
#   along with the values for these parameters.
#
# Valid Values:
#   true
# Default Values:
#   true
#####
enableAdminSecurity=true
adminUserName=adminUser_ID
adminPassword=adminPassword

#####
# Parameter: signingCertDN
#
# Description:
#   Specifies the distinguished name of the root signing certificate that you
#   create when you create the profile. Specify the distinguished name in
#   quotation marks. This default personal certificate is located in the
#   server keystore file. If you do not specifically create or import a root
#   signing certificate, one is created by default. See the
#   -signingCertValidityPeriod parameter and the -keyStorePassword.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: signingCertValidityPeriod
#
# Description:
#   An optional parameter that specifies the amount of time in years that the
#   root signing certificate is valid. If you do not specify this parameter
#   with the -signingCertDN parameter, the root signing certificate is valid
#   for 20 years.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: keyStorePassword
#
# Description:
#   Specifies the password to use on all keystore files created during profile
#   creation. Keystore files are created for the default personal certificate
#   and the root signing certificate.
#
# Valid Values:

```

```

#    Varies
# Default Values:
#    None
#####
#signingCertDN =distinguished_name
#signingCertValidityPeriod =validity_period
#keyStorePassword =keyStore_password
#####
# Parameter:  enableService
#
# Description:
#    Enables the creation of a Linux service. Valid values include true or
#    false. The default value for this parameter is false. When the
#    manageprofiles command-line utility is run with the -enableService option
#    set to true , the Linux service is created with the profile when the
#    command is run by the root user. When a nonroot user runs the
#    manageprofiles command-line utility, the profile is created, but the Linux
#    service is not. The Linux service is not created because the nonroot user
#    does not have sufficient permission to set up the service. An
#    INSTCONPARTIALSUCCESS result is displayed at the end of the profile
#    creation and the profile creation log
#    install_root/logs/manageprofiles/profile_name_create.log contains a
#    message indicating the current user does not have sufficient permission to
#    set up the Linux service. Use this parameter when creating profiles only.
#
# Valid Values:
#    false
#    true
# Default Values:
#    None
#
# Parameter:  serviceUserName
#
# Description:
#    Specifies the user ID that is used during the creation of the Linux
#    service so that the Linux service will run under this user ID. The Linux
#    service runs whenever the user ID is logged on. Not required.
#
# Valid Values:
#    Varies
# Default Values:
#    None
#
# Parameter:  winserviceAccountType
#
# Description:
#    The type of the owner account of the Windows service created for the
#    profile. Valid values include specifieduser or localsystem. The
#    localsystem value runs the Windows service under the local account of the
#    user who creates the profile. The default value for this parameter is
#    localsystem. Use this parameter when creating profiles only.
#
# Valid Values:
#    localsystem
#    specifieduser
# Default Values:
#    localsystem
#
# Parameter:  winserviceUserName
#
# Description:
#    Specify your user ID so that the Windows operating system can verify you
#    as an ID that is capable of creating a Windows service. Your user ID must
#    belong to the Administrator group and have the following advanced user
#    rights:
#    Act as part of the operating system

```

```

# Log on as a service
# The default value for this parameter is the current user name. The value
# for this parameter must not contain spaces or characters that are not
# valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |. The user that
# you specify must have the proper permissions to create a Windows service.
# You must specify the correct password for the user name that you choose.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: winservicePassword
#
# Description:
#   Specify the password for the specified user or the local account that is
#   to own the Windows service.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: winserviceCheck
#
# Description:
#   The value can be either true or false. Specify true to create a Windows
#   service for the server process that is created within the profile. Specify
#   false to not create the Windows service. The default value for this
#   parameter is false.
#
# Valid Values:
#   false
#   true
# Default Values:
#   false
#
# Parameter: winserviceStartupType
#
# Description:
#   The following values for Windows service startup can be used:
#   manual
#   automatic
#   disabled
#   The default value for this parameter is manual.
#
# Valid Values:
#   manual
#   automatic
#   disabled
# Default Values:
#   manual
#####
#enableService=true
#serviceName=service_user_ID
#winserviceAccountType=localsystem
#winserviceUserName=winservice_user_ID
#winservicePassword=winservice_password
#winserviceCheck=false
#winserviceStartupType>manual
#####
# Parameter: dbWinAuth
#
# Description:
#   An optional parameter that is valid in all default profile templates.
#   Specify true to indicate that you are running SQL Server using integrated

```

```

# windows authentication.
#
# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
# false
# true
# Default Values:
# None
#####
#dbWinAuth=true

#####
# Parameter: federateLaterBPM
#
# Description:
# Indicates if the managed profile is to be federated later using either the
# profileTemplates/managed.esbserver or the
# profileTemplates/BPM/managed.templateName template. Valid values are true
# or false. If the -dmgrHost, -dmgrPort, -dmgrAdminUserName and
# -dmgrAdminPassword parameters are not set, the default value for this
# parameter is true. If you use -federateLaterBPM, you must either omit the
# WebSphere Application Server-based parameter -federateLater or set it to
# true.
#
# Valid Values:
# false
# true
# Default Values:
# true
#
# Parameter: dmgrHost
#
# Description:
# Identifies the workstation where the deployment manager is running.
# Specify this parameter and the dmgrPort parameter to federate a custom
# profile as it is created or augmented. This parameter is available with
# the managed.templateName and managed.esbserver profile templates. The
# host name can be the long or short DNS name or the IP address of the
# deployment manager workstation. Specifying this optional parameter directs
# the manageprofiles command-line utility to attempt to federate the custom
# node into the deployment manager cell as it creates the custom profile.
# This parameter is ignored when creating a deployment manager profile or
# stand-alone server profile. If you federate a custom node when the
# deployment manager is not running, the installation indicator in the logs
# is INSTCONFFAILED to indicate a complete failure. The resulting custom
# profile is unusable. You must move the custom profile directory out of the
# profile repository (the profile's installation root directory) before
# creating another custom profile with the same profile name. If you have
# changed the default JMX connector type, you cannot federate with the
# manageprofiles command-line utility. Use the addNode command later after
# the node is created instead. The default value for this parameter is
# localhost. The value for this parameter must be a properly formed host
# name and must not contain spaces or characters that are not valid such as
# the following: *, ?, ", <, >, , , /, \, and |. A connection to the
# deployment manager must also be available in conjunction with the dmgrPort
# parameter. Required if you are creating a managed profile with the
# -federateLaterBPM parameter set to false and the deployment manager is not
# on the local machine.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# None
#
# Parameter: dmgrPort
#

```

```

# Description:
#   Identifies the SOAP port of the deployment manager. Specify this parameter
#   and the dmgrHost parameter to federate a custom profile as it is created
#   or augmented. The deployment manager must be running and accessible. If
#   you have changed the default JMX connector type, you cannot federate with
#   the manageprofiles command-line utility. Use the addNode command later
#   after the node is created instead. The default value for this parameter is
#   8879. The port that you indicate must be a positive integer and a
#   connection to the deployment manager must be available in conjunction with
#   the dmgrHost parameter. Required if you are creating a managed profile,
#   the -federateLaterBPM parameter is set to false, and the deployment
#   manager was configured with a port that was not a default port.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
federateLaterBPM=true
#dmgrHost=dmgr_host_name
#dmgrPort=dmgr_port_number
#dmgrAdminUserName=dmgr_admin_user_name
#dmgrAdminPassword=dmgr_admin_password

#####
# Parameter: environmentType
#
# Description:
#   Specifies the environment type. The environment type refers to how IBM
#   Business Process Manager is used; for example, in a production, stage or
#   test environment. Load testing might be done on a test server, while a
#   stage environment type might be used as a temporary location to host
#   changes before putting those changes into production. You might specify
#   Stage as the Environment type if the server you are configuring will be
#   accessed and used to review content and new functionality. Valid values
#   are as follows:
#   Test
#   Use Test if the server you are configuring is to be used as a testing
#   environment.
#   Stage
#   Use Stage if the server is to serve as a staging platform to be used as a
#   preproduction server.
#   Production
#   Use Production if the server is to serve in a production capacity.
#   The default value is Test.
#
# Valid Values:
#   Test
#   Production
#   Stage
# Default Values:
#   Test
#####
environmentType=Test

#####
# Parameter: isDeveloperServer
#
# Description:
#   Specifies whether the server is intended for development purposes only.
#   This parameter is useful when creating profiles to test applications on a
#   non-production server prior to deploying the applications on their
#   production application servers. If -isDeveloperServer is set when
#   creating an IBM Business Process Manager profile, then a preconfigured VMM
#   file repository is installed. This file repository contains a sample
#   organization that can be used to test Business Process Choreographer
#   people resolution, ready for you to use as is.

```

```

#
# Valid Values:
#   false
#   true
# Default Values:
#   false
#####
#isDeveloperServer=false

```

Advanced Process Server 用の応答ファイル:

manageprofiles コマンド行ユーティリティと応答ファイルを使用して、カスタム・プロファイルを作成します。

DB2 用の Advanced Process Server カスタム・プロファイル作成の応答ファイル:

ここに用意されている応答ファイルを変更し、**manageprofiles** コマンド行ユーティリティと一緒に使用して、DB2 データベース用のカスタム・プロファイルを作成します。

注: ご使用のオペレーティング・システムに合わせて、必要に応じて応答ファイルの情報をコメント化またはアンコメントしてください。詳細については、応答ファイルのコメントを参照してください。

```

# BEGIN COPYRIGHT
# *****
#
# Licensed Materials - Property of IBM
# 5725-C94
# (C) Copyright IBM Corporation 2011, 2012. All Rights Reserved.
# This sample program is provided AS IS and may be used, executed, copied
# and modified without royalty payment by customer (a) for its own
# instruction and study, (b) in order to develop applications designed to
# run with an IBM WebSphere product, either for customer's own internal
# use or for redistribution by customer, as part of such an application,
# in customer's own products.
#
# *****
# END COPYRIGHT

#####
# These response file has the applicable parameters for creating a
# Managed PS Adv profile that uses DB2.
#
# Depending on your environment, you may need to change the default values.
#
# To create a profile with this response file specify:
#
# was.install.root/bin/manageprofiles -response PS_Adv_Managed_DB2.response
#
# If you use the -response parameter, it must be the only parameter on
# the command-line. If you include any manageprofile parameters
# (in addition to -response) on the command-line, the response file
# is ignored. And default WebSphere Application server profile will be created .
#####

#####
# Parameter: create
#
# Description:
#   Creates the profile.
#   If you are creating a profile, this parameter is required.
#####
create

#####
# Parameter: templatePath

```

```

#
# Description:
#   Specifies the directory path to the template files in the installation
#   root directory. Within the profileTemplates directory are various
#   directories that correspond to different profile types and that vary with
#   the type of product installed. The profile directories are the paths that
#   you indicate while using the -templatePath option.
#   Use absolute paths. This parameter must exist as a directory and point to
#   a valid template directory.
#
#   When using the -templatePath parameter, specify the fully qualified file
#   path for the parameter.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
templatePath=BPM/managed.procsvr.adv

#####
# Parameter:  profileName
#
# Description:
#   Specifies the name of the profile. Use a unique value when creating a
#   profile.
#   Each profile that shares the same set of product binaries must have a
#   unique name. The default profile name is based on the profile type and a
#   trailing number, for example:
#   profileType ProfileNumberwhere profileType is a value such as ProcSrv,
#   Dmgr, or Custom and ProfileNumber is a sequential number that creates a
#   unique profile name. The value for this parameter must not contain spaces
#   or characters that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,,
#   /, \, and |. The profile name that you choose must not be in use. On
#   Windows platforms: If the fully qualified path contains spaces, enclose
#   the value in quotation marks. The default value is based on the
#   install_root directory, the profiles subdirectory, and the name of the
#   file. For example, the default for profile creation is:
#   WS_WSPROFILE_DEFAULT_PROFILE_HOME/profileNamewhere
#   WS_WSPROFILE_DEFAULT_PROFILE_HOME is defined in the wasprofile.properties
#   file in the install_root/properties directory. The value for this
#   parameter must be a valid path for the target system and must not be
#   currently in use. You must have permissions to write to the directory.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
profileName=Custom01

#####
# Parameter:  cellName
#
# Description:
#   Specifies the cell name of the profile. Use a unique cell name for each
#   profile.
#   The default value for this parameter is based on a combination of the
#   short host name, the constant Cell, and a trailing number, for example:
#   if (DMgr)
#     shortHostNameCellCellNumber
#   else
#     shortHostNameNodeNodeNumberCell
#   where CellNumber is a sequential number starting at 01 and NodeNumber is
#   the node number that you used to define the node name.
#   The value for this parameter must not contain spaces or any characters
#   that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |.

```



```

#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   Varies
#
# Parameter: nodeName
#
# Description:
#   Specifies the node name for the node that is created with the new profile.
#   Use a unique value within the cell or on the workstation. Each profile
#   that shares the same set of product binaries must have a unique node name.
#   This parameter is required for profile creation only with the
#   dmgr.esbserverdefault.procsvrdefault.procctrdefault.procsvr.advdefault.
#   procctr.advdmgr.procctrmanaged.procctrmanaged.procsvr templates.
#   The default value for this parameter is based on the short host name,
#   profile type, and a trailing number, for example:
#   if (DMgr)
#       shortHostNameCellManagerNodeNumber
#   else
#       shortHostNameNodeNodeNumber
#   where NodeNumber is a sequential number starting at 01.
#   The value for this parameter must not contain spaces or any characters
#   that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   Varies
#####
cellName=cell_name
nodeName=node_name

#####
# Parameter: enableAdminSecurity
#
# Description:
#   For IBM Business Process Manager omit this parameter. Administrative
#   security is always enabled for IBM Business Process Manager profiles.
#   You must also specify the parameters -adminUserName and -adminPassword
#   along with the values for these parameters.
#
# Valid Values:
#   true
# Default Values:
#   true
#####
enableAdminSecurity=true
adminUserName=adminUser_ID
adminPassword=adminPassword

#####
# Parameter: signingCertDN
#
# Description:
#   Specifies the distinguished name of the root signing certificate that you
#   create when you create the profile. Specify the distinguished name in
#   quotation marks. This default personal certificate is located in the
#   server keystore file. If you do not specifically create or import a root
#   signing certificate, one is created by default. See the
#   -signingCertValidityPeriod parameter and the -keyStorePassword.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#

```

```

# Parameter: signingCertValidityPeriod
#
# Description:
#   An optional parameter that specifies the amount of time in years that the
#   root signing certificate is valid. If you do not specify this parameter
#   with the -signingCertDN parameter, the root signing certificate is valid
#   for 20 years.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: keyStorePassword
#
# Description:
#   Specifies the password to use on all keystore files created during profile
#   creation. Keystore files are created for the default personal certificate
#   and the root signing certificate.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
#signingCertDN =distinguished_name
#signingCertValidityPeriod =validity_period
#keyStorePassword =keyStore_password
#####
# Parameter: enableService
#
# Description:
#   Enables the creation of a Linux service. Valid values include true or
#   false. The default value for this parameter is false. When the
#   manageprofiles command-line utility is run with the -enableService option
#   set to true , the Linux service is created with the profile when the
#   command is run by the root user. When a nonroot user runs the
#   manageprofiles command-line utility, the profile is created, but the Linux
#   service is not. The Linux service is not created because the nonroot user
#   does not have sufficient permission to set up the service. An
#   INSTCONPARTIALSUCCESS result is displayed at the end of the profile
#   creation and the profile creation log
#   install_root/logs/manageprofiles/profile_name_create.log contains a
#   message indicating the current user does not have sufficient permission to
#   set up the Linux service. Use this parameter when creating profiles only.
#
# Valid Values:
#   false
#   true
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: serviceUserName
#
# Description:
#   Specifies the user ID that is used during the creation of the Linux
#   service so that the Linux service will run under this user ID. The Linux
#   service runs whenever the user ID is logged on. Not required.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: winserviceAccountType
#

```

```

# Description:
#   The type of the owner account of the Windows service created for the
#   profile. Valid values include specifieduser or localsystem. The
#   localsystem value runs the Windows service under the local account of the
#   user who creates the profile. The default value for this parameter is
#   localsystem. Use this parameter when creating profiles only.
#
# Valid Values:
#   localsystem
#   specifieduser
# Default Values:
#   localsystem
#
# Parameter: winserviceUserName
#
# Description:
#   Specify your user ID so that the Windows operating system can verify you
#   as an ID that is capable of creating a Windows service. Your user ID must
#   belong to the Administrator group and have the following advanced user
#   rights:
#   Act as part of the operating system
#   Log on as a service
#   The default value for this parameter is the current user name. The value
#   for this parameter must not contain spaces or characters that are not
#   valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |. The user that
#   you specify must have the proper permissions to create a Windows service.
#   You must specify the correct password for the user name that you choose.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: winservicePassword
#
# Description:
#   Specify the password for the specified user or the local account that is
#   to own the Windows service.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: winserviceCheck
#
# Description:
#   The value can be either true or false. Specify true to create a Windows
#   service for the server process that is created within the profile. Specify
#   false to not create the Windows service. The default value for this
#   parameter is false.
#
# Valid Values:
#   false
#   true
# Default Values:
#   false
#
# Parameter: winserviceStartupType
#
# Description:
#   The following values for Windows service startup can be used:
#   manual
#   automatic
#   disabled
#   The default value for this parameter is manual.
#

```

```

# Valid Values:
#   manual
#   automatic
#   disabled
# Default Values:
#   manual
#####
#enableService=true
#serviceName=service_user_ID
#winserviceAccountType=localsystem
#winserviceUserName=winservice_user_ID
#winservicePassword=winservice_password
#winserviceCheck=false
#winserviceStartupType=manual

#####
# Parameter: dbType
#
# Description:
#   The database type. Set one of the following values for the type of
#   database product you are using with IBM Business Process Manager.
#
#   Required only for one of the following:
#   A stand-alone profile when -bpmdbDesign was not specified.
#   An advanced dmgr or managed profiles when -bpmdbDesign was not specified.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   DB2_DATASERVER
# Default Values:
#   DB2_DATASERVER
#
# Parameter: dbJDBCClasspath
#
# Description:
#   The directory path location of JDBC driver files.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
dbType=DB2_DATASERVER
dbJDBCClasspath=${WAS_INSTALL_ROOT}/jdbcdrivers/DB2

#####
# Parameter: federateLaterBPM
#
# Description:
#   Indicates if the managed profile is to be federated later using either the
#   profileTemplates/managed.esbserver or the
#   profileTemplates/BPM/managed.templateName template. Valid values are true
#   or false. If the -dmgrHost, -dmgrPort, -dmgrAdminUserName and
#   -dmgrAdminPassword parameters are not set, the default value for this
#   parameter is true. If you use -federateLaterBPM, you must either omit the
#   WebSphere Application Server-based parameter -federateLater or set it to
#   true.
#
# Valid Values:
#   false
#   true
# Default Values:
#   true
#

```

```

# Parameter: dmgrHost
#
# Description:
#   Identifies the workstation where the deployment manager is running.
#   Specify this parameter and the dmgrPort parameter to federate a custom
#   profile as it is created or augmented. This parameter is available with
#   the managed.templateName and managed.esbserver profile templates. The
#   host name can be the long or short DNS name or the IP address of the
#   deployment manager workstation. Specifying this optional parameter directs
#   the manageprofiles command-line utility to attempt to federate the custom
#   node into the deployment manager cell as it creates the custom profile.
#   This parameter is ignored when creating a deployment manager profile or
#   stand-alone server profile. If you federate a custom node when the
#   deployment manager is not running, the installation indicator in the logs
#   is INSTCONFFAILED to indicate a complete failure. The resulting custom
#   profile is unusable. You must move the custom profile directory out of the
#   profile repository (the profile's installation root directory) before
#   creating another custom profile with the same profile name. If you have
#   changed the default JMX connector type, you cannot federate with the
#   manageprofiles command-line utility. Use the addNode command later after
#   the node is created instead. The default value for this parameter is
#   localhost. The value for this parameter must be a properly formed host
#   name and must not contain spaces or characters that are not valid such as
#   the following: *, ?, ", <, >, , , /, \, and |. A connection to the
#   deployment manager must also be available in conjunction with the dmgrPort
#   parameter. Required if you are creating a managed profile with the
#   -federateLaterBPM parameter set to false and the deployment manager is not
#   on the local machine.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: dmgrPort
#
# Description:
#   Identifies the SOAP port of the deployment manager. Specify this parameter
#   and the dmgrHost parameter to federate a custom profile as it is created
#   or augmented. The deployment manager must be running and accessible. If
#   you have changed the default JMX connector type, you cannot federate with
#   the manageprofiles command-line utility. Use the addNode command later
#   after the node is created instead. The default value for this parameter is
#   8879. The port that you indicate must be a positive integer and a
#   connection to the deployment manager must be available in conjunction with
#   the dmgrHost parameter. Required if you are creating a managed profile,
#   the -federateLaterBPM parameter is set to false, and the deployment
#   manager was configured with a port that was not a default port.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
federateLaterBPM=true
#dmgrHost=dmgr_host_name
#dmgrPort=dmgr_port_number
#dmgrAdminUserName=dmgr_admin_user_name
#dmgrAdminPassword=dmgr_admin_password
#####
# Parameter: environmentType
#
# Description:
#   Specifies the environment type. The environment type refers to how IBM
#   Business Process Manager is used; for example, in a production, stage or
#   test environment. Load testing might be done on a test server, while a

```

```

# stage environment type might be used as a temporary location to host
# changes before putting those changes into production. You might specify
# Stage as the Environment type if the server you are configuring will be
# accessed and used to review content and new functionality. Valid values
# are as follows:
# Test
# Use Test if the server you are configuring is to be used as a testing
# environment.
# Stage
# Use Stage if the server is to serve as a staging platform to be used as a
# preproduction server.
# Production
# Use Production if the server is to serve in a production capacity.
# The default value is Test.
#
# Valid Values:
# Test
# Production
# Stage
# Default Values:
# Test
#####
environmentType=Test

#####
# Parameter: isDeveloperServer
#
# Description:
# Specifies whether the server is intended for development purposes only.
# This parameter is useful when creating profiles to test applications on a
# non-production server prior to deploying the applications on their
# production application servers. If -isDeveloperServer is set when
# creating an IBM Business Process Manager profile, then a preconfigured VMM
# file repository is installed. This file repository contains a sample
# organization that can be used to test Business Process Choreographer
# people resolution, ready for you to use as is.
#
# Valid Values:
# false
# true
# Default Values:
# false
#####
#isDeveloperServer=false

```

DB2 for z/OS 用の Advanced Process Server カスタム・プロファイル作成の応答ファイル:

ここに用意されている応答ファイルを変更し、**manageprofiles** コマンド行ユーティリティと一緒に使用して、DB2 for z/OS データベース用のカスタム・プロファイルを作成します。

注: ご使用のオペレーティング・システムに合わせて、必要に応じて応答ファイルの情報をコメント化またはアンコメントしてください。詳細については、応答ファイルのコメントを参照してください。

```

# BEGIN COPYRIGHT
# *****
#
# Licensed Materials - Property of IBM
# 5725-C94
# (C) Copyright IBM Corporation 2011, 2012. All Rights Reserved.
# This sample program is provided AS IS and may be used, executed, copied
# and modified without royalty payment by customer (a) for its own
# instruction and study, (b) in order to develop applications designed to
# run with an IBM WebSphere product, either for customer's own internal
# use or for redistribution by customer, as part of such an application,
# in customer's own products.
#

```

```

# *****
# END COPYRIGHT

#####
# These response file has the applicable parameters for creating a
# Managed PS Adv profile that uses DB2zOS.
#
# Depending on your environment, you may need to change the default values.
#
# To create a profile with this response file specify:
#
# was.install.root/bin/manageprofiles -response PS_Adv_Managed_DB2zOS.response
#
# If you use the -response parameter, it must be the only parameter on
# the command-line. If you include any manageprofile parameters
# (in addition to -response) on the command-line, the response file
# is ignored. And default WebSphere Application server profile will be created .
#####
#####
# Parameter: create
#
# Description:
#   Creates the profile.
#   If you are creating a profile, this parameter is required.
#####
create

#####
# Parameter: templatePath
#
# Description:
#   Specifies the directory path to the template files in the installation
#   root directory. Within the profileTemplates directory are various
#   directories that correspond to different profile types and that vary with
#   the type of product installed. The profile directories are the paths that
#   you indicate while using the -templatePath option.
#   Use absolute paths. This parameter must exist as a directory and point to
#   a valid template directory.
#
#   When using the -templatePath parameter, specify the fully qualified file
#   path for the parameter.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
templatePath=BPM/managed.procsvr.adv

#####
# Parameter: profileName
#
# Description:
#   Specifies the name of the profile. Use a unique value when creating a
#   profile.
#   Each profile that shares the same set of product binaries must have a
#   unique name. The default profile name is based on the profile type and a
#   trailing number, for example:
#   profileType ProfileNumberwhere profileType is a value such as ProcSrv,
#   Dmgr, or Custom and ProfileNumber is a sequential number that creates a
#   unique profile name. The value for this parameter must not contain spaces
#   or characters that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,,
#   /, \, and |. The profile name that you choose must not be in use. On
#   Windows platforms: If the fully qualified path contains spaces, enclose
#   the value in quotation marks. The default value is based on the
#   install_root directory, the profiles subdirectory, and the name of the

```



```

# file. For example, the default for profile creation is:
# WS_WSPROFILE_DEFAULT_PROFILE_HOME/profileNamewhere
# WS_WSPROFILE_DEFAULT_PROFILE_HOME is defined in the wasprofile.properties
# file in the install_root/properties directory. The value for this
# parameter must be a valid path for the target system and must not be
# currently in use. You must have permissions to write to the directory.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# None
#####
profileName=Custom01

#####
# Parameter: cellName
#
# Description:
# Specifies the cell name of the profile. Use a unique cell name for each
# profile.
# The default value for this parameter is based on a combination of the
# short host name, the constant Cell, and a trailing number, for example:
# if (DMgr)
#     shortHostNameCellCellNumber
# else
#     shortHostNameNodeNodeNumberCell
# where CellNumber is a sequential number starting at 01 and NodeNumber is
# the node number that you used to define the node name.
# The value for this parameter must not contain spaces or any characters
# that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# Varies
#
# Parameter: nodeName
#
# Description:
# Specifies the node name for the node that is created with the new profile.
# Use a unique value within the cell or on the workstation. Each profile
# that shares the same set of product binaries must have a unique node name.
# This parameter is required for profile creation only with the
# dmgr.esbserverdefault.procsvrdefault.procctrdefault.procsvr.advdefault.
# procctr.advdmgr.procctrmanaged.procctrmanaged.procsvr templates.
# The default value for this parameter is based on the short host name,
# profile type, and a trailing number, for example:
# if (DMgr)
#     shortHostNameCellManagerNodeNumber
# else
#     shortHostNameNodeNodeNumber
# where NodeNumber is a sequential number starting at 01.
# The value for this parameter must not contain spaces or any characters
# that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# Varies
#####
cellName=cell_name
nodeName=node_name

#####
# Parameter: enableAdminSecurity
#
# Description:

```

```

# For IBM Business Process Manager omit this parameter. Administrative
# security is always enabled for IBM Business Process Manager profiles.
# You must also specify the parameters -adminUserName and -adminPassword
# along with the values for these parameters.
#
# Valid Values:
# true
# Default Values:
# true
#####
enableAdminSecurity=true
adminUserName=adminUser_ID
adminPassword=adminPassword
#####
# Parameter: signingCertDN
#
# Description:
# Specifies the distinguished name of the root signing certificate that you
# create when you create the profile. Specify the distinguished name in
# quotation marks. This default personal certificate is located in the
# server keystore file. If you do not specifically create or import a root
# signing certificate, one is created by default. See the
# -signingCertValidityPeriod parameter and the -keyStorePassword.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# None
#
# Parameter: signingCertValidityPeriod
#
# Description:
# An optional parameter that specifies the amount of time in years that the
# root signing certificate is valid. If you do not specify this parameter
# with the -signingCertDN parameter, the root signing certificate is valid
# for 20 years.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# None
#
# Parameter: keyStorePassword
#
# Description:
# Specifies the password to use on all keystore files created during profile
# creation. Keystore files are created for the default personal certificate
# and the root signing certificate.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# None
#####
#signingCertDN =distinguished_name
#signingCertValidityPeriod =validity_period
#keyStorePassword =keyStore_password
#####
# Parameter: enableService
#
# Description:
# Enables the creation of a Linux service. Valid values include true or
# false. The default value for this parameter is false. When the
# manageprofiles command-line utility is run with the -enableService option
# set to true , the Linux service is created with the profile when the

```

```

# command is run by the root user. When a nonroot user runs the
# manageprofiles command-line utility, the profile is created, but the Linux
# service is not. The Linux service is not created because the nonroot user
# does not have sufficient permission to set up the service. An
# INSTCONPARTIALSUCCESS result is displayed at the end of the profile
# creation and the profile creation log
# install_root/logs/manageprofiles/profile_name_create.log contains a
# message indicating the current user does not have sufficient permission to
# set up the Linux service. Use this parameter when creating profiles only.
#
# Valid Values:
#   false
#   true
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: serviceUserName
#
# Description:
#   Specifies the user ID that is used during the creation of the Linux
#   service so that the Linux service will run under this user ID. The Linux
#   service runs whenever the user ID is logged on. Not required.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: winserviceAccountType
#
# Description:
#   The type of the owner account of the Windows service created for the
#   profile. Valid values include specifieduser or localsystem. The
#   localsystem value runs the Windows service under the local account of the
#   user who creates the profile. The default value for this parameter is
#   localsystem. Use this parameter when creating profiles only.
#
# Valid Values:
#   localsystem
#   specifieduser
# Default Values:
#   localsystem
#
# Parameter: winserviceUserName
#
# Description:
#   Specify your user ID so that the Windows operating system can verify you
#   as an ID that is capable of creating a Windows service. Your user ID must
#   belong to the Administrator group and have the following advanced user
#   rights:
#   Act as part of the operating system
#   Log on as a service
#   The default value for this parameter is the current user name. The value
#   for this parameter must not contain spaces or characters that are not
#   valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |. The user that
#   you specify must have the proper permissions to create a Windows service.
#   You must specify the correct password for the user name that you choose.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: winservicePassword
#
# Description:
#   Specify the password for the specified user or the local account that is

```

```

# to own the Windows service.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# None
#
# Parameter: winserviceCheck
#
# Description:
# The value can be either true or false. Specify true to create a Windows
# service for the server process that is created within the profile. Specify
# false to not create the Windows service. The default value for this
# parameter is false.
#
# Valid Values:
# false
# true
# Default Values:
# false
#
# Parameter: winserviceStartupType
#
# Description:
# The following values for Windows service startup can be used:
# manual
# automatic
# disabled
# The default value for this parameter is manual.
#
# Valid Values:
# manual
# automatic
# disabled
# Default Values:
# manual
#####
#enableService=true
#serviceName=service_user_ID
#winserviceAccountType=localsystem
#winserviceUserName=winservice_user_ID
#winservicePassword=winservice_password
#winserviceCheck=false
#winserviceStartupType>manual
#####
# Parameter: dbType
#
# Description:
# The database type. Set one of the following values for the type of
# database product you are using with IBM Business Process Manager.
#
# Required only for one of the following:
# A stand-alone profile when -bpmdbDesign was not specified.
# An advanced dmgr or managed profiles when -bpmdbDesign was not specified.
#
# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
# DB2UDB0S390
# Default Values:
# DB2UDB0S390
#####
dbType=DB2UDB0S390
#####
# Parameter: federateLaterBPM

```

```

#
# Description:
# Indicates if the managed profile is to be federated later using either the
# profileTemplates/managed.esbserver or the
# profileTemplates/BPM/managed.templateName template. Valid values are true
# or false. If the -dmgrHost, -dmgrPort, -dmgrAdminUserName and
# -dmgrAdminPassword parameters are not set, the default value for this
# parameter is true. If you use -federateLaterBPM, you must either omit the
# WebSphere Application Server-based parameter -federateLater or set it to
# true.
#
# Valid Values:
# false
# true
# Default Values:
# true
#
# Parameter: dmgrHost
#
# Description:
# Identifies the workstation where the deployment manager is running.
# Specify this parameter and the dmgrPort parameter to federate a custom
# profile as it is created or augmented. This parameter is available with
# the managed.templateName and managed.esbserver profile templates. The
# host name can be the long or short DNS name or the IP address of the
# deployment manager workstation. Specifying this optional parameter directs
# the manageprofiles command-line utility to attempt to federate the custom
# node into the deployment manager cell as it creates the custom profile.
# This parameter is ignored when creating a deployment manager profile or
# stand-alone server profile. If you federate a custom node when the
# deployment manager is not running, the installation indicator in the logs
# is INSTCONFFAILED to indicate a complete failure. The resulting custom
# profile is unusable. You must move the custom profile directory out of the
# profile repository (the profile's installation root directory) before
# creating another custom profile with the same profile name. If you have
# changed the default JMX connector type, you cannot federate with the
# manageprofiles command-line utility. Use the addNode command later after
# the node is created instead. The default value for this parameter is
# localhost. The value for this parameter must be a properly formed host
# name and must not contain spaces or characters that are not valid such as
# the following: *, ?, ", <, >, , , /, \, and |. A connection to the
# deployment manager must also be available in conjunction with the dmgrPort
# parameter. Required if you are creating a managed profile with the
# -federateLaterBPM parameter set to false and the deployment manager is not
# on the local machine.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# None
#
# Parameter: dmgrPort
#
# Description:
# Identifies the SOAP port of the deployment manager. Specify this parameter
# and the dmgrHost parameter to federate a custom profile as it is created
# or augmented. The deployment manager must be running and accessible. If
# you have changed the default JMX connector type, you cannot federate with
# the manageprofiles command-line utility. Use the addNode command later
# after the node is created instead. The default value for this parameter is
# 8879. The port that you indicate must be a positive integer and a
# connection to the deployment manager must be available in conjunction with
# the dmgrHost parameter. Required if you are creating a managed profile,
# the -federateLaterBPM parameter is set to false, and the deployment
# manager was configured with a port that was not a default port.
#
# Valid Values:

```

```

#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
federateLaterBPM=true
#dmgrHost=dmgr_host_name
#dmgrPort=dmgr_port_number
#dmgrAdminUserName=dmgr_admin_user_name
#dmgrAdminPassword=dmgr_admin_password

#####
# Parameter:  environmentType
#
# Description:
#   Specifies the environment type. The environment type refers to how IBM
#   Business Process Manager is used; for example, in a production, stage or
#   test environment. Load testing might be done on a test server, while a
#   stage environment type might be used as a temporary location to host
#   changes before putting those changes into production. You might specify
#   Stage as the Environment type if the server you are configuring will be
#   accessed and used to review content and new functionality. Valid values
#   are as follows:
#   Test
#   Use Test if the server you are configuring is to be used as a testing
#   environment.
#   Stage
#   Use Stage if the server is to serve as a staging platform to be used as a
#   preproduction server.
#   Production
#   Use Production if the server is to serve in a production capacity.
#   The default value is Test.
#
# Valid Values:
#   Test
#   Production
#   Stage
# Default Values:
#   Test
#####
environmentType=Test

#####
# Parameter:  isDeveloperServer
#
# Description:
#   Specifies whether the server is intended for development purposes only.
#   This parameter is useful when creating profiles to test applications on a
#   non-production server prior to deploying the applications on their
#   production application servers. If -isDeveloperServer is set when
#   creating an IBM Business Process Manager profile, then a preconfigured VMM
#   file repository is installed. This file repository contains a sample
#   organization that can be used to test Business Process Choreographer
#   people resolution, ready for you to use as is.
#
# Valid Values:
#   false
#   true
# Default Values:
#   false
#####
#isDeveloperServer=false

```

Oracle 用の Advanced Process Server カスタム・プロファイル作成の応答ファイル:

ここに用意されている応答ファイルを変更し、**manageprofiles** コマンド行ユーティリティと一緒に使用して、Oracle データベース用のカスタム・プロファイルを作成します。

注: ご使用のオペレーティング・システムに合わせて、必要に応じて応答ファイルの情報をコメント化またはアンコメントしてください。詳細については、応答ファイルのコメントを参照してください。

```
# BEGIN COPYRIGHT
# *****
#
# Licensed Materials - Property of IBM
# 5725-C94
# (C) Copyright IBM Corporation 2011, 2012. All Rights Reserved.
# This sample program is provided AS IS and may be used, executed, copied
# and modified without royalty payment by customer (a) for its own
# instruction and study, (b) in order to develop applications designed to
# run with an IBM WebSphere product, either for customer's own internal
# use or for redistribution by customer, as part of such an application,
# in customer's own products.
#
# *****
# END COPYRIGHT

#####
# These response file has the applicable parameters for creating a
# Managed PS Adv profile that uses Oracle.
#
# Depending on your environment, you may need to change the default values.
#
# To create a profile with this response file specify:
#
# was.install.root/bin/manageprofiles -response PS_Adv_Managed_Oracle.response
#
# If you use the -response parameter, it must be the only parameter on
# the command-line. If you include any manageprofile parameters
# (in addition to -response) on the command-line, the response file
# is ignored. And default WebSphere Application server profile will be created .
#####

#####
# Parameter: create
#
# Description:
#   Creates the profile.
#   If you are creating a profile, this parameter is required.
#####
create

#####
# Parameter: templatePath
#
# Description:
#   Specifies the directory path to the template files in the installation
#   root directory. Within the profileTemplates directory are various
#   directories that correspond to different profile types and that vary with
#   the type of product installed. The profile directories are the paths that
#   you indicate while using the -templatePath option.
#   Use absolute paths. This parameter must exist as a directory and point to
#   a valid template directory.
#
#   When using the -templatePath parameter, specify the fully qualified file
#   path for the parameter.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
templatePath=BPM/managed.procsvr.adv

#####
```



```

# Parameter:  profileName
#
# Description:
#   Specifies the name of the profile. Use a unique value when creating a
#   profile.
#   Each profile that shares the same set of product binaries must have a
#   unique name. The default profile name is based on the profile type and a
#   trailing number, for example:
#   profileType ProfileNumberwhere profileType is a value such as ProcSrv,
#   Dmgr, or Custom and ProfileNumber is a sequential number that creates a
#   unique profile name. The value for this parameter must not contain spaces
#   or characters that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,,
#   /, \, and |. The profile name that you choose must not be in use. On
#   Windows platforms: If the fully qualified path contains spaces, enclose
#   the value in quotation marks. The default value is based on the
#   install_root directory, the profiles subdirectory, and the name of the
#   file. For example, the default for profile creation is:
#   WS_WSPROFILE_DEFAULT_PROFILE_HOME/profileNamewhere
#   WS_WSPROFILE_DEFAULT_PROFILE_HOME is defined in the wasprofile.properties
#   file in the install_root/properties directory. The value for this
#   parameter must be a valid path for the target system and must not be
#   currently in use. You must have permissions to write to the directory.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
profileName=Custom01
#####
# Parameter:  cellName
#
# Description:
#   Specifies the cell name of the profile. Use a unique cell name for each
#   profile.
#   The default value for this parameter is based on a combination of the
#   short host name, the constant Cell, and a trailing number, for example:
#   if (DMgr)
#       shortHostNameCellCellNumber
#   else
#       shortHostNameNodeNodeNumberCell
#   where CellNumber is a sequential number starting at 01 and NodeNumber is
#   the node number that you used to define the node name.
#   The value for this parameter must not contain spaces or any characters
#   that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   Varies
#
# Parameter:  nodeName
#
# Description:
#   Specifies the node name for the node that is created with the new profile.
#   Use a unique value within the cell or on the workstation. Each profile
#   that shares the same set of product binaries must have a unique node name.
#   This parameter is required for profile creation only with the
#   dmgr.esbserverdefault.procsvrdefault.procctrdefault.procsvr.advdefault.
#   procctr.advdmgr.procctrmanaged.procctrmanaged.procsvr templates.
#   The default value for this parameter is based on the short host name,
#   profile type, and a trailing number, for example:
#   if (DMgr)
#       shortHostNameCellManagerNodeNumber
#   else
#       shortHostNameNodeNodeNumber

```

```

# where NodeNumber is a sequential number starting at 01.
# The value for this parameter must not contain spaces or any characters
# that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   Varies
#####
cellName=cell_name
nodeName=node_name

#####
# Parameter: enableAdminSecurity
#
# Description:
#   For IBM Business Process Manager omit this parameter. Administrative
#   security is always enabled for IBM Business Process Manager profiles.
#   You must also specify the parameters -adminUserName and -adminPassword
#   along with the values for these parameters.
#
# Valid Values:
#   true
# Default Values:
#   true
#####
enableAdminSecurity=true
adminUserName=adminUser_ID
adminPassword=adminPassword

#####
# Parameter: signingCertDN
#
# Description:
#   Specifies the distinguished name of the root signing certificate that you
#   create when you create the profile. Specify the distinguished name in
#   quotation marks. This default personal certificate is located in the
#   server keystore file. If you do not specifically create or import a root
#   signing certificate, one is created by default. See the
#   -signingCertValidityPeriod parameter and the -keyStorePassword.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: signingCertValidityPeriod
#
# Description:
#   An optional parameter that specifies the amount of time in years that the
#   root signing certificate is valid. If you do not specify this parameter
#   with the -signingCertDN parameter, the root signing certificate is valid
#   for 20 years.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: keyStorePassword
#
# Description:
#   Specifies the password to use on all keystore files created during profile
#   creation. Keystore files are created for the default personal certificate
#   and the root signing certificate.
#
# Valid Values:

```

```

#    Varies
# Default Values:
#    None
#####
#signingCertDN =distinguished_name
#signingCertValidityPeriod =validity_period
#keyStorePassword =keyStore_password
#####
# Parameter:  enableService
#
# Description:
#    Enables the creation of a Linux service. Valid values include true or
#    false. The default value for this parameter is false. When the
#    manageprofiles command-line utility is run with the -enableService option
#    set to true , the Linux service is created with the profile when the
#    command is run by the root user. When a nonroot user runs the
#    manageprofiles command-line utility, the profile is created, but the Linux
#    service is not. The Linux service is not created because the nonroot user
#    does not have sufficient permission to set up the service. An
#    INSTCONPARTIALSUCCESS result is displayed at the end of the profile
#    creation and the profile creation log
#    install_root/logs/manageprofiles/profile_name_create.log contains a
#    message indicating the current user does not have sufficient permission to
#    set up the Linux service. Use this parameter when creating profiles only.
#
# Valid Values:
#    false
#    true
# Default Values:
#    None
#
# Parameter:  serviceUserName
#
# Description:
#    Specifies the user ID that is used during the creation of the Linux
#    service so that the Linux service will run under this user ID. The Linux
#    service runs whenever the user ID is logged on. Not required.
#
# Valid Values:
#    Varies
# Default Values:
#    None
#
# Parameter:  winserviceAccountType
#
# Description:
#    The type of the owner account of the Windows service created for the
#    profile. Valid values include specifieduser or localsystem. The
#    localsystem value runs the Windows service under the local account of the
#    user who creates the profile. The default value for this parameter is
#    localsystem. Use this parameter when creating profiles only.
#
# Valid Values:
#    localsystem
#    specifieduser
# Default Values:
#    localsystem
#
# Parameter:  winserviceUserName
#
# Description:
#    Specify your user ID so that the Windows operating system can verify you
#    as an ID that is capable of creating a Windows service. Your user ID must
#    belong to the Administrator group and have the following advanced user
#    rights:
#    Act as part of the operating system

```

```

# Log on as a service
# The default value for this parameter is the current user name. The value
# for this parameter must not contain spaces or characters that are not
# valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |. The user that
# you specify must have the proper permissions to create a Windows service.
# You must specify the correct password for the user name that you choose.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# None
#
# Parameter: winservicePassword
#
# Description:
# Specify the password for the specified user or the local account that is
# to own the Windows service.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# None
#
# Parameter: winserviceCheck
#
# Description:
# The value can be either true or false. Specify true to create a Windows
# service for the server process that is created within the profile. Specify
# false to not create the Windows service. The default value for this
# parameter is false.
#
# Valid Values:
# false
# true
# Default Values:
# false
#
# Parameter: winserviceStartupType
#
# Description:
# The following values for Windows service startup can be used:
# manual
# automatic
# disabled
# The default value for this parameter is manual.
#
# Valid Values:
# manual
# automatic
# disabled
# Default Values:
# manual
#####
#enableService=true
#serviceName=service_user_ID
#winserviceAccountType=localsystem
#winserviceUserName=winservice_user_ID
#winservicePassword=winservice_password
#winserviceCheck=false
#winserviceStartupType>manual
#####
# Parameter: dbType
#
# Description:
# The database type. Set one of the following values for the type of
# database product you are using with IBM Business Process Manager.

```

```

#
# Required only for one of the following:
# A stand-alone profile when -bpmdbDesign was not specified.
# An advanced dmgr or managed profiles when -bpmdbDesign was not specified.
#
# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
# ORACLE
# Default Values:
# ORACLE
#
# Parameter: dbDriverType
#
# Description:
# The database driver type. For an Oracle database, specify ORACLE. For
# databases other than Oracle, the value is automatically set based on the
# server operating system. Server installations on all operating systems use
# type 4.
#
# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# None
#
# Parameter: dbJDBCClasspath
#
# Description:
# The directory path location of JDBC driver files.
#
# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# None
#####
dbType=ORACLE
dbDriverType=ORACLE_THIN
dbJDBCClasspath=${WAS_INSTALL_ROOT}/jdbcdrivers/Oracle
#####
# Parameter: federateLaterBPM
#
# Description:
# Indicates if the managed profile is to be federated later using either the
# profileTemplates/managed.esbserver or the
# profileTemplates/BPM/managed.templateName template. Valid values are true
# or false. If the -dmgrHost, -dmgrPort, -dmgrAdminUserName and
# -dmgrAdminPassword parameters are not set, the default value for this
# parameter is true. If you use -federateLaterBPM, you must either omit the
# WebSphere Application Server-based parameter -federateLater or set it to
# true.
#
# Valid Values:
# false
# true
# Default Values:
# true
#
# Parameter: dmgrHost
#
# Description:
# Identifies the workstation where the deployment manager is running.
# Specify this parameter and the dmgrPort parameter to federate a custom

```

```

# profile as it is created or augmented. This parameter is available with
# the managed.templateName and managed.esbserver profile templates. The
# host name can be the long or short DNS name or the IP address of the
# deployment manager workstation. Specifying this optional parameter directs
# the manageprofiles command-line utility to attempt to federate the custom
# node into the deployment manager cell as it creates the custom profile.
# This parameter is ignored when creating a deployment manager profile or
# stand-alone server profile. If you federate a custom node when the
# deployment manager is not running, the installation indicator in the logs
# is INSTCONFFAILED to indicate a complete failure. The resulting custom
# profile is unusable. You must move the custom profile directory out of the
# profile repository (the profile's installation root directory) before
# creating another custom profile with the same profile name. If you have
# changed the default JMX connector type, you cannot federate with the
# manageprofiles command-line utility. Use the addNode command later after
# the node is created instead. The default value for this parameter is
# localhost. The value for this parameter must be a properly formed host
# name and must not contain spaces or characters that are not valid such as
# the following: *, ?, ", <, >, , , /, \, and |. A connection to the
# deployment manager must also be available in conjunction with the dmgrPort
# parameter. Required if you are creating a managed profile with the
# -federateLaterBPM parameter set to false and the deployment manager is not
# on the local machine.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter:  dmgrPort
#
# Description:
#   Identifies the SOAP port of the deployment manager. Specify this parameter
#   and the dmgrHost parameter to federate a custom profile as it is created
#   or augmented. The deployment manager must be running and accessible. If
#   you have changed the default JMX connector type, you cannot federate with
#   the manageprofiles command-line utility. Use the addNode command later
#   after the node is created instead. The default value for this parameter is
#   8879. The port that you indicate must be a positive integer and a
#   connection to the deployment manager must be available in conjunction with
#   the dmgrHost parameter. Required if you are creating a managed profile,
#   the -federateLaterBPM parameter is set to false, and the deployment
#   manager was configured with a port that was not a default port.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
federateLaterBPM=true
#dmgrHost=dmgr_host_name
#dmgrPort=dmgr_port_number
#dmgrAdminUserName=dmgr_admin_user_name
#dmgrAdminPassword=dmgr_admin_password
#####
# Parameter:  environmentType
#
# Description:
#   Specifies the environment type. The environment type refers to how IBM
#   Business Process Manager is used; for example, in a production, stage or
#   test environment. Load testing might be done on a test server, while a
#   stage environment type might be used as a temporary location to host
#   changes before putting those changes into production. You might specify
#   Stage as the Environment type if the server you are configuring will be
#   accessed and used to review content and new functionality. Valid values
#   are as follows:

```

```

# Test
# Use Test if the server you are configuring is to be used as a testing
# environment.
# Stage
# Use Stage if the server is to serve as a staging platform to be used as a
# preproduction server.
# Production
# Use Production if the server is to serve in a production capacity.
# The default value is Test.
#
# Valid Values:
# Test
# Production
# Stage
# Default Values:
# Test
#####
environmentType=Test
#####
# Parameter: isDeveloperServer
#
# Description:
# Specifies whether the server is intended for development purposes only.
# This parameter is useful when creating profiles to test applications on a
# non-production server prior to deploying the applications on their
# production application servers. If -isDeveloperServer is set when
# creating an IBM Business Process Manager profile, then a preconfigured VMM
# file repository is installed. This file repository contains a sample
# organization that can be used to test Business Process Choreographer
# people resolution, ready for you to use as is.
#
# Valid Values:
# false
# true
# Default Values:
# false
#####
#isDeveloperServer=false

```

SQL 用の Advanced Process Server カスタム・プロファイル作成の応答ファイル:

ここに用意されている応答ファイルを変更し、**manageprofiles** コマンド行ユーティリティと一緒に使用して、SQL データベース用のカスタム・プロファイルを作成します。

注: ご使用のオペレーティング・システムに合わせて、必要に応じて応答ファイルの情報をコメント化またはアンコメントしてください。詳細については、応答ファイルのコメントを参照してください。

```

# BEGIN COPYRIGHT
# *****
#
# Licensed Materials - Property of IBM
# 5725-C94
# (C) Copyright IBM Corporation 2011, 2012. All Rights Reserved.
# This sample program is provided AS IS and may be used, executed, copied
# and modified without royalty payment by customer (a) for its own
# instruction and study, (b) in order to develop applications designed to
# run with an IBM WebSphere product, either for customer's own internal
# use or for redistribution by customer, as part of such an application,
# in customer's own products.
#
# *****
# END COPYRIGHT

#####
# These response file has the applicable parameters for creating a

```



```

# Managed PS Adv profile that uses SQLServer.
#
# Depending on your environment, you may need to change the default values.
#
# To create a profile with this response file specify:
#
# was.install.root/bin/manageprofiles -response PS_Adv_Managed_SQLServer.response
#
# If you use the -response parameter, it must be the only parameter on
# the command-line. If you include any manageprofile parameters
# (in addition to -response) on the command-line, the response file
# is ignored. And default WebSphere Application server profile will be created .
#####

#####
# Parameter: create
#
# Description:
#   Creates the profile.
#   If you are creating a profile, this parameter is required.
#####
create

#####
# Parameter: templatePath
#
# Description:
#   Specifies the directory path to the template files in the installation
#   root directory. Within the profileTemplates directory are various
#   directories that correspond to different profile types and that vary with
#   the type of product installed. The profile directories are the paths that
#   you indicate while using the -templatePath option.
#   Use absolute paths. This parameter must exist as a directory and point to
#   a valid template directory.
#
#   When using the -templatePath parameter, specify the fully qualified file
#   path for the parameter.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
templatePath=BPM/managed.procsvr.adv

#####
# Parameter: profileName
#
# Description:
#   Specifies the name of the profile. Use a unique value when creating a
#   profile.
#   Each profile that shares the same set of product binaries must have a
#   unique name. The default profile name is based on the profile type and a
#   trailing number, for example:
#   profileType ProfileNumberwhere profileType is a value such as ProcSrv,
#   Dmgr, or Custom and ProfileNumber is a sequential number that creates a
#   unique profile name. The value for this parameter must not contain spaces
#   or characters that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,,
#   /, \, and |. The profile name that you choose must not be in use. On
#   Windows platforms: If the fully qualified path contains spaces, enclose
#   the value in quotation marks. The default value is based on the
#   install_root directory, the profiles subdirectory, and the name of the
#   file. For example, the default for profile creation is:
#   WS_WSPROFILE_DEFAULT_PROFILE_HOME/profileNamewhere
#   WS_WSPROFILE_DEFAULT_PROFILE_HOME is defined in the wasprofile.properties
#   file in the install_root/properties directory. The value for this
#   parameter must be a valid path for the target system and must not be

```

```

# currently in use. You must have permissions to write to the directory.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
profileName=Custom01

#####
# Parameter: cellName
#
# Description:
#   Specifies the cell name of the profile. Use a unique cell name for each
#   profile.
#   The default value for this parameter is based on a combination of the
#   short host name, the constant Cell, and a trailing number, for example:
#   if (DMgr)
#       shortHostNameCellCellNumber
#   else
#       shortHostNameNodeNodeNumberCell
#   where CellNumber is a sequential number starting at 01 and NodeNumber is
#   the node number that you used to define the node name.
#   The value for this parameter must not contain spaces or any characters
#   that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   Varies
#
# Parameter: nodeName
#
# Description:
#   Specifies the node name for the node that is created with the new profile.
#   Use a unique value within the cell or on the workstation. Each profile
#   that shares the same set of product binaries must have a unique node name.
#   This parameter is required for profile creation only with the
#   dmgr.esbserverdefault.procsvrdefault.procctrdefault.procsvr.advdefault.
#   procctr.advdmgr.procctrmanaged.procctrmanaged.procsvr templates.
#   The default value for this parameter is based on the short host name,
#   profile type, and a trailing number, for example:
#   if (DMgr)
#       shortHostNameCellManagerNodeNumber
#   else
#       shortHostNameNodeNodeNumber
#   where NodeNumber is a sequential number starting at 01.
#   The value for this parameter must not contain spaces or any characters
#   that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   Varies
#####
cellName=cell_name
nodeName=node_name

#####
# Parameter: enableAdminSecurity
#
# Description:
#   For IBM Business Process Manager omit this parameter. Administrative
#   security is always enabled for IBM Business Process Manager profiles.
#   You must also specify the parameters -adminUserName and -adminPassword
#   along with the values for these parameters.
#

```

```

# Valid Values:
#   true
# Default Values:
#   true
#####
enableAdminSecurity=true
adminUserName=adminUser_ID
adminPassword=adminPassword

#####
# Parameter: signingCertDN
#
# Description:
#   Specifies the distinguished name of the root signing certificate that you
#   create when you create the profile. Specify the distinguished name in
#   quotation marks. This default personal certificate is located in the
#   server keystore file. If you do not specifically create or import a root
#   signing certificate, one is created by default. See the
#   -signingCertValidityPeriod parameter and the -keyStorePassword.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: signingCertValidityPeriod
#
# Description:
#   An optional parameter that specifies the amount of time in years that the
#   root signing certificate is valid. If you do not specify this parameter
#   with the -signingCertDN parameter, the root signing certificate is valid
#   for 20 years.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: keyStorePassword
#
# Description:
#   Specifies the password to use on all keystore files created during profile
#   creation. Keystore files are created for the default personal certificate
#   and the root signing certificate.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
#signingCertDN =distinguished_name
#signingCertValidityPeriod =validity_period
#keyStorePassword =keyStore_password

#####
# Parameter: enableService
#
# Description:
#   Enables the creation of a Linux service. Valid values include true or
#   false. The default value for this parameter is false. When the
#   manageprofiles command-line utility is run with the -enableService option
#   set to true , the Linux service is created with the profile when the
#   command is run by the root user. When a nonroot user runs the
#   manageprofiles command-line utility, the profile is created, but the Linux
#   service is not. The Linux service is not created because the nonroot user
#   does not have sufficient permission to set up the service. An
#   INSTCONPARTIALSUCCESS result is displayed at the end of the profile

```

```

# creation and the profile creation log
# install_root/logs/manageprofiles/profile_name_create.log contains a
# message indicating the current user does not have sufficient permission to
# set up the Linux service. Use this parameter when creating profiles only.
#
# Valid Values:
#   false
#   true
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: serviceUserName
#
# Description:
#   Specifies the user ID that is used during the creation of the Linux
#   service so that the Linux service will run under this user ID. The Linux
#   service runs whenever the user ID is logged on. Not required.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: winserviceAccountType
#
# Description:
#   The type of the owner account of the Windows service created for the
#   profile. Valid values include specifieduser or localsystem. The
#   localsystem value runs the Windows service under the local account of the
#   user who creates the profile. The default value for this parameter is
#   localsystem. Use this parameter when creating profiles only.
#
# Valid Values:
#   localsystem
#   specifieduser
# Default Values:
#   localsystem
#
# Parameter: winserviceUserName
#
# Description:
#   Specify your user ID so that the Windows operating system can verify you
#   as an ID that is capable of creating a Windows service. Your user ID must
#   belong to the Administrator group and have the following advanced user
#   rights:
#   Act as part of the operating system
#   Log on as a service
#   The default value for this parameter is the current user name. The value
#   for this parameter must not contain spaces or characters that are not
#   valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |. The user that
#   you specify must have the proper permissions to create a Windows service.
#   You must specify the correct password for the user name that you choose.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: winservicePassword
#
# Description:
#   Specify the password for the specified user or the local account that is
#   to own the Windows service.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:

```

```

# None
#
# Parameter: winserviceCheck
#
# Description:
# The value can be either true or false. Specify true to create a Windows
# service for the server process that is created within the profile. Specify
# false to not create the Windows service. The default value for this
# parameter is false.
#
# Valid Values:
# false
# true
# Default Values:
# false
#
# Parameter: winserviceStartupType
#
# Description:
# The following values for Windows service startup can be used:
# manual
# automatic
# disabled
# The default value for this parameter is manual.
#
# Valid Values:
# manual
# automatic
# disabled
# Default Values:
# manual
#####
#enableService=true
#serviceName=service_user_ID
#winserviceAccountType=localsystem
#winserviceUserName=winservice_user_ID
#winservicePassword=winservice_password
#winserviceCheck=false
#winserviceStartupType>manual
#####
# Parameter: dbType
#
# Description:
# The database type. Set one of the following values for the type of
# database product you are using with IBM Business Process Manager.
#
# Required only for one of the following:
# A stand-alone profile when -bpmdbDesign was not specified.
# An advanced dmgr or managed profiles when -bpmdbDesign was not specified.
#
# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
# MSSQLSERVER_MICROSOFT
# Default Values:
# MSSQLSERVER_MICROSOFT
#
# Parameter: dbJDBCClasspath
#
# Description:
# The directory path location of JDBC driver files.
#
# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
# Varies

```

```

# Default Values:
#   None
#####
dbType=MSSQLSERVER_MICROSOFT
dbJDBCClasspath=${WAS_INSTALL_ROOT}/jdbcdrivers/SQLServer
#####
# Parameter: dbWinAuth
#
# Description:
#   An optional parameter that is valid in all default profile templates.
#   Specify true to indicate that you are running SQL Server using integrated
#   windows authentication.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   false
#   true
# Default Values:
#   None
#####
#dbWinAuth=true
#####
# Parameter: federateLaterBPM
#
# Description:
#   Indicates if the managed profile is to be federated later using either the
#   profileTemplates/managed.esbserver or the
#   profileTemplates/BPM/managed.templateName template. Valid values are true
#   or false. If the -dmgrHost, -dmgrPort, -dmgrAdminUserName and
#   -dmgrAdminPassword parameters are not set, the default value for this
#   parameter is true. If you use -federateLaterBPM, you must either omit the
#   WebSphere Application Server-based parameter -federateLater or set it to
#   true.
#
# Valid Values:
#   false
#   true
# Default Values:
#   true
#
# Parameter: dmgrHost
#
# Description:
#   Identifies the workstation where the deployment manager is running.
#   Specify this parameter and the dmgrPort parameter to federate a custom
#   profile as it is created or augmented. This parameter is available with
#   the managed.templateName and managed.esbserver profile templates. The
#   host name can be the long or short DNS name or the IP address of the
#   deployment manager workstation. Specifying this optional parameter directs
#   the manageprofiles command-line utility to attempt to federate the custom
#   node into the deployment manager cell as it creates the custom profile.
#   This parameter is ignored when creating a deployment manager profile or
#   stand-alone server profile. If you federate a custom node when the
#   deployment manager is not running, the installation indicator in the logs
#   is INSTCONFFAILED to indicate a complete failure. The resulting custom
#   profile is unusable. You must move the custom profile directory out of the
#   profile repository (the profile's installation root directory) before
#   creating another custom profile with the same profile name. If you have
#   changed the default JMX connector type, you cannot federate with the
#   manageprofiles command-line utility. Use the addNode command later after
#   the node is created instead. The default value for this parameter is
#   localhost. The value for this parameter must be a properly formed host
#   name and must not contain spaces or characters that are not valid such as
#   the following: *, ?, ", <, >, , , /, \, and |. A connection to the

```

```

# deployment manager must also be available in conjunction with the dmgrPort
# parameter. Required if you are creating a managed profile with the
# -federateLaterBPM parameter set to false and the deployment manager is not
# on the local machine.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: dmgrPort
#
# Description:
#   Identifies the SOAP port of the deployment manager. Specify this parameter
#   and the dmgrHost parameter to federate a custom profile as it is created
#   or augmented. The deployment manager must be running and accessible. If
#   you have changed the default JMX connector type, you cannot federate with
#   the manageprofiles command-line utility. Use the addNode command later
#   after the node is created instead. The default value for this parameter is
#   8879. The port that you indicate must be a positive integer and a
#   connection to the deployment manager must be available in conjunction with
#   the dmgrHost parameter. Required if you are creating a managed profile,
#   the -federateLaterBPM parameter is set to false, and the deployment
#   manager was configured with a port that was not a default port.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
federateLaterBPM=true
#dmgrHost=dmgr_host_name
#dmgrPort=dmgr_port_number
#dmgrAdminUserName=dmgr_admin_user_name
#dmgrAdminPassword=dmgr_admin_password
#####
# Parameter: environmentType
#
# Description:
#   Specifies the environment type. The environment type refers to how IBM
#   Business Process Manager is used; for example, in a production, stage or
#   test environment. Load testing might be done on a test server, while a
#   stage environment type might be used as a temporary location to host
#   changes before putting those changes into production. You might specify
#   Stage as the Environment type if the server you are configuring will be
#   accessed and used to review content and new functionality. Valid values
#   are as follows:
#   Test
#   Use Test if the server you are configuring is to be used as a testing
#   environment.
#   Stage
#   Use Stage if the server is to serve as a staging platform to be used as a
#   preproduction server.
#   Production
#   Use Production if the server is to serve in a production capacity.
#   The default value is Test.
#
# Valid Values:
#   Test
#   Production
#   Stage
# Default Values:
#   Test
#####
environmentType=Test

```



```
#####
# Parameter: isDeveloperServer
#
# Description:
# Specifies whether the server is intended for development purposes only.
# This parameter is useful when creating profiles to test applications on a
# non-production server prior to deploying the applications on their
# production application servers. If -isDeveloperServer is set when
# creating an IBM Business Process Manager profile, then a preconfigured VMM
# file repository is installed. This file repository contains a sample
# organization that can be used to test Business Process Choreographer
# people resolution, ready for you to use as is.
#
# Valid Values:
# false
# true
# Default Values:
# false
#####
#isDeveloperServer=false
```

manageprofiles の例:

このセクションの例では、**manageprofiles** コマンド行ユーティリティを使用して、スタンドアロン・プロファイル、デプロイメント・マネージャー・プロファイル、およびカスタム (管理対象ノード) プロファイルを作成する方法を示します。

関連タスク:

534 ページの『**manageprofiles** を使用した Process Center デプロイメント・マネージャーとカスタム・プロファイルの作成』

Network Deployment 構成用の Process Center デプロイメント・マネージャー・プロファイルとカスタム・プロファイルを作成するには、**manageprofiles** コマンド行ユーティリティを使用します。

659 ページの『**manageprofiles** を使用した Process Server デプロイメント・マネージャー・プロファイルとカスタム・プロファイルの作成』

manageprofiles コマンド行ユーティリティを使用して、Network Deployment 構成用の Process Server デプロイメント・マネージャー・プロファイルおよびカスタム・プロファイルを作成します。

422 ページの『**manageprofiles** を使用した Process Server スタンドアロン・プロファイルの作成』

manageprofiles コマンド行ユーティリティを使用して、IBM Business Process Manager Advanced 用の Process Server スタンドアロン・プロファイルを作成します。

316 ページの『**manageprofiles** を使用した Process Center スタンドアロン・プロファイルの作成』

IBM Business Process Manager Advanced 用の Process Center スタンドアロン・プロファイルを作成するには、**manageprofiles** コマンド行ユーティリティを使用します。

例: DB2 データベースおよび **manageprofiles** コマンド行ユーティリティを使用した Process Server プロファイルおよび WebSphere ESB プロファイルの作成:

このトピックには、DB2 データベースを備えたインストール済み環境で **manageprofiles** コマンド行ユーティリティを使用した、Process Server スタンドアロン・サーバー・プロファイル、デプロイメント・マネージャー・プロファイル、およびカスタム・プロファイルの作成に役立つプロファイル作成コマンド実例が記載されています。

スタンドアロン・サーバーのプロファイル

以下のコマンド例は、Windows サーバー上で *my_BPM_PSVRSA_profile* と呼ばれる IBM Business Process Manager スタンドアロン・サーバー・プロファイルを作成します。指定の **manageprofiles** コマンド行ユ

ユーティリティ・パラメーターおよび デフォルト指定の **manageprofiles** コマンド行ユーティリティ・パラメーターにおけるパラメーターは、以下のものを指定します。

- DB2 データベース製品は共通データベース、Process Server データベースおよび Performance Data Warehouse データベースに使用され、これらはすべてローカル・ホストに既に存在すると想定されています。すべてのデータベースは後で構成するように設定されています (**-dbDelayConfig "true"** のコマンド・パラメーター値は、構成スクリプトは作成されませんが実行されないことを指定します)。データベース関連の **manageprofiles** パラメーターの完全なリストは、トピック『*manageprofiles* パラメーター』を参照してください。
- Windows サービスは手動で開始するように設定されます。
- サンプルの Business Process Choreographer 環境は作成されません。
- ビジネス・ルール・マネージャーは構成されます。
- Business Space powered by WebSphereは構成されません。
- プロファイル作成プロセスにより、ポート値 (データベース関連のポートは除く) が自動的に設定されます。このプロセスでは、新規プロファイルが他のプロファイルに対して検証され、ポートの競合が存在しないことが確認されます。

ヒント: **manageprofiles** コマンド行ユーティリティが指定するポート値をオーバーライドするには、**-portsFile** パラメーターを使用します。すべての有効な **manageprofiles** パラメーターのリストについては、参照資料の「*manageprofiles* パラメーター」を参照してください。

- 管理セキュリティは使用可能になります。

指定される **manageprofiles** コマンド行ユーティリティ・パラメーターは、スタンドアロン・サーバー・プロファイルを作成するために使用する **manageprofiles** コマンド行ユーティリティ・パラメーターと値の例を示したものです。

表 80. 指定される **manageprofiles** コマンド行ユーティリティ・パラメーター

パラメーター	値
-create	N/A
-templatePath	"install_root¥ profileTemplates¥BPM¥ default.procsvr.adv" (完全修飾されていることが必要)
-profileName	"my_BPM_PSVRSA_profile"
-adminPassword	"admin_pwd"
-adminUserName	"admin_id"
-dbServerPort	"50000"
-dbHostName	"localhost"
-dbType	"DB2_UNIVERSAL" または "DB2_DATASERVER"
-dbName	"CMNDB"
-procSvrDbName	"BPMDB"
-perfDWDbName	"PDWDB"
-dbCreateNew	"false"
-dbDelayConfig	"true"
-dbUserId	"db_id"
-dbPassword	"db_pwd"
-configureBPC	"false"
-configureBSpace	"false"

表 80. 指定される **manageprofiles** コマンド行ユーティリティ・パラメーター (続き)

パラメーター	値
-configureBRM	"true"
-samplesPassword	" <i>samples_pwd</i> "
-environmentName	" <i>environment_name</i> "

要確認: **enableAdminSecurity** パラメーターは常に true であり、false にできないため、指定する必要はありません。

ヒント: **samplesPassword** パラメーターは、サンプルを使用している場合のみ必要です。

デフォルトの **manageprofiles** コマンド行ユーティリティ・パラメーターは、通常では変更する必要のない **manageprofiles** コマンド行ユーティリティ・パラメーターとデフォルト値を示したものです。

表 81. デフォルトの **manageprofiles** コマンド行ユーティリティ・パラメーター

パラメーター	デフォルト値
-profilePath	" <i>install_root</i> ¥profiles¥ <i>my_BPM_PSVRSA_profile</i> "
-hostName	" <i>host_name</i> "
-nodeName	" <i>host_name</i> Nodenode_number"
-cellName	" <i>host_name</i> Nodenode_numbercell_numberCell"
Windows -environmentType	"Test"
Windows -processCenterURL	URL が指定されていない場合は、デフォルトでオフライン・サーバーになります。
Windows -winserviceCheck	"true"
Windows -winserviceAccountType	"localsystem"
Windows -winserviceStartupType	"manual"
Windows -winserviceUserName	"Administrator"
-dbJDBCClasspath	" <i>install_root</i> ¥jdbcdrivers¥DB2"
-dbOutputScriptDir	" <i>install_root</i> ¥profiles¥ <i>my_BPM_PSVRSA_profile</i> ¥dbscripts"

WebSphere Enterprise Service Bus スタンドアロン・サーバーのプロファイル

以下は、*my_WESBSA_profile* と呼ばれる WebSphere Enterprise Service Bus スタンドアロン・サーバー・プロファイルを作成する類似した例です。以下のような違いがあります。

- DB2 データベース製品は、共通データベースに使用されます。このデータベースは、プロファイル作成プロセスの実行時にローカル・ホスト上で作成および構成されるように設定されています。

指定される **manageprofiles** コマンド行ユーティリティ・パラメーターは、**manageprofiles** コマンド行ユーティリティ・パラメーターと値の例を示したものです。

表 82. 指定される **manageprofiles** コマンド行ユーティリティ・パラメーター

パラメーター	値
-create	N/A

表 82. 指定される **manageprofiles** コマンド行ユーティリティ・パラメーター (続き)

パラメーター	値
-templatePath	"install_root %profileTemplates%default.esbserver" (完全修飾されていることが必要)
-profileName	"my_WESBSA_profile"
-enableAdminSecurity	"true"
-adminPassword	"admin_pwd"
-adminUserName	"admin_id"
-dbServerPort	"50000"
-dbHostName	"localhost"
-dbType	"DB2_UNIVERSAL" または "DB2_DATASERVER"
-dbName	"CMNDB"
-dbCreateNew	"true"
-dbDelayConfig	"false"
-dbUserId	"db_id"
-dbPassword	"db_pwd"
-configureBSpace	"false"
-samplesPassword	"samples_pwd"

ヒント: **samplesPassword** パラメーターは、サンプルを使用している場合のみ必要です。

デフォルトの **manageprofiles** コマンド行ユーティリティ・パラメーターは、通常では変更する必要のない **manageprofiles** コマンド行ユーティリティ・パラメーターとデフォルト値を示したものです。

表 83. デフォルトの **manageprofiles** コマンド行ユーティリティ・パラメーター

パラメーター	デフォルト値
-profilePath	"install_root%profiles%my_WESBSA_profile"
-hostName	"host_name"
-nodeName	"host_nameNodenode_number"
-cellName	"host_nameNodenode_numbercell_numberCell"
Windows -winserviceCheck	"true"
Windows -winserviceAccountType	"localsystem"
Windows -winserviceStartupType	"manual"
Windows -winserviceUserName	"Administrator"
-dbOutputScriptDir	"install_root%profiles%my_WESBSA_profile% dbscripts"

デプロイメント・マネージャーのプロファイル

以下のコマンド例は、Windows サーバー上で *my_BPM_PSVRDMGR_profile* と呼ばれるデプロイメント・マネージャー・プロファイルを作成します。

788 ページの表 84 および 788 ページの表 85 のパラメーターは以下を指定します。

- DB2 データベース製品は共通データベース用に使用されますが、これはリモート・ホスト上に存在すると想定されています。このデータベースは後で構成するように設定されています (`-dbDelayConfig "true"` コマンドのパラメーター値により構成スクリプトは作成されますが、実行されません)。データベース関連の `manageprofiles` パラメーターの完全なリストについては、トピック「`manageprofiles` パラメーター」を参照してください。
- Windows サービスは手動で開始するように設定されます。
- プロファイル作成プロセスにより、ポート値 (データベース関連のポートは除く) が自動的に設定されます。このプロセスでは、新規プロファイルが他のプロファイルに対して検証され、ポートの競合が存在しないことが確認されます。

ヒント: `manageprofiles` コマンド行ユーティリティーが指定するポート値をオーバーライドするには、`-portsFile` パラメーターを使用します。有効なすべての `manageprofiles` パラメーターのリストについては、リファレンス資料の『`manageprofiles` パラメーター』を参照してください。

- 管理セキュリティは使用可能になります。

指定される `manageprofiles` コマンド行ユーティリティー・パラメーターは、デプロイメント・マネージャー・プロファイルを作成するために使用する `manageprofiles` コマンド行ユーティリティー・パラメーターと値の例を示したものです。

表 84. 指定される `manageprofiles` コマンド行ユーティリティー・パラメーター

パラメーター	値
<code>-create</code>	N/A
<code>-templatePath</code>	"install_root¥profileTemplates¥BPM¥ dmgr.procsvr.adv" (完全修飾されていることが必要)
<code>-profileName</code>	"my_BPM_PSVRDMGR_profile"
<code>-adminPassword</code>	"admin_pwd"
<code>-adminUserName</code>	"admin_id"
<code>-dbType</code>	"DB2_UNIVERSAL" または "DB2_DATASERVER"
<code>-dbName</code>	"CMNDB"
<code>-dbCreateNew</code>	"false"
<code>-dbDelayConfig</code>	"true"
<code>-dbUserId</code>	"db_id"
<code>-dbPassword</code>	"db_pwd"
<code>-dbHostName</code>	"remote_host_name"
<code>-dbServerPort</code>	"50000"

要確認: `enableAdminSecurity` パラメーターは常に `true` であり、`false` にできないため、指定する必要はありません。

デフォルトの `manageprofiles` コマンド行ユーティリティー・パラメーターは、通常では変更する必要のない `manageprofiles` コマンド行ユーティリティー・パラメーターとデフォルト値を示したものです。

表 85. デフォルトの `manageprofiles` コマンド行ユーティリティー・パラメーター

パラメーター	デフォルト値
<code>-profilePath</code>	"install_root¥profiles¥my_BPM_PSVRDMGR_profile"
<code>-hostName</code>	"host_name"

表 85. デフォルトの **manageprofiles** コマンド行ユーティリティ・パラメーター (続き)

パラメーター	デフォルト値
-nodeName	"host_nameCellManagernode_number"
-cellName	"host_nameCellcell_number"
Windows -winserviceCheck	"true"
Windows -winserviceAccountType	"localsystem"
Windows -winserviceStartupType	"manual"
Windows -winserviceUserName	"Administrator"
-dbJDBCClasspath	"install_root¥jdbcdriver¥DB2"
-dbOutputScriptDir	"install_root¥profiles¥ my_BPM_PSVRDMGR_profile¥dbscripts"

WebSphere Enterprise Service Bus デプロイメント・マネージャー・プロファイル

以下は、*my_WESBDMGR_profile* と呼ばれる WebSphere Enterprise Service Bus デプロイメント・マネージャー・プロファイルを作成する類似した例です。異なる点は、DB2 データベース製品は共通データベースに使用でき、これはプロファイル作成プロセス中にローカル・ホストで作成および構成されるように設定されることです。

指定される **manageprofiles** コマンド行ユーティリティ・パラメーターは、デプロイメント・マネージャー・プロファイルを作成するために使用する **manageprofiles** コマンド行ユーティリティ・パラメーターと値の例を示したものです。

表 86. 指定される **manageprofiles** コマンド行ユーティリティ・パラメーター

パラメーター	値
-create	N/A
-templatePath	"install_root ¥profileTemplates¥dmgr.esbserver" (完全修飾されていることが必要)
-profileName	"my_WESBDMGR_profile"
-enableAdminSecurity	"true"
-adminPassword	"admin_pwd"
-adminUserName	"admin_id"
-dbType	"DB2_UNIVERSAL" または "DB2_DATASERVER"
-dbName	"CMNDB"
-dbCreateNew	"true"
-dbDelayConfig	"false"
-dbUserId	"db_id"
-dbPassword	"db_pwd"
-dbHostName	"localhost"
-dbServerPort	"50000"

デフォルトの **manageprofiles** コマンド行ユーティリティ・パラメーターは、通常では変更する必要のない **manageprofiles** コマンド行ユーティリティ・パラメーターとデフォルト値を示したものです。

表 87. デフォルトの **manageprofiles** コマンド行ユーティリティ・パラメーター

パラメーター	デフォルト値
-profilePath	"install_root¥profiles¥my_WESBDMGR_profile"
-hostName	"host_name"
-nodeName	"host_nameCellManagernode_number"
-cellName	"host_nameCellcell_number"
Windows -winserviceCheck	"true"
Windows -winserviceAccountType	"localsystem"
Windows -winserviceStartupType	"manual"
Windows -winserviceUserName	"Administrator"
-dbOutputScriptDir	"install_root¥profiles¥my_WESBDMGR_profile¥ dbscripts"

カスタム・プロファイル

以下のコマンド例は、Windows サーバー上で *my_BPM_PSVRCUSTOM_profile* と呼ばれるカスタム・プロファイルを作成します。

この例は、上で作成されたデプロイメント・マネージャー・プロファイルと一緒に動作するように設定されています。

表 88 および 791 ページの表 89 のパラメーターは以下を指定します。

- DB2 データベース製品は共通データベース用に使用されますが、これは既に存在すると想定されています。カスタム・プロファイルの作成では、カスタム・プロファイルの統合先のデプロイメント・マネージャーによって使用されるデータベースを指し示す必要があります。
- 管理セキュリティは、カスタム・プロファイルの統合先となるデプロイメント・マネージャーで使用可能になります。
- プロファイル作成中に、カスタム・ノードは統合されます。そのためにはデプロイメント・マネージャーが稼働していることが必要です。

ヒント: デプロイメント・マネージャーが稼働していない場合、またはプロファイル作成後にカスタム・ノードを統合したい場合は、**federateLaterBPM** を **true** に設定します。

すべての有効な **manageprofiles** パラメーターのリストについては、参照資料の「*manageprofiles* パラメーター」を参照してください。

指定される **manageprofiles** コマンド行ユーティリティ・パラメーターは、カスタム・プロファイルを作成するために使用する **manageprofiles** コマンド行ユーティリティ・パラメーターと値の例を示したものです。

表 88. 指定される **manageprofiles** コマンド行ユーティリティ・パラメーター

パラメーター	値
-create	N/A
-templatePath	"install_root¥profileTemplates¥BPM¥ managed.procsvr.adv" (完全修飾されていることが必要)
-profileName	"my_BPM_PSVRCUSTOM_profile"

表 88. 指定される **manageprofiles** コマンド行ユーティリティ・パラメーター (続き)

パラメーター	値
-dmgrHost	"remote_host"
-dmgrPort	"8879" (-dmgrPort の値を見つけるには、このカスタム・プロファイルに関連付けられたデプロイメント・マネージャーの <i>dmgr_profile_root</i> ¥logs ディレクトリーに移動します。このディレクトリーで AboutThisProfile.txt ファイルを開き、「Management SOAP connector port:」の項目の値を見つめます。)
-dmgrAdminPassword	"admin_pwd"
-dmgrAdminUserName	"admin_id"
-federateLaterBPM	"false"
-dbType	"DB2_UNIVERSAL" または "DB2_DATASERVER"
-dbJDBCClasspath	"install_root¥jdbcdrivers¥DB2"

要確認: **federateLaterBPM** パラメーターが true に設定されている場合、**dmgrHost**、**dmgrPort**、**dmgrAdminPassword**、および **dmgrAdminUserName** を指定する必要はありません。

デフォルトの **manageprofiles** コマンド行ユーティリティ・パラメーターは、通常では変更する必要のない **manageprofiles** コマンド行ユーティリティ・パラメーターとデフォルト値を示したものです。

表 89. デフォルトの **manageprofiles** コマンド行ユーティリティ・パラメーター

パラメーター	デフォルト値
-profilePath	"install_root¥profiles¥ my_BPM_PSVRCUSTOM_profile"
-hostName	"host_name"
-nodeName	"host_nameNodenode_number"

WebSphere Enterprise Service Bus の例

以下は、*my_WESBCUSTOM_profile* と呼ばれる WebSphere Enterprise Service Bus カスタム・プロファイルを作成する類似した例です。異なる点は、DB2 データベース製品が、カスタム・プロファイルの統合先となるデプロイメント・マネージャー上の共通データベースに使用されることです。この例は、上で作成された WebSphere Enterprise Service Bus デプロイメント・マネージャー・プロファイルと一緒に動作するように設定されています。

指定される **manageprofiles** コマンド行ユーティリティ・パラメーターは、カスタム・プロファイルを作成するために使用する **manageprofiles** コマンド行ユーティリティ・パラメーターと値の例を示したものです。

表 90. 指定される **manageprofiles** コマンド行ユーティリティ・パラメーター

パラメーター	値
-create	N/A
-templatePath	"install_root¥profileTemplates¥ managed.esbserver" (完全修飾されていることが必要)
-profileName	"my_WESBCUSTOM_profile"
-dmgrHost	"remote_host"

表 90. 指定される **manageprofiles** コマンド行ユーティリティ・パラメーター (続き)

パラメーター	値
-dmgrPort	"8879" (-dmgrPort の値を見つけるには、このカスタム・プロファイルに関連付けられたデプロイメント・マネージャーの <code>dmgr_profile_root¥logs</code> ディレクトリーに移動します。このディレクトリーで AboutThisProfile.txt ファイルを開き、「Management SOAP connector port:」の項目の値を見つけます。)
-dmgrAdminPassword	"admin_pwd"
-dmgrAdminUserName	"admin_id"
-federateLaterWESB	"false"
-dbType	"DB2_UNIVERSAL" または "DB2_DATASERVER"
-dbJDBCClasspath	"install_root¥jdbcdrivers¥DB2"

要確認: **federateLaterWESB** パラメーターが **true** に設定されている場合、**dmgrHost**、**dmgrPort**、**dmgrAdminPassword**、および **dmgrAdminUserName** を指定する必要はありません。

デフォルトの **manageprofiles** コマンド行ユーティリティ・パラメーターは、通常では変更する必要のない **manageprofiles** コマンド行ユーティリティ・パラメーターとデフォルト値を示したものです。

表 91. デフォルトの **manageprofiles** コマンド行ユーティリティ・パラメーター

パラメーター	デフォルト値
-profilePath	"install_root¥profiles¥ my_WESBCUSTOM_profile"
-hostName	"host_name"
-nodeName	"host_nameNodenode_number"

例: Oracle データベースおよび **manageprofiles** コマンド行ユーティリティを使用した **Process Center** プロファイルの作成:

このトピックには、Oracle データベースを備えたインストール済み環境で **manageprofiles** コマンド行ユーティリティを使用した、**Process Center** スタンドアロン・サーバー・プロファイル、デプロイメント・マネージャー・プロファイル、およびカスタム・プロファイルの作成に役立つプロファイル作成コマンド実例が記載されています。

スタンドアロン・サーバーのプロファイル

以下のコマンド例は、Windows サーバー上で `my_BPM_PCTRSA_profile` と呼ばれる **Process Center** スタンドアロン・プロファイルを作成します。

指定の **manageprofiles** コマンド行ユーティリティ・パラメーターでのパラメーターは、以下の機能を指定します。

- Oracle データベース製品は共通データベース、**Process Server** データベースおよび **Performance Data Warehouse** データベースに使用され、これらはローカル・ホストに既に存在すると想定されています。すべてのデータベースは後で構成するように設定されています (**-dbDelayConfig "true"** のコマンド・パラメーター値は、構成スクリプトは作成されますが実行されないことを指定します)。
- Windows サービスは手動で開始するように設定されます。
- ビジネス・ルール・マネージャーは構成されません。

- Business Space powered by WebSphereは構成されます。
- プロファイル作成プロセスにより、ポート値（データベース関連のポートは除く）が自動的に設定されます。このプロセスでは、新規プロファイルが他のプロファイルに対して検証され、ポートの競合が存在しないことが確認されます。

ヒント: manageprofiles コマンド行ユーティリティーが指定するポート値をオーバーライドするには、**-portsFile** パラメーターを使用します。すべての有効な **manageprofiles** パラメーターのリストについては、参照資料の「*manageprofiles* パラメーター」を参照してください。

- 管理セキュリティは使用可能になります。

データベース構成を実行する前に、プロファイル作成用に指定されたすべてのユーザー ID がデータベース内になければなりません。

- **dbDelayConfig** が false に設定されている場合は、プロファイルを作成する前にユーザー ID を作成する必要があります。
- **dbDelayConfig** が true に設定されている場合は、プロファイル作成が完了してからサーバーを始動するまでの間に、データベース表と同時にユーザー ID を作成できます。

注: dbDelayConfig が true に設定されている場合は、サーバーを始動する前に bootstrapProcessServerData スクリプトを実行する必要があります。詳しくは、938 ページの『データベースへのシステム情報のロード』を参照してください。このシナリオでは、このステップがスタンドアロン・プロファイルに適用されます。

指定される **manageprofiles** コマンド行ユーティリティー・パラメーターは、スタンドアロン・サーバー・プロファイルを作成するために使用する **manageprofiles** コマンド行ユーティリティー・パラメーターと値の例を示したものです。

表 92. 指定される **manageprofiles** コマンド行ユーティリティー・パラメーター

パラメーター	値
-create	N/A
-templatePath	"install_root¥profileTemplates¥BPM¥ default.procctr.adv" (完全修飾されていることが必要)
-profileName	"my_BPM_PCTRSA_profile"
-adminPassword	"admin_pwd"
-adminUserName	"admin_id"
-dbServerPort	"1521"
-dbType	"ORACLE"
-dbName	"CMNDB"
-procSvrDbName	"BPMDB"
-dbProcSvrUserId	"procsvr_db_id"
-dbProcSvrPassword	"procsvr_db_pwd"
-perfDWDbName	"PDWDB"
-dbPerfDWUserId	"perfdw_db_id"
-dbPerfDWPassword	"perfdw_db_pwd"
-dbDelayConfig	"true"
-dbPassword	"db_pwd"
-configureBSpace	"true"

表 92. 指定される **manageprofiles** コマンド行ユーティリティ・パラメーター (続き)

パラメーター	値
-configureBRM	"false"
-samplesPassword	" <i>samples_pwd</i> "
-environmentName	" <i>environment_name</i> "






要確認: **enableAdminSecurity** パラメーターは常に true であり、false にできないため、指定する必要はありません。

ヒント: **samplesPassword** パラメーターは、サンプルを使用している場合のみ必要です。

制約事項: **dbProcSvrUserId** および **dbPerfDWUserId** パラメーターは、同じ値が **procSvrDbname** および **perfDWDbName** パラメーターに与えられていた場合には、同じ値を持つことはできません。

デフォルトの **manageprofiles** コマンド行ユーティリティ・パラメーターは、通常では変更する必要のない **manageprofiles** コマンド行ユーティリティ・パラメーターとデフォルト値を示したものです。

表 93. デフォルトの **manageprofiles** コマンド行ユーティリティ・パラメーター

パラメーター	デフォルト値
-profilePath	" <i>install_root</i> ¥profiles¥ <i>my_BPM_PCTRSA_profile</i> "
-hostName	" <i>host_name</i> "
-nodeName	" <i>host_nameNode</i> <i>node_number</i> "
-cellName	" <i>host_nameNode</i> <i>node_numberCell</i> <i>number</i> Cell"
 -environmentType	"Test"
 -winserviceCheck	"true"
 -winserviceAccountType	"localsystem"
 -winserviceStartupType	"manual"
 -winserviceUserName	"Administrator"
-dbJDBCClasspath	" <i>install_root</i> ¥jdbcdrivers¥Oracle"
-dbOutputscriptDir	" <i>install_root</i> ¥profiles¥ <i>my_BPM_PCTRSA_profile</i> ¥ <i>dbscripts</i> "
-dbHostName	" <i>local_host_name</i> "

『Oracle 用追加 **manageprofiles** コマンド行ユーティリティ・パラメーター』に示すのは、プロファイル管理ツールを通じて表示されない追加の **manageprofiles** コマンド行ユーティリティ・パラメーターで、ユーザー自身の Oracle 用ユーザー名およびパスワードの組み合わせを選択するように指定することが可能です。

表 94. Oracle 用追加 **manageprofiles** コマンド行ユーティリティー・パラメーター

パラメーター	値	注釈
-dbCommonUserId	" <i>common_db_userID</i> " (共通 DB オブジェクトの作成に使用)	<p>このパラメーターはプロファイル作成中、「カスタム・ユーザーとパスワード (Custom Users and Passwords)」オプションを選択する場合に必要です。</p> <p>「単一パスワードのユーザー生成 (Generate Users with Single Password)」オプションについては、このユーザーは Oracle データベース名 (SID) に基づいて自動的に作成されます。例: SID が ORCL の場合、dbCommonUserId は ORCCOMM。</p> <p>このパラメーターは、拡張スタンドアロン (default*.adv) プロファイルで dbType パラメーターが ORACLE に設定されていて、データベース設計ファイルが指定されていない場合に必須です。</p>
-dbCommonPassword	" <i>common_db_pwd</i> "	<p>このパラメーターはプロファイル作成中、「カスタム・ユーザーとパスワード (Custom Users and Passwords)」オプションを選択する場合に必要です。</p> <p>「単一パスワードのユーザー生成 (Generate Users with Single Password)」オプションについては、dbCommonPassword は dbPassword に設定されます。例: dbCommonPassword = dbPassword</p> <p>このパラメーターは、拡張スタンドアロン (default*.adv) プロファイルで dbType パラメーターが ORACLE に設定されていて、データベース設計ファイルが指定されていない場合に必須です。</p>
-dbBspaceUserId	" <i>bpace_db_userID</i> " (Business Space の構成に使用)	<p>このパラメーターは、ユーザー独自の Business Space スキーマが必要な場合に必要です。指定されない場合、デフォルト値 (IBMBUSSP) が設定されます。</p>
-dbBspacePassword	" <i>bpace_db_pwd</i> " (Business Space の構成に使用)	<p>このパラメーターは、独自の Business Space パスワードが必要な場合に必要です。それ以外の場合は、dbBspacePassword = "YouNameIt" でなければ dbBspacePassword = dbPassword (存在する場合)、そうでなければ dbBspacePassword = IBMBUSSP、という順序でデフォルト値が設定されます。</p>
-dbCeiMeUserId	" <i>cei_me_userID</i> " (CEI ME オブジェクトの作成に使用)	<p>このパラメーターはプロファイル作成中、「カスタム・ユーザーとパスワード (Custom Users and Passwords)」オプションを選択する場合に必要です。</p> <p>「単一パスワードのユーザー生成 (Generate Users with Single Password)」オプションについては、このユーザーは Oracle データベース名 (SID) に基づいて自動的に作成されます。例: SID が ORCL の場合、dbCeiMeId は ORCCM00。</p>

表 94. Oracle 用追加 **manageprofiles** コマンド行ユーティリティー・パラメーター (続き)

パラメーター	値	注釈
-dbCeiMePassword	" <i>cei_me_pwd</i> "	このパラメーターはプロファイル作成中、「カスタム・ユーザーとパスワード (Custom Users and Passwords)」オプションを選択する場合に必要です。 「単一パスワードのユーザー生成 (Generate Users with Single Password)」オプションについては、dbCeiPassword は dbPassword に設定されます。例: dbCeiMePassword = dbPassword
-dbAppMeUserId	" <i>app_me_userID</i> " (SCAAPP ME オブジェクトの作成に使用)	このパラメーターはプロファイル作成中、「カスタム・ユーザーとパスワード (Custom Users and Passwords)」オプションを選択する場合に必要です。 「単一パスワードのユーザー生成 (Generate Users with Single Password)」オプションについては、このユーザーは Oracle データベース名 (SID) に基づいて自動的に作成されます。例: SID が ORCL の場合、dbAppMeId は ORCSA00。
-dbAppMePassword	" <i>app_me_pwd</i> "	このパラメーターはプロファイル作成中、「カスタム・ユーザーとパスワード (Custom Users and Passwords)」オプションを選択する場合に必要です。 「単一パスワードのユーザー生成 (Generate Users with Single Password)」オプションについては、dbCeiPassword は dbPassword に設定されます。例: dbAppMePassword = dbPassword

デプロイメント・マネージャー・プロファイル

以下のコマンド例は、Windows サーバー上で *my_BPM_PCTRDmgr_profile* と呼ばれるデプロイメント・マネージャー・プロファイルを作成します。

『指定される **manageprofiles** コマンド行ユーティリティー・パラメーター』のパラメーターは以下を指定します。

- Oracle データベース製品は共通データベース用に使用されますが、これはリモート・ホスト上に存在すると想定されています。データベースは後で構成するように設定されています (**-dbDelayConfig "true"** のコマンド・パラメーター値は、構成スクリプトは作成されますが実行されないことを指定します)。
- Windows サービスは手動で開始するように設定されます。
- プロファイル作成プロセスにより、ポート値 (データベース関連のポートは除く) が自動的に設定されます。このプロセスでは、新規プロファイルが他のプロファイルに対して検証され、ポートの競合が存在しないことが確認されます。

ヒント: **manageprofiles** コマンド行ユーティリティーが指定するポート値をオーバーライドするには、**-portsFile** パラメーターを使用します。すべての有効な **manageprofiles** パラメーターのリストについては、参照資料の「*manageprofiles* パラメーター」を参照してください。

- 管理セキュリティーは使用可能になります。

指定される `manageprofiles` コマンド行ユーティリティ・パラメーターは、デプロイメント・マネージャー・プロファイルを作成するために使用する `manageprofiles` コマンド行ユーティリティ・パラメーターと値の例を示したものです。




表 95. 指定される `manageprofiles` コマンド行ユーティリティ・パラメーター

パラメーター	値
<code>-create</code>	N/A
<code>-templatePath</code>	"install_root¥profileTemplates¥BPM¥ dmgr.procctr.adv" (完全修飾されていることが必要)
<code>-profileName</code>	"my_BPM_PCTRD_MGR_profile"
<code>-adminPassword</code>	"admin_pwd"
<code>-adminUserName</code>	"admin_id"
<code>-dbType</code>	"ORACLE"
<code>-dbName</code>	"CMNDB"
<code>-dbDelayConfig</code>	"true"
<code>-dbPassword</code>	"db_pwd"
<code>-dbHostName</code>	"remote_host_name"
<code>-dbServerPort</code>	"1521"

要確認: `enableAdminSecurity` パラメーターは常に `true` であり、`false` にできないため、指定する必要はありません。

デフォルトの `manageprofiles` コマンド行ユーティリティ・パラメーターは、通常では変更する必要のない `manageprofiles` コマンド行ユーティリティ・パラメーターとデフォルト値を示したものです。

表 96. デフォルトの `manageprofiles` コマンド行ユーティリティ・パラメーター

パラメーター	デフォルト値
<code>-profilePath</code>	"install_root¥profiles¥my_BPM_PCTRD_MGR_profile"
<code>-hostName</code>	"host_name"
<code>-nodeName</code>	"host_nameCellManagernode_number"
<code>-cellName</code>	"host_nameCellcell_number"
 <code>-winserviceCheck</code>	"true"
 <code>-winserviceAccountType</code>	"localsystem"
 <code>-winserviceStartupType</code>	"manual"
 <code>-winserviceUserName</code>	"Administrator"
<code>-dbJDBCClasspath</code>	"install_root¥jdbcdrivers¥Oracle"
<code>-dbOutputScriptDir</code>	"install_root¥profiles¥my_BPM_PCTRD_MGR_profile¥dbscripts"

『Oracle 用追加 `manageprofiles` コマンド行ユーティリティ・パラメーター』に示すのは、プロファイル管理ツールを通じて表示されない追加の `manageprofiles` コマンド行ユーティリティ・パラメーターで、ユーザー自身の Oracle 用ユーザー名およびパスワードの組み合わせを選択するように指定することが可能です。

表 97. Oracle 用追加 **manageprofiles** コマンド行ユーティリティ・パラメーター

パラメーター	デフォルト値
-dbCommonUserId	このパラメーターは、拡張デプロイメント・マネージャー (dmgr.*.adv) プロファイルで dbType パラメーターが ORACLE に設定されていて、データベース設計ファイルが指定されていない場合に必須です。そうでなければ、デフォルトは「 <i>common_db_userID</i> 」(共通 DB オブジェクトの作成に使用) です。
-dbCommonPassword	このパラメーターは、拡張デプロイメント・マネージャー (dmgr.*.adv) プロファイルで dbType パラメーターが ORACLE に設定されていて、データベース設計ファイルが指定されていない場合に必須です。そうでなければ、デフォルトは「 <i>common_db_pwd</i> 」です。

カスタム・プロファイル

以下のコマンド例は、Windows サーバー上で *my_BPM_PCTRCUSTOM_profile* と呼ばれるカスタム・プロファイルを作成します。

この例は、上で作成されたデプロイメント・マネージャー・プロファイルと一緒に動作するように設定されています。

表 98 および 799 ページの表 99 のパラメーターは以下を指定します。

- Oracle データベース製品は共通データベース用に使用されますが、これは既に存在すると想定されています。カスタム・プロファイルの作成では、カスタム・プロファイルの統合先のデプロイメント・マネージャーによって使用されるデータベースを指し示す必要があります。
- 管理セキュリティは、カスタム・プロファイルの統合先となるデプロイメント・マネージャーで使用可能になります。
- プロファイル作成中に、カスタム・ノードは統合されます。そのためにはデプロイメント・マネージャーが稼働していることが必要です。

ヒント: デプロイメント・マネージャーが稼働していない場合、またはプロファイル作成後にカスタム・ノードを統合したい場合は、**federateLaterBPM** を true に設定します。

すべての有効な **manageprofiles** パラメーターのリストについては、参照資料の「*manageprofiles* パラメーター」を参照してください。

指定される **manageprofiles** コマンド行ユーティリティ・パラメーターは、カスタム・プロファイルを作成するために使用する **manageprofiles** コマンド行ユーティリティ・パラメーターと値の例を示したものです。

表 98. 指定される **manageprofiles** コマンド行ユーティリティ・パラメーター

パラメーター	値
-create	N/A
-templatePath	" <i>install_root</i> ¥profileTemplates¥BPM¥ managed.procctr.adv" (完全修飾されていることが必要)
-profileName	" <i>my_BPM_PCTRCUSTOM_profile</i> "
-dmgrHost	" <i>remote_host</i> "

表 98. 指定される **manageprofiles** コマンド行ユーティリティ・パラメーター (続き)

パラメーター	値
-dmgrPort	"8879" (-dmgrPort の値を見つけるには、このカスタム・プロファイルに関連付けられたデプロイメント・マネージャーの <code>dmgr_profile_root¥logs</code> ディレクトリーに移動します。このディレクトリーで <code>AboutThisProfile.txt</code> ファイルを開き、「Management SOAP connector port:」の項目の値を見つけます。)
-dmgrAdminPassword	"admin_pwd"
-dmgrAdminUserName	"admin_id"
-federateLaterBPM	"false"
-dbType	"ORACLE"
-dbJDBCClasspath	"install_root¥jdbcdrivers¥Oracle"

要確認: `federateLaterBPM` パラメーターが `true` に設定されている場合、`dmgrHost`、`dmgrPort`、`dmgrAdminPassword`、および `dmgrAdminUserName` を指定する必要はありません。

デフォルトの **manageprofiles** コマンド行ユーティリティ・パラメーターは、通常では変更する必要のない **manageprofiles** コマンド行ユーティリティ・パラメーターとデフォルト値を示したものです。

表 99. デフォルトの **manageprofiles** コマンド行ユーティリティ・パラメーター

パラメーター	デフォルト値
-profilePath	"install_root¥profiles¥ my_BPM_PCTRCUSTOM_profile"
-hostName	"host_name"
-nodeName	"host_nameNodenode_number"

例: **manageprofiles** コマンド行ユーティリティによる Oracle データベースを使用した Process Server および WebSphere ESB プロファイルの作成:

このトピックには、Oracle データベースを備えたインストール済み環境で **manageprofiles** コマンド行ユーティリティを使用した、Process Server スタンドアロン・サーバー・プロファイル、デプロイメント・マネージャー・プロファイル、およびカスタム・プロファイルの作成に役立つプロファイル作成コマンド実例が記載されています。

スタンドアロン・サーバーのプロファイル

以下のコマンド例は、Windows サーバー上で `my_BPM_PSVRSA_profile` と呼ばれる IBM Business Process Manager スタンドアロン・プロファイルを作成します。

指定の **manageprofiles** コマンド行ユーティリティ・パラメーター、デフォルト指定の **manageprofiles** コマンド行ユーティリティ・パラメーター、および追加の **manageprofiles** コマンド行ユーティリティ・パラメーター (Oracle 用)におけるパラメーターが以下の機能を指定します。

- Oracle データベース製品は共通データベース、Process Server データベースおよび Performance Data Warehouse データベースに使用され、これらはすべてローカル・ホストに既に存在すると想定されています。すべてのデータベースは後で構成するように設定されています (`-dbDelayConfig "true"` のコマン

ド・パラメーター値は、構成スクリプトは作成されますが実行されないことを指定します)。データベース関連の **manageprofiles** パラメーターの完全なリストは、トピック『*manageprofiles* パラメーター』を参照してください。

- Windows サービスは手動で開始するように設定されます。
- ビジネス・ルール・マネージャーは構成されません。
- Business Space powered by WebSphereは構成されます。
- プロファイル作成プロセスにより、ポート値 (データベース関連のポートは除く) が自動的に設定されます。このプロセスでは、新規プロファイルが他のプロファイルに対して検証され、ポートの競合が存在しないことが確認されます。

ヒント: manageprofiles コマンド行ユーティリティーが指定するポート値をオーバーライドするには、**-portsFile** パラメーターを使用します。すべての有効な **manageprofiles** パラメーターのリストについては、参照資料の「*manageprofiles* パラメーター」を参照してください。

- 管理セキュリティは使用可能になります。

データベース構成を実行する前に、プロファイル作成用に指定されたすべてのユーザー ID がデータベース内になければなりません。

- **dbDelayConfig** が false に設定されている場合は、プロファイルを作成する前にユーザー ID を作成する必要があります。
- **dbDelayConfig** が true に設定されている場合は、プロファイル作成が完了してからサーバーを始動するまでの間に、データベース表と同時にユーザー ID を作成できます。

指定される **manageprofiles** コマンド行ユーティリティー・パラメーターは、スタンドアロン・サーバー・プロファイルを作成するために使用する **manageprofiles** コマンド行ユーティリティー・パラメーターと値の例を示したものです。

表 100. 指定される **manageprofiles** コマンド行ユーティリティー・パラメーター

パラメーター	値
-create	N/A
-templatePath	"install_root¥profileTemplates¥BPM¥ default.procsvr.adv" (完全修飾されていることが必要)
-profileName	"my_BPM_PSVRSA_profile"
-adminPassword	"admin_pwd"
-adminUserName	"admin_id"
-dbServerPort	"1521"
-dbType	"ORACLE"
-dbName	"CMNDB"
-procSvrDbName	"BPMDB"
-dbProcSvrUserId	"procsvr_db_id"
-dbProcSvrPassword	"procsvr_db_pwd"
-perfDWdbName	"PDWDB"
-dbPerfDWUserId	"perfdw_db_id"
-dbPerfDWPassword	"perfdw_db_pwd"
-dbDelayConfig	"true"
-dbPassword	"db_pwd"

表 100. 指定される **manageprofiles** コマンド行ユーティリティ・パラメーター (続き)

パラメーター	値
-configureBspace	"true"
-configureBRM	"false"
-samplesPassword	" <i>samples_pwd</i> "
-environmentName	" <i>environment_name</i> "

要確認: **enableAdminSecurity** パラメーターは常に true であり、false にできないため、指定する必要はありません。

ヒント: **samplesPassword** パラメーターは、サンプルを使用している場合のみ必要です。

制約事項: **dbProcSvrUserId** および **dbPerfDWUserId** パラメーターは、同じ値が **procSvrDbname** および **perfDWDbName** パラメーターに与えられていた場合には、同じ値を持つことはできません。

デフォルトの **manageprofiles** コマンド行ユーティリティ・パラメーターは、通常では変更する必要のない **manageprofiles** コマンド行ユーティリティ・パラメーターとデフォルト値を示したものです。

表 101. デフォルトの **manageprofiles** コマンド行ユーティリティ・パラメーター

パラメーター	デフォルト値
-profilePath	" <i>install_root</i> ¥profiles¥ <i>my_BPM_PSVRSA_profile</i> "
-hostName	" <i>host_name</i> "
-nodeName	" <i>host_name</i> Nodenode_number"
-cellName	" <i>host_name</i> Nodenode_numbercell_numberCell"
Windows -winserviceCheck	"true"
Windows -winserviceAccountType	"localsystem"
Windows -winserviceStartupType	"manual"
Windows -winserviceUserName	"Administrator"
-dbJDBCClasspath	" <i>install_root</i> ¥jdbcDrivers¥Oracle"
-dbOutputscriptDir	" <i>install_root</i> ¥profiles¥ <i>my_BPM_PSVRSA_profile</i> ¥dbscripts"
-dbHostName	"local_host_name"

『Oracle 用追加 **manageprofiles** コマンド行ユーティリティ・パラメーター』に示すのは、プロファイル管理ツールを通じて表示されない追加の **manageprofiles** コマンド行ユーティリティ・パラメーターで、ユーザー自身の Oracle 用ユーザー名およびパスワードの組み合わせを選択するように指定することが可能です。

表 102. Oracle 用追加 **manageprofiles** コマンド行ユーティリティー・パラメーター

パラメーター	値	注釈
-dbCommonUserId	" <i>common_db_userID</i> " (共通 DB オブジェクトの作成に使用)	このパラメーターはプロファイル作成中、「カスタム・ユーザーとパスワード (Custom Users and Passwords)」オプションを選択する場合に必要です。 「単一パスワードのユーザー生成 (Generate Users with Single Password)」オプションについては、このユーザーは Oracle データベース名 (SID) に基づいて自動的に作成されます。例: SID が ORCL の場合、dbCommonUserId は ORCCOMM。
-dbCommonPassword	" <i>common_db_pwd</i> "	このパラメーターはプロファイル作成中、「カスタム・ユーザーとパスワード (Custom Users and Passwords)」オプションを選択する場合に必要です。 「単一パスワードのユーザー生成 (Generate Users with Single Password)」オプションについては、dbCommonPassword は dbPassword に設定されます。例: dbCommonPassword = dbPassword
-dbBspaceUserId	" <i>bpace_db_userID</i> " (Business Space の構成に使用)	このパラメーターは、ユーザー独自の Business Space スキーマが必要な場合に必要です。指定されない場合、デフォルト値 (IBMBUSSP) が設定されます。
-dbBspacePassword	" <i>bpace_db_pwd</i> " (Business Space の構成に使用)	このパラメーターは、独自の Business Space パスワードが必要な場合に必要です。それ以外の場合は、dbBspacePassword = "YouNameIt" でなければ dbBspacePassword = dbPassword (存在する場合)、そうでなければ dbBspacePassword = IBMBUSSP、という順序でデフォルト値が設定されます。
-dbCeiMeUserId	" <i>cei_me_userID</i> " (CEI ME オブジェクトの作成に使用)	このパラメーターはプロファイル作成中、「カスタム・ユーザーとパスワード (Custom Users and Passwords)」オプションを選択する場合に必要です。 「単一パスワードのユーザー生成 (Generate Users with Single Password)」オプションについては、このユーザーは Oracle データベース名 (SID) に基づいて自動的に作成されます。例: SID が ORCL の場合、dbCeiMeId は ORCCM00。
-dbCeiMePassword	" <i>cei_me_pwd</i> "	このパラメーターはプロファイル作成中、「カスタム・ユーザーとパスワード (Custom Users and Passwords)」オプションを選択する場合に必要です。 「単一パスワードのユーザー生成 (Generate Users with Single Password)」オプションについては、dbCeiPassword は dbPassword に設定されます。例: dbCeiMePassword = dbPassword

表 102. Oracle 用追加 **manageprofiles** コマンド行ユーティリティ・パラメーター (続き)

パラメーター	値	注釈
-dbAppMeUserId	" <i>app_me_userID</i> " (SCAAPP ME オブジェクトの作成に使用)	このパラメーターはプロファイル作成中、「カスタム・ユーザーとパスワード (Custom Users and Passwords)」オプションを選択する場合に必要です。 「単一パスワードのユーザー生成 (Generate Users with Single Password)」オプションについては、このユーザーは Oracle データベース名 (SID) に基づいて自動的に作成されます。例: SID が ORCL の場合、dbAppMeId は ORCSA00。
-dbAppMePassword	" <i>app_me_pwd</i> "	このパラメーターはプロファイル作成中、「カスタム・ユーザーとパスワード (Custom Users and Passwords)」オプションを選択する場合に必要です。 「単一パスワードのユーザー生成 (Generate Users with Single Password)」オプションについては、dbCeiPassword は dbPassword に設定されます。例: dbAppMePassword = dbPassword

WebSphere Enterprise Service Bus スタンドアロン・サーバーのプロファイル

以下は、*my_BPM_WESBSA_profile* と呼ばれる WebSphere Enterprise Service Bus スタンドアロン・サーバー・プロファイルを作成する、同様の例です。違いは、データベースを直ちに構成するように設定されていることです (-dbDelayConfig "false" のコマンド・パラメーター値は、構成スクリプトが実行されることを指定します)。

指定される **manageprofiles** コマンド行ユーティリティ・パラメーターは、**manageprofiles** コマンド行ユーティリティ・パラメーターと値の例を示したものです。

表 103. 指定される **manageprofiles** コマンド行ユーティリティ・パラメーター

パラメーター	値
-create	N/A
-templatePath	" <i>install_root</i> %profileTemplates%default.esbserver" (完全修飾されていることが必要)
-profileName	" <i>my_BPM_WESBSA_profile</i> "
-enableAdminSecurity	"true"
-adminPassword	" <i>admin_pwd</i> "
-adminUserName	" <i>admin_id</i> "
-dbServerPort	"1521"
-dbType	"ORACLE"
-dbName	"CMNDB"
-dbDelayConfig	"false"
-dbPassword	" <i>db_pwd</i> "
-configureBspace	"true"
-samplesPassword	" <i>samples_pwd</i> "

ヒント: `samplesPassword` パラメーターは、サンプルを使用している場合のみ必要です。

デフォルトの `manageprofiles` コマンド行ユーティリティー・パラメーターは、通常では変更する必要のない `manageprofiles` コマンド行ユーティリティー・パラメーターとデフォルト値を示したものです。

表 104. デフォルトの `manageprofiles` コマンド行ユーティリティー・パラメーター

パラメーター	デフォルト値
<code>-profilePath</code>	<code>"install_root\profiles\my_BPM_WESBSA_profile"</code>
<code>-hostName</code>	<code>"host_name"</code>
<code>-nodeName</code>	<code>"host_nameNodenode_number"</code>
<code>-cellName</code>	<code>"host_nameNodenode_numbercell_numberCell"</code>
Windows <code>-winserviceStartupType</code>	<code>"manual"</code>
Windows <code>-winserviceCheck</code>	<code>"true"</code>
Windows <code>-winserviceAccountType</code>	<code>"localsystem"</code>
Windows <code>-winserviceUserName</code>	<code>"Administrator"</code>
<code>-dbOutputScriptDir</code>	<code>"install_root\profiles\ my_BPM_WESBSA_profile\dbscripts"</code>
<code>-dbJDBCClasspath</code>	<code>"install_root\jdbcDrivers\Oracle"</code>
<code>-dbHostName</code>	<code>"local_host_name"</code>

『Oracle 用追加 `manageprofiles` コマンド行ユーティリティー・パラメーター』に示すのは、プロファイル管理ツールを通じて表示されない追加の `manageprofiles` コマンド行ユーティリティー・パラメーターで、ユーザー自身の Oracle 用ユーザー名およびパスワードの組み合わせを選択するように指定することが可能です。

表 105. Oracle 用追加 `manageprofiles` コマンド行ユーティリティー・パラメーター

パラメーター	デフォルト値	注釈
<code>-dbCommonUserId</code>	<code>"common_db_userID"</code> (共通 DB オブジェクトの作成に使用)	このパラメーターはプロファイル作成中、「カスタム・ユーザーとパスワード (Custom Users and Passwords)」オプションを選択する場合に必要です。「単一パスワードのユーザー生成 (Generate Users with Single Password)」オプションについては、このユーザーは Oracle データベース名 (SID) に基づいて自動的に作成されます。例: SID が ORCL の場合、 <code>dbCommonUserId</code> は ORCCOMM。
<code>-dbCommonPassword</code>	<code>"common_db_pwd"</code>	このパラメーターはプロファイル作成中、「カスタム・ユーザーとパスワード (Custom Users and Passwords)」オプションを選択する場合に必要です。 「単一パスワードのユーザー生成 (Generate Users with Single Password)」オプションについては、 <code>dbCommonPassword</code> は <code>dbPassword</code> に設定されます。例: <code>dbCommonPassword = dbPassword</code>

表 105. Oracle 用追加 **manageprofiles** コマンド行ユーティリティー・パラメーター (続き)

パラメーター	デフォルト値	注釈
-dbBspaceUserId	" <i>bospace_db_userid</i> " (Business Space の構成に使用)	このパラメーターは、ユーザー独自の Business Space スキーマが必要な場合に必要です。指定されない場合、デフォルト値 (IBMBUSSP) が設定されます。
-dbBspacePassword	" <i>bospace_db_pwd</i> " (Business Space の構成に使用)	このパラメーターは、独自の Business Space パスワードが必要な場合に必要です。それ以外の場合は、dbBspacePassword = "YouNameIt" でなければ dbBspacePassword = dbPassword (存在する場合)、そうでなければ dbBspacePassword = IBMBUSSP、という順序でデフォルト値が設定されます。
-dbCeiMeUserId	" <i>cei_me_userid</i> " (CEI ME オブジェクトの作成に使用)	このパラメーターはプロファイル作成中、「カスタム・ユーザーとパスワード (Custom Users and Passwords)」オプションを選択する場合に必要です。 「単一パスワードのユーザー生成 (Generate Users with Single Password)」オプションについては、このユーザーは Oracle データベース名 (SID) に基づいて自動的に作成されます。例: SID が ORCL の場合、dbCeiMeId は ORCCM00。
-dbCeiMePassword	" <i>cei_me_pwd</i> "	このパラメーターはプロファイル作成中、「カスタム・ユーザーとパスワード (Custom Users and Passwords)」オプションを選択する場合に必要です。 「単一パスワードのユーザー生成 (Generate Users with Single Password)」オプションについては、dbCeiPassword は dbPassword に設定されます。例: dbCeiMePassword = dbPassword
-dbAppMeUserId	" <i>app_me_userid</i> " (SCAAPP ME オブジェクトの作成に使用)	このパラメーターはプロファイル作成中、「カスタム・ユーザーとパスワード (Custom Users and Passwords)」オプションを選択する場合に必要です。 「単一パスワードのユーザー生成 (Generate Users with Single Password)」オプションについては、このユーザーは Oracle データベース名 (SID) に基づいて自動的に作成されます。例: SID が ORCL の場合、dbAppMeId は ORCSA00。

表 105. Oracle 用追加 **manageprofiles** コマンド行ユーティリティー・パラメーター (続き)

パラメーター	デフォルト値	注釈
-dbAppMePassword	"app_me_pwd"	このパラメーターはプロファイル作成中、「カスタム・ユーザーとパスワード (Custom Users and Passwords)」オプションを選択する場合に必要です。 「単一パスワードのユーザー生成 (Generate Users with Single Password)」オプションについては、dbCeiPassword は dbPassword に設定されます。例: dbAppMePassword = dbPassword

デプロイメント・マネージャー・プロファイル

以下のコマンド例は、Windows サーバー上で *my_BPM_PSVRDMGR_profile* と呼ばれるデプロイメント・マネージャー・プロファイルを作成します。

表 106、 807 ページの表 107、および 807 ページの表 108 におけるパラメーターは、以下のものを指定します。

- Oracle データベース製品は共通データベース用に使用されますが、これはリモート・ホスト上に存在すると想定されています。データベースは後で構成するように設定されています (**-dbDelayConfig "true"** のコマンド・パラメーター値は、構成スクリプトは作成されますが実行されないことを指定します)。有効なすべての **manageprofiles** パラメーターのリストについては、リファレンス資料の『*manageprofiles* パラメーター』を参照してください。
- Windows サービスは手動で開始するように設定されます。
- プロファイル作成プロセスにより、ポート値 (データベース関連のポートは除く) が自動的に設定されます。このプロセスでは、新規プロファイルが他のプロファイルに対して検証され、ポートの競合が存在しないことが確認されます。

ヒント: **manageprofiles** コマンド行ユーティリティーが指定するポート値をオーバーライドするには、**-portsFile** パラメーターを使用します。有効なすべての **manageprofiles** パラメーターのリストについては、リファレンス資料の『*manageprofiles* パラメーター』を参照してください。

- 管理セキュリティは使用可能になります。

指定される **manageprofiles** コマンド行ユーティリティー・パラメーターは、デプロイメント・マネージャー・プロファイルを作成するために使用する **manageprofiles** コマンド行ユーティリティー・パラメーターと値の例を示したものです。

表 106. 指定される **manageprofiles** コマンド行ユーティリティー・パラメーター

パラメーター	値
-create	N/A
-templatePath	"install_root\profileTemplates\BPM\dmgr.procsvr.adv" (完全修飾されていることが必要)
-profileName	"my_BPM_PSVRDMGR_profile"
-adminPassword	"admin_pwd"
-adminUserName	"admin_id"
-dbType	"ORACLE"





表 106. 指定される **manageprofiles** コマンド行ユーティリティ・パラメーター (続き)

パラメーター	値
-dbName	"CMNDB"
-dbDelayConfig	"true"
-dbPassword	"db_pwd"
-dbHostName	"remote_host_name"
-dbServerPort	"1521"

要確認: **enableAdminSecurity** パラメーターは常に true であり、false にできないため、指定する必要はありません。

デフォルトの **manageprofiles** コマンド行ユーティリティ・パラメーターは、通常では変更する必要のない **manageprofiles** コマンド行ユーティリティ・パラメーターとデフォルト値を示したものです。

表 107. デフォルトの **manageprofiles** コマンド行ユーティリティ・パラメーター

パラメーター	デフォルト値
-profilePath	"install_root\profiles\my_BPM_PSVRDMGR_profile"
-hostName	"host_name"
-nodeName	"host_nameCellManagernode_number"
-cellName	"host_nameCellcell_number"
 -winserviceCheck	"true"
 -winserviceAccountType	"localsystem"
 -winserviceStartupType	"manual"
 -winserviceUserName	"Administrator"
-dbJDBCClasspath	"install_root\jdbcDrivers\Oracle"
-dbOutputScriptDir	"install_root\profiles\my_BPM_PSVRDMGR_profile\dbscripts"

『Oracle 用追加 **manageprofiles** コマンド行ユーティリティ・パラメーター』に示すのは、プロファイル管理ツールを通じて表示されない追加の **manageprofiles** コマンド行ユーティリティ・パラメーターで、ユーザー自身の Oracle 用ユーザー名とパスワードの組み合わせを選択するように指定することが可能です。

表 108. Oracle 用追加 **manageprofiles** コマンド行ユーティリティ・パラメーター

パラメーター	デフォルト値
-dbCommonUserId	"common_db_userID" (共通 DB オブジェクトの作成に使用)
-dbCommonPassword	"common_db_pwd"

WebSphere Enterprise Service Bus デプロイメント・マネージャー・プロファイル

以下は、*my_WESBDMGR_profile* と呼ばれる WebSphere Enterprise Service Bus デプロイメント・マネージャー・プロファイルを作成する類似した例です。異なる点は、Oracle データベース製品は共通データベースに使用でき、これはプロファイル作成プロセス中にローカル・ホストで作成および構成されるように設定されることです。

指定される **manageprofiles** コマンド行ユーティリティ・パラメーターは、デプロイメント・マネージャー・プロファイルを作成するために使用する **manageprofiles** コマンド行ユーティリティ・パラメーターと値の例を示したものです。

表 109. 指定される **manageprofiles** コマンド行ユーティリティ・パラメーター

パラメーター	値
-create	N/A
-templatePath	"install_root %profileTemplates%dmgr.esbserver" (完全修飾されていることが必要)
-profileName	"my_WESBDMGR_profile"
-enableAdminSecurity	"true"
-adminPassword	"admin_pwd"
-adminUserName	"admin_id"
-dbType	"ORACLE"
-dbName	"CMNDB"
-dbDelayConfig	"false"
-dbPassword	"db_pwd"
-dbHostName	"localhost"
-dbServerPort	"1521"

デフォルトの **manageprofiles** コマンド行ユーティリティ・パラメーターは、通常では変更する必要のない **manageprofiles** コマンド行ユーティリティ・パラメーターとデフォルト値を示したものです。

表 110. デフォルトの **manageprofiles** コマンド行ユーティリティ・パラメーター

パラメーター	デフォルト値
-profilePath	"install_root%profiles%my_WESBDMGR_profile"
-hostName	"host_name"
-nodeName	"host_nameCellManagernode_number"
-cellName	"host_nameCellcell_number"
 -winserviceCheck	"true"
 -winserviceAccountType	"localsystem"
 -winserviceStartupType	"manual"
 -winserviceUserName	"Administrator"
-dbJDBCClasspath	"install_root%jdbcDrivers%Oracle"
-dbOutputScriptDir	"install_root%profiles%my_WESBDMGR_profile% dbscripts"

『Oracle 用追加 manageprofiles コマンド行ユーティリティ・パラメーター』に示すのは、プロファイル管理ツールを通じて表示されない追加の **manageprofiles** コマンド行ユーティリティ・パラメーターで、ユーザー自身の Oracle 用ユーザー名およびパスワードの組み合わせを選択するように指定することが可能です。

表 111. Oracle 用追加 **manageprofiles** コマンド行ユーティリティ・パラメーター

パラメーター	デフォルト値
-dbCommonUserId	"common_db_userID" (共通 DB オブジェクトの作成に使用)
-dbCommonPassword	"common_db_pwd"

カスタム・プロファイル

以下のコマンド例は、Windows サーバー上で *my_BPM_PSVRCUSTOM_profile* と呼ばれるカスタム・プロファイルを作成します。

この例は、上で作成されたデプロイメント・マネージャー・プロファイルと一緒に動作するように設定されています。

表 112 および 810 ページの表 113 のパラメーターは以下を指定します。

- Oracle データベース製品は共通データベース用に使用されますが、これは既に存在すると想定されています。カスタム・プロファイルの作成では、カスタム・プロファイルの統合先のデプロイメント・マネージャーによって使用されるデータベースを指し示す必要があります。
- 管理セキュリティは、カスタム・プロファイルの統合先となるデプロイメント・マネージャーで使用可能になります。

すべての有効な **manageprofiles** パラメーターのリストについては、参照資料の「*manageprofiles* パラメーター」を参照してください。

指定される **manageprofiles** コマンド行ユーティリティ・パラメーターは、カスタム・プロファイルを作成するために使用する **manageprofiles** コマンド行ユーティリティ・パラメーターと値の例を示したものです。

表 112. 指定される **manageprofiles** コマンド行ユーティリティ・パラメーター

パラメーター	値
-create	N/A
-templatePath	"install_root¥ profileTemplates¥BPM¥ managed.procsvr.adv" (完全修飾されていることが必要)
-profileName	"my_BPM_PSVRCUSTOM_profile"
-dmgrHost	"remote_host"
-dmgrPort	"8879" (-dmgrPort の値を見つけるには、このカスタム・プロファイルに関連付けられたデプロイメント・マネージャーの <i>dmgr_profile_root</i> ¥logs ディレクトリーに移動します。このディレクトリーで AboutThisProfile.txt ファイルを開き、「Management SOAP connector port:」の項目の値を見つけます。)
-dmgrAdminPassword	"admin_pwd"
-dmgrAdminUserName	"admin_id"

表 112. 指定される **manageprofiles** コマンド行ユーティリティー・パラメーター (続き)

パラメーター	値
-federateLaterBPM	"false"
-dbType	"ORACLE"
-dbJDBCClasspath	"install_root¥jdbcDrivers¥Oracle"

要確認: **federateLaterBPM** パラメーターが true に設定されている場合、**dmgrHost**、**dmgrPort**、**dmgrAdminPassword**、および **dmgrAdminUserName** を指定する必要はありません。

デフォルトの **manageprofiles** コマンド行ユーティリティー・パラメーターは、通常では変更する必要のない **manageprofiles** コマンド行ユーティリティー・パラメーターとデフォルト値を示したものです。

表 113. デフォルトの **manageprofiles** コマンド行ユーティリティー・パラメーター

パラメーター	デフォルト値
-profilePath	"install_root¥profiles¥ my_BPM_PSVRCUSTOM_profile"
-hostName	"host_name"
-nodeName	"host_nameNodenode_number"

WebSphere Enterprise Service Bus の例

以下は、**my_WESBCUSTOM_profile** と呼ばれる WebSphere Enterprise Service Bus カスタム・プロファイルを作成する類似した例です。異なる点は、Oracle データベース製品が、カスタム・プロファイルの統合先となるデプロイメント・マネージャー上の共通データベースに使用されることです。この例は、上で作成された WebSphere Enterprise Service Bus デプロイメント・マネージャー・プロファイルと一緒に動作するように設定されています。

指定される **manageprofiles** コマンド行ユーティリティー・パラメーターは、カスタム・プロファイルを作成するために使用する **manageprofiles** コマンド行ユーティリティー・パラメーターと値の例を示したものです。

表 114. 指定される **manageprofiles** コマンド行ユーティリティー・パラメーター

パラメーター	値
-create	N/A
-templatePath	"install_root¥profileTemplates¥ managed.esbserver" (完全修飾されていることが必要)
-profileName	"my_WESBCUSTOM_profile"
-dmgrHost	"remote_host"
-dmgrPort	"8879" (-dmgrPort の値を見つけるには、このカスタム・プロファイルに関連付けられたデプロイメント・マネージャーの dmgr_profile_root¥logs ディレクトリーに移動します。このディレクトリーで AboutThisProfile.txt ファイルを開き、「Management SOAP connector port:」の項目の値を見つけてます。)
-dmgrAdminPassword	"admin_pwd"
-dmgrAdminUserName	"admin_id"
-federateLaterWESB	"false"

表 114. 指定される **manageprofiles** コマンド行ユーティリティー・パラメーター (続き)

パラメーター	値
-dbType	"ORACLE"
-dbJDBCClasspath	"install_root¥jdbcDrivers¥Oracle"

要確認: **federateLaterWESB** パラメーターが true に設定されている場合、**dmgrHost**、**dmgrPort**、**dmgrAdminPassword**、および **dmgrAdminUserName** を指定する必要はありません。

デフォルトの **manageprofiles** コマンド行ユーティリティー・パラメーターは、通常では変更する必要のない **manageprofiles** コマンド行ユーティリティー・パラメーターとデフォルト値を示したものです。

表 115. デフォルトの **manageprofiles** コマンド行ユーティリティー・パラメーター

パラメーター	デフォルト値
-profilePath	"install_root¥profiles¥ my_WESBCUSTOM_profile"
-hostName	"host_name"
-nodeName	"host_nameNodenode_number"

例: **manageprofiles** コマンドでのデータベース設計ファイルの使用:

データベース設計ツールを使用してデータベース設計ファイルを作成すると、生成されるファイルに **manageprofiles** コマンド用の値が含まれます。

-bpmdbDesign パラメーターでデータベース設計ファイルの名前を指定すると、指定する必要がある他のデータベース・パラメーターは、**dbDelayConfig** パラメーターのみになります。

BPM Standard 用のスタンドアロン・サーバーのプロファイル

次の例では、BPM Standard 用に **SAPC** という名前のスタンドアロン・サーバーのプロファイルが作成されます。

```
manageprofiles.bat -create -templatePath C:¥w¥4210¥profileTemplates¥BPM¥default.procctr -profileName
SAPC -profilePath C:¥w¥4210¥profiles¥SAPC -cellName Cell1 -nodeName SN1 -serverName server1
-hostName srikanthc.usca.ibm.com -enableAdminSecurity true -adminUserName bpmadmin
-adminPassword bpmadmin -winserviceCheck false -applyPerfTuningSetting standard
-webFormConfig false -omitAction samplesInstallAndConfig
-createDefaultProfileForMigration false -bpmdbDesign C:¥w¥bpm.standalone.dbDesign
-dbDelayConfig true
```

BPM Advanced 用のスタンドアロン・サーバーのプロファイル

次の例では、BPM Advanced 用に **SAAPC** という名前のスタンドアロン・サーバーのプロファイルが作成されます。

```
manageprofiles.bat -create -templatePath C:¥w¥4210¥profileTemplates¥BPM¥default.procctr.adv
-profileName SAAPC -profilePath C:¥w¥4210¥profiles¥SAAPC -cellName Cell1 -nodeName
SN1 -serverName server1 -hostName srikanthc.usca.ibm.com -enableAdminSecurity true -adminUserName
bpmadmin -adminPassword bpmadmin -winserviceCheck false -applyPerfTuningSetting standard
-webFormConfig false -omitAction samplesInstallAndConfig -createDefaultProfileForMigration
false -bpmdbDesign C:¥w¥bpm.standalone.dbDesign -dbDelayConfig true

manageprofiles.bat -create -templatePath C:¥w¥4210¥profileTemplates¥default.esbserver -profileName
SAESB -profilePath C:¥w¥4210¥profiles¥SAESB -cellName Cell1 -nodeName SN1 -serverName server1
-hostName srikanthc.usca.ibm.com -enableAdminSecurity true -adminUserName bpmadmin -adminPassword
```



```
bpmadmin -winserviceCheck false -applyPerfTuningSetting standard -webFormConfig false
-omitAction samplesInstallAndConfig -createDefaultProfileForMigration false -dbDelayConfig true
-bpmbdbDesign C:¥Projects¥Defects¥714891 ¥webb.standalone.dbDesign
```

プロファイルの拡張

WebSphere Application Server バージョン 7.0 または WebSphere Application Server Network Deployment バージョン 7.0 の既存のプロファイルを拡張して、WebSphere Enterprise Service Bus または IBM Business Process Manager のサポートを追加できます。または、WebSphere Enterprise Service Bus バージョン 7.5.1 プロファイルを拡張して、IBM Business Process Manager のサポートを追加できます。

- トピック『プロファイルの作成または拡張に関する前提条件』で、プロファイルの作成または拡張を行うためのリストを参照してください。
- プロファイルが以下の特性を保有していることを確認してください。
 - IBM Business Process Manager のインストール済み環境を持つシステム上に存在していること。
 - デプロイメント・マネージャーに統合されていないこと。プロファイル管理ツールまたは **manageprofiles** コマンド行ユーティリティを使用して、統合済みのプロファイルを拡張することはできません。
 - 稼働中のサーバーがないこと。

ご使用のシステムに WebSphere Application Server または WebSphere Application Server Network Deployment のプロファイルが既に存在している場合は、それらのプロファイルで定義されている稼働環境で WebSphere ESB または IBM Business Process Manager の機能を使用できるようになります。同様に、WebSphere Enterprise Service Bus のプロファイルが既に存在している場合は、それらで IBM Business Process Manager の機能を使用できるようになります。

制約事項:

- 64 ビット・アーキテクチャー (Linux on zSeries プラットフォームは除く) 上の IBM Business Process Manager インストール済み環境でプロファイルを拡張するときは、プロファイル管理ツールを使用することはできません。他の 64 ビット・アーキテクチャーでプロファイルを拡張するときは、**manageprofiles** コマンド行ユーティリティを使用できます。**manageprofiles** コマンド行ユーティリティの使用については、『manageprofiles コマンド行ユーティリティを使用したプロファイルの拡張』を参照してください。32 ビットの IBM Business Process Manager インストール済み環境を使用している場合は、これらのアーキテクチャー上でもプロファイル管理ツールを使用できます。

このセクションおよびサブセクション内の説明に従って、Process Server および Process Center のプロファイルを拡張します。プロファイルの拡張は、プロファイル管理ツールのグラフィカル・ユーザー・インターフェース (GUI) を使用して対話式に行うことも、**manageprofiles** コマンド行ユーティリティを使用してコマンド行から行うこともできます。

プロファイル管理ツールを使用したプロファイルの拡張:

プロファイル管理ツールを使用して、WebSphere Application Server バージョン 7.0、WebSphere Application Server Network Deployment バージョン 7.0、または WebSphere Enterprise Service Bus バージョン 7.5.1 のプロファイル IBM Business Process Manager バージョン 7.5.1 Process Server プロファイルに拡張します。

以下の前提条件が満たされていることを確認します。

- 拡張後のプロファイル・タイプ (スタンドアロン・サーバー、デプロイメント・マネージャー、またはカスタム) が、拡張前のプロファイルのタイプと同じである。

- 230 ページの『プロファイルの作成または拡張に関する前提条件』で、プロファイルを作成または拡張するための前提条件リストを確認している。
- 拡張する予定のプロファイルに関連付けられたすべてのサーバーをシャットダウンした。
- スタンドアロン・サーバーまたはカスタム・プロファイルを拡張する場合は、デプロイメント・マネージャーに統合されていないことを確認した。
- **Solaris** Solaris オペレーティング・システム上の Motif グラフィカル・ユーザー・インターフェースでプロファイル管理ツールを使用する場合、プロファイル管理ツールのデフォルト・サイズが、ツールのすべてのメッセージおよびボタンを表示するには小さすぎる可能性があります。この問題を修正するには、`install_root/.Xdefaults` ファイルに以下の行を追加します。

```
Eclipse*spacing:0
Eclipse*fontList:-misc-fixed-medium-r-normal-*-10-100-75-75-c-60-iso8859-1
```

行を追加したら、プロファイル管理ツールを開始する前に次のコマンドを実行します。

```
xrdb -load user_home/.Xdefaults
```

1. IBM Business Process Manager プロファイル管理ツールを開始します。

以下のいずれかのコマンドを使用します。

- **Linux** **UNIX** `install_root/bin/ProfileManagement/pmt.sh`
- **Windows** `install_root¥bin¥ProfileManagement¥pmt.bat`

このツールを開始するためのその他の方法については、『プロファイル管理ツールの開始』を参照してください。

「ようこそ」ページが表示されます。

2. 「ようこそ」ページで、「プロファイル管理ツールの起動」ボタンまたは「プロファイル管理ツール」タブをクリックします。

「プロファイル」タブが表示されます。

3. 「プロファイル」タブで、拡張するプロファイルを強調表示し、「拡張」をクリックします。

システムに存在するプロファイルが「プロファイル」タブにリストされます。この手順では、既存のプロファイルを拡張するものと想定しています。

制約事項:

- WebSphere Application Server、WebSphere Application Server Network Deployment、または WebSphere Enterprise Service Bus バージョン 6.2 のプロファイル IBM Business Process Manager バージョン 7.0 のプロファイルに拡張することはできません。
- セル・スタンドアロン・サーバー、管理エージェント、管理ジョブ・マネージャー、またはセキュア・プロキシのプロファイルは拡張できません。
- WebSphere Application Server プロファイルまたは WebSphere Application Server Network Deployment プロファイルを拡張した場合は、IBM Business Process Manager がインストールされている WebSphere Application Server のバージョンから行う必要があります。プロファイルの拡張が可能な場合以外は、「拡張」ボタンは選択できません。

「拡張の選択 (Augment Selection)」ページが別ウィンドウで開きます。

4. 「拡張の選択 (Augment Selection)」ページで、プロファイルに適用する拡張のタイプを選択します。そして、「次へ」をクリックします。

「プロファイル拡張オプション」ページが表示されます。

5. 「プロファイル拡張オプション」ページで、「標準的」または「拡張」プロファイル拡張を実行するように選択し、「次へ」をクリックします。

「標準的」オプションでは、デフォルトの構成設定でプロファイルが拡張されます。

「高度」オプションでは、プロファイルに独自の構成値を指定できます。

制約事項: 以下のいずれかの条件に該当する場合は、プロファイル管理ツールが警告メッセージを表示します。

- 拡張対象として選択したプロファイルに実行中のサーバーがある。サーバーを停止しない限り、プロファイルは拡張できません。あるいは、「戻る」をクリックして、実行中のサーバーを持たない別のプロファイルを選択してください。
 - 拡張対象として選択したプロファイルは統合されている。統合されたプロファイルは拡張できません。「戻る」をクリックして、未統合の別のプロファイルを選択する必要があります。
 - 拡張対象として選択したプロファイルは、選択した製品で既に拡張されている。「戻る」をクリックして、別のプロファイルを拡張対象に選択してください。
6. プロファイル管理ツールの次のページに進む前に、以下のいずれかのトピックに記載されている手順を行って、プロファイルの拡張を構成および完了してください。

選択したプロファイル拡張のタイプ	選択したプロファイル・タイプ (スタンドアロン・サーバー、デプロイメント・マネージャー、またはカスタム) に基づいてプロファイルの拡張を完了するための手順
標準的	Process Server プロファイルの場合: <ul style="list-style-type: none">• 842 ページの『「標準 (Typical)」オプションを使用した Process Server スタンドアロン・プロファイルの拡張』• 870 ページの『「標準 (Typical)」オプションを使用した Process Server デプロイメント・マネージャー・プロファイルの拡張』• 878 ページの『「標準 (Typical)」オプションを使用した Process Server のカスタム・プロファイル (管理対象ノード) の拡張』 Process Center プロファイルの場合: <ul style="list-style-type: none">• 815 ページの『「標準 (Typical)」オプションを使用した Process Center スタンドアロン・プロファイルの拡張』• 835 ページの『「標準」オプションを使用した Process Center のデプロイメント・マネージャー・プロファイルの拡張』• 839 ページの『「標準」オプションを使用した Process Center カスタム・プロファイル (管理対象ノード) の拡張』

選択したプロファイル拡張のタイプ	選択したプロファイル・タイプ (スタンドアロン・サーバー、デプロイメント・マネージャー、またはカスタム) に基づいてプロファイルの拡張を完了するための手順
高度	<p>Process Serverプロファイルの場合:</p> <ul style="list-style-type: none"> 855 ページの『「詳細 (Advanced)」 オプションを使用した Process Server スタンドアロン・プロファイルの拡張』 873 ページの『「詳細 (Advanced)」 オプションを使用した Process Server デプロイメント・マネージャー・プロファイルの拡張』 882 ページの『「詳細 (Advanced)」 オプションを使用した Process Server のカスタム・プロファイル (管理対象ノード) の拡張』 <p>Process Center プロファイルの場合:</p> <ul style="list-style-type: none"> 827 ページの『「詳細 (Advanced)」 オプションを使用した Process Center スタンドアロン・プロファイルの拡張』 837 ページの『「詳細 (Advanced)」 オプションを使用した Process Center デプロイメント・マネージャー・プロファイルの拡張』 840 ページの『「詳細 (Advanced)」 オプションを使用した Process Center カスタム・プロファイル (管理対象ノード) の拡張』

Process Center 用プロファイルの拡張:

「標準」プロファイル拡張オプションまたは「詳細」プロファイル拡張オプションを使用して、Process Center 用のプロファイルを拡張することができます。

「標準 (Typical)」オプションを使用した Process Center スタンドアロン・プロファイルの拡張:

プロファイル管理ツールを使用して、Process Center スタンドアロン・プロファイルを拡張します。

スタンドアロン・プロファイル、Network Deployment プロファイル、およびカスタム・プロファイルの違いなど、プロファイルの概念を理解していること。

「標準プロファイル拡張」オプションと「詳細プロファイル拡張」オプションの違いについて、どのシナリオのもとで一方を他方より優先して使用する必要があるかを含めて理解してください。

- 230 ページの『プロファイルの作成または拡張に関する前提条件』で、プロファイルを作成または拡張するための前提条件リストを確認してください。
- Solaris** Solaris オペレーティング・システム上の Motif グラフィカル・ユーザー・インターフェースでプロファイル管理ツールを使用する場合、プロファイル管理ツールのデフォルト・サイズが、すべてのメッセージおよびボタンを表示するには小さすぎる可能性があります。この問題を修正するには、`install_root/.Xdefaults` ファイルに以下の行を追加します。

```
Eclipse*spacing:0
Eclipse*fontList:-misc-fixed-medium-r-normal-*-10-100-75-75-c-60-iso8859-1
```

行を追加したら、プロファイル管理ツールを開始する前に次のコマンドを実行します。

```
xrdb -load user_home/.Xdefaults
```

このタスク・トピックで説明する手順は、以下の場合に使用します。

- *Process Center* のスタンドアロン・サーバー・プロファイルの拡張

以下のステップは「標準プロファイル拡張」の説明です。

1. プロファイル管理ツールを開始します。

以下のいずれかのコマンドを使用します。

- **Linux** **UNIX** `install_root/bin/ProfileManagement/pmt.sh`
- **Windows** `install_root¥bin¥ProfileManagement¥pmt.bat`

「ようこそ」ページが表示されます。

2. 「ようこそ」ページで、「プロファイル管理ツールの起動 (Launch Profile Management Tool)」をクリック、または「プロファイル管理ツール」タブを選択します。

「プロファイル」タブが表示されます。

「プロファイル」タブには、現在マシン上にあるプロファイルのリストが表示されます。この手順では、*Process Center* の既存のスタンドアロン・プロファイルを拡張するものと想定しています。新しい *Process Center* プロファイルの作成手順については、239 ページの『プロファイル管理ツールを使用した *Process Center* スタンドアロン・プロファイルの作成』を参照してください。

制約事項:

- WebSphere Application Server、WebSphere Application Server Network Deployment、または WebSphere Enterprise Service Bus バージョン 6.2 のプロファイルを IBM Business Process Manager バージョン 7.0 のプロファイルに拡張することはできません。
- セル・スタンドアロン・サーバー、管理エージェント、管理ジョブ・マネージャー、またはセキュア・プロキシのプロファイルは拡張できません。
- WebSphere Application Server プロファイルまたは WebSphere Application Server Network Deployment プロファイルを拡張した場合は、IBM Business Process Manager がインストールされている WebSphere Application Server のバージョンから行う必要があります。プロファイルの拡張が可能な場合以外は、「拡張」ボタンは選択できません。

「拡張の選択 (Augment Selection)」ページが別ウィンドウで開きます。

3. 「拡張の選択 (Augment Selection)」ページで、プロファイルに適用する拡張のタイプを選択します。その後、「次へ」をクリックします。

「プロファイル拡張オプション」ページが表示されます。

「プロファイル拡張オプション」ページで、適用するプロファイル拡張方式を選択します。以下のオプションを使用できます。

- **標準プロファイル拡張**

デフォルトの構成設定を使用してプロファイルを拡張します。

- **詳細プロファイル拡張**

拡張するプロファイルに対して独自の構成値を指定できます。

制約事項: 以下のいずれかの条件に該当する場合は、プロファイル管理ツールが警告メッセージを表示します。

- 拡張対象として選択したプロファイルに実行中のサーバーがある。サーバーを停止しない限り、プロファイルは拡張できません。あるいは、「戻る」をクリックして、実行中のサーバーを持たない別のプロファイルを選択してください。
 - 拡張対象として選択したプロファイルは統合されている。統合されたプロファイルは拡張できません。「戻る」をクリックして、未統合の別のプロファイルを選択する必要があります。
 - 拡張対象として選択したプロファイルは、選択した製品で既に拡張されている。「戻る」をクリックして、別のプロファイルを拡張対象に選択してください。
4. 「管理セキュリティ」ページから、拡張するプロファイルの管理ユーザー ID およびパスワードを再入力します。
 5. 「ビジネス・スペースの構成」ページで、「**ビジネス・スペースの構成**」チェック・ボックスが選択された状態にして、ビジネス・スペースをセットアップします。これは、IBM ビジネス・プロセス管理ポータルフォリオでアプリケーション・ユーザー用に統合されたユーザー・エクスペリエンスです。Business Space 内のヒューマン・タスク管理ウィジェットと連携するように IBM Forms Server を構成する場合は、「**IBM Forms Server の構成**」チェック・ボックスを選択し、IBM Forms Server 変換プログラムおよび IBM Forms Server インストール・ルートの HTTP ロケーションを入力します。その後、「次へ」をクリックします。

WebSphere ESB プロファイルを拡張する場合は、「ビジネス・スペースの構成」ページは表示されません。

6. ビジネス・ルール・マネージャーを構成してインストールするかどうか選択します。

ビジネス・ルール・マネージャーは、ビジネス・アプリケーションの必要に合わせてビジネス・ルール・テンプレートをカスタマイズする Web アプリケーションです。

「次へ」をクリックします。

7. Performance Data Warehouse の構成設定を選択します。

Performance Data Warehouse の機能をこのプロファイル用に構成するには、「**Performance Data Warehouse の構成**」チェック・ボックスを選択します。

8. 設計ファイルを使用してデータベースを構成します。このオプションは拡張パスのみを対象としています。
 - a. 「データベース設計ファイルの使用 (Use a database design file)」を選択します。
 - b. 「参照」をクリックします。
 - c. 設計ファイルの完全修飾パス名を選択します。
 - d. データベース・スクリプトを自動で (プロファイル作成プロセスの一部として) 実行する場合は、「データベース・スクリプトを実行してデータベース表を作成する」を選択します。このチェック・ボックスを選択しない場合、プロファイル作成の完了後に、ユーザー自身またはデータベース管理者がスクリプトを手動で実行できます。

重要: 「データベース・スクリプトを実行してデータベース表を作成する」を選択する場合は、「既存のローカル・データベースまたはリモート・データベースを使用する」を選択しないようにしてください。両方のオプションを選択すると、エラーが発生します。

- e. 「次へ」をクリックします。

設計ファイルを指定することを選択すると、プロファイル管理ツールのデータベース構成パネルはスキップされます。代わりに、データベースの構成を完了するために、設計ファイルの場所がコマンド行に渡されます。データベース構成用の設計ファイルの使用については、922 ページの『データベース設計ツールを使用したデータベース設計ファイルの作成』を参照してください。

9. 「データベース構成 - パート 1」 ページで、以下のアクションを実行します。
 - 「**データベース製品の選択 (Select a database product)**」 ドロップダウン・リストから、プロファイルで使用されるデータベース製品を選択します。
 - 「**新規ローカル・データベースの作成**」 または 「**既存のローカルまたはリモート・データベースの使用 (Use an existing local or remote database)**」 を選択します。

データベース製品として DB2 を選択した場合は、新規データベースの作成を選択できます。DB2 はソフトウェアに組み込まれているため、プロファイル管理ツールにより新規 DB2 データベースが作成されます。

ソフトウェアで使用するデータベース製品が既に存在する場合は、「**既存のローカルまたはリモート・データベースの使用 (Use an existing local or remote database)**」 を選択します。

- 「**Process Server データベース名 (Process Server database name)**」 フィールドにデータベースの名前を入力するか、またはデフォルト値 **BPMDDB** をそのまま使用します。
- 「**Performance Data Warehouse データベース名 (Performance Data Warehouse database name)**」 フィールドにデータベースの名前を入力するか、またはデフォルト値 **PDWDB** をそのまま使用します。
- 「**共通データベース名**」 フィールドで、共通データベースの名前を入力するか、**CMNDB** デフォルト値を受け入れます。
- データベース表の作成に使用される SQL スクリプトが書き込まれるディレクトリーを設定する場合は、「**データベース・スクリプトのデフォルト出力ディレクトリーをオーバーライドする (Override the default output directory for database scripts)**」 チェック・ボックスを選択します。

このチェック・ボックスを選択しない場合、スクリプトはデフォルト・ディレクトリーに出力されます。

- データベース・スクリプトを自動で (プロファイル作成プロセスの一部として) 実行する場合は、「**データベース・スクリプトを実行してデータベースを初期化 (Run database scripts to initialize the databases)**」 チェック・ボックスを選択します。このチェック・ボックスを選択しない場合、プロファイル作成の完了後に、ユーザー自身またはデータベース管理者がスクリプトを手動で実行できます。

10. 「データベース構成 - パート 2」 ページで、データベース構成を指定し、「**次へ**」 をクリックします。

注: データベース・スクリプトを実行しない場合でも、このページを完成させる必要があります。「データベース構成 - パート 2」 ページで選択した値は、前のページの「**データベース・スクリプトの出力ディレクトリー**」 フィールドで指定したディレクトリー内 (別のロケーションを指定しなかった場合は、これらのスクリプトのデフォルト・ディレクトリー内) に格納されたデータベース構成スクリプトに追加されます。

制約事項: DB2 for z/OS V8 または V9、または Oracle を使用している場合は、新規データベースを作成できません。これらの場合は、Process Server/Performance Data Warehouse データベースが存在している必要があります。

次のリストで、使用しているデータベースの名前を示すリンクを選択してください。

- DB2 データベース
 - DB2 for z/OS V8、 V9 および V10
 - Microsoft SQL Server
 - Oracle
- a. DB2 データベースの値を設定します。

以下の表に、DB2 Universal Database をデータベース製品として選択する場合に「データベース構成 (その 2)」ページで入力しておく必要があるフィールドを示します。

表 116. DB2 Database の場合の必須のデータベース構成フィールド

フィールド	必要なアクション
JDBC ドライバー	以下のオプションから選択してください。 <ul style="list-style-type: none"> • DB2 Universal • DB2 DataServer
データベース認証用のユーザー名 (User name for database authentication)	データベースで認証を行うユーザー名を入力してください。
データベース認証用のパスワード	データベースで認証を行うパスワードを入力してください。
パスワードの確認	パスワードを確認します。
JDBC ドライバーのクラスパス・ファイルのディレクトリー・ロケーション (Directory location of JDBC driver classpath files)	JDBC ドライバーのクラスパス・ファイルは製品と一緒にパッケージ化されており、以下のディレクトリーに置かれています。 <ul style="list-style-type: none"> • インストール時に DB2 Express フィーチャーを選択した場合: \${WAS_INSTALL_ROOT}/db2/java • インストール時に DB2 Express フィーチャーを選択しなかった場合: \${WAS_INSTALL_ROOT}/jdbcdrivers/DB2
データベース・サーバーのホスト名 (例えば IP アドレス)	デフォルト値 localhost をそのまま確定するか、データベース・サーバーの正しいホスト名を入力します。
サーバー・ポート	デフォルト値 50000 をそのまま確定するか、サーバーの正しいポート番号を入力します。

- b. DB2 for z/OS V8、V9、および V10 の値を設定します。

以下の表に、DB2 for z/OS V8 および V9 をデータベース製品として選択する場合に「データベース構成 (その 2)」ページで入力しておく必要があるフィールドを示します。これらのデータベースを使用して新規データベースを作成することはできません。Performance Data Warehouse データベースが存在している必要があり、スタンドアロン・サーバー・プロファイルの場合は Process Server データベースも必要です。

表 117. DB2 Universal Database for z/OS の場合の必須のデータベース構成フィールド

フィールド	必要なアクション
データベース認証用のユーザー名 (User name for database authentication)	データベースで認証を行うユーザー名を入力してください。
データベース認証用のパスワード	データベースで認証を行うパスワードを入力してください。
パスワードの確認	パスワードを確認します。

表 117. DB2 Universal Database for z/OS の場合の必須のデータベース構成フィールド (続き)

フィールド	必要なアクション
JDBC ドライバーのクラスパス・ファイルのディレクトリー・ロケーション (Directory location of JDBC driver classpath files)	JDBC ドライバーのクラスパス・ファイルは製品と一緒にパッケージ化されており、ディレクトリー <code>\${WAS_INSTALL_ROOT}/jdbcdrivers/DB2</code> に置かれています。
データベース・サーバーのホスト名 (例えば IP アドレス)	データベース・サーバーのホスト名を入力してください。
サーバー・ポート	デフォルト値 446 をそのまま確定するか、サーバーの正しいポート番号を入力します。
Process Server のスキーマ名 (Process Server Schema name)	Process Server のデータベース・スキーマ名を入力してください。
Performance Server のスキーマ名 (Performance Server Schema name)	Performance Server のデータベース・スキーマ名を入力してください。
接続のロケーション	接続のロケーションを入力してください。
ストレージ・グループ名	ストレージ・グループ名を入力してください。

c. Microsoft SQL Server の値の設定

以下の表に、Microsoft SQL Server をデータベース製品として選択する場合に「データベース構成 (その 2)」ページで入力しておく必要があるフィールドを示します。

表 118. Microsoft SQL Server の場合の必須のデータベース構成フィールド

フィールド	必要なアクション
JDBC ドライバー	以下のオプションから選択してください。 <ul style="list-style-type: none"> • Microsoft SQL Server JDBC 2.0 注: JDBC 3.0 もサポートされています。JDBC 3.0 の場合は、「Microsoft SQL Server JDBC 2.0」を選択してください。 • Microsoft SQL Server JDBC 1.2
共通データベース	共通データベースの場合は、以下のパラメーターの値を入力してください。 <ul style="list-style-type: none"> • ユーザー名 共通データベースのユーザー名を入力してください。 • パスワード 共通データベースで認証を行うパスワードを入力してください。 • パスワードの確認 確認のためにパスワードを再入力してください。

表 118. Microsoft SQL Server の場合の必須のデータベース構成フィールド (続き)

フィールド	必要なアクション
Process Server データベース	<p>Process Server データベースの場合は、以下のパラメーターの値を入力してください。</p> <ul style="list-style-type: none"> • ユーザー名 <p>Process Server データベースのユーザー名を入力してください。</p> <ul style="list-style-type: none"> • パスワード <p>Process Server データベースで認証を行うパスワードを入力してください。</p> <ul style="list-style-type: none"> • パスワードの確認 <p>確認のためにパスワードを再入力してください。</p>
Performance Data Warehouse データベース	<p>Performance Data Warehouse データベースの場合は、以下のパラメーターの値を入力してください。</p> <ul style="list-style-type: none"> • ユーザー名 <p>Performance Data Warehouse データベースのユーザー名を入力してください。</p> <ul style="list-style-type: none"> • パスワード <p>Performance Data Warehouse データベースで認証を行うパスワードを入力してください。</p> <ul style="list-style-type: none"> • パスワードの確認 <p>確認のためにパスワードを再入力してください。</p>
データベース・サーバーのホスト名 (例えば IP アドレス)	デフォルト値 localhost をそのまま確定するか、データベース・サーバーの正しいホスト名を入力します。
サーバー・ポート	デフォルト値 1433 をそのまま確定するか、サーバーの正しいポート番号を入力します。
JDBC ドライバーのクラスパス・ファイルのディレクトリー・ロケーション (Directory location of JDBC driver classpath files)	<p>JDBC 2.0 ドライバーのクラスパス・ファイル (sqljdbc4.jar) は製品と一緒にパッケージ化されており、ディレクトリー</p> <p><code>\${WAS_INSTALL_ROOT}¥jdbcdrivers¥SQLServer</code> に置かれています。</p>

「次へ」をクリックして、「データベース構成 (その 3)」ページに進みます。

表 119. Microsoft SQL Server の場合の必須のデータベース構成フィールド

フィールド	必要なアクション
Common Event Infrastructure バス・メッセージング・エンジン (Common Event Infrastructure bus messaging engine)	<p>Common Event Infrastructure バス・メッセージング・エンジンの場合は、以下のパラメーターの値を入力してください。</p> <ul style="list-style-type: none"> • ユーザー名 <p>Common Event Infrastructure バス・メッセージング・エンジンのユーザー名を入力してください。</p> <ul style="list-style-type: none"> • パスワード <p>Common Event Infrastructure バス・メッセージング・エンジンで認証を行うパスワードを入力してください。</p> <ul style="list-style-type: none"> • パスワードの確認 <p>確認のためにパスワードを再入力してください。</p>
SCA アプリケーション・バス・メッセージング・エンジン	<p>SCA アプリケーション・バス・メッセージング・エンジンの場合は、以下のパラメーターの値を入力してください。</p> <ul style="list-style-type: none"> • ユーザー名 <p>SCA アプリケーション・バス・メッセージング・エンジンのユーザー名を入力してください。</p> <ul style="list-style-type: none"> • パスワード <p>SCA アプリケーション・バス・メッセージング・エンジンで認証を行うパスワードを入力してください。</p> <ul style="list-style-type: none"> • パスワードの確認 <p>確認のためにパスワードを再入力してください。</p>
SCA システム・バス・メッセージング・エンジン	<p>SCA システム・バス・メッセージング・エンジンの場合は、以下のパラメーターの値を入力してください。</p> <ul style="list-style-type: none"> • ユーザー名 <p>SCA システム・バス・メッセージング・エンジンのユーザー名を入力してください。</p> <ul style="list-style-type: none"> • パスワード <p>SCA システム・バス・メッセージング・エンジンで認証を行うパスワードを入力してください。</p> <ul style="list-style-type: none"> • パスワードの確認 <p>確認のためにパスワードを再入力してください。</p>

表 119. Microsoft SQL Server の場合の必須のデータベース構成フィールド (続き)

フィールド	必要なアクション
Process Server バス・メッセージング・エンジン (Process Server bus messaging engine)	Process Server バス・メッセージング・エンジンの場合は、以下のパラメーターの値を入力してください。 <ul style="list-style-type: none"> • ユーザー名 <p>Process Server バス・メッセージング・エンジンのユーザー名を入力してください。</p> • パスワード <p>Process Server バス・メッセージング・エンジンで認証を行うパスワードを入力してください。</p> • パスワードの確認 <p>確認のためにパスワードを再入力してください。</p>
Performance Data Warehouse バス・メッセージング・エンジン (Performance Data Warehouse bus messaging engine)	Performance Data Warehouse バス・メッセージング・エンジンの場合は、以下のパラメーターの値を入力してください。 <ul style="list-style-type: none"> • ユーザー名 <p>Performance Data Warehouse バス・メッセージング・エンジンのユーザー名を入力してください。</p> • パスワード <p>Performance Data Warehouse バス・メッセージング・エンジンで認証を行うパスワードを入力してください。</p> • パスワードの確認 <p>確認のためにパスワードを再入力してください。</p>

d. Oracle データベースの値の設定

以下の表に、Oracle をデータベース製品として選択する場合に「データベース構成 (その 2)」ページで入力しておく必要があるフィールドを示します。このデータベースを使用して新規データベースを作成することはできません。

重要: プロファイルを作成する前に、SYSDBA 特権のあるユーザー ID を取得している必要があります。

表 120. Oracle の場合の必須のデータベース構成フィールド

フィールド	必要なアクション
共通データベース	<p>共通データベースの場合は、以下のパラメーターの値を入力してください。</p> <ul style="list-style-type: none"> • ユーザー名 <p>共通データベースのユーザー名を入力してください。</p> <ul style="list-style-type: none"> • パスワード <p>共通データベースで認証を行うパスワードを入力してください。</p> <ul style="list-style-type: none"> • パスワードの確認 <p>確認のためにパスワードを再入力してください。</p>
Process Server データベース	<p>Process Server データベースの場合は、以下のパラメーターの値を入力してください。</p> <ul style="list-style-type: none"> • ユーザー名 <p>Process Server データベースのユーザー名を入力してください。</p> <ul style="list-style-type: none"> • パスワード <p>Process Server データベースで認証を行うパスワードを入力してください。</p> <ul style="list-style-type: none"> • パスワードの確認 <p>確認のためにパスワードを再入力してください。</p> <p>注: Process Server データベース・ユーザー名および Performance Data Warehouse データベース・ユーザー名に同じ名前を指定することはできません。</p>
Performance Data Warehouse データベース	<p>Performance Data Warehouse データベースの場合は、以下のパラメーターの値を入力してください。</p> <ul style="list-style-type: none"> • ユーザー名 <p>Performance Data Warehouse データベースのユーザー名を入力してください。</p> <ul style="list-style-type: none"> • パスワード <p>Performance Data Warehouse データベースで認証を行うパスワードを入力してください。</p> <ul style="list-style-type: none"> • パスワードの確認 <p>確認のためにパスワードを再入力してください。</p> <p>注: Performance Data Warehouse データベース・ユーザー名および Process Server データベース・ユーザー名に同じ名前を指定することはできません。</p>
データベース・サーバーのホスト名 (例えば IP アドレス)	<p>デフォルト値 localhost をそのまま確定するか、データベース・サーバーの正しいホスト名を入力します。</p>

表 120. Oracle の場合の必須のデータベース構成フィールド (続き)

フィールド	必要なアクション
サーバー・ポート	デフォルト値 1521 をそのまま確定するか、サーバーの正しいポート番号を入力します。
JDBC ドライバーのクラスパス・ファイルのディレクトリー・ロケーション (Directory location of JDBC driver classpath files)	JDBC 2.0 ドライバーのクラスパス・ファイルは、製品と一緒にパッケージ化されており、ディレクトリー <code>\${WAS_INSTALL_ROOT}¥jdbcdrivers¥Oracle</code> に置かれています。

「次へ」をクリックして、「データベース構成 (その 3)」ページに進みます。

表 121. Oracle の場合の必須のデータベース構成フィールド

フィールド	必要なアクション
Common Event Infrastructure バス・メッセージング・エンジン (Common Event Infrastructure bus messaging engine)	<p>Common Event Infrastructure バス・メッセージング・エンジンの場合は、以下のパラメーターの値を入力してください。</p> <ul style="list-style-type: none"> • ユーザー名 Common Event Infrastructure バス・メッセージング・エンジンのユーザー名を入力してください。 • パスワード Common Event Infrastructure バス・メッセージング・エンジンで認証を行うパスワードを入力してください。 • パスワードの確認 確認のためにパスワードを再入力してください。
SCA アプリケーション・バス・メッセージング・エンジン	<p>SCA アプリケーション・バス・メッセージング・エンジンの場合は、以下のパラメーターの値を入力してください。</p> <ul style="list-style-type: none"> • ユーザー名 SCA アプリケーション・バス・メッセージング・エンジンのユーザー名を入力してください。 • パスワード SCA アプリケーション・バス・メッセージング・エンジンで認証を行うパスワードを入力してください。 • パスワードの確認 確認のためにパスワードを再入力してください。

表 121. Oracle の場合の必須のデータベース構成フィールド (続き)

フィールド	必要なアクション
SCA システム・バス・メッセージング・エンジン	<p>SCA システム・バス・メッセージング・エンジンの場合は、以下のパラメーターの値を入力してください。</p> <ul style="list-style-type: none"> • ユーザー名 <p>SCA システム・バス・メッセージング・エンジンのユーザー名を入力してください。</p> <ul style="list-style-type: none"> • パスワード <p>SCA システム・バス・メッセージング・エンジンで認証を行うパスワードを入力してください。</p> <ul style="list-style-type: none"> • パスワードの確認 <p>確認のためにパスワードを再入力してください。</p>
Process Server バス・メッセージング・エンジン (Process Server bus messaging engine)	<p>Process Server バス・メッセージング・エンジンの場合は、以下のパラメーターの値を入力してください。</p> <ul style="list-style-type: none"> • ユーザー名 <p>Process Server バス・メッセージング・エンジンのユーザー名を入力してください。</p> <ul style="list-style-type: none"> • パスワード <p>Process Server バス・メッセージング・エンジンで認証を行うパスワードを入力してください。</p> <ul style="list-style-type: none"> • パスワードの確認 <p>確認のためにパスワードを再入力してください。</p>
Performance Data Warehouse バス・メッセージング・エンジン (Performance Data Warehouse bus messaging engine)	<p>Performance Data Warehouse バス・メッセージング・エンジンの場合は、以下のパラメーターの値を入力してください。</p> <ul style="list-style-type: none"> • ユーザー名 <p>Performance Data Warehouse バス・メッセージング・エンジンのユーザー名を入力してください。</p> <ul style="list-style-type: none"> • パスワード <p>Performance Data Warehouse バス・メッセージング・エンジンで認証を行うパスワードを入力してください。</p> <ul style="list-style-type: none"> • パスワードの確認 <p>確認のためにパスワードを再入力してください。</p>

11. 「プロファイル拡張の要約」ページで、「**拡張**」をクリックしてプロファイルを拡張するか、「**戻る**」をクリックしてプロファイルの特性を変更します。

「プロファイル構成の進行状況 (Profile Configuration Progress)」ウィンドウに構成の進行状況が表示されます。

プロファイルの拡張が完了すると、「プロファイル拡張の完了」ページに「**プロファイル管理ツール**により、プロファイルが正常に拡張されました。」というメッセージが表示されます。

重要: プロファイルの拡張中にエラーが検出された場合、成功メッセージの代わりに他のメッセージが表示されます。それは、以下のようなメッセージです。

- 「**プロファイル管理ツールでプロファイルが拡張されましたが、エラーが発生しました**」: プロファイルの拡張が完了したが、エラーが生成されたことを示します。
- 「**プロファイル管理ツールでプロファイルを拡張できません**」: プロファイルの拡張が完全に失敗したことを示します。

「プロファイル完了 (Profile complete)」ページには、問題のトラブルシューティングを行うために参照するログ・ファイルが示されます。

「詳細 (Advanced)」オプションを使用した *Process Center* スタンドアロン・プロファイルの拡張:

プロファイル管理ツールのグラフィカル・ユーザー・インターフェース (GUI) 上の「**詳細プロファイル拡張**」オプションを使用して、*Process Center* スタンドアロン・プロファイルを拡張します。「**詳細**」オプションを選択すると、カスタマイズした構成設定でプロファイルが拡張されます。

スタンドアロン・プロファイル、*Network Deployment* プロファイル、およびカスタム・プロファイルの違いなど、プロファイルの概念を理解していること。

「**標準プロファイル拡張**」オプションと「**詳細プロファイル拡張**」オプションの違いについて、どのシナリオのもとで一方を他方より優先して使用する必要があるかを含めて理解してください。

- 230 ページの『プロファイルの作成または拡張に関する前提条件』で、プロファイルを作成または拡張するための前提条件リストを確認してください。

- **Solaris** *Solaris* オペレーティング・システム上の *Motif* グラフィカル・ユーザー・インターフェースでプロファイル管理ツールを使用する場合、プロファイル管理ツールのデフォルト・サイズが、すべてのメッセージおよびボタンを表示するには小さすぎる可能性があります。この問題を修正するには、`install_root/.Xdefaults` ファイルに以下の行を追加します。

```
Eclipse*spacing:0  
Eclipse*fontList:-misc-fixed-medium-r-normal-*-10-100-75-75-c-60-iso8859-1
```

行を追加したら、プロファイル管理ツールを開始する前に次のコマンドを実行します。

```
xrdb -load user_home/.Xdefaults
```

IBM BPM Advanced、*Process Center* スタンドアロン・プロファイル は、それ独自のコンソールから管理する定義済みサーバー環境で、他のすべての *Process Center* から独立して機能します。

このタスクは、プロファイル管理ツールの「**詳細プロファイル拡張**」オプションを使用して、スタンドアロン・プロファイルを拡張する方法を説明しています。

「**拡張**」オプションを選択することで、以下のタスクを実行できます。

- 共通データベースを構成します。
- 拡張するプロファイルでセキュリティが有効になっている場合は、*Business Space* を構成します。
- ビジネス・ルール・マネージャーを構成します。
- 拡張するプロファイルでセキュリティが有効になっている場合は、*Business Process Choreographer* サンプル構成を作成します。
- データベース設計ファイルを使用してデータベースを構成します。

重要: このトピックの手順には、「**拡張**」オプションを使用してスタンドアロン *Process Server* プロファイルを拡張する際に表示されることがある、プロファイル管理ツールのすべてのページが含まれています。た

だし、拡張するプロファイルに構成済みコンポーネント (共通データベース、Business Space powered by WebSphere など) がすでに含まれている場合は、プロファイル管理ツール内のこれらのコンポーネント用のページは表示されません。

812 ページの『プロファイル管理ツールを使用したプロファイルの拡張』の手順を使用してプロファイルの拡張を開始し、中止した手順から以下のステップを再開してください。

要確認: すべての IBM Business Process Manager プロファイルで管理セキュリティが有効になっています。

1. プロファイル管理ツールを使用して、拡張する Process Center プロファイルを選択し、「**拡張 (Augment)**」をクリックします。「拡張の選択」ページが開きます。
2. プロファイルに適用する拡張のタイプを選択し、「次へ」をクリックします。「プロファイル拡張オプション」ページが開きます。
3. 「**詳細プロファイル拡張**」を選択して、「次へ」をクリックします。「管理セキュリティ」ページが開きます。
4. 「管理セキュリティ」ページから、拡張するプロファイルの管理ユーザー ID およびパスワードを再入力します。

拡張するプロファイルで WebSphere(r) Application Server サンプル・アプリケーションがデプロイされている場合は、実行するアカウントが必要です。アカウントのパスワードを指定してください。アカウントのユーザー名は変更できません。

5. 「ビジネス・スペースの構成」ページで、「**ビジネス・スペースの構成**」チェック・ボックスが選択された状態にして、ビジネス・スペースをセットアップします。これは、IBM ビジネス・プロセス管理ポータルフォリオでアプリケーション・ユーザー用に統合されたユーザー・エクスペリエンスです。

Business Space 内のヒューマン・タスク管理ウィジェットと連携するように IBM Forms Server を構成する場合は、「**IBM Forms Server の構成**」チェック・ボックスを選択し、IBM Forms Server 変換プログラムおよび IBM Forms Server インストール・ルートの HTTP ロケーションを入力します。その後、「次へ」をクリックします。

6. ビジネス・ルール・マネージャーを構成してインストールするかどうか選択します。ビジネス・ルール・マネージャーは、ビジネス・アプリケーションの必要に合わせてビジネス・ルール・テンプレートをカスタマイズする Web アプリケーションです。
7. システムで複数のサーバーを定義している場合は、サーバーを選択します。「Application Scheduler の構成」ページが開きます。「Application Scheduler の構成」ページの「**プロファイルに複数のサーバーが定義されているときの詳細プロファイル拡張の場合: (For Advanced profile augmentation when profile has multiple servers defined:)**」セクションで、ドロップダウン・リストからサーバーを選択し、「次へ」をクリックします。

「詳細」オプションを使用した Process Center スタンドアロン・プロファイルを拡張するための初期手順が完了しました。

以下のシステム・セットアップに応じて、拡張プロセスを完了させます。

- システム上でデータベースが定義されていない。
- システム上でデータベースが定義されている。

関連タスク:

『データベースが定義されている場合の「詳細」オプションを使用した Process Center スタンドアロン・プロファイルの拡張』

プロファイル管理ツールのグラフィカル・ユーザー・インターフェース (GUI) にある「**詳細プロファイル拡張**」オプションを使用して、カスタマイズした構成設定で Process Center スタンドアロン・プロファイルを拡張します。システムにセットアップ済みのデータベースが既にあるときに、スタンドアロン・プロファイルを拡張することができます。

831 ページの『データベースが定義されていない場合の拡張オプションを使用した Process Center スタンドアロン・プロファイルの拡張』

プロファイル管理ツールのグラフィカル・ユーザー・インターフェース (GUI) にある「**詳細プロファイル拡張**」オプションを使用して、カスタマイズした構成設定で Process Center スタンドアロン・プロファイルを拡張します。システムにセットアップ済みのデータベースがまだないときに、スタンドアロン・プロファイルを拡張することができます。

938 ページの『データベースへのシステム情報のロード』

IBM Business Process Manager サーバーの始動または使用を試みる前に、**bootstrapProcessServerData** コマンドを実行する必要があります。

関連資料:

893 ページの『プロファイル管理ツール構成のデータベース構成フィールド』

スタンドアロン環境のプロファイルを作成するには、データベース情報が必要です。必要な情報は、使用するデータベースによって異なります。

データベースが定義されている場合の「詳細」オプションを使用した Process Center スタンドアロン・プロファイルの拡張:

プロファイル管理ツールのグラフィカル・ユーザー・インターフェース (GUI) にある「**詳細プロファイル拡張**」オプションを使用して、カスタマイズした構成設定で Process Center スタンドアロン・プロファイルを拡張します。システムにセットアップ済みのデータベースが既にあるときに、スタンドアロン・プロファイルを拡張することができます。

827 ページの『「**詳細 (Advanced)**」オプションを使用した Process Center スタンドアロン・プロファイルの拡張』の手順を使用して詳細プロファイル拡張を開始し、このタスクのステップから再開します。

このタスクでは、システムでデータベースが既に定義されている場合に、プロファイル管理ツールのユーザー・インターフェースにある「**詳細プロファイル拡張**」オプションを使用してスタンドアロン・プロファイルを拡張する作業について説明します。

要確認: すべての IBM Business Process Manager プロファイルで管理セキュリティが有効になっています。

1. 「プロファイル拡張の要約」ページで、「**拡張**」をクリックしてプロファイルを拡張するか、「**戻る**」をクリックしてプロファイルの特性を変更します。

「プロファイル構成の進行状況 (Profile Configuration Progress)」ウィンドウに構成の進行状況が表示されます。

プロファイルの拡張が完了すると、「プロファイル拡張の完了」ページに「**プロファイル管理ツールにより、プロファイルが正常に拡張されました。**」というメッセージが表示されます。

重要: プロファイルの拡張中にエラーが検出された場合、成功メッセージの代わりに他のメッセージが表示されます。それは、以下のようなメッセージです。

プロファイル管理ツールでプロファイルが拡張されましたが、エラーが発生しました
プロファイル拡張が完了しましたが、エラーが発生したことを示します。

プロファイル管理ツールでプロファイルを拡張できません
プロファイル拡張が完全に失敗したことを示します。

「プロファイル完了 (Profile Complete)」ページには、問題をトラブルシューティングする際に参照するログ・ファイルが示されます。

2. 手動で実行するスクリプトを作成して実際のデータベース構成を先送りするように選択したかどうかに応じて、以下のタスクのいずれかを実行し、Process Center スタンドアロン・プロファイルの構成を完了します。
 - プロファイル管理ツールを使用した共通データベース、 Performance Data Warehouse データベースおよび Process Center データベースの構成が完了したら、以下のステップを実行します。
 - a. 「ファースト・ステップ・コンソールを起動する」オプションが選択されていることを確認します。
 - b. 「終了」をクリックして終了します。
 - c. 別のウィンドウで開いている「プロファイル」ページを閉じます。
 - d. ファースト・ステップ・コンソールを使用して、サーバーを始動します。
 - Common Event Infrastructure コンポーネントを使用する場合は、そのデータベースを手動で作成する必要があります。『Common Event Infrastructure (CEI) データベースの構成』を参照してください。
 - 手動で実行するスクリプトを生成して実際のデータベース構成を延期することを選択した場合は、以下のステップを実行します。
 - a. 「ファースト・ステップ・コンソールを起動する」の横にあるチェック・ボックスをクリアします。
 - b. 「終了」をクリックして、プロファイル管理ツールを閉じます。
 - c. 別のウィンドウで開いている「プロファイル」ページを閉じます。
 - d. サイトの標準的なデータベース定義ツールと手順を使用して、プロファイル管理ツールにより生成されたスクリプトを編集して実行し、**CMNDB** データベースを作成するか、または作成および構成します。
 - e. また、新規のデータベースまたは既存のデータベース内の新規テーブルを手動で作成することについて説明しているトピックも参照してください。
 - Common Event Infrastructure データベース: 『イベント・データベースの構成』とそのサブトピック。
 - 共通データベース: 『プロファイルの作成後または拡張後の共通データベースとテーブルの作成』。
 - f. データベースの構成時に、『』『ファースト・ステップ・コンソールの開始またはファースト・ステップ・コンソールの開始』で説明されているとおりに、プロファイルに関連付けられた「ファースト・ステップ・コンソール」を開始します。

WebSphere Application Server または WebSphere Application Server Network Deployment プロファイルが IBM Business Process Manager プロファイルに拡張されました。

ファースト・ステップ・コンソールから「サーバーの起動」を選択してサーバーの作動をチェックします。出力ウィンドウが開きます。次のようなメッセージが表示される場合、サーバーは正常に作動しています。

```
ADMU3000I: e-business のサーバー server1 がオープンしました。  
プロセス ID は 3348 です  
(Server server1 open for e-business; process id is 3348)
```


ファースト・ステップ・コンソールからインストール検査テスト (IVT) を実行するか、**wbi_ivt** コマンド行ユーティリティを実行することで、サーバーの動作を確認することもできます。このテストは、デプロイメント・マネージャーまたはスタンドアロン・サーバーのインストール環境が正常に動作していることが確認するものです。

関連タスク:

827 ページの『「**詳細 (Advanced)**」 オプションを使用した Process Center スタンドアロン・プロファイルの拡張』

プロファイル管理ツールのグラフィカル・ユーザー・インターフェース (GUI) 上の「**詳細プロファイル拡張**」オプションを使用して、Process Center スタンドアロン・プロファイルを拡張します。「**詳細**」オプションを選択すると、カスタマイズした構成設定でプロファイルが拡張されます。

データベースが定義されていない場合の拡張オプションを使用した Process Center スタンドアロン・プロファイルの拡張:

プロファイル管理ツールのグラフィカル・ユーザー・インターフェース (GUI) にある「**詳細プロファイル拡張**」オプションを使用して、カスタマイズした構成設定で Process Center スタンドアロン・プロファイルを拡張します。システムにセットアップ済みのデータベースがまだないときに、スタンドアロン・プロファイルを拡張することができます。

827 ページの『「**詳細 (Advanced)**」 オプションを使用した Process Center スタンドアロン・プロファイルの拡張』の手順を使用して詳細プロファイル拡張を開始し、このタスクのステップから再開します。

このタスクでは、システムでデータベースが定義されておらず、かつ定義する必要がある場合に、プロファイル管理ツールのユーザー・インターフェースにある「**詳細プロファイル拡張**」オプションを使用してスタンドアロン・プロファイルを拡張する作業について説明します。「**データベース設計**」ページが表示されます。

要確認: すべての IBM Business Process Manager プロファイルで管理セキュリティが有効になっています。

1. オプション: 設計ファイルを使用してデータベースを構成します。このオプションは、「**拡張**」オプションを使用して作成したスタンドアロン・サーバーのプロファイルとデプロイメント・マネージャーのプロファイルの両方で使用できます。

注: IBM Business Process Manager Express 構成では、データベース設計ファイルの使用は推奨されません。

- a. 「**データベースの構成にはデータベース設計ファイルを使用する**」を選択します。
- b. 「**参照**」をクリックします。
- c. 設計ファイルの完全修飾パス名を選択します。
- d. 「**次へ**」をクリックします。

設計ファイルの指定を選択する場合、Profile Management Tool のデータベース構成パネルはスキップされます。代わりに、データベース構成を完了するために、設計ファイルの場所がコマンド行に渡されます。データベース構成用の設計ファイルの使用について詳しくは、922 ページの『データベース設計ツールを使用したデータベース設計ファイルの作成』を参照してください。

2. 「Process Center 構成」ページで、以下のパラメーターの値を設定します。

環境名

構成する環境の名前を指定します。

環境タイプの選択

環境タイプは、Process Center の使用方法を示します。以下のいずれかのオプションを選択します。

実動 実動キャパシティーでサーバーを使用する場合は、「**実動**」を選択します。

ステージング

サーバーを実動前サーバーとして使用されるステージング・プラットフォームにする場合は、「**ステージング**」を選択します。

テスト

サーバーをテスト環境として使用する場合は、「**テスト**」を選択します。

例えば、負荷テストはテスト・サーバーで実行し、変更を実稼働環境に反映させるまでの間、それらの変更をホストするための一時的なロケーションとしてステージング環境タイプを使用します。構成する Process Center が、コンテンツおよび新機能のレビューを目的としてアクセスおよび使用される場合は、「**環境タイプ**」として「**ステージング**」を指定することが考えられます。

Process Center の構成情報

Process Center の接続先となる Process Server を構成します。以下のフィールドにパラメーターを設定します。

サーバーをオフラインで使用する

構成するサーバーがオフライン・サーバーであるかどうかを示します。オフライン・サーバーは、Process Center に接続されていない Process Server です。オフライン・サーバーは、Process App の Snapshot をデプロイするときにも使用できます。ただし、Process App をオフラインの Process Server にデプロイする方法は、Process App をオンラインの Process Server にデプロイする方法とは異なります。

プロトコル

Process Server への接続プロトコルとして **http://** または **https://** を選択します。

ホスト名

この Process Center が Process Server と通信するために必要なホストまたは仮想ホストを入力します。完全修飾ホスト名を使用します。

Process Center と Process Server サービスとの間にロード・バランサーまたはプロキシ・サーバーが存在する環境の場合、ここでの設定内容が Process Server にアクセスするための URL と一致していることを確認してください。

ポート Process Server のポート番号を入力します。Process Server と Process Center との間にロード・バランサーまたはプロキシ・サーバーが存在する環境の場合、ここでの設定内容が Process Server にアクセスするための URL と一致していることを確認してください。

「**接続のテスト**」をクリックすることによって、Process Server への接続をテストできます。

「**次へ**」をクリックします。

3. 「データベース構成 - パート 1」ページで、以下のアクションを実行します。
 - 「**データベース製品の選択 (Select a database product)**」ドロップダウン・リストから、プロファイルで使用されるデータベース製品を選択します。
 - 「**新規ローカル・データベースの作成**」または「**既存のローカルまたはリモート・データベースの使用 (Use an existing local or remote database)**」を選択します。

データベース製品として DB2 を選択した場合は、新規データベースの作成を選択できます。DB2 はソフトウェアに組み込まれているため、プロファイル管理ツールにより新規 DB2 データベースが作成されます。

ソフトウェアで使用するデータベース製品が既に存在する場合は、「既存のローカルまたはリモート・データベースの使用 (Use an existing local or remote database)」を選択します。

- 「**Process Server データベース名 (Process Server database name)**」フィールドにデータベースの名前を入力するか、またはデフォルト値 **BPMDDB** をそのまま使用します。
- 「**Performance Data Warehouse データベース名 (Performance Data Warehouse database name)**」フィールドにデータベースの名前を入力するか、またはデフォルト値 **PDWDB** をそのまま使用します。
- 「**共通データベース名**」フィールドで、共通データベースの名前を入力するか、**CMNDB** デフォルト値を受け入れます。
- データベース表の作成に使用される SQL スクリプトが書き込まれるディレクトリーを設定する場合は、「**データベース・スクリプトのデフォルト出力ディレクトリーをオーバーライドする (Override the default output directory for database scripts)**」チェック・ボックスを選択します。

このチェック・ボックスを選択しない場合、スクリプトはデフォルト・ディレクトリーに出力されます。

- データベース・スクリプトを自動で (プロファイル作成プロセスの一部として) 実行する場合は、「**データベース・スクリプトを実行してデータベースを初期化 (Run database scripts to initialize the databases)**」チェック・ボックスを選択します。このチェック・ボックスを選択しない場合、プロファイル作成の完了後に、ユーザー自身またはデータベース管理者がスクリプトを手動で実行できます。
4. 「データベース構成 - パート 2」ページで、選択したデータベースの構成を指定します。各必須フィールドについて詳しくは、『プロファイル管理ツール構成のデータベース構成パラメーター』を参照してください。

以下のデータベースのパラメーターを構成できます。

DB2 「データベース構成 - パート 2」ページで DB2 データベースの値を設定した後に、「次へ」をクリックして「プロファイル拡張の要約」ページに進みます。

DB2 Universal Database for z/OS

DB2 Universal Database for z/OS を使用して新規データベースを作成することはできません。Performance Data Warehouse データベースが存在している必要があり、スタンドアロン・サーバー・プロファイルの場合は Process Server データベースも必要です。「データベース構成 - パート 2」ページで DB2 Universal Database for z/OS の値を設定した後に、「次へ」をクリックして「プロファイル拡張の要約」ページに進みます。

Microsoft SQL Server

「データベース構成 - パート 2」ページで Microsoft SQL Server データベースの値を設定した後に、「次へ」をクリックして「データベース構成 - パート 3」ページに進みます。「データベース構成 - パート 3」ページでの構成が完了したら、「次へ」をクリックして「プロファイル拡張の要約」ページに進みます。

Oracle このデータベースを使用して新規データベースを作成することはできません。

重要: プロファイルを作成する前に、SYSDBA 特権のあるユーザー ID を取得している必要があります。

「データベース構成 - パート 2」ページで Oracle データベースの値を設定した後に、「次へ」をクリックして「データベース構成 - パート 3」ページに進みます。「データベース構成 - パート 3」ページでの構成が完了したら、「次へ」をクリックして「プロファイル拡張の要約」ページに進みます。

5. 「プロファイル拡張の要約」ページで、「**拡張**」をクリックしてプロファイルを拡張するか、「**戻る**」をクリックしてプロファイルの特性を変更します。

「プロファイル構成の進行状況 (Profile Configuration Progress)」ウィンドウに構成の進行状況が表示されます。

プロファイルの拡張が完了すると、「プロファイル拡張の完了」ページに「**プロファイル管理ツールにより、プロファイルが正常に拡張されました。**」というメッセージが表示されます。

重要: プロファイルの拡張中にエラーが検出された場合、成功メッセージの代わりに他のメッセージが表示されます。それは、以下のようなメッセージです。

プロファイル管理ツールでプロファイルが拡張されましたが、エラーが発生しました

プロファイル拡張が完了しましたが、エラーが発生したことを示します。

プロファイル管理ツールでプロファイルを拡張できません

プロファイル拡張が完全に失敗したことを示します。

「プロファイル完了 (Profile Complete)」ページには、問題をトラブルシューティングする際に参照するログ・ファイルが示されます。

6. 手動で実行するスクリプトを作成して実際のデータベース構成を先送りするように選択したかどうかに応じて、以下のタスクのいずれかを実行し、Process Center スタンドアロン・プロファイルの構成を完了します。
 - プロファイル管理ツールを使用した共通データベース、Performance Data Warehouse データベースおよび Process Center データベースの構成が完了したら、以下のステップを実行します。
 - a. 「**ファースト・ステップ・コンソールの起動**」オプションが選択されていることを確認します。
 - b. 「**終了**」をクリックして終了します。
 - c. 別のウィンドウで開いている「プロファイル」ページを閉じます。
 - d. ファースト・ステップ・コンソールを使用して、サーバーを始動します。
 - Common Event Infrastructure コンポーネントを使用する場合は、そのデータベースを手動で作成する必要があります。『Common Event Infrastructure (CEI) データベースの構成』を参照してください。
 - 手動で実行するスクリプトを生成して実際のデータベース構成を延期することを選択した場合は、以下のステップを実行します。
 - a. 「**ファースト・ステップ・コンソールを起動する**」チェック・ボックスをクリアします。
 - b. 「**終了**」をクリックして、プロファイル管理ツールを閉じます。
 - c. 別のウィンドウで開いている「プロファイル」ページを閉じます。
 - d. サイトの標準的なデータベース定義ツールと手順を使用して、プロファイル管理ツールにより生成されたスクリプトを編集して実行し、**CMNDB** データベースを作成するか、または作成および構成します。
 - e. 新規データベースを手動で作成する方法、または既存のデータベースで新規表を作成する方法について説明したトピックを参照してください。
 - Common Event Infrastructure データベース: 『イベント・データベースの構成』とそのサブトピック。

- 共通データベース: 『プロファイルの作成後または拡張後の共通データベースとテーブルの作成』。
- f. データベースの構成時に、『』 『ファースト・ステップ・コンソールの開始またはファースト・ステップ・コンソールの開始』で説明されているとおりに、詳細を確認しながら、プロファイルに関連付けられた「ファースト・ステップ・コンソール」を開始します。

WebSphere Application Server または WebSphere Application Server Network Deployment プロファイルが IBM Business Process Manager プロファイルに拡張されました。

ファースト・ステップ・コンソールから「**サーバーの起動**」を選択してサーバーの作動をチェックします。出力ウィンドウが開きます。次のようなメッセージが表示される場合、サーバーは正常に作動しています。

```
ADMU3000I: e-business のサーバー server1 がオープンしました。
プロセス ID は 3348 です
(Server server1 open for e-business; process id is 3348)
```

ファースト・ステップ・コンソールからインストール検査テスト (IVT) を実行するか、**wbi_ivt** コマンド行ユーティリティを実行することで、サーバーの動作を確認することもできます。このテストは、デプロイメント・マネージャーまたはスタンドアロン・サーバーのインストール環境が正常に動作していることが確認するものです。

関連タスク:

827 ページの『「**詳細 (Advanced)**」オプションを使用した Process Center スタンドアロン・プロファイルの拡張』

プロファイル管理ツールのグラフィカル・ユーザー・インターフェース (GUI) 上の「**詳細プロファイル拡張**」オプションを使用して、Process Center スタンドアロン・プロファイルを拡張します。「**詳細**」オプションを選択すると、カスタマイズした構成設定でプロファイルが拡張されます。

「**標準**」オプションを使用した Process Center のデプロイメント・マネージャー・プロファイルの拡張:

プロファイル管理ツールのグラフィカル・ユーザー・インターフェース (GUI) の「**標準プロファイル拡張**」オプションを使用して、Process Center のデプロイメント・マネージャー・プロファイルを拡張し、構成します。「**標準**」オプションを選択すると、デフォルトの構成設定でプロファイルが拡張されます。

スタンドアロン・プロファイル、Network Deployment プロファイル、およびカスタム・プロファイルの違いなど、プロファイルの概念を理解していること。

「**標準プロファイル拡張**」オプションと「**詳細プロファイル拡張**」オプションの違いについて、どのシナリオのもとで一方を他方より優先して使用する必要があるかを含めて理解してください。

- 230 ページの『プロファイルの作成または拡張に関する前提条件』で、プロファイルを作成または拡張するための前提条件リストを確認してください。
- **Solaris** Solaris オペレーティング・システム上の Motif グラフィカル・ユーザー・インターフェースでプロファイル管理ツールを使用する場合、プロファイル管理ツールのデフォルト・サイズが、すべてのメッセージおよびボタンを表示するには小さすぎる可能性があります。この問題を修正するには、`install_root/.Xdefaults` ファイルに以下の行を追加します。

```
Eclipse*spacing:0
Eclipse*fontList:-misc-fixed-medium-r-normal-*-10-100-75-75-c-60-iso8859-1
```

行を追加したら、プロファイル管理ツールを開始する前に次のコマンドを実行します。

```
xrdb -load user_home/.Xdefaults
```

このトピックでは、プロファイル管理ツールを使用してプロファイルを拡張することを前提としています。したがって、プロファイル管理ツールを既に開始しており、Process Center デプロイメント・マネージャー・プロファイルの拡張を選択し、「標準プロファイル拡張」オプションを選択しているものと想定しています。

このタスクでは、「標準 (Typical)」拡張オプションを使用して Process Center のデプロイメント・マネージャー・プロファイルを拡張する手順について説明します。「標準」拡張オプションを使用すると、共通データベース構成が DB2 に設定されます (拡張するプロファイルでまだ構成されていない場合)。

812 ページの『プロファイル管理ツールを使用したプロファイルの拡張』に記載されている手順に従って作業が完了していれば、「管理セキュリティ」ページが表示されます。すべての IBM Business Process Manager プロファイルでセキュリティが有効になっています。

1. 管理セキュリティを有効にする

「管理セキュリティ」ページから、拡張するプロファイルの管理ユーザー ID およびパスワードを再入力します。

拡張するプロファイルで WebSphere(r) Application Server サンプル・アプリケーションがデプロイされている場合は、実行するアカウントが必要です。アカウントのパスワードを指定してください。アカウントのユーザー名は変更できません。

2. 「プロファイル拡張の要約」ページで、「拡張」をクリックしてプロファイルを拡張するか、「戻る」をクリックしてプロファイルの特性を変更します。

「プロファイル構成の進行状況 (Profile Configuration Progress)」ウィンドウに構成の進行状況が表示されます。

プロファイルの拡張が完了すると、「プロファイル拡張の完了」ページに「プロファイル管理ツールにより、プロファイルが正常に拡張されました。」というメッセージが表示されます。

重要: プロファイルの拡張中にエラーが検出された場合、成功メッセージの代わりに他のメッセージが表示されます。それは、以下のようなメッセージです。

- 「プロファイル管理ツールでプロファイルが拡張されましたが、エラーが発生しました」：プロファイルの拡張が完了したが、エラーが生成されたことを示します。
- 「プロファイル管理ツールでプロファイルを拡張できません」：プロファイルの拡張が完全に失敗したことを示します。

「プロファイル完了 (Profile complete)」ページには、問題のトラブルシューティングを行うために参照するログ・ファイルが示されます。

3. 「プロファイル完了 (Profile Complete)」ページで、「ファースト・ステップ・コンソールの起動」が選択されていることを確認し、「終了」をクリックして終了します。また、別のウィンドウで開いている「プロファイル」ページも閉じてください。ファースト・ステップ・コンソールを使用して、サーバーを始動します。

WebSphere Application Server または WebSphere Application Server Network Deployment プロファイルが IBM Business Process Manager プロファイルに拡張されました。

ファースト・ステップ・コンソールから「デプロイメント・マネージャーの開始」を選択して、サーバーの動作を確認します。出力ウィンドウが開きます。次のようなメッセージが表示される場合、デプロイメント・マネージャーは正常に作動しています。

ADMU3000I: サーバー dmgr が e-ビジネス用にオープン。プロセス ID は 3072
(Server dmgr open for e-business; process id is 3072)

デプロイメント環境で、別のデータベースを作成して構成し、カスタム・プロファイルを作成してそれをご使用のデプロイメント・マネージャーに統合し、サーバーを作成し、ワークロード管理機能が必要な場合はクラスターを作成し、さらに、計画したインストール環境に固有のその他のタスクを実行する必要があります。計画した環境では、実行が必要なタスク、およびその実行順序を指示します。

「詳細 (Advanced)」 オプションを使用した *Process Center* デプロイメント・マネージャー・プロファイルの拡張:

プロファイル管理ツールのグラフィカル・ユーザー・インターフェース (GUI) 上の「拡張プロファイル作成」オプションを使用して、*Process Center* 用のデプロイメント・マネージャー・プロファイル。「拡張」オプションを選択すると、カスタマイズした構成設定でプロファイルが拡張されます。

スタンドアロン・プロファイル、*Network Deployment* プロファイル、およびカスタム・プロファイルの違いなど、プロファイルの概念を理解していること。

「標準プロファイル拡張」オプションと「詳細プロファイル拡張」オプションの違いについて、どのシナリオのもとで一方を他方より優先して使用する必要があるかを含めて理解してください。

- 230 ページの『プロファイルの作成または拡張に関する前提条件』で、プロファイルを作成または拡張するための前提条件リストを確認してください。
- **Solaris** Solaris オペレーティング・システム上の Motif グラフィカル・ユーザー・インターフェースでプロファイル管理ツールを使用する場合、プロファイル管理ツールのデフォルト・サイズが、すべてのメッセージおよびボタンを表示するには小さすぎる可能性があります。この問題を修正するには、*install_root/.Xdefaults* ファイルに以下の行を追加します。

```
Eclipse*spacing:0  
Eclipse*fontList:-misc-fixed-medium-r-normal-*-10-100-75-75-c-60-iso8859-1
```

行を追加したら、プロファイル管理ツールを開始する前に次のコマンドを実行します。

```
xrdb -load user_home/.Xdefaults
```

このタスクでは、「詳細 (Advanced)」拡張オプションを使用して *Process Center* のデプロイメント・マネージャー・プロファイルを拡張する手順について説明します。

「拡張」オプションを選択することで、以下のタスクを実行できます。

- 共通データベースを構成します。
- データベース設計ファイルを使用してデータベースを構成します。

重要: このトピックの手順では、「拡張」オプションを使用してデプロイメント・マネージャー・プロファイルを構成するために、プロファイル管理ツールで使用可能なすべてのページの概要を示しています。特定のコンポーネント (共通データベースなど) が、拡張しようとしているプロファイルで既に構成されている場合は、そのコンポーネントの構成ページは表示されません。

1. 「管理セキュリティー」ページから、拡張するプロファイルの管理ユーザー ID およびパスワードを再入力します。

「管理セキュリティー」ページが表示される場合は、拡張中のプロファイルでセキュリティーが有効になっていることを意味します。そのプロファイルの管理ユーザー ID およびパスワードを再入力する必要があります。

2. 「管理セキュリティ」ページから、拡張するプロファイルの管理ユーザー ID およびパスワードを再入力します。

拡張するプロファイルで WebSphere(r) Application Server サンプル・アプリケーションがデプロイされている場合は、実行するアカウントが必要です。アカウントのパスワードを指定してください。アカウントのユーザー名は変更できません。

3. オプション: 設計ファイルを使用してデータベースを構成します。このオプションは、拡張スタンドアロン・サーバーのプロファイルと拡張デプロイメント・マネージャーのプロファイルの両方で使用できます。
 - a. 「データベースの構成にはデータベース設計ファイルを使用する」を選択します。
 - b. 「参照」をクリックします。
 - c. 設計ファイルの完全修飾パス名を選択します。
 - d. 「次へ」をクリックします。

設計ファイルの指定を選択する場合、Profile Management Tool のデータベース構成パネルはスキップされます。代わりに、データベース構成を完了するために、設計ファイルの場所がコマンド行に渡されます。データベース構成用の設計ファイルの使用について詳しくは、922 ページの『データベース設計ツールを使用したデータベース設計ファイルの作成』を参照してください。

4. 「プロファイル拡張の要約」ページで、「拡張」をクリックしてプロファイルを拡張するか、「戻る」をクリックしてプロファイルの特性を変更します。

「プロファイル構成の進行状況 (Profile Configuration Progress)」ウィンドウに構成の進行状況が表示されます。

プロファイルの拡張が完了すると、「プロファイル拡張の完了」ページに「**プロファイル管理ツールにより、プロファイルが正常に拡張されました。**」というメッセージが表示されます。

重要: プロファイルの拡張中にエラーが検出された場合、成功メッセージの代わりに他のメッセージが表示されます。それは、以下のようなメッセージです。

- 「**プロファイル管理ツールでプロファイルが拡張されましたが、エラーが発生しました**」: プロファイルの拡張が完了したが、エラーが生成されたことを示します。
- 「**プロファイル管理ツールでプロファイルを拡張できません**」: プロファイルの拡張が完全に失敗したことを示します。

「プロファイル完了 (Profile complete)」ページには、問題のトラブルシューティングを行うために参照するログ・ファイルが示されます。

WebSphere Application Server または Application Server Network Deployment プロファイルが IBM Business Process Manager プロファイルに拡張されました。

ファースト・ステップ・コンソールから「**デプロイメント・マネージャーの始動**」を選択して、サーバーが作動することを確認します。出力ウィンドウが開きます。次のようなメッセージが表示される場合、デプロイメント・マネージャーは正常に作動しています。

ADMU3000I: サーバー dmgr が e-ビジネス用にオープン。プロセス ID は 3072
(Server dmgr open for e-business; process id is 3072)

デプロイメント環境で、別のデータベースを作成して構成し、カスタム・プロファイルを作成してそれをご使用のデプロイメント・マネージャーに統合し、サーバーを作成し、ワークロード管理機能が必要な場合は

クラスターを作成し、さらに、計画したインストール環境に固有のその他のタスクを実行する必要があります。計画した環境では、実行が必要なタスク、およびその実行順序を指示します。

「標準」オプションを使用した *Process Center* カスタム・プロファイル (管理対象ノード) の拡張:

プロファイル管理ツールのグラフィカル・ユーザー・インターフェース (GUI) 上の「標準」拡張オプションを使用して、WebSphere Application Server バージョン 7.0 または WebSphere Application Server Network Deployment バージョン 7.0 のカスタム・プロファイル (管理対象ノード) を拡張および構成します。「標準」オプションを選択すると、デフォルトの構成設定でプロファイルが拡張されます。

プロファイル管理ツールを開始し、カスタム・プロファイルの拡張を選択して、「標準」プロファイル拡張オプションを選択しています。

この構成のタイプでは、拡張プロセス時に既存のデプロイメント・マネージャーにノードを統合するか、後で `addNode` コマンドを使用して統合するかを選択できます。拡張プロセス時にプロファイルを統合することを決定した場合は、このツールによって共通データベースの構成がデプロイメント・マネージャーと同じデータベースに設定されます。統合しないことを決定した場合は、データベースは未構成のままになります。

1. 「フェデレーション」ページで、ノードのデプロイメント・マネージャーへの統合をプロファイルの拡張の一部としてここで実行するか、またはプロファイルの拡張とは別に後で実行するかを選択します。

- プロファイル拡張の一部としてノードを統合することを選択した場合は、デプロイメント・マネージャーのホスト名または IP アドレスと SOAP ポート、および認証ユーザー ID とパスワード (デプロイメント・マネージャー上で管理セキュリティーが使用可能になっている場合) を指定します。「**後でこのノードを統合する**」チェック・ボックスを選択解除されたままにしておきます。そして、「次へ」をクリックします。

プロファイル管理ツールによって、デプロイメント・マネージャーが存在していて通信可能であること、および認証ユーザー ID とパスワードがそのデプロイメント・マネージャーで有効であること (デプロイメント・マネージャーがセキュリティーで保護されている場合) が検査されます。

重要: 以下の条件すべてに該当する場合にのみ、プロファイルの拡張時にカスタム・ノードを統合してください。

- このカスタム・ノードをマイグレーション・ターゲットとして使用する予定がない。
- 他のノードは統合されていない (ノードの統合はシリアルライズする必要があります)。
- デプロイメント・マネージャーが実行されている。
- デプロイメント・マネージャーが IBM Business Process Manager デプロイメント・マネージャーである。IBM Business Process Manager プロファイルは WebSphere Enterprise Service Bus デプロイメント・マネージャーを使用できませんが、WebSphere Enterprise Service Bus プロファイルは IBM Business Process Manager デプロイメント・マネージャーを使用できます。
- デプロイメント・マネージャーが、拡張するカスタム・プロファイルと同じか、それより高いリリース・レベルである。
- デプロイメント・マネージャーで、JMX 管理ポートが有効になっている。デフォルト・プロトコルは SOAP です。(優先コネクタ・タイプを確認するには、デプロイメント・マネージャーの管理コンソールで「システム管理」>「デプロイメント・マネージャー」>「管理サービス」をクリックします。)

デプロイメント・マネージャーが実行中でないとき、またはほかの理由でデプロイメント・マネージャーを使用できないときに、カスタム・ノードを統合しようとする、警告ボックスが表示されて、

続行できなくなります。この警告ボックスが表示されたら、「OK」をクリックしてこの警告パネルを終了し、「フェデレーション」ページで別の選択を行ってください。

- プロファイルの拡張とは別に、後でノードを統合することを選択する場合は、「後でこのノードを統合する」チェック・ボックスを選択して、「次へ」をクリックします。

「プロファイルの要約」ページが表示されます。

2. 「プロファイルの要約」ページで、「拡張」をクリックしてプロファイルを拡張するか、「戻る」をクリックしてプロファイルの特性を変更します。

プロファイルの拡張が完了すると、「プロファイル完了 (Profile Complete)」ページに「プロファイル管理ツールにより、プロファイルが正常に拡張されました。」というメッセージが表示されます。

重要: プロファイルの拡張中にエラーが検出された場合は、正常終了のメッセージの代わりに他のメッセージが表示される可能性があります。その例と意味は次のとおりです。

- 「プロファイル管理ツールでプロファイルが拡張されましたが、エラーが発生しました」: プロファイルの拡張が完了したが、エラーが生成されたことを示します。
- 「プロファイル管理ツールでプロファイルを拡張できません」: プロファイルの拡張が完全に失敗したことを示します。

「プロファイル完了 (Profile complete)」ページには、問題のトラブルシューティングを行うために参照するログ・ファイルが示されます。

3. 「プロファイル完了 (Profile Complete)」ページで、「ファースト・ステップ・コンソールの起動」が選択されていることを確認し、「終了」をクリックして終了します。また、別のウィンドウで開いている「プロファイル」ページも閉じてください。ファースト・ステップ・コンソールを使用して、製品資料にアクセスします。

WebSphere Application Server または WebSphere Application Server Network Deployment プロファイルが Process Center プロファイルに拡張されました。

プロファイルの拡張中にプロファイルを統合しなかった場合、ここで統合します。プロファイル内のノードを統合し、デプロイメント・マネージャーを使用してそのノードをカスタマイズするまでは、そのノードは空です。

「詳細 (Advanced)」オプションを使用した Process Center カスタム・プロファイル (管理対象ノード) の拡張:

「拡張」拡張オプションを使用して、WebSphere Application Server バージョン 7.0 または WebSphere Application Server Network Deployment バージョン 7.0 のカスタム・プロファイル (管理対象ノード) を拡張および構成します。「拡張」オプションを選択すると、拡張設定と構成設定をカスタマイズすることができます。の使用

プロファイル管理ツールを開始し、カスタム・プロファイルの拡張を選択して、「拡張」プロファイル拡張オプションを選択しています。

カスタム・プロファイルの拡張中、拡張プロセス時にノードを既存のデプロイメント・マネージャーに統合するか、後で **addNode** コマンドを使用して統合するかを選択できます。

1. 「フェデレーション」ページで、ノードのデプロイメント・マネージャーへの統合をプロファイルの拡張の一部としてここで実行するか、またはプロファイルの拡張とは別に後で実行するかを選択します。

- プロファイル拡張の一部としてノードを統合することを選択した場合は、デプロイメント・マネージャーのホスト名または IP アドレスと SOAP ポート、および認証ユーザー ID とパスワード (デプロイメント・マネージャー上で管理セキュリティーが使用可能になっている場合) を指定します。「**後でこのノードを統合する**」チェック・ボックスを選択解除されたままにしておきます。そして、「**次へ**」をクリックします。

プロファイル管理ツールによって、デプロイメント・マネージャーが存在していて通信可能であること、および認証ユーザー ID とパスワードがそのデプロイメント・マネージャーで有効であること (デプロイメント・マネージャーがセキュリティーで保護されている場合) が検査されます。

重要: 以下の条件すべてに該当する場合にのみ、プロファイルの拡張時にカスタム・ノードを統合してください。

- このカスタム・ノードをマイグレーション・ターゲットとして使用する予定がない。
- 他のノードは統合されていない (ノードの統合はシリアルライズする必要があります)。
- デプロイメント・マネージャーが実行されている。
- デプロイメント・マネージャーが IBM Business Process Manager デプロイメント・マネージャーである。IBM Business Process Manager プロファイルは WebSphere Enterprise Service Bus デプロイメント・マネージャーを使用できませんが、WebSphere Enterprise Service Bus プロファイルは IBM Business Process Manager デプロイメント・マネージャーを使用できます。
- デプロイメント・マネージャーが、拡張するカスタム・プロファイルと同じか、それより高いリリース・レベルである。
- デプロイメント・マネージャーで、JMX 管理ポートが有効になっている。デフォルト・プロトコルは SOAP です。(優先コネクタ・タイプを確認するには、デプロイメント・マネージャーの管理コンソールで「システム管理」>「デプロイメント・マネージャー」>「管理サービス」をクリックします。)
- 拡張する管理対象ノードが既にデプロイメント・マネージャー・プロファイルに統合されている場合は、このカスタム・プロファイルの拡張時に、dmgr プロファイルが実行中でなければなりません。さらに、統合されたノードが確実に拡張されるように、デプロイメント・マネージャーのホスト名または IP アドレスと SOAP ポートを指定してください。

デプロイメント・マネージャーが実行中でないとき、またはほかの理由でデプロイメント・マネージャーを使用できないときに、カスタム・ノードを統合しようとする、警告ボックスが表示されて、続行できなくなります。この警告ボックスが表示されたら、「OK」をクリックしてこの警告パネルを終了し、「フェデレーション」ページで別の選択を行ってください。

- プロファイルの拡張とは別に、後でノードを統合することを選択する場合は、「**後でこのノードを統合する**」チェック・ボックスを選択して、「**次へ**」をクリックします。

「プロファイルの要約」ページが表示されます。

2. 「プロファイルの要約」ページで、「**拡張**」をクリックしてプロファイルを拡張するか、「**戻る**」をクリックしてプロファイルの特性を変更します。

プロファイルの拡張が完了すると、「プロファイル完了 (Profile Complete)」ページに「**プロファイル管理ツールにより、プロファイルが正常に拡張されました。**」というメッセージが表示されます。

重要: プロファイルの拡張中にエラーが検出された場合は、正常終了のメッセージの代わりに他のメッセージが表示される可能性があります。その例と意味は次のとおりです。

- 「**プロファイル管理ツールでプロファイルが拡張されましたが、エラーが発生しました**」: プロファイルの拡張が完了したが、エラーが生成されたことを示します。

- 「プロファイル管理ツールでプロファイルを拡張できません」: プロファイルの拡張が完全に失敗したことを示します。

「プロファイル完了 (Profile complete)」ページには、問題のトラブルシューティングを行うために参照するログ・ファイルが示されます。

3. 「プロファイル完了 (Profile Complete)」ページで、「ファースト・ステップ・コンソールの起動」が選択されていることを確認し、「終了」をクリックして終了します。また、別のウィンドウで開いている「プロファイル」ページも閉じてください。ファースト・ステップ・コンソールを使用して、製品資料にアクセスします。

WebSphere Application Server または WebSphere Application Server Network Deployment プロファイルが IBM Business Process Manager プロファイルに拡張されました。

プロファイルの拡張中にプロファイルを統合しなかった場合、ここで統合します。プロファイル内のノードを統合し、デプロイメント・マネージャーを使用してそのノードをカスタマイズするまでは、そのノードは空です。

Process Server および WebSphere ESB のプロファイルの拡張:

「標準」プロファイル拡張オプションまたは「詳細」プロファイル拡張オプションを使用して、Process Server または WebSphere ESB のプロファイルを拡張できます。

「標準 (Typical)」オプションを使用した Process Server スタンドアロン・プロファイルの拡張:

IBM Business Process Manager Process Server スタンドアロン・プロファイルの拡張と構成を行うには、プロファイル管理ツールの「標準プロファイル拡張」オプションを使用します。「標準 (Typical)」オプションを選択すると、デフォルトの構成設定でプロファイルが拡張されます。

スタンドアロン・プロファイル、Network Deployment プロファイル、およびカスタム・プロファイルの違いなど、プロファイルの概念を理解していること。

「標準プロファイル拡張」オプションと「詳細プロファイル拡張」オプションの違いについて、どのシナリオのもとで一方を他方より優先して使用する必要があるかを含めて理解してください。

- 230 ページの『プロファイルの作成または拡張に関する前提条件』で、プロファイルを作成または拡張するための前提条件リストを確認してください。

このトピックでは、プロファイル管理ツールを使用してプロファイルを拡張することを前提としています。プロファイル管理ツールを既に開始しており、Process Server スタンドアロン・プロファイルの拡張を選択し、「標準プロファイル拡張」オプションを選択していると想定しています。

この構成のタイプでは、プロファイル管理ツールは以下のタスクを実行します。

- 管理コンソールをデプロイするためのオプションを表示します。
- 共通データベース構成を DB2 に設定します (拡張するプロファイルでまだ構成されていない場合)。
- DB2 を使用して Business Space を構成します (まだ構成されていない場合)。
- プロファイル用のサンプル Business Process Choreographer 構成を作成します。

制約事項: スタンドアロン・サーバー・プロファイルをデプロイメント・マネージャーに統合する予定がある場合、標準的なオプションを使用してプロファイルを作成しないでください。「標準 (Typical)」のプロファイル拡張で提供されるメッセージング・エンジン・ストレージおよびデータベース・タイプのデフォルト値は、デプロイメント環境のインストールには適していません。代わりに、「拡張」オプションを使用し

てプロファイルを拡張してください。詳しくは、855 ページの『「詳細 (Advanced)」オプションを使用した Process Server スタンドアロン・プロファイルの拡張』を参照してください。

812 ページの『プロファイル管理ツールを使用したプロファイルの拡張』に記載されている手順に従って作業が完了していれば、「管理セキュリティ」ページが表示されます。すべての IBM Business Process Manager プロファイルでセキュリティが有効になっています。

1. 「管理セキュリティ」ページから、拡張するプロファイルの管理ユーザー ID およびパスワードを再入力します。

拡張するプロファイルで WebSphere(r) Application Server サンプル・アプリケーションがデプロイされている場合は、実行するアカウントが必要です。アカウントのパスワードを指定してください。アカウントのユーザー名は変更できません。

2. 「Process Server 構成」ページで、以下のパラメーターの値を設定します。

環境名

構成する環境の名前を指定します。

環境タイプの選択

以下のオプションがあります。

- 実稼働

実動キャパシティーでサーバーを実行する場合は、「**実動**」を選択します。

- ステージ

実動前サーバーとして使用されるステージング・プラットフォームとしてサーバーが機能することになる場合は、「**ステージング**」を選択します。

- テスト

構成するサーバーをテスト環境として使用する場合は、「**テスト**」を選択します。

環境タイプは、Process Server の使用方法を示します。例えば、Process Server を使用するキャパシティー (実動、ステージング、またはテスト) です。テスト・サーバーでは負荷テストを実行できます。ステージング環境タイプは、変更を実動環境に反映する前にそれらの変更をホストするための一時的なロケーションとして使用できます。構成する Process Server が、コンテンツおよび新機能のレビューを目的としてアクセスおよび使用される場合は、「**環境タイプ**」として「**ステージング**」を指定することが考えられます。

Process Center の構成情報

Process Server の接続先の Process Center を構成します。

以下のフィールドにパラメーターを設定します。

- **サーバーをオフラインで使用する**

構成しているサーバーがオフライン・サーバーであるかどうかを示します。

オフライン・サーバーは、Process Center に接続されていない Process Server です。

オフライン・サーバーは、Process App の Snapshot をデプロイするときにも使用できます。ただし、Process App をオフラインの Process Server にデプロイする方法は、Process App をオンラインの Process Server にデプロイする方法とは異なります。

- **プロトコル**

Process Center への接続プロトコルとして「**http://**」または「**https://**」を選択します。

- **ホスト名**

この Process Server が Process Center と通信するために必要なホストまたは仮想ホストを入力します。完全修飾ホスト名を使用します。

Process Server と Process Center サービスとの間にロード・バランサーまたはプロキシー・サーバーが存在する環境の場合、ここでの設定内容が Process Center にアクセスするための URL と一致していることを確認してください。

- **ポート**

Process Center のポート番号を入力します。Process Server と Process Center との間にロード・バランサーまたはプロキシー・サーバーが存在する環境の場合、ここでの設定内容が Process Center にアクセスするための URL と一致していることを確認してください。

「**接続のテスト**」をクリックすることによって、Process Center への接続をテストできます。

「**次へ**」をクリックします。

3. 「データベース構成 - パート 1」ページで、以下のアクションを実行します。 IBM Business Process Manager Standard の Process Server を拡張する際は、「**Performance Data Warehouse データベース名 (Performance Data Warehouse database name)**」および「**Process Server データベース名 (Process server database name)**」フィールドは表示されません。 WebSphere ESB プロファイルを拡張する際は、共通データベース名フィールドは表示されません。

- 「**データベース製品の選択 (Select a database product)**」ドロップダウン・リストから、プロファイルで使用されるデータベース製品を選択します。
- 「**新規ローカル・データベースの作成**」または「**既存のローカルまたはリモート・データベースの使用 (Use an existing local or remote database)**」を選択します。

データベース製品として DB2 を選択した場合は、新規データベースの作成を選択できます。DB2 はソフトウェアに組み込まれているため、プロファイル管理ツールにより新規 DB2 データベースが作成されます。

ソフトウェアで使用するデータベース製品が既に存在する場合は、「**既存のローカルまたはリモート・データベースの使用 (Use an existing local or remote database)**」を選択します。

- 「**Process Server データベース名 (Process Server database name)**」フィールドにデータベースの名前を入力するか、またはデフォルト値 **BPMDB** をそのまま使用します。
- 「**Performance Data Warehouse データベース名 (Performance Data Warehouse database name)**」フィールドにデータベースの名前を入力するか、またはデフォルト値 **PDWDB** をそのまま使用します。
- 「**共通データベース名**」フィールドで、共通データベースの名前を入力するか、**CMNDB** デフォルト値を受け入れます。
- データベース表の作成に使用される SQL スクリプトが書き込まれるディレクトリを設定する場合は、「**データベース・スクリプトのデフォルト出力ディレクトリをオーバーライドする (Override the default output directory for database scripts)**」チェック・ボックスを選択します。

このチェック・ボックスを選択しない場合、スクリプトはデフォルト・ディレクトリに出力されません。

- データベース・スクリプトを自動で (プロファイル作成プロセスの一部として) 実行する場合は、「データベース・スクリプトを実行してデータベースを初期化 (Run database scripts to initialize the databases)」チェック・ボックスを選択します。このチェック・ボックスを選択しない場合、プロファイル作成の完了後に、ユーザー自身またはデータベース管理者がスクリプトを手動で実行できます。

4. 「データベース構成 - パート 2」ページで、データベース構成を指定し、「次へ」をクリックします。

注: データベース・スクリプトを実行しない場合でも、このページを完成させる必要があります。「データベース構成 - パート 2」ページで選択した値は、前のページの「データベース・スクリプトの出力ディレクトリー」フィールドで指定したディレクトリー内 (別のロケーションを指定しなかった場合は、これらのスクリプトのデフォルト・ディレクトリー内) に格納されたデータベース構成スクリプトに追加されます。

制約事項: DB2 for z/OS V8 または V9、または Oracle を使用している場合は、新規データベースを作成できません。これらの場合は、Process Server/Performance Data Warehouse データベースが存在している必要があります。

次のリストで、使用しているデータベースの名前を示すリンクを選択してください。

- DB2 データベース
 - DB2 for z/OS V8、 V9 および V10
 - Microsoft SQL Server
 - Oracle
- a. DB2 データベースの値を設定します。

以下の表に、DB2 Universal Database をデータベース製品として選択する場合に「データベース構成 (その 2)」ページで入力しておく必要があるフィールドを示します。

表 122. DB2 Database の場合の必須のデータベース構成フィールド

フィールド	必要なアクション
JDBC ドライバー	以下のオプションから選択してください。 <ul style="list-style-type: none"> DB2 Universal DB2 DataServer
データベース認証用のユーザー名 (User name for database authentication)	データベースで認証を行うユーザー名を入力してください。
データベース認証用のパスワード	データベースで認証を行うパスワードを入力してください。
パスワードの確認	パスワードを確認します。
JDBC ドライバーのクラスパス・ファイルのディレクトリー・ロケーション (Directory location of JDBC driver classpath files)	JDBC ドライバーのクラスパス・ファイルは製品と一緒にパッケージ化されており、以下のディレクトリーに置かれています。 <ul style="list-style-type: none"> インストール時に DB2 Express フィーチャーを選択した場合: \${WAS_INSTALL_ROOT}/db2/java インストール時に DB2 Express フィーチャーを選択しなかった場合: \${WAS_INSTALL_ROOT}/jdbcdrivers/DB2
データベース・サーバーのホスト名 (例えば IP アドレス)	デフォルト値 localhost をそのまま確定するか、データベース・サーバーの正しいホスト名を入力します。
サーバー・ポート	デフォルト値 50000 をそのまま確定するか、サーバーの正しいポート番号を入力します。

- b. DB2 for z/OS V8、V9、および V10 の値を設定します。

以下の表に、DB2 for z/OS V8 および V9 をデータベース製品として選択する場合に「データベース構成 (その 2)」ページで入力しておく必要があるフィールドを示します。これらのデータベースを使用して新規データベースを作成することはできません。Performance Data Warehouse データベースが存在している必要があり、スタンドアロン・サーバー・プロファイルの場合は Process Server データベースも必要です。

表 123. DB2 Universal Database for z/OS の場合の必須のデータベース構成フィールド

フィールド	必要なアクション
データベース認証用のユーザー名 (User name for database authentication)	データベースで認証を行うユーザー名を入力してください。
データベース認証用のパスワード	データベースで認証を行うパスワードを入力してください。
パスワードの確認	パスワードを確認します。
JDBC ドライバーのクラスパス・ファイルのディレクトリー・ロケーション (Directory location of JDBC driver classpath files)	JDBC ドライバーのクラスパス・ファイルは製品と一緒にパッケージ化されており、ディレクトリー <code>\${WAS_INSTALL_ROOT}/jdbcdrivers/DB2</code> に置かれています。
データベース・サーバーのホスト名 (例えば IP アドレス)	データベース・サーバーのホスト名を入力してください。
サーバー・ポート	デフォルト値 446 をそのまま確定するか、サーバーの正しいポート番号を入力します。
Process Server のスキーマ名 (Process Server Schema name)	Process Server のデータベース・スキーマ名を入力してください。
Performance Server のスキーマ名 (Performance Server Schema name)	Performance Server のデータベース・スキーマ名を入力してください。
接続のロケーション	接続のロケーションを入力してください。
ストレージ・グループ名	ストレージ・グループ名を入力してください。

- c. Microsoft SQL Server の値の設定

以下の表に、Microsoft SQL Server をデータベース製品として選択する場合に「データベース構成 (その 2)」ページで入力しておく必要があるフィールドを示します。

表 124. Microsoft SQL Server の場合の必須のデータベース構成フィールド

フィールド	必要なアクション
JDBC ドライバー	以下のオプションから選択してください。 <ul style="list-style-type: none"> • Microsoft SQL Server JDBC 2.0 注: JDBC 3.0 もサポートされています。JDBC 3.0 の場合は、「Microsoft SQL Server JDBC 2.0」を選択してください。 • Microsoft SQL Server JDBC 1.2

表 124. Microsoft SQL Server の場合の必須のデータベース構成フィールド (続き)

フィールド	必要なアクション
共通データベース	<p>共通データベースの場合は、以下のパラメーターの値を入力してください。</p> <ul style="list-style-type: none"> • ユーザー名 <p>共通データベースのユーザー名を入力してください。</p> <ul style="list-style-type: none"> • パスワード <p>共通データベースで認証を行うパスワードを入力してください。</p> <ul style="list-style-type: none"> • パスワードの確認 <p>確認のためにパスワードを再入力してください。</p>
Process Server データベース	<p>Process Server データベースの場合は、以下のパラメーターの値を入力してください。</p> <ul style="list-style-type: none"> • ユーザー名 <p>Process Server データベースのユーザー名を入力してください。</p> <ul style="list-style-type: none"> • パスワード <p>Process Server データベースで認証を行うパスワードを入力してください。</p> <ul style="list-style-type: none"> • パスワードの確認 <p>確認のためにパスワードを再入力してください。</p>
Performance Data Warehouse データベース	<p>Performance Data Warehouse データベースの場合は、以下のパラメーターの値を入力してください。</p> <ul style="list-style-type: none"> • ユーザー名 <p>Performance Data Warehouse データベースのユーザー名を入力してください。</p> <ul style="list-style-type: none"> • パスワード <p>Performance Data Warehouse データベースで認証を行うパスワードを入力してください。</p> <ul style="list-style-type: none"> • パスワードの確認 <p>確認のためにパスワードを再入力してください。</p>
データベース・サーバーのホスト名 (例えば IP アドレス)	<p>デフォルト値 localhost をそのまま確定するか、データベース・サーバーの正しいホスト名を入力します。</p>
サーバー・ポート	<p>デフォルト値 1433 をそのまま確定するか、サーバーの正しいポート番号を入力します。</p>
JDBC ドライバーのクラスパス・ファイルのディレクトリー・ロケーション (Directory location of JDBC driver classpath files)	<p>JDBC 2.0 ドライバーのクラスパス・ファイル (sqljdbc4.jar) は製品と一緒にパッケージ化されており、ディレクトリー</p> <p><code>\${WAS_INSTALL_ROOT}¥jdbcdrivers¥SQLServer</code> に置かれています。</p>

「次へ」をクリックして、「データベース構成 (その 3)」ページに進みます。

表 125. Microsoft SQL Server の場合の必須のデータベース構成フィールド

フィールド	必要なアクション
Common Event Infrastructure バス・メッセージング・エンジン (Common Event Infrastructure bus messaging engine)	<p>Common Event Infrastructure バス・メッセージング・エンジンの場合は、以下のパラメーターの値を入力してください。</p> <ul style="list-style-type: none"> • ユーザー名 <p>Common Event Infrastructure バス・メッセージング・エンジンのユーザー名を入力してください。</p> <ul style="list-style-type: none"> • パスワード <p>Common Event Infrastructure バス・メッセージング・エンジンで認証を行うパスワードを入力してください。</p> <ul style="list-style-type: none"> • パスワードの確認 <p>確認のためにパスワードを再入力してください。</p>
SCA アプリケーション・バス・メッセージング・エンジン	<p>SCA アプリケーション・バス・メッセージング・エンジンの場合は、以下のパラメーターの値を入力してください。</p> <ul style="list-style-type: none"> • ユーザー名 <p>SCA アプリケーション・バス・メッセージング・エンジンのユーザー名を入力してください。</p> <ul style="list-style-type: none"> • パスワード <p>SCA アプリケーション・バス・メッセージング・エンジンで認証を行うパスワードを入力してください。</p> <ul style="list-style-type: none"> • パスワードの確認 <p>確認のためにパスワードを再入力してください。</p>
SCA システム・バス・メッセージング・エンジン	<p>SCA システム・バス・メッセージング・エンジンの場合は、以下のパラメーターの値を入力してください。</p> <ul style="list-style-type: none"> • ユーザー名 <p>SCA システム・バス・メッセージング・エンジンのユーザー名を入力してください。</p> <ul style="list-style-type: none"> • パスワード <p>SCA システム・バス・メッセージング・エンジンで認証を行うパスワードを入力してください。</p> <ul style="list-style-type: none"> • パスワードの確認 <p>確認のためにパスワードを再入力してください。</p>

表 125. Microsoft SQL Server の場合の必須のデータベース構成フィールド (続き)

フィールド	必要なアクション
Process Server バス・メッセージング・エンジン (Process Server bus messaging engine)	Process Server バス・メッセージング・エンジンの場合は、以下のパラメーターの値を入力してください。 <ul style="list-style-type: none"> • ユーザー名 <p>Process Server バス・メッセージング・エンジンのユーザー名を入力してください。</p> • パスワード <p>Process Server バス・メッセージング・エンジンで認証を行うパスワードを入力してください。</p> • パスワードの確認 <p>確認のためにパスワードを再入力してください。</p>
Performance Data Warehouse バス・メッセージング・エンジン (Performance Data Warehouse bus messaging engine)	Performance Data Warehouse バス・メッセージング・エンジンの場合は、以下のパラメーターの値を入力してください。 <ul style="list-style-type: none"> • ユーザー名 <p>Performance Data Warehouse バス・メッセージング・エンジンのユーザー名を入力してください。</p> • パスワード <p>Performance Data Warehouse バス・メッセージング・エンジンで認証を行うパスワードを入力してください。</p> • パスワードの確認 <p>確認のためにパスワードを再入力してください。</p>

d. Oracle データベースの値の設定

以下の表に、Oracle をデータベース製品として選択する場合に「データベース構成 (その 2)」ページで入力しておく必要があるフィールドを示します。このデータベースを使用して新規データベースを作成することはできません。

重要: プロファイルを作成する前に、SYSDBA 特権のあるユーザー ID を取得している必要があります。

表 126. Oracle の場合の必須のデータベース構成フィールド

フィールド	必要なアクション
共通データベース	<p>共通データベースの場合は、以下のパラメーターの値を入力してください。</p> <ul style="list-style-type: none"> • ユーザー名 <p>共通データベースのユーザー名を入力してください。</p> <ul style="list-style-type: none"> • パスワード <p>共通データベースで認証を行うパスワードを入力してください。</p> <ul style="list-style-type: none"> • パスワードの確認 <p>確認のためにパスワードを再入力してください。</p>
Process Server データベース	<p>Process Server データベースの場合は、以下のパラメーターの値を入力してください。</p> <ul style="list-style-type: none"> • ユーザー名 <p>Process Server データベースのユーザー名を入力してください。</p> <ul style="list-style-type: none"> • パスワード <p>Process Server データベースで認証を行うパスワードを入力してください。</p> <ul style="list-style-type: none"> • パスワードの確認 <p>確認のためにパスワードを再入力してください。</p> <p>注: Process Server データベース・ユーザー名および Performance Data Warehouse データベース・ユーザー名に同じ名前を指定することはできません。</p>
Performance Data Warehouse データベース	<p>Performance Data Warehouse データベースの場合は、以下のパラメーターの値を入力してください。</p> <ul style="list-style-type: none"> • ユーザー名 <p>Performance Data Warehouse データベースのユーザー名を入力してください。</p> <ul style="list-style-type: none"> • パスワード <p>Performance Data Warehouse データベースで認証を行うパスワードを入力してください。</p> <ul style="list-style-type: none"> • パスワードの確認 <p>確認のためにパスワードを再入力してください。</p> <p>注: Performance Data Warehouse データベース・ユーザー名および Process Server データベース・ユーザー名に同じ名前を指定することはできません。</p>
データベース・サーバーのホスト名 (例えば IP アドレス)	<p>デフォルト値 localhost をそのまま確定するか、データベース・サーバーの正しいホスト名を入力します。</p>

表 126. Oracle の場合の必須のデータベース構成フィールド (続き)

フィールド	必要なアクション
サーバー・ポート	デフォルト値 1521 をそのまま確定するか、サーバーの正しいポート番号を入力します。
JDBC ドライバーのクラスパス・ファイルのディレクトリー・ロケーション (Directory location of JDBC driver classpath files)	JDBC 2.0 ドライバーのクラスパス・ファイルは、製品と一緒にパッケージ化されており、ディレクトリー <code>\${WAS_INSTALL_ROOT}¥jdbcdrivers¥Oracle</code> に置かれています。

「次へ」をクリックして、「データベース構成 (その 3)」ページに進みます。

表 127. Oracle の場合の必須のデータベース構成フィールド

フィールド	必要なアクション
Common Event Infrastructure バス・メッセージング・エンジン (Common Event Infrastructure bus messaging engine)	<p>Common Event Infrastructure バス・メッセージング・エンジンの場合は、以下のパラメーターの値を入力してください。</p> <ul style="list-style-type: none"> • ユーザー名 Common Event Infrastructure バス・メッセージング・エンジンのユーザー名を入力してください。 • パスワード Common Event Infrastructure バス・メッセージング・エンジンで認証を行うパスワードを入力してください。 • パスワードの確認 確認のためにパスワードを再入力してください。
SCA アプリケーション・バス・メッセージング・エンジン	<p>SCA アプリケーション・バス・メッセージング・エンジンの場合は、以下のパラメーターの値を入力してください。</p> <ul style="list-style-type: none"> • ユーザー名 SCA アプリケーション・バス・メッセージング・エンジンのユーザー名を入力してください。 • パスワード SCA アプリケーション・バス・メッセージング・エンジンで認証を行うパスワードを入力してください。 • パスワードの確認 確認のためにパスワードを再入力してください。

表 127. Oracle の場合の必須のデータベース構成フィールド (続き)

フィールド	必要なアクション
SCA システム・バス・メッセージング・エンジン	<p>SCA システム・バス・メッセージング・エンジンの場合は、以下のパラメーターの値を入力してください。</p> <ul style="list-style-type: none"> • ユーザー名 SCA システム・バス・メッセージング・エンジンのユーザー名を入力してください。 • パスワード SCA システム・バス・メッセージング・エンジンで認証を行うパスワードを入力してください。 • パスワードの確認 確認のためにパスワードを再入力してください。
Process Server バス・メッセージング・エンジン (Process Server bus messaging engine)	<p>Process Server バス・メッセージング・エンジンの場合は、以下のパラメーターの値を入力してください。</p> <ul style="list-style-type: none"> • ユーザー名 Process Server バス・メッセージング・エンジンのユーザー名を入力してください。 • パスワード Process Server バス・メッセージング・エンジンで認証を行うパスワードを入力してください。 • パスワードの確認 確認のためにパスワードを再入力してください。
Performance Data Warehouse バス・メッセージング・エンジン (Performance Data Warehouse bus messaging engine)	<p>Performance Data Warehouse バス・メッセージング・エンジンの場合は、以下のパラメーターの値を入力してください。</p> <ul style="list-style-type: none"> • ユーザー名 Performance Data Warehouse バス・メッセージング・エンジンのユーザー名を入力してください。 • パスワード Performance Data Warehouse バス・メッセージング・エンジンで認証を行うパスワードを入力してください。 • パスワードの確認 確認のためにパスワードを再入力してください。

5. 「プロファイル拡張の要約」ページで、「**拡張**」をクリックしてプロファイルを拡張するか、「**戻る**」をクリックしてプロファイルの特性を変更します。

「プロファイル構成の進行状況 (Profile Configuration Progress)」ウィンドウに構成の進行状況が表示されます。

プロファイルの拡張が完了すると、「プロファイル拡張の完了」ページに「**プロファイル管理ツールにより、プロファイルが正常に拡張されました。**」というメッセージが表示されます。

重要: プロファイルの拡張中にエラーが検出された場合、成功メッセージの代わりに他のメッセージが表示されます。それは、以下のようなメッセージです。

- 「**プロファイル管理ツールでプロファイルが拡張されましたが、エラーが発生しました**」: プロファイルの拡張が完了したが、エラーが生成されたことを示します。
- 「**プロファイル管理ツールでプロファイルを拡張できません**」: プロファイルの拡張が完全に失敗したことを示します。

「プロファイル完了 (Profile complete)」ページには、問題のトラブルシューティングを行うために参照するログ・ファイルが示されます。

以下のいずれかの作業が完了しました。

- WebSphere Application Server、WebSphere Application Server Network Deployment、または WebSphere Enterprise Service Bus プロファイルの IBM Business Process Manager プロファイルへの拡張。
- WebSphere Application Server または WebSphere Application Server Network Deployment プロファイルの WebSphere Enterprise Service Bus プロファイルへの拡張。

ファースト・ステップ・コンソールから「**サーバーの起動**」を選択してサーバーの作動をチェックします。出力ウィンドウが開きます。次のようなメッセージが表示される場合、サーバーは正常に作動しています。

```
ADMU3000I: e-business のサーバー server1 がオープンしました。  
プロセス ID は 3348 です  
(Server server1 open for e-business; process id is 3348)
```

ファースト・ステップ・コンソールからインストール検査テスト (IVT) を実行するか、**wbi_ivt** コマンド行ユーティリティを実行することで、サーバーの動作を確認することもできます。このテストは、デプロイメント・マネージャーまたはスタンドアロン・サーバーのインストール環境が正常に動作していることが確認するものです。Process Server スタンドアロン・サーバー・プロファイルの場合はシステム正常性検査も実行され、レポートが生成されます。

「標準 (Typical)」オプションを使用した WebSphere ESB スタンドアロン・プロファイルの拡張

プロファイル管理ツールの「**標準プロファイル拡張**」オプションを使用して、WebSphere Enterprise Service Bus のスタンドアロン・サーバー・プロファイルを拡張して構成します。「**標準 (Typical)**」オプションを選択すると、デフォルトの構成設定でプロファイルが拡張されます。

スタンドアロン・プロファイル、Network Deployment プロファイル、およびカスタム・プロファイルの違いなど、プロファイルの概念を理解していること。

「**標準プロファイル拡張**」オプションと「**詳細プロファイル拡張**」オプションの違いについて、どのシナリオのもとで一方を他方より優先して使用する必要があるかを含めて理解してください。

- 230 ページの『プロファイルの作成または拡張に関する前提条件』で、プロファイルを作成または拡張するための前提条件リストを確認してください。

プロファイル管理ツールを既に開始しており、WebSphere ESB スタンドアロン・プロファイルの拡張を選択し、「**標準プロファイル拡張**」オプションを選択していると想定しています。

この構成のタイプでは、プロファイル管理ツールは以下のタスクを実行します。

- 管理コンソールをデプロイするためのオプションを表示します。
- 共通データベース構成を DB2 に設定します (拡張するプロファイルでまだ構成されていない場合)。
- 拡張するプロファイルでセキュリティが有効になっている場合は、DB2 を使用して、Business Space powered by WebSphere を構成します (まだ構成されていない場合)。

制約事項: スタンドアロン・サーバー・プロファイルをデプロイメント・マネージャーに統合する予定がある場合、**標準的な**オプションを使用してプロファイルを作成しないでください。「**標準 (Typical)**」のプロファイル拡張で提供されるメッセージング・エンジン・ストレージおよびデータベース・タイプのデフォルト値は、デプロイメント環境のインストールには適していません。代わりに、「**拡張**」オプションを使用してプロファイルを拡張してください。詳しくは、864 ページの『「**詳細 (Advanced)**」オプションを使用した WebSphere ESB スタンドアロン・プロファイルの拡張』を参照してください。

以下の表で説明するように、812 ページの『プロファイル管理ツールを使用したプロファイルの拡張』の手順の実行結果として表示されるページは、拡張するプロファイル上のセキュリティーおよびデータベースの状態によって異なります。

表 128. WebSphere ESB プロファイルのセキュリティーの状態と、表示されるプロファイル管理ツールのページ

プロファイルのセキュリティーおよびデータベースの状態	表示されるページ	参照先
拡張する WebSphere ESB プロファイルでセキュリティーが有効になっています。	「管理セキュリティー」ページ	ステップ 1
拡張する WebSphere ESB プロファイルでセキュリティーが有効でなく、共通データベースをまだ構成していません。	「プロファイルの要約」ページ	ステップ 2
拡張する WebSphere ESB プロファイルでセキュリティーが有効でなく、共通データベースは構成済みです。	パスワード・ページで、データベースの構成に使用するデータベース・ユーザー名とパスワードを求めるプロンプトが出力されます。情報を入力して「次へ」をクリックします。	ステップ 2

1. 管理セキュリティーを有効にする

このページが表示された場合、拡張する WebSphere ESB プロファイルでセキュリティーが有効になっています。そのプロファイルの管理ユーザー ID およびパスワードを再入力する必要があります。

拡張するプロファイルで WebSphere Application Server サンプル・アプリケーションがデプロイされている場合は、実行するアカウントが必要です。アカウントのパスワードを指定してください。アカウントのユーザー名は変更できません。

2. 「プロファイル要約の確認 (Review Profile Summary)」ページで、「拡張」をクリックしてプロファイルを拡張するか、「戻る」をクリックしてプロファイルの特性を変更します。

「プロファイル構成の進行状況 (Profile Configuration Progress)」ウィンドウに構成の進行状況が表示されます。

プロファイルの拡張が完了すると、「プロファイル拡張の完了」ページに「プロファイル管理ツールにより、プロファイルが正常に拡張されました。」というメッセージが表示されます。

重要: プロファイルの拡張中にエラーが検出された場合、成功メッセージの代わりに他のメッセージが表示されます。それは、以下のようなメッセージです。

プロファイル管理ツールでプロファイルが拡張されましたが、エラーが発生しました
 プロファイル拡張が完了しましたが、エラーが発生したことを示します。

プロファイル管理ツールでプロファイルを拡張できません
 プロファイル拡張が完全に失敗したことを示します。

「プロファイル完了 (Profile Complete)」ページには、問題のトラブルシューティングを行うために参照するログ・ファイルが示されます。

スタンドアロン・プロファイルを WebSphere ESB スタンドアロン・プロファイルに拡張しました。

プロファイル内のノードのサーバーは、**server1** (Linux、UNIX、および Windows プラットフォームの場合) という名前になります。

ファースト・ステップ・コンソールから「**サーバーの起動**」を選択してサーバーの作動をチェックします。出力ウィンドウが開きます。次のようなメッセージが表示される場合、サーバーは正常に作動しています。

```
ADMU3000I: e-business のサーバー server1 がオープンしました。  
プロセス ID は 3348 です  
(Server server1 open for e-business; process id is 3348)
```

ファースト・ステップ・コンソールからインストール検査テスト (IVT) を実行するか、**wbi_ivt** コマンド行ユーティリティを実行することで、サーバーの動作を確認することもできます。このテストは、デプロイメント・マネージャーまたはスタンドアロン・サーバーのインストール環境が正常に動作していることが確認するものです。

「詳細 (Advanced)」オプションを使用した Process Server スタンドアロン・プロファイルの拡張:

プロファイル管理ツールのグラフィカル・ユーザー・インターフェース (GUI) 上の「**詳細プロファイル拡張**」オプションを使用して、Process Server スタンドアロン・プロファイルを拡張します。「**詳細**」オプションを選択して、カスタマイズした構成設定でプロファイルを拡張します。

IBM BPM Advanced、Process Server スタンドアロン・プロファイルは、それ独自のコンソールから管理する定義済みサーバー環境で、他のすべての Process Server から独立して機能します。開始する前に、このプロファイルのサーバーを停止し、BPM Advanced インストール済み環境からプロファイル管理ツールを起動しておく必要があります。

このタスクは、プロファイル管理ツールの「**詳細プロファイル拡張**」オプションを使用して、スタンドアロン・プロファイルを拡張する方法を説明しています。

「**拡張**」オプションを選択することで、以下のタスクを実行できます。

- 共通データベースを構成します。
- 拡張するプロファイルでセキュリティが有効になっている場合は、Business Space を構成します。
- ビジネス・ルール・マネージャーを構成します。
- 拡張するプロファイルでセキュリティが有効になっている場合は、Business Process Choreographer サンプル構成を作成します。
- データベース設計ファイルを使用してデータベースを構成します。

重要: このトピックの手順には、「**拡張**」オプションを使用してスタンドアロン Process Server プロファイルを拡張する際に表示されることがある、プロファイル管理ツールのすべてのページが含まれています。ただし、拡張するプロファイルに構成済みコンポーネント (共通データベース、Business Space powered by WebSphere など) がすでに含まれている場合は、プロファイル管理ツール内のこれらのコンポーネント用のページは表示されません。

812 ページの『プロファイル管理ツールを使用したプロファイルの拡張』の手順を使用してプロファイルの拡張を開始し、中止した手順から以下のステップを再開してください。

要確認: すべての IBM Business Process Manager プロファイルで管理セキュリティが有効になっています。

1. プロファイル管理ツールを使用して、拡張する Process Server プロファイルを選択し、「**拡張 (Augment)**」をクリックします。「拡張の選択」ページが開きます。
2. プロファイルに適用する拡張のタイプを選択し、「**次へ**」をクリックします。「プロファイル拡張オプション」ページが開きます。
3. 「**詳細プロファイル拡張**」を選択して、「**次へ**」をクリックします。「管理セキュリティー」ページが開きます。
4. 「管理セキュリティー」ページから、拡張するプロファイルの管理ユーザー ID およびパスワードを再入力します。

拡張するプロファイルで WebSphere(r) Application Server サンプル・アプリケーションがデプロイされている場合は、実行するアカウントが必要です。アカウントのパスワードを指定してください。アカウントのユーザー名は変更できません。

5. 「ビジネス・スペースの構成」ページで、「**ビジネス・スペースの構成**」チェック・ボックスが選択された状態にして、ビジネス・スペースをセットアップします。これは、IBM ビジネス・プロセス管理ポータルフォリオでアプリケーション・ユーザー用に統合されたユーザー・エクスペリエンスです。
Business Space 内のヒューマン・タスク管理ウィジェットと連携するように IBM Forms Server を構成する場合は、「**IBM Forms Server の構成**」チェック・ボックスを選択し、IBM Forms Server 変換プログラムおよび IBM Forms Server インストール・ルートの HTTP ロケーションを入力します。その後、「**次へ**」をクリックします。
6. ビジネス・ルール・マネージャーを構成してインストールするかどうか選択します。ビジネス・ルール・マネージャーは、ビジネス・アプリケーションの必要に合わせてビジネス・ルール・テンプレートをカスタマイズする Web アプリケーションです。
7. システムで複数のサーバーを定義している場合は、サーバーを選択します。「Application Scheduler の構成」ページが開きます。「Application Scheduler の構成」ページの「**プロファイルに複数のサーバーが定義されているときの詳細プロファイル拡張の場合: (For Advanced profile augmentation when profile has multiple servers defined:)**」セクションで、ドロップダウン・リストからサーバーを選択し、「**次へ**」をクリックします。

「詳細」オプションを使用した Process Server スタンドアロン・プロファイルを拡張するための初期手順が完了しました。

以下のシステム・セットアップに応じて、拡張プロセスを完了させます。

- システム上でデータベースが定義されていない。
- システム上でデータベースが定義されている。

関連タスク:

857 ページの『データベースが定義されている場合の「詳細」オプションを使用したスタンドアロン・プロファイルの拡張』

プロファイル管理ツールのグラフィカル・ユーザー・インターフェース (GUI) にある「**詳細プロファイル拡張**」オプションを使用して、カスタマイズした構成設定で Process Server スタンドアロン・プロファイルを拡張します。この Process Server スタンドアロン・プロファイルは、システム上でデータベースが既に定義されている場合に拡張することができます。

859 ページの『データベースが定義されていない場合の「詳細」オプションを使用したスタンドアロン・プロファイルの拡張』

プロファイル管理ツールのグラフィカル・ユーザー・インターフェース (GUI) にある「**詳細プロファイル拡張**」オプションを使用して、カスタマイズした構成設定で Process Server スタンドアロン・プロファイルを拡張します。この Process Server スタンドアロン・プロファイルは、システム上でデータベースがまだ定義されていない場合に拡張することができます。

938 ページの『データベースへのシステム情報のロード』

IBM Business Process Manager サーバーの始動または使用を試みる前に、`bootstrapProcessServerData` コマンドを実行する必要があります。

関連資料:

893 ページの『プロファイル管理ツール構成のデータベース構成フィールド』

スタンドアロン環境のプロファイルを作成するには、データベース情報が必要です。必要な情報は、使用するデータベースによって異なります。

データベースが定義されている場合の「詳細」オプションを使用したスタンドアロン・プロファイルの拡張:

プロファイル管理ツールのグラフィカル・ユーザー・インターフェース (GUI) にある「**詳細プロファイル拡張**」オプションを使用して、カスタマイズした構成設定で Process Server スタンドアロン・プロファイルを拡張します。この Process Server スタンドアロン・プロファイルは、システム上でデータベースが既に定義されている場合に拡張することができます。

IBM BPM Advanced、*Process Server* スタンドアロン・プロファイル は、それ独自のコンソールから管理する定義済みサーバー環境で、他のすべての Process Server から独立して機能します。開始する前に、このプロファイルのサーバーを停止し、*BPM Advanced* インストール済み環境からプロファイル管理ツールを起動しておく必要があります。855 ページの『「**詳細 (Advanced)**」オプションを使用した Process Server スタンドアロン・プロファイルの拡張』の手順を使用して詳細プロファイル拡張を開始し、このタスクのステップから再開します。

このタスクでは、システムでデータベースが既に定義されている場合に、プロファイル管理ツールのユーザー・インターフェースにある「**詳細プロファイル拡張**」オプションを使用してスタンドアロン・プロファイルを拡張する作業について説明します。

要確認: すべての IBM Business Process Manager プロファイルで管理セキュリティが有効になっています。

1. 「プロファイル拡張の要約」ページで、「**拡張**」をクリックしてプロファイルを拡張するか、「**戻る**」をクリックしてプロファイルの特性を変更します。

「プロファイル構成の進行状況 (Profile Configuration Progress)」ウィンドウに構成の進行状況が表示されます。

プロファイルの拡張が完了すると、「プロファイル拡張の完了」ページに「**プロファイル管理ツールにより、プロファイルが正常に拡張されました。**」というメッセージが表示されます。

重要: プロファイルの拡張中にエラーが検出された場合、成功メッセージの代わりに他のメッセージが表示されます。それは、以下のようなメッセージです。

プロファイル管理ツールでプロファイルが拡張されましたが、エラーが発生しました
プロファイル拡張が完了しましたが、エラーが発生したことを示します。

プロファイル管理ツールでプロファイルを拡張できません
プロファイル拡張が完全に失敗したことを示します。

「プロファイル完了 (Profile Complete)」ページには、問題をトラブルシューティングする際に参照するログ・ファイルが示されます。

2. 手動で実行するスクリプトを作成して実際のデータベース構成を先送りするように選択したかどうかに応じて、以下のタスクのいずれかを実行し、Process Server スタンドアロン・プロファイルの構成を完了します。
 - プロファイル管理ツールを使用した共通データベース、Performance Data Warehouse データベースおよび Process Server データベースの構成が完了したら、以下のステップを実行します。
 - a. 「ファースト・ステップ・コンソールを起動する」オプションが選択されていることを確認します。
 - b. 「終了」をクリックして終了します。
 - c. 別のウィンドウで開いている「プロファイル」ページを閉じます。
 - d. ファースト・ステップ・コンソールを使用して、サーバーを始動します。
 - Common Event Infrastructure コンポーネントを使用する場合は、そのデータベースを手動で作成する必要があります。『Common Event Infrastructure (CEI) データベースの構成』を参照してください。
 - 手動で実行するスクリプトを生成して実際のデータベース構成を延期することを選択した場合は、以下のステップを実行します。
 - a. 「ファースト・ステップ・コンソールを起動する」の横にあるチェック・ボックスをクリアします。
 - b. 「終了」をクリックして、プロファイル管理ツールを閉じます。
 - c. 別のウィンドウで開いている「プロファイル」ページを閉じます。
 - d. サイトの標準的なデータベース定義ツールと手順を使用して、プロファイル管理ツールにより生成されたスクリプトを編集して実行し、CMNDB データベースを作成するか、または作成して構成します。
 - e. 新規データベースを手動で作成する方法、または既存のデータベースで新規表を作成する方法について説明したトピックを参照してください。
 - Common Event Infrastructure データベース: 『イベント・データベースの構成』とそのサブトピック。
 - 共通データベース: 『プロファイルの作成後または拡張後の共通データベースとテーブルの作成』。
 - f. データベースの構成時に、プロファイルに関連付けられているファースト・ステップ・コンソールを開始します。
3. ご使用の環境で Business Process Choreographer コンポーネントを使用する予定がある場合、データベース管理者に Business Process Choreographer データベースの作成および構成を依頼する必要がある場合があります。

詳しくは、『Business Process Choreographer の構成』セクションを参照してください。

以下のいずれかの作業が完了しました。

- WebSphere Application Server、WebSphere Application Server Network Deployment、または WebSphere Enterprise Service Bus プロファイルの IBM Business Process Manager プロファイルへの拡張。
- WebSphere Application Server または WebSphere Application Server Network Deployment プロファイルの WebSphere Enterprise Service Bus プロファイルへの拡張。

ファースト・ステップ・コンソールから「サーバーの起動」を選択してサーバーの作動をチェックします。出力ウィンドウが開きます。次のようなメッセージが表示される場合、サーバーは正常に作動しています。

ADMU3000I: e-business のサーバー server1 がオープンしました。
プロセス ID は 3348 です
(Server server1 open for e-business; process id is 3348)

ファースト・ステップ・コンソールからインストール検査テスト (IVT) を実行するか、**wbi_ivt** コマンド行ユーティリティを実行することで、サーバーの動作を確認することもできます。このテストは、デプロイメント・マネージャーまたはスタンドアロン・サーバーのインストール環境が正常に動作していることが確認するものです。Process Server スタンドアロン・サーバー・プロファイルの場合はシステム正常性検査も実行され、レポートが生成されます。

関連タスク:

855 ページの『「**詳細 (Advanced)**」 オプションを使用した Process Server スタンドアロン・プロファイルの拡張』

プロファイル管理ツールのグラフィカル・ユーザー・インターフェース (GUI) 上の「**詳細プロファイル拡張**」オプションを使用して、Process Server スタンドアロン・プロファイルを拡張します。「**詳細**」オプションを選択して、カスタマイズした構成設定でプロファイルを拡張します。

データベースが定義されていない場合の「**詳細**」オプションを使用したスタンドアロン・プロファイルの拡張:

プロファイル管理ツールのグラフィカル・ユーザー・インターフェース (GUI) にある「**詳細プロファイル拡張**」オプションを使用して、カスタマイズした構成設定で Process Server スタンドアロン・プロファイルを拡張します。この Process Server スタンドアロン・プロファイルは、システム上でデータベースがまだ定義されていない場合に拡張することができます。

IBM BPM Advanced、Process Server スタンドアロン・プロファイル は、それ独自のコンソールから管理する定義済みサーバー環境で、他のすべての Process Server から独立して機能します。開始する前に、このプロファイルのサーバーを停止し、BPM Advanced インストール済み環境からプロファイル管理ツールを起動しておく必要があります。855 ページの『「**詳細 (Advanced)**」 オプションを使用した Process Server スタンドアロン・プロファイルの拡張』の手順を使用して詳細プロファイル拡張を開始し、このタスクのステップから再開します。

要確認: すべての IBM Business Process Manager プロファイルで管理セキュリティが有効になっています。

1. オプション: 設計ファイルを使用してデータベースを構成します。このオプションは、「**拡張**」オプションを使用して作成されたスタンドアロン・サーバー・プロファイルおよびデプロイメント・マネージャー・プロファイルの両方で使用できます。
 - a. 「**データベースの構成にはデータベース設計ファイルを使用する**」を選択します。
 - b. 「**参照**」をクリックします。
 - c. 設計ファイルの完全修飾パス名を選択します。
 - d. 「**次へ**」をクリックします。

設計ファイルの指定を選択する場合、Profile Management Tool のデータベース構成パネルはスキップされます。代わりに、データベース構成を完了するために、設計ファイルの場所がコマンド行に渡されます。データベース構成用の設計ファイルの使用について詳しくは、922 ページの『データベース設計ツールを使用したデータベース設計ファイルの作成』を参照してください。

2. 「Process Server 構成」ページで、以下のパラメーターの値を設定します。

環境名

構成する環境の名前を指定します。

環境タイプの選択

以下のオプションがあります。

- 実稼働

実動キャパシティーでサーバーを実行する場合は、「**実動**」を選択します。

- ステージ

実動前サーバーとして使用されるステージング・プラットフォームとしてサーバーが機能することになる場合は、「**ステージング**」を選択します。

- テスト

構成するサーバーをテスト環境として使用する場合は、「**テスト**」を選択します。

環境タイプは、Process Server の使用方法を示します。例えば、Process Server を使用するキャパシティー（**実動**、**ステージング**、または**テスト**）です。テスト・サーバーでは負荷テストを実行できます。ステージング環境タイプは、変更を実動環境に反映する前にそれらの変更をホストするための一時的なロケーションとして使用できます。構成する Process Server が、コンテンツおよび新機能のレビューを目的としてアクセスおよび使用される場合は、「**環境タイプ**」として「**ステージング**」を指定することが考えられます。

Process Center の構成情報

Process Server の接続先の Process Center を構成します。

以下のフィールドにパラメーターを設定します。

- **サーバーをオフラインで使用する**

構成しているサーバーがオフライン・サーバーであるかどうかを示します。

オフライン・サーバーは、Process Center に接続されていない Process Server です。

オフライン・サーバーは、Process App の Snapshot をデプロイするときにも使用できます。ただし、Process App をオフラインの Process Server にデプロイする方法は、Process App をオンラインの Process Server にデプロイする方法とは異なります。

- **プロトコル**

Process Center への接続プロトコルとして「**http://**」または「**https://**」を選択します。

- **ホスト名**

この Process Server が Process Center と通信するために必要なホストまたは仮想ホストを入力します。完全修飾ホスト名を使用します。

Process Server と Process Center サービスとの間にロード・バランサーまたはプロキシ・サーバーが存在する環境の場合、ここでの設定内容が Process Center にアクセスするための URL と一致していることを確認してください。

- **ポート**

Process Center のポート番号を入力します。Process Server と Process Center との間にロード・バランサーまたはプロキシ・サーバーが存在する環境の場合、ここでの設定内容が Process Center にアクセスするための URL と一致していることを確認してください。

- **ユーザー名**

Process Center にログオンする際に使用するユーザー名を入力します。

- パスワード

Process Center にログオンする際に使用するパスワードを入力します。

- パスワードの確認

Process Center にログオンする際に使用するパスワードを確認します。

「接続のテスト」をクリックすることによって、Process Center への接続をテストできます。

「次へ」をクリックします。

3. 「データベース構成 - パート 1」ページで、以下のアクションを実行します。

- 「**データベース製品の選択 (Select a database product)**」ドロップダウン・リストから、プロファイルで使用されるデータベース製品を選択します。
- 「**新規ローカル・データベースの作成**」または「**既存のローカルまたはリモート・データベースの使用 (Use an existing local or remote database)**」を選択します。

データベース製品として DB2 を選択した場合は、新規データベースの作成を選択できます。DB2 はソフトウェアに組み込まれているため、プロファイル管理ツールにより新規 DB2 データベースが作成されます。

ソフトウェアで使用するデータベース製品が既に存在する場合は、「**既存のローカルまたはリモート・データベースの使用 (Use an existing local or remote database)**」を選択します。

- 「**Process Server データベース名 (Process Server database name)**」フィールドにデータベースの名前を入力するか、またはデフォルト値 **BPMDB** をそのまま使用します。
- 「**Performance Data Warehouse データベース名 (Performance Data Warehouse database name)**」フィールドにデータベースの名前を入力するか、またはデフォルト値 **PDWDB** をそのまま使用します。
- 「**共通データベース名**」フィールドで、共通データベースの名前を入力するか、**CMNDB** デフォルト値を受け入れます。
- データベース表の作成に使用される SQL スクリプトが書き込まれるディレクトリーを設定する場合は、「**データベース・スクリプトのデフォルト出力ディレクトリーをオーバーライドする (Override the default output directory for database scripts)**」チェック・ボックスを選択します。

このチェック・ボックスを選択しない場合、スクリプトはデフォルト・ディレクトリーに出力されます。

- データベース・スクリプトを自動で (プロファイル作成プロセスの一部として) 実行する場合は、「**データベース・スクリプトを実行してデータベースを初期化 (Run database scripts to initialize the databases)**」チェック・ボックスを選択します。このチェック・ボックスを選択しない場合、プロファイル作成の完了後に、ユーザー自身またはデータベース管理者がスクリプトを手動で実行できます。

4. 「データベース構成 - パート 2」ページで、選択したデータベースの構成を指定します。各必須フィールドについて詳しくは、『プロファイル管理ツール構成のデータベース構成パラメーター』を参照してください。

以下のデータベースのパラメーターを構成できます。

- DB2** 「データベース構成 (その 2)」ページで DB2 データベースの値を設定した後に、「次へ」をクリックして「プロファイル拡張の要約」ページに進みます。

DB2 Universal Database for z/OS

DB2 Universal Database for z/OS を使用して新規データベースを作成することはできません。Performance Data Warehouse データベースが存在している必要があり、スタンドアロン・サーバー・プロファイルの場合は Process Server データベースも必要です。「データベース構成 (その 2)」ページで DB2 Universal Database for z/OS の値を設定した後に、「次へ」をクリックして「プロファイル拡張の要約」ページに進みます。

Microsoft SQL Server

「データベース構成 - パート 2」ページで Microsoft SQL Server データベースの値を設定した後に、「次へ」をクリックして「データベース構成 - パート 3」ページに進みます。「データベース構成 - パート 3」ページでの構成が完了したら、「次へ」をクリックして「プロファイル拡張の要約」ページに進みます。

Oracle このデータベースを使用して新規データベースを作成することはできません。

重要: プロファイルを作成する前に、SYSDBA 特権のあるユーザー ID を取得している必要があります。

「データベース構成 - パート 2」ページで Oracle データベースの値を設定した後に、「次へ」をクリックして「データベース構成 - パート 3」ページに進みます。「データベース構成 - パート 3」ページでの構成が完了したら、「次へ」をクリックして「プロファイル拡張の要約」ページに進みます。

5. (注: このステップは DB2 環境および DB2 Universal Database for z/OS 環境にのみ適用されます。) 「Business Process Choreographer の構成」で、サンプル Business Process Choreographer 構成を作成するかどうかを選択します。
6. 「プロファイル拡張の要約」ページで、「**拡張**」をクリックしてプロファイルを拡張するか、「**戻る**」をクリックしてプロファイルの特性を変更します。「プロファイル構成の進行状況 (Profile Configuration Progress)」ウィンドウに構成の進行状況が表示されます。

プロファイルの拡張が完了すると、「プロファイル拡張の完了」ページに「プロファイル管理ツールにより、プロファイルが正常に拡張されました。」というメッセージが表示されます。

重要: プロファイルの拡張中にエラーが検出された場合、成功メッセージの代わりに他のメッセージが表示されます。それは、以下のようなメッセージです。

プロファイル管理ツールでプロファイルが拡張されましたが、エラーが発生しました

プロファイル拡張が完了しましたが、エラーが発生したことを示します。

プロファイル管理ツールでプロファイルを拡張できません

プロファイル拡張が完全に失敗したことを示します。

「プロファイル完了 (Profile Complete)」ページには、問題をトラブルシューティングする際に参照するログ・ファイルが示されます。

7. 手動で実行するスクリプトを作成して実際のデータベース構成を先送りするように選択したかどうかに応じて、以下のタスクのいずれかを実行し、Process Server スタンドアロン・プロファイルの構成を完了します。
 - プロファイル管理ツールを使用した共通データベース、Performance Data Warehouse データベースおよび Process Server データベースの構成が完了したら、以下のステップを実行します。
 - a. 「**ファースト・ステップ・コンソールを起動する**」オプションが選択されていることを確認します。
 - b. 「**終了**」をクリックして終了します。

- c. 別のウィンドウで開いている「プロファイル」ページを閉じます。
- d. ファースト・ステップ・コンソールを使用して、サーバーを始動します。
- Common Event Infrastructure コンポーネントを使用する場合は、そのデータベースを手動で作成する必要があります。『Common Event Infrastructure (CEI) データベースの構成』を参照してください。
- 手動で実行するスクリプトを生成して実際のデータベース構成を延期することを選択した場合は、以下のステップを実行します。
 - a. 「ファースト・ステップ・コンソールを起動する」の横にあるチェック・ボックスをクリアします。
 - b. 「終了」をクリックして、プロファイル管理ツールを閉じます。
 - c. 別のウィンドウで開いている「プロファイル」ページを閉じます。
 - d. サイトの標準的なデータベース定義ツールと手順を使用して、プロファイル管理ツールにより生成されたスクリプトを編集して実行し、**CMNDB** データベースを作成するか、または作成して構成します。
 - e. 新規データベースを手動で作成する方法、または既存のデータベースで新規表を作成する方法について説明したトピックを参照してください。
 - Common Event Infrastructure データベース: 『イベント・データベースの構成』とそのサブトピック。
 - 共通データベース: 『プロファイルの作成後または拡張後の共通データベースとテーブルの作成』。
 - f. データベースの構成時に、プロファイルに関連付けられているファースト・ステップ・コンソールを開始します。
- 8. ご使用の環境で Business Process Choreographer コンポーネントを使用する予定がある場合、データベース管理者に Business Process Choreographer データベースの作成および構成を依頼する必要がある場合があります。

詳しくは、『Business Process Choreographer の構成』にある各トピックを参照してください。

以下のいずれかの作業が完了しました。

- WebSphere Application Server、WebSphere Application Server Network Deployment、または WebSphere Enterprise Service Bus プロファイルの IBM Business Process Manager プロファイルへの拡張。
- WebSphere Application Server または WebSphere Application Server Network Deployment プロファイルの WebSphere Enterprise Service Bus プロファイルへの拡張。

ファースト・ステップ・コンソールから「**サーバーの起動**」を選択してサーバーの作動をチェックします。出力ウィンドウが開きます。次のようなメッセージが表示される場合、サーバーは正常に作動しています。

```
ADMU3000I: e-business のサーバー server1 がオープンしました。
プロセス ID は 3348 です
(Server server1 open for e-business; process id is 3348)
```

ファースト・ステップ・コンソールからインストール検査テスト (IVT) を実行するか、**wbi_ivt** コマンド行ユーティリティを実行することで、サーバーの動作を確認することもできます。このテストは、デプロイメント・マネージャーまたはスタンドアロン・サーバーのインストール環境が正常に動作していることが確認するものです。Process Server スタンドアロン・サーバー・プロファイルの場合はシステム正常性検査も実行され、レポートが生成されます。

関連タスク:

855 ページの『「詳細 (Advanced)」 オプションを使用した Process Server スタンドアロン・プロファイルの拡張』

プロファイル管理ツールのグラフィカル・ユーザー・インターフェース (GUI) 上の「詳細プロファイル拡張」オプションを使用して、Process Server スタンドアロン・プロファイルを拡張します。「詳細」オプションを選択して、カスタマイズした構成設定でプロファイルを拡張します。

「詳細 (Advanced)」 オプションを使用した WebSphere ESB スタンドアロン・プロファイルの拡張:

プロファイル管理ツールの「詳細プロファイル拡張」オプションを使用して、WebSphere Enterprise Service Bus のスタンドアロン・サーバー・プロファイルを拡張して構成します。「詳細」オプションを選択すると、カスタマイズした構成設定でプロファイルが拡張されます。

スタンドアロン・プロファイル、Network Deployment プロファイル、およびカスタム・プロファイルの違いなど、プロファイルの概念を理解していること。

「標準プロファイル拡張」オプションと「詳細プロファイル拡張」オプションの違いについて、どのシナリオのもとで一方を他方より優先して使用する必要があるかを含めて理解してください。

- 230 ページの『プロファイルの作成または拡張に関する前提条件』で、プロファイルを作成または拡張するための前提条件リストを確認してください。

プロファイル管理ツールを既に開始しており、WebSphere ESB スタンドアロン・プロファイルの拡張を選択し、「詳細プロファイル拡張」オプションを選択していると想定しています。

「拡張」オプションを選択することで、以下のタスクを実行できます。

- 共通データベースを構成します。
- 拡張するプロファイルでセキュリティが有効になっている場合は、作成する WebSphere Enterprise Service Bus プロファイルで管理セキュリティを有効にできます。
- 拡張するプロファイルでセキュリティが有効になっている場合は、DB2 Express を使用して、Business Space powered by WebSphere を構成します。
- 共通データベース構成を DB2 に設定します (拡張するプロファイルでまだ構成されていない場合)。
- 拡張するプロファイルでセキュリティが有効になっている場合は、DB2 を使用して、Business Space powered by WebSphere を構成します (まだ構成されていない場合)。
- データベース設計ファイルを使用してデータベースを構成します。

重要: このトピックの手順には、「拡張」オプションを使用して WebSphere ESB スタンドアロン・プロファイルを拡張する際に表示される可能性がある、プロファイル管理ツールのページがすべて含まれています。ただし、拡張するプロファイルに構成済みコンポーネント (共通データベース、Business Space powered by WebSphere など) がすでに含まれている場合は、プロファイル管理ツール内のこれらのコンポーネント用のページは表示されません。

812 ページの『プロファイル管理ツールを使用したプロファイルの拡張』の手順の実行結果として表示されるページは、拡張するプロファイル上のセキュリティおよびデータベースの状態によって異なります。管理セキュリティを既に有効にしている場合は、ステップ 1 をスキップしてかまいません。

1. 管理セキュリティが有効でない場合は有効にします。

このページが表示された場合、拡張する WebSphere ESB プロファイルでセキュリティが有効になっています。そのプロファイルの管理ユーザー ID およびパスワードを再入力する必要があります。

拡張するプロファイルで WebSphere Application Server サンプル・アプリケーションがデプロイされている場合は、実行するアカウントが必要です。アカウントのパスワードを指定してください。アカウントのユーザー名は変更できません。

2. 「ビジネス・スペースの構成」 ページで、「**ビジネス・スペースの構成**」チェック・ボックスをオンにして、Business Space powered by WebSphere をセットアップします。これは、IBM Business Process Management ポートフォリオでアプリケーション・ユーザー用に統合されたユーザー・エクスペリエンスです。Business Space 内のヒューマン・タスク管理ウィジェットと連携するように IBM Forms Server を構成する場合は、「**IBM Forms Server の構成 (Configure IBM Forms Server)**」チェック・ボックスを選択し、Webform Server 変換プログラムおよびインストール・ルートを入力します。

注: Business Space は、以下のデータベース製品でサポートされています。

- DB2 Express
- DB2[®] Universal
- DB2 for z/OS[®]
- Oracle
- Microsoft SQL Server

WebSphere ESB で使用するデータベースが、Business Space でサポートされているデータベースと一致しない場合、Business Space の構成には DB2 Express が選択されます。

スタンドアロン・プロファイルを WebSphere ESB スタンドアロン・プロファイルに拡張する作業を開始しました。

以下の要因に応じて、拡張を完了させます。

- システム上でデータベースが定義されていない
- システム上でデータベースが定義されている

関連タスク:

868 ページの『データベースが定義されている場合の「詳細」オプションを使用した WebSphere ESB スタンドアロン・プロファイルの拡張』

プロファイル管理ツールの「**詳細プロファイル拡張**」オプションを使用して、WebSphere Enterprise Service Bus のスタンドアロン・サーバー・プロファイルを拡張して構成します。「**詳細**」オプションを選択すると、カスタマイズした構成設定でプロファイルが拡張されます。

866 ページの『データベースが定義されていない場合の「詳細」オプションを使用した WebSphere ESB スタンドアロン・プロファイルの拡張』

プロファイル管理ツールの「**詳細プロファイル拡張**」オプションを使用して、WebSphere Enterprise Service Bus のスタンドアロン・サーバー・プロファイルを拡張して構成します。「**詳細**」オプションを選択すると、カスタマイズした構成設定でプロファイルが拡張されます。

関連資料:

893 ページの『プロファイル管理ツール構成のデータベース構成フィールド』

スタンドアロン環境のプロファイルを作成するには、データベース情報が必要です。必要な情報は、使用するデータベースによって異なります。

データベースが定義されていない場合の「詳細」オプションを使用した WebSphere ESB スタンドアロン・プロファイルの拡張:

プロファイル管理ツールの「詳細プロファイル拡張」オプションを使用して、WebSphere Enterprise Service Bus のスタンドアロン・サーバー・プロファイルを拡張して構成します。「詳細」オプションを選択すると、カスタマイズした構成設定でプロファイルが拡張されます。

864 ページの『「詳細 (Advanced)」オプションを使用した WebSphere ESB スタンドアロン・プロファイルの拡張』の手順を使用して詳細プロファイル拡張を開始し、このタスクのステップから再開します。

このタスクでは、システムでデータベースが定義されておらず、かつ定義する必要がある場合に、プロファイル管理ツールのユーザー・インターフェースにある「詳細プロファイル拡張」オプションを使用してスタンドアロン・プロファイルを拡張する作業について説明します。

1. オプション: 設計ファイルを使用してデータベースを構成します。このオプションは、「拡張」オプションを使用して作成したスタンドアロン・サーバーのプロファイルとデプロイメント・マネージャーのプロファイルの両方で使用できます。
 - a. 「データベースの構成にはデータベース設計ファイルを使用する」を選択します。
 - b. 「参照」をクリックします。
 - c. 設計ファイルの完全修飾パス名を選択します。
 - d. 「次へ」をクリックします。

設計ファイルの指定を選択する場合、Profile Management Tool のデータベース構成パネルはスキップされます。代わりに、データベース構成を完了するために、設計ファイルの場所がコマンド行に渡されます。データベース構成に設計ファイルを使用する方法については、『データベース設計ツールを使用したデータベース設計ファイルの作成』を参照してください。

2. 「データベース構成」ページで、選択した WebSphere Enterprise Bus コンポーネントで使用されるデータベースを構成します。各必須フィールドについては、『プロファイル管理ツール構成のデータベース構成パラメーター』を参照してください。

以下のデータベースのパラメーターを構成できます。

DB2 「データベース構成 - パート 2」ページで DB2 データベースの値を設定した後に、「次へ」をクリックして「プロファイルの要約」ページに進みます。

DB2 Universal Database for z/OS

DB2 Universal Database for z/OS を使用して新規データベースを作成することはできません。Performance Data Warehouse データベースが存在している必要があり、スタンドアロン・サーバー・プロファイルの場合は Process Server データベースも必要です。「データベース構成 - パート 2」ページで DB2 Universal Database for z/OS の値を設定した後に、「次へ」をクリックして「プロファイルの要約」ページに進みます。

Microsoft SQL Server

「データベース構成 - パート 2」ページで Microsoft SQL Server データベースの値を設定した後に、「次へ」をクリックして「データベース構成 - パート 3」ページに進みます。「データベース構成 - パート 3」ページでの構成が完了したら、「次へ」をクリックして「プロファイルの要約」ページに進みます。

Oracle このデータベースを使用して新規データベースを作成することはできません。

重要: プロファイルを作成する前に、SYSDBA 特権のあるユーザー ID を取得している必要があります。

「データベース構成 - パート 2」ページで Oracle データベースの値を設定した後に、「次へ」をクリックして「データベース構成 - パート 3」ページに進みます。「データベース構成 - パート 3」ページでの構成が完了したら、「次へ」をクリックして「プロファイルの要約」ページに進みます。

3. 「プロファイルの要約」ページで、「**拡張**」をクリックしてプロファイルを拡張するか、「**戻る**」をクリックしてプロファイルの特性を変更します。

プロファイルの拡張が完了すると、「プロファイル拡張の完了」ページに「プロファイル管理ツールにより、プロファイルが正常に拡張されました。」というメッセージが表示されます。

重要: プロファイルの拡張中にエラーが検出された場合、成功メッセージの代わりに他のメッセージが表示されます。それは、以下のようなメッセージです。

プロファイル管理ツールでプロファイルが拡張されましたが、エラーが発生しました
プロファイル拡張が完了しましたが、エラーが発生したことを示します。

プロファイル管理ツールでプロファイルを拡張できません
プロファイル拡張が完全に失敗したことを示します。

「プロファイル完了 (Profile Complete)」ページには、問題のトラブルシューティングを行うために参照するログ・ファイルが示されます。

4. **Common Event Infrastructure** データベースと共通データベースを手動で構成する必要があるかどうかに応じて、以下のタスクのいずれかを実行し、スタンドアロン・プロファイルの構成を完了します。
 - プロファイル管理ツールを使用した共通データベースの構成が完了したら、以下のステップを実行します。
 - a. 「**ファースト・ステップ・コンソールを起動する**」オプションが選択されていることを確認します。
 - b. 「**終了**」をクリックして終了します。
 - c. 別のウィンドウで開いている「プロファイル」ページを閉じます。
 - d. ファースト・ステップ・コンソールを使用して、サーバーを始動します。
 - **Common Event Infrastructure** コンポーネントを使用する場合は、そのデータベースを手動で作成する必要があります。『**Common Event Infrastructure (CEI) データベースの構成**』を参照してください。
 - 手動で実行するスクリプトを生成して実際のデータベース構成を延期することを選択した場合は、以下のステップを実行します。
 - a. 「**ファースト・ステップ・コンソールを起動する**」チェック・ボックスをクリアします。
 - b. 「**終了**」をクリックして、プロファイル管理ツールを閉じます。
 - c. 別のウィンドウで開いている「プロファイル」ページを閉じます。
 - d. サイトの標準的なデータベース定義ツールと手順を使用して、プロファイル管理ツールにより生成されたスクリプトを編集して実行し、**CMNDB** データベースを作成するか、または作成および構成します。
 - e. 新規データベースを手動で作成する方法、または既存のデータベースで新規表を作成する方法について説明したトピックを参照してください。
 - f. データベースの構成時に、『**ファースト・ステップ・コンソールの開始**』で説明されているように、プロファイルと関連付けられたファースト・ステップ・コンソールを開始します。

スタンドアロン・プロファイルを WebSphere ESB スタンドアロン・プロファイルに拡張しました。

プロファイル内のノードのサーバーは、**server1** (Linux、UNIX、および Windows プラットフォームの場合) という名前になります。

ファースト・ステップ・コンソールから「**サーバーの起動**」を選択してサーバーの作動をチェックします。出力ウィンドウが開きます。次のようなメッセージが表示される場合、サーバーは正常に作動しています。

```
ADMU3000I: e-business のサーバー server1 がオープンしました。  
プロセス ID は 3348 です  
(Server server1 open for e-business; process id is 3348)
```

ファースト・ステップ・コンソールからインストール検査テスト (IVT) を実行するか、**wbi_ivt** コマンド行ユーティリティを実行することで、サーバーの動作を確認することもできます。このテストは、デプロイメント・マネージャーまたはスタンドアロン・サーバーのインストール環境が正常に動作していることが確認するものです。

関連タスク:

864 ページの『「**詳細 (Advanced)**」オプションを使用した WebSphere ESB スタンドアロン・プロファイルの拡張』

プロファイル管理ツールの「**詳細プロファイル拡張**」オプションを使用して、WebSphere Enterprise Service Bus のスタンドアロン・サーバー・プロファイルを拡張して構成します。「**詳細**」オプションを選択すると、カスタマイズした構成設定でプロファイルが拡張されます。

データベースが定義されている場合の「**詳細**」オプションを使用した WebSphere ESB スタンドアロン・プロファイルの拡張:

プロファイル管理ツールの「**詳細プロファイル拡張**」オプションを使用して、WebSphere Enterprise Service Bus のスタンドアロン・サーバー・プロファイルを拡張して構成します。「**詳細**」オプションを選択すると、カスタマイズした構成設定でプロファイルが拡張されます。

864 ページの『「**詳細 (Advanced)**」オプションを使用した WebSphere ESB スタンドアロン・プロファイルの拡張』の手順を使用して詳細プロファイル拡張を開始し、このタスクのステップから再開します。

このタスクでは、システムでデータベースが定義されている場合に、プロファイル管理ツールのユーザー・インターフェースにある「**詳細プロファイル拡張**」オプションを使用してスタンドアロン・プロファイルを拡張する作業について説明します。

1. 「プロファイルの要約」ページで、「**拡張**」をクリックしてプロファイルを拡張するか、「**戻る**」をクリックしてプロファイルの特性を変更します。

プロファイルの拡張が完了すると、「プロファイル拡張の完了」ページに「プロファイル管理ツールにより、プロファイルが正常に拡張されました。」というメッセージが表示されます。

重要: プロファイルの拡張中にエラーが検出された場合、成功メッセージの代わりに他のメッセージが表示されます。それは、以下のようなメッセージです。

プロファイル管理ツールでプロファイルが拡張されましたが、エラーが発生しました
プロファイル拡張が完了しましたが、エラーが発生したことを示します。

プロファイル管理ツールでプロファイルを拡張できません
プロファイル拡張が完全に失敗したことを示します。

「プロファイル完了 (Profile Complete)」ページには、問題のトラブルシューティングを行うために参照するログ・ファイルが示されます。

2. **Common Event Infrastructure** データベースと共通データベースを手動で構成する必要があるかどうかに応じて、以下のタスクのいずれかを実行し、スタンドアロン・プロファイルの構成を完了します。

- プロファイル管理ツールを使用した共通データベースの構成が完了したら、以下のステップを実行します。
 - a. 「**ファースト・ステップ・コンソールを起動する**」オプションが選択されていることを確認します。
 - b. 「**終了**」をクリックして終了します。
 - c. 別のウィンドウで開いている「プロファイル」ページを閉じます。
 - d. ファースト・ステップ・コンソールを使用して、サーバーを始動します。
- Common Event Infrastructure コンポーネントを使用する場合は、そのデータベースを手動で作成する必要があります。『Common Event Infrastructure (CEI) データベースの構成』を参照してください。
- 手動で実行するスクリプトを生成して実際のデータベース構成を延期することを選択した場合は、以下のステップを実行します。
 - a. 「**ファースト・ステップ・コンソールを起動する**」チェック・ボックスをクリアします。
 - b. 「**終了**」をクリックして、プロファイル管理ツールを閉じます。
 - c. 別のウィンドウで開いている「プロファイル」ページを閉じます。
 - d. サイトの標準的なデータベース定義ツールと手順を使用して、プロファイル管理ツールにより生成されたスクリプトを編集して実行し、**CMNDB** データベースを作成するか、または作成および構成します。また、新規のデータベースまたは既存のデータベース内の新規テーブルを手動で作成することについて説明しているトピックも参照してください。
 - e. データベースの構成時に、『ファースト・ステップ・コンソールの開始』で説明されているように、プロファイルと関連付けられたファースト・ステップ・コンソールを開始します。

スタンドアロン・プロファイルを WebSphere ESB スタンドアロン・プロファイルに拡張しました。

プロファイル内のノードのサーバーは、**server1** (Linux、UNIX、および Windows プラットフォームの場合) という名前になります。

ファースト・ステップ・コンソールから「**サーバーの起動**」を選択してサーバーの作動をチェックします。出力ウィンドウが開きます。次のようなメッセージが表示される場合、サーバーは正常に作動しています。

```
ADMU3000I: e-business のサーバー server1 がオープンしました。
プロセス ID は 3348 です
(Server server1 open for e-business; process id is 3348)
```

ファースト・ステップ・コンソールからインストール検査テスト (IVT) を実行するか、**wbi_ivt** コマンド行ユーティリティを実行することで、サーバーの動作を確認することもできます。このテストは、デプロイメント・マネージャーまたはスタンドアロン・サーバーのインストール環境が正常に動作していることが確認するものです。

関連タスク:

864 ページの『「**詳細 (Advanced)**」オプションを使用した WebSphere ESB スタンドアロン・プロファイルの拡張』

プロファイル管理ツールの「**詳細プロファイル拡張**」オプションを使用して、WebSphere Enterprise Service Bus のスタンドアロン・サーバー・プロファイルを拡張して構成します。「**詳細**」オプションを選択すると、カスタマイズした構成設定でプロファイルが拡張されます。

「標準 (Typical)」オプションを使用した Process Server デプロイメント・マネージャー・プロファイルの拡張:

プロファイル管理ツールのグラフィカル・ユーザー・インターフェース (GUI) の「標準プロファイル拡張」オプションを使用して、Process Server または WebSphere Enterprise Service Bus のデプロイメント・マネージャー・プロファイルを拡張し、構成します。「標準」オプションを選択すると、デフォルトの構成設定でプロファイルが拡張されます。

スタンドアロン・プロファイル、Network Deployment プロファイル、およびカスタム・プロファイルの違いなど、プロファイルの概念を理解していること。

「標準プロファイル拡張」オプションと「詳細プロファイル拡張」オプションの違いについて、どのシナリオのもとで一方を他方より優先して使用する必要があるかを含めて理解してください。

- 230 ページの『プロファイルの作成または拡張に関する前提条件』で、プロファイルを作成または拡張するための前提条件リストを確認してください。
- **Solaris** Solaris オペレーティング・システム上の Motif グラフィカル・ユーザー・インターフェースでプロファイル管理ツールを使用する場合、プロファイル管理ツールのデフォルト・サイズが、すべてのメッセージおよびボタンを表示するには小さすぎる可能性があります。この問題を修正するには、`install_root/.Xdefaults` ファイルに以下の行を追加します。

```
Eclipse*spacing:0  
Eclipse*fontList:-misc-fixed-medium-r-normal-*-10-100-75-75-c-60-iso8859-1
```

行を追加したら、プロファイル管理ツールを開始する前に次のコマンドを実行します。

```
xrdb -load user_home/.Xdefaults
```

このトピックでは、プロファイル管理ツールを使用してプロファイルを拡張することを前提としています。したがって、プロファイル管理ツールを既に開始しており、Process Server デプロイメント・マネージャー・プロファイルの拡張を選択し、「標準プロファイル拡張」オプションを選択しているものと想定しています。

このタスクでは、「標準 (Typical)」拡張オプションを使用して Process Server のデプロイメント・マネージャー・プロファイルを拡張する手順について説明します。「標準」拡張オプションを使用した「標準」拡張。「標準」拡張オプションを使用すると、共通データベース構成が DB2 に設定されます (拡張するプロファイルでまだ構成されていない場合)。

812 ページの『プロファイル管理ツールを使用したプロファイルの拡張』に記載されている手順に従って作業が完了していれば、「管理セキュリティ」ページが表示されます。すべての IBM Business Process Manager プロファイルでセキュリティが有効になっています。

1. 管理セキュリティを有効にする

「管理セキュリティ」ページから、拡張するプロファイルの管理ユーザー ID およびパスワードを再入力します。

拡張するプロファイルで WebSphere(r) Application Server サンプル・アプリケーションがデプロイされている場合は、実行するアカウントが必要です。アカウントのパスワードを指定してください。アカウントのユーザー名は変更できません。

2. 「プロファイル拡張の要約」ページで、「拡張」をクリックしてプロファイルを拡張するか、「戻る」をクリックしてプロファイルの特性を変更します。

「プロファイル構成の進行状況 (Profile Configuration Progress)」ウィンドウに構成の進行状況が表示されます。

プロファイルの拡張が完了すると、「プロファイル拡張の完了」ページに「プロファイル管理ツールにより、プロファイルが正常に拡張されました。」というメッセージが表示されます。

重要: プロファイルの拡張中にエラーが検出された場合、成功メッセージの代わりに他のメッセージが表示されます。それは、以下のようなメッセージです。

- 「プロファイル管理ツールでプロファイルが拡張されましたが、エラーが発生しました」：プロファイルの拡張が完了したが、エラーが生成されたことを示します。
- 「プロファイル管理ツールでプロファイルを拡張できません」：プロファイルの拡張が完全に失敗したことを示します。

「プロファイル完了 (Profile complete)」ページには、問題のトラブルシューティングを行うために参照するログ・ファイルが示されます。

3. 「プロファイル完了 (Profile Complete)」ページで、「ファースト・ステップ・コンソールの起動」が選択されていることを確認し、「終了」をクリックして終了します。また、別のウィンドウで開いている「プロファイル」ページも閉じてください。ファースト・ステップ・コンソールを使用して、サーバーを始動します。
4. ご使用の環境で Business Process Choreographer コンポーネントを使用する場合、それを構成する必要があります。データベース管理者に Business Process Choreographer データベースを作成し、構成してもらうことが必要になる場合があります。

詳しくは、『Business Process Choreographer の構成』にある各トピックを参照してください。

以下のタスクのいずれかが完了しました。

- WebSphere Application Server、WebSphere Application Server Network Deployment、または WebSphere Enterprise Service Bus プロファイルの IBM Business Process Manager プロファイルへの拡張。
- WebSphere Application Server または WebSphere Application Server Network Deployment プロファイルの WebSphere Enterprise Service Bus プロファイルへの拡張。

プロファイルで定義されたノードには、名前が **Dmgr** というデプロイメント・マネージャーがあります。

ファースト・ステップ・コンソールから「デプロイメント・マネージャーの開始」を選択して、サーバーの動作を確認します。出力ウィンドウが開きます。次のようなメッセージが表示される場合、デプロイメント・マネージャーは正常に作動しています。

```
ADMU3000I: サーバー dmgr が e-ビジネス用にオープン。プロセス ID は 3072  
(Server dmgr open for e-business; process id is 3072)
```

デプロイメント環境で、別のデータベースを作成して構成し、カスタム・プロファイルを作成してそれをご使用のデプロイメント・マネージャーに統合し、サーバーを作成し、ワークロード管理機能が必要な場合はクラスターを作成し、さらに、計画したインストール環境に固有のその他のタスクを実行する必要があります。計画した環境では、実行が必要なタスク、およびその実行順序を指示します。

インストールの計画について詳しくは、インストールについての PDF で『計画』セクションの各トピックを参照してください。IBM BPM Advanced で必要とされるデータベースについて詳しくは、「*IBM Business Process Manager for Multiplatforms* バージョン 7.0 のインストールおよび構成」PDF 内の『*IBM Process Server* の構成』>『データベースの構成』の各トピックを参照してください。または、 の各トピックを参照してください。

「標準」オプションを使用した WebSphere ESB のデプロイメント・マネージャー・プロファイルの拡張

プロファイル管理ツールのグラフィカル・ユーザー・インターフェース (GUI) 上の「標準プロファイル拡張」オプションを使用して、WebSphere ESB デプロイメント・マネージャー・プロファイルを拡張して構成します。「標準 (Typical)」オプションを選択すると、デフォルトの構成設定でプロファイルが拡張されます。

スタンドアロン・プロファイル、Network Deployment プロファイル、およびカスタム・プロファイルの違いなど、プロファイルの概念を理解していること。

「標準プロファイル拡張」オプションと「詳細プロファイル拡張」オプションの違いについて、どのシナリオのもとで一方を他方より優先して使用する必要があるかを含めて理解してください。

- 230 ページの『プロファイルの作成または拡張に関する前提条件』で、プロファイルを作成または拡張するための前提条件リストを確認してください。

この構成のタイプでは、プロファイル管理ツールは以下のタスクを実行します。

- 拡張するプロファイルでセキュリティーが有効になっている場合は、拡張する WebSphere ESB プロファイルで管理セキュリティーを有効にできます。
- 共通データベース構成を DB2 Express に設定します (拡張するプロファイルでまだ構成されていない場合)。

以下の表で説明するように、812 ページの『プロファイル管理ツールを使用したプロファイルの拡張』の手順の実行結果として表示されるページは、拡張するプロファイル上のセキュリティーおよびデータベースの状態によって異なります。

表 129. プロファイルのセキュリティー状態と、表示されるプロファイル管理ツールのページ

プロファイルのセキュリティーおよびデータベースの状態	表示されるページ	参照先
拡張する WebSphere ESB プロファイルでセキュリティーが有効になっています。	「管理セキュリティー」ページ	ステップ 1
拡張する WebSphere ESB プロファイルでセキュリティーが有効になっていません。	「プロファイルの要約」ページ	ステップ 2

1. 管理セキュリティーを有効にする

このページが表示された場合、拡張する WebSphere ESB プロファイルでセキュリティーが有効になっています。そのプロファイルの管理ユーザー ID およびパスワードを再入力する必要があります。

拡張するプロファイルで WebSphere Application Server サンプル・アプリケーションがデプロイされている場合は、実行するアカウントが必要です。アカウントのパスワードを指定してください。アカウントのユーザー名は変更できません。

2. 「プロファイルの要約」ページを確認し、「拡張」をクリックしてプロファイルを拡張するか、「戻る」をクリックしてプロファイルの特性を変更します。

構成の進行状況が、「プロファイル構成の進行 (Profile Configuration Progress)」ウィンドウに表示されます。

プロファイルの拡張が完了すると、「プロファイル拡張の完了」ページに「プロファイル管理ツールにより、プロファイルが正常に拡張されました。」というメッセージが表示されます。

重要: プロファイルの拡張中にエラーが検出された場合、成功メッセージの代わりに他のメッセージが表示されます。それは、以下のようなメッセージです。

- 「**プロファイル管理ツールでプロファイルが拡張されましたが、エラーが発生しました**」: プロファイルの拡張が完了したが、エラーが生成されたことを示します。
- 「**プロファイル管理ツールでプロファイルを拡張できません**」: プロファイルの拡張が完全に失敗したことを示します。

「プロファイル完了 (Profile complete)」ページには、問題のトラブルシューティングを行うために参照するログ・ファイルが示されます。

3. 「プロファイル完了 (Profile Complete)」ページで、「**ファースト・ステップ・コンソールの起動**」が選択されていることを確認し、「終了」をクリックして終了します。また、別のウィンドウで開いている「プロファイル」ページも閉じてください。ファースト・ステップ・コンソールを使用して、サーバーを始動します。

WebSphere Application Server または WebSphere Application Server Network Deployment プロファイルが WebSphere Enterprise Service Bus プロファイルに拡張されました。

プロファイルで定義されたノードには、名前が **Dmgr** というデプロイメント・マネージャーがあります。

ファースト・ステップ・コンソールから「**デプロイメント・マネージャーの開始**」を選択して、サーバーの動作を確認します。出力ウィンドウが開きます。次のようなメッセージが表示される場合、デプロイメント・マネージャーは正常に作動しています。

```
ADMU3000I: サーバー dmgr が e-ビジネス用にオープン。プロセス ID は 3072  
(Server dmgr open for e-business; process id is 3072)
```

デプロイメント環境で、別のデータベースを作成して構成し、カスタム・プロファイルを作成してそれをご使用のデプロイメント・マネージャーに統合し、サーバーを作成し、ワークロード管理機能が必要な場合はクラスターを作成し、さらに、計画したインストール環境に固有のその他のタスクを実行する必要がある場合があります。計画した環境では、実行が必要なタスク、およびその実行順序を指示します。

インストールの計画について詳しくは、インストールについての PDF で『**計画**』セクションの各トピックを参照してください。IBM BPM Advanced で必要とされるデータベースについて詳しくは、「**IBM Business Process Manager for Multiplatforms バージョン 7.0 のインストールおよび構成**」PDF 内の『**IBM Process Server の構成**』>『**データベースの構成**』の各トピックを参照してください。または、 の各トピックを参照してください。

「**詳細 (Advanced)**」オプションを使用した **Process Server デプロイメント・マネージャー・プロファイルの拡張**:

プロファイル管理ツールのグラフィカル・ユーザー・インターフェース (GUI) 上の「**拡張プロファイル作成**」オプションを使用して、Process Server のデプロイメント・マネージャー・プロファイルを拡張し、構成します。または WebSphere Enterprise Service Bus。「**詳細**」オプションを選択すると、カスタマイズした構成設定でプロファイルが拡張されます。

スタンドアロン・プロファイル、Network Deployment プロファイル、およびカスタム・プロファイルの違いなど、プロファイルの概念を理解していること。

「**標準プロファイル拡張**」オプションと「**詳細プロファイル拡張**」オプションの違いについて、どのシナリオのもとで一方を他方より優先して使用する必要があるかを含めて理解してください。

- 230 ページの『プロファイルの作成または拡張に関する前提条件』で、プロファイルを作成または拡張するための前提条件リストを確認してください。
- **Solaris** Solaris オペレーティング・システム上の Motif グラフィカル・ユーザー・インターフェースでプロファイル管理ツールを使用する場合、プロファイル管理ツールのデフォルト・サイズが、すべてのメッセージおよびボタンを表示するには小さすぎる可能性があります。この問題を修正するには、`install_root/.Xdefaults` ファイルに以下の行を追加します。

```
Eclipse*spacing:0
Eclipse*fontList:-misc-fixed-medium-r-normal-*-*10-100-75-75-c-60-iso8859-1
```

行を追加したら、プロファイル管理ツールを開始する前に次のコマンドを実行します。

```
xrdb -load user_home/.Xdefaults
```

このタスクでは、「詳細 (Advanced)」拡張オプションを使用して Process Server のデプロイメント・マネージャー・プロファイルを拡張する手順について説明します。

「拡張」オプションを選択することで、以下のタスクを実行できます。

- 共通データベースを構成します。
- データベース設計ファイルを使用してデータベースを構成します。

重要: このトピックの手順では、「拡張」オプションを使用してデプロイメント・マネージャー・プロファイルを構成するために、プロファイル管理ツールで使用可能なすべてのページの概要を示しています。特定のコンポーネント (共通データベースなど) が、拡張しようとしているプロファイルで既に構成されている場合は、そのコンポーネントの構成ページは表示されません。

IBM BPM 構成 (Advanced、Standard、または Express) からプロファイルを拡張する場合は、812 ページの『プロファイル管理ツールを使用したプロファイルの拡張』の手順を実行した結果として、「管理セキュリティ」ページが表示されます。

以下の表で説明するように、WebSphere ESB プロファイルで拡張を実行する場合、812 ページの『プロファイル管理ツールを使用したプロファイルの拡張』の手順の実行結果として表示されるページは、拡張するプロファイル上のセキュリティおよびデータベースの状態によって異なります。

表 130. WebSphere ESB プロファイル上のセキュリティの状態と、表示されるプロファイル管理ツールのページ

プロファイルのセキュリティおよびデータベースの状態	表示されるページ	参照先
拡張中の WebSphere ESB プロファイルでセキュリティが有効になっています。	「管理セキュリティ」ページ	ステップ 1
拡張する WebSphere ESB プロファイルでセキュリティが有効でなく、共通データベースをまだ構成していない	「データベース設計」ページ	
拡張する WebSphere ESB プロファイルでセキュリティが有効でなく、共通データベースが構成済みである	「データベース・パスワード」ページ	

1. 「管理セキュリティ」ページから、拡張するプロファイルの管理ユーザー ID およびパスワードを再入力します。

「管理セキュリティ」ページが表示される場合は、拡張中のプロファイルでセキュリティが有効になっていることを意味します。そのプロファイルの管理ユーザー ID およびパスワードを再入力する必要があります。

2. 「管理セキュリティ」ページから、拡張するプロファイルの管理ユーザー ID およびパスワードを再入力します。

拡張するプロファイルで WebSphere(r) Application Server サンプル・アプリケーションがデプロイされている場合は、実行するアカウントが必要です。アカウントのパスワードを指定してください。アカウントのユーザー名は変更できません。

3. オプション: 設計ファイルを使用してデータベースを構成します。このオプションは、拡張スタンドアロン・サーバーのプロファイルと拡張デプロイメント・マネージャーのプロファイルの両方で使用できます。
 - a. 「データベースの構成にはデータベース設計ファイルを使用する」を選択します。
 - b. 「参照」をクリックします。
 - c. 設計ファイルの完全修飾パス名を選択します。
 - d. 「次へ」をクリックします。

設計ファイルの指定を選択する場合、Profile Management Tool のデータベース構成パネルはスキップされます。代わりに、データベース構成を完了するために、設計ファイルの場所がコマンド行に渡されます。データベース構成用の設計ファイルの使用について詳しくは、922 ページの『データベース設計ツールを使用したデータベース設計ファイルの作成』を参照してください。

4. 「プロファイル拡張の要約」ページで、「拡張」をクリックしてプロファイルを拡張するか、「戻る」をクリックしてプロファイルの特性を変更します。

「プロファイル構成の進行状況 (Profile Configuration Progress)」ウィンドウに構成の進行状況が表示されます。

プロファイルの拡張が完了すると、「プロファイル拡張の完了」ページに「プロファイル管理ツールにより、プロファイルが正常に拡張されました。」というメッセージが表示されます。

重要: プロファイルの拡張中にエラーが検出された場合、成功メッセージの代わりに他のメッセージが表示されます。それは、以下のようなメッセージです。

- 「プロファイル管理ツールでプロファイルが拡張されましたが、エラーが発生しました」: プロファイルの拡張が完了したが、エラーが生成されたことを示します。
- 「プロファイル管理ツールでプロファイルを拡張できません」: プロファイルの拡張が完全に失敗したことを示します。

「プロファイル完了 (Profile complete)」ページには、問題のトラブルシューティングを行うために参照するログ・ファイルが示されます。

以下のタスクのいずれかが完了しました。

- WebSphere Application Server、Application Server Network Deployment、または WebSphere ESB プロファイルの IBM Business Process Manager プロファイルへの拡張。
- WebSphere Application Server または Application Server Network Deployment プロファイルの WebSphere ESB プロファイルへの拡張。

ファースト・ステップ・コンソールから「デプロイメント・マネージャーの始動」を選択して、サーバーが作動することを確認します。出力ウィンドウが開きます。次のようなメッセージが表示される場合、デプロイメント・マネージャーは正常に作動しています。

ADMU3000I: サーバー dmgr が e-ビジネス用にオープン。プロセス ID は 3072
(Server dmgr open for e-business; process id is 3072)

デプロイメント環境で、別のデータベースを作成して構成し、カスタム・プロファイルを作成してそれをご使用のデプロイメント・マネージャーに統合し、サーバーを作成し、ワークロード管理機能が必要な場合はクラスターを作成し、さらに、計画したインストール環境に固有のその他のタスクを実行する必要がある場合があります。計画した環境では、実行が必要なタスク、およびその実行順序を指示します。

インストールの計画について詳しくは、「インストール、バージョン 7.5」PDF で『計画』セクションの各トピックを参照してください。IBM BPM Advanced で必要とされるデータベースについて詳しくは、「IBM BPM Advanced バージョン 7.5 のインストールおよび構成」PDF 内の『IBM Process Server の構成』>『データベースの構成』の各トピックを参照してください。または、の各トピックを参照してください。

「詳細 (Advanced)」オプションを使用した WebSphere ESB デプロイメント・マネージャー・プロファイルの拡張:

プロファイル管理ツールのグラフィカル・ユーザー・インターフェース (GUI) 上の「拡張プロファイル作成」オプションを使用して、デプロイメント・マネージャー・プロファイル (WebSphere Enterprise Service Bus 用)。「詳細」オプションを選択すると、カスタマイズした構成設定でプロファイルが拡張されます。

スタンドアロン・プロファイル、Network Deployment プロファイル、およびカスタム・プロファイルの違いなど、プロファイルの概念を理解していること。

「標準プロファイル拡張」オプションと「詳細プロファイル拡張」オプションの違いについて、どのシナリオのもとで一方を他方より優先して使用する必要があるかを含めて理解してください。

- 230 ページの『プロファイルの作成または拡張に関する前提条件』で、プロファイルを作成または拡張するための前提条件リストを確認してください。
- **Solaris** Solaris オペレーティング・システム上の Motif グラフィカル・ユーザー・インターフェースでプロファイル管理ツールを使用する場合、プロファイル管理ツールのデフォルト・サイズが、すべてのメッセージおよびボタンを表示するには小さすぎる可能性があります。この問題を修正するには、`install_root/.Xdefaults` ファイルに以下の行を追加します。

```
Eclipse*spacing:0  
Eclipse*fontList:-misc-fixed-medium-r-normal-*-10-100-75-75-c-60-iso8859-1
```

行を追加したら、プロファイル管理ツールを開始する前に次のコマンドを実行します。

```
xrdb -load user_home/.Xdefaults
```

このタスクでは、「詳細 (Advanced)」拡張オプションを使用して WebSphere ESB のデプロイメント・マネージャー・プロファイルを拡張する手順について説明します。

「拡張」オプションを選択することで、以下のタスクを実行できます。

- 共通データベースを構成します。
- データベース設計ファイルを使用してデータベースを構成します。

重要: このトピックの手順では、「拡張」オプションを使用してデプロイメント・マネージャー・プロファイルを構成するために、プロファイル管理ツールで使用可能なすべてのページの概要を示しています。特定のコンポーネント (共通データベースなど) が、拡張しようとしているプロファイルで既に構成されている場合は、そのコンポーネントの構成ページは表示されません。

以下の表に示すように、812 ページの『プロファイル管理ツールを使用したプロファイルの拡張』の手順の実行後に表示されるページは、拡張するプロファイル上のセキュリティーおよびデータベースの状態によって異なります。

表 131. プロファイルのセキュリティー状態と、表示されるプロファイル管理ツールのページ

プロファイルのセキュリティーおよびデータベースの状態	表示されるページ	参照先
拡張する WebSphere ESB プロファイルでセキュリティーが有効になっています。	「管理セキュリティー」 ページ	ステップ 1
拡張する WebSphere ESB プロファイルでセキュリティーが有効になっていません。	「データベース設計」 ページ	ステップ 3

1. 「管理セキュリティー」 ページから、拡張するプロファイルの管理ユーザー ID およびパスワードを再入力します。

「管理セキュリティー」 ページが表示される場合は、拡張中のプロファイルでセキュリティーが有効になっていることを意味します。そのプロファイルの管理ユーザー ID およびパスワードを再入力する必要があります。

2. 「管理セキュリティー」 ページから、拡張するプロファイルの管理ユーザー ID およびパスワードを再入力します。

拡張するプロファイルで WebSphere(r) Application Server サンプル・アプリケーションがデプロイされている場合は、実行するアカウントが必要です。アカウントのパスワードを指定してください。アカウントのユーザー名は変更できません。

3. オプション: 設計ファイルを使用してデータベースを構成します。このオプションは、拡張スタンドアロン・サーバーのプロファイルと拡張デプロイメント・マネージャーのプロファイルの両方で使用できます。
 - a. 「データベースの構成にはデータベース設計ファイルを使用する」を選択します。
 - b. 「参照」をクリックします。
 - c. 設計ファイルの完全修飾パス名を選択します。
 - d. 「次へ」をクリックします。

設計ファイルの指定を選択する場合、Profile Management Tool のデータベース構成パネルはスキップされます。代わりに、データベース構成を完了するために、設計ファイルの場所がコマンド行に渡されます。データベース構成用の設計ファイルの使用について詳しくは、922 ページの『データベース設計ツールを使用したデータベース設計ファイルの作成』を参照してください。

4. 「プロファイル拡張の要約」 ページで、「拡張」をクリックしてプロファイルを拡張するか、「戻る」をクリックしてプロファイルの特性を変更します。

「プロファイル構成の進行状況 (Profile Configuration Progress)」 ウィンドウに構成の進行状況が表示されます。

プロファイルの拡張が完了すると、「プロファイル拡張の完了」 ページに「プロファイル管理ツールにより、プロファイルが正常に拡張されました。」というメッセージが表示されます。

重要: プロファイルの拡張中にエラーが検出された場合、成功メッセージの代わりに他のメッセージが表示されます。それは、以下のようなメッセージです。

- 「プロファイル管理ツールでプロファイルが拡張されましたが、エラーが発生しました」: プロファイルの拡張が完了したが、エラーが生成されたことを示します。

- 「プロファイル管理ツールでプロファイルを拡張できません」: プロファイルの拡張が完全に失敗したことを示します。

「プロファイル完了 (Profile complete)」ページには、問題のトラブルシューティングを行うために参照するログ・ファイルが示されます。

WebSphere Application Server または Application Server Network Deployment プロファイルが WebSphere ESB プロファイルに拡張されました。

「標準 (Typical)」オプションを使用した *Process Server* のカスタム・プロファイル (管理対象ノード) の拡張:

プロファイル管理ツールの「標準」拡張オプションを使用して、WebSphere Application Server バージョン 7.0、WebSphere Application Server Network Deployment バージョン 7.0、または WebSphere Enterprise Service Bus バージョン 7.0 のカスタム・プロファイル (管理対象ノード) を *Process Server* プロファイルに拡張します。「標準」オプションを選択すると、デフォルトの構成設定でプロファイルが拡張されます。

プロファイル管理ツールを開始し、カスタム・プロファイルの拡張を選択して、「標準」プロファイル拡張オプションを選択しています。

この構成のタイプでは、拡張プロセス時に既存のデプロイメント・マネージャーにノードを統合するか、後で **addNode** コマンドを使用して統合するかを選択できます。拡張プロセス時にプロファイルを統合することを決定した場合は、このツールによって共通データベースの構成がデプロイメント・マネージャーと同じデータベースに設定されます。統合しないことを決定した場合は、データベースは未構成のままになります。

1. 「フェデレーション」ページで、ノードのデプロイメント・マネージャーへの統合をプロファイルの拡張の一部としてここで実行するか、またはプロファイルの拡張とは別に後で実行するかを選択します。
 - プロファイル拡張の一部としてノードを統合することを選択した場合は、デプロイメント・マネージャーのホスト名または IP アドレスと SOAP ポート、および認証ユーザー ID とパスワード (デプロイメント・マネージャー上で管理セキュリティが使用可能になっている場合) を指定します。「後でこのノードを統合する」チェック・ボックスを選択解除されたままにしておきます。そして、「次へ」をクリックします。

プロファイル管理ツールによって、デプロイメント・マネージャーが存在していて通信可能であること、および認証ユーザー ID とパスワードがそのデプロイメント・マネージャーで有効であること (デプロイメント・マネージャーがセキュリティで保護されている場合) が検査されます。

重要: 以下の条件すべてに該当する場合にのみ、プロファイルの拡張時にカスタム・ノードを統合してください。

- このカスタム・ノードをマイグレーション・ターゲットとして使用する予定がない。
- 他のノードは統合されていない (ノードの統合はシリアルライズする必要があります)。
- デプロイメント・マネージャーが実行されている。
- デプロイメント・マネージャーが IBM Business Process Manager デプロイメント・マネージャーである。IBM Business Process Manager プロファイルは WebSphere Enterprise Service Bus デプロイメント・マネージャーを使用できませんが、WebSphere Enterprise Service Bus プロファイルは IBM Business Process Manager デプロイメント・マネージャーを使用できます。
- デプロイメント・マネージャーが、拡張するカスタム・プロファイルと同じか、それより高いリリース・レベルである。
- デプロイメント・マネージャーで、JMX 管理ポートが有効になっている。デフォルト・プロトコルは SOAP です。(優先コネクタ・タイプを確認するには、デプロイメント・マネージャーの管理コンソールで「システム管理」>「デプロイメント・マネージャー」>「管理サービス」をクリックします。)

デプロイメント・マネージャーが実行中でないとき、またはほかの理由でデプロイメント・マネージャーを使用できないときに、カスタム・ノードを統合しようとする、警告ボックスが表示されて、続行できなくなります。この警告ボックスが表示されたら、「OK」をクリックしてこの警告パネルを終了し、「フェデレーション」ページで別の選択を行ってください。

- プロファイルの拡張とは別に、後でノードを統合することを選択する場合は、「後でこのノードを統合する」チェック・ボックスを選択して、「次へ」をクリックします。

「プロファイルの要約」ページが表示されます。

2. 「プロファイルの要約」ページで、「拡張」をクリックしてプロファイルを拡張するか、「戻る」をクリックしてプロファイルの特性を変更します。

プロファイルの拡張が完了すると、「プロファイル完了 (Profile Complete)」ページに「プロファイル管理ツールにより、プロファイルが正常に拡張されました。」というメッセージが表示されます。

重要: プロファイルの拡張中にエラーが検出された場合は、正常終了のメッセージの代わりに他のメッセージが表示される可能性があります。その例と意味は次のとおりです。

- 「プロファイル管理ツールでプロファイルが拡張されましたが、エラーが発生しました」: プロファイルの拡張が完了したが、エラーが生成されたことを示します。
- 「プロファイル管理ツールでプロファイルの拡張できません」: プロファイルの拡張が完全に失敗したことを示します。

「プロファイル完了 (Profile complete)」ページには、問題のトラブルシューティングを行うために参照するログ・ファイルが示されます。

3. 「プロファイル完了 (Profile Complete)」ページで、「ファースト・ステップ・コンソールの起動」が選択されていることを確認し、「終了」をクリックして終了します。また、別のウィンドウで開いている「プロファイル」ページも閉じてください。ファースト・ステップ・コンソールを使用して、製品資料にアクセスします。

以下のいずれかの作業が完了しました。

- WebSphere Application Server、WebSphere Application Server Network Deployment、または WebSphere Enterprise Service Bus プロファイルの IBM Business Process Manager プロファイルへの拡張。

- WebSphere Application Server または WebSphere Application Server Network Deployment プロファイルの WebSphere Enterprise Service Bus プロファイルへの拡張。

プロファイルの拡張中にプロファイルを統合しなかった場合、ここで統合します。プロファイル内のノードを統合し、デプロイメント・マネージャーを使用してそのノードをカスタマイズするまでは、そのノードは空です。

「標準」オプションを使用した WebSphere ESB カスタム (管理対象ノード) プロファイルの拡張:

プロファイル管理ツールの「標準」拡張オプションを使用して、WebSphere Application Server バージョン 7.0 または WebSphere Application Server Network Deployment バージョン 7.0 のプロファイルを WebSphere Enterprise Service Bus プロファイルに拡張および構成します。「標準」オプションを選択して、デフォルト構成設定でプロファイルを拡張します。

プロファイル管理ツールを開始し、カスタム・プロファイルの拡張を選択して、「標準」プロファイル拡張オプションを選択しています。

この構成のタイプでは、拡張プロセス時に既存のデプロイメント・マネージャーにノードを統合するか、後で **addNode** コマンドを使用して統合するかを選択できます。拡張プロセス時にプロファイルを統合することを決定した場合は、このツールによって共通データベースの構成がデプロイメント・マネージャーと同じデータベースに設定されます。統合しないことを決定した場合は、データベースは未構成のままになります。

1. 「フェデレーション」ページで、ノードのデプロイメント・マネージャーへの統合をプロファイルの拡張の一部としてここで実行するか、またはプロファイルの拡張とは別に後で実行するかを選択します。
 - プロファイル拡張の一部としてノードを統合することを選択した場合は、デプロイメント・マネージャーのホスト名または IP アドレスと SOAP ポート、および認証ユーザー ID とパスワード (デプロイメント・マネージャー上で管理セキュリティーが使用可能になっている場合) を指定します。「**後でこのノードを統合する**」チェック・ボックスを選択解除されたままにしておきます。そして、「**次へ**」をクリックします。

プロファイル管理ツールによって、デプロイメント・マネージャーが存在していて通信可能であること、および認証ユーザー ID とパスワードがそのデプロイメント・マネージャーで有効であること (デプロイメント・マネージャーがセキュリティーで保護されている場合) が検査されます。

重要: 以下の条件すべてに該当する場合にのみ、プロファイルの拡張時にカスタム・ノードを統合してください。

- このカスタム・ノードをマイグレーション・ターゲットとして使用する予定がない。
- 他のノードは統合されていない (ノードの統合はシリアルライズする必要があります)。
- デプロイメント・マネージャーが実行されている。
- デプロイメント・マネージャーが IBM Business Process Manager デプロイメント・マネージャーである。IBM Business Process Manager プロファイルは WebSphere Enterprise Service Bus デプロイメント・マネージャーを使用できませんが、WebSphere Enterprise Service Bus プロファイルは IBM Business Process Manager デプロイメント・マネージャーを使用できます。
- デプロイメント・マネージャーが、拡張するカスタム・プロファイルと同じか、それより高いリリース・レベルである。
- デプロイメント・マネージャーで、JMX 管理ポートが有効になっている。デフォルト・プロトコルは SOAP です。(優先コネクタ・タイプを確認するには、デプロイメント・マネージャーの管理コンソールで「システム管理」>「デプロイメント・マネージャー」>「管理サービス」をクリックします。)

デプロイメント・マネージャーが実行中でないとき、またはほかの理由でデプロイメント・マネージャーを使用できないときに、カスタム・ノードを統合しようとする、警告ボックスが表示されて、続行できなくなります。この警告ボックスが表示されたら、「OK」をクリックしてこの警告パネルを終了し、「フェデレーション」ページで別の選択を行ってください。

- プロファイルの拡張とは別に、後でノードを統合することを選択する場合は、「**後でこのノードを統合する**」チェック・ボックスを選択して、「**次へ**」をクリックします。

「プロファイルの要約」ページが表示されます。

2. 「プロファイルの要約」ページで、「**拡張**」をクリックしてプロファイルを拡張するか、「**戻る**」をクリックしてプロファイルの特性を変更します。

プロファイルの拡張が完了すると、「プロファイル完了 (Profile Complete)」ページに「**プロファイル管理ツールにより、プロファイルが正常に拡張されました。**」というメッセージが表示されます。

重要: プロファイルの拡張中にエラーが検出された場合は、正常終了のメッセージの代わりに他のメッセージが表示される可能性があります。その例と意味は次のとおりです。

- 「**プロファイル管理ツールでプロファイルが拡張されましたが、エラーが発生しました**」: プロファイルの拡張が完了したが、エラーが生成されたことを示します。
- 「**プロファイル管理ツールでプロファイルを拡張できません**」: プロファイルの拡張が完全に失敗したことを示します。

「プロファイル完了 (Profile complete)」ページには、問題のトラブルシューティングを行うために参照するログ・ファイルが示されます。

3. 「プロファイル完了 (Profile Complete)」ページで、「**ファースト・ステップ・コンソールの起動**」が選択されていることを確認し、「**終了**」をクリックして終了します。また、別のウィンドウで開いている「プロファイル」ページも閉じてください。ファースト・ステップ・コンソールを使用して、製品資料にアクセスします。

WebSphere Application Server または WebSphere Application Server Network Deployment プロファイルが WebSphere Enterprise Service Bus プロファイルに拡張されました。

プロファイルの拡張中にプロファイルを統合しなかった場合、ここで統合します。プロファイル内のノードを統合し、デプロイメント・マネージャーを使用してそのノードをカスタマイズするまでは、そのノードは空です。

「詳細 (Advanced)」オプションを使用した *Process Server* のカスタム・プロファイル (管理対象ノード) の拡張:

プロファイル管理ツールの「詳細 (Advanced)」拡張オプションを使用して、WebSphere Application Server バージョン 7.0、WebSphere Application Server Network Deployment バージョン 7.0、または WebSphere Enterprise Service Bus バージョン 7.0 のカスタム・プロファイル (管理対象ノード) を *Process Server* プロファイルに拡張します。「拡張」オプションを選択すると、拡張設定と構成設定をカスタマイズすることができます。

プロファイル管理ツールを開始し、カスタム・プロファイルの拡張を選択して、「拡張」プロファイル拡張オプションを選択しています。

カスタム・プロファイルの拡張中、拡張プロセス時にノードを既存のデプロイメント・マネージャーに統合するか、後で **addNode** コマンドを使用して統合するかを選択できます。

1. 「フェデレーション」ページで、ノードのデプロイメント・マネージャーへの統合をプロファイルの拡張の一部としてここで実行するか、またはプロファイルの拡張とは別に後で実行するかを選択します。

- プロファイル拡張の一部としてノードを統合することを選択した場合は、デプロイメント・マネージャーのホスト名または IP アドレスと SOAP ポート、および認証ユーザー ID とパスワード (デプロイメント・マネージャー上で管理セキュリティが使用可能になっている場合) を指定します。「後でこのノードを統合する」チェック・ボックスを選択解除されたままにしておきます。そして、「次へ」をクリックします。

プロファイル管理ツールによって、デプロイメント・マネージャーが存在していて通信可能であること、および認証ユーザー ID とパスワードがそのデプロイメント・マネージャーで有効であること (デプロイメント・マネージャーがセキュリティで保護されている場合) が検査されます。

重要: 以下の条件すべてに該当する場合にのみ、プロファイルの拡張時にカスタム・ノードを統合してください。

- このカスタム・ノードをマイグレーション・ターゲットとして使用する予定がない。
- 他のノードは統合されていない (ノードの統合はシリアルライズする必要があります)。
- デプロイメント・マネージャーが実行されている。
- デプロイメント・マネージャーが IBM Business Process Manager デプロイメント・マネージャーである。IBM Business Process Manager プロファイルは WebSphere Enterprise Service Bus デプロイメント・マネージャーを使用できませんが、WebSphere Enterprise Service Bus プロファイルは IBM Business Process Manager デプロイメント・マネージャーを使用できます。
- デプロイメント・マネージャーが、拡張するカスタム・プロファイルと同じか、それより高いリリース・レベルである。
- デプロイメント・マネージャーで、JMX 管理ポートが有効になっている。デフォルト・プロトコルは SOAP です。(優先コネクタ・タイプを確認するには、デプロイメント・マネージャーの管理コンソールで「システム管理」>「デプロイメント・マネージャー」>「管理サービス」をクリックします。)
- 拡張する管理対象ノードが既にデプロイメント・マネージャー・プロファイルに統合されている場合は、このカスタム・プロファイルの拡張時に、dmgr プロファイルが実行中でなければなりません。さらに、統合されたノードが確実に拡張されるように、デプロイメント・マネージャーのホスト名または IP アドレスと SOAP ポートを指定してください。

デプロイメント・マネージャーが実行中でないとき、またはほかの理由でデプロイメント・マネージャーを使用できないときに、カスタム・ノードを統合しようとする、警告ボックスが表示されて、続行できなくなります。この警告ボックスが表示されたら、「OK」をクリックしてこの警告パネルを終了し、「フェデレーション」ページで別の選択を行ってください。

- プロファイルの拡張とは別に、後でノードを統合することを選択する場合は、「**後でこのノードを統合する**」チェック・ボックスを選択して、「**次へ**」をクリックします。

「プロファイルの要約」ページが表示されます。

2. 「プロファイルの要約」ページで、「**拡張**」をクリックしてプロファイルを拡張するか、「**戻る**」をクリックしてプロファイルの特性を変更します。

プロファイルの拡張が完了すると、「プロファイル完了 (Profile Complete)」ページに「**プロファイル管理ツールにより、プロファイルが正常に拡張されました。**」というメッセージが表示されます。

重要: プロファイルの拡張中にエラーが検出された場合は、正常終了のメッセージの代わりに他のメッセージが表示される可能性があります。その例と意味は次のとおりです。

- 「**プロファイル管理ツールでプロファイルが拡張されましたが、エラーが発生しました**」: プロファイルの拡張が完了したが、エラーが生成されたことを示します。
- 「**プロファイル管理ツールでプロファイルを拡張できません**」: プロファイルの拡張が完全に失敗したことを示します。

「プロファイル完了 (Profile complete)」ページには、問題のトラブルシューティングを行うために参照するログ・ファイルが示されます。

3. 「プロファイル完了 (Profile Complete)」ページで、「**ファースト・ステップ・コンソールの起動**」が選択されていることを確認し、「**終了**」をクリックして終了します。また、別のウィンドウで開いている「プロファイル」ページも閉じてください。ファースト・ステップ・コンソールを使用して、製品資料にアクセスします。

以下のタスクのいずれかが完了しました。

- WebSphere Application Server、WebSphere Application Server Network Deployment、または WebSphere Enterprise Service Bus プロファイルの IBM Business Process Manager プロファイルへの拡張。
- WebSphere Application Server または WebSphere Application Server Network Deployment プロファイルの WebSphere Enterprise Service Bus プロファイルへの拡張。

プロファイルの拡張中にプロファイルを統合しなかった場合、ここで統合します。プロファイル内のノードを統合し、デプロイメント・マネージャーを使用してそのノードをカスタマイズするまでは、そのノードは空です。

「拡張」オプションを使用した WebSphere ESB カスタム (管理対象ノード) プロファイルの拡張:

プロファイル管理ツールの「詳細」拡張オプションを使用して、WebSphere Application Server バージョン 7.0 または WebSphere Application Server Network Deployment バージョン 7.0 のプロファイルを WebSphere Enterprise Service Bus プロファイルに拡張および構成します。「拡張」オプションを使用して、拡張設定と構成設定をカスタマイズします。

プロファイル管理ツールを開始し、カスタム・プロファイルの拡張を選択して、「拡張」プロファイル拡張オプションを選択しています。

カスタム・プロファイルの拡張中、拡張プロセス時にノードを既存のデプロイメント・マネージャーに統合するか、後で **addNode** コマンドを使用して統合するかを選択できます。

1. 「フェデレーション」ページで、ノードのデプロイメント・マネージャーへの統合をプロファイルの拡張の一部としてここで実行するか、またはプロファイルの拡張とは別に後で実行するかを選択します。
 - プロファイル拡張の一部としてノードを統合することを選択した場合は、デプロイメント・マネージャーのホスト名または IP アドレスと SOAP ポート、および認証ユーザー ID とパスワード (デプロイメント・マネージャー上で管理セキュリティが使用可能になっている場合) を指定します。「**後でこのノードを統合する**」チェック・ボックスを選択解除されたままにしておきます。そして、「次へ」をクリックします。

プロファイル管理ツールによって、デプロイメント・マネージャーが存在していて通信可能であること、および認証ユーザー ID とパスワードがそのデプロイメント・マネージャーで有効であること (デプロイメント・マネージャーがセキュリティで保護されている場合) が検査されます。

重要: 以下の条件すべてに該当する場合にのみ、プロファイルの拡張時にカスタム・ノードを統合してください。

- このカスタム・ノードをマイグレーション・ターゲットとして使用する予定がない。
- 他のノードは統合されていない (ノードの統合はシリアルライズする必要があります)。
- デプロイメント・マネージャーが実行されている。
- デプロイメント・マネージャーが IBM Business Process Manager デプロイメント・マネージャーである。IBM Business Process Manager プロファイルは WebSphere Enterprise Service Bus デプロイメント・マネージャーを使用できませんが、WebSphere Enterprise Service Bus プロファイルは IBM Business Process Manager デプロイメント・マネージャーを使用できます。
- デプロイメント・マネージャーが、拡張するカスタム・プロファイルと同じか、それより高いリリース・レベルである。
- デプロイメント・マネージャーで、JMX 管理ポートが有効になっている。デフォルト・プロトコルは SOAP です。(優先コネクタ・タイプを確認するには、デプロイメント・マネージャーの管理コンソールで「システム管理」>「デプロイメント・マネージャー」>「管理サービス」をクリックします。)
- 拡張する管理対象ノードが既にデプロイメント・マネージャー・プロファイルに統合されている場合は、このカスタム・プロファイルの拡張時に、dmgr プロファイルが実行中でなければなりません。さらに、統合されたノードが確実に拡張されるように、デプロイメント・マネージャーのホスト名または IP アドレスと SOAP ポートを指定してください。

デプロイメント・マネージャーが実行中でないとき、またはほかの理由でデプロイメント・マネージャーを使用できないときに、カスタム・ノードを統合しようとする、警告ボックスが表示されて、続行できなくなります。この警告ボックスが表示されたら、「OK」をクリックしてこの警告パネルを終了し、「フェデレーション」ページで別の選択を行ってください。

- プロファイルの拡張とは別に、後でノードを統合することを選択する場合は、「**後でこのノードを統合する**」チェック・ボックスを選択して、「**次へ**」をクリックします。

「プロファイルの要約」ページが表示されます。

2. 「プロファイルの要約」ページで、「**拡張**」をクリックしてプロファイルを拡張するか、「**戻る**」をクリックしてプロファイルの特性を変更します。

プロファイルの拡張が完了すると、「プロファイル完了 (Profile Complete)」ページに「**プロファイル管理ツールにより、プロファイルが正常に拡張されました。**」というメッセージが表示されます。

重要: プロファイルの拡張中にエラーが検出された場合は、正常終了のメッセージの代わりに他のメッセージが表示される可能性があります。その例と意味は次のとおりです。

- 「**プロファイル管理ツールでプロファイルが拡張されましたが、エラーが発生しました**」: プロファイルの拡張が完了したが、エラーが生成されたことを示します。
- 「**プロファイル管理ツールでプロファイルを拡張できません**」: プロファイルの拡張が完全に失敗したことを示します。

「プロファイル完了 (Profile complete)」ページには、問題のトラブルシューティングを行うために参照するログ・ファイルが示されます。

3. 「プロファイル完了 (Profile Complete)」ページで、「**ファースト・ステップ・コンソールの起動**」が選択されていることを確認し、「**終了**」をクリックして終了します。また、別のウィンドウで開いている「プロファイル」ページも閉じてください。ファースト・ステップ・コンソールを使用して、製品資料にアクセスします。

WebSphere Application Server または WebSphere Application Server Network Deployment プロファイルが WebSphere Enterprise Service Bus プロファイルに拡張されました。

プロファイルの拡張中にプロファイルを統合しなかった場合、ここで統合します。プロファイル内のノードを統合し、デプロイメント・マネージャーを使用してそのノードをカスタマイズするまでは、そのノードは空です。

manageprofiles コマンド行ユーティリティを使用したプロファイルの拡張:

拡張は、拡張テンプレートで既存のプロファイルを変更する機能です。既存の WebSphere Application Server または WebSphere Application Server Network Deployment プロファイル を WebSphere Enterprise Service Bus または IBM Business Process Manager プロファイルに拡張するか、WebSphere Enterprise Service Bus プロファイル を IBM Business Process Manager プロファイルに拡張することができます。既存の WebSphere Application Server または WebSphere Application Server Network Deployment プロファイル を WebSphere Enterprise Service Bus プロファイルに拡張できます。プロファイルを拡張するには、**manageprofiles** コマンド行ユーティリティを使用します。

この手順を実行する前に、以下の作業が完了していることを確認してください。

- 『プロファイルの作成または拡張に関する前提条件 (Prerequisites for creating or augmenting profiles)』で、プロファイルを作成または拡張するための前提条件のリストを確認している。
- 拡張する予定のプロファイルに関連付けられたすべてのサーバーをシャットダウンした。
- スタンドアロン・サーバーまたはカスタム・プロファイルを拡張する場合は、それがデプロイメント・マネージャーに既に統合されているかどうかを次の手順で判断します。
 - 拡張するプロファイルが既にデプロイメント・マネージャーに統合されている場合は、このプロファイルを **manageprofiles** コマンド行ユーティリティを使用して拡張することはできません。
 - 拡張しようとするプロファイルがまだデプロイメント・マネージャーに統合されておらず、後から **addNode** コマンドを使用してそのプロファイルを統合する場合、拡張を正常に完了するためには、統合先のデプロイメント・マネージャーが以下の状態になっている必要があります。
 - 実行されていなければなりません。
 - IBM Business Process Manager デプロイメント・マネージャー・プロファイルでなければなりません。
 - リリース・レベルが拡張中のプロファイルと同じか、それより高いリリース・レベルである必要があります。
 - IBM Business Process Manager プロファイルは、WebSphere Enterprise Service Bus デプロイメント・マネージャーを使用することができません。
 - WebSphere Enterprise Service Bus プロファイルでは、WebSphere Enterprise Service Bus デプロイメント・マネージャーまたは IBM Business Process Manager デプロイメント・マネージャーを使用できます。
 - JMX 管理ポートを使用可能にしておく必要があります。デフォルト・プロトコルは SOAP です。
- **manageprofiles** パラメーターとデフォルト値を『**manageprofiles** パラメーター』で既に検討しました。
- 同じプロファイルで **manageprofiles** コマンド行ユーティリティを実行していないことを検査している。エラー・メッセージが表示された場合は、別のプロファイル作成操作や拡張操作が進行中かどうかを確認してください。実行されている場合は、完了するまで待ってください。

このタスクには、**セキュリティ・ロールが必要**です。『プロファイル作成のための、非 root ユーザーに対するファイルとディレクトリーの書き込み権限の付与』を参照してください。

manageprofiles コマンド行ユーティリティを使用してプロファイルを拡張するには、以下のステップを実行します。

1. 既存のプロファイルの作成時に使用したテンプレート (デプロイメント・マネージャー、スタンドアロン、または管理対象) を調べます。プロファイルの作成に使用したテンプレートは、*install_root/properties/profileRegistry.xml* のプロファイル・レジストリーを表示して判別できます。このファイルは変更しないでください。テンプレートを確認するだけにしてください。
2. 拡張先のテンプレートを探します。既存の WebSphere Application Server または WebSphere Application Server Network Deployment プロファイルを IBM Business Process Manager または WebSphere ESB プロファイルに拡張できます。既存の WebSphere ESB プロファイルを IBM Business Process Manager プロファイルに拡張できます。

各プロファイルのテンプレートは、*install_root/profileTemplates/BPM* ディレクトリー (BPM テンプレートの場合) および *install_root/profileTemplates* の下 (その他の製品の場合) にあります。

使用可能なプロファイル・テンプレートは次のとおりです。

- **default.procctr**: Process Center スタンドアロン・プロファイル用で、IBM BPM Standard または Express に固有の機能を備えたスタンドアロン・サーバーを定義します。
- **default.procctr.adv**: Process Center スタンドアロン・プロファイル用で、IBM BPM Advanced に固有の機能を備えたスタンドアロン・サーバーを定義します。
- **default.procsvr**: Process Server スタンドアロン・プロファイル用で、IBM BPM Standard または Express に固有の機能を備えたスタンドアロン・サーバーを定義します。
- **default.procsvr.adv**: Process Server スタンドアロン・プロファイル用で、IBM BPM Advanced に固有の機能を備えたスタンドアロン・サーバーを定義します。
- **dmgr.procctr**: IBM BPM Standard の Process Center デプロイメント・マネージャー・プロファイル用で、デプロイメント・マネージャーを定義します。デプロイメント・マネージャーは、1 つ以上のワークステーション上にあるサーバーの論理グループに、1 つの管理インターフェースを提供します。
- **dmgr.procctr.adv**: IBM BPM Advanced の Process Center デプロイメント・マネージャー・プロファイル用で、デプロイメント・マネージャーを定義します。デプロイメント・マネージャーは、1 つ以上のワークステーション上にあるサーバーの論理グループに、1 つの管理インターフェースを提供します。
- **dmgr.procsvr**: IBM BPM Standard の Process Server デプロイメント・マネージャー・プロファイル用で、デプロイメント・マネージャーを定義します。デプロイメント・マネージャーは、1 つ以上のワークステーション上にあるサーバーの論理グループに、1 つの管理インターフェースを提供します。
- **dmgr.procsvr.adv**: IBM BPM Advanced の Process Server デプロイメント・マネージャー・プロファイル用で、デプロイメント・マネージャーを定義します。デプロイメント・マネージャーは、1 つ以上のワークステーション上にあるサーバーの論理グループに、1 つの管理インターフェースを提供します。
- **managed.procctr**: IBM BPM Standard または Express の Process Center カスタム・プロファイル用で、デプロイメント・マネージャーに統合されている場合に管理対象ノードを定義します。使用するソリューションにデプロイメント環境が必要であると判断した場合、ランタイム環境には 1 つ以上の管理対象ノードが必要になります。カスタム・プロファイルには空のノードが含まれており、デプロイメント・マネージャー・セルに統合して作動可能にする必要があります。カスタム・プロファイルを統合すると、カスタム・プロファイルが管理対象ノードに変更されます。統合先のデプロイメント・マネージャーのリリース・レベルが、作成しているカスタム・プロファイルのリリース・レベル以上でない場合は、ノードを統合しないでください。

- `managed.procctr.adv`: IBM BPM Advanced の Process Center カスタム・プロファイル用で、デプロイメント・マネージャーに統合されている場合に管理対象ノードを定義します。デプロイメント環境を必要とするソリューションを使用する場合は、ランタイム環境に 1 つ以上の管理対象ノードが必要になります。カスタム・プロファイルには、作動可能にするためにデプロイメント・マネージャー・セル内に統合する必要のある空のノードが含まれています。カスタム・プロファイルを統合すると、カスタム・プロファイルが管理対象ノードに変更されます。統合先のデプロイメント・マネージャーのリリース・レベルが、作成しているカスタム・プロファイルのリリース・レベル以上でない場合は、ノードを統合しないでください。
- `managed.procsvr`: IBM BPM Standard の Process Server カスタム・プロファイル用で、デプロイメント・マネージャーに統合されている場合に管理対象ノードを定義します。Network Deployment 構成を必要とするソリューションを使用する場合は、ランタイム環境に 1 つ以上の管理対象ノードが必要になります。カスタム・プロファイルには、作動可能にするためにデプロイメント・マネージャー・セル内に統合する必要のある空のノードが含まれています。カスタム・プロファイルを統合すると、カスタム・プロファイルが管理対象ノードに変更されます。統合先のデプロイメント・マネージャーのリリース・レベルが、作成しているカスタム・プロファイルのリリース・レベル以上でない場合は、ノードを統合しないでください。
- `managed.procsvr.adv`: IBM BPM Advanced の Process Server カスタム・プロファイル用で、デプロイメント・マネージャーに統合されている場合に管理対象ノードを定義します。Network Deployment 構成を必要とするソリューションを使用する場合は、ランタイム環境に 1 つ以上の管理対象ノードが必要になります。カスタム・プロファイルには、作動可能にするためにデプロイメント・マネージャー・セル内に統合する必要のある空のノードが含まれています。カスタム・プロファイルを統合すると、カスタム・プロファイルが管理対象ノードに変更されます。統合先のデプロイメント・マネージャーのリリース・レベルが、作成しているカスタム・プロファイルのリリース・レベル以上でない場合は、ノードを統合しないでください。また、IBM Business Process Manager Advanced: Process Server プロファイルは WebSphere Enterprise Service Bus デプロイメント・マネージャーを使用できませんが、WebSphere Enterprise Service Bus プロファイルは IBM Business Process Manager Advanced: Process Server デプロイメント・マネージャーを使用できます。
- `default.esbserver`: WebSphere Enterprise Service Bus スタンドアロン・サーバー・プロファイル用で、スタンドアロン・サーバーを定義します。
- `dmgr.esbserver`: WebSphere Enterprise Service Bus デプロイメント・マネージャー・プロファイル用で、デプロイメント・マネージャーを定義します。
- `managed.esbserver`: WebSphere Enterprise Service Bus カスタム・プロファイル用で、デプロイメント・マネージャーに統合された場合、管理対象ノードを定義します。

拡張テンプレートを使用して既存のプロファイルに変更を加える場合は、`augment` パラメーターを使用します。`augment` パラメーターを使用すると、`manageprofiles` コマンド行ユーティリティは `-templatePath` パラメーターのテンプレートを使用して、`-profileName` パラメーターで指定されているプロファイルを更新または拡張します。使用できる拡張テンプレートは、どの IBM 製品のどのバージョンが環境にインストールされているかによって決まります。`-templatePath` パラメーターには必ず完全修飾ファイル・パスを指定してください。理由は、`-templatePath` パラメーターに相対ファイル・パスを指定すると、指定したプロファイルが完全に拡張されないためです。

注: `install_dir/profileTemplates` ディレクトリー内のファイルは手動で変更しないでください。

3. 応答ファイルを作成します。 応答ファイルを作成する際には、`-profilePath` パラメーターは指定せず、「create」を「augment」と置き換えてください。パラメーターおよびそのデフォルト値の完全なリストについては、`manageprofile` パラメーターを参照してください。

サンプル応答ファイルは、install_root/BPM/samples/manageprofiles/ ディレクトリーの下にあります。作成するプロファイル (スタンドアロンまたはネットワーク、Process Center または Process Server) に応じて適切な応答ファイルを選択し、環境に合わせてファイルをカスタマイズしてください。

重要: 値の後にスペースが入っている (例えば、'personalCertValidityPeriod=1 ' や 'winserviceCheck=false ') ことがないようにしてください。スペースがある場合は、プロファイルの作成が失敗します。

『IBM Business Process Manager サンプルを使用した応答ファイルの作成』を参照してください。

4. **-response** パラメーターと、作成した応答ファイルの名前を使用して、コマンド行から **manageprofiles** コマンドを実行します。

- **Linux** **UNIX** `manageprofiles.sh -response myResponseFile`
- **Windows** `manageprofiles.bat -response myResponseFile`

コマンドにより、実行につれて状況が表示されます。コマンドが終了するまで待機します。他の応答ファイルと同様に、ファイルの構文解析時には応答ファイルに対する通常の構文検査が適用されます。応答ファイルの個々の値はコマンド行パラメーターと見なされます。

「INSTCONFSUCCESS: プロファイルの拡張は正常に終了しました。(INSTCONFSUCCESS: Profile augmentation succeeded.)」というメッセージが表示された場合は、プロファイルの拡張が正常に完了したことが分かります。また、以下のログ・ファイルを確認できます。

- **Linux** **UNIX** `install_root/logs/manageprofiles/profile_name_augment.log`
- **Windows** `install_root\logs\manageprofiles\profile_name_augment.log`

インストール検査テスト (IVT) ツールを実行して、プロファイルが正常に拡張されたことを確認します。このためには、以下のコマンドを実行します。

- **Linux** **UNIX** **Linux** および **UNIX** プラットフォームの場合: `profile_root/bin/wbi_ivt.sh`
- **Windows** **Windows** プラットフォームの場合: `profile_root\bin\wbi_ivt.bat`

manageprofiles コマンド行ユーティリティーを使用した **Process Center** スタンドアロン・プロファイルの拡張:

拡張は、拡張テンプレートで既存のプロファイルを変更する機能です。プロファイルは、コマンド行から **manageprofiles** コマンド行ユーティリティーを使用して拡張することができます。

- 『230 ページの『プロファイルの作成または拡張に関する前提条件』』で、プロファイルを作成または拡張するための前提条件リストを確認している。
- 拡張する予定のプロファイルに関連付けられたすべてのサーバーをシャットダウンした。
- スタンドアロン・サーバーまたはカスタム・プロファイルを拡張する場合は、それがデプロイメント・マネージャーに既に統合されているかどうかを次の手順で判別します。
 - 拡張するプロファイルが既にデプロイメント・マネージャーに統合されている場合は、これを **manageprofiles** コマンド行ユーティリティーを使用して拡張することはできません。
 - 拡張しようとするプロファイルがまだデプロイメント・マネージャーに統合されていない場合は、後から **addNode** コマンドを介してそのノードを統合するとき、拡張を正常に完了するためには、統合先のデプロイメント・マネージャーが以下の状態になっている必要があります。
 - 実行されていない必要があります。

- リリース・レベルが拡張中のプロファイルと同じか、それより高いリリース・レベルである必要があります。IBM Business Process Manager プロファイルでは WebSphere Enterprise Service Bus デプロイメント・マネージャーを使用できませんが、WebSphere Enterprise Service Bus プロファイルでは IBM Business Process Manager Advanced 構成から Process Server デプロイメント・マネージャー・プロファイルを使用できます。
- JMX 管理ポートを使用可能にしておく必要があります。デフォルト・プロトコルは SOAP です。
- インストールした製品に応じて、事前に IBM Business Process Manager または WebSphere Enterprise Service Bus プロファイルに拡張されている必要があります。
- このセクションにあるプロファイル拡張コマンドの例を確認している。
- 同じプロファイルで **manageprofiles** コマンド行ユーティリティーを実行していないことを検査している。エラー・メッセージが表示された場合は、別のプロファイル作成操作や拡張操作が進行中かどうかを確認してください。実行されている場合は、完了するまで待ってください。

この作業に必要なセキュリティの役割: 232 ページの『プロファイル作成のための、非 root ユーザーに対するファイルとディレクトリーの書き込み権限の付与』を参照してください。

既存のプロファイルの作成時に使用したテンプレート (デプロイメント・マネージャー、スタンドアロン、または管理対象) を調べます。プロファイルの作成に使用したテンプレートは、*install_root/properties/profileRegistry.xml* のプロファイル・レジストリーを表示して判別できます。このファイルは変更しないでください。テンプレートを確認するだけにしてください。この手順では、Process Center スタンドアロン・プロファイルを拡張することを前提とします。

このタスクでは、**manageprofiles** を使用して Process Center スタンドアロン・プロファイルを拡張する方法について説明します。

manageprofiles コマンド行ユーティリティーを使用してスタンドアロン・プロファイルを拡張するには、以下のステップを実行します。

1. 拡張先のテンプレートを探します。既存の WebSphere Application Server または WebSphere Application Server Network Deployment プロファイルを IBM Business Process Manager または WebSphere ESB プロファイルに拡張できます。既存の WebSphere ESB プロファイルを IBM Business Process Manager プロファイルに拡張できます。

各プロファイルのテンプレートは、*install_root/profileTemplates/BPM* ディレクトリー (BPM テンプレートの場合) および *install_root/profileTemplates* の下 (その他の製品の場合) にあります。

使用可能なプロファイル・テンプレートは次のとおりです。

- **default.procctr:** Process Server スタンドアロン・プロファイル用。IBM Business Process Manager Standard または Express の機能が組み込まれたスタンドアロン・サーバーを定義します。
- **default.procctr.adv:** Process Server スタンドアロン・プロファイル用。IBM Business Process Manager Advanced の機能が組み込まれたスタンドアロン・サーバーを定義します。

拡張テンプレートを使用して既存のプロファイルに変更を加える場合は、**augment** パラメーターを使用します。**augment** パラメーターを使用すると、**manageprofiles** コマンド行ユーティリティーは **-templatePath** パラメーターのテンプレートを使用して、**-profileName** パラメーターで指定されているプロファイルを更新または拡張します。使用できる拡張テンプレートは、どの IBM 製品のどのバージョンが環境にインストールされているかによって決まります。**-templatePath** パラメーターには必ず完全修飾ファイル・パスを指定してください。理由は、**-templatePath** パラメーターに相対ファイル・パスを指定すると、指定したプロファイルが完全に拡張されないためです。

注: `install_dir/profileTemplates/BPM` ディレクトリー内のファイルは手動で変更しないでください。

2. 応答ファイルを作成します。 応答ファイルを作成する際には、`-profilePath` パラメーターは指定せず、「create」を「augment」と置き換えてください。パラメーターおよびそのデフォルト値の完全なリストについては、`manageprofile` パラメーターを参照してください。

サンプル応答ファイルは、`install_root/BPM/samples/manageprofiles/` ディレクトリーの下にあります。作成するプロファイル (スタンドアロンまたはネットワーク、Process Center または Process Server) に応じて適切な応答ファイルを選択し、環境に合わせてファイルをカスタマイズしてください。

重要: 値の後にスペースが入っている (例えば、`'personalCertValidityPeriod=1 '` や `'winserviceCheck=false '`) ことがないようにしてください。スペースがある場合は、プロファイルの作成が失敗します。

『IBM Business Process Manager サンプルを使用した応答ファイルの作成』を参照してください。

3. `-response` パラメーターと、作成した応答ファイルの名前を使用して、コマンド行から `manageprofiles` コマンドを実行します。

• `Linux` `UNIX` `manageprofiles.sh -response myResponseFile`

• `Windows` `manageprofiles.bat -response myResponseFile`

コマンドにより、実行につれて状況が表示されます。コマンドが終了するまで待機します。他の応答ファイルと同様に、ファイルの構文解析時には応答ファイルに対する通常の構文検査が適用されます。応答ファイルの個々の値はコマンド行パラメーターと見なされます。

***manageprofiles* コマンド行ユーティリティーを使用した Process Server スタンドアロン・プロファイルの拡張:**

拡張は、拡張テンプレートで既存のプロファイルを変更する機能です。既存の WebSphere Application Server プロファイルまたは WebSphere Application Server Network Deployment プロファイルを IBM Business Process Manager プロファイルに拡張できます。プロファイルは、コマンド行から `manageprofiles` コマンド行ユーティリティーを使用して拡張することができます。

- 『230 ページの『プロファイルの作成または拡張に関する前提条件』』で、プロファイルを作成または拡張するための前提条件リストを確認している。
- 拡張する予定のプロファイルに関連付けられたすべてのサーバーをシャットダウンした。
- スタンドアロン・サーバーまたはカスタム・プロファイルを拡張する場合は、それがデプロイメント・マネージャーに既に統合されているかどうかを次の手順で判別します。
 - 拡張するプロファイルが既にデプロイメント・マネージャーに統合されている場合は、このプロファイルを `manageprofiles` コマンド行ユーティリティーを使用して拡張することはできません。
 - 拡張しようとするプロファイルがまだデプロイメント・マネージャーに統合されていない場合は、後から `addNode` コマンドを介してそのノードを統合するとき、拡張を正常に完了するためには、統合先のデプロイメント・マネージャーが以下の状態になっている必要があります。
 - 実行されていなければなりません。
 - リリース・レベルが拡張中のプロファイルと同じか、それより高いリリース・レベルである必要があります。IBM Business Process Manager プロファイルは WebSphere Enterprise Service Bus デプロイメント・マネージャーを使用できませんが、WebSphere Enterprise Service Bus プロファイルは IBM Business Process Manager Advanced 構成から Process Server デプロイメント・マネージャー・プロファイルを使用することができます。
 - JMX 管理ポートを使用可能にしておく必要があります。 デフォルト・プロトコルは SOAP です。

- インストールした製品に応じて、事前に IBM Business Process Manager または WebSphere Enterprise Service Bus プロファイルに拡張されている必要があります。
- このセクションにあるプロファイル拡張コマンドの例を確認している。
- 同じプロファイルで **manageprofiles** コマンド行ユーティリティーを実行していないことを検査している。エラー・メッセージが表示された場合は、別のプロファイル作成操作や拡張操作が進行中かどうかを確認してください。実行されている場合は、完了するまで待ってください。

この作業に必要なセキュリティの役割: 232 ページの『プロファイル作成のための、非 root ユーザーに対するファイルとディレクトリーの書き込み権限の付与』を参照してください。

既存のプロファイルの作成時に使用したテンプレート (デプロイメント・マネージャー、スタンドアロン、または管理対象) を調べます。プロファイルの作成に使用したテンプレートは、*install_root/properties/profileRegistry.xml* のプロファイル・レジストリーを表示して判別できます。このファイルは変更しないでください。テンプレートを確認するだけにしてください。この手順では、Process Server スタンドアロン・プロファイルを拡張することを前提とします。

このタスクでは、**manageprofiles** を使用して Process Server スタンドアロン・プロファイルを拡張する方法について説明します。

manageprofiles コマンド行ユーティリティーを使用してスタンドアロン・プロファイルを拡張するには、以下のステップを実行します。

1. 拡張先のテンプレートを探します。既存の WebSphere Application Server または WebSphere Application Server Network Deployment プロファイルを IBM Business Process Manager または WebSphere ESB プロファイルに拡張できます。既存の WebSphere ESB プロファイルを IBM Business Process Manager プロファイルに拡張できます。

各プロファイルのテンプレートは、*install_root/profileTemplates/BPM* ディレクトリー (BPM テンプレートの場合) および *install_root/profileTemplates* の下 (その他の製品の場合) にあります。

使用可能なプロファイル・テンプレートは次のとおりです。

- **default.procsvr:** Process Server スタンドアロン・プロファイル用。IBM Process Manager Standard および Express 構成の機能を含むスタンドアロン・サーバーを定義します。
- **default.procsvr.adv:** Process Server スタンドアロン・プロファイル用。IBM Business Process Manager Advanced 構成の機能を含むスタンドアロン・サーバーを定義します。
- **default.esbserver:** WebSphere Enterprise Service Bus スタンドアロン・サーバー・プロファイル用で、スタンドアロン・サーバーを定義します。

拡張テンプレートを使用して既存のプロファイルに変更を加える場合は、**augment** パラメーターを使用します。**augment** パラメーターを使用すると、**manageprofiles** コマンド行ユーティリティーは **-templatePath** パラメーターのテンプレートを使用して、**-profileName** パラメーターで指定されているプロファイルを更新または拡張します。使用できる拡張テンプレートは、どの IBM 製品のどのバージョンが環境にインストールされているかによって決まります。**-templatePath** パラメーターには必ず完全修飾ファイル・パスを指定してください。理由は、**-templatePath** パラメーターに相対ファイル・パスを指定すると、指定したプロファイルが完全に拡張されないためです。

注: *install_dir/profileTemplates/BPM* ディレクトリー内のファイルは手動で変更しないでください。

2. 応答ファイルを作成します。応答ファイルを作成するには、**-profilePath** パラメーターは指定せず、「create」を「augment」と置き換えてください。パラメーターおよびそのデフォルト値の完全なリストについては、**manageprofile** パラメーターを参照してください。

サンプル応答ファイルは、install_root/BPM/samples/manageprofiles/ ディレクトリーの下にあります。作成するプロファイル (スタンドアロンまたはネットワーク、Process Center または Process Server) に応じて適切な応答ファイルを選択し、環境に合わせてファイルをカスタマイズしてください。

重要: 値の後にスペースが入っている (例えば、'personalCertValidityPeriod=1 ' や 'winserviceCheck=false ') ことがないようにしてください。スペースがある場合は、プロファイルの作成が失敗します。

『IBM Business Process Manager サンプルを使用した応答ファイルの作成』を参照してください。

3. **-response** パラメーターと、作成した応答ファイルの名前を使用して、コマンド行から **manageprofiles** コマンドを実行します。

- **Linux** **UNIX** `manageprofiles.sh -response myResponseFile`

- **Windows** `manageprofiles.bat -response myResponseFile`

コマンドにより、実行につれて状況が表示されます。コマンドが終了するまで待機します。他の応答ファイルと同様に、ファイルの構文解析時には応答ファイルに対する通常の構文検査が適用されます。応答ファイルの個々の値はコマンド行パラメーターと見なされます。

「INSTCONFSUCCESS: プロファイルの拡張は正常に終了しました。(INSTCONFSUCCESS: Profile augmentation succeeded.)」というメッセージが表示された場合は、プロファイルの拡張が正常に完了したことが分かります。また、以下のログ・ファイルを確認できます。

- **Linux** **UNIX** `install_root/logs/manageprofiles/profile_name_augment.log`
- **Windows** `install_root¥logs¥manageprofiles¥profile_name_augment.log`

インストール検査テスト (IVT) ツールを実行して、プロファイルが正常に拡張されたことを確認します。このためには、以下のコマンドを実行します。

- **Linux** **UNIX** **Linux** および **UNIX** プラットフォームの場合: `profile_root/bin/bpm_ivt.sh`

- **Windows** **Windows** プラットフォームの場合: `profile_root¥bin¥bpm_ivt.bat`

プロファイル管理ツール構成のデータベース構成フィールド:

スタンドアロン環境のプロファイルを作成するには、データベース情報が必要です。必要な情報は、使用するデータベースによって異なります。

以下のいずれかの表を参照して、特定のデータベース・タイプに必要なデータベース・パラメーターを特定してください。

表 132. プロファイル管理ツール構成のデータベース構成パラメーター

データベース・タイプ
DB2 Universal Database 構成フィールド
DB2 Universal Database for z/OS 構成フィールド
Microsoft SQL Server データベース構成フィールド
Oracle データベース構成フィールド

DB2 Universal Database 構成フィールド

以下の表に、DB2 Universal Database をデータベース製品として選択する場合に「データベース構成 - パート 2」ページで入力しておく必要があるフィールドを示します。

表 133. DB2 データベースの場合の必須のデータベース構成フィールド

フィールド	必要なアクション
JDBC ドライバー	以下のオプションから選択してください。 <ul style="list-style-type: none"> DB2 Universal DB2 DataServer
データベース認証用のユーザー名 (User name for database authentication)	データベースで認証を行うユーザー名を入力してください。
データベース認証用のパスワード	データベースで認証を行うパスワードを入力してください。
パスワードの確認	パスワードを確認します。
JDBC ドライバーのクラスパス・ファイルのディレクトリ・ロケーション (Directory location of JDBC driver classpath files)	JDBC ドライバーのクラスパス・ファイルは製品と一緒にパッケージ化されており、以下のディレクトリーのいずれかに置かれています。 <ul style="list-style-type: none"> インストール時に DB2 Express フィーチャーを選択した場合: <code>\${WAS_INSTALL_ROOT}/db2/java</code> インストール時に DB2 Express フィーチャーを選択しなかった場合: <code>\${WAS_INSTALL_ROOT}/jdbcdrivers/DB2</code>
データベース・サーバーのホスト名 (例えば IP アドレス)	デフォルト値 <code>localhost</code> をそのまま確定するか、データベース・サーバーの正しいホスト名を入力します。
サーバー・ポート	デフォルト値 <code>50000</code> をそのまま確定するか、サーバーの正しいポート番号を入力します。

スタンドアロン構成の場合のみ、Process Server データベースを構成すると、メッセージング・エンジン表がそのデータベースに作成されます。Performance Data Warehouse データベースを構成する際に、Performance Data Warehouse メッセージング・エンジン表が Performance Data Warehouse データベースに作成されます。サービス・コンポーネント・アーキテクチャー (SCA) システム、SCA アプリケーション、Common Event Infrastructure (CEI)、および Business Process Choreographer のメッセージング・エンジン表はすべて、共通データベースに作成されます。

DB2 Universal Database for z/OS 構成フィールド

以下の表に、DB2 Universal Database for z/OS をデータベース製品として選択した場合に「データベース構成 - パート 2」ページで入力しておく必要があるフィールドを示します。

表 134. DB2 for z/OS Universal Database の場合の必須のデータベース構成フィールド

フィールド	必要なアクション
データベース認証用のユーザー名 (User name for database authentication)	データベースで認証を行うユーザー名を入力してください。
データベース認証用のパスワード	データベースで認証を行うパスワードを入力してください。
パスワードの確認	パスワードを確認します。

表 134. DB2 for z/OS Universal Database の場合の必須のデータベース構成フィールド (続き)

フィールド	必要なアクション
JDBC ドライバーのクラスパス・ファイルのディレクトリー・ロケーション (Directory location of JDBC driver classpath files)	JDBC ドライバーのクラスパス・ファイルは製品と一緒にパッケージ化されており、ディレクトリー <code>\${WAS_INSTALL_ROOT}/jdbcd drivers/DB2</code> に置かれています。
データベース・サーバーのホスト名 (例えば IP アドレス)	データベース・サーバーのホスト名を入力してください。
サーバー・ポート	デフォルト値 446 をそのまま確定するか、サーバーの正しいポート番号を入力します。
スキーマ名 (Schema name)	データベース・スキーマ名を入力してください。
Performance Server のスキーマ名 (Performance Server Schema name)	Performance Server のデータベース・スキーマ名を入力してください。
接続のロケーション	接続のロケーションを入力してください。
ストレージ・グループ名	ストレージ・グループ名を入力してください。

DB2 Universal Database for z/OS を使用して新規データベースを作成することはできません。Performance Data Warehouse データベースが存在している必要があり、スタンドアロン・サーバー・プロファイルの場合は Process Server データベースも必要です。

Microsoft SQL Server データベース構成フィールド

以下の表に、Microsoft SQL Server をデータベース製品として選択する場合に「データベース構成 - パート 2」ページで入力しておく必要があるフィールドを示します。

表 135. Microsoft SQL Server の場合の必須のデータベース構成フィールド

フィールド	必要なアクション
Windows 認証情報を使用してデータベースに接続するように指定する場合は、「Windows 認証を適用」オプションを選択します。このオプションを選択すると、共通データベース、Process Server データベース、および Performance Data Warehouse データベースのフィールドが非アクティブになります。	
共通データベース	<p>共通データベースの場合は、以下のパラメーターの値を入力してください。</p> <ul style="list-style-type: none"> • ユーザー名 共通データベースのユーザー名を入力してください。 • パスワード 共通データベースで認証を行うパスワードを入力してください。 • パスワードの確認 共通データベースで認証を行うパスワードを確認してください。

表 135. Microsoft SQL Server の場合の必須のデータベース構成フィールド (続き)

フィールド	必要なアクション
Process Server データベース	<p>Process Server データベースの場合は、以下のパラメーターの値を入力してください。</p> <ul style="list-style-type: none"> • ユーザー名 <p>Process Server データベースのユーザー名を入力してください。</p> <ul style="list-style-type: none"> • パスワード <p>Process Server データベースで認証を行うパスワードを入力してください。</p> <ul style="list-style-type: none"> • パスワードの確認 <p>Process Server データベースで認証を行うパスワードを確認してください。</p>
Performance Data Warehouse データベース	<p>Performance Data Warehouse データベースの場合は、以下のパラメーターの値を入力してください。</p> <ul style="list-style-type: none"> • ユーザー名 <p>Performance Data Warehouse データベースのユーザー名を入力してください。</p> <ul style="list-style-type: none"> • パスワード <p>Performance Data Warehouse データベースで認証を行うパスワードを入力してください。</p> <ul style="list-style-type: none"> • パスワードの確認 <p>Performance Data Warehouse データベースで認証を行うパスワードを確認してください。</p>
JDBC ドライバーのクラスパス・ファイルのディレクトリー・ロケーション (Directory location of JDBC driver classpath files)	JDBC 2.0 ドライバーのクラスパス・ファイル (sqljdbc4.jar) は製品と一緒にパッケージ化されており、ディレクトリー <code>\${WAS_INSTALL_ROOT}\%jdbcdrivers%</code> SQLServer に置かれています。
データベース・サーバーのホスト名 (例えば IP アドレス)	デフォルト値 localhost をそのまま確定するか、データベース・サーバーの正しいホスト名を入力します。
サーバー・ポート	デフォルト値 1433 をそのまま確定するか、サーバーの正しいポート番号を入力します。

スタンドアロン構成の場合のみ、Process Server データベースを構成すると、メッセージング・エンジン表がそのデータベースに作成されます。Performance Data Warehouse データベースを構成する際に、Performance Data Warehouse メッセージング・エンジン表が Performance Data Warehouse データベースに作成されます。サービス・コンポーネント・アーキテクチャー (SCA) システム、SCA アプリケーション、Common Event Infrastructure (CEI)、および Business Process Choreographer のメッセージング・エンジン表はすべて、共通データベースに作成されます。

スタンドアロン構成の場合のみ、ユーザーおよびスキーマに関する追加の考慮事項がいくつかあります。

- SQL 認証:

- Process Server を構成すると、Process Server メッセージング・エンジンに対して指定されたユーザーおよびパスワードを使用して、Process Server メッセージング・エンジン表が作成されます。これらの値が指定されていない場合は、Process Server のユーザーおよびパスワードが使用されます。
 - Performance Data Warehouse を構成すると、Performance Data Warehouse メッセージング・エンジンに対して指定されたユーザーおよびパスワードを使用して、Performance Data Warehouse メッセージング・エンジン表が作成されます。これらの値が指定されていない場合は、Performance Data Warehouse のユーザーおよびパスワードが使用されます。
 - Service Component Architecture (SCA) システム、SCA アプリケーション、Common Event Infrastructure (CEI)、および Business Process Choreographer のメッセージング・エンジン表は、異なるユーザーおよびパスワードを使用して構成する必要があります。これらは、他のメッセージング・エンジンと同じユーザーおよびパスワードを使用することはできません。
- Windows 認証:
- Windows 認証では、ユーザーおよびパスワードはいつも同じになるため、すべてのメッセージング・エンジンにカスタム・スキーマを定義して、メッセージング・エンジンごとに異なるスキーマで表を作成できるようにする必要があります。メッセージング・エンジンが構成されると、Windows ユーザーを使用してスキーマが自動的に作成されます。Windows ユーザーがスキーマの作成特権を持っていない場合は、製品を構成する前にスキーマを作成する必要があります。
 - メッセージング・エンジン・スキーマ名については、『*Microsoft SQL Server で使用するスタンドアロン・プロファイルの作成*』のステップ 2 を参照してください。

以下の表に、「データベース構成 - パート 3」ページでの Microsoft SQL Server 構成の必須フィールドを示します。デプロイメント・マネージャーを作成していて、「**Windows 認証を適用**」オプションを選択した場合は、このページは表示されません。

表 136. Microsoft SQL Server の場合の必須のデータベース構成フィールド

フィールド	必要なアクション
共通データベースのスキーマ名	共通データベース用のスキーマ名を入力してください。スタンドアロン・プロファイルを作成していて、「 Windows 認証を適用 」オプションを選択した場合は、このフィールドは表示されません。
CEI バス・メッセージング・エンジンのスキーマ名	Common Event Infrastructure バス・メッセージング・エンジン用のスキーマ名を入力してください。
SCA アプリケーション・バス・メッセージング・エンジンのスキーマ名	Service Component Architecture アプリケーション・バス・メッセージング・エンジン用のスキーマ名を入力してください。
SCA システム・バス・メッセージング・エンジンのスキーマ名	Service Component Architecture システム・バス・メッセージング・エンジン用のスキーマ名を入力してください。
Process Server メッセージング・エンジンのスキーマ名	Process Server メッセージング・エンジン用のスキーマ名を入力してください。
Performance Data Warehouse メッセージング・エンジンのスキーマ名	Performance Data Warehouse メッセージング・エンジン用のスキーマ名を入力してください。

Oracle データベース構成フィールド

以下の表に、Oracle をデータベース製品として選択する場合に入力しておく必要があるフィールドを示します。

表 137. Oracle の場合の必須のデータベース構成フィールド

フィールド	必要なアクション
共通データベース	<p>共通データベースの場合は、以下のパラメーターの値を入力してください。</p> <p>ユーザー名 共通データベースのユーザー名を入力してください。</p> <p>パスワード 共通データベースで認証を行うパスワードを入力してください。</p> <p>パスワードの確認 確認のためにパスワードを再入力してください。</p>
Process Server データベース	<p>Process Server データベースの場合は、以下のパラメーターの値を入力してください。</p> <p>ユーザー名 Process Server データベースのユーザー名を入力してください。</p> <p>パスワード Process Server データベースで認証を行うパスワードを入力してください。</p> <p>パスワードの確認 確認のためにパスワードを再入力してください。</p> <p>注: Process Server データベースのユーザー名と Performance Data Warehouse データベースのユーザー名を同じにすることはできません。</p>
Performance Data Warehouse データベース	<p>Performance Data Warehouse データベースの場合は、以下のパラメーターの値を入力してください。</p> <p>ユーザー名 Performance Data Warehouse データベースのユーザー名を入力してください。</p> <p>パスワード Performance Data Warehouse データベースで認証を行うパスワードを入力してください。</p> <p>パスワードの確認 確認のためにパスワードを再入力してください。</p> <p>注: Performance Data Warehouse データベースのユーザー名を Process Server データベースのユーザー名と同じにすることはできません。</p>
データベース・サーバーのホスト名 (例えば IP アドレス)	デフォルト値 localhost をそのまま確定するか、データベース・サーバーの正しいホスト名を入力します。
サーバー・ポート	デフォルト値 1521 をそのまま確定するか、サーバーの正しいポート番号を入力します。
JDBC ドライバーのクラスパス・ファイルのディレクトリー・ロケーション (Directory location of JDBC driver classpath files)	JDBC 2.0 ドライバーのクラスパス・ファイルは、製品と一緒にパッケージ化されており、ディレクトリー <code>\${WAS_INSTALL_ROOT}¥jdbcdrivers¥oracle</code> に置かれています。

すべてのコンポーネントが同じ Oracle インスタンスを使用するため、個々のコンポーネントに使用されるデータベースに違いはありません。

スタンドアロン構成の場合のみ、ユーザーおよびスキーマに関する追加の考慮事項がいくつかあります。

- Process Server を構成すると、Process Server メッセージング・エンジンに対して指定されたユーザーおよびパスワードを使用して、Process Server メッセージング・エンジン表が作成されます。これらの値が指定されていない場合は、Process Server のユーザーおよびパスワードが使用されます。
- Performance Data Warehouse を構成すると、Performance Data Warehouse メッセージング・エンジンに対して指定されたユーザーおよびパスワードを使用して、Performance Data Warehouse メッセージング・エンジン表が作成されます。これらの値が指定されていない場合は、Performance Data Warehouse のユーザーおよびパスワードが使用されます。
- Service Component Architecture (SCA) システム、SCA アプリケーション、Common Event Infrastructure (CEI)、および Business Process Choreographer のメッセージング・エンジン表は、異なるユーザーおよびパスワードを使用して構成する必要があります。これらは、他のメッセージング・エンジンと同じユーザーおよびパスワードを使用することはできません。

以下の表に、「データベース構成 - パート 3」ページでの Oracle 構成の必須フィールドを示します。

表 138. Oracle の場合の必須のデータベース構成フィールド

フィールド	必要なアクション
Common Event Infrastructure バス・メッセージング・エンジン (Common Event Infrastructure bus messaging engine)	<p>Common Event Infrastructure バス・メッセージング・エンジンの場合は、以下のパラメーターの値を入力してください。</p> <p>ユーザー名 Common Event Infrastructure バス・メッセージング・エンジンのユーザー名を入力してください。</p> <p>パスワード Common Event Infrastructure バス・メッセージング・エンジンで認証を行うパスワードを入力してください。</p> <p>パスワードの確認 確認のためにパスワードを再入力してください。</p>
SCA アプリケーション・バス・メッセージング・エンジン	<p>SCA アプリケーション・バス・メッセージング・エンジンの場合は、以下のパラメーターの値を入力してください。</p> <p>ユーザー名 SCA アプリケーション・バス・メッセージング・エンジンのユーザー名を入力してください。</p> <p>パスワード SCA アプリケーション・バス・メッセージング・エンジンで認証を行うパスワードを入力してください。</p> <p>パスワードの確認 確認のためにパスワードを再入力してください。</p>

表 138. Oracle の場合の必須のデータベース構成フィールド (続き)

フィールド	必要なアクション
SCA システム・バス・メッセージング・エンジン	<p>SCA システム・バス・メッセージング・エンジンの場合は、以下のパラメーターの値を入力してください。</p> <p>ユーザー名 SCA システム・バス・メッセージング・エンジンのユーザー名を入力してください。</p> <p>パスワード SCA システム・バス・メッセージング・エンジンで認証を行うパスワードを入力してください。</p> <p>パスワードの確認 確認のためにパスワードを再入力してください。</p>
Process Server バス・メッセージング・エンジン (Process Server bus messaging engine)	<p>Process Server バス・メッセージング・エンジンの場合は、以下のパラメーターの値を入力してください。</p> <p>ユーザー名 Process Server バス・メッセージング・エンジンのユーザー名を入力してください。</p> <p>パスワード Process Server バス・メッセージング・エンジンで認証を行うパスワードを入力してください。</p> <p>パスワードの確認 確認のためにパスワードを再入力してください。</p>
Performance Data Warehouse バス・メッセージング・エンジン (Performance Data Warehouse bus messaging engine)	<p>Performance Data Warehouse バス・メッセージング・エンジンの場合は、以下のパラメーターの値を入力してください。</p> <p>ユーザー名 Performance Data Warehouse バス・メッセージング・エンジンのユーザー名を入力してください。</p> <p>パスワード Performance Data Warehouse バス・メッセージング・エンジンで認証を行うパスワードを入力してください。</p> <p>パスワードの確認 確認のためにパスワードを再入力してください。</p>

関連タスク:

239 ページの『プロファイル管理ツールを使用した Process Center スタンドアロン・プロファイルの作成』

Process Center スタンドアロン・プロファイルを作成するには、プロファイル管理ツールを使用します。

909 ページの『Microsoft SQL Server で使用するスタンドアロン・プロファイルの作成』

Microsoft SQL Server で使用する Process Server スタンドアロン・プロファイルを作成するには、プロファイル管理ツールまたは manageprofiles コマンド行ユーティリティを使用して必須パラメーターを渡します。また、データベース設計ツール (DDT) で生成される設計ファイルを使用してプロファイルを作成することもできます。

データベースの構成

プロファイルを開始する前に、そのプロファイルで使用するようになるデータベースを構成しておく必要があります。

すべてのデータベース名およびスキーマ名のリストなど、データベース要件を計画しておく必要があります。詳しくは、『データベース構成の計画』を参照してください。

提供されているスクリプトを使用したデータベースの作成

プロファイルの作成時にデータベースを作成しなかった場合は、後で実行するためのデータベース・スクリプト・ファイルが生成されます。

スタンドアロン・プロファイルまたはデプロイメント・マネージャー・プロファイルの作成の一環としてデータベースを作成するか、データベース設計ツール (dbDesignGenerator) を使用するか、データベースを手動で作成するか、またはプロファイル作成後にデータベース・スクリプト・ファイルを実行してデータベースを作成できます。ネットワーク・デプロイメント環境では、デプロイメント・マネージャーを開始してカスタム・プロファイルを作成する前に、データベースを作成する必要があります。

制約事項: Oracle の場合、データベース・インスタンスは SQL ファイル実行の一環として作成されません。Oracle 製品資料を参照して、インスタンスを手動で作成する必要があります。

生成された SQL スクリプトを実行してデータベースを作成するには、以下の手順に従います。

1. スクリプトは以下のディレクトリにあります。

- Process Server データベースの場合:

```
install_root%dbscripts%ProcessServer%db_type%createDatabase.sql
```

- Performance Data Warehouse データベースの場合:

```
install_root%dbscripts%PerformanceDW%db_type%createDatabase.sql
```

- 共通データベースの場合:

```
install_root%dbscripts%CommonDB%db_type%createDatabase_CommonDB.sql
```

2. 該当するスクリプトに必要な変更を加えます。変更が必要な箇所を見つけるには、@ を探します。例えば、@DB_NAME@ を任意のデータベース名で置き換えます。

注: SQL Server の場合は、Process Server および Performance Data Warehouse 用に作成するデータベースで大/小文字が区別されないようにしてください。これは、COLLATE 属性値に含まれる文字列 CI によって指定されます。この変数が SQL_Latin1_General_CP1_CI_AS のように (SQL_Latin1_General_CP1_CS_AS ではなく) 指定されていることを確認します。これを行わない場合、以下のようなエラーが発生することがあります。

```
org.springframework.beans.factory.BeanCreationException: Error creating bean with name 'message.routingCache' defined in class path resource [registry.xml]: Instantiation of bean failed; nested exception is org.springframework.beans.BeanInstantiationException: Could not instantiate bean class [com.lombardisoftware.bpd.runtime.engine.message.DefaultMessageRoutingCache]: Constructor threw exception; nested exception is org.springframework.jdbc.BadSqlGrammarException: PreparedStatementCallback; bad SQL grammar [select "value" from lsw_system where "key"=?]; nested exception is com.microsoft.sqlserver.jdbc.SQLServerException: Invalid object name 'lsw_system'.
```

```
Caused by: com.microsoft.sqlserver.jdbc.SQLServerException: Invalid object name 'lsw_system'.
at com.microsoft.sqlserver.jdbc.SQLServerException.makeFromDatabaseError(SQLServerException.java:196)
at com.microsoft.sqlserver.jdbc.SQLServerStatement.getNextResult(SQLServerStatement.java:1454)
at com.microsoft.sqlserver.jdbc.SQLServerPreparedStatement.doExecutePreparedStatement
(SQLServerPreparedStatement.java:388)
at com.microsoft.sqlserver.jdbc.SQLServerPreparedStatement$PrepStmtExecCmd.doExecute
(SQLServerPreparedStatement.java:338)
```



```

at com.microsoft.sqlserver.jdbc.TDSCommand.execute(IOBuffer.java:4026)
at com.microsoft.sqlserver.jdbc.SQLServerConnection.executeCommand(SQLServerConnection.java:1416)
at com.microsoft.sqlserver.jdbc.SQLServerStatement.executeCommand(SQLServerStatement.java:185)
at com.microsoft.sqlserver.jdbc.SQLServerStatement.executeStatement(SQLServerStatement.java:160)
at com.microsoft.sqlserver.jdbc.SQLServerPreparedStatement.executeQuery
(SQLServerPreparedStatement.java:281)
at org.apache.commons.dbcp.DelegatingPreparedStatement.executeQuery
(DelegatingPreparedStatement.java:205)
at org.springframework.jdbc.core.JdbcTemplate$1.doInPreparedStatement(JdbcTemplate.java:648)
at org.springframework.jdbc.core.JdbcTemplate.execute(JdbcTemplate.java:591)
[...]

```

3. 該当するスクリプトを実行して、エラーなく完了することを確認します。

関連タスク:

904 ページの『Process Center または Process Server のデータベース表の作成』

SQL スクリプトを実行して、IBM Process Center 構成または IBM Process Server 構成用のデータベース表を作成します。

905 ページの『Performance Data Warehouse データベース表の作成』

SQL スクリプトを実行して、IBM Performance Data Warehouse 用のデータベース表を作成します。

907 ページの『XA トランザクションの構成』

データベースをインストールしたら、サーバーを始動する前に XA トランザクションを構成する必要があります。Microsoft SQL Server JDBC ドライバーは、Java Platform Enterprise Edition/JDBC 2.0 のオプションの分散トランザクションのサポートを提供します。**SQLServerXADataSource** クラスから取得した JDBC 接続は、Java Platform Enterprise Edition (Java EE) アプリケーション・サーバーなどの標準分散トランザクション処理環境に参加できます。

手動でのデータベースの作成

IBM Business Process Manager Advanced は、Process Server データベース、Performance Data Warehouse データベース、および共通データベースを必要とします。標準インストールを使用して IBM Business Process Manager Advanced をインストールする前に、データベースが使用可能であることを確認する必要があります。

Process Server および Performance Data Warehouse には、固有の独立したデータベースが必要であり、これらを他の BPM コンポーネントと同じデータベース上に構成することはできません。

ここに示す手順は、DB2 と SQL Server のみを対象としています。Oracle の場合は、Oracle の単一インスタンスを使用して BPM を構成できます。Oracle インスタンスが存在し、アクセス可能でなければなりません。Oracle インスタンスを作成するには、Oracle の資料を参照してください。単一の Oracle インスタンスを使用する場合は、必ず BPM データベースごとに異なるユーザー ID を使用してください。

データベースを作成するには、以下のコマンドを使用します (@ プレースホルダーの文字列は適切な値に置き換えます)。

• DB2の場合:

```

create database @DB_NAME@ automatic storage yes using codeset UTF-8 territory US pagesize 32768;
connect to @DB_NAME@;
grant dbadm on database to user @DB_USER@;
UPDATE DB CFG FOR @DB_NAME@ USING LOGFILSIZ 4096 DEFERRED;
UPDATE DB CFG FOR @DB_NAME@ USING LOGSECOND 64 DEFERRED;
connect reset;

```

• SQL Server の場合: Process Server データベースおよび Performance Data Warehouse データベースの場合:

```

osql -b -S hostname -U db_user_account -P db_user_password
-Q "CREATE DATABASE database_name COLLATE SQL_Latin1_General_CP1_CI_AS"

```


ここで、**hostname** は SQL Server をホストするシステムのホスト名、**db_user_account** と **db_user_password** は データベースを作成するためのログインに使用されるユーザー名とパスワード、**database_name** は作成するデータベースの名前です。これらのデータベースでは大/小文字が区別されないようにする必要があるので、**COLLATE SQL_Latin1_General_CP1_CI_AS** が含まれています。

共通データベースを作成するには、以下の手順を実行します。

```
osql -b -S hostname -U db_user_account -P db_user_password
-Q "CREATE DATABASE database_name COLLATE SQL_Latin1_General_CP1_CS_AS"
```

違っているのは COLLATE 分節です。共通データベースでは、照合の際に大/小文字を区別する必要があります。

Microsoft SQL Server データベースがインストールされた後、サーバーを始動する前に、XA トランザクションを構成する必要があります。

注: SQL Server の場合は、Process Server および Performance Data Warehouse 用に作成するデータベースで大/小文字が区別されないようにしてください。これは、**COLLATE** 属性値に含まれる文字列 **CI** によって指定されます。この変数が **SQL_Latin1_General_CP1_CI_AS** のように (**SQL_Latin1_General_CP1_CS_AS** ではなく) 指定されていることを確認します。これを行わない場合、以下のようなエラーが発生することがあります。

```
org.springframework.beans.factory.BeanCreationException: Error creating bean with name
'message.routingCache' defined in class path resource [registry.xml]: Instantiation of bean
failed; nested exception is org.springframework.beans.BeanInstantiationException: Could not
instantiate bean class [com.lombardisoftware.bpd.runtime.engine.message.DefaultMessageRoutingCache]:
Constructor threw exception; nested exception is org.springframework.jdbc.BadSqlGrammarException:
PreparedStatementCallback; bad SQL grammar [select "value" from lsw_system where "key"=?];
nested exception is com.microsoft.sqlserver.jdbc.SQLServerException: Invalid object name
'lsw_system'.
```

```
Caused by: com.microsoft.sqlserver.jdbc.SQLServerException: Invalid object name 'lsw_system'.
at com.microsoft.sqlserver.jdbc.SQLServerException.makeFromDatabaseError(SQLServerException.java:196)
at com.microsoft.sqlserver.jdbc.SQLServerStatement.getNextResult(SQLServerStatement.java:1454)
at com.microsoft.sqlserver.jdbc.SQLServerPreparedStatement.doExecutePreparedStatement
(SQLServerPreparedStatement.java:388)
at com.microsoft.sqlserver.jdbc.SQLServerPreparedStatement$PrepStmtExecCmd.doExecute
(SQLServerPreparedStatement.java:338)
at com.microsoft.sqlserver.jdbc.TDSCCommand.execute(IOBuffer.java:4026)
at com.microsoft.sqlserver.jdbc.SQLServerConnection.executeCommand(SQLServerConnection.java:1416)
at com.microsoft.sqlserver.jdbc.SQLServerStatement.executeCommand(SQLServerStatement.java:185)
at com.microsoft.sqlserver.jdbc.SQLServerStatement.executeStatement(SQLServerStatement.java:160)
at com.microsoft.sqlserver.jdbc.SQLServerPreparedStatement.executeQuery
(SQLServerPreparedStatement.java:281)
at org.apache.commons.dbcp.DelegatingPreparedStatement.executeQuery
(DelegatingPreparedStatement.java:205)
at org.springframework.jdbc.core.JdbcTemplate$1.doInPreparedStatement(JdbcTemplate.java:648)
at org.springframework.jdbc.core.JdbcTemplate.execute(JdbcTemplate.java:591)
[...]
```

Microsoft SQL Server を Performance Data Warehouse のデータベースとして使用する場合は、既存のプロセス・アプリケーション用の最適化プログラムまたはポータルを使用したレポートの生成中に、以下のエラー・メッセージが表示される可能性があります。この場合は、レポートが表示されなくなります。

```
com.microsoft.sqlserver.jdbc.SQLServerException: Invalid object name 'slathresholdtraversals'.
at com.microsoft.sqlserver.jdbc.SQLServerException.makeFromDatabaseError
(SQLServerException.java:196)
at com.microsoft.sqlserver.jdbc.SQLServerStatement.getNextResult
(SQLServerStatement.java:1454)
at com.microsoft.sqlserver.jdbc.SQLServerStatement.doExecuteCursed
```

```
(SQLServerStatement.java:1824)
at com.microsoft.sqlserver.jdbc.SQLServerStatement.doExecuteStatement
(SQLServerStatement.java:760)
at com.microsoft.sqlserver.jdbc.SQLServerStatement$StmtExecCmd.doExecute
(SQLServerStatement.java:685)
```

Microsoft SQL Server では、ユーザーと関連付けられたデフォルトのスキーマ名がユーザー名と同じでなければなりません。例えば、Performance Data Warehouse データベースのユーザー名が *perfDB* の場合は、ユーザー *perfDB* と関連付けられたデフォルトのスキーマ名も *perfDB* にする必要があります。スーパーユーザー (*sa* など) を使用するのではなく、通常のデータベース・ユーザーを作成し、そのユーザーに必要な権限を割り当てる必要があります。この理由は、スーパーユーザーのデフォルトのスキーマが *dbo* であり、これを変更できないためです。

既存のテーブルが、ユーザー名と同じスキーマと関連付けられていない場合は、以下のステップを実行できます。

1. SQL Server Management Studio のオブジェクト・エクスプローラーで、テーブル名を右クリックし、「設計」をクリックします。
2. 「設計」ビューで、F4 キーを押して「プロパティ」ウィンドウを表示します。
3. 「プロパティ」ウィンドウで、スキーマ名を更新します。
4. タブを右クリックし、「閉じる」を選択して「設計」ビューを閉じます。
5. 保存するか尋ねられたら、「OK」をクリックします。選択したテーブルが、スキーマに転送されます。
6. Performance Data Warehouse データベース内のすべてのテーブルに対して、上記のステップを繰り返します。

関連タスク:

『Process Center または Process Server のデータベース表の作成』

SQL スクリプトを実行して、IBM Process Center 構成または IBM Process Server 構成用のデータベース表を作成します。

905 ページの『Performance Data Warehouse データベース表の作成』

SQL スクリプトを実行して、IBM Performance Data Warehouse 用のデータベース表を作成します。

907 ページの『XA トランザクションの構成』

データベースをインストールしたら、サーバーを始動する前に XA トランザクションを構成する必要があります。Microsoft SQL Server JDBC ドライバーは、Java Platform Enterprise Edition/JDBC 2.0 のオプションの分散トランザクションのサポートを提供します。**SQLServerXADataSource** クラスから取得した JDBC 接続は、Java Platform Enterprise Edition (Java EE) アプリケーション・サーバーなどの標準分散トランザクション処理環境に参加できます。

Process Center または Process Server のデータベース表の作成

SQL スクリプトを実行して、IBM Process Center 構成または IBM Process Server 構成用のデータベース表を作成します。

構成に必要なすべてのステップを実行しており、データベースを初期化するためのデータベース・スクリプトを構成中に実行しないことを選択していることが必要です。また、Process Center または Process Server のデータベース表の作成先となるデータベースを作成済みであることが必要です。データベースの作成については、『データベースの作成』を参照してください。

構成の完了時に作成された Process Center または Process Server の SQL スクリプトを実行するには、次の手順で行います。

注: Process Server はスキーマをサポートしません。ユーザーとしてログインしてから、SQL ファイルを実行する必要があります。

1. データベース表を作成するための SQL スクリプトが格納されているディレクトリーに移動します。

デフォルトでは、SQL スクリプトはプロファイルの作成時に、*profile_root/dbscripts/ProcessServer/DB_product* に出力されます。以下に例を示します。

profile_root/dbscripts/ProcessServer/DB2

2. 以下のコマンドを root ユーザーまたは管理者として実行します。

- **Linux** **UNIX** `configProcessServerDB.sh createDB`
- **Windows** `configProcessServerDB.bat createDB`

注: **createDB** パラメーターは、ローカル・データベースを作成するために使用されます。必要なデータベースが作成済みの場合は、このパラメーターを省略してください。**createDB** パラメーターは、Oracle データベースには適用できないため、コマンドから除外する必要があります。

3. SQL データベースの場合は、Process Center または Process Server 用のテーブルを作成します。

ステップ 1 で移動したディレクトリーから、Process Center または Process Server 用に構成したデータベース (BPMDB) に対して **createTable_ProcessServer.sql** を実行します。

すべての SQL ステートメントがエラーなく成功したことを確認してください。

4. SQL データベースの場合は、Process Center または Process Server 用のテーブル・プロシージャーを作成します。

ステップ 1 で移動したディレクトリーから、Process Center または Process Server 用に構成したデータベース (BPMDB) に対して **createProcedure_ProcessServer.sql** を実行します。

すべての SQL ステートメントがエラーなく成功したことを確認してください。

5. 接続をリセットします。

Process Center 構成または Process Server 構成用のデータベース表が作成され、データベース構成が完了しました。

これで、データベースにシステム情報をロードし、Process Center 構成または Process Server 構成上でサーバーまたはクラスターを開始することができます。

関連タスク:

901 ページの『提供されているスクリプトを使用したデータベースの作成』

プロファイルの作成時にデータベースを作成しなかった場合は、後で実行するためのデータベース・スクリプト・ファイルが生成されます。

902 ページの『手動でのデータベースの作成』

IBM Business Process Manager Advanced は、Process Server データベース、Performance Data Warehouse データベース、および共通データベースを必要とします。標準インストールを使用して IBM Business Process Manager Advanced をインストールする前に、データベースが使用可能であることを確認する必要があります。

Performance Data Warehouse データベース表の作成

SQL スクリプトを実行して、IBM Performance Data Warehouse 用のデータベース表を作成します。

構成に必要なすべてのステップを実行しており、データベースを初期化するためのデータベース・スクリプトを構成中に実行しないことを選択していることが必要です。また、Performance Data Warehouse のデータベース表の作成先となるデータベースを作成済みであることが必要です。データベースの作成については、『データベースの作成』を参照してください。

構成の完了時に作成された Performance Data Warehouse の SQL スクリプトを実行するには、次の手順で行います。

注: Performance Data Warehouse はスキーマをサポートしません。ユーザーとしてログインしてから、SQL ファイルを実行する必要があります。

1. データベース表を作成するための SQL スクリプトが格納されているディレクトリーに移動します。

デフォルトでは、SQL スクリプトはプロファイルの作成時に、`profile_root/dbscripts/PerformanceDW/DB_product` に出力されます。以下に例を示します。

`profile_root/dbscripts/PerformanceDW/DB2`

2. 以下のコマンドを root ユーザーまたは管理者として実行します。

- `Linux` `UNIX` **configPerformanceDWDB.sh createDB**
- `Windows` **configPerformanceDWDB.bat createDB**

注: `createDB` パラメーターは、ローカル・データベースを作成するために使用されます。`createDB` パラメーターは、Oracle データベースには適用できないため、コマンドから除外する必要があります。

3. SQL データベースの場合は、Performance Data Warehouse 用のテーブルを作成します。

ステップ 1 で移動したディレクトリーから、Performance Data Warehouse 用に構成したデータベース (PDWDB) に対して `createTable_PerformanceDW.sql` を実行します。

すべての SQL ステートメントがエラーなく成功したことを確認してください。

Performance Data Warehouse 用のデータベース表が作成され、データベース構成が完了しました。

これで、データベースにシステム情報をロードし、Performance Data Warehouse 上でサーバーまたはクラスターを開始することができます。

関連タスク:

901 ページの『提供されているスクリプトを使用したデータベースの作成』

プロファイルの作成時にデータベースを作成しなかった場合は、後で実行するためのデータベース・スクリプト・ファイルが生成されます。

902 ページの『手動でのデータベースの作成』

IBM Business Process Manager Advanced は、Process Server データベース、Performance Data Warehouse データベース、および共通データベースを必要とします。標準インストールを使用して IBM Business Process Manager Advanced をインストールする前に、データベースが使用可能であることを確認する必要があります。

Microsoft SQL Server データベースの構成

Microsoft SQL Server と共に使用するスタンドアロン・プロファイルを作成することができます。

前提条件

プロファイルを作成する前に、データベースをホストするサーバーに Microsoft SQL Server をインストールする必要があります。

データベースに関する制約事項

- コンポーネント用に作成されるデータベースでは、大/小文字の区別が必要です。2つの例外は、Process Server データベース (BP MDB) および Performance Data Warehouse データベース (PDWDB) です。これらの2つは、大/小文字を区別しないものでなければなりません。SQL ファイルを使用して Business Process Choreographer 用のデータベースを作成する場合には、SQL ファイルは、それらのデータベースに対して大/小文字の区別のある名前を作成します。
- Business Process Choreographer Explorer のレポート作成機能では、Microsoft SQL Server データベースはサポートされていません。

データベース特権およびセキュリティー上の考慮事項

データベース・スキーマを作成するには、テーブルを作成するための十分な権限が付与されているユーザー ID が必要です。テーブルが作成されたら、テーブル内の情報の選択、挿入、更新、削除を行うのに十分な権限をアプリケーションが備えている必要があります。

表 139 は、データ・ストアへのアクセスに必要なデータベース特権を示しています。

表 139. データベース特権

データベース管理システム	データ・ストア・テーブルの使用に必要な最小の特権	データ・ストア・テーブルの作成に必要な追加の特権
Microsoft SQL Server	SQL Server の認証が SQL Server のログイン ID およびパスワードに基づいて行われるように、SQL Server を構成します。ユーザー ID は、テーブルを所有できるか、または TRUNCATE TABLE ステートメントを発行するのに十分な権限を備えているグループのメンバーになることができます。	ユーザー ID には CREATE TABLE ステートメント特権が必要です。

分離レベルは、トランザクションのロック動作を指定します。分離レベルを READ_COMMITTED_SNAPSHOT に設定する必要があります。SQL コマンド **SELECT name, is_read_committed_snapshot_on FROM sys.database** を使用すると、Process Server データベース、パフォーマンス・データウェアハウス、および共通データベースの分離レベルを確認できます。SQL コマンド **ALTER DATABASE <database> SET READ_COMMITTED_SNAPSHOT ON** を使用すると、分離レベルを設定できます。

関連タスク:

196 ページの『標準インストール時の既存データベースの構成』
標準インストール時に既存のデータベース・サーバーを構成するための正しいデータベース値を判別するには、このトピックの情報を参考にしてください。

XA トランザクションの構成:

データベースをインストールしたら、サーバーを始動する前に XA トランザクションを構成する必要があります。Microsoft SQL Server JDBC ドライバーは、Java Platform Enterprise Edition/JDBC 2.0 のオプション

ンの分散トランザクションのサポートを提供します。**SQLServerXADataSource** クラスから取得した JDBC 接続は、Java Platform Enterprise Edition (Java EE) アプリケーション・サーバーなどの標準分散トランザクション処理環境に参加できます。

XA トランザクションの構成に失敗すると、サーバーの始動時に次のエラーが起こる可能性があります。**javax.transaction.xa.XAException: com.microsoft.sqlserver.jdbc.SQLServerException: XA 制御接続を作成できませんでした。(Failed to create the XA control connection.) エラー: ストアド・プロシージャ 'master..xp_sqljdbc_xa_init_ex' が見つかりませんでした。(Error: "Could not find stored procedure 'master..xp_sqljdbc_xa_init_ex'.')**..

1. MS DTC サービスには、Service Manager で「Automatic」のマークを付けて、SQL Server サービスの開始時に実行されるようにしてください。XA トランザクション用に MS DTC を使用可能にするには、以下のステップを実行する必要があります。

Windows XP および Windows Server 2003 の場合:

- a. 「コントロール パネル」 > 「管理ツール」 > 「コンポーネント サービス」を選択します。
- b. 「コンポーネント サービス」 > 「コンピュータ」を選択し、「マイ コンピュータ」を右クリックして、「プロパティ」を選択します。
- c. 「MSDTC」タブをクリックし、次に「セキュリティ構成」をクリックします。
- d. 「XA トランザクションを使用可能にする (Enable XA Transactions)」チェック・ボックスを選択し、「OK」をクリックします。これで、MS DTC サービスが再始動します。
- e. もう一度「OK」をクリックして「プロパティ」ダイアログ・ボックスを閉じ、「コンポーネント サービス」を閉じます。
- f. SQL Server サーバーを再始動して、MS DTC の変更と同期していることを確認します。

Windows Vista および Windows 7 の場合:

- a. 「コントロール パネル」 > 「管理ツール」 > 「コンポーネント サービス」を選択します。
 - b. 「コンポーネント サービス」 > 「コンピュータ」 > 「マイ コンピュータ」 > 「分散トランザクション コーディネータ」を選択します。
 - c. 「ローカル DTC (Local DTC)」を右クリックし、「プロパティ」を選択します。
 - d. 「ローカル DTC のプロパティ (Local DTC Properties)」ダイアログ・ボックスで「セキュリティ」タブをクリックします。
 - e. 「XA トランザクションを使用可能にする (Enable XA Transactions)」チェック・ボックスを選択し、「OK」をクリックします。これで、MS DTC サービスが再始動します。
 - f. もう一度「OK」をクリックして「プロパティ」ダイアログ・ボックスを閉じ、「コンポーネント サービス」を閉じます。
 - g. SQL Server サーバーを再始動して、MS DTC の変更と同期していることを確認します。
2. JDBC 分散トランザクション・コンポーネントを構成します。
 - a. 『リソース』セクションの URL を使用して、Microsoft のサイトから「Microsoft SQL Server JDBC Drive 2.0」ドライバーをダウンロードします。
 - b. 任意のフォルダーにアーカイブを unzip します。
 - c. JDBC unarchived ディレクトリーから SQL サーバー・コンピューターの Binn ディレクトリーに sqljdbc_xa.dll ファイルをコピーします。32 ビット SQL サーバーで XA トランザクションを使用する場合は、SQL サーバーが x64 プロセッサにインストールされていても、x86 フォルダの sqljdbc_xa.dll ファイルを使用します。x64 プロセッサ上の 64 ビット SQL サーバーで XA トランザクションを使用する場合は、x64 フォルダの sqljdbc_xa.dll ファイルを使用します。

- d. SQL サーバーで `xa_install.sql` データベース・スクリプトを実行します。このスクリプトにより、`sqljdbc_xa.dll` で呼び出される拡張ストアード・プロシージャがインストールされます。これらの拡張ストアード・プロシージャにより、Microsoft SQL Server JDBC ドライバー用の分散トランザクションおよび XA サポートが実装されます。このスクリプトは、SQL Server インスタンスの管理者として実行する必要があります。
- e. JDBC ドライバーを使用する分散トランザクションに参加する権限を特定のユーザーに認可するには、そのユーザーをマスター・データベース内の `SqlJDBCXAUser` ロールに追加します (例えば、`lombardi` ユーザーの場合、「User」マッピングにマスター・データベースを追加し、`SqlJDBCXAUser` ロールにチェック・マークを付けます)。

Microsoft SQL Server で使用するスタンドアロン・プロファイルの作成:

Microsoft SQL Server で使用する Process Server スタンドアロン・プロファイルを作成するには、プロファイル管理ツールまたは `manageprofiles` コマンド行ユーティリティを使用して必須パラメーターを渡します。また、データベース設計ツール (DDT) で生成される設計ファイルを使用してプロファイルを作成することもできます。

プロファイルを作成する前に、以下の前提条件を満たしてください。

- データベースをホストするサーバーに、Microsoft SQL Server をインストールします。
- CMNDB (CommonDB) データベースと、BPEDB (Business Process Choreographer)、BPMDB (Process Server)、および PDWDB (Performance Data Warehouse) の各データベースを作成します。Microsoft SQL Server 用のデータベースの作成に使用するコマンドの例を次に示します。

```
osql -b -S hostname -U db_user_account -P db_user_password  
-Q "CREATE DATABASE database_name COLLATE SQL_Latin1_General_CP1_CI_AS"
```

ここで、`hostname` は SQL Server をホストするシステムのホスト名、`db_user_account` と `db_user_password` は データベースを作成するためのログインに使用されるユーザー名とパスワード、`database_name` は作成するデータベースの名前です。`COLLATE SQL_Latin1_General_CP1_CI_AS` が含まれているのは、BPMDB (Process Server) データベースと PDWDB (Performance Data Warehouse) データベースで大/小文字を区別しないようにする必要があるのでです。

- Business Space が構成されている場合は、CMNDB データベース内にスキーマ名 `IBMBUSSP` でテーブルが作成されます。CMNDB データベースにメッセージング・エンジン・テーブルを作成するには、ステップ 2 (915 ページ) の説明に従ってスキーマを手動で作成する必要があります。ローカル・データベースを使用する場合は、プロファイルの作成時に Common Event Infrastructure データベースが作成されます。それ以外の場合は、プロファイルの作成時に生成されたスクリプトを使用して、Common Event Infrastructure データベースを作成する必要があります。
- Common Event Infrastructure (CEI) を使用する予定の場合は、CEI データベースを手動で作成する必要があります。『*Common Event Infrastructure (CEI) データベースの構成*』を参照してください。

IBM Business Process Manager には SQL Server 用の JDBC ドライバーがパッケージされています。JDBC ドライバー (バージョンおよびレベル情報を含む) については、『IBM Business Process Manager のハードウェアおよびソフトウェア要件の詳細 (Detailed hardware and software requirements for IBM Business Process Manager)』ページを参照してください。

注: IBM Business Process Manager に同梱されているもの以外の JDBC ドライバー・レベルは、お客様ご自身で用意していただく必要があります。

CommonDB、Process Server、Performance Data Warehouse、Business Space、Service Component Architecture (SCA) システム・メッセージング・エンジン、および SCA アプリケーション・メッセージング・エンジンは、スタンドアロン・プロファイルの作成時に構成できます。

Business Process Choreographer コンテナ、Business Process Choreographer メッセージング・エンジン、および Business Process Choreographer Explorer は、bpeconfig.jacl スクリプトまたは管理コンソールを使用して構成します。Business Process Choreographer の構成方法については、ステップ 3 (916 ページ) を参照してください。

1. プロファイル管理ツールまたは `manageprofiles` コマンド行ユーティリティを使用するか、DDT によって生成される `dbDesign` ファイルをインポートして、プロファイルを作成します。
 - プロファイル管理ツールを使用してプロファイルを作成するには、『252 ページの『プロファイル管理ツールを使用したスタンドアロン・プロファイルの作成』』を参照してください。『表 140』は、「データベース構成 (その 2)」ページおよび『Microsoft SQL Server の場合の必須のデータベース構成フィールド (その 3)』で入力する必要のあるフィールドのリストを示しています。

表 140. Microsoft SQL Server の場合の必須のデータベース構成フィールド (その 2)

フィールド	必要なアクション
JDBC ドライバー	<p>以下のオプションから選択してください。</p> <ul style="list-style-type: none"> • Microsoft SQL Server JDBC 2.0 注: JDBC 3.0 もサポートされています。JDBC 3.0 の場合は、「Microsoft SQL Server JDBC 2.0」を選択してください。 • Microsoft SQL Server JDBC 1.2
共通データベース	<p>共通データベースの場合は、以下のパラメーターの値を入力してください。</p> <ul style="list-style-type: none"> • ユーザー名 共通データベースのユーザー名を入力してください。 • パスワード 共通データベースで認証を行うパスワードを入力してください。 • パスワードの確認 確認のためにパスワードを再入力してください。
Process Server データベース	<p>Process Server データベースの場合は、以下のパラメーターの値を入力してください。</p> <ul style="list-style-type: none"> • ユーザー名 Process Server データベースのユーザー名を入力してください。 • パスワード Process Server データベースで認証を行うパスワードを入力してください。 • パスワードの確認 確認のためにパスワードを再入力してください。

表 140. Microsoft SQL Server の場合の必須のデータベース構成フィールド (その 2) (続き)

フィールド	必要なアクション
Performance Data Warehouse データベース	<p>Performance Data Warehouse データベースの場合は、以下のパラメーターの値を入力してください。</p> <ul style="list-style-type: none"> • ユーザー名 Performance Data Warehouse データベースのユーザー名を入力してください。 • パスワード Performance Data Warehouse データベースで認証を行うパスワードを入力してください。 • パスワードの確認 確認のためにパスワードを再入力してください。
データベース・サーバーのホスト名 (例えば IP アドレス)	デフォルト値 localhost をそのまま確定するか、データベース・サーバーの正しいホスト名を入力します。
サーバー・ポート	デフォルト値 1433 をそのまま確定するか、サーバーの正しいポート番号を入力します。
JDBC ドライバーのクラスパス・ファイルのディレクトリ・ロケーション (Directory location of JDBC driver classpath files)	<p>JDBC 2.0 ドライバーのクラスパス・ファイル (sqljdbc4.jar) は製品と一緒にパッケージ化されており、ディレクトリー <code>\${WAS_INSTALL_ROOT}¥jdbcdrivers¥SQLServer</code> に置かれています。</p>

表 141. Microsoft SQL Server の場合の必須のデータベース構成フィールド (その 3)

フィールド	必要なアクション
Common Event Infrastructure バス・メッセージング・エンジン (Common Event Infrastructure bus messaging engine)	<p>Common Event Infrastructure バス・メッセージング・エンジンの場合は、以下のパラメーターの値を入力してください。</p> <ul style="list-style-type: none"> • ユーザー名 Common Event Infrastructure バス・メッセージング・エンジンのユーザー名を入力してください。 • パスワード Common Event Infrastructure バス・メッセージング・エンジンで認証を行うパスワードを入力してください。 • パスワードの確認 確認のためにパスワードを再入力してください。

表 141. Microsoft SQL Server の場合の必須のデータベース構成フィールド (その 3) (続き)

フィールド	必要なアクション
SCA アプリケーション・バス・メッセージング・エンジン	<p>SCA アプリケーション・バス・メッセージング・エンジンの場合は、以下のパラメーターの値を入力してください。</p> <ul style="list-style-type: none"> • ユーザー名 <p>SCA アプリケーション・バス・メッセージング・エンジンのユーザー名を入力してください。</p> • パスワード <p>SCA アプリケーション・バス・メッセージング・エンジンで認証を行うパスワードを入力してください。</p> • パスワードの確認 <p>確認のためにパスワードを再入力してください。</p>
SCA システム・バス・メッセージング・エンジン	<p>SCA システム・バス・メッセージング・エンジンの場合は、以下のパラメーターの値を入力してください。</p> <ul style="list-style-type: none"> • ユーザー名 <p>SCA システム・バス・メッセージング・エンジンのユーザー名を入力してください。</p> • パスワード <p>SCA システム・バス・メッセージング・エンジンで認証を行うパスワードを入力してください。</p> • パスワードの確認 <p>確認のためにパスワードを再入力してください。</p>
Process Server バス・メッセージング・エンジン (Process Server bus messaging engine)	<p>Process Server バス・メッセージング・エンジンの場合は、以下のパラメーターの値を入力してください。</p> <ul style="list-style-type: none"> • ユーザー名 <p>Process Server バス・メッセージング・エンジンのユーザー名を入力してください。</p> • パスワード <p>Process Server バス・メッセージング・エンジンで認証を行うパスワードを入力してください。</p> • パスワードの確認 <p>確認のためにパスワードを再入力してください。</p>

表 141. Microsoft SQL Server の場合の必須のデータベース構成フィールド (その 3) (続き)

フィールド	必要なアクション
Performance Data Warehouse バス・メッセージング・エンジン (Performance Data Warehouse bus messaging engine)	<p>Performance Data Warehouse バス・メッセージング・エンジンの場合は、以下のパラメーターの値を入力してください。</p> <ul style="list-style-type: none"> • ユーザー名 <p>Performance Data Warehouse バス・メッセージング・エンジンのユーザー名を入力してください。</p> • パスワード <p>Performance Data Warehouse バス・メッセージング・エンジンで認証を行うパスワードを入力してください。</p> • パスワードの確認 <p>確認のためにパスワードを再入力してください。</p>

Process Server スタンドアロン・プロファイルの構成時に、プロファイル管理ツールは以下のアクションを実行します。

- ポート、プロファイルのロケーション、およびプロファイル、ノード、サーバー、ホスト、セル (該当する場合) の名前にカスタマイズ値を割り当てます。
- 共通データベースを構成します。
- Process Server および Performance Data Warehouse データベースを構成します。
- **-dbDelayConfig** パラメーターが **false** に設定されている場合は、それぞれのデータベースでテーブルを作成します。このパラメーターが **true** に設定されている場合は、*install_root/profiles/profile_name/dbscripts* ディレクトリーにある SQL スクリプトを手動で実行する必要があります。

注: リモート・データベースを使用していて、データベース・スクリプトの実行を遅らせたい場合は、**-dbDelayConfig** パラメーターを **true** に設定します。

- 管理コンソールおよび WebSphere Application Server のサンプル・アプリケーションをデプロイします。
- デフォルト・アプリケーション (Snoop、Hello、および HitCount の各サーブレットを含む) をデプロイします。
- Web サーバー定義を作成します。
- 管理セキュリティーを使用可能にします。
- ご使用のオペレーティング・システムとユーザー・アカウントの特権でサービスの作成が許可される場合は、サーバーを実行するためのシステム・サービスを作成します。
- ビジネス・ルール・マネージャーの構成
- **manageprofiles** コマンド行ユーティリティーを使用してプロファイルを作成するには、『422 ページの『manageprofiles を使用した Process Server スタンドアロン・プロファイルの作成』』を参照してください。

以下のコマンド例は、CommonDB、Common Event Infrastructure、メッセージ・エンジン、Business Space の各コンポーネントが 1 つのデータベースに含まれるスタンドアロン・プロファイルを作成するために使用されます。

Microsoft SQL Server JDBC 1.2 ドライバーの場合:

```
install_root/bin/manageprofiles -create -templatePath
install_root/profileTemplates/BPM/
default.procsvr.adv -dbType MSSQLSERVER_MICROSOFT -dbJDBCClasspath
path to JDBC driver -dbDriverVersion 1.2 -dbUserId userID -dbPassword password -dbCommonForME
true -dbCeiMeSchemaName
ceiSchema -dbSysMeSchemaName sysSchema
-dbAppMeSchemaName appSchema
```

Microsoft SQL Server JDBC 2.0 ドライバーの場合:

```
install_root/bin/manageprofiles -create -templatePath
install_root/profileTemplates/BPM/
default.procsvr.adv -dbType MSSQLSERVER_MICROSOFT -dbJDBCClasspath
path to JDBC driver -dbDriverVersion 2.0 -dbUserId userID -dbPassword
password -dbCommonForME true -dbCeiMeSchemaName
ceiSchema -dbSysMeSchemaName sysSchema
-dbAppMeSchemaName appSchema
```

表 142 に、Microsoft SQL Server 上で共通データベースを構成する場合に使用可能な **manageprofiles** のパラメーターを示します。

表 142. Microsoft SQL Server を使用して共通データベースを構成するために使用可能な *manageprofiles* パラメーター

パラメーター	説明
-dbJDBCClasspath <i>jdbc_driver_location</i>	デフォルトは <install_root>/jdbcdrivers/<dbProduct> です。ここで、<dbProduct> は次のとおりです。 dbProduct=SQLServer
-dbType <i>db_type</i>	データベース・タイプ。以下の値を設定します。 <ul style="list-style-type: none"> MSSQLSERVER_MICROSOFT (Microsoft JDBC ドライバー V1.2 または V2.0 を使用する Microsoft SQL Server データベース)
-dbCreateNew <i>true false</i>	データベースを作成するのか、再使用するのを示します。有効な値は true または false です。デフォルト値は true です。
-dbDelayConfig <i>true false</i>	プロファイルの作成後にテーブルを作成するかどうかを示します。有効な値は true または false です。このパラメーターは、デフォルトでは false に設定されています。リモート・データベースを使用していて、データベース・スクリプトの実行を遅らせたい場合は、このパラメーターを true に設定します。
-dbDriverVersion <i>db_driver_version</i>	データベース・ドライバーのバージョン。このパラメーターは、Microsoft SQL Server にのみ有効です。SQL Server データベースの場合は、 1.2 (Microsoft SQL JDBC ドライバー V1.2 の場合) または 2.0 (Microsoft SQL JDBC ドライバー V2.0 の場合) を指定します。指定しない場合、この値は自動的にデフォルトの 2.0 に設定されます。
-dbHostName <i>db_host_name</i>	データベース・サーバーのホスト名または IP アドレス。デフォルト値は localhost です。
-dbName <i>db_name</i>	データベースの名前。デフォルト値は CMNDB です。

表 142. Microsoft SQL Server を使用して共通データベースを構成するために使用可能な *manageprofiles* パラメーター (続き)

パラメーター	説明
-dbOutputScriptDir <i>db_output_dir</i>	この値は絶対パスでなければなりません。相対パスを設定した場合、SQL スクリプトはエクスポートまたは実行されず、その結果、サーバー始動時に多数の例外が発生することになります。エクスポートされたデータベース・スクリプトのロケーション。デフォルト値は dbscripts¥CommonDB¥DB2 です。
-dbPassword <i>db_pswd</i>	データベース認証に必要なパスワード。このパラメーターは必須です。
-dbServerPort <i>db_port_number</i>	データベース・サーバーのポート番号。使用するデータベースに応じて、デフォルトのポート番号の代わりに別のポート番号を指定できます。デフォルト値は 1433 です。
-dbUserId <i>db_userid</i>	データベースの作成および除去の特権を持つユーザー ID を指定します。WebSphere データ・ソースは、この ID を使用してデータベース接続を認証します。Microsoft SQL Server データベースの場合、データベース表を所有する SQL Server のユーザー ID を指定します。

- DDT によって生成される dbDesign ファイルをインポートしてデータベース構成を作成するには、「データベース設計ファイルの使用」オプションを選択します。このオプションは、「拡張」オプションを使用して作成されたスタンドアロン・サーバー・プロファイルで使用でき、プロファイル管理ツールの「データベース構成」ページに表示されます。
 - a. 「データベース設計ファイルの使用 (Use a database design file)」を選択します。
 - b. 「参照」をクリックします。
 - c. 設計ファイルの完全修飾パス名を指定し、「次へ」をクリックします。
 - d. データベース・スクリプトを自動で (プロファイル作成プロセスの一部として) 実行する場合は、「データベース・スクリプトを実行してデータベース表を作成する」を選択します。このチェック・ボックスを選択しない場合、プロファイル作成の完了後に、ユーザー自身またはデータベース管理者がスクリプトを手動で実行できます。

重要: 「既存のローカル・データベースまたはリモート・データベースを使用する」を選択したときに表が既に存在している場合は、「データベース・スクリプトを実行してデータベース表を作成する」が選択されていないことを確認してください。両方のオプションが選択されていると、エラーが発生してプロファイルの作成が失敗します。
 - e. 「次へ」をクリックします。

設計ファイルの指定を選択すると、データベースの構成を完了するために、設計ファイルのロケーションがコマンド行に渡されます。データベース構成用の設計ファイルの使用について詳しくは、922 ページの『データベース設計ツールを使用したデータベース設計ファイルの作成』を参照してください。

制約事項: Business Process Choreographer サンプル構成では DB2 データベースしかサポートされないため、サンプル構成は、MS SQL Server データベースを使用したスタンドアロン・プロファイルでは作成されません。

2. SQL Server Studio を使用して、所有者 sdo として以下のスキーマを CMNDB データベースに作成します。これらのスキーマは、SIBus メッセージング・エンジンに必要です。

重要: これらのスキーマは、メッセージング・エンジンの開始前、またはメッセージング・エンジンの開始中に構成する必要があります。

- MEDSS00 (Service Component Architecture (SCA) システム・バス・メッセージング・エンジン)
- MEDSA00 (Service Component Architecture (SCA) アプリケーション・バス・メッセージング・エンジン)
- MEDCM00 (Common Event Infrastructure バス・メッセージング・エンジン)
- MEDBE00 (Business Process Choreographer バス・メッセージング・エンジン)
- MEDPS00 (Process Server メッセージング・エンジン)
- MEDPE00 (Performance Data Warehouse メッセージング・エンジン)

ここで、MED はメッセージ・エンジン・データベース名の最初の 3 文字です。

3. Business Process Choreographer の構成。
 - a. BPEDB データベースの計画
 - b. bpeconfig.jacl スクリプトによる Business Process Choreographer の構成
 - c. Business Process Choreographer 用の Microsoft SQL Server データベースの作成
4. オプション: プロファイル管理ツールまたは manageprofiles コマンド行ユーティリティでデータベース・スクリプトの実行を遅らせるオプションを選択した場合は、以下の SQL スクリプトを実行して、データベース・テーブルを手動で作成する必要があります。

重要: スクリプトを実行する前に、*install_root/profiles/profile_name/dbscripts* フォルダをデータベース・マシンにコピーする必要があります。

- a. *install_root/profiles/profile_name/dbscripts/CommonDB/SQLServer/configCommonDB*
- b. *install_root/profiles/profile_name/dbscripts/BusinessSpace/SQLServer/configBusinessSpaceDB*
- c. *install_root/profiles/profile_name/dbscripts/ProcessServer*
- d. *install_root/profiles/profile_name/dbscripts/PerformanceDW*

5. サーバーを始動します。

関連資料:

893 ページの『プロファイル管理ツール構成のデータベース構成フィールド』

スタンドアロン環境のプロファイルを作成するには、データベース情報が必要です。必要な情報は、使用するデータベースによって異なります。

Microsoft SQL Server と共に使用する Network Deployment 環境の作成:

このトピックでは、Microsoft SQL Server と共に使用する Network Deployment 環境を作成する方法について説明します。

プロファイルを作成する前に、以下の前提条件を満たしてください。

- データベースをホストするサーバーに、Microsoft SQL Server をインストールします。
- CMNDB (CommonDB) データベースと、BPEDB (Business Process Choreographer)、BPMDB (Process Server)、および PDWDB (Performance Data Warehouse) の各データベースを作成します。Microsoft SQL Server 用のデータベースの作成に使用するコマンドの例を次に示します。

```
osql -b -S hostname -U db_user_account -P db_user_password  
-Q "CREATE DATABASE database_name COLLATE SQL_Latin1_General_CP1_CI_AS"
```

ここで、**hostname** は SQL Server をホストするシステムのホスト名、**db_user_account** と **db_user_password** は データベースを作成するためのログインに使用されるユーザー名とパスワード、

database_name は作成するデータベースの名前です。COLLATE SQL_Latin1_General_CP1_CI_AS が含まれているのは、BPMDB (Process Server) データベースと PDWDB (Performance Data Warehouse) データベースで大/小文字を区別しないようにする必要がありますためです。

- Common Event Infrastructure (CEI) を使用する予定の場合は、CEI データベースを手動で作成する必要があります。『Common Event Infrastructure (CEI) データベースの構成』を参照してください。

IBM Business Process Manager には SQL Server 用の JDBC ドライバーがパッケージされています。JDBC ドライバー (バージョンおよびレベル情報を含む) については、『IBM Business Process Manager のハードウェアおよびソフトウェア要件の詳細 (Detailed hardware and software requirements for IBM Business Process Manager)』ページを参照してください。

注: IBM Business Process Manager に同梱されているもの以外の JDBC ドライバー・レベルは、お客様ご自身で用意していただく必要があります。

CommonDB はデプロイメント・マネージャー・プロファイルの作成時に構成できますが (IBM Business Process Manager Advanced のみ)、残りのコンポーネントは、管理コンソールでデプロイメント環境の各パネルを使用して構成する必要があります。構成されるコンポーネントは以下のとおりです。

- Common Event Infrastructure
- Business Space
- Business Process Choreographer
- Business Process Choreographer Explorer
- メッセージング・エンジン

1. デプロイメント・マネージャー・プロファイルを作成します。以下の方法のいずれかを使用します。
 - プロファイル管理ツールの使用。詳しくは、『288 ページの『プロファイル管理ツールを使用した Process Server デプロイメント・マネージャー・プロファイルの作成』』を参照してください。

重要:

- 「データベース・スクリプトを実行してデータベース表を作成する」を選択して、(プロファイル作成処理の一環として) データベース・スクリプトを自動的に実行します。「データベース・スクリプトを実行してデータベース表を作成する」を選択しない場合は、プロファイル作成の完了後に、ユーザー自身またはデータベース管理者がスクリプトを手動で実行できます。
- 「データベース・スクリプトを実行してデータベース表を作成する」を選択する場合は、「既存のローカル・データベースまたはリモート・データベースを使用する」を選択しないようにしてください。両方のオプションを選択すると、エラーが発生します。

- **manageprofiles** コマンドの使用。詳しくは、659 ページの『manageprofiles を使用した Process Server デプロイメント・マネージャー・プロファイルとカスタム・プロファイルの作成』を参照してください。

重要: リモート・データベースを使用している場合で、データベース・スクリプトの実行を遅らせた場合は、**-dbDelayConfig** パラメーターを **true** に設定します。

以下に、**manageprofiles** コマンドを使用して、CommonDB、Common Event Infrastructure、メッセージ・エンジン、Business Space の各コンポーネントが含まれたデプロイメント・マネージャー・プロファイルを作成する場合のコマンド例を示します。

Microsoft SQL Server JDBC 1.2 ドライバーの場合:

```
install_root¥bin¥manageprofiles -create -templatePath
install_root¥profileTemplates¥BPM¥
¥dmgr.procsvr.adv -dbHostName hostName -dbServerPort 1433 -dbDelayConfig true
-configuresBspace true -dbType MSSQLSERVER_Microsoft -dbUserId userID -dbDriverVersion 1.2 -
dbJDBCClasspath
path to JDBC 1.2 driver -dbName CMNDB
-dbPassword password
```

Microsoft SQL Server JDBC 2.0 ドライバーの場合:

```
install_root¥bin¥manageprofiles -create -templatePath
install_root¥profileTemplates¥BPM¥
¥dmgr.procsvr.adv -dbHostName hostName -dbServerPort 1433 -dbDelayConfig true
-configuresBspace true -dbType MSSQLSERVER_Microsoft -dbUserId userID -dbDriverVersion 2.0 -
dbJDBCClasspath
path to JDBC 2.0 driver -dbName CMNDB
-dbPassword password
```

Microsoft SQL Server 上で共通データベースを構成するために使用できる **manageprofiles** パラメーターについては、『表 143』を参照してください。

表 143. Microsoft SQL Server を使用した共通データベースの構成のために使用可能な *manageprofiles* パラメーター

パラメーター	説明
-dbJDBCClasspath <i>jdbc_driver_location</i>	JDBC ドライバー・ファイルのロケーション。
-dbType <i>db_type</i>	データベース・タイプ。以下の値を設定します。 <ul style="list-style-type: none"> • MSSQLSERVER_MICROSOFT (Microsoft JDBC ドライバー V1.2 または V2.0 を使用する Microsoft SQL Server データベース)
-dbCreateNew true false	データベースを作成するのか、再使用するのを示します。有効な値は true または false です。デフォルト値は true です。
-dbDelayConfig true false	プロファイルの作成後にテーブルを作成するかどうかを示します。有効な値は true または false です。このパラメーターは、デフォルトでは false に設定されています。リモート・データベースを使用していて、データベース・スクリプトの実行を遅らせたい場合は、このパラメーターを true に設定します。
-dbDriverVersion <i>db_driver_version</i>	データベース・ドライバーのバージョン。このパラメーターは、Microsoft SQL Server にのみ有効です。SQL Server データベースの場合は、 1.2 (Microsoft SQL JDBC ドライバー V1.2 の場合) または 2.0 (Microsoft SQL JDBC ドライバー V2.0 の場合) を指定します。指定しない場合、この値は自動的にデフォルトの 2.0 に設定されます。
-dbHostName <i>db_host_name</i>	データベース・サーバーのホスト名または IP アドレス。デフォルト値は localhost です。
-dbName <i>db_name</i>	データベースの名前。デフォルト値は CMNDB です。
-dbOutputScriptDir <i>db_output_dir</i>	エクスポートされたデータベース・スクリプトのロケーション。
-dbPassword <i>db_pswd</i>	データベース認証に必要なパスワード。このパラメーターは必須です。
-dbServerPort <i>db_port_number</i>	データベース・サーバーのポート番号。使用しているデータベースに応じて、デフォルトのポート番号以外の別のポート番号を指定できます。デフォルト値は 1433 です。

表 143. Microsoft SQL Server を使用した共通データベースの構成のために使用可能な *manageprofiles* パラメーター (続き)

パラメーター	説明
-dbUserId <i>db_userid</i>	データベースの作成および除去の特権を持つユーザー ID を指定します。WebSphere データ・ソースは、この ID を使用してデータベース接続を認証します。Microsoft SQL Server データベースの場合、データベース表を所有する SQL Server のユーザー ID を指定します。

2. 以下のいずれかの方法で、デプロイメント・マネージャーを始動します。

- **Windows** 「スタート」メニューから、「IBM」 > 「BPM Advanced」 > 「プロファイル」 > 「*profile_name*」 > 「デプロイメント・マネージャーの始動」を選択します。
- ファースト・ステップ・コンソールで、「デプロイメント・マネージャーの始動」をクリックします。
- **startManager** コマンドを使用します。

3. デプロイメント環境で使用するノード (管理対象プロファイル) を少なくとも 1 つ作成します。詳しくは、659 ページの『*manageprofiles* を使用した Process Server デプロイメント・マネージャー・プロファイルとカスタム・プロファイルの作成』を参照してください。

以下に、**manageprofiles** を使用して管理対象プロファイルを作成するコマンドの例を示します。

Microsoft SQL Server JDBC 1.2 ドライバーの場合:

```
install_root¥bin¥manageprofiles -create -templatePath
install_root¥profileTemplates¥BPM¥
managed.procsvr -dbHostName hostName -dbServerPort 1433
-dbDelayConfig true -dbType MSSQLSERVER_MICROSOFT
-dbUserId userID -dbPassword password -dbDriverVersion 1.2
-dbJDBCClasspath path to JDBC 1.2 driver -dmgrHost localhost -dmgrPort 8879
```

Microsoft SQL Server JDBC 2.0 ドライバーの場合:

```
install_root¥bin¥manageprofiles -create -templatePath
install_root¥profileTemplates¥BPM¥
managed.procsvr -dbHostName hostName -dbServerPort 1433
-dbDelayConfig true -dbType MSSQLSERVER_MICROSOFT
-dbUserId userID -dbPassword password -dbDriverVersion 2.0
-dbJDBCClasspath path to JDBC 2.0 driver -dmgrHost localhost -dmgrPort 8879
```

4. デプロイメント環境を作成します。

- a. 管理コンソールで、「サーバー」 > 「デプロイメント環境」を選択します。
- b. 「新規」をクリックします。
- c. データベースの構成までの各ステップで情報を指定します。
- d. 「データベース」ページで、ご使用の環境が使用しているコンポーネントのデフォルト値を更新します。

以下のコンポーネントについては、ユーザー名とスキーマ名に必ず正しい値を入力してください。デプロイメント環境の構成では、スキーマおよびユーザーは構成の一部として作成されません。スキーマおよびユーザーは、デプロイメント環境の生成が行われる前に存在している必要があります。SQL Server では、ユーザーのデフォルト・スキーマがデータベースに設定されていることを確認する必要があります。ユーザーごとに、データベース内のスキーマに同じ値を設定することをお勧めします。各ユーザーにデフォルト・スキーマを設定しなかった場合、その値はデフォルトで「dbo」に設定され、すべてのコンポーネントがこのデフォルト・スキーマで構成されるため、環境

が機能しなくなります。データベース・パネルに示されるスキーマの値は、該当するユーザーに対応したスキーマの値でなければなりません。フィールドにスキーマ値を入力するオプションがない場合は、ユーザーと同じデフォルト・スキーマがデータベースに設定されるものと予想されます。

- e. これらのコンポーネントに必要なテーブルを作成するには手動のステップが必要なため、Business Space の「テーブルの作成」チェック・ボックスは無効になっています。このコンポーネント用のテーブルを作成するには、以下のステップ 6 に従います。
 - f. 残りのステップを実行して、環境を作成し、設定を保存します。「サーバー」 > 「デプロイメント環境」は表示されますが、デプロイメント環境は始動されません。この時点では、デプロイメント環境を始動しないでください。
5. オプション: 4 (919 ページ) でプロファイルを作成したときに「テーブルの作成」をクリアした場合は、メッセージ・エンジン用のスクリプトを生成します。

- a. 管理コンソールで、「サーバー」 > 「デプロイメント環境」 > 「*your_deployment_environment*」 > 「据え置かれた構成」を選択します。
- b. コマンド行で、スクリプトを生成する場所に移動します。
- c. `sibDDLGenerator.bat` ユーティリティを実行して、環境に必要な各スキーマ用のスクリプトを生成します。このユーティリティの実行について詳しくは、「据え置かれた構成」ページを参照してください。スキーマ名は上記のデータベース・パネルで選択した値です。

```
sibDDLGenerator.bat -system sqlserver -version 2005 -platform windows  
-schema WPRCM00 -user user_name -statementend ; > output_script_filename
```

必ず正しいスキーマ（「据え置かれた構成」ページにリストされているもの）とユーザー名を使用してください。また、結果をファイルにリダイレクトしてください。そうしないと、生成されたスクリプトがファイルではなくコマンド・プロンプトに出力されます。

注: データベース設計ファイルを使用してデータベースを構成した場合は、`sibDDLGenerator.bat` ユーティリティを実行する必要はありません。詳しくは、『922 ページの『データベース設計ツールを使用したデータベース設計ファイルの作成』』を参照してください。

6. Business Space データベースを手動で作成します。
 - a. 管理コンソールで、「サーバー」 > 「デプロイメント環境」 > 「*your_deployment_environment*」 > 「据え置かれた構成」を選択します。
 - b. Business Space のスクリプトを見つけます。
 - c. `createDatabase_BusinessSpace.sql` スクリプトを実行し、次に `createTable_BusinessSpace.sql` スクリプトを実行します。
7. `profile_path%dbscripts%ProcessChoreographer%SQLServer%dbName%dbSchema` に移動し、`createSchema.sql` スクリプトを実行します。ここで、`dbName` はデータベースの名前、`dbSchema` はスキーマ名です。`createSchema.sql` スクリプトがエラーなく実行されることを確認してください。
8. 管理コンソールで、「サーバー」 > 「デプロイメント環境」 > 「*your_deployment_environment*」 > 「据え置かれた構成」を選択し、「実行された構成」をクリックします。
9. 管理コンソールからログオフし、デプロイメント・マネージャーをシャットダウンして、すべてのカスタム・プロファイルをシャットダウンします。
10. オプション: 該当するすべてのプロファイル・ログを削除するか、それらを別のディレクトリーに保存します。ログの削除または移動が必要な場合があります。これはログが最終構成に付加されるためです。その場合に最新情報の表示が困難になる可能性があります。
11. カスタム・プロファイルを開始し、デプロイメント・マネージャーを始動して、管理コンソールにログインします。

12. デプロイメント環境を開始します。
 - a. 管理コンソールで、「サーバー」 > 「サーバー・タイプ」 > 「デプロイメント環境」をクリックして、デプロイメント環境を開始します。デプロイメント環境の横にあるチェック・ボックスを選択し、「開始」をクリックします。
 - b. 5 分から 10 分後 (システムによってはそれ以上) に、「デプロイメント環境」ページが最新表示されます。デプロイメント環境の状況が「開始」に変わります。
13. オプション: 以下の項目の状況を確認します。
 - a. Microsoft SQL Server Management Studio で、共通データベースの Tables フォルダーを見つけます。テーブルがステップ 5 (920 ページ) で手動で作成した 4 つのスキーマを使用して作成されていることを確認します。
 - b. Business Process Choreographer データベースの XXXBE## スキーマを使用して、テーブルが作成されていることを確認します。
 - c. 管理コンソールで「アプリケーション」 > 「エンタープライズ・アプリケーション」を選択し、インストール済みのアプリケーションが正常に始動したことを確認します。
 - d. 「リソース」 > 「JDBC」 > 「データ・ソース」を選択し、メッセージ・エンジンに関連しない (つまり、名前に **ME** が含まれない) すべてのコンポーネントの接続が正常かどうかをテストします。

プロファイルの作成後または拡張後の共通データベースとテーブルの作成

プロファイル管理ツールの「データベース構成」パネルで「データベース・スクリプトを実行してデータベース表を作成 (リモート・データベースを使用している場合は選択しない) (Run database scripts to create database tables (do not select if using a remote database))」チェック・ボックスをオフにして共通データベースおよびその表の作成を延期した場合、お客様またはデータベース管理者がデータベースと表を手動で作成する必要があります。これらは、プロファイルの作成時または拡張時にプロファイル管理ツールによって生成されるスクリプトを使用すると作成できます。

このトピックでは、以下のアクションが既に実行されているものと想定しています。

- プロファイル管理ツールを使用してスタンドアロン・サーバー・プロファイルまたはデプロイメント・マネージャー・プロファイルを作成または拡張しました。
- プロファイル管理ツールの「データベース構成」パネルで「共通データベース名」にデータベースの名前を入力したか、デフォルトの共通データベース名 **CMNDB** を受け入れました。
- プロファイル管理ツールの「データベース構成」パネルで、「データベース・スクリプトを実行してデータベース表を作成する」チェック・ボックスをクリアして、共通データベースおよびその表の作成を後で行うことを選択しました。

IBM Business Process Manager のインストール済み環境では、共通データベースが機能することが不可欠であるため、プロファイル管理ツールによる共通データベースの自動作成を許可しなかった場合は、プロファイルの作成時または拡張時にプロファイル管理ツールによって生成されるスクリプトを使用して、インストール実行者またはデータベース管理者が、この段階でデータベースとテーブルを手動で作成する必要があります。

1. 次のスクリプトを含むディレクトリーに移動します。Linux および UNIX プラットフォームでは **configCommonDB.sh** スクリプト、Windows プラットフォームでは **configCommonDB.bat** スクリプトとなります。データベース・スクリプトの出力先となるデフォルト・ディレクトリーは以下のとおりです。

- Linux UNIX `profile_root/dbscripts/CommonDB/db_type/db_name`
- Windows `profile_root%dbscripts%CommonDB%db_type%db_name`

注: プロファイル管理ツールは、デフォルト・ディレクトリーをオーバーライドするオプションを提供します。デフォルト・ディレクトリーをオーバーライドするオプションを選択した場合、データベース・スクリプトの出力先ロケーションは、「データベース構成 - パート 1」パネルの「データベース・スクリプトの出力ディレクトリー」フィールドに入力したパスです。

変数 *db_type* はサポートされるデータベース製品を表し、*db_name* はデータベースの名前です。

新規のローカル・データベースを作成する場合は、**createDB** パラメーターを `configCommonDB` スクリプトに渡す必要があります。それ以外は、既存のデータベースが使用されます。

注: Oracle の場合、バッチ・ファイルによって既存のスキーマにテーブルが作成されるので、**createDB** パラメーターを指定する必要はありません。

例:

configCommonDB.sh createDB - データベースとテーブルを作成します。

configCommonDB.sh - データベースは既に存在しているものと見なし、テーブルのみを作成します。

代わりに、次の順序でスクリプトを個別にカスタマイズし、実行することもできます。

- a. `createTable_AppScheduler.sql`
 - b. `createTable_CommonDB.sql`
 - c. `createTable_customization.sql`
 - d. `createTable_DirectDeploy.sql`
 - e. `createTable_EsbLoggerMediation.sql`
 - f. `createTable_governancerepository.sql`
 - g. `createTable_lockmanager.sql`
 - h. `createTable_mediation.sql`
 - i. `createTable_Recovery.sql`
 - j. `createTable_RelationshipService.sql`
 - k. `insertTable_CommonDB.sql`
2. このスクリプトを実行してデータベースおよび必要なテーブルを作成するには、標準のデータベース定義ツール、ネイティブ・コマンド、およびプロシーチャーを使用します。このスクリプトには、データベース、テーブル、および索引を作成するための基本的なステートメントのみが含まれています。

データベースの作成が正しく完了したら、そのデータベースのインストール先がローカルかどうかにかかわらず、サーバーまたはデプロイメント・マネージャーを始動する前に、データベースが稼働していることを必ず確認してください。次に、プロファイルのファースト・ステップ・コンソールからサーバーまたはデプロイメント・マネージャーを始動し、エラーがないことを確認してください。`SystemOut.log` ファイルと `SystemErr.log` ファイルでエラーを確認できます。それらのファイルは以下の場所にあります。

- `profile_root/logs/server_name` (スタンドアロン・プロファイル)
- `profile_root/logs/dmgr` (デプロイメント・マネージャー・プロファイル)

データベース設計ツールを使用したデータベース設計ファイルの作成

データベース構成の設計を作成および生成するには、データベース設計ツールを使用します。この設計は、特定のコンポーネント用にも、IBM Business Process Manager の全機能をサポートするエンタープライズ・レベルのデータベース構成用にもなります。

関連概念:

811 ページの『例: manageprofiles コマンドでのデータベース設計ファイルの使用』
データベース設計ツールを使用してデータベース設計ファイルを作成すると、生成されるファイルに
manageprofiles コマンド用の値が含まれます。

データベース設計ツールを使用したスタンドアロン・プロファイル用またはデプロイメント環境用のデータベース設計ファイルの作成:

データベース設計ツールを使用して、プロファイル作成時またはデプロイメント環境ウィザードの使用時に
使用できるデータベース表の設計ファイルを生成できます。データベース設計ツールは、ユーザー対話型の
入力または既存の設計ファイルから、設計ファイルを生成します。

IBM Business Process Manager がインストール済みであることを確認します。データベース設計ツール
は、インストール・バイナリー・ファイルからのみ使用可能です。

データベース設計ツールを実行する前に、以下の情報を準備します。

- 設計するデータベース構成に関する情報。この情報としては、データベース管理者 (DBA) やソリューション・アーキテクトが提供する、データベース構成の一般的な目的を説明する文書が考えられます。または、必須のパラメーターやプロパティの説明でもあります。
- IBM Business Process Manager とそのコンポーネントがインストールされた方法、使用されているデータベース・ソフトウェア、およびそのタイプのデータベースに必要なプロパティに関する情報。
- 作成するプロファイル (特にプロファイル・タイプとデータベースの間の機能面の関係) の理解。
- 実装するトポロジ・パターンに関する情報、および使用するパターンにデータベース設計を適合させる方法に関する理解。

データベース設計ツールを実行する前に、必ず以下の決定を行っておいてください。

- スケーラビリティと高可用性の要件に基づいた、データベースを使用するデプロイメント環境のタイプ (スタンドアロン・プロファイルまたは Network Deployment 環境)。
- データベース表のロケーション。
- データベース・タイプに関する詳細。具体的には以下の項目ですが、これらに限定されません。
 - データベースのタイプ (DB2、Oracle、DB2 for zOS、SQL Server)
 - サーバー・プロファイルが作成されるシステム上の JDBC ドライバーのロケーション
 - データベースに対する認証用のユーザー ID とパスワード

ヒント: IBM Business Process Manager の計画された使用方法に関する情報を検討するときにデータベースの
使用方法を計画して、データベース設計ツールが必要とする情報を決定してください。

このタスクでは、データベース設計ツールを使用して、スタンドアロン・プロファイル用またはデプロイメント環境用のデータベース設計ファイルを作成する方法について説明します。データベース設計ツールへの
入力は、ユーザー対話型の入力または既存の設計ファイルのいずれかです。使用可能なオプションは、環境
によって異なります。

DbDesignGenerator コマンドのオプションは以下のとおりです。

- ? , -help
ヘルプ情報を表示します。
- e db_design_file_name
指定したデータベース設計ファイル (*.dbDesign、*.properties など) を編集します。
- v db_design_file | db_scripts_output_directory
db_design_file が指定されている場合は、データベースの仕様に基づいて、

指定されたデータベース設計ファイルに対して検証が行われます。
db_scripts_output_directory が指定されている場合は、
指定されたディレクトリ内のデータベース・スクリプトが検証されます。現在のところ、検証が可能なのは、
テンプレート ddl 生成プログラムから生成されたスクリプトのみです。

```
-g db_design_file [-d output_directory] [db_design_file2] [-d output_directory2] ...  
[db_design_fileN] [-d output_directoryN]
```

指定された設計ファイルからデータベース・スクリプトをバッチ・モードで生成します。
生成されたスクリプトは、対応する出力ディレクトリに格納されるか、
出力ディレクトリがない場合はデフォルトのロケーションに格納されます。

制約事項: データベース設計ツールは Common Event Infrastructure (CEI) をサポートしていません。

1. **DbDesignGenerator** コマンドにアクセスし、ファイルを実行します。

DbDesignGenerator コマンドは以下のロケーションにあります。

- **Windows** `install_root\util\dbUtils`

例えば、`C:\Program Files\IBM\WebSphere\AppServer\util\dbUtils> DbDesignGenerator.bat` です。

- **Linux** **UNIX** `/install_root/util/dbUtils`

例えば、`/opt/IBM/WebSphere/AppServer/util/dbUtils> DbDesignGenerator.sh` とします。

ヒント: 「指定されたパスが見つかりません」というメッセージが表示された場合は、入力したパス名が間違っている可能性があります。パスを再入力してください。

データベース設計ツールが正常に起動すると、以下の情報が表示されます。

[通知] 対話モードで DbDesignGenerator を実行中...

[通知] 保存しないで終了する場合は「q」、直前のメニューに戻るには「-」、ヘルプを随時表示するには「?」を入力してください。

([info] Enter 'q' to quit without saving; '-' for back to previous menu; '?' for help at any time.)

[通知] 提供されたデフォルト値を受け入れるには、単に「Enter」キーを押します。

[通知] 以下のいずれかの [設計オプション] を選んでください:
([info] Please pick one of the following [design option(s)] :)

- (1) Create a database design for Standalone profile or Deployment Environment
- (2) Create a database design for a single component
- (3) 既存のデータベース設計を編集する
- (4) データベース設計からデータベース・スクリプトを生成する
- (5) exit [q]

Please enter the number for the design option :

2. オプション「**(1) スタンドアロン・プロファイルまたはデプロイメント環境のデータベース設計の作成**」を選択するには、数字の 1 を入力して Enter を押します。

以下のような、データベース・パターンの選択を求めるプロンプトが表示されます。

[通知] 以下のいずれかの [データベース・パターン] を選んでください
(Please pick one of the following [database pattern(s)]):

- (1) bpm.advanced.nd.topology
- (2) bpm.advanced.standalone
- (3) bpm.standard.standalone
- (4) wesb.nd.topology
- (5) wesb.standalone

- 構成を行うスタンドアロン・プロファイル用またはデプロイメント環境用のデータベース設計パターンを作成するには、該当するオプションの番号を入力し、Enter を押します。 スタンドアロン・プロファイルの場合は「.standalone;」を含むオプションを選択し、デプロイメント環境の場合は「.nd.」を含むオプションを選択します。

例えば、IBM Business Process Manager Advanced のデプロイメント環境用のデータベース・パターンを構成する場合は、番号 1 を入力してオプション「(1)bpm.advanced.nd.topology」を選択し、Enter を押します。次の例に示すような情報が表示されます。

[通知] 「未完了」のデータベース・コンポーネントの必須プロパティを編集してください。

[通知] 完了したデータベース・コンポーネントを編集して、既存またはデフォルトのプロパティ値を変更することができます。

[通知] 「マスター」コンポーネントを最初に設計して、次に親コンポーネントを設計します。

これは他のコンポーネントが親の値を継承していることがあるためです。

[通知] 以下のいずれかの [データベース・コンポーネント] を選んでください
(Please pick one of the following [database component(s)]):

- (1)[CommonDB] WBI_CommonDB : [マスター] [状況 = 未完了]
- (2)[BPCReporting] WBI_BPCEventCollector : [status = not complete]
- (3)[BPC] WBI_BPC : [status = not complete]
- (4)[BPM_PerformanceDW] BPM_PerformanceDW : [状況 = 未完了]
- (5)[BPM_ProcessServer] BPM_ProcessServer : [status = not complete]
- (6)[Bspace] WBI_BSPACE : [状況 = 未完了]
- (7)[SibME] WBI_BPC_ME : [状況 = 未完了]
- (8)[SibME] WBI_CEI_ME : [状況 = 未完了]
- (9)[SibME] WBI_SCA_APP_ME : [状況 = 未完了]
- (10)[SibME] WBI_SCA_SYS_ME : [状況 = 未完了]
- (11)[SibMe] BPM_PerformanceDW_ME : [parent = BPM_PerformanceDW] [状況 = 未完了]
- (12)[SibMe] BPM_ProcessServer_ME : [parent = BPM_ProcessServer] [状況 = 未完了]
- (13)[save and exit]

- 該当するオプションの番号を入力してマスター・データベース・コンポーネントを構成し、Enter を押します。データベース・コンポーネントが表示されますが、これらは前に選択された環境に合わせて構成されている可能性があります。マスター・コンポーネントとしてリストされているデータベース・コンポーネントの名前の横には [master] が示されており、これを最初に構成する必要があります。

例えば、(1)bpm.advanced.nd.topology 設計パターンのマスター・コンポーネントを構成するには、番号 1 を入力してオプション「(1)[CommonDB] WBI_CommonDB : [マスター] [状況 = 未完了]」を選択し、Enter を押します。以下の例のような情報が表示されます。

[状況] 以下のように残り項目が 1 つあるため、

WBI_CommonDB は未完了です

(WBI_CommonDB is not complete with 1 remaining item(s)):

[1] CommonDB.WBI_CommonDB : : DbType キーが設定されていません
(DbType key is not set).

このデータベース・コンポーネントを編集しますか?(y/n) [default=y] :

- データベース・コンポーネントを編集するには、構成するデータベース・タイプを選択し、y と入力して Enter を押します。

データベース・コンポーネントの編集を選択すると、次の例に示すような情報が表示されます。

[通知] 以下のいずれかの [データベース・タイプ] を選んでください

(Please pick one of the following [database type(s)]):

- (1)DB2-distributed
- (2)DB2-zOS
- (3)Oracle
- (4)SQL Server

6. ご使用の環境で使用するデータベース・タイプに対応する番号を入力し、Enter を押します。データベース・プロパティを指定するための一連のプロンプトが表示されます。これらのプロンプトは、使用するデータベース・タイプに応じて異なります。

例えば、番号 1 を入力してデータベース・タイプとして **(1)DB2-distributed** を選択したとします。共通 DB の構成用にこのデータベース・タイプを選択すると、次の例に示すような情報が表示されま

```
[通知] データベース・オブジェクト・セクションに
プロパティの値を入力してください。
([info] Please enter the values for the properties in
the database objects section.)
Database name[default=CMNDB] :
データベース・ユーザー名 [デフォルト=]:
(Database User name[default=] :)
システム・パスワード
(スタンドアロン・プロファイル作成の一環としてデータベースを
作成する場合にのみ必要)
(System password(this is required ONLY for creating the database
as a part of standalone profile creation.))[デフォルト=] :
```

```
[通知] 以下のいずれかを選択してください
[これは Process Center のデータベースですか?]:
([info] Please pick one of the following
[Is this database for a Process Center?(s)] :)

```

- (1>false
- (2>true

```
番号を入力してください。
これは Process Center のデータベースですか?
(Please enter the number for the
Is this database for a Process Center?)[デフォルト=いいえ]: 1
([default=false] :1)
管理セキュリティに使用するユーザー ID [デフォルト=]:
(The user ID you use for administrative security[default=] :)
adminUserName パラメーターで指定した名前のパスワード
[デフォルト=]: 1
(The password for the name specified
with the adminUserName parameter
[default=] :1)
通常のページ・サイズ [デフォルト=32k]:
(Regular pagesize[default=32k] :)
通常の表スペース [デフォルト=WBISPACE] :
(Regular TableSpace[default=WBISPACE] :)
一時ページ・サイズ [デフォルト=32k]:
(Temporary pagesize[default=32k] :)
一時表スペース [デフォルト=WBITEMPSPACE] :
(Temporary TableSpace[default=WBITEMPSPACE] :)
```

7. それぞれのプロンプトで、データベース構成に適した値を入力するか、(デフォルト値がリストされている場合は) Enter を押してデフォルト値を受け入れます。管理セキュリティのプロンプトが表示された場合、これは WebSphere 管理コンソールのユーザー名とパスワードを意味します。

データベース・プロパティの最後のプロンプトに値を入力すると、以下の例のようなメッセージが表示されます。

```
[通知] データベース・スクリプトの生成に必要なデータベース・
オブジェクト・セクションのプロパティが入力されました。
([info] You have completed database objects
section properties needed for database
scripts generation.)
```

データ・ソース・プロパティをスキップする場合は「s」を入力し、続行するにはそれ以外のキーを入力してください :

8. データ・ソース・プロパティ・コンポーネントを構成するには、s 以外の任意の文字を入力して Enter を押します。この構成をスキップしてデフォルトを受け入れるには、s を入力して Enter を押します。

ヒント: データベース設計ツールを使用して、プロファイル作成またはトポロジー構成の入力として使用するデータベース設計ファイルを生成する場合は、データ・ソースを構成する必要があります。データベース設計ツールを使用して SQL を生成する場合、このステップはオプションです。

選択したデータベース・タイプのデータ・ソースを構成するように選択した場合、そのデータ・ソースのデータベース・プロバイダーのリストが表示されます。例えば、**DB2-distributed** データベース・タイプの場合は、次のようなデータベース・プロバイダーが表示されます。

[通知] 以下のいずれかの [データベース・プロバイダー] を選んでください
(Please pick one of the following [database provider(s)]):

- (1)DB2 Universal JDBC Driver Provider # XA data source # DB2 Universal JDBC Driver Provider (XA)
- (2)DB2 Using IBM JCC Driver # XA data source # DB2 Using IBM JCC Driver (XA)

- a. 該当する番号を入力して、データ・ソースのデータベース・プロバイダーを選択し、Enter キーを押します。例えば、**(1)DB2 Universal JDBC Driver Provider # XA data source # DB2 Universal JDBC Driver Provider (XA)** のオプションをデータベース・プロバイダーとして選択するには、番号 1 を選択して Enter キーを押します。このデータベース・プロバイダーを選択した後、次の例に示すような情報が表示されます。

[通知] データ・ソース・プロパティ・セクションに
プロパティの値を入力してください。
([info] Please enter the values for the properties in
the data source properties section.)
データベース・サーバー・ホスト [デフォルト=]:
(Database server host[default=] :)
データベース・サーバー・ポート [デフォルト=50000]:
(Database server port[default=50000] :)
Data source user name[default=] :
Data source password[default=] :
DB2 Universal JDBC driver path[default=\${WAS_INSTALL_ROOT}/jdbcdrivers/DB2] :
Universal JDBC driver path[default=\${WAS_INSTALL_ROOT}/jdbcdrivers/DB2] :

注: 生成される出力ファイルでは、パスワードが暗号化されています。

- b. それぞれのプロンプトで、データベース構成に適した値を入力するか、(デフォルト値がリストされている場合は) Enter を押してデフォルト値を受け入れます。構成中にデータベース表を作成するかどうかを尋ねられたら、データベース設計ファイルをプロファイル作成のための入力として使用する場合は「**No**」を指定してください。このオプションはプロファイル管理ツールでも選択可能であり、競合の原因となるためです。管理コンソールを使用してデプロイメント環境を作成する場合は、表を自動的に作成させるかどうかによって決定できます。

最後のプロンプトに値を入力すると、以下の例のような情報が表示されます。

[状況] 以下のように残り項目が 0 になったため、
WBI_CommonDB は完了しました
(WBI_CommonDB is complete with 0 remaining item(s):)

[通知] 「未完了」のデータベース・コンポーネントの必須プロパティを
編集してください。
[通知] 完了したデータベース・コンポーネントを編集して、既存またはデフォルトの
プロパティ値を変更することができます。
[通知] 「マスター」コンポーネントを最初に設計して、
次に親コンポーネントを設計します。
これは他のコンポーネントが親の値を継承していることがあるためです。

[通知] 以下のいずれかの [データベース・コンポーネント] を選んでください

(Please pick one of the following [database component(s)]):

- (1) [CommonDB] WBI_CommonDB : [マスター] [状況 = 完了]
- (2) [BPCReporting] WBI_BPCEventCollector : [status = complete]
- (3) [BPC] WBI_BPC : [status = complete]
- (4) [BPM_PerformanceDW] BPM_PerformanceDW : [状況 = 完了]
- (5) [BPM_ProcessServer] BPM_ProcessServer : [status = not complete]
- (6) [BSpace] WBI_BSPACE : [status = complete]
- (7) [SibME] WBI_BPC_ME : [status = complete]
- (8) [SibME] WBI_CEI_ME : [status = complete]
- (9) [SibME] WBI_SCA_APP_ME : [status = complete]
- (10) [SibME] WBI_SCA_SYS_ME : [status = complete]
- (11) [SibME] BPM_PerformanceDW_ME : [parent = BPM_PerformanceDW] [状況 = 完了]
- (12) [SibME] BPM_ProcessServer_ME : [parent = BPM_ProcessServer] [状況 = 完了]
- (13) [save and exit]

マスター・データベース・コンポーネントの構成を終了すると、データベース設計ツールは入力した値を、残りのコンポーネントに伝搬します。これを正常に実行できると、マスター・コンポーネントとともにこれらのコンポーネントにも **[status = complete]** が表示されます。何らかの理由でこれが実行できない場合、これらのコンポーネントには **[状況 = 未完了]** が表示されたままになります。

9. オプション: 前のステップに従って **[状況 = 未完了]** と表示されている残りのデータベース・コンポーネントを構成します。別のコンポーネントの親としてリストされているデータベース・コンポーネントがある場合は、他のコンポーネントより先にその親を構成してください。それによって提供される情報が、親がリストされているデータベース・コンポーネント用のデフォルト設定として使用されるためです。また、マスター・データベース・コンポーネントを構成した結果として、**[状況 = 完了]** として示されているコンポーネントを再構成することも可能です。

注: データベース・タイプが DB2 for z/OS である場合は、残りの各コンポーネントを構成する必要があります。以下のガイドラインが適用されます。

- 残りの各データベース・コンポーネントに、必ず適切なスキーマ名を指定します。通常、Process Server、Performance Data Warehouse、およびメッセージング・エンジン・コンポーネントは固有スキーマ名を必要とします。残りのコンポーネントには同じスキーマ名を割り当てることができません。構成するコンポーネントのタイプに特有のその他の値 (例えば、表スペース名の接頭部や VSAM カタログ名 (VCAT) の値など) の入力を求めるプロンプトが表示される場合もあります。
- すべてのシステム統合バスのメッセージング・エンジンに対して 1 つのデータベースを使用する場合は、その表スペース名に固有の接頭部を指定します。こうした接頭部を使用することによって、データベース内で各メッセージング・エンジンの表スペース名が固有に保たれるためです。
- Process Server コンポーネント (**BPM_ProcessServer**) の構成時に、以下のように、Process Center 用のデータベースなのか Process Server 用のデータベースなのかを指定する画面が表示されます。

[通知] 以下のいずれかを選択してください
[これは Process Center のデータベースですか?]:
[[info] Please pick one of the following
[Is this database for a Process Center?(s)] :)

- (1) false
- (2) true

ネットワーク・デプロイメント環境で Process Center のプロファイルまたはクラスターを作成する場合は、**true** オプションを選択する必要があります。このオプションを **false** に設定すると、Process Center コンソールにアクセスできなくなります。

データベースが Process Server 用の場合は、**false** オプションを選択する必要があります。

- 各コンポーネントを構成しているときに、マスター・コンポーネントから継承された値が適切であるかどうか確認し、必要に応じて修正します。例えば、複数のデータベースを使用する予定である場合は、DB2 for z/OS サブシステム内でのデータベース・オブジェクトの分散計画に合わせて、データベース名を修正することをお勧めします。

- 選択したデータベース・パターン用のすべてのデータベース・コンポーネントの構成を完了し、データベース設計ツール内でそれらのコンポーネントに **[状況 = 完了]** が示されていたら、該当する番号を入力して **[保存して終了]** を選択し、Enter を押します。例えば、**(1)bpm.advanced.nd.topology** データベース・パターンの構成を終了したら、番号 13 を入力して Enter を押します。以下の例のような情報が表示されます。

```
[状況] 残り項目が 0 になったため、bpm.advanced.nd.topology は完了しました
([status] bpm.advanced.nd.topology is complete with 0 remaining item(s):)
```

```
出力ディレクトリーを入力してください
[デフォルト=C:\IBM\WebSphere\AppServer\util\dbUtils]:
(Please enter the output directory
[default=C:\IBM\WebSphere\AppServer\util\dbUtils] :)
```

- データベース設計ファイルを保存するロケーションを入力し、Enter キーを押します。プロンプトでロケーションを入力すると、以下の例のような情報が表示されます。

```
出力ファイル名を入力してください
[デフォルト=bpm.advanced.nd.topology.dbDesign] :
(Please enter the output filename
[default=bpm.advanced.nd.topology.dbDesign
] :)
```

- 生成したデータベース設計ファイルのファイル名を入力し、Enter を押します。プロンプトでファイル名を入力すると、以下の例のような情報が表示されます。

```
データベース・スクリプトを生成しますか?(y/n) [default=y] :
```

- オプション: データベース設計ツールに提供した情報に基づいてデータベース・スクリプトも生成する場合は、y を入力して Enter を押します。

- そのデータベース・コンポーネントのスクリプトを格納する出力ディレクトリーの絶対パスを指定して Enter を押します。

y と入力して Enter を押し、データベース・スクリプトを生成することを示すと、データベース・コンポーネントごとに以下の例のような情報が表示されます。

```
WBI_CommonDB の出力ディレクトリーを入力してください
(Please enter the output directory for WBI_CommonDB)
[default=DB2-distributed-CommonDB] :
```

出力ディレクトリーのロケーションを入力し、Enter を押すと、各項目の後に以下の例のような情報が表示されます。

```
[通知] スクリプトを次のディレクトリーに生成しました
(The script(s) have been generated in) C:\IBM\WebSphere\AppServer\util\
dbUtils\DB2-distributed-CommonDB
```

各プロンプトで値を入力すると、以下の例のような情報が表示されます。

```
[通知] 終了しています...
```

指定したロケーションに、データベース設計ファイルと、オプションでデータベース・スクリプトが作成されています。

データベース設計ツールからの出力は、以下のいずれかの方法で使用できます。

- データベース設計ファイルのみを生成した場合は、データベース設計ファイルを指定し、それらの構成ステップの一環としてデータベース表を作成するオプションを選択できます。

- データベース設計ファイルと SQL スクリプトの両方を生成した場合は、データベース設計ファイルのみを指定して、構成するランタイムを SQL スクリプトから作成されたデータベース表に合致させることができます。

データベース設計ファイルは、以下のようにいくつかの方法で指定できます。

- プロファイル管理ツールを使用してプロファイルを作成するとき
- **manageprofiles** コマンド行ユーティリティを使用してプロファイルを作成するとき
- デプロイメント環境ウィザードを使用して環境を作成するとき

データベース設計ファイルは、管理コンソールでサーバーを Process Server、Process Center、または Performance Data Warehouse サーバーとして構成するときにも使用できます。

関連概念:

811 ページの『例: manageprofiles コマンドでのデータベース設計ファイルの使用』

データベース設計ツールを使用してデータベース設計ファイルを作成すると、生成されるファイルに manageprofiles コマンド用の値が含まれます。

データベース設計ツールを使用した特定のコンポーネントのためのデータベース設計ファイルの作成:

データベース設計ツールを使用して、特定のコンポーネントが必要とするデータベース表の設計ファイルを生成することができます。データベース設計ツールは、ユーザー対話型の入力または既存の設計ファイルから、設計ファイルを生成します。

IBM Business Process Manager がインストール済みであることを確認します。データベース設計ツールは、インストール・バイナリー・ファイルからのみ使用可能です。

データベース設計ツールを実行する前に、以下の情報を準備します。

- 設計するデータベース構成に関する情報。この情報としては、データベース管理者 (DBA) やソリューション・アーキテクトが提供する、データベース構成の一般的な目的を説明する文書が考えられます。または、必須のパラメーターやプロパティの説明であることもあります。
- IBM Business Process Manager とそのコンポーネントがインストールされた方法、使用されているデータベース・ソフトウェア、およびそのタイプのデータベースに必要なプロパティに関する情報。
- 作成するプロファイル (特にプロファイル・タイプとデータベースの間の機能面の関係) の理解。
- 実装するトポロジー・パターンに関する情報、および使用するパターンにデータベース設計を適合させる方法に関する理解。

データベース設計ツールを実行する前に、以下の事項について決定します。

- スケーラビリティと高可用性の要件に基づいた、データベースを使用するデプロイメント環境のタイプ (スタンドアロン・プロファイルまたは Network Deployment 環境)。
- データベース表のロケーション。
- データベース・タイプに関する詳細。具体的には以下の項目ですが、これらに限定されません。
 - データベースのタイプ (DB2、Oracle、DB2 for zOS、SQL Server)
 - サーバー・プロファイルが作成されるシステム上の JDBC ドライバーのロケーション
 - データベースに対する認証用のユーザー ID とパスワード

ヒント: IBM Business Process Manager の計画された使用方法に関する情報を検討するときにデータベースの使用法を計画して、データベース設計ツールが必要とする情報を決定してください。

このタスクでは、データベース設計ツールを使用して特定のコンポーネントのためのデータベース設計ファイルを作成する方法について説明します。データベース設計ツールへの入力、ユーザー対話型の入力または既存の設計ファイルのいずれかです。使用可能なオプションは、環境によって異なります。

DbDesignGenerator コマンドのオプションは以下のとおりです。

```
-? , -help
ヘルプ情報を表示します。

-e db_design_file_name
指定したデータベース設計ファイル (*.dbDesign、*.properties など) を編集します。

-v db_design_file | db_scripts_output_directory
db_design_file が指定されている場合は、データベースの仕様に基づいて、
指定されたデータベース設計ファイルに対して検証が行われます。
db_scripts_output_directory が指定されている場合は、
指定されたディレクトリ内のデータベース・スクリプトが検証されます。 現在のところ、検証が可能なのは、
テンプレート dd1 生成プログラムから生成されたスクリプトのみです。

-g db_design_file [-d output_directory] [db_design_file2] [-d output_directory2] ...
[db_design_fileN] [-d output_directoryN]
指定された設計ファイルからデータベース・スクリプトをバッチ・モードで生成します。
生成されたスクリプトは、対応する出力ディレクトリに格納されるか、
出力ディレクトリがない場合はデフォルトのロケーションに格納されます。
```

制約事項: データベース設計ツールは Common Event Infrastructure (CEI) をサポートしていません。

重要: サービス統合バスのメッセージング・エンジンに対するデータベース・スクリプトを生成する場合は、以下の手順のステップ 1 からステップ 9 (934 ページ) までを繰り返し実行して、必要とするメッセージング・エンジンごとにデータベース構成を定義し、スクリプトを生成する必要があります。例えば、6 つのメッセージング・エンジン用のスクリプトが必要な場合は、この手順を 6 回実行してください。DB2 for z/OS サブシステム内にメッセージ・エンジンのデータ・ストアを作成する際の考慮事項については、943 ページの『メッセージ・エンジンのデータ・ストアの作成』を参照してください。

1. **DbDesignGenerator** コマンドにアクセスし、ファイルを実行します。

DbDesignGenerator コマンドは以下のロケーションにあります。

- Windows `install_root%util%dbUtils`

例えば、`C:%Program Files%IBM%WebSphere%AppServer%util%dbUtils> DbDesignGenerator.bat` です。

- Linux UNIX `/install_root/util/dbUtils`

例えば、`/opt/IBM/WebSphere/AppServer/util/dbUtils> DbDesignGenerator.sh` とします。

ヒント: 「システムは指定されたパスを検出できません。(The system cannot find the specified path.)」というメッセージが表示された場合は、誤ったパス名を入力した可能性があります。パスを再入力してください。

データベース設計ツールが正常に起動すると、以下の例のような情報が表示されます。

[通知] 対話モードで DbDesignGenerator を実行中...

[通知] 保存しないで終了する場合は「q」、直前のメニューに戻るには「-」、ヘルプを随時表示するには「?」を入力してください。

([info] Enter 'q' to quit without saving; '-' for back to previous menu; '?' for help at any time.)

[通知] 提供されたデフォルト値を受け入れるには、単に「Enter」キーを押します。

[通知] 以下のいずれかの [設計オプション] を選んでください:

[info] Please pick one of the following [design option(s)] :)

- (1) Create a database design for Standalone profile or Deployment Environment
- (2) Create a database design for a single component
- (3) 既存のデータベース設計を編集する
- (4) データベース設計からデータベース・スクリプトを生成する
- (5) 終了する [q]

2. オプション「**(2)Create a database design for a single component**」を選択するには、番号 2 を入力して Enter キーを押します。

コンポーネントのプロンプトが出されます。例えば、以下のようになります。

[通知] 以下のいずれかの [コンポーネント] を選んでください
(Please pick one of the following [component(s)]):

- (3)bpm_performancedw
- (4)bpm_processserver

- (6)cei
- (7)commondb
- (8)sca
- (9)sibme

3. 構成するコンポーネントのデータベース設計を作成するには、該当するオプションの番号を入力して Enter を押します。

例えば、IBM Process Server データベース・コンポーネントを構成するには、番号 4 を入力してオプション「**(4)bpm_processserver**」を選択し、Enter を押します。以下の例のような情報が表示されません。

[通知] 以下のいずれかの [データベース・タイプ] を選んでください
(Please pick one of the following [database type(s)]):

- (1)DB2-distributed
- (2)DB2-zOS
- (3)Oracle
- (4)SQL Server

4. ご使用の環境で使用するデータベース・タイプに対応する番号を入力し、Enter を押します。データベース・プロパティを指定するための一連のプロンプトが表示されます。プロンプトは、使用するデータベース・タイプに応じて異なります。

例えば、番号 1 を入力してデータベース・タイプとして **(1)DB2-distributed** を選択したとします。データベースの構成用にこのデータベース・タイプを選択すると、以下の例のような情報が表示されません。

[通知] データベース・オブジェクト・セクションにプロパティの値を入力してください。
([info] Please enter the values for the properties in the database objects section.)
データベース名 [デフォルト=BPMDB]: (Database name[default=BPMDB] :)
データベース・ユーザー名 [デフォルト=]: (Database User name[default=] :)
システム・パスワード
(スタンドアロン・プロファイル作成の一環としてデータベースを作成する場合にのみ必要)
(System password(this is required ONLY for creating the database as a part of standalone profile creation.))[デフォルト=] :

[通知] 以下のいずれかを選択してください
[これは Process Center のデータベースですか?]:
([info] Please pick one of the following
[Is this database for a Process Center?(s)] :)

- (1>false
- (2>true

番号を入力してください。
 これは Process Center のデータベースですか?
 (Please enter the number for the
 Is this database for a Process Center?)[デフォルト=いいえ]: 1
 ([default=false] :1)
 管理セキュリティに使用するユーザー ID [デフォルト=]:
 (The user ID you use for
 administrative security[default=] :)
 adminUserName パラメーターで指定した名前のパスワード
 [デフォルト=]: 1
 (The password for the name specified
 with the adminUserName parameter
 [default=] :1)
 通常のページ・サイズ [デフォルト=32k]:
 (Regular pagesize[default=32k] :)
 通常の表スペース [デフォルト=TWSSPACE]:
 (Regular TableSpace[default=TWSSPACE] :)
 一時ページ・サイズ [デフォルト=32k]:
 (Temporary pagesize[default=32k] :)
 Temporary TableSpace[default=TWSTEMPSPACE] :

5. それぞれのプロンプトで、データベース構成に適した値を入力するか、(デフォルト値がリストされている場合は) Enter を押してデフォルト値を受け入れます。管理セキュリティのプロンプトが表示された場合、これは WebSphere 管理コンソールのユーザー名とパスワードを意味します。

最後のプロンプトに値を入力すると、以下の例のような情報が表示されます。

[通知] データベース・スクリプトの生成に必要なデータベース・オブジェクト・
 セクションのプロパティが入力されました。
 ([info] You have completed database objects section
 properties needed for database scripts generation.)

データ・ソース・プロパティをスキップする場合は「s」を入力し、
 続行するにはそれ以外のキーを入力してください :

6. データ・ソース・プロパティ・コンポーネントを構成するには、s 以外の任意の文字を入力して Enter を押します。この構成をスキップしてデフォルトを受け入れるには、s を入力して Enter を押します。

ヒント: データベース設計ツールを使用して、プロファイル作成またはトポロジー構成の入力として使用するデータベース設計ファイルを生成する場合は、データ・ソースを構成する必要があります。データベース設計ツールを使用して SQL を生成する場合、このステップはオプションです。

データベース・タイプとして **DB2-distributed** を選択した後にデータベースのデータ・ソースを構成する場合は、次の例に示すような情報が表示されます。

[通知] 以下のいずれかの [データベース・プロバイダー] を選んでください
 (Please pick one of the following [database provider(s)]):

- (1)DB2 Universal JDBC Driver Provider # XA data source # DB2 Universal JDBC Driver Provider (XA)
- (2)DB2 Using IBM JCC Driver # XA data source # DB2 Using IBM JCC Driver (XA)

- a. 該当するオプションの番号を入力してデータ・ソースのデータベース・プロバイダーを選択し、Enter を押します。例えば、**(1)DB2 Universal JDBC Driver Provider # XA data source # DB2 Universal JDBC Driver Provider (XA)** のオプションをデータベース・プロバイダーとして選択するには、番号 1 を選択して Enter キーを押します。データ・ソースとしてこのデータベース・プロバイダーを選択した後、次の例に示すような情報が表示されます。

[通知] データ・ソース・プロパティ・セクションに
 プロパティの値を入力してください。
 ([info] Please enter the values for the properties in
 the data source properties section.)
 データベース・サーバー・ホスト [デフォルト=]:
 (Database server host[default=] :)

```
データベース・サーバー・ポート [デフォルト=50000]:  
(Database server port[default=50000] :)  
Data source user name[default=] :  
Data source password[default=] :  
DB2 Universal JDBC driver path[default=${WAS_INSTALL_ROOT}/jdbcdrivers/DB2] :  
Universal JDBC driver path[default=${WAS_INSTALL_ROOT}/jdbcdrivers/DB2] :
```

注: 生成される出力ファイルでは、パスワードが暗号化されています。

- b. それぞれのプロンプトで、(デフォルト値がリストされている場合は) Enter キーを押してデフォルト値を受け入れるか、構成に適した値を入力します。

最後のプロンプトに値を入力すると、以下の例のような情報が表示されます。

```
出力ディレクトリーを入力してください  
[デフォルト=C:\IBM\WebSphere\AppServer\util\dbUtils]:  
(Please enter the output directory  
[default=C:\IBM\WebSphere\AppServer\util\dbUtils] :)
```

7. データベース設計ファイルを保存するロケーションを入力し、Enter キーを押します。場所を入力すると、以下の例のような情報が表示されます。

```
出力ファイル名を入力してください  
[デフォルト=BPM_ProcessServer_DB2-distributed.properties] :  
(Please enter the output filename  
[default=BPM_ProcessServer_DB2-distributed.properties] :)
```

8. 生成させるデータベース設計ファイルのファイル名を入力して Enter を押します。ファイル名を入力すると、以下の例のような情報が表示されます。

```
データベース・スクリプトを生成しますか?(y/n) [default=y] :
```

9. オプション: データベース設計ツールに提供した情報に基づいてデータベース・スクリプトも生成する場合は、以下のステップを実行します。

- a. y を入力して、Enter キーを押します。

y と入力して Enter を押し、データベース・スクリプトの生成を指示すると、以下の例のような情報が表示されます。

```
BPM_ProcessServer [デフォルト=DB2-distributed-BPM_ProcessServer] の  
出力ディレクトリーを入力してください:  
(Please enter the output directory for BPM_ProcessServer  
[default=DB2-distributed-BPM_ProcessServer] :)
```

- b. そのデータベース・コンポーネントのスクリプトを格納する出力ディレクトリーの絶対パスを指定して Enter を押します。

出力ディレクトリーのロケーションを入力すると、以下の例のような情報が表示されます。

```
[通知] スクリプトを C:\IBM\WebSphere\AppServer\util\dbUtils  
¥DB2-distributed-BPM_ProcessServer に生成しました  
([info] The script(s) have been generated in C:\IBM\WebSphere¥  
;AppServer\util\dbUtils ¥DB2-distributed-BPM_ProcessServer)
```

各プロンプトで値を入力すると、以下の例のような情報が表示されます。

```
[通知] 終了しています...
```

データベース設計ファイルが作成され、オプションで、指定した場所にデータベース・スクリプトが作成されています。

データベース設計ツールを使用して特定のコンポーネントを構成すると、生成された SQL スクリプトはデータベース表を作成するために使用できます。生成されたデータベース設計ファイルには、この構成されたコンポーネント用の値のみが含まれ、以下の方法で使用するには十分ではありません。

- プロファイル管理ツールを使用してプロファイルを作成するとき
- **manageprofiles** コマンド行ユーティリティーを使用してプロファイルを作成するとき
- デプロイメント環境ウィザードを使用して環境を作成するとき

関連概念:

811 ページの『例: manageprofiles コマンドでのデータベース設計ファイルの使用』
データベース設計ツールを使用してデータベース設計ファイルを作成すると、生成されるファイルに
manageprofiles コマンド用の値が含まれます。

データベース設計ツールの例:

データベース設計ツールを使用すると、DB2、Oracle、SQL Server など、複数のタイプのデータベースの
設計ファイルを生成することができます。

DB2

bpm.standard.standalone または **bpm.standard.nd** を選択すると、マスター・コンポーネントを構成した後
に、すべてのデータベース・コンポーネントが完了と表示されます。

[通知] 以下のいずれかの [データベース・コンポーネント] を選んでください
(Please pick one of the following [database component(s)]):

- (1) [BPM_ProcessServer] BPM_ProcessServer : [master] [status = complete]
- (2) [BPM_PerformanceDW] BPM_PerformanceDW : [status = complete]
- (3) [SibMe] BPM_PerformanceDW_ME : [parent = BPM_PerformanceDW] [status = complete]
- (4) [SibMe] BPM_ProcessServer_ME : [parent = BPM_ProcessServer] [status = complete]
- (5) [save and exit]

データベース・コンポーネントの番号を入力してください
(Please enter the number for the database component):5

[状況] 以下のように残り項目が 0 になったため、
bpm.standard.standalone は完了しました
(bpm.standard.standalone is complete with 0 remaining item(s):)

wesb.standard または **wesb.nd.topology** を選択すると、マスター・コンポーネントを構成した後、すべ
てのデータベース・コンポーネントが完了と表示されます。

[通知] 以下のいずれかの [データベース・コンポーネント] を選んでください
(Please pick one of the following [database component(s)]):

- (1) [CommonDB] WBI_CommonDB : [master] [status = complete]
- (2) [Bspace] WBI_BSPACE : [status = complete]
- (3) [SibMe] WBI_CEI_ME : [状況 = 完了]
- (4) [SibMe] WBI_SCA_APP_ME : [状況 = 完了]
- (5) [SibMe] WBI_SCA_SYS_ME : [状況 = 完了]
- (6) [save and exit]

データベース・コンポーネントの番号を入力してください
(Please enter the number for the database component) :6

[状況] 残り項目が 0 になったため、wesb.standalone は完了しました
(wesb.standalone is complete with 0 remaining item(s):)

Oracle

bpm.advanced.standalone または **bpm.advanced.nd.topology** を選択した場合は、**CommonDB** を構成した
後、必要とされるデータベース認証に関して **BPM_ProcessServer** および **BPM_PerformanceDW** コンポー
ネントを手動で構成する必要があります。

[通知] 以下のいずれかの [データベース・コンポーネント] を選んでください
(Please pick one of the following [database component(s)]):

- (1)[CommonDB] WBI_CommonDB : [master] [status = complete]
- (2)[BPCReporting] WBI_BPCEventCollector : [status = complete]
- (3)[BPC] WBI_BPC : [status = complete]
- (4)[BPM_PerformanceDW] BPM_PerformanceDW : [状況 = 未完了]
- (5)[BPM_ProcessServer] BPM_ProcessServer : [status = not complete]
- (6)[BSPACE] WBI_BSPACE : [status = complete]
- (7)[SibME] WBI_BPC_ME : [status = complete]
- (8)[SibME] WBI_CEI_ME : [status = complete]
- (9)[SibME] WBI_SCA_APP_ME : [status = complete]
- (10)[SibME] WBI_SCA_SYS_ME : [status = complete]
- (11)[SibMe] BPM_PerformanceDW_ME : [status = complete]
- (12)[SibMe] BPM_ProcessServer_ME : [status = complete]
- (13)[save and exit]

データベース・コンポーネントの番号を入力してください
(Please enter the number for the database component):4

[状況] 以下のように残り項目が 1 つあるため、BPM_PerformanceDW は未完了です
(BPM_PerformanceDW is not complete with 1 remaining item(s)):
[1] BPM_PerformanceDW.BPM_PerformanceDW : databaseObjects :
DB_USER の必須プロパティ「databaseUser」が空です。
(required property 'databaseUser' for DB_USER is empty.)

このデータベース・コンポーネントを編集しますか?(y/n) [default=y] :

[通知] 以下のいずれかの [データベース・コンポーネント] を選んでください
(Please pick one of the following [database component(s)]):

- (1)[CommonDB] WBI_CommonDB : [master] [status = complete]
- (2)[BPCReporting] WBI_BPCEventCollector : [status = complete]
- (3)[BPC] WBI_BPC : [status = complete]
- (4)[BPM_PerformanceDW] BPM_PerformanceDW : [状況 = 完了]
- (5)[BPM_ProcessServer] BPM_ProcessServer : [status = not complete]
- (6)[BSPACE] WBI_BSPACE : [status = complete]
- (7)[SibME] WBI_BPC_ME : [status = complete]
- (8)[SibME] WBI_CEI_ME : [status = complete]
- (9)[SibME] WBI_SCA_APP_ME : [status = complete]
- (10)[SibME] WBI_SCA_SYS_ME : [status = complete]
- (11)[SibMe] BPM_PerformanceDW_ME : [status = complete]
- (12)[SibMe] BPM_ProcessServer_ME : [status = complete]
- (13)[save and exit]

データベース・コンポーネントの番号を入力してください
(Please enter the number for the database component):5

[状況] 以下のように残り項目が 3 つあるため、BPM_ProcessServer は未完了です
(BPM_ProcessServer is not complete with 3 remaining item(s)):
[1] BPM_ProcessServer.BPM_ProcessServer : databaseObjects :
DB_USER の必須プロパティ「databaseUser」が空です。
(required property 'databaseUser' for DB_USER is empty.)
[2] BPM_ProcessServer.BPM_ProcessServer : databaseObjects :
SECURITY_ADMIN_USER の必須プロパティ「adminUserName」が空です。
(required property 'adminUserName' for SECURITY_ADMIN_USER is empty.)
[3] BPM_ProcessServer.BPM_ProcessServer : databaseObjects :
SECURITY_ADMIN_PASSWORD の必須プロパティ「adminPassword」が空です。
(required property 'adminPassword' for SECURITY_ADMIN_PASSWORD is empty.)

このデータベース・コンポーネントを編集しますか?(y/n) [default=y] :

SQL Server

bpm.standard.standalone または **bpm.standard.nd** を選択した場合は、**BPM_ProcessServer** を構成した後、**BPM_PerformanceDW** コンポーネントに対して、必要なデータベース認証を手動で構成する必要があります。

[通知] 以下のいずれかの [データベース・コンポーネント] を選んでください
(Please pick one of the following [database component(s)]):

- (1) [BPM_ProcessServer] BPM_ProcessServer : [master] [status = complete]
- (2) [BPM_PerformanceDW] BPM_PerformanceDW : [status = not complete]
- (3) [SibMe] BPM_PerformanceDW_ME : [parent = BPM_PerformanceDW] [status = complete]
- (4) [SibMe] BPM_ProcessServer_ME : [parent = BPM_ProcessServer] [status = complete]
- (5) [save and exit]

データベース・コンポーネントの番号を入力してください
(Please enter the number for the database component):2

[状況] 以下のように残り項目が 1 つあるため、BPM_PerformanceDW は未完了です
(BPM_PerformanceDW is not complete with 1 remaining item(s)):
[1] BPM_PerformanceDW.BPM_PerformanceDW : databaseObjects :
DB_USER の必須プロパティ「databaseUser」が空です。
(required property 'databaseUser' for DB_USER is empty.)

このデータベース・コンポーネントを編集しますか?(y/n) [default=y] :

関連概念:

811 ページの『例: manageprofiles コマンドでのデータベース設計ファイルの使用』
データベース設計ツールを使用してデータベース設計ファイルを作成すると、生成されるファイルに
manageprofiles コマンド用の値が含まれます。

データベース設計ツールのトラブルシューティング:

データベース・スクリプトにエラーがある場合は、データベース設計ツールが提供する診断および妥当性検査情報を使用して、問題を診断できます。

必須プロパティが空であることを示すエラー

必須の **userName** および **password** のプロパティが設定されていない場合には、出力に以下のタイプのメッセージが出されることがあります。

[状況] 以下のように残り項目が 2 つあるため、
WBI_BSPACE は未完了です
(WBI_BSPACE is not complete with 2 remaining item(s)):
[1] BSpace.WBI_BSPACE : authAlias :
userId の必須プロパティ「userName」が空です。
(required property 'userName' for userId is empty.)
[2] BSpace.WBI_BSPACE : authAlias :
DB_PASSWORD の必須プロパティ「password」が空です。
(required property 'password' for DB_PASSWORD is empty.)

既存のデータベース設計の妥当性検査を実行した場合の出力例

既存のデータベース設計の妥当性検査を実行するときには、出力に以下のタイプの警告が出されることがあります。

```
DbDesignGenerator.bat -v DB2-distributed-
```

```
...  
[警告] 2 潜在的な問題がスクリプトで検出されました。問題の内容:  
DB_USER @ line 46 in file configCommonDB.bat  
DB_USER @ line 80 in file configCommonDB.sh
```


データベース設計ツール・ログ・ファイルの内容

データベース設計ツールを実行すると、データベース設計ツール・コマンドを実行した場所に `dbDesignGenerator.log` ファイルが作成されます。ログにはすべてのプロンプトおよび入力した値が含まれています。ログ・ファイルにその他のトレース出力は含まれていません。

関連概念:

811 ページの『例: `manageprofiles` コマンドでのデータベース設計ファイルの使用』
データベース設計ツールを使用してデータベース設計ファイルを作成すると、生成されるファイルに `manageprofiles` コマンド用の値が含まれます。

データベースへのシステム情報のロード

IBM Business Process Manager サーバーの始動または使用を試みる前に、`bootstrapProcessServerData` コマンドを実行する必要があります。

`bootstrapProcessServerData` コマンドを実行すると、BPM アプリケーションの構成データがデータベースにロードされます。このデータは、BPM アプリケーションが正常に実行されるようにするために必要です。

注: スタンドアロン・プロファイルを作成するときに、プロファイル作成中にデータベースを作成することを選択した場合は、このコマンドが自動的に実行されます。

- スタンドアロン・プロファイルを作成し、データベース表のセットアップを据え置いた場合は、データベースおよびその表を作成した後、かつサーバーを初めて始動する前に、`bootstrap` コマンドを実行する必要があります。
- Network Deployment (ND) 環境では、サーバーまたはサーバー・クラスターを作成した後に、このコマンドを実行する必要があります。クラスターでは、単一のクラスター・メンバーを指定して、このコマンドを 1 回だけ実行してください。データベースおよびその表を作成した後、かつプロファイルおよびデプロイメント環境を作成した後、かつ最初のサーバーを始動する前に、このコマンドを実行します。別のクラスター・メンバーを追加した場合に、このコマンドを再実行する必要はありません。

コマンド行から `bootstrap` ユーティリティを実行します。ブートストラップ・ユーティリティは、スタンドアロン・プロファイルまたはデプロイメント・マネージャー・プロファイルのディレクトリにあります。以下に例を示します。

```
<install_root>/profiles/Dmgr01/bin  
C:¥<install_root>¥profiles¥ProcCtr01/bin
```

ブートストラップ・ユーティリティは、以下の構文を使用して実行します。

- **Linux** **UNIX** `bootstrapProcessServerData.sh [-dbJDBCClasspath classpath] -clusterName cluster_name`
- **Linux** **UNIX** `bootstrapProcessServerData.sh [-dbJDBCClasspath classpath] -nodeName node_name -serverName server_name`
- **Windows** `bootstrapProcessServerData.bat [-dbJDBCClasspath classpath] -clusterName cluster_name`
- **Windows** `bootstrapProcessServerData.bat [-dbJDBCClasspath classpath] -nodeName node_name -serverName server_name`

ここで、

- **-dbJDBCClasspath** は、データベース JDBC ドライバーのロケーションです。 **dbJDBCClasspath** で指定するパスにスペースが含まれている場合は、その値を引用符で囲む必要があります。デフォルト・ロケーションは `WAS_INSTALL_ROOT/jdbcdrivers` です。
- **-clusterName** はアプリケーション・ターゲット・クラスターの名前です。ND 環境の場合は、このパラメーターまたは **-nodeName** および **-serverName** パラメーターのいずれか一方を指定する必要があります。スタンドアロンの場合は指定しないでください。
- **-nodeName** はノードの名前です。ND 環境の場合は、このパラメーターおよび **-serverName** パラメーター、または **-clusterName** パラメーターのいずれか一方を指定する必要があります。スタンドアロンの場合は指定しないでください。
- **-serverName** はサーバーの名前です。ND 環境の場合は、このパラメーターおよび **-nodeName** パラメーター、または **-clusterName** パラメーターのいずれか一方を指定する必要があります。スタンドアロンの場合は指定しないでください。

パラメーターは大/小文字が区別されます。

Process Server または Process Center を正常に始動する前に、データベースにシステム情報がロードされました。

重要: For SQL Server、ブートストラップ・ユーティリティーが失敗した場合は、Process Server データベースおよび Performance Data Warehouse データベースを作成するときに、**COLLATE** 属性で大/小文字を区別しないように指定したこと (**CI**) を確認します (大/小文字を区別する場合は **CS**)。つまり、create コマンドが以下のようにになっている必要があります。

```
CREATE DATABASE database_name COLLATE SQL_Latin1_General_CP1_CI_AS
```

これを行わない場合、以下のようなエラーが発生することがあります。

```
org.springframework.beans.factory.BeanCreationException: Error creating bean with name
'message.routingCache' defined in class path resource [registry.xml]: Instantiation of bean
failed; nested exception is org.springframework.beans.BeanInstantiationException: Could not
instantiate bean class [com.lombardisoftware.bpd.runtime.engine.message.DefaultMessageRoutingCache]:
Constructor threw exception; nested exception is org.springframework.jdbc.BadSqlGrammarException:
PreparedStatementCallback; bad SQL grammar [select "value" from lsw_system where "key"=?];
nested exception is com.microsoft.sqlserver.jdbc.SQLServerException: Invalid object name
'lsw_system'.
```

```
Caused by: com.microsoft.sqlserver.jdbc.SQLServerException: Invalid object name 'lsw_system'.
at com.microsoft.sqlserver.jdbc.SQLServerException.makeFromDatabaseError
(SQLServerException.java:196)
at com.microsoft.sqlserver.jdbc.SQLServerStatement.getNextResult(SQLServerStatement.java:1454)
at com.microsoft.sqlserver.jdbc.SQLServerPreparedStatement.doExecutePreparedStatement
(SQLServerPreparedStatement.java:388)
at com.microsoft.sqlserver.jdbc.SQLServerPreparedStatement$PrepStmtExecCmd.doExecute
(SQLServerPreparedStatement.java:338)
at com.microsoft.sqlserver.jdbc.TDSCommand.execute(IOBuffer.java:4026)
at com.microsoft.sqlserver.jdbc.SQLServerConnection.executeCommand
(SQLServerConnection.java:1416)
at com.microsoft.sqlserver.jdbc.SQLServerStatement.executeCommand(SQLServerStatement.java:185)
at com.microsoft.sqlserver.jdbc.SQLServerStatement.executeStatement(SQLServerStatement.java:160)
at com.microsoft.sqlserver.jdbc.SQLServerPreparedStatement.executeQuery
(SQLServerPreparedStatement.java:281)
at org.apache.commons.dbcp.DelegatingPreparedStatement.executeQuery
(DelegatingPreparedStatement.java:205)
at org.springframework.jdbc.core.JdbcTemplate$1.doInPreparedStatement(JdbcTemplate.java:648)
at org.springframework.jdbc.core.JdbcTemplate.execute(JdbcTemplate.java:591)
[...]
```

ND 環境の一部であるがクラスターの一部ではないサーバーにデータをブートストラップするには、以下のようになります。

```
bootstrapProcessServerData -nodeName node01 -serverName server1
```

Process Center または Process Server をホストするクラスターにデータをブートストラップする場合は、以下のようにします。

```
bootstrapProcessServerData -clusterName myAppCluster
```

デフォルトのスタンドアロン・プロファイル・サーバーにデータをブートストラップする場合は、以下のようにします。

```
bootstrapProcessServerData
```

カスタム JDBC ドライバーのロケーションを指定して、デフォルトのスタンドアロン・プロファイル・サーバーにデータをブートストラップする場合は、以下のようにします。

```
bootstrapProcessServerData -dbJDBCClasspath c:/DB2/java
```

スタンドアロン・サーバーまたは最初のクラスター・メンバーを始動できます。

DB2 for z/OS データベースの作成および構成

デプロイメント環境がリモートの DB2 for z/OS データベースに依存している場合、このセクションの手順および参照情報を使用して、データベースの構成およびデータベース表の作成に役立ててください。

関連タスク:

196 ページの『標準インストール時の既存データベースの構成』

標準インストール時に既存のデータベース・サーバーを構成するための正しいデータベース値を判別するには、このトピックの情報を参考にしてください。

SPUFI、DSNTEP2、または DButility.sh を使用した DB2 for z/OS データベースおよびストレージ・グループの作成:

プロファイル作成プロセスにより、構成用の DB2 データベース・オブジェクトを作成するために使用できるデータ定義言語 (DDL) スクリプトが生成されます。ご使用の構成に対するデータベース・オブジェクトを作成するための DDL スクリプトを実行するために使用できるツールがいくつかあります。また、SPUFI または DSNTEP2 などのツールを使用してデータベースを作成し、これにオブジェクトを取り込むこともできます。

DB2 データベースとストレージ・グループを作成する前に、以下のタスクを実行する必要があります。

- サーバー構成を作成します。スタンドアロン・サーバーと Network Deployment 環境の構成の作成方法については、『ロードマップ: IBM BPM Advanced のインストールおよび構成 ロードマップ: IBM BPM Express のインストールおよび構成』を参照してください。
- データベースの構成に使用するすべてのコンポーネント用に、DDL が生成されていることを確認します。DDL を生成するには、以下のタスクを実行します。
 - データベース構成の設計

Network Deployment 環境においては、データベース設計ツール (DDT) の使用を推奨します。

スタンドアロン・サーバー環境でも DDT を使用することはできますが、スタンドアロン・プロファイルでは通常、「プロファイル管理ツール」のデータベース・パネルだけで、必要な機能を実行できます。

DDT の出力は、データベース構成の設計文書 (xml ファイル) と、オプションとしてデータベース表を作成するための SQL スクリプトです。

- DDL ファイル使用の準備
 - DDL ファイルを、IBM Business Process Manager ファイル・システムから区分データ・セット (PDS) にコピーすることが必要になる場合があります。Dd12Pds.sh などのツールを使用して、ファイルをコピーできます。
 - データベース・オブジェクトに適用する命名規則や編成規則に制限はありません。
 - CEI DDL ファイルと SIB DDL ファイルは、実行する前にカスタマイズが必要です。

注: サンプルの SIB DDL が、単一データベース構成向けに用意されています。

DBUtility.sh、SPUFI、または DSNTEP2 を使用して DDL スクリプトを実行できます。使用するツールは、経験や慣れ、または個人的な好みに基づいて選択できます。また、DB2 オブジェクトの作成に使用するツール (特に、実稼働環境で使用するもの) について、組織が標準や規則を実装している場合もあります。各ツールによって、発行された DB2 データベース・コマンドの監査証跡が生成される場合があります。

z/OS UNIX システム・サービス環境で作業する場合は、**DBUtility.sh** スクリプトを使用して DDL スクリプトを実行できます。この **DBUtility.sh** スクリプトも IBM Business Process Manager に付属しています。

複数のデータベースにわたるデータベース・オブジェクトを作成する一方で、作業は z/OS UNIX システム・サービス環境で行う場合は、データベース名ごとに異なるコンポーネントを指定して **DBUtility.sh** スクリプトを複数回使用し、DDL スクリプトを実行します。

重要: ASCII から EBCDIC に変換した後に、SQL ステートメントの長さが 71 文字を超えていないことを確認してください。行が長いと、固定幅の MVS データ・セットにコピーするときに行が切り捨てられ、ステートメントが無効になってしまいます。

1. データベースおよびストレージ・グループを作成します。
2. 生成された DDL スクリプトを使用して、データベースにデータを取り込みます。生成された DDL スクリプトのロケーションは、生成方法によって異なります。

DbDesignGenerator コマンドは以下のロケーションにあります。

- **Windows** `install_root%util%dbUtils`

例えば、`C:%Program Files%IBM%WebSphere%AppServer%util%dbUtils> DbDesignGenerator.bat` です。

- **Linux** **UNIX** `/install_root/util/dbUtils`

例えば、`/opt/IBM/WebSphere/AppServer/util/dbUtils> DbDesignGenerator.sh` とします。

その他の方法で生成された DDL の場合は、次のロケーションの下にあるディレクトリー内に DDL が存在します。

- `WAS_HOME/profiles/default/dbScripts` (スタンドアロン構成の場合)
- `WAS_HOME/profiles/default/dbScripts` (Network Deployment 構成の場合)

ここで、`WAS_HOME` は WebSphere Application Server 構成のトップ・ディレクトリーです。

3. z/OS UNIX 環境から DDL を実行する場合は、ファイルのコピーに適切な許可を割り当てます。以下に例を示します。

```
chmod 755 createTable_AppScheduler.sql
```

4. ファイル内の値を必要に合わせて編集します。 データベース名、ストレージ・グループ、およびスキーマ名は、製品構成プロセスでカスタマイズされます。各ファイルの値を調べ、構成スクリプトへの入力を提供する応答ファイルに入力した値に一致しており、かつデータベースに適していることを確認します。

注: ファイルは ASCII フォーマットで提供できます。スクリプトの表示、編集、および実行に使用するツールではスクリプトが EBCDIC フォーマットでなければならない場合は、**iconv** コマンドを使用して、ファイルを EBCDIC に変換します。以下に例を示します。

```
iconv -t IBM-1047 -f ISO8859-1 createTable_AppScheduler.sql >
createTable_AppScheduler_EBCDIC.sql
```

ファイルを ASCII フォーマットから EBCDIC に変換したが、ファイルの実行は ASCII フォーマットで行う必要がある場合は、**iconv** を使用して、ファイルを ASCII に戻してください。例:

```
iconv -t ISO8859-1 -f IBM-1047 createTable_AppScheduler_EBCDIC.sql >
createTable_AppScheduler.sql
```

5. 適切なツールを使用して、カスタマイズされたスクリプトを実行します。以下に例を示します。

SPUFI z/OS から SQL スクリプトを実行するユーティリティです。SPUFI は EBCDIC 入力を使用します。

DSNTEP2

DB2 for z/OS 製品に付属の、サンプルの動的 SQL プログラムです。

DBUtility.sh

DBUtility.sh は、IBM Business Process Manager for z/OS に付属のユーティリティで、インストール・ファイル・システムにインストールされます。例えば、`/usr/lpp/zBPMP5/V7R5M1/bin/DBUtility.sh` のようになります。このユーティリティを使用すると、データベースおよびストレージ・グループを作成できるだけでなく、後で z/OS UNIX から SQL を実行してデータベース表を作成することもできます。**DBUtility.sh** は ASCII 入力を使用します。

DBUtility.sh スクリプトで使用される構文の例を次に示します。

```
/WebSphere/V7S03Z1/AppServer/profiles/default/bin/DBUtility.sh
createTable
-DdbStorageGroup=S3DBSTO
-DdbSchemaName=S3CELL
-DsqlScriptName.default=createTable_AppScheduler.sql
-DsqlScriptPath.default=/WebSphere/V7S03Z1/AppServer/profiles/default/dbscripts/CommonDB/DB2zOS/S3CELLDB
/createTable_AppScheduler.sql
-DdbType=DB2UDBOS390
-DdbName=S3CELLDB
-DprofileName=default
-DprofilePath=/WebSphere/V7S03Z1/AppServer/profiles/default
-DdbJDBCProperties=/wps/dbscripts/db2v9
-DdbConnectionLocation=DSN810PP
-DdbJDBCClasspath=/usr/lpp/db2910/db2910/jcc/classes
-DdbUserId=wsadmin
-DdbPassword=password
-DdbDelayConfig=false
-DdbCreateNew=false
-DdbHostName=winmvsp1.hursley.ibm.com
-DdbServerPort=448
>/tmp/output.out 2>>/tmp/error.out
```

6. 出力を調べて、データベース、ストレージ・グループ、および表がエラーなく正常に作成されたことを確認します。
7. スタンドアロン構成を作成する場合は、以下のようにして IBM Business Process Manager のインストール済み環境を検証します。
 - a. サーバーを始動します。

- b. ブラウザー・ウィンドウを開き、表示するサーバーの URL を入力して、管理コンソールを開きます。以下に例を示します。

`http://server_name.domain_name:port_number/admin`

- c. 管理コンソールにログインします。
- d. 「ようこそ」ページに IBM Business Process Manager for z/OS が表示されることを確認します。これをクリックすると、詳細情報を表示できます。
- e. コンソール内を移動して、サーバーが始動済みの状況であることを確認します。すべてのアプリケーションが開始したこと、およびメッセージング・エンジンが開始したことも確認してください。開始に失敗したものがある場合は、サーバー・ジョブ・ログで、失敗についての詳細を示す「SEVERE」または「WARNING」のメッセージを探します。

DB2 データベースおよびストレージ・グループが作成され、表や索引など、必要なデータベース・オブジェクトが取り込まれます。

スタンドアロン構成を作成する場合は、これでアプリケーションをサーバーにデプロイすることができます。

Network Deployment 構成を作成する場合は、空のノードを 1 つ以上作成して、デプロイメント・マネージャー・セルに追加する必要があります。『カスタム・インストール後に 1 つのデプロイメント・マネージャーおよびカスタム・プロファイルを作成するためのソフトウェア構成』を参照してください。

メッセージ・エンジンのデータ・ストアの作成:

まだメッセージング・エンジンのデータ・ストアを作成していない場合は、データベース設計ツールを使用して、データベース管理者がメッセージング・エンジンのデータ・ストアのテーブルを作成するために使用する データベース・スクリプトを生成します。

データベース・スクリプトを作成して実行する前に、以下を行います。

- クラスタを作成します。詳細については、『パターンを使用したデプロイメント環境の作成』または『管理コンソールを使用した Network Deployment 環境の構成』を参照してください。
- Network Deployment 構成で作成するサービス統合バス・コンポーネントを決定します。

構成する以下のコンポーネントごとにメッセージング・エンジンのデータ・ソースを作成し、設定します。

- Service Component Architecture システム・バス
- Service Component Architecture アプリケーション・バス
- IBM Process Server
- IBM Performance Data Warehouse
- Business Process Choreographer
- Common Event Infrastructure

すべてのデータベース・オブジェクトを DB2 for z/OS サブシステムの 1 つ以上のデータベース内に作成することができます。以下の考慮事項に注意してください。

- すべてのメッセージング・エンジンは、同じ表名を使用します。このため、各メッセージング・エンジンのテーブルには、固有のスキーマ修飾子が必要です。
- すべてのメッセージング・エンジンは、同じテーブル・スペース名を使用します。このため、メッセージング・エンジンごとに異なるデータベースを使用してください。また、単一のデータベースを使用する場合は、テーブル・スペース名を編集して、データベース内部で固有になるようにしてください。

1. 各メッセージング・エンジンについて、以下の手順を実行して、必要なデータベース・スクリプトを生成します。
 - a. `install_root/util/dbUtils` ディレクトリーから、データベース設計ツール (**DbDesignGenerator**) を実行します。
 - b. 「(2)単一コンポーネントのデータベース設計の作成」オプションを選択してから、そのメッセージング・エンジンに該当するオプションを選択します。
 - c. ツールの残りのプロンプトで入力を行って、データベース構成を定義し、スクリプトを生成します。詳しくは、『データベース設計ツールを使用した特定のコンポーネントのためのデータベース設計ファイルの作成』を参照してください。

ヒント: それぞれのメッセージング・エンジン用のスクリプトを生成するために、データベース設計ツールを何度も実行する代わりに、「(1)スタンドアロン・プロファイルまたはデプロイメント環境のデータベース設計の作成」オプションを使用して、ツールを 1 度だけ実行する方法があります。このオプションでは、共通データベース、Business Process Choreographer、Performance Data Warehouse、Process Server、Business Space、および 6 個のメッセージング・エンジンのすべてのコンポーネントに対して、ツールを 1 回実行するだけで、データベース構成の定義とデータベース・スクリプトの生成を実行することができます。詳しくは、923 ページの『データベース設計ツールを使用したスタンドアロン・プロファイル用またはデプロイメント環境用のデータベース設計ファイルの作成』を参照してください。

2. お好みのツールを使用して、生成された DDL スクリプトを実行します。

メッセージング・エンジンのデータ・ストアが作成されます。

JCA 認証別名ユーザー ID への表の特権の付与:

使用しているスキーマ名が JCA 認証別名ユーザー ID と同じものでない場合は、DB2 特権のサブセットを JCA 認証別名ユーザー ID に付与する必要があります。

サービス統合バス用の DDL には、コメント化された GRANT コマンドが既に含まれていて、これを SIB テーブルへのアクセス権を付与するための基盤として使用できます。ただし、他の IBM Business Process Manager コンポーネントは GRANT ステートメントを何も提供しません。

JCA 認証別名と同じものでないスキーマ名を使用して、別名ユーザー ID が表を除去する能力を持たないようにしてください (テーブルを除去する能力は、作成者、つまりスキーマには暗黙的に付与されます。) DBADM のような特権を JCA 認証別名ユーザー ID に付与することには意味がありません。これは、DBADM 特権でもテーブルを DROP することができるからです。

別名ユーザー ID で DROP を実行できないようにしたまま、IBM Business Process Manager を機能させるには、DDL をコピーし、それを編集して、CREATE コマンドから GRANT ステートメントを作成することにより、いくつかの GRANT ステートメントを作成します。次のような GRANT コマンドを作成します。

```
GRANT ALL PRIVILEGES ON TABLE  
cell.tablename TO userid/sqlid
```

ここで、`userid/sqlid` は JCA 認証別名ユーザー ID です。

SIB の正しいスキーマ名の設定:

SIB メッセージング・エンジンが適切な DB2 表にアクセスできるようにするには、DB2 表にアクセスするために使用する SIB メッセージング・テーブルに正しいスキーマ名を設定します。

サーバー (スタンドアロン・サーバーまたはデプロイメント・マネージャー) を始動します。

管理コンソールを使用して、スキーマ名を変更します。

1. 管理コンソールにログインします。
2. 「サービス統合」 > 「バス」にナビゲートします。
3. 各バスについて、以下を実行します。
 - a. 「メッセージング・エンジン」を選択し、表示される名前をクリックします。
 - b. 「メッセージ・ストア」をクリックします。
 - c. 「スキーマ名」の値を、この SIB の DB2 表を作成したときに使用した名前に変更します。
 - d. 「適用」をクリックします。
 - e. 構成変更を保存します。
4. 管理コンソールからログアウトします。
5. サーバーを停止した後で、再始動します。
6. 付属ジョブ・ログの出力を参照して、成功を示す SIB メッセージング・エンジン始動メッセージを探します。以下に例を示します。

```
BB0002221: "BusName"  
CWSID0016I: Messaging engine MessagingEngineName is in state Started.
```

SIB メッセージング・テーブルが DB2 表をアクセスするために使用するスキーマ名が変更されます。

DB2 for z/OS を使用したインストールの検査:

DB2 for z/OS データベースを使用するインストールを検査するときは、サーバント・ジョブおよび付属ジョブのログを確認し、データ・ストアへのアクセスに問題があることを示すエラー・メッセージがないかどうかを調べることが重要です。

1. 付与されている権限を調べ、どのユーザー ID にも必要以上の権限を付与していないことを確認するように、DB2 システム管理者に依頼してください。構成時に起こる可能性がある DB2 のセキュリティに関する問題を回避するために、JCA 認証別名に DB2 の SYSADM 権限を付与したくなる場合もあります。
2. ストレージ・グループの割り当てとバッファ・プールの使用状況を調べるように、DB2 システム管理者に依頼してください。ストレージ・グループの割り当てとバッファ・プールの使用量が正しくなくても、ログにエラー・メッセージとして表示されない場合がありますが、後で問題の原因になる可能性があります。このような問題は、システムを使用するユーザーに引き渡した後でなく、この時点で解決しておくことを推奨します。例えば、ストレージ・グループおよび VCAT の修正は、表と索引が使用された後では容易ではありません。
3. 管理コンソールにログインします。
4. 管理コンソールで、すべてのアプリケーションが開始されていることと、メッセージング・エンジンが開始されていること、およびすべてのデータ・ソースに対して「テスト接続」オプションを使用してアクセスできることを確認します。始動に失敗したアプリケーションがある場合は、サーバント・ログおよび付属ジョブ・ログで「SEVERE」または「WARNING」のメッセージを探し、失敗の詳細を確認します。
 - 管理コンソールに SQLCODE -204 などの DB2 エラーが表示された場合は、データ・ソースのカスタム・プロパティ・セクションに正しいスキーマ名または currentSQLID 値を設定します。スキーマ名が JCA 認証別名のユーザー ID と異なる場合、SQL 要求は、JCA 認証別名のユーザー ID によって修飾されている表を探そうとします。

- SQLCODE -913 理由コード 00C90088 などの DB2 デッドロック・エラーが表示された場合は、RRULOCK DB2 パラメーターを YES に設定し、IBM Business Process Manager テーブルのテーブル・スペースがロックされないようにします。

すべてのメッセージング・エンジンが正しく初期化済みで、JDBC 接続を開くことに関連するその他のエラーが出力されていない場合は、IBM Business Process Manager の構成のカスタマイズを続行できます。

Process Server および Performance Data Warehouse を構成した後のデータベース・パスワードとユーザー ID の変更

データベース構成が完了した後に、必要に応じてデータベース・パスワードおよびユーザー ID を再構成することができます。

データベース・パスワードおよびユーザー ID を再構成するには、管理コンソールを使用します。データベース・パスワードおよびユーザー ID を変更するには、以下の 3 つの処理を実行する必要があります。

- すべてのデータ・ソースの認証別名を更新する
- メッセージ・エンジンのデータ・ストア認証別名を更新する
- 98database.xml ファイルで Process Server および Performance Data Warehouse のパスワードを手動で更新する

重要: 何らかの構成変更を行う前に、config フォルダをバックアップすることをお勧めします。config フォルダは、Deployment Manager の下の <Dmgr-profile>/config にあります。詳しくは WebSphere Application Server 管理者にお問い合わせください。

データ・ソース認証別名の更新:

データベース・パスワードおよびユーザー名を変更する前に、データ・ソース認証別名を更新する必要があります。

この手順を始める前に、以下のすべての項目を必ず実行してください。

- Network Deployment 環境に対して、要求の送信がすべて停止していることを確認します。また、すべてのクラスターを停止し、DMGR とすべてのノード・エージェントの実行を継続する必要があります。
- スタンドアロン・プロファイルに対して、要求の送信がすべて停止していることを確認します。

データ・ソース認証別名を変更するには、以下の手順を実行します。

1. 管理コンソールにログインします。
2. 「リソース」 > 「JDBC」 > 「データ・ソース」を選択します。

注: 「コンポーネント管理認証別名」および「XA リカバリー用の認証別名 (Authentication alias for XA recovery)」に対して構成されている値を書き留めておいてください。

3. 必要なデータ・ソースを選択します。
4. 「関連項目」セクションを選択し、「JAAS - J2C 認証データ」を選択します。
5. ステップ 2 で書き留めた、適切な「コンポーネント管理認証別名」の値を選択します。パスワードまたはユーザー名を編集し、「OK」をクリックして変更を保存します。
6. 「JAAS - J2C 認証データ」パネルに戻り、ステップ 2 で書き留めた「XA リカバリー用の認証別名 (Authentication alias for XA recovery)」の値を選択します。パスワードまたはユーザー名を編集し、「OK」をクリックして変更を保存します。
7. 更新内容を保存し、「完全同期」をクリックして、この情報をすべてのノードに同期させます。

メッセージ・エンジンのデータ・ストア認証別名の更新:

データベース・パスワードおよびユーザー名を変更する前に、メッセージ・エンジンのデータ・ストア認証別名を更新する必要があります。

この手順を始める前に、以下のすべての項目を必ず実行してください。

- Network Deployment 環境に対して、要求の送信がすべて停止していることを確認します。また、すべてのクラスターを停止し、DMGR とすべてのノード・エージェントの実行を継続する必要があります。
- スタンドアロン・プロファイルに対して、要求の送信がすべて停止していることを確認します。
- Network Deployment クラスターおよびサーバーを停止した後、別名を変更する前に、DMGR とすべてのノード・エージェントを始動する必要があります。

メッセージング・エンジンのデータ・ストア認証別名を更新するには、以下の手順を実行します。

1. 管理コンソールにログインします。
2. 「サービス統合」 > 「バス」を選択します。
3. 各バスの認証別名を更新するには、以下の手順を実行します。
 - a. 「バス」 > 「[Bus_NAME]」 > 「メッセージング・エンジン」 > 「[MESSAGING_ENGINE]」 > 「データ・ストア」を選択します。

要確認: データ・ストアでの「認証別名」の値を書き留めておいてください。

- b. 「関連項目」セクションを選択し、「JAAS - J2C 認証データ」をクリックします。
- c. ステップ a で書き留めた値を選択します。パスワードを編集し、「OK」をクリックして変更を保存します。
- d. 更新内容を保存し、「完全同期」をクリックして、この情報をすべてのノードに同期させます。

構成ファイル内のパスワードおよびユーザー名の更新:

データベース・パスワードを変更するには、いくつかの構成ファイルを更新する必要があります。

ユーザー名およびパスワード更新を始める前に、DMGR と各ノード・エージェントが稼働していることを確認してください。新規パスワードで 98Database.xml ファイルを更新したら、「完全同期」をクリックして、変更内容をすべてのノードに適用する必要があります。その後、ご使用の環境を再始動して、ご使用の Network Deployment 環境またはスタンドアロン環境で新規パスワードを確実にアクティブ化する必要があります。

IBM Process Center、IBM Process Server、および IBM Performance Data Warehouse では、それぞれのデータベース情報が 98Database.xml ファイルに保管されるため、このファイルを新規パスワードまたはユーザー ID で更新する必要があります。このファイルが存在するすべての場所については、このトピックに記載されている表を参照してください。

サンプルの 98Database.xml ファイルには、次のようなコード・セグメントが含まれています (これは例であり、セットアップに応じて異なる場合があります)。

```
<databases>
<default-database-name>default</default-database-name>
<database type="default">
<driver>com.ibm.db2.jcc.DB2Driver</driver>
<url>jdbc:db2://localhost:50000/BA8000_1</url>
<user>bpmdb</user>
<schema></schema>
<encrypted-password>GFgs/fnJCC9RnNCHDH3kLA==:acGciJgBON8Wtk0ZF/dS/A==</encrypted-password>
```

```

<db-name>BA8000_1</db-name>
<storage-group></storage-group>
</database>
</databases>

```

ユーザー ID を変更するには、`<user>new_userID</user>` のように、user タグに新規の値を追加します。

パスワードについては、暗号化ツールを使用して生成されたパスワード値を組み込んで、次に示す項目を更新する必要があります。「関連リンク」セクションの『パスワードの暗号化』で説明されている方法を使用してください。

```
<encrypted-password>7Yu5Kz3XaYL5aUjbWfISHg==:VyP9e8ytnTz6623hERR4lg==</encrypted-password>
```

表 1 に、スタンドアロン環境での 98Database.xml 構成ファイルのロケーションを示します。

表 144. スタンドアロン環境での 98Database.xml 構成ファイルのロケーション

デプロイメント・タイプ	ファイルのロケーション
Process Center	Process Center <STANDALONE-PROFILE-DIR>¥config¥cells¥<cell name>¥nodes¥<node name>¥servers¥<server name>¥process-center¥config¥system パフォーマンス・データウェアハウス <STANDALONE-PROFILE-DIR>¥config¥cells¥<cell name>¥nodes¥<node name>¥servers¥<server name>¥performance-data-warehouse¥config¥system
Process Server	Process Server <STANDALONE-PROFILE-DIR>¥config¥cells¥<cell name>¥nodes¥<node name>¥servers¥<server name>¥process-server¥config¥system パフォーマンス・データウェアハウス <STANDALONE-PROFILE-DIR>¥config¥cells¥<cell name>¥nodes¥<node name>¥servers¥<server name>¥performance-data-warehouse¥config¥system

表 2 に、Network Deployment 環境での 98Database.xml 構成ファイルのロケーションを示します。

表 145. Network Deployment 環境での 98Database.xml 構成ファイルのロケーション

デプロイメント・タイプ	ファイルのロケーション
Process Center	<p>1 または 2 クラスター・トポロジー</p> <p>Process Center</p> <p><DMGR-PROFILE-DIR>%config%cells%<cell name>%clusters%<APPLICATION-CLUSTER-NAME>%process-center%config%system</p> <p>アプリケーション・クラスターの一部として使用される各ノード - <DMGR-PROFILE-DIR>%config%cells%<cell name>%nodes%<node name>%servers%<server name>%process-center%config%system</p> <p>パフォーマンス・データウェアハウス</p> <p><DMGR-PROFILE-DIR>%config%cells%<cell name>%clusters%<APPLICATION-CLUSTER-NAME>%performance-data-warehouse%config%system</p> <p>アプリケーション・クラスターの一部として使用される各ノード - <DMGR-PROFILE-DIR>%config%cells%<cell name>%nodes%<node name>%servers%<server name>%performance-data-warehouse%config%system</p>
	<p>3 または 4 クラスター・トポロジー</p> <p>Process Center</p> <p><DMGR-PROFILE-DIR>%config%cells%<cell name>%clusters%<APPLICATION-CLUSTER-NAME>%process-center%config%system</p> <p>アプリケーション・クラスターの一部として使用される各ノード - <DMGR-PROFILE-DIR>%config%cells%<cell name>%nodes%<node name>%servers%<server name>%process-center%config%system</p> <p>パフォーマンス・データウェアハウス</p> <p><DMGR-PROFILE-DIR>%config%cells%<cell name>%clusters%<SUPPORT-CLUSTER-NAME>%performance-data-warehouse%config%system</p> <p>サポート・クラスターの一部として使用される各ノード - <DMGR-PROFILE-DIR>%config%cells%<cell name>%nodes%<node name>%servers%<server name>%performance-data-warehouse%config%system</p>

Process Server	<p>1 または 2 クラスター・トポロジー</p> <p>Process Server</p> <p><DMGR-PROFILE-DIR>%config%cells%<cell name>%clusters%<APPLICATION-CLUSTER-NAME>%process-server%config%system</p> <p>アプリケーション・クラスターの一部として使用される各ノード - <DMGR-PROFILE-DIR>%config%cells%<cell name>%nodes%<node name>%servers%<server name>%process-server%config%system</p> <p>パフォーマンス・データウェアハウス</p> <p><DMGR-PROFILE-DIR>%config%cells%<cell name>%clusters%<APPLICATION-CLUSTER-NAME>%performance-data-warehouse%config%system</p> <p>アプリケーション・クラスターの一部として使用される各ノード - <DMGR-PROFILE-DIR>%config%cells%<cell name>%nodes%<node name>%servers%<server name>%performance-data-warehouse%config%system</p> <hr/> <p>3 または 4 クラスター・トポロジー</p> <p>Process Server</p> <p><DMGR-PROFILE-DIR>%config%cells%<cell name>%clusters%<APPLICATION-CLUSTER-NAME>%process-server%config%system</p> <p>アプリケーション・クラスターの一部として使用される各ノード - <DMGR-PROFILE-DIR>%config%cells%<cell name>%nodes%<node name>%servers%<server name>%process-server%config%system</p> <p>パフォーマンス・データウェアハウス</p> <p><DMGR-PROFILE-DIR>%config%cells%<cell name>%clusters%<SUPPORT-CLUSTER-NAME>%performance-data-warehouse%config%system</p> <p>サポート・クラスターの一部として使用される各ノード - <DMGR-PROFILE-DIR>%config%cells%<cell name>%nodes%<node name>%servers%<server name>%performance-data-warehouse%config%system</p>
----------------	---

パスワードの暗号化

DB2 データベースのトランザクション・ログ・オプションの変更

IBM Business Process Manager で使用できるように DB2 を構成する場合は、トランザクション・ログ・オプションを変更する必要があります。

1. DB2 コマンド・ライン・プロセッサを開始します。
2. 以下のコマンドを実行します。

```
CONNECT TO [DB_name]
UPDATE DB CFG FOR DB_name USING LOGFILSIZ 4096 IMMEDIATE
UPDATE DB CFG FOR DB_name USING LOGSECOND 64 IMMEDIATE
CONNECT RESET
```

3. DB2 を停止して再始動します。

Network Deployment 環境の構成

インストールが完了し、デプロイメント・マネージャー・プロファイルおよびカスタム・プロファイルを作成したら、Network Deployment 構成を作成できます。

Network Deployment 環境の作成

カスタム・インストールを実行した後、プロファイル管理ツールまたは `manageprofiles` コマンド行ユーティリティーを使用して、複数のマシンにわたって Network Deployment セルを作成することができます。各セルについて、1 つのデプロイメント・マネージャー・プロファイル、および 1 つ以上のカスタム (管理対象ノード) プロファイルを作成します。これで、必要なデプロイメント構成を作成できます。

もう 1 つの方法として、単純な Network Deployment トポロジを構成する場合は、プロファイル管理ツールとデプロイメント環境ウィザード、または `manageprofiles` コマンドと `wsadmin` コマンドを使用する代わりに、`configureNode` コマンドを使用して必要なプロファイルとクラスターを作成できます。

このセクションでは、Network Deployment 環境を構成する方法について説明します。要約は以下のとおりです。

1. プロファイル管理ツールを使用して、1 つのデプロイメント・マネージャー・プロファイルおよび 1 つ以上のカスタム (管理対象ノード) プロファイルを作成します。
2. デプロイメント環境ウィザードまたは管理コンソールを使用して、デプロイメント構成を作成します。

このセクションに記載された情報では、インストーラーを実行してカスタム・インストールを実行したことが前提となります。

ヒント: プロファイル管理ツールを使用する代わりに、`manageprofiles` コマンド行ユーティリティーを使用してプロファイルを作成することもできます (『コマンド行ユーティリティーおよび `wsadmin` を使用したソフトウェアの構成』を参照)。

デプロイメント環境ウィザードを使用した Network Deployment 環境の構成:

カスタム・インストールを実行し、デプロイメント・マネージャー・プロファイルおよびカスタム (管理対象ノード) プロファイルを作成した後、Network Deployment 構成を作成できます。

このセクションでは、デプロイメント環境ウィザードを使用して、ソフトウェアにパッケージされているトポロジ・パターン・テンプレートに基づいて Network Deployment 環境を作成する方法について説明します。

このセクションの情報では、インストーラーを実行済みであること、またカスタム・インストールを実行済みであること、およびデプロイメント・マネージャー・プロファイルおよびカスタム (管理対象ノード) プロファイルを作成済みであることを想定しています。

`wsadmin` を使用した Network Deployment 構成の作成については、『コマンド行を使用したデプロイメント環境の作成』を参照してください。

関連概念:

41 ページの『概要: デプロイメント環境のトポロジおよびパターン』

Network Deployment 環境にはさまざまなトポロジを持たせることができます。またこの環境は、いくつかの標準トポロジ・パターンから作成することができます。

58 ページの『トポロジ・パターンおよびサポート対象の製品フィーチャー』

トポロジとは、デプロイメント環境の物理的レイアウトのことです。製品フィーチャーとデフォルトの使用法は、選択するトポロジ・パターンによって異なります。

仮想ホスト

関連タスク:

974 ページの『コマンド行を使用したデプロイメント環境の作成』

wsadmin を使用して、Process Server および Process Center デプロイメント環境を作成できます。

createDeploymentEnvDef および **generateDeploymentEnv** は、デプロイメント環境ウィザードを使用してデプロイメント環境を作成するのと同様のコマンド行を提供します。

仮想ホストの構成

パターンを使用した *Process Server* デプロイメント環境の作成:

Network Deployment 構成の基礎とするパターンを決定したら、「デプロイメント環境」ウィザードを使用して、そのパターンに基づいた IBM BPM Advanced Process Server デプロイメント環境を作成します。

ヒント: パターンを使用してデプロイメント環境を作成する代わりに、インポートされた設計を使用することもできます。詳しくは、『管理コンソールを使用した設計文書に基づくデプロイメント環境定義のインポート』を参照してください。

このタスクに必要なセキュリティー・ロール: セキュリティーおよびロール・ベースの許可が使用可能になっている場合、このタスクを実行するには、管理者またはコンフィギュレーターとして管理コンソールにログインする必要があります。

構成するパターンとフィーチャーはすでに計画されているはずです。詳細は、『Network Deployment 環境の計画』を参照してください。

製品がインストール済みであり、デプロイメント・マネージャー・プロファイルおよび関連ノードが作成済みであることを前提とします。

さらに、「デプロイメント環境構成」ウィザードのステップの 1 つに、データベース設計文書のインポートが含まれています。データベース設計文書は、選択されたデプロイメント環境フィーチャーのデータベース構成を定義します。IBM Business Process Manager には、ユーザーの入力に基づいてデータベース設計文書を作成する応答型のデータベース設計ツール (DDT) が含まれています。DDT は、設計文書の作成以外に、データベース表を作成するオプションも提供します。通常、DDT を実行する人が、適宜データベース表の作成を選択します。その後その文書を IBM Business Process Manager デプロイメント環境ウィザードで使用して、デプロイメント環境で使用されるデータベースを構成できます。DDT およびデータベース構成全般について詳しくは、『データベースの構成』を参照してください。

このタスクでは、特定のパターンに基づいたデプロイメント環境の作成手順を説明し、デプロイメント環境構成ウィザードを使用します。

注: ウィザードで作業中に操作を間違えた場合は、「戻る」をクリックして前に戻ることができます。

1. 管理コンソールから、「デプロイメント環境」ページに移動します。例えば、「サーバー」 > 「デプロイメント環境」をクリックします。
2. 「デプロイメント環境」ページで「新規」をクリックして、「デプロイメント環境構成」ウィザードを起動します。
 - a. 「パターンに基づくデプロイメント環境の作成」オプションが選択されています。「パターンに基づくデプロイメント環境の作成」は、システムのデフォルトです。このトピックで説明するのは、このオプションです。

デプロイメント環境パターンにより、よく使用するビジネス・インテグレーション・トポロジを記録します。パターンは、作成するデプロイメント環境のテンプレートになります。

注: パターンは、構成済みのデプロイメント・マネージャーによってサポートされる製品と直接的な関係を持ちます。IBM Business Process Manager は、システム・デフォルトである「リモート・メッセージングおよびリモート・サポート」パターンと共に、特定のパターン・セットをサポートしています。デプロイメント・マネージャーが IBM Business Process Manager 以外の製品もサポートしている場合は、追加のパターンが適用される可能性があります。各製品に適用されるパターンについては、製品固有の資料を参照してください。

IBM Business Process Manager に用意されているパターンのタイプの詳細は、『トポロジー・タイプおよびデプロイメント環境パターン』を参照してください。

- b. 「デプロイメント環境名」フィールドに、デプロイメント環境の固有の名前を入力します。
- c. オプション: ウィザードですべての構成ステップを表示するには、「詳細: すべてのステップを表示します」を選択します。

「ファースト・パス: 必要なステップのみを表示します」を選択した場合は、ウィザードにはデフォルト値が割り当てられていないページだけが表示されます。「ファースト・パス: 必要なステップのみを表示します」は、デプロイメント環境構成に対してシステム提供のデフォルト値を受け入れる場合にのみ選択してください。

このトピックでは、「詳細: すべてのステップを表示します」を選択したものと想定します。

- d. 「次へ」をクリックして、「デプロイメント環境フィーチャー」ページを表示します。
3. 「デプロイメント環境フィーチャー (Deployment Environment Features)」ページで、デプロイメント環境のフィーチャーを選択し、「次へ」をクリックして互換性のあるフィーチャーのリストを表示するか、デプロイメント環境パターンのリストを表示します。フィーチャーはデプロイメント環境のランタイム処理機能を表します。

「デプロイメント環境フィーチャー」ページの使用可能なフィーチャーのリストは、デプロイメント・マネージャー・プロファイルに基づきます。デプロイメント・マネージャー・プロファイルを拡張して IBM Business Process Manager と一緒に別の製品を組み込んだ場合 (IBM Business Monitor など)、「デプロイメント環境フィーチャー」ページにはこれらのフィーチャーもリストされます。

IBM Business Process Manager のプロファイルをインストールして構成した場合、「デプロイメント環境フィーチャー」ページには以下の詳細が表示されます。

- IBM Business Process Manager Advanced の場合:
 - **WESB** は WebSphere Enterprise Service Bus を指し、メディエーションをサポートするデプロイメント環境が提供されます。
 - **BPMAPS** (IBM BPM Advanced の場合)。Process Server デプロイメント・マネージャー・プロファイル。メディエーション、ビジネス・プロセス、ヒューマン・タスク、Business Space 機能、およびビジネス・ルールをサポートする Process Server デプロイメント環境を提供します。
 - **BPMAPC** (IBM BPM Advanced の場合)。Process Center デプロイメント・マネージャー・プロファイル。メディエーション、ビジネス・プロセス、ヒューマン・タスク、Business Space 機能、およびビジネス・ルールをサポートする Process Center デプロイメント環境を提供します。

デプロイメント環境フィーチャーのデフォルト値は、デプロイメント・マネージャーのランタイム機能に対応しています。

4. 「互換性のあるデプロイメント環境フィーチャーの選択」 ページで必要に応じて追加のフィーチャーを選択し、「次へ」をクリックして、1 次フィーチャーおよび補助フィーチャーの選択に関連したパターンのリストを表示します。

注: 「互換性のあるデプロイメント環境フィーチャーの選択」 ページは、デプロイメント・マネージャーが他のビジネス・プロセス・マネジメント (BPM) フィーチャー (IBM Business Monitor など) で拡張されている場合にのみ表示されます。

通常のフィーチャーと互換フィーチャーとの関係を理解するには、『計画』セクションのデプロイメント環境に関する情報を参照してください。

5. 「デプロイメント環境パターンの選択 (Select the deployment environment pattern)」 ページで、選択したデプロイメント環境のパターンを選択し、「次へ」をクリックして「ノードの選択」 ページを表示します。

「デプロイメント環境パターン」 ページに表示されるパターンのリストは動的です。このリストは、以下の環境条件および構成決定によってアクティブ化され、それらの条件および決定に依存します。

- ソフトウェアをインストールしたプラットフォーム
- 「デプロイメント環境フィーチャーの選択 (Select the deployment environment feature)」 ページおよび「互換性があるデプロイメント環境フィーチャーの選択 (Select compatible deployment environment features)」 ページでの選択内容。

パターンからフィーチャーへの関係について詳しくは、『トポロジー・パターンおよびサポート対象の製品フィーチャー』を参照してください。

6. オプション: 「ノードの選択」 ページで、このデプロイメント環境に含めるノードを選択し、「次へ」をクリックして「クラスター」 ページを表示します。

ステップ 3 (953 ページ) で選択した環境に必要な機能を持つノードを選択します。例えば、デプロイメント環境タイプとして **BPMSPC** を選択した場合、選択したノードではその環境タイプの機能を実行できる必要があります。

デプロイメント環境用に少なくとも 1 つのノードを選択します。高可用性環境とフェイルオーバー環境の場合は、2 つ以上のノードを選択します。スケーラビリティを実現するには、すべてのノードを選択します。

ノードを組み込むには、ノード名の隣にあるチェック・ボックスを選択します。「ノード・マッピング」を使用すると、選択したノードが別のノード名にマップされます。

7. オプション: 「クラスター」 ページで、デプロイメント環境のクラスター・タイプ (アプリケーション・デプロイメント・ターゲット、メッセージング・インフラストラクチャー、サポート・インフラストラクチャー) ごとに各ノードに必要な数のクラスター・メンバーを割り当てます。

デフォルトでは、機能ごとに各ノード上で 1 つのクラスター・メンバーが割り当てられます。この数を変更するには、各列の数値を置換します。それぞれのクラスター・タイプで提供される各種のクラスター・ロールおよび機能について十分な知識がない場合は、『トポロジー・タイプおよびデプロイメント環境パターン』を参照してください。

ノードの値が 0 (ゼロ) の場合、選択したフィーチャーに関して、その選択した機能にノードが寄与しないことを意味します。

クラスター・メンバーを割り当てた後、「次へ」をクリックすると、デプロイメント環境のクラスター・タイプごとに「クラスター命名」ページを表示することができます。表示される「クラスター命名」サブステップは、選択したデプロイメント環境パターンによって異なります。

クラスター名およびクラスター・メンバー名のデフォルト値は、システムによって生成されます。

クラスター名もクラスター・メンバー名をカスタマイズしない場合は、以下の手順で、ウィザード・ナビゲーション・ペインを使用して、「REST サービス」ページに直接移動できます。

サブステップ・ページの構造はどれも共通しています。『クラスター名およびクラスター・メンバー名をカスタマイズします』に説明があります。

a. オプション: クラスター名とクラスター・メンバー名をカスタマイズします。

「クラスター命名」ページを使用して、クラスター・タイプのクラスター名またはクラスター・メンバー名をカスタマイズします。選択したパターンのクラスター・タイプごとに、1つのサブステップ・ページがあります。例えば、「リモート・メッセージングおよびリモート・サポート」パターンを選択した場合は、3つのサブステップがあります。すなわち、そのパターンのクラスター・タイプ (アプリケーション・デプロイメント・ターゲット、メッセージング・インフラストラクチャー、およびサポート・インフラストラクチャー) ごとに1つのサブステップがあります。

それぞれのサブステップ・ページには、以下の情報が表示されます。

クラスター

クラスターの機能ロールを指定する読み取り専用フィールド。

値は、以下のようにクラスター・タイプによって異なります。

- アプリケーション・デプロイメント・ターゲット
- メッセージング・インフラストラクチャー
- サポート・インフラストラクチャー
- Web アプリケーション・インフラストラクチャー

各クラスター・タイプで提供される機能ロールについては、『トポロジー・タイプおよびデプロイメント環境パターン』を参照してください。

クラスター名

クラスター名のシステム生成デフォルト値が入ります。

デフォルト値は、<デプロイメント環境名>.<クラスター・タイプ名> という命名規則に従っています。ここで、**クラスター・タイプ名** は、以下のいずれかの値です。

- AppTarget

アプリケーション・デプロイメントのターゲットのロールを実行するクラスターの場合

- メッセージング

メッセージング・インフラストラクチャーのロールを実行するクラスターの場合

- サポート

サポート・インフラストラクチャーのロールを実行するクラスターの場合

- Web

サポート Web アプリケーションのロールを実行するクラスターの場合

注: このクラスター・タイプ名は、WebSphere Business Monitor が主なフィーチャーまたは製品である BPM 構成に適用されます。

クラスター・メンバー名

システム生成デフォルト値を受け入れるか、任意の名前を指定します。

クラスター・メンバー名のデフォルト値は、<クラスター名>.<ノード名>.<ノード番号シーケンス> という命名規則に従っています。

表に表示されるクラスター・メンバー名のは、 「クラスター」 ページのクラスター・タイプ列およびノード行に入力したクラスター・メンバーの数と一致します。「クラスター」 ページについては、前のステップを参照してください。

8. 「REST サービス」 ページで、Representational State Transfer (REST) アプリケーション・プログラミング・インターフェース (API) のサービス・エンドポイントを構成します。

Business Space でウィジェットを使用可能にする場合は、それらのウィジェットに対する REST サービス・エンドポイントを構成する必要があります。

- a. 「プロトコル」 リストから 「https://」 または 「http://」 のいずれかを選択することにより、すべての REST サービスに対して完全な URL パスを構成します。
 - b. 「負荷分散環境でのホスト名または仮想ホスト」 フィールドに名前を入力します。
 - c. 「ポート」 フィールドに、クライアントがサーバーまたはクラスターと通信する必要があるポートを入力します。
 - d. REST サービスの表で、REST サービス・エンドポイントの説明を変更する場合は、「説明」 フィールドの項目を上書きします。その他のフィールドは読み取り専用です。
 - e. 「次へ」 をクリックして、「データベース構成のインポート (Import the database configuration)」 ページに移動します。
9. オプション: 「データベース構成のインポート」 ページで、「参照」 をクリックしてデータベース設計文書に進むか、またはデータベース設計文書へのパスを入力した後、「次へ」 をクリックして、「データ・ソース」 ページに進みます。設計文書は、データベース設計ツール (DDT) を使用して作成したデータベース設計に基づく設計文書にすることも、選択したパターンとフィーチャーに基づいて提供された設計文書にすることもできます。

注: プロファイルの作成時に作成された commonDB は、デプロイメント環境用にインポートされたデータベース設計文書によって変更されることはありません。

10. 必須: 「データベース」 ページで、デプロイメント環境のデータ・ソースのデータベース・パラメータを構成し、「次へ」 をクリックして「セキュリティー」 ページに移動します。

注: このパネルで指定されるデータベースは既に存在している必要があります。デプロイメント環境構成で新規データベースが作成されることはありません。

DB2 データベースおよび SQL Server データベースの場合、IBM Process Server および IBM Performance Data Warehouse では残りのコンポーネントと同じデータベースを使用できません。

Oracle データベースを使用する場合には、IBM Process Server および IBM Performance Data Warehouse は同じデータベース・インスタンスを使用できますが、それぞれ異なるユーザーを使用する必要があります。

このページでは、このデプロイメント環境に組み込まれるコンポーネントのデータベース情報を定義します。該当するところには、ウィザードによってパラメータのデフォルト情報が提供されていますが、その値を、環境の計画を立てたときに定義した値に一致するように変更します。

注: データベース設計文書をインポートしてある場合は、その文書に存在するデータ・ソース構成が「データベース」ページの情報に反映されます。

ファースト・パス・デプロイメント環境構成用にこのステップが表示されるかどうかは、条件に依存します。複数のデータベースが定義されている場合は、ファースト・パス・デプロイメント環境構成用にこのステップが表示されます。

DB2 for z/OS または Oracle データベース・プロバイダーを使用している場合には、このステップが常に表示されます。

注: このページに表示されるデフォルト・スキーマ名は、お客様のサイトの命名規則と矛盾したり、既存のスキーマと矛盾したりする場合があります。そのような場合は、スキーマ名の変更が必要になります。名前の競合を避けるため、指定する値には注意してください。

Oracle データベースの考慮事項:

- ユーザー名とスキーマ名が正確に一致していることを確認します。ユーザー名には、環境を生成する前にデータベース内に存在していたユーザー名を指定する必要があります。

SQL Server に関する考慮事項:

- 構成を行う前に、ユーザー名とスキーマが存在していることを確認します。スキーマの値は、選択されたユーザーのデフォルト・スキーマでなければなりません。
- ユーザーが Windows の資格情報を使用してデータベースに接続することを指定するには、データ・ソースを個別に選択し、「編集」をクリックし、「Windows 認証を適用」を選択します。

実稼働環境の場合は、「ユーザー名」と「スキーマ名 (Schema name)」に同じ値を設定し、「テーブルの作成」を選択解除する必要があります。実稼働環境の場合は、必要なスキーマを手動で作成し、生成された SQL ファイルを使用してテーブルを作成します。

注: Business Space では、「テーブルの作成」を選択できません (このオプションは選択不可になっています)。Business Space の SQL ファイルは手動で実行する必要があります。Business Space 用の SQL の手動実行については、『Business Space のデータベース表の構成』を参照してください。

すべてのキー・パラメーターを編集することができます。キー・パラメーターには、データベース名、テーブルを作成するかどうか、データ・ソース・ランタイム・ユーザー名、デプロイメント環境のパスワードなどがあります。

特定のコンポーネントに使用するデータベースを選択できます。

DB2 for z/OS: DB2 for z/OS データベース・プロバイダーを使用している場合、「テーブルの作成」オプションは使用できません。

「デプロイメント環境構成」ウィザードで実行できないステップは、手動で実行する必要があります。これらのステップは「据え置かれた構成」ページにリストされます。

11. 「Process Server」ページで、Process Server 構成の値を次のように設定します。

• 環境名

Process Server の環境名を入力します。

環境名は、このサーバーまたはクラスターを Process Center ユーザーが識別するための名前です。

• 環境タイプ

プルダウン・リストから、構成する Process Server の環境タイプを選択します。

環境タイプは、Process Server の使用方法を示します。例えば、Process Server を使用するキャパシティー（実動、ステージング、またはテスト）です。負荷テストはテスト・サーバーで実行され、ステージング環境タイプは、変更を実動環境に反映する前にそれらの変更をホストするための一時的なロケーションとして使用されます。構成する Process Server が、コンテンツおよび新機能のレビューを目的としてアクセスおよび使用される場合は、「環境タイプ」に「ステージング」を指定することが考えられます。

選択可能な環境のタイプには、以下の 3 つがあります。

実稼働 実動キャパシティーでサーバーを実行する場合は、「実動」を選択します。

ステージ

実動前サーバーとして使用されるステージング・プラットフォームとしてサーバーを実行する場合は、「ステージング」を選択します。

テスト 構成するサーバーをテスト環境として使用する場合は、「テスト」を選択します。

• サーバーをオフラインで使用する

構成しているサーバーがオフライン・サーバーであるかどうかを示します。

オフライン・サーバーは、Process Center に接続されていない Process Server です。

オフライン・サーバーは、Process App の Snapshot をデプロイするときにも使用できます。ただし、Process App をオフラインの Process Server にデプロイする方法は、Process App をオンラインの Process Server にデプロイする方法とは異なります。

• プロトコル

Process Center への接続プロトコルとして「<http://>」または「<https://>」を選択します。

• 負荷分散環境でのホスト名または仮想ホスト

この Process Server が Process Center と通信するために必要なホスト名または仮想ホストを入力します。完全修飾ホスト名を使用します。Process Server と Process Center サービスとの間にロード・バランサーまたはプロキシ・サーバーが存在する環境の場合、ここでの設定内容が Process Center にアクセスするための URL と一致していることを確認してください。

• ポート

Process Center のポート番号を入力します。Process Server と Process Center との間にロード・バランサーまたはプロキシ・サーバーが存在する環境の場合、ここでの設定内容が Process Center にアクセスするための URL と一致していることを確認してください。

• ユーザー名

Process Center 上に存在する有効なユーザー名を入力します。Process Server は、Process Center にこのユーザーとして接続します。

• パスワード

上記のユーザーのパスワードを入力します。

12. 「セキュリティ」ページで、セキュア・コンポーネントへのアクセス時に WebSphere が使用する認証別名を構成します。

認証別名のユーザー名とパスワードは、このページで変更することができます。これらの別名を使用してセキュア・コンポーネントにアクセスしますが、データ・ソースにアクセスすることはできません。

13. 「Business Process Choreographer」ページで Business Process Choreographer 構成のパラメーターを設定してから「次へ」をクリックして、「システム Web アプリケーション (System web applications)」ページを表示します。このページでは、以下の値を指定します。
 - セキュリティー・ロール
 - 認証別名
14. オプション: 「システム Web アプリケーション (System web applications)」ページで、デプロイメント環境のコンポーネント・ベース Web アプリケーションのコンテキスト・ルートを設定するか、システム提供のコンテキスト・ルートのデフォルト値を受け入れます。「次へ」をクリックして、「要約」ページを表示します。

「システム Web アプリケーション」ページは、デプロイメント環境でリモート・メッセージング、サポート、および Web アプリケーション・パターンを使用している場合に表示されます。

テーブルには以下のコントロール情報が含まれています。

Web アプリケーション

Web アプリケーションの名前。

作成するデプロイメント環境の一部であるコンポーネントの中には、Web アプリケーションが含まれているものがあります。「Web アプリケーション」列には、以下のコンポーネントが表示されます。

- Business Space
- Business Process Choreographer Explorer
- Business Rules Manager

コンテキスト・ルート

コンポーネントのコンテキスト・ルートの現行値。

デフォルトでは、Web アプリケーションのデフォルトのコンテキスト・ルートが適用されます。

「コンテキスト・ルート」フィールドの値を上書きすることにより、コンテキスト・ルートを変更できます。

注: Business Space のコンテキスト・ルートは読み取り専用のため、編集できません。

15. 「要約」ページ上の情報が正しいことを確認してから、以下のサブステップを実行します。
 - a. オプション: デプロイメント環境構成を保存しない場合は、「キャンセル」をクリックします。
 - b. オプション: 構成を生成せずに終了する場合は、「終了」をクリックします。

パネルに戻る (完了せずに終了した場合) には、管理コンソールで、「デプロイメント環境」 > 「name of deployment environment」 > 「環境の生成」を選択します。

- c. デプロイメント環境構成を保存するには、「終了」をクリックし、「メッセージ」ウィンドウで「保存」をクリックします。

「保存」をクリックすると、デプロイメント環境がマスター構成に保存されます。デプロイメント環境の生成時にエラーが発生した場合は、その構成の設定がマスター構成に保存されます。

- d. 据え置かれた構成ステップがないかどうかを確認します。

「デプロイメント環境」 > デプロイメント環境の名前 > 「据え置かれた構成」を選択します。

据え置かれた構成ステップが存在する場合は、デプロイメント環境を始動する前に、そのステップを処理する必要があります。

- e. デプロイメント環境構成が正しいことを確認し、据え置かれているステップが存在する場合はすべて処理してから、「終了して環境を生成」をクリックし、デプロイメント環境の構成を保存して完了します。

16. **bootstrapProcessServerData.sh** コマンドを実行します。938 ページの『データベースへのシステム情報のロード』を参照してください。

注: このコマンドは、Process Center または Process Server クラスター・メンバーを始動する前に実行する必要があります。

構成が完了すると、構成ファイルを調べて、変更を表示できます。

変更をマスター構成に保管または廃棄します。

重要: 固有のポートを持つ追加のサーバーを使用する場合、WebSphere Application Server ではそのサーバーの仮想ホストが自動的に構成されません。具体的には、WebSphere Application Server は、ホスト別名ポートを自動的に仮想ホストに追加しません。ただし、管理コンソールを使用して、新しいサーバーが使用するポートごとに新しいホスト別名を追加することは可能です。詳しくは、仮想ホストの構成に関する WebSphere Application Server の資料を参照してください。

関連概念:

41 ページの『概要: デプロイメント環境のトポロジーおよびパターン』

Network Deployment 環境にはさまざまなトポロジーを持たせることができます。またこの環境は、いくつかの標準トポロジー・パターンから作成することができます。

58 ページの『トポロジー・パターンおよびサポート対象の製品フィーチャー』

トポロジーとは、デプロイメント環境の物理的レイアウトのことです。製品フィーチャーとデフォルトの使用法は、選択するトポロジー・パターンによって異なります。

仮想ホスト

関連タスク:

981 ページの『データベース構成の完了』

Network Deployment 環境内のクラスターを開始する前に、データベース表を作成してデータベース構成を完了する必要があります。

938 ページの『データベースへのシステム情報のロード』

IBM Business Process Manager サーバーの始動または使用を試みる前に、**bootstrapProcessServerData** コマンドを実行する必要があります。

仮想ホストの構成

パターンを使用した Process Center デプロイメント環境の作成:

Network Deployment 構成の基礎とするパターンを決定したら、「デプロイメント環境構成」ウィザードを使用して、そのパターンに基づいた IBM® Process Center デプロイメント環境を作成します。

デプロイメント・マネージャーの管理コンソールで、「サーバー」>「デプロイメント環境」にナビゲートします。

このタスクに必要なセキュリティー・ロール: セキュリティーおよびロール・ベースの許可が使用可能になっている場合、このタスクを実行するには、管理者またはコンフィギュレーターとして管理コンソールにログインする必要があります。

デプロイメント環境ウィザードを使用してデプロイメント環境を作成する手順には、パターンおよびフィーチャーを選択するステップが含まれています。したがって、『計画』のセクションに記載されているパターンおよびフィーチャーに関する情報を読んで理解していることを前提としています。

製品がインストール済みであり、デプロイメント・マネージャー・プロファイルおよび関連ノードが作成済みであることを前提とします。

さらに、「デプロイメント環境構成」ウィザードのステップの 1 つに、データベース設計文書のインポートが含まれています。データベース設計文書は、選択されたデプロイメント環境フィーチャーに合わせてデータベース構成を定義します。IBM Business Process Manager には、ユーザーの入力に基づいてデータベース設計文書を作成する応答型のデータベース設計ツール (DDT) が含まれています。データベース設計文書を DDT で使用することによりデータベース・スクリプトを作成できます。また、データベース設計文書を IBM Business Process Manager デプロイメント環境ウィザードで使用することによりデプロイメント環境で使用されるデータベースを構成できます。DDT およびデータベース構成全般については、『データベースの構成』を参照してください。

このタスクでは、特定のパターンに基づいたデプロイメント環境の作成手順を説明し、デプロイメント環境構成ウィザードを使用します。

注: ウィザードで作業中に操作を間違えた場合は、「戻る」をクリックして前に戻ることができます。

1. 管理コンソールで「サーバー」 > 「デプロイメント環境」をクリックして、「デプロイメント環境」ページを表示します。
2. 「デプロイメント環境」ページで「新規」をクリックして、「デプロイメント環境構成」ウィザードを起動します。
 - a. 「パターンに基づくデプロイメント環境の作成」オプションが選択されています。「パターンに基づくデプロイメント環境の作成」は、システムのデフォルトです。このトピックで説明するのは、このオプションです。

デプロイメント環境パターンにより、よく使用するビジネス・インテグレーション・トポロジを記録します。パターンは、作成するデプロイメント環境のテンプレートになります。

注: パターンは、構成済みのデプロイメント・マネージャーによってサポートされる製品と直接的な関係を持ちます。IBM Business Process Manager は特定のパターン・セットをサポートします。その中の「リモート・メッセージングおよびリモート・サポート」パターンがシステム・デフォルトです。デプロイメント・マネージャーが IBM Business Process Manager 以外の製品もサポートしている場合は、追加のパターンを適用できます。各製品に適用されるパターンについては、製品固有の資料を参照してください。

IBM Business Process Manager に組み込まれてサポートされるパターンについては、『概要: デプロイメント環境のトポロジおよびパターン』を参照してください。

- b. 「デプロイメント環境名」フィールドに、デプロイメント環境の固有の名前を入力します。
- c. オプション: ウィザードですべての構成ステップを表示するには、「詳細: すべてのステップを表示します」を選択します。

「ファースト・パス: 必要なステップのみを表示します」を選択した場合は、ウィザードにはデフォルト値が割り当てられていないページだけが表示されます。「ファースト・パス: 必要なステップのみを表示します」は、デプロイメント環境構成に対してシステム提供のデフォルト値を受け入れる場合にのみ選択してください。

このトピックでは、「詳細: すべてのステップを表示します」を選択したものと想定します。

- d. 「次へ」をクリックして、「デプロイメント環境フィーチャー」ページを表示します。
3. 「デプロイメント環境フィーチャー (Deployment Environment Features)」ページで、デプロイメント環境のフィーチャーを選択し、「次へ」をクリックして互換性のあるフィーチャーのリストを表示するか、デプロイメント環境パターンのリストを表示します。フィーチャーはデプロイメント環境のランタイム処理機能を表します。

「デプロイメント環境フィーチャー」ページの使用可能なフィーチャーのリストは、デプロイメント・マネージャー・プロファイルに基づきます。デプロイメント・マネージャー・プロファイルを拡張して IBM Business Process Manager と一緒に別の製品を組み込んだ場合 (IBM Business Monitor など)、「デプロイメント環境フィーチャー」ページにはこれらのフィーチャーもリストされます。

IBM Business Process Manager 用のプロファイルをインストールおよび構成した場合は、「デプロイメント環境フィーチャー (Deployment Environment Features)」ページに以下のものが含まれます。

- IBM Business Process Manager Standard の場合:
 - **BPMSPS** (IBM BPM Standard の場合)。Process Server デプロイメント・マネージャー・プロファイル。ビジネス・プロセス、ヒューマン・タスク、およびビジネス・ルールをサポートする Process Server デプロイメント環境を提供します。
 - **BPMSPC** (IBM BPM Standard の場合)。Process Center デプロイメント・マネージャー・プロファイル。ビジネス・プロセス、ヒューマン・タスク、およびビジネス・ルールをサポートする Process Center デプロイメント環境を提供します。
 - IBM Business Process Manager Advanced の場合:
 - **WESB** は WebSphere Enterprise Service Bus を指し、メディエーションをサポートするデプロイメント環境が提供されます。
 - **BPMAPS** (IBM BPM Advanced の場合)。Process Server デプロイメント・マネージャー・プロファイル。メディエーション、ビジネス・プロセス、ヒューマン・タスク、Business Space 機能、およびビジネス・ルールをサポートする Process Server デプロイメント環境を提供します。
 - **BPMAPC** (IBM BPM Advanced の場合)。Process Center デプロイメント・マネージャー・プロファイル。メディエーション、ビジネス・プロセス、ヒューマン・タスク、Business Space 機能、およびビジネス・ルールをサポートする Process Center デプロイメント環境を提供します。
4. 「互換性のあるデプロイメント環境フィーチャーの選択」ページで必要に応じて追加のフィーチャーを選択し、「次へ」をクリックして、フィーチャーの選択に関連したパターンのリストを表示します。

注: 「互換性のあるデプロイメント環境フィーチャーの選択」ページは、デプロイメント・マネージャーが他のビジネス・プロセス・マネジメント (BPM) フィーチャー (IBM Business Monitor など) で拡張されている場合にのみ表示されます。

通常のフィーチャーと互換フィーチャーとの関係を理解するには、『計画』セクションのデプロイメント環境に関する情報を参照してください。

5. 「デプロイメント環境パターンの選択」ページで、選択したデプロイメント環境のパターンを選択し、「次へ」をクリックして「ノードの選択」ページを表示します。

「デプロイメント環境パターン」ページに表示されるパターンのリストは動的です。このリストは、以下の環境条件および構成決定によってアクティブ化され、それらの条件および決定に依存します。

- ソフトウェアをインストールしたプラットフォーム
 - 「デプロイメント環境フィーチャーの選択 (Select the deployment environment feature)」ページおよび「互換性があるデプロイメント環境フィーチャーの選択 (Select compatible deployment environment features)」ページでの選択内容。
6. オプション: 「ノードの選択」ページでこのデプロイメント環境に含めるノードを選択し、「次へ」をクリックして「クラスター」ページを表示します。

ステップ 3 (962 ページ) で選択した環境に必要な機能を持つノードを選択します。例えば、デプロイメント環境タイプとして **BPMSPC** を選択した場合、選択したノードではその環境タイプの機能を実行できる必要があります。

デプロイメント環境用に少なくとも 1 つのノードを選択します。高可用性環境とフェイルオーバー環境の場合は、2 つ以上のノードを選択します。スケーラビリティを実現するには、すべてのノードを選択します。

ノードを組み込むには、ノード名の隣にあるチェック・ボックスを選択します。「ノード・マッピング」を使用すると、選択したノードが別のノード名にマップされます。

7. オプション: 「クラスター」ページで、デプロイメント環境のクラスター・タイプ (アプリケーション・デプロイメント・ターゲット、メッセージング・インフラストラクチャー、サポート・インフラストラクチャー) ごとに各ノードに必要な数のクラスター・メンバーを割り当てます。

デフォルトでは、機能ごとに各ノード上で 1 つのクラスター・メンバーが割り当てられます。この数を変更するには、各列の数値を置換します。それぞれのクラスター・タイプで提供される各種のクラスター・ロールおよび機能について十分な知識がない場合は、『トポロジー・タイプおよびデプロイメント環境パターン』を参照してください。

ノードの値が 0 (ゼロ) の場合、選択したフィーチャーに関して、その選択した機能にノードが寄与しないことを意味します。

クラスター・メンバーを割り当てた後、「次へ」をクリックすると、デプロイメント環境のクラスター・タイプごとに「クラスター命名」ページを表示することができます。表示される「クラスター命名」サブステップは、選択したデプロイメント環境パターンによって異なります。

クラスター名およびクラスター・メンバー名のデフォルト値は、システムによって生成されます。

クラスター名もクラスター・メンバー名をカスタマイズしない場合は、以下の手順で、ウィザード・ナビゲーション・ペインを使用して、「REST サービス」ページに直接移動できます。

- a. オプション: クラスター名とクラスター・メンバー名をカスタマイズします。

「クラスター命名」ページを使用して、クラスター・タイプのクラスター名またはクラスター・メンバー名をカスタマイズします。選択したパターンのクラスター・タイプごとに、1 つのサブステップ・ページがあります。例えば、「リモート・メッセージングおよびリモート・サポート」パターンを選択した場合は、3 つのサブステップがあります。すなわち、そのパターンのクラスター・タイプ (アプリケーション・デプロイメント・ターゲット、メッセージング・インフラストラクチャー、およびサポート・インフラストラクチャー) ごとに 1 つのサブステップがあります。

それぞれのサブステップ・ページには、以下の情報が表示されます。

フィールド	説明	値
クラスター	クラスターの機能性役割を指定する読み取り専用フィールド。	<p>値は、次のようにクラスター・タイプに応じて異なります。</p> <ul style="list-style-type: none"> • アプリケーション・デプロイメント・ターゲット • サポート・インフラストラクチャー • メッセージング・インフラストラクチャー • Web アプリケーション・インフラストラクチャー <p>各クラスター・タイプで提供される機能ロールについては、『トポロジー・タイプおよびデプロイメント環境パターン』を参照してください。</p>
クラスター名	システムによって生成されたクラスター名のデフォルト値。	<p>デフォルト値は、Deployment Environment Name.Cluster type name の命名規則に基づきます。この Cluster type name は次のいずれかの値です。</p> <ul style="list-style-type: none"> • AppTarget <p>アプリケーション・デプロイメントのターゲットのロールを実行するクラスターの場合</p> • メッセージング <p>メッセージング・インフラストラクチャーのロールを実行するクラスターの場合</p> • サポート <p>サポート・インフラストラクチャーのロールを実行するクラスターの場合</p> • Web <p>サポート Web アプリケーションのロールを実行するクラスターの場合</p> <p>注: このクラスター・タイプ名は、WebSphere Business Monitor が主なフィーチャーまたは製品である BPM 構成に適用されます。</p>

フィールド	説明	値
クラスター・メンバー名	システムによって生成されたクラスター・メンバー名のデフォルト値。クラスターの一部であるサーバーは、クラスター・メンバーと呼ばれます。	システムによって生成されたデフォルト値を受け入れるか、または選択した名前を指定します。クラスター・メンバー名のデフォルト値は、 クラスター名.ノード名.ノード番号シーケンス という命名規則に従っています。表に表示されるクラスター・メンバー名の数は、「クラスター」ページのクラスター・タイプ列およびノード行に入力したクラスター・メンバーの数と一致します。

8. 「システム REST サービス・エンドポイント」ページで、Representational State Transfer (REST) アプリケーション・プログラミング・インターフェース (API) のサービス・エンドポイントを構成します。

ウィジェットを Business Space で使用できるようにしたい場合は、それらのウィジェットについて REST サービス・エンドポイントを構成する必要があります。

- 「**プロトコル**」リストから「**https://**」または「**http://**」のいずれかを選択することにより、すべての REST サービスに対して完全な URL パスを構成します。
- 「**負荷分散環境でのホスト名または仮想ホスト**」フィールドに名前を入力します。
- 「**ポート**」フィールドに、クライアントがサーバーまたはクラスターと通信する必要があるポートを入力します。
- REST サービスの表で、REST サービス・エンドポイントの説明を変更する場合は、「説明」フィールドの項目を上書きします。その他のフィールドは読み取り専用です。
- 「**次へ**」をクリックして、「データベース構成のインポート (Import the database configuration)」ページに移動します。

9. オプション: 「データベース構成のインポート」ページで、「**参照**」をクリックしてデータベース設計文書に進むか、またはデータベース設計文書へのパスを入力した後、「**次へ**」をクリックして、「データ・ソース」ページに進みます。設計文書をインポートすると、設計文書からの情報が、ウィザードの「データベース」ページに反映されます。設計文書は、データベース設計ツール (DDT) を使用して作成したデータベース設計に基づく設計文書にすることも、選択したパターンとフィーチャーに基づいて提供された設計文書にすることもできます。

注: プロファイルの作成時に作成された commonDB は、デプロイメント環境用にインポートされたデータベース設計文書によって変更されることはありません。

10. 必須: 「データベース」ページで、デプロイメント環境のデータ・ソースのデータベース・パラメーターを構成し、「**次へ**」をクリックして「**セキュリティー**」ページに移動します。

注: このパネルで指定されるデータベースは既に存在している必要があります。デプロイメント環境構成で新規データベースが作成されることはありません。

DB2 および SQL Server データベースの場合、IBM Process Server と IBM Performance Data Warehouse では、他のコンポーネントと同じデータベースを使用しないようにしてください。ただし、Oracle データベースを使用する場合には、IBM Process Server と IBM Performance Data Warehouse で同じデータベース・インスタンスを使用できます。しかし、別々のユーザーを使用してください。

このページでは、このデプロイメント環境に組み込まれるコンポーネントのデータベース情報を定義します。該当するところには、ウィザードによってパラメーターのデフォルト情報が提供されていますが、その値を、環境の計画を立てたときに定義した値に一致するように変更します。

注: データベース設計文書をインポートした場合、「データベース」ページの情報は、インポートしたデータベース設計文書に存在するとおりのデータ・ソース構成を反映しています。データベース設計文書をインポートした後、データ・ソース構成を変更すると、その変更が、データベース設計ツールによって生成された DDL および元の値と互換性を持たなくなる可能性があります。

ファースト・パス・デプロイメント環境構成でこのステップが表示されるかどうかは、条件によります。複数のデータベースが定義されている場合、ファースト・パス・デプロイメント環境構成でこのステップが表示されます。

DB2 for z/OS または Oracle データベース・プロバイダーを使用している場合には、このステップが常に表示されます。

注: このページに表示されるデフォルト・スキーマ名は、お客様のサイトの命名規則と矛盾したり、既存のスキーマと矛盾したりする場合があります。そのような場合は、スキーマ名の変更が必要になります。名前の競合を避けるため、指定する値には注意してください。

Oracle データベースの考慮事項:

- ユーザー名/スキーマ名がまったく同じであることを確認します。ユーザー名には、環境を生成する前にデータベース内に存在していたユーザー名を指定する必要があります。

SQL Server に関する考慮事項:

- 構成を行う前に、ユーザー名/スキーマが存在していることを確認します。スキーマの値は、選択されたユーザーのデフォルト・スキーマでなければなりません。
- ユーザーが Windows の資格情報を使用してデータベースに接続することを指定するには、データ・ソースを個別に選択し、「編集」をクリックし、「Windows 認証を適用」を選択します。

実稼働環境の場合は、「ユーザー名」と「スキーマ名 (Schema name)」に同じ値を設定し、「テーブルの作成」を選択解除する必要があります。実稼働環境の場合は、必要なスキーマを手動で作成し、生成された SQL ファイルを使用してテーブルを作成します。

注: Business Space では、「テーブルの作成」を選択できません (このオプションは選択不可になっています)。Business Space 用の SQL ファイルは、手動で実行する必要があります。Business Space 用の SQL を手動で実行する場合の情報については、「Business Space のデータベース表の構成」を参照してください。

すべてのキー・パラメーターは編集可能です。キー・パラメーターには、データベース名、表を作成するかどうか、データ・ソース・ランタイム・ユーザー名、デプロイメント環境のパスワードがありません。

特定のコンポーネントに使用するデータベースを選択できます。

DB2 for z/OS: DB2 for z/OS データベース・プロバイダーを使用している場合、「テーブルの作成」オプションは使用できません。

「デプロイメント環境構成」ウィザードで実行できないステップは、手動で実行する必要があります。これらのステップは「据え置かれた構成」ページにリストされます。

11. 「Process Center」ページで、Process Center 構成の値を次のように設定します。

- **環境名**

Process Server の環境名を入力します。

環境名は、このサーバーまたはクラスターを Process Center ユーザーが識別するための名前です。

- **環境タイプ**

プルダウン・リストから、構成する Process Center の環境タイプを選択します。

環境タイプは、Process Center の使用方法を示します。例えば、Process Server を使用するキャパシティー (実動、ステージング、またはテスト) です。負荷テストはテスト・サーバーで実行され、ステージング環境タイプは、変更を実動環境に反映する前にそれらの変更をホストするための一時的なロケーションとして使用されます。構成する Process Center が、コンテンツおよび新機能のレビューを目的としてアクセスおよび使用される場合は、「環境タイプ」として「ステージング」を指定することが考えられます。

選択可能な環境のタイプには、以下の 3 つがあります。

実稼働 実動キャパシティーでサーバーを実行する場合は、「実動」を選択します。

ステージ

実動前サーバーとして使用されるステージング・プラットフォームとしてサーバーを実行する場合は、「ステージング」を選択します。

テスト 構成するサーバーをテスト環境として使用する場合は、「テスト」を選択します。

- **サーバーをオフラインで使用する**

構成しているサーバーがオフライン・サーバーであるかどうかを示します。

オフライン・サーバーは、Process Center に接続されていない Process Server です。

オフライン・サーバーは、Process App の Snapshot をデプロイするときにも使用できます。ただし、Process App をオフラインの Process Server にデプロイする方法は、Process App をオンラインの Process Server にデプロイする方法とは異なります。

- **プロトコル**

Process Center への接続プロトコルとして「**http://**」または「**https://**」を選択します。

- **負荷分散環境でのホスト名または仮想ホスト**

この Process Server が Process Center と通信するために必要なホスト名または仮想ホストを入力します。完全修飾ホスト名を使用します。Process Server と Process Center サービスとの間にロード・バランサーまたはプロキシ・サーバーが存在する環境の場合、ここでの設定内容が Process Center にアクセスするための URL と一致していることを確認してください。

- **ポート**

Process Center のポート番号を入力します。Process Server と Process Center との間にロード・バランサーまたはプロキシ・サーバーが存在する環境の場合、ここでの設定内容が Process Center にアクセスするための URL と一致していることを確認してください。

12. 「セキュリティ」ページで、セキュア・コンポーネントへのアクセス時に WebSphere が使用する認証別名を構成します。

認証別名のユーザー名とパスワードは、このページで変更することができます。これらの別名を使用してセキュア・コンポーネントにアクセスしますが、データ・ソースにアクセスすることはできません。

13. 「Business Process Choreographer」ページで、Business Process Choreographer 構成のパラメーターを設定し、「次へ」をクリックして「システム Web アプリケーション (System web applications)」ページを表示します。このページでは、以下の値を指定します。

- セキュリティー・ロール
- 認証別名

14. オプション: 「システム Web アプリケーション (System web applications)」ページで、デプロイメント環境のコンポーネント・ベース Web アプリケーションのコンテキスト・ルートを設定するか、システム提供のコンテキスト・ルートのデフォルト値を受け入れます。「次へ」をクリックして、「要約」ページを表示します。

「システム Web アプリケーション」ページは、デプロイメント環境でリモート・メッセージング、サポート、および Web アプリケーション・パターンを使用している場合に表示されます。

テーブルには以下のコントロール情報が含まれています。

Web アプリケーション

Web アプリケーションの名前。

作成するデプロイメント環境の一部であるコンポーネントの中には、Web アプリケーションが含まれているものがあります。「Web アプリケーション」列には、以下のコンポーネントが表示されます。

- Business Space
- Business Process Choreographer Explorer
- Business Rules Manager

コンテキスト・ルート

コンポーネントのコンテキスト・ルートの現行値。

デフォルトでは、Web アプリケーションのデフォルトのコンテキスト・ルートが適用されます。

「コンテキスト・ルート」フィールドの値を上書きすることにより、コンテキスト・ルートを変更できます。

注: Business Space のコンテキスト・ルートは読み取り専用のため、編集できません。

15. 「要約」ページ上の情報が正しいことを確認してから、以下のサブステップを実行します。
 - a. オプション: デプロイメント環境構成を保存しない場合は、「キャンセル」をクリックします。
 - b. オプション: 構成を生成せずに終了する場合は、「終了」をクリックします。
 - c. デプロイメント環境構成を保存するには、「終了」をクリックし、「メッセージ」ウィンドウで「保存」をクリックします。

「保存」をクリックすると、デプロイメント環境がマスター構成に保存されます。デプロイメント環境の生成中にエラーが起きた場合でも、構成設定はマスター構成に保存されます。

- d. 据え置かれた構成ステップがないかどうかを確認します。

「デプロイメント環境」 > デプロイメント環境の名前 > 「据え置かれた構成」を選択します。

据え置かれた構成ステップが存在する場合は、デプロイメント環境を始動する前に、そのステップを処理する必要があります。

- e. デプロイメント環境構成が正しいことを確認し、据え置かれているステップが存在する場合はすべて処理してから、「終了して環境を生成」をクリックし、デプロイメント環境の構成を保存して完了します。

16. **bootstrapProcessServerData.sh** コマンドを実行します。938 ページの『データベースへのシステム情報のロード』を参照してください。

構成が完了すると、構成ファイルを調べて、変更を表示できます。

変更をマスター構成に保管または廃棄します。

重要: 固有のポートを持つ追加のサーバーを使用する場合、WebSphere Application Server ではそのサーバーの仮想ホストが自動的に構成されません。具体的には、WebSphere Application Server は、ホスト別名ポートを自動的に仮想ホストに追加しません。ただし、管理コンソールを使用して、新しいサーバーが使用するポートごとに新しいホスト別名を追加することは可能です。詳しくは、仮想ホストの構成に関する WebSphere Application Server の資料を参照してください。

関連概念:

41 ページの『概要: デプロイメント環境のトポロジーおよびパターン』

Network Deployment 環境にはさまざまなトポロジーを持たせることができます。またこの環境は、いくつかの標準トポロジー・パターンから作成することができます。

58 ページの『トポロジー・パターンおよびサポート対象の製品フィーチャー』

トポロジーとは、デプロイメント環境の物理的レイアウトのことです。製品フィーチャーとデフォルトの使用法は、選択するトポロジー・パターンによって異なります。

仮想ホスト

関連タスク:

981 ページの『データベース構成の完了』

Network Deployment 環境内のクラスターを開始する前に、データベース表を作成してデータベース構成を完了する必要があります。

938 ページの『データベースへのシステム情報のロード』

IBM Business Process Manager サーバーの始動または使用を試みる前に、**bootstrapProcessServerData** コマンドを実行する必要があります。

仮想ホストの構成

管理コンソールを使用した Network Deployment 環境の構成:

カスタム・インストールを実行し、デプロイメント・マネージャー・プロファイルおよびカスタム (管理対象ノード) プロファイルを作成した後で、管理コンソールを使用して Network Deployment 環境を作成できます。

このセクションでは、管理コンソールを使用して Network Deployment 構成を作成する方法について説明します。

このセクションでは、以下の情報が真であることを想定しています。

- カスタム・インストールを作成するためにインストーラーを実行済みです。
- デプロイメント・マネージャー・プロファイルおよびカスタム (管理対象ノード) プロファイルを作成済みです。
- ユーザーは、Network Deployment のトポロジーと構成および管理コンソールについて精通しています。

重要: デプロイメント環境ウィザードを使用して Network Deployment 環境を作成することを検討してください。

また、管理コンソールから実行できるいずれの操作も、wsadmin を使用して実行することができます。また、コマンド・アシスタンスは、管理コンソール・アクションのサブセットに対して使用することができます。使用可能である場合には、コマンド・アシスタンスは、実行した最後のコンソール・アクションに関する wsadmin スクリプト・コマンドを表示します。コマンド・アシスタンスに関する情報については、『コマンド・アシスタンスによる管理コンソール・アクション』を参照してください。

サーバーとクラスターの作成および構成:

管理コンソールを使用すると、IBM Business Process Manager のサーバーとクラスターを作成および構成できます。

このセクションの情報では、管理コンソールを使用して、IBM Business Process Manager 用のサーバーとクラスターを手動で作成する方法について説明します。

クラスターの作成:

以下の手順では、1 つのクラスター・メンバーを持つクラスターを作成する方法について説明します。管理コンソールを使用してクラスターを作成することの利点は、作業中に変更を元に戻せることと、グラフィカル・ユーザー・インターフェースを使用できることです。

管理コンソールを使用してクラスターを作成する前に、デプロイメント・マネージャーを始動してください。

以下の手順では、管理コンソールを使用して、1 つのクラスター・メンバーを持つクラスターを作成する方法について説明します。なお、このトピックで説明する、管理コンソールから実行されるタスクは、管理スクリプトを使用して実行することもできます。 **createCluster** パラメーターについては、WebSphere Application Server インフォメーション・センターで、『AdminTask オブジェクトの ClusterConfigCommands コマンド・グループ』を参照してください。

wsadmin ツールを使用したクラスター・メンバーの作成については、『スクリプトによるクラスター・メンバーの作成』を参照してください。

クラスターを作成すると、後でそのクラスターにサーバーを容易に追加できるため、現時点では単一サーバーで高可用性要件とスケーラビリティ要件を十分に満たせる場合でも、クラスターを作成することを検討してください。

1. 管理コンソールにログインし、「サーバー」 > 「クラスター」 > 「**WebSphere Application Server クラスター (WebSphere application server clusters)**」にナビゲートします。
2. 「新規」をクリックして、「新規クラスターの作成 (Create new cluster)」ページを表示します。
3. 「新規クラスターの作成」ページで、基本的なクラスター情報を入力します。
 - a. 「**クラスター名**」フィールドにクラスターの名前を入力します。
 - b. ホスト・スコープのルーティング最適化を有効にしたい場合は、「**ローカルを優先**」を選択します。このオプションは、デフォルトでは有効になっています。このオプションが有効の場合、EJB 要求は可能であればクライアント・ホストにルーティングされます。このオプションを使用すると、クライアント要求がローカルのエンタープライズ Bean に送信されるため、パフォーマンスが向上します。

注: preferLocal 最適化を有効にする場合は、構成に影響を与えるために、デプロイメント・マネージャーを稼働させておく必要があります。デプロイメント・マネージャーがシャットダウンしていると、preferLocal 最適化が実行されず、クラスターのすべてのメンバーに要求が分散される可能性があります。

- c. このクラスターに対してメモリー間の複製ドメインを作成したい場合は、「**HTTP セッションのメモリー間の複製の構成**」を選択します。

複製ドメインにはクラスターと同じ名前が付けられ、複製ドメインのデフォルト設定で構成されます。デフォルト設定が有効な場合は、データの断片ごとにレプリカが 1 つ作成され、暗号化は無効になります。また、メモリー間の複製用に、クラスター・メンバーごとの Web コンテナも構成されます。

複製ドメインのこれらの設定を変更するには、「**環境**」 > 「**複製ドメイン**」 >

「**replication_domain_name**」をクリックします。Web コンテナの設定を変更するには、「**サーバー**」 > 「**クラスター**」 > 「**WebSphere Application Server クラスター**」 > 「**cluster_name**」 > 「**クラスター・メンバー**」 > 「**cluster_member_name**」をクリックします。次に、管理コンソールの「**コンテナ設定**」セクションで、「**Web コンテナ設定**」 > 「**Web コンテナ**」 > 「**セッション管理**」 > 「**分散環境設定**」をクリックします。1 つのクラスター・メンバーでこれらの設定を変更する場合、このクラスターの他のメンバーでも設定変更が必要になる場合があります。

4. 「**次へ**」をクリックして、「**最初のクラスター・メンバーの作成 (Create first cluster member)**」ページに進みます。
5. 「**最初のクラスター・メンバーの作成**」ページで、そのクラスター・メンバーに関する情報を入力します。
 - a. 「**メンバー名**」フィールドにメンバー名を入力します。
 - a. 「**ノードの選択**」リストから、サーバーを定義するノードをクリックします。
 - b. 「**ウェイト**」フィールドに、このクラスター・メンバーのウェイト値を入力します。

ウェイト値は、アプリケーション・サーバーに送信される処理の量を制御します。このサーバーのウェイト値が、クラスター内の他のサーバーに割り当てられたウェイト値よりも大きい場合は、このサーバーが受ける作業負荷の割合が大きくなります。ウェイト値は、特定のアプリケーション・サーバーに割り当てられた作業負荷の相対比率を表します。値の範囲は 0 から 20 です。

- **z/OS システム**では、作業負荷のタイプに応じて、ウェイトで作業負荷のバランスを取る場合と、z/OS システムによってバランスを取る場合があります。HTTP 要求については、Web サーバー・プラグインと、クラスター化されたアプリケーション・サーバーを処理するコントローラーの間で、HTTP トラフィックを分散させる目的でウェイトが使用されます。HTTP トラフィックを受信する必要のあるアプリケーション・サーバーには、より高いウェイト値を割り当ててください。
 - **Web サービス呼び出し**については、1 つのアプリケーション・サーバー内のサーバントから別のアプリケーション・サーバー内のコントローラーに情報が転送されます。呼び出しを受けるアプリケーション・サーバーのウェイト値は最も高くなります。
 - ウェイトは、Internet Inter-ORB Protocol (IIOP) 要求には影響しません。IIOP 要求は、sysplex ディストリビューターを使用して正しいアプリケーション・サーバーに配布されます。
- c. ソース・サーバーで定義された HTTP トラnsポートごとに固有のポート番号を生成したい場合は、「**固有の HTTP ポートを生成する**」(デフォルト・オプション)を選択します。

このオプションが選択されている場合は、このクラスター・メンバーの HTTP トラnsポートや HTTP トラnsポート・チャンネルが、同じノード上で定義されている他のどのサーバーとも競合し

なくなります。「固有の HTTP ポートを生成する」チェック・ボックスを選択解除すると、すべてのクラスター・メンバーが同じ HTTP ポートを共有するようになります。

6. 「最初のクラスター・メンバーの基礎を選択」セクションで、以下のオプションから選択します。

- アプリケーション・サーバー・テンプレートを使用してメンバーを作成します

これは、標準的なクラスター作成方法です。「**defaultProcessServer**」を選択します。

このオプションを選択して「次へ」をクリックすると、空白のフォームが表示され、これを使用して追加のクラスター・メンバーを定義できます。作成したばかりのサーバーが画面の下部にリストされます。

- a. 「次へ」をクリックします。
- b. 要約画面で詳細を確認し、「次へ」をクリックします。
- c. 構成変更を保存します。

作成したクラスターがリストに表示されます。

- d. ご使用の構成に合わせてポート番号をカスタマイズします。

- 既存のアプリケーション・サーバーをテンプレートとして使用してメンバーを作成します

このオプションはサポートされません。

- 既存のアプリケーション・サーバーを変換してメンバーを作成します

注: このオプションは選択しないでください。WebSphere Application Server では、**resourcesScope** という名前の新しいパラメーターが `createCluster` コマンドと `createClusterMember` コマンドに追加されています。これにより、最初のクラスター・メンバーがクラスターに追加される際のリソースの処理方法を制御することができます。これらのパラメーターについては、技術情報の

『resourcesScope という名前の新しいパラメーターが `createCluster` コマンドと `createClusterMember` コマンドに追加されました (New parameter named resourcesScope was added to the createCluster and createClusterMember commands)』を参照してください。

IBM Business Process Manager の場合は、**resourcesScope** パラメーターの値を **cluster** にして使用する必要があります。現在、**resourcesScope** パラメーターは管理コンソールには表示されません。IBM Business Process Manager では、管理コンソールを使用して、既存の単一サーバーを使用するクラスターを最初のクラスター・メンバーとして作成することはできません。このオプションを選択すると、管理コンソールまたはデプロイメント・マネージャーの `SystemOut.log` に、以下のエラー・メッセージが返されます。

既存サーバーからクラスターを作成する場合は、「resourcesScope」パラメーターを「cluster」に設定する必要があります。

コマンド行を使用して、既存の単一サーバーを使用するクラスターを最初のクラスター・メンバーとして作成することは有効です。**resourcesScope** の値は **Cluster** に設定する必要があります。以下に例を示します。

```
$AdminTask createCluster {-clusterConfig
{-clusterName newcluster -preferLocal true}
-convertServer {-serverNode NODE1Node01 -serverName testserver
-resourcesScope cluster}}
```

createCluster パラメーターについては、WebSphere Application Server インフォメーション・センターで『AdminTask オブジェクトの ClusterConfigCommands コマンド・グループ』を参照してください。

wsadmin ツールを使用したクラスター・メンバーの作成については、『スクリプトによるクラスター・メンバーの作成』を参照してください。

- なし

常に処理を行います。

7. 「次へ」をクリックします。
8. 追加のクラスター・メンバーを作成します。

追加のクラスター・メンバーを作成する前に、最初のクラスター・メンバーの構成設定を確認してください。これらの設定は、「新規クラスターの作成」ウィザードの「追加クラスター・メンバーの作成」パネルの下部に表示されます。作成する追加メンバーごとに、以下の手順を実行します。

- a. メンバーの固有の名前を指定します。この名前は、ノード内で固有にする必要があります。
 - b. クラスター・メンバーの割り当て先となるノードを選択します。
 - c. このメンバーに割り当てるウェイトを指定します。ウェイト値は、アプリケーション・サーバーに送信される処理の量を制御します。このサーバーのウェイト値が、クラスター内の他のサーバーに割り当てられたウェイト値よりも大きい場合は、このサーバーが受ける作業負荷の割合が大きくなります。値の範囲は 0 から 20 です。
 - d. ソース・サーバーで定義された HTTP トランスポートごとに固有のポート番号を生成したい場合は、「固有の HTTP ポートを生成する」を選択します。
 - e. 「メンバーの追加」をクリックします。最初のクラスター・メンバー以外の新規作成されたクラスター・メンバーの構成設定を編集したり、追加のクラスター・メンバーを作成したりすることができます。最初のクラスター・メンバーのプロパティを編集するには、「戻る」をクリックします。最初のクラスター・メンバーの設定は、最初のクラスター・メンバーの作成時に自動的に作成されるクラスター・メンバー・テンプレートの設定になります。
9. クラスター・メンバーの作成が終了したら、「次へ」をクリックします。
 10. クラスターを作成するには、クラスターの要約を確認して「終了」をクリックします。前のウィザード・パネルに戻るには、「戻る」をクリックします。クラスターを作成せずにウィザードを終了するには、「キャンセル」をクリックします。
 11. さらにクラスターの構成を行うには、「サーバー」 > 「クラスター」 > 「WebSphere Application Server クラスター」をクリックし、そのクラスターの名前をクリックします。変更内容を保存するまでは、「構成」タブと「ローカル・トポロジー」タブしか表示されません。
 12. 「レビュー (Review)」をクリックして、クラスターの構成設定を確認します。追加の構成変更を行う必要がある場合は、前のステップを繰り返します。
 13. 追加の構成変更を行う必要がない場合は、「ノードと変更を同期化」を選択し、「保存」をクリックします。変更内容が保存され、すべてのノード間で同期されます。

注: 「ノードと変更を同期化」を選択しない場合、「保存」をクリックしても、クラスターの再始動時に、製品がノード上のクラスター・サーバーを検出できないため、クラスター・サーバーは開始されません。構成変更をノード間で常に同期したい場合は、コンソール・プリファレンスの 1 つとして「ノードと変更を同期化」を選択することができます。

14. クラスターを再始動します。

選択したサーバーを使用して、選択した管理対象ノード内に最初のクラスター・メンバーとしてクラスターが作成されます。

関連概念:

仮想ホスト

関連タスク:

仮想ホストの構成

サーバーの新規作成:

実稼働環境のニーズに対応するアプリケーションを処理するためには、ほとんどのインストール環境に複数のサーバーが必要になります。コマンド行ツールまたは管理コンソールを使用して、必要なサーバーを作成できます。

新規サーバーをクラスターに含めるかどうかを決定します。このサーバーをクラスターの一部にする場合には、新規アプリケーション・サーバーの作成ウィザードでなく、新規クラスターの作成ウィザードを使用して、サーバーを作成する必要があります。

重要: このタスクでは、管理対象サーバーを作成します。スタンドアロン・サーバーが必要な場合は、以下のステップを実行しないでください。代わりに、スタンドアロン・サーバーのプロファイルを作成してください。

管理対象サーバーを新規作成するには、以下のステップを実行します。

『アプリケーション・サーバーの作成』の説明に従い、「サーバー・テンプレートの選択」ページで「**defaultProcessServer**」テンプレートを選択するか、適切なユーザー定義テンプレートを選択します。**制約事項:** 「必要に応じてコンポーネントを開始」機能は、サポートされていません。

必要なコンポーネントをサーバーで構成します。詳しくは、『コンポーネントの構成』を参照してください。

コマンド行を使用したデプロイメント環境の作成:

wsadmin を使用して、Process Server および Process Center デプロイメント環境を作成できます。**createDeploymentEnvDef** および **generateDeploymentEnv** は、デプロイメント環境ウィザードを使用してデプロイメント環境を作成するのと同等のコマンド行を提供します。

関連概念:

951 ページの『デプロイメント環境ウィザードを使用した Network Deployment 環境の構成』
カスタム・インストールを実行し、デプロイメント・マネージャー・プロファイルおよびカスタム (管理対象ノード) プロファイルを作成した後に、Network Deployment 構成を作成できます。

41 ページの『概要: デプロイメント環境のトポロジーおよびパターン』
Network Deployment 環境にはさまざまなトポロジーを持たせることができます。またこの環境は、いくつかの標準トポロジー・パターンから作成することができます。

58 ページの『トポロジー・パターンおよびサポート対象の製品フィーチャー』
トポロジーとは、デプロイメント環境の物理的レイアウトのことです。製品フィーチャーとデフォルトの使用法は、選択するトポロジー・パターンによって異なります。

仮想ホスト

関連タスク:

922 ページの『データベース設計ツールを使用したデータベース設計ファイルの作成』
データベース構成の設計を作成および生成するには、データベース設計ツールを使用します。この設計は、特定のコンポーネント用にも、IBM Business Process Manager の全機能をサポートするエンタープライ

ズ・レベルのデータベース構成用にもなります。

仮想ホストの構成

コマンド行を使用したデプロイメント環境定義の作成:

wsadmin コマンドを使用して、デプロイメント環境定義を作成できます。**createDeploymentEnvDef** を実行すると、デプロイメント環境の定義が提供されます。

デプロイメント環境定義を作成するデプロイメント・マネージャーを起動しておく必要があります。

このタスクに必要なセキュリティー・ロール: セキュリティーとロール・ベースの許可が有効になっている場合、このタスクを実行するには、管理者権限またはオペレーター権限を持つユーザー ID とパスワードを使用する必要があります。

IBM Business Process Manager はパターンのセットをサポートしており、「リモート・メッセージングおよびリモート・サポート」は、Network Deployment 実稼働環境のために使用するパターンです。ご使用のデプロイメント・マネージャーが IBM Business Process Manager 以外の製品もサポートする場合は、デプロイメント環境定義を作成するときに、それらの製品のパターンを使用した方がよい可能性があります。他の製品のパターンについては詳しくは、それらの製品の資料を参照してください。

このタスクは、**wsadmin** コマンドを使用して、特定のパターンに基づいたデプロイメント環境定義を作成します。

wsadmin コマンドを使用して、管理コンソールから作成する環境と同じデプロイメント環境を作成することができます。この機能により、管理タスクを実行して、既存の構成（プロファイル作成時に作成した構成）に基づくすべてのデフォルト値が設定されたデプロイメント環境定義を作成することができます。このコマンドには、データベース設計文書をインポートするオプションのプロパティーも含まれます。データベース設計文書は、作成しているトポロジー用のデータベース構成を保持しています。

デプロイメント環境を生成するときに、テーブルを作成するかどうかについての情報が設計文書から取得されます。指定するデータベース設計ファイルに **createTables** パラメーターが正しく設定されていることを確認してください。

重要: createTables パラメーターを使用する場合は、データベースが既に存在していなければなりません。生成されたデータベース・スクリプトをカスタマイズする実稼働環境では、**createTables** を使用しないでください。リモート・データベース・サーバーが存在する場合は、**createTables** を使用しないでください。

DB2 および SQL Server データベースの場合、IBM Process Server と IBM Performance Data Warehouse では、他のコンポーネントと同じデータベースを使用しないようにしてください。Oracle データベースを使用する場合には、IBM Process Server および IBM Performance Data Warehouse は同じデータベース・インスタンスを使用できますが、それぞれ異なるユーザーを使用する必要があります。

Oracle データベースでは、ユーザー名およびスキーマ名がまったく同じであることを確認します。環境を生成する前にユーザーがデータベースに存在する必要があります。

SQL Server データベースでは、構成を行う前に、ユーザー名およびスキーマが存在していることを確認します。スキーマ値は、選択するユーザーのデフォルト・スキーマでなければなりません。

実稼働環境の場合は、ユーザー名およびスキーマ名に同じ値を設定します。**createTables** は選択しないでください。必要なスキーマを手動で作成し、生成された SQL ファイルを使用してテーブルを作成します。

デプロイメント環境定義には、デプロイメント環境を構成する、特定のコンポーネント、(クラスター、ノード、サーバーの) 構成、リソース、および関連構成パラメーターが記述されています。この定義は、デプロイメント環境構成のインスタンスと呼ばれることもあります。デプロイメント環境構成は、デプロイメント環境定義にエクスポートできます。デプロイメント環境定義をインポートして、ご使用のシステムに新しいデプロイメント環境構成を追加することができます。

1. コマンド・ウィンドウをオープンします。 **wsadmin** コマンドは、次のディレクトリーのいずれかにあります。

```
install_root/profiles/dmgr profile/bin
install_root/bin
```

2. コマンド・プロンプトから **wsadmin** コマンドを入力して **wsadmin** 環境に入ります。
3. **createDeploymentEnvDef** コマンドを使用して、特定のランタイムとパターンに関して固有の名前を持つデプロイメント環境定義を作成します。

注: 管理セキュリティが有効になっていて、コマンド内でユーザー ID とパスワードを指定しなかった場合は、ユーザー ID とパスワードの入力を求めるプロンプトが表示されます。

この例では、管理セキュリティが有効な状態で、ホスト myDmgr 上に myDepEnv がある IBM Business Process Manager ランタイムでのリモート・メッセージングおよびリモート・サポート・パターンに関するデプロイメント環境定義を作成します。この例では、nd.topology.dbDesign という名前のデータベース設計文書をインポートします。

注: *-topologyRuntime* に割り当てる値は、IBM BPM の構成 (Advanced または Standard) および選択した環境によって異なります。以下に例を示します。

- IBM BPM Standard の場合、**-topologyRuntime** は次のようになります。
 - **BPMSPS** (IBM BPM Standard Process Server の場合)
 - **BPMSPC** (IBM BPM Standard Process Center の場合)
- IBM BPM Advanced の場合、**-topologyRuntime** は次のようになります。
 - **BPMAFS** (IBM BPM Advanced Process Server の場合)
 - **BPMAFC** (IBM BPM Advanced Process Center の場合)

```
wsadmin -connType SOAP -host myDmgr -port 8879
> $AdminTask createDeploymentEnvDef { -topologyName topOne
-topologyPattern RemoteMessagingAndSupport
-topologyRuntime BPMSPS -dbDesign C:¥dbDesigns¥z.nd.topology.dbDesign}
> $AdminConfig save
```

注: 管理セキュリティを無効にする場合は、ユーザー ID とパスワードを指定する必要はありません。

デプロイメント・マネージャー上にデプロイメント環境をインポートまたは作成したあと、**generateDeploymentEnv** コマンドを使用してデプロイメント環境を構成できます。

重要: 固有のポートを持つ追加のサーバーを使用する場合、WebSphere Application Server ではそのサーバーの仮想ホストが自動的に構成されません。具体的には、WebSphere Application Server は、ホスト別名ポートを自動的に仮想ホストに追加しません。ただし、管理コンソールを使用して、新しいサーバーが使用するポートごとに新しいホスト別名を追加することは可能です。詳しくは、仮想ホストの構成に関する WebSphere Application Server の資料を参照してください。

関連概念:

41 ページの『概要: デプロイメント環境のトポロジーおよびパターン』

Network Deployment 環境にはさまざまなトポロジーを持たせることができます。またこの環境は、いくつかの標準トポロジー・パターンから作成することができます。

58 ページの『トポロジー・パターンおよびサポート対象の製品フィーチャー』
トポロジーとは、デプロイメント環境の物理的レイアウトのことです。製品フィーチャーとデフォルトの使用法は、選択するトポロジー・パターンによって異なります。

仮想ホスト

関連タスク:

922 ページの『データベース設計ツールを使用したデータベース設計ファイルの作成』
データベース構成の設計を作成および生成するには、データベース設計ツールを使用します。この設計は、特定のコンポーネント用にも、IBM Business Process Manager の全機能をサポートするエンタープライズ・レベルのデータベース構成用にもなります。

仮想ホストの構成

978 ページの『コマンド行を使用したデプロイメント環境の生成』
wsadmin インターフェースを使用してデプロイメント環境を生成することができます。この機能により、スクリプトを使用して、デプロイメント・マネージャー上の複数のデプロイメント環境を無人で構成できます。

コマンド行を使用したデプロイメント環境定義へのノードの追加:

wsadmin コマンドを使用して、デプロイメント環境定義にノードを追加することができます。

このタスクでは、ノードがデプロイメント・マネージャーに統合されていることを前提としています。

トポロジーが既に構成されている場合、このコマンドを実行しても、デプロイメント環境定義にノードは追加されません。

ノードを追加するデプロイメント・マネージャーを起動しておく必要があります。

このタスクに必要なセキュリティー・ロール: セキュリティーとロール・ベースの許可が有効になっている場合、このタスクを実行するには、管理者権限またはオペレーター権限を持つユーザー ID とパスワードを使用する必要があります。

このタスクでは、**wsadmin** コマンドを使用して、統合ノードをデプロイメント環境定義に追加します。

1. コマンド・ウィンドウをオープンします。 **wsadmin** コマンドは、次のディレクトリーのいずれかにあります。

```
install_root/profiles/dmgr_profile/bin  
install_root/bin
```

2. コマンド・プロンプトから **wsadmin** コマンドを入力して **wsadmin** 環境に入ります。
3. **addNodeToDeploymentEnvDef** コマンドを入力して、デプロイメント環境定義にノードを追加します。

注: 管理セキュリティーが有効になっている場合は、ユーザー ID とパスワードの入力を求めるプロンプトが表示されます (コマンド内で指定していない場合)。

この例では、管理セキュリティーが有効な状態で、ノード (**MyNode**) をデプロイメント環境定義 (**myDepEnv**) に追加します。

重要: 単一クラスターのトポロジー・パターンにノードを追加する場合は、**-toplogyRole** の値を **ADT** に設定する必要があります。デプロイメント環境のトポロジー・パターンは、**createDeploymentEnvDef** コマンドまたは「デプロイメント環境構成」ウィザードを使用してデプロイメント環境を作成する場合に指定されます。

```
wsadmin -connType SOAP -host myDmgr -port 8879 -user dmgrAdmin -password dmgrPass
> $AdminTask addNodeToDeploymentEnvDef {-topologyName myDepEnv
-topologyRole Messaging -nodeName MyNode}
```

注: 管理セキュリティが無効になっている場合は、ユーザー ID とパスワードを指定する必要はありません。

重要: 固有のポートを持つ追加のサーバーを使用する場合、WebSphere Application Server ではそのサーバーの仮想ホストが自動的に構成されません。具体的には、WebSphere Application Server は、ホスト別名ポートを自動的に仮想ホストに追加しません。ただし、管理コンソールを使用して、新しいサーバーが使用するポートごとに新しいホスト別名を追加することは可能です。詳しくは、仮想ホストの構成に関する WebSphere Application Server の資料を参照してください。

コマンド行を使用したデプロイメント環境の生成:

wsadmin インターフェースを使用してデプロイメント環境を生成することができます。この機能により、スクリプトを使用して、デプロイメント・マネージャー上の複数のデプロイメント環境を無人で構成できます。

デプロイメント環境を構成するデプロイメント・マネージャーでコマンドを入力する必要があります。

このタスクに必要なセキュリティ・ロール: セキュリティおよびロール・ベースの許可が使用可能になっている場合、このタスクを実行するには、管理者またはコンフィギュレーターとして管理コンソールにログインする必要があります。

デプロイメント・マネージャー上にデプロイメント環境をインポートまたは作成したあと、**generateDeploymentEnv** コマンドを使用してデプロイメント環境を構成できます。

1. **wsadmin** 環境に入ります。
2. 構成するトポロジーごとに **generateDeploymentEnv** コマンドを入力します。

以下のコマンドは、ホスト **myDmgr** 上で **eastEnvironment** トポロジーを構成します。

```
wsadmin -connType SOAP -host myDmgr -port 8879
> $AdminTask generateDeploymentEnv {-topologyName eastTopology}
> $AdminConfig save
```

注: 管理セキュリティを有効にしている場合、**wsadmin** コマンドの処理後にユーザー ID とパスワードの入力を求めるプロンプトが表示されます。

構成されたデプロイメント環境を保存します。コマンド行から、**\$AdminConfig save** と入力します。

コマンド行からのデプロイメント環境定義の検証:

wsadmin コマンドを使用して、デプロイメント環境定義を検証することができます。

このタスクでは、ノードがデプロイメント・マネージャーに統合されていることを前提としています。

デプロイメント環境定義を生成したデプロイメント・マネージャーを起動しておく必要があります。

このタスクに必要なセキュリティ・ロール: セキュリティとロール・ベースの許可が有効になっている場合、このタスクを実行するには、管理者権限またはオペレーター権限を持つユーザー ID とパスワードを使用する必要があります。

このタスクは、**wsadmin** コマンドを使用して、デプロイメント環境定義を検証します。

1. コマンド・ウィンドウをオープンします。 **wsadmin** コマンドは、次のディレクトリーのいずれかにあります。

```
install_root/profiles/dmgr profile/bin  
install_root/bin
```

2. コマンド・プロンプトから **wsadmin** コマンドを入力して **wsadmin** 環境に入ります。
3. **validateDeploymentEnvDef** コマンドを入力して、デプロイメント環境定義を検証します。

注: 管理セキュリティが有効になっている場合は、ユーザー ID とパスワードの入力を求めるプロンプトが表示されます (コマンド内で指定していない場合)。

この例では、管理セキュリティが有効な状態で、デプロイメント環境定義 (**myDepEnv**) を検証します。

```
wsadmin -connType SOAP -host myDmgr -port 8879 -user dmgrAdmin -password -dmgrPass  
> $AdminTask validateDeploymentEnvDef { -topologyName topOne}
```

注: 管理セキュリティが無効になっている場合は、ユーザー ID とパスワードを指定する必要はありません。

コマンド行を使用したデプロイメント環境の状況表示:

wsadmin コマンドを使用して、デプロイメント環境の現在の状況を表示できます。

状況を表示する場合、状況表示の対象となるデプロイメント・マネージャーに管理クライアントを接続する必要があります。

このタスクに必要なセキュリティ・ロール: セキュリティとロール・ベースの許可が有効になっている場合、このタスクを実行するには、管理者権限またはオペレーター権限を持つユーザー ID とパスワードを使用する必要があります。

このタスクは、**wsadmin** コマンドを使用して、デプロイメント環境の現在の状況を表示します。

1. コマンド・ウィンドウをオープンします。 **wsadmin** コマンドは、次のディレクトリーのいずれかにあります。

```
install_root/profiles/dmgr profile/bin  
install_root/bin
```

2. コマンド・プロンプトで **wsadmin** コマンドを入力して、コマンド環境に入ります。

注: 接続モードで実行する場合は、**wsadmin** を適切なデプロイメント・マネージャーに接続してください。

3. **showDeploymentEnvStatus** コマンドを使用して、デプロイメント環境の現在の状況を表示します。

注: 管理セキュリティが有効になっている場合は、ユーザー ID とパスワードの入力を求めるプロンプトが表示されます (コマンド内で指定していない場合)。

次の表は、結果として返される状態をまとめたものです。

注: 表にリストされた状態には、構成済みのトポロジーに対してのみ有効な状態も含まれています。その場合、構成済みのトポロジーに対してのみ適用されるということが説明欄に記載されています。

表 146. トポロジー・インスタンスの使用可能状況 (使用可能性が低い順から高い順)

状態	説明
不完全	デプロイメント環境で欠落している要素はありませんが、不完全な部分があります。 この状態は、デプロイメント環境に必須のロール、ノード、コンポーネント、または依存関係が欠落している可能性がある状態です。 追加の詳細情報は、警告メッセージに含まれています。
完了	この状態は、未構成 とも呼ばれます。これは、既知の構成が完了しているが、まだ生成されていない状態です。
構成済み	これは、構成の同期がとれている状態です。
一部が構成済み	デプロイメント環境は生成していますが、据え置かれた構成が完了していません。
不明	これは、デプロイメント環境の現在の状態をシステムが判別できない状態です。再同期操作は、この状態で実行することができます。
停止	この状態は、構成済みのトポロジーに対してのみ適用されます。トポロジー内のすべてのデプロイメント・ターゲットが停止している状態です。
実行中	この状態は、構成済みのトポロジーに対してのみ適用されます。デプロイメント環境が使用可能であり、すべての機能が実行中の状態です。
一部が開始済み	この状態は、構成済みのトポロジーに対してのみ適用されます。デプロイメント環境が使用可能になっているが、部分的に実行中の機能が 1 つ以上ある状態です。
開始中	この状態は、構成済みのトポロジーに対してのみ適用されます。デプロイメント環境が始動中の状態です。
一部が停止済み	この状態は、構成済みのトポロジーに対してのみ適用されます。デプロイメント環境が使用可能になっているが、停止した機能または部分的に停止した機能が 1 つ以上ある状態です。
停止中	この状態は、構成済みのトポロジーに対してのみ適用されます。デプロイメント環境が停止中の状態です。
使用不可	この状態は、構成済みのトポロジーに対してのみ適用されます。デプロイメント環境の状態は使用できません。

この例では、管理セキュリティーが有効な状態で、ホスト (**myDmgr**) 上のデプロイメント環境 (**MyDepEnv**) の状況を表示します。

注: デプロイメント・マネージャーの **bin** フォルダから管理クライアントを実行する場合は、コマンドに **-host** パラメーターと **-port** パラメーターを指定する必要はありません。

```
wsadmin -connType SOAP -host myDmgr -port 8879 -user dmgradmin -password dmgrpass
> $AdminTask showDeploymentEnvStatus {-topologyName myDepEnv}
```

-connType パラメーターでは、使用する接続のタイプを指定します。デフォルトの引数は **SOAP** です。**SOAP** はデフォルトであるため、この値を明示的に指定する必要はありません。

-host パラメーターでは、SOAP または RMI の接続で使用するホストを指定します。**-host** のデフォルト値はローカル・ホストです。ノードがローカル・ホストで稼働している場合は、**-host** を指定する必要はありません。

注: 管理セキュリティーが無効になっている場合は、ユーザー ID とパスワードを指定する必要はありません。

データベース構成の完了

Network Deployment 環境内のクラスターを開始する前に、データベース表を作成してデータベース構成を完了する必要があります。

Process Center または Process Server のデータベース表の作成:

SQL スクリプトを実行して、IBM Process Center 構成または IBM Process Server 構成用のデータベース表を作成します。

構成に必要なすべてのステップを実行しており、データベースを初期化するためのデータベース・スクリプトを構成中に実行しないことを選択していることが必要です。また、Process Center または Process Server のデータベース表の作成先となるデータベースを作成済みであることが必要です。データベースの作成については、『データベースの作成』を参照してください。

構成の完了時に作成された Process Center または Process Server の SQL スクリプトを実行するには、次の手順で行います。

注: Process Server はスキーマをサポートしません。ユーザーとしてログインしてから、SQL ファイルを実行する必要があります。

1. データベース表を作成するための SQL スクリプトが格納されているディレクトリーに移動します。

デフォルトでは、SQL スクリプトはプロファイルの作成時に、*profile_root/dbscripts/ProcessServer/DB_product* に出力されます。以下に例を示します。

```
profile_root/dbscripts/ProcessServer/DB2
```

2. 以下のコマンドを root ユーザーまたは管理者として実行します。

- **Linux** **UNIX** **configProcessServerDB.sh createDB**
- **Windows** **configProcessServerDB.bat createDB**

注: **createDB** パラメーターは、ローカル・データベースを作成するために使用されます。必要なデータベースが作成済みの場合は、このパラメーターを省略してください。**createDB** パラメーターは、Oracle データベースには適用できないため、コマンドから除外する必要があります。

3. SQL データベースの場合は、Process Center または Process Server 用のテーブルを作成します。

ステップ 1 で移動したディレクトリーから、Process Center または Process Server 用に構成したデータベース (BPMDB) に対して **createTable_ProcessServer.sql** を実行します。

すべての SQL ステートメントがエラーなく成功したことを確認してください。

4. SQL データベースの場合は、Process Center または Process Server 用のテーブル・プロシージャーを作成します。

ステップ 1 で移動したディレクトリーから、Process Center または Process Server 用に構成したデータベース (BPMDB) に対して **createProcedure_ProcessServer.sql** を実行します。

すべての SQL ステートメントがエラーなく成功したことを確認してください。

5. 接続をリセットします。

Process Center 構成または Process Server 構成用のデータベース表が作成され、データベース構成が完了しました。

これで、データベースにシステム情報をロードし、Process Center 構成または Process Server 構成上でサーバーまたはクラスターを開始することができます。

関連タスク:

901 ページの『提供されているスクリプトを使用したデータベースの作成』

プロファイルの作成時にデータベースを作成しなかった場合は、後で実行するためのデータベース・スクリプト・ファイルが生成されます。

902 ページの『手動でのデータベースの作成』

IBM Business Process Manager Advanced は、Process Server データベース、Performance Data Warehouse データベース、および共通データベースを必要とします。標準インストールを使用して IBM Business Process Manager Advanced をインストールする前に、データベースが使用可能であることを確認する必要があります。

Performance Data Warehouse データベース表の作成:

SQL スクリプトを実行して、IBM Performance Data Warehouse 用のデータベース表を作成します。

構成に必要なすべてのステップを実行しており、データベースを初期化するためのデータベース・スクリプトを構成中に実行しないことを選択していることが必要です。また、Performance Data Warehouse のデータベース表の作成先となるデータベースを作成済みであることが必要です。データベースの作成については、『データベースの作成』を参照してください。

構成の完了時に作成された Performance Data Warehouse の SQL スクリプトを実行するには、次の手順で行います。

注: Performance Data Warehouse はスキーマをサポートしません。ユーザーとしてログインしてから、SQL ファイルを実行する必要があります。

1. データベース表を作成するための SQL スクリプトが格納されているディレクトリーに移動します。

デフォルトでは、SQL スクリプトはプロファイルの作成時に、*profile_root/dbscripts/PerformanceDW/DB_product* に出力されます。以下に例を示します。

profile_root/dbscripts/PerformanceDW/DB2

2. 以下のコマンドを root ユーザーまたは管理者として実行します。

- **Linux** **UNIX** **configPerformanceDWDB.sh createDB**
- **Windows** **configPerformanceDWDB.bat createDB**

注: **createDB** パラメーターは、ローカル・データベースを作成するために使用されます。**createDB** パラメーターは、Oracle データベースには適用できないため、コマンドから除外する必要があります。

3. SQL データベースの場合は、Performance Data Warehouse 用のテーブルを作成します。

ステップ 1 で移動したディレクトリーから、Performance Data Warehouse 用に構成したデータベース (PDWDB) に対して **createTable_PerformanceDW.sql** を実行します。

すべての SQL ステートメントがエラーなく成功したことを確認してください。

Performance Data Warehouse 用のデータベース表が作成され、データベース構成が完了しました。

これで、データベースにシステム情報をロードし、Performance Data Warehouse 上でサーバーまたはクラスターを開始することができます。

関連タスク:

901 ページの『提供されているスクリプトを使用したデータベースの作成』

プロファイルの作成時にデータベースを作成しなかった場合は、後で実行するためのデータベース・スクリプト・ファイルが生成されます。

902 ページの『手動でのデータベースの作成』

IBM Business Process Manager Advanced は、Process Server データベース、Performance Data Warehouse データベース、および共通データベースを必要とします。標準インストールを使用して IBM Business Process Manager Advanced をインストールする前に、データベースが使用可能であることを確認する必要があります。

データベースへのシステム情報のロード

IBM Business Process Manager サーバーの始動または使用を試みる前に、`bootstrapProcessServerData` コマンドを実行する必要があります。

`bootstrapProcessServerData` コマンドを実行すると、BPM アプリケーションの構成データがデータベースにロードされます。このデータは、BPM アプリケーションが正常に実行されるようにするために必要です。

注: スタンドアロン・プロファイルを作成するときに、プロファイル作成中にデータベースを作成することを選択した場合は、このコマンドが自動的に実行されます。

- スタンドアロン・プロファイルを作成し、データベース表のセットアップを据え置いた場合は、データベースおよびその表を作成した後、かつサーバーを初めて始動する前に、`bootstrap` コマンドを実行する必要があります。
- Network Deployment (ND) 環境では、サーバーまたはサーバー・クラスターを作成した後に、このコマンドを実行する必要があります。クラスターでは、単一のクラスター・メンバーを指定して、このコマンドを **1 回だけ実行してください**。データベースおよびその表を作成した後、かつプロファイルおよびデプロイメント環境を作成した後、かつ最初のサーバーを始動する前に、このコマンドを実行します。別のクラスター・メンバーを追加した場合に、このコマンドを再実行する必要はありません。

コマンド行から `bootstrap` ユーティリティを実行します。ブートストラップ・ユーティリティは、スタンドアロン・プロファイルまたはデプロイメント・マネージャー・プロファイルのディレクトリーにあります。以下に例を示します。

```
<install_root>/profiles/Dmgr01/bin
C:¥<install_root>¥profiles¥ProcCtr01/bin
```

ブートストラップ・ユーティリティは、以下の構文を使用して実行します。

- **Linux** **UNIX** `bootstrapProcessServerData.sh [-dbJDBCClasspath classpath] -clusterName cluster_name`
- **Linux** **UNIX** `bootstrapProcessServerData.sh [-dbJDBCClasspath classpath] -nodeName node_name -serverName server_name`
- **Windows** `bootstrapProcessServerData.bat [-dbJDBCClasspath classpath] -clusterName cluster_name`
- **Windows** `bootstrapProcessServerData.bat [-dbJDBCClasspath classpath] -nodeName node_name -serverName server_name`

ここで、

- **-dbJDBCClasspath** は、データベース JDBC ドライバーのロケーションです。 **dbJDBCClasspath** で指定するパスにスペースが含まれている場合は、その値を引用符で囲む必要があります。デフォルト・ロケーションは `WAS_INSTALL_ROOT/jdbcdrivers` です。
- **-clusterName** はアプリケーション・ターゲット・クラスターの名前です。ND 環境の場合は、このパラメーターまたは **-nodeName** および **-serverName** パラメーターのいずれか一方を指定する必要があります。スタンドアロンの場合は指定しないでください。
- **-nodeName** はノードの名前です。ND 環境の場合は、このパラメーターおよび **-serverName** パラメーター、または **-clusterName** パラメーターのいずれか一方を指定する必要があります。スタンドアロンの場合は指定しないでください。
- **-serverName** はサーバーの名前です。ND 環境の場合は、このパラメーターおよび **-nodeName** パラメーター、または **-clusterName** パラメーターのいずれか一方を指定する必要があります。スタンドアロンの場合は指定しないでください。

パラメーターは大/小文字が区別されます。

Process Server または Process Center を正常に始動する前に、データベースにシステム情報がロードされました。

重要: For SQL Server、ブートストラップ・ユーティリティーが失敗した場合は、Process Server データベースおよび Performance Data Warehouse データベースを作成するときに、**COLLATE** 属性で大/小文字を区別しないように指定したこと (**CI**) を確認します (大/小文字を区別する場合は **CS**)。つまり、create コマンドが以下のようにになっている必要があります。

```
CREATE DATABASE database_name COLLATE SQL_Latin1_General_CP1_CI_AS
```

これを行わない場合、以下のようなエラーが発生することがあります。

```
org.springframework.beans.factory.BeanCreationException: Error creating bean with name
'message.routingCache' defined in class path resource [registry.xml]: Instantiation of bean
failed; nested exception is org.springframework.beans.BeanInstantiationException: Could not
instantiate bean class [com.lombardisoftware.bpd.runtime.engine.message.DefaultMessageRoutingCache]:
Constructor threw exception; nested exception is org.springframework.jdbc.BadSqlGrammarException:
PreparedStatementCallback; bad SQL grammar [select "value" from lsw_system where "key"=?];
nested exception is com.microsoft.sqlserver.jdbc.SQLServerException: Invalid object name
'lsw_system'.
```

```
Caused by: com.microsoft.sqlserver.jdbc.SQLServerException: Invalid object name 'lsw_system'.
at com.microsoft.sqlserver.jdbc.SQLServerException.makeFromDatabaseError
(SQLServerException.java:196)
at com.microsoft.sqlserver.jdbc.SQLServerStatement.getNextResult(SQLServerStatement.java:1454)
at com.microsoft.sqlserver.jdbc.SQLServerPreparedStatement.doExecutePreparedStatement
(SQLServerPreparedStatement.java:388)
at com.microsoft.sqlserver.jdbc.SQLServerPreparedStatement$PrepStmtExecCmd.doExecute
(SQLServerPreparedStatement.java:338)
at com.microsoft.sqlserver.jdbc.TDSCommand.execute(IOBuffer.java:4026)
at com.microsoft.sqlserver.jdbc.SQLServerConnection.executeCommand
(SQLServerConnection.java:1416)
at com.microsoft.sqlserver.jdbc.SQLServerStatement.executeCommand(SQLServerStatement.java:185)
at com.microsoft.sqlserver.jdbc.SQLServerStatement.executeStatement(SQLServerStatement.java:160)
at com.microsoft.sqlserver.jdbc.SQLServerPreparedStatement.executeQuery
(SQLServerPreparedStatement.java:281)
at org.apache.commons.dbcp.DelegatingPreparedStatement.executeQuery
(DelegatingPreparedStatement.java:205)
at org.springframework.jdbc.core.JdbcTemplate$1.doInPreparedStatement(JdbcTemplate.java:648)
at org.springframework.jdbc.core.JdbcTemplate.execute(JdbcTemplate.java:591)
[...]
```

ND 環境の一部であるがクラスターの一部ではないサーバーにデータをブートストラップするには、以下のようになります。


```
bootstrapProcessServerData -nodeName node01 -serverName server1
```

Process Center または Process Server をホストするクラスターにデータをブートストラップする場合は、以下のようにします。

```
bootstrapProcessServerData -clusterName myAppCluster
```

デフォルトのスタンドアロン・プロファイル・サーバーにデータをブートストラップする場合は、以下のようにします。

```
bootstrapProcessServerData
```

カスタム JDBC ドライバーのロケーションを指定して、デフォルトのスタンドアロン・プロファイル・サーバーにデータをブートストラップする場合は、以下のようにします。

```
bootstrapProcessServerData -dbJDBCClasspath c:/DB2/java
```

スタンドアロン・サーバーまたは最初のクラスター・メンバーを始動できます。

コンポーネントの構成

IBM Business Process Manager のコンポーネントを個別に構成することが可能です。

コンポーネントは、次の 3 つの方法のいずれかで構成できます。

1. 一部の IBM Business Process Manager コンポーネントは、プロファイルの作成時に構成される場合があります。これは、特にスタンドアロン・サーバーの場合に当てはまります。スタンドアロン・サーバーでは、大半のコンポーネントがプロファイルの作成時に構成される場合があります。
2. Network Deployment セルでは、デプロイメント環境のビルドおよび生成によって、コンポーネントが構成される場合があります。デプロイメント環境をセットアップすると、サーバー・クラスターがビルドされ、それらのサーバー・クラスター上に IBM Business Process Manager コンポーネントが構成されます。

注: スタンドアロン・サーバーではデプロイメント環境は使用できません。

3. 管理コンソールまたは管理スクリプトのいずれかを使用して、IBM Business Process Manager サーバーおよびクラスター (およびこれらのサーバー/クラスター上で実行されるコンポーネント) を個別に構成できます。

このセクションでは、IBM Business Process Manager の個々のコンポーネントを構成する方法について説明します。

Process Center の構成

管理コンソールを使用してアプリケーション・サーバーまたはクラスターを Process Center として構成できます。サーバーまたはクラスターを Process Center として構成すると、そのサーバーまたはクラスターは共用開発環境をサポートできるようになり、その環境で Process Designer および Integration Designer は Process App や関連サービスなどの資産を共用できます。

このタスクでは、管理コンソールを使用してサーバーまたはクラスターを Process Center として構成する方法について説明します。

サーバーまたはクラスターを Process Center として (wsadmin スクリプトの使用により) 構成する方法 (パラメーター定義および例を含む) については、リファレンス資料で `configureProcessCenter` コマンドを参照してください。

注:

スタンドアロン・サーバー・プロファイルを使用する場合、または以前にサーバーまたはクラスター用の Process Center サポートを構成した場合は、管理コンソールで現行構成を検討することはできませんが、構成を変更することはできません。

1. 管理コンソールを起動します。
2. 管理コンソールで、サーバーまたはクラスターを構成するためのパスを選択します。

サーバーを構成するには、「サーバー」 > 「サーバー・タイプ (Server Types)」 > 「WebSphere Application Server」 > 「*server_name*」 > 「Process Center」をクリックします。

クラスターを構成するには、「サーバー」 > 「クラスター」 > 「WebSphere Application Server クラスター」 > 「*cluster_name*」 > 「Process Center」をクリックします。

3. パラメーターを設定してサーバーまたはクラスターを Process Center として構成します。

すべてのパラメーターの説明については、パネルにアクセスして「ページのヘルプ」を選択するか、リファレンス資料の『管理コンソールのヘルプ (Administrative console help)』セクションで『Process Center』を参照してください。

4. 構成を保管します。

サーバーまたはクラスターを Process Center として構成しました。

インストールに含まれるその他の Business Process Manager コンポーネントおよび製品を構成します。

一般に、管理コンソールを使用して Business Process Manager コンポーネントを構成する場合、Process Center の構成後に実行する構成タスクの順序は以下のようになります。

1. Performance Data Warehouse の構成
2. SCA の構成
3. Business Process Choreographer の構成
4. Business Space の構成
5. Common Event Infrastructure の構成

TeamWorksConfiguration.running.xml ファイルは、各サーバーが始動したときに、複数のローカル構成 XML ファイルから生成されます。このファイルは、`BPM_ROOT¥profiles¥profile_name¥config¥cells¥cellName¥nodes¥nodeName¥servers¥serverName¥process-center¥TeamWorksConfiguration.running.xml`にあります。

TeamWorksConfiguration.running.xml の内容を確認します。TeamWorksConfiguration.running.xml ファイルを生成するのに使用する構成ファイルを編集する必要がある場合があります。

URL、IP アドレス、およびポートを変更する必要がある場合は、99Local.xml および 100Custom.xml 構成ファイルを更新してから、サーバーを再始動します。クラスターに Web サーバーを追加する場合は、これらのファイルを更新する必要があります。これは、アプリケーションの URL を生成する際に、これらのファイルの情報が使用されるためです。影響を受けるすべてのノードでファイルの変更内容が同じであり、99Local.xml および 100Custom.xml ファイルが、これらのファイルが置かれているシステムに対してローカルであることを確認します。これらのファイルは、ノード間で自動的に複製されません。xml ファイルの更新について詳しくは、トピック『構成設定の管理』および『Web サーバーと連動する Process Server/Process Center クラスターのカスタマイズ』を参照してください。

Process Server の構成

管理コンソールを使用してアプリケーション・サーバーまたはクラスターを Process Server として構成できます。サーバーまたはクラスターを Process Server として構成することにより、そのサーバーまたはクラスターが Process App および関連サービスをサポートできるようになります。

このタスクでは、管理コンソールを使用してサーバーまたはクラスターを Process Server として構成する方法について説明します。

サーバーまたはクラスターを Process Server として (wsadmin スクリプトの使用により) 構成する方法 (パラメーター定義および例を含む) については、リファレンス資料で `configureProcessServer` コマンドを参照してください。

注:

スタンドアロン・サーバー・プロファイルを使用する場合、または以前にサーバーまたはクラスター用の Process Server サポートを構成した場合は、管理コンソールで現行構成を検査することはできますが、構成を変更することはできません。

1. 管理コンソールを起動します。
2. 管理コンソールで、サーバーまたはクラスターを構成するためのパスを選択します。

サーバーを構成するには、「サーバー」 > 「サーバー・タイプ」 > 「WebSphere Application Server」 > 「`server_name`」 > 「Process Server」をクリックします。

クラスターを構成するには、「サーバー」 > 「クラスター」 > 「WebSphere Application Server クラスター」 > 「`cluster_name`」 > 「Process Server」をクリックします。

3. パラメーターを設定してサーバーまたはクラスターを Process Server として構成します。

すべてのパラメーターの説明については、パネルにアクセスして「ページのヘルプ」を選択するか、リファレンス資料の『管理コンソール・ヘルプ』セクションで『Process Server』を参照してください。

4. 構成を保管します。

サーバーまたはクラスターを Process Server として構成しました。

インストールに含まれるその他の Business Process Manager コンポーネントおよび製品を構成します。

一般に、管理コンソールを使用して Business Process Manager コンポーネントを構成する場合、Process Server の構成後に実行する構成タスクの順序は以下のようになります。

1. Performance Data Warehouse の構成
2. SCA の構成
3. Business Process Choreographer の構成
4. Business Space の構成
5. Common Event Infrastructure の構成

TeamWorksConfiguration.running.xml ファイルは、各サーバーが始動したときに、複数のローカル構成 XML ファイルから生成されます。このファイルは、`BPM_ROOT¥profiles¥profile_name¥config¥cells¥cellName¥nodes¥nodeName¥servers¥serverName¥process-center¥TeamWorksConfiguration.running.xml`にあります。

TeamWorksConfiguration.running.xml の内容を確認します。TeamWorksConfiguration.running.xml ファイルを生成するのに使用する構成ファイルを編集する必要がある場合があります。

URL、IP アドレス、およびポートを変更する必要がある場合は、99Local.xml および 100Custom.xml 構成ファイルを更新してから、サーバーを再始動します。クラスターに Web サーバーを追加する場合は、これらのファイルを更新する必要があります。これは、アプリケーションの URL を生成する際に、これらのファイルの情報が使用されるためです。影響を受けるすべてのノードでファイルの変更内容が同じであり、99Local.xml および 100Custom.xml ファイルが、これらのファイルが置かれているシステムに対してローカルであることを確認します。これらのファイルは、ノード間で自動的に複製されません。xml ファイルの更新について詳しくは、トピック『構成設定の管理』および『Web サーバーと連動する Process Server/Process Center クラスターのカスタマイズ』を参照してください。

サーバー上またはクラスター上の Business Performance Data Warehouse コンポーネントの構成

管理コンソールを使用して、サーバーまたはクラスター上で Business Performance Data Warehouse コンポーネントを構成することができます。

サーバーまたはクラスター上で Performance Data Warehouse コンポーネントを構成する前に、対応する Process Server または Process Center をまず構成する必要があります。Network Deployment 環境では、この 2 つのコンポーネントは同じサーバー上またはクラスター上に存在する場合があります、複数のサーバーまたはクラスターに分割されている場合もあります。

このタスクでは、管理コンソールを使用して、サーバーまたはクラスター上で Performance Data Warehouse コンポーネントを構成する方法について説明します。

wsadmin スクリプトを使用してサーバーまたはクラスター上で Performance Data Warehouse コンポーネントを構成する方法 (パラメーター定義および例を含む) については、リファレンス資料で『configurePerfDW コマンド』を参照してください。

注:

スタンドアロン・サーバー・プロファイルを使用する場合、または以前にサーバーまたはクラスター用の Performance Data Warehouse サポートを構成した場合は、管理コンソールで現行構成を検討することはできませんが、構成を変更することはできません。

1. 管理コンソールを起動します。
2. 管理コンソールで、サーバーまたはクラスターを構成するためのパスを選択します。

サーバーを構成するには、「サーバー」 > 「サーバー・タイプ (Server Types)」 > 「WebSphere Application Server」 > 「server_name」 > 「Performance Data Warehouse サーバー (Performance Data Warehouse Server)」をクリックします。

クラスターを構成するには、「サーバー」 > 「クラスター」 > 「WebSphere Application Server クラスター」 > 「cluster_name」 > 「Performance Data Warehouse サーバー (Performance Data Warehouse Server)」をクリックします。

3. サーバーまたはクラスター上で Performance Data Warehouse コンポーネントを構成するためのパラメーターを設定します。

すべてのパラメーターの説明については、パネルにアクセスして「ページのヘルプ」を選択するか、リファレンス資料の『管理コンソールのヘルプ (Administrative console help)』セクションで『Performance Data Warehouse』を参照してください。

4. 構成を保管します。

サーバーまたはクラスター上で Performance Data Warehouse コンポーネントが構成されました。

インストールに含まれるその他の Business Process Manager コンポーネントおよび製品を構成します。

一般に、管理コンソールを使用して Business Process Manager コンポーネントを構成する場合、Process Server の構成後に実行する構成タスクの順序は以下のようになります。

1. Performance Data Warehouse の構成
2. SCA の構成
3. Business Process Choreographer の構成
4. Business Space の構成
5. Common Event Infrastructure の構成

サーバーまたはクラスターの SCA サポートの構成

「Service Component Architecture (SCA)」コンソール・ページで、Network Deployment 環境内のサーバーまたはクラスターが、サーバー・アプリケーションと、そのアプリケーションに必要なメッセージング・エンジンおよび宛先をホストできるように設定します。

SCA サポートを構成する前に、以下の事項を確認しておきます。

- スタンドアロン・サーバー・プロファイルを使用しているかどうか。使用している場合は、SCA サポートが既に構成されているため、「Service Component Architecture」ページでこのサポートを除去することはできません。ただしこのページでは、データベース・データ・ソースの一部のプロパティを変更できます。
- メッセージング・エンジンと宛先をホストするかどうか (ローカル・バス・メンバーまたはリモート・バス・メンバーのいずれかを使用)。
- SCA システム・バスのみを構成する必要があるのか、または SCA アプリケーション・バスも構成する必要があるかどうか。デフォルトではアプリケーション・バスが構成されます。アプリケーション・バスは、WebSphere Business Integration Adapters を使用する SCA アプリケーションをデプロイする場合に必要です。

このタスクに必要なセキュリティー・ロール: 以下のタスクを実行するには、管理者またはコンフィギュレーターとしてログインする必要があります。

サービス・アプリケーションでは、自動的に作成されるサービス統合バスを 1 つ以上使用する必要があります。これらのバスでは、宛先のメッセージング・エンジンを構成済みでなければなりません。Network Deployment 構成の新規のサーバーとクラスターは、デフォルトでは SCA アプリケーションとそれらの宛先をホストするようには構成されません。

サーバーまたはクラスター上で SCA サポートを構成するには、以下のステップを実行してください。

1. 管理コンソール内から、スコープに応じて、以下のいずれかをクリックします。
 - 「サーバー」 > 「サーバー・タイプ (Server Types)」 > 「WebSphere アプリケーション・サーバー (WebSphere application servers)」 > *server_name* > 「Service Component Architecture」
 - 「サーバー」 > 「クラスター」 > 「WebSphere Application Server クラスター (WebSphere application server clusters)」 > *cluster_name* > 「Service Component Architecture」
2. 「Service Component Architecture コンポーネントのサポート」をクリックします。

3. 「バス・メンバー・ロケーション」パネルで、SCA アプリケーションに必要なメッセージ・エンジンと宛先をホストする場所を指定します。2 つのオプションがあります。

- 「ローカル」。SCA アプリケーション、宛先、およびメッセージング・エンジンを現行サーバーまたは現行クラスターでホストすることを指定します。
- 「リモート」。SCA アプリケーションを現行サーバーまたはクラスターでホストし、宛先およびメッセージング・エンジンをリモート・サーバーまたはリモート・クラスター (デプロイメント・ターゲットとも呼ばれる) でホストすることを指定します。

4. (リモート・バス・メンバーのみ) 前のステップで「リモート」を選択した場合は、アプリケーション宛先およびメッセージング・エンジンをホストするリモート・サーバーまたはリモート・クラスターを指定します。ドロップダウン・メニューから既存のデプロイメント・ターゲット (SCA システム・バスのメンバーとして既に構成されているターゲット) を選択するか、または「新規」をクリックして「デプロイメント・ターゲットのブラウズ」ページで新しいサーバーまたはクラスターを選択します。

「デプロイメント・ターゲットのブラウズ」ページで新しいサーバーまたはクラスターを選択した場合は、このトピックで説明する SCA 構成手順が完了すると、ターゲットに必要なメッセージング機能が自動的に構成されます。

5. 「システム・バス・メンバー」パネルの表で、システム・バス・データ・ソース構成を確認または変更します。

- a. 「データベース名」、「スキーマ」、「テーブルの作成」、「ユーザー名」、「パスワード」、「サーバー」、および「プロバイダー」の各フィールドのデフォルト値を確認します。これらのフィールドと、各フィールドに受け入れられる値についての詳細は、オンライン・ヘルプを参照してください。
- b. これらのフィールドにデフォルト値がない場合、またはデフォルト値が誤っている場合は、システム・バス・データ・ソースの適切な値を入力します。フィールドに値を直接入力するか、または「編集」をクリックして「データ・ソース」詳細ページの内容を編集します。
- c. オプション: 「テスト接続」をクリックするとデータ・ソースがデータベースに接続して認証を実行することを確認します。

6. 「アプリケーション・バス・メンバー」パネルの表で、アプリケーション・バス・データ・ソース構成を確認または変更します。

- a. 「WebSphere Business Integration Adapter コンポーネントの使用可能化」オプションが選択されていることを確認します。

注: アプリケーション・バスを使用しない場合は、「WebSphere Business Integration Adapter コンポーネントの使用可能化」オプションの選択を解除し、ステップ 7 に進みます。

- b. 「データベース名」、「スキーマ」、「テーブルの作成」、「ユーザー名」、「パスワード」、「サーバー」、および「プロバイダー」の各フィールドのデフォルト値を確認します。これらのフィールドと、各フィールドに受け入れられる値についての詳細は、オンライン・ヘルプを参照してください。
- c. これらのフィールドにデフォルト値がない場合、またはデフォルト値が誤っている場合は、アプリケーション・バス・データ・ソースの適切な値を入力します。フィールドに値を直接入力するか、または「編集」をクリックして「データ・ソース」詳細ページの内容を編集します。

7. 「OK」をクリックします。SCA 構成が完了します。

8. 変更を保管します。必要に応じて、加えた変更を見直すこともできます。

サーバーおよびクラスター上での Service Component Architecture (SCA) サポートに関する考慮事項:

サーバーおよびクラスターでは、Service Component Architecture (SCA) アプリケーション、アプリケーション宛先、またはその両方をサポートできます。

SCA アプリケーション (サービス・アプリケーションとも呼ばれる) では、自動的に作成される 1 つ以上のサービス統合バスを使用する必要があります。各アプリケーションでは、一連のメッセージング・リソース (宛先 と呼ばれる) が使用されます。これらの宛先には構成されたメッセージング・エンジンが必要であり、またこれらの宛先はアプリケーションと同じサーバーまたはクラスター、あるいはリモート・サーバーまたはリモート・クラスター上でホストすることができます。通常、メッセージング・エンジンでは、データベース・データ・ソースが使用されます。スタンドアロン・サーバー・プロファイルでは、データベース・データ・ソースの代わりにファイル・ストアを使用できることに注意してください (プロファイル作成時にそのオプションを選択した場合)。

Network Deployment 環境または管理対象ノード環境内の新規のサーバーとクラスターは、デフォルトでは SCA アプリケーションとそれらの宛先をホストするようには構成されません。

注: スタンドアロン・サーバーでは、SCA サポートが自動的に構成されます。この構成を使用不可能にすることはできません。

このサポートを有効にするには、管理コンソールの「Service Component Architecture」ページを使用します。サーバーの場合、アプリケーション・クラス・ローダー・ポリシーが「複数」に設定されていることを確認します。

Network Deployment 環境または管理対象ノード環境内にあるサーバーまたはクラスターに対して、SCA サポートを使用可能にする前に、以下の可能な構成のいずれを実装するかを決定します。

- **リモート・バス・メンバーの構成:** サーバーまたはクラスターでは SCA アプリケーションがホストされますが、宛先はリモート・サーバーまたはリモート・クラスター上でホストされます。このシナリオでは、宛先をホストするために必要なメッセージング・エンジンを使って、リモート・サービス統合バス・メンバーを構成する必要があります。

リモート・メッセージングの使用には、サービス統合バスとそのメンバーの計画を立てて構成するための初期投資が必要になりますが、この構成はアプリケーション・クラスター内の複数のメンバーで再利用できます。メッセージは、すべてのメンバーに配布されます。また、フェイルオーバー・サポートを提供するように初期構成を構造化することもできます。

- **ローカル・バス・メンバーの構成:** サーバーまたはクラスターでは SCA アプリケーションおよびアプリケーション宛先の両方がホストされます。必要なメッセージング・エンジンは、サーバーまたはクラスター上のローカル・バス・メンバーを使用して構成されます。

計画の各トピックを参照して、ご使用の環境にいずれの構成が適しているかを判断してください。

関連情報:

 [サーバーのクラス・ローダーの構成](#)

 [サービス統合バスについて](#)

 [メッセージング・エンジン](#)

Business Space の構成

Business Space powered by WebSphere を構成することで、IBM ビジネス・プロセス・マネジメント・ポータルフォリオ、WebSphere エンタープライズ・サービス・バス、およびその他の IBM 製品全体にわたって Web インターフェースを作成、管理、および統合するための共通インターフェースをアプリケーション・ユーザーに提供できます。

ビジネス・ルールおよびセレクターの構成

ビジネス・ルールおよびセレクターは、基準に基づいて処理の結果を変更できるため、ビジネス・プロセスに柔軟性が提供されます。ビジネス・ルールおよびセレクターのコンポーネントを含むアプリケーションをインストールする前に、ビジネス・ルール動的リポジトリをインストールする必要があります。スタンドアロン・サーバー用または Network Deployment 用のビジネス・ルール動的リポジトリをインストールできます。

ビジネス・ルールとセレクターの監査ログの構成:

ビジネス・ルールとセレクターの新規作成、変更、および削除を追跡するログの値として、デフォルト値とは異なる値を使用するように、サーバーを構成できます。構成を変更すると、サーバー上のリソースを効率的に使用できます。

このタスクを実行するには、管理コンソールを使用している必要があります。

このタスクに必要なセキュリティー・ロール: セキュリティーとロール・ベースの許可が有効になっている場合、このタスクを実行するには、コンフィギュレーターとしてログインする必要があります。

サーバーを実稼働環境で一定期間実行した後で、ビジネス・ルールとセレクターの監査ログのためにサーバーが使用しているデフォルト値を調整する必要があると判断することがあります。

ビジネス・ルールとセレクターの監査ログを構成するには、以下のステップを実行します。

1. 「サーバー」>「アプリケーション・サーバー」> *servername* > 「ビジネス・ルール」> 「ビジネス・ルールとセレクター監査」をクリックして、「ビジネス・ルールとセレクター監査」ページにナビゲートします。
2. 必要な変更のタイプに応じて、以下のいずれかを実行します。

変更のタイプ	アクション
即時	<ol style="list-style-type: none">1. 「ランタイム」タブを選択します。2. 必要な変更を入力します。3. オプション: 永続的に変更するには、「構成へのランタイム変更も保管」を選択して、変更内容をリポジトリにコピーします。4. 変更を適用してから前のページに戻るには、「OK」をクリックします。変更の適用後もこのページを表示したままにするには、「適用」をクリックします。

変更のタイプ	アクション
遅延	<ol style="list-style-type: none"> 1. 「構成」タブを選択します。 2. 必要な変更を入力します。 3. 変更を適用してから前のページに戻るには、「OK」をクリックします。変更の適用後もこのページを表示したままにするには、「適用」をクリックします。 4. 変更内容を有効にするには、サーバーを再始動します。

指定した属性が監査ログに適用されます。

注: WebSphere Application Server 6.1 でセキュリティーが有効に設定されている場合、サーバー・ユーザー ID の指定方法のために、ビジネス・ルールとセクター監査の構成の変更が必要なことがあります。サーバー・ユーザー ID にデフォルト値が使用されている場合は、ビジネス・ルールまたはセクターのインストール後にビジネス・ルールまたはセクターが含まれているアプリケーションが開始され、ビジネス・ルールまたはセクターを使用する監査可能アクションが実行されると、自動生成されたサーバー ID 値がユーザーの監査レコードに記録されます。インストール後のアプリケーションの開始、管理クライアント、または管理コンソールでのインポートまたはエクスポートによってビジネス・ルールまたはセクターの成果物に変更されると、監査可能なアクションが発生します。生成される値は、他の監査レコードで使用されているユーザー ID の形式と一致していないことがあり、より一貫性のある値が必要な場合があります。

サーバー ID を指定するには、「リポジトリに保管されたサーバー ID」を使用するオプションを選択します。これにより、ユーザー・リポジトリのユーザー ID がサーバー・プロセスに関連付けられます。ビジネス・ルールまたはセクターの成果物がリポジトリにインストールされた後で、ビジネス・ルールまたはセクターを含むアプリケーションが開始され、ビジネス・ルールまたはセクターを使用する監査可能アクションが実行されると、監査レコードでこの ID が使用されます。

管理クライアント (ビジネス・ルール・マネージャーなど) による変更が行われる監査アクション、およびビジネス・ルール・グループのエクスポートやインポートなどの管理アクションには、サーバー ID 値は影響しません。このようなアクションの場合、監査レコードでは認証済みユーザーが使用されます。

サーバー・ユーザー ID の変更について詳しくは、『アプリケーションと環境の保護』の各トピックと、WebSphere Application Server Network Deployment セキュリティーに関する資料を参照してください。

コマンドを使用したビジネス・ルールとセクター監査の構成 (Configuring business rule and selector auditing using commands):

サーバーの実行中に特性を変更する必要がある場合には、コマンドを使用して、ビジネス・ルールとセクターの監査を構成します。

これらのコマンドは、サーバーのコマンド行環境から実行する必要があります。

このタスクに必要なセキュリティー・ロール: セキュリティーとロール・ベースの許可が有効になっている場合、このタスクを実行するには、コンフィギュレーターとしてログインする必要があります。

ビジネス・ルールとセクターを監査するサーバーの数を変更する必要があるにもかかわらず、関連するサーバーを再始動できない場合があります。コマンド行を使用して、サーバーの構成をバッチ・モードで自動化できます。以下のタスクは、コマンドを使用して 1 つのサーバーを構成する方法を示しています。

重要: これらの設定は、サーバーを再始動した場合には保管されません。これらのコマンドを入力した後で構成を保管するには、管理コンソールを使用する必要があります。「サーバー」>「サーバー・タイプ」>「WebSphere Application Server」>「*servername*」>「ビジネス・ルール」>「ビジネス・ルールとセレクター監査」>「ランタイム」または「サーバー」>「サーバー・タイプ」>「WebSphere Application Server」>「*servername*」>「セレクター」>「ビジネス・ルールとセレクター監査」>「ランタイム」を選択します。

コマンドを使用したビジネス・ルールとセレクターの監査を構成するには、以下のステップを実行します。

注: 以下のタスクでは、サーバー **server1** を構成します。サーバーの名前が **server1** でない場合は、以下の **server1** を、そのサーバーの名前で置き換えます。ステップ 3 以降のすべてのステップは、**jac1** スクリプトに組み込んで実行できます。

1. 管理環境に入ります。

wsadmin

2. 監査ロギングを構成するか、既存の構成を変更するかを決定します。

タスク	コマンド
監査ロギングの構成	set mbean [\$AdminControl queryNames *:*,name=CustomizationAuditMBean,process=server1]
監査ロギング構成の変更	set auditconfig [\$AdminConfig list AuditLog]

3. 該当するコマンドを入力します。

監査ロギングを構成または変更するコマンド

重要: 既存の構成を変更するコマンドを入力する場合は、変更内容を保管する必要があります。サーバーを再始動しないと、変更内容は有効になりません。

以下は、入力可能なコマンドです。

\$AdminControl invoke \$mbean getSeparateAuditLogEnabled

別個の監査ログへのロギングを実行するかどうかを判別するために使用します。

\$AdminControl invoke \$mbean setSystemOutAuditLogEnabled {boolean}

SystemOut.log ファイルへのロギングを使用可能または使用不可にするために使用します。Boolean には、true または false を指定できます。

\$AdminControl invoke \$mbean getSeparateAuditLogFileName

別個の監査ログのファイル名を判別するために使用します。

\$AdminControl invoke \$mbean setSeparateAuditLogFileName {filename}

新規のログ・ファイルの名前 (MyAudit.log など) を設定するために使用します。

\$AdminControl invoke \$mbean getSeparateAuditLogFileRolloverSize

監査ログのサイズを判別するために使用します。

\$AdminControl invoke \$mbean setSeparateAuditLogFileRolloverSize integer

システムが監査ログをヒストリー・ファイルへロール・オーバーする条件となる、監査ログのサイズを設定するために使用します。サイズはメガバイト単位です。

\$AdminControl invoke \$mbean getSeparateAuditLogFileMaxNumberOfBackupFiles

監査ログ・ヒストリー・ファイルの数を判別するために使用します。

\$AdminControl invoke setSeparateAuditLogFileMaxNumberOfBackupFiles *integer*

監査ログ・ヒストリー・ファイルの数を設定するために使用します。

\$AdminControl invoke \$mbean setSeparateAuditLogEnabled *{boolean}*

別個のログ・ファイルへのロギングを開始または停止するために使用します。*Boolean* には、true または false を指定できます。

\$AdminConfig showall \$auditconfig

現在の監査ログ構成を表示するために使用します。

\$AdminConfig modify \$auditconfig {{separateAuditLogEnabled true}}

別個の監査ログへのロギングを使用可能にするために使用します。

\$AdminConfig modify \$auditconfig {{systemOutAuditLogEnabled false}}

system.Out ファイルへの監査を使用不可にするために使用します。

\$AdminConfig modify \$auditconfig {{customAuditLog {{maxNumberOfBackupFiles 7} {rolloverSize 7}}}}

監査ログ・ヒストリー・ファイルの数と監査ログ・ファイルのサイズを変更するために使用します。

\$AdminConfig modify \$auditconfig {{customAuditLog {{fileName MyAudit.log}}}}

監査ログ・ファイルの名前を変更するために使用します。

\$AdminConfig save

構成を保管するために使用します。

管理コンソールを開き、「サーバー」>「サーバー・タイプ」>「WebSphere Application Server」>「*servername*」>「ビジネス・ルール」>「ビジネス・ルールとセレクター監査」>「ランタイム」、または「サーバー」>「サーバー・タイプ」>「WebSphere Application Server」>「*servername*」>「セレクター」>「ビジネス・ルールとセレクター監査」>「ランタイム」を選択して、変更を保存します。あるいは、**\$AdminConfig save** と入力します。

注: WebSphere Application Server 6.1 でセキュリティーが有効に設定されている場合、サーバー・ユーザー ID の指定方法のために、ビジネス・ルールとセレクター監査の構成の変更が必要ことがあります。サーバー・ユーザー ID にデフォルト値が使用されている場合は、ビジネス・ルールまたはセレクターのインストール後にビジネス・ルールまたはセレクターが含まれているアプリケーションが開始され、ビジネス・ルールまたはセレクターを使用する監査可能アクションが実行されると、自動生成されたサーバー ID 値がユーザーの監査記録に記録されます。インストール後のアプリケーションの開始、管理クライアント、または管理コンソールでのインポートまたはエクスポートによってビジネス・ルールまたはセレクターの成果物に変更されると、監査可能なアクションが発生します。生成される値は、他の監査記録で使用されているユーザー ID の形式と一致していないことがあり、より一貫性のある値が必要な場合があります。

サーバー ID を指定するには、「リポジトリに保管されたサーバー ID」を使用するオプションを選択します。これにより、ユーザー・リポジトリのユーザー ID が、サーバー・プロセスに関連付けられます。ビジネス・ルールまたはセレクターの成果物がリポジトリにインストールされた後で、ビジネス・ルールまたはセレクターを含むアプリケーションが開始され、ビジネス・ルールまたはセレクターを使用する監査可能アクションが実行されると、監査記録でこの ID が使用されます。

管理クライアント (ビジネス・ルール・マネージャーなど) による変更が行われる監査アクション、およびビジネス・ルール・グループのエクスポートやインポートなどの管理アクションには、サーバー ID 値は影響しません。このようなアクションの場合、監査記録では認証済みユーザーが使用されます。

サーバー・ユーザー ID の変更についての詳細は、『アプリケーションと環境の保護』の各トピックと、WebSphere Application Server の WebSphere Application Server Network Deployment セキュリティーに関する資料を参照してください。

ビジネス・ルール・マネージャーのインストールの考慮事項:

ビジネス・ルール・マネージャー (Business Process Rules Manager と呼ばれます) を分散環境で使用する場合、セル、ノード、クラスター概念、および実行時のパフォーマンスを最適にするビジネス・ルール・マネージャーのセットアップ方法を理解する必要があります。

アプリケーション・サーバーは、セル、ノード、およびサーバー概念に基づいて編成されます。スタンドアロン・サーバー構成では、1 つのセルには 1 つのノードが含まれ、各ノードには 1 つのサーバーが含まれます。システム管理アプリケーションとユーザー・アプリケーションはすべて同じサーバーで稼働します。スタンドアロン・サーバー構成では、ビジネス・ルール・マネージャーを同じアプリケーション・サーバーにインストールできます。また、ビジネス・ルール・マネージャーにはデフォルトの URL からアクセスできます。

分散サーバー構成では、1 つのセルに複数のノードが含まれ、各ノードに複数のアプリケーション・サーバーが含まれるように構成できます。各セルは、単一の管理ドメインを構成します。この構成では、ドメイン全体で中央管理、ワークロード管理、およびフェイルオーバー構成を使用できます。

分散サーバー構成でパフォーマンスを最適にするには、ビジネス・ルール・マネージャーを管理デプロイメント・ターゲット (ビジネス管理サービスが中央にホストされているセル内のアプリケーション・サーバー) にインストールします。通常、このサーバーは Common Event Infrastructure サービスをホストするサーバーです。

セル内では、すべてのサーバーが単一のビジネス・ルール・リポジトリを使用および共有します。ビジネス・ルール・リポジトリにアクセスすると、ビジネス・アプリケーションがどの場所にインストールされているかにかかわらず、すべての動的ビジネス・ルール成果物の定義にアクセスできます。

実行時にセル内のすべてのビジネス・ルールが使用できるこの中央ストレージがあることによって、セル内のどのアプリケーション・サーバーにもビジネス・ルール・マネージャーをデプロイできます。また、ビジネス・ルール・マネージャーは、セル内のすべてのビジネス・ルールの一貫性のあるビューを提供します。ただし、高可用性を考慮すると、ビジネス・ルール・マネージャーを管理デプロイメント・ターゲット (ビジネス管理サービスが中央でホストされているセル内の専用アプリケーション・サーバー) にデプロイすることを、システム管理者にお勧めします。管理デプロイメント・ターゲット・サーバーは、Common Event Infrastructure サービスやその他のビジネス管理アプリケーションがインストールされているのと同じサーバーです。この構成では、高可用性が必要な場合、管理デプロイメント・ターゲット・サーバーをクラスター化して、アプリケーション・ユーザーに拡張が容易なソリューションを提供できます。

管理コンソールを使用したビジネス・ルール・マネージャーのインストール:

ビジネス・ルール・マネージャー (Business Process Rules Manager と呼ばれる) を Process Server 上のエンタープライズ・アプリケーションとしてインストールして、実行時にビジネス・ルールを管理できます。プロファイル管理ツールの「ビジネス・ルール・マネージャーの構成」ページのチェック・ボックスを選択して IBM Business Process Manager プロファイルを作成する時点で、同時にビジネス・ルール・マネージャーをインストールできます。また、管理コンソールの構成ページか、ご使用のオペレーティング・システムに対応する JACL コマンドを使用して、ビジネス・ルール・マネージャーをインストールすることもできます。詳しくは、各インストール方法の個々のトピックを参照してください。

セキュリティーとロール・ベースの許可が有効になっている場合、このタスクを実行するには、管理者またはコンフィギュレーターとしてログインする必要があります。

管理コンソールを使用してビジネス・ルール・マネージャーをインストールするには、以下のステップを実行します。

1. 管理コンソールが稼働していることを確認します。
2. ナビゲーション・ペインで、「サーバー」>「サーバー・タイプ」>「WebSphere Application Server」または「サーバー」>「クラスター」>「WebSphere Application Server クラスター」をクリックします。
3. サーバーまたはクラスター・ターゲットの名前を選択します。
4. 「構成」タブを含むページで、「Business Integration」の下にある「ビジネス・ルール」を展開して、「ビジネス・ルール・マネージャーの構成」をクリックします。
5. 「一般プロパティ」から、「ビジネス・ルール・マネージャーのインストール」チェック・ボックスを選択します。

注: ビジネス・ルール・マネージャーが既にインストールされている場合は、このチェック・ボックスがチェックされた状態になりますが、このページからビジネス・ルール・マネージャーをアンインストールすることはできないのでぼかし表示されます。ただし、アプリケーションのリストを表示し、このリストから手動でアンインストールできます。

6. 「コンテキスト・ルート」フィールドで、デフォルト・コンテキスト・ルートの /br を受け入れるか、またはビジネス・ルール・マネージャー URL のカスタム・コンテキスト・ルートを入力します。
7. 「OK」をクリックします。
8. 構成を保管します。

ナビゲーション・ペインで、「アプリケーション」>「アプリケーション・タイプ」>「WebSphere エンタープライズ・アプリケーション」をクリックし、「ビジネス・ルール・マネージャーの始動 (Start Business Rules Manager)」を選択します。

JACL コマンドを使用したビジネス・ルール・マネージャーのインストール:

Windows および Linux では、ビジネス・ルール・マネージャーをインストールするときに、管理コンソールの代わりに JACL コマンドを使用できます。JACL コマンドを使用できるのは、IBM Business Process Manager をインストールしてプロファイルを作成したときに、ビジネス・ルール・マネージャーをインストールしていなかった場合です。

このタスクに必要なセキュリティー・ロール: セキュリティーとロール・ベースの許可が有効になっている場合、このタスクを実行するには、管理者またはコンフィギュレーターのロールに割り当てられているユーザー ID を使用して認証される必要があります。

JACL コマンドを使用してビジネス・ルール・マネージャーをインストールするには、以下のステップを実行します。

1. Process Server が始動していることを確認します。
2. オペレーティング・システムのシェル環境またはコマンド・プロンプトを開き、`install_root/bin` ディレクトリー (Windows の場合は `install_root%bin` ディレクトリー) に移動します。
3. オペレーティング・システム独自のインストール・コマンドを以下のように実行します。
 - Windows で実行するコマンド: `wsadmin.bat -f installBRManager.jacl [-s servername -n nodename | -cl clustername] -ce cellname -r rootname`

- Linux で実行するコマンド: `wsadmin.sh -f ./installBRManager.jacl [-s servername -n nodename | -cl clustername] -ce cellname -r rootname`

ビジネス・ルール・マネージャーをインストールして、それを複数のターゲットにマップするには、ご使用のオペレーティング・システムで以下のコマンドを実行します。

- Windows で実行するコマンド: `wsadmin.bat -f installBRManager.jacl -m “{{target1} {target2} ... {targetn}}” -ce cellname -r rootname`
- Linux で実行するコマンド: `wsadmin.sh -f installBRManager.jacl -m “{{target1} {target2} ... {targetn}}” -ce cellname -r rootname`
- z/OS で実行するコマンド: `wsadmin.sh -f installBRManager.jacl -m “{{target1} {target2} ... {targetn}}” -ce cellname -r rootname`

注: パラメーター「-m」(「複数 (multiple)」を意味する) を指定すると、ビジネス・ルール・マネージャーを複数のターゲットに一括でインストールしてマップできます。複数のターゲットを二重引用符で囲みます。

ここで、

servername

アプリケーション・サーバーの名前。

Network Deployment 構成内でクラスターが指定されていない場合には、引数のペア「-s *servername*」が必要です。欠落している場合、*servername* のデフォルト値は「server1」です。

nodename

インストール・ノードの名前。

Network Deployment 構成内でクラスターが指定されていない場合には、引数のペア「-n *nodename*」が必要です。

clustername

アプリケーションをインストールするクラスターの名前。

Network Deployment 構成内でサーバー名とノード名が指定されていない場合には、引数のペア「-cl *clustername*」が必要です。

注: ノードとサーバーを指定するか、またはクラスターを指定する必要があります。両方は指定しないでください。

cellname

インストール・セルの名前。

引数のペア「-ce *cellname*」はオプションです。

rootname

アプリケーション・ルート・ディレクトリーの名前。

引数のペア「-r *rootname*」はオプションです。欠落している場合、*rootname* のデフォルト値は「/br」です。

target_i ビジネス・ルール・マネージャーをインストールしてマップするターゲット (*i* は 1、2、...、*n*)。

ターゲットは (-s *servername* および -n *nodename*) または -cl *clustername* のいずれかです。

重要: IBM Business Process Manager が単一サーバー環境で構成されている場合、これらの引数のペアのすべてはオプションです。Process Server が Network Deployment 環境用に構成されている場合、以下の引数ペアのいずれかが必要です。

- (-s *servername* および -n *nodename*)
- または -cl *clustername*
- または -m "{{target1} {target2} ... {targetn}}"

他の引数ペアはオプションです。

例: ビジネス・ルール・マネージャー・アプリケーションを以下のターゲットにマップするとします。

- クラスター「BofACluster」
- Web サーバー「RedirectorServer」およびノード「AIXNode01」
- アプリケーション・サーバー「LinuxServer」およびノード「LinuxNode02」

コンテキスト・ルートは「bofa/brm」です。

以下のようにコマンドを実行します。

```
install_root/bin/wsadmin -f installBRManager.jacl -m "{{-cl BofACluster} {-n AIXNode01 -s RedirectorServer} {-s LinuxServer -n LinuxNode02}}" -r bofa/brm
```

AdminTask コマンドを使用したビジネス・ルール・マネージャーのインストール:

AdminTask コマンドを使用して、ビジネス・ルール・マネージャー（「Business Process Rules Manager」とも呼ばれる）をインストールできます。IBM Business Process Manager をインストールしてプロファイルを作成したときに、ビジネス・ルール・マネージャーをインストールしなかった場合は、AdminTask コマンドを使用してください。

このタスクに必要なセキュリティ・ロール: セキュリティーとロール・ベースの許可が有効になっている場合、このタスクを実行するには、管理者またはコンフィギュレーターとしてログインする必要があります。

AdminTask コマンドを使用してビジネス・ルール・マネージャーをインストールするには、以下のステップを実行します。

1. IBM Business Process Manager が始動していることを確認します。
2. コマンド・ウィンドウで IBM Business Process Manager のホーム・ディレクトリーに移動して、ディレクトリー /bin に切り替えます。
3. wsadmin コマンドを実行して、wsadmin モードに入ります。
4. 以下のいずれかのコマンドを入力して、ビジネス・ルール・マネージャーをインストールします。

```
wsadmin> $AdminTask configBusinessRulesManager {-serverName <serverName> -nodeName <nodeName> -contextRoot <contextRoot>}
```

または

```
wsadmin> $AdminTask configBusinessRulesManager {-clusterName <clusterName> -contextRoot <contextRoot>}
```

ここで、

serverName

アプリケーション・サーバーの名前。

nodeName

インストール・ノードの名前。

clusterName

アプリケーションをインストールするクラスターの名前。

contextRoot

アプリケーションを起動するために使用するコンテキスト・ルート。デフォルト値は /br です。

5. **wsadmin> \$AdminConfig save** を実行して、構成を保存します。

ヒント: **\$AdminTask help configBusinessRulesManager** を実行すると、そのパラメーターの詳細を知ることができます。

例: コンテキスト・ルート「br」を使用してサーバー「cvuServer」およびノード「cvuNode01」にビジネス・ルール・マネージャーをインストールするには、以下のコマンドを入力します。

```
wsadmin> $AdminTask configBusinessRulesManager {-serverName cvuServer -nodeName cvuNode01  
-contextRoot br}
```

次に構成を保存するには、以下のように入力します。

```
wsadmin> $AdminConfig save
```

ビジネス・ルール・マネージャーのサーバー・セキュリティの構成:

サーバーでセキュリティを使用する場合は、ビジネス・ルール・マネージャーを使用しているサーバーを構成する必要があります。サーバーでセキュリティを使用可能に設定しない場合は、追加の構成なしでビジネス・ルール・マネージャーを使用できます。

異なるロールまたはユーザー ID がある場合、サーバーの構成時に管理セキュリティを設定する必要があります。サーバーのセキュリティを設定するには、以下のステップを実行します。

1. ユーザー ID の作成時に各 ID にロールを割り当てることにより、ユーザー ID に管理セキュリティを設定します。各ユーザー ID を作成して、それをロール BusinessRuleUser にマップします。

ロールを設定するには、ビジネス・ルール・マネージャー・アプリケーションにナビゲートし（「**アプリケーション**」>「**エンタープライズ・アプリケーション**」）、ビジネス・ルール・マネージャー・アプリケーションを選択します。「**ユーザー/グループ・マッピングへのセキュリティ・ロール**」を選択し、BusinessRuleUser ロールを更新します。

BusinessRuleUser ロール以外に、NoOne と AnyOne という 2 つのロールが定義されています。NoOne は、直接アクセスすべきではないリソースを明示的に設定する場合に開発者が使用します。AnyOne は、Process Server 環境の許可を取得する場合に Tivoli® Access Manager が使用します。

注: 管理セキュリティが有効に設定された ND 環境において、ポート 908n (n は正の整数) 上でビジネス・ルール・マネージャーを実行する場合は、ポート「944(n+3) とホスト値 "*" を構成する必要があります。該当するポートがない場合は、ビジネス・ルール・マネージャーを起動する前に手動で構成します。

2. Cookie を使用してセッションを追跡するように、セッション・トラッキング・メカニズムを設定します。

3. 最低でも、適切なセッション・タイムアウト値を必ず設定します。

ビジネス・ルール・マネージャーを正常に動作させるための Web ブラウザーの構成:

サーバーは、ビジネス・ルール・マネージャーのインストール中に自動的にクライアントを構成しますが、ビジネス・ルール・マネージャーが正しく動作するように、Web ブラウザーが正しく構成されていることを確認する必要があります。

ビジネス・ルール・マネージャー用の Web ブラウザーが正しく構成されていることを確認するには、以下のステップを実行します。

1. Web ブラウザーでスクリプトが使用可能であることを確認します。

ビジネス・ルール・マネージャーが動作するには、スクリプトが機能する必要があります。

2. Cookie が使用可能であることを確認します。

ビジネス・ルール・マネージャーを使用する場合、必要に応じてセッションの追跡に Cookie が使用されます。このため、セッションを追跡できるように、ブラウザーで Cookie を使用可能にします。

Cookie を使用可能にする場合、必ずシステム管理者に連絡してください。

リレーションシップ・サービスの構成

製品をインストールした後で、リレーションシップ・サービス用の構成プロパティを設定する必要があります。

このタスクに必要なセキュリティー・ロール: セキュリティーと役割ベースの許可が有効になっている場合、このタスクを実行するには、コンフィギュレーターまたは管理者としてログインする必要があります。どの WebSphere セキュリティー・ロールでもこの構成を表示できます。

リレーションシップ・サービスのデータ・ソース・プロパティと照会ブロック・サイズ・プロパティ (リレーションシップ・インスタンス・カウント) を設定するには、以下のステップを実行します。

1. 管理コンソールが稼働していることを確認します。
2. ナビゲーション・ペインで、「統合アプリケーション」 > 「Relationship Manager」をクリックします。
3. 「リレーションシップ・サービス構成」をクリックします。

タブ付きの構成ページが表示され、現在インストールされているリレーションシップ・サービスの名前とバージョン (読み取り専用) が示されます。

4. 「照会ブロック・サイズ (リレーションシップ・インスタンスのカウント) (Query block size (relationship instance count))」フィールドに、リレーションシップ・サービスがリレーションシップ照会用に確保する最大キャッシュを指定します。この設定により、照会結果セットのサイズが決定します。デフォルトでは、5000 個のリレーションシップ・インスタンスが一度に読み取られます。このフィールドによってサーバー・サイズ・メモリー使用量が制御されるため、管理者は、任意の照会が消費できるメモリー・リソースの量を一定の範囲内で制御できるようになります。
5. 「データ・ソース」フィールドで、セル・レベルで定義されたデータ・ソースの Java Naming and Directory Interface (JNDI) 名を入力して、リレーションシップ・サービスのデフォルトのデータ・ソースを指定します。これは、リレーションシップ・サービス用のテーブルが保管される場所です。デフォルトでは、各リレーションシップ関連スキーマはこのデータ・ソース内に作成されます。
6. 次のオプションを選択できます。
 - 「OK」をクリックして、変更を保存し、前のページに戻ります。

- 変更をクリアして現在構成されている値または最後に保存された値を復元するには、「リセット」をクリックします。
- そのページで保存されていない変更内容を破棄して前のページに戻るには、「キャンセル」をクリックします。

メッセージング・サーバー環境のセットアップ

XMS アプリケーション (XMS に付属のサンプル・アプリケーションを含む) を実行する前に、メッセージング・サーバー環境をセットアップする必要があります。

メッセージング・サーバー環境をセットアップするために実行すべき手順は、アプリケーションが接続する成果物と、Message Service Client for .NET か Message Service Client for C/C++ のどちらを使用しているかによって異なります。これらの手順については、当該タイプのクライアントに関する資料で説明されています。

- Message Service Client for .NET のセットアップ
- Message Service Client for C/C++ のセットアップ

メッセージ・サービス・クライアントに付属のサンプル・アプリケーションを使用すると、インストールおよびメッセージング・サーバーのセットアップを検証することができます。サンプル・アプリケーションの使用について詳しくは、以下のトピックを参照してください。

- .NET のサンプル XMS アプリケーションの使用
- C/C++ のサンプル XMS アプリケーションの使用

JNDILookup Web Service の構成

Message Service Clients for C/C++ and .NET を備えた IBM Business Process Manager で提供された管理 JMS オブジェクトを使用する場合、IBM Business Process Manager が提供する JNDILookup Web Service を、非 Java クライアントが非 Java 環境から管理 JMS オブジェクトにアクセスできるように構成する必要があります。

このタスクを開始する前に、JNDILookup Web サービス・アプリケーションがインストールされていることを確認してください。

管理上定義された ConnectionFactory オブジェクトおよび Destination オブジェクトによって、JMS 実装と JMS インターフェースが分離されます。これにより、JMS クライアント・アプリケーションが JMS プロバイダーの実装詳細から隔離されるため、移植性が高まります。管理対象オブジェクトを使用すると、管理者は中央リポジトリからクライアント・アプリケーションの接続設定を管理できるようになります。例えば、アプリケーションが JNDI を通じて取得する管理対象の Destination オブジェクトを変更することで、アプリケーションが使用する特定のキューを変更できます。

Message Service Clients for C/C++ and .NET などの非 Java クライアントも管理対象オブジェクトを使用できます。ただし、IBM Business Process Manager によって提供される管理対象の JMS オブジェクトは、JNDI を通じてアクセスされる直列化 Java オブジェクトなので、非 Java クライアントは JNDILookup Web サービスを使用しないとこれらのオブジェクトを正しく解釈できません。この Web サービスによって提供されるルックアップ・オペレーションを使用すると、Message Service Clients for C/C++ and .NET がオブジェクト名を指定することで JNDI オブジェクトの取得を要求できるようになります。管理対象オブジェクトのプロパティは、名前/値ペアのマッピングを使用してアプリケーションに返されます。

Message Service Client for C/C++ または Message Service Client for .NET アプリケーション内で JNDILookup Web サービス URL を定義します。アプリケーション内で Web サービス URL を定義する

には、InitialContext オブジェクトの XMSC_IC_URL プロパティを Web サービスのエンドポイント URL に設定します。このプロパティは、InitialContext オブジェクトの構成時に引数として指定することも可能です。

CEI データベースの構成

Common Event Infrastructure (CEI) データベースを手動で構成して、IBM Business Process Manager 用の CEI 機能を使用することができます。

このトピックの手順では、IBM Business Process Manager とともに使用するための CEI データベースの構成方法について説明します。

1. CEI イベント・サービス用のデータ・ストアを作成するには、以下の適切なコマンドを実行します。

- configEventServiceDB2DB
- configEventServiceDB2ZOSDB
- configEventServiceOracleDB
- configEventServiceSQLServerDB

重要: 実稼働環境用のイベント・サービス・データ・ストアは作成しないでください。永続化イベントのパフォーマンスに影響する場合があります。

2. データベース・スクリプトの生成後、**\$AdminConfig save** を使用して変更内容を保存します。データベース・スクリプトの生成に加えて、コマンドにより CEI イベント・サービスで使用する JDBC リソースが作成されます。
3. 生成したスクリプトをデータベース・サーバーにコピーします。スクリプトのディレクトリーの場所は、CEI がデプロイされるスコープによって異なります。

クラスター・スコープでのディレクトリーの場所は以下のとおりです。

```
profile_root/databases/event/<cluster_name>/dbscripts/<database_type
```

サーバー・スコープでのディレクトリーの場所は以下のとおりです。

```
profile_root/databases/event/<node_name>/<server_name>/dbscripts/<database_type
```

この *profile_root* は以下のいずれかです。

- AIX の場合: **/usr/IBM/WebSphere/AppServer/profiles/profile_name**
- Linux の場合: **/opt/IBM/WebSphere/AppServer/profiles/profile_name**
- Solaris の場合: **/opt/IBM/WebSphere/AppServer/profiles/profile_name**
- Windows の場合: **C:\Program Files\IBM\WebSphere\AppServer\profiles\profile_name**

デフォルト・ディレクトリーの表記規則については、『製品およびプロファイルのデフォルトのインストール・ディレクトリー』を参照してください。

4. データベースに対する読み取りと書き込みのアクセス権を持つユーザーで、データベース・サーバーにログインします。コマンド・プロンプトを開き、データベース・ソフトウェアのコマンド行インターフェースを初期化します。イベント・データベースを作成するには、ご使用のデータベース・タイプのスクリプト (例えば **cr_event_db2 server <db2_user>**) を実行してください。

引き続き IBM Business Process Manager コンポーネントを構成します。

関連概念:

96 ページの『Common Event Infrastructure データベース構成の計画』

Common Event Infrastructure (CEI) データベース仕様には、サポートされるデータベースのタイプ、スキーマの場所、プロファイル構成タイプ、および必要なユーザー ID の特権がリストされます。オプションで、CEI データベースを使用して、それが IBM Business Process Manager をモニターしているときに取り込まれるイベントを保管することができます。

WebSphere Portal 用の IBM Business Process Manager ウィジェットの構成

IBM Business Process Manager ウィジェットを WebSphere Portal に表示することができます。

ウィジェットを WebSphere Portal に表示するためのステップの概要は以下のとおりです。

1. Business Space を構成します。
2. WebSphere Portal と連携するようにウィジェットを構成します。

Common Event Infrastructure の構成

サーバー AdminTask オブジェクトを使用して、Common Event Infrastructure リソースを構成できるほか、既存のリソースを変更することもできます。

Network Deployment 環境、クラスター構成、またはスタンドアロン・サーバー構成に CEI をインストールする場合は、管理コンソールを使用して CEI を構成します。

また、wsadmin コマンドを使用して CEI を構成するか、既存の CEI 構成を変更するコマンドを使用することもできます。いずれの場合も、サーバー AdminTask オブジェクトを使用して管理コマンドを実行することにより、CEI の構成を変更します。

CEI 構成を変更した後、サーバーまたはクラスターを再始動する必要があります。

Common Event Infrastructure コンポーネント:

Common Event Infrastructure コンポーネントは、一連のアプリケーション、サービス、およびリソースとしてサーバー上にインストールされます。

Common Event Infrastructure を構成すると、いくつかのコンポーネントが作成され、サーバー上にデプロイされます。

Common Event Infrastructure サービス

サーバーにインストールされるサービスで、アプリケーションおよびクライアントが Common Event Infrastructure を使用できるようにします。Common Event Infrastructure サービスの構成は、次のようにして管理コンソールに表示できます。

- サーバーの場合は、「サーバー」 > 「アプリケーション・サーバー」 > *server_name* > 「ビジネス・インテグレーション」 > 「Common Event Infrastructure」 > 「Common Event Infrastructure サービス」をクリックします。
- クラスターの場合は、「サーバー」 > 「クラスター」 > *cluster_name* > 「ビジネス・インテグレーション」 > 「Common Event Infrastructure」 > 「Common Event Infrastructure サービス」をクリックします。

「イベント・インフラストラクチャー・サーバーを使用可能に設定」というチェック・ボックスが選択されている場合、サービスはインストール済みで稼働しているか、サーバーまたはクラスターを再始動すると始動します。このチェック・ボックスがクリアされている場合、サービスはインストールされていないか、サーバーまたはクラスターを再始動するとアンインストールされます。

イベント・サービス設定

イベント・サービスが使用する一連のプロパティ。これらのプロパティにより、データ・ストアを使用して、イベントの配布および永続化が可能になります。通常、このリソースに構成は必要ありませんが、同じセルに複数のイベント・サービスをセットアップする場合は、追加のイベント・サービス設定を作成することが必要な場合があります。イベント・サービス設定を表示するには、「サービス統合」 > 「イベント・サービス」 > 「イベント・サービス設定」をクリックします。

イベント・メッセージング構成

Java Messaging Service (JMS) を使用して、イベントをイベント・サービスに非同期的に転送することが可能なリソース。デフォルトのメッセージング構成では、サーバー組み込みメッセージが使用されます。必要な場合は、イベント・メッセージング用に外部の JMS プロバイダーを構成することもできます。

イベント・データベース

イベント・データベースは、イベント・サービスが受け取ったイベントを永続的に保管するために使用されます。DB2、Oracle、および SQLServer の各製品上で、外部イベント・データベースを構成することができます。

イベント・フィルター・プラグイン

フィルター・プラグインは、XPath イベント・セレクターを使用して、ソースのイベントをフィルターに掛けるために使用されます。フィルター・プロパティを構成するには、「サービス統合」 > 「Common Event Infrastructure」 > 「イベント・エミッター・ファクトリー」 > 「イベント・フィルター設定」をクリックします。

エミッター・ファクトリー

エミッター・ファクトリーは、エミッターを作成するためにイベント・ソースで使用されるオブジェクトです。エミッターは、イベントをイベント・サービスに送信するために使用されます。エミッター・ファクトリーのプロパティは、そのエミッター・ファクトリーを使用して作成したすべてのエミッターの動作に影響を与えます。使用可能なエミッター・ファクトリーを表示するには、「サービス統合」 > 「Common Event Infrastructure」 > 「イベント・エミッター・ファクトリー」をクリックします。

イベント・サービス伝送

イベント・サービス伝送は、エミッターが EJB 呼び出しを使用してイベント・サービスに同期的にアクセスする方法を決定するプロパティを定義するオブジェクトです。これらのプロパティは、エミッターを新規作成するときにエミッター・ファクトリーで使用されます。使用可能なイベント・サービス伝送は、エミッター・ファクトリー設定から表示または変更できます。

JMS 伝送

JMS 伝送は、エミッターが JMS キューを使用してイベント・サービスに非同期にアクセスする方法を決定するプロパティを定義するオブジェクトです。これらのプロパティは、エミッターを新規作成するときにエミッター・ファクトリーで使用されます。使用可能な JMS 伝送は、エミッター・ファクトリー設定から表示または変更できます。

イベント・グループ

イベント・グループは、イベントの論理的な集合であり、イベントをその内容に応じて分類するために使用されます。イベント・サービスからイベントを照会する場合、またはイベント配布をサブスクライブする場合、イベント・コンシューマーは、イベント・グループを指定することにより、そのグループのイベントのみを取得できます。イベント・グループは、永続データ・ストアに保管するイベントを指定するために使用することもできます。使用可能なイベント・グループを管理コ

ンソールで表示するには「サービス統合」 > 「Common Event Infrastructure」 > 「イベント・サービス (Event service)」 > 「イベント・サービス (Event services)」 > *event_service* > 「イベント・グループ」をクリックします。

Common Event Infrastructure サーバーの構成:

サーバー管理コンソールを使用して Common Event Infrastructure を構成します。

以下のようにして、管理コンソールの「Common Event Infrastructure サーバー」パネルを開きます。

サーバーを構成する場合は、「サーバー」 > 「サーバー・タイプ」 > 「WebSphere Application Server」 > *server_name* > 「ビジネス・インテグレーション」 > 「Common Event Infrastructure」 > 「Common Event Infrastructure サーバー」を選択します。

クラスターを構成する場合は、「サーバー」 > 「クラスター」 > 「WebSphere Application Server クラスター」 > *cluster_name* > 「ビジネス・インテグレーション」 > 「Common Event Infrastructure」 > 「Common Event Infrastructure サーバー」をクリックします。

1. Common Event Infrastructure エンタープライズ・アプリケーションのデプロイメントを可能にするために、「イベント・インフラストラクチャー・サーバーを使用可能に設定」というチェック・ボックスを選択します。「使用可能に設定」チェック・ボックスがクリアされている場合、Common Event Infrastructure はまだ構成されていないか、以前の構成が無効にされており、サーバーが再始動されていません。情報メッセージにより、このデプロイメント・ターゲットに Common Event Infrastructure が構成済みであるかどうかを示されます。

注:

- サーバーがまだ構成されていない場合に、チェック・ボックスを選択して Common Event Infrastructure サーバーを使用可能にすると、表示されたパラメーターを変更しない限り、それらのパラメーターを使用してサーバーが構成されます。
 - 共通データベースの下で、固有のスキーマの下にメッセージング・サービスが作成されます。
 - Common Event Infrastructure が構成されたサーバーまたはクラスターが再始動されると、変更が有効になります。
2. オプション: イベント・データベースを構成するために使用できる手段は、スクリプティングのみです。ただし、イベント・データベースはパフォーマンスに悪影響を及ぼすので、イベント・データベースを使用することはお勧めしません。イベント・データベースは、イベントを表示するために Common Base Event ブラウザーのみが使用します。『イベント・データベースの構成』を参照してください。
 3. Common Event Infrastructure バスがサーバー上で「ローカル」として存在するか、あるいは「リモート」として他のサーバー上に存在するかを選択します。「リモート」を選択した場合は、メニューからリモート・ロケーションを選択するか、「新規」をクリックして新規リモート・バスを作成します。
 4. メッセージング用の Common Event Infrastructure サポートを構成します。
 - 「編集」をクリックして、このパネルよりも詳細なオプション・リストを持つデータベース構成パネルを表示します。
 - パネルの各フィールドを使用して、情報を入力します。
 - a. 「データベース名」 - メッセージの保管に使用するデータベースの名前を入力します。
 - b. 「スキーマ」 - スキーマの名前を入力するか、デフォルト名を受け入れます。
 - c. 「ユーザー名」および「パスワード」 - メッセージング・データベースの認証用。
 - d. 「サーバー」 - メッセージング・データベースが存在するサーバーの名前。
 - e. 「プロバイダー」 - データベースのプロバイダーをメニューから選択します。
 5. Common Event Infrastructure バスのメッセージング認証別名を作成します。

- a. 「追加プロパティ」 > 「JMS 認証別名」を選択します。
 - b. システム統合バスでのセキュア通信に使用するユーザー ID およびパスワードを入力します。セキュリティが使用不可となっている場合、ユーザー ID およびパスワードの両方に対する CEI のデフォルト構成値を受け入れることができます。セキュリティが使用可能となった場合は、バス認証のために使用しているユーザー ID およびパスワードを入力します。実稼働環境においては、システム保護のため、所有するユーザー ID およびパスワードを選択してください。
 - c. 「OK」をクリックします。
6. 「OK」または「適用」をクリックします。
 7. サーバーまたはクラスターを再始動します。

これで、Common Event Infrastructure の主要な部分がすべて構成されて、サーバーまたはクラスターで稼働するようになります。この構成にはイベント・データ・ストア、メッセージング・エンジン、およびイベント・アプリケーションが含まれます。この単一のパネルを、本来なら Common Event Infrastructure の構成に使用する多数のコマンドやステップの代わりに使用できます。

サーバーまたはクラスターを再始動した後、アプリケーションから出力されるサービス・コンポーネント・イベントを保管できるようになります。この時点で、「**Common Event Infrastructure の宛先**」パネルを選択することにより、Common Event Infrastructure サーバーのランタイム・プロパティを変更できます。また、始動時に Common Event Infrastructure サーバーを始動するかどうかを選択したり、イベントが送信されるエミッター・ファクトリー JNDI 名を指定することができます。

イベント・メッセージングの構成:

JMS でイベントをイベント・サービスに転送する場合に使用するメッセージングの構成を変更できます。

管理コンソール・パネルを使用して、サーバー上に Common Event Infrastructure を構成するときは、Common Event Infrastructure のメッセージング・インフラストラクチャーを作成します。一般に、メッセージング構成は、イベント・サービスへのイベントの非同期伝送にデフォルトのメッセージング・プロバイダーを使用し、単一の JMS キューを作成します。必要であれば、このメッセージング構成を変更できます。

追加の JMS キューの構成:

デフォルトのイベント・メッセージング構成を使用している場合は、イベントをイベント・サービスに転送するために JMS キューを追加できます。

デフォルトのメッセージング構成を使用して追加の JMS キューを構成するには、サービス統合バスのキュー宛先に転送される複数の JMS キューをセットアップします。Common Event Infrastructure サービス統合バスのキュー宛先は、イベント・サービスがデプロイされる有効範囲によって決まります。

Scope	サービス統合バスのキュー宛先
サーバー	<code>node.server.CommonEventInfrastructureQueueDestination</code>
クラスター	<code>cluster.CommonEventInfrastructureQueueDestination</code>

外部 JMS プロバイダーを使用したイベント・メッセージングの構成:

デフォルトの組み込みメッセージング構成をイベント伝送で使わない場合は、非同期メッセージ・トランスポートを構成することにより、外部の Java Messaging Service (JMS) プロバイダーを使用できます。

外部 JMS プロバイダーを使用してイベント・メッセージングを構成する前に、まず使用している JMS プロバイダーに適したインターフェースを使用して JMS キューおよび接続ファクトリーを作成する必要があります。リスナー・ポートまたはアクティベーション・スペックを作成する必要もあります。

外部 JMS プロバイダーを使用してイベント・メッセージングを構成するには、以下の手順を実行します。

wsadmin ツールから **deployEventServiceMdb** 管理コマンドをバッチ・モードまたは対話モードで実行します。 **deployEventServiceMdb** コマンドのパラメーターは、以下のとおりです。

applicationName

デプロイするイベント・サービスのメッセージ駆動型 Bean のアプリケーション名。このパラメーターは必須です。

nodeName

イベント・サービスのメッセージ駆動型 Bean をデプロイするノードの名前を指定します。ノード名を指定する場合は、サーバー名も指定する必要があります。ノード名はオプション・パラメーターで、デフォルト値は現在のノードです。クラスターにアプリケーションをデプロイする場合は、このパラメーターを指定しないでください。

serverName

イベント・サービスのメッセージ駆動型 Bean をデプロイするサーバーの名前を指定します。このパラメーターは、サーバーの有効範囲にアプリケーションをデプロイする場合、必須です。それ以外の場合は、任意指定です。クラスターにアプリケーションをデプロイする場合は、サーバー名を指定しないでください。

clusterName

イベント・サービスのメッセージ駆動型 Bean をデプロイするクラスターの名前を指定します。このパラメーターは、アプリケーションをクラスターにデプロイする場合にのみ指定します。

listenerPort

イベントの公開時にイベント・サービスのメッセージ駆動型 Bean が使用するリスナー・ポートの名前を指定します。指定するリスナー・ポートは存在する必要があります。リスナー・ポートとアクティベーション・スペックのいずれかを指定する必要がありますが、両方を指定しないでください。

activationSpec

イベントの公開時にイベント・サービスのメッセージ駆動型 Bean が使用するアクティベーション・スペックの JNDI 名を指定します。指定するアクティベーション・スペックは存在する必要があります。リスナー・ポートとアクティベーション・スペックのいずれかを指定する必要がありますが、両方を指定しないでください。

qcfJndiName

イベント・サービスのメッセージ駆動型 Bean が使用する JMS キュー接続ファクトリーの JNDI 名。このパラメーターは、アクティベーション・スペックを指定する場合、必須です。それ以外の場合は、任意指定です。キュー接続ファクトリーとリスナー・ポートを指定する場合、キュー接続ファクトリーは、そのリスナー・ポート用に構成されたものと一致する必要があります。

deployEventServiceMdb 管理コマンドは、指定したリスナー・ポートまたはアクティベーション・スペック用に構成された、イベント・サービスのメッセージ駆動型 Bean をデプロイします。外部の JMS 構成を使用して、エミッター・ファクトリーと JMS 伝送の作成も行います。アプリケーションは、(デフォルトのメッセージング構成を使用するように構成された) デフォルトのエミッター・ファクトリー、または (外部の JMS プロバイダーを使用する) 新しいエミッター・ファクトリーを使用できます。

イベント・サービスに対して複数の JMS キューをセットアップする場合は、異なるエンタープライズ・アプリケーション名と JMS キューを指定して、このコマンドを複数回実行します。スクリプトを実行するたびに、追加のメッセージ駆動型 Bean がデプロイされ、新規リソースで指定された JMS キューを使用するように構成されます。

JMS 認証別名の構成:

WebSphere セキュリティーが使用可能で、非同期 JMS メッセージングを使用してイベントをイベント・サービスに送信する場合は、JMS 認証別名を構成する必要があります。

JMS 認証別名を構成するには、以下の手順を実行します。

wsadmin ツールから **setEventServiceJmsAuthAlias** 管理コマンドをバッチ・モードまたは対話モードで実行します。 **setEventServiceJmsAuthAlias** コマンドのパラメーターは、以下のとおりです。

userName

JMS 認証別名で使用するユーザーの名前。このパラメーターは必須です。

password

JMS 認証別名で使用するユーザーのパスワード。このパラメーターは必須です。

nodeName

JMS 認証別名を更新または作成するノードの名前。ノード名を指定する場合は、サーバー名も指定する必要があります。クラスターの認証別名を構成する場合は、ノード名を指定しないでください。

serverName

JMS 認証別名を更新または作成するサーバーの名前。このパラメーターは、ノードを指定する場合にのみ必要です。クラスターで認証別名を構成する場合は、このパラメーターは無効です。

clusterName

JMS 認証別名を更新または作成するクラスターの名前。このパラメーターは、クラスターで認証別名を構成する場合にのみ指定します。クラスター名を指定する場合は、ノード名またはサーバー名を指定しないでください。

イベント・サービス・オブジェクトが使用する JMS 認証別名は、指定された有効範囲で更新されます。認証別名が存在しない場合は、指定された値を使用して認証別名が作成されます。

イベント・データベースの構成:

サポートされている各データベース製品に固有のコマンドを使用して、イベント・データ・ソースを構成できます。

イベント・データベースでは、イベントの永続性をサポートする必要があります。管理コンソールの Common Event Infrastructure 構成パネルを使用しなかった場合でも、ここで説明するコマンドを使用すればイベント・データベースを作成できます。

イベント・データベースの制限:

特定のデータベース・ソフトウェアを使用してイベント・データベースを構成する場合は、いくつかの制限が適用されます。

ご使用の環境に適用される制限については、以下の表を参照してください。

表 147. イベント・データベースの制限

データベース・タイプ	制限
Oracle	<ul style="list-style-type: none"> • Oracle 11 JDBC Thin ドライバーでは、Unicode 文字セットを使用する場合にストリング値のサイズ制限があります。大きい値 (長メッセージ属性など) を含むイベントがイベント・データベースに保管されると、Oracle ORA-01461 エラーが発生する可能性があります。この制限についての詳細は、Oracle 11 の資料を参照してください。 <p style="margin-left: 2em;">この問題を避けるには、Oracle 11 OCI ドライバーまたは Oracle 11 Thin ドライバーを使用してください。</p> <ul style="list-style-type: none"> • Oracle データベース・ソフトウェアは、ブランクのストリングを NULL 値として扱います。ブランクのストリングをイベント属性値として指定すると、そのストリングは、Oracle イベント・データベースに保管されるときに NULL に変換されます。
SQL Server	<ul style="list-style-type: none"> • SQL サーバー・データベースは、混在認証モードを使用するように構成する必要があります。トラステッド接続はサポートされません。 • XA ストアード・プロシージャをインストールする必要があります。このストアード・プロシージャは、Microsoft Corporation が提供する JDBC ドライバーに同梱されています。 • PATH ステートメントで指定したディレクトリーに sqljdbc.dll ファイルが含まれ、使用できる必要があります。このファイルは、Microsoft Corporation が提供する JDBC ドライバーに同梱されています。 • Distributed Transaction Coordinator (DTC) サービスを開始する必要があります。

DB2 イベント・データベースの構成 (Linux、UNIX、および Windows システム):

Linux、UNIX、または Windows システムで、DB2 Universal Database を使用して、外部イベント・データベースを構成できます。

Linux、UNIX、または Windows システムで DB2 イベント・データベースを構成するには、以下の手順を実行します。

1. wsadmin ツールを開始します。
2. AdminTask オブジェクトを使用して、**configEventServiceDB2DB** 管理コマンドをバッチ・モードまたは対話モードで実行します。 **configEventServiceDB2DB** コマンドに最低限指定する必要のあるパラメーターを以下に示します。

createDB

データベース構成スクリプトを管理コマンドで作成して実行するかどうかを指定します。 **true** または **false** を指定します。このパラメーターを **false** に設定すると、スクリプトは作成されますが、実行されません。この場合、データベース構成を完了するにはデータベース構成スクリプトを実行する必要があります。

nodeName

イベント・サービス・データ・ソースを作成するサーバーを含むノードの名前。ノード名を指定する場合は、サーバー名も指定する必要があります。以下のいずれかを指定してください。

- ノード名およびサーバー名
- クラスター名

serverName

イベント・サービス・データ・ソースを作成するサーバーの名前。

clusterName

イベント・サービス・データ・ソースを作成するクラスターの名前。クラスター名を指定する場合は、ノード名とサーバー名を指定しないでください。

jdbcClassPath

JDBC ドライバーへのパス。ドライバー・ファイルのパスのみを指定します。ファイル名は指定しないでください。

dbHostName

データベースがインストールされているサーバーのホスト名。

dbUser

イベント・データベースの作成時に使用する DB2 ユーザー ID。指定するユーザー ID には、データベースを作成および除去するための十分な特権が必要です。

dbPassword

使用する DB2 パスワード。

環境によっては、その他のパラメーターが必要になる場合もあります。詳細なパラメーターのリストとその用法については、**configEventServiceDB2DB** 管理コマンドのヘルプを参照してください。

管理コマンドは、必要なデータ・ソースを指定された有効範囲に作成します。 **createDB** パラメーターに **true** を指定した場合、コマンドは、生成されたデータベース構成スクリプトも実行し、データベースを作成します。

デフォルトでは、生成されたデータベース構成スクリプトは、*profile_root/databases/event/node/server/dbscripts/db2* ディレクトリーに保管されます。(Network Deployment 環境では、これらのスクリプトは、デプロイメント・マネージャーのプロファイル・ディレクトリーの下に保管されます。) 任意指定の **outputScriptDir** パラメーターに値を指定した場合は、その場所にスクリプトが保管されます。これらのスクリプトを使用すると、イベント・データベースをいつでも手動で構成できます。

z/OS システムでの DB2 データベースの構成:

DB2 データベース・ソフトウェアを使用して、z/OS システムでイベント・データベースを構成することができます。

リモート・クライアントから DB2 データベースを構成するには、最新のフィックスパックを含む DB2 Connect 製品がインストールされている必要があります。

イベント・データベースを構成するには、以下の手順を実行します。

1. **Linux** **UNIX** **Windows** z/OS イベント・データベースを Linux、UNIX、または Windows クライアント・システムから構成する場合は、以下のステップを実行して、データベースを作成およびカタログします。
 - a. z/OS システム上で、DB2 管理メニューを使用してサブシステムを作成します。

- b. オプション: イベント・データベースに使用するストレージ・グループを作成します。既存のストレージ・グループ (**sysdeflt** など) を使用することもできます。
- c. イベント・データベースで使用する 4 K、8 K、および 16 K のバッファ・プールを使用可能にします。
- d. データ・ソースが使用するユーザー ID に対して必要な権限を付与します。このユーザー ID には、作成したデータベースおよびストレージ・グループへのアクセス権限がなければなりません。また、データベース用新規テーブル、テーブル・スペース、および索引を作成する権限も必要です。
- e. リモート・データベースをカタログします。スクリプトまたは DB2 コマンド行ウィンドウで、以下のコマンドを実行します。

```
catalog tcpip node zosnode remote hostname server IP_port
      system db_subsystem
catalog database db_name as db_name at node zosnode authentication DCS
```

ノードとそのデータベースをカタログする方法については、DB2 Connect の資料を参照してください。

- f. リモート・サブシステムへの接続を確立できることを確認してください。この確認を行うには、以下のコマンドを実行します。

```
db2 connect to subsystem user userid using password
```

- g. ホスト・データベースにバインドします。以下のコマンドを実行します。

```
db2 connect to db_name user userid using password
db2 bind db2_root/bnd/@ddcsmvs.lst blocking all sqlerror continue message
      mvs.msg grant public
db2 connect reset
```

クライアントをホスト・データベースにバインドする方法について詳しくは、DB2 Connect の資料を参照してください。

2. WebSphere システムで、wsadmin ツールを開始します。
3. AdminTask オブジェクトを使用して、**configEventServiceDB2ZOSDB** 管理コマンドをバッチ・モードまたは対話モードで実行します。**configEventServiceDB2ZOSDB** コマンドに最低限指定する必要があるパラメーターを以下に示します。

createDB

Linux **UNIX** **Windows** データベース構成スクリプトを管理コマンドで作成して実行するかどうかを示します。このパラメーターは、管理コマンドを Linux、UNIX、または Windows クライアント・システムから実行する場合にのみ適用されます。**true** または **false** を指定します。

このパラメーターを **false** に設定するか、z/OS システム上でコマンドを実行すると、スクリプトは作成されますが、実行されません。この場合、データベース構成を完了するにはデータベース構成スクリプトを実行する必要があります。

nodeName

イベント・サービス・データ・ソースを作成するサーバーを含むノードの名前。ノード名を指定する場合は、サーバー名も指定する必要があります。以下のいずれかを指定してください。

- ノード名およびサーバー名
- クラスタ名

serverName

イベント・サービス・データ・ソースを作成するサーバーの名前。

clusterName

イベント・サービス・データ・ソースを作成するクラスターの名前。クラスター名を指定する場合は、ノード名とサーバー名を指定しないでください。

jdbcClassPath

JDBC ドライバーへのパス。ドライバー・ファイルのパスのみを指定します。ファイル名は指定しないでください。

dbHostName

データベースがインストールされているサーバーのホスト名。

dbUser

イベント・データベースの作成時に使用する DB2 ユーザー ID。指定するユーザー ID には、データベースを作成および除去するための十分な特権が必要です。

dbPassword

使用する DB2 パスワード。

dbPort

DB2 インスタンス・ポート。

dbSubSystemName

データベース・サブシステムの名前。

storageGroup

イベント・データベースとイベント・カタログ・データベースのストレージ・グループ。

eventDBName

作成するイベント・データベース名。

eventCatalogDBName

作成するイベント・カタログ・データベース。

bufferPool14K

4K バッファ・プールの名前。

bufferPool18K

8K バッファ・プールの名前。

bufferPool16K

16K バッファ・プールの名前。

環境によっては、その他のパラメーターが必要になる場合もあります。詳細なパラメーターのリストとその用法については、**configEventServiceDB2ZOSDB** 管理コマンドのヘルプを参照してください。

管理コマンドは、必要なデータ・ソースを指定された有効範囲に作成します。また、コマンドを Linux、UNIX、または Windows DB2 クライアント上で実行している場合、**createDB** パラメーターに **true** を指定すると、コマンドは、生成されたデータベース構成スクリプトも実行し、データベースを作成します。z/OS システムの場合は、SQL Processor Using File Input (SPUFI) 機能を使用して、生成された DDL ファイルを実行する必要があります。DDL ファイルは、*profile_root/databases/event/node/server/db2zos/dd1* ディレクトリーに保管されます。

デフォルトでは、生成されたデータベース構成スクリプトは、*profile_root/databases/event/node/server/dbscripts/db2zos* ディレクトリーに保管されます。(Network Deployment 環境では、これらのスクリプトは、デプロイメント・マネージャーのプロファイル・ディレクトリーの下に保管されます。) 任意指定の **outputScriptDir** パラメーターに値を指定した場合は、その場所にスクリプトが保管されます。これらのスクリプトを使用すると、イベント・データベースをいつでも手動で構成できます。

データベースの構成が終了した後、サーバー管理コンソールを使用してデータベース構成をテストできます。このタスクを実行する場合、該当する JDBC データ・ソースにナビゲートして「テスト接続」オプションを選択します。

Oracle イベント・データベースの構成:

Linux、UNIX、または Windows システム上で、Oracle データベースを使用して、外部のイベント・データベースを構成できます。

Oracle イベント・データベースを構成する前に、まずデータベースを作成しておく必要があります。イベント・データベースの構成コマンドを実行する前に、Oracle SID が既に存在している必要があります。イベント・データベースのデフォルトの SID は、**event** です。

Oracle イベント・データベースを構成するには、以下の手順を実行します。

1. wsadmin ツールを開始します。
2. AdminTask オブジェクトを使用して、**configEventServiceOracleDB** 管理コマンドをバッチ・モードまたは対話モードで実行します。 **configEventServiceOracleDB** コマンドに最低限指定する必要があるパラメーターを以下に示します。

createDB

データベース構成スクリプトを管理コマンドで作成して実行する必要があるかどうかを示します。**true** または **false** を指定します。このパラメーターを **false** に設定すると、スクリプトは作成されますが、実行されません。この場合、データベース構成を完了するにはデータベース構成スクリプトを実行する必要があります。

nodeName

イベント・サービス・データ・ソースを作成する必要があるサーバーを含むノードの名前。ノード名を指定する場合は、サーバー名も指定する必要があります。以下のいずれかを指定してください。

- ノード名およびサーバー名
- クラスター名

serverName

イベント・サービス・データ・ソースを作成する必要があるサーバーの名前。

clusterName

イベント・サービス・データ・ソースを作成する必要があるクラスターの名前。クラスター名を指定する場合は、ノード名とサーバー名を指定しないでください。

jdbcClassPath

JDBC ドライバーへのパス。ドライバー・ファイルのパスのみを指定します。ファイル名は指定しないでください。

oracleHome

ORACLE_HOME ディレクトリー。このパラメーターは、createDB パラメーターに **true** を指定した場合にのみ必要です。

dbPassword

データベース構成時に作成されるスキーマ・ユーザー ID に対して使用するパスワード (デフォルトのユーザー ID は **ceiuser** です)。このパスワードは、Oracle データベース接続を認証するために使用されます。

sysUser

Oracle SYSUSER ユーザー ID。このユーザー ID には、SYSDBA 特権が必要です。

sysPassword

指定した SYSUSER ユーザー ID のパスワード。

環境によっては、その他のパラメーターが必要になる場合もあります。詳細なパラメーターのリストとその使用方法については、**configEventServiceOracleDB** 管理コマンドのヘルプを参照してください。

管理コマンドは、必要なデータ・ソースを指定された有効範囲に作成します。createDB パラメーターに **true** を指定した場合、コマンドは、生成されたデータベース構成スクリプトも実行し、データベースを作成します。

デフォルトでは、生成されたデータベース構成スクリプトは、*profile_root/databases/event/node/server/dbscripts/oracle* ディレクトリーに保管されます。(Network Deployment 環境では、これらのスクリプトは、デプロイメント・マネージャーのプロファイル・ディレクトリーの下に保管されます。) 任意指定の outputScriptDir パラメーターに値を指定した場合は、その場所にスクリプトが保管されます。これらのスクリプトを使用すると、イベント・データベースをいつでも手動で構成できます。

SQL サーバー・イベント・データベースの構成:

Windows システムで、Microsoft SQL Server Enterprise を使用して、外部イベント・データベースを構成できます。

SQL サーバー・イベント・データベースを構成するには、以下の手順を実行します。

1. SQL サーバー・データベース・サーバー・システムで、データベース・ファイルを格納するために使用するディレクトリーを作成します。デフォルトでは、ファイルは *c:\%program files%\ibm\event\%ceiinst1%\sqlserver_data* ディレクトリーに書き込まれます。別の場所を指定する必要がある場合は、生成されたデータベース構成スクリプトを編集して **ceiInstancePrefix** パラメーターの値を変更し、次にスクリプトを手動で実行する必要があります。
2. サーバー・システムで、wsadmin ツールを開始します。
3. AdminTask オブジェクトを使用して、**configEventServiceSQLServerDB** 管理コマンドをバッチ・モードまたは対話モードで実行します。**configEventServiceSQLServerDB** コマンドに最低限指定する必要のあるパラメーターを以下に示します。

createDB

データベース構成スクリプトを管理コマンドで作成して実行する必要があるかどうかを示します。**true** または **false** を指定します。このパラメーターを **false** に設定すると、スクリプトは作成されますが、実行されません。この場合、データベース構成を完了するにはデータベース構成スクリプトを実行する必要があります。

nodeName

イベント・サービス・データ・ソースを作成する必要があるサーバーを含むノードの名前。ノード名を指定する場合は、サーバー名も指定する必要があります。以下のいずれかを指定してください。

- ノード名およびサーバー名
- クラスタ名

serverName

イベント・サービス・データ・ソースを作成する必要があるサーバーの名前。サーバー名を指定する場合は、ノード名も指定する必要があります。

clusterName

イベント・サービス・データ・ソースを作成する必要があるクラスターの名前。クラスター名を指定する場合は、ノード名とサーバー名を指定しないでください。

dbServerName

SQL サーバー・データベースのサーバー名。このパラメーターは、createDB パラメーターに **true** を指定した場合にのみ必要です。

dbHostName

SQL サーバー・データベースが稼働しているサーバーのホスト名。

dbPassword

イベント・データベース表を所有するために作成されたユーザー ID に対して使用するパスワード (デフォルトのユーザー ID は ceiuser です)。WebSphere データ・ソースは、このパスワードを使用して SQL サーバー・データベース接続を認証します。

saUser

データベースとユーザーを作成および除去する特権を持つユーザー ID。このパラメーターは、createDB パラメーターに **true** を指定した場合にのみ必要です。

saPassword

指定した SA ユーザーのパスワード。

環境によっては、その他のパラメーターが必要になる場合もあります。詳細なパラメーターのリストとその用法については、**configEventServiceSQLServerDB** 管理コマンドのヘルプを参照してください。

管理コマンドは、必要なデータ・ソースを指定された有効範囲に作成します。createDB パラメーターに **true** を指定した場合、コマンドは、生成されたデータベース構成スクリプトも実行し、データベースを作成します。

デフォルトでは、生成されたデータベース構成スクリプトは、*profile_root/databases/event/node/server/dbscripts/dbscripts/sqlserver* ディレクトリに保管されます。(Network Deployment 環境では、これらのスクリプトは、デプロイメント・マネージャーのプロファイル・ディレクトリの下に保管されます。) 任意指定の *outputScriptDir* パラメーターに値を指定した場合は、その場所にスクリプトが保管されます。これらのスクリプトを使用すると、イベント・データベースをいつでも手動で構成できます。

データベース構成スクリプトの手動実行:

データベース構成管理コマンドで生成されたスクリプトは、いつでも手動で実行できます。

データベース構成には 2 つのステップがあります。まず、データベース構成管理コマンドが、環境に対応したデータベース固有のスクリプトを生成します。次に、この生成されたスクリプトが、イベント・データベースとデータ・ソースを構成します。管理コマンドの実行時に createDB パラメーターに **true** を指定した場合は、両方のステップが自動的に実行されます。

ただし、createDB パラメーターに **false** を指定した場合は、生成されたスクリプトをターゲット・システム上で手動で実行して、データベース構成を完了する必要があります。以下の状況の場合は、スクリプトを手動で実行する必要がある可能性があります。

- 管理コマンドを実行したシステムとは異なるシステムでイベント・データベースを構成する必要がある。
- イベント・データベースを後で再作成する必要がある。
- 生成されたスクリプトを実行する前に、そのスクリプトが使用するデフォルト・オプションを変更する必要がある。

Linux、UNIX、または Windows システム上での手動による DB2 イベント・データベースの作成:

cr_event_db2 コマンドを使用して、Linux、UNIX、または Windows サーバー上の DB2 イベント・データベース用のデータベース構成スクリプトを手動で生成します。

以下の手順を実行して、Linux、UNIX、または Windows システム上の DB2 イベント・データベース用に生成されたデータベース構成スクリプトを手動で実行します。

1. サーバー・システムで、生成されたスクリプトを含むディレクトリーに移動します。デフォルトのロケーションは `profile_root/databases/event/node/server/dbscripts/db2` ディレクトリーです。データベース構成管理コマンドの **outputScriptDir** パラメーターに値を指定した場合は、その場所にスクリプトが保管されています。
2. 必要に応じ、ASCII テキスト・エディターを使用して構成スクリプトを変更します。スクリプトの名前は、ご使用のオペレーティング・システムに応じて異なります。

- **Windows** **cr_event_db2.bat**

- **Linux** **UNIX** **cr_event_db2.sh**

3. 以下の構文を使用して、データベース作成スクリプトを実行します (該当する場合は、ファイル拡張子を指定することを忘れないでください)。

```
cr_event_db2 [client|server] db_user [db_password]
```

パラメーターは、以下のとおりです。

client|server

データベースがクライアントとサーバーのいずれであるかを示します。 **client** または **server** を指定する必要があります。

db_user

データベース・ユーザー ID。このパラメーターは必須です。

db_password

データベース・ユーザーのパスワード。クライアント・データベースのパスワードを指定しない場合は、パスワードの入力プロンプトが表示されます。

例えば、以下のコマンドは、ユーザー ID **db2admin** とパスワード **mypassword** を使用して、クライアント・データベース用の DB2 イベント・データベースを作成します。

```
cr_event_db2 client db2admin mypassword
```

4. サーバーを再始動します。統合ノードの場合は、**stopNode** および **startNode** コマンドを使用して、ノード・エージェントを停止してから再始動する必要があります。

データベースの構成が完了したら、管理コンソールを使用してデータベース構成をテストできます。これを行うには、該当する JDBC データ・ソースにナビゲートし、「**テスト接続**」オプションを選択します。

z/OS システム上での手動による DB2 イベント・データベースの作成:

Linux、UNIX、または Windows クライアント・システムで **cr_event_db2zos** コマンドを使用して、z/OS システム上の DB2 イベント・データベース用のデータベース構成スクリプトを手動で生成します。

以下の手順に従って、Linux、UNIX、または Windows クライアント・システムを使用して、z/OS システム上の DB2 イベント・データベース用に生成されたデータベース構成スクリプトを手動で実行します。

1. サーバー・システムで、生成されたスクリプトを含むディレクトリーに移動します。デフォルトのロケーションは `profile_root/databases/event/node/server/dbscripts/db2` ディレクトリーです。データベース構成管理コマンドの `outputScriptDir` パラメーターに値を指定した場合は、その場所にスクリプトが保管されています。
2. 必要に応じ、ASCII テキスト・エディターを使用して構成スクリプトを変更します。スクリプトの名前は、ご使用のオペレーティング・システムに応じて異なります。

- **Windows** `cr_event_db2zos.bat`
- **Linux** **UNIX** `cr_event_db2zos.sh`

3. 以下の構文を使用して、データベース作成スクリプトを実行します（該当する場合は、ファイル拡張子を指定することを忘れないでください）。

```
cr_event_db2zos [dbName=db_name] db_user [db_password]
```

パラメーターは、以下のとおりです。

db_name

使用するデータベース名。このパラメーターは任意指定です。データベース名を指定しない場合は、名前が生成されます。

db_user

使用するためのデータベース・ユーザー ID。このパラメーターは必須です。

db_password

データベース・ユーザーのパスワード。パスワードを指定しない場合、DB2 データベースは、パスワードの入力プロンプトを表示します。

例えば、以下のコマンドは、ユーザー ID `db2admin` とパスワード `mypassword` を使用して、`event` という名前の DB2 イベント・データベースを作成します。

```
cr_event_db2zos dbName=client db2admin mypassword
```

4. サーバーを再始動します。統合ノードの場合は、`stopNode` および `startNode` コマンドを使用して、ノード・エージェントを停止してから再始動する必要があります。

データベースの構成が完了したら、管理コンソールを使用してデータベース構成をテストできます。これを行うには、該当する JDBC データ・ソースにナビゲートし、「**テスト接続**」オプションを選択します。

Oracle イベント・データベースの手動による作成:

`cr_event_oracle` コマンドを使用して、Oracle イベント・データベース用のデータベース構成スクリプトを手動で生成します。

以下の手順を実行して、Oracle イベント・データベース用に生成されたデータベース構成スクリプトを手動で実行します。

1. サーバー・システムで、生成されたスクリプトを含むディレクトリーに移動します。デフォルトのロケーションは `profile_root/databases/event/node/server/dbscripts/db2` ディレクトリーです。データベース構成管理コマンドの `outputScriptDir` パラメーターに値を指定した場合は、その場所にスクリプトが保管されています。
2. 必要に応じ、ASCII テキスト・エディターを使用して構成スクリプトを変更します。スクリプトの名前は、ご使用のオペレーティング・システムに応じて異なります。

- **Windows** `cr_event_oracle.bat`

• **Linux** **UNIX** **cr_event_oracle.sh**

3. 以下の構文を使用して、データベース作成スクリプトを実行します (該当する場合は、ファイル拡張子を指定することを忘れないでください)。

```
cr_event_oracle password sys_user
sys_password [sid=sid]
[oracleHome=oracle_home]
```

パラメーターは、以下のとおりです。

password

スキーマ・ユーザー ID のパスワード。このパラメーターは必須です。

sys_user

Oracle データベースの SYSDBA 特権を持つユーザー ID (通常は、システム・ユーザー)。このパラメーターは必須です。

sys_password

指定したシステム・ユーザー ID のパスワード。このユーザー ID でパスワードを使用しない場合は、**none** を入力します。

sid=sid

Oracle システム ID (SID)。このパラメーターはオプションです。

oracleHome=oracle_home

Oracle ホーム・ディレクトリー。このパラメーターは任意指定です。値を指定しない場合は、生成されたパスが使用されます。

例えば、以下のコマンドは、スキーマ・ユーザー ID **auser** とシステム・ユーザー ID **sys** を使用して、Oracle イベント・データベースを作成します。

```
cr_event_oracle auser sys syspassword sid=event oracleHome=c:\oracle
```

4. サーバーを再始動します。統合ノードの場合は、**stopNode** および **startNode** コマンドを使用して、ノード・エージェントを停止してから再始動する必要があります。

データベースの構成が完了したら、管理コンソールを使用してデータベース構成をテストできます。これを行うには、該当する JDBC データ・ソースにナビゲートし、「**テスト接続**」オプションを選択します。

SQL サーバー・イベント・データベースの手動による作成:

cr_event_mssql コマンドを使用して、SQL Server イベント・データベース用のデータベース構成スクリプトを手動で生成します。

以下の手順を実行して、SQL Server イベント・データベース用に生成されたデータベース構成スクリプトを手動で実行します。

1. サーバー・システムで、生成されたスクリプトを含むディレクトリーに移動します。デフォルトのロケーションは *profile_root/databases/event/node/server/dbscripts/db2* ディレクトリーです。データベース構成管理コマンドの **outputScriptDir** パラメーターに値を指定した場合は、その場所にスクリプトが保管されています。
2. 必要に応じ、ASCII テキスト・エディターを使用して **cr_event_mssql.bat** スクリプトを変更します。
3. 以下の構文を使用して、データベース作成スクリプトを実行します。

```
cr_event_mssql user_id password [server=server] sauser=sa_user
sapassword=sa_password
```


パラメーターは、以下のとおりです。

user_id

作成されたテーブルを所有する SQL サーバー・ログイン・ユーザー ID。このユーザー ID は、データベースへの JDBC 接続ができるようにするために SQL サーバー内で作成する必要があります。(JDBC ドライバーは、トラステッド接続をサポートしません。)

password

作成する新しいログイン・ユーザー ID のパスワード。

server=server

SQL サーバー・データベースを含むサーバーの名前。このパラメーターは任意指定です。デフォルト値は、ローカル・ホストです。

sauser=sa_user

sa ユーザー ID。このユーザー ID には、データベースおよびユーザー・ログインを作成するための十分な特権が必要です。

sapassword=sa_password

sa パスワード (混在認証モードを使用する場合)。sa ユーザー ID にパスワードが設定されていない場合は、**sapassword=** に値を指定しないでください。トラステッド接続を使用する場合は、このパラメーターを省略します。

例えば、以下のコマンドは、ログイン・ユーザー ID **userid** を使用して、SQL サーバー・イベント・データベースを作成します。

```
cr_event_mssql userid apassword server=myserver sauser=sa sapassword=sapassword
```

4. サーバーを再始動します。統合ノードの場合は、**stopNode** および **startNode** コマンドを使用して、ノード・エージェントを停止してから再始動する必要もあります。

データベースの構成が完了したら、管理コンソールを使用してデータベース構成をテストできます。これを行うには、該当する JDBC データ・ソースにナビゲートし、「**テスト接続**」オプションを選択します。

以前のバージョンからのイベント・データベースのアップグレード:

以前のバージョンの Common Event Infrastructure からマイグレーションした場合、イベント永続性を使用するには、既存のイベント・データベースのアップグレードが必要になる場合があります。

イベント・データベースのアップグレードが必要になるのは、Common Event Infrastructure バージョン 5.1 以前からマイグレーションする場合です。

データベースのアップグレード・プロセスでは、現在のイベント・データを保持しながら、既存のイベント・データベースのスキーマとメタデータが現行バージョンにアップグレードされます。

データベースのアップグレード・スクリプトでは、既存のイベント・データベースのスキーマとメタデータが現行バージョンにアップグレードされます。

サポートされないバージョン: Common Event Infrastructure 6.0 でサポートされなくなったバージョンのデータベース・ソフトウェアをイベント・データベースが使用している場合は、まず、そのデータベース・ソフトウェア用の適切な手順を使用して、データベースをサポートされるバージョンへとマイグレーションする必要があります。次に、イベント・データベースのアップグレード・プロセスに従って、データベースをアップグレードします。

以前のバージョンからの DB2 イベント・データベースのアップグレード:

Linux、UNIX、または Windows システムに Common Event Infrastructure バージョン 5.1 の既存の DB2 イベント・データベースがある場合は、それを現行バージョンにアップグレードする必要があります。

Linux または UNIX システムで DB2 イベント・データベースをアップグレードするには、以下の手順を実行します。

1. 既存のイベント・データベースのバックアップ・コピーを作成します。
2. `profile_root/bin` ディレクトリーに移動します。
3. 次のように、ご使用のオペレーティング・システム用の DB2 アップグレード・スクリプトを実行します。

- **Windows** Windows システムの場合:

```
eventUpgradeDB2 runUpgrade=[true|false] dbUser=user  
[dbName=name] [dbPassword=pw]  
[dbNode=node] [scriptDir=dir]
```

- **Linux** **UNIX** Linux および UNIX システムの場合:

```
eventUpgradeDB2.sh runUpgrade=[true|false] dbUser=user  
[dbName=name] [dbPassword=pw]  
[dbNode=node] [scriptDir=dir]
```

通常、必要なパラメーターは以下のとおりです。

runUpgrade

生成された DDL スクリプトをアップグレード・スクリプトで自動的に実行してデータベース・アップグレードを完了するかどうかを指定します。このパラメーターは必須です。データベース・アップグレードを後で、または別のシステム上で手動で実行する場合は、**false** を指定します。

dbUser

使用する DB2 ユーザー ID を指定します。このパラメーターは必須です。

dbName

DB2 データベース名を指定します。デフォルトのイベント・データベース名は **event** です。このパラメーターは、**runUpgrade=true** を指定した場合、必須です。

dbPassword

指定した DB2 ユーザー ID のパスワードを指定します。このパラメーターは任意指定です。パスワードを指定しない場合、DB2 は、パスワードの入力プロンプトを表示します。

dbNode

データベース・ノード名を指定します。このパラメーターは、DB2 クライアント・システムからアップグレード・スクリプトを実行する場合、必須です。

scriptDir

生成された DDL スクリプトを含めるディレクトリーを指定します。このパラメーターは任意指定です。ディレクトリーを指定しない場合は、`./eventDBUpgrade/db2` ディレクトリーにスクリプトが保管されます。

詳細なパラメーターのリストとその使用方法を確認するには、パラメーターを指定せずに **eventUpgradeDB2** スクリプトを実行します。

アップグレード・スクリプトは、イベント・データベースをアップグレードするために必要な DDL スクリプトを生成します。 **runUpgrade=true** を指定した場合は、DDL スクリプトが自動的に実行され、アップグレードが完了します。

Windows システムの既存の DB2 データベースをアップグレードする例を以下に示します。

```
eventUpgradeDB2 runUpgrade=true dbUser=db2inst1 dbName=event
```

runUpgrade=false を指定した場合は、データベース・システム上で DDL スクリプトを手動で実行して、データベース・アップグレードを完了する必要があります。

以前のバージョンからの DB2 for z/OS イベント・データベースのアップグレード:

z/OS システムに Common Event Infrastructure バージョン 5.1 の既存の DB2 イベント・データベースがある場合は、それを現行バージョンにアップグレードする必要があります。

z/OS システムの DB2 イベント・データベースをアップグレードするには、以下の手順を実行します。

1. 既存のイベント・データベースのバックアップ・コピーを作成します。
2. `profile_root/bin` ディレクトリに移動します。
3. ご使用のクライアント・オペレーティング・システム用の DB2 for z/OS アップグレード・スクリプトを以下のように実行します。

- **Windows** Windows システムの場合:

```
eventUpgradeDB2ZOS runUpgrade=[true|false] dbUser=user  
[dbName=name] [dbPassword=pw]  
[scriptDir=dir] storageGroup=group  
bufferPool14K=4kbufpool bufferPool18k=8kbufpool  
bufferPool16K=16kbufpool
```

- **Linux** **UNIX** Linux および UNIX システムの場合:

```
eventUpgradeDB2ZOS.sh runUpgrade=[true|false] dbUser=user  
[dbName=name] [dbPassword=pw]  
[scriptDir=dir] storageGroup=group  
bufferPool14K=4kbufpool bufferPool18k=8kbufpool  
bufferPool16K=16kbufpool
```

通常、必要なパラメーターは以下のとおりです。

runUpgrade

生成された DDL スクリプトをアップグレード・スクリプトで自動的に実行してデータベース・アップグレードを完了するかどうかを指定します。このパラメーターは必須です。データベースを後で、または別のシステム上で手動でアップグレードする場合は、**false** を指定します。

z/OS システム: このパラメーターは、ネイティブ z/OS システムでは無視されます。生成された DDL スクリプトの自動実行は、クライアント・システムでのみサポートされます。

dbUser

使用する DB2 ユーザー ID を指定します。このパラメーターは必須です。

dbName

DB2 データベース名を指定します。デフォルトのイベント・データベース名は **event** です。このパラメーターは、**runUpgrade=true** を指定した場合、必須です。

dbPassword

指定した DB2 ユーザー ID のパスワードを指定します。このパラメーターは任意指定です。パスワードを指定しない場合、DB2 は、パスワードの入力プロンプトを表示します。

scriptDir

生成された DDL スクリプトを含めるディレクトリーを指定します。このパラメーターは任意指定です。ディレクトリーを指定しない場合は、`./eventDBUpgrade/db2zos` ディレクトリーにスクリプトが保管されます。

storageGroup

ストレージ・グループの名前を指定します。このパラメーターは必須です。

bufferPool4K

4K バッファ・プールの名前を指定します。このパラメーターは必須です。

bufferPool8K

8K バッファ・プールの名前を指定します。このパラメーターは必須です。

bufferPool16K

16K バッファ・プールの名前を指定します。このパラメーターは必須です。

詳細なパラメーターのリストとその使用方法を確認するには、パラメーターを指定せずに **eventUpgradeDB2ZOS** スクリプトを実行します。

アップグレード・スクリプトは、イベント・データベースをアップグレードするために必要な DDL スクリプトを生成します。クライアント・システムで **runUpgrade=true** を指定した場合は、DDL スクリプトが自動的に実行され、アップグレードが完了します。

Windows クライアント・システムから DB2 for z/OS イベント・データベースをアップグレードする例を以下に示します。

```
eventUpgradeDB2ZOS runUpgrade=true dbUser=db2inst1 dbName=event
storageGroup=sysdef1t bufferPool4K=BP9 bufferPool8K=BP8K9 bufferPool16K=BP16K9
```

runUpgrade=false を指定した場合、または z/OS システム上でアップグレード・スクリプトを実行した場合は、生成された DDL スクリプトを、SQL Processor Using File Input (SPUFI) 機能を使用して z/OS システムで手動で実行する必要があります。この手順によって、データベース・アップグレードが完了します。

Oracle イベント・データベースのバージョン 5 からのアップグレード:

Common Event Infrastructure バージョン 5.1 の既存の Oracle イベント・データベースを使用している場合は、それを現行バージョンにアップグレードする必要があります。

Oracle イベント・データベースをアップグレードするには、以下の手順を実行します。

1. 既存のイベント・データベースのバックアップ・コピーを作成します。
2. `profile_root/bin` ディレクトリーに移動します。
3. 次のように、ご使用のオペレーティング・システム用の Oracle アップグレード・スクリプトを実行します。

- Windows システムの場合:

```
eventUpgradeOracle runUpgrade=[true|false] schemaUser=schemauser
[oracleHome=dir] [dbName=name]
[dbUser=sysuser] [dbPassword=pw]
[scriptDir=dir]
```

- Linux および UNIX システムの場合:

```
eventUpgradeOracle.sh runUpgrade=[true|false] schemaUser=schemauser  
[oracleHome=dir] [dbName=name]  
[dbUser=sysuser] [dbPassword=pw]  
[scriptDir=dir]
```

通常、必要なパラメーターは以下のとおりです。

runUpgrade

生成された DDL スクリプトをアップグレード・スクリプトで自動的に実行してデータベース・アップグレードを完了するかどうかを指定します。このパラメーターは必須です。データベースを後で、または別のシステム上で手動でアップグレードする場合は、**false** を指定します。

schemaUser

データベース表を所有する Oracle ユーザー ID を指定します。このパラメーターは必須です。

oracleHome

Oracle ホーム・ディレクトリーを指定します。このパラメーターは、**runUpgrade=true** を指定した場合、必須です。

dbName

Oracle データベース名を指定します。デフォルトのイベント・データベース名は **event** です。このパラメーターは、**runUpgrade=true** を指定した場合、必須です。

dbUser

Oracle システム・ユーザー ID を指定します。このパラメーターは、**runUpgrade=true** を指定した場合、必須です。

dbPassword

システム・ユーザー ID のパスワードを指定します。システム・ユーザー ID にパスワードがない場合は、このパラメーターを指定しないでください。

scriptDir

生成された DDL スクリプトを含めるディレクトリーを指定します。このパラメーターは任意指定です。ディレクトリーを指定しない場合は、`./eventDBUpgrade/oracle` ディレクトリーにスクリプトが保管されます。

詳細なパラメーターのリストとその使用方法を確認するには、パラメーターを指定せずに **eventUpgradeOracle** スクリプトを実行します。

アップグレード・スクリプトは、イベント・データベースをアップグレードするために必要な DDL スクリプトを生成します。**runUpgrade=true** を指定した場合は、DDL スクリプトが自動的に実行され、アップグレードが完了します。

Windows システムの既存の Oracle データベースをアップグレードする例を以下に示します。

```
eventUpgradeOracle runUpgrade=true schemaUser=cei  
dbName=event dbUser=sys
```

runUpgrade=false を指定した場合は、データベース・システム上で DDL スクリプトを手動で実行して、データベース・アップグレードを完了する必要があります。

WebSphere Business Integration Adapter の構成

WebSphere Business Integration Adapter と IBM Business Process Manager を連携させるには、インストールおよび構成の手順を実行する必要があります。

1. アダプターをインストールします。

- a. WebSphere Business Integration Adapters のインストール方法が説明されている『WebSphere Business Integration Adapters 製品のインストール』の手順に従います。
 - b. 『WebSphere Business Integration Adapters の資料』に移動し、「アダプター」の下にあるナビゲーションを展開して、ご使用のアダプターに固有の必須の追加手順があるかどうかを確認します。ご使用のアダプターについて追加のインストール・タスクが記載されている場合は、そのタスクを実行します。
2. 『WebSphere Business Integration Adapters の資料』に移動して、「アダプター」の下にあるナビゲーションを展開し、ご使用のアダプターの構成手順に従って、アダプターを構成します。構成手順を実行すると、必要な成果物が生成されます。
 3. 『メディエーション・モジュールのデプロイ』の指示に従って、アプリケーション EAR ファイルをインストールします。

WebSphere Business Integration Adapter の管理のセットアップ:

WebSphere Business Integration Adapter を管理できるようにするには、いくつかの管理機能を実行する必要があります。

- 『WebSphere Business Integration Adapters 製品のインストール』に示されている手順を理解している必要があります。
- アプリケーション EAR ファイルをインストールして、このタスクを実行する前に WebSphere Business Integration Adapter に必要な成果物を作成する必要があります。

WebSphere Business Integration Adapter を管理するには、『手順』セクションの管理機能を実行します。

1. キュー接続ファクトリーを作成します。

管理コンソールの最上位から、以下の手順を実行します。

- a. 「リソース」を展開します。
- b. 「JMS」を展開します。
- c. 「キュー接続ファクトリー (Queue connection factories)」を選択します。
- d. 管理入出力キューの有効範囲レベルに一致する有効範囲レベルを選択します。
- e. 「新規」をクリックして、新規 JMS キュー接続ファクトリーを作成します。
- f. JMS リソース・プロバイダーを選択します。「デフォルトのメッセージング・プロバイダー」を選択して「OK」をクリックします。
- g. 以下を例外として、すべてのデフォルト値を受け入れます。
 - 名前: QueueCF
 - JNDI 名: jms/QueueCF
 - バス名: 現在のバス名
- h. 「OK」をクリックして、新しい JMS キュー接続ファクトリーの作成を完了します。

「JMS キュー接続ファクトリー」パネルの上部にメッセージ・ウィンドウが表示されます。

- i. メッセージ・ウィンドウで「保管」をクリックして、ローカル構成レベルで行った変更をマスター構成に適用します。
2. WebSphere Business Integration Adapter リソースを作成します。

管理コンソールの最上位から、以下の手順を実行します。

- a. 「リソース」を展開します。

- b. 「WebSphere Business Integration Adapter」 ページを開きます。

「WebSphere Business Integration Adapters」 を選択します。

- c. 「新規」をクリックして、新しい WebSphere Business Integration Adapter を作成します。
- d. 以下を例外として、すべてのデフォルト値を受け入れます。
 - 名前: EISConnector
 - キュー接続ファクトリー JNDI 名: jms/QueueCF
 - 管理入力キュー JNDI 名: *connectorName/AdminInQueue*
 - 管理出力キュー JNDI 名: *connectorName/AdminOutQueue*
- e. 「OK」をクリックして、 WebSphere Business Integration Adapter の作成を完了します。

「WebSphere Business Integration Adapters」 パネルの上部にメッセージ・ウィンドウが表示されま

す。

- f. メッセージ・ウィンドウで「保管」をクリックして、ローカル構成レベルで行った変更をマスター構成に適用します。

3. WebSphere Business Integration Adapter サービスを使用可能にします。

管理コンソールの最上位から、以下の手順を実行します。

- a. 「サーバー」を展開します。
- b. 「サーバー・タイプ」を展開します。
- c. 「WebSphere Application Server」を選択します。
- d. サーバー・リストから、WebSphere Business Integration Adapter サービスを有効にするサーバーを選択します。

対象となるリソースをホストするサーバー名をクリックします。

- e. 「構成」タブの「Business Integration」リストから、「WebSphere Business Integration Adapter サービス」を選択します。
- f. 「サーバー始動時にサービスを使用可能にする」チェック・ボックスが選択されていることを確認します。
- g. 「OK」をクリックします。

「WebSphere Business Integration Adapters」 ページの上部にメッセージ・ウィンドウが表示されま

す。

- h. WebSphere Business Integration Adapter サービスを使用可能とする予定の各サーバーごとに、ステップ 3d から 3g を繰り返します。
- i. メッセージ・ウィンドウで「保管」をクリックして、ローカル構成レベルで行った変更をマスター構成に適用します。

注: WebSphere Business Integration Adapter サービスを使用可能または使用不可にする場合、変更を有効にするためにサーバーを再始動する必要があります。

Service Federation Management 用の IBM Business Process Manager の構成

WebSphere Service Registry and Repository バージョン 7.0 で提供された Service Federation Management (SFM) コンソールによって管理できる接続サーバーとして、IBM Business Process Manager を使用可能にすることができます。これによって、SFM コンソールは IBM Business Process Manager で、SFM プロキシを構成できます。

別のビジネス単位に、別のエンタープライズ・サービス・バス (ESB) を保有している場合があります。各 ESB および関連付けられたサービス・レジストリーは、接続されたサービス・アプリケーションの別のドメインを構成しています。この結果、ドメイン間で大量のアプリケーションの重複が発生する可能性があります。また、ドメインを横断するアプリケーション接続の実装に要する開発体力が増加する可能性があります。WebSphere Service Registry and Repository バージョン 7.0 で提供されている SFM を使用すれば、異なる ESB 間にブリッジが確立され、サービスおよびアプリケーションをドメイン間で共用することができます。

SFM プロバイダー:

- フェデレーション対応コンテンツを統一して表示できるフェデレーション・モデル。
- ドメインをサポートする、サービス接続およびレジストリー・コンポーネントにアクセスする、Service Connectivity Management プロトコル。
- サービス・ドメインを制御するコンソール。

SFM を使用して、コンソール・ユーザーは、あるドメインでサービスを構成して、そのサービスを使用して別のドメインの消費者にサービスを提供することができます。1つのドメインのサービス・エンドポイントは、別のドメインのサービス・プロキシ・エンドポイントとして使用可能です。

Service Connectivity Management 接続サーバーの構成:

Service Federation Management (SFM) コンソールは、Service Connectivity Management プロトコル (SCMP) を使用して、IBM Business Process Manager と通信します。

IBM Business Process Manager は、SCM 接続サーバーという名前のシステム REST サービスとして、Atom ベースのプロトコルを公開します。このサービスは、スタンドアロン・サーバー用の REST サービス・プロバイダーと、Network Deployment 環境のデプロイメント・マネージャーでは、デフォルトで使用可能になっています。

1. REST サービスを構成します。プロトコルによって戻される Atom 文書には、SFM コンソールによって保持される絶対 URL が含まれています。これらの絶対 URL で使用されるプロトコル、ホスト名、およびポート番号は、REST サービス構成から取得されます。SFM コンソール・サーバーと IBM Business Process Manager 間のロード・バランシングおよびネットワーク・コンポーネントを検討することが重要です。
 - a. サービス・プロバイダーのトピックの『REST サービスの構成』で説明されているように、スタンドアロン・サーバーまたはデプロイメント・マネージャー REST サービス・プロバイダー用に、プロトコル、完全修飾ホスト名、およびポート番号を構成します。
2. SFM コンソール・ユーザーに、接続サーバーへのアクセスに必要な詳細を提供してください。
 - a. 接続サーバー用の Atom サービス文書の URL は、REST サービス・パネルで見つけることができます。サービスは、タイプ *SCM Connectivity Server* を保有します。
 - b. IBM Business Process Manager 管理セキュリティが使用可能な場合、SFM コンソール・ユーザーも、サービス・エンドポイントへのアクセスには、ユーザー名およびパスワードが必要です。これらの資格情報は、Service Connectivity Architecture モジュールをインストール可能な、充分な管理権限を持つ、RestServicesUser グループ内のユーザーのものでなければなりません。

Service Connectivity Management 接続プロバイダーの構成:

管理コンソールを使用して、ご使用の環境の Service Connectivity Management (SCM) 接続プロバイダーを構成できます。

SCM 接続プロバイダーは、SCM プロトコルを使用して公開される ESB の論理区画です。その接続プロバイダー上で SCM グループ・プロキシを作成するときにプロキシ・ゲートウェイ・モジュールがデプロイされるターゲット (サーバーまたはクラスター) が定義されます。また、それらのグループ・プロキシ上で作成されたプロキシ・ターゲットで使用するプロパティも定義されます。

「サービス統合」>「SCM 接続プロバイダー」を選択します。「SCM 接続プロバイダー」ページが開き、現在の環境内の接続プロバイダーがすべて表示されます。

SCM 接続プロバイダーは、このページから、追加、除去または使用できます。

接続プロバイダーの追加:

管理コンソールを使用して、Service Connectivity Management (SCM) 接続プロバイダーとして、サーバーまたはクラスターを追加できます。

1. 「サービス統合」>「SCM 接続プロバイダー」をクリックします。「SCM 接続プロバイダー」ページが開き、現在の環境内の接続プロバイダーがすべて表示されます。
2. 「追加」をクリックして、サーバーまたはクラスターを接続プロバイダーとして追加します。接続プロバイダーを追加するためのウィザードが開きます。
3. ウィザードで「ステップ 1 サーバーまたはクラスターの選択」を完了して、この接続プロバイダー用に SCM グループ・プロキシをデプロイする必要があるサーバーまたはクラスターを識別します。「次へ」をクリックします。
4. ウィザードで「ステップ 2 SCM 接続プロバイダー・プロパティの指定」を完了して、プロパティを指定します。

オプション	説明
名前	SCM 接続プロバイダーの名前。これはセル内で固有でなければなりません。名前が既に存在する場合は、例外がスローされます。名前、説明、連絡先、組織、およびロケーションは、Service Federation Management コンソールのユーザーに表示されます。
説明	SCM 接続プロバイダーの簡単な説明。これは任意指定であり、デフォルトは空ストリングです。名前、説明、連絡先、組織、およびロケーションは、Service Federation Management コンソールのユーザーに表示されます。
連絡先	SCM 接続プロバイダーの連絡先担当者の名前。これは任意指定であり、デフォルトは空ストリングです。名前、説明、連絡先、組織、およびロケーションは、Service Federation Management コンソールのユーザーに表示されます。
Organization	SCM 接続プロバイダーの所有組織の名前。これは任意指定であり、デフォルトは空ストリングです。名前、説明、連絡先、組織、およびロケーションは、Service Federation Management コンソールのユーザーに表示されます。
ロケーション	SCM 接続プロバイダーのロケーション。これは任意指定であり、デフォルトは空ストリングです。名前、説明、連絡先、組織、およびロケーションは、Service Federation Management コンソールのユーザーに表示されます。

オプション	説明
HTTP ホスト	保護されていないプロキシ・ターゲットのエンドポイントに対して返されるホスト名。これは、別のドメイン内の Web サービス・クライアントがプロキシへのアクセスに使用するホストであり、Web サーバーおよびその他のネットワーク・コンポーネントが考慮されます。
HTTP ポート	保護されていないプロキシ・ターゲットのエンドポイントに対して返されるポート。これは、別のドメイン内の Web サービス・クライアントがプロキシへのアクセスに使用するポートであり、Web サーバーおよびその他のネットワーク・コンポーネントが考慮されます。
HTTPS ホスト	保護されているプロキシ・ターゲットのエンドポイントに対して返されるホスト名。これは、別のドメイン内の Web サービス・クライアントがプロキシへのアクセスに使用するホストであり、Web サーバーおよびその他のネットワーク・コンポーネントが考慮されます。
HTTPS ポート	保護されているプロキシ・ターゲットのエンドポイントに対して返されるポート。これは、別のドメイン内の Web サービス・クライアントがプロキシへのアクセスに使用するポートであり、Web サーバーおよびその他のネットワーク・コンポーネントが考慮されます。
認証別名	基本認証資格情報を提供する認証別名の名前。この資格情報は、SCM 接続プロバイダーのドメインに関連付けられたサービス・レジストリーから、HTTP を使用して WSDL 文書を取得するために使用されます。サービス・レジストリーに接続するために基本認証が必要とされない場合は、このパラメーターを指定する必要はありません。
SSL 構成	SSL 構成の名前。この構成は、SCM 接続プロバイダーのドメインに関連付けられた保護されているサービス・レジストリーから、HTTP を使用して WSDL 文書を取得するために使用されます。これは任意指定であり、指定しなかった場合は、サーバーのデフォルト SSL 構成が使用されます。

5. 「終了」をクリックします。SCM 接続プロバイダー・ページが開き、新規の接続プロバイダーがリストされます。
6. 「メッセージ」セクションを確認し、接続プロバイダーおよびそのプロパティーが完了していることを確認してください。
7. 「保存」をクリックして、接続プロバイダーをマスター構成に保存します。

接続プロバイダーの除去:

管理コンソールを使用して、Service Connectivity Management (SCM) 接続プロバイダーとして、サーバーまたはクラスターを除去できます。

1. 「サービス統合」>「SCM 接続プロバイダー」をクリックします。「SCM 接続プロバイダー」ページが開き、現在の環境内の接続プロバイダーがすべて表示されます。
2. 接続プロバイダーを選択します。「除去」をクリックして、サーバーまたはクラスターを接続プロバイダーから除去します。

接続プロバイダーの使用:

管理コンソールを使用して、Service Connectivity Management (SCM) 接続プロバイダーをリスト、表示および変更できます。

1. 「サービス統合」>「SCM 接続プロバイダー」をクリックします。「SCM 接続プロバイダー」ページが開き、現在の環境内の接続プロバイダーがすべて表示されます。
2. 接続プロバイダーを選択して、詳細ページを表示します。
3. このページでフィールドを変更できます。ただし、「名前」、「作成者」、「作成」、または「更新」フィールドは変更できません。
4. 変更を完了するには、「適用」、「OK」、「リセット」、「キャンセル」ボタンを使用してください。

Service Component Architecture (SCA) モジュールの Service Connectivity Management の使用:

Service Component Architecture (SCA) モジュールは、Service Federation Management コンソールがグループ・プロキシを作成するときにインストールされます。SCA モジュールは、管理コンソールの SCA モジュール・リストとエンタープライズ・アプリケーション・ビューに表示できます。

バージョン管理されている SCA モジュールは、グループ・プロキシ用に使用されます。基本モジュール名は `ScmGroupProxy` で、バージョン番号は `v1_0_0` です。セル ID は、接続プロバイダー名とセル内のグループ・プロキシ固有の ID から構成されます。

モジュール・リストに表示されるサービス・モジュール名は `ScmGroupProxy (ConnectivityProviderName_UniqueID)` で、サービス・アプリケーション名の形式は `ScmGroupProxy_v1_0_0_ConnectivityProviderName_UniqueIDApp` です。また、SCM プロトコル経由でグループ・プロキシにアクセスする際に使用される URL と Atom ID の一部も、同じ固有 ID によって構成されます。

生成された固有 ID の `xot5` によって接続プロバイダー `ExampleConnectivityProvider` 上に作成されたグループ・プロキシは、最終的に `ScmGroupProxy (ExampleConnectivityProvider_xot5)` という名前のモジュールになり、アプリケーション `ScmGroupProxy_v1_0_0_ExampleConnectivityProvider_xot5App` として、接続プロバイダーに関連付けられたサーバーまたはクラスターにデプロイされます。

グループ・プロキシ・リソースを表す Atom 文書にアクセスするための URL は、次の形式になります。

```
/rest/scmp/connectivity-provider/ExampleConnectivityProvider-g0jk9fzm/mediation/group-proxy-type/group-proxy/xot5-g0jkja19
```

この文書の Atom ID は、次の形式になります。

```
urn:wesb-scmp:cell/localhostNode01Cell/connectivity-provider/ExampleConnectivityProvider-g0jk9fzm/mediation/group-proxy-type/group-proxy/xot5-g0jkja19
```

注: SCM グループ・プロキシの属性は、モジュールのプロモートされたプロパティとして表示されます。これらのモジュールは管理コンソールで表示できますが、変更しないでください。

Service Connectivity Management (SCM) のプロキシ・ゲートウェイへのマッピング:

Service Connectivity Management (SCM) グループ・プロキシ・モジュールは、IBM Business Process Manager 内にプロキシ・ゲートウェイとして実装されています。

グループ・プロキシの SCM プロキシ・ターゲットは、プロキシ・ゲートウェイの仮想サービスとして表示され、プロキシ・ゲートウェイ・ウィジェットを介して、**Business Space powered by WebSphere** で表示することができます。プロキシ・ターゲットのプロパティは、仮想サービスのプロパティとして表示されます。

注: SCM グループ・プロキシ・モジュールに関連付けられた仮想サービスを、プロキシ・ゲートウェイ・ウィジェットを介して、追加、除去、または変更しないでください。

SMTP サーバーの構成

Process Server ランタイム環境で E メール通知を送信するときに使用する Simple Mail Transfer Protocol (SMTP) サーバーを定義します。新規インストールの後、SMTP サーバーを手動で構成して、メール通知を使用可能にする必要があります。

このトピックでは、正しい SMTP サーバーを指すように SMTP サーバーの設定を変更するために必要なステップについて説明します。デフォルトの SMTP サーバーの設定は次のとおりです。

```
<server merge="mergeChildren">
    <!-- email properties -->
    <email>
        <!-- SMTP server that mail should be sent to -->
        <smtp-server>smtp.yourcompany.com</smtp-server>
    </email>
```

1. サーバーを停止します。
2. テキスト・エディターを使用して 100Custom.xml ファイルを開きます。

- ネットワーク・デプロイメント環境の場合:

- Process Server および Process Center のクラスター:

```
DMGR-profile-root%config%cells%cell-name%clusters%ClusterName%
process-center%config%100Custom.xml
```

- Process Server および Process Center のクラスター・メンバー:

```
DMGR-profile-root%config%cells%cell-name%nodes%node-name%servers%serverName%
process-center%config%100Custom.xml
```

- スタンドアロン環境の場合:

```
profile-root%config%cells%cell-name%nodes%node-name%servers%serverName%
process-center%config%100Custom.xml
```

3. 100Custom.xml ファイルに以下を追加します。

```
<properties>
  <server merge="mergeChildren">

    <!-- email properties -->
    <email merge="mergeChildren">
      <!-- SMTP server that mail should be sent to -->
      <smtp-server merge="replace">SMTP.YOURCOMPANY.COM</smtp-server>
    </email>
  </server>
</properties>
```

ここで、**SMTP.YOURCOMPANY.COM** は実際の SMTP サーバーの名前です。

4. 変更内容を保存して、サーバーを再始動します。

拡張構成: 環境のカスタマイズ

IBM Business Process Manager でシステム上にランタイム環境をインストールして構成した後、構成のカスタマイズが必要になる場合があります。例えば、設定のカスタマイズ、追加のセキュリティー・プロバイダーのセットアップ、ユーザー・アカウントのセットアップ、パスワードの変更と暗号化などが必要になる場合があります。

Process Center への接続で Process Server が使用する設定のカスタマイズ

IBM Business Process Manager をインストールして構成したら、Process Server をオフライン・サーバーから Process Center 接続サーバーに変更することができます (その逆も可能)。

IBM Business Process Manager の Process Server コンポーネントがインストールされて構成されていることを確認します。

このトピックの手順を使用して、スタンドアロン・サーバー環境または Network Deployment 環境用に Process Server 接続設定をカスタマイズします。

通常、構成のカスタマイズは 100Custom.xml ファイルを編集することによって管理します。(例えば Process Center のアドレス変更など、構成の変更が必要な場合は、認証別名の構成を更新し、管理用タスクを実行してください。) 100Custom.xml ファイルのカスタマイズと編集の例については、『1041 ページの『インストール後のパスワード変更』』を参照してください。

例えば、以下のタスクを実行できます。

- 接続の詳細のホストおよびポート名の更新。
- Process Server を、オフライン・サーバーから Process Center 接続サーバーに変更する (その逆も可能)。例えば、Process Server をオフライン・サーバーとして構成した場合、その構成を Process Center 接続サーバーに変更することができます。Process Center に接続された Process Server は、Process Center 管理コンソールから直接管理することができます。Process Center のユーザー・インターフェースから Process Server を管理する方法については、『IBM Business Process Manager の管理』を参照してください。
- 接続 URL の変更。

Process Center が Process Server に接続されている場合、Process Center ユーザー・インターフェースを使用して直接管理することができます。

ネットワーク構成に複数のアプリケーション・ターゲットが存在する場合に、Process Center と Process Server 間の通信のターゲットごとに新規ユーザーを構成するには、構成ファイルにまだ含まれていない新規ユーザーそれぞれの認証別名を作成する必要があります。

Process Center への接続で Process Server が使用する設定をカスタマイズするには、以下のステップを実行します。

1. デプロイメント・マネージャーと、Process Server クラスターまたはサーバーを停止します (稼働している場合)。
2. 構成を更新します。
 - **V7.5.1.1 を実行中の場合:** 以下に示す手順で、認証別名構成ページを更新し、管理タスクを実行します。
 - a. 管理コンソールを開きます。
 - b. 「セキュリティー」 > 「ビジネス・インテグレーション・セキュリティー」をクリックします。

- c. 構成する認証別名をクリックするか、認証別名に関連したチェック・ボックスを選択して、「編集」ボタンをクリックします。デフォルトの IBM Business Process Manager ユーザー・アカウントごとに、外部コンポーネントが Process Server に接続するためのデフォルトの認証別名が用意されています。例えば、BPMPrimaryAdmin_Auth_Alias は、デフォルトの管理ユーザー用の認証別名です。ユーザー名とパスワードの資格情報を指定してください。

注: 認証別名の構成に変更を加えるためには、管理者ロールまたは構成ロールのメンバーである必要があります。

- d. 次に示す値を更新して、管理用タスクを実行します。

- **repositoryServerURL:** http://localhost:9190/ProcessCenter
- **repositoryServerHeartbeat:** 10

注: オフライン・サーバーは、値 **-1** によって示されます。

サーバーの場合:

```
AdminTask updateBPMConfig {-nodeName Node_Name -serverName Server_Name -repositoryServerURL
http://localhost:9190/ProcessCenter -repositoryServerHeartbeat 10}
AdminConfig save
```

クラスターの場合:

```
AdminTask updateBPMConfig {-clusterName Cluster_Name -repositoryServerURL
http://localhost:9190/ProcessCenter -repositoryServerHeartbeat 10}
AdminConfig save
```

注: **user-auth-alias** と **designated-user-auth-alias** の値を更新することもできます。

user-auth-alias の値により、ユーザーがプロセス・サーバーから Process Center へ接続するための認証別名を指定します。この別名で設定されたユーザーとパスワードは、Process Center に存在している必要があります。

designated-user-auth-alias の値により、ユーザーが Snapshot にアクセスしてランタイム Process Server にデプロイし、IBM Process Designer 内の Process Inspector からそのプロセス・サーバーにアクセスするための認証別名を指定します。この認証別名は、Process Server と Process Center の両方で定義されている必要があります。また、パスワードも一致している必要があります。

updateBPMconfig 管理タスクは XML 構成ファイルを更新します。これらの XML 構成ファイルには、環境に適用されるすべての変更が指定された単一ファイルを提供する 100Custom.xml ファイルが含まれます。100Custom.xml ファイルが存在していない場合は、管理タスクがこのファイルを作成します。複数のバージョンのカスタム・ファイル (101Custom.xml や 102Custom.xml など) がある場合は、100Custom.xml ファイルのみが更新されます。

- **V7.5.1 を実行中の場合:** 99Local.xml ファイルの接続値を編集します。

99Local.xml ファイルのディレクトリー・パス・ロケーションは、スタンドアロン環境であるか、クラスター化された Network Deployment 環境であるか、あるいは単一サーバーの Network Deployment 環境であるかによって異なります。

スタンドアロン・サーバー環境の場合:

```
stand-alone-profile-root%config%cells%cell-name\nodes\stand-alone-node-name\
servers\server_name\process-server\config\system\99Local.xml
```

Network Deployment クラスター環境の場合:

- Network Deployment の Process Server クラスター: `DMGR-profile-root\config\cells\cell-name\clusters\cluster-name\process-server\config\system\99Local.xml`
- 次の場所の各 Process Server クラスター・メンバー: `DMGR-profile-root\config\cells\cell-name\nodes\custom-node-name\servers\cluster-member-name\process-server\config\system\99Local.xml`

Network Deployment 単一サーバー環境の場合:

`DMGR-profile-root\config\cells\cell-name\nodes\custom-node-name\servers\server_name\process-server\config\system\99Local.xml`

次の例を参照してください。

更新前:

```
<repository-server-url>/ProcessCenter</repository-server-url>
<repository-server-interval>-1</repository-server-interval>
```

更新後:

```
<repository-server-url>http://localhost:9190/ProcessCenter</repository-server-url>
<repository-server-interval>10</repository-server-interval>
```

重要: オフライン・サーバーは **-1** の値で示されます。

例: `<repository-server-interval>-1</repository-server-interval>`。

3. デプロイメント・マネージャーを再始動します。
4. Network Deployment 環境の場合、管理コンソールでノード・エージェントを同期化します。スタンドアロン・サーバーの場合、デプロイメント・マネージャーとノード・エージェントの同期は必要ありません。ノード・エージェントの同期方法については、WebSphere Application Server インフォメーション・センターで **syncNode** コマンドを参照してください。
5. Process Server クラスターまたはサーバーを再始動します。

Process Server を Process Center に接続するための設定がカスタマイズされました。

関連タスク:

1041 ページの『インストール後のパスワード変更』

IBM Business Process Manager のインストール時に指定したパスワードを変更するには、Process Admin Console を使用してこのパスワードを変更し、WebSphere Application Server 管理コンソールを使用して、対応する認証別名でのパスワードを変更します。

関連情報:



WebSphere Application Server インフォメーション・センター

Web サーバーと連動する Process Server/Process Center クラスターのカスタマイズ

IBM Business Process Manager のインストールおよび構成の後、Web サーバーと連動するクラスターとして適切に機能できるように、環境をカスタマイズする必要があります。

Process Server をインストールして構成してあること、サーバーおよびクラスターを作成して構成してあることを確認してください。このトピックの手順を完了するまでは、クラスターを始動できません。

注: `updateBPMconfig` 管理タスクは V7.5.1.1 で追加されました。この管理タスクは、XML 構成ファイルを更新します。これらの構成ファイルには、環境に適用されるすべての変更が指定された単一ファイルを提供する `100Custom.xml` ファイルが含まれます。`100Custom.xml` ファイルが存在していない場合は、管理タスクがこのファイルを作成します。複数のバージョンのカスタム・ファイル (`101Custom.xml` や `102Custom.xml` など) がある場合は、`100Custom.xml` ファイルのみが更新されます。

このトピックでは、以下の操作の手順を示します。

- Process Server と Process Center の両方で、Web サーバーを指すように 100Custom.xml ファイルを構成します。ネットワーク・デプロイメント環境では、このファイルが複数の場所に存在します。100Custom.xml ファイルの作成方法または検索方法については、『IBM Business Process Manager 構成設定の管理』を参照してください。このトピックでは 100Custom.xml について説明しますが、他の 100 レベル・ファイルに構成情報を含めることもできます。例えば Process Center のアドレス変更など、構成の変更が必要な場合は、認証別名の構成を更新し、管理用タスクを実行してください。100Custom.xml ファイル内の認証別名のそれぞれに、有効なユーザー名とパスワードが含まれている必要があります。
- Web サーバーで使用できるよう、Process Server をオフライン・モードからオンライン・モードに変更します。
- HTTP over SSL または HTTP Secure (HTTPS) を処理するよう、Process Center から Process Server への通信を設定します。

1. Process Server と Process Center の両方で、Web サーバーを指すように 100Custom.xml ファイルを構成します。100Custom.xml 構成ファイルを直接編集する前に、そのバックアップ・ファイルを作成します。ファイルを安全に保つため、.bak 拡張子を追加します。

- a. デプロイメント・マネージャーを停止します。
- b. 99Local.xml ファイルを開き、<authoring-environment> セクションを探します。
- c. このセクションをコピーして、100Custom.xml ファイルに貼り付けます。
- d. merge="mergeChildren" 修飾子を使用して、100Custom.xml ファイルに貼り付けたテキストを更新します。Web サーバーが存在しない場合、100Custom.xml ファイル内のすべての URL はクラスター・メンバーのホスト名とポートを指します。Web サーバーが存在しない場合、クラスター・サーバー・メンバーの xml ファイルを変更する必要はありません。Web サーバーが存在する場合は、その Web サーバーの実際のホスト名とポートを使用して、Web サーバーのホスト名とポートを指すようにすべての値を変更します。http (80) または https (443) にデフォルト・ポートを使用する場合は、このポートが URL のオプション部分になります。100Custom.xml ファイル内にトークン化された値を残さないようにしてください。以下に、変更を加えた後のエントリーの例を示します。

```
<authoring-environment merge="mergeChildren">
  <!-- Prefix for serving images in the Authoring Environment -->
  <images-prefix merge="replace">https://server1.ibm.com:9447/teamworks</images-prefix>

  <!-- Prefix for URLs that refer to the portal -->
  <portal-prefix merge="replace">https://server1.ibm.com:9447/portal</portal-prefix>

  <!-- Prefix for URLs that refer to the repository view -->
  <repository-prefix merge="replace">https://server1.ibm.com:9447/ProcessCenter</repository-prefix>

  <servlet-prefix merge="replace">https://server1.ibm.com:9447/teamworks</servlet-prefix>

  <!-- Prefix for URLs that refer to the web api -->
  <webapi-prefix merge="replace">https://server1.ibm.com:9447/webapi</webapi-prefix>
</authoring-environment>
```

- e. この手順の残りの部分の実行を続けない予定の場合は、デプロイメント・マネージャーを開始します。そうでない場合は、次のステップに進みます。
 - f. 更新を保存します。管理コンソールで、「**完全同期**」をクリックし、この情報をすべてのノードに同期します。
 - g. サーバーを再始動します。
2. Web サーバーを指すように Process Server と Process Center を構成するには、次の手順で行います。
- a. デプロイメント・マネージャーを停止します。

b. 構成を更新します。

- **V7.5.1.1 以降を実行中の場合:** 管理タスクを実行します。

1) 次に示す値を更新して、管理用タスクを実行します。サーバーの場合:

```
AdminTask.updateBPMConfig( [ "-nodeName", Node_Name, "-serverName", Server_Name,
"-appServerName", APPSERVER_URL, "-appServerPort", APPSERVER_PORT" ] )
AdminConfig.save()
```

クラスターの場合:

```
AdminTask.updateBPMConfig( [ "-clusterName", Cluster_Name, "-appServerName",
YOUR_APPSERVER_URL, "-appServerPort", YOUR_APPSERVERPORT ] )
AdminConfig.save()
```

注: Web サーバーが存在する場合は、その Web サーバーの実際のホスト名とポートを使用して、Web サーバーのホスト名とポートを指すようにすべての値を変更します。HTTP のデフォルト・ポート (80) を使用する場合、ポートの指定はオプションです。

- **V7.5.1.0 を実行中の場合:** Process Server クラスター・マシン上にある 100Local.xml ファイル内の接続値を編集します。
 - Network Deployment の Process Server クラスター: *DMGR-profile-root\config\cells\cell-name\clusters\ClusterName\process-center\config\system\100Local.xml*
 - 次の場所の各 Process Server クラスター・メンバー: *DMGR-profile-root\config\cells\cell-name\nodes\node-name\servers\serverName\process-center\config\system\100Local.xml*

次の例を参照してください。

```
<images-prefix>http://w2k8-64bitp.austin.ibm.com:9080/teamworks</images-prefix>
<portal-prefix>http://w2k8-64bitp.austin.ibm.com:9080/portal</portal-prefix>
<deploy-snapshot-using-https>true</deploy-snapshot-using-https>
--><server-name>Process Server</server-name>
<server-description>Process Server Production Cluster</server-description>
<server-host>w2k8-64bitps1.austin.ibm.com</server-host>
<server-port>80</server-port>
<environment-type>Production</environment-type>
```

この例について、次に説明します。

```
<images-prefix>http://w2k8-64bitp.austin.ibm.com:9080/teamworks</images-prefix>
```

- これは、オーサリング環境でイメージを処理するためのプレフィックスです。

```
<portal-prefix>http://w2k8-64bitp.austin.ibm.com:9080/portal</portal-prefix>
```

- これは、Process Portal を参照する URL のためのプレフィックスです。

```
<server-host>w2k8-64bitps1.austin.ibm.com</server-host>
```

- これは、Process Server クラスターの Web サーバーのホスト名です。

```
<server-port>80</server-port>
```

- これは、Process Server の Web サーバーの http ポートです。https を使用する場合は、https ポートを指定してください。

- c. この手順の残りの部分の実行を続けない予定の場合は、デプロイメント・マネージャーを開始します。そうでない場合は、次のステップに進みます。
- d. 管理コンソールからノード・エージェントを同期します。詳しくは、WebSphere Application Server インフォメーション・センターで **syncNode** コマンドを参照してください。

3. Web サーバーで使用できるように、Process Server をオフライン・モードからオンライン・モードに変更します。
 - a. デプロイメント・マネージャーを停止します。
 - b. Process Server クラスター・マシン上で、認証別名に有効なユーザー名とパスワードが含まれていることを確認して、管理タスクを実行してください。
 - 1) 管理コンソールを開きます。
 - 2) 「**セキュリティ**」 > 「**グローバル・セキュリティ**」をクリックしてから、「**Java Authentication and Authorization Service**」を展開し、「**J2C 認証データ**」をクリックします。
 - 3) 以下の認証別名を検証し、必要に応じて変更します。
 - `<repository-server-user-auth-alias>BPMRuntimeServer_Auth_Alias</repository-server-user-auth-alias>` の下の `100custom.xml` ファイルに構成される別名には、Process Center に対して認証するための有効なユーザー名とパスワードが含まれている必要があります。
 - `<repository-server-designated-user-auth-alias>BPMAuthor_Auth_Alias</repository-server-designated-user-auth-alias>` の下の `100custom.xml` ファイルに構成される別名には、IBM Process Server での有効なユーザー名とパスワードが含まれている必要があります。これは、オンライン・デプロイメント用に IBM Process Center が使用します。

注: 認証別名の構成に変更を加えるためには、管理者ロールまたは構成ロールのメンバーである必要があります。

 - 4) 次に示す値を更新して、管理用タスクを実行します。クラスターの場合:
 - `repositoryServerURL`: `http://YOUR_APPSERVER_URL/ProcessCenter`
 - `repositoryServerHeartbeat`: `10`
 - `clusterName`: `YOUR_APPSERVER_URL`

```
AdminTask.updateBPMConfig( [ "-clusterName", Cluster_Name, "-repositoryServerURL",
"http://APPSERVER_URL/ProcessCenter", "-repositoryServerHeartbeat", "10" ] )
AdminConfig.save()
```
 - c. この手順の残りの部分の実行を続けたい予定の場合は、デプロイメント・マネージャーを開始します。そうでない場合は、次のステップに進みます。
 - d. 管理コンソールでノード・エージェントを同期します。

ノード・エージェントの同期方法については、WebSphere Application Server インフォメーション・センターで `syncNode` コマンドを参照してください。
4. HTTP over SSL または HTTP Secure (HTTPS) を使用するように、Process Center から Process Server への通信を設定します。
 - a. Process Server の SSL 証明書を Process Center にインポートします。
 - 1) Process Center 管理コンソールで、「**セキュリティ**」 > 「**SSL 証明書と鍵管理 (SSL certificate and key management)**」 > 「**エンドポイントのセキュリティ構成の管理 (Manage endpoint security configurations)**」 > 「**Click on any node**」 > 「**鍵ストアと証明書 (Key stores and certificates)**」 > 「**CellDefaultTrustStore**」 > 「**署名者証明書 (Signer certificates)**」 > 「**ポートから取得 (Retrieve from port)**」をクリックします。
 - 2) Process Server Web サーバーの別名、ホスト名、およびセキュア・ポートを入力します。デフォルトの IHS Web サーバー・セキュア・ポートは 443 です Web サーバーが存在しない場合、ホスト名およびポートの値は Process Center クラスター・メンバーのホスト名およびポートの値と同じです。
 - 3) 「**署名者情報の取得**」をクリックして、「**適用**」および「**保存**」をクリックします。

- 4) クラスタを再始動します。
- b. Process Center の SSL 証明書を Process Server にインポートします。
 - 1) Process Server 管理コンソールで、「セキュリティ」 > 「SSL 証明書と鍵管理 (SSL certificate and key management)」 > 「エンドポイントのセキュリティ構成の管理 (Manage endpoint security configurations)」 > 任意のノードをクリック > 「鍵ストアと証明書 (Key stores and certificates)」 > 「CellDefaultTrustStore」 > 「署名者証明書 (Signer certificates)」 > 「ポートから取得 (Retrieve from port)」に移動します。
 - 2) Process Server Web サーバーの別名、ホスト名、およびセキュア・ポートを入力します。デフォルトの IHS Web サーバー・セキュア・ポートは 443 です Web サーバーが存在しない場合、ホスト名およびポートの値は Process Center クラスタ・メンバーのホスト名およびポートの値と同じです。
 - 3) 「署名者情報の取得」をクリックして、「適用」および「保存」をクリックします。
 - 4) クラスタを再始動します。
- c. 次に示す値を更新して、管理用タスクを実行します。クラスタの場合:


```
AdminTask.updateBPMConfig( [ "-clusterName", Cluster_Name, "-repositoryServerURL".
"https://APPSERVER_URL/ProcessCenter" ] )
AdminConfig.save()
```
- d. デプロイメント・マネージャーを始動します。
- e. クラスタを再始動します。

関連タスク:

1041 ページの『インストール後のパスワード変更』

IBM Business Process Manager のインストール時に指定したパスワードを変更するには、Process Admin Console を使用してこのパスワードを変更し、WebSphere Application Server 管理コンソールを使用して、対応する認証別名でのパスワードを変更します。

関連情報:



WebSphere Application Server インフォメーション・センター

IBM Business Process Manager 用の Oracle Real Application Cluster (RAC) の構成

Oracle Real Application Clusters (RAC) は Oracle データベースのオプションであり、複数のコンピューターをまとめて、単一システムとして動作するクラスタ・データベースにします。RAC データベースでは、個別のノードで実行される Oracle プロセスは、共有ディスク・ストレージの同じデータにアクセスします。

IBM Business Process Manager の初期インストールおよび構成時に、Oracle RAC をターゲット・データベースとして使用することはできません。構成時に、Oracle データベースの単一インスタンスの SID を指定する必要があります。Oracle データベースにアクセスするために自動的に生成され、サポートされる JDBC URL は、**jdbc:oracle:thin:@<hostname>:<port number>:<DBName>** です。Oracle RAC を使用するために、JDBC URL を事後構成ステップとして編集する必要があります。

以下の 2 つのシナリオが考えられます。

- スタンドアロン・プロファイルを使用する場合は、データベース名の値として SID を使用して、プロファイルを作成する必要があります。
- Network Deployment 環境をセットアップする場合は、SID を使用してプロファイルとクラスタを構成する必要があります。

IBM Business Process Manager では、JDBC URL は必ず、**jdbc:oracle:thin:@[HOST][:PORT]:SID** の形式で作成されます。この形式を次のいずれかに編集することにより、Oracle RAC を使用できます。

- `jdbc:oracle:thin:@//[HOST][:PORT]/SERVICE`

ここで、**SERVICE** は Oracle サービス名です。

注: この新しい構文は、Oracle 11g R2 で使用可能な SCAN 機能で使用できますが、SCAN 機能がない場合は使用できません。

- Oracle RAC の URL を指定するための一般的な形式

```
jdbc:oracle:thin:@(DESCRIPTION=
(Load_balance=on)
(ADDRESS=(PROTOCOL=TCP)(HOST=host1)(PORT=1521))
(ADDRESS=(PROTOCOL=TCP)(HOST=host2)(PORT=1521))
(CONNECT_DATA=(SERVICE_NAME=service_name)))
```

Oracle RAC ノードのフェイルオーバーが発生すると、IBM Business Process Manager は処理を停止するため、場合によってはすべての IBM Business Process Manager ノードを再始動する必要があります。プロセス・リカバリー問題が発生した場合は、IBM Business Process Manager V7.5 の特定の状況におけるプロセス・リカバリーの問題を参照してください。

1. 関連 Oracle JDBC データ・ソースを定義するときに、Oracle URL として RAC URL を指定します。
 - a. 管理コンソールで、「リソース」 > 「JDBC」 > 「データ・ソース」を選択します。
 - b. JDBC URL を指定して Oracle を使用しているすべてのデータ・ソースを編集して、上記のいずれかの形式を使用するようにします。

管理コンソールを使用したデータ・ソースの構成を参照してください。

2. 「認証別名の構成」ページを更新し、管理用タスクを実行して、Oracle RAC を使用するように URL を更新します。詳細については、認証別名の変更を参照してください。
3. Network Deployment 環境では、Process Center、Process Server、または Performance Data Warehouse クラスタ・メンバーが含まれるノードを同期化する必要があります。
 - a. 管理コンソールで、「システム管理」 > 「ノード」 をクリックします。
 - b. ノードをすべて選択して、「完全な再同期化」をクリックします。
 - c. クラスタとサーバーのすべてを停止し、再始動します。

LDAP セキュリティー・プロバイダーの構成

IBM Business Process Manager での追加の Lightweight Directory Access Protocol セキュリティー・プロバイダーを使用するには、プロバイダーをフェデレートされたリポジトリに追加する必要があります。

デフォルトでは、IBM Business Process Manager は、内部 IBM BPM セキュリティー・プロバイダーのみを含む単一の統合リポジトリで構成されています。あるいは、WebSphere フェデレーテッド・リポジトリで LDAP セキュリティー・プロバイダー (Microsoft Active Directory など) を構成することができます。

IBM Business Process Manager で LDAP セキュリティー・プロバイダーを構成するには、以下の手順を完了します。

1. `tw_user` として WebSphere 管理コンソールにログオンします。`tw_user` アカウントのデフォルトのパスワードは、`tw_user` です。
2. 「セキュリティ」 > 「グローバル・セキュリティ」をクリックします。
3. 「ユーザー・アカウント・リポジトリ」の下で、「使用可能なレルムの定義」 > 「フェデレーテッド・リポジトリ」をクリックします。

4. 「構成」をクリックします。
5. 「関連項目」の下で、「リポジトリの管理」をクリックします。
6. 「追加」をクリックし、追加したいプロバイダーのパラメーターを指定します。例えば、Microsoft Active Directory を追加するには、以下の例のような値を指定します。

表 148. プロバイダーを追加するためのパラメーター

パラメーター	値の例
リポジトリ ID	SALOMLDAP // change to suit
ディレクトリー・タイプ	Microsoft Windows Active Directory
1 次ホスト名	10.1.5.18
バインド識別名	cn=LDAP_USER,CN=Users,DC=COMPANYQA,DC=com
バインド・パスワード	pwsaaswp

7. 「OK」をクリックし、次に「保存」をクリックします。
8. 「基本項目をレルムに追加 (Add Base entry to Realm)」をクリックし、以下の例のような値を指定します。

表 149. 基本項目をレルムに追加するためのパラメーター

基本項目名	値の例
レルム内でこの項目のセットを一意的に識別する基本項目の識別名	cn=Users,DC=COMPANYQA,DC=com
このリポジトリ内の基本項目の識別名	cn=Users,DC=COMPANYQA,DC=com

9. 「OK」をクリックし、次に「保存」をクリックします。
10. 「グローバル・セキュリティー」ページで、「現行として設定 (Set as current)」をクリックし、次に「適用」をクリックします。
11. すべての IBM BPM サーバーをシャットダウンします。Network Deployment 環境の場合、クラスターを停止することによって、同じクラスターのメンバーであるすべてのサーバーを同時にシャットダウンすることができます。
12. IBM BPM 内部セキュリティー・プロバイダーと追加したばかりのセキュリティー・プロバイダーとの間に重複するユーザーが存在しないことを確認してください。重複するユーザーが存在する場合、IBM Business Process Manager 製品コンポーネントを実行したときにエラーが発生します。
13. すべての IBM BPM サーバーを始動します。Network Deployment 環境の場合、クラスターを開始することによって、クラスター内のすべてのサーバー (クラスター・メンバー) を 1 つのアクションで開始することができます。

ご使用のランタイム環境用にサーバー・クラスターを構成した場合、クラスター内のすべてのサーバーを停止し、再始動します。

関連タスク:

1041 ページの『スタンドアロン構成用のユーザー・アカウントのセットアップ』
 IBM Business Process Manager の内部セキュリティー・プロバイダーを使用して、ユーザーおよびグループの作成と保守を行うことができます。さらに、内部セキュリティー・プロバイダーを Lightweight Directory Access Protocol (LDAP) などの外部セキュリティー・プロバイダーと結合することができます。

スタンドアロン構成用のユーザー・アカウントのセットアップ

IBM Business Process Manager の内部セキュリティ・プロバイダーを使用して、ユーザーおよびグループの作成と保守を行うことができます。さらに、内部セキュリティ・プロバイダーを Lightweight Directory Access Protocol (LDAP) などの外部セキュリティ・プロバイダーと結合することができます。

IBM Business Process Manager の内部セキュリティ・プロバイダーには、デフォルトのユーザーおよびグループがいくつか用意されています。内部セキュリティ・プロバイダーと外部プロバイダーを結合して使用すると、両方のプロバイダーのユーザーとグループが選択可能になります。

重要: IBM BPM のデフォルトの管理者アカウント `tw_admin` およびデフォルトの管理者グループ `tw_admins` は削除しないでください。これらのデフォルトのアカウントがないと、サーバーおよびユーザーを管理できません。 `tw_admin` アカウントのパスワードを変更するには、『デフォルトのユーザーおよびグループの管理』を参照してください。

IBM BPM での最善のセキュリティ管理方法は、グループを使用することです。例えば、IBM BPM への管理アクセス権限を付与するには、外部セキュリティ・プロバイダーの既存のユーザー・グループを `tw_admins` に追加します。 `tw_admins` は、メンバーがデフォルトで IBM BPM 製品コンポーネントへの管理アクセス権限を持つ IBM BPM グループです。次に、変更が必要な場合は、外部セキュリティ・プロバイダーに存在するグループの個々のユーザーを追加または削除することができます。この手法を用いると、外部プロバイダーで実行するセキュリティ保守において、IBM BPM で追加作業を行う必要がなくなります。

最初に IBM BPM サーバーを構成する際にスタンドアロン構成用にユーザー・アカウントをセットアップするには、以下のステップを実行します。

1. Process Admin Console にアクセスするために、Web ブラウザーで `http://[host_name]:[port]/ProcessAdmin` にアクセスします。デフォルトの管理アカウント (`tw_admin`) を使用してログオンします。デフォルトでは、パスワードはプロファイルの作成時に使用された管理パスワードに設定されます。
2. オプション: ユーザーが IBM BPM で必要とする各種タイプのユーザーおよびグループを作成します。
3. デフォルトの IBM BPM グループまたは作成したグループにメンバーを追加します。構成済みの任意の外部プロバイダー (LDAP など) からユーザーおよびグループを追加でき、また内部の IBM BPM のユーザーおよびグループを追加できます。
4. リポジトリへのアクセスが必要なユーザーおよびグループを追加し、適切なユーザーに管理権限を付与します。次に、各 Process App および Toolkit にアクセスできるユーザーを設定します。リポジトリへのアクセス権限を付与する最善の方法は、デフォルトのグループ `tw_authors` にメンバーを追加することです。

関連タスク:

1039 ページの『LDAP セキュリティ・プロバイダーの構成』

IBM Business Process Manager での追加の Lightweight Directory Access Protocol セキュリティ・プロバイダーを使用するには、プロバイダーをフェデレートされたリポジトリに追加する必要があります。

インストール後のパスワード変更

IBM Business Process Manager のインストール時に指定したパスワードを変更するには、Process Admin Console を使用してこのパスワードを変更し、WebSphere Application Server 管理コンソールを使用して、対応する認証別名でのパスワードを変更します。

内部セキュリティー・プロバイダーを使用している場合は、Process Admin Console を使用してユーザー・アカウントを保守します。異なるタイプのユーザー・レジストリーを構成した場合は、そのユーザー・レジストリーのユーザー・インターフェースでユーザー・アカウントを保守する必要があります。

tw_admin および **tw_user** パスワードに加えて、Network Deployment 環境内のすぐに使用可能なパスワードもすべて変更することができます。

注: ご使用の環境で `BPMAdmin_Auth_Alias` が定義されていない場合は、おそらく IBM Business Process Manager バージョン 7.5.1 にアップグレードする前にプロファイルが作成されています。この場合は、IBM Business Process Manager バージョン 7.5.0 インフォメーション・センターに掲載されているパスワード変更プロセスに従う必要があります。

関連タスク:

1051 ページの『パスワードの暗号化』

IBM Business Process Manager 製品コンポーネントのインストール時には、通常、インストール済みファイル内のパスワードはデフォルトで暗号化されます。これらのパスワードを変更する必要がある場合は、IBM BPM EncryptPassword ユーティリティーを使用して新規パスワードを暗号化できます。

1032 ページの『Process Center への接続で Process Server が使用する設定のカスタマイズ』

IBM Business Process Manager をインストールして構成したら、Process Server をオフライン・サーバーから Process Center 接続サーバーに変更することができます (その逆も可能)。

スタンドアロン環境での **tw_admin** パスワードの変更:

IBM Business Process Manager のインストール時に指定した、スタンドアロン環境の **tw_admin** パスワードを変更するには、Process Admin Console を使用してこのパスワードを変更し、WebSphere Application Server 管理コンソールを使用して、対応する認証別名でのパスワードを変更します。

ご使用の環境で `BPMAdmin_Auth_Alias` が定義されていない場合は、おそらく IBM Business Process Manager バージョン 7.5.1 にアップグレードする前にプロファイルが作成されています。この場合は、IBM Business Process Manager バージョン 7.5.0 インフォメーション・センターに掲載されているパスワード変更プロセスに従ってください。

重要: 内部セキュリティー・プロバイダーを使用している場合は、Process Admin Console を使用してユーザー・アカウントを保守します。異なるタイプのユーザー・レジストリーを構成した場合は、そのユーザー・レジストリーのユーザー・インターフェースでユーザー・アカウントを保守する必要があります。

例えば、WebSphere Application Server Network Deployment 環境のデフォルト・リポジトリーであるファイル・ベース・リポジトリーを持つフェデレーテッド・リポジトリーを使用していた場合は、WebSphere Application Server 管理コンソールを使用してユーザー・アカウントを変更します。

例えば、1 つ以上の LDAP リポジトリーを持つフェデレーテッド・リポジトリーを使用している場合は、LDAP ユーザー・インターフェースを使用してユーザー・アカウントを変更します。例えば、**tw_admin** が **LDAP** からのユーザーである場合は、LDAP でパスワードを変更する必要があります。

1. 管理アカウントを使用して、Process Admin Console にログオンします。管理アカウントには、製品のインストール時にユーザー名とパスワードが指定されています。
2. Process Admin Console で、**tw_admin** アカウントのパスワードを変更します。
3. WebSphere Application Server 管理コンソールにログインします。
4. `BPMAdmin_Auth_Alias` パスワードを変更します。
 - a. WebSphere Application Server 管理コンソールで、「セキュリティー」 > 「グローバル・セキュリティー」をクリックします。

- b. 右側の「認証」の下で、「JAASConfiguration」 > 「J2C 認証データ」をクリックします。
 - c. **BPMAdmin_Auth_Alias** にナビゲートします。
 - d. **BPMAdmin_Auth_Alias** パスワードを変更します。
5. 以下のいずれかの方法で、**tw_admin** 管理ユーザー名に関連付けられたロールの **tw_admin** パスワードを変更します。
 - 「エンタープライズ・アプリケーション」 > 「IBM_BPM_Teamworks_<node and server location>」 > 「ユーザー RunAs ロール」に移動します (例えば、「エンタープライズ・アプリケーション」 > 「IBM_BPM_Teamworks_Node01_Server01」 > 「ユーザー RunAs ロール」)。**tw_admin** 管理ユーザー名に関連付けられているロールのパスワードを変更し、変更を適用します。例えば、**twem** ロールと **twuser** ロールが **tw_admin** ユーザー名に関連付けられている場合は、これらのロールのパスワードを変更します。
 - `util%Security%bpmModifyMapRunAsRole.py` ユーティリティを実行して、システム・アプリケーションの管理ユーザーのパスワードを更新します。詳しくは、『システム・アプリケーションの RunAs ロールへのユーザー割り当ての定義』を参照してください。
 6. WebSphere Application Server 管理コンソールからログアウトします。
 7. サーバーを再始動します。

関連情報:



IBM BPM v7.5 でのデフォルトの管理パスワードの変更

スタンドアロン環境での **tw_user** パスワードの変更:

スタンドアロン環境で IBM Business Process Manager のインストール時に指定した **tw_user** パスワードを変更するには、Process Admin Console を使用してこのパスワードを変更し、WebSphere Application Server 管理コンソールを使用して、対応する認証別名でのパスワードを変更します。

ご使用の環境で **BPMAdmin_Auth_Alias** が定義されていない場合は、おそらく IBM Business Process Manager バージョン 7.5.1 にアップグレードする前にプロファイルが作成されています。この場合は、IBM Business Process Manager バージョン 7.5.0 インフォメーション・センターに掲載されているパスワード変更プロセスに従う必要があります。

重要: 内部セキュリティ・プロバイダーを使用している場合は、Process Admin Console を使用してユーザー・アカウントを保守します。異なるタイプのユーザー・レジストリーを構成した場合は、そのユーザー・レジストリーのユーザー・インターフェースでユーザー・アカウントを保守する必要があります。

例えば、WebSphere Application Server Network Deployment 環境のデフォルト・リポジトリーであるファイル・ベース・リポジトリーを持つフェデレーテッド・リポジトリーを使用していた場合は、WebSphere Application Server 管理コンソールを使用してユーザー・アカウントを変更します。

例えば、1 つ以上の LDAP リポジトリーを持つフェデレーテッド・リポジトリーを使用している場合は、LDAP ユーザー・インターフェースを使用してユーザー・アカウントを変更します。例えば、**tw_user** が LDAP からのユーザーである場合は、LDAP でパスワードを変更する必要があります。

1. 管理アカウントを使用して、Process Admin Console にログオンします。管理アカウントには、製品のインストール時にユーザー名とパスワードが指定されています。
2. **tw_user** アカウントのパスワードを変更します。
 - a. Process Admin Console で、「ユーザー管理」 > 「ユーザー管理」をクリックします。
 - b. 「プロファイルの取得」フィールドに **tw_user** と入力し、「取得」をクリックします。

- c. 「内部 IBM BPM ユーザー」セクションの **tw_user** をクリックします。
 - d. 「内部 IBM BPM ユーザーの詳細」セクションで、「パスワード」に新規パスワードを入力します。
 - e. 「更新」をクリックします。
3. WebSphere Application Server 管理コンソールにログインします。
 4. **BPMUser_Auth_Alias** パスワードを変更します。
 - a. WebSphere Application Server 管理コンソールで、「セキュリティ」 > 「グローバル・セキュリティ」をクリックします。
 - b. 右側の「認証」の下で、「JAASConfiguration」 > 「J2C 認証データ」をクリックします。
 - c. **BPMUser_Auth_Alias** パスワードを変更します。
 5. 「エンタープライズ・アプリケーション」 > 「IBM_BPM_PerformanceDW_<node and server location>」 > 「ユーザー RunAs ロール」に移動します (例えば、「エンタープライズ・アプリケーション」 > 「IBM_BPM_PerformanceDW_Node01_Server01」 > 「ユーザー RunAs ロール」)。
 6. **tw_user** ユーザー名が関連付けられているロールのパスワードを変更し、変更を適用します。例えば、**twem** ロールと **twuser** ロールが **tw_user** ユーザー名に関連付けられている場合は、これらのロールのパスワードを変更します。
 7. WebSphere Application Server 管理コンソールをログアウトします。

関連情報:



IBM BPM v7.5 でのデフォルトの管理パスワードの変更

ND クラスター環境での **tw_admin** パスワードの変更:

IBM Business Process Manager のインストール時に指定した ND クラスター環境の **tw_admin** パスワードを変更するには、WebSphere Application Server 管理コンソールを使用してこのパスワードを変更します。

ご使用の環境で **BPMAdmin_Auth_Alias** が定義されていない場合は、おそらく IBM Business Process Manager バージョン 7.5.1 にアップグレードする前にプロファイルが作成されています。この場合は、IBM Business Process Manager バージョン 7.5.0 インフォメーション・センターに掲載されているパスワード変更プロセスに従ってください。

重要: 内部セキュリティ・プロバイダーを使用している場合は、Process Admin Console を使用してユーザー・アカウントを保守します。異なるタイプのユーザー・レジストリーを構成した場合は、そのユーザー・レジストリーのユーザー・インターフェースでユーザー・アカウントを保守する必要があります。

例えば、WebSphere Application Server Network Deployment 環境のデフォルト・リポジトリーであるファイル・ベース・リポジトリーを持つフェデレーテッド・リポジトリーを使用していた場合は、WebSphere Application Server 管理コンソールを使用してユーザー・アカウントを変更します。

例えば、1 つ以上の LDAP リポジトリーを持つフェデレーテッド・リポジトリーを使用している場合は、LDAP ユーザー・インターフェースを使用してユーザー・アカウントを変更します。例えば **tw_admin** が **NDCluster LDAP** で保守されているユーザーである場合は、NDCluster LDAP でパスワードを変更する必要があります。

1. WebSphere Application Server 管理コンソールにログインします。
2. 「ユーザーおよびグループ」 > 「ユーザーの管理」にナビゲートし、**tw_admin** ユーザー・アカウントを見つけます。
3. **tw_admin** ユーザー・アカウントのパスワードを変更します。

4. **BPMAdmin_Auth_Alias** パスワードを変更します。
 - a. WebSphere Application Server 管理コンソールで、「セキュリティ」 > 「グローバル・セキュリティ」をクリックします。
 - b. 右側の「認証」の下で、「JAASConfiguration」 > 「J2C 認証データ」をクリックします。
 - c. **BPMAdmin_Auth_Alias** にナビゲートします。
 - d. **BPMAdmin_Auth_Alias** パスワードを変更します。
5. 以下のいずれかの方法で、**tw_admin** 管理ユーザー名に関連付けられたロールの **tw_admin** パスワードを変更します。
 - 「エンタープライズ・アプリケーション」 > 「IBM_BPM_Teamworks_<node and server location>」 > 「ユーザー RunAs ロール」に移動します (例えば、「エンタープライズ・アプリケーション」 > 「IBM_BPM_Teamworks_Node01_Server01」 > 「ユーザー RunAs ロール」)。**tw_admin** 管理ユーザー名が関連付けられているロールのパスワードを変更し、変更を適用します。例えば、**twem** ロールと **twuser** ロールが **tw_admin** ユーザー名に関連付けられている場合は、これらのロールのパスワードを変更します。
 - `util%Security%bpmModifyMapRunAsRole.py` ユーティリティを実行して、システム・アプリケーションの管理ユーザーのパスワードを更新します。詳しくは、『システム・アプリケーションの RunAs ロールへのユーザー割り当ての定義』を参照してください。

重要: クラスター環境で `bpmModifyMapRunAsRole.py` ユーティリティを 2 回実行する必要があります。以下に例を示します。

```
wsadmin.bat -port port number -lang jython -user username -password admin -f
C:%WAS_INSTALL_LOCATION%util%Security%bpmModifyMapRunAsRole.py -usr username -pwd admin
-clusterName BPM.AppTarget -applicationName Teamworks

wsadmin.bat -port port number -lang jython -user username -password admin -f
C:%WAS_INSTALL_LOCATION%util%Security%bpmModifyMapRunAsRole.py -usr username -pwd admin
-clusterName BPM.Support -applicationName PerformanceDW
```

6. Network Deployment 環境では、Process Center、Process Server、または Performance Data Warehouse クラスター・メンバーが含まれるノードを同期化する必要があります。
 - a. 管理コンソールで、「システム管理」 > 「ノード」 をクリックします。
 - b. ノードをすべて選択して、「完全な再同期化」をクリックします。
 - c. クラスターとサーバーのすべてを停止し、再始動します。
7. クラスター・メンバーを再始動します。

関連情報:



IBM BPM v7.5 でのデフォルトの管理パスワードの変更

ND クラスター環境での **tw_user** パスワードの変更:

ND クラスター環境で IBM Business Process Manager のインストール時に指定した **tw_user** パスワードを変更するには、Process Admin Console を使用してこのパスワードを変更し、WebSphere Application Server 管理コンソールを使用して対応する認証別名でのパスワードを変更します。

ご使用の環境で **BPMAdmin_Auth_Alias** が定義されていない場合は、おそらく IBM Business Process Manager バージョン 7.5.1 にアップグレードする前にプロファイルが作成されています。この場合は、IBM Business Process Manager バージョン 7.5.0 インフォメーション・センターに掲載されているパスワード変更プロセスに従う必要があります。

重要: 内部セキュリティー・プロバイダーを使用している場合は、Process Admin Console を使用してユーザー・アカウントを保守します。異なるタイプのユーザー・レジストリーを構成した場合は、そのユーザー・レジストリーのユーザー・インターフェースでユーザー・アカウントを保守する必要があります。

例えば、WebSphere Application Server Network Deployment 環境のデフォルト・リポジトリーであるファイル・ベース・リポジトリーを持つフェデレーテッド・リポジトリーを使用していた場合は、WebSphere Application Server 管理コンソールを使用してユーザー・アカウントを変更します。

例えば、1 つ以上の LDAP リポジトリーを持つフェデレーテッド・リポジトリーを使用している場合は、LDAP ユーザー・インターフェースを使用してユーザー・アカウントを変更します。例えば **tw_user** が **NDCcluster LDAP** で保守されているユーザーである場合は、NDCcluster LDAP でパスワードを変更する必要があります。

1. 管理アカウントを使用して、Process Admin Console にログオンします。 管理アカウントには、製品のインストール時にユーザー名とパスワードが指定されています。
2. **tw_user** アカウントのパスワードを変更します。
 - a. Process Admin Console で、「ユーザー管理」 > 「ユーザー管理」をクリックします。
 - b. 「プロファイルの取得」フィールドに **tw_user** と入力し、「取得」をクリックします。
 - c. 「内部 IBM BPM ユーザー」セクションの **tw_user** をクリックします。
 - d. 「内部 IBM BPM ユーザーの詳細」セクションで、「パスワード」に新規パスワードを入力します。
 - e. 「更新」をクリックします。
3. WebSphere Application Server 管理コンソールにログインします。
4. **BPMUser_Auth_Alias** パスワードを変更します。
 - a. WebSphere Application Server 管理コンソールで、「セキュリティー」 > 「グローバル・セキュリティー」をクリックします。
 - b. 右側の「認証」の下で、「JAASConfiguration」 > 「J2C 認証データ」をクリックします。
 - c. **BPMUser_Auth_Alias** パスワードを変更します。
5. 「エンタープライズ・アプリケーション」 > 「IBM_BPM_PerformanceDW_<node and server location>」 > 「ユーザー RunAs ロール」に移動します (例えば、「エンタープライズ・アプリケーション」 > 「IBM_BPM_PerformanceDW_Node01_Server01」 > 「ユーザー RunAs ロール」)。
6. **tw_user** ユーザー名が関連付けられているロールのパスワードを変更し、変更を適用します。例えば、**twem** ロールと **twuser** ロールが **tw_user** ユーザー名に関連付けられている場合は、これらのロールのパスワードを変更します。
7. Network Deployment 環境では、Process Center、Process Server、または Performance Data Warehouse クラスタ・メンバーが含まれるノードを同期化する必要があります。
 - a. 管理コンソールで、「システム管理」 > 「ノード」 をクリックします。
 - b. ノードをすべて選択して、「完全な再同期化」をクリックします。
 - c. クラスタとサーバーのすべてを停止し、再始動します。
8. クラスタ・メンバーを再始動します。

関連情報:

 IBM BPM v7.5 でのデフォルトの管理パスワードの変更

Process Server および Performance Data Warehouse を構成した後のデータベース・パスワードとユーザー ID の変更

データベース構成が完了した後に、必要に応じてデータベース・パスワードおよびユーザー ID を再構成することができます。

データベース・パスワードおよびユーザー ID を再構成するには、管理コンソールを使用します。データベース・パスワードおよびユーザー ID を変更するには、以下の 3 つの処理を実行する必要があります。

- すべてのデータ・ソースの認証別名を更新する
- メッセージ・エンジンのデータ・ストア認証別名を更新する
- 98database.xml ファイルで Process Server および Performance Data Warehouse のパスワードを手動で更新する

重要: 何らかの構成変更を行う前に、config フォルダをバックアップすることをお勧めします。config フォルダは、Deployment Manager の下の <Dmgr-profile>/config にあります。詳しくは WebSphere Application Server 管理者にお問い合わせください。

データ・ソース認証別名の更新:

データベース・パスワードおよびユーザー名を変更する前に、データ・ソース認証別名を更新する必要があります。

この手順を始める前に、以下のすべての項目を必ず実行してください。

- Network Deployment 環境に対して、要求の送信がすべて停止していることを確認します。また、すべてのクラスターを停止し、DMGR とすべてのノード・エージェントの実行を継続する必要があります。
- スタンドアロン・プロファイルに対して、要求の送信がすべて停止していることを確認します。

データ・ソース認証別名を変更するには、以下の手順を実行します。

1. 管理コンソールにログインします。
2. 「リソース」 > 「JDBC」 > 「データ・ソース」を選択します。

注: 「コンポーネント管理認証別名」および「XA リカバリー用の認証別名 (Authentication alias for XA recovery)」に対して構成されている値を書き留めておいてください。

3. 必要なデータ・ソースを選択します。
4. 「関連項目」セクションを選択し、「JAAS - J2C 認証データ」を選択します。
5. ステップ 2 で書き留めた、適切な「コンポーネント管理認証別名」の値を選択します。パスワードまたはユーザー名を編集し、「OK」をクリックして変更を保存します。
6. 「JAAS - J2C 認証データ」パネルに戻り、ステップ 2 で書き留めた「XA リカバリー用の認証別名 (Authentication alias for XA recovery)」の値を選択します。パスワードまたはユーザー名を編集し、「OK」をクリックして変更を保存します。
7. 更新内容を保存し、「完全同期」をクリックして、この情報をすべてのノードに同期させます。

メッセージ・エンジンのデータ・ストア認証別名の更新:

データベース・パスワードおよびユーザー名を変更する前に、メッセージ・エンジンのデータ・ストア認証別名を更新する必要があります。

この手順を始める前に、以下のすべての項目を必ず実行してください。

- Network Deployment 環境に対して、要求の送信がすべて停止していることを確認します。また、すべてのクラスターを停止し、DMGR とすべてのノード・エージェントの実行を継続する必要があります。
- スタンドアロン・プロファイルに対して、要求の送信がすべて停止していることを確認します。
- Network Deployment クラスターおよびサーバーを停止した後、別名を変更する前に、DMGR とすべてのノード・エージェントを始動する必要があります。

メッセージング・エンジンのデータ・ストア認証別名を更新するには、以下の手順を実行します。

1. 管理コンソールにログインします。
2. 「サービス統合」 > 「バス」を選択します。
3. 各バスの認証別名を更新するには、以下の手順を実行します。
 - a. 「バス」 > 「[Bus_NAME]」 > 「メッセージング・エンジン」 > 「[MESSAGING_ENGINE]」 > 「データ・ストア」を選択します。

要確認: データ・ストアでの「認証別名」の値を書き留めておいてください。

- b. 「関連項目」セクションを選択し、「JAAS - J2C 認証データ」をクリックします。
- c. ステップ a で書き留めた値を選択します。パスワードを編集し、「OK」をクリックして変更を保存します。
- d. 更新内容を保存し、「完全同期」をクリックして、この情報をすべてのノードに同期させます。

構成ファイル内のパスワードおよびユーザー名の更新:

データベース・パスワードを変更するには、いくつかの構成ファイルを更新する必要があります。

ユーザー名およびパスワード更新を始める前に、DMGR と各ノード・エージェントが稼働していることを確認してください。新規パスワードで 98Database.xml ファイルを更新したら、「完全同期」をクリックして、変更内容をすべてのノードに適用する必要があります。その後、ご使用の環境を再始動して、ご使用の Network Deployment 環境またはスタンドアロン環境で新規パスワードを確実にアクティブ化する必要があります。

IBM Process Center、IBM Process Server、および IBM Performance Data Warehouse では、それぞれのデータベース情報が 98Database.xml ファイルに保管されるため、このファイルを新規パスワードまたはユーザー ID で更新する必要があります。このファイルが存在するすべての場所については、このトピックに記載されている表を参照してください。

サンプルの 98Database.xml ファイルには、次のようなコード・セグメントが含まれています (これは例であり、セットアップに応じて異なる場合があります)。

```
<databases>
<default-database-name>default</default-database-name>
<database type="default">
<driver>com.ibm.db2.jcc.DB2Driver</driver>
<url>jdbc:db2://localhost:50000/BA8000_1</url>
<user>bpmdb</user>
<schema></schema>
<encrypted-password>GFgs/fnJCC9RnNCHDH3kLA==:acGciJgBON8WTk0ZF/dS/A==</encrypted-password>
<db-name>BA8000_1</db-name>
<storage-group></storage-group>
</database>
</databases>
```

ユーザー ID を変更するには、`<user>new_userID</user>` のように、user タグに新規の値を追加します。

パスワードについては、暗号化ツールを使用して生成されたパスワード値を組み込んで、次に示す項目を更新する必要があります。「関連リンク」セクションの『パスワードの暗号化』で説明されている方法を使用してください。

<encrypted-password>7Yu5Kz3XaYL5aUjbWfISHg==:VyP9e8ytnTz6623hERR4lg==</encrypted-password>

表 1 に、スタンドアロン環境での 98Database.xml 構成ファイルのロケーションを示します。

表 150. スタンドアロン環境での 98Database.xml 構成ファイルのロケーション

デプロイメント・タイプ	ファイルのロケーション
Process Center	Process Center <STANDALONE-PROFILE-DIR>¥config¥cells¥<cell name>¥nodes¥<node name>¥servers¥<server name>¥process-center¥config¥system パフォーマンス・データウェアハウス <STANDALONE-PROFILE-DIR>¥config¥cells¥<cell name>¥nodes¥<node name>¥servers¥<server name>¥performance-data-warehouse¥config¥system
Process Server	Process Server <STANDALONE-PROFILE-DIR>¥config¥cells¥<cell name>¥nodes¥<node name>¥servers¥<server name>¥process-server¥config¥system パフォーマンス・データウェアハウス <STANDALONE-PROFILE-DIR>¥config¥cells¥<cell name>¥nodes¥<node name>¥servers¥<server name>¥performance-data-warehouse¥config¥system

表 2 に、Network Deployment 環境での 98Database.xml 構成ファイルのロケーションを示します。

表 151. Network Deployment 環境での 98Database.xml 構成ファイルのロケーション

デプロイメント・タイプ	ファイルのロケーション
Process Center	<p>1 または 2 クラスター・トポロジー</p> <p>Process Center</p> <p><DMGR-PROFILE-DIR>%config%cells%<cell name>%clusters%<APPLICATION-CLUSTER-NAME>%process-center%config%system</p> <p>アプリケーション・クラスターの一部として使用される各ノード - <DMGR-PROFILE-DIR>%config%cells%<cell name>%nodes%<node name>%servers%<server name>%process-center%config%system</p> <p>パフォーマンス・データウェアハウス</p> <p><DMGR-PROFILE-DIR>%config%cells%<cell name>%clusters%<APPLICATION-CLUSTER-NAME>%performance-data-warehouse%config%system</p> <p>アプリケーション・クラスターの一部として使用される各ノード - <DMGR-PROFILE-DIR>%config%cells%<cell name>%nodes%<node name>%servers%<server name>%performance-data-warehouse%config%system</p>
	<p>3 または 4 クラスター・トポロジー</p> <p>Process Center</p> <p><DMGR-PROFILE-DIR>%config%cells%<cell name>%clusters%<APPLICATION-CLUSTER-NAME>%process-center%config%system</p> <p>アプリケーション・クラスターの一部として使用される各ノード - <DMGR-PROFILE-DIR>%config%cells%<cell name>%nodes%<node name>%servers%<server name>%process-center%config%system</p> <p>パフォーマンス・データウェアハウス</p> <p><DMGR-PROFILE-DIR>%config%cells%<cell name>%clusters%<SUPPORT-CLUSTER-NAME>%performance-data-warehouse%config%system</p> <p>サポート・クラスターの一部として使用される各ノード - <DMGR-PROFILE-DIR>%config%cells%<cell name>%nodes%<node name>%servers%<server name>%performance-data-warehouse%config%system</p>

Process Server	<p>1 または 2 クラスター・トポロジ</p> <p>Process Server</p> <p><code><DMGR-PROFILE-DIR>%config%cells%<cell name>%clusters%<APPLICATION-CLUSTER-NAME>%process-server%config%system</code></p> <p>アプリケーション・クラスターの一部として使用される各ノード - <code><DMGR-PROFILE-DIR>%config%cells%<cell name>%nodes%<node name>%servers%<server name>%process-server%config%system</code></p> <p>パフォーマンス・データウェアハウス</p> <p><code><DMGR-PROFILE-DIR>%config%cells%<cell name>%clusters%<APPLICATION-CLUSTER-NAME>%performance-data-warehouse%config%system</code></p> <p>アプリケーション・クラスターの一部として使用される各ノード - <code><DMGR-PROFILE-DIR>%config%cells%<cell name>%nodes%<node name>%servers%<server name>%performance-data-warehouse%config%system</code></p> <hr/> <p>3 または 4 クラスター・トポロジ</p> <p>Process Server</p> <p><code><DMGR-PROFILE-DIR>%config%cells%<cell name>%clusters%<APPLICATION-CLUSTER-NAME>%process-server%config%system</code></p> <p>アプリケーション・クラスターの一部として使用される各ノード - <code><DMGR-PROFILE-DIR>%config%cells%<cell name>%nodes%<node name>%servers%<server name>%process-server%config%system</code></p> <p>パフォーマンス・データウェアハウス</p> <p><code><DMGR-PROFILE-DIR>%config%cells%<cell name>%clusters%<SUPPORT-CLUSTER-NAME>%performance-data-warehouse%config%system</code></p> <p>サポート・クラスターの一部として使用される各ノード - <code><DMGR-PROFILE-DIR>%config%cells%<cell name>%nodes%<node name>%servers%<server name>%performance-data-warehouse%config%system</code></p>
----------------	---

パスワードの暗号化

パスワードの暗号化

IBM Business Process Manager 製品コンポーネントのインストール時には、通常、インストール済みファイル内のパスワードはデフォルトで暗号化されます。これらのパスワードを変更する必要がある場合は、IBM BPM EncryptPassword ユーティリティを使用して新規パスワードを暗号化できます。

パスワードを暗号化するには、以下のステップを実行します。

1. コマンド・プロンプトで `[IBM_BPM_home]/BPM/Lombardi/lib` ディレクトリーに移動します。
2. `java -cp utility.jar com.lombardisoftware.utility.EncryptPassword <password>` コマンドを実行します。ここで、`<password>` は暗号化するパスワードです。

例えば、次のコマンドを実行します。

```
java -cp utility.jar com.lombardisoftware.utility.EncryptPassword JohnDoe
```

結果は次のコードのようになります。

taVcMTLTWGkTvfavvu/7g==:sROM4ZbvqRDFYMobWXqvwg==

重要: 上記以外のディレクトリーからユーティリティーを実行する場合には、**utility.jar** を、**utility.jar** ファイルへの正確なパスで置き換えます。

- ユーティリティーが **ClassNotFoundException** 例外で失敗した場合は、ユーティリティーを再実行する前に、Java ホームを **[IBM_BPM_home]/AppServer/java/bin/java** ディレクトリーに設定します。

例:

```
Linux UNIX java -cp /opt/[IBM_BPM_home]/BPM/Lombardi/lib/utility.jar  
com.lombardisoftware.utility.EncryptPassword JohnDoe
```

```
Windows java -cp c:[IBM_BPM_home]\BPM\Lombardi\lib\utility.jar  
com.lombardisoftware.utility.EncryptPassword JohnDoe
```

- IBM BPM 構成ファイル (*PROFILE_HOME*\config\cells\cell_name\nodes\node_name\servers\server_name\process-center\config100Custom.xml など) 内の暗号化された既存のパスワードを置き換えます。

制約事項: 既に暗号化されているパスワードの暗号化解除に **EncryptPassword** ユーティリティーを使用することはできません。

関連タスク:

1041 ページの『インストール後のパスワード変更』

IBM Business Process Manager のインストール時に指定したパスワードを変更するには、**Process Admin Console** を使用してこのパスワードを変更し、**WebSphere Application Server** 管理コンソールを使用して、対応する認証別名でのパスワードを変更します。

サンプルの手動インストール

Network Deployment 環境またはスタンドアロン・サーバー環境で拡張サンプルを手動でインポートできます。

プロファイルを使用する場合は、作成した **Process Center** プロファイルのログ・ファイルを確認できません。**importAdvancedSamples** タスク中に拡張サンプルが見つからなかったというエラーが示されています。これは予期されることであり、拡張サンプルを手動でインストールできます。

サンプルをインポートするには、**importAdvancedSamples** スクリプトを実行して、プロセス・サーバー・データベースに適切なデータを提供します。

以下のいずれかのオプションを選択して、**importAdvancedSamples** スクリプトを実行します。

- プロファイルを使用する場合は、**importAdvancedSamples** スクリプトを呼び出します。スクリプトは適切なパラメーター値を評価して、拡張サンプルをデータベースにインポートします。以下の例では、拡張サンプルをスタンドアロン・プロファイル・サーバー環境にインポートします。

```
Windows importAdvancedSamples.bat
```

```
Linux UNIX importAdvancedSamples.sh
```

- プロファイルを使用しない場合は、**importAdvancedSamples** スクリプトを呼び出すことができますが、適切なパラメーター値を指定する必要があります。以下の大/小文字が区別されるパラメーターを使用できます。

profileName

デフォルト・プロファイルを使用しない場合は、プロファイル名を設定する必要があります。

dbJDBCClasspath

データベース JDBC ドライバーがあるディレクトリーのロケーション。このパラメーターはオプションです。指定しなかった場合は、ロケーション `WAS_INSTALL_ROOT/jdbcdrivers` が使用されます。

nodeName

ノード名パラメーターはオプションです。ただし、Network Deployment 環境では `serverName` パラメーターと共に指定する必要があります。

serverName

サーバー名パラメーターはオプションです。ただし、Network Deployment 環境では `nodeName` パラメーターと共に指定する必要があります。

clusterName

クラスター名の指定はオプションです。

重要: スペースが含まれたパス値を指定する場合は、引用符で囲む必要があります。

以下の例では、Network Deployment 環境のプロセス・センターに拡張サンプルをインポートします。

```
importAdvancedSamples -nodeName node01 -serverName server1
```

以下のサンプルがインポートされます (使用可能である場合)。

- advanced-hiring-sample.twx
- procurement-sample.twx

ファースト・ステップ・コンソールの開始

IBM Business Process Manager Advanced のインストール後に「ファースト・ステップ」コンソールを使用して、インストールの検証、「プロファイル管理ツール」の開始、製品資料へのアクセス、または個別のプロファイルに関連するサーバーや管理コンソールなどのエレメントに対する指示を行います。

汎用バージョンのコンソールと、インストール内のプロファイルごとのバージョンが使用可能です。各コンソールのオプションは、インストールした機能と、各オペレーティング・システムで使用可能なエレメントに応じて動的に表示されます。オプションには、インストールの検証、サーバーまたはデプロイメント・マネージャーの開始または停止、管理コンソールへのアクセス、プロファイル管理ツールの開始、製品資料へのアクセスなどがあります。

通常は、プロファイル用のバージョンを開始します。以下のセクションでは、「ファースト・ステップ」コンソールの開始手順を、そのバージョンおよびシステムで使用されているプラットフォームごとに詳しく説明します。

- 1054 ページの『Linux、UNIX、および Windows プラットフォーム上のプロファイル用のファースト・ステップ・コンソールの開始』
- 1054 ページの『汎用バージョンのファースト・ステップ・コンソールの開始』

制約事項: デフォルトのブラウザとして Mozilla を使用し、そのインストール・ロケーションのパス名にスペースが含まれていると、ファースト・ステップ・コンソールが起動しない場合があります。この問題を解消するには、以下のいずれかのアクションを実行してください。

- Mozilla を、パス名にスペースを含まないロケーションにインストールする。
- レジストリー・キーを変更してスペースを削除する。
- 一時的なデフォルト・ブラウザとして Internet Explorer を指定してから、Mozilla をデフォルト・ブラウザに設定する。このアプローチでは、レジストリー・キーからスペースが自動的に除去されます。

Linux、UNIX、および Windows プラットフォーム上のプロファイル用のファースト・ステップ・コンソールの開始

Linux **UNIX** **Windows** 以下のステップを実行し、プロファイル用のファースト・ステップ・コンソールを開始します。

1. コマンド・ウィンドウをオープンします。
2. 以下のディレクトリーに移動します (*install_root* は、IBM Business Process Manager または WebSphere Enterprise Service Bus のプロファイルのインストール場所(*install_root/profiles/profile_name/*) を表します)。

- IBM Business Process Manager プロファイルの場合:

- **Linux** **UNIX** *profile_root/firststeps/bpmPC* または *bpmPS*
- **Windows** *profile_root%firststeps%bpmPC* または *bpmPS*

- WebSphere Enterprise Service Bus プロファイルの場合:

- **Linux** **UNIX** *profile_root/firststeps/esb*
- **Windows** *profile_root%firststeps%esb*

3. **firststeps** コマンドを実行して、コンソールを開始します。

- **Linux** **UNIX** *./firststeps.sh*
- **Windows** *firststeps.bat*

ファースト・パス:

以下のいずれかのタスクを実行して、プロファイルに関連付けられているバージョンのファースト・ステップ・コンソールを開始することもできます。

- プロファイルの作成または拡張処理の終了時に「プロファイル作成の完了」または「プロファイル拡張の完了」パネルの「ファースト・ステップ・コンソール」チェック・ボックスにチェック・マークを付ける。
- **Windows** 「スタート」 > 「プログラム」 > 「IBM」 > 「BPM Advanced 7.5」 > 「プロファイル」 > *profile_name* > 「ファースト・ステップ」をクリックします。

汎用バージョンのファースト・ステップ・コンソールの開始

以下のステップを実行し、汎用バージョンのファースト・ステップ・コンソールを開始します。

1. コマンド・ウィンドウをオープンします。
2. 以下のディレクトリーに移動します。
 - **Linux** **UNIX** *profile_root/firststeps/bpmPC* または *bpmPS*
 - **Windows** *profile_root%firststeps%bpmPC* または *bpmPS*

変数 *install_root* は、Linux システム、UNIX システム、または Windows システム上の IBM Business Process Manager インストール済み環境のロケーションを表します。

3. 以下のいずれかのコマンドを実行して、コンソールを開始します。

- **Linux** **UNIX** *./firststeps.sh*

- **Windows** firststeps.bat

ファースト・パス:

Windows Windows プラットフォームで汎用バージョンのコンソールを開始することもできます。そのためには、「スタート」 > 「プログラム」 > 「IBM」 > 「BPM Advanced 7.5」 > 「ファースト・ステップ」をクリックします。

